國文注釋全書

文學博士　本居豐穎
文學博士　木村正辭
文學博士　井上頼圀
校訂

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部刊行

緒言

一徒然草諸抄大成ハ、淺香氏山井輯ト記セリ、二十巻ナリ、壽命院抄、野槌、貞德抄、慰草、盤齋抄、句解、諸家聞書、文段抄、諺解、古今抄、增補鐵槌、大全、參考等、凡諸抄ヲ殘サズ拔抄シテ頭書傍注トシ、ナホ自說ヲモ加ヘテ大成シタルモノナリ・卷首ニ傳記系圖ヲ載セタリ、徒然草注解書中本書ヨリ便利ナルモノ蓋シアラザルベシ、今爰ニ飜刻スルニ當リ、頭書傍注一切ヲ本文ノ次ニ列擧セリ、コレ原書ノマヽニテハ、植字上頗ル困難ナルヲ以テナリ、

明治四十三年七月

編者識ス

徒然草諸抄大成

全

徒然草諸抄大成凡例

越路加符淺香氏山井輯

此抄を述し意趣は上壽命院抄より下大全參考に至るまで數抄出て世にひろまる是を閲するに皆其一流をいふ其一々の理を考えん事を求むといへど卷多して讀破するに煩し此故に今一本にして諸抄の註解を見ん事を思ひ其邪正を論せずして集て大成(タイセイ)冀(スコヒネガハク)講莚(コウエン)の便にもなれかしとぞ

一凡此抄正説を本文の次ぎに列記し異説傳記引文引歌等は正説の次ぎに頭書云として是れを書也是正説と混雜せずして見易からしめん爲なり但正説にも異説あり頭書にも本文に便り有説まゝ多し讀者是を察すべし

一凡引用ゆる諸抄の名をば一説々々の間に一二字をもつてしるすこと左のごとし

壽は　壽命院抄　二卷　也足軒奥書
野は　野槌抄　十四卷　林道春作
貞は　貞徳抄　二卷　長頭丸作
同は　同慰草　八卷　是徒然の大意をしるす也
古は　古今抄　八卷　大和田氣求作
盤は　盤齋抄　十三卷　踏雪作
句は　句解　七卷　高階楊順作
聞は　諸家聞書　三卷
文は　文段抄　七卷　北村季吟作
諺は　諺解　五卷　南部宗壽作
增鐵は　增補鐵槌　六卷　山岡元隣作
全は　大全　十三卷　高田宗賢作
參は　參考抄　八卷　惠空和尚作
諸は　諸抄通じて同じ説なり
説は　予が聞をける説なり

山井案は謾に僕が僻考をしるす

段末に一段之統論と有之は右諸抄の大意を取て名て統論となす

右の外に註抄あまたありといへどさして珍しき見解もなく却て本意をうしなはん事免かれかたし

一凡諸抄の違目又同抄の内にて少しづゝの異有所には正説は黑き丸頭書云は同鱗形を以て別つ也

一凡諸抄に引もらしぬる和漢故事本説證歌系圖あまねくしるす也卷末に至ても少しも略せずいよ／＼細

に考えあらはす
一凡一部の秘説残らず是を書世の憚後の嘲のがれがたしといへど貪覧薄情の族栗首の楽なく聞學の勤うすく共此抄にむかはゝつれ／＼草の諸事掌をかへすがごとくさとし易からんされば物を秘するは壁削のかたくなゝる意氣好の悪ある志にはたがはむものか孔夫子もわれかくす事なしと宣へりさはいへと是も予が自讃の僻ならんかし

徒然草諸抄大成巻第一

目次

諸太夫にて官瀧口にて有ければ内裏の宿直に參て常に玉體を拜み奉りき後宇多院崩御の後遁世しけりやさしき發心の因縁なり隨分の歌仙にて頓阿慶運淨辨兼好とて其比の四天王と申しなり貞徳抄 ●兼好隱遁して洛陽東山吉田に閑居し俗名をあらためず兼好と呼り是も此草子の奥にいへるごとく寺院の號もさらぬ物の名も奇異を好めるをそしれるに言行相かなへり今吉田に兼好が舊蹟あり諺解 ●兼好も神道は其家にならひ歌道は二條家門弟にてよめる歌おほく風雅新千載新拾遺新後拾遺新續古今等の勅撰にいれり又兼好家集一巻あり其集に云ならびの岡といふ所に無常所まふけてかたはらに櫻をうへて「ちぎりをく花とならびの岡野邊にあはれいく世の春をすごさん大全 ●今川伊豫守貞世が落書露見に二條家の門第兼好法師と書たれば歌道の事は二條家の流をくみたるにや句解 ●二條殿良基公の御作近來風體抄に兼好は人口にある歌おほきよしあそばせり盤齋抄 ●兼好は天台の學に達し且儒經を學び殊に老莊の道を好める人なり諺 ●存海法師の行者用心集に徒然草の語をあまた用ひられたりしか殊に兼好は天台宗也無雙の道心者なりと侍るなり參

同生卒之事 ●兼好生卒たしかにしるせる書なし或曰弘安五年に生れ觀應元年四月八日に六十八歳にして卒するなり高野山に於て西光院に今もつて位牌ありといひ傳ふ古今抄 ●叡山のふもと西教寺に兼好の位牌ありとなん又墓は雙岡にあるよしなれど今は所の人もしらずといふ參 ●今考に後宇多御即位より觀應元年までは七十四年也然ば兼好は後宇多即位より六年以後に生れたるにや不審全 ●されば後宇多院は正中元年に崩御なり此時兼好發心とあれば四十二の年に相あたるなり古 ●山井案右の諸抄まち〳〵にして一決しがたし予も闕をける一說あれども是又附會の說に似たる故しばらく闕也後の君子是をたゞせ

艶書事 ●問高師直が鹽谷判官が妻の許へ遣す艶書を兼好法師替りて書りといふ事太平記に見えたり是を讀耕林子が本朝遯史に信一生之過錯也可ニ慨惜一焉といへり ●又深草隱士元政が扶桑隱逸傳にも此艶書の事を記て兼好便書其不レ拘也如レ此といひて其次に此草子の手本にて女のよりかゝりしに兼好まよはざりし事をあはせしるして其贊云兼好以ニ師直一爲レ友且

筆二其艶書一若二物我相忘一然及レ過二婬女之魅惑一則秋霜烈日凛然不レ可レ侵也可レ謂和而介者矣と云り ●また踏雪が抄には此艶書かきたる事をそしる人は色好さらんといふ所など心よくはすむまじき事なりといへり此三説のことはり如何●答是各其好む所にて兼好を判じたり遯史の趣は儒者なり兼好がまめなる身にとりてたま／＼此一事有事誠に一生のあやまりなりといへるさしあたりては兼好をそしるに似たれど實は兼好が幸なるべし苟有レ過人必知レ之と孔子も宣るがごとし尋常の一生をあやまり暮すもの丶類にはあらず又元政は佛者にて隱士なり其不レ拘二若物我相忘一然といふをもつて賛たる事又むべなり又踏雪はつれ／＼草に錬したる人なればほどにつけて粗兼好を見知たるにや其ことはりたるさま法師のよふにもあらずやさしくも侍る兼好は和歌の人なりすべて歌よむ人はなべて心和らかなるべきものなればかく師直に伴ふからにけやけくも辭せざりしにや又隱逸の人なれば不拘なるべし此うへの褒貶は其好む所にしたがふべし文段 ●兼好不幸の時に逢て此名を得給る事是非なき事也しかれども兼好艶書の事を此所に論ずるは無用なりとぞ覺ゆるたとひ兼好惡人なりとも此草子のあやまりになるべからず佛も依法不依人と說き給へり其人にはよるべからず此草子の深々殊勝なる所によるべし兼好艶書をかかれたる事は定て不レ叶子細こそあらめとばかり可二心得一なり全

一部の大意●兼好得道の大意は儒釋道の三を兼備する鉄草子の大體は清少納言が枕草子を模し源氏物語の詞を用ゆ諺●大抵清紫の二女より事おこりて靑き事藍より靑く台教を根本とし老莊を枝葉とし生死無常を觀し時序風景を翫び男女の情を不レ捨世俗を憤りて己が志を述たり誠に和語の書の中殊にすぐれたる物也句●作意は往々方便說を寫し寓言を學ぶといへとも退て其意を立る所を察すれば皆日用に便有てしかも中道に至らしむるものなり諸家聞書●此書を佛者がよめば專ら釋教にいひおとし儒者が講すればことごとく五常の旨にとりなし歌學者は詞花言葉をかざりて歌の道にいひ課す是皆しかるべからず兼好が心は何れの道にも人のおしへとなるべき處を引用ひ終に己か本意をいひあらはすしかれば三教一致と心得畢竟の處は人間常住の思ひをやぶりて無常變易の旨

を觀じて一部をあめる者なりされば說去說來るところ皆此あらましなり此本意をもつて全部を見るべし夫道は善惡二つの外なし善を勸め惡を懲しむるいましめならば何れを是とし何れを非とせんや必しも一偏になづむべからず諺●しかれども薙染の人のあらはせる本なる故に往々に大事とのみいへるは佛の道なり又終にも佛のはじめをとひつめてむすべる事なれば宗と立るところもみえたり又書の名を引用れとも摩訶止觀にも侍ると手に入たるやうにいひ論語といふ文にもなどゝ見えければ法師の筆ながらによくかなひける也參

題號の事●題號に就て二說あり●(先一說に)此題號さして穿鑿の義を取可らず其故は此草子に寺院の號さらぬ萬の物にも名を付る事昔の人はすこしももとめずありのまゝにやすく付るなり此頃はふかく案じ才覺をあらはさんとしたるようにきこゆるいとむつかしと兼好みづからいへり只發端の詞をもつてつれづれ草と付たりといふ說を用ゆべし是論語の學而篇老子經の道可道編などの類也文●問此題號は兼好みづから付られたる歟如何答予若年の比兼好自筆のつれづれ草のうつしを見侍りしに內題も外題もなく只端書なり然は後人發端の詞をおのづから用ひ習ひてかく云にや全●(又一說)兼好法師大かた浮世の隙をあけて心にうかむよしなしとをかき付ければ此題號一部の心に通ずる歟貞●此題號台家の敎相なりとて一部全編の心つれづれになれとなりつれづれとはしづかなりしづかとは止觀なり盤●此書の本意先徒然の心を本とする故に上下二卷の內につれづれの詞あまたみえたり是撰者の悟道の本意なるにや參

徒然草の字註●先三說ありくはしくこゝにしるすたゞし最初の說を用ゆべし其外は鑿也△徒(一說に)徒然と書てつれづれとよめりさびしき意又閑寂の心も有諸此說のおもむき數多本文の首にしるす故こゝには略す●(一說)徒はいたづらと訓ず是に付て二義有一つには夫人として當然々々のつとむべき業あるぞつとめもせず明暮する事もなくいたづらにのみ居りしゆへに書記といふ意也古歌にも「いたづらに過る月日はおほけれど花みてくらす春ぞすくなき●又一つには聖賢の書は人の敎となるに此草子は文にもあ

らず武にもあらずよしなしごとを書ｰ故にいたづらごとゝもなり此時は草の字も書樣がちがふべし次にしるす是卑下の意也但此說による時は題號を兼好つけしとみねばならぬぞ說●（一說）徒は韻會に云空也とあり云意は世のうつり替る有樣を皆空と觀じて書と也說●空といふにはさびしき心もしづかなる心もこどたらぬ心も有べし和語の心をよく思ひ合て空のことはりある字を付られたるべし●長水子璿云夫聖人所ｖ作不ニ徒然ニ云々此心も空ならぬよしなり聖人は空しきことはせぬ也人の敎か世の爲になるまことなる事をするといふ事也兼好が謙退の心にていふなるべし物くるおしけれといふ詞にもよくかなひてきこゆ盤 此說前說に似る△然●廣韻云助語也盤●山案助語辭云然訓ニ如是ｰ儼然蕭然却是形容之助語實有ニ恁地之意ｰ（カクノコトキノ）△草●是も四說有先●（一說に）草とは草紙の義なるべし淸書せざるさまを草案とも草稿ともいふなり是下書の意也野●前漢書師古注曰草謂ニ創造ｰ也●文選注濟曰草創言ニ造作ｰ也是草案の意盤●（一說）草はかこち草わらひ草などの類也つれ／＼のもてあつかひ草也壽抄●戀草思草も草也是は戀のしげきとを草のしげきにたとへ思ひのしげきにたとへたるなり植物にはあらずつれ／＼なるまゝに書あつめたる草子なりといふ盤●（一說）愚作と書おろかに作るといふこゝろ是卑下の詞なり前のいたづらといふ說に引合せみるべし說●（一說）種の字をかくべき也たねといふ意さびしきがたねとなりてか樣に書出したるとなり或說

〔序〕つれ〳〵なるまゝに日ぐらしすゞりにむかひて心にうつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書つくればあやしうこそ物ぐるおしけれ

つれ〳〵　●徒然（トゼン）と書數說前に註す●心二つ有一にはしづかなる心二にはさびしき心こゝにては打まかせて用る也全●しづかにしてをともかくもなき時はをのづからさびしき心にもかよふにや參●兼好の方よりは只さびしき故に硯にむかひて心にまかせて書といへり此方よりみれば兼好心身ともに靜なる心よりかゝる有難草子をばつくられたるとも可レ見ものなり全　頭書云▲六條宮御撰伊勢物語眞字本に徒然と書てつれ〳〵とよめり諸▲山案明心寶鑑云得失榮枯總在レ天機關用盡也徒然▲盆經新記云立レ今廢レ古必不二徒然一▲扶桑隱逸傳には寂寞の字をつれ〳〵とよめり參▲源氏須磨卷につれづれなるまゝに色々の紙をつぎ手習し玉ふとあり文▲大和物語業平歌に「つれ〳〵といとゞ心のわびしきに今日はとはずに暮してんとは▲又躬恒が集に「春暮てさびしき宿はつれ〳〵と庭白妙に花ぞちりける盤

まゝに　●間々と書つれ〳〵なるあひだ〳〵に書となり說●任の字を書さびしきに打まかせての義也諺●又間の字ばかりをも書諸

日ぐらし　●日くらしのくの字淸てよむべしにごれば虫の名になるぞ諸●兩說有●一義には終日（ヒメモス）の義也諸●一義には一日の事にあらず昨日もくらし今日もくらして暇あるよし也全　頭書云▲山案に前兩首の引歌は終日の意後兩首の引歌は每日の意なるべし「日くらしに見れどもあかず女郎花野邊にや今宵旅寢してまし●伊勢物語に「暮がたき夏の日くらしながむればそこはかとなく物ぞかなしき●又引歌に「日くらしに見れどもあかぬ紅葉々をいかなる山の嵐にかちる●詞花集に「日くらしに山路の昨日時雨しは富士の高根の雪にぞありける兩說見るものゝ意に任すべし

すゞりにむかひて　●對レ硯と書べし又向の字もかくべし●下卷に筆をとれば物かゝん事を思ひとあるに思合べし硯にむかひて居故に書付し心なり造作に落てかゝぬよし也盤　頭書云▲沈存中筆談序云蕭然移レ日所二與談一者唯筆硯而已謂二之筆談一良

▲草堂暇筆云毎レ有二日課之暇一偶然對レ硯筆ニ乎目之所レ視筆ニ乎耳之所一聆而已参 ▲風雅集に「何となく硯に向ふ手習よ人に云べき思ならねば壽
心にうつりゆく ●心は鏡のごとく萬境うつり來るといふ古來の本說あり壽 ●心にのにの字眼なりいかんとなれは心のうつりゆくといふ時は心が萬事にうつりてうごくなり心にうつるといふ時は心は外へ出ずして物來てうつるなりしかる時は心物のためにうごかされず物されぱまた本へかへつて無事なり說 ●(行)ゆくの字眼也執のなき心なりただ人はうつりゆくことなき故なりゆく故にこともものもうつるものなりとなん下卷に心にぬしあらましかば萬物は入來らざらましとある心なり其段と思合べし盤　頭書云 ▲性理大全三十二潜室陳氏曰人心如レ鏡物來則應物去則依レ古自在不三曾迎レ物來亦不二曾送レ物去只定而應レ之定盤 ▲倶舍論云壯士一彈指頃六十五刹那時之極少名二刹那一 ▲仁王經云一念中有二九十刹那一しかればつれ〴〵の折ふしはいかばかりの事ども心にうつりゆくは尤なり說
よしなしこと ●無レ由事無レ由言無レ據言共に書べし說 ●何の故よしもなきと卑下の詞なり諸 ●又說に兩說有ニル ●一義に人の敎によしがなきと也 ●又說に字註に由は用なりとあれば用に立事なきといふ義なり人の敎の用に立ぬ義也盤 ●此方より見れば皆本說有事也全 ●(こと)草子一部をさしてことゝ云なるべし盤
そこはかとなく ●そことさしあてたる事なき也はかは村字也諸 ●又一說無二其量一無二其計一と書說 ●そこをふまへたる事もなく何をはかりともなく心にうつるにまかせて書となり盤 ●山案後の兩說ははかの字を重く見る　頭書云 ▲源氏若紫に山の鳥どもそこはかとなくさへづり出たり旬 ▲「神無月風に紅葉のちる時はそこはかとなく物ぞかなしき野
書つくれば ●書つゞくればの中略也 ●又付の字なり譱字用ゆべからず譿　頭書云 ▲三敎指歸卷頭云文之起必有レ由天朗則垂レ象人感則含レ筆乃至動二乎中一書二于紙一参
あやしうこそ ●怪の字を書 ●我心なから出書もなく本說もなき事を書つゞくればあやしく奇怪な

るとなり諸 ●又異字なり ●凡人には其當然々々の勤あり世捨人ならば後世をねがふ事を專として世話にかゝるまじき事なるをよしなき事を書は人なみの道心者とはちがひ異樣なるとなり説 ●山案に兩説同意也

物くるおしけれ　●兩説在先正義には ●物狂と書物ぐるはしけれ也おしといふ事は五音相通なり諸 ●狂人の口きゝがましき也卑下の詞也參 ●又異説には物苦と書　頭書云▲異説に物苦と書く▲言は人のさせぬることぞいやともいはれずするに我心に移る事を書とてくるしむはあやしきこととかへして見るなり盤 ▲問ものぐるをしと云ふに物苦と云義もありや答源氏物語夕貟卷にもあなものぐるをしのものをぢやとあり其外あまた所に見へ侍れど只物ぐるはしき心に古人の註しをかれたるが此草子の心にもよく叶ひ侍べし文 ▲毛詩狂 進取ニ一槩之義一 ▲韓子云心不レ能レ審ニ得失之端一則謂ニ之狂一盤

〔此一節を序と云之論〕●是まで一部の序文と云傳なり異説多しといへども此義にしたがふべし參 ●或人曰書籍を見るに序と云物は別人が書りかゝるより所もあるにこそといへりそれにつき考に是は佛經を序正流通の三段にわけて見るに似たり神書も此ごとく序と云ものなくて本文の中に云ることあり此等の事此草子の例になるべきと云々盤 ●如レ此序より本段へ直に書つゞくる例妙樂の釋籤の序和泉式部が家集などに見へたり ●又案ずる下の下戸ならぬと云までを序文とし古の聖の御代と云を本段の初とし底心は源氏の品定の例になぞらへ序に人品を論じて帝王の事を初に云たれば又本段の初にも聖代の事より書出し末々の事も處々引合見る一説あり是も又捨がたき義なり句 ●問これまで序歟答序の心なし歌などに序歌ありそれに准すれば此一段の序なるべし一部の序とはいはれまじき也又此一段をつれ〴〵一部の序と見るはさも有べし全 ●序字訓 ●左傳正義云序與レ敍音義同 ●爾雅釋語に云敍緒也然則擧ニ其綱要一若ニ繭之抽一レ緒此外序字註多けれども今こゝには略す

〔二〕いでや此世にむまれてはねがはしかるべき事こそおほかめれ

いでや　●先の字を萬葉にいでやとよめり諺 ●又凡の字も用ゆ●發語の詞なり諸 ●いで〳〵さらばおもはくをいはんとなり余 ●山案に謠にもいで其比と發語をせり　頭書云▲文選註凡猶ニ條目一▲說文大槩也說 ▲山案助語辭云凡者一槩總說之意▲古今に「いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ことにして又「我をのみ思ふといはゞあるべきにいでや心はをほねさにして

此世　●今世と書べし

むまれて　●此世に生るゝといふ中に三世ある事をこめたり增鐵

ねがはしかるべき　●此人間世に生れては品々につきねがひなき事あたはず文　頭書云▲三略云含レ氣之類咸願レ得ニ其志一

おほかゝめれ　●おほく有なれといふ心也諸

〔第一節〕●いでやと云よりをほかんめれまでなり此一段を六節に分ち可レ見文段の節の分ちやうもこれに同じ●此一節は一段の大綱なり諸 ●人のねがひと云ものは數多あるべきなり先かく云て後に其願をやめさせんとのためなり文章の抑揚也盤

みかどの御位はいともかしこし竹の園生の末葉まで人間の種ならぬぞやんごとなき一の人の御ありさまはさらなりただ人も舍人なんど給るきはゝゆゆしとみゆ其子むまご迄ははふれにたれど猶なまめかしそれよりしもつかたはほどにつけつゝ時にあひしたり顏なるもみづからはいみじと思ふらめどいと口おし

みかどの御位　●帝の字を書又和字に御門と書也●御門の御位とこゝに出せるは天子は人間の願を滿足し給へば願の至極は叶ぬ事をしらせてすてさせたる也盤　頭書云▲先づ帝の字を用る也▲洪武正韻云丁計切帝王君也參 ▲山案に呂氏春秋云帝者天下之所レ適▲禮記云謚法德象ニ天地一曰レ帝▲又御門と書▲いにしへは平人は門たてる事なき故に內裏はかりにありし故御門と申なりとなん盤 ▲御位▲獨斷云天子所レ止謂ニ之御一前曰ニ御前一書曰ニ御書一服曰ニ御服一皆取下統ニ御四海一之義上參 ▲位易聖人大寶曰レ位位者正也列也凡所レ當レ立者皆曰レ位中庭之左右謂ニ之位一盤

いとも　●山案最字を白氏文集にて訓●又河海專

字も書又いとゞの義つのる詞也

かしこし　●字の書樣あまたあれ共是は日本紀に用たる可畏の字をかくべき也參●帝位の御事を凡人としてねがふ事はもつともおそれ有と也●又最も恭と云心也壽　頭書云▲正説は下に記す▲又貴字を古事記によませたり言は帝位は最も貴ければ云ふにをよばずとなり文▲又賢字を書てよき心なりいとゞよき事にて中々人の望れぬとの事也盤▲賢と恐と古は通用するなりしかるときはともに恐多と云心なるべし▲拾遺集に「勅なればいとも賢し鶯の宿はと問はゞいかゞこたへん説

竹の園生　●竹園とは親王を指生の字は蓬生淺茅生の類にて生植の意なり野●漢文帝の御子梁孝王修竹園におはしけるより今に竹の園といひて親王の御事とするなり參　頭書云▲史記世家云於レ是孝王築二東苑一三百餘里註ニ有二宋州宋城縣東南十里一俗人言二梁孝王竹園一文▲歌にも竹の園とよめり「さもこそは竹の園生の末ならめ身にうきふしのなどしげるらん「年をへて生そふ竹の園の中に盡せざるべき君が御代かな盤

末葉　●竹と云より末葉とうけて親王の御子孫をいへり諺

人間の種　●我朝の王孫は異國に替りて天照大神の御末今にたえせねば凡人の種ならぬ事と云り諸　頭書云▲朗詠に親王の詩に云此花是非二人間種一再養二平臺一片霞一菅三品　▲此花是非二人間種一瓊樹枝頭第二花後江相公▲これ王孫入學日名花在二閑軒一といふ題の詩なり文時朝臣と朝綱卿と同時に作り合せし名譽の句なり兼好此詞を用ひてかゝれける歟文▲杜子美哀二王孫一詩に▲高帝子孫盡隆準龍種自與二常人一殊野

やんごとなき　●無レ止と書てほめたる詞也●よき人の身の上は云ひやまれぬ心より萬ほむる事にいひ來る詞也文●山案に此やんごとなきを上へ付てみると下へ付て見るとの兩説あり但上へ付て見るをよしとす諸抄同レ是●孫王などさへ人間の同じ事ならねばまして天子の位はといふ筆法也末葉迄のまでの字を味ふべしとなり盤●是は俗骨の青雲をえふまぬためしなればねがはしき事のはじめには書たれどもうらやむばかりの心にてさしをく

なり貞●天子の御事は云もはゞかりあれば手を付ぬ所一章の妙所なり參●手を付ぬ所文法の手本辭多ければかへつてあさ〳〵し諺　頭書云▲源氏の桐壺にやんごとなきゝはにはあらぬと云り▲花鳥餘情にはきはめて上藹の品を云とあり壽▲さて此やんごとなきを異說にはやんごとなき一の人と下へ付るなり▲其說に云やんごとなき人とは天子一人にかぎりたる詞なれどもそれにてならひてほむる詞に用來るなり何事もやめ玉ぬは一の人ならではなきことなり全說の辨もこれに同じ▲山案に前後の文法によつて見れば下へ付るは惡しかるべし如何となれば帝の御位はいともかしこしと云もかしこしを上へ付るなり又次のたゞ人も舍人など給るきはゝゆゝしとみゆとまた其子むまこまではふれにたれど猶なまめかし又其より以下の文も皆上へ付し筆法なり何ぞや此所にかぎりて一の人のかしらにやんごとなきをつくべきや其上一の人の御ありさまはさらなりと下にて褒美する詞あるぞ若し頭にやんごとなきを付るときは重言なり

一の人の　●攝政關白の事なり●山案に一人(イチジン)とは天子の御事一の人とは攝關を云一人(イチニン)とは平人なり同じ文字にて替る也　頭書云▲職原には執柄必蒙ニ一座之宣旨一故稱ニ一人一野▲內覽之宣旨を蒙ると云ふ事あり天子に見せ申文書をまづ執柄に見せて後に奏聞申事なり其故に諸臣ノ中ノ上座せらるゝ間一の人とも一の所とも申なり▲職原云一の人者當時兩流也法性寺入道關白後胤近衛九條是也近衛又分爲レ二近衛鷹司九條分爲レ三九條一條二條これを五攝家と申なり又枕草子にめでたきもの一の人のみありきといへり文

さらなり　●今さらいふもことあたらしきと云心也壽●又殊更の義なり野●臣下にても攝關になる人は殊更なりねがふべきにあらず藤氏は天兒屋根命の御子孫なればねがひてもならぬよし也盤●又異說一の人は位といひ威勢と云たぐひなければうらやましき事に引りさらなりとは天子はねがひても及かたくておそれあり殊更に願しきは一の人のありさまなりといふ心なり全

たゞ人も　●凡人と書也爰は攝關に對して書ば平人とは心得べからず五攝家の外にても淸花名家な

ど也
舍人など給はる　●近衞舍人は即隨身也隨身の下﨟なり隨身に兩樣有本府の隨身と小隨身と也小隨身はいづれの家にても御免に及ばずつれらるゝ也本府の隨身は天子の御免なくてはつれざるなり御免は規模なり壽●今いはゆる舍人とは本府隨身を云なり參　頭書云●弘安禮節云隨身攝關十人府生二人番長二人近衞六人大臣大將八人納言參議六人中將四人少將二人諸衞督四人佐二人てれ御免にてつれらるゝ隨身の數なり府生番長近衞等は近衞府ノ大將中將少將等ノ下につく官人なれば本府の隨身と云なり文●されば警固のために隨身を召連て禁門を出入す凡そ隨身の發る所は聖德太子ノ守屋ノ逆臣にをそはれさせ玉ひ甲斐の黑駒に乘じて落させ玉ふ時秦河勝一人御身に隨ひ供奉し奉りけるより始るとこそ諺
きはゝ　●際と書其分際なり諸
ゆゝし　●優々と書●優長なる事也參●又美々敷見ゆるやうの心なり諸●舍人を給る事は取分て忠節の有故也尋常の大臣とはちがふ也盤●又いさましくいさ〳〵したる義也古

其子むまで　●其子や孫といふ事也說●舍人なんど給りし人の子孫也諺●孫の字をむまごと訓ず諸●常にまごと云は略したる也句　頭書云▲孫の字をまごと訓するはよろしからず眞子と書てまごと訓ずれば子の事なり孫の字はむまごと訓ずべし生子と書なり子のうむ子と云心なり諺
はふれにたれ　●放の字書盤●廢の字も書說●又放埓共書野●世に落ぶれたる事也ふの字淸濁の兩樣によむくるしからず句●はふれにのにの字は助語なり諸　頭書云●古今集に「身はすてつ心をだにもはふらさじ終にはいかゞなるとしるべく野▲にの字てにをは字にて休字なり●山案末にもいたふこそからうじにたれとある類也●又古今の序にも人丸なくなりにたれどゝ書るも同格也句
猶　●猶と云は威勢あるたゞ人よりは落ふれたるがまさるとなりまして舍人給る人はといふ筆法也盤
なまめかし　●最媚共嬋娟共書諺●優美なる體やさしき心也諸　頭書云▲伊勢物語に其里にいとなまめいたる女と書り諺▲古今に「秋野になまめき

立る女郎花あなかしかまし花も一時野
それより　●上をうけてそれといふ盤●舍人給るより下なれば五位六位殿上人受領の類を云也參
ほどにつけ　●其人の品々に付てといへる心なり句
したり顔　●知りたり顔也ほこりたる體也諸　頭書云▲後京極の歌に一露そむる野邊の錦の色々をはた織虫のしたり貌なる句
みつから　●自字　頭書云▲集成に躬親なり又己也▲字彙獨なり古
いみじ　●美の字也よろしき心也參●其一分にいみじくよろしと思ふらめどいと口おしく願に不足也文
いと　●最の字前に註す
口おし　●口の暇惜きと云心也如何となれば善と惡と一口に云ふに惡をいふは口の暇も惜き也上に云所の麗々と又其以下と一口にいふ事は口惜と也說　頭書云▲一說に朽惜と書て物の朽はつるはをしゝと云心なり說▲山案此說はこゝには叶ひがたし口の暇をしきと云說を用ゆべし

［第二節］●御門の御位と云より口をしと云までなり●此二節は人の子がひには金銀米錢居家衣食等さまぐあれどそれは云もつくされず又云にも不レ足は只帝位一の人など人の品のうへばかりを書つらねたり此内に萬のねがひはこもりたればなり文●富と貴とは人のこひねがふ事なればやがて帝の御位より書はじめて品下りたるさまゝて及ぼすなりされど得がたき富貴を求ず身のほどをしりて望とどもあることを後にいたりて書あらはさん爲なるべしさて世間の望をこゝまでにて書をさめ次より出世間の道をねがふに付て云ふなり參●俗の上は公家をかぎりにして士農工商を云ず文句法規師則也諸●山案公家さへ望に不レ足況や四民に於をや
法師ばかり羨しからぬ物はあらじ人には木のはしの樣に思はるゝよと淸少納言がかけるもげにさる事ぞ實字　かしいきほひまうにのゝしりたるにつけていみじと威勢の字　美の字　は見えず增賀ひじりのいひけんやうに名聞ぐるしく外聞也　佛の御おしへにたがふらんとぞおぼゆるひたふるの

世捨人は中々あらまほしきかたも有なん（有度なり）
法師　●三論の出家をはつしとよむで天台をほう
しとよむよみくせなりされども愛の法師は其かま
いなき也句　頭書云▲法華科註云法者軌則也師者
訓レ匠也法雖レ可レ軌體不二自弘一通レ之在レ人故曰二法
師一句
ばかり　●計と書ばかりはほどなり凡ばかりと云
處ほどゝいふにかなふ所おほし諺　●こゝも法師ほ
どゝいふ義也　頭書云▲引歌「有明のつれなく見
へし別より曉ばかりうきものはなし諺　▲山案に百
人一首に周防内侍が歌に「春の夜の夢ばかりなる
たまくらに甲斐なくたゝん名こそ惜けれ
うらやましからぬ　●法師程うらやましけなきも
のは又なしと也上にうらやましき物に對して如此
いふなり兼好底心は法師ほどうらやむべきものは
あらぬに世の人はうらやましげなきといふなり枕
草子を引ける心味ふべし又枕草子の心もこれ也全
●法師は佛の形をかたちとして佛の心を心とする
ものなれば三尊の其ひとつにゑらはれたれど其行
あしきをみて羨しからぬにや又世を捨たるをみて

人のたつぎにもならねば人うらやまぬにや兼好世
人の心に法師をゆるかせに思ふ事をいきどほりて
みづからおもふよふに書なせりまことは人にうら
やませたきと思ふより出たり参　頭書云▲山案に
異國にも兼好が心はへのごとく云し者あり▲膾餘
雜錄云堯山堂外紀載二元柏子庭可レ憎詩一曰世間何
物最可レ憎蚤虱蚊蠅鼠賊僧船脚車夫幷晚母濕柴爆
炭水油燈余謂爲二憎レ僧一邊重一而作柏子庭吳僧而
作二是詩一躬自厚而薄責二於人一豈無レ意哉これを以
て思合すれば兼好志尤殊勝なり
木のはし　●木斷也榾柮（コツトツ）小木也　或云木頭野　●山案
に木端とも可レ書●切かぶなり世をはなれてゑよ
ふなきさまをいふ諺　●又用にたゝぬとの義也盤
頭書云▲榾柮▲海篇崖烟曰音骨咄短木也　讀如レ柮
誤参　▲山案梵網經云若佛子信心出家受二佛正戒一故
起レ心毀二犯聖戒一者不レ得レ受二一切檀越供養一亦不レ
得二國王ノ地上行一不レ得レ飲二國王水一五千大鬼常遮二
其前一鬼言大賊若入二房舍城邑宅中一鬼復常掃二其脚
跡一一切世人罵言二佛法中賊一一切ノ衆生眼不レ欲レ見
二犯戒之人一畜生無レ異木頭無レ異云々▲古今に「木

にもあらず草にも非ぬ竹のよのはしに我身はなりぬべらなり野

清少納言が　頭書云▲肥後守清原元輔かむすめ也一條院の皇女定子に宮仕せし女房なり紫式部など同時の者にて詩歌に達せる女なり其姓を用ひて清少納言といへり諸

系圖

天武天皇人王四十代━舍人親王日本紀撰者━貞代王━有雄

┣通雄賜二清原姓一━海雄筑前守━房則豊前守清原夏野爲レ子━深養父

┣内匠允藏人所雜色━顯忠下野守━元輔肥後守後撰集の撰者梨壺五人の内

┗清少納言枕草紙七冊をあらはせり

かける　●枕草子にかける也　頭書云▲清少納言が枕草紙に思はん子を法師になしたらんこそ心ぐるしけれさるはいとたのもしきわざをたゞ木のはしなどのやうに思へるこそいと〳〵をしけれ諸

さる事ぞかし　●枕草子にかける事實ケニもつともなりと兼好同心なり世間塵欲ふかき心からは嫌ふも尤なりとの心也全●枕草子の語にてよく味ふべしさるはたのもしきわざといへばみづからは殊勝におもへども世の人なべて木のはしのように思ふ事を兼好も同心して憤り思ふ故にげにさる事ぞかしといへり參

まうに　●猛の字也たけき心也●假名物にもかく堅くよむよみくせ也源氏に多き詞也句●又猛字もいきほひと訓ずしかる時はいきほひもふにといふは重言の様なれども此格有伊勢物語にまめにじちようにといへるも同じ心をかさねて云也說

のゝじり　●罵の字也文選には轘罵と書なり

いみじとは見えず　●是うらやましげなき法師をいへり兼好尤と同心したる心をのべたりいきほひのゝしる法師はいやとなり兼好隱者の心なり全●法師は尤俗緣をはなれ樹下石上の有樣にて菩提をねがふべきなり參●兼好時代何の禪師何の僧正とて威勢あるに付てよくはなしとなりまして威勢なくて世にまじはるは見にくしと也盤

增賀　●增の字濁りてよむと清でよむとの兩義なれども大かたは濁てよみならはせりさりながら今多武峰の僧に皆清て唱るなり又僧賀と書る本もあれば彌すむもくるしからず句●清でよむが山門の

ならい也濁ては我台宗一家聞しる人なし參　頭書云

▲增賀系圖

敏達天皇人皇二十一代―難波親王―大俣王贈正二位―美好王―

治部卿正二位―諸兄井手左大臣正一位歌人―奈良麿參議正五―島田麿春宮―

亮兵部大輔從四下―當主參議從四位下―安吉麿攝津守從四下―良狙參議從四位上―

敦行從五位上―敏行正四位下左少將―恒平參議正四位下―增賀―

住二多武峯一

▲元亨譯書十曰釋增賀平安城人諫議大夫橘恒平之子也十歲父母送二叡山一與二慈惠一性聰穎操履潔學綜二顯密一尤邃二止觀一而惡二利名一絕二交謁一云々慈惠任二僧正一入レ宮賀謝翼從甚盛賀帶二乾魚一爲レ劍乘二瘦牸牛一交二先驅之列一諸徒叱而去レ之賀勵レ聲曰僧正先驅去レ我誰乎聽者笑而伏應和三年如覺法師勸上二談峯一因レ是居焉長保五年六月九日滅年八十七野○長明發心集に慈惠僧正に任じてよろこびし玉る時增賀異樣の體にて前駈せしことをいふところにかくて名聞こそくるしかりけれ乞食の身こそたのもしけれとうたひて打はなれにけりと云文

ひじり○聖の字也○山案に聖の字をひじりとよむはもと非をしると云心にて非知と書ぞそれを取て聖の字の訓に付たり德を成就せし名なりされば字書にも於レ事無レ所レ不レ通謂二之聖一又通而先識曰レ聖○增賀聖とはたうとみたる詞也慶保胤の日本往生極樂記に沙門弘也ヨシノヤスタネを阿彌陀聖或は市聖といひしとある類なり全

佛　○佛とばかりいへば釋尊の御事也此娑婆世界の教主なる故也例せば世典の中に子曰といへば孔子と知がごとし參　頭書云▲山案佛地論云佛者覺也覺二一切種智一復能開二覺有情一如二睡夢覺一故名爲レ佛▲列子云西方有二聖人一焉其名曰レ佛古くはしく十六段目にしるすなり

御おしへ　○教字也○山案に增韵に教者使二人爲一也とあれば何事にても我道を人に云しらせて其通にさせることとなり○さておしへとは釋迦のおしへなり四教八教とて是あり五十年の間とかれし經々にも名聞をねがへとはみえぬなり參

たがふらんとぞおぼゆる　○上のいきほひつよく名聞ぐるしさ法師を增我の詞を引てそしれる也全

●是も俗家のねがひの方より法師をきらへるに付て且は兼好桑門にてつれ〴〵を好む志をいさゝか述たるべし文 ●前段には世人の僧を踈略に思ふをうらみ此段は僧の自分の佛の道にそむく事をかなしむなり參

ひたふる ●一向と書又永の字も書 ●ひたすらの義なり增鐵

世捨人 ●桑門の字を文選にてよすて人と訓するなり參

中々 ●却(カヘツ)てなどいふべき時につかふ詞也文 ●俗にいふ結句の心に通ふなり句

あらまほしき ●此一句は法師の事を褒ていへり言はひたすら名利を離て身を安樂にする法師は却てあらまほしきと願の辭なり諺 ●兼好存念は此一句にとゞまる末にも山寺にかきこもりてと云ひ又世にまじはれば心ほかの塵にけがさるゝと書し也說 頭書云▲枕草子にうらやましきものまことに世を思ひ捨たるひじりといへり文 ▲禪家龜鑑云名利納子不レ如ニ草衣野人一參

〔第三節〕●法師ばかりと云より有なんまでなり●上には世上俗人のねがひを書つくしたればこゝには法師の上を云ふなり是三節也文 ●山案 上節ともには世上の俗の願を書ながら或は望てもかなひ難く或は望むに不レ足と云て望をすてさせ此節には兼好が望しく思ふことを書くしかも三品に又書りたとひ法師になりても木のはしのやうに人に思れそれをば又思れまじきとすればかへつて名聞ぐるしゝとかく世にまじはるゆへに二の難出來なり只ひたすらに世をすてたる時は世の交をもやめて居るゆへに人に木端のやうにいはるるべき誘もなく謗がなければ自ら名利の煩も止み心も安く閑にして兼好存念のつれ〴〵の境界にいたるべきと書留たり此次はこゝの餘論なり

人はかたちありさまの勝れたらんこそあらまほしか(有度なり)るべけれ物うちいひたる聞にくからず愛敬有て詞おほからぬこそあかずむかはまほしけれめでたしとみる人の心おとりせらるゝ本性みえんこそ口おしかるべけれ

かたち ●生付也諸 ●美男など〻云がごとし是より

おしなべての人を論ずるなり全
ありさま　●行跡の立居ふるまひの事を云諺　●衣服にかゝれり全
あらまほし云々　●畢竟本心の事を云ん爲にまづ形上を論じおくなり諺　●心にはよらず只形有樣のよきが有度と云る心には非ず心は云に不及形威儀迄よき人こそあらましけれと云る義なれば末に心法の事を專要に書添たり句
物うちいひたる　●うらゝかに云詞なり諺　●ごんびんさはやかなるがきゝよきと也全　●中にあるものは必外へあらはるゝならひなれは言語異義の間にて其人の德の有無を見る事儒門にも沙汰有事とぞ扨其あらまほしかるべき皃有樣はいか樣にたしなむべきなれば物うち云ひたると書つゞけたり形有樣の品々多中に殊に言語を愼むべきいはれ有て古の聖賢も口を開ば言を愼事を敎故に今兼好も言語一事の工夫を示してもつともつゝしむべき事をしらせたり句
愛敬　●愛はいつくしみあはれみの心也敬はつゝしみうやまふ也愛を過して物いふ時はなれすぐる事有又敬を過す時はあまり慇懃（インギン）にしてそひよりなき物なれば過不及のたがひなく其中をとりて物いふべきなり參　●愛敬は禮と和と相兼たる皃なり文
頭書云▲孝經云愛敬盡二於事一レ親　▲董氏註云愛者仁之端敬者義之端參　▲論語鄕黨君在踧踖如也與々如也▲大全雙峯饒氏曰踧踖敬レ君至也與々愛レ君至也敬有レ餘而愛不レ足踈也愛有レ餘敬不レ足慢也聖人兩者具足莫レ非二中和氣象一諺
詞おほからぬ　●言葉ずくなにと也諸　頭書云▲論語里仁篇子曰君子欲下訥二於言一而敏中於行上▲又古者言之不レ出耻二躬之不一レ逮也▲又學而篇に愼二於言一と孔子の宣ひたるを朱註に愼二於言一者不三敢盡二其所一レ有レ餘也とあり句　▲文始經云大言不レ能レ言大智不レ能レ思古　▲文中子云多言德之賊也註曰有レ德則不レ言參　▲山案に離騷經云人不下以二多言一爲上レ善犬不下以二善吠一爲上レ良　▲擊蒙要訣云多言多慮最害二心術一　▲景行錄曰寡レ言則省レ謗
あかずむかはま云々　●いつまでかたりてもあくといふ事もなくむかひ居たき義也參
めでたし　●ほめたる詞也壽　●尊貴美麗の人を云

野●愛字を書愛する心色にめづるなど云と同じ說
　頭書云▲引歌「散ばこそいとゞさくらはめでたけれ又こん春もさかんと思へば說

みる人の　●そひよりはめでたしとみゆる人の立入てみれば不學無道にして思ひの外にみさげたる心なり說

本性　●生付たる氣性をいふなり文●性に天性と氣質の性とあり天性は渾然たる善にて惡にそまる事なし爰にいふ性は氣質の性なり是はよくも惡敷も染る者なれば其惡敷も染りたる性を向の人にみせんは口惜となり諺●本性の二字かろくみるべし
全●此本性の二字は只人の心底といふばかりの事也參　頭書云▲頓悟要門云本性者是汝無生心參▲枕草子にげなき物の條に本の心の本性とのみのたまひつゝ句▲山案に或問生付の天性と見てはこゝにてはすまぬぞ天性はもと善なるものなればたとひ人に見らるゝとも何ぞ口惜かるべき綵脊抄には本性とは人の不審することなり心と云ものは萬人靈明なるものなるにあしきとはいかゞと也是は本心にてはなし性と云にてしるべしと云々但これにても性の字の意分明なりがたしまづ本體は下にいへる氣質の性と見るべしさりながら本の字すみがたし氣質の性ならば本性とは云ひ難し若性の字を情字になして見たらば少し通ずべき歟されば七情と云は見もの聞ものについて發るゆへに本より善不善あるものそさて人として七情なきと云ことなし天より性を得るとひとしく情は性の中にそなはつてある故に本情ともいはん歟如何答此說誠に一理あり又問儒者に今とける本性は儒者に云へる氣質の性なりと云說あり答儒佛ともに本性は一理にして隔なきと云こと續原敎論などに見へたり其略云天性者吾佛謂ニ之本覺一即一念不レ起寂而常照之心也儒門乃喜怒哀樂未レ發之中無ニ一毫私欲之累一純乎天理者也二敎之迹雖レ異本性之理則同也佛由ニ此本覺一發爲ニ六度萬行一乃至レ圓ニ滿佛果一儒亦從ニ此天性一發爲ニ仁義禮智一以成ニ聖人之道一佛則兼ニ四聖六凡一而治レ之儒者但治ニ人道一而已云々とあれば氣質の性とも云ひ難し

みえんこそ　●人に見すかされんことゝなり說

口おし　●おもてむきをつくろひて内證のばけあ

らはれたるはにが〳〵しきとの心全
〔第四節〕●人は形ありさまと云より口惜かるべけれ迄なり●此節は品にまよらず人々の上のたしなみねがふべきことをいへり是まで四節なり文●山案に上の段々には他人の身上にあることを云是外に就てのねがひなり此より末は身上について有度ことを云ふなり

品形こそ生つきたらめ心はなどか賢より賢にもうつさばうつらざらん形心ざまよき人もざえなく成ぬればしなくだり顔にくさげ成人にも立まじりてかけずけをさるゝこそほいなきわざなれ

品形 ●品は位官の品々諸●一の人の御有様たゞ人も舎人なんど給るきはなど云し所にかけて見るべし文〔形〕生付の形容説●人は形有さまのすぐれたらんといふ所にかけてみるべきなり　頭書云▲源氏帚木に今はたゞ品にもよらじかたちをば更にもいはじいと口惜くねぢけがましきをぼへだになくは物まめやかに閑なる心をもむきなられよるべをぞつゐの頼の所には思ひをくべかりけるとなり▲是品と形と心を評論して所詮心に歸する義なり此文法をうけて兼好も書り▲花鳥餘情に三界唯一心は源氏一部の肝心と釋せり壽

生つきたらめ ●官位と男からこそ生付たれば是非なしと也論　頭書云▲孟子盡心云形色天性也疏云人之形與レ色皆天所レ賦性所レ有也野▲撃蒙要訣立志章曰人之容貌不レ可レ變醜爲レ妍膂力不レ可レ變弱爲レ强身体不レ可レ變短爲レ長此則已定之分不レ可レ改也惟有二心志一則可下以變レ愚爲レ智變二不肖一爲上レ賢此則心之虚靈不レ拘二於禀受一故也句▲明心寶鑑云古人形似レ獸心有二大聖徳一今人表似レ人獸心安可レ測有レ心無レ相相逐レ心生有レ相無レ相相從レ心滅參

賢より賢にも ●論語古註の點　頭書云▲論語子夏曰賢レ賢易レ色皇侃疏云凡人之情莫レ不レ好レ色而不レ好レ賢今若有レ人能改下易好レ色之心上以好二於賢一則人便是賢二於賢一者也故云二賢レ賢易一レ色也然云二賢二於賢一亦是奬勸之辭也參

うつらざらん ●色を易ると云をうつさばうつらざらんとやはらげて書筆法おもしろし貞●人品容儀などこそ其家其身に生れ付ざる人は願っても甲斐なかるべし心ばかりは學問して聖賢の道を手本

にして我心にうつしとらんと思はゞいかでか願得ざるべきとの心なり文　頭書云▲抱朴子云今ニ頭虱一著レ身皆稍變而白身虱著レ頭皆漸化而黑則是玄素果無ニ定質一移易在ニ乎所一レ染也云々▲弘法依ニ此語一而作ニ教誡一曰與ニ頭虱一以陶レ性參▲山案貞觀政要云人相與處自然染習▲又水は方圓の器にしたがひ人は善惡の友によるといへば古の聖賢を友として明暮似せんと思はゞ何んぞうつらざらんや則ち末にも灯火のもとに文をひろげて見ぬ世の人を友とせよと書り▲「かしこきにうつさばなどかならざらん花の色なる山吹の露說

ざえなく　●無レ才なりさ文字を濁りてよむべし諸●才をざへとよむは五音相通なり參　頭書云▲源氏桐壺の巻にざへをいとさへかしこきはかせにて云かはしたるもなんとあり說

成ぬれば　●才智なく成ゆく也文選に初貴して後賤しといへるにも心同し參●才智なきと評判成ぬればと云心なり句●山案に此所文字に泥むべからず輕く見るべし只才藝なければと云意なるべし●心までよき人もあれど才藝がなければ又あしきと重々に云ひあげたる筆法なり盤

しなくだり　●差降と書●我より分限のひきゝを云諸　頭書云▲日本紀二十五巻云大夫以上各有ニ差降一野

顏にくさげ　●顏惡氣なる事也さは助語なり諸●又惡相氣なるなり是にてはけを助語とす譬ばいとしげさきけおかしげの類也說

かけず　かけくらへずと也諸●はかりにて物をかけくらぶる心なり才なければむかふとくらべぐるしきとなり諺●又掛圖共書かけはかりてなり說

けをさるゝ　●氣色おさるゝなりむかふよりもののかずともせぬ体なり諸●又けさるゝの義なりをの字助語なり句●又藝押なり古　頭書云▲源氏紅葉賀に顏の匂にけをされたる心地すればとかけり野▲柳屯田勸學文云學則庶人之子爲ニ公卿一不レ學則公卿之子爲ニ庶人一文▲誡子拾遺云蔡伯階誡レ子曰貴賤無レ常唯人所レ速苟善則庸夫之子所レ至ニ三公一苟不善則王公之子反爲ニ凡庶一參▲山案滕王霄詩云莫レ道文章不レ直レ錢布衣親到玉皇前

ほいなきわざなれ　●無ニ本意一事なれ諸●此所は

此段の宗也たとへ攝關なり共無道無學文ならば下人也無官無位なり共聖道をしりて勤る人は心高位高官なり全

〔第五節〕●品形と云よりほいなきわざなれまでなり●其身に生れ付ぬ官位容儀はがねひても甲斐なきものから學問才智のねがひて得やすきものには猶をとるべきものなればたゞ才學をねがふべしと畢竟いへるなり是五節なり文

有度事はまことしき文の道作文和歌管絃の道また有職に公事のかた人の鏡ならんこそいみじかるべけれ手なんどつたなからずはしりがき聲おかしくて拍子とりいたましうする物からげこならぬこそおのこはよけれ

有度事　●人の身の上に有度事也是惣標の詞也參

まことしき文の道　●國家を治る四書六經の道也文●まことしきと云に心をつくべし野　頭書云▲まことしき文道は四書五經を云なりとしかれども續世繼にまことの道と題を云ては佛者の事を載せ賢道々といひては世俗の賢者の事をいへり如何盤▲まことしき文とは身を修め家を齊へ天下を平にするには儒書を基とすべし心法の迷（マドヒ）にひかるゝをとりかへして萬劫にもうつらぬやうにをさむるは佛道也名利につかはれず自然造物の理を樂ているは老莊の書也三教なべてまことしき文也參▲山案禮記玉不レ琢不レ成レ器人不レ學不レ知レ道▲大公曰人生不レ學冥々如二夜行一▲朱晦菴曰學者爲二君子一不レ學則爲二小人一▲葛子外篇云水積而成レ淵學積而成レ聖

作文　●文を作り詩を賦する等の事なり異國にも是をおゝくする道也此國には唐うたといふ諧●文といへば詩もこもるなり句●山案文は貫通の器といへば尤人たるものゝ可レ勤事也

和歌　●和歌は神代よりの風義にして此國の道也萬葉古今集を始として古人の説々其德あげてかぞふべからず昔は歌道遍世に行れて人の心ざし直（スナホ）道にして神慮の惠あつく國もゆたか成しとなりされば人たる人學ばで叶ぬ道なれば稽古あるべし全

管絃の道　●管はくだとよめり笛篳篥（ヒチリキ）など也絃はいとつるとよめり琴琵琶等也すべて音樂の惣名を管絃と云なり全●山案是六藝の其一つにして尤人たる者の勤むべき事也人の心を溫和にして風（フウ）をあ

らたむるは樂の德なり末の神樂の段にくはしく注
ず　頭書云▲文選注云吹曰レ管撫曰レ絃文
有職　●ゆうしよくとよむも苦しからずされどゆ
うそくとよむよみくせなり句●ものしる事ありと
よめり萬物に心得て故實を存じすべをしるをいふ
禁中の事共わきまへしれるのみにあらず野
公事のかた　●おほやけごとゝよめり諸●正月元
日より十二月除夜に至る迄天子の行せ給ふまつり
ごとの惣名なり全　頭書云▲爰に二說あり禁中の
行事と見れば有識公事同事なり此說は有識にと句
を切て公事の方人と下へよむなり有識を明らめて
公事の方人の鏡手本とならんこそ願なれとなり未
レ知二是也否一諺
人の鏡　●鏡といふ物は鏡がよきまゝに人が來り
て善惡をうつしてなをす也其ごとく人が來て善惡
を此人をば手本にしてなをすやうにとなり師匠と
なりたがりてなをすにあらずをのづから人の方よ
り手本にする也盤　頭書云▲莊子天道篇云聖人之
心靜乎天地之鑒也萬物之鏡也參▲唐書魏徵薨太宗
臨レ朝歎曰以レ銅爲レ鑑可レ正二衣冠一以レ古爲レ鑑可レ
知二興替一以レ人爲レ鏡可レ明二得失一朕常保二此三鑑一
內防二己過一今魏徵逝一鑑亡矣野▲晉書樂廣傳云衛
瓘曰此人之水鏡也見レ之瑩然若三披二雲霧一而覩二青
天一說▲番陽沈氏曰智者涵二天理動靜之機一具二人事
是非之鏡一古
つたなからず　●すぐれたる能書ならねど達筆な
るがよきとなり奧にも手かく事むねとする事はな
くとも是を學ぶべしといへる拙からずといふに相
應せり文●つたなからずは不レ拙也よめさへすれ
ばよきと思ふも野人なり全
はしりがき　●必草書にかぎらずこゝにてははや
かきをいふ說　頭書云▲東坡文集云眞生レ行々生レ
草眞如レ立行如レ行草如レ走未レ有下未二能立一能行一而
能走上也▲河海集云眞字は人の衣冠たゞしき體な
り行字はありく體なり草字は人のはしる體なり壽
▲はしりがきのかの字淸でよむべし草字を書義な
ればなりかの字濁ては草書の體をさす義に成べし
草書などいやしからず書ちらす義也句此說は鑿也
聲おかしくて　●おもしろき義也●可笑とも可共
書ほめたる詞なり古

拍子とり●源氏にてはうしとよめり聲おもしろくいまよふ早歌(サウカ)などうたひて手拍子とるさま也文●私云うたひなどのさまなり全●三說有先酒の方にては痛飲と書藝能の方にては強勤と書又勞いたましうする物からげこならぬ●(げこ)是も酒にては下戸と書藝にては下字も書子と書又饒子と書　頭書云▲三說あり先づ酒の說をいへ此時はいたましふを痛飲と書げこを下戸と書なりさて酒の方に見るにも又兩說あるなり▲一說は貴人高位の御前へ召れ月花の御遊に御土器など下さるゝ時は興なく飲むべきにあらねば我痛む體ながら一つさしうけたるはよしと也▲又一說に向より痛く誣らるゝ時は一つのみたるもよしとなり諺▲山案に兩說を合て見るときはよく相通するなり(藝說)此時はいたましふを強勤と書けこを下子と書▲言は上に云品々の事をつよくつとめなからさすがそれしやのやうに下劣ならぬが男はよしとなり此時はものからを藝のものからと云心に用ゆ下子は下子(ス)しきと云意なり說又一說にはいたましふを勞と書けこを饒子と書▲其說に云

はうしとりと云まではすてがたき振舞をつらねたりいたましふすると云よりは以上の文段をむすびたる詞なりと云々言はたとひ身は苦勞するとも人の饒子被官にもならぬが男たるものゝ本意と也兼好本老莊を學て此心切なりまして此一段は上天子の最賢御位も常の人のねがふ事ならぬと云て中比は變して法師桑門の行の思儘になきことを論じ末にいたりて又再とりかへしていへるやうは人に扶持せられ家の子となりて其身を過しけるは自然の大道を忘て外物につかはれたる事なればねがはしくは饒子ならぬがよしとなり參▲けこ三說の註右に記す▲(下戸)酒を飲者を大戸と云のまざる者を小戸と云ことと白氏文集に見へたり日本にては上戸下戸と云なり野▲山案事言要玄天集三食物總敍云飲多曰二大戸一白樂天詩猶嫌小戸長先醒又戸大嫌二甜酒一才高笑二小詩一唐人以二飲多一爲二大戸一少者爲二小戸一▲(饒子)伊勢物語にけこのうつはものとあるはいやしき義なり諸▲山案に伊勢物語抄云眞名伊勢物語に饒子の器とかけり家人などなり▲學明草稿記曰人卑し之知二饒子被官一參▲又伊勢物語の

闕疑には家子と書り▲或人曰拍子とりと續たる文章の體をよく味に只下戶ならぬと見が親きと也されど拍子より續たる詞にあらず管絃作文手跡拍子等皆各別の事を一條づゝ目錄のやうに書し故也又下戶と云も不審子細は奥に酒を論ぜる段一章あり事も褻(ナメタ)しく評議せり謾に酒を赦事兼好法師の身にては憚る事あればにや梵網をまて引て戒たり如何ぞたやすく卷頭より酒をすゝむること有べけんや公家衆の物語を聞しと云人の沙汰にも饒子の說よしと申人ありとなんさはあれど酒の說に見て苦ず佛も辨意長者の子に酒を飮て亂ぬを天に生する因と說玉ひ孔子も亂ぬをゆるされければ世俗には酒をゆるす道もあることとなり參▲山案にいたましうすと云より以下の結句に殊ノ外に酒を戒たる事あり如何となればいたましふする物からとは心地よげに酒を飮にてはなし飮ねば叶ぬときは飮て一興を催すがよきとなり又下戶ならぬと書し中に上戶あしきと云意こもれり其上兼好存念はひたふるの世捨人は中々あらまほしきと書をさめて人は形と云よりは世俗の者の爲にいましめを書は酒の事を書しは尤なり酒は人の飮過し易き物なればなりされば俗人は出家の如くに一滴ものまぬ等にてはなきなりされば男はと云にて出家男女などをばいましめたる心ありと諸抄にもいへり

おのこ ●をのこはのはの字をみれ女法師なとの酒を好むましき事しられたり諸 ●此所數說有て一決しかたし

［第六節］●有度事はと云より終迄也●此節は人として學習べき學問藝能を書連て一段を決したり文

［一段之統論］●此段人間世に生れて人の品々を云に王公卿大夫士より其有さまを云て法師の事まで云くだし世を遁る者をあらまほしといふは兼好が身の上によそへたるべし如此人品を評して品にもよらず形にもよらず心を賢に移さんと云る此段の大意なり其上に才藝のあらまほしきことを男子の業とすべしといへる義なるべし野 ●此一段兼好が時分臣は君を輕して君位かろ〳〵しくならせ玉ふ此なり人のねがひ第一に天子第二に攝家を望ことなればそれは願てもならずと敎へ其以下はねがひてお甲斐なしと云て望をやめさせたりやむれば

すなはちつれ〳〵なり兼好の頃出家に威勢なるがありし故人の望てあるがそれも佛の制戒ならぬさまなれば願に不ㇾ足とやぶりて願をやめさせたる也やむればすなはちつれ〳〵なり盤

〔二〕いにしへの聖の御代の政をもわすれ民の愁國のそこなはるゝもしらず萬にきよらをつくしていみじ（美字）と思ひ所せきさましたる人こそうたて思ふ所なく見ゆれ衣冠より馬車にいたるまで有にしたがひて用よ美麗をもとむる事なかれとぞ九條殿の遺誡にも侍る順徳院の禁中の事共かゝせ給へる（美字）にもおほやけのたてまつり物は疎なるをもつてよしとすとこそ侍れ

いにしへの　㊟古の字也和訓にいにしへと云はいにし世といふ心也すなはち往世と可ㇾ書よとへと通韵にていにしへといふ也説

聖の御代　㊟聖の字訓前に注聖代とは漢土にては堯舜文武日本にては延喜天暦を申べきかと云々壽　㊟壽に如ㇾ斯あれども延喜の御時ははや世の花やかさの盛なり爰にいふはすなほにことそぎたる時をさせり神武などの御代又は仁徳などの御代なるべし盤　㊟時代をさすまじきか只神代より引はへて其風義さながらおこなはるゝ時節なるべし全　頭書云▲後撰集に「君がためいはふ心のふかければひじりの御代の跡ならへとぞ説

政　㊟萬民をたゞす事なり諸　頭書云▲山案論語爲政篇子曰爲ㇾ政以ㇾ德集註政者正也子師以ㇾ正孰敢不ㇾ正▲字彙云之盛切音正正也以ニ正理一立ニ典常法一則曰ㇾ政政之所ㇾ行曰ㇾ事又大曰ㇾ政小曰ㇾ事又以ㇾ法正ㇾ民曰ㇾ政以ㇾ道誨ㇾ人曰ㇾ教▲尚書帝範崇儉篇云夫聖代之爲ニ乎節儉一富貴廣大守ㇾ之以ㇾ約叡智聰明守ㇾ之以ㇾ愚不下以ニ身尊一而驕上人不下以ニ德厚一而矜上物茅茨不ㇾ剪采椽不ㇾ刮舟車不ㇾ飾衣服無ㇾ文壽▲神社に加棟木を置ことは上古の茅茨ぶきの宮制なりと神社啓蒙にもいひ又伊勢大神宮三粋米をさゝぐる事は人民をなやますことなきためなりなどゝ神社考にも侍れば上代の政の奢なく民の愁をいたはり玉ふことをしるべし巻

政をもわすれ　㊟山案に先祖の政を忘れ苛政をなすこと下にいふがことし㊟もろこしの聖は四海の民を子のごとくしたまへば民又君を父母のごとく

に仰となりㇾ又仁德の高屋の歌を詠じ給て及貢物をゆるしたまふ政さへあるに一向に民の苦をもかへりみずとなり諺●是上の驕奢ゆへなり
民の愁國のそこなはるゝ●古の政をわするゝついへをいへり盤●大なる時は他人に奪れ少きなる時は民四方へちる諺　頭書云▲山案孟子離婁下云君之視ㇾ臣如二手足一則臣視ㇾ君如二腹心一君之視ㇾ臣如二犬馬一則臣視ㇾ君如二國人一君之視ㇾ臣如二土芥一則臣視ㇾ君如二寇讎一▲同梁惠王篇云民無二恒產一則無二恒心一▲家語云獸窮　擢鳥窮則啄人窮則詐馬窮則逸自ㇾ古及ㇾ今未ㇾ有窮二其下一而能無ㇾ危者▲誠盈篇云儉則民不ㇾ勞靜則下不ㇾ擾民勞則怨起擾則政乖
きよら●淸の字也美麗の義諸●宮殿に金銀をちりばめ身に錦繡をかざるなり諸
いみじと思ひ●花美をよきと思ひてあらためぬさま也參●民の愁國の損るゝ本をいふ盤
所せきさま●所狹樣と書所せばきよふにと也せきはせばきの中略也評●宮殿など所せき迄たてつづくる有樣也句　頭書云▲玉露に「草枕さゝかきうすき蘆の屋は所せきまで袖を露けき古▲定家卿の歌に「冬來ては一夜二夜に吳竹の葉分の露の所せきまで句▲山案左傳云都城過二百雉一國之害也▲漢書云楚起二章花之臺一而黎民散秦興二安房殿一而天下亂

うたて●轉の字也うたた蒼意又薄情と書うたてしきと云心●又あまりにと云る心も有句
思ふ所なく●南說有●思ひつく所なくみゆる也心にくからぬ義也諸●又左樣の人は思案遠慮もなき人と見ゆると也盤
馬車にいたるまで●身にしたがへ用る物の最上の衣冠より下馬車にと云中間に種々の調度を攝していふ也全●是より先賢の詞を引て君臣共に儉約をもとゝすべき事をいへり文
九條殿　頭書云▲大織冠十代孫右丞相師輔公なり
小一條太政大臣忠平貞信公の男なり諸

系　圖

天兒屋根二十一代前の兼好系圖にくわし
大織冠鎌足――淡海公不比等右大臣正二位文忠公――房前參議――
一正三位――眞楯大納言正二位――內麿後長岡右大臣從一位――冬嗣閑院左大臣正二位

一良房太政大臣從一位忠仁公─基經堀川關白太政大臣昭宣公─忠平小一條太政大臣攝政關白從一位貞信公─
一師輔右大臣正二位　村上帝天曆元年四月爲ニ右大臣一兼ニ右大將一同天德四年五月薨年五十三爲レ人仁愛不レ見ニ喜慍一

遺誡　●師輔公遺誡一卷を作て子孫のいましめとし給へり諸　●兼好私にあらずとて證據をひけり全
頭書云▲(遺)山案大學通義韓氏古遺曰人亡書存故曰ニ遺書一▲晉水註ニ遺敎經題一曰遺敎者謂遺ニ留敎誡一勗ニ彼群機一參▲(誡)山案增韻云警敕之辭曰レ誡
▲九條殿遺誡云始レ自ニ衣冠一及ニ于馬車一隨レ有用レ之勿レ求ニ美麗一不レ量ニ己力一好ニ美物一則必招ニ嗜欲之謗一文

順德院　頭書云▲八十四代の帝なり▲山案編年小史云順德院諱守成後鳥羽第三子母修明門院藤原重子贈左大臣範季女也承元四年十二月朔日即レ位立レ元在ニ辛未一在レ位十一年讓ニ位於皇太子一是號ニ九條廢帝一仁治三年九月十二日崩壽四十六

禁中　頭書云▲三輔黃圖云漢宮中謂ニ之禁中一門各在レ禁非ニ侍衛通籍臣一不ニ敢妄入一參

かゝせ給へる　●禁秘抄一卷作り給へる事也參

おほやけの　●公の字をおほやけとよめり遊仙窟には天事と書ておほやけごとゝよむなり野

たてまつり物　●此所數說ありといへとも先天子のめさるゝ御服の事なりといふがよきぞ委く爰にしるす●問奉物とは天子へさゝげ奉る物なりと云說有(是野の說)又天子のつかひ用給ふ道具をいふ說有(是盤か說)如何答云禁秘抄に著御の物とあり又源氏などに御裝束をめさせまいらせる事を奉るといへる所多ければ御服の說を用ゆべきなり文●私云御膳にても調度にても御服にても一切下より天子へめさるゝ物を奉るといふなり禁秘抄に假令御服の所にあればとて奉るとは御服にかぎるといふこと心得ずしゐて御服にかぎるといはゞつれづれ草幷禁秘抄の誡は御服ばかり疎にして餘は過美なるものにてもくるしからぬにや抑禁秘抄の心は身にしたがひ用る物は御服を第一とすればそれさへ以レ疎爲レ美と書うへは餘事皆これにならへとの筆法なりつれ〴〵此所の文のうつりも心も何にても疎なるをよしとすとの心なりあやまるべからず全

疎なるをもつて云　●天下の事は天子と攝家にか

かゝる事なれば師輔と順德院との御詞にて君臣をいましめたり盤 ●さて君臣ともに儉約を本意とすべきいましめの證文に唐の書物をひかばいかほどもあるべきに九條どのゝ遺誡と禁秘抄とをひける事日本の誡の書におもしろく侍るにや彼堯舜の代にかぎらず我朝にても古の賢王賢臣の法は如ㇾ此と見しらしめんためなるべし文　頭書云▲禁秘抄に天子の御服のことをかゝせ玉へるところに天位著御物以ㇾ疎爲ㇾ美(ヨシ)とあり文▲禁秘抄を又禁中御鈔とも名付句▲儉約と云題にて定家の歌に「家にあらん其器もとよりも馬車まできよらつくすな」説

【一段之統論】●此段は初段をうけて位高やんごとなき人も彼まことしき文學を傍にして古の聖代の儉約なりしためしをも忘れ無道に奢て國人の愁もしらざるやうならんはかひなき心をといましめて君臣ともに儉約を本とすべきことをいへり文 ●人間世の事を論ぜば天子の事を云はしむべきことなれば上に御門の御位はいともかしこしと計書すて〻今此段に取分て念比に天下を治め玉ふ大事を書出せる詞簡にして心切なり誠に天子として驕奢をいましめば何の善政かなすべからざらん何の天下かをさまらざらん句 ●山案此段は中人以上を戒といへども中人以下をもこめて見るべし如何となれば天子攝家さへかやうに儉約を本とし玉ふ況や凡人に於てをや富貴の人さへ財をつかふに節を以てせざれば失ふこと遄(スミヤカ)なりましてや貧賤の身としては最も愼むべきことなりさりながら得がたき寶を求て吝嗇を心とすべからず

【三】萬にいみじく(美字)とも色好ざらん男はいとさう／＼しく玉卮(タマノサカヅキ)の當(ソコ)なき心地ぞすべき

萬にいみじくとも ●姿貌又は萬の藝能にすぐれたりともなり壽 ●是も初段の人は形有さまの勝たらんと云所有度事をばまことしき文の道といふより以下の才藝などをうけて書出たるにや文

色 ●色とは女色の事なり●色好ぬ男は唐の顔叔子柳下惠が類なるべし參　頭書云▲毛詩序疏云女有㆓美色㆒男子悦ㇾ之故經傳之文通謂㆓女人㆒爲ㇾ色句

さう／＼しく ●さうはさびと云心さび／＼しくと云義也假名の通韵也説 ●さびしき義也和名集に寂寞と書てさう／＼とよめり爰にては事たらぬ意

なるべし野
玉巵の當なき ●瑕の有心なり壽 ●事たらぬ體也
諺●用ひられぬ義なり參●玉巵は萬いみじき男に
たとへ當なきは色このまぬにたとふるなり句　頭
書云▲韻府王巵無レ當桂花無レ實壽 ▲文選左太沖三
都賦序云且夫玉巵無レ當雖レ寶非レ用呂尙幷劉淵林
注皆曰當底也▲抱扑子云無レ當玉盌不レ知レ全用ニ之
挺埴ニ寸裂ノ錦黻未レ若ニ堅完之韋布一參 ▲韓子云堂
溪公謂ニ韓昭侯一曰今有ニ玉巵無レ當有ニ瓦巵有レ當君
寧何取曰取ニ瓦巵一句
心地ぞすべき　頭書云▲山案に明心寶鑑安定胡先
生曰男大不レ婚如ニ劣馬無レ韁云々上下略
【第一節】●よろづにいみじきと云より心地ぞすべ
きまで也此一段を三節に分つ文段の分ちやうも是
に等し▲此一節は上段に藝能を習得たき事をいへ
るをうけてたとひ藝能はあまた習得ても好色の心
なきものはいとさう〴〵しくして事足ぬなりとい
へりされば此一段に付て數の說あつて難ニ一決一逐
一末々に記す先一說に云▲若き時女色に耽ること
を唐し我朝ともにきらふことは事舊たる習なるを

今此草子に色好ぬ男は玉巵の當なきに譬へて書る
は人の不審あるべきながらこゝが兼好の新き作文
なり加様にまづ戀慕の路をほめて後に能いましめ
ん爲也たとへば良醫の虫藥を飮せんとては砂糖を
さきへのまするが如し源氏物語一部の趣向此段に
あり▲又俊成卿の歌に「戀せずは人は心もなから
ましものゝ哀もこれよりぞしる此段は此歌を以て
しるべしともいへり貞▲山案夫婦は五倫の本人情
の最難レ捨道なり若此道を斷ときは忠孝の心もな
くなるなり如何となれば妻なければ子なし是後無
は不孝の第一なり又子孫なければ主への忠も後榮
を思ぬ故に自然に薄くなるぞ易序卦傳云有ニ天地一
然後有ニ男女一有ニ男女一然後有ニ夫婦一有ニ夫婦一然後
有ニ父子一有ニ父子一然後有ニ君臣一有ニ君臣一然後有ニ
上下一有ニ上下一然後禮義有レ所レ錯▲又中庸に君子
之道造ニ端於夫婦一といへりさりながら此道に著す
れば家を失ひ身を亡す也尤心あるべきことなり▲
又五不男の心もあるべし佛も五不男の人に近付な
と法華安樂行品もとき又因地に裘夷女を娶玉ひし
事は男の道をあらはさんためなりとあり▲釋迦譜

云大善權經云何故菩薩而有二室妻一菩薩無欲所三以示二現妻息一防二人懷レ疑菩薩非レ男斯黄門一故納レ妃釋氏之女なれば法師にもなる人をこそいましめ玉ふなれしかれども過る則(トキ)は非なり邪婬戒の本意こゝにあり參

露霜にしほたれて所さだめずまどひありき親のいさめ世のそしりをつゝむに心のいとまなくあふさきるさに思ひみだれさるは獨寢がちにまどろむ夜なきこそおかしけれ

露霜に云々　●是より色好男のありさまを書り文

頭書云▲萬葉集の歌に「いけど〳〵あはぬものから我戀は雨露霜にぬれにける哉何

所さだめず　●西へ行東へ來る也諺　●山案伊勢物語にあくた川といふ所迄出るにけりと有跡など思ひ合すべし　頭書云▲古今和歌集十四云ある女の業平朝臣を所さだめずありきすときゝてよみてつかはしけるよみ人しらす「をほぬさのひく手あまたになりぬれば思へとえこそ頼まざりけり

いとまなく　●外聞をはゞかるに心隙なき也諺

あふさきるさに　●詩經關雎篇には左右の字をよませたり何　●往(ユク)さま來(クル)さまなり壽　●君が方へゆきかひするといふ義也參　●上の詞に所さだめずとあり全　●八雲御抄にとするもかくするも也諸　頭書云▲古今集に「しかりとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに▲又箒木にとあればかゝりあふさきるさにとあり野

思ひみだれ　●戀路の習にて兎に角につけて物おもふさま也文　●好色人の心の有さまなり盤

さるは　●さあれば也上詞をうけて下へ云つゞくる詞

獨寢がちにまどろむ夜なき　●兩說有先一說に●親のいさめ世の謗をつゝしみなとするに付ては逢夜まれに一人寢がちにて歎きあかすさまなり文　●又獨寢がちにまどろむ夜はなくて彼方此方にて枕をかはす義なり此二義につけておかしけれも心いさゝか替るなり增鐵　●山案前說はひとり寢がちにとまどろむ夜なきとを句を切て二つに見る後說は連續して一つにみる但前說の直なるにしかずさて獨寢がちは親のいさめ世の謗へかゝりまどろむ夜なきはあふさきるさに思亂るゝにかけて可レ見な

り　頭書云▲杜子美詩云鴛鴦不二獨宿一参▲是より
好色人のをもはくをかけり「をきもせず寝もせで
夜を明しては春のものとてながめくらしつ此心ば
へなり全
おかしけれ　●やさしき心ほめたる詞也野●おも
しろく與ある體なり諺●山案野説は前説の心諺説
は後説の心なり　頭書云▲夕貞巻になき玉ふさま
いとをかしけれ野▲異説云先に云ふ所をくゝりて
をかしけれと云りねがちなるを云のみに非ず露霜
にしほたれ心のいとまなきくらうをしてはてには
獨寝をほむる心はいかなるといふに人の心の物に
執着してあるが戀ゆへに世はうきものなりと思知
て物の常なき理をさとるたよりなるはをかしけれ
とほむるなり盤
〔第二節〕●露霜よりをかしけれまで也●山案此節
は好色の人のありさま心底の事をあり〱と書つ
らねてしかも其中に警を合りさて此一節を連續し
て段々に前をうけて見るべきなり如何となれば親
の諫世の謗をつゝむは是心に耻る思ある故なり露
霜にしをたれてまどひありけども親諫世謗をつゝ
むに心の暇もなきなり心の暇なき故にあふさきる
さに思亂なり思亂るゝ故に獨寝がち也獨寝がちな
る故にまどろみ難き也されば戀路に身をかくると
も心に耻る思のあるはをかしきとほめて云るなり
●此段に色好を美きことにほめて書たる所を無理
に義理を付て人の教にとりなさんとする故に却て
道理にそむき兼好本意にあらざるなり抑ゝ此段は
歌書に戀の部立あるが如し惟好色のをもはくを面
白書たる分なりたとへば戀する人ばかりの戀の歌
よむにはあらず戀と云ふものは如レ此ものなりと
其をもはくをよむことの類なり戀の情をふかくよ
めるほど手柄にする事なり此段も其たぐひなり全

さりとてひたすらたはれたるかたにはあらで女にた
やすからず思はれんこそあらまほしかるべきわざな
れ

さりとて　●左樣にありとてなり好色の人の有樣
をおかしと褒たりとてもとの心也是より好色にお
ぼるゝ人をばいましめたり文
ひたすら　●一向と書句●ひとへなり野●一筋の
義参

たはれたる　●狂の字も風流の字も書り野　●たはむれた也戀路に落たはむれた也說　●たわけたるなど云詞なり　頭書云▲萬葉集に「たはれをと人はいへどもまだしらず我をかくせり獺のたはれを」秋くれば野邊にたはるゝ女郎花何れの人か妻と見るべき野

女にたやすからず云々　●此語此段の字眼也古●色を好人の僻として何の思慮もなく我心を女にみとられて是程人よとたやすく思ひあなどらるゝ也これ色におぼれたるによつて也たとへ親しき妻なりといふとも心の奥に隔心をしてたやすからず思はるゝ人は色におぼれたる人とは申さるまじ左樣の人こそあらまほしきと也諺　●不容易(タヤスカラズ)　頭書云▲さりとてと云より好色の方に長練してをとなしくをもはくの深き好色人の事を云也さりとてとは上の露霜にしほたれて所定めずまどひありきと云をうけてさやうにあればとて此方よりばかり色に落入たはるゝはなま〱の好色人也女の方よりもしたはれてこそとすこし識たる心也さりとてと云より好色甚をもき也光源氏などの好色なりたやすからず思れんとは女にあなどられずして慕れたきとの心なり全

〔第三節〕●さりとてより終までなり●前にをかしとほめて爰にては過たるを抑て云り文の抑揚なり盤●山案此結句大きに警を書り大全の說も面白けれども夫れ書を讀ことは慰ばかりの爲ならず道を心得て日用の便りにせんとの爲なりしかる則(トキ)は此所もいましめを書しと見るべし其うへ八段目の意と引合せて可レ見末に強く誡めん爲に爰には一旦はほめて書ながら底心にいましめを含て書し筆法まことに妙なり懶惰の後學末まで熟讀せずして此一段ばかりを誦して好色をほめしに迷て著せんことを恐てなり

〔一段之統論〕●此段色好ざるは人情にあらざれば無下の事也と思へる兼好が心いとをかし末に妻と云ふ物は男の持まじきものなりと云ひ叉子持ぬ者は物の哀をしらぬといへるを實さる事なりといへば兼好が本意不レ淺侍る　されば飲食男女は大欲存せりと禮記に見へたり誠に男女の道は飲食よりもまさりて人の捨難きものなりされば男女は人倫の

ことはりにてあれど過て淫なれば人倫を亂る此故に萬の事は過不及なきをよしとすとしるべし野●前にはほめ末には過たるを抑たりまことに樂めども淫せずかなしんでやぶらずとありける心なるべし盤●此段は兼好已に出家の身なれば世を遁る者の萬のするすみなるが世俗の色情を見て偏に思ひくだすは僻事なり男女の道は一々天性なれば如何ぞ一向に是をいまん過て好るこそあしけれと思へる誠に殊勝に侍る句●大全には右の說々をそしれり其略に云戀路によきほどと云戀は決して無事也若戀の歌などによきほどの心をよまば落題になるべし又詩經の說はこゝによりつくことに非ず詩經は夫婦のこと也此所は戀のことなり又歌書に戀の歌は歌道の根本なるやうに往々にあり是は習あること也それを不知してかゝる誤をなす事なり全

［四］後の世の事心にわすれず佛の道うとからぬ心にくし

後世　●來世とも書也此後世の詞は發端の此世といふに對して書なり說　頭書云▲惠心僧都の歌に「後の世ときけば遠きに似たれども　しらずや今日も其日なるらん

心にわすれず　●此生を他界へうつす未來の事を心に思惟して生死の一大事を工夫するを心にわすれずとなり古●未來の事なり古

佛の道云々　●或は看經し行法を修し佛の道をつとむるを云ふなり今の人は或は一大事を心にはかけながら道にうとき人有或は佛の道踈からぬとも生死の事をわするゝ人有故に此二つを備へたる人を心にくゝ思ふと也諺●此段知行を分つの辨有頭書云▲此段知行の二つ有增鐵　▲山案忘ずは知にあたりうとからぬは行ひあたるべし是下に記す諺解の說によれり▲又後の世を忘ずとは佛道を勤行するを云佛の道うとからぬとは佛法を學問するを云ふ句▲是は又知行の分ちやう違へり此說も難し捨▲又一說に信智の二つをいへり佛道はこれに過ず忘ずと云は信なりうとからぬとは智なり心にくしとは信智相兼たるは心にくしとなり闕(カケ)ては佛道ならぬゆへなり盤

心にくし●兼好したふ心也諸

［一段之統論］●此段前段に世俗の上に就て此世の

願望を種々擧しをうけて兼好ねがひは今生にはこれなし後世の事を忘ずして佛道を修道するばかりにあると云事を書たりさて前の數段も畢竟此一段を書んために設て書しなりしかれば此段は前々よりの結段と可見つれ〳〵一部の文法大概如此説●佛道修行をすゝめんために此一部も書たれば此段は永々しくあるべきをいかにも短く書たるに深き心あるべし世に富貴の人は適珠數など取ても愚痴の尼入道の所作に似たるをうるさく思ひて深くかくしなどする末法の世の風情なれば此段をも念比に書は例の佛法臭き事とて人手にも取間敷事を了簡して又一向にかゝぬも本意なればいかにもすこしかゝれしと見へたり貞●佛法のこと短く書こと此段に限らはさもあるべし永々とかける所多ければ德の説信じ難し抑此段は佛法の事始て書出せるなれば佛法の大綱これにありこれより末九段まで佛法の事を云つゞけたりさて此つゞきは後世の事心に忘ず佛の道うとからぬにつきて不幸に愁にしづめる道心は思立ふつつゝかにして道心もさめやすく信ならぬことを云ん爲の發端と見るべし全●此段尤殊勝なり源氏薫大將などの行跡思合べきなり前三段に大かた人間界のあらまほしき事を云盡し此段より後世にうつる次第眼をつくべき也書●山案後の兩說も亦難捨●又云後世に志ても佛道にうとくては愚昧なり佛道にうとからで少し學問したりと云ても後世のためならで名聞の心ばかりなれば益なき故に此段纔なる詞の中に其心榮を書つくされし筆勢かぎりなきものなるべし貞

〔五〕不幸に愁にしづめる人の頭おろしなどふつゝかに思ひとりたるにはあらで有か無かに門さしこめて待事もなく明し暮したるさるかたにあらまほし顯基中納言のいひけん配所の月罪なくて見ん事さも覺えぬべし

不幸　●さいはいならずとよむ不仕合の事也諸●士は主人の勘氣をうけ地領をめし返れ農は凶年に逢商人は買賣に利をうしなふ皆不幸なり諺●不幸と次の愁とをわけて二つに見るがよし又一本に深の字を書けるあり是はふかく愁にしづむと一つにみるなり又不幸の字に作りなから一つにもみるなり下にくはしく註す　頭書云●幸者可慶幸也福

喜之事皆稱爲レ幸といへり不幸は此うら也盤 ▲山案論語先進篇有二顏囘者一好レ學不幸短命死

愁にしづめる ●主に別れ親にはなれ子を先立妻をうしなふ類皆愁にしづむなり右二つの所より思立發心は當分の血氣のまゝに發するによつて血氣さむれば又本の俗心にかへるなり諺 ●山案此說は不幸と愁を二つにみるなり又不幸にして愁にしづむと一つに見るも有りされど文法においては二つにみるが面白し不幸に愁にのにの字を味べし一つにみる時は不幸にのにの下にての字を入てみるべし諸抄大かた一つに見るなり

ふつゝかに ●大の字句 ●不束(フツツカ)の字諺 ●土近源氏にてはひちゝかとよめりともにいやしき心也說 ●何の味もなくいやしく浮世を思ひとりたるなり增鐵

思ひとり ●兼好本意はか樣の愁に沈みたる故に世を捨たるにはあらで諸

有か無かに ●是より好兼本意の隱者の有樣なり外より見る者は此門の內に人は有か無かと思ふ程閑に籠り居也文

門さしこめて ●靜かに住居なせること三昧に入たる僧のごとくならば人有か無かと休らふ程に靜なるべし　頭書云▲一元山居詩云山居茅瓦竹爲レ椽守レ道安レ貧樂二自然一盡(ヒメモス)日閉レ關無二別事一長伸二兩脚一枕レ雲眠參 ▲歸去來辭に門雖レ設而常鎖といへる淵明が風情など思ひ合せ侍る句

待事もなく ●求なきなり外をねがふは待事有壽

頭書云▲山案韓退之原道云足二乎己一無レ待二於外一謂二之德一▲莊子云猶二有レ所レ待者一諸 ▲陸長庚副墨云己也功也名也皆有レ所レ待而後成者也無レ所レ待則無レ己矣無レ功無レ名矣至人也神人也聖人也參 ▲玉葉集に　山里の心靜に住よきは問人もなし待人もなし諺 ▲一說不幸の故に世を思ひとる人は待ことあるが如し如何となれば其不幸にむかふほど心に滿足することあらば自遁世の心さむる事あるべし不幸故に棄し世なればなり待事もなき人は只何となく世を離て只閑居を樂とする物なりかやうならんこそ遁世者の身にはあらまほしけれとなり文 ▲又一說これはねがひの最上を云ふなり待こともなくあかし暮したると云ことなか〳〵及び難きこと

なり其故は不幸に愁にしづみたる世捨人もうき世の事には待ことなし然れども出世にをよびては待ことあるべし▲法然上人の歌に「柴の戸に明暮かかる白雲をいつむらさきの色と見なさん全
さるかたに ●左ある方なり諸 ●世を遁るゝ方になり文 ●上をうけて願のなきかたになり全
あらまほし ●兼好も如ㇾ此に有度と願心也
顯基中納言　頭書云▲公卿補任云長元八年正月廿八日任二中納言一西宮左大臣高明公孫大納言俊賢卿一男▲清輔袋草子云入道中納言顯基後一條院の近習の臣也長元九年四月十七日に院崩ず同廿二日奉ㇾ遷二上東門一此日於二大原一出家す生年卅七時人流ㇾ涙文 ▲山案に顯基卿出家の後洛外の大原に一室を構て住給ふ永承二年九月に四十七歳にて卒し玉ふとなん

▲系　圖

醍醐天皇人王六十代 ─ 高明醍子賜二源姓一西宮左大臣正二位 ─ 俊賢大納言 ─
─ 顯基中納言

▲中納言の詞野槌に撰集抄を引て委く記せり今其略云朝につかへしそのかみより明暮あはれ罪なくして配所の月を見はやと泪をながし玉ふとあり又句解云發心集に少し言葉をそへて載たるにて道理分明なり其略に云罪を蒙り配所の月を見はやとぞねかはれけるとあり▲其外匡房中納言作の續本朝往生傳清輔の袋草紙讀耕林子か本朝遯史なとに顯基傳あり
いひけん ●是より古人の詞を引て前に云し兼好本意の閑居の心をあらはせり文
配所の月 ●罪の輕重に配當して左遷人を置所也
罪なくて見んこと ●此顯基卿の願給へる心は閑なる所にて月を見度と也隠遁を好る道心より願るなるべし顯基などやうの公卿は朝廷の宮仕にかゝづらひて彼配所のごとき深山遠島などを見ること罪あつて左遷の折ならではなき事也顯基はもとより道心おはしける人なれば其罪によりて左樣の浦山の月を見るは本意にあらずたゞ何となく世をすてゝ閑居にて月をみばやとの心なり文 ●只何となく閑居して月見る所を配所と憤りていへる也官人は兎角配所へゆかねば隙になられぬ故なり參

覺えぬべし　●今兼好のさも覺ぬべしと同心したる心は彼不幸によりて世を捨たるは罪によりて深山遠島の閑居するがごとし只何となく靜に世にもましはらず門さしこめてある有樣は罪なくてといへるにひとしければなり文

〔一段之統論〕●此段は前段にねがひの最上はこれなりと云留なから其佛道の緣によりて又世捨人の中にも如ㇾ此の違ありと云ていよ〳〵初段に兼好がねがひを書たるひたふるの世捨人こそ中々あらまほしけれの意を云あらはせるものなり是より次の一兩段は皆前段の餘論と見るべし説　●此段は奥に閑ならでは行じ難しとも書佛道をねがふは別の事なし暇ある身になりて世の事を心にかけぬを第一とするなりと一言芳談を拔書たる所など思ひ合すべし文　●世捨人の仕形は同じやうなれども心あると心なきと大にかはりめあり今こゝに云る不幸に愁に沈て不圖思切たる遁世者を今の世には殊勝の事とす兼好のほめてあらまほしき世のいとひやうを書るゝは心あるまことの桑門なり此かはりめを人に知せんために顯基黃門の金言をこゝに書しと見へたり此段は心あらん人はよく〳〵心を着て見らるべき事なり貞

〔六〕我身のやむことなからんにもまして數ならざらんにも子といふものなくてありなん

やむことなからん　●注上に見えたり身の無ㇾ止尊貴に生付たる人もと也參

まして　●增の字いはんやの意參　●上をうけたる詞也古　●增の字力在增鐵　頭書云▲本朝遯史云俗語之增者況之義也就ㇾ之推ㇾ彼以相二輕重一焉參　▲山案にましてをまひてともつかふなり枕草子にまひて雁などのつらねたるかとあり又益の字勝の字も書なり

子といふものなくて云々　●無ㇾ止人は子ありとても苦しからねとも不肖の子は其もなきかまさるべきなればまして數ならぬ者は子のなき勝る也諺

頭書云▲莊子天地篇云多二男子一則多ㇾ懼諸

ありなん　●あれかしとなり增鐵

〔第一節〕●我身やんことなからんよりありなん迄なり盤　●此一句一段の眼目なり盤　●山案に此段二節に分て見るべし此一節は其大綱を擧て次の節には

此節の意を古人の證據を引て理れるなり偖此一節に就て色々の難ありされど此次の末のをくれ玉へるはといへるを以て味ふときは尤面白くひとへに子孫をたてと云には非る者歟但し次の化野（アダシ）の段に夕陽に子孫を愛し盛ゆく末を見んまでの命をあらましひたふる世を貪る心のみ多しといましむるを以て見れば子孫なき事を願心もあらん歟是兼好桑門の志也

前中書王九條太政大臣花園左大臣皆ぞうたゑむ事を願ひ給へり染殿の大臣も子孫おはせぬぞよく侍る末のをくれ給へるはわろき事なりとぞ世繼の翁の物語（築の字きつくの上略諸）にはいへる聖德太子の御墓をかねてつかせ給ひける時もこゝをきれかしこをたて子孫あらせじと思ふなりと侍りけるとかや

前中書王　◉中務兼明親王の御事也諸◉中書は中務の唐名也親王なりし故に中書王と申す也後に村上天皇の御子具平親王又中務卿に任せられて御才も高くおはしけるゆへ兼明親王を先中書王と申具平親王をば後中書王と申せし也　頭書云▲山案二品兼明親王の御事也延喜帝の御子御母は參議藤原菅根卿の御息女也生質（ウマレツキ）學を好み玉ひて能詩文に達し玉ひき始源姓を給りて左大臣までに任ぜられ玉へりしを貞元二年四月に太政大臣兼通公詔を矯て停ニ兼明公官職一以て親王と爲て中務卿に任し玉へり于レ是兼明親王龜山に隱居し玉ふとなん

▲系　圖

醍醐天皇（人皇六十代）—兼明（二品親王 中務卿）

九條太政大臣　◉大宮太政大臣藤原伊通公　頭書云▲大織冠十六代の孫伊通公の事なり諸　▲山案後白河院三條院の時代の人也保元二年に左大臣に任じ永曆元年に太政大臣と爲り玉ふ永萬元年に薨じ玉ふ年七十三

▲系圖　（但し師輔公までは第二段聖御代の所に委）

天兒屋根二十一代也

▲大織冠—淡海公—房前—眞楯—內麿
—冬嗣—良房—基經—忠平—師輔—兼家（攝政太大臣東三條 注號院准三后從一位）
—道長（攝政關白太政大臣從一位准三后御堂殿號）—賴宗
—俊家（正二位 右大臣）—宗通（正二位 權大納）—伊通（大宮太政大臣 從一位號九條）
—爲通（宰相 早世）

花園左大臣　●左大臣源有仁公　頭書云▲後三條院の御孫輔仁親王の御子也左大臣有仁公なり諸▲山案鳥羽崇德近衞の時代の人也保安三年に任ニ内大臣兼右大將ニ天承元年任ニ右大臣ニ保延二年に左大臣と成久安二年二月薨四十五

▲系　圖

後三條院人王七十一代 ―― 輔仁無品 ―― 有仁賜源姓左大臣左大將從一位號花園
　　　　　　　　　　　　　　　　　　―― 伊實中納言正三位早世

そう　●曾の字也子孫の事也諸　頭書云▲韻會曾重也自ニ曾孫ニ至ニ無窮ニ皆得レ稱ニ曾孫ニ壽

たえん事を　●曾絶事とは子孫のたゆる事なり諸●是昔の無レ止人々の子孫なきを願給へる事を書文●さて其願給へる事跡を案ずるに●(中書王)此中書王の嫡子を中納言伊渉卿と申せしに兼明かくれ給ひて後帝より此兼明の書給へる文などありやと御尋有ければ伊渉卿うさきのかはころもの賦といふ物書置給へりといひて天下に笑れ給へりし事有左傳ニ魯の隱公菟裘云所に隱居し給へる事兼明なぞらへ給ふ御心にて書給し菟裘賦といふ事を伊渉卿得しり給はざりし故也知ニ其子ニ無レ如ニ其父ニとて中書王の賢き御目にかやうに御子孫のおくれ給はむ事をよく見しらせ給ふ故に是も子孫なからん事をおほしけるにや文●(九條太政大臣)續世繼物語に九條太政大臣太郎は宰相にてうせ給ひき伊實中納言と聞えしは顯隆中納言の息女の腹にてむかひ腹とて宗とし給ひければ兄の宰相よりも時めき給へりき皆おほいとのより先にうせ給ひきと云々●(花園左大臣)又同じ物語に花園左大臣此おとど御子のおはせぬこそ口おしけれかへりては哀なるかたもありて我ものたまはせけるはいとしもなき事などのあらんはいと本意なかるべし村上の帝の御末中務の宮のむまことといふ人々を見るにさせる事なき人々どもこそおほく見ゆれ我子などのありとも甲斐なかるべしとぞありける云々此詞に曾たへん事をねがひ給へる事見え侍るにや文

染殿の大臣　●染殿は所の名太政大臣良房公也頭書云▲大織冠七代孫太政大臣良房公なり清和の時に攝政し玉ふ是藤氏の攝政の始なりこれを臣下の攝政と云なり貞觀十四年九月三日に薨じ玉ふ歲

六十九正一位を贈り美濃公に封し忠仁公と諡す系圖は前の九條殿の所に見へたる故爰には略す▲染殿とは所の名なり拾芥に正親町の西二町云々こゝにをはしけるゆへに染殿の大臣と申なり忠仁公は清和天皇の外祖父なれば文德天皇の遺詔によりて攝政し玉へり御威勢高くをはしけれど御娘染殿の后一人にて御嫡男はなかりしなり文おはせぬぞ　●是はねがひはし給ね共なきがよかりし證據に引り盤●さてなきがよかりし事は良房公に實子なきゆへに御兄長良卿の御子基經公を猶子にし給へり諭して昭宣公と申けり陽成院の攝政たりしに此王惡王成しかは僞りてすべらしめ其頃小松の宮の堅德ありしを位に立給ふ是則光孝天皇の御事なり光孝位に付給ふにより寛平延喜と明君の出させ給ふも昭宣公の力なり其もとは忠仁公に御子なき故に昭宣子を猶子にし給ひしによつてなり又昭宣公も賢臣とても大臣の家を不レ繼は道も行れまじきと也諸末のをくれ　●子孫の事也諸●此詞にて此段ひとへに子孫なき事をねがひといふにあらず先祖より

おくれんよりはたゞなからんにはしかしとの心しられたり文世繼　●大鏡といふ物なり藤原爲業か書し也諸●翁のいひしやうに託して書し本なればかく名付たり參●大鏡の上卷に染殿の子のおはしまさぬ事を行末まさりたるやうに書のせたり盤　頭書云▲文德天皇より後一條院まで十四代百七十五年の間の事帝王攝關大臣等の來歷をかけるゆへ世繼物語と云ふ藤原爲業法名舜念が書り舜念は阿波守爲忠の子大納言國經八代の孫なり壽聖德太子　頭書云▲用明天皇第一の皇子御母后は穴穗部間人皇女と申す▲太子傳曆云敏達天皇元年壬辰春正月朔日妃巡二第中一到二于廐下一不レ覺仕レ產云々このゆへに廐戶皇子と申す▲舊事記云名二豐聰耳聖德皇子一或名二豐聰耳法大王一亦名二法主王一云々文▲山案推古天皇二十九年二月五日薨歲四十九人惜レ之▲宋史云用明天皇有レ子曰二聖德太子一年三歲問二十人語一同時解レ之七歲悟二佛法于二菩提寺一講二勝鬘經一天雨二曼陀羅華一當二此土隋開皇中一遣レ使泛レ海至二中國一求二法華經一今曰太子是南岳大

師再生也參 ▲山案有二六異名一生二于厩戸一故曰二厩戸太子一用明愛敬居二南宮上殿一故曰二上宮太子一八人同時奏レ事一時善聽故曰二八耳太子一又曰二豐聰一又曰二耳聰一叡明仁恕故曰二聖德太子一也此說見二于下學集一

御墓をかねてつかせ ●太子いきておはしますほどに東條しなかの山里に逝終の御墓をつかせ給へり今河内上太子といふて寺有御廟の上には常灯をともして殊勝の靈廟なり參　頭書云▲平氏聖德太子傳云推古天皇二十六年戊寅太子四十七歲冬十二月太子命レ駕科長墓所覽二造レ墓者一直入二墓內一四望謂二左右一云此處必斷彼處必切欲レ令レ應レ絕二子孫之後一墓工隨レ命可レ絕者切下略太子傳に異本ある歟今兼好はこれを用らるにやこゝをきれかしこをたてと云り諸抄にこれを引用す文 ▲山案諸抄に引る太子傳曆云三回二御陵一勅二墓功一曰汝斷二四路一朕意趣有レ二一者爲レ令レ無二大行道之煩一二者我子孫爲レ令レ無二日本之相續一又云子孫不レ續豈云二大咎一孔子遺教無二後嗣一者爲二不孝一矣吾爲二釋迦大聖弟子一豈爲二孔子小賢弟子一云々(蒙求之故事)▲蒙求云晉羊祜初有二善相レ墓者一言祜祖墓所有二帝王氣一若鑿レ之則無レ後此心もやあらん盤 ▲山案此故を以て異朝には今以人の墓より紫の氣たつ時は其子孫に天子あると云傳ふさるによつて其時の帝より其墓を墮ち玉ふとなり其墓を破れば必其子孫斷るとなりてれ其時の天子のためには後に敵とならんほどにとて墮ち玉ふといへり此の紫の氣のことを和歌にもよめり▲清輔の奧義抄云「藤の花宮の內にはむらさきの雲かとのみぞあやまたれける これは慶雲の心をよめるなり帝后の出來たまふべき所には紫の雲の立なりと云々されば爰の心は此蒙求の故事にたよつてなし玉ふには非ず蒙求は太子より後の書なればなり太子は只其道理を以てかくましなひたまふ心晴によく相叶へり委下に辨するが如し

こゝをきれかしこをたて ●爰を切れ彼を斷て也參 ●まはりをほりて人の往來なきやうにするをいふ參 ●此斷切は墓の大なるを破れる事といへるは如何有べきや是は墓へ詣る爰の道をも斷て彼の道をも切れ我子孫あらせじとなれば子孫なければ墓へ詣る道を斷とぞの給ひし事なり諺

聖徳太子云々侍りけるとかや　●此一句古今難一決說々繁多也略記レ之●されば墓といふものは子孫相續して有内はいつ迄もたえず祭るなり然るに其子孫衰へ其家たゆれば墓へ詣る人もなくなりて其墓も農民かたはしより壞て田畠となす也則末の法成寺の事書る所可ニ思合一されば天子親王の墓は御陵とて平人の墓とはちがひて大きなる故に俄には墮はせねどもかしこの角爰の端を切斷て後には平地になすぞ太子其心をかんがへ給て子孫なければ此ごとくに爰を切かしこをたつぞといふ事を先表してしめし給ふなり說●問太子の御墓をたちて子孫あらせじと宣るは墓をきれば必子孫たゆる故有や答此事太子傳の抄物にも所見なし只斷切といふをもちて子孫を斷きる心に用ひさせ給るにや文●子孫の盛衰は墓所にてうらなふ事もと仙家陰陽家などにある事也蒙求に載たる故事首記に又無常記及簠簋內傳にしるせる五墓日の事皆子孫のうらなひ也或は儒家にも父母を葬る時に墓の穴を占事あれどそれは別段の事也太子三世照見の御眼より子孫の行末をかんがみ給て子孫あらせしと斷切給ふ也いにしへ俑を作りて葬に伴ひとせる事さへ後なからんとてなげかれし子細もあればまして墓をきる事子孫にたゝるべき事也其子孫のたえむと有占は鏡のごとく明にして御入滅の後三十六代皇極天皇二年癸卯の年の十一月辛卯辰時に太子の御子山背大兄皇子以下廿餘人ともに斑鳩寺にて不思議のおはりをとり給ひし事太子傳などにくはしくのせたり參●山案蘇我入鹿が亂に逢て斑鳩寺にて何も縊て死たまふ●太子の子孫なからん事をねがひ給ふ事は釋迦尊の佛勅にして佛者の常なり儒者の心よりしてうはべの合點にては不審あり立入て可レ聞深々の義理ありさて此所の一往は太子我子孫を六道四生界に緣をひかしめさらんために此詞をなして祝したまふなり●問墓をきればいかなる故有て子孫たゆべきや答させる本說はなけれども祝するといふにて心得べし墓は祖孫の本なれば墓をくつして誓願し給ふなり世にいひ事とて口にもいひ事にもなすは是皆本說なき事多し太子子孫あらせじと宣る事をめづらしきやうにおもへども佛者の朝夕佛前においてて七世の父母眷屬佛果滿足といの

るも同じ事也若佛界へいたりぬれば此人界へは生を引ぬなり是にて此所をこゝろ得べし全

〔第一節〕●前中書王より終までなり●山案此一節は先賢の子孫なきことをねがひ玉ふことや或はねがひ玉はねども自ら子孫なくてよかりしためしを引て愈前節の心を明せり

〔一段之統論〕●此段の心は人の子の先祖にまさりて身を立道を行て父母の名をば揚るほどの者はまれなれば愚なる子もたんよりは只子と云者なくてありなんとの心なりされども世にある人は子を持ずと云ふ事なき物なれば若し子を持たる人は偏に舐犢の愛にをぼれずしてよく敎たてゝ愚ならぬやうにせよ人の子たるものも其心ばせをよく思ひ勵との誡言外にあり其故に末のをくれ玉へるはわろきことなりと世繼の翁の詞を書そへたり是佛者の偏に子孫を斷侍心とはかはりて俗家の上の誡よりいへりやごとなからんにも數ならざらんにもといふも皆俗の上にて云なり俗家には子を求る習ひなるを兼好かへつてかやうにいへる是めつらしき文體なるべし文●上兩段に人間の落着は兎角出家遁世と云すまし又此段にては世間の上に立かへりたとひ俗身なりとても出家のごとく妻子の點止(モダシ)なくして有べきこと、暗に佛道を人にすゝむるなるべし又無量壽經に不如無子と說莊子が語など取合せ見べし旬

徒然草諸抄大成卷第二

目　次

〔七〕あだし野の露消る時なく鳥部山の煙立さらでのみ住はつるならひならばいかに物のあはれもなからん世は定めなきこそいみじけれ（美の字）

あだし野　●化野（アダシノ）共阿太志野共書名所なれどもその國たしかにしれず諸●あながち名所にもあらずあだなる心ばかりに歌にもよむなり書●鳥部山と對に書たればたしかに名所に見度所なり今嵯峨の奥あたごの麓に化野といふ墓所（ムショ）あれば承暦の歌合に嵯峨野を過てあだし野まで行けんもあぢきなしといふにかなへり全　頭書云▲名所には對馬の國に入るといへども未レ勘とあり大和或は山城にも在歌の作例は無常所とあだなる心と兩義也續古今哀傷西行「誰とてもとまるべきかは化野の草の葉ごとにすがる白露▲續後拾遺に哀傷爲相「消はつる草の陰まで悲きは結もとめぬ化野の露右の二首名所に非ず無常の心也▲金葉秋に春宮金實（キンザネ）「化野の露吹亂る秋風になびきもあへぬ女郎花哉▲風雅集秋上俊賴「化野の萩の末こす秋風にこぼるゝ露や玉川の里右二首は秋歌にてあだなる心也名所に非す俊賴は玉川によみ合せりされども玉川いづれ

の名所とも知難し清輔抄に名所に載たるを八雲抄
に不審し玉へり或歌合の判の詞に化野名たかゝら
ぬ故にや知人なしと云々全
露　●化野の露とは消るといはん枕詞なり野　●露
は佛經儒典にも皆人の命のもろきたとへたること
おほし參　●露の字の下にとの字を入て見るべし露
と消る時なくとは長命を云なり諸　頭書云▲文選
曹子建詩云人生度二一世一去若二朝露晞一▲六度集經
云人命譬若二草上露一參
鳥部山　●顯昭か拾遺抄に鳥部山は阿彌陀か峯な
り其麓を鳥部野と云●又一説に阿彌陀が峯とは別
なりとぞとかく今の東山也人を葬る地なり參●鳥
部山と云事は釋尊をだびし奉所を鶴林といへばそ
れを日本にうつして鳥部山といふ也昔は此所にて
ありしを秀頼公豊國の社を祝ひ給ふとて彼煙宮居
になびけるとて建仁寺の境内にうつす又寛文年
中に西河原にうつすなりしかれば何れの所にても
火葬の墓所を鶴林とも鳥部山とも歌によむなり又
化野も一切の墓所を指ていふて不レ苦　頭書云▲
拾遺集に「鳥邊山空に煙のもへたらばはかなく消

し我にしらなん▲後拾遺法橋忠命「たき木つき雪
ふりしける鳥邊野は鶴の林の心ちこそすれ野
煙立さらで　●鳥部山の煙とは立といはむ枕詞な
り野　●煙の字の下に又との字入て見るべし煙と立
さらで也言意は人死ぬるといふ事あるもすてられ
ぬ事也もしは露ともきえず煙とも立さらぬに極り
ぬる世の掟ならばあしかるべしと也參　●又消る時
なき露立さらぬ俗の煙ならはあだし野鳥部山のあ
はれもあらし人も死はてぬならひならばいかにも
のゝ哀もあるまじきと也引合見義もありと云々句
●山案後説のごとくならば本の儘に見てとの字を
入ざるなり是は露煙を他人の身の上にして他所に
見たる體なり前説は我身のうへにかけて見るされ
ば後説は前説の意味あるにはしかず●(煙)上に露
といひこゝに煙といふ二つの文字に心を付べし露
は命の消るにたとへ煙は死骸となる身のはかなき
によせて云り命は實の體なき物なるゆへにきゆる
といひかたちは四大のしき身なればたちさるとい
ふ字意味ふかし參　頭書云▲淮南子に天氣を魂と
す地氣を魄とす魂魄合て人となる也されば命盡る

とき魄は露となつて地に歸り魂は煙となつて天に登る此心を以て二ふ ▲惠心僧都六道講式云東岱前後之烟便是朝睦夕語之輩北芒新舊之露寧非二遠聞近見之人一参

住云々ならば ●常住にして死ずばといふことなり全

いかに云々いみじけれ ●さてもし人間世の盡る時なきものならばいかにあらんされども無常變易の世界なれば或はあだし野の露と消うせ或は鳥部山の煙と立去なりしかるに露とも消ず煙ともたゝず常住の人ならばいかにとゝがめてそれにては中々貪欲心いやまし世間の哀もしらざらんとなり諺 ●世は定めなきの一句一章の骨子ならんか句 ●山案是決前生後の詞なりさて定めなきのよき事を次の節々に書べきため也　頭書云▲北鬱單越と云所は定て千年人が生ると雖も八難所とて佛も出玉ぬは長命にてもの丶哀も知すある故也南閻浮洲とて此世界は壽命不定なる故にもの丶あわれを知て敎化しやすき故に佛も出玉ふと有となん此心にて定なきはいみじけれとも云盤 ●觀心略要集云世人之愚也於二老少不定之境一成二千秋萬歳之執一参

〔第一節〕●化野と云よりいみじけれまで也此段を三節に分つなり ●言意は人の世に無常のならひ正しくありてだにかく慈悲もなく貪欲もをほき物を若人きゆることなく世を立去ることなくて住はつるならば何ほどもの丶あはれもなく人の心うとましからんされば定なき世にてこそよけれとの心をいへり参 ●山案此節は上段の會たへん事をいへるをうけて無常をすゝめんために先此節を書て末々にいましむべき爲なり此節一段綱領にしてしかも其筆法妙なり心を着て味ふべし

命あるものを見るに人ばかり（計の字はとゝ云心）久しきはなしかげろふの夕をまち夏のせみの春秋をしらぬも有ぞかしつくづくと一年をくらす程だにもこよなうのどけしやあかず（世に住あかず說）おしと思はゞ千年を過すとも一夜の夢のこゝ地こそせめ住はてぬ世に見にくき姿を待得て何かはせん命ながければ辱おほしながくとも四十にたらぬ程にて死なんこそめやすかるべけれ

命 ●天地の間に生していきとしいける程のもの也諸

人ばかり久しき　●人程長壽はなしといへる是は生をむさぼらすまじきとの心なり鐵　頭書云▲洞古經云天得二其眞一故長地得二其眞一故久人得二其眞一故壽古

かげろふ　●先蜉蝣の字を用ゆる足も手も細くとんばうに似たる虫也諸　頭書云▲弄花に蜉蝣遊絲蜻蛉野馬陽焔などの字をば擧たり野　▲蜉蝣淮南子云蜉蝣朝生而夕死而盡二其樂一　▲本艸綱目蟲部時珍曰蜉蝣一名渠略似二蛣蜣一而少大如レ指頭身狹而長而有レ角黃色甲下有レ翅能飛夏月雨後叢生二糞土中一或人曰蜉蝣水蟲也狀似二蠶蛾一參　▲歌に「夕暮に命かけたるかげろふのあるかなきかの世にもすむかな諸

夕をまち　●蜉蝣は朝に生じて夕べに死す一日を一期とするの心みじかきのたとへ也諺

夏の蟬　●蟬の數多きによりて夏の蟬といふ說　●一本に夏の虫と有古今序にて春鶯を春の鳥とよみ夏の蟬を夏の虫とよむ一義あるとかや野　頭書云▲山案格物論云蟬兩翼喙長在二腋下一或以爲レ無レ口以レ脇鳴者其蟬有二數種一蟪蛄寒螿（カンシャウ）蛁蟟蟀母蜩范並蟬蟪蛄小蟬紫色四五月鳴寒螿黑而傴僂九十月鳴甚悽急蛁蟟色青七月鳴蟀母似二寒螿一而小二月鳴蜩范形大而黑亦五月鳴

春秋を　●一年四季の中の一季を一期とする義也諸　●是みじかきものゝ證據を出せり是等にて人情のうへをたのしめとなり全　頭書云▲莊子云蟪蛄不レ知二春秋一註蟪蛄寒蟬也春生夏死夏生秋死不レ見二四時全一壽

つく〴〵　●熟の字を書なり久しき心木の實の久しうしてじゆくするなどゝ同じ心なり山案　頭書云▲拾遺集に「つく〴〵と思へばうきに生る蘆のはかなき世をばいかゝたのまん說

程だにも　●八雲抄には事外と有野　●河海には無越閑雅の字をかけり無越の字なればこゆることなき也閑雅の字なれば幽微の心也又かぎりもなしといふ心も有諸

のどけしや　●長閑と書ゆるやかにながながしき心諸　●うか〳〵くらせば月日の行もしらぬが心を付てつく〴〵としづかにくらせば一年もこゆる事

なくながきとなり如此あらば一年にても心にたり
ぬべき事也といふ心也まして六十七十も生るほど
にと也故に人間は何事にても滿足の思ひ第一と也
其心をいへり全　頭書云▲山案東坡詩云無事此靜
座一日是兩日若活七十年便是百四十
一夜の夢云々世に　●山案名利に走一生を暮し命
おしと思ひなば千年を經ても限あるべき命なれば
只一よの夢の間の如し猶あかさるべし●とても世
はきはまりなく人はかぎりあれは住はてぬ也參
頭書云▲圓覺經云生死涅槃猶二昨夢一參　▲維摩經云
度二千百刧一猶二彈指一盤
見にくき姿　●長命なれば只鬢髮しろく顏色おと
ろふばかりなるを待得て何かはせんとなり文　頭
書云▲樂邦文類載京師比丘善導頌漸々雞皮鶴髮看
看行步躘踵假饒金玉滿レ堂誰免二衰殘老病一參　▲山
案仲芳　覽レ鏡詩に壯歲竊期天下奇宗門九鼎欲レ扶
レ危朝來咲向二鏡中一問白髮蒼顏汝是誰　▲又拾遺集
に「增かゞみそこなる影に向居て見る時にこそし
らぬ翁に逢こゝちすれど我ながらさへかく詠じけ
り況や他所目に於てをや

命長ければ辱おほし　●長生して形容見惡きのみ
ならず猶恥さへおほしと也文　頭書云▲莊子天地
篇云多二男子一則多レ懼富則多レ事壽則多レ辱是三者
非レ所三以養二德也野
ながくとも　●人間の齡猶行末ながくとももと云心
也●一說に四十といふも猶ながくともとの心とい
へり文
四十に云々　●此所は古今人のすまし難き所也先
正說は古來日本の俗語に四十を老の初といへば老
のきたらぬうちにはやく死はつべき事と云なるべ
し句　●若時よりあだに日を暮す人の上にていふ也
儒佛にわたりて勤むべき事の有人の手前にていふ
には非ず始は人の滿足をしらせ爰に至ては無用の
人は四十より內に死たがよきと也全　頭書云▲爰
に四十と限りて書たる兼好の心を按するに素問上
古天眞論云四八筋骨隆盛肌肉滿壯五八腎氣衰髮墮
齒槁六八陽氣衰と云々しかれば人は四十より前は
血氣も盛にして四十より始て老衰し行なり諺　▲一
說人三十にては世に名をたて功もとげる時なり三
十にして名たゝずんば君かへつて寸陰を惜めなど

いへる事あり功業もとげて後は四十に不レ足とも死なんはねがはしきことゝ也いかんとなれば老子のいへる功なり名遂て身退くは天の道なれば陶朱公もこれを云て引てもりたりこゝに死なんこそとあるは四十より内にはかぎるまじけれど三十を大やう名遂る時といふ故に其後は世をも遁て山林の住居もねがふがよきといはんとすれど一重高上死なんこそといへるは佛道に思ひ入て生死事大より見れば死ぬることをわらくつをぬぐよりいとやすく思ふによりかく死なんこそといふなるべし參▲又説▲人にをしまるゝ聞えもあるなり四十にたらぬとかすをかぎりたるまことにをもしろし句

めやすかるべけれ　◉見やすからん也めとみと五音相通也上の見惡きのうらなり

〔第二節〕命あるものと云よりめやすかるべけれまで也◉此節はまづ人はたとひ早世するとても猶長命なるものなれば大かた四十にたらで死なんがよかるべしとの心也是も佛者などの寂滅を樂とするうへよりかやうに長命をいとふはめづらしからぬを兼好は世俗の上を云ふに尋常の世俗は長命を好む習なるを加樣に長命の益なきことを云て四十にたらで死なんをめやすかるべきといへる所は例の兼好のめづらかなる文章也文

其程過ぬればかたちをはづる心もなく人に出まじらはん事を思ひ夕の陽に子孫を愛しさかゆく末を見ん迄の命をあらましひたすら世をむさぼる心のみふかく物のあはれもしらずなりゆきなんあさましき

過ぬれば　◉四十をすぐればなり是より長命の損をいふなり盤

出まじらはん　◉若時は身をもたしなめども四十歳のほとを過れば世に馴じみて物の耻かましきをもわすれ白き老髪をさしあげしはある顔ながら世に出まじらはん事を思ふと也文

夕陽に子孫を愛し　◉夕方の日の入らんとするほとはかなき時にのぞみて子孫を寵愛するなり參

頭書云▲白氏文集第二秦中吟不致仕云七十而致仕禮法有二明文一何乃貪レ榮者斯言如レ不レ聞可レ憐八九十齒墮雙眸昏朝露貪二名利一夕陽愛二子孫一挂レ冠顧二翠緌一懸レ車惜二朱輪一金章腰不レ勝傴僂入二君門一誰不レ愛二富貴一誰不レ戀二君恩一年高須レ請レ老名遂合

レ退レ身云々野 ▲夕陽朝露對して人の若時と老後と
によせたり盤
さかゆく ●子孫の榮行末也 頭書云▲古今に「
今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしも
のを野
末を見ん云々 ●不定の世界をわすれて子孫いく
いくつの年さかへゆくを我はいく〳〵いくつなれ
ばさのみの年にもあらずなど云事也我命よりも其
若き子孫さへしらずましていかなる難きにかあひ
いかなる貧苦を請んことをもしらず愚也全
あらまし ●かねての義也句 ●未來をかねていふ
事也文 ●一義にあらまほしの畧語なり或說
ひたすら ●一向と書前註●餘事なく只世をむさ
ぼる心ばかりと云なり全
世をむさぼる ●年寄は子孫の爲を思ひて欲がつ
くなり 頭書云▲惠心六道講式云深貪ニ着名利ニ不
レ厭ニ生死ニ乃至一生雖レ盡希望不レ竭參 ▲論語云及ニ其
老ニ也血氣既衰戒レ之在レ得といへる心にもかよふ
べきや野
物のあはれもしらず 頭書云▲歌に「別路をまれ

には人のなげゝども數かさなればをどろきもせず
▲撰集抄老後述懷西行「をどろかす鐘の聲さへ聞
なれて永き睡のさむる夜もなし說
なりゆきなん ●老しては惡になれて心がひがみ
て慈悲もなくなるなり盤
あさましき ●老人のあしき事をくゝりて淺間敷
と歎きたり盤
〔第三節〕●其ほど過ぬればより終まで也●此節は
長命の人のかやうにあさましければたゞ短命なら
んにはしかじとの心なり文
〔一段之統論〕●此段は人長命なれば無常を忘ても
のゝ哀をしらず貪欲ふかく慈悲すくなくなるもの
なれば只はやく死なんには不レ如との心なり偖世
に早世する人も此ことはりを能心得てさのみ悔ま
じき事なり若存命して久しく世にあらば貪欲すく
なく慈悲深くして人にもまじはらずつれ〳〵にて
あれと言外にいましめたる段なり文 ●生を好て死
を惡むは世のならひなるゆへに或は松竹にたとへ
鶴龜を引て昔より祝へども終に千年を經たるため
しもなし其上儒道には老て死さるはこれ賊なりと

いましめ佛法には寂滅爲樂と見へたりされども僧俗ともに此理にまよふ故に無常の烟の立とまらぬをかへりてよきやうにかゝれ侍る貞●長命なればあしきと一篇に心得つるは此段の本意に非ず不學愚痴のやから長命の益なくして却而辱をほきこと如レ此能々心得て長生を保べき道なり然るに不孝の族親の長命をうるさく思ふ方人に此所を口すさみとなすは注釋あしく取なしたる失なり改むべし全

〔八〕世の人の心まどはす事色欲にはしかず

色欲には●道にそむき身を苦しむるよ種々の事あれども本色欲の爲になす業也例へ人に千兩の金をあたへん色よくを長く斷絕すべしと云とも十人か九人はうけぬ也又人界の三欲とて色欲食欲睡眠欲とて此三つの欲を根本として種々の欲おこるといへども三つの中に色欲第一と見えたり其故は戀慕のためには幾日もいねずいかなる財寶をもほろぼしうるさきものをも食物にすればなか／＼三欲の第一とぞ覺ゆる全　頭書云▲此段色欲とはかり云て聲香味觸法をいはぬことは陳雄金剛經註云佛言ニ六塵之苦一每以レ色獨言ニ於先一而繼レ之以ニ聲香味觸法一蓋以見レ色者人情之所レ易レ感在ニ六塵中一尤其最者也盤　▲禮記禮運篇云飲食男女人之大欲存焉　▲程伊川曰淫聲美色易レ惑レ人野　▲白氏文集古塚狐妖且老化爲ニ婦人一顏色好見者十人八九迷假色迷レ人猶若レ是眞色迷レ人應レ過レ此彼眞此假俱迷レ人云云壽

しかず　●不如と書●しかずとあるにていつれもまどはすにてはあるがと云心なり

〔第一節〕●世の人と云よりしかず迄なり●山案これ色欲の第一重きと云大綱を擧て次に人のまよふ品々をいへり

人の心は愚なるものかな匂ひなどはかりのもの成（暫時の間諸）にしばらく衣裳にたき物すとしりながらえならぬ匂には心ときめきするものなり

人の心　●人の心といへるにて道の心にはあらず迷る心なることはしるべし盤

愚なる　●愚なるとはかりの色にもまよふゆへなり參

かりのもの　●彼匂を假に是に移す也諸

衣裳　頭注云▲論語子罕篇云冕衣裳集註云衣上服
裳下服句
たき物　●薫字　頭注云▲白氏文集樂府大行路云
爲レ君薫ニ衣裳一君聞ニ蘭麝一不ニ馨香一野
しりながら　●實體なきものとしりながらと也諺
●しらぬことに心を動すは理なり知て有ながら風
するは愚なるといはん爲也盤
えならぬ　●殊勝と書ともいはれぬかうはしき匂
ひ也壽●ほためる詞也盤●八雲抄にはおもしろう
ゆうなる義とあり參
心ときめきする　●風の字を河海に書さはぐ心也
句●心のうごきうつる心也　頭書云▲枕草紙云心
ときめきするものはよき薫物たきてひとりふした
る諸▲(ときめき)河海に時字を書▲威勢の心に用
るとき也句▲心の其時にうつるを云ふなりかうば
しき匂ひに戀慕の心になるなり春めく秋めくの類
なり全▲山案此說は鑿なり下に注する說をまつ用
ゆべきなり
[第二節]●人の心はと云よりするもの也まで也●
山案此節は上節をうけて色欲に迷ふ品々ある中に
外の色にまよふはいよ〳〵愚の至なることをいへ
り借外の色の中にて香の事を云ふは輕きを擧て重
きを戒めんため也
久米の仙人の物あらふ女の脛の白きを見て通をうし
なひけんはまことに手あしはだへなどのきよらに
肥あぶらつきたらんは外の色ならねばさもあらんか
し
久米の仙人　頭書云▲元亨釋書十八久米仙者和州
上郡人入ニ深山一學ニ仙法一食ニ松葉一服ニ薜茘一一旦騰
レ空過ニ故里一會婦人以レ足蹈ニ浣衣一其脛甚白忽生ニ
染心一即時墮落云々賛曰昔婬女誓曰我不レ跨ニ一角
仙頸一不レ出レ山果然久米見ニ白脛一而墜有レ以矣哉於
戲色之毀レ人也可レ不レ愼乎諸▲(仙人)釋名曰老而
不レ死曰レ仙仙僊也遷入レ山也故制レ字人傍レ山也盤
脛　●足のこぶらの上也ひざまぶしよりしたを云
諸
通をうしなひ　●空を飛行する通力をうしなひし
也文　頭書云▲神境通亦名ニ如意通一靈芝曰能飛行
速到山障無碍即如意也參
まことに　●まことゝは上をうけたる心也上に云

所を評判して云也盤
あぶら　頭書云▲詩經膚如二凝脂一文　▲樂天嘆二楊貴妃一曰溫泉水滑如二凝脂一參
外の色云々　●生付の色也生付を眞粧といひ外より物をかりてかさるを假粧と云也說●眞の色に仙人のまよひしは尤也と諸
〔第二節〕●久米仙人と云よりあらんかしまで也●此節は暫仙人をほめて世人の假粧にまよふは最愚なる事を戒む說●人の心はをろかなると云より承て久米の仙人は實の體を見て通を失しは世人の匂に心をまよはすに比すれば尤なりとたすけて畢竟色には迷ひやすきと云緒を云て次の段にて深く警たり諺
〔一段之統論〕●此段は前に色好さらん男はいとさう〳〵しくと云て下心にはひたすらたはれたる方にはあらでなど戒を含たり其下心を彌說出せり文●此段は佛道修行も色欲がさはりとなる意なり此次の女は髮のめでたからんと云よりを分て別段にするがよき也これにはまどふ人の心を云ふ女は髮のとあるよりは人の心をまどはすものを云なり盤
●山案野槌參考などは兩段に見る其辨は次の統論の下に可レ申予は暫盤にしたがふ其上壽抄文段大全等も兩段に見れはなり

〔九〕女は髮のめでたからんこそ人の目だつべかめれ

女は髮のめでたからん　●髮はまづ目にかゝる物なる故にかくいへり盤●女に美人の德あまたあれど髮のうるはしきが第一の德なり三十二相も頂上肉髻相とて髮の見事なるを第一とす參●俗にも一髮二姿と云なりされば人の身の內には首ほど尊き物はなしかふべを天にかたどり眼を日月に表す髮は目より空に生する物なれば一身の內は是より上はなき心にてかみと訓ず一身の內にては物にけがれざる所也故に何にても尊ぶべき物おば頭にいただくは一身の淸淨の所にふるゝと也●又異說に●髮は女の頂上のかざり也又鬢は血に屬して女の全體也然は自然愛着をしやうずる常なり全●（めでたからん）愛の字●愛する心花にめて月にめづるの類參前に注す●髮をまつ人の愛する樣に捺よとなり說●黑くたけ有髮也諺　頭書云▲詩君子階老

篇云鬢髮如レ雲不レ屑レ髢也▲文選西京賦衛后興ニ於鬒髮ニ飛燕寵ニ於體輕ニ▲左傳昭二十八年昔有ニ仍氏女鬒黒而甚美光可ニ以鑑一名曰ニ玄妻ニ野▲長恨歌雲鬢花顔▲又雜寶藏經に波斯匿王のむすめ頼提と云しは十八の醜ところありし中に髮は馬の尾のごとくなりしとこれのみわきて說玉へば髮を云は餘はこもるなるべし美人の相は此うらなるべければ髮をばかりかけるは面白き事也參▲山案枕草子うらやましきもの丶條に髮ながくうるはしうさがりはなど目出度人▲又心ゆくもの丶條にも髮のうちたたなはりてゆら丶かなるほどながさをしはかられたるにと云り▲源氏若紫にこぼれかゝりたる髮つや／＼とめでたふ見ゆと有句

目だつ　●まつ目にたつと也見事に見ゆる心也全●見とがめて心をうごかすよし也盤●たつのたの字清韵の兩韻也　頭書云▲山案新古今序に是にぞ人の目たつべき色もなく心とゞむべきふしも有難ゆへに

[第一節]●女は髮の目出度からんよりかめれまでなり此段七節に分て見るべし●山案に此段女の人をまどはす事をいへる中に第一髮の事を擧て女の最も防べき本を敎へ男も亦能迷ふべき始を知らせて末にいましめんため也末の大象も能つながれと云んために發端に髮のことをいへり

人の程心ばへなどは物うちいひたるけはひにこそ物ごしにもしらるれ

人の程　●人品也諸●前に注在り女の姓のほどほどなり如何樣なる位の人なりとしる丶なり全●人のほどは善惡の品なり盤　頭書云▲源氏若紫に人のほどもあてにをかしうとあり句

心ばへ　●山案源語類聚に榮映光の三字をよませたり●心の物に動く處也●心ばせの義也參●志のよしあし也全

けはひ　●氣字河海形勢日本紀景氣新猿樂記ともに野に出る也●女の物いひつくろひたるけいきをいふなり全

物こし　●物越と書●屛風障子ごしの聲をものこしと云なり其女は見えねともものいふけしきにて其よし打心ばへもしられていまだ見ぬ人にも心のうつるを云也諸　頭書云▲物いふ聲の事也▲禮記

云凡音生ニ人心ニ者情動ニ中故形ニ於聲ニ聲成レ文謂ニ之音ニ是故治世之音安以樂其政和也亂世音怨以怒其政乖也亡國音哀以思其民困也古 ●舊抄に物云ふ聲を云とあれど上に物云たると書たる詞にかさなれば此義あしかるべしたゞ物のへだてと可レ見句

〔第一節〕●人のほどゝ云よりしらるれまでなり●山案此節は女たるべきもの丶先づ詞をたしなむべきことをいへり初段に物うちいひたる聞惡からずといへるは男子のうへのたしなみ此兩節女のたしなみを上べには書て底心は人のまよふは第一は髪第二は言葉といましめたり

ことにふれてうちあるさまにも人の心をまどはし

ことにふれて ●萬の事に觸てなり諸

うちあるさま ●つゐ居體也文　頭書云▲水鏡にうちある人にだにとあり野

〔第二節〕ことにふれてと云よりまどはしまでなり●山案此節は女は最人をまどはすの深きことをいへりされば心なくてつゐ居るにさへ人がまよふほどにといひて心ある時はと云を下にいましめたり又或說に此節は女の書のことを云ふなり次の節は女の夜人をまよはすことを云といへり

すべて女のうちとけたるいもねず身をおしともおもひたらずたゆべくもあらぬわざにもよくたえしのぶはたゞ色を思ふが故なり

すべて ●凡字都字を書おしなべての心惣論也諸

うちとけたるいもねず ●いもねずとはいもねぬなりいとは寢の心也いぎたなきといふはねがひ事なり壽 ●此所二說あり先一義には●女のうちとけたるあひしらひにはまことにいぬるにもいねられぬと也句 ●此說は男へかけて見る也又一義には●女と云者はそひ寢の床などの打とけて寢ぬべき夜も身のたしなみ深き故に寢姿など人に見限られまじきと思ひて寢いらぬ心なり諸 ●此說は女へかけて見るなり●前說よし後說にしたかはゞ大きに心違へりたしなみならば打とけてはいもねずとかくべき也此所を女の嗜と見れば次の詞の義理相違せり全　頭書云▲拾遺集に「きみこふる涙のかゝる冬の夜は心とけたるいもにねられず野 ▲萬葉に其夜は我もいもねかねてとよめり▲土佐日記に夜はいもねずと有文 ▲「秋の夜の千夜を一夜になせり

とも言葉のこりて鳥や鳴なんの心なり全
身をおしともおもひたらず ●命を捨ても不足におもふなり參●男の女に着したる事也全●又女の方へもかけて見るなり但前説勝れり説●(たらす)不足字●又は絶字にて思ひたへずと異本にあるはあしゝ　頭書云▲法華云不㆓自惜㆒身命㆒參▲箒木にたまさかなる人とも思ひたらずとあり句
たゆべくも云々　●(たゆ)堪字●堪忍すべくもあらぬ事なり諸●(色を思ふ)好色には堪忍のならぬ事を堪忍するは色を思ふが故也車の榻に百夜通シテし事此類數しらず全●此説は男の方にして見る也女の方へかけて見る説あり　頭書云▲こゝまでは女の氣色様體を云ふなり女の我身さまあしからぬやうにと思ふが故にたへがたき事にもよく堪忍すると也▲我身をうつくしく人に思れ見られんために深く爪をいたきをこらへてとりなどするやうのことゝもを云り盤●此説どもは女の方へかけて見たるなり但しいましめに書し段なれば男の方へかけて見るが●よかるべし説
〔第四節〕●すべてと云より故なりまでなり●山案前節は心なき女にもよく人の迷ふことをいひ此節は心ありて打とけかゝるときは愈男の心をまよはすと戒たり

誠に愛着の道其根ふかく源とをし六塵の樂欲多しといへども皆厭離しつべし其中にたゞ彼まどひのひとつやめがたきのみぞ老たるもわかきも智あるも愚なるもかはる所なしとぞみゆ

誠に　●兼好の感なり全●上の詞をうけて後を起すなり決前生後の筆法なり盤
愛着の　●恩愛執着の略語なり説
源とをし　●人の心に此愛着の絶がたき事木の根のふかくて堀たえしがたく水の流の源遠て汲干がたきがごとくなり文●愛執のもとは生々世々薫執して捨難し儒にては五常を以て天理にしたがひ佛にては五戒を以て禁ずべし全
六塵　●六塵とは色聲香味觸法也此六をいふ也色塵聲塵と一々に塵といふ字を付いふ也塵は物をけがしくもらすたとへなり六つの塵となりて心をけがしくらます也此六塵は眼耳鼻舌身意の六根をけがしそこなふもの也眼にはよきいろあしき色を見

て愛着を生して心のけがれとなり耳には聲を聞ていかり腹立て心のけがれとなり鼻には香を齅(カグ)舌には味をしり身には觸なりぞくはふるゝとよめり男女の肌にふるゝも衣裳にふるゝも同事也意には法なりのこる五をよくわきまへしるを云也此分別によりて善惡の業と成也諸　頭書云▲三藏法數云六塵出ニ涅槃經一塵即染汚之義一色塵謂男女形貌色等二聲塵謂男女歌詠聲等三香塵謂男女身分所々有香等四味塵謂肴饍美味等五觸塵觸即著也謂男女身分柔軟細滑等六法塵謂意根對ニ前五塵一而起ニ善惡諸法一參

樂欲　頭書云▲宗密禪師盂蘭盆經疏云願者心之樂欲參

厭離　頭書云▲往生要集云夫三界無安最可ニ厭離一參

彼まどひ云々　●色欲の事也諸　頭書云▲四十二章經云佛言愛欲莫レ甚ニ於色一色之爲レ欲其大無レ外古▲歌に「いかばかり戀の山路のしげゝれば入と入ぬる人まどふらん野

ひとつやめかたき　●是より次に難レ止子細をいひて戒む全

老たるも　頭書云▲山案伊勢物語にむかし世ごゝろつける女いかで心なさけあらん男にあひえてしがなど思へどいひ出んもたよりなさにまことならぬ夢がたりをす子三人をよびてかたりけりふたりの子は情なくいらへてやみぬ三郎なりける子なんよき御男ぞいでこんとあはする此女けしきいとよしこと人はいとなさけなしいかてか此在五中將にあはせてしがなと思ふ心あり狩しありきけるにいきあひて道にて馬の口を取てかう〳〵なん思ふといひければあはれがりて來て寢にけりさて後男見へざりければ女をとこの家にいきて垣間見けるを男仄に見て「百歳に一年たらぬつくも髮我をこふらしをもかげにみゆ

わかきも　頭書云▲大和物語に大内の内舍人なりける人御てぐら使に大和の國にくだりけり井手と云所にて歳六七つばかりにてうつくしげなる女ありけり内舍人あひしたはむれに帶をとらせかはして心かはらずは逢見とちぎりてたちぬ後六年ばかり經て又使にさゝれて下りぬ彼井手と云所をさへ

男は忘れにけり女は心みさほにて逢見んとぞ云し此事井手の下帶と云故事になりて後々の歌にもよめり俊成の歌に一とき返し井手の下帶行めぐり逢瀬うれしき玉川の水全

智あるも　頭書云▲此智は分別智の分際なり無漏智にあらず學文廣才の智惠にては迷ふなり全▲山案唐しの玄宗皇帝は明君といはれ玉ひしかども晩年に到て楊貴妃の色にをぼれたまへり又司馬相如は自ら文を作て好色をいましむといへども卓文君が情には愈迷ひしとなり

愚なるも　●畜生ほど愚なる者はあらし尤ふかし全

かはる所なし　●此六塵の色聲香等にさま〳〵願思事の品多しといへども又或は厭離しつべけれども只女色は萬人やめがたき諸

〔第五節〕●まことにと云よりとぞみゆまでなり●山案此節は色欲の尤もはなれ難ことをいへりされば男女の道は天地開闢のむかしより定りし道なれば其根ふかし如何となれば無極之眞二五之精妙合而凝乾道成レ男坤道成レ女二氣交感化ニ生萬物一と云へり又二神の古天の浮橋の下にてみとのまくはひをし玉ふ時より起て永く流れ來る道なれば其源とをしまことに此生を受るもの誰か此道によらざるものあらんされど此道に淫するときは大にしては國を亡し少にしては身を亡すぞ故に儒家には夫婦にさへ別ありと敎へたり又釋氏は俗にも邪婬を戒めたり尤も可レ恐可レ愼は此まどひなり

されば女の髪筋にてよれる綱には大象も能つながれ女のはけるあしだにてつくれる笛には秋鹿必よるとこぞいひ傳え侍る

されば　●上をうけて此故にといふ心なり參

大象　●大象ほどたけきこは〳〵しきものもよくつながるゝ也皆々女の髪筋にてよりたる綱には非ず苧綱にすこしよりまぜること也又象にかぎらず舟の綱にも髪筋をよりまぜつればきるゝ事なしと船長申き全　頭書云▲山案虞衡志云象出ニ交趾一惟雄者有ニ兩長牙一頭不レ可レ俯頸不レ可レ回口隱ニ於頤一去レ地尙遠運動以レ鼻爲レ用一軀之力皆在レ鼻將レ行先以レ鼻柱レ地以移レ足鼻端深可ニ以開闢取一レ物毎以レ鼻取レ食飲レ水亦以レ鼻吸而捲レ之足如レ柱無レ指而

有ニ爪甲一形如レ粟登レ山渉レ水甚捷(トシ)出ニ象山一
能つながれ　◉能の字可味委次に記　頭書云▲大威德陀羅尼經第十九云一切女人爲レ不レ除レ欲乃至以ニ女人髮一爲レ作ニ綱維一香象能繫況丈夫輩云々諸
あしだにて云々笛　◉此事出處もしれず只古諺に云ひ傳へたる事にや諸　頭書云▲或人の申されしは近代參河國安部の山人都にのぼり名ある遊女のはける屐(アシダ)をとりて歸り笛に作て阿部山の中に入是を吹に鹿の多くよる事常のあしたにて作れる笛よりもまさりてしるしありと語り侍る野　▲鹿笛の作

ロナリコヲ吹
諸
鹿笛之圖

りやうあまたあり鹿の腹ごもりの皮を用るもあり又鹿の耳のうちの皮を用るもよし笛かはけばならず吹時口にてぬらすなり古　▲太平廣記四百四十三云江陵松滋枝江村射レ鹿者幸以ニ陶河烏脛骨一爲レ管以ニ鹿心上脂膜一作レ笛吹作ニ鹿聲一有ニ大號小號之異一或作ニ麀鹿聲一則麚鹿集蓋爲ニ牝聲一所レ誘人得ニ彀レ矢而注一之野　▲本生心地觀經八云心如ニ野鹿一逐ニ假聲一說
秋鹿　頭書云▲山案格物論云鹿性多ニ驚烈一能別ニ良草一他獸多屬ニ十二辰及八卦一惟鹿不レ然一千年爲ニ蒼鹿一又百年化ニ白鹿一又五百年爲ニ玄鹿一鹿有レ麃有レ麋有レ麞有レ麂有レ麠(キヤウ)々一角似レ麃牛尾麂大麕旋毛狗足麞即麕也麋冬至角解鹿夏至角解麃又鹿之大者也
必　◉能の字に必の字心を付へし女の髮の綱ならすをんなあしだの笛ならでも象を繫ぎ鹿はよれとも是にては一入よく必つながれよるぞとの心也文
[第六節]◉されば女と云より傳侍るまでなり◉夫妹背のかたらひも同類とは尤なり人と獸とは別種なりしかるに獸さへよくつながれ必よることは是必然の道理と云ひながら女人の惡業ふかき事をあらはしていよ〱つゝしむべきと次の節にいましめんためなりこれたとへば鐵砲の臺を物をびへする者の藥に用ひ古衣を蓮のこゑに用る類皆自然の道理なりされば畜類さへ如レ如況や同類にして

しかも心をよせて假の物にさへ心ときめきする人なれば迷ふは尤也說

みづからいましめておそるべくつゝしむべきは此まどひなり

みづからいましめて　●自警と書自の字眼目なり我と心を制してなり諺　頭書云▲朱文公自警詩云十年浮レ海一身輕歸對ニ梨渦一却有レ情世上無レ如ニ人欲險一幾人到レ此誤ニ平生一といへり此詩の意は宋の胡澹庵が忠義ありしかども南方へ流れて十年を經て免り還りし時湘潭にて酒を呑黎倩と云る女を顧盼して梨頰生ニ微渦一と云へることを朱子かく作て自警とせり微渦は笑る顔にゑくぼのあるを云ふ黎倩を梨花にたとへたり兼好か色欲のまとひを自ら警てをそれよと云るは朱子の此詩に自ら叶ひ侍るなり野

つゝむべき云々　●上に彼まどひと有に對して此まどひと書なり諺　此まどひは色欲なり始には彼まどひと書こゝにては此まどひとかける彼此の字眞に文法の妙なり野

〔第七節〕●自らいましめてより以下なり●山案前に色々女色のありさまを云ひ述てこゝにて嚴くいましめて書とめたり自警の字學者の本とすべき義なり好色にかぎらず餘の五欲も自警の心をはなれては迷ひやすきなり●外よりの異見にてはやめがたきとなり親の諫世の謗をつゝむに暇なきと云り不ニ自警一叶はぬことなり全

〔一段之統論〕●此段には人の心をまどはすものをいへり假の物にさへ心をまどはす心なればかやうのものにはましてまよふはずなれば自らいましめて恐れよとの心なり盤●千金方曰見ニ姝妙之美女一愼勿ニ熟視而愛一レ之當是魑魅之物令ニ人深ク愛也●詩經云亂匪レ降レ自レ天生レ自ニ婦人一など云て古今女色は人のつゝしみいましむべきことなり說●此章を古來より二章にはなして書たる本あり予は一章となせる本によるいかにと云に一には六塵の字にあたりて見る故也又一には此章のはじめに世の人の心まどはすと書き出て今終に至てつゝしむべきは此まどひなりと留たり皆色欲の人をまどはすをいはんとて六塵のことを書つらぬ首尾一雙してまとひと云字の一章を始めをさむること文章の妙所な

り中庸に天命これを性と云ふと書始て上天のことはをともなくかもなしといへるによくかなへり後の人心をつくへし參

〔十〕家居のつき〴〵しくあらまほしきこそかりのやどりとは思へど興ある物なれ

つき〴〵しく　●雨點あり●一義には後のつの字を濁る●山案遊仙窟に方便の字をつき〴〵しくとよませたりてだて用意ある心也●さもありぬべき義也世話につきのよきと云たぐひ也增鐵●又一義にきの字を濁る次々しくなり中門筑地などのとりつき次第々々のよき心なり諸●後説は中人以上にかけて見るべき説　頭書云▲源氏藤のうら葉にさすがにつき〴〵しからんをおぼすにとあり句▲山井案清少納言か枕草紙にすみもてわたるもいとつき〴〵し

あらまほしき　●それ〳〵の分際ほどにあらまほしきなり盤●すまゝくほしき義なり句

かりのやどり　●逆旅●寄寓野●寄宿參●此世の無常のことはりなれば假初（カリソメ）のやどり也盤　頭書云▲莊子云吾生特逆旅耳▲文選古詩人生ニ天地間一忽如ニ遠行客一句▲東坡詩集云吾生如レ寄耳注魏文帝樂府云人生如レ寄多レ憂何爲參▲山案李大白宴ニ桃李園一序云天地者萬物之逆旅光陰者百代之過客▲又尸迦羅越六方禮經云父母妻子居盡如ニ寄宿一夜裏共安レ身天明各消散參▲西行歌「世の中を厭まで社難からめ假の宿りを惜む君哉句

とは思へど云々　●兼好法師の眞實より出たる詞なるべし後の詞に又時の間の烟共などいへる同じ心ばへに出たるなりいかにつきよく興有て作りおきてもしばしの露命のかりの宿とは思へどゝなり文●〔興〕面白きよしなり盤

〔第一節〕●家居と云よりあるものなれまでなり此段五節に分ちて見るべし●上の數段に人間のあらましを書終て又家居のことをいへるにや增鐵●こゝを發心者などの草庵の事を云ふと見るによりて相違するなりこれはをしなべての人の家居の事なりさてこゝにかく云ふは人每に儉約がよきといへばそれに過るによつてかく云なり萬事中道をしらせたり盤●山案此一節は人として衣食住の三は暫も此世にある中はなくて叶はざることなる故に書

なから謾に所狹樣したるはあしきぞ方便ツキ〳〵シキようにせよと家居に就ての大綱を擧て次の兩節に委細に論ぜり

よき人ののどやかに住みなしたる所はさし入たる月の色もひときはしみ〴〵と見ゆるぞかしいまめかしくきらゝかならねど木だち物ふりてわざとならぬ庭の草も心あるさまにすのごすいがいのたよりおかしくうちある調度もむかしおぼえてやすらか成こそ心にくしと見ゆれ

よき人の　㊟智德ある人を云也兼好の氣に入たる人おもひやるべし全

住みなしたる　㊟つき〴〵しくあらまほしきと云は別の事にてなしのどやかに住なしたる所ぞとことはりたる筆法なりのどやかにはすなはちつれ〴〵なり盤

しみ〴〵と　㊟身に入て愛せらるゝなり諺

見ゆるぞかし　㊟月の方にへだてはなけれども所からによる也廣澤姨捨いづれも月の名所はところからおもしろき也全　頭書云▲金葉集に「宿がらぞ月の光もまさりける世のくもりなく棲ば也けり句▲又歌に「月影は同じ雲井に見へながら我宿からの秋ぞかはれる説

いまめかしく　㊟當世めきてあたらしき心なり參

きらゝか　㊟玓瓅テキラクと書㊟奇麗にみかきたてたるを云句　頭書云▲文選上林賦に玓瓅の字をよませたり註に說文を引て曰玓瓅明珠之光也句▲漢書相如賦註玓瓅光明貌ハウノ參

ならねど　㊟今やうにはやり事をしそへ結構ならねども也兼好のものずきに合たる也思ひやらるゝ作事也全

木だち物ふりて云々庭の草も　㊟物古と書古㊟又舊の字にてふるびたるさま也上のいまめかしくと云によく叶へり參　頭書云▲陶淵明が眄ニ庭柯一以怡レ顏と云又木欣々以向レ榮といひ周茂叔が窓前草はらはずして自家の意思と一般也といへる思ひやられ侍る野㊟（わざとならぬ）㊟とりつくろはぬ其まゝの體也諸㊟上のきらゝかに應ワウず句

心あるさま　㊟兩說有㊟一義には態とつくろひてうへなしたるにはあらねどさすがに心あるやうにてむさ〳〵とはなきていなり文㊟をのづから生る

草心ありてうへたるさまに見ゆるはよき人の住給へるとおもへばと也全●又一義には木草の作てためゆがめするは非常の物なればとて不便なる事ならずやされはそれをおのが性のまゝにておくは心あるさまと也盤●前説の直(スナホ)なるにしかず

すのこ　●簀子(サクシ)と書竹椽などなり　頭書云▲宇治拾遺にうしろのゑんにかゞまり居たり侍まいりたるかと問せ玉へば南の簀子に候よし申せばとありこれにてよくしられたり句

すいがい　●透垣と書すきのある垣也諸　頭書云▲源氏に竹のすいがいとも云り木にても竹にてもかろ〲と垣をしたる也文▲末摘花にすいがいの只少し折たるかくれの方に立より給ふにと有句

たより　●次々のたよりよく也諺

うちある　●常にある也諺●わざとならず有心也盤

調度　●諸道具を云諸　頭書云▲小學外篇に孔明の詞を引けり其略云別無ニ調度ーと句讀云調度猶レ言ニ區畫ー也とあり句▲東鏡などに調度懸といへるは武家にての事なるゆへに弓持の事なり公家などにては烏帽子懸をもいふべしすべてそれ〲の手道具也

昔覺て　頭書云●枕草紙に昔は覺てこと成事とあり句

やすらか　●古風にてかろ〲としたる心也文

心にくし　●主が心にくしとなり盤

〔第二節〕●よき人のと云より見ゆれまでなり●山案此節は上節に家居のつき〲しくあるべきことをいへるをうけてよき人の住居はさしてことなる事もなけれ共心にくゝうらやましきものと云て人たるものは平生の志が肝要なりといましめん爲なりされば劉禹錫陋室銘云山不レ高有レ僊則名水不レ在レ深有レ龍則靈斯是陋室惟吾德馨なりといへり叉孔子も何陋之有んとの玉へりされば家居に美つくさすとも簡約にして肝要也前ニ段目の所狭さましたる人を悪みしことなど可ニ思合ーされば俗語にもたふとひ寺は門から見ゆるといへり

おほくのたくみ(工の字)の心をつくしてみがきたて唐の大和のめづらしくえならぬ調度どもならべおき前栽の草木迄心のまゝならずつくりなせるは見る目もくるし

くいとわびしさてもやはながらへ住べきまた時の間の煙ともなりなんとぞうち見るよりもおもはるゝ

おほく　◉大勢の大工なり

たくみ　頭書云▲山案諸工總名也俗云大工木工番匠匠人木匠工匠並同し昔は飛彈の國より出づ故に飛彈の工と云ふ

心をつくして　◉手おもき彫物くみ物に心を盡すと也全◉二重に見たるがよき也少の工さへあるに多きはあしくあら〳〵作るさへあるべきに心をつくしゝはあしきことなりとこまかに書たるなり盤

大和　◉大和は日本の惣名也　頭書云▲此國をやまとゝ云ふ山案に先人の云傳は山跡山戸山止の三說なり▲善隣國寶紀云山迹昔天地始分泥土未レ乾人往來以二山間一爲レ迹而人跡多故也又曰二山止一蓋居住曰レ止此時皆居レ山故也▲又日本書紀釋云大和國草昧之始未レ有二居舍一人民唯據レ山而居仍曰二山戸一云々▲もと大和と云は今云大和國のことなるを日本を總て大和と云は今云ふは神武天皇東征し玉ひて天下一統の後大和國に始て皇都を建て居し玉ふによりて日本をすべて大和と云今例せば異朝の天子周地より出で玉へば天下皆周といひ漢より出玉へば天下皆漢といふが如し▲又神道秘說には耶摩騰と書又耶的と云ふされとも今略す口傳に可二授與一▲さて大和の字に書替しは三十二代用明天皇より漢字の大和の字を假て書也其心は神武天下一統して敵方も和睦したると云意にて大に和すると書也但し上古は漢字なき故に京ノ町と云文字を以て書也三十代欽明の御宇に漢字わたれりさて大和と云字は易經に有されば大和と云詞は神代よりの唱也大和と書し意は神武の時こと漢字に書かへしは用明の時の大和の字の出處は易經也と加樣に可二料簡一これやまとゝ云唱をかりて付しもの也是に就て假字眞字と云ふ有り事永き故に今爰に略す

えならぬ　◉前段のえならぬとは違へり爰は緣ならぬなり諺◉假名に書付にはねる字をにと書し例多し又えにといふを下略してよめる歌もあり

調度　◉無用の器物をあつめおくなり說◉ならべ置にて澤山にある心也少にてもよからぬにと云意なり是も二重に見たる心なり盤

草心ありてうへたるさまに見ゆるはよき人の住給へるとおもへばと也全●又一義には木草の作てためゆがめするは非常の物なればとて不便なる事ならずやさればそれをおのが性のまゝにておくは心あるさまと也盤●前説の直なるにしかず

すのこ　●簀子と書竹椽などなり　頭書云▲宇治拾遺にうしろのゑんにかゞまり居たり侍まいりたるかと問せ玉へば南の簀子に候よし申せばとありこれにてよくしられたり句

すいがい　●透垣と書すきのある垣也諸　頭書云▲源氏に竹のすいがいとも云り木にても竹にてもかろ〳〵と垣をしたる也文▲末摘花にすいがいの只少し折たるかくれの方に立より給ふにと有句

たより　●次々のたよりよく也諺

うちある　●常にある也諺●わざとならず有心也盤

調度　●諸道具を云諸　頭書云▲小學外篇に孔明の詞を引けり其略云別無二調度一と句讀云調度猶レ言二區畫一也とあり句▲東鏡などに調度懸といへるは武家にての事なるゆへに弓持の事なり公家などにては烏帽子懸をもいふべしすべてそれ〳〵の手道具也

昔覺て　頭書云●枕草紙に昔は覺てこと成事とあり句

やすらか　●古風にてかろ〳〵としたる心也文

心にくし　●主が心にくしとなり盤

〔第二節〕●よき人のと云より見ゆれまでなり●山案此節は上節に家居のつき〴〵しくあるべきことをいへるをうけてよき人の住居はさしてことなる事もなけれ共心にくゝうらやましきものと云て人たるものは平生の志が肝要なりといましめん爲なりされば劉禹錫陋室銘云山不レ高有レ僊則名水不レ在レ深有レ龍則靈斯是陋室惟吾德馨なりといへり又孔子も何陋之有んとの玉へりされば家居に美つくさすとも簡約にして肝要也前二段目の所狹さましたる人を惡みしことなど可二思合一されば俗語にもたふとひ寺は門から見ゆるといへり

おほくのたくみ（工の字）の心をつくしてみがきたて唐の大和のめづらしくえならぬ調度どもならべおき前栽の草木迄心のまゝならずつくりなせるは見る目もくるし

くいとわびしさてもやはながらへ住べきまた時の間の煙ともなりなんとぞうち見るよりもおもはるゝ

おほく　●大勢の大工なり

たくみ　頭書云▲山案諸工總名也俗云大工木工番匠匠人木匠工匠並同し昔は飛彈の國より出づ故に飛彈の工と云ふ

心をつくして　●手おもき彫物くみ物に心を盡すと也全●二重に見たるがよき也少の工さへあるに多きはあしくあら〳〵作るさへあるべきに心をつくしゝはあしきことなりとこまかに書たるなり盤

大和　●大和は日本の惣名也　頭書云▲此國をやまとゝ云ふ山案に先人の云傳は山跡山戸山止の三說なり▲善隣國寶紀云山迹昔天地始分泥土未レ乾人往來以二山間一爲レ跡而人跡多故也又曰二山止一蓋居住曰レ止此時皆居レ山故也▲又日本書紀釋云大和國草昧之始未レ有二居舍一人民唯據レ山而居仍曰二山戸一云々▲もと大和と云ふは今云大和國のことなるを日本を總て大和と云は今云ふは神武天皇東征し玉ひて天下一統の後大和國に始て皇都を建て居し玉ふによりて日本をすべて大和と云今例せば異朝の天子周地より出で玉へば天下皆周といひ漢より出玉へば天下皆漢といふが如し▲又神道秘說には耶摩騰と書又耶的と云ふされとも今略す口傳に可二授與一▲さて大和の字に書替しは三十二代用明天皇より漢字の大和の字を假て書也其心は神武天下一統して敵方も和睦したると云意にて大に和すると書也但し上古は漢字なき故に京ノ町と云文字を以て書也三十代欽明の御宇に漢字わたれりさて大和と云字は易經に有されば大和と云詞は神代よりの唱也大和と書し意は神武の時こと漢字に書かへしは用明の時の大和の字の出處は易經也と加樣に可二料簡一これやまとゝ云唱をかりて付しもの也是に就て假字眞字と云ふ有り事永き故に今爰に略す

えならぬ　●前段のえならぬとは違へり爰は縁ならぬなり磐●假名に書付にはねる字をにと書し例多し又えにといふを下略してよめる歌もあり

調度　●無用の器物をあつめおくなり說●ならべ置にて澤山にある心也少にてもよからぬにと云意なり是も二重に見たる心なり盤

前栽の草木まで　●わざとならねどゝいふたる裏なり枝をため葉をすかし草木の自然ならぬさまなり壽

見る目もくるしく　●心なき草木とはいへど草木もさぞ苦しく思はんとわきより見るもくるしきと也●又說は草木は非情の物なれば何とも思ふまじき也さやうにする主の心をくるしまんとの義なり盤

いとわびし　●かなしく思るゝなり諸

さてもやは　●此やはの詞事をば問かけて又打返したることばなり句　頭書云▲此やはの詞は「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見へね香やはかくるゝのかやと同じ句

ながらへ　●久しくながらへ住べきがいやながらへすむまじきといふてには也●さきにかりの宿とは思へどゝ云に應じたる詞なり文　頭書云▲白樂天履道居詩莫レ嫌地窄林亭小莫レ厭家貧活計微多少朱門鎖ニ空宅一主人到了不ニ終歸一野

時の間の煙　●多の工といふに對して時の間の煙といへり出來る時は大儀にてほろぶる時は時の間の煙なりといひてはかなき事をいへりやけぬさきより思ふなり盤　●時の間の字心を付べし參　頭書云▲吳融廢宅詩云不ニ獨凄涼眼前事一咸陽一火便成レ原野　▲阿房宮賦云楚人一炬可レ憐焦土參

うち見る　●かりそめに見るなり諺

〔第三節〕●をほくの工より思るゝまでなり●山案上節にはよき人の住家をあらはしこゝにては無益なる家居の體を述たり

大かたは家居にこそことざまはおしはからるれ

大かた　●大かたといふに心を付べし不殘しるゝといふにはあらず說

家居にこそことざまは云々　●家居にて亭主の心ばへも大略は推量せらるゝものなればつき〲しくあらまほしき物ぞとおしへたる詞なり文　頭書云▲孔聖全書云孔子曰相レ馬以レ輿相レ士以レ居弗レ可レ廢說　▲山案家語云孔子曰不レ知ニ其子一視ニ其父一不レ知ニ其人一視ニ其友一不レ知ニ其君一視ニ其所レ使不レ知ニ其地一視ニ其草木一

〔第四節〕●大かたよりはからるれまでなり●是上を沢し下を起す詞なり此次に家居にてことざまを

推量たる物語を書つらねんとていへる詞なればなり壽●山案此一句尤後人のいましめなり讀者心を付て味ふべき也偖次の後德大寺より別段になしたる本野句盤あり今一段になす本壽文諺參にしたがふなり

後德大寺の大臣の寢殿に鳶ゐさせじとて繩をはられたりけるを西行が見て鳶のゐたらん何かはくるしかるべき此殿の御心さばかりにこそとて其後はまいらざりけると聞はんべるそ綾の小路の宮のおはします小坂殿の棟にいつぞや繩をひかれたりしかば彼ため群居し思ひ出られ侍りしそまことや烏のむれゐて池の蛙をとりければ御覽しかなしませ給ひてなんと人の語りしこそ扨はいみじくこそと覺えしが德大寺にもいかなるゆへか侍りけん

後德大寺の大臣　●實定公也　頭書云▲山案に鎌足十八代の孫左大將正二位左大臣實定公也大炊御門右大臣公能の御子也後鳥羽院建久二年六月に出家し玉ひて同閏十二月に薨す

▲系圖　師輔公まではニ段目にくわし

天兒屋根廿一代目也

大織冠—淡海公—房前—眞楯—內麿—冬嗣—

—良房—基經—忠平—師輔—公季閑院一流上祖從一位太政大臣諡ニ仁義公ニ

—實成正二位中納言—公成從二位權中納言—實季正二位大納言—公實從二位權中納言

—實能從一位左大臣—公能正二位右大臣—實定歌人檢別當左衛門督皇后宮大夫左大將正二位

左大臣號ニ後德大寺ー

寢殿　●只御殿なり文●常に住給ふ處盤　頭書云▲字彙云寢堂室也諸▲武林卓氏曰人君所レ居者也謂ニ前殿ー也朝ニ諸侯群臣ー之處周曰ニ路寢ー漢曰ニ正殿ー又正寢也參▲井蛙抄云德大寺に歌の間と云ふ所あり寢殿の西角間なり是後德大寺左府の西行に對面せられける所なり壽

鳶ゐさせじ　●寢殿の棟に繩を張り鳶をとまらせぬため也全　頭書云▲山案陶隱居云鳶鴟類善飛ニ騰江湖間ー捕レ魚食レ之云々されば鴟の類といへばこれ惡鳥なり鴟鴞は人家に入て鳴ときは凶なりと古今云傳ふ此故に世俗には鳶は怪鳥なりとて是を忌也其上又詩經に鳶鳴則風生風生則塵埃起といへり加樣の心持にて後德大寺殿のきらひ玉ひて繩をはられけるか其外に又故ありける歟

西行　頭書云▲東鑑六云佐藤兵衛憲淸法師今號ニ

西行ハ保延三年八月遁世云々即秀郷九代嫡孫陸奧守秀衡入道者上人一族也野

▲系圖　房前までは二段目にくわし

大織冠―不比等―房前―魚名河邊左大臣正二位―藤成伊與守從四下―
―豐澤備前守從四上―村雄河內守從五上―秀郷武藏守從四下世人號ニ俵藤太ト―千常―
―左衛門尉從五下―公脩內舍人―文行左衛門尉從五下―公光相摸守從五下―
―公淸佐藤左衛門尉―季淸左衛門從五下―康淸左衛門―憲淸歌人依ニ發心出

家ノ法名圓位後西行大寶房鳥羽院下北面左兵衛尉從五下建久九年二月十五日死

此殿の　●實定公也殿といふは名を諱て宮殿をよぶなり參

さばかり　●左計共大小共書それほどにてそとの心也諸●それほどなる心底なれば奧ふかきことなしと見さげたる也參●一說に鵄いたらんに何事の出來べきことはりもなきに愚なる義との心也●一說に鵄か羽をやすめなどするを慈悲もなく有といふ事をさはかりと云と也盤

其後はまいらざりける　●西行がまいらざりしは不ㇾ如ㇾ己者を友とする事なかれとの心ばへならん說●此處は彼家居にてことざまをはかりし證文也文

きゝはんべる　●きゝはんべるといひて下を起すぞ說●西行のあまり氣短なることなり其子細はと云はんために小坂殿を後にいへり參

綾小路宮　●性惠法親王なり　頭書云▲本朝皇胤紹運錄云性惠法親王號ニ綾小路宮ー是龜山院十三皇子妙法院道敎之御弟子也兼好と同じ時代なればもし是にやおはすらん文

▲系　圖

龜山院仁皇八十九代―性惠法親王

小坂殿　●綾小路宮の御所の名なるべし文

いつぞや　●時をさゝぬなり參

彼ためし　●後德大寺のためしなり諸

思ひ出られ　●西行がよふに兼好も綾小路の宮を見かぎりたるにとなり盤

まことや　●人の語りし事を云ひ出るとてまことにやあらんとすこし疑よふの時云出る詞也源氏に多き文體也文●文に蓋なと云意なり盤

烏の　頭書云▲山案格物論云烏鴉別名有ニ小而多

群腹下白者一名二鴉烏一反二哺其母一者名二慈烏一池の蛙を云々　頭書云▲山案格物論云蛙蝦蟆也蝦蟆皮上腹下有二黒班點一脚短能跳接二百虫一解レ作二鳴叫一▲白樂天大嘴鳥詩探レ巣呑二燕卵一入レ簇啄二蚕虫一とあれば蛙をとるのみにあらず野

御覧じ　●宮の御覧じて也参

かなしませ　●見るにしのびざる仁心あれば也参

扨は、●人の語るをうけてそれなればよきことぞとなり諸

いみじくこそと覺えしが　●縄をはられししさいをきゝて性恵法親王の御心ざしを兼好感じ奉るなり全 ●覺えしかのかの字淸でよむべし諸 ●哉の下略にて嘆息の詞也参　頭書云▲（覺えしか）凡そかの字に哉と通するもあり又疑のがになるもあり諺

▲こゝのかの字はかなのこゝろ古今遍照僧正「あさみどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳かこのかと同じ句

德大寺にも云々　●德大寺殿を西行が見かぎりたれども小坂殿にて思合すれば德大寺にもいかなる故かあらんと也全 ●西行がそしりておとしたるを助て書り殊勝の事也壽　頭書云▲此詞は西行をそしりたると見て德大寺にもよきことにてもあるべきに西行がよくとひきかぬは麁相なると云ふ説あり是はあしゝ爰のこゝろはものは一筋にいはれぬことなりと云ばかりにかく云と見るべきなり盤 ▲山案或說に此結句德大寺をたすけて書し事は勿論也西行をばそしつて書にはあらずいかんとなれば西行は世捨人なれば萬するすみにして德大寺殿の縄を見て其子細を問きかずして見かぎりしは似合たるとなり何んぞや世捨人などの世にかゝはりて其わけを細に問んや尤卒爾なるやうなれども世捨人のかやうに物にかゝはらぬは古今ためしをゝき事なり其上西行は兼好より上にたゝん道德の人なれば兼好いかでかこれをそしらん小坂殿の義をば西行へは引合すまじたゞ德大寺殿をたすけてものを一偏に心得べからずとのために書り

〔第五節〕●後德大寺より故か侍りけんまでなり●上節の大かた家居にこそことざまはをしはからるれと云ふをうけて書たり家居にも又よらずと云事を末に書て大かたと云意を明せり一偏にはものは

なき理りを明す盤

〔一段之統論〕●此段畢竟の心は家作る人に成ては外より見てあしく推量れぬやうにせよ又外より見る人には其家居にすこし見にくき所ありともそればかりによりて偏に亭主を見かぎる事なかれとの心なるべし文●此段はじめには家居にて人の心もしらるれば家造りを惡くはすなと云ようなれども畢竟は假の宿りなればたゞやすらかなるべきかよきといふ事なり此事人間の肝要たれば居無レ求レ安とみじかき論語に三處まで孔子の宣ふなり貞

〔十一〕神無月の頃栗栖野といふ所を過てある山里に尋入事侍しに遙なる苔の細道をふみわけて心ぼそく（神無月の比なれば文）住なしたる庵あり木の葉にうづもるゝ筧の雫ならでは露おとなふ物なしあか棚に菊紅葉など折ちらしたるさすがにすむ人のあればなるべしかくてもあられけるよとあはれにみる程にかなたの（あなたの庭也文）庭におほきなる柑子の木の枝もたはゝになりたるがまはり（廻字）をきびしく（嚴字）かこひ（圍字）たりしこそ少事さめて此木なからましかばと覺えしが

神無月　●十月の異名なり此注末の段にくはし●神無月と時節を書出す事心有べし山中の物さびしく感情もふかき時節なり盤

栗栖野　頭書云▲山城醍醐の邊なり又沙門常曉山城國小栗栖路傍棄子也と釋書にありと云々▲又宇治の邊にも有▲萬葉に「さし杉のくるすの小野の萩の花散なん時に行てたむけん野

苔の細道　●是より其所のさびしき景を云り増鐵●分入る道のありさまなり常に人の通ぬ體也ふみわけて入て見れば心ぼそく住なしたる庵ありと見る說あれどこれは庵にすむ人がふみわけて入て心ぼそく住めるよしなり盤●道もなき深山を始て開れたると云義也句

庵あり　頭書云▲釋名云草以爲ニ圓居一曰レ庵庵奄也以ニ自覆奄一也文▲韓退之云士之行レ道者不レ得ニ於朝一則山林而已矣山林者士之所ニ獨善自養一而不レ憂ニ天下一者之所ニ能安一也如有下憂ニ天下一之心上則不レ能矣說▲山案孟子云隱居以求ニ其志一行レ義以達ニ其道一▲又班嗣云漁ニ釣於一壑一則萬物不レ奸ニ其志一栖ニ遲於一丘一則天下不レ易ニ其樂一

筧　頭書云▲上東門院の中將の歌に「思ひやれ問人もなき山里の筧の水の心ぼそさを句▲風雅集に圓光院入道關白山家をよみ玉ふ歌に「秋の風筧の水にきゝかへて都の人の音信もなし

露　●露とはすこしの義也諸●山案雫ならでといふにひとしほ縁ある辭なり

おとなふ物なし　●筧の雫の外は露程も音信人なきと也文

あか棚　●閼伽とも阿伽とも書水の梵語也●佛具をすゝぎなどする水をつかふ棚なり盤　頭書云▲あかとは水なり天竺の詞なり佛法なる故に其國のことばを用るなり閼伽とは梵語也漢語欝勃蒸ニ煮雜香一以ニ其汁一供ニ養佛一也天竺法に佛を請するには以ニ本清淨水一洗ニ浴無垢身一矣盤

菊紅葉なゝど　●樒にかぎらず時の草木の花を奉ることなり盤　頭書云▲源氏榊卷に法師ばら閼伽奉るとてからゝとならしつゝ菊の花こきうすき紅葉なゝと折ちらしたるもはかなけれどこのかたのいとなみはつれゝならず後世はた頼もしげなり云々是は源氏の雲居寺に居玉ふときのことなり盤

すむ人云々　●すむ人もなきかと思ひける折ふし菊紅葉などの折ちらしたる跡あるにて人ありとしるなり諸

かくもてあられ　●斯の字かふしても也説●被ゝ在と書説　頭書云▲草庵集に「年を經てあれゆく宿の板庇かくても世にはあられふる也文

あはれに見るほとに　●かく山居してもすめばすまるゝものぞと氣好も殊勝に見る也參

柑子　頭書云▲山案韻會柑姑南切音甘橘屬▲周處風土記云柑橘之屬滋味甜美特異者也有ニ黄者一有ニ頳者一謂ニ之壺柑一即乳柑也

枝もたはゝ　●撓共裊共嫋共書たはむといへる義もたよはき心も有句●こゝにては枝もたはむほどなりたる也　頭書云▲古今和歌集に「折て見ば落そしぬべき秋萩の枝もたはゝにをける白露野

きびしくかこひ　●木實を惜みし類　頭書云▲くだものを惜もの世にをほかりもろこしの和嶠がすもゝは實をかぞへて錢をはたり王安豊が楊梅は人の栽んことをきらひて實をきりてうる陸龜蒙か橘

は野人にわかたず王倹が帳下には柑子たゞれぬ皆是愛情する所あれどもいやしからぬには非ず日本にも萬壽の比六波羅密寺の沙門講仙庭前に橘をうへて常に愛し弄びしかば死後に蛇となりて橘樹の根をまとひてありけるとなん野 ▲長明發心集一曰横川の尊勝阿闍梨楊範と云ける人目出度紅梅をうへて又なき物にして花盛には偏に是を興じつゝ自人の折も殊にをしみいなみける程にいかゞ思ひけん弟子なども外へ行て人もなかりける隙に心もなき小法師のひとり有けるを呼てよきやある持てこよと云て此梅の木を土ぎはより切て上に砂を打散して跡かたもなくなりたり弟子歸て驚きあやしみて故を問ければ唯よしなければとぞこたへけるこれは皆執をとゞめることを恐けるなり句

少事さめて、●此少の字偏に見おとさぬ心あり先に大かたはといへる心に相應せり文 ●他所ならば大きに事さめぬべきが所の哀によりて少し事さめたるよしなり盤 ●此柑子の木を用心して人にとられまじきとてきびしく圍たるにて其人の心執着を放下せぬよと淺間敷事覺て思はるゝなり參

此木なからましかは　●此木なくばいよ〳〵よからん物をと也増鐵

覺えしが　●此かの字清で哉の心に見ると濁りて疑の心に見ると兩說なり但うたがひの方に見るがおもしろきぞ疑に見る說には●此段も先段と同じく人の家居に就て主の心をしる事をいへば柑子の木にて少事さめて覺ゆれ共又綾小路の宮の例を思合れば此きびしくかこひたりしも如何なる故か有つらんと前段にあてゝ見るべき事也諺又參全も同じ ●哉と見る說●此木なくば此閑居の事さめまじき物をと覺しかなと也文又句貞等同

〔一段之統論〕●此段も前段と同類なり柑子木をかこひたると德大寺殿の繩をはられけると皆家居につきて事ざまをはかりたるなり壽 ●此段も上の餘論也見たるところは興さめたることとなるが是もよく聞たらんにはいかなることのあらんと云意也盤 ●山案草木を愛するは執を離れぬあしきことゝはいへどもこれ以て惡しきと云ひ難し淵明は菊を東籬のもとに愛して達磨の骨髓を得周茂叔は蓮を愛して道を悟り玉へり又我朝花山法皇御遁世後紅梅

をば愛し玉ひけるを或女王これをとがめ玉へば法
皇勅には常の心にて花を見るには非ず紅梅に實相
あるを觀ずるとて則御製「色香をも思ひも入れず
梅の花常ならぬ世によそへてぞみる又きびしくか
こひしも山林の法禁は非常の盜人をふせぐそなへ
いにしへよりなきにもあらず物を踈にして置て盜
人にとられて盜人を恨んよりはとられぬやうにす
るがよかるべければ此處をば兼好か一偏に見落し
たるには非ず其上又いかなる故あらんもしれねば
なり

〔十二〕同じ心ならん人としめやかに物語しておかし
き事も世のはかなき事もうらなくいひなぐさまんこ
そうれしかるべきにさる人有まじけれざ露たがはざ山案露さいふよりこ
らんとむかひゐたらんはひとりあるこゝちやせんた
いまでを一節にして見よ
がひにいはん程のことをば實と聞かひある物からい
さゝかたがふ所もあらん人こそ我はさやはおもふな
ミどどあらそひにくみ さるからさぞともうちかたらは
ばつれ〳〵なぐさまめとおもへどげにはすこしかこ
つかたも我とひとしからざらん人は大方のよしなし眞實也
ごといはん程社あらめまめやかの心の友にははるか

隔の字
にへだゝる所のありぬべきぞわびしきや
同じ心　●我心によくかなひたる斷金の友の事也
　頭書云▲公羊傳云同レ門曰レ朋同レ志曰レ友▲周禮
大司徒注同レ師曰レ朋同レ學曰レ友▲易繫辭曰二人同
レ心其利斷レ金同心之言其臭如レ蘭▲漢書勢交者近
勢盡而亡財交者密財盡而踈色交者親色衰而絕この
三つの意をば歌に詠せるあり勢一殿守のとものみ
やつこ他所にして拂ぬ庭に花そちりしく財「あは
れげにうき時つるゝ友もかな人の情は世にありし
ほど色「忘じとたのめし人はありときく云し言の
葉いづちいにけん說
しめやかに　●靜字しづかなるこゝろ諸
おかしき事も　●世上の面白きことなり文
はかなき事も　●無常如幻の生のはかなきを云
うらなく　●ひへといふ意說●表裏もなき也心底
をのこさゝる義なるべし野　頭書云▲紅葉賀に我
もうらなく打語りなぐさめ聞てん物をとあり句▲
古歌に「夏衣我はひとへに思へども君の心にうら
やあるらん說
なぐさまん　●互に打かたらふこそなり

うれしかるべきに　●此段文意連續して節をわか
ちがたしされど心を以て分ち見ねばまぎらはしう
してすみがたしそのうへ諸抄區々にして一决しが
たし先文段には壽抄にしたがひて此段はよき友の
內にて同じ心なると少し違ひたるとを評論するな
りといへり又句解參考には心友面友を以ていへり
又諺解盤齋大全は上中下の三友をわかちて論ぜり
さればれし發端よりこゝまでを一節の心持になして可
レ見(山井案)●此一句は上品の友をいふ(全諺盤)●是まで
は心友のさまを述たり(句參)　頭書云▲(心友面友之
辯)明心寶鑑云古人結レ交惟結レ心今人結レ交惟結
レ面　▲楊子法言學行篇云朋而不レ心面朋也友而不
レ心面友也註曰匿レ怨仲尼之所レ恥面朋楊子之所レ譏
▲司馬光曰言朋友當下以二誠心一相與切磋琢磨上不
レ可下心知二其非一而不レ告但外貌相媚悅二群居一遊戲
相從飮食上而已(參)
さる人　●さうある人なり上をうけてなり(説)●决
前生後の詞なりさやうの人は有まじければ其外は
かく〳〵と云筆勢なり(盤)
露たがはざらん　●是より下品の友也(諺全盤)　●是よ
り面友の樣を述たり(句)●露たがはさらんとは少も
違はざらんとなり(野)●此所を身にかけて見るとむ
かふへかけて見ると兩說在わか身へとくとかけて
見る時はむかふのものゝ心にすこしもたがはぬよ
ふにと氣ををして也(諺全の說)●山案此說はむかひゐた
らんといふにかなふ●又むかふへかけて見る時は
此方の心に露程もたがはぬよふにあひしらひてむ
かひ居るなり友といふものは我相手になりて云ひ
なぐさむに我しだひなるはひとり有と同しとなり
(盤)●山案此說は獨ある心地と云によくかなふ　頭
書云▲同じ心の友を立かへり云なり露もたがはぬ
同じ友と對ひ居て語らんは友を求し甲斐もなく只
一人ある心地やせんとなり聊たがふ所ある人こそ
互に爭ふ所もありてつれ〴〵もなぐさまめといはは
ん爲なり問露たがはざらんと向居たらんと云所を
面友と云說あり如何答此段兼好の友を求る心ばへ
偏になぐさむといふ所に在面友爺友の沙汰に及ぶ
べからずよく文意を味べし只たがひあらそふ人こ
そつれ〳〵なぐさまめと云んとて偏に同じ心にて
露たがふ所なき人とむかはんは友を求し甲斐なき

やうにやあらんとの心に見るべきなり文 ◉此所に論語の子曰吾與ㇾ回言終日不ㇾ違如ㇾ愚といへるを引ける説ありくるしからねども義理大きに相違せり能々吟味すべし全 ◉山案壽抄文段に論語を引けり此説不審也論語の意は孔子と顔淵と同じ心の友なることをいへるなり爰のたがはざるは態(ワザ)とつくろひたる體巧言令色の人にしてなるほどあしき友のこと也されば論語の如くの友ならば何ぞ兼好是をあしきとしてかくいはんや兼好世人にかはりて見所高き法師なるゆへにかく孔子顔回との様なる友をさへもつれ〲なぐさむためにはならずして獨ある心地やせんと云しといへるなりさりながら兼好もそれをきらふにはあらざること明し終にまめやかなる心の友をこのましく書とめしなり若し文の説によらばこの少しあらそふ友さへ少しかこつ方あつてあしゝまめやかの心の友といへる友は如何やうなる友を云ふにかあらん

こゝちやせん ◉山案露といふよりこゝまでを一節にしてみよ

たがひに ◉是より中品の友の事を論ずる也盤諺

物から ◉物からは物ながらなり其面友にいかほど氣に入らんとしてたがひにもつとももときくかひ有ものながら也參 頭書云 全此所は上の露たがはさらん子細を云也からと云詞を上へかへして見るべし諸抄に下へつゞけたるは誤なり互にいはんほどの事をば實と聞かひあるものから露たがはぬ友とは獨居たると同前にて友にはならぬと云也全

いさゝか ◉少の字すこしといふ義也説

たがふ所もあらん ◉山案此所あらんにて句をきると人こそにて句をきると兩説有先あらんにて句をきる説は◉句云互にいふほどの事をば尤と聞あふ間にもすこしは心にそむく事もあるならひといふ義なり句 ◉此時は人こそ我はと下へ付て見る言意は人こそとは其方こそといふ義也そなたにこそ左様に思はるれ我は左樣にやはおもふさやうには思はぬなどと心底をのこさずいひあらそふなり參句之意 ◉此説は少し詞のわけ聞えたるばかりにこそあれ文の抑揚更になし文

人こそ ◉山案人こそにて句をきる説は◉是より少あらそふ所ある友をいふなりまづ大かたは同じ

心の友に似てたがひにいふほどの事を尤ときくかひありながら少はたがふ所もある人こそはつれづれなぐさまめとの心也此たがふ所もあらん人こそといふこそのてにをは次の詞のつれ〳〵なぐさまめといふ所にかけて見るべし文是は義理におひておもしろし人こそを下へ付るは文の詞はよくきこゆれど義理すこしうとし說

あらそひにくみ　●此にくむは妬みにくむにあらずたゞすこしたがひにあらそふ心也文　●又說に●面友は心底和合せぬ故にやゝもすればいかり出てあらそひにくむ心生ずるなり參　頭書云▲孝經云士有二爭友一則身不レ離二於令名一▲論語子曰責レ善朋友之道也▲又曾子曰君子以レ文會レ友以レ友輔レ仁▲學記云獨學而無レ友則孤陋而寡レ聞說

さるから　●さうあるからはさうもあらんとたがひに道理をきゝわくるなり增鐵

なぐさまめとおもへど　●如レ此なる友は徒然のなぐさみともなるべきとおもへどゝ也諺　●山案互と云より爰迄を一節になして見るべし中品の友の事をいへりされはかやうにあらそふ友こそさびしさもなぐさまめとなりさりながら是も眞實にはなぐさめがたきとなり其慰めがたきやうすを次にいへり　頭書云▲互にと云よりこゝまでは再び友は心の友なるべきことを述たり句　▲此段に兼好の友といへるは畢竟此なくさむを本としていへるなり同じ心の友にも云なくさまんといひこゝにもつれづれなくさまめといへり心をつくべし文

げにはすこし云々　●實は心ひとしからぬ故にすこしかこつ方もあれば打とけたるやうにてもそこは悪に心あり參　●山案是より終迄を一節となして見るべし右にいへる友の事を惣論していへり●是より畢竟同じ心なる友を貴る義也諺　●又說是よりあらめ迄は心友面友にてもなく少しよき友の事をいへり句　●是より中の友をいへり全　頭書云▲横渠先生曰今之朋友擇二其善柔一以相與拍レ肩執レ袂以爲二氣合一一言不レ合怒氣加云々參　▲山案論語子游曰朋友數斯疏▲荀子云士有二妬友一則賢友不レ親▲景行錄云自信者人亦信レ之吳越皆兄弟自疑者人亦疑レ之身外皆敵國

我とひとしからざらん　●我と同じ心ならぬ人な

り諸　頭書云▲伊勢物語に「思ふ事いはてたゞにやゝみなまし我にひとしき人しなければ壽▲山案左傳云意合則吳越相親意不ㇾ合則骨肉爲ニ讐敵一大方のよしなし　●故よしもなき事世間の浮說なり全

いはん程社あらめ　●さして深からぬことを云んほどこそはさるからさそ共いひ慰んとの心也

はるかにへだゝる　頭書云▲此はるかにへだゝると云を前の少しかこつ方もと云にあたりて見るべしたとへば一毫のたがひも千里のあやまりとなる心也我とひとしき人にこそ少あらそふともさるからさぞと云ひことはりて終には我と同心になるべけれ少しにても互にかこつ方あるからは何とぞあらん折ふしは遙にへたゝりかはる所あらんとの心なり文▲一說に心の友とは外の人を伴んことをねがはず只我心を友としてたのしむには遙にへだゝりてわびしきやとなり說

ありぬべきぞ　●眞の同心の友と語んには遙かに隔りかはる所有て慰みがたからんぞ侘しき諸

わびしきや　●さびしくかこつ體也諺●わびしきやのやの字は疑のやにてはなし助語なり諸●又決定の詞句●山案實は少しよりは惣論也言意はさるからさぞ共かたらふ中品の友はもつともつれ〳〵をもなぐさむべけれどもそれさへすこしかこつ方のあらんほどに心の友には大きにへだゝるそ況や露たがはざらんとむかゐ居る友はとなり大全にはまめやかよりを相論といへり

〔一段之統論〕●此段は第十七段目の山寺にかきこもるといふを云んとての發端と見るべし其辨は末に記すべし心をなぐさむべきことを段々に云つゞけて十七段目に至て云結たり先此段は心の同じき友のなきことを云に就て上中下の三段の友の品を論じて上はなく下はありて甲斐なし中は少しは友となりて慰むたよりもあれど心の友とは大きに違なれば畢竟世には友なきことを云て次の段にて古人を友とするがつれ〳〵を慰によけれといへりさて此內に友を擇むべきのいましめを含めり尤心著て味ふべきものなり說

〔十三〕ひとり燈の下に文をひろげて見ぬ世の人を友とするこそこよなうなぐさむわざなれ文は文選のあ

はれなる巻々白氏文集老子のことば南花の篇この國のはかせどものかけるもいにしへのはあはれなることおほかり

ひとり云々　●獨といふ字肝心なり諸　●大勢はあしき心にてひとりと云耋もあしき心にて灯の本と云盤　●前段に心友は世になく面友は伴ふにたらぬ子細を書のべしよりうけてとかくひとりつれ〳〵になるがよきと也こゝに三の閑寂なる義有獨と云は人の閑寂なり燈下は晝夜のうちの閑寂文を見るは人事の閑寂なり参　頭書云▲韓退之符讀二書城南一詩云時秋積雨霽新涼入二郊墟一燈火稍可レ親簡篇可二巻舒一野　▲王荊公勸學文云窓前看二古書一灯下學二書義一説　▲山井案古語に閑居可二以養一志詩書足二以自娯一

文　●文とは書籍なり諸　頭書云▲和語に文をふみといふにあまたの義あり▲一義には蒼頡鳥の踏あとを見て文字を製するゆへにふみと訓ずみとむとは五音相通の故なり今の世俗の語に文字のさだかならぬをは鳥のふみしやうにかきたりと云ふも是なるべし▲又一義にふみとは含と云ふ中略してふみと訓す義理を含むゆへなり是も相通の意なり▲又一義にふみにじるなどゝ云義は日本紀纂疏に見へたり参

ひろげて　●虎關の聚分韻略の序には繙の字を書野槌には攤と展の字を用ひたり参　●ひろげてといふにて切て見るべしひろげてといふにて見る心をもたせたり盤

見ぬ世の人を友とす　●いにしへの人を友とする也諸　●人とは聖人賢人也壽　頭書云▲山案枕草紙にめつらしと云ふべき事にはあらねど文ぞなを目出度物なれはるかなる世界にある人のいみしく覺束なくいかならんと思ふに文を見ればたゞ今さしむかひたるやうに覺ゆるいみじき事也かしとあり▲新古今集に「言の葉の中をなく〳〵尋れば昔の人に逢見つる哉古　▲又歌に「とぢをきし枕草紙の上にこそ昔の人の夢は見へけれ盤　▲又「主や誰見ぬ世の色をうつし置て筆のすさみにうかむ面影説
▲山案孟子萬章下云以レ友二天下之善士一爲レ未レ足又尙二論古之人一頌二其詩一讀二其書一不レ知二其人一可乎是以論二其世一也是尙友也▲袁了凡曰然由二誦讀一

而潛レ神冥會直與ニ古人一觀ニ面於曠世之前ニ不下徒論ニ其詩書ニ已上也▲司馬溫公獨樂園記云迂叟平日讀レ書上師ニ聖人ニ下友ニ群賢一野▲朗詠云鶴籠開處見ニ君子一書卷展時逢ニ故人一文▲許尹山谷詩序云任君子淵博極ニ群書一尙友ニ古人一盤

こよなう ●無超と書こゆることなき也八雲にはるかにといふぎ也野●書物にむかふてなぐさむは遙にすぐれて是をこす樂はなきと也參●こよなうは前に注

なぐさむ ●前段にいひなぐさまんと云ひつれづれなぐさまめといひて爰に無超慰むとかける文章奇妙にや兼好一世の慰此段に有と見えたり文頭書云▲兼好一代のたのしみ此所にありけるにや讀耕林子が筆にも彼圖知ニ讀書之樂一也と云膾餘錄にも惟有ニ書燈照ニ岑寂一と賛し扶桑隱逸傳及古法眼探幽などが繪かけるにもなべて此所とみるべし參

文は ●文はのはの字上の文といふ字にうけていへり句●さて其の友となる文は何々といへば諸

文選 頭書云▲梁武帝の子昭明太子の撰する所なり周の末より六朝までの詩文をあつむ三十卷あり唐李善是を注して世にひろむ李善か本に呂延濟劉良張銑呂向李周翰五人の注を加て六臣註と名付く六十卷あり李善か注なきを五臣註とす日本にてむかしより讀來る中に殊に菅家の點じ玉ふをよしとす野

あはれなる ●凡和語にあはれといへる詞哀傷の義殊勝の義或は面白といへる心にも通ひあつはれといへる義もあり爰にては哀傷をのけて何も叶ひ侍る句

白氏文集 ●白樂天が文集也 頭書云▲唐の白樂天が集なり若き時より長慶年中までの詩文を集て白氏長慶と名付く五十卷にて五帙とす元稹か序あり長慶以後のを加て七十五卷とし白氏文集名付今の世に行るゝは七十一卷あり十帙とせり定家卿の詠歌大概にも白氏文集第一第二の帙を常に握翫すべしとあり諸

老子のことば ●老子經なり●老子のことばに篇と對して書り增鐵●ことばの字と篇の字とに心を付べし老子は五千餘言あり一字を一言とするなり東坡が五百言といふがごとし其五千言の言の字を

やはらげて老子をばことはといひ莊子は卅三篇ある故に南花の篇といふなり老子は八十一章あれど後人の作意なる故に七十二章にわかつ家もありしからば老子の心に章をわかつことなき故に孝子をば章といはずしてことばといふこと兼好の妙筆也參　頭書云▲獻齋が老子口義發題を案するに老子姓李氏名耳字伯陽楚國苦縣人也周に仕て藏室史となる周室已に衰て老子西方に遊て散關を出んとす關令尹喜異人たることを知て書を顯しむ終に上下篇五千言を顯參

南花の篇　●莊子の書　頭書云▲莊周字子休宋人也隱遁して書を著す皆老子道德の意に本つく三十三篇あり南花眞經とも名付く野　▲新唐書云玄宗天寶元年詔封㆓莊子㆒爲㆓南華眞人㆒▲廣輿記云莊周遂隱㆓曹州之南華山㆒因名㆓其經㆒曰㆓南華㆒

此國のはかせ　●此國とは日本の事也上にあげたる品々は皆人の國の事なる故にこゝに此國とへだてゝ書り參●(はかせ)博達の士といふ心也あながち文章博士の官に限らす壽　頭書云▲山案博士とは官の名なり▲漢官儀云博者博通㆓古今㆒士者辨㆓於然否㆒▲日本の博士どもの書る文集には懷風藻一卷　經國集廿卷　本朝文粹十四卷　續本朝文粹十四卷　文華秀麗集一卷　無題詩十一卷此類多し又一家にては野相公が集菅家文章　善相公集和氏か文集　江吏部集　橘在列集　源順集などの類なるべし野

いにしへの　●此古の字に心をつくべし文●今の人の疎學なるをあらはす諺●古代を慕ふ詞也全

〔一段之統論〕●此段は前段をうけて面友は伴ふに不足心友はあるまじければとかく當世の友を斷て只燈下に古書をひろげて古人を友とすべしと思へる心尤殊勝に覺へ侍る句●此段に儒書と内典をばあげず文選文集と莊老の書を戴られたるは兼好の心に面白と思るゝか此草紙にも專らこれらの心をあらはせり閑居など好む人の學んには尤似合たりかやうの事をしらねば同じ眼力をむなしくつくすものなり學者の爲にはよきたからと申べきものなり貞●枕草紙にもふみ文集文選はかせの申ぶみと云々文

〔十四〕和歌こそ猶おかしき物なれあやしのしづ山が

つのしわざもいひ出ればおもしろくおそろしき猪の
しゝもふするの床といへばやさしくなりぬ
和歌　頭書云▲和歌は神代よりの風儀にて此國の
道也萬葉古今を始として故人の說其德あげてかぞ
へがたし全▲山案古今序に力をも入ずして天地を
うごかし目に見へぬ鬼神をもあわれと思はせ男女
の中をもやはらげたけき武士の心をもなぐさむる
は歌なり此歌あめつちのひらけはじまりけるとき
より出來にけり▲又深草隱士元政の集云我聞レ之
和歌者天地自然之聲萬物之情也感二於心一而形二於
聲一其唯述レ志之言耳不下以二僞飾一爲上レ事矣
猶おかしき　●猶の字味ふべし上段の文選文集な
どにあたりて見るべし壽
あやしの　●怪の字●奇怪の心もあり又いやしき
心もあり諺●彼田返し草ぎり炭やくものゝ有樣は
都の人の目には人か何ぞとあやしまるゝ物なれば
怪しのと云り文
しづ山かつ　●賤男賤女といひてすべていやしき
者也參●山賤共山兒共書木こり草かりの類なり諸
しわざも　●かれが所作を云ふ也參

いひ出ればおもしろく　●歌の詞にとりなせば諺
頭書云▲いやしきものゝするわざも歌によめば
面白きやしやにきこゆるものなり田夫見レ月と云
題にて「いとまなみ夜田かる賤が浮雲のかゝるを
りにや月を見るらん曾禰好忠全
ふするの床　頭書云▲八雲御抄に寂蓮法師が云け
るは歌のやうにいみじきものなし猪のしゝなどい
ふをそろしきものをふするの床など云ひつればや
さしきなりましてやさしきものをおそろしと云ひ
なすは無下の事なりと云々此詞にて兼好も書るな
るべし壽▲後拾遺に和泉式部が歌に「かるもかき
臥猪の床も寢をやすみさこそねられめかゝらずも
哉文▲又龜山殿七百首に御製「年ふれば臥猪の床
もへだたらでなれぬる山の奥の庵かな諺
やさしく　●是對にかきし文法なり盤
「第一節」●和歌こそと云よりやさしくなりぬと云
迄なり此段五節に分て見るべし●此節は前の
段の文集文選莊老の書を友とする心をうけて和歌
の德は猶それらにまさりてをもしろき事をいへり
文●和歌こそ猶をかしきものなれと書出せるはげ

にもことはりにて侍るよき道なれども其人にかなはぬこともあるを和歌は御門より公家武家男女雜人までも似あはすと云ことなし尤此國の風俗なればなるべし貞

此ごろの歌は一ふしおかしくいひかなへたりと見ゆるはあれどふるき歌共のやうにいかにぞや言葉の外にあはれにけしき覺ゆるはなし

此頃の歌は　●新古今以後兼好時代を指べき歟全　●此頃といふに口傳あり兼好時代は頓阿をはじめ名人おほくて中古西行定家卿等の後歌道又中興の時節なりしかれどもむかしには不レ及なるべし貞

一ふし　●新しき作意を一ふし也參　●歌一首のうちにはいかなる惡敷歌にも面白きところ有ものなり歌のとくなり全

いひかなへたり　●歌の體をもしろく云叶たりとは諸

ふるき歌共　●上古の歌なり諸　頭書云▲奥義抄云ときにしたがひて衰へゆく今の歌を古にならぶるに水火よりもことなるべし

いかにぞや　●いかなる事にてかくぞやととがめていふなり參　頭書云(言葉の外に)▲子貢は貧して樂むことを聞て詩を引子夏は詩を問て禮を後とすることを知也されば楊龜山曰非下得二之言意之表一者上能レ之乎商賜可三與言二詩者以レ此也和歌をよむものも又かくぞあるべき野　▲山案貫之が古今の序にも在原業平は其心あまりて言葉たらずしぼめる花の色なくて匂のこれるがごとしといへり今の世の歌は云ひつまりて其さまいやしきなり

覺ゆるはなし　●古人の歌は吟ずる程詞の外の意味深長に覺ゆるやうなるは今はなしとなり參

[第二節]●此比の歌と云より覺ゆるはなしと云迄なり●上節に歌の德を云によつて其次手に歌も古今不レ同ことを云て昔を慕ふ也説　●前段に此國の博士どものかける物も古のはあはれなること多かりといへるをうけて和歌にも上古と今世とのかはり有て古は今にまされることをいへり文　●かく云ふことは見ぬ世の人の歌が友とするによしと云たてんとの義なり盤　●此所は歌のさかひに入髓分に歌よむ人ならでは知難きこと也全　●兼好は和歌の四天王といはれしほどの者なるゆへにこゝの批判

をするなり古

貫之が糸による物ならなくにといへるは古今集の中の歌くづとかや云ひつたへたれど今の世の人のよみぬべきことがらとは見へず其世の歌にはすがた詞此類のみおほし此歌にかぎりてかくいひたてられたるもしりがたし源氏物語には物とはなしにとぞかける新古今には殘る松さへ嶺にさびしきといへる歌をぞいふなるはまことにすこしくだけたる姿にもや見ゆらんされど此歌も衆議判の時よろしきよし沙汰ありて後にも殊更に感じ仰下されけるよし家長が日記にはかけり

貫之　●紀貫之　頭書云▲山案醍醐天皇の臣也傳記區々にして難ニ一決一

人皇八代
孝元天皇—彥太忍信命—屋主忍雄命—武雄心命—武内宿禰（六代帝之大臣景行天皇三年於ニ紀伊國一生賜ニ紀姓一仁德廿九年薨歲三百餘）—木菟宿禰—眞鳥宿禰（號ニ平郡一大臣）—茲寐臣（武烈天皇臣）—眞咋臣—小足臣—鹽手臣（推古舒明二代臣）—大口臣—大人（正三大納言天智十五六三薨）—園益（從五下）—諸人（贈太政大臣從一依ニ光仁外祖一也）—麿（正三大納言）—猿取（從五上）—船守（參議正三大納言）—梶長（正三中納言）—興道（從四位下右兵衛尉）—本道（從五下藏人）—望行（歌人）—貫之（童名内敎坊阿古久曾土佐守木工頭右京内膳從五上御書所預）▲或説に云貫之は昔初瀨の觀音の示現によりて紀文幹のまうけたる子也やがて觀音の御夢相にて貫之わらはの時初瀨にて内敎坊と號すと云々

糸による物　●古今集第九羇旅部の歌　頭書云▲古今集第九羇旅部に東へまかりける時道にてよめる「糸による物ならなくに別路の心ぼそくもおもほゆる哉諸　▲此歌の心は糸の緣にてしたてたる也糸もわかるゝと云旅にもわかるゝと云糸も細きと云旅の心もほそくなるといひぬるを取合て此旅は糸によるものにてはなきに別かなど心ぼそきと也糸と云物合せたるはふときが二にわかるればかたかたは細きゆへにかく云り盤

古今集　頭書云▲山案貫之集云延喜の御時大和歌しれる人は今むかしの歌たてまつらしめ玉ひて承香殿のひんがしなるところにてゑらはしめ玉ふと云々　▲古今眞名序云詔ニ大内記紀友則御書所預紀貫之前甲斐少目凡河内躬恒右衛門府生壬生忠岑等一各獻ニ家集并古來舊歌一曰ニ續萬葉一於是重有レ詔

部ニ類所レ奉之歌ニ勅爲ニ二十卷ニ名曰ニ古今和歌集ニ云
々△拾芥云古今廿卷千百首或千九十九首云々△奏
覽の日限に異說あり△仲實古今目錄云延喜五年四
月十八日卷軸肇就以備ニ叡覽ニ云々假名序是に同じ
又本朝帝記や拾芥などには四月十五日とあり
歌くづ　●くづとは屑の字なり木のけづりくづを
木屑と云又和書に藻屑なとゝつかひし也參●兼好
時代にも歌道不案内の人が古今の歌くづといひ傳
たるなり古今集は儒道の經書のごとくにて萬代不
易の習有古今傳授ならてはしりがたし全●此歌を
古今集の中の歌くづと云事飛鳥井榮雅卿の古今集
の抄にもいへり文
云ひつたへたれと　●あながち出所を不レ可レ尋參
今の　●兼好時代を指也たとへ古今の歌屑也共今
の人の不レ及也全
ことがら　●言柄は詞の姿なり詩を句からといふ
と同じ參●からはたとへば人の體を見てからよき
など云心也詞の體也盤
其世に　●延喜の時代を指なり全
此類のみ多し　頭書云△古今十四戀部に河原左大
臣「陸奥の忍ふもちずり誰故に亂んと思我ならな
くに△同十七雜上藤原興風歌に「誰をかも知る人
にせん高砂の松も昔の友ならなくに　されば此歌
を歌屑と云るは物ならなくにの所を以て云かとて
次に源氏を引て書りされど此類の歌多しとなり說
此歌に　●糸によるの歌也諸
しりがたし　●歌くづといひたるは不審のはれぬ
事也昔の歌の體には此やうなる作意おほき事なる
に何とも心得がたきとなり參●又一說此歌一首を
しも歌くづといひ立られし仔細をだにも知がたき
は今の世の人の心の上古の歌人にえ及ばさる故か
との心也文
源氏物語　△紫式部の作也　頭書云△越前守爲時
此物語を作りこまかなる事は女の紫式部にかゝせ
たりしをきさいの宮聞召呼出し玉ひける由宇治拾
遺には見へたり△又一說には西宮左大臣安和年中
太宰權帥に左遷せられ玉ひしかば式部幼より馴奉
て思ひ歎きける比大齋院より上東門院へめづらか
なる草紙や侍ると尋申させ給ひけるに竹取うつぼ
やうの古物語はめなれたれば新しく作り出して奉

るべきよし式部に仰せられければ石山寺に通夜し此事を祈りける比しも八月十五夜月湖水にうつり心の澄わたるまゝに物語の風情空にうかひ先須磨の巻より書出し六十帖に及べり故に須磨の巻に今宵は八月十五夜也けりとをぼしいでゝとありと河海には見へたり旬▲又云石山の觀音我朝の人の心を考み玉ふに戀路の無常よりさとらねば佛の道に入らぬ器量なりとて紫式部とかりに再生して源氏六十帖をゑらばれしも皆生死事大のしめしにして更に戀路を教たるに非ず即現婦女身而爲説法といへる觀音品の説に割府を合たるが如しと也參

物とはなしに　頭書云▲源氏總角に我涙をば玉にぬかなんとうちずゝし給へる伊勢の御もかうこそはありけめとをかしうきこゆるもうちの人は聞知顔にさしいらへ玉はんもつゝましうて物とはなしにと貫之が此世ながらの別をだに心ぼそきすじに引かけゝんをなどげにふることとそ人の心をのぶるたよりなりけるを思ひ出玉ふと云々野▲我涙をはとは薰大將のずし玉へるなり七條大后の別に伊勢が「より合てなくなる聲を糸にして我涙をば玉にぬかなん此歌をずし玉ふなりうちの人とは姬君たちなりずし玉ふを聞知顔にいらへ答へをし玉ふもつゝまじさにものもいはず貫之が歌を思ひ玉ふ也此世ながらとはたかひに生てある旅の別さへかく云ひしまして八宮の死別はと也ふる歌を思ひ出て心をのべ玉ふと也盤▲此心は宇治の優婆塞の宮の一周忌の佛事のために彼宮の姬君達名香の糸をこしらへ玉へるとき此父宮の御別の心ぼそき事を思ひつゝけ玉へるさまなり名香の糸に付て貫之の歌を口號（クチズサミ）玉ふ也全

とぞかける　◯兼好の此源氏を引ける意は彼歌をうたくづといひ傳しはもし物ならなくにといふ所にや源氏にものとはなしにと書かへたればとなるべし文

新古今　頭書云▲山案拾芥云新古今集廿卷千九百七十八首云々▲元久二年乙丑三月廿六日依二後鳥羽院院宣一參議右衞門督通具大藏卿有家右近中將定家前上總介家隆右少將雅經等撰進中上皇有二御合點一被レ定有レ序（眞名親經卿奉二良經公仰一書レ之假名攝政書レ之）▲新古今假名序云古今後撰のあとをあらためず五人のともがら

を定めてしるして奉らしむとあり▲元久は土御門院の年號といへども後鳥羽院院宣と見へたり帝いまだわかくをはしまして院の御はからひなるべきなり

殘る松さへ　●祝部成仲が歌なり新古今冬部に見ゆる　頭書云▲新古今冬の部に春日社ノ歌合に落葉と云ことを詠たてまつる祝部成仲「冬の來て山もあらはに木のはふり殘松さへ嶺にさびしき▲此歌は淵明が詩に春水滿二四澤一夏雲多二奇峰一秋月揚二明輝一冬嶺秀二孤松一といふ四の句の心なりと云りさへと云字に力を入たる歌なり盤▲歌の心は冬來れば奥ふかき山も木の葉散てあさあさと其景もなし松は時をわかぬものなれとそれさへ友なく峰にさびしく見ゆるとなり全

といへる歌を　●又此歌を新古今の歌屑といふなるはと也參

まことに　●兼好尤と同心して

くだけたる　●上の句の詞つゞきくだ〳〵しきやうなれば新古今の中の歌くづといふにやとの心なり文●くだけたると云所は腰の五文字より下の七文字へつゞく所をいふ歟歌の體は一首のとまりといふなれば是よりほかにくだけたると兼好思へる所見へざる歟全

姿にもや　●先一往そしる人の方人になりて評する也參

衆議判　●和歌所にて時の歌仙寄合て判するなり●歌合などの樣に判者を定めずして一座の作者よりて批判する諸

沙汰　●沙汰の字はすなをゆりそろへたる心也日本の人は只咄し物語の事の樣に思へど文字の心はしからず理非を精義する心也兼好は能つかひ出せり參　頭書云▲慧林師一切經音義第八十九曰沙汰音太廣雅汰濤鍊也沙汰去二惡物一也希麟續一切經音義第十曰案沙汰即如下沙中濤二洗其金一取中精妙上者也弘明集第八僧順法師折三破論曰息レ心達レ源號曰二沙門一然則練レ神濯レ穢反レ流歸レ潔即沙汰之謂也參

後　●衆議判の後にも也盤

仰下され　●後鳥羽院の叡感なるべし文

家長が日記　●家長日記とてすなはち本の名也諸●家長は和歌處の開闔也●さるによつて記錄をか

ける也盤●家長が日記を引て此歌もあしからぬ由を云り說●又一說かく叡慮に預りし歌も新古今にては歌屑といへば中古の歌もたゞならず及びがたき事しられたりとのこゝろなり文　頭書云▲醍醐帝の御子西宮左大臣高明公十代の孫右馬助前但馬守和歌所の開闔といへり野

▲系圖　高明までは前五段目にくわし

人皇六十代
醍醐天皇─高明親王─忠賢─守隆─長季─
─盛長─盛家─盛定─忠光─時長─家長

▲土御門院御宇建久元年に後鳥羽上皇和歌所を置給て源家長を開闔とし藤原淸範鴨長明藤原能季などを寄人とし玉へり文▲開闔は易の字なりあけたてをする心にて其所のあづかりを云なり盤▲新古今に家長和歌所の開闔に成て始て參內しゝ日奏し侍し歌「藻鹽草かくともつきじ君が代の數によみをく和歌の浦波句

［第三節］●貫之がと云より日記にはかけりまでなり●山案上節に古と今と歌のかはりたることを云しをうけて貫之成仲が歌を擧て世には歌屑といへども今の世の人の中々及ぶことには非ずといつていよ〳〵昔をしたふ意をいへり●此節は何事も古にをとりしと云ふに付て兩人の歌の評を擧たりされば其道に堪能ならずして謾にものをそしるべからざることを云りたとへば富士山を見くださんとならば富士山より高山に成すは富士峯のことは知り難からん彼妙樂大師の天台の釋書を再釋し玉ふ時恐は先師の御あやまりかと宣ふ詞なとは天台とひとしき妙樂なればなるべし貫之成仲にをとらぬ歌仙ならでは歌屑と云批判はなしがたからん若し見得たるとも緘レ口云まじきと也▲論語顏淵篇子曰君子成二人之美一不レ成二人之惡一小人反レ是▲孔聖全書云夫子見二人之一善一忘二其百非一▲又法華安樂行品不レ說二他人好惡長短一といへり況や愚不肖の身としてや人を誹謗せずして惟我をつゝしめと也雖二至愚一責レ人則明雖レ有二聰明一恕レ己則昏當下以二責レ人之心一責上レ己といへり說

歌道のみいにしへに替らぬなどいふ事もあれどいさや今もよみあへる同じ詞歌枕も昔の人のよめるは史にをなじ物にあらずやすくすなほにしてすがたもき
昔も今も歌のことばは同じ事ながら也盤

よげにあはれもふかく見ゆ
歌道　●歌のさまと作れる本も有西行が故事有頭書云▲新古今集云寂蓮法師人々すゝめて百首の歌よませ侍りけるにいなひて熊野詣でける道にて夢に何事も衰へゆけど此道こそ末の世にも變らぬ物にはあれなを此歌よむべき由別當湛快三位俊成に申と見て驚きながら此歌を急ぎよみ出して遣しけるをくに書侍る西行法師「末の世も此情のみかはらずと見し夢なくばよそにきかまし此心にて書り▲又新續古今にも「昔人の心の種もかはらねば今も昔の和歌の浦波文　▲又續千載法皇御製「あつめ置言葉の林散もせて千年かはらぬ和歌の浦波說▲(歌の道と云を歌のさまにつくるの辨)▲此所始終の文のうつりも義理も歌の姿の事なれば歌のさまと云までよく聞へたり抑歌道のいにしへにかはるといふ道理はなき事なり古今集の序に天地を動し鬼神を感ずとかき玉へり今も感じ動くことは少もかはらぬこと也歌道にかぎらず儒佛道ともに道のかはると云ことは決してなきことなり若日月地に落國土天にのぼらば歌道もかわるべし又歌のすがたは代々集時々風義かはる事なり全▲たとひ世の末になりて人の三十字のつらね古に及ずとも心の情は替る事あるべからず工拙品を分ち古今時異にして言がらの衰へたるを見て歌の道昔に及ばずとは兼好等とも覺ぬ事なり參▲山案此說一理ありといへども此所は歌の道と云ふが面白し如何となれば末の世になりては心の實は無なりて只詞華言葉をのみ飾る故に天地鬼神の感應も自らなきそこれ歌の道の衰たるに非やされば歌のさまの古にかはりたることを何んぞや兼好の悲み玉ん道の衰へたることをこそ歎じ玉へばなりたとひ其さまはかはるとも心の實さへあらば佛神の納受もあらん其上歌のさまは時代によつてかはるものなればなり
いさや　●不知と書●歌道は古にかはらずといへどいさしらずかはれりとの心なり文●此いさやの字を下に屬して見るは誤也旬　●又說いさやと心をおこしていふ共いへり盤
歌枕　●名所の歌を集たるを歌枕といへどもこゝにては詞のつゞき枕詞などをいふべし壽
おなじ　●今と昔を引合見るに各別ちがひたると

也諸
やすく ●何の工もなく易らかに也諸
すがた ●一首の姿なり諺
きよげ ●塵埃をはなれてなり參
あはれも云々 ●おもしろきに心深長に見ゆ參 ●あはれは感あることなり古代の歌をしたひたる也全
〔第四節〕●歌の道と云よりふかく見ゆまでなり●山案前節をうけていよ〳〵古にかはることをいへり西行が夢にかく見たれども猶かはりたると云て古の歌の友となるこゝろを偏に書たり
梁塵秘抄の郢曲の言葉こそ又あはれなることはおほかゝめれむかしの人はいかにいひすてたることぐさも皆いみじく聞ゆるにや
梁塵秘抄 ●八雲御抄に後白川院の御作と有野槌等の諸抄に後鳥羽院の御作といへるは誤にや神樂と催馬樂とのうたひ物をあつめたる抄なり一條禪閤御所の注をくはへ給へるを梁塵愚案抄といへり文●漢の虞公か歌に梁の塵うごきし故にうたひ物を梁塵と名付給ふ也參　頭書云▲杜佑通典百四十五云漢有二虞公一善歌能下令二梁上塵起上野▲列子湯問篇云昔韓娥東之レ齊匱レ糧過二雍門一鬻レ歌假レ食既去而餘音遶二梁欐一三日不レ絶左右以二爲其人弗一レ去乃至故雍門人至レ今善歌哭效二娥之遺聲一也歸有光註曰娥韓國之善歌者參●此外事文類聚續集博物志などにも此事出たり諸抄に載すといへども今爰には略す
郢曲 ●催馬樂の詞の名なり催馬樂とは梁塵愚案抄云むかし諸國より御貢物を大藏省へ納し時民の口ずさひにうたひける歌なれば催馬樂と名付るなり馬をもよほすと書る貢物をおほする馬をかりもよほす心也と云々遠國より馬子口すさみたるは自然の詞なれくにをさまり豐なるを用ゆ也全●うたひものを郢曲といふことくはしく頭書有●うたにはひなふりとよむ全　頭書云▲文選卷四十五云宋玉對楚王問云客在下歌二於郢中一者上其始曰二下里巴人一國中屬而和者數千人其爲二陽阿薤露一國中屬而和者數百人其爲二陽春白雲一國中屬而和者數十人引レ商則レ羽雜以二流徵一國中屬而和者不レ過二數人一而已是其曲彌高而和彌寡▲郢は楚國の都也是より歌謠を郢曲と云なり▲瀛奎律髓元稹梅詩云郢曲琴空

秦野
いかに　●いかやうになり諺
いひすてたる　●口ずさみたる諸
ことぐさ　●言種と書野●言雜と書壽●雜談なり古　頭書云▲大僧正慈鎮和尚の歌に一山里にとひくるひとのことくさはこの住居こそうらやましけれ句

〔第五節〕●梁塵と云より終まで也●此節は上古の人の詞はいひすてたる事もよく聞ふるにやとの意を云て彌昔を慕る也文

〔一段之統論〕●此一章の大意幾度もいにしへを云出して今のをろそかなるを歎きしなり熟讀して意味ふかきことをしるべし參●山案此段は論語に孔子の詞に先進於二禮樂一野後進於二禮樂一君子也如用レ之則吾從二先進一と宣るに似たり今の世の歌も一ふしをかしく云ひ叶へたりとも古の質朴なるにはなか／＼をとれりとなりされば異朝の詩文も末に至ては國風の正しき體を失へりと詩人もこれを歎息せるなり●此段と前段と合て一として見んもよかるべし文章詩賦和歌郢曲の事を云中に古を慕て今を議せり見ぬ世の人と云古の哀なると云此頃の歌はといひ古き歌どものといひ今の世の人と云其世の歌にはと云いにしへにかはらぬといひいさや今もといひむかし人のといひ昔の人はといひて幾度もむかしをあはれかりて今はいかゝと評論す野

●上段の餘論なり源氏物語のならびの卷の筆法也云べきことを殘して別段としたる也盤

〔十五〕いづくにもあれしばしたびたちたるこそ目さむる心ちすれそのわたりこゝかしこ見ありきゐなかびたる所山里などはいとめなれぬ事のみぞおほかる都へたより求て文やる其事かのこと便宜にわするななど云やるこそおかしけれさやうの所にてこそ萬に心づかひせらるれ

いづく　●方角をさゝぬ詞也參
しばし　●必遠き旅と心得べからず參
たび　頭書云▲羈旅の二字は何れもたびとよめり羈は遠國へ日をさしてゆく旅なり旅は我宿を出近所をありく旅也と云々こゝのしばし旅立と書るは旅の字の心相叶か貞
目さむる　●一きは目のさめたるごとくはつきり

とする也諺 ●氣のつく心也文　頭書云▲三體和歌に慈圓の歌に「まこもかる美豆のみまきの夕すゝみねぬに目さますほとゝきす哉文
わたり ●當の字●あたりの義なりあとわとは相通也句　頭書云▲能因か歌に「心あらん人に見せばや津の國の難波わたりの春のけしきを句
ゐなかびたる ●田舍めきたるなり諸
めなれぬ ●見なれぬ也めとみと相通参
おほかる ●是より以下皆めさむる心地するの仔細也文
都へたより ●都の宿へ文をやるに盤　頭書云▲京　廣雅云四起曰ㇾ京又京師天子之居▲公羊傳京者大也師者衆也天子之居必以ニ衆大ー也言也古▲都
　集成云天子所宮曰ㇾ都古▲山案古今遷建云帝都天子之居天子以ニ四海ー爲ㇾ家豈有ニ常處ー哉惟其所ㇾ在即以爲ㇾ都爰に都へ便と書しは王城のみを云と見るべからず何處にても我住居せし故郷を云と可ㇾ見されば歌にも故郷を思ふこゝろを詠せんとて都を思ふとよむなりたれとても都にすむものなる故なり邦畿千里所ニ民止ーといへばなり

其事かのこと ●色々の用のことなり参
便宜 ●色々の用事をいひつかはしゝ程に此方の便りにわすれずよこせといひやるかをかしきと也常にかはりたる事なれば目さむる心地ならんと也盤　頭書云　▲一封書寄ニ數行啼ーといひし詩のこゝろもあり参▲「便あらばいかに都へ告やらん今日白河の關はこえぬと説
萬に心づかひ ●よきあしきにつけてもなり説●旅にての心つかひなり古郷にては我心つかぬ所はわきより氣をつけたすくる友もあり又明暮なれたる人にはたとひいさゝか心づかひをわすれてもゆるすこともあるに田舍などのなれぬ所の人の心もあしきにあひてはすこしものに油斷する事ならずをのづから我心づかひ一入せらるゝことなり諸
〔第一節〕●何處よりせらるれ迄也此章三節に分ち見るべし●山案上件に段々面白きことを云て和歌こそ猶をかしきと云ながら又旅と云ものも長旅こそ飽心もあらんしばし旅立たるは萬につけて目さむる心地して面白くしかも物毎に功が出來て德あるものなりされば天子卿大夫は旅をせねば世の

善惡民の辛苦を知事なし故に一年に四度の狩を定
て天子も出玉ひて世の風をしろし召す也最明寺時
賴禪門は天下を修行し給ひしとなん▲古文前集五言
古詩憫レ農李紳鋤レ禾日當レ午汗滴禾下土誰知盤中
飧粒々皆辛苦▲錦繡段蠶婦詩曉夕采レ桑多苦辛好レ
花時節不レ關レ身若教レ解ニ愛ニ繁華一事上凍ニ殺黃金屋
裏人一●此段羇旅の中にて人のたしなみ心もちを
書たり壽
もてる調度迄（諸道具の事前に注す）よきはよく（一きはよきなり說）能ある人かたちよき人もつ
ねよりはおかしとこそ見ゆれ
能ある人　頭書云▲山案字彙云能奴豆切才能又工
善也又獸名▲說文能獸堅中故稱ニ賢能而彊壯一稱ニ
能傑一也徐曰堅中骨節實也
つねよりは　●都にて澤山なればよきものとさの
み目にたゝず田舍の不自由なる時よきものはあら
はるゝと也諸
〔第二節〕●もてる調度と云より見ゆれまで也●山
案此節は心づかひのみにかきらず諸道具藝能に至
るまで旅立にては一きはよく見ゆるものぞと云事
を知らせたりこれ目さむるこゝろなりされば調度
能ある人にかぎらず禽獸草木に至るまで田舍にて
は人これを用るものなり
寺社などに忍びてこもりたるもおかし
寺社なとに　頭書云▲山案清少納言枕草紙につれ
づれなるものゝ段に所さりたるものいみといへる
をうけてこゝに書たるなるべし
忍びて　●忍の字面白し兼好の本意誠顯はれ侍る
にや文●忍てと云にてさはがしきはつれ〴〵なら
ぬよし也都へ其事彼事などいひやりて不自由なる
體をいへると忍てと云に心を付べし盤
〔第三節〕●寺社以下なり●旅立と云よりうけて——
——又寺社に忍やかにこもりたるも常にかはりてを
かしと也諺●しばし旅立たるこゝろに同じければ
也文●我居所を去てあれはこれも旅なればかく云
也盤●山案前節は世人の旅をなせばよきことをい
へり此節は兼好がしばし旅立たき志をいへり
〔一段之統論〕●此段も前段の心友なき事を歎じて
其より下へつゞけて必ず友を求ずとも如レ此樂あ
ることを云顯す諺●思ふ子には旅をさせとの世の
諺も實もと覺へ侍る人の氣のつくものなり親のふ

ところにのみ養れて居る者は有爲無常をも知ず乏しく悲き人の上を見てもあはれむ心なくなさけなきもの也旅と云字はあはれなるかたと書と或人の語し貞◉旅と云ものは心もうつりかはりあたらしくなるもの也心のうつりゆき一院に執着なきを旅の德にいへるなるべし盤

〔十六〕神樂こそなまめかしくおもしろけれおほかたものゝ音には笛篳篥つねにきゝ度は琵琶和琴

神樂　頭書云▲神樂のをこりは天照大神天の盤戸をさしてこもり玉ひし時天下とこやみになりければ諸神祈り申されけるに天鈿目命まさきのかづらをかつらとしひかげをたすきとして謠ひ舞庭燎燒しより事はじまれり古語拾遺に見へたり▲梁塵秘抄には「深山にはあられふるらし外山なるまさきのかつら色つきにけりとあるを庭燎の歌に載られたり▲又内侍所の御神樂は一條院の時よりをこりて隔年に行る承保より毎年に行る内侍所西國へわたらせ給ひて三年を經て都へかへり給ければ三ケ夜の御神樂あり是は別して臨時に行るさて此所にて御神樂の時主上行幸あり庭燎を燒本末の坐をまふけ笛篳篥本末の歌和琴次第に拍子なんどゝりて舞謠ことゝも委公事根源抄に見ゆ野▲内侍所御神樂のこと文段抄に略記せり事長き故にこゝには略す▲今こゝに云ふ神樂は即内侍所の御神樂のことなるべし參▲山案異朝の樂は聖代に作り玉ひて人を敎へ玉ふ▲禮記云夫樂淸明象レ天廣大象レ地終始象ニ四時一周旋象ニ風雨一▲五經折疑曰先王之制ニ禮樂一也制レ禮以節レ事修レ樂以導レ志故觀ニ其樂一治亂可レ知也▲漢書云夫樂者聖人所下以感ニ天地一通ニ鬼神一安中萬民上故聽者無レ不ニ虚レ已竦ニ神悅而承流ニ於是一海内被ニ服其風一光輝日新而不レ知ニ所ニ以然一

なまめかし　◉娟の字是ゝ優なると褒たる詞なり文

おもしろけれ　◉神樂によせある詞文　頭書云▲天盤戸より天照大神出させ玉ふ時人の顏しろく見へければよろこびて面白と云よりの詞也手をのべてよろこべるよりたのしと云なりこのときの事也盤▲枕草紙に歌はと云ふ所に神樂歌もをかしとあり句

おほかたものゝ音　◉神樂の次手に兼好心にすけ

る樂器を書つらねたり是まくら草紙の文體をうつせり文●ものゝ音とは樂器の事也盤

笛　●常の横笛參頭書云▲山案說文云七孔筩也羌笛三孔▲風俗通云武帝時丘中作レ笛々滌也所下以滌ニ邪穢一納中之於雅上正也參▲事文類聚云黃帝使三伶倫伐ニ竹於昆谿一斬而作レ笛吹レ之作ニ鳳鳴一▲又武帝時丘中作レ笛かくはあれど日本をこりは御鎮座記曰凡神樂起在昔素盞烏神奉爲ニ日神一行无狀天鈿命採ニ天香山竹一其虛節間雕ニ風孔一通ニ和氣一今世早笛是亦天香弓與並叩レ絃今所謂和琴其法盤

篳篥　頭書云▲山案說文云篳篥茄管也卷ニ蘆葉一爲レ頭截レ竹爲レ管出ニ胡地一▲律書曰云大篳篥小篳篥云々▲遊仙窟云長一尺八寸舌四寸三分云云▲通典云本名ニ悲篥一出ニ於胡中一其聲悲▲悅目抄にひちりきを隱題にて「去々年も去年も替らで咲花を共ひちりきとしる人ぞなき文

つねにきゝ度　●常に聞度といふは笛篳篥は管絃を奏する時はよし琵琶和琴は一器にてもおもしろき心也全●常に聞度はひさわうみやいちとかける本有毘沙王宮一とかけり野

琵琶　●頭書云●風俗通云琵琶近代樂家所レ造長三尺五寸象ニ三才五行一四絃象ニ四時一▲釋名曰推レ手前曰レ琵引レ手御曰レ琶琵琶本胡家馬上彈也參▲山案杜摯云秦末苦ニ於長城之役一百姓絃レ鞉鼓琵琶なり▲歌には四の緒とよめり「思ひやれ塵のみつもる四の緒にはらひもあへずかゝる涙を全▲又こととともよめるあり堀川後百首に王昭君をよめる歌に「道すがら馬の上にて引ことの緒ごとに玉をぬく泪かな文

和琴　頭書云▲あづまことゝもあづまとばかりも云なり文▲昔神代には弓六張をならべてひきけるを後に琴に作りて六絃をかけて彈ずるなり日本にてもろ〳〵の樂器のかしらたるにより花鳥餘情序にあづまをもろ〳〵の器のうへにをき紫をよろづの色のなかにたとふとあり野▲河海抄に和琴は伊弉冊伊弉諾尊御時令ニ作出一給云々諸▲山案神代の出處前の笛の下に委し夜笠内大臣家良の歌に「夏くればあづまのことのあしつをによりかけてける藤波の花

〔一段之統論〕●此段は上の段に寺社なといへる詞

よりかける餘論なり盤●此一章を諸抄にはたゞ音樂の面白は此たぐひなりとばかり見たてたり此心ばかりにてはさして味もなき事也抑樂は六藝にも第二につらね六經の中にも第五の樂經と云が樂の事を述たる書なれど秦始皇の書をかきしより樂經すてにうせて五經となれり凡天下の治亂國家の盛衰此音樂のうつりにてよくしれるとかや此故に官にも雅樂頭を置て天下の非樂をたゞし玉ふそのかみ唐玄宗の時安祿山か謀反も音樂にあらはれ我朝の伊勢をどりの後も騷動有と記せ此道理なるによりて聖德太子異朝の正樂を我朝に傳玉ひて天王寺の伶人今にこれを奏すと云々今の世の三味線の勞察ぶし尺八の戀慕ながしといふも皆人の心を亂すわざなれば常に聞べきしらべに非ずたゞ聖代の餘風のこりて人の心つれづれになり道をしたふものは神樂笛篳篥琵琶和琴のたぐひなりといふ心なるべしことに琵琶は靑蓮院慈鎭和尙生佛が平家に天台宗の六道講式などの博士をつけて頓寫の中間にて琵琶に和して語らしめられたるより頓寫に琵琶を用ゆとなりけげに天台の聲明は天下無雙の聲なりこれにかなふしらべなればさしも道にかなふ調子なるべし今此草子をよむ人常に聞度と云字をよく見るべし參

〔十七〕山寺にかきこもりて佛につかふまつるこそつれづれもなく心の濁もきよまる心ちすれ

山寺にかきこもり ●由といふに心を付べし里らかきはあしき由なり盤●兼好みづからいはく心は緣にひかれてうつるものなればしづかならでは道は行じかたしと有心にて見るべし山寺とは經にしづか成住家を阿蘭若菩提場といへるたぐひなるべし參●昔は三年の禁足を出家はし山門にても十二年の籠山などいふ事ありて其中に四種三昧五種法師の修行などしける事ありてこゝはそれにては有べからずたゞ山寺に居てといふ事なるべし出家にはかきるべからず盤●かきこもるは垣などしてこもるの義なり參●山案抄といふは甚なり只きびしくいはん爲にかきこもるといふなりかきくもるかきたれてなどいふとおなじ頭書云▲心地觀經云入二阿蘭若菩提場一常修二於妙道一▲遺教經云汝等比丘欲レ求二寂靜無爲安樂一當レ離二憒閙一獨處

閑居靜處之人帝釋諸天所ニ共敬重一㊂△方便品云我常獨ニ處山林樹下一若坐若行△藥草喩品云處ニ山林一常行ニ禪定一△又儒家にも山者吾心之靜也故仁者樂レ之と云ひ論語にも仁者樂レ山ともいへり説

佛　頭書云六孫統院の西谷鈔云和語にほどけとよむ事四の義有一には煩惱のきづなほどけしと云心二には萬法の義をよく心得ほどけるゆへ也と三には善光寺の如來を守屋などが火にて燒きけれども湯にならざる故に難波江にすてたりしを堀出して見ればほとをりけ有しゆへ也四には聖德太子佛の御經に點じてよみほどける故也如影集の四を見るべしとなん今案ずるに義に云生死の河の舟の帆をとけとをしふる人なればほとけと云とも有㊂△山案梵云ニ佛陀一譯云レ覺所謂自覺々他覺行圓滿今略稱レ佛△盤若灯論云何名レ佛於ニ一切法一不ニ顚倒一眞實覺了故名レ佛又云於ニ無體法中一覺ニ了無餘諸法平等覺一故名爲レ佛△菩薩本行經云佛者諸惡永盡諸善普會無レ復ニ衆垢一諸欲都滅六度無レ極皆悉滿畢以ニ權方便一隨レ時敎化有ニ太神力身紫金色一三十二相八十種好一六通淸徹前知ニ無窮一却覩ニ無極一現在靡レ所レ不レ知三達遙鑒有ニ如レ此德一故號レ佛也

つれ〴〵も　㊟山寺はつれ〴〵なるべき事なれども内外の塵俗を拂によつて感心生ずる故なり諺　㊟つれ〴〵もなくのなくの字に眼をつくべし大底の人は山寺にてもるをさびしき事にいふに兼好かく云意は凡世間にさびしきと云はなす事なく徒に月日を送るをいふ酒宴遊興諸勝負雜談などにて日をくらし夜を明す中は其事にまぎれて面白けれどもかならず終りにはさびしき事が有ていかなるふつき人にても四季ともに不斷に遊ぶ事はならぬぞかならず時としてさびしき事なり觀樂極兮哀情多といへりされば山寺にてもれば本より面白き事がなきほどに又さびしき時もなきそ面白き事がなきによつて心のひかさるゝ事もなく勤て心のきよまる事はあれどもさびしき事はなきそ畢竟上件の段々にいひしおもしろきこともうらにはかならずさびしき事が有なれば畢竟面白事はこゝに極て外にはなき也説　頭書云△源氏榊の巻に源氏の君雲林院にをはしける所に云此方のいとなみはつれ〴〵ならず後の世はたゝのもしげなり文

心の濁り　煩惱濁ノ事なり参　頭書云▲一元山居詩云山居遙窈自無レ塵不レ假ニ修持一見ニ本眞一参
［一段之統論］●此段も寺社などにといへる詞よりのあまりの論なり盤●寺に參籠する功德はいつくも同じことながら山寺とかけるこそ一入聞より心もきよまり侍る貞●前段に神樂のことを云て世間に弄物にうつりてとかくそれよりは山寺にこもりて佛につかへ奉れば管絃のなぐさみもいらずしてつれ〳〵のさびしき事もなきと也兼好持用をあらはせり殊勝の事也全●此段は同じ心ならんと云し段よりの結段なり同じ心より以下の五段は此段を書んための序也兼好存念はこゝにとゞまるそ前の四段目の後の世の段の筆法と同しゝかも其段に相應してかけり●兼好自讃歌に「いかにして慰むそとも世の中をいとはですごす人に問ばや說

徒然草諸抄大成巻第三

目次

〔十八〕人はおのれをつゞまやかにし驕を退て財をもたず世をむさぼらざらんぞいみじかるべきむかしよりかしこき人のとめるはまれなり（上下の人をさす諺）

つゞまやかにし　◉物の字也一切の事を倹約にとり守りておごらざるをいふ諺　頭書云▲明心寶鑑引二大公説一云靜則常安倹則常足參▲事文類聚別集十八云節以二制度一不レ傷レ財不レ害レ民節卦 禮與二其奢一也寧倹語 君子以二倹德一避レ難否卦 説

驕を退け　◉驕を退くとは約にしてから驕るもの有故に用心にかくいへり奢るために約にする事あればなり盤　頭書云▲孝經云在レ上不レ驕高不レ危玄宗御註曰無レ禮爲レ驕參 ▲論語泰伯篇子曰有二周公之才之美一使二驕且吝一其餘不レ足レ觀説

財をもたず　◉財をもたずとは財をもたん爲に約にし奢をしりぞくる人の有故に財をしかくしてもてといふにはあらずと也盤 ◉富るはわろきと云にてはなけれとも財あれば心をうごかさるゝ程に也

頭書云▲山案明心寶鑑云蘇武曰賢人多レ財損二其志一愚人多レ財益二其過一▲老子曰多レ財失二其眞守一多レ學惑二於所一レ聞

世をむさぼらん　◉財を好む者は必世を貪る者也諺 ◉世をむさぼらざらんとはつゞまやかにし奢をしりぞくるはむさぼらざらん爲也との義を云り此詞あぢはひをくはゆべし盤 ◉生れながらの福人は各別也しゐて幸を求る事なかれと也説　頭書云▲樂邦文類云不レ得二怕レ死貪一レ生參 ◉山案景行錄云知レ足可レ樂多レ貪則憂知レ足者貧賤亦樂不レ知レ足者富貴多レ憂

かしこき人の　◉昔より賢人の貧しき人あまた有參 ◉此詞決前生後の詞なり盤　頭書云▲伯夷叔齊は首陽のもとに飢顔淵はいやしき巷にありて糟糠にだもあかず閔子騫は蘆花の絮うすく原憲は桑の扉雨もり子夏はうづら衣をつゞり南華老人は粟を監河候にかり五柳先生は環堵の風にたへがたく浣花翁は家破れて常に傘を持り陳后山は衣をしりぞけて寒たりかやうの人多かり▲孟子藤文公上篇爲レ富不レ仁矣爲レ仁不レ富矣とあり野 ◉覺明草稿記云古語云賢者未二必富一富者未二必賢一參

まれなり　◉稀なりと有にてすきとなきにてはなし説

〔第一節〕◉人はをのれと云よりまれなりまでなり此段兩節に分つ文段も是に同じ◉古人の奢を退るは得難の貨をたふとむまじき爲也今の儉約を本とするは金銀をたくはへん爲なればたとひ驕を退るとも此二つの道を能わきまへずばいたづら事なるべし增鐵◉山案此節は上天子より下庶人に通じて皆儉約を本とすべき事をいへりさてかしこき人の富るは少なりと上件を云ひ留て下を起すそさて次の節には古の賢き人の貧を安する物語をあげて分を安んぜよとのいましめなりされど富貴なる人も無理に貧になれとには非ず道にさへ叶ふて富貴して鉅萬の財寶を積とも何ぞ譏に此を捨や又貧して一朝の畜へなくともそれを厭ふて世を貪り歎かんや己をつゝまやかにして奢をしりぞけといへるは富貴なる人への戒也財を持ず世をむさぼるなどいへるは貧乏の者へのいましめなり第二段の聖の御代の段にも相應せり

もろこしに許由といひつる人は更に身にしたがへるたくはへもなくて水をも手してさゝげて飲けるを見てなりひさごといふ物を人の得させたりければ或時木の枝にかけたりければ風に吹れてなりけるをかしかましとてすてつ又手にむすびてぞ水ものみけるいかばかり心のうちすゞしかりけん孫晨は冬月に衾なくて藁一束ありけるを夕には是にふし朝にはおさめけりもろこしの人はこれをいみじと思へばこそしるしとゞめて世にもつたへけめこれらの人はかたりも傳ふべからず

もろこしに　◉唐の字をかけども唐朝にはかぎらすすへて異朝の事

許由　頭書云▲高士傳云許由隱二箕山一以レ手捧レ水飮レ之人遺二一瓢一得以取飮々訖掛二於樹上一風吹歷々作レ聲尙以爲レ煩遂去レ之野　▲堯天下を讓らんとのたまひたれどもうけずして去事莊子に見えたり耳をあらひしことは皇甫謐か高士傳等にあり又其堯の世をゆづらんといひしはいつはりなりと楊雄が評議せしことは瑯邪代醉編十七卷のさし口にくわしく見へたり參

水をも手して　◉水をも手をくぼめさしあげて飮と也句

見て　◉見てとはわきより人の見てとなり參

なりひさご　●瓢の字ふくべなり壽　頭書云▲瓢和名集云奈利比佐古斟レ水器也壽　▲瓢の字をひやうたんと心得るは誤也其は瓢箪數空と云詩よりあやまれり瓢はひさご箪は竹のくみ籠なり諺　▲莊子註に瓢は半瓢也といへり盤

かしかまし　●かは助語也かしましき也諺　頭書云▲枕草紙に心ゆくものゝ條にいとかしかましきまで人ごと云にとあり句　▲山案古今集秋の部に「秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花も一時

手にむすびて　●掬の字手をくほめて水をたむるを云句　頭書云▲干武陵か詩に掬レ水月在レ手▲又古今貫之歌手にむすぶ雫に濁る山の井のあかでも人に別ぬる哉句

いかばかり　●いかほどかの義也句　●はかりの注前に有

心のうちすゞし　●心のうちきれいなりけんと也參　頭書云▲白樂天が詩に但能心靜即身凉野　●大納言公任卿の歌に「さゞなみや志賀の浦波いかばかり心の内のすゞしかりけん文

孫晨　頭書云▲蒙求云孫晨藁席補註云三輔決錄孫晨字元公家貧織レ席爲レ業明ニ詩書一爲ニ京兆功曹一冬月無レ被有ニ藁一束一暮臥朝收參

冬月　頭書云▲つれ〳〵草にては冬の月に衾なくて藁ひとつかねとよむべし文　▲冬の月とよめと云說もあれどこゝは聲に讀ねば言から無拍子也あまり歌のことばのやうにやはらかによまずともなり此草子にも放下の蹉跎たりのなどゝいひ歌にも法性の台戸といへどなとゝあれば兎角吟聲のよきがよきなり參　▲蒙求にては冬三月の心なれば冬月とよむつれづれにては冬の月とよむべしされども月影の心にてはなし鐵增

しるしとゞめて　●書籍にかきしるしとゞめてなり句　●高士傳之文類聚三輔決錄蒙求等にしるしてなり參

これらの人は云々　●日本の人をいふ諸　●唐の人は是をよきと思へばこそ記しとゞめて置けめ我朝に若如レ此人ありとも却て狂人のやうに覺えて後の世に語りも傳ずとなり諺　●書にかく事は勿論語りも傳へまじ

〔第二節〕●もろこしと云より終までなり●此二節は賢人の清貧なりしためしを云て唐の人はかく書しるしとどめると此等の人は語もつたへぬと雲泥かはれる心ばへを云てかく淺間敷濁富を好むらんよ清貧にてこそあらまほしけれといふ心を含めたるなるべし文●かく和漢の人を比挍して云るは漢を知て隱逸するものを人知ずしてあなどる心を云んとて強く我朝の人を耻しめたりさはあれど唐の人もなべてよきにも極るまじき事なり其仔細は佛道を悟て隱退せし人などを多く舊唐に載けれども歐陽永叔が佛を好ざるによりて新唐書を書時ことごとくけづりすて侍る又我朝にもまゝ記錄のはしには乞兒のやうなるものゝ隱せるをも載たる書もあればひとへに此國をゝとしむべきにもあらずたゞもろこしは大國にて賢者の方人も多く日本には道しれる人すくなきをうらむ心なるべし參

〔一段之統論〕●此段は己が身に花麗をせずして奢を退けて儉約にせよと也壽●前に心の濁もきよまると云ことをいへるをうけて世をむさぼらぬ許由なとの心すゞしきとを云てなべて人も加樣にあらまほしき心をいへり文●上の段に世をはかなみ後世をねがふことを云ひ此段にはそれを折返して世にまじはるにつけても如此有べきことゝいふ心なりさて發端よりいみじかるべきと云まで世に有て身を修る肝要よく云ひをほせたり儒門の理にも違ふべからず次に許由孫晨を上の詞の譬例にひき末には異朝上代のすぐれたる事をほめ本朝當世の風俗衰薄せることを歎息したるなり句

〔十九〕折節のうつりかはるこそ物ごとにあはれなれ

折節のうつり　●四時の轉變をいふ此一句貫之が歌の心によく叶なり句　頭書云▲拾遺の雜の下に在所に春秋いづれかまさると問せ玉ひけるによみて奉る貫之「春秋に思ひ亂れてわきかねの時につけつゝうつるこゝろは句▲新古今俊成女の歌に「折節もうつればかへつ世の中の人の心の花染の袖說

物ごとに　●一つとしてすつべき物なき義也是より與に物ことにあはれなるよしをいへり盤

あはれなれ　●あはれは面白き義なるべし句

〔第一節〕●折節よりあはれなれまでなり此段六節

に分ちて見るなり文段も是に同じ●是此段の大綱なり後にいろ〳〵の事をいはん爲也増鐵 ●此一節は年中四季にわたりて慰ぬ日もなく春秋の差別もなく樂はあると云ことをしらせたりよむものかく了簡して此段を見ば四時ともに常樂ある心をしらん後人眼をつけよ訖

物のあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれどそれもさる物にて今一きは心もうきたつものは春のけしきにあめれ鳥の聲なども殊の外に春めきてのどやかなる日影に垣根の草もえ出る比よりやゝ漸の字也諸春ふかく霞わたりて花もやう〳〵けしきだつ程こそあれ折しも雨風打つゞきて心あはたゝしく散すぎぬ青葉になり行まで萬にたゞ心をのみぞなやます花橘は名にこそおへれ猶梅の匂ひにぞいにしへの事も立歸り戀しうおもひ出らるゝ山吹のきよげに藤のおぼつかなきさましたるすべて思ひすてがたき事おほし

物のあはれは　●此あはれは面白き心に哀傷の義も含めり句　頭書云▲和漢春秋のあらそひあること也源氏物語に齋宮は秋を好み紫の上は春に心をよせ玉ふことをいへる所を見合すべし盤▲源氏に春秋のあらそひに昔より秋に心をよする人はかずまさりけり▲白樂天詩大抵四時心惣苦就中腸斷是秋天野　▲詩學大成四云自レ古逢レ秋悲二寂寥一我言秋夕勝二春朝一劉禹錫　▲萬葉第一額田王の歌に「花も見つ紅葉をもみつ虫の音も聲々多く秋はまされり▲又拾遺にも題不レ知詠人不レ知の歌に「春は只花のひとへに咲ばかり物の哀はあきぞまされる文

さる物にて　●秋のまさるといふも尤そうあれどもと也諺　●畢竟兼好は四季は物ごとにおもしろきこゝろなり參

今一きは　●一入の意也訖　●是より春のことを云諺

心もうきたつ　頭書云▲事文類聚前集に元祐二年正月東坡先生在二汝陰一州堂前梅華大開月色鮮霽王夫人曰春月色勝二如秋月色一秋月色令二人悽慘一春月色令二人和悦一云々參　▲東坡詩云春宵一刻價千金花有二淸香一月有レ陰「雁鳴て菊の花咲秋はあれど春の海邊に住吉の濱「常盤なる松のみどりも春くれば今一しほの色まさりけり訖

あんめれ　●あるなれと也諸

鳥の聲　●鷄と云說あれ共都ての鳥の囀と見るべ
し諺　頭書云▲韓文云以レ鳥鳴レ春參●陳圖南野花
啼鳥一般春といへる詩にもかよへり又東坡が詩に
春山磔々鳴二春禽一此間不レ可レ無二我吟一野●有仲集
に「百千鳥朝氣の空に遊ぶ也殊外にも春めきにけ
り文
殊の外に　●是より正月のこと也殊外にとかきた
りしおもしろし壽
のどやかなる日影　●長閑と書　頭書云▲東坡內
制集五云仙家日月本長閑送レ臘逐レ春豈亦然野
垣根の草　●壁の本などに萠出る草也　頭書云▲
拾遺集に「野邊見れば若菜つみけりむべしこそ垣
根の草も春めきにけれ文
もえ出る　●萠の字にてきざしめぐむこゝろなり
句　頭書云▲「岩そゝぐ垂氷の上の早蕨のもへ出
る春になりにけるかな說
春ふかく　●やう〳〵春ふかくなるなり二月の比
を云ふ野
花もやう〳〵けしきだつ　●咲べきけしきに色め
きたつ心なり文　頭書云▲玉葛にいつしかとけし
き立霞に木の目も打けむりとあり句
雨風打つゞきて　●春のくせ三日も四日も雨つゞ
きて諺
心あはたゝしく　●二說在先一義には●天氣晴な
ば花を見んとする內にはや花もちりゆけば心いそ
がはしき也諺●是は花を見るものゝ心也●又一義
には●心は花の心也あはたゝしきはいそがはしき
也句●雨說好む所にしたがふべし●氣色立といひ
ちり過ぬと云て花の盛をいはずしてそれとしらせ
たる眞に奇妙の文法也下卷の發端の句の心引合見
るべし句●こゝに花の盛をかゝざる事は兼好の例
の筆法也文　頭書云▲若紫に宮より明日俄に御むか
へにとの玉はせたりつれば心あはたゝしくてと
あり句　▲又花の心の說に▲杜子美詩に花飛有レ底
急一と作り紀友則が歌に「久方の光り長閑き春の日
にしづ心なく花のちるらん句
青葉に　頭書云▲西行が歌に「青葉まで見れば心
のとまる哉散にし花の名殘と思へば▲經繼卿の歌
に一散のこる花かあらぬか夏山の青葉が下にかゝ
る白雲句

行くまで　●花の散ての木末まで也諺
心をのみぞ惱す　●花をおもふによつてかれこれ
と心をなやますなり諺　頭書云▲杜子美曲江詩云
一片花飛減却春風飄萬點正愁人註云一片花
飛已滅春色況萬點倶飄固宜愁人參 ▲王荊公詩
云春色惱人眠不得月移花影上欄干野 ▲「世
の中にたへて櫻のなかりせば春の心の長閑からま
し增鐵▲「散ばとて花は歎の色もなし我爲にうき春
の山風「まてと云に散でしとまるものならば何を
櫻に思ひまさまし說 ▲山案業平の歌に「花に飽ぬ
歎はいつもせしかども今日の今宵に似時ぞなき
花橘は名にこそ　頭書云▲山案禹貢云淮海惟楊州
厥包橘柚錫貢▲孔安國疏小曰橘大曰柚▲異物志
云橘白華赤實皮馨香有味 ▲國史云垂仁天皇九年
辛酉春二月庚子朔天皇命田道間守遣常世國
令求非時香菓今謂橘是也十九年秋七月朔天皇
崩明年三月間守至自常世則賚物也非時香菓八
竿八縵焉間守於是悲歎云々乃向天皇之陵叫哭
而自死云々▲さて橘に昔を忍ぶことは業平の歌に
「五月待花橘の香をきけば昔の人の袖の香ぞする

とよめるを本歌として後々の歌にも橘に昔の香い
ある樣によめり橘の香に昔と云ふ緣あるにてはな
し自然橘に事よせて云也何れの花によせていはん
も同じ心なるべし
おへれ　●負字應字などを書花橘に昔を忍ぶは名
に立たる事なればさることなれど猶梅の匂にこそ
と下へ移りたる文法也句 ●たちばなといふを名に
立と取なしたるなり參 ●花橘に昔をしのぶ故事は
ことふもていふにも不及との心也全
猶梅の匂ひにぞ　●立花より猶梅が香に昔をしの
ぶといへる源氏の面影にてかゝれたると見へたり
句頭書云▲源氏早蕨に御前近き紅梅の色も香もな
つかしきに鶯だに見すぐしがたげに打鳴てわたる
めればまして春や昔のと心をまどはし給ふどち御
物語にをり哀れ也かし風のさと吹入るゝに花の香
もまらふとの御匂ひも立花ならねど昔思ひ出らる
るつまなり▲又新古今家隆の歌に「梅が香に昔を
とへば春の月こたへぬ影ぞ袖にうつれる句 ▲伊勢
物語に梅の花盛に去年を戀てよめる「月やあらぬ
春や昔の春ならぬ我身ひとつは本の身にして全 ▲

後拾遺に「一閑ちかき梅の匂ひに朝な〳〵あやなく戀のまさるころかなとよめるも梅の盛に昔をこひける心とかや文「色よりも香こそ哀とをもほゆれ誰袖ふれし宿の梅ぞも増鐵▲「梅花あかぬ色香も昔にて同じ形見の春の夜の月梅の匂に昔をこひしふ思ふこと若好色の家よりいはゞ梅の花盛に去年をこひて西の對へゆきしは在中將なり羅浮の梅の花のもとにて淡粧素服の人と酒もりせしは趙師雄にあらずや若又世をいきどをるものよりいはゞひとり花をひねりて香をかくものは羲之彦謙が徒にあらずやもし又詩人の家よりいはゞ前村の一枝園林の半樹いかでか雪の時の昔を思はざらん野

山吹 ●酴醾(ヤマブキ)ニ昔なり 頭書云▲山案下學集云酴醾日本所謂山吹是也暮春有レ花日本俗呼ニ欵冬一謂ニ山吹一者誤也とあれ共又格物論云酴醾花藤身青莖多レ刺毎ニ一穎一着ニ三葉一品字青跗紅萼及レ開變レ白其香微而清盤曲高架一種色黄似レ酒故加ニ酉字一とありしかれば日本の山吹とはすこし異なるか▲新勅撰に俊成「ふりぬれど吉野の川はそこきよみ岸の山吹うつろひにけり句

きよげ ●花やかに色はへて遠方よりも見ゆるものなり全 ●一説に山吹をきよげといひてほむるは黄色なればなり黄色は中央の色なる故に和漢共に五色の内にてはとり分て賞翫する也説

藤のおぼつかなき ●花の色のおぼろなるを云か句 ●藤は遠方より見わけられずしておぼつかなきもの也全 ●一説に藤は五色の外なる故におぼつかなきといへるとなん説 ●山吹藤は色につきて清と無覺束(オボツカナキ)とを對にかけり盤 ●此二色のさま能心をつけてあり〳〵とかけり殊勝の詞なり壽 頭書云▲山案爾雅江東呼レ藟爲レ藤▲本草註藟蔓ニ延木上一葉如ニ葡萄一而小五月開レ花七月結レ實青黑微赤▲和泉式部が歌に「見ても猶をぼつかなきは春の夜の霞の内にさける藤波句

すべて ●惣じて春の風景をいふ諺 ●又立かへり初春より暮春迄の風景をいふなり拳

すてがたき ●春は心のとまるもの數多ありとの結句也盤

[第一節]●ものゝあはれはと云より事をほしと云までなり●此節は春のけしきをいへり文

灌佛の比祭のころ若葉の梢すゞしげに茂り行ほどこそ世のあはれも人の戀しさもまされと人の仰せられしこそ實さる物なれ五月あやめふく比早苗とる比水鷄のたゝくなゞど心ぼそからぬかは六月の比あやしき家に夕顔の白く見えて蚊遣火ふすぶるもあはれなり六月祓又おかし

灌佛　●四月八日に行る是を佛生會と云推古天皇より始る釋尊天竺倶毘藍城にて生れ給ふ時天龍下りて水をそゝぎて釋尊にあぶせ奉りし事をいふ也是を灌佛といふは水を注ぐといふ事也其例にて百敷にも上達部より始て佛に水をあぶせ奉る也江次第に委諸　頭書云▲山案事文類聚前集卷之九云周昭王三十四年甲寅四月八日中天竺國淨飯王妃摩耶氏生二太子悉達多一三十五歲於二菩提場中一成二無上道一號曰二佛世尊一以二周穆王五十二年二月十五日一於二拘尸羅國娑羅雙樹間一入涅槃大慧禪師浴佛上堂語云今朝正四月八淨飯王宮生二悉達一吐レ水九龍天外來捧レ足七蓮從レ地發佛運統記▲南山釋迦氏譜云經云時四天王以二天繒一接持置二寶几上一帝釋執レ蓋梵王執二白拂一左右侍立難陀龍王兄弟於レ空吐レ水溫涼沐レ身普曜云釋梵雨レ香九龍下二香水一浴レ身修行云水左溫右冷釋衣裹レ身參▲浴佛功德經云爲二衆香湯一置二淨器中一先作二方壇一敷二妙牀座一於レ上置レ佛以二諸香湯一次第浴レ之用二香水一畢復以二淨水一淋二洗其像一人各取二少許洗像水一置二自頭上一初於二像上淋レ水時一應レ誦二此偈一云我今灌二沐諸如來一淨智功德莊嚴聚五濁衆生令二離垢一願證二如來淨法身一文▲(異說)遵生八牋第三引二玄樞經一曰二月初八日乃佛生日也周建レ子以二子月一爲二歲首一是以二十二月一爲二正月一也莊王九年四月初八日釋迦生者不レ考二歲首建支一猶以二四月一爲二歲規一何其謬哉出野槃全▲今從二八牋說一則涅槃亦當二十二月十五日一與涅槃經第三十師子吼品第十一之四云師子吼言二世尊一如來何故二月涅槃善男子二月名レ春春陽之月萬物生長種植根栽花果敷榮江河盈滿百獸孚乳是時衆多生二常想一爲レ破二衆生如レ是常心一說二一切法悉是無常一云々依レ此觀レ之十二月十五日豈萬物生長花果敷榮時乎且雖レ有二夏殷周三代建支不一レ同是中華之法而全非二天竺之制一句▲天竺の經を譯する時あまたの評議ありて周の世と天竺と建斗をかんがへて此方の四月八

日に相應するやうに譯することとなれば爭で加樣に
覺束なきことあるべきぞや參
ころ ●此とは四月八日の前後をさすなり殘の比
といふも皆如此其折節の景氣よくうつし述られた
り山案
祭 ●四月中の酉の日は賀茂の御形とて祭有也み
あれとは賀茂の明神御誕生日をいふ也全 ●此日を
祭とばかりいふて賀茂祭といはぬはいかにといへ
ば賀茂は山城愛宕郡の初生神なれば花といへば櫻
寺といへば三井寺山といへば比叡山御門跡といへ
ば仁和寺御室佛といへば釋迦子曰といへば孔子の
詞詩といへば詩經書といへば書經としるたぐひの
如し都にて祭とさへいへば賀茂祭の事也參　頭書
云▲祭賀茂の祭を云ふ也賀茂の國祭は四月中の申
日行る是賀茂の本祭なるべし賀茂祭は中の酉日行
る人々葵かづらを掛て祭るなり前日に賀茂松尾の
社司この葵をさゝぐるなり此祭は欽明天皇より始
る又申の日に關白の賀茂詣と云こともあり皆公事
根源にあり野 ▲當日の使は近衛司これを勤む昔夢
の告侍しより今日人々葵かづらを懸るなり江次第

にくはし文 ▲山案諸社記云欽明天皇御宇天下擧
國風吹雨零爾時勅卜部令卜賀茂神祟也撰
四月中祀馬繫鈴人蒙猪影而驅馳以爲祭天下豐
年乘馬始於此 ▲兼敦云於造社者天武六年也於
祭者自欽明被始行四月酉日也若朔日當酉若
下酉行之 ▲此祭を御形と云也花鳥云みあれは玉
依姫の別雷をうみ玉ひし所を云にやさて御生とも
書則かたちをあらはし玉へる故に御形とも書り神
館は糺と御祖との間をきみねといふ所にあり河海
云賀茂祭前日於垂迹石上有神事號御形御阿
禮御生也
若葉の稍すゞしげに ●わかやかにいさぎよさを
涼しきと云也文　頭書云▲樂天詩綠樹陰前逐晩
涼野 ▲山案清少納言が云祭の比はいみじうをか
しき木々のこの葉まではいとしげうはなうてわかや
かに青みたるにと云々これをうけてこゝをかける
と見へたり
人の戀しさ ●花に見し梢の替り行て其花の便り
に問來し人も音信ぬより盛者必衰の理りも思ひし
られ又人も戀しきと也文　頭書云▲後の人の字晴

に躬恒をさすか古今春部下躬恒か歌に「我宿の花見がてらにくる人は散なん後ぞ戀しかるべき句▲山案六百番歌合に後鳥羽院御製「花は散ぬいかに云てか人またん月だにもらぬ庭の梢に

人の仰せられし　◉人の字躬恒を指といへどたゞ誰ともなしにみたるがよき也參◉人の仰れしとは大納言以上を指也全

五月　◉清輔奥儀抄に五月川うる事さかりなる故にさなへ月といふをあやまれり予按ずるに是はあやまりとはいはれまじ二字中略なるべし參

あやめふく頃　頭書云▲天平五年に勅ありしより五月五日に菖蒲をふけりあやめとは蛇の異名なり菖蒲の根の赤き所くちなはに似たる故かく云也これをずた〳〵にきりて酒に入るは毒蛇を退治するの心也と朗詠の古き抄に見へたり又一義に蛇をあやめると云ふ義也ともいへり年齋拾唾端午の部に委し參天平十九年五月に勅ありて百官諸人ことごとく菖蒲の蘰（カツラ）をかくべしかけざらんものは宮中に入べからずと定めらる弘仁式にも五月三日平旦に菖蒲よもぎ花など南殿の前にをくとあり公事根源に見へたり▲拾芥云五月四日主殿寮葺ニ內裏殿舍菖蒲一▲荊楚記云五日以レ艾縛ニ一人形一懸ニ于門戸上一以辟ニ邪氣一▲事文類聚前集云端午以ニ菖蒲一或縷或屑泛レ酒野▲枕草子云節は五月五日にしくはなし菖蒲艾のかほりあひたるもいみじうをかし九重の內を始めていひしらぬ民の栖までいかで我もとにしげくふかんと葺わたしたる猶最めづらしくいつかことをりはさはしたりし▲狹衣云中將の君內よりまかで玉ふ道すがら見給へば菖蒲ひきぬる賤男がひまなく行ちがひもてあつかふさまどもげにいかばかり深かりける十市の里の戀路ならんと見ゆる足もとどものいみじげなるをもしらず顏にいとをほく持たるもいかにくるしからんと目とまり給ふて「うきしづみねのみなかるゝあやめ草かゝる戀路と人もしらぬにとぞいはれ玉ふ文▲山案續拾遺に「菖蒲草いつのさ月に引初て永きためしのねをもかくらん▲永能百首に十樂院宮「菖蒲葺ならひしなくば年をへて有も軒端を何にかくさん

早苗とる比　頭書云▲樂天詩云碧毯線頭抽ニ早稻一野▲山案續拾遺順德院「峯の松入日涼しき山陰の

すそ野の小田に早苗とるなり▲躬恒の歌に「昨日まで早苗とりしかいつのまに稲葉もそよに秋風ぞ吹

水鶏のたゝく　●たゝくは鳴ことなり鳴聲物をたたくやうなりと也盤　頭書云▲源氏明石に春秋の花紅葉の盛なるよりはそこはかとなく茂れる陰どもなまめかしきに水鶏の打たゝきたるは誰門さしてもあはれに覺ゆるとあり壽▲歌に「また宵に打來てたゝく水鷄哉誰門さして入ぬなるらん諸▲詞花源雅光が歌「終夜はかなく叩く水鷄かなさせりともなき柴のかりやを句▲金葉題綱歌に「朝ごとにたゝく水鷄の音す也心のとまる宿やなからん各

心ぼそからぬかは　●心ぼそくなひか心ほそきといふ文法也説

六月　●奥義抄に六月農の事皆しつきたる故にみなし月と云事を誤れり●一説に此月誠にあつくして殊水泉枯つきたる故に水なしといふをあやまれり予按するに是も中畧なるべし參

あやしき家に夕顔の　貧家をいふ也句●怪しきの注前にあり　頭書云▲夕貌の巻に彼白く咲るをなん夕顔と申侍る花の名は人めきてかうあやしき垣根に咲侍ると申▲又夕貌を唐の歌に作りたるは杜子美が除架の題註に瓠架なりと有其詩曰束薪已零落匏葉轉蕭疎幸結ニ白花ー了寧辭ニ青蔓除ー秋虫聲不レ去暮雀意如何寒事々牢落人生亦有レ物野▲山案六百番歌合「葎にふ賤が垣根も色はへて光ことなる夕貌の花有家

蚊遣火云々　頭書云▲古今戀歌匡房「夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまで我身下もへにせん▲詩學大成蚊詩幾回揮レ扇摩難レ去纔聽ニ薫煙即逆レ除野

六月祓　●堀川百首抄云悪神をなだむる故になごしの祓と云也萬葉に和儺祓と書り又荒和祓ともいふなり文　頭書云▲山案此祓を水無月大秡とも名越祓とも云なり▲下學集云名越之祓六月盡也夏秋交代之時候也而夏火秋金火與レ金相尅故越ニ夏之名ー攘ニ相尅之災ー故云ニ名越之祓ー也▲令云凡六月十二月晦日大祓東西文部上祓刀讀祓詞訖百官男女聚ニ集祓所ー中臣宣ニ祓詞ー卜部爲ニ解除ー▲公事根源云大祓は六月晦日百官こど／＼く朱雀門にあつま

りて祓をするなり六月十二月二度あり天武天皇の御時より始る又今日家々に輪をこゆることあり「みな月の名越の祓する人は千年の命のぶといふ也此歌を唱ふるとぞ申傳へ侍るしかるに法性寺關白の記に「思ふ事皆つきねとて麻の葉をきりにきりてもはらへつる哉此歌を詠べしと見たり野▲河原に五串たて麻の葉などにて祓をする也此六月祓歌に月をよめるありそれを定家卿の注に必晦不レ限六月河原出臨レ祓又納凉皮絲竹遊ありとなれば六月の中比にも祓あるべし但し大祓といふは晦日なり參

又おかし　●又おかしとは春に對してなり

【第三節】●灌佛の比と云より又をかしまでなり●此節は夏のことを云ふなり

七夕まつるこそなまめかしけれやう／＼夜さむにな（八月の比諸）る程雁鳴て來る比萩の下葉色づくほどわさ田かり（早田也參）ほすなどとりあつめたることは秋のみぞ多かる又野分の朝こそおかしけれいひつゞくれば皆源氏物語枕草紙などにことふりにたれど同じ事又今さらにいはじとにもあらずおぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざなればふでにまかせつゝあぢきなきすさびにてかいやりすつべきものなれば人の見るべきにもあらず

七夕まつる　●七夕まつるとも又乞巧奠（キッコウデン）ともいふなり天平勝寶の比より始る公事根源に御殿の庭に机を置き色々の物をすへたらひに水を入大空の星をうつすよしあり今日五釆の糸を竿にかけて手向るを願の糸といへり諺　●又星に手向る詩歌を芋の葉の露を硯にすりて梶の葉に書事あり文　頭書云▲述異記云天河之東有二美麗女人一乃天帝之女機杼女工年々勞役織二雲霧綃縑之衣一辛苦殊無二歡悦一容貌不レ暇二整理一天帝憐二其獨處一與二河西牽牛之夫一婚自後竟廢二織經之功一貪レ歡不レ歸帝怒責歸二河東一但使下一年一度與二牽牛一相會上云々　▲晉傳玄擬夫問云七月七日牽牛織女會二天河一杜公瞻註此出二流俗小書一尋二之經史一未レ有二典據一詩十三大東云睆（ミテ）二彼牽牛一不三以服二箱終日七襄説者以爲二一星有レ名無レ實云々參　▲續齋諧記曰桂陽城武丁有二仙道一忽謂二其弟一曰七月七日織女當レ渡レ河弟問織女何事渡レ河答曰暫詣二牽牛一世人至レ今云三織女嫁二牽牛一是也句　▲

風土記云七月初七夜酒二掃中庭一施二几筵一設二酒脯一
率牛織女相會守レ夜者咸懐二私願一或曰見二天漢中一
有二奕々白氣光耀五色一以レ此爲二徵應一見者便拜願
乞レ富乞レ壽無レ子者乞レ子惟得レ乞レ一不レ得二兼求一
三年乃得▲事文類聚前集卷之十云京師舊俗初七晩
貴家多結二綵縷於庭一謂二之乞巧樓一鋪二陳磨喝樂花爪
酒炙筆研針線一或兒童裁レ詩女郎呈レ巧焚レ香列拜
謂二之乞巧一婦女望レ月穿レ針或以二小蜘蛛一在二合子
內一次日看レ之若二網圓正一謂二之得一レ巧里巷與二妓館一
往々列レ之▲又梶の葉に歌を書こと新勅撰集に「草
の上の露とる今朝の玉章に軒端の梶はもとつ葉も
なし▲今日雨ふれば二星不レ逢と世俗にいふは歲
時雜記に七月七日の雨則云二洒涙雨一と云るを誤り
つたへたるにや
なまめかし　●最媚共嬋媚共書優美なる體やさし
き心前にくはし諸
雁鳴て　頭書云▲山案格物論云雁陽鳥泊二江湖洲
渚之間一動計千百大者居二其中一令二雁奴（ヤトモズレバ）圍而警察上
飛有二先後行列一秋南而春北又其大者羽毛純白▲詩
疏云大曰レ鴻小曰レ鴈▲管子云鴻鴈春北而秋南不レ
失二其時一▲月令仲秋之月鴻鴈來野▲一年を七十二
候に分つ時八月のはじめ五日の間を鴻鴈來候と名
付又九月の初五日を鴻鴈來賓候とあれば八月より
九月へ掛間を指參
萩の下葉　頭書云▲古今に「秋萩の下葉色づく今
よりや獨ある人のいねがてにする▲拾遺に人丸此
頃の曉露に我宿の萩の下葉ぞ色つきにける文
取あつめ　●源氏の詞をもつてかけり　頭書云▲
夕貌の卷に白妙の衣うつ砧の音もかすかにこなた
彼方聞わたされ空とぶ雁の聲とりあつめて忍びが
たきこと多かりと云々文
秋のみぞ云々　●景氣のおもしろきは秋こそ多け
れとなり諺
野分の朝　●和名云暴風（ハヤチ）●漢語抄に八夜知又乃和
木加世文●風はけしくて野草を吹わくるによりて（ノハキノカゼ）
秋風のつよきを云諺　頭書云▲枕草紙風はと云條
に野分の又の日こそいみじふあはれにをぼゆれと
あり▲源氏にも野分の卷あり諸
源氏物語枕草紙　●源氏に野分の卷あり又幻卷に
四季の詞あり枕草紙には發端に四季の景をかけり

又木の花ほと云條の面影よく相似たり參　頭書云
▲此段兼好自ら枕草紙源氏物語に似たる樣にいへ
ど筆力いかてか淸紫の二女の彤管(トウカン)にをとらんや野
ことふりにたれ　●舊の字にの字は助語ことふり
たれどゝいふ義なり又似の字を書て源氏に似たる
といふ說もあり諸
同じ事　頭書云▲兼好淸紫の二女の筆の跡を同し
樣に書しといへど此方より見れば源氏枕草紙に似
ながら又新しく云ひかへたり詞が似たるとも何ぞ
心の新しきを害せんや▲事文類聚別集卷六云詩惡
レ蹈二襲古人之意一亦有下襲而愈工若レ出二於己一者上
魏人章疏云福不レ盈レ耳禍將レ溢レ世韓愈則云歡華不
レ滿レ眼咎責塞二兩儀一李華吊古戰場文云其存其沒家
莫二聞知一人或有レ言將信將疑悁二々心目一夢寐見レ之
陳陶則云可レ憐無定河邊骨猶是春閨夢裏人蓋工二
於前一也▲又詠歌大概にも詞以レ舊爲レ本とあり山井案
いはじ　●同じことといはぬといふ法度もなければ
也諺
おほしき事いはぬ　●思ふ事をいはねばと也參
頭書云▲世繼の序にをぼしき事いはぬはげにぞ腹
ふくるゝ心ちしけるかゝればこそむかしの人は入
侍りけめ野▲元眞集に「夏衣いとゝ淚にそぼちつ
つをぼしきこともいはで來にけり文
腹ふくるゝ　●胸中に欝してとゞこほりて腹ふく
るゝやうなれば也參
あぢきなき　●日本紀に無レ爲と書てあぢきなき
とよませたりせんかたなしといふ義なり句無端(アヂキナキ)筆
のすさみなり文無二味氣一とも書說
すさび　●遊字說●手ずさみ口すさみなといふて
なぐさみ也參
かいやり　●三說有一義には●書破と書てかきや
ぶりすつるの中略也●又かい其まゝ破り捨る也●
又書やりすつるなり野●又一說に且やりと書たる
本有句三說共に通して卑下の詞也說
人の見るべき　●かやうの反古をば人の見ること
もあらじとなり諺
[第四節]●七夕まつる比と云より見るへきにもあ
らずまでなり●此節は是秋の景色こゝ秋にはおさ〳〵おとるまじけ
れ汀の草に紅葉の散とゞまりて霜いと白ふをける朝

やり水より煙のたつこそおかしけれ年の暮はてゝ人每にいそぎあへる頃ぞ又なくあはれなるすさまじき物にして見る人もなき月のさむけくすめる二十日あまりの空こそ心ぼそきものなれ御佛名荷前の使たつなどぞあはれにやんごとなき公事どもしげく春のいそぎにとりかさねてもよほしおこなはるゝさまぞいみじきや追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれ晦の夜いたうくらきに松どもともして夜半すぐる迄人の門たゝきはしりありきて何事にかあらんことことしくのゝしり(訇の字)て足を空にまどふが曉方よりさすがに音なく成ぬるこそ年の名殘も心ぼそけれなき人(亡ひと)のくる夜とて玉まつるわざは此比都にはなきをあづまのかたには猶する事にて有しこそあはれ成しか

おさ〳〵　●長字也少は秋におとる共多くはおとらじとの心也盤　頭書云▲花鳥餘情云漸又頗など云が如し云々秋のけしきにも大かたをとるまじきとの心なり文

汀　●池の汀など也諺

霜　頭書云▲太戴禮云霜露陰陽之氣陰氣勝則凝而成ㇾ霜古▲山案白虎通云露者霜之始寒則變而爲ㇾ霜▲釋名云霜者喪也其氣慘毒物皆喪也

やり水　●筧の水をいふ又細き流を云諺

煙のたつ　頭書云▲冬になれば人の口より出る息も目に見へ水に日移れば必ず烟の立はいかにといふに夏の時分には天地の間に陽氣みち塞るゆへに人の口より煖氣をはくといへど又日の水にうつるときも天地の陽氣にけたれて其氣象見へぬなり冬者陰氣つよく天地の間にふさがる折なればわづかの日影の水をむす烟も外に見へ人の息の口よりいづるも陰の中に陽氣をあぐる故にあらはにも見へ侍る參

又なく　●又なくは無二亦無三なり●是よりあはれ成事又とあらじといへる義也句●兼好閑人の心より此世上のいそがはしきさまを又もなく愛したるなり文

すさまじき　●時分過ぎつきなき頃也十二月の月いつよりもすさましきにことに二十日あまり猶見るやう也參　頭書云▲朝貌卷に時々につけて人の心をうつすめる花紅葉のさかりよりも冬の夜のすめる月に雪のひかりあひたる空こそあやしう色な

きものゝ身にしみて此世の外のことまで思ひながされ面白さもあはれさものこらぬをりなれすさまじきためしにいひ置けん人の心あさゝよとて御簾(ミス)捲上させ給ふ▲總角によの人すさまじきことにいふなるしはすの月夜の曇りなくさし出たる▲河海云清少納言枕草紙にすさまじきもの師走の月夜おうなのけさう簟か日記に師走の望月の比月いとあかきに物語しけるを人みてこれそあなすさまじ師走の月夜にもあるかといひしもぞあはれなりける壽▲狹衣にもげにすさまじき物にいひをきたる師走の月も見る人からにや宵過て出る影さやかにすみわたりて云々文

御佛名　◉十二月十九日より二十一日まで三ケ日なり或は一夜も例有此佛名といふは三世の諸佛の名號をとなへて六根の罪を滅するなり誠に佛名經にとかるゝ所の功德ははかりなきにや寶龜五年光仁天皇十二月よりはじまる承和の比は仁明天皇毎年佛名三ケ日の間は諸國にて殺生禁斷のよし格に見えたり。くはしく公事根源にあり諺　頭書云▲元亨釋書九釋靜安從ニ西大寺常騰一學ニ法相一嘗居ニ比良山一讀ニ十二佛經一禮拜修懺其聲聞ニ帝闕一諸州亦有ニ聞者一因レ茲勅賜ニ僧官一承和五年奏請ニ宮中季冬佛名懺一野▲江次第十一云貞觀十三年九月八日格應レ安ニ置一萬三千畫佛像七十二鋪一事元興寺大法師賢瀧奏狀先師故律師靜安承和年中奉レ勅爲ニ國家一禮ニ拜佛名一始行ニ內裏一漸遍ニ天下一文　▲仁壽殿の御本尊を移して御帳の中にかけて南額の間に又南北に札を立て佛像塔形を置き佛前に香華をそなふ導師にかづけの綿のことあり又勸盃の事あり昔は終夜となへければ延喜の御代などは夜の御殿にて和琴をかき合玉ひけるとかや參　▲昔は內裏にてありしか今はなし西山槙尾にて被レ修ニ三世諸佛の御名を唱て年中の罪を懺悔す三千佛名經を讀誦するなり堀川次郎百首一「言の葉に三世の佛の名をかけて作れる罪は露もとまらし顯仲同「かづすきぬる綿引かけよ小夜ふけて室へかへらんせなかかくして說　▲山案佛名經曰若有ニ善男子善女人一聞ニ是三世三劫諸佛世尊名號一歡喜信樂▲江次第云承和十三年十月二十七日格自ニ十二月十五日一迄ニ十七日一三ケ夜云々▲仁壽三年十一月十三日格改定從ニ十九日一迄ニ二

十一日ニ三ヶ夜云々　●枕草紙きら〳〵しきものと云條に十二月二十四日宮の御佛名の初夜の御導師聞て出る人はと書り是を以て見ば二十一日結願とするにも定まらざるか句

荷前の使　●のざきともにさきとも兩樣にとなふる也句　公事根源云十二月吉日をゑらぶ先十三日につかさ〳〵をかさねてさだめらる使は公卿のも殿上人のもあり荷前とは十陵八墓に年の終りに幣帛を奉らせたまふなり諸　頭書云▲江次第云十陵山階天智天皇在ニ山階一　田原光仁天皇大和添上郡一　柏原桓武天皇在ニ伏見也一從ニ東邊一二町計入稻荷在ニ南野一　八島崇道天皇在ニ大和添上郡一天長九年止ニ國忌一而猶在ニ十陵内一　深草仁明天皇在ニ嘉祥寺内一　後田原光孝天皇在ニ仁和寺内大教院丑寅一　後山階醍醐天皇在ニ醍醐寺北菩陀羅堂丑寅一　宇治贈皇太后宮穩子　中宇治贈皇太后宮安子　今宇治贈皇太后宮茂子　▲八墓　多武峯鎌足江次第淡海公　宇治贈正一位愛宕護贈太政大臣忠仁公　葛野贈一品太政大臣仲野親王　後葛野贈正一位當宗氏　宇治贈正一位昭宣公　小野贈太政大臣正一位藤原高藤公　後小野贈正一位宮道氏　後宇治贈正一位皇太后班子仲野親王女　▲拾芥云今案荷前日除ニ後田原八島ニ陵一之外公卿爲レ使以ニ大夫一爲ニ次官一田原八島幷九墓使以ニ侍從二人一爲レ使長官次官毎レ陵加内舍人内豎大舍人各一人令ニ供奉一但多武峯不レ差ニ侍從一以ニ内舍人一人一爲レ使内豎以下同レ前野　▲日本事跡考云荷前撰レ日以ニ今年所レ貢物一先薦ニ于陵墓一以奉ニ幣帛一參

あはれにやんごとなき　●あつはれと也全　●おほやけことなればやんごとなき也文

公事共しげく　●(公事共)禁中に行るゝまつり事也野　●(しげく)繁の字諺　頭書云▲すなはちこゝに書る御佛名荷前追儺などの公事とも打つゞき行るゝなり其外御髮上着駄の政内侍所の御神樂御贖物大祓など云ふことあり公事根源等にくわし說

春のいそぎ　●正月の御用意にとりかさねて也壽

いみじきや　●此やの字はうたがひのやにはあらず決定したることはなりいみじきやとはほめたることばなり諸

追儺　▲ついな共なやらふとも鬼やらいともとなふる也句　●十二月晦日也追儺とは年中の疫をおひはらふ也やらふとは追と云詞也儺は鬼也今夜殿上人御殿に立て桃の弓葦の矢にて鬼を射る也方相氏四目ある面を着て手に楯矛をもつ又侲子とて二十人紺の布衣着たる者をぐして内裏の四門をめぐるなり文武天皇慶雲二年に此年百姓おほく疫になや

まされしによつて此事はじまる也參　頭書曰▲公事根源云十二月晦日に行る今日はなやらふ夜なればば大舍人察鬼をつとめ陰陽寮祭文を以て南殿の邊につきてよむ上卿以下是をおふ殿上人とも御殿の方に立て桃の弓葦の矢にて射る仙花門より今東庭を經て瀧の戸に出づ今夜御所に灯火を多燃す東庭朝餉臺飯所の前のみぎりに燈臺をひまなくたてゝともすなり追儺と云は年中の疫氣をはらふ心なり鬼といふは方相氏のこと也云々下略野▲山案呂氏春秋季冬紀注曰前レ歳一日撃レ鼓驅ニ疫癘之鬼一謂ニ之逐除一亦曰レ儺▲又月令云季春命レ國儺季秋天子乃儺季冬命ニ有司一大儺▲山海經云昔顓頊氏有ニ三子一亡而爲ニ疫鬼一居ニ江中一爲ニ瘧鬼一一居ニ山谷一爲ニ魍魎蜮鬼一一居ニ宮室區隅中一善驚ニ小兒一於レ是以ニ歳十二月一命ニ祀官一時儺以索ニ宮中一而驅ニ疫鬼一謂東海度索山有ニ神荼鬱壘之神一以禦ニ凶鬼一爲レ民除レ害因制ニ驅儺之神一云▲其外事文類聚新唐書文選等に出る野槌句解參考等に委し今こゝに略するなり▲衣笠(キヌガサ)内大臣家良の歌に「百敷の大宮人はきゝつきて鬼をふ程に夜はなりにけり

四方拜　●公事根源云元日の寅の時天皇屬星をとなへて天地四方山陵を拜み給て年災をはらひ寶祚をいのり申さるゝ義にて侍るにや此事いつはじまるとも見えず仁和五年正月とらの刻に天地四方屬星山陵を拜し給ふよし宇多天皇紀にあれと濫觴とは見えず又皇極天皇雨をいのり給ふとて南淵河上に行幸ありて四方を拜し給ひければ雨五日までふりけるよし日本紀にのせたればこれなどをやはじめとも申べからん其上屬星を拜して災難をのぞく趣は天地瑞祥志といふ書にも見えたり野　頭書云▲山案公事根源に天地四方の山陵を拜み給ふとあり四方の山陵とは東は吉田南は男山西は愛宕北は加茂此四社を拜し玉ふとなり▲江次第曰四方拜事追儺後供ニ御湯一(主殿寮)鷄鳴(掃部寮)奉ニ仕御裝束一於ニ清涼殿東庭一先敷ニ葉薦一其上敷ニ長莚一南北妻其上立ニ御屏風四帖一設ニ御座三所一一所拜ニ屬星一座(座前立レ机燒レ香置レ花燃レ灯)一所拜ニ天地一座(座前立レ机置レ花燒レ香)以上座鋪ニ短帳一但拜ニ天地一座別鋪レ褥一所拜ニ山陵一座(輔レ褥或本疊)出御(横櫨)近衞次將取ニ晝御座御劍一前行侍臣等持ニ脂燭一藏人持ニ御笏式御筥等一檢ニ舊記一先置々云然而近例如レ此入御

於二御屏風裏一次皇上端レ笏北向稱二御屬星名字一是北斗七星也子年貪狼星字司希神子丑亥巨門星字貞文子寅戌祿存星字祿會子卯酉文曲星字微惠子辰申廉貞星字衛不隣子巳未武曲星字賓大惠午年破軍星字持大景子次再拜咒曰私曰咒文可レ用二内裏式一也延久御記又可レ爲二本説一歟先規不レ同也賊寇之中過度我身毒魔之中過度我身毒氣之中過度我身内裏式在危厄句下毀厄之中過度我身内裏式作危厄五鬼六害之中過度我身内式在五厄五兵口舌之中過度我身内式在厄句上厭魅咒咀之中過度我身内式無北句萬病除愈所欲隨心急々如律令内式作百病次北向再二拜天一向レ乾庶人次西北向再二拜地一庶人或向レ坤次以レ坎向二四方一各再拜九條年中行事起レ子終レ酉四條大納言記起レ東終レ北此説可レ被レ用レ之雨雪等時供二御座於射場殿一九記卯刻庶人者拜二四方一後可レ加二大將軍天一太白以上再拜氏神兩段再拜竈神先聖先師以上先聖先師不レ可レ用二再拜一文學志ノ人ハ可レ拜レ之

つゞくこそ　●上の公事どもしげく春のいそぎに取かさねてといへる證文に追儺より四方拜につゞく事を書出せり句

晦の夜　●月こもるの義也つもごりは誤也參

いたう　●痛の字又甚字をも用句

松ども　●或書に松明今按に俗にわり松參

人の門たゝき　●是皆今の俗に十二月晦日にかけこふとて人々のありくをいふと見えたり句　●一説に京童ども松ともし手に八九寸ばかりの木をけづり持て家々の門を人の耳にさかふ事をいふてたゝきのゝしる事夜半過る頃までなり年の名殘も今宵はかりとどよめきたゝくされど古よりふせぐ人もなしそれも夜ふくれば音せぬなり説

足を空にまどふ　●いそがはしくありく義也盤　●商人の體諺　頭書云▲源氏葵卷に足を空にてたれもしまかで玉ひぬ野　●夕貌卷に足を空に思ひまどふ句

さすがに　●明れば元旦なれは諺

音なく　●右の句といふにかけて見るべし諺

年の名殘も　●今年もはや此かぎりぞとおもへばなり諺　頭書云▲歌に「行年の惜くもある哉ますます鏡見る影さへに暮ぬと思へば「數ふれば我身に年のよるものを何いそぐらんをくりむかふと説

なき人のくる夜　●此説は報恩經に一年六度其靈來ると説りしかれども七月十四日十二月晦日此兩度を別してまつりけるにや兼好時代より盂蘭盆經

の餓鬼供にことより七月ばかりになりけるにや全
頭書云▲報恩云二月十五日寅時來次日午時歸五月十五日卯時來次日已時歸七月十四日卯時來次十六日午時歸八月十五日辰時來次日申時歸九月十六日未時來次日申時歸十二月晦日午時來正月一日卯時歸也右亡靈之來去之時日也文▲一說にいかなる故有て歲終に祭るぞと云ば昔は佛法かすかにして七月十五僧自恣日玉祭もなべて世にひろまらざる時節には陰陽に氣交代の理にて神靈をまつれり其仔細は神氣は陰氣の逼迫するところとへかくれひそまる故に方角にとれば丑寅の間が陰氣のせまる方なれば鬼門名付時にとれば丑寅は夜半の後なり此時神靈をむかへん爲に宵より門火を燒て且招魂するなるべしこれを一年に配すれば十二月は丑の月正月は寅の月なれば丑寅の間か師走の晦日にして陰氣せまる時なるゆへに此夜追儺をして惡鬼をはらひ先祖の肅氣をむかへてまつるなるべし梨窓に筆にもくわし參▲拾遺曾禰好忠歌に「玉祭る年の終りになりにけり今日には又やあはんとすらん野▲和泉式部歌に「なき人のくる夜ときけど君もなし我住宿や玉なしの里文▲後撰集「なき人のともにし歸る年ならばくれ行今日はうれしからまじ說▲枕草紙木はと云條ゆづり葉の下に師走の晦日にしも時めきてなき人のくひものにもしくにやとあはれなるにとあり句

玉　●玉は魂魄なり諸

此頃　●兼好時代にさへ都になしと書たり今は其沙汰もなし東國にも今は此沙汰なきとぞ壽

猶する　●昔は有しと云心なり猶字よくしれたり增鐵

あはれなりしか　●此かの字清でよむべし哉の義なり句

[第五節]●さて冬がれと云よりあはれ成しかまでなり●此節は冬の景色をいへり文

かくて明ゆく空のけしき昨日にかはりたりとは見へねど引かへめづらしき心地ぞする大路のさま松立わたしてはなやかにうれしげ成こそ又あはれなれ

明ゆく　●又春にかへしていへり面白き筆法なりいくとせも又同じ事なるはしを起せり盤　頭書云▲玉葉に立春貫之「今日に明て昨日に似ぬは皆人

のこゝろに春の立にけらしな古 ▲後拾遺卷頭小大君歌に「いかにねてをくるあしたにいふことぞ昨日をこそと今日をことしとこの歌の面影引合ふ味べし句

大路 洛中をいふ諺

松立わたし ●淸明が說に巨旦が墓の木を學て松を門にたて其火葬の火をまねて炭を結び付る事ある彼巨旦は祇園の午頭天皇の敵なる故に巨旦を降伏する事を歲の初におこなふ時は疫病をうけぬといふ心なるべし午頭天皇は疫病をはらふ神なる故也かく陰陽家の說もふりたる事なれど松は素より目出度ものなれば松柏不ㇾ調といひ又抱朴子にも松柏龜鶴とを壽事に比したる事あれば千代もといのる心より初春に松をうふるなるべし參 頭書云▲素盞烏尊南海へ通ひ玉し時宿を巨旦將來にかり玉ひけれども備奉らず蘇民將來宿をかし奉る其後尊いかりて巨旦を殺しその家を亡し玉ふ是を後の世までのしるしとせんとて巨旦が墓の上に生たる松を年の始めに門に立るなり此事淸明が簠簋(ホキ)內傳に見へたり野 ▲世諺問答に云一條禪閤御說松は千年を契り竹は萬代をちぎる物なれば年の始のいはひごとに立侍るべし云々 ▲堀川百首に「門松をいとなみたつる其ほとに春明かたに夜やなりぬらん文 ▲抱朴子云人中之在ニ老彭一猶ニ木中之有ニ松柏一 ▲又曰衆木不ㇾ能ㇾ法ニ松柏一諸虫不ㇾ能ㇾ學ニ龜鶴一參

はなやかに云々あはれなれ ●貴賤上下さゝめきよろこぶ也參 此あはれはおもしろき義なり句

〔第六節〕●かくてと云より終まで也●年の終までをいひつくして又春に立かへりたることをこゝにいふ此段の發端に折節のうつりかはると書出したるによく相應せり女文字書るも男文字の文法に異ならず是常山の蛇の首尾相救ふといふ又此段秋と冬との間に源氏枕草紙の例をひく是もゆるやかにしてつづまらぬ筆法なり野

〔一段之統論〕●此段は上段に樂と云ふ物は富貴人のみに非ず貧家にもあれど人々の知しめんとて許由孫晨がことを引て只志を樂めと敎し緣を受てかけりされば死生在ㇾ命富貴在ㇾ天といへり不ㇾ叶ことを求ことなかれと也財なきとて樂なきに非ず春花秋月は一人のためならず本より春夏秋冬は天下

の四時なりそれ〳〵に素して樂めとなり今兼好かく觀ぜられたれば四季の内何れをすてんところもなく皆をもしろしとなりされど一時の景氣にたはれて著を破すは大きにあしきことなるとしらせんために四時の轉變を書て一所に心をとゞむまじきことを書りさて樂慰むといへど世俗の志とはちがひ若葉の梢に世のあはれを感じ年の名殘には人生の無常ことを觀じ折にふれてそれ〳〵に皆佛道を修するたよりとなることをいへり説 ● 兼好文章は段々すべて古人のいまだ云ざりし所に心をつけ詞をうるほせり此段にも同じ四季の風景を書つらぬる中に若葉の梢に世の衰人のこひしさを云ひ冬枯の景色を秋に劣じと書しはすの晦日より元日の空の景色に書移せる筆力古今未曾有也是源氏枕草紙にもをとるまじき所なるべし文 ● 或說云此段二三の奇妙あり一には四季の次第をいはゞ春より書初て冬まで終るべきに却て秋よりはじめて又春にて書をはれる是人の及はさる所なり二秋と冬との間に言葉を入れて冬の景物すくなけれど多き樣に書たり三には一段の骨子の哀の八字にてすへたり退之が孟郊を送る序に鳴字三十九用ひたるが如し讀人多きを覺へず參 ● 山案又此の字も九つまで用ひながらしかも耳にかゝらず其時の風景それとさし難くきはまりなき興あるところをば比字を以て含せたり ● 今此段を以て見れば一年の春秋に每日もあふよふにてをかしく侍る古き草子をば誰も見ることながら加樣に新しく取成て書連ぬん人は近き世に有べしともをぼへ侍らず公の仰にて光源氏のごとくなる物語を書と仰らるゝとも書かねらるべき筆の威とは更に思れぬは老の僻にや侍らん奇妙とも中々也貞

〔卄〕なにがしとかやいひし世すて人の此世のほだしもたらぬ身にたゞ空の名殘のみぞおしきといひしこそ誠にさもおぼえぬへけれ

なにかし ● 何某諺 某字野 共になにがしとよむ ● 何とやらんと云と同心也文 ● 其名確ならぬ也句

世すて人 ● 桑門と書是鴨の長明なるべしと云

▲頭書云▲世すて人は鴨長明なるべしといへり方丈記云一期のたのしみはうたゝねの枕の上にきはまり生涯の望は折々の美景にのこれりと云々盤

ほだし ●綻ホダシ人絆馬同 羈ホダサルル段文 ●罪人などの足にゆはへて自在にあゆまれぬよふにするものなり妻子をもつ時は此身のほだしに成ておもふやうにならぬ心也参　頭書云▲古今集に「世のうき目見へぬ山路にいらんには思ふ人こそほだしなりけれ　飛鳥井榮雅抄云世のうきめ見ぬ山路へいらんずるには我思ふ人にはなれがたければこれがほだしと成たると也文 ▲藏經飛函菩薩呵色欲法云女色者世間之枷鎖凡夫戀著不能自救▲四十二章經云佛言人繫於妻子寶宅之患甚於牢獄桎梏桹檔参 ▲大賢古迹曰先死牢獄婬爲枷鎖深縛有情難出離故盤

もたらぬ ●もたらぬはもたぬなりらは付字参

たゞ空の名殘のみぞ ●此空の名殘といふを心得ぬ人多し先段の四季折々の天の事也此世には妄執なき世捨人もさすが春秋の花紅葉にすこしとまるといひしをかへりてやさしきことゝほめてこゝにかける兼好の心ふつゝかならぬ遁世者と思ひしられ侍る貞

誠に ●誠にといふから右の儀を兼好が同心したる詞なり古　頭書云▲李白は豪放の謫仙人なれども餘春を惜むことあり又大德寺の一休は身死時に草木までなつかしといひけるとなん此段の心にかよはんかし壽

〔一段之統論〕●上段を結ぶ段也世を財ゆへに貪るに對してそれをむさぼらんよりはかゝる事にて心を慰めよ昔の人もかゝることとぞと證人に引て云り法篋なり盤 ●此段は昔の桑門も空の名殘に心をとゞめし事を書て前段の四時の景氣の兼好も捨がたくてさまざま書たりし心をのべたり文 ●一說にこれ上べには譽て書やうなれとも底意にはいましめたりされば妻子を厭離したれども四季の景氣に心ひかれ後世のつとめうとく何事も著念あるはまよひとなり ●書經に玩物喪志とあり ●又維摩經に法猶可捨而況非法 ●止觀觀法雖正著心同邪たゞ著心をなさずつとむべしと云意なり「我爲に輝く月か咲花か曇ると散と只ありとみよ說

〔廿一〕萬の事は月見るにこそなぐさむものなれある人の月ばかりおもしろきものはあらじといひしに又ひとりつゆこそ哀なれとあらそひしこそおかしけれ

折にふれば何かはあはれならざらん

月見る　頭書云▲拾遺雜の上に女にをくれて侍る頃月を見侍て大江爲基「ながむるに物思ふことの慰むは月はうきよの外よりやゆく句●古今に「我心慰めかねつ更科や姨捨山にてる月を見て是月を見ては必なぐさむ心ある歌なれば此本歌にて書出したり文

なぐさむもの　●此發端の萬のうさもつれ〳〵も月見るになぐさむといふ字彼こよなふなぐさむといふにひとしかるべし文●此一句此段の末までの大意也何にてもあれ心にむつかしき時風景に對してなぐさみ心のやりよふにつきてといふ事也盤●文には是迄一節として段をわかてり今下へつゞけし辨次にしるす

或人　頭書云▲盧允武助語辭云不レ指二名其人一指二名其事一但以二或字一代レ之參

月ばかり　●月ほどなり文

物は　●是より分々の願を云諺

露こそ　頭書云▲山案大戴禮云露陰陽之氣也夫陰氣勝則凝爲二霜雪一陽氣勝則散爲二雨露一▲後撰集に「白露に風の吹しく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散ける

哀なれ　●此あはれはおもしろき義句

おかしけれ　●そしり笑ふ義也諸●此二人の心かたよりたるを兼好おかしがり給ふ也褒たるにあらす面白心も有全

折にふれば　頭書云▲杜甫が詩に感レ時花濺涙のこゝろなり諺▲新古今に忠良の歌に「折にあへば是もさすがにあわれなれ小田の蛙の夕暮の聲句▲貫之歌に「春秋を心ひとつにわきかねつ時につけつゝうつる心はとよみし心なり盤▲春は花秋は月雨霰雪水其時々にしたがひ見る人の心の趣なり愁にあひし人の目には何事も悲く見へ喜を得たる人の前には月露烟もうき立やうにをもしろかるべしとなり全▲「物思へば澤の螢も我身よりあこがれ出る玉かとぞみる説

あはれならざらん　●是より兼好評判なり必何とかぎるべからず折にふれば何かはあれになき事あらんと也諺●此詞折節のうつりかはるこそ物ごとにあはれなれといひしに應ず文●ならざらんやい

やさやうにはなきかといひかけたる文勢なり盤

〔第一節〕●萬の事と云よりあはれならざらんまでなり此段三節に分ち見るべし●此節は問答にて書出してさて後に我本意をいはんためなり古文漁父（ギヨホ）辭などの文法なり盤●山案此節或人の問答を擧て兼好それを批判して兎角一偏に思ふはあしきと云て中道實相に歸するぞさて或說に或人と云字を萬の事は月見ると云ふ首に冠をしめて見るべしさなければ文意辨じ難し萬事は月見るになぐさむものなれの一句を兼好詞とする時は折にふれば何かはあはれならざらんと云ふに違て月に着する心あり又兼好詞となさゞれば誰詞ともしれがたしそれゆへに是も或人が詞となして見るなり加樣に或人と云ことを中に置て前後にかきし文法もあるもの也といへり此說鑿せりといへども一理あるによつて今此說にしたがふて節を分てり

月花はさらなり風のみこそ人に心はつくめれ岩にくだけて淸く流るゝ水のけしきこそ時をもわかずめでたけれ沅湘日夜東に流去愁人のためにとゞまる事しばらくもせずといへる詩を見侍しこそあはれなりしか

月花は更なり　●更字前にくはし●月花のおもしろきはいふも今更事あたらしければいふにおよはすとの心也

風のみ　●風のみは春夏秋冬の日夜朝暮に付て其時節を感ぜしむるとの心也文　頭書云▲山案河圖云風者天地之使▲元命包云天地怒而爲レ風▲稗雅云天地之氣噓而成レ雲噫而成レ風▲陸佃云萬物以レ風動以レ風化云々古今集に「秋來ぬと目にはさやかに見へねども風の音にそをどろかれぬる古▲西行歌に「をほかたの物を思ぬ人にだに心をつくる秋の初風盤

つくめれ　●つくれといへる義なりめは助字句

水のけしき　●水は萬古より東にながれて一息の懈怠なき所まことに萬物のうつり替る所水にたとふるにしくはなし諺　頭書云▲論語に孔子河のほとりに在して水哉々々と水をほめ給て往者如レ斯不レ捨二晝夜一と仰られし心なり夜とてもとゞまらず晝とても急がす常住不變になかるゝよしなりこれ萬物逝去すること無二間斷一に似たりとほめ玉ふな

り盤
時をもわかず ◉四季ともにあれば時をわかたず
といへるなり全
めでたけれ ◉愛の字めづるといふ意説 ◉ほめた
る詞也壽 ◉水の不變なる有さまのおもしろき事を
いふ風は人の心をうごかす事をいひ水は人の心を
靜にする心を云り盤
沅湘日夜 ◉唐の戴叔林か詩也 ◉これ水のことを
云に付て與風此詩を思出て書付たり文 頭書云▲
三體詩云湘南即事戴叔倫盧橘花開楓葉衰出レ門何
處望二京師一沅湘日夜東流去不下爲二愁人一住少時上註
云身不レ得レ去故怨二水之去一所三以深傷二己之不一レ能レ
去也蓋叔倫事二曹王於湖湘一故有二是作一秦少游謫二
郴州一有レ詞云郴江幸遶二郴山一爲レ誰流下二瀟湘一去
正用二此意一沅湘沅水湘水皆水名也文 ▲李齋賢愚抄
云第三四句言沅湘日夜朝二宗東海一而無二閑斷一叔倫
則在二遠方一而無レ所レ望二京師一欲下向二流水一而説中此
情上則水急流而不二少住一故却恨レ水而已參 ▲在中將
の歌に「いとゝしく過行方のこひしきにうら山し
くもかへる波かなとよめるも又叔倫が心也句 ▲又

業平歌に「行水と過るよはひと散花といつれまて
てふことを聞らん古 ▲山案長明方丈記の發端に行
川の流はたへずしてしかも本の水に非ずと云り
しばらくも ◉此詞は水のしばらくも私をもつて
とゞまらぬ事を此詩をひいていふなり盤
あはれなりしか ◉哀傷の義又愛する心も有へし
參 ◉水の事を書し次手に水の事作りたる詩を引た
りされど其心は各別也上の水は夫子の河の上にて
見給ふ心にて不レ舍二晝夜一光采いかで目出たか
らざらん後の詩は叔倫が水を見て己がうらみをか
こちたり同じ水なりといへども憂樂立所にたがふ
畢竟皆折にふれば何かはの心なるべし句 ◉(か)此
かも哉なり清でよむ也句
「第二節」◉月花はさらなりと云よりあはれなりし
かまでなり ◉文段には或人よりこれまでを二節と
なして云發端に月を云しにつけて露風水なとの哀
を云なり ◉山案前節をうけて一偏に著せずして折
にふれてあはれなるものゝことをいへりしかるに
風のみこそ水の氣色こそとかきつて云るは如何に
と問しに或者答云月花は人々の愛するものゆへに

見る者の方より心を何角と付てあはれを起すぞ風と云ふものは誰も心を付ぬに風の方より人に心を付るなりされば人に心をつくるものは風のみにかぎると云ふことなり此方より心を起すと彼方より心を付るとの違なり風ばかりに限て愛すべきものと云には非ず歌の水も又日夜の限りもなく能うつりかはつて常なきものは水の氣色にかぎると云心なりされば月花風水ともにかたよつて愛せぬ心自ら顯然たり讀者眼を著て熟く味ふべし

嵆康(ケイコウ)も山澤にあそびて魚鳥を見て心たのしふといへり人とをく水草きよき所にさまよひありきたるばかり心なぐさむ事はあらじ

嵆康　●竹林七賢の其一人也　頭書云▲李善文選注臧榮緒晉書云嵆康字叔夜譙國人幼有ニ奇才一博覽無レ所レ不レ見拜ニ中散大夫一以ニ呂安事一誅參

山澤　頭書云▲文選四十三嵆康與ニ山濤一絶交書云游ニ山澤一觀ニ魚鳥一心甚樂レ之一行作レ吏此事便廢安能捨ニ其所レ樂而從ニ其所一レ懼哉壽　▲東坡詩云圉々如ニ唐中一歩々踏ニ陳迹一豈知下世外人長與ニ魚鳥一逸上　▲柳文云魚樂ニ廣樂一鳥慕ニ靜源一盤

心たのしふと　●古人の詞を引て水のみならず風景にこそ樂あると治定せり莊子重言の筆法也盤　余好畢竟のたのしみ此にあるなり說

いへり　●是迄嵆康詞を寫す參

人とをく　頭書云▲江談云玄賓折ニ大僧都一歌云「外國は水草きよし事しげき都のうちはすまぬまされり諸　▲外國は五畿内の外の心也此草子の水草とばかりいへども外國の事しげからぬと云心此歌にゆづりてかゝぬ筆法なり盤

さまよひ　●漁父辭に行々吟ニ澤畔(サマヨフ)一といへり

ありきたる　●玄賓の歌の心を引てひつきやうは靜に世を過すべき事を云り

ばかり　●是もほどゝいふ義也參

心なぐさむ　●此なぐさむといふ詞發端の月見るにこそ慰むといひし首尾にてこよなふ慰といふと又同じ文　●なぐとは和き靜になる意也海などの雨風はげしき時は浪の立てさはがしきが靜に平等になるをなぐと云心也さむとはいさむといふ略又はさむる略ともいへり心の本覺になりたる也覺をさむるといふ義也理を悟りしれば本心になる事也本

心になれば愁はなき理也盤　頭書云▲兼好家の集に修學院にこもりてよみし歌の中に「いかにしてなぐさむものぞ世の中をいとはですです人にとはばや此趣も同じかるべきにや文●杜子美か江村に隱居せし詩を見れば飛來り飛去りし燕を樂みあひしたしみあひ近づく水中の鷗をなぐさみいとけなき子の針をたゝきまげて魚を釣を幽景として此外に又何をか求んといひしも同じ心ならんかし參●山谷東坡前赤壁賦云且夫天地之間物各有レ主苟非ニ吾之所レ有雖ニ一毫ニ而莫レ取惟江上之淸風與ニ山間之明月一耳得レ之而爲レ聲目過レ之而爲レ色取レ之無レ禁用レ之不レ竭是造物者之無盡藏也而吾與レ子之所ニ共適一とあるも同じ心ばへなり文

事はあらじ●是かの嵇康が詞をうけて世の交をたつて閑成所に吟行する程なぐさむ事はなしと也文

〔第三節〕●嵇康より終までなり●此節は世のまじはりをやめて閑に山水をもてあそぶたのしみを云て一段を決したり文●山谷此節は兼好の存念をあらはせり前に種々云したのしみも必竟こゝをいはんためなり是亦こゝに著するやうなれどもさにはあらず讒に兼好の志を推し見ば人遠水草淸所にさまよひありきて魚鳥の自得して樂を見てともに樂むなり是中庸の理にもかなはん鳶飛で天にいたり魚淵に躍るといへる皆自然の樂なりされば自然の樂を得れば風月露水も何んぞや折にふれ興によつて樂ざるべけんやかく書留ながらてゝにばかりと又一偏に泥むべからず

〔一段之統論〕●此章は前の四時の景をいへる段に云ひのこしたることの外に時をも分す翫ぶべきもののあるをいへり前章のあまりを論ぜりとしるべし參●これはことしげきを別にかく也たとへば源氏物語にことしげきことは別にならびの巻に書筆法と同じことなり人の心の片落ぬやうを本として書たり盤●月露の二物は秋光の內殊に愛すべき物なる故に四季の段に諸景と同くつらねのせず別に如レ此書出し其次手に又風水を合論し四季の段の折節のうつり變るこそ物ごとにあはれなれと云るに相應せしめたる筆法奇妙なり偖必竟は人利欲うすく世を遁れ淡事をたのしむべき事を末句に書たり

句●此段に彼戴叔倫が詩も身の去ることを得ざることを傷める心あり嵇康が詞も吏となることを懼れ交りを絶し詞なり玄賓の歌も大僧都を辭して隱遁を本意とせしことなれば此等を取合せ引用ひて彼風月水露など翫ぶも人につかへて身を心にまかせざれば愛し難し身をつながるゝ方なくて後實に此慰あることをいふなるべし文

〔廿二〕何事も（一切の事諺）ふるき世のみぞしたはしきいまやう（當世風の事也文）は無下にいやしくこそなりゆくめれ

ふるき世　上代の事也諸　頭書云▲百人一首順徳院「百敷や古き軒端の忍ぶにも猶あまりある昔なりけり▲又古歌「ながらへば又此頃や忍ばれんうしと見し世ぞ今はこひしき説

無下に　●至極しての義也諺●是よりあしき事はなきとなり末世をなげきてかくのごとくにいふ也全●一段の大意なり文

なりゆくめれ　●なりゆくめれといふうちにかぎりなく歎し意こもれり當時道もすたれ萬事いやしくなりゆくと也説

〔第一節〕●何事もよりなりゆくめれまでなり此段三節に分つべし文段これに同じ●山案此節は兼好時代は天下も穩かならず世のまつりごとも今日明日とかはりもてゆき何事も今樣にことなるを好み人の心も定らぬことを歎て古をしたへる志をいへりさて次の節に古にかはりたることの證據を書り

彼木の道のたくみの作れるうつくしき器も古代のすがたこそおかしと見ゆれ

彼木の道の工　●彼といふ字さす所なければをかぬ字なり是を案ずるに源氏品定に人の品を云にたとへとくの所に木の道のことをいへりそれを指なるべし源氏にいふたるといふ心なりむかしはよき器物あるゆへに源氏にもたとへに出すもとはあしくといふ心に彼といふか盤●源氏のことばは首に出せり●(工)大工番匠の類也諸　頭書云▲周禮の考工記にもろ〳〵の工を擧たり木石金玉を治る工あり野●箒木に云萬のことによそへてをほせ彼木の道の工のよろづの物を心にまかせてつくり出すもと云々此詞にてかけり文

古代の姿　頭書云▲考古圖博古圖などいふ書ありいづれも古の鼎などの圖俎豆の形等のうつしとど

めてあり後の世の工の及ぶ所に非ず論語に觚不ゝ觚あるも今の器はいにしへの制法にあらざることを云なり野 ▲みをつくし御調度どもゝいと古代になれたるが昔やうにてうるはしきをとあり句おかしと見ゆれ ●古の細工は何のたくみもなくてしかもつゞまやかなり諺

［第二節］●彼木の道といふよりをかしと見ゆれまでなり●山案此節は上に何事も古にかはると云しをうけて先調度なども古にかはると云ことを書りされば當時の器は古代に十倍して結構にはあれども却て古の質にして手輕さには大きにをとれることをいへり

文のことばなどぞむかしの反古どもはいみじきた消息文章也壽

だいふ詞も口おしうこそなりもてゆくなれいにしへ漸々の心あり參は車もたけよ火かゝげよとこそいひしを今やうの人はもてあげよかきあげよといふ主殿寮の人數だてといふべきを立明しろくせよといひ最勝講の御聽聞所なるをば御かうのろといふべきをかうろといふ口おしとぞふるき人の仰られし

反古 ●反故とも書物をかきちらしたるふるき紙をいふ其おほく集たるを反故堆といふ禪錄に見ゆ野 頭書云▲和名十三云齊春秋云沈驎士少淸貧以二反古一寫二書數千卷一參 ▲萬葉に「秋の田のほぐとも雁の見ゆるかな誰をほ空にかき散すらん增鐵

いみじき ●古の人はかりそめにいひすてたることぐさも皆いみじくと上に書しと同し心也說

たゞいふ詞も ●文といふをうけてそれのみにかぎらずかりそめにいひし言葉もと也參 ●二說あり參說はたゞいふ詞を古人の詞となす句解には當時の人のいふ詞となして見るなり好む所にしたがふべし

口おしう ●二說あり口惜とも朽惜とも書字訓は前にくはし●前說の意は當時の人の詞は昔のよふになくて口おしく成行と也●後說の心は古人の云ひ捨たる詞も皆いみじけれとも皆朽うせる事はおしとなり說

いにしへは車もたげよ 是より古と今とのかはりを比對して云り參 ●是より詞の惡敷なるをいふ諺

頭書云▲狹衣に御車もたげぬればいとかろかにいたきたてまつりて云々

火かゝげよ　●かゝげるは揭の字参●歌雙紙に多
きことはなり文
主殿寮　●寮は主殿の官人のつむる所也主殿寮と
いふ時は主殿の下司もこもる也此官人の職は殿上
殿下の洒掃又は夜の行幸に火をともすことをつか
さどる諸　頭書云▲職原抄云主殿寮唐名尙舍局掌ニ
殿上洒掃事一▲職原抄家傳舊注云主殿式略記掌ニ名
香胡麻油油瓶燈盞燈炷松明燎燈炷燈心之布事一也
云々参▲山案職員令云主殿寮頭一人掌下供御輿輦
蓋笠繖扇帷帳湯沐洒ニ掃殿庭一及燈燭松柴炭燎等
事上助一人允一人少屬一人殿部四十人使部二十人
直丁二人駈使丁八十人
人數だて　●人數だての字淸濁の二說あり先濁る
說は●節會御神樂などに主上別殿に行幸せさせ給
ふ時殿上人脂燭を執て供奉し主殿寮二人立明をと
りて供奉せり是を人數たてといふべし文●又淸る
說は主殿寮の人數に座をたちて火をともせといふ
義なりたの字すみてよむべし濁りて義理をとるは
あやまり也句　頭書云▲山案江次第云若及ニ昏黑一
者主殿官人奉ニ炬火庭中一▲淸少納言が枕草紙にも

主殿の官人などのながき松をたかくともして首は
ひき入てゆけばさきはさしてつけつばかりなると
をかしうとあり
立明　●松明の類也和名云炬火太天阿加之　東レ薪灼也ち
とてと相通也しろくは明白也諸
最勝講　●一條院長保四年五月七日に始ておこな
はる吉日を撰て五ヶ日あり淸涼殿にて最勝王經を
講ぜらる東大寺興福寺延曆寺園城寺四ヶの大衆ま
いりておこのふなり證義講師聽衆など有公事根源
に詳也野●五月に吉日をゑらびて行るゝ故に歌に
は五月の御法とよめり文●最勝とは金光明最勝王
經の事也此御經にも經王なりと說給ふ故に最勝王
と申なり此經を讀誦すれば天下國家災害をこらず
天星ヲ消て安穩息災なる仔細を說給ふ目出度御經
なる故天台大師此經に文句をつけ給ひしを南湖の
智禮法師記をくはへられし是を光明文句記と名付
て世におこなはる又法華と仁王との二經を右の最
勝王經にそへて鎭護の三部といふなり参　頭書云
▲江次第七云五月最勝講時尅公卿參入候ニ殿上一次
上卿依レ仰々ニ殿上辨一令レ打レ鐘次出居次將等參上次

公卿參上著座次威儀師率二衆僧一參上著座次講讀師著二禮盤一下略 ▲年中行事歌合註云一條院の御時よりはじめて清涼殿にて最勝王經を講ぜられしにや後朱雀の御時にや正眞四天王道場に現ぜさせ給ひけるより四天王の座をしかれ侍りまことに嚴重なることなり文 ▲又臨時にも御懺法講といふ事をこなはる此時も山門の僧禁裏にあがりて天子の玉體に近づき三公以下の衆と居わけに向て南岳大師之作り玉ふ法花懺法を讀誦す天子も御簾の內に御座し是を誦し玉ふはじめはまぢかく玉體を見奉るといへども後には御簾をおろし玉ふとなり天子も內にて行道し玉ふまことに涅槃經の說のことく國王大臣に正法を附屬し玉ふとは加樣の類なり參

御聽聞 ●天子の御聽聞所なり諸

御かうのろ ●御講の廬なり 頭書云▲最勝講の論義をきこしめす所をいふ廬はいほりとよめり關白の內裏にて休息するところを直廬といふがごとし直は宿直のこゝろなり壽 ●廬は家と云ふ心なり諺

かうろといふ ●天子の御事さへ御の字を略して講廬とばかりいふなり諺

口おしとぞ 頭書云▲山案人として最可レ愼ものは言なり▲論語里仁篇子曰君子欲下訥二於言一而敏中於行上▲劉會曰言不レ中レ理不レ如レ不レ言一言不レ中千言無レ用とありされば一犬虛を傳ふれば萬犬實を傳ふといへり一言にても誤あれば末々にいたつては毫釐の違千里となるなり

仰られし ●仰られしとあれば定て高貴の人なるべし參 ●口より云出せし誤はかへらねば第一愼べし全

[第三節]●文の詞と云より終までなり●山案上節には器物の古へにかはりたることを云ひ此節には文の詞もつゐ云ふ詞までをとろへゆきて古に異なることを證據を立て口惜とかなしめり●論語云子路曰衞君待レ子而爲レ政奚先子曰必也正レ名乎とある心にて此段の兼好が物の名を云違たるをあしゝとすることをしるべきなり朱子曰君子於二其所一不レ知蓋闕如一也名不レ正則言不レ順言不レ順則事不レ成事不レ成則禮樂不レ興などいへりかの文をば見合すべし禮云奇語不レ可レ官君不レ乘二奇

車一盤 ●此段心あらん人はよく見てたしなまるべき事なり末代までのいましめに書をかれしと見へたり今京の人達のもの申さるゝ言葉を聞に或はたれといふことをばたの字をにごりたゞと云ふをばたッたとかみのた文字をつめて下のた文字をすみて云ふ加樣のかた言いくらと云數を不レ知丸が耳にさへをかし是を古人に聞せたらばいかはかり悲く思しめされん貞公

【一段之統論】●上段には四季の段の殘景を論し在世濁富の揚々たるより遯世清貧の樂まさる事を云ひさて此段にはそれをうけて上代淳厚のいみじきを褒今世風俗の偸薄せるを歎じたるなり旬 ●此段は是より古今のものゝかはることを云てすへ〳〵の段々に論を舉たり上段は風景のかはらぬものを云ひこれには人事の變じやすきを云なり天道をたのしびたるかよし古今のかはりなし人事は古今のかはりあることにてたのしむにたらずと云心なり盤 ●此段よろづのことといにしへのは末の世よりまされりと云實もとぞ覺ゆる宋の六一居士周秦漢の碑文をあつめ撰で集古錄と名付くもろこしの人は古をいみじと思故なりてゝらの人は云も出ざるに兼好が志ありがたしとぞ覺ゆる古文古詩古語古書のみかは人は舊にしくはなしと尙書にも見へ侍り文宣王の生知なりしもいにしへをこのむと宣へり野

【廿三】おとろへたる末の世とはいへど猶九重のかみさびたるありさまこそ世づかずめでたきものなれ

末の世　頭書云▲元照律師小止觀序曰叔世(スヘノヨ)寡薄馳ニ走聲利一參

いへど ●上の段をうけていへどゝ書也指所なくてはいはれぬ詞也盤

猶 ●猶字心を付べし全 ●猶とは大內裏のあたらしく結構なるよりもふるめかしき體がよきと也盤

九重 ●內裏をいへり君の門九重ある故なり文 ●九重とは大形都の內をいふ一條より九條までなりさりながらてゝは專禁裏の事なり旬　頭書云▲王辯云天子門有レ九謂遠郊門近郊門城門皇門庫門雉門路門關門應門是なり象ニ天有ニ九重一諸 ▲九は天の數なり陽の極數之重とは四町づゝか一重なりとそれを九重ぬれば四九三十六町の帝都なり天子の

御座所を天にたとふる心にて天の三百六十日に象るなり說 ▲或書云傳教大師桓武天皇の御時王城を山城へ引玉ふとて九條の袈裟に表して九重に建立し玉ふなりとあれとこゝの九重は只禁裏のことを云と心得べし參

かみさびたる ●上久と書り古風にして貴き心也文 ●又宿字をもかみさぶるとよませて代々を經たる義也參 ●又は神は久しき物なれば久しき心になるなり盤 ●神祇よりおこりたる詞にてすべてふるめかしく殊勝なる事をいふ句

世づかず ●にごれる世をはなれきりたる心也參 ●世俗になれぬ事をいへり代は末になりても古風の有は似つかぬなどいふこゝろなり全 頭書云▲夕貞の卷によつかず御もてなしなればとあり句

〔第一節〕●をとろへたるよりものなれまでなり此段四節に分て見るべし ●山案此節は上段に諸事古にかはりたると云しをうけていまだ禁裏には古風のこれると云ことをいはんとて一段の大綱に書り次の節よりのこりし其證據どもを書り

露臺朝餉何殿何門なゞどはいみじとも聞ゆべしあやしの所にも有ぬべき小蔀小板敷高遣戸なゞどもめでたくこそきこゆれ

露臺 ●禁裏御殿の名也諸 ●十一月五節ある時未の日露臺の亂舞といふ事有所なり歌には露のうてなとよめり文 ●藻鹽草に云露の臺とは內裏に大極殿の昇殿を露の臺といふ又異說に內裏に關白殿の御宿直にまいらせ給ふ所を露の臺といふ然ば露の臺とは彼露臺と云々但是如何盤 ●山案玄旨法印說三ケ重事に云官廳の內なり云々畢竟やねのなき廊下或は參會の場を云となり 頭書云▲史記漢孝文帝本紀云嘗欲レ作二露臺一注 索隱云顧氏按新是南豐山上猶有二露臺之舊跡一也云々文 ▲卓氏藻林云露臺累レ土爲レ之將以承レ露 ▲漢武故事云上作二承露盤一仙人掌擎二玉盃一以取二雲表之露一和二玉屑一服レ之求二不死一參 ▲六花に「玉しきの露の臺も時にあひて千代の始の秋は來にけり盤

朝餉 淸凉殿の內の南にあり天子の朝の御膳を朝餉といひてこゝに供御を奉る所なり諸 頭書云▲年中行事歌合の注に云あさがれゐと申は天子の朝の御膳の名御膳を供する事にて侍りかれゐとはか

れたる飯にて侍るにや▲禁秘抄云朝餉二間南平敷
二枚北上東北立二屏風一細屏風夜御殿方有二副障子一屏風内
外案二御調度二階一押レ錦唐匣筥一硯筥鎮筥厨子二脚非鎮御只近代誤置鎮以レ薄押冠筥二唾壺手拭筥樊筥儿帳一大床子
二一者在二御手水間一火櫃春冬計也謂火櫃也書二和繪一
何殿 ●本に何殿を南殿となすは非なり内裏の殿
門あまたある故に一々にその名をいはぬなり其名
は禁秘抄拾芥抄に見えたり諺
いみじとも ●俗に其名一つもなければいみじと
聞ゆるは尤也全
あやしの所 ●賤きものゝ家にもありぬべき物な
れども禁中にあれば各別に聞ゆると也諸 ●あやし
の注解前に有
小蔀 ●殿上に有 頭書云▲或書蔀覆レ暖障レ光者
也今披遲陽也參 ●禁秘抄云殿上六間有二小蔀一主上
覽二殿上一所也下レ之御忌時文
小板敷 殿上に有 頭書云▲名目抄云神仙門中を
云今は殿上に有諺▲殿上の南面の前の階の上の縁
に板間ありこれを云となり▲禁秘抄云小板敷西
有二榑間小庭時簡牖棚灯樓一▲千載集云二條院の御

時小板敷と云五文字を句の上にをきて旅のこゝろ
を源雅重朝臣「駒なべていざ見にゆかん立田川白
波よするきしのあたりを文▲又定家卿殿上にての
歌にこれも句の上に置て「こしたもといとゞひが
たき旅の夜のしら露むすふ木々のこのした古
高燈火 今は清涼殿の坤の廊下の間にあり諺
「第一」「節」●露臺と云よりきこゆれまでなり●出簗
南節に禁中には猶古風の殘りたると云ことを云し
をうけて先殿閣に古風の殘て日出度ことをいへり
陣に夜の設せよといふこそいみじけれ夜の御殿のを
ばかいともしとうよなゞどいふ又めでたし上卿の陣
にておこなへるさまは更なり名別也參前に委諸司の下人どものした
り顔になれたるもおかしさばかりさむき夜もすがら
愛律こゝかしこにねぶりゐたるこそおかしけれ
陣 ●諸卿の座する所也參 ●清涼殿の前紫宸殿の
西にあたりて陣の座あり節會を行ふ所をいふ諸卿
の座する處なり武士の陣所のやうにする也佛殿に
內陣外陣といふ是に本付なるべし參 頭書云▲爾
雅云堂途謂二之陣一註云堂至二門徑一也▲戰國策美人
充二下陣一猶二下堂一云々鉴

設せよ　●夜の設せよとは灯の用意せよなとゝ主殿寮のいふ體なるべし文　●又灯にもかきるべからず野

夜の御殿　●年中行事注云夜の御殿と申は天子の御寝所也文　頭書云▲禁秘抄云夜御殿四方有ニ妻戸一南大妻戸一間也帳同ニ清涼殿一

かいともし　●掻灯也諸　●かゝぐる燈なれば油火のことなり文　●獵燭は心をきる故に切灯といふと也説　●夜の御殿のともし火をばといふ心なり文　●陣にては夜のもふけといひ夜御殿にてはかいともしといふと書わけたり灯火を所によりていひかへたり野　頭書云▲禁秘抄云夜御殿四方有ニ妻戸一南大妻戸一間也帳同ニ清涼殿一東枕疊御座敷也御枕有ニ二階一奉レ安ニ御劔神璽一皆有レ覆蘇芳也御劔東南帳四角有ニ燈樓一又帳南西北敷レ疊爲ニ女房座一野　▲年中行事歌合に前大納言良冬卿寄ニ夜御殿一戀をよめる「立そひて消ぬ思ひのくるしきはかひともしせし人のをもかげ句　▲同注に云夜の御殿は天子の御寝所なり劔璽をおかるゝ故に何れも灯をけたずこれをかひともしと申にや文

とうよ　●敏也諺　かいともしをとくせよと主殿司の云さま也諸

上卿　●上卿とは大臣大中納言等の公卿の陣にて惣奉行するをいふ節會の時は内辨とも申なり壽

諸司の下人　●百官の下々の人を云　頭書云▲諸司とは百官に職寮司其外さま〲差別あれども惣じては諸司と云なり詳に職原抄に有壽

したり顔　●其職々に能なれて知行得たる貌ぶり也今　前に注

さばかり　●さるばかり也其寒夜と云に對していへる詞也爰にては如レ此の義に通ふなり句

夜もすがら　頭書云▲終夜終宵通夜通宵盡夕盡宵徹宵竟夜達夜竟宵竟夕何れもよもすがらと讀也参

ねふりゐたる云々　●しも人ともねぶり居さへ九重の神さびたる内にては心もとまりておかしく覺ゆると也説　頭書云▲玉篇云睡殊慵切座寐也参

[第三節]●陣に夜の設と云よりをかしけれまで也

●山案此節は上節をうけて禁裏には殿閣のみにかぎらずもの云詞又は執行事にもいまだ古風が殘てあることを褒たり

內侍所の御鈴の音はめでたく優なる物なりとぞ德大寺の太政大臣はおほせられける

內侍所　●內侍所とは神鏡を安置せさせ給ふ賢所也溫明殿と申とかや文●南殿の巽に有也朝とに天子拜し給ふ神樂有盤　頭書云▲廿七段目御國ゆづりの所に委く注する也▲內侍所とは八咫神鏡也と云秘事には日體なり一義に云八咫鏡とは此れ八尺の鏡なり此鏡に天照大神御皃を鑄作るなりと云々又此鏡の鑄手に付て數說あり一には石疑姬の鑄給鏡と云々一には天照大神自ら鑄て此鏡に我影をうつし置き其後天の磐戶に引籠玉ふとなり▲日本紀云使下二鏡作部遠祖天糠戶者一造上レ鏡▲又秘說には八咫鏡は神書なり神代の事態にして鏡にむかふて物を見る如くに明なれば鏡と云なり又八咫と云は八方の事明に知る故に八咫と云とも已上秘說なり▲又日本紀云天照大神宮手持二寶鏡一授二天忍穗耳尊一而祝レ之曰吾兒視二此寶鏡一當レ猶レ視レ吾可三與同レ床共レ殿以爲二齋鏡一▲大神の勅によりて上古は同殿にましく〱しか垂仁天皇より別殿に住玉ひ新に改めつくりて神代よりのは大和姬に授給ひて伊勢にうつらせ給ふとなり賢ところのこと禁秘抄などにくわし▲昔內裏炎上の時此神鏡飛出給て內侍が袖にとゞまり玉ふ故に內侍所と云也▲又禁秘抄に云白河院仰云內侍所神鏡飛出欲レ上レ天而女官縣二唐衣袖一奉二引留一依二此因緣一女官奉二守護一云々諸

御鈴　●此すゞは外の神樂のやうに手にはもたず大きなるすゞにてかけてあるを緖にて引てならす也是を御簾に鈴あつて出入になるといふ說不レ用ことなり盤　頭書云▲江次第十一御神樂次第云主上召二御笏一御拜再拜兩段訖女官引レ鈴鳴レ之三度上下略

德大寺太政大臣　●實基公なり　頭書云▲實基公なり野宮左大臣公繼公の子後德大寺左大臣實定公の孫なり鎌足より二十代の孫なり諸

▲系圖師輔公までは二段實定公までは十一段目にくわし故にこゝに略す

鎌足—不比等—房前—眞楯—內麿—冬嗣—
良房—基經—忠平—師輔—公季—實成—
公成—實季—公實—實能—公能—實定—
公繼右大將從一位左大臣嘉祿二年正月卅日薨歲五十三—實基八十七代後嵯峨天皇寬元四年任二內大臣一後深草建長五年任二從一位太政大臣一龜山院文永二年九月十九日出家改二名因性一同十一年薨ス

〔第四節〕●內侍所と云より終までなり●山案此節は禁裏にて一入古風の殘て目出度ものは內侍所の御神樂なりと云んために我一人にかぎらず德大寺殿も仰られしと證據に出せり

〔一段之統論〕●此段何事も末の世は古にをとろへる中に禁裏のありさまばかり目出度と上の段の古をほめて今をおとせるにうけて書たり句

〔廿四〕齋宮の野宮におはしますこそ（かは哉なり諸）やさしくおもしろきことのかぎりとは覺しか經佛などいみてなかご染紙などいふなるもおかし

齋宮　●齋宮とは內親王を天照大神の御杖代に定奉らるゝ事也加茂にも齋院とて此例あり一本に齋王とあり此時は伊勢加茂兩所にかゝる也こゝは齋宮といへるかよし齋宮をいつきの宮と申す心は代代の皇女大神をいつきまいらせ給ふ故にや世に后にたちたまふ事のやうに心得るはあやまり也皇女の大神に宮仕したまへる事は崇神天皇の皇女豊鍬入姫命にはじまり伊勢へおはします事は垂仁天皇の皇女倭姫にはじまれり文●一說齋宮齋院ともに野宮に御座の事あれば齋王といひて兩所へかけたるがよし盤野も齋王につくる但壽抄はじめ多くは齋宮につくる　頭書云▲人皇十代崇神天皇の御代に神代遠さかりて內侍所と一處に帝の御座事を恐れ給ひ御鏡をは新しく鑄させ大神宮の御影のうつります御鏡をば皇女豊鍬入姫命にいたゞかしめて大和の笠縫邑にて祭らしめ玉ふ也其後十一代垂仁天皇の時に皇女倭姫に託たまひて今の伊勢へ移し玉ひて祭り玉ふ也豊鍬倭姫皆皇女なるゆへによりて後々まで帝の御女を伊勢神宮へたてまつらるゝなりもし帝に御むすめなき時は親王の女も立たまふ例ありかくて代々を經て後宇多院皇女弉子內親王七十餘代の後斷絕せりされど兼好時代にも猶餘風はのこるなるべし說▲日本紀第四云崇神天皇六年以二天照大神一託二豊鍬入姫命一祭二於倭笠縫邑一仍立二磯堅城神籬一▲同第六云垂仁天皇二十五年三月離二天照大神於豊鍬入姫命一託二于倭姫命一爰倭姫命求下鎮二座大神一之處上而詣二菟田篠畑一更還之入二近江國一東方廻二美濃一到二伊勢國一時天照大神誨二倭姫命一曰是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可怜國也欲レ居二是國一故隨二大神教一其祠立二伊勢

國一因與二齋宮于五十鈴川上一是謂二磯宮一則天照大神始自レ天降處也野

野宮　●花鳥云伊勢齋宮の野宮は嵯峨の有栖川に有賀茂の齋院の野宮は紫野にあり野　頭書云▲天皇位に著玉へば内親王の未レ嫁を撰て卜定とて御占ありて其御占に當り玉ふ皇女を西川にて御はらへせさせ奉りて内裏のうちの左衞門の陣に忌竹を立て二年目に又御祓ありて其八月より明る年の八月まで野宮にうつり御座すさて三年目に伊勢へ御下りあるなりさて伊勢へ御下向の時に參内あり其時天子大極殿にて御對面なりさて帝自皇女の御髮に櫛をさし玉ひて齋宮に二度都へのぼりましますなと宜ふ是を世に別の櫛と云ふなり此櫛さし玉ひて後は御對面なきことなり其ゆえんは當今のかはらせ玉へは齋宮もかはらせ玉ふによつてなり皇女伊勢へ御下向の時は相坂の關を經て近江を越て伊勢にいたり玉ふ又次の齋王とかはらせられて京へ歸り玉ふ時は大和路を經て立田越にかゝり攝津の國渡部の大江の岸と云ところにて又祓してのぼり玉ふと也さて伊勢にて齋王の居玉ふ所を竹の宮居と云新勅撰に中納言兼輔の歌に「吳竹の代々の都ときくからに君は千年のうたかひもなしこれ堤中納言伊勢國へ勅使として下り給時に齋宮にてよめるなり諺　▲江次第十二云齋王卜定事伊勢上卿參議著陣藏人奉レ仰問二諸司具不於上卿一藏人仰乙可レ令レ勘下申卜二定伊勢祭主一日時上由甲上卿仰レ辨令二勘申一入二外記筥一令二藏人奏一上卿仰レ居レ陣令レ奏返給之後上卿下レ辨次藏人奉レ仰仰二上卿一日其內親女王若其可レ爲二伊勢齋王一散由令二卜申一與用二未レ嫁人一若無二內親王一依二世次一簡二女王一下略　▲三代實錄第三云貞觀元年十二月二十五日丙午伊勢齋恬子內親王於二鴨水邊一修レ禊賀茂齋儀子內親王於二同水邊待賢門末一修レ禊並入二初齋院一　▲同第四云貞觀二年八月二十五日伊勢齋恬子內親王臨二鴨水一大修二禊事一即日入二野宮一野　▲御門のありかせ玉ふ行幸と云院をは御幸と云此齋王の御下向をば行啓と云也長奉造使などゝ申いかめしき供奉あり貞

かぎり　●やさしき事の至極といふ心也諺

經佛　●佛をなかごとは心法といふことなり心をなかごとよむ經を染紙とは黃卷朱軸にいたす故也

全　頭書云▲延喜式第五齋宮忌詞内七言佛稱二中子一經稱二染紙一塔稱二阿良々木一寺稱二瓦葺一僧稱二髮長一尼稱二女髮長一齋稱二片膳一外七言死稱二奈保留一病稱二夜須美一哭稱二鹽垂一血稱二阿世一打稱レ撫肉稱レ菌墓稱レ壤▲又別忌詞堂稱二香燒一優婆塞稱二角筈一▲同第六齋院司凡忌詞死稱レ直病稱レ息泣稱二鹽垂一血稱レ汗肉稱レ菌打稱レ撫墓稱レ壤▲詞花集雜部に選子内親王賀茂の齋院ときこへける時西に向てよめる「思へどもいむとていはぬことなれば其方にむきて音をのみぞなく▲山案枕草紙に齋院は罪ふかけれどをかしとあるも此心なり

[第一節]●齋宮と云よりおかしまでなり此段二節に分つべし文段是に同し●山案此節は上段の結句に内侍所のことをいへるをうけて又野宮のことを書り

すべて神の社こそすてがたくなまめかしき物なれや物ふりたる森のけしきもたゞならぬに玉垣しわたして榊にゆふかけたるなどいみじからぬかはことにおかしきは伊勢賀茂春日平野住吉三輪貴船吉田大原野松尾梅宮

すべて　●是より野宮にかきらずすべて神社のなまめかしきことをいふなり文

神の社　頭書云▲山案神代口決云神者嘉牟嘉美（カムガミ）也略云二嘉美一神慮如三明鏡之照二萬物一不レ捨二一法一不レ受二一塵一也在レ天者神在二萬物一者靈在レ人者眞心也萬物之靈人之心清明則神也儒書云陽之精氣曰レ神陰之精氣曰レ靈

なまめかしき　●最媚書やさしく優美なる姿也諸

物なれや　●や決の詞うたがひのやにあらず句

森　頭書云▲字彙云森音參衆木貌平地に同木の茂るを林といひ諸木相まじへて茂れるを森と云也或説●山案一説に山にてしげれる木を森といひ平地にてしげれる木を林と云ふと

たゞならぬに　●常にかはりたるなり參

玉垣　●玉は褒美の詞赤の玉垣也井垣瑞籬などもいふなり文森ばかりも面白と也まして玉垣などはとなり全

榊　●賢木共書野●龍眼木共書まさかき玉ぐしなども云文

ゆふかけたる　●白木綿也ゆふたゝみともいへり

文 ●木綿四手麻幣神道家に沙汰有ことなり八雲抄に榊か枝にしらが付などいへるもゆふなり野
おかしきは ●上のすべてかみのやしろこそすてがたくなまめかしきものなれやといへるにあたりてことにおかしきと書なり句 ●是かみのことにてはなしやしろの景色のしゆしやうなることなりと也社の殊勝なるも神の德のあらはるゝゆへなり龍あれば靈あるの心也盤
伊勢 ●天照太神の廟也垂仁天皇の時大和姬神代よりの神鏡神劔を取て伊勢の國宇治の川上に鎮座し給ふ其川を御裳濯川と申は大和姬御裳をあらひし故也又河上に五十鈴川あるによりて五十鈴川とも申今の內宮是なり其後雄略天皇廿二年御託宣によりて丹波の與佐より豐受太神をむかへて伊勢の度會郡山田の原に勸請す今の外宮是也豐受大神は國常立尊也此時まで大和姬猶死せずしておはしける詳に日本紀幷神皇正統記に見えたり野　頭書云▲內宮外宮と申事二說あり▲古事記釋云內宮者其地名曰二宇治鄉一故以稱二內宮一也外宮則外者遠義也是天地開闢神座故因レ遠號二外宮一也 ▲亦祭主公節云太神者奥座故號二內宮一度會者外坐故申二外宮一云云▲伊勢內外諸宮記云內宮天照皇太神宮一坐（在二度會郡宇治鄉五十鈴河上一）大日靈貴相殿二坐右萬幡豐秋津姬命（イニ栲幡千々姬命）左天手力雄命外宮豐受太神宮一坐（在二度會郡沼木鄉山田原一）國常立尊（イニ天御中主尊）相殿三坐左天津彦々火瓊々杵尊右天兒屋根命天太玉命▲二十二社次第云（吉田兼倶作）一伊勢內宮垂仁天皇十七年鎮座まことに我朝の宗廟にてをはしますと文
賀茂 ●雷神也下賀茂は御祖神也糺宮と申す也上賀茂は別雷神也昔賀茂健角（タケツ）身（ミ）命のむすめ玉依姬河邊に遊ぶ時丹塗の矢流來る取てかへりて家の簷にさす偖一人の男子を生り其父をしらん爲に盃をば男子にもたせて汝が父に與べしといふ時彼矢の前に置きし也此矢の羽鴨の羽なれば其姓を賀茂氏とする也此時男子我は天神の子也とて飛て天に登りて雷となる是今の上賀茂也玉依姬も同時に天に登り槻樹の下にくたりて神となる是今の下鴨也丹塗矢も神となる今の松尾大明神是也野　頭書云▲山案諸社記云別雷神一座號二上社一御祖社二座號二下社一亦社氏說御祖社稱二中賀茂一日本紀曰日向襲

峯天降座神賀茂建角身命止申須後仁大和國葛木山峯爾宿坐須其後山城國岡田賀茂爾移坐須在レ川名ニ石川瀨見小川一建角身命女子玉依姬瀨見乃小川爾遊遙志賜布時自ニ川上一一矢流來取豆置ニ床邊一多利之爾玉依姬孕胎産賜布御子乎別雷止申須此神乃父乎不レ知故爾七日七夜宴云ニ神魂尊一樂乎調豆酒乎薦晃豆我父多流人爾盃乎指賜邊枳由乎外祖建角身命止仰豆禮介流爾我父登天爾有利止天屋乃甍乎穿加千天爾登利賜志豆利別雷神止波申也云々 ▲下鴨　廿二社次第云御祖社別雷神御父也 大山咋神松尾日吉同體云々 ▲一條禪閤御說には玉依姬と申賀茂建角身命の女なりとの玉へり ▲季吟云糺宮と申侍るは河合大明神なり本社の南にたゝせ玉へり ▲上賀茂廿二社次第云別雷神也天武天皇六年二月營ニ社壇一 ▲廿二社本緣云後一條院行幸乃時山城國を寄進し玉ふに仍て今者當國の惣社にて坐ますなり

春日　●日本記に皇孫天降り給ふ時武雷命齋主命はさきへ降りて豐葦原中國を平けらる兒屋根命は皇孫を守奉て皇孫と同時にくたり給ふ是すなはち藤原氏の祖神なり武雷命は武甕槌神とも申齋主命は經津主神とも申也野 ●大和國添上郡三笠山に御垂跡なり諸　頭書云▲四所なり▲廿二社次第云第一建甕槌命常陸國鹿島 第二齋主命下總香取 第三天兒屋根命河內國平岡 第四姬太神伊勢太神宮 若宮保延以後造ニ神殿一御本社者同殿神護景雲二年正月九日大和國添上郡三笠山御垂跡同年十一月九日寅日寅時宮柱立御殿造畢自ニ常陸國一御影向御乘物以レ鹿爲レ馬以ニ柿木枝一爲ニ御鞭一或說曰春日若宮天押雲命中臣祐通祭レ之文

平野　●山城國葛野郡に有諸　頭書云▲延喜式に平野神四座今木神久度神古關神相殿比賣神とあり野 ▲又二十二社次第云平野五社第一今木神日本武尊 源家氏神第二久度神仲哀天皇平家氏神第四比賣神天照太神大江氏神第五縣神天穗日命四姓中原清原菅原秋篠延曆年中立ニ件社一貞觀元年十一月九日始祭レ之文

住吉　●日本紀伊弉諾尊日向國橘の檍原にて祓し給ふ時海底より出る三神也底筒男命中筒男命表筒男命と申是住吉大神也神功皇后新羅を攻給し時此神あらはれて軍の先がけをし給ふに依てつゐに三韓をしづめらる神託によりて長門國に祝ひまつる倍又皇后攝津國に到り給ふ時ま住吉の國也と託宣

ある故に其所に鎭座す又筑前那賀郡にも有三ヶ國共に皆住吉と云なり野・頭書云▲二十二社次第云攝津國住吉郡住吉神社四座第一底筒男命第二中筒男命第三表筒男神第四神功后靈神神功皇后御宇伐ニ新羅國一明年向レ京隨ニ神敎一以鎭座▲二十二社本緣云玉津島明神古衣通姬坐ニ此四座一故住吉は古より和歌の道を護り玉へり文▲卜部兼直か歌に一西の海檍か原の鹽路よりあらはれ出し住吉の神▲社家の說云天照太神を一座とし田霧姬を一座とし底筒中筒表筒を一座とし神功皇后を一座として住吉四社明神と申なり野

三輪　●日本紀に素盞烏の子大己貴の神を大國主神共申其魂魄出雲國より大和國三諸山へうつり給へば宮を建ていはふなり是を大三輪神と申崇神天皇の姑倭迹々姬を此神の妻とし給ふ此神常に晝不見して夜來る姬あやしくみて晝見え給ねばうるはしき姿を見ずといふ神答云明朝汝か櫛笥に入て有なん驚き恐るべからずと云姬彌々怪しみてつとめてみればうつくしき小蛇櫛笥にわたかまりて長さふとさ下紐のごとくなり姬おどろきてさけぶ神耻うらみて俄に人の形となりて汝すでに我に耻を見せつ我も又耻を汝に見せんとて虛空に飛て御諸山に登る姬悔て箸をもつて陰をつきて死す▲又舊事記には活玉依姬に通ひしに屋の上より往來しければ苧玉卷に針を付て神の裳にかけて見れば鑰の穴より出て茅渡山吉野山を過て三諸山にとゞまりけり其糸三わけ殘る故に三輪山と申なり野　頭書云▲二十二社次第云大和國城上郡大神大物主神神代垂跡也▲本記云大己貴神一名大物主神大三輪明神是也日本國地主神なり文

貴船　●貴布禰とも書也山城國愛宕郡に有龍神なれば晴を祈るも雨を祈るにも此社を祭る也輌過突智の所變に高龗と申神は是なるべし是も王城の守護神にておはします野●賀茂の別所也　頭書云▲二十二社次第云山城國愛宕郡貴布禰神社水神也▲二十二社本緣云此神賀茂別處也祈レ雨止レ雨時丹生と同じく奉幣せらる文

吉田　●山城國愛宕郡にあり吉田の神社四座神の名春日の社に同じ諸●奈良の京にては春日長岡の京にては大原野平安城にては此社皆帝闕に近く有

て寶祚を守り給ふ御堂關白の法成寺を立て殊に吉田をあがめ興福寺春日社に擬す野　頭書云▲二十二社次第云山城國愛宕郡吉田神社四座神名同ニ春日社一貞觀年中鎭座亦曰中納言山蔭卿勸請ニ云々▲一條院永延元年始ニ祭禮一▲季吟云吉田の山に齋場所とてあり▲二十二社次第裏書云齋場所事日輪太神宮と號し申は神武天皇元年神祇齋場所より初りたる故に日本最上と被ニ號申一也下略▲此齋場所は如意嶽にありし近き比吉田にうつし奉れり後の八神殿はもと大内裏の神祇官にて堀川の西大炊御門の北にありしを太閤秀吉公の時洛中の寺社を方々にひかるに此八神殿も今の吉田にうつし置き奉れりと云々此八神殿の兩方に外宮内宮たゝせ給ふ毎年九月十一日の例幣をほやけより奉らせ玉へり▲八神殿神産靈日神高皇産靈日神玉皇産靈日神生皇産靈日神足皇産靈日神大宮賣神御食津神事代主神在ニ延喜式一文

大原野　●山城の國葛野郡大原野此山を小鹽山と申也文德天皇の時始て此祭を行る春日と同體也春日はほど遠し故に后妃の參詣のたよりあらんか爲に此所へうつし申さるゝ也野　頭書云▲山案諸社記云大原野靈跡同ニ春日社一仁壽元年辛未二月依ニ大皇大后宮御祈一山城國葛野郡大原野爾宮柱廣知立春冬乃御祭始賜之

松尾　●大寶元年秦都理始て此社を立たり日吉三輪宮社皆同體の神なり野　頭書云▲延喜式第九云山城國葛野郡松尾神社二座▲二十二社次第云松尾大山咋神市杵島姬神▲舊事本記云大山咋神此神坐ニ淡海比叡山一亦坐ニ葛野郡松尾一用ニ鳴鏑神一者也▲今社家說云松尾七社者第一松尾社第二月讀社第三櫟谷社第四三宮第五宗像社第六大神社第七衣手社愚案ずるに是延喜式の後に祝ひ添たるなるべし文

梅宮　嵯峨天皇の后嘉智子は贈太政大臣橘淸友の女なり淸友は諸兄が孫奈良丸が子なり嘉智子は仁明天皇の御母也承和年中に勅して此社を祭る橘是定是を管領すとなり●是定とは正月五日の叙位に橘の氏爵の事を行ふ人をいふ名目なり橘氏の末微微になりて後寬和の比中關白道隆公大納言と申せし時宣旨をかふむり給ひしより攝家に傳りし也然

るに諸抄に是定をこれさたと點じたるは誤り也文
頭書云▲二十二社次第云山城國葛野郡梅宮四社第一酒解神第二大若子第三小若子第四酒解子當社者仁明天皇母后文德天皇祖母大后橘氏神▲社家說云大山祇命木花開姬命彥火々出見命大酒解神小酒解神若宮橘諸兄と云々文▲仁明天皇の母后橘嘉智子は祖林寺をたて給ふによりて旦林皇后と申なり今の天龍寺其舊跡なり后の遺詔にまかせて其屍を西郊に捨しかば鳥獸とりちらして拳のこりしを拾て葬る所を一拳と申也みめかたちうつくしくをはせしが世の人に色欲のまよひを絕しめんとてからを野外にすてよと仰けるとなん野

〔第二節〕●すべて神の社と云より終までなり●前に野宮のことを云し緣を以て其外の神社あまたある內にとりわきなまめかしく殊勝なる神社のことを載たり說●此段の神社のこと彼枕草子の文法を以て何となく書つらねたりといへど猶十一社を取分かきたる心あるべし口訣あり文●枕草子神はと云條にあり事永き故略文

〔一段之統論〕●此段も前段をうけて上代の餘風を

したひ神道を尊て書り●此段は上段の末に神道をいひたる引つゞきなり神道の目出度ことと天子も祖神をあがめ給ふゆへに王道めでたきよしなり盤

徒然草諸抄大成卷之四

目次

〔廿五〕飛鳥川の淵瀨常ならぬ世にしあれは時うつり事さりたのしびかなしひゆきかひて花やかなりしあたりも人すまぬのらとなりかはらぬ住家は人あらたまりぬ桃李物いはねばたれとゝもにか昔をかたらむましてて見ぬいにしへのやんことなかりけむ跡のみそいとはかなき

飛鳥川　●飛鳥川は大和高市郡に有と名所和歌集に見えたり句●淵瀨のさだまらぬ川也故に世の變じかはる事におほく歌によめり諺●飛鳥と書はとふ鳥のいまだ飛おはらざりし間に淵瀨替るといふ義なり名所ながら物の定めなき事を飛鳥川といふなり前の化野(アダシノ)の意也說　頭書云▲古今集の序に飛鳥川の瀨になるうらみもきこへずとあり又同集「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵は今日は瀨となる「飛鳥川淵は瀨になる世なりとも思ひそめてし人はわすれじ「昨日といひ今日と暮して飛鳥川ながれてはやき月日なりけり野▲壽抄には「飛鳥川淵にもあらぬ我宿も瀨にかはりゆくものにぞ有ける此歌を引けりこれは古今に伊勢が家を賣てよめる歌也此段世の中の常ならぬことをいへるには

野槌の引歌もよくかなひかはらぬ栖は人あらたまりなどゝ云て人家のうへを書たれば壽抄の歌もよくかなへり文

時うつり　去年は今年にうつり昨日は今日にうつり諺　頭書云▲古今序にたとひ時うつり事さり樂かなしみゆきかふとも此歌の文字あるをや壽▲陳鴻長恨歌傳時移事去樂盡悲來野▲文選云樂往哀來愴然傷懷

事さり　●其時なしたる事とも徒に去ゆく心なり文

ゆきかひて　●往還と書句●行かよひてなり行かはる心なり文●喜が過れば悲來り悲すくれば喜來る也盤

のらとなり　●野原中略の詞也盤●萬葉に草の字をのらとよめり又野等ともかけり壽●昔は繁榮なる地も時されは今は野等となる也諺●是よりして時うつり事さる證據をいだすなり盤　頭書云▲遍昭が歌に「里はあれて人はふりにし跡なれや庭も籬も秋の野等なる句▲赤染衛門が家集に「跡もなく雪ふるさとはあれにけりいつれ昔の垣根なるらん▲又西行歌に「津の國の長柄は橋の形もなし名はとゞまりて聞わたれども說

かはらぬ住家　頭書云▲此句樂天が詩に所レ經多ニ舊館ニ太半主人非と作り萬葉歌に「ときはなる岩屋は今もありけれど住ぬる人ぞ常なかりけるとよめる詩家の心に本つげり句▲朗詠集に年々歳々花相似歳々年々人不レ同とあり▲又鴨長明方丈記に行水の流はたへずしてしかも本の水に非ずよどみにうかぶうたかたはかつきへかつ結て久しく留ることなし世間に在人と栖とかくのごとし玉しきの都の內に棟をならべ甍をあらそへる高き卑き人誠かと尋ぬれば昔かはりて昔見し人は三十人が中に僅にひとりふたり也▲又新古今に「古鄉は見し世にも似ずあせにけりいづち昔の人は行けん說

人あらたまりぬ　●家居かはらねば主かはる也壽竟皆常ならぬ心なり文●法成寺のありさまをいはん爲也余

桃李物云々　●舊跡にのこれる桃李ものいはねば昔を語りあはせん友もなくなりてはかなき心也文●是は故事をもつて書なり松もむかしの友ならぬ

といひふるしたるにかく書事面白き筆法一轉語奇妙也といへり盤　頭書云▲前漢書李廣傳李將軍恂恂如ニ鄙人ー口不レ能レ出レ辭及ニ死日ー天下知與レ不レ知皆爲流レ涙彼其中心誠信ニ於士大夫ー也諺曰桃李不レ言下自成レ蹊此事言雖レ小可ニ以喩ー大▲李將軍の生付物いはぬ人なれど心中誠に德をそなへし人なれば人の信じてあつまること桃李の人に來といはねども花見事に咲ば人のあつまるにたとへていひたることとわざより桃李ものいはすとつかひつけたり▲後拾遺に世尊寺の桃花をよめる出羽辨「古鄕の花のものいふ世也せばいかに昔のことをとはまし野▲菅三品詩桃李不レ言春幾暮烟霞無レ跡昔誰栖諸

まして　●ましての字兩說あり●一義には兼好見給ふ所さへ如レ此にかはりゆけば昔久しき跡はまして也●又常の所さへ替りはつれば花やかなりし所はまして也諺●後の義に見ればやんごとなきといふ字をつよく見るなり參●決前生後の詞なり盤●たゞ尋常の人の家のかはれるさへはかなきにまして法成寺はとのこゝろたり全

やんごとなき　●無止と書前に注

〔第一節〕●飛鳥川と云よりいとはかなきと云までなり此段三節に分て見るべし●山棊ずるに上段に神社のことを云しをうけて佛閣のことをいへりさて人に無常をしらせんために先大綱を此一節に論じて次の節に其常なきことの證據をかけり

京極殿法成寺なﾄﾞど見るこそ志とゞまりこと變じにけるさまはあはれなれ御堂殿の作りみがゝせ給ひて庄園おほくよせられ我御ぞうのみ御門の御うしろみ世のかためにて行末までとおぼしをきしときいかならん世にもかばかりあせはてんとはおぼしてんや大門金堂なﾄﾞどちかくまでありしかど正和の比南門はやけぬ金堂は其後たふれふしたるまゝにてとりつるわざもなし無量壽院ばかりぞそのかたとてのこりたる丈六の佛九體いとたうとくてならびおはします行成大納言の額兼行がかける扉あざやかに見ゆるぞ哀なる法花堂なﾄﾞどもいまだ侍めり是もまたいつまでかあらんかばかりの名殘だになき所々はをのづから石ずへばかりのこるもあれどさだかにしれる人もなし

京極殿法成寺　●京極殿法成寺ともに御堂ノ關白道長公の住給ひし古跡なり壽 ●京極殿は道長公の俗にての御殿也法成寺は入道して住給ふ寺也盤
頭書云▲「京極殿」拾芥中末云京極殿土御門南京極ノ西南北二町其南一町被レ入二道長家一或大入道殿家上東門院是也後一條朱雀後冷泉三代帝於二此所一誕生匡衡宅皇后四人於二此所一誕生此家紀伊島賀茂明神通給云々▲後一條後冷泉被レ加二南一町一野 ▲「法成寺」五條河原にあり壽 ▲今の三十三間堂の南をもてにありしと聞侍る近比書付ありし瓦の出しとなり全 ▲後一條院など行幸し給ひしことなど榮花物語にあり京極殿には宇治關白頼通公すみ給へと道長公の御遺言なり野 ▲寛仁四年二月より道長公此寺を催し立給ひて治安二年七月十四日御堂供養し給へること榮花物語にあり文
志とゞまり　●昔の願人の志後代迄と思ひ置ける志の趣はとゞまりて此事の樣は變じたると也壽
異說●今見る人の志とゞまりなり大かたの所は見すてゝありくにかゝる所は見すぐされぬとなり盤●後說は文體のうつりにも義理にもそむけり塔婆佛閣建立の佛説を見るべし志の功德者不變なりそれを心ざしとゞまるといふなり全　頭書云▲本朝文粋十四後江ノ相公朱雀院御願文樂盡哀來志留事變句
御堂殿　●關白道長公法名道相好て御堂を造立ある故に世に御堂殿と稱す諺 ●法成寺に住みたまふゆゑに御堂關白といふなり盤　頭書云▲山案鎌足十二代の孫なり九條の右大臣師輔公の孫東三條關白兼家公の男なり康保三年に誕生し給ひて萬壽四年十二月四日に薨し給ふ歳六十二官に在て攝政し給事二十六年長德元年より長和六年まで也後一條院後朱雀院後冷泉院の外祖父なり攝政從一位太政大臣氏長者世に御堂關白と號す

▲系圖 前にくわしく記すゆへにこゝには略す

大織冠—淡海公—房前—眞楯—内麿—冬嗣—良房—基經—忠平—師輔—兼家—道長

作りみかゝせ　●作りみがゝせ給ふといふ事はかかるも變じたる也ましてや麁相なるはと云むため也盤　頭書云▲風雅集にかたのゝ尼法成寺にまいりて詠侍ける歌「くもりなくみがける玉の臺には塵

もいがたきものにぞ有けるとありみがゝせと云詞よくこれに相叶へり参

庄園多く　●寺領を寄附せらるゝ也諸　頭書云▲字彙莊子註云田舍也俗作レ庄非　▲三體詩註云唐人謂ニ別業ー爲レ莊句　▲榮花物語三十卷に道長公病腦重くなり玉ひ法成寺にをはしますに後一條院行幸し給へる所に云又御堂には五百戸の御封よせさせ給ふ宣旨下りぬとのゝ御前いみじうれしき也とかへすぐ＼よろこび申させ給ふ萬壽四年十一月廿五日也　▲同卷又云御領御庄さるべき限りは四五所皆よせ奉り給ふて殘の所はうへのおはしまさん限りはしろしめして後は御堂にとぞのたまはせしかば其まゝにとぞをぼしめす上下略　▲元享釋書云寛仁三年三月大相國藤道長公薙髮九月受ニ戒于東大寺ニ法名道祖▲又云萬壽四年十二月道相疾ニ於法成寺ー常幸因納ニ五百戸于寺ニ又供ニ南北僧二京僧一萬人ー文

我御ッぞう　●我御曾孫なり壽　●我御曾は御堂をさして也しかるに御曾と御を付るは兼好御堂をおしはかりて云によつて尊で御の字付るなり古●當代井東宮の祖父なれは御曾と申なり全　●曾の字註前に有

御うしろみ　●攝政關白太政大臣を申なり野

かばかり　●かくばかりの義也句　●かほどになり諺

あせはてん　●あれはつるをあせはてんといふなりせとれと相通也参●河のあせるといふも水のあれてかはくを云　頭書云▲八雲にあせるはかはり損する義なり▲後撰集に「今日よりや天の川原はあせなゝんそこゐともなく只わたりなん

おぼしてんや　●か程にあれはてんとは御堂殿おぼしめさじ物をとの心也すでに兼好時分にはやいたくあれたるなるへしとは跡かたもなき也文●兼好が其昔を推量していふ詞也盤

大門　●惣門也全

金堂　●其諸堂のうちに本堂をいふなり全　頭書云▲千載集云花さかりに法成寺へ詣て侍けるに金堂の前なりける花のちりけるを見てよみ侍ける俊成「ふりにける昔をしらば櫻花ちりの末をもあはれとは見よ此歌のこゝろは俊成卿御堂殿より五代の末葉なればなるべし文▲編年小史五載六十八後

一條治世壬戌七月慶ニ讃法成寺金堂ニ天皇臨幸彰子妍子威子三后皆至公季以下扈從因レ是稱ニ道長御堂關白一參

正和の比 ●人皇九十四代花園院年號也諸

わざもなし ●再興する人もなし諺

無量壽院 ●阿彌陀堂なるゆへに譯語を用て無量壽院と名付是も法成寺に有參 頭書云●天台大師十六觀經疏云無量壽者天竺稱ニ阿彌陀一▲四明妙宗鈔無量壽者已是華言天竺梵語稱ニ阿彌陀一參 ▲大鏡云鎌足のをとゞの多武峯不比等大臣の山階寺基經のをとゞ極樂寺忠平のをとゞの法性寺九條殿の楞嚴院あめの帝の作り給へる東大寺も佛ばかりこそ大きにをはすめれど猶無量壽院にはならひ給はずましてよの寺々はいふべきに非ず文上下略す

其かたとて ●昔の法成寺の形とて諺

丈六の佛 ●本尊の阿彌陀佛の御たけ一丈六尺なり參 頭書云▲觀經云阿彌陀佛神通如意於ニ十方國一變現自在或現ニ大身一滿ニ虚空中一或現ニ小身一丈六八尺參 ▲往生要集云彼佛是三身一體之身也於ニ彼一身一所見不レ同或丈六或廣大身▲榮花物語十八卷云佛を見たてまつれば丈六の彌陀如來光明たい一きなり諸の御かうべは綠の色深ふ眉間の光毫は右にめぐりてえんてんせること五須彌のごとし青蓮華の眼は四大海をたゝへ御唇は頻婆菓のごとしと云々文

九體 ●佛九體ある事は九品の淨土にかたどり印相なども上品中品下品かはりめありさて其上中下の三品各三つにわかれて九品となるなり諸 頭書云▲阿彌陀式云九體阿彌陀九品敎主也參

行成 ●正二位藤原行成卿能書也諸 頭書云▲謙德公伊尹孫義孝子也能書之家也道風佐理行成を三跡と云なり壽

▲系圖師輔迄前委

鎌足—不比等—房前—眞楯—内麿—冬嗣—良房—基經—忠平—師輔—伊尹正二位太政大臣攝政號ニ三條一六十四代圓融院天祿三年十二月一薨歳四十九諡ニ謙德公一—義孝春宮亮歌人右少將從五下—行成辨頭帶劔按察使正二位權大納言後一條院萬壽三年十二月四日薨歳五十六能書人也

兼行 ●大和守藤原兼行 頭書云▲延久四年七月任ニ大和守一南家人也能書能書相兼句▲大和守兼行

は後冷泉院後三條院の大嘗會の悠紀主基の屏風をかけり又圓宗寺の額を書たる人なり其外內裏の額かきしことと又此法成寺の額は行成卿內の扉は兼行がかきしことなど行能卿の夜鶴抄に見へたり▲榮花物語十八に云北南のそばのかた東のはし／＼の扉ごとに繪をかゝせ給へりかみに色紙をして詞をかゝせ給へりはるかにあふがれて見へがたし九品蓮だいのありさまなり云々これ扉の內に其佛の功德の故ある經文など書葺也文

▲系圖今こゝに系圖を書といへども未レ詳諸抄に南家の人とあり南家氏族には未ニ考出一

陽成院十七代―仁皇五清蔭歌人大納言天暦四年七月三日薨六十歳―兼房從五位下上總介―延幹上總介能書―兼行大和守正四位下能書

又考に鎌足の孫不比等の男南家の祖武智麿より十二代目に兼行といへる人あれども未レ詳ゆへに略す重て可レ考

扉 ●阿彌陀堂の扉諺見ゆるぞ ●少し殘りたるにて猶々哀なるよしに書り盤

法花堂 ●法花三昧を行ふ堂なり本尊阿彌陀なり諸

又いつまでか云々 ●是も前に准じて見ればやがてなくならんと也盤

かばかりの名殘 ●法成寺などの如く名ある所さへ如此況其外の舊跡はいよ／＼しる人なき也野

頭書云▲承久の兵亂に中御門中納言宗行武士の手に渡りて關東に下向の時菊川の驛にて討れぬ其時宿の障子に▲昔南陽縣菊水汲ニ下流ニ而延レ齡今東海道菊川宿ニ西岸ニ而失レ命云々と書付け給ふ其後長源法師東國修行の此菊川に至り彼宗行此所にて西岸に命を失と記されし家やあると尋ぬるに火のために燒失せると所の者答ければ偕は今を限と殘れし形見さへ跡なくなりぬとあわれを催して一書付し形見も今はなかりけり跡は千年と誰かいひけんとよみけるか其長源も今は昔となりにけり說

所々 ●其跡もなき所々なり說

をのづから ●石は朽ぬものなれば殘さんとせねどもをのづから殘るよし也盤

石ずへ ●礎字磌(シン)字

さだかに ●央の字也たしかに也其跡と昔の名をだにたしかにしらぬよしなり盤

【第二節】●京極殿と云よりこゝまでなり●此節は

家居の常ならぬことを云しをうけて法成寺の事を擧て其うつりかわつて常なきことの證據を書り説●御堂殿のやうなは稀なるによつて其外は跡もなしと云て深く警めたりさて法成寺のあせはてたる有さまを繪に書たるやうに述たり人を感動させんため也盤

さればよろづに見ざらん世迄を思ひおきてんこそはかなかるべけれ

されば　●さうあればと前をうけていへる詞也かく無常の世なればと也文

よろづに　●萬にはと家居寺などの事ばかりにはあらず何事をもと也京極殿法成寺の事をいひ一轉じて萬のことゝいふ也是筆法也盤

見ざらん世迄　●見ざらん世とは死後の事也錄

頭書云▲景行錄云明旦之事薄暮不レ可レ必薄暮之事晡時不レ可レ必天有二不測之風雲一人有二旦夕之禍福一未レ歸二三尺土一難レ保二一生之身一既歸二三尺土一難レ保二百年墳一▲金剛經云一切有レ爲法如二夢幻泡影一如レ露亦如レ電▲源氏若菜卷に紫の上「目にちかくうつれば替る世の中を行末遠く思ひける哉說

〔第三節〕●さればと云より終まで也●此節は前を議論したるなりよく／＼思へ入ぬことにてはなきか只在世に道にそむかぬがよし入ぬものを費し人民をいため後の世のためといふは墓なきことなりといましめたり盤●さればと云より末までは御堂殿の心をはかなみたるとは見るべからず御堂殿の御心わきより推量し難し釋書にも入し人なれば墓なき心にはあるべからす又堂塔は今日立破滅するとも幾久とをもふが功德なり此所は世間に貪着する人にしばらくしらせたり全

〔一段之統論〕●此段は上段に神社のことをいへるに付て又佛閣の沙汰にうつり何事も世の無常なることを人にいましめ侍る句●此段は無常のならひなれば家居よろづにつけて末代を兼て仕置んも徒ら事なるべしたとひ富貴榮達の人とてもさのみ行末までと思ふべからずとの教なり文●此段我身の榮ゆる時に子葉孫枝の猶しげらんことをかねて思へども程なくうつりかはること圍碁の石をひろふが如し汾陽が舊宅には古槐すさましく金谷園の花は風雨あはたゝし朕を始として二世三世より萬世

にいたるべしと云しも一炬の火三月の紅ならずやされば驪山を過るもの漢文陵を拜するためしあれば君も臣も驕をきはめずして只德をつとむべきなり道長公佛法を好て後までの福をいのりて寺を建立せられしが寺は早無なれは其福も甲斐なきことにや野

〔廿六〕風も吹あへずうつろふ人の心の花になれにし年月をおもへばあはれと聞し言の葉ごとにわすれぬものから我世の外になりゆくならひこそなき人の別よりもまさりて悲しき物なれ

風も吹あへず　●（風）古歌の心をもつて書り諧

（あへず）あへぬとは敢の字也敢は果也とて風も吹はてぬにとなり盤　頭書云▲古今集に貫之の歌に「櫻花とくちりぬともをもほへず人の心ぞ風も吹あへぬ▲又小町が歌に「色見へてうつろふものは世の中の人の心の花にぞ有ける此二首の詞にてかけり壽▲此貫之歌は人の櫻ばかりとくちるものはあらしと云しとき貫之かよみしなり盤

心の花　●心の花をはたゞ心のごとくばかり見るべし參●風の吹あへて花のうつろふはさる事なれど人の心の花には風も吹あへぬにうつろひやすし其うつろひ易き心の花に相なれたる昔の年月を今思ひかへせばとなり是は男女の道に不限互にうらみかこちあひたる睦しき中のことくなりゆく也説　頭書云▲圓覺經云心華發明照二十方刹一心の花と云ふは佛經より出たるなるべし衆生の心法に自性清淨の白蓮華ありと見へたり又心の月など云も密家の觀法に心月輪を觀ずるゆへ也參

年月をおもへば　●年月を思にと書出してさて次に其なれにし有さまを書なりおもへばといふ詞淺く不レ可レ見盤

あはれと聞し　●さきのあひ手か千年萬歲と忘ましきと契る事也盤

わすれぬものから　●物ながら也諸●今こそ人の心も花のうつるやうに替れ其かはらぬ時にあはれと聞し言の葉は今替れる後も忘れがたき也增鐵　頭書云▲古今集に「吉野川よしや人こそつらからめはやく云てしことは忘れずとよめる心にてかけり文▲はやく云しとはもと云し言葉也增鐵▲「忘れしと頼めし人はありときく云しことの葉いづちい

にけん▲伊勢物語に「ながゝらぬ命の内にかはれるはいかに短き心なるらん▲又兼好歌に「空に立名のみ殘りて浮雲の跡なきものはちぎりなりけり説▲古詩云君子芳桂性春濃秋更繁小人桂花心朝在夕不レ存盤

我世の外　●我世の外とは哀に馴し人も何ぞ故障ありてえあはぬか又は心うつろひて中絶する事あればあらぬ世界へもゆきわかれたるやうにへだゝりて也諸

なき人の別より　●死して別しよりいきわかれがまさりて悲しき物と也參　頭書云▲楚辭云樂莫レ樂二兮新相知一哀莫レ哀二乎生別離一とあるも此心に同じ句

〔第一節〕●風も吹あへぬと云より悲しきものなれまで也此段二節に分て見るべし●此節は人の心はかくうつりやすきものからさすがに馴かたらひし年月のほどは哀にわすれがたきことをも云かはせしに其跡かたもなくかはりゆく世のならひを云なり▲烏丸亞相の耳底記に玄旨法印曰つれづれは面白き物なり古歌古事などをもかすませて二重も三重もうへを書たるものなり人の心ぞ風も吹あへぬ是を風も吹あへぬ心のとかけり云々文

されば白き糸のそまむことをかなしび路の岐のわかれん事をなげく人も有けんかし堀川院（七十三代の帝也）の百首の歌の中に「昔見し妹（妻を云也諸○又妻なられ共云也全）が垣根は荒にけりつばな（茅字又茅花）まじりのすみれ（菫の字）のみして淋しきけしきさゝる事侍りけん（かくも有べきとの言也諸）

されば　●さうあれば也上をうけし詞也諸

糸のそまむ云々路の岐のわかれん　頭書云▲淮南子云楊子見二逵路一而哭之爲下其可二以南一可中以北上▲墨子見二練絲一而泣之爲下其可二以黄一可中以黑上▲高誘註曰憫二其本同而末異一▲高辨上人白糸を人の心にたとへたることをよめる風雅集に「昔たれ人の心を白糸のそむればそまる色になしけん野

人も有けんかし　●是は楊墨が二色の故事をひきて人の心のいろ〳〵にうつりやすき事を云也諸●上の生別をかなしふもはじめ心をそめて互に相しれる着より發りたるものなれば昔も物の相わかるゝ始を歎き悲める楊墨が故事を引合られ侍り句

堀川院　頭書云▲山案人皇七十三代堀川院諱善仁白川院七十二代第二子母中宮賢子藤原太政大臣師實公

猶子也實右大臣源顯房公之女也承暦（白河院）二年七月九日降誕同十一月三日爲ニ親王一應德三年（于時九歲）十一月廿六日受レ禪同十二月廿六日即レ位寛治元年十一月十九日大嘗會同三年正月五日元服（于時十二歲）嘉承二年七月十九日讓レ位即崩ニ堀川院一治ニ天下一廿一年壽二十九

百首の歌　頭書云▲兩度の百首あり初度の百首は權大納言公實勸ニ進之一こゝにひく昔見しの歌は則公實卿の歌也壽

昔見し云々　●此歌は權大納言藤原公實卿の詠也堇の題也野　頭書云▲昔見しの歌は家持家集に「つばなぬく淺茅が原のつぼすみれ今盛りにもしげき我戀」とよめるを本歌にてよみ給へり文▲さびしきことに堇を皆とり合侍る後撰春部の詞書にあれたる所に住侍ける女つれ〲にをもほへ侍りければ庭にある堇の花をつみて遣しけると書たり句さること侍りけん　●是も馴たる人の心かはりて跡かたもなき有さまをよめる歌なれば引合て書り文是も生別を悲める事也參

［第二節］●されば白糸と云より終までなり●山案

上節に皆うつりかはることを云しをうけて昔の人もかくうつりかはることを歎しと云ふ證據に古き詞と古き歌とを引けり

［一段之統論］●此段は前段に家居などの常なき事を云ふをうけて爰には人の心も常住なることなくうつりかはり易く墓なきことをいへり文●上段には當世と後世とのうつりかはる事をいひ此段には當世の中にして人の心の飛鳥川なる體を述たり猶又古今の戀の歌に「心こそうたてにくけれ染ざらばうつろふ事もをしからましや」とよめる心よく考合せ見るべし●此發端の書出しやふ古歌の結句をふと心にうかむまゝにかゝれ侍る無類の筆勢なり此うたは或人の櫻ほど早くうつろふものはなしといひける言葉の下より紀貫之のながめ出たる名歌なり又おはりのすみれの歌にて書とめらるるをもはずしらず文章又もさびしき段なり堀川院の兩度百首の内にあまた名歌あるにさまで人の目立ることもなきやうの歌をこゝにぬき出しかゝれたる作者の歌道のたけ中々をもしろしともいはれぬ氣味侍り此段々の次第を見れば古人は何事に付てもむか

しを慕ひ感慨をおこせり尤あはれに侍る貞

〔廿七〕御國ゆづりの節會おこなはれて劔璽内侍所わたし奉らるゝ程こそかぎりなう心ぼそけれ

御國ゆつり ●天子の位を春宮へゆづり給ふ時の節會也讓國共御讓位とも申也壽 ●御讓國といふ事上古はなし帝御存生の内に御位を次の帝へ御ゆづり有事三十六代皇極天皇卅七代孝德天皇へゆづらせ給ふ始也壽 頭書云▲御讓國の節會北山抄并江次第に見へたり又後成恩寺殿宗祇へ御相傳の抄物に云御讓位の時は警固固關節會宣制劔璽渡御新主の御所の儀式あり御國讓は天下の重事世のかはりめたるによりて非常をいましめに警固固關と云ふ事を先最前に被レ行なり▲警固と云は兼日或は當日に上卿陣の座につきて六府の將佐を召て司司固め守れと仰すれば將佐稱唯して退くことなり▲固關とは關々を固むること也古は奥州の夷やゝもすれば都に亂入せし事ありし其用心に東山東海の關を固めしむる也今は伊勢の鈴鹿近江逢坂美濃の不破を其國々の國司に勅符を下されて固めしむること也▲節會儀式大臣陣の座にて内記を召して宣命の草を奉らしむ内覽奏聞あり返し給ひても内覽奏聞あり定れる義なり宣命使には中納言或は參議を用ゆ則其人に仰レ之天皇南殿に出御此日は御簾をかけてあらはには出ましまさず近衛次將も纔腋の袍に壺胡籙を負て陣をひく常の節會にはかはることなり大臣陣を立て軒廊にすゝみたつ内侍階に臨て召の由を告内辨宣命を笏にとりそへて昇殿して兀子につく闈門を仰すれば闈司坐につく内辨二音舍人を召せは少納言かはりて版につく此時内辨刀禰召せと仰す刀禰は六位以上の人を云也其後諸卿參上列立す異位重行衞府の公卿は弓矢を帶て列するなり次に内辨宣命使を召す召るゝ人列をはなれて階より昇て内辨のうしろに立内辨宣命を授く命を給りて殿を下て軒廊の北の方にたつ次に内辨下殿して公卿の列に立くはゝる次に宣命使列の前をへて版位につきて宣命をよむ二度によむによつて宣制二段と云なり諸卿これを承て一段ことに再拜す或は後の段には舞踏する例あり是天位を太子に讓り給ふよし宣命の文にのせられたるを百官承てかしこまり申由なり宣命使本列にくはゝる其

後内辨以下退出す劒璽渡御のことは次に記す文
節會　●せちへとは日本國をゆつり給ふとの事也
委曲其作法公家にてもしり給ふ事かたし盤
劒璽内侍所　●寶劒神璽内侍所也略してこゝに云
也全●劒璽内侍所を三種の神器と申て王位をうけ
つがせ給ふしるしとして舊主の御所より新帝へ渡
さるゝなり説　頭書云▲(寶劒)麗氣記云草薙劒亦
名二天牟羅雲劒一是也▲日本紀云素盞鳴尊乃拔二所レ
帶十握劒一寸斬其蛇一至レ尾劒刄少缺故割二裂其尾一
視レ之中有二一劒一此謂二草薙劒一也素盞鳴尊曰是神
劒也吾何敢私以安乎乃上二獻於天神一文▲秘説云寶
劒とは星の氣なり此劒をは本は叢雲劒と云後に草
薙劒と云なり素盞鳴尊於二出雲國簸川上一拔二十握
劒一斬二八岐大蛇一至レ尾劒刄少缺不レ切叢雲立故怪
割二裂其尾一視レ之中有二一劒一是云二叢雲劒一也全▲又
草薙劒と云ふは景行天皇四十年日本武皇子東夷を
征し給ふ時冬十月伊勢神宮を拜し御伯母倭姫命に
辭して云天皇の命をうけて東征の志ありもろ〳〵
の叛者を誅すべきために君を辭するよし申たまひ
ければ倭姫命天叢雲劒をとりて日本武にさづけて

宣くつゝしみておこたることなかれと此歳日本武
尊はしめて駿河にいたり給ひしに其所の賊ともい
つはりあさむきていはく此野には麋鹿をほしこれ
を狩給へとたばかりしを日本武これをまことゝ思
ひて野の中に人獸をもとむ彼賊王を殺さんとする
心ありし故に火を放て其野をやくとき王の佩給ひ
し劒叢雲ひとりぬけ出で王のかたはらの草を薙攘
よりまぬかれ給ひしほどに其劒を草薙といへり此
劒今尾張國年魚市郡熱田社にあり參▲(神璽)八坂
瓊曲玉なり▲舊事本紀云令三玉作祖櫛明玉神一作中
八坂瓊之五百箇御統玉上矣▲禁秘抄云神璽自二神代一
于レ今不レ替誇永自二海底一求出以二青色絹一裹レ之以二
紫糸一結レ之如レ網内侍持間下緒指入程緩筥中鏡一
程物動返々不レ可レ傾文▲秘説云御靈月精也一義云
天照太神ノ御靈骨也一義云天照太神天岩戸に引籠
給ふ時爲レ可二慰申一天明玉命作給へる八坂瓊曲玉
也八坂とは八方うるはしく圓なる意也一義秘事に
は獨鈷形なり又八坂瓊玉の事日本紀私上云八坂瓊
と者八岳まて光り輝く玉也故曰二八坂瓊一右は深々
秘説なり全▲天照太神素盞鳴とちかひし時御髻に

まとひ付させ給ひける物なり又素盞嗚尊此玉を羽明玉と云ふ神よりうけて後に天照大神へ奉り給ふとも申なり野 ▲神璽のことは天子といへども此筥の内を見給ことあたはすまして凡人などか其故をしらん論すべからずと也參 ▲(内侍所)前廿三段目にもあらまし記す故に略して爰に記さす ▲内侍所とは八咫神鏡也 ▲日本紀云使ニ鏡作部遠祖天糠戸者一造ル鏡 ▲麗氣記云八咫鏡火珠所レ成玉本有ニ法身妙理一也亦名ニ邊都鏡一亦名ニ眞經津鏡一亦曰ニ白銅鏡一文 ▲此鏡を八咫と云は八寸を咫といふ中の婦人の手のたけ八寸あるほどに婦人の手を咫と云なりさるゆへに八咫といふは天照太神陰神なれは婦人の手の長さにかたどりて八寸なるもの八つのことにて八々六十四義なり鏡の徑二尺二寸三分餘なるによりて其圍六尺四寸あるほどに八咫鏡と云なり又一説に村上天皇聖記に天德四年に内裏炎上の時に内侍所灰の中にいませしを見しに其徑八寸ばかりとあるほとに八寸の義よしと也家傳の本に云八と云字を用る事はやは付字なり小兒の啼ときも初てやあといふ神は萬物の根源なるゆへに八の字を付るが神道の本なりと也參

わたし奉らる　頭書云 ▲劔璽渡御事舊主の御所より三種の神器を新帝へ渡さるゝなり掃部寮路の間に莚道をしきて近衛の次將兩人劔璽を持て莚道のうへを歩む關白以下皆扈從行幸のことし近衛の次將階をのぼりて内侍に是をさづく内侍二人をのを劔璽を取て夜の御殿に安置す ▲内侍所渡御の時は六府幷職事一人供奉す主上は庭上に下りたゝしめ給ふ内侍所は溫明殿に安置す文 ▲帝王はやく崩御なつて親王自ら渡し給ねは關白の次の帝王に渡し奉り給ふ也盤

かぎりなう　●今日迄の御位のかぎりなれば也文

心ぼそけれ　●節會の時兼好正しく見たる時の心をすぐに書也盤

［第一節］●御國ゆつりと云より心ぼそけれまで也此段二節に分て見るへし●山案これも前段にもののうつりかはることを書しをうけて天子の御身の上にさへ如レ斯うつりかはると云ことをいはんために先うつりかはるゆえんを云なり

新院の　おりゐさせ給ての春よ　ませ給ひけ　るとかや

「殿守のとものみやつこ(御奴と書)他所にしてはらはぬ庭に花ぞちりしく今の世(當今也參)のことしげきにまぎれて院にはまいる人もなきぞさびしげなるかゝるをりにぞ人のこころもあらはれぬべき

新院 ●九十四代の帝花園院なるべし諸 頭書云▲山案人皇九十四代花園院諱富仁九十一代帝伏見院第二子母顯親門院藤原周子左大臣實雄公女也永仁五年七月廿日降誕正安三年八月廿五日親王同廿四日立ニ太子一(于時五歳)徳治三年八月廿六日踐祚同十月改ニ元延慶一同十一月十六日即レ位(于時十二歳)同二年十月廿一日御禊同十一月廿四日大嘗會(于時十三歳)應長元年正月三日元服(于時十五歳)文保二年二月廿六日禪レ位(于時廿二歳)同三月十日奉ニ尊號一治ニ天下一十一年建武二年十一月廿二日御落飾(于時廿九)法諱遍行御戒師惠鎭上人貞和四年十一月十一日崩壽五十一號ニ萩原院一

おりゐさせ ●御位をおり居給ふ也諸

殿守の ●主殿寮の事なり御殿の掃除をつかさどるなり前にくはしくしるす參 頭書云▲此歌は朗詠集に「殿守の伴の御奴心あらは此春ばかり朝きよめすな是庭の落花をよめる歌なるを本歌としてよませたまへるなり文

とものみやつこ ●主殿寮の下司は伴氏の者どもなる故にとものみやつことい へり句

他所にして ●今は當今の事をのみ專として新院は他所にすると也句

庭に花ぞ云々 ●主殿寮の御奴ともは禁中の官人にて院の御所へはまいらぬ故にちりしきし花をはらふ人もなきさま也文

かゝるおり 頭書云▲古歌に「あはれげにうき時つるゝ友もかな人の情は世にありしほと古▲山案漢書云勢交者近勢盡而亡財交者密財盡而疎

あらはれぬべき ●兼好義論也人のゆかぬ時分に心をつくべき事也盤 ●此結句簡要也主君親昵朋友等に忠義をすゝむる詞也壽

「第二節」●新院と云より終までなり●此節は天か下治させ給ひし帝さへをり居させ給へばまいる人もはやまいらぬ體なり加樣の事を書んために前段に貫之か歌をば書出し給へるか此段はかゝる折にそ人の心もあらはれぬべきと書る一句金言なるべし人の敎にのこせり貞 ●此節末に殿守の歌まいる

人もなきなんといへるを見れば唐の玄宗の心ならず肅宗に位をゆつりて蜀より歸て後南園にすみ給ひしをもかげありされば樂天も西宮南苑多ニ秋草一宮葉滿レ階紅不レ掃といひしまして李輔國が政をままにして二帝を辨髦とせしをや野

「一段之統論」◉此段も世上の變易を書り天子の御上にも猶其事あるよしをいふなるべしさてかゝる折にぞ人の心もあらはれぬべきといひて前段の人の心の末の變改を云しに應したるにや文◉山案此段は上件にものゝ移易ることを段々に云し結句と見るべし先初には調度や詞などの古とかはることを云ひて其次には九重には未だ古風のこることとを慕ひ其緣によりて內侍所の御神樂野宮のことなどを中間云てさて飛鳥川の段には何事もうつりかはるほとに末の世の事を思惟すまじき戒め其次には末の世のことはさてをき同じ世にさへはやくかはり易き人の心の頼み難きことをしらせ天子さへ如斯況や庶人に於てをやと此段に云てさて結句にかゝる折にと嚴しくいましめたり上段々も此一句を書んためなるべし此次の段もうつりかはること書しといひながら彼は又此段の意をうけて死の道のあはれなることを段々末迄とけり偏に此段に可レ着レ意

「廿八」諒闇の年ばかり哀なる事はあらじ倚廬の御所のさまなンど板敷をさげ葦の御簾をかけ布のもかうあらあらしく御ン調度どもおろそかに皆人のさうぞく太刀平緒までことやうなるぞゆゝしき

諒闇　◉說々おほくして字の書樣もちがふなりされとも只諒闇と書かよきそ諒闇の二字はまことにくらしとよめり天子は天の子と書は天の日月に比するなり天に日月なき時は天下くらやみになる也天子崩御なさるればまことにくらやみになつて天の日月のなきごとく也說◉諒闇とは天子の喪にこもりおはします時の事也むかしは三年其後略して一年其後は以レ月易レ日とて十二日也こゝは十二日の事にてもあらず天子崩御の年の內を指也盤　頭書云◬字の書樣あまたあつて一決しがたし亮陰書經諒陰禮喪服四制 諒闇傳蔡氏 梁闇鄭氏註 梁庵王氏註 ◬書經說命上曰王宅ニ憂亮陰ニ三祀蔡氏傳云亮亦作レ諒陰古作レ闇按ニ喪服四制ニ高宗諒陰三年鄭氏註云諒古作レ梁楣謂ニ

之梁闇讀如鶉鶉之鶉闇謂廬也即倚廬之廬云々
▲朱子語類問諒陰之義朱子曰孔氏曰諒信也陰默也胡氏釋之曰信謂信任冢宰胡氏釋之曰信能默而不言也二家皆用孔訓而爲說不同鄭氏於禮記又讀作諒闇言居倚廬大抵古者天子居喪之名野

あらじ　●あらじと治定していへるおし出しての哀さなればなり盤

倚廬　御忌の時の御かり屋也句　●かたは屋に作るを倚廬と云是に付て髪翦作と云事有說　頭書云　▲禮喪大記父母之喪居倚廬不塗疏云倚廬就中門外墻下倚木爲廬句　▲文選楊子雲解嘲云曠以歳月結以倚廬呂延濟註云倚廬堊室也斬衰服居之以結其心也此言下脩喪制之禮以示於人也
▲日本事跡考云天王崩太子居倚廬百寮存壟遏密八音官命固三關戒嚴先命造陵司次命裝束司葬送有日太子素服群臣百官皆凶服云々参

板敷をさげ　●御倚廬の間の板敷をひきくさげる也参

葦の御簾　●伊豫簾也常の竹にてせぬなり省略の意なり盤

布のもかう　●兩說布帽額とも又布木瓜とも書●布のもかふの事予きゝし比まては左様にはあらさりしが後に三ヶの大事とて秘事の說とやらん貞德の定め給ひしとて秘する事になればしるさずと云云盤　●口傳云布のもかうあら〳〵しくとは葦にてあみたる御簾也其へりはあらき布をねずみ色に染てもつかうをへりの紋に墨にて書なり天子一代に一度ある事にて殊に忌憚事なれば格式もなく物に書付てもおかぬ故にしりたる人まれなれば大事といふ也全　●木瓜はぼけ也諸　頭書云　▲山案一說に伊豫簾に帽額の附たるを云なり端の紋と云義非なり▲西宮記云撤尋常御簾改簾以鈍色細布爲端帽額云々帽額と云もの別にあり可口授

あら〳〵しく　●もつかふとも見えわかぬほと麁相にかく故にあら〳〵しくといふ也全　●かやうにあら〳〵しくかく事は御遊興にまぎれぬやうに御心の憂を表する也是によりすへ皆かくのごとし参

皆人のさうぞく　●装束也●主上にかきらず喪にこもらせ給ふ間の諸官人も装束を麁相に態とする

也全　頭書云▲服衣鈍色を用其人によりて濃鈍薄鈍かはりめあり文▲深草帝崩御の時に諸官人何れも服を著す喪過て後皆服を改けるに良峯宗貞はすぐに世捨人となつてよめる「皆人は花の袂になりにけり苔の衣よかわきだにせず説
太刀●黒作りに銀かな具なり壽　頭書云▲鑄抄云黒染諒闇帶ㇾ之金具拔ニ替吉服劍具一也裝束無文紫或藍革云々劍柄白佐女如ㇾ常云々文
平緒●前にさかれる緒也拾　頭書云▲鑄抄云諒闇之時平緒無文鈍色或香色云々文
●尋常のありさまとかはれることとやうなるぞ　●尋常のありさまとかはれると也文
ゆゝしき●こゝにては忌々しき義也壽●はゞかる詞也全　頭書云△ゆゝしとていむとも今は甲斐もあらじうきをばこれに思ひよせけん説
［一段之統論］●此段は上段に前生に十善の戒行いみじく御座すによつて今萬乘の主とならせ給ふといへども幾はくならずして御位を去給て院とならせ給ふといへるをうけてそれはまだ御存生もあるか或は御在位の内にも多く帝の崩御ならせ給ぞ世にあはれなることばなしといへりされば御殿を長生殿と云ひ御門を不老門と號し院を仙洞と申し奉るも只名のみにしてほどなくかはらせ給ふなりと云て人間の生涯上一人より下萬民まで樂盡哀來ると云ふをしらせたり説●此段はいまいましき段なれば講釋もせぬがよきなりこれ相傳の説なりしかしながら三ヶ大事一ヶ條此段にこれあり伊勢物語の終りのつゐにゆくの歌の所むかしは談義なかりしを堯孝法印時々所によりてよまれしより今むさとよむたり同しくはよまぬがよきなり孝經にも喪服の所は文字よみもなき事とやらん傳へ承り侍し貞●伊勢物語につゐにゆくの歌は業平の終りなれば忌はゝかるばかりなり源氏物語の雲隱の卷は源氏一部の大事なればしる人まれなる故にしれぬことなりとばかり思て過ぬ此大事をしらされば源氏物語は世間の浮説なるべし亦諒闇のことは講釋してもくるしからぬ習在伊勢のつゐにゆくの所同ㇾ之ならひしらぬ人はよむべからずさて習といへばとて布のもかうなどの事にはあらず講釋してくるしからぬと云ふならねのことなり全

〔廿九〕しづかにおもへばよろづ過にしかたの戀しさのみぞせんかたなき

しづかに　◉靜の字心を付べし輕からず心をしづかにして思へば也ふとはしられぬ由なり盤

よろづ　◉萬にとは何事に付ても也さて反故道具の二色をばかり跡にいひて其外は略したる文法也盤

過にしかた云々　頭書云▲詞花集に「今は只昔ぞ常に戀らるゝ殘りありしを思出にして▲續千載に「昔まて遠くはいはじ過ぬれど昨日のこともこひしかりけり▲新古今慈圓「世の中を今はの心つくからに過にし方ぞいとゞこひしき▲後鳥羽院集に「それとなく思ひ出れば袖ぞぬるゝ過にし方の夕暮の空說

〔第一節〕◉しつかに思へばと云よりせんかたなきまでなり此段二節に分つ文段これに同じ◉此節は上段にかたじけなくも諒闇のことを書たるに付てすべて人の無き跡のことを此の段のみならず次の段々へあはれにかゝれ侍る誠によむにたりもてゆふにたれる詞なるべし句◉此節は凡そ老たるもわかきもなにはに付て過にし方をしたふならひなれば世間の人によそへて兼好も昔かこひしきと云ふ大綱を擧て次の節には其こひしきありさまをありとかゝれたりひとへに感淚を催す筆法なり說

人しづまりて後ながきよのずさびに何となき具足とりしたゝめ殘しをかじとおもふ反古なゞどやりすつる中になき人の手ならひ繪かきすさびたる見出たるこそ只其おりの心地すれ此比ある人の文だに久しくなりていかなるおりいつのとしなりけんとおもふはあはれなるぞかし手なれし具足なゞとも心もなくかはらずひさしきいとかなし

人しづまりて　◉人の寢しづまりたる也野◉四つ時分の事を人定といへば四つ過といふ說あれどいつにても人しづまりて夜更てのことなるべし盤

頭書云▲後漢書列傳五來歙書云臣夜人定後とあり野

すさび　◉手ずさびの義なりなぐさむ心に通べし野

何となき　◉何となきとは常に用にたてぬうつはものなり盤

具足　●よろつの道具なととりをくさまなり文
反古なゝとやりすつる中に　●むさと殘すまじき
と思ふ也諺●反古の事前に注●或はひき破り或は
やきすつる中にと也諺　頭書云▲枕草紙に過にし
方こひしき物かれたる葵雛あそびの調度又折から
哀なりし人の文つれ〳〵なる日さがし出たる▲源
氏幻卷に落とまりてかたはなるべき人の文ども物
のついてに御覽しつけてやらせ給ひなんとするに
彼すまの比所々より奉らせ給ひけるも在中に彼御
手なるはことにこひ合てぞありけるみつからしお
き給へることなれど久しうなりにけることゝをほ
すに只今のやうなる墨つきげに千年のかたみにし
つべかりけるを見ず成ぬべきよとおほせば甲斐な
くてうとからぬ人々二三人ばかりおまへにてやら
せ給いとかゝらぬほどのことにてだに過にし人の
あと見るは哀なるをまして下略壽　▲新拾遺に江侍從
身まかりける男の文をとりあつめてやりすつると
てよめる「見るまゝに落る泪の玉づさはやるかた
もなく悲しかりけり▲文選五十六潘安仁が書ル揚
仲武誄云披レ帙散レ書ヲ視ニ遺文ニ有レ造有レ壑或艸或

眞執玩周復想ニ見其人ヲ紙勞ニ于年ヲ渉ニ露于巾ヲ野
ゑかきすさひ　頭書云▲六百番歌合に寄レ繪戀を
定家卿のよみ給へる歌に「主やたれ見ぬ世の色を
うつしおく筆のすさひにうかふ面影句
心地すれ　●其人の生て居たる時の心地する也諸
ある人　●ある人とは上のなき人に對して世にな
がらへある人をいふ或人と心得るは誤也句●此比
あるといひて久しきはましてといはんためなり盤
手なれし具足　●なき人の手なれてつかひし器也
盤●手道具なとは心もなく跡に殘りて其ぬしはう
せし事をあはれむ也見る人はかなしきに其道具は
心もなく世に傳るをいふなり本●器財は無心の物
なればなり文　頭書云▲我ひさしくもちなれたる
諸道具なり文●手なれし道具は無心のものなれど
もわれにひさしくなれたればこれも情がもよほさ
れてかなしきなり無情にして有情をもよほす義な
り古
「第二節」●人しづまりてより終までなり●山案此
節は初節に大綱を擧し内にて死別の跡に昔を戀ふ
と生別の後の悲きとを述てともに過にし方の戀し

きこゝろをあらはせり或者女郎花を常に愛して植をきけるに其者むなしく成ける跡にしたしき友人の來りてよめるとなん「女郎花見るに心はなくさまでいとゝ昔の秋そ戀しき「女郎花折手にかゝる白露は昔の人の袖の泪かとよめるも同じこゝろなり

〔二段之統論〕●此段も前の諒闇につきて過にしむかしのこひしさを云つゞくる也參●ゆかりにてもあれ他人にてもあれ文をとりかはすほどの人はさきだては悲しくなる習ひなれなくてぞ人はこひしかりけるとよむ歌のことはりよりふるき文を見る時は此段のこと〻常に思ひいたさる貞●此段も前前の心をうけたりこれは人の死後のやうすを書たり死て月日經てのことをかくは人の心は去ものは日々にうとくなるありさまなるにさなきことをほめたるなり盤●此段は枕草紙源氏の幻卷文選文集などの心詞をもちて書給へり哀にやさしき文體なるべし此次に人のなきあとのことをかけり天子の諒闇と書つゞけんよりは此段にてやすめてへだてられし心つかひ面白侍る文

〔卅〕人のなき跡ばかりかなしきはなし

跡ばかり　●はかりはほとゝいふ意也參前注す

〔第一節〕●此段六節に分て見るへし文段これに同し●此節は前の末の詞をうけて人の無き跡のかなしきありさまをかけり文●此一句一段の大綱を云ふなりこれより奥へはかなしき仔細を云ふなり盤

中陰のほど山里などにうつろひて便あしくせばき（不自由なる心諸）所にあまた（眷屬ともよりあひ居る也參）あひ居て後のわざともいとなみあへる心あはたゝし日數のはやく過る程ぞ物にも似ぬはての日はいとなさけなう互にいふ事もなく我かしこげに物ひきしたゝめちり〳〵に行あがれぬもとのすみか（なのが住家也説）に歸てぞさらに悲しき事はおほかるべき

中陰　●人死して未來生の中間に先五陰のかたちをうる故に中陰と名付て五陰は色受想行識是なり壽●色とは眼耳鼻舌身の諸根和合してかたちとなるをいふ受とは領納の義とてうけおさむる心なり六根もろ〳〵の塵にけがされて心に塵慮をうくる事也●相とは思相の義とてかの塵相をひたと心におもひやまぬ也●行とはいよ〳〵塵相はけしく成

てつゐに善悪の二業を造作する也●識とは了別の義とて六根にものをわきまへしるたましゐ也是を五陰と云也此五つ身と心の外を出すはじめの色は此身の事也後の受より已下の四つは皆心の上の沙汰也又は五蘊ともいふされども陰といふときは蓋覆の義にして眞性をおほひかくす也蘊といへば積聚の義とてつもりあつまる心也今中陰といふ字の意は前の生と後の生との中にはさまれて別に五陰を受る故に中陰といふ其罪福の輕重によりて善悪二所のさだまらぬ間に四十九日をふるなり或は一七日にさだまるもあり又二七乃至四十九日にて其生所しかとさだまる事也極善のもの極悪のものには中有といふものなししかるに佛家なべて中陰の法事つとむる事は衆生をして悪所へおとすまじきとの用意也ちうをんといふべきことなれど昔より漢音によみ來れり參　頭書云▲釋氏要覽云人亡毎レ至二七日一必營齋追薦謂二之累七一又云二齋七一瑜伽論云人死中有身若未レ得二生緣一極二七日一住若有二生緣即不レ定若極二七日一必死而復生如レ是展轉生死乃至七七日住自レ此已後決定得レ生又云如二世七日七日齋福一是中有身死生之際以レ善追助令三中有種子不三轉生二悪趣一故由レ是此日之福不レ可レ闕怠一也文▲中陰經二卷十二品あり中陰經云中陰形極爲二微細一唯佛世尊獨能都見然此衆生有學無學一住二住乃至九住非三彼境界所二能都見一云々中陰の亡者は烟を食ひ風を吸ふとあり名香を供すべし全▲佛祖統記三十四云孔子曰子生三年然後免二於父母之懐一故報以二三年之喪一佛經云人死七七然後免二於中陰之趣一故備二乎齋七之法一云々留青日札曰人之初生以二七日一爲レ臘人之初死以二七日一爲レ忌一臘而一魄成故七七四十九日而七魄具矣一忌而一魂散故七七四十九日而七魂泯矣易云精氣爲レ物游魂爲レ變故知鬼神之精狀中陰七々之名出二乎諸廻向清規式四卷一參

山里●四十九日のうちは追善の爲に山里の寺などに移り居るなり參●山寺と有べきにや但寺近き所の心か盤●山案枕草紙にもつれ〴〵なるものゝ條に所さりたる物いみとあり

後のわざ●死後の吊也わざとは法事也　頭書云▲伊勢物語になゝなぬかの御わざとあり說

心あはたゝし ●周章の字をあはたゝしく
とよむ参 ●尤旅宿の體なれば心いそがはしきなり
諺 頭書云▲源氏に君は御念誦したまひてをほし
めくらすにいと心あはたゝし▲河海に心いそがは
しき義なり野
はやく過る ●四十九日の早々過る間は物にたと
へんかたもなしとなり参 ●死人に遠さかるをなげ
く心あり盤
はての日 ●四十九日の結願日也諸 頭書云▲源
氏物語幻巻に源氏の御歌に「君こふる泪はきはも
なきものを今日をはなにのはてと云らん説 ▲四十
九日過て後百ヶ日も一周忌も三年も七年も十三年
十七年廿一年廿五年卅三年乃至五十年百年なども
皆經説に見へす毎年の盂蘭盆ばかり佛説也十王經
なとのとむらひをは證據にそなへかたし經藏にい
らぬ故なりしかれば此草紙にはての日とあるは四
十九日のはてといふばかりに心得れともまことは
經説の中の追薦のはてなり諸廻向清規式に四十九
日の異名大斂忌とのせたり参
いとなさけなう ●此間寄合て悲しさも哀さもい
ひつくしけるうへなれば今更いふにも不及して詞
なく別れゆくはかへつて情なきに似たり説
我かしこげに ●中陰にこもる人々ぬからぬやう
に身爲を思ふて死人をおろそかにするよしなり盤
したゝめ ●山里へもて來る諸道具共をしたゝむ
るなり諸
ちり〴〵に ●右山寺より面々の住所へ諺
行あがれぬ ●須字又分散とも書てわかるゝ義也
句 頭書云▲源氏物語宿木に方々集ひ物せられけ
る人々も皆所々にあかれ散つゝとあり句 ▲新古今
に年比住み侍ける女の身まかりける四十九日はて
て猶山里にこもり居てよみ侍りける左京大夫顯輔
「たれも皆花の都にちりはてゝひとり時雨る秋の
山里 増鐵
かなしき事は云々 ●山里に一族あまた一所にあ
る程は後のわざなど心あはたゝしくてさのみ哀情
をも覺えねどかへりてしづかにおもへば其生てあ
りし程の事思出て悲しき也諸 頭書云▲御註孝經
喪親章云寒暑變移益用増ゝ感参
〔第二節〕●中陰のほどゝ云よりをほかるべきまで

なり●第二節には中陰のありさまをかけり
しか〳〵の事は穴賢跡のためいむなる事ぞなっどいへるこそかばかりの中に何かはと人の心は猶うたておぼゆれ
しか〳〵 ●如レ斯とも如レ爾共書てともにしかしかとよむそのよふなことこのよふなことゝいふ心也說 ●死去の人の事を云ひ出しなどする時如此事は今より後云ひ出すまじきと云也全　頭書云▲日本紀に云々と書てしか〳〵とよめり▲河海にいろいろのいひことゝ云義也又然々と書てしか〳〵とよむあり是は如是々々の義なり野一▲前漢書汲黯傳上曰吾欲ニ云々一師古曰云々猶レ言ニ如此如一レ此也▲文選四十二阮元瑜書其言云々銑曰云々謂ニ辭多一略而不レ能レ載也句
穴賢 ●恙虫の故事●此徒然草のあなかしこはあなかまへてといふ意也古●あらおそろしと云詞也物を恐れ愼てかまへて〳〵などいふ心也假名文の奥に書く恐々恐惶なと云と同事にてあなかしこと書なるべし文　頭書云▲下學集云穴賢上古時倭漢兩國未レ知レ家人居ニ土窠一恙虫螫レ人故本朝書札末相勸曰ニ穴賢一言土窠之穴賢閉塞可レ防ニ恙虫一諺▲昔は目出と云ふことを書狀の奥にあなかしこと云しを後に略してかしこと云けるを又この字聞惡しとて五音相通してこの字を改て文のとまりにかしくと云是也參▲葵卷に穴賢あたにといへばとあり句
跡の爲 ●跡に殘る人を祝して詞を忌也諺●跡の人にたゝる事かある也それをばいふなと也盤　頭書云▲無常記を見れば五墓日に葬送すれば其跡に五人死すると云ひ又用時三鏡などゝて習ひもあり又墨札とて五方に梵字をかきて葬送の跡の家内にはり大戸にもものいみの札を推こととあり又世俗の說に三月越に四十九日の吊をせぬものなりなど云も經說にも俗書にも見へぬことながら三月をこさぬはあしき事三つゝくはよからぬとのことゝならんか此草子に跡のため忌とは加樣のことならんか參
かばかり ●かくばかり哀傷の中にといふ義也野●眼前にかほと無常を見なからよしなき忌事やとうらめしく思ふ參

人の心は　●人の心とは其忌なると云人にてはなし惣て人の心といふものはうたてきと其人のいふによりてなげきたるなり盤

うたて　●薄情と書うたてしき義なり諸 前注す　頭書云▲古今戀の歌に「心こそうたて悪けれ染ざらばうつろふこともおしからましや句

おぼゆれ　●二說有●山案先一說にかばかりと云よりは兼好心也かほど愁にあふて居る内に跡の忌事ぞ跡にたるなと云は愚なることなればなり其上人の心といふものははやく忘れ易くてかゝるうたてしき事をいふものかと評判したる意也●又一說に其愁にあひしものゝ意也是別を悲しむ事かふかき故に跡果まで人が何角と制することをもうるさく思ふと也●但前後の文法皆兼好思ひやつて書しなれば前說勝れり又案するに執着をはなるゝやうにとの方便になることなれば跡のため忌事なとゝ云て其人を制し慰るを一偏にあしきと云ひ難し其愁にあひしものゝ心になりて思はゞ尤かく思ふはさもあらんかしかれば後說の心ぬすてがたし

【第三節】●しか〳〵と云よりおほゆれまてなり●此節は人無常の世をはやく忘れて事忌などをすることを云也文

年月へても露わするゝにはあらねど去者は日々に疎しといへるごとなればさはいへど其際ばかりはおぼえぬにやよしなしごといひてうちもわらひぬ

（少しといふ事也盤）

年月經て　●或は親子兄弟君臣妹背の間諺　頭書云▲源氏玉葛に年月へたゝりぬれどあかざりし夕貌を露わすれ給はず壽

忘るゝには云々　●年月經ても少しも忘れぬとなり然どもうすく成やすきといはんため也參

去者は日々に疎し　●死去の人の事は忘れ易き故に日數のたつほどうとく成なと古詩の中にいへる事もありと也參●又ごとは如なればといへる義也この字濁りてよむべし古詩に云る如なればといへる義也句ことく下略之　頭書云▲文選二十九古詩云去者日已疎來者日已親註云去者謂レ死也來者謂レ生也不レ見二容貌一故疎歡愛終レ日故親也壽下句は欠に記す▲兼好集に懐舊と云題にて「なき人の面影さへにたへぬとやうたて月日の遠ざかるらん これも去者日疎の心よりよめるにや文

ことなれば　頭書云▲古今和歌集に「逢ことは玉緒ばかり名の立は吉野の川の瀧津瀬のごとゝよめるごとくのこゝろなり句

さはいへど　●上の年月經ても忘れぬと云にあたりての詞也壽●此格源氏の箒木に見えたり句●たはむれごと也諸　前注す

其際ばかり　●悲しみも切なれども其死したる際程にはおぼえぬかと疑がひて下へ云かけたる也參

わらひぬ　●どつとわらふ事も有也諸　頭書云▲人の死たるに歯をあらはさぬが禮なるに程ふれば自らかくあると世のならひを云也盤

【第四節】●年月へてと云よりうちもわらひぬまで也●此節は年月過れば死別のかなしみ彌うすくなることを云なり文

からは死骸也壽
からはけうとき山の中におさめてさるべき日ばかりまうでつゝみれば程なく卒都婆も苔むし木の葉ふり埋て夕の嵐夜の月のみぞ事とふよすがなりける

から　頭書云▲王盧中淨土文云神自ニ無始一以來投レ胎易レ殼不レ得三久留ニ於一所一▲又圓覺疏等呼ニ四大形一爲ニ形殼一參▲源氏桐壺にむなしき御からをとあり壽

けうとき　●河海に氣疎と書りをそろしき義也壽●人氣疎く物さびしき心也文

さるべき日　●さあるべき日也月忌年忌の類を云なり諸

卒都婆　頭書云▲要覧云梵語云ニ蘇偸婆一此云ニ寶塔一又梵云ニ窣堵婆一此云レ墳文▲金剛經略疏云塔者梵語窣都婆此云ニ高顯一謂摩雲轟漢俾下遠近見者生上福也今按卒都婆是密教胎大日三昧耶形而以ニ[梵字]五字一ヲ爲ニ五輪種子一人人ノ色身五體也謂ニ之如意半月三角圓方一本長作ニ三尺七寸一者三十七尊表示也參

苔むし　頭書云▲九相詩第九古墳相詩云石上碑文消不レ見亦此意也參▲一書付し其名もはやくうづもれて見しにもあらぬ古そとはかな

木の葉ふり　●木の葉を時雨といふ　●故に落るをもふるといふ也

夕の嵐　頭書云▲本朝文粹十四江ノ相公朱雀院願文空聞ニ暮山烟嵐之松響一句▲弘法無常賦云垂レ珠

麗耳倏然作ニ松風之ニ商聲一▲當麻曼陀羅白記に載たる中將姫幼時母の墓にまいりてよめる「まれに來て問もさびしき松風を常にや苔の下にきくらん參

夜の月　頭書云▲九相詩云守ル塚幽魂飛ニ夜月一失レ屍愚魄嘯ニ秋風一▲無常賦玲瓏桂月可憐映レ而覩娯之心亦之ニ何處一參▲慈鎭の歌「ありし世の宿のけしきをとふものは秋の夜の月庭の松風盤

事とふよすが　●よすがはたより也壽●事を問よるたよりと也嵐や月ならてはとふ人も無㨾也文

〔第五節〕●からはけうときと云よりよすがなりけるまで也●此節はなきがらの墓なく捨をかれとふ人まれなるさまをいへり文

おもひいでゝしのぶ人あらんほどこそあらめそも又ほとなくうせて聞つたふるばかりの末々は哀とやはおもふさるは跡とふわざもたえぬればいづれの人と名をだにしらず年々の春の草のみぞ心あらん人はあはれと見るべきをはては嵐にむせびし松も千年をまたで薪にくだかれ古墳は犂れて田と成ぬ其かたゞになくなりぬるぞ悲しき

おもひいでゝ　●思ひ出ると云にて疎なる由也盤

人あらんほど　●子孫の殘りて先祖の墓所を心にしたひ思ひしのぶ人浮世にあらんほどこそと也參

そも又　●それもまた也其しのぶ人もほとなくまたうせてなり諸　頭書云▲新古今に「ちる花の忘れ形見の峯の雲そをだにのこせ春の山風古

聞つたふる　●是は我先祖何代以前の墓所ぞと聞傳る計也諸

哀とやは思ふ　●やはとはやはかと云心也あはれといふものあらんかやはがあるまひと云ふ時書義なり古●あはれともおもはぬとの心なり文●次第に跡なく成いはれを云　頭書云▲陳師道か思亭記に服盡則情盡情盡則忘レ之矣といへる心にかなふべきにや文▲やは歌に「信濃なる淺間の嶽に立烟遠近人のみやはとがめぬと云るのやはの義同じ古

さるは　●さうあればなり上をうけていふ諸

名をだに　●子孫もたえぬ遠ざかれば古塚ばかりにて誰の墓所と名をだにしらず諺　頭書云▲白氏文集に古墓何代人不レ知ニ姓與ニ名化爲ニ路傍土一年年春草生壽▲歌に「野邊見れば昔の人や誰ならん其名もしらぬ苔の下哉右京大夫　說

心あらん人　●是も彼文集の詞よりかけり何の人
の墳としらても心有人は春の草にも哀と見るを叉
心なき者は一向何共思はでかへりて塚を田にすき
しるしの松も薪とするといはんとて也文　頭書云
▲心あらんと云に仔細もあるべし白氏文集の年々
春草生ずといひし詩を顯基中納言の見て涙にむせ
びて道心をおこせしためしもあれば筆の跡を見て
さへ良馬の鞭影に急ぐがごとく無常をさとりし人
も侍りましてたゞちにまことの春草の塚に生たる
を見ては心あらん人は感慨も發るべきこと也叉に
心あらんといふ詞顯基をさして云るにはあらねど
も內意に含みていへる義もあるべし參
はては　●跡とふわざもたへたるはてなり盤
嵐　●松は風を含む物なる故人のむせぶよふに聞
ゆる也松風の吟ずるといふも此仔細なり參
松も千歲　●松が年もつもらずくだかるゝと也盤
頭書云▲符經新記曰松柏即墳墓所ㇾ植之樹參●高山
記嵩々山有二大松樹一或百歲或千歲古
薪にくだかれ　●名を知ぬ塚なり共せめて跡あら
はこそ却て墓印の木迄薪に成なり參

古墳　●耕牛にすかれて也參●是また彼文選の古
詩の詞よりかけり感慨淺からぬ文章にや文　頭書
云▲文選古詩云上略前記ス出二郭門一直視但見丘與ㇾ墳
古墓犂爲ㇾ田松栢摧爲ㇾ薪壽　▲陳師道思亭記其
略云賢不肖異ㇾ思後豈不ㇾ有下望二其木一思二以爲一ㇾ材
視二其榛棘一思二以爲一ㇾ薪登二其丘墓一思ㇾ發二其所一ㇾ藏者上乎
其かただに　●其古塚の跡かたちだに諺
かなしき　●此悲しきと云詞發端のかなしきはな
しといふ詞をむすびたる也文●山案是首尾吟とい
ふ類なるべし參　頭書云▲是叉中庸の天の命とい
ひて上天のことにてとどめたる文法深く心を付く
べし
［第六節］思出てと云より終まで也●此節は跡かた
もなく成ゆくことを書て人の無き跡はかりかなし
きはなしと云ひ出たる心を決したり文●山案此節
は一人あわれに感涙袖にあまる筆法なり
［一段之統［註］］●上の段に人のなき跡のことを云る
にうけて此段にも叉殊更あはれにかゝれ侍る一段
の大意去者日已疎とある古詩の意に本づけり句●
此段次第に事の變する事を人に敎て生を受る者皆

賤にかきらす皆如ν此ぞと夢幻の世をさとさしむ諺
●中陰の日數も程なくたち墓所も後には跡なくなる體をあざやかに記せり此段を見て感慨をこさぬ人はあらじとこそおもわれ侍る貞

〔卅一〕雪のおもしろふふりたりし朝人のがりいふべきことありて文をやるとて雪のことは何共いはざりし返事に此雪いかゞ見ると一筆のたまはせぬ程のひがひがしからん人の仰らるゝ事聞入べきかは返々も口おしき御心なりといひたりしこそおかしかりしか説
なりすみてよむ句
今はなき人なればかばかりの事も忘れがたし

雪　頭書云 △山案大戴禮云天地積陰溫則爲ν雨寒則爲ν雪 △五經通義云陽則散爲ニ雨水ニ寒則凝爲ニ雪霜ニ皆從ν地而昇者也

おもしろふ ●面白といふにて心つくべき時也と云事しらせたり盤

人のがり ●許字人のもと也野　頭書云 △伊勢物語にむかし紀有常のがりいきたると有「思ひかね妹がりゆけば冬の夜の河風さむみ千鳥鳴なり野

文をやると ●兼好か或人の方へ文をやりたる也句

いはざりし ●兼好が身をさして書り古 ●さきの人よりの返事也参

此雪いかゞ ●先よりのとがめたる返事の體なりまことに心ばへおもしろしとがめやうやさしき也盤 ●寒溫の挨拶さへ一通の書狀の序にかゝて叶ぬ事まして雪月花は吟興に心をつくすものなり猶おもしろふ降し雪なり殊更又朝の書札なるなり参
頭書云 △古來雪月花をもてあそぶは詩人歌ともに愛する也樂天が詩に琴詩酒友皆於ν我雪月花時最懷ν君と作れり説

ひが〳〵し ●辟々也文 ●一事に心のひがみたる義也句 ●たはむれごとながらよき返事也全　頭書云 △源氏若紫に少しをくふりたる山住もせてさる海づらに出たるひが〳〵しきやうなれどとあり句

おかし ●眞に興あつてやさしく思ひしと也諺

かばかり ●中略の詞かくばかりなり全 ●是程のこともとなり諺

忘れがたし ●兼好が心をいふなり此とがめて返ししたる人死たるなればかくのことく少しの事な

れとわすられぬと也盤●山案かはかりの事忘れ給はぬ兼好の心ざし又殊勝なり

〔一段之統論〕●此段などは死たる人の事を後に思ひ出すは其人の心だてによることなりと死人の事を論じて書なり上段には殘る人の心だてを云ひこれからは死たる人の心だてを云なり盤●此段上段に無あとのことを云に付て兼好が身の上に當りたることを次の段に書たり誠にかりそめの上にてもよき一言は耳にとゞまりて死後にも忘れぬ物なりと人の心得のために書と見へたり句

〔卅二〕九月廿日の比或人にさそはれ奉りて明るまで月見ありく事侍りしにおぼし出る所ありて案内せさせて入給ぬあれたる庭の露しげきにわざとならぬ匂ひしめやかにうちかほりて忍びたる氣はひいと物あはれなりよき程にて出給ひぬれど猶ことざま優におぼえてものゝかくれよりしばし見ゐたるに妻戸を今少し推あけて月見るけしきなりやがてかけこもらましかば口惜からまし跡まで見る人ありとはいかでかしらんかやうの事はたゞ朝夕の心づかひによるべし其人程なくうせにけりと聞侍りし

九月　●倭名ながつき也清輔云夜なが月といふ事と也盤

おぼし出る　●兼好をさそひし人の道の程にて或家の立よるべき所を思ひ出たる也文

あれたる　●家のあはれたるにはあらず時分暮秋なれば景氣さそあらん諺

わざとならぬ　●客のためにてはなく尋常たきしめておくなり諸

しめやか　●俗にしつほといへるに通ふ也句

出給ひ　●入給ひてはやくも遲くもなく居て出給ふと也盤●兼好は外に待居たるへしあまり待遠にもあらてと也諸

優　●優とはゆたかなる心也参●兼好床敷思ひて猶見たるなり文

しはし見ゐたるに　●歸るよしして垣ごしなどにて見居たる也諺

妻戸を今少し　●客の出たる跡の妻戸のあきたりしを今少し開てさすがに見送るやうにもあらて月見るけしきなりとなり文

推あけて月見る　頭書云▲山案草紙に殿ばらなる

人々の出あひなどして格子などもあけなから冬の夜を居あかして人の出ぬる後も見出したるこそおかしけれと書るもこゝの意と同じき也

こもらましかば　㊀是より兼好評判なり諺　客の歸るをみて待かねたる樣に內に入らばと也

口惜からまし　㊀初よきと見つるに違て見ざめして盤

見る人ありとは　㊀かやうに跡までも物のひまより見る人ありとはいかでかしらんとなり諸

かやうの事　㊀彼亭主の心にくかりしさま共をほめてかやうの事どもは人目ばかりに俄にたしなみてはならぬ事也文

【一段之統論】㊀此段と前段との二段は人の詞のやさしきとしわざの優なるとを書り前の前段に人の無跡には墓もあとなくしるしの松も千年をまたて薪となれば何の甲斐なきことをいへりされば此兩段のごとくやさしき詞心づかひこそ加樣に書しるして世々の形見にものこれば只人は言行をよくあらまほしきとの心にや文　㊀前段には人の詞のやさしきを云ひ此段は人の行のたゝしきを書とめて君子言行の二つを鳥の雙翼のごとく大事とせらるる本意をしるせる心入見ても〳〵見あかぬ殊勝なる敎識なり參

也仝

【卅三】今の內裏（兼好時代也諸）作り出されて有識（其事わきまへしれる人をいふ）の人々に見せられけるにいづくも難なし（故實にたがはぬ由を申也諸）とてすでに遷幸の日ちかくなりけるに玄輝門院御覽じて閑院殿のくしがたの穴は丸くふちもなくてぞ有しと仰られけるいみじかりけり是はえふの入て木にてふちをしたりければあやまりにてなをされにけり

遷幸　㊀新殿へうつり給ふを云壽　頭書云▲幸字天子巡行用レ之蔡邕獨斷云天子車駕所レ至見レ令長三老官屬親臨レ軒作レ樂賜以二食帛一民爵有レ級或賜二田祖一故謂二之幸一晉灼曰民臣被二其德一以爲二徼倖一也參

玄輝門院　頭書云▲九十一代 伏見院の母后也洞院左大臣實雄公の女なり壽

▲系圖　公實までは十一段目に委し

鎌足―不比等―房前―眞楯―內麿―冬嗣―良房―

―基經―忠平―師輔―公季―實成―公成―實季―

「公實-通季 正二位 中納言 公通 從二位 大納言 實宗 正二位 內大臣 公經 從一位 太政大臣 一
「實雄 從一位 左大臣 女子 玄輝門院 深草院妃

閑院殿 ●一つの御殿の名也諺　頭書云▲拾芥云閑院二條南西洞院西一町冬嗣大臣家金岡畫二水石一公季傳領ㇾ之野

くしかたの穴 ●俗に火灯口と云て書院などに地下の家にもする事也句 ●櫛形とは櫛と云もの今は横へ長きが昔は爪櫛とて人の爪のなりしたる也穴がうへは丸くながく有り櫛のかたちに似ればと也盤

頭書云▲　●くしかたの圖は如ㇾ此ありしとなり全

丸く ●昔よりは丸くしてふちもえうもなかりし也句

いみじかりけり ●女人の身として故實を覺へ給ふ事はいみじとなり是より末に至る迄兼好の評判也參

えふの入て ●えふは葉の字か壽 ●五葉の松千葉の花なといへる字の心なるへし野　頭書云▲えうとはまるくなくてもつかうのやうにうちへ入りたるなり盤 ▲あやまれるくしかたの圖は

如ㇾ此ありしとなり

ふちをしたり ●根本は緣もなき筈なるを是はあしゝ諺

なをされにけり ●かり初の事も見とがめて置べき事をいへりかねては昔の物數奇はやすらかなる事をしらせたりくしがた程の事も昔をたがへぬ所なり全　頭書云▲此櫛形のたかひは纔の事なるを誤りとてなをされしは是費のやうなれども禁裏や大社などは故實がありて少にてもそれに異なることがならぬぞ其上かみにすこしのあやまりをゆるし給へば下萬民まで誤りを不ㇾ改して後には大きなる僻事出來るぞされは堯舜師二天下一以ㇾ仁民從ㇾ之桀紂師二天下一以ㇾ暴民從ㇾ之といへり上天子たる人は尤愼み給ふべきこと也彼子貢か告朔餼羊を惜しに孔子は其禮を惜み給ふがごとしさしあたりは費のごとくなれどもかへつて道を求るのためなればこゝの建なをされしもついえにはあらず說

〔一段之統論〕●此段故實を記せり又前段に兼好猶立とゞまりて彼家主のふるまひを能見とゞけたることを云し次手にものを能見とゝめおくことの益を書るにや文●此段前段の朝夕の心づかひと云をうけて書り朝夕心を物につけいてはかゝることも覺へられぬとの義なり盤●前段兩段に人の言行の美しきことを書のせ此段には人の才智の勝れたることを褒たり誠に初段の內に先人の言葉をつゝしむべきことを云ひ次に品と形と心との三つを論して心に決定しぬ其上に才智を加へて人の全美といへるによく相應し侍る大かた此書の始終如レ此心を付て見るべき物なり句

〔卅四〕甲香はほら貝のやうなるがちいさくて口のほどのほそながにして出たる貝のふたなり武藏の國金澤といふ浦に有しを所の者はへなだりと申侍るとぞいひし

甲香　●かいかうといふ聲はなけれども讀くせてかうかうとはいはぬなるべし●貝の字よみを甲字へ移したるなるべし參　頭書云▲本草圖經曰甲香今醫家稀レ用但合香家所レ須又有二大小一用二小者一佳也可レ聚レ香使レ不レ散也▲和名集云異物志云甲香俗云音合螺屬也可下合二衆香一燒上レ之皆使レ益レ芳獨燒則臭

壽●兼好時代に用る所の甲香ノ圖かくのごとしその比は人さだかにしらずありければなりを云て知せし段なり兼好時には是を用ひしに今の世には燒物の方に勅方など云て種々あり甲香にも此ながにし貝の掩を不レ用ばへのふたよきとて今は勅方の甲香にもばへのふたをばかり用るなりしかれば兼好の給へる所をいよいよ不審しあへるは此ゆへなり全▲今の俗香具にばへのふたを甲香に用ることは壽抄云本草海藥云又有二小甲香一若二螺子一とあり是ばへなるべし此義によりてばへの掩を用ひ來る歟彼本草圖經にも用二小者一佳なりとあり文

ほら貝　●螺の字也俗にほらの貝といふ也句

へなだり　●舊抄云一本にばへと有ばいといふにや覺束なし今金澤にて尋ればばいと云又つぶともいふ也兼好が時はへなだりといひけるにやばいに似て少し大きにして口のほそながき貝ありそれをへなだりといふか又今俗香具にばへのふたを用ゆ

本經に書たる貝は今よなきといふ物なるべし盤●都にてはよなき共ながにしともいふ武藏にてはへなたりといふにや全●所の者はた文字濁りていふと也盤

〔一段之統論〕●此段も前段をうけて世間の誤をしらせたるもの也諺●上段に玄輝門院の婦人の身として能故實をわきまへ知給ふを書たるにうけて又兼好も甲香の正說をあらはして人に知しめたるなり兼好の時分甲香に異說多くして用ひあやまりたると見へたり句●此段も物を能見置の益ある心ばへなり土地をかへて物を求めんには名はかはれども同じ物と知て取用れば重寶なり本草に藥の異名を多しるして國々にて其形ハ異あることを圖をしてあきらめをきしと同じ心なるべし文

〔卅五〕手のわろき人のはばからず文かきちらすはよし見ぐるしとて人にかかするはうるさし

手のわろき　頭書云▲若紫によからねと無下にかかねこそわろけれと有も此句の心と相似侍る句

人にかゝする　●手跡あしきとて人にかゝするは無筆同前なりはばからずして書用る時は自手習ともなるべし全●此草子に手なと拙からずはしり書といひ又手かく事むねとする事はなく共これをならへなと云る用にだにたゝは見苦きは耻べき事に有べからず文　頭書云▲漢高祖手勅ニ子云毎ニ上疏ニ宜ニ自書而勿ニ使ㇾ人也夫帝王且然況士大夫子弟乎今數行字輙付ニ侍史ニ書ㇾ之豈非ニ隨ニ習ニ矣と岩栖幽事には書たり士大夫の家すら如ㇾ此昔人はいましめたるに今は庶人の家にも少しにぎはひ豊なれば右筆とて扶持し置自身筆をとらず嗚呼風俗の偸薄甚矣鑑むべしをそるべし句

うるさし　●伊勢物語玄旨注にうるさしとはうきといふ意也とありされどこゝへは憾に叶ひがたしこゝにては只むさきといへる意也そしりたる詞也言意は外見をかざりて人にかゝするはむさき志なりといへる意也山井案　頭書云▲うるさしの詞伊勢物語に武藏鐙さすがにかけて頼むには問ぬもつらしとふもうるさし句●一說に右流左止と書是菅丞相の故事よりをこれり如何となれば賢人なれども右大臣道眞公は流れ給ひ惡人なれども左大臣時平公は止り給ふ故に右は流され左は止ると云こゝろ

にて右流左止と書てもの丶いやなることに其時の民ども云しより今以てこれを云ふなりともいへり説

〔一段之統論〕●此段かくれたることなし今世に誰も誰も可ㇾ在ニ受用ㇾこと也壽 ●山案楊子曰書心畫也心畫形君子小人見矣といへり又筆は心跡と云て心を通ずるためなり遠方にて心を言葉に通ずることのならぬ所へは書を以て我心を人に知するなればば心を通ずるものなり故に心通ずるときは呉越も咫尺といひ心不ㇾ通ときは咫尺も千里といへりされば我心をうつしてやる文なれば書せまじきことなり他筆を以てやれば其者の志がうつつて我志が無になるほどに惡筆にても自ら可ㇾ書こと也自筆の狀にても通じ難き事には我身直に行ても云うなりしかるに文にをいて人にかゝすべけんや●或は生ながら菽麥をわきまへざる者或は柳肘義手なる者或は事に暇なき者などは人に書するまも有べしさもなくば自ら筆を取ことよかるへし野

〔卅六〕久しく音づれぬ比いかばかりうらむらんと我おこたり思ひしられて言葉なき心地するに女の方より仕丁やある一人なッどいひおこせ(頭の字也)たるこそ有がたくうれしけれさる心ざましたる人ぞよきと人の申侍しさも有べき事也

久しく音づれぬ ●時々通ふ女の許へさはること有て久しく音信せぬ比也壽

うらむらん ●むかふの人より我をうらむらんと諺

我おこたり思ひ云々 ●身の科を我とするほどに如在したる義との意なり盤

言葉なき ●何共向へ云ひやるべき詞なき也諺

女の方 ●女は心ひがみて常さへ人をうらむるものなるにさもなくて參

仕丁 ●仕丁と書てつかはれよぼろとよめり下部の事也野　頭書云▲諸司の下人に直丁駈使丁白丁などゝいへる者あるも同じ心なり文 ▲今も禁中の庭男を仕丁と云是也全 ▲白虎通に丁者壯也しかれば盛んにして人に仕るゝものを云諺 ▲匀會云唐志男子二十爲ㇾ丁一說二十以上爲ㇾ丁文 ▲居家必用十六云男子十七歲出ㇾ幼二十已上成ㇾ丁謂ㇾ可ニ以力役ㇾ參

一人なつどいひおこせたる　下人あらばひとりやどはかし給へとうちとけていひおくるなり文

有がたく　●扨は音信ぬをもうらみざると也諺

さる心さましたる　●さやうにうらなき心さましたる人文　頭書云▲向よりは何の心もなくて天然と音信もなきを此方より様々の推量をめぐらして男女の情朋友知音の中をも中絶することありさして仔細もなきことを恨みかこちて遠ざかるはあしき事也只いつも何となく用事あれば云やりなどして心等閑にならぬが道の心なり参▲源氏品定の所になのめにうつろふ方あらんをけしきばみそむかんはたをこがましかりなんとある心こゝの段に相應するにや文▲荀子云士有ニ妬友一則賢友不レ親君有ニ妬臣一則賢人不レ至となり▲西行歌に一化にのみ人をつらしと何か思ふ心よ我をうきものとしれ▲大和物語に「忘らるゝ身は我からの過ちになしてだにこそ君をうらみよ▲又論語衛靈公篇に身自厚して薄責レ人と云りたしかればたとひうらむべきことありとも我身を厚して人をばうすく責よと也いはんや向の者に如在なくしておこたり來るに於て何ぞやうらみん尤心をつけて此一句を味ふべきなり萬人の針灸なるべし説

人ぞよき　●こゝに女ぞよきとかゝて人ぞよきとかけるは男女の中にかぎらず君臣朋友の間にもわたるへき心はへなれはなり文

人の申侍し　●此段は女のかこつによそへていへるなれば兼好遁世の身に似合ぬやうに覺て人のいひしと書るにや参●前に女の方よりと書るも又かりにもふけて書るとも見るべし一向に女ばかりと見るべからずすべて女は人我の相ふかき者なるにかくいひおこせしは有難き者なりといひて其外の人の交の事も内にこめたり説

さも　●兼好も左様あるべしと同心の義也古

【一段之統論】●此段は前段に文と云ふものは我志を顯して人の方へ遣すものなれば必以他筆に書すまじきことなりと其志のところを戒めたるをうけて又假初のことにて人を恨むまじきぞと云意を仕丁かりし女のことを述て平生の志をいましめたり説●此段の女の心ばへ賢く女の道をよく知れる人の様なりたとへば久しく懈怠すといへども其懈怠

を男にも思ひ知りて詞なき心地するほとならば平生も此男の等閑なきことしられたり女も其こゝろばせを能見知たる故今おとづれざるとも少も恨みず只尋常の禮に用事あれば云おこせたり世上愚痴なる女はさやうの男の心をも見しらで少のこともうらみくねりなどするはよからぬ心なり文㊟此一章に仕丁をやとひしことをまつ記して人の交の替らぬことを述べたり必仕丁をやとふがよきとは心得べからず參㊟此段の大意もし我方へ人よりとはるべきことあるに音信不通なること有て我にはづべき心根をしらば其事となく何なりとも用事を頼みやるべきことと也それにて我恨みぬ底意をかれに知しめんためなりつくろひかざりたるやうなれど世間人情の上に此心得有まじきに非ずあながち女の上にはかぎらねども男女の中女は殊に人我の相有て嫉み怨むこと深き物なる故に女を云て男をかねたり又重きをあぐる心なるべし句

徒然草諸抄大成卷之五

目　次

〔三十七〕朝夕へだてなくなれたる人のともある時に我に心をき引つくろへるさまにみゆるこそ今さらかくやはなどいふ人も有ぬべけれどなをげに〳〵しくよき人かなとぞおぼゆる

へだてなく　●常住交る心也心のへだてなく也餘

ともある時に　●何とぞ事ある時を云友の來るといへる抄古云他の友の來る義也の義は大きなる誤也句　●公義禮式有時をいふ也全

心をき云々　●平生とかはりて急度隔心がましき禮也參

今さら云々有ぬべけれど　●朝夕だに隔なくいひしたしむに今さら如此に急度がましく見ゆるはいかゞと云へけれどゝ也

げに〳〵しく　●實々共誠々とも書り尤といふ意也二つかさねたるは親切にほめたる心なるべし參　●是親しきにも禮を忘れぬ心也　頭書云▲げにげにと二つ重ねたる心は佛經の中に善哉々々とあるはほめたることのたしかなる時也▲古文眞寶に蒼蠅々々とあるは蠅を惡むことのつよき心なれはげに〳〵も是になぞらへしるべし參

よき人かな　頭書云▲論語子曰晏平仲善與レ人交久而敬レ之▲禮記云賢者狎敬レ是說

〔第一節〕●朝夕と云よりおぼゆるまで也此段兩節に分つ●山案此段も上段をうけて平生の心入を書り上段は隔なき中も心ならず久しふ音信なきことを云此段は又朝夕なるゝ中にも禮を盡すべき時あることを云

うとき人のうちとけたる事などいひたる又よしと思ひつきぬべし

うとき人　●外人と書て白氏文集にうとき人とよめり文

うちとけたる事　頭書云▲禮記云禮勝則離樂勝則流諺▲又云張而不レ弛文武不レ能也弛而不レ張文武不レ爲也說

又よし　●うとき人は隔心にてそひよりなきものなるにさきより打とけたる事などいひしは是も又よしと思ひつかるゝと也全

〔第二節〕うときと云より終まで也●此第二節はうとき中にも和をたつとぶ心を云り文

〔二段之統論〕●此段男女朋友ともに親しき上にも

禮義を失はず又うとき中にも和を貴べしとの心なり畢竟親疎ともに禮と和の二つを以て交るべきとの理なるべし文 ●此段は論語に有子曰禮之用和爲レ貴先王之道斯爲レ美小大由レ之有レ所レ不レ行知レ和而和不三以レ禮節二之亦不レ可レ行也此文に能相かなふ歟貞 ●此段朋友の交末には敬衰るに依て必絶レ交故に禮義を以て可レ交ことを云て又禮過れば却て親みなきほとに禮ある中に和する處を以て相交れとの敎なり諺 ●山案一說に此段に友の交のことを云ほどに上の段は只男女の交のことばかりを云と可レ見となりされど此段も男女の交もこめて上段と同じく可レ見ともいへり

〔三十八〕名利につかはれてしづかなるいとまなく一生をくるしむるこそ愚なれ

名利 ●名聞利欲の畧語也說 ●名は名聞君子もまぬかれがたし利は財利也小人のまどふ所なり參 頭書云▲列子云鬻子曰去レ名者無レ憂▲文中子曰愛レ名尙レ利小人哉未レ見仁一者而好二名利一者也 ▲愚迷發心集云名利大毒惱二一世之身心一參

つかはれて ●下人の主人につかはるゝごとく世の人のなべて名利のためにつかはるゝ也參 頭書云▲以レ心爲二形役一と歸去來辭にいへるが如し壽▲莊子云修レ身役々而不レ見二其成功一▲淮南子原道訓云聖人不三以レ心役二レ物▲菩薩呵色欲法云凡夫重レ色甘爲二之僕一參 ▲法界次第云使以二驅役一爲レ義能驅二役行者心神一流二轉三界一故盤

しつかなる ●東西に急き南北にはしりて一息の間もやすらかに道を工夫する事はなき也參 ●つれつれならぬとなり盤 頭書云▲莊子齊物論云一受二其成功一不レ亡以待レ盡與レ物相刄相靡其行盡如レ馳而莫二之能止一不二亦悲一乎▲口義云人不レ能三一順二乎造物一乃爲二外物一所レ汨與レ之或逆或順以レ此而行盡二其一生一如二駒過一レ隙不レ能二以一息自寧一故曰行盡如レ馳而莫二之能止一參

一生をくるしむ ●一生とは人の一代なり例へば若き時四方に馳走するとも其非をあらためてしづかになるかよの常也さるをあらためずして一代の間つかはれてはつるは愚也と也一生の字心あり盤 頭書云▲羅陰峯が蜂の詩に採二得百花一成レ蜜後不レ知辛苦爲レ誰甜といへるを引合せて見る可也參

〔第一節〕●名利と云より愚なれまで也此段七節に分ちて見るべし文段是に同じ●是兼好一生の本意の閑寂を本として書り即此一段の大意なり文●山案一段の大綱を擧て名利のあしきことを論じて此次より名と利とを分ちて逐一に云顯す

財おほければ身を守るにまどし害をかひ煩をまねく媒なり身の後には金をして北斗をさゝふとも人のためにぞわづらはるべき愚なる人の目をよろこばしむるたのしみ又あぢきなし大なる車肥たる馬金玉のかざりも心あらん人はうたて愚なりとぞ見るべき金は山にすて玉は淵になぐべし利にまどふはすぐれて愚なる人也

財おほければ　●是より欲をはなるゝ義をいふ也古●利につかはるゝ失をいふ也多ければはしはおほくほしがるによりてつかはるゝ也大欲をいましめたり小欲知足はゆるす所なり盤　頭書云▲文選阮嗣宗詠懷詩曰膏火自煎熬多レ財爲二患害一▲遺敎經曰不レ知レ足者雖レ富而貧參

まどし　●貧の字惑の字との兩説なり●先貧の字の心は財を好めば財には一度富といへども身を守るに貧しきなり財有て心を煩すべきよりは貧しくて心の樂まんにいづれ彦●又惑の字の心は●道を以て身を守るにまよふと也まどしはまどはしの中略の詞也財ゆへに迷惑すると也盤

害をかひ　●文選の詞を以て財をむさぼるは金銀の物をかふごとくに其身の災害を買求め煩をまねくの媒なる事をいへり文　頭書云▲文選曰不レ懷レ寶以買レ害今不レ徇レ表以招レ累諺

媒　●かねがなかだちとなると也諸　頭書云▲山案字彙曰謨杯切音枚媒妁媒之爲レ言謀也謀合二姓一也▲文中子曰佞之媒也參

身の後　●死後を云參　頭書云▲白氏文集五十一身後堆レ金柱二北斗一不レ如二生前一樽酒一▲唐書秦王引二尉遲敬德一爲二右府參軍一屢立二大功一隱太子嘗以レ書招レ之贈二金皿一車一同辭秦王曰公之心如二山岳一雖二積レ金至二斗豈能移レ之說▲云秦王者謂二大宗一也隱太子者太宗兄建成也

北斗　頭書云▲史記天官書北斗七星云々▲通占大象暦星經卷上曰北斗星謂二之七政一天之諸侯亦爲二帝車一云々▲天の北斗は七星にして人の目にかゝ

る星なれば是をあけて金のつみ重ねたることにたとふるなり參

さゝふとも　●つかゆるこゝろなり柱の字也諸　人のためにそ　●死後に誰とるべきなといひてあらそふとなり又はそれをとりたる人金によりて害をかひ累をまねくべしと也盤●前は生前に身の上の害をいふ爰は死後に人の上の累をいふ説　頭書云▲李卓吾集十八曰若是不肖之子父母方死骨頭未レ冷作二捷財産一出二賣田園一之意歟參

目をよろこばしむる　●目をよろこばしむるとは見たるばかりにて我ものともならぬよし也されど愚人が富る人を見てはうらやみよき事と思ひて目をよろこばしむるなりさればよしとおもひてうらやましからるゝをたのみとするはあぢきなきなり説　頭書云▲文選序曰黼黻不レ同倶爲二悦目之翫一參▲禮記曰君子得二其道一樂小人得二其欲一樂説

あぢきなし　●和語の心は食の味もなき程笑止におもふよし也盤　頭書云▲史記には母爲の字薄愛の字をあぢきなしとよめり日本紀には無爲とかけり參▲無道と書なり道へゆかぬと云義なり古　▲よからぬと云こゝろなり素盞烏尊の惡行のとき諸神あぢきなしと云給ふ詞なり諸

大なる車肥たる馬　頭書云▲爰の一句暗に范魯公の詩意思ひ合せ書たると見へたり▲范魯公詩肥馬衣二輕裘一揚々過二閭里一雖レ得二市童憐一還爲二識者鄙一句▲此句暗似二弘法之語意一三教指歸曰看二輕肥流水一則電幻之歎忽起覺明註曰論語曰赤之適レ齊也乘二肥馬一衣二輕裘一後漢書曰車如二流水一兼名云輅軲一名流水參

心あらん人は　●始に愚なる人の目といへるによつてこゝには心あらん人と書なり古●只をごりをなせるばかりにて彼衣冠より馬車に至るまであるにしたがひて用よ美麗を求る事なかれといへるたぐひの人の目にはをろかなるべし文

うたて　●前にくはしく注こゝは薄情と書てうたてしき意なり

金は山にすて　●一向に金玉を山河へすてといふにはあらず無用の財をもとむるものゝために古語を引てきびしくいましめたり説●かろしめて用ひぬ心なり上に金玉のかざりといへるを又二つに分

たる文章面白し参　頭書云▲莊子天地篇藏ニ金於山ニ藏ニ珠於淵ニ不レ利ニ貨財ニ不レ近ニ貴富ニ不レ樂レ壽不レ哀レ夭不レ榮レ通不レ醜レ窮壽▲文選東都賦曰捐ニ金於山ニ沈ニ珠於淵ニ▲同第三藏ニ金於山ニ抵ニ璧於谷ニ注云抵擲擊也野

利にまどふはすぐれて愚なる人也　●結語なり盤

●此章のはじめには名利の二つをはづかしめたれどわきていふ時は利にまどふがすぐれて愚也勝ての字字眼也名よりも一段引くだせり参

［第二節］●財多ければより愚なる人なりまで也●第二節はまづ利の益なく害あることを書つらねて是につかはれて一生をくるしむることの愚なることをいへり文●山案人たる者は分限に應じて財寶をたくはへ置ことはさもあるべきに愚人は利にまどふて無益の金玉をもとむることは至て愚なることなりといましめたり

うつもれぬ名をながき世に殘さんこそあらまほしかるべけれ位たかくやんごとなきをしもすぐれたる人とやはいふべき愚に拙人も家にうまれ時にあへば高き位にのぼり驕をきはむるもありいみじかりし賢人聖人みづからいやしき位にをり時にあはずしてやみぬる又おほしひとへに高きつかさ位をのぞむも次におろかなり

うづもれぬ名　●身は死して土にうつめども名は跡に殘ればうつもれぬ名なり諺●博學廣才の名なり諸●山案此次の節に智惠と心との勝れたる名を殘し度といへればこゝの名は藝能に堪たる名をいふか但此次に位高くやんごとなきもといひぬれば藝能とばかりきはめがたしされば爰の名は名のために司位をのぞむとの名と又心智のすぐれたるの名とをこめてすべてうつもれぬ名といふなりさて名にも二つ有事を次の兩節にいへり　頭書云▲白氏文集に遺文三十軸々々金玉聲龍門原上土埋レ骨不レ埋レ名野▲本朝文粹卷十高積善曰夫形者百年之旅館也名者萬代之嘉賓也参▲柿本人麿石見國高津浦にて「石見潟高津の浦の木の間より浮世の月を見果ける哉と詠給て終り給へり今以高津の浦に書付おるよし也近世細川玄旨高津の浦にてそれを見給ひて「移りゆく世々は經ぬれど朽もせぬ名こそ高津の松の言の葉▲又藤原實方は流罪の身にて奥

州へ行き給へども其罪のことは人不レ云して其人の歌道に達し給へる名を今の世にも云傳ふ西行奥州修行の時實方の墓を見て「朽もせぬ其名ばかりをとめをきて枯野の薄形見とぞ見る是皆名の朽ずしてのこるゆへなり説

世に殘さんこそあらまほしかるべけれ　●是迄は名を好むは利を好むよりもやさしき心はへなれは一旦兼好も名をもとむる人の方人となるとはいへと又とりかへして是より後にはふたゝび名をそしりてとにもかくにも名利につかはるゝ事をいやしむる本意をあらはせり參

位たかく　●高位貴人の名の事なり盤

すぐれたる人とやは　●やはととがめてすぐれたるといふへきかいふまじきと也諺　●たとひ高位の人も愚痴無道なれは勝れたる人とはいふべからず全

愚に拙き人も　●是より勝たる人といはれましき仔細をことはるなり參

家にうまれ　●父祖の陰によりて不肖の子孫も官位にのほる事あり昔は官をえらぶに賢才を用ゆ後世其家になり來るを例とす是を世官といふ善政にあらず野　頭書云▲俗官も僧官も昔は其德を見てゑらひ行れし故に元亨釋書の中を見侍るも異國には金銀の賄を取て官職を給る事ありといへども本朝はそれにかはりて德行を見て引あげらるゝことを虎關もゆゝしく記されたれば此時代までも我國の道のおとろへざるにや參

時にあへば　●一旦時の仕合にあへば參

賢人聖人みつから　●自といふ詞眼字也人の高官に擧用ざる故といふにはあらずとの心也文　●上より用ゐんとすれども辭レ位身をかくす諺　●下位なりとてすつべきにあらずと也盤　頭書云▲孟子萬章下編曰爲レ貧者辭レ尊居レ卑辭レ富居レ貧辭レ尊居レ卑辭レ富居レ貧惡乎宜乎抱レ關擊レ柝孔子嘗爲二委吏一矣爲二乘田一矣野　▲六家文選四十三與二山巨源一絶交書嵇叔夜作云老子莊周吾之師也親居二賤職一柳下惠東方朔達人也安二乎卑位一吾豈敢短レ之哉參　▲山案自ら賤しき位にかくるゝ者古來これ多し巣父許由荷レ蕢丈人の類ひなり

時にあはずして　●たとひ聖賢の德ありても不幸

にして時にあはぬ人多し此奥に孔子も時にあはずといふに同じ參頭書云▲明心寶鑑曰擊壤詩曰富貴如將ニ智力ー求仲尼年少合レ封レ侯世人不レ解ニ靑天意ー空使ニ身心半夜愁ー參

高きつかさ位をのぞむも　●高き官位をのぞむは利欲に同じきといひながら富榮の人も世に名を發せんために使をもとめて高位高官をのぞむ者也たとへば近世富榮の商人か少祿をとる士をうら山敷思ひて士の眞似をするがごとし是利の爲にてはなく名の爲にのぞむ也山案

次におろか也　●次にと云字の心は利をもとむるは第一の愚也と上にいひそれに次では高位の名をもとむるが愚也となり參　頭書云▲山案司馬溫公諫院題名記曰彼汲ニ々於名ー者猶レ汲ニ々於利ー也其間相去何遠哉とあり▲許昌斷裁之も士に品あることを論じて道德に志す者を上とし功名に志す者を中とし富貴に志す者を下として鄙夫なりといへり又君子疾ニ沒レ世而名不レ稱焉と聖人の宣ひたるは向上の道理有べし兼好が知る所にあらず句

ー第三節ー●うづもれぬ名と云より次に愚なりまでなり●第三節は高き官位を望むも富貴とて利欲の類なれば是を望も愚なることをいへりかく榮利を貪るの至りて愚なるにくらぶれば名譽をもとむるは猶賢人の業なる故しばらく揚ていへり文●山案此説は高官を望むを利欲のことのみに見るなり但利欲のことばかりに見ては埋ぬ名と云次には續き難し右に云ふ通りに名の爲めに官位を求るも愚なりといましめしと見るへし

智惠と心こそ世に勝れたる譽も殘さまほしきをつらつら思へば譽を愛するは人の聞をよろこぶなりほむる人そしる人ともに世にとゞまらず傳へきかん人又又すみやかに去べし誰をかはぢたれにかしられんことをねがはんや譽はまた毀の本なり身の後の名殘りて更に益なしこれをねがふも次におろかなり

智惠　●こゝにては學問の才智也文●是を佛書には解義智と云參　頭書云▲山案字彙曰智知意切音置心有レ所レ知也▲荀子曰是レ之非レ之謂ニ之智ー▲雲峯胡氏曰智則心之神明所下以妙ニ衆理ー而宰中萬物上者也古▲智に種々あり義理を以て得たる智は識智とも又分別智とも云也學問の才智也佛の智聖人の

智はのこすべき沙汰なきなり全（慧）▲山案字彙曰
胡桂功音惠性通解也
心こそ　●自然の心の事をいふ説　●こゝにては賢
人の明意をいふべし文
譽も　●名譽なり其名を世にほめらるゝ心文
殘さまほしきを　●高位高官より智德を殘さんと
思へどもと也全　●山案殘さまほしきをと云て下を
うけたる文章也
つらく　●熟字倩の字なとを書つらくは丁寧
の義也句　●しづかに事の理を案ずればなり盤
人の聞を云々　　頭書云▲論語顏淵篇曰夫聞也者
色取レ仁而行違居之不レ疑在レ邦必聞在レ家必聞▲莊
子逍遙遊曰舉レ世而譽レ之而不レ加レ勸舉レ世而非レ
之不レ加レ沮定ニ乎內外之分一辨ニ乎榮辱之境一野▲文中
子卷八魏相篇曰文中子曰聞レ謗而怒者讒之由也見レ
譽而喜者佞之媒也阮逸註曰爲ニ謗譽一所ニ動靜一則讒
佞得レ計矣參
ほむる人そしる人　●畢竟は譽る人もそしる人も
ともに世に殘らねば是をねがふも皆いたづら事也
となり諺　　頭書云▲歌に「かしこきも賢からぬも

鳥邊野の烟の色はかわらざりけり▲東坡詩に仲尼
盜跖一塵埃といへり説
又々　●上に又といへるによりて爰には又々とい
へり古
すみやかに去べし　●よし又其人を見ずとも傳聞
人あらんが其人も又々すみやかにさるへし諺
しられんことをねかはんや　●此や文字なき本あ
りてにはちがひなるべし全　●諸本何もこれなし
譽はまた　●一方にほむる者多ければそれを偏執
する者又そしりを起す也又我を目の前にてほむる
者はかならず人の前にて我を又そしるとしるべし
とかく毀譽にかゝはらぬがまことの人なり參　　頭
書云▲韓退之送ニ李愿一序曰與ニ其譽ニ於前一孰ニ若無レ
毀ニ於其後一壽▲莊子盜跖篇曰好面譽レ人者亦好背
而毀レ之▲法華釋曰不ニ向レ張說ニ趙長一恐彼謂以ニ他
之長一而譏ニ我短一亦不ニ向レ張說ニ趙短一恐彼謂爾既
背毀ニ於彼一必能毀ニ於我一也善惡俱不レ可レ談者也▲
されば佛は利衰毀譽稱譏苦樂の八風吹どもそれに
うごき給ぬこと四方の風須彌を吹がごとしとかや
維摩經の肇公の疏にも侍るなれ參

身の後の名殘りて云々　●是埋ぬ名を永き世に殘さんと云しかと畢竟名譽と云ものも生ての世死ての後に更に益なき事にいひをとせり文　●名の失を古文をふまえて書也謗の本は存生の失身の後の名は死て後の失とかくよからぬよし也盤　頭書云△晉書張翰曰使三我有二身後名一不レ如卽時一盃酒△通鑑魏主叡曰選擧勿レ取二有名一名如二畫レ地作一レ餠不レ可レ啖已野　△列子揚朱篇曰賢愚好醜成敗是非無レ不二消滅一但遲速之間爾張湛註曰以二遲速一而致レ惑矜二一時之毀譽一以焦二苦其神形一要二死後數百年中餘名一豈足潤二枯骨一何生樂哉獻齋口義曰雖レ有二一時之名譽一數百年之後無レ不二消滅一爲レ善者亦徒自苦而已參　これをねがふも　●結語也盤　●智德をのこすと云も官位を貴とく思ふ程に愚痴にこそなけれ是も次に愚なりといへり全　●すべて三ケ所の愚の字輕重ありといへども必竟此章のはじめの一生をくるしむるこそ愚なれと名利をひとつにしていひし詞を釋せるなり參　●又愚なる人の目をよろこばしむる樂といひ愚なりと見るべきといひ愚につたなき人もといふ詞又一意也心をつくへし文

おろかなり　●名譽の益なき事を二重にことはれり文

〔第四節〕●智惠と心とこそと云より是をねかふも次に愚なりまでなり●第四節は名譽も亦求て益なきことをいへり文

たゞししゐて智をもとめ賢をねがふ人の爲にいはゞ智惠出ては僞あり才能は煩惱の增長せるなり

しゐて　●强の字也古　●義論をたてゝいふ也盤

智をもとめ　●智に明慧の智と又鑿智との差別有是は按排をそへたる鑿智也求るといふから自然の良智にはあらず參　頭書云△山案致知格物は儒者の第一とする所なる故に人一度にて知ることは己は百たびし人十たびすることは己は千度しても其理を知るべしといへりされど兼好意には智をもねがはず只待こともなく徒然として暮すばかりなり此老子の意也

人の爲にいはゞ　●是非々々名といふものはあしからぬといはゞ一理いはんと也智の名賢の名なりよからぬ仔細をいはむと也盤

智惠出では　●一向嬰兒のごとき無智の者には僞

なし小智ある人には僞ありされば僞は智恵の失なれば智恵はうるさき事ぞとなり文 ●智あると人にしられて後我しらぬ事をば人が問ける時にしらぬといふも名かおしく可レ苔樣もなき時に似たか似ぬやうに返事してしかもそれに道理をつけて何角云まぎらかして置也是智恵出て僞ある所なり是小智故なり大智は是をもつて不レ可レ云説　頭書云▲老子經俗薄章曰大道廢在ニ仁義一智惠出有ニ大僞一▲王介甫註曰智者知也惠者察也以ニ其有レ知有ニ察此大僞所ニ以生一也息齋註曰不幸而又有ニ小智小惠一者竊ニ仁義一而行レ之則僞自レ此滋亂自レ此始河上公註云智惠之君賤レ德而貴レ言賤レ質而貴レ文下則應レ之以レ僞大僞奸詐王弼註曰行レ術用レ明以察ニ姦僞趣一覩レ形見レ物知避レ之故智惠出則大僞生也諸 ▲又老子還淳章曰絕レ聖去レ智▲河上公註曰棄ニ智惠一反無爲無垢子註曰制作過レ人者俗謂ニ之聖一也謀慮過レ人者世謂ニ之智一也不レ知如レ此則巧詐日增反以爲レ害故絕レ之民之利益百倍矣參

才能　●才智藝能也諸

煩惱　●いたづかはしくなやむと訓する也諺　頭書云▲大智度論曰煩惱者能令ニ心煩作レ惱故名ニ煩惱一▲又曰屬レ婬屬レ嗔屬レ痴是名ニ煩惱一壽 ▲天台大師法界次第上曰名煩惱者煩以ニ喧煩一爲レ義惱以ニ逼亂一爲レ義能喧煩之法逼ニ亂行者心神一致レ使下不レ得中開發上故名ニ煩惱一也

増長せる也　●才能藝能をよくつとめ得る事は學問藝古の苦惱のつもりかさなりたる也と也煩惱は道にきらへる事なれば是もうるさきよし也文 ●一向小兒のごとくなれば何のなやみもなきをいらさる才能かあれば却而他にまさらんとおもふ我相はなれかたき故に次第に煩惱がましこそすれへる事なければ增長といふなり參 ●智者のうへに難を説て三重に名譽の益なき事をことわれり文

〔第五節〕●たゞし强てと云より增長せるまで也 ●此節はしゐてもとむる人のためにしいて智恵と云ものゝあしきことを云なり老子の心をさとりてしるべし智恵才能の名を至極と思ふなそれよりうへはあるほどにとの心なり盤

つたへて聞學びてしるはまことの智にあらずいかなるをか智といふべきかふかは一條なりいかなるをか

善といふ眞の人は智もなく德もなく功もなく名もなく誰かしり誰か傳へん是德をかくし愚をまもるにあらず本より賢愚得失の境におらざればなり

つたへて聞 ●まことの智は無相なるものなれば人に傳て聞べからす參

學びてしる ●本來の智は何の學ぶことがあらん人の水をのみてひやゝかなるとあたゝかなるをしるに同し參　頭書云△佛書よりいはゞ偏智權智小智世智便聰の類なり眞實の智は圓鏡平等觀察成作是を佛心の四智とす其體を法界と云法界の用は四智なり其體用は一心也莊老の實智をいはゞ愚なるが如く嬰兒のごとく中央之帝爲二渾沌一といふ是なり我儒より實智をいはゞ生智の智智仁の智舜の大智是なり鑿智は眞實の智にあらず良智の智是非の智是又眞實なる故に致知を大學のをしへとするなり野

まことの智云々 ●それは自然の眞知にあらず●才能は煩惱の增長したるなればなり前の智惠と才能とにかけていひ出たる詞なり文 ●智に高下ある事をいひてそれより後は向上の工夫をのべられたり鐵增 ●是より兼好みづからの本意をいひあらはすなり諺

いかなるをか云々 ●是より自問自荅也參 ●是問也名聞に對して利欲をすて智德に對して官位をすて今此所に到て智も實の智にあらずといへば其實の智惠を問つめたり全 ●問を求めて理をあかす也一轉語也盤

可不可は一條也 ●可は善不可は不善也諸 ●可とは我身の爲によき事をいふ不可とは我身の爲にあしき事をいふ參 ●是眞の智を問たる答也實の智は是なりと答れば實智にはあらず敎相にては諸法實相善惡不二といひ禪家にては世尊拈花(ネンゲ)などの所是也諸抄の心は可は善不可は不善と云が如と有は常の事也此所は善惡を論する所にあらず良の知はいかにと問しに可不可は一條と答たる所工夫すべし言語を絕する所なり全 ●一條とは一ケ條といふと同じたゞひとつぞとの心也文 ●善惡ともにひとつにして根本二色の品はなき也是本分の智の一理をしめす也參 ●愚に對する智こそ名もあれ不二の大智はいづくか知といふべきなしとなり盤 ●是善惡

是非可不可然不然曲直邪正一切世間の物論をひとしふする心也野 ●是莊子の詞をもちて善惡不二の道理を云てさきにほむる人そしる人ともに世にとどまらす誰をかはゞ誰にかしられんといひし名譽のうへにかけて云也文　頭書云▲莊子齊物論曰方可方不可方不可方可▲又曰可ニ乎可一不ニ可乎不可一物固有レ所レ然物固有レ所レ可無ニ物不一レ然無ニ物不一レ可故道通爲レ一▲郭象註曰可ニ於己一者即謂ニ之可一不ニ可於己一者即謂ニ之不可一云々擧ニ縱橫好醜恢恑憰怪一各可ニ其所一レ可則形雖ニ萬殊一而性同得故曰道通爲レ一也諸▲祖庭事苑載大法眼頌寄ニ復長老一曰渠々々我々々南北東西皆可可レ々々不レ可々但唯我無レ不レ可參▲こゝの可不可は莊子の語なれども引用る心は莊子の心にあらず莊子の語を兼好心に自由に用ひたる所あらはなり教相の佛語禪の語祿を引ばいかほどもあるべきに莊子の語を以て禪の旨をのべられたること此草子の習ひ兼好手柄なりいかにしても莊子の可不可の心にあらず其上一條なりと云所が兼好見所也可不可とは萬法といはんがごとし一條とは歸一といはんも同じ全

く

眞の人　頭書云▲莊子大宗師篇曰且有ニ眞人一而後有ニ眞知一句▲此眞人と云ものを智解了簡を以て此所に注釋すべからず外の境界なり其故は眞人は釋迦孔子を先達として孔子に聖智有聖人の名ある也又釋迦に般若の智あり無邊の滿德あり三世了達三明六通の功あり十號圓滿とて十種の名あり然に眞人は智德功名なきと云に付て釋迦孔子と同歟異歟可ニ工夫一全

智もなく　●あらはれて云べき智もなし諺 ●いかなるをか智といふへきに答たる也文

德もなく　●才德あらねば諺

功もなく名もなし　●外へ發したる手柄もなし參 ●手柄あれば世にしらるゝ名あれどそれもなし無名は天地のはじめと心をすましていれば也文 ●德もなく功もなく名もなしとはいかなるをか善と云に答たりと見るべし文　頭書云▲莊子逍遙遊云至人無レ己神人無レ功聖人無レ名▲口義云無レ己無レ功無レ名皆言レ無レ迹也▲焦竑閲註曰至人知レ道內冥ニ諸心一而泯絕無レ寄故曰無レ己神人盡レ道成ニ遂萬物一而妙用深藏故曰無レ功聖人忘レ迹神化蕩々了不レ可レ

測故曰無レ名句 ▲碧巖第一達磨初見ニ武帝一帝問朕起レ寺度レ僧有ニ何功德一磨曰無功德增鐵

誰かしり ●右の功もなく名もなければ諺

愚をまもる云々 ●ある德を見へぬ樣にかくしわざと愚人の體をつとめまもるにはあらず諺

本より賢愚得失 ●利德損失なりさきの可不可善惡にもかけて見るべし文 頭書云▲大慧書云無レ凡無レ聖無レ得無レ失云

境に云々なり ●本より可不可一條と見る眼なれば賢きにも愚なるにも得たる事にも失ふ事にもかかはらず此是非高下の境界に足をふみとめぬなり參●其境にをらぬはいかなる事ぞなれば工夫有へきとなり大道の理に住するゆへ成べし盤

[第六節] ●つたへてきくと云よりをらざればなりまでなり●此第六節は眞の人はもとより智德功名を求る心もなければ又態と德をかくし愚をまもらんとするにもあらず一向賢愚得失にかゝはらぬことをいひて兼好本意のつれ〳〵に落著せり文 ●眞の人は自德ならでは知り難きと云ことを此一節に決したり全

まよひの心をもちて名利の要を求るにかくのごとし萬事は皆非なりいふにたらずねがふにたらず

まよひの心 ●彼しづかなるいとまなく一生をくるしむるは愚なる事としらずして利欲名聞をもとむる心をさしていふなり文

名利の要 ●の要の二字は衍文なり又一說には用ひて義理をとれり 頭書云▲莊子盜跖篇に與レ名就レ利と云て下の句に非ニ以要ニ名譽一也とあり要の字に假名付たるを合てあやまり來れるなり野 ▲又一說▲名利の要を求るとは名利を要として求る也壽▲又一說▲老子經の註に欲者要也と字註あれば名利の欲を求ると云こゝろにや盤

かくの如し ●二說有▲名利につかはれて一生をくるしむるものゝ體かくのこととしとなり參●其利欲名聞を求て閑にせざる人のために如此ことはりをきかするそとの心なり文●發端の詞に應映せり野

萬事は皆云々 ●とかく僅かなる一生の内に何事をも願求るは皆非也諸 頭書云▲杜子美詩に嘆息人間萬事非句▲新撰朗詠に秋夜 長國詩曰萬事皆非灯下涙一生半暮月前情盤

〔第七節〕▲まよいの心と云より終までなり●是一段の結文なり壽●此まよひと云より終まで眞の人は智德功名なきと云所のつゞきには非ず發端の名利につかはれて一生くるしむと云所より末此所までの結句なりよく〳〵心付て味ふべしまよひを主として名利にふける者は萬事皆非なりといふことなり此かくのごとくと云ことと眞の人は智德功名なきと云所にかゝるやうに聞へてみそこなひあるなり全●名利ともにかきらず世間の事は萬妄相也云にたらずねがふに不ㇾ足さて何をか云ねがはんと云のこして下段にて佛道のことを云て佛道をねがふべしと心をあましてしらせたり盤

〔一段之總論〕●此段は世に愚なる者は利欲にまよひ少し心あるものは又名聞にまよひて一生をくるしむことをいさめたり畢竟人間の一生わづかなることなれば浮世の榮利を貪らず名譽をも求めずしてつれ〳〵と身を閑にし賢愚得失の境をはなれてこそあらめとの心なるべし例の兼好の人に異なる筆法也さて此段利欲をいさむるところに身の後に金をして北斗をさゝふともと云て名聞を戒る所にはほむる人そしる人ともに世にとゞまらず身の後の名のこりて更に益なしと云り畢竟無常の世なれば萬事皆非也と云に歸せる誡也心をつくべし文●兼好の老莊を好る段わきて此章にあり心をつくべし又つれ〳〵の本意をのべたり參●加樣にかゝれたるを聞けば儒道より一入打あがりて聞ゆ日本へ道家の書あまたわたりたれどよみて感ずる人のみにて加樣に身に行ひたる道人は此兼好法師古今に獨歩せるものならし貞

〔三十九〕或人法然上人に念佛の時睡におかされて行をおこたり侍る事いかゞして此さはりをやめ侍らんと申ければ目のさめたらんほど念佛し給へとこたへられけるいとたうとかりけり又往生は一定と思へは一定不定と思へば不定なりと云れけり是もたふとし又うたがひながらも念佛すれば往生すともいはれけり是も又たふとし

或人　●其名をさゝぬことば也參　頭書云▲山案文選六臣註兩都賦序註呂向曰或者不定之辭とあれども今こゝに書る或人は佐々貴高綱なるべし一日和論語を讀けるに彼書に曰佐々貴四郎高綱遁世し

高野山に有しが或時京へのほりて源空上人に逢て問ひけるは念佛の時ねふりにをかされて行を怠り侍ることいかゞして此障をやめなんやと尋しかば上人曰目のさめたらんほど念佛したまへとぞ申されし

法然　●其名をは源空といへとも法然坊と坊號をよひし故にかくいふなり參　頭書云▲元享釋書第五慧解篇曰釋源空姓漆間氏美作國稻岡人也父時國母秦氏父母無レ子祈ニ佛神一云々長承二年四月七日生年十五從ニ延暦寺功德院皇圓一剃落受戒三期之間通受ニ台教一又從ニ黑谷叡空一稟ニ密乘及大乘律一凡大藏經律論他宗章疏靡レ不ニ檢閲一晩見ニ源信往生要集一乃棄ニ所業一偈ニ淨土專念之宗一云々建永二年竄ニ讃州一建暦元年詔追赴ニ都城一二年正月居ニ大谷一染レ疾其徒安ニ彌陀像於床頭一且爲ニ臨終助標一云々二十五日高倡ニ佛號一諸徒助和午時著ニ傳持之慈覺僧伽(キャリ)梨一頭北面西誦ニ光明遍照偈一而寂年八十臘六十六諸▲法然はもと叡山の僧にて圓頓戒の一流を相承せる人也後に叡山の內黑谷と云所に引こもりて念佛往生を修行せられたり其跡とて今に叡山に在其後月輪關白嵯峨の二尊院を建立せられしより彼寺の開山となられたり二尊院は今に天台宗にて叡山の末寺也此故に法然の全骨をおさめたる塚彼寺にあり灰はあをの光明寺にありとなん參

元國（美作國久米押領使）─盛行（漆間氏）─重俊（同）─國弘（同）
─時國（同　美作國久米南條稻岡佳人押領使漆間時國）─源空（童名勢至丸生質性敏也十五歲久安三年春に比叡山西塔の北谷持寶坊源光が弟子となる其後十八歲の時同西黑谷の慈眼房の叡空の弟子となる故に兩師の名の上下を取て源空と號）

上人　●天台宗の圓戒を時の法皇にさづけ奉られし故に上人の號を下されしと也官位を給はらずして上人號を給ふ事は隱遁の僧なる故なり參　頭書云▲書言故事曰僧曰ニ上人一有レ過能自改名ニ上人一內有ニ智德一外有ニ勝行一在ニ人之上一名ニ上人一說▲山案摩訶般若經曰何名ニ上人一佛言若菩薩一心行ニ阿耨菩提一心不ニ散亂一是名ニ上人一

念佛　頭書云▲元亨釋書二十九曰念佛者持誦之一支也修多羅中持ニ于佛々一此方局ニ彌陀一焉或釋迦焉盤▲山案智度論曰但一稱ニ南無佛一是人亦得レ畢レ苦其福無盡▲念佛のことはもと法華經の中に但一心

念佛とも以深心念佛とも見へたり彌陀念佛に四種の品あり一には稱名念佛二には觀像念佛三には觀想念佛四には實相念佛也法然坊下機に敎られし念佛と云は稱名念佛なり此故に念の字を稱の義に心得るなり此故に一枚起請にも觀念の念にもあらすと云ひ念の心をさとりて申念佛にもあらすといへりされども觀經に念佛とあるは觀念のことにして唱ることにあらず故に經文曰此人苦逼不ㇾ遑ニ念佛一善友告言汝若不ㇾ能ㇾ念者應ㇾ稱ニ無量壽佛一とあり是稱と念と二つなり法然房の內意は下根の衆生を導かん爲の念佛なればとがむべきやうなし參

行をおこたり云々 ●念佛に懈怠する事也文

此さはり ●眠をいふ也文

目のさめたらんほど ●兩說有●ほどゝは時といふ心にかよふ也目のさめたる時念佛申せとの義也されば稱名念佛に又上中下の三根を立てしめす是までは上根の行なり參●淨土宗の念佛は易行道の最上なれば睡たき時はふし目の覺たる時にはおこたりなく勤よと也諸●ねむたきを無理にこらゆれは心がさはぐ也念佛の本意は人の心をちかくは此世に靜にし遠くは來世にしづかにせん爲なればさはぐはよしなければ睡の來るを無理にこらへぬ也盤●又說●此問の心を伺ひ見るに睡の覺るならひあらは其障を除かんとかもふ程の機分なれば其機に對し睡たき時はふし寤たる時に勤よとは敎給ふまじ其故は世間の藝能諸職農業に至まて進む方には睡をのづから退ぞく物也是五根の中の精進根といふ其根いよ／＼進むときはたとへ病苦なとの障難にあへども行業を退せず是を五力の中の精進力といふたとへば草木の種萠出て二葉さすは五根なり其根わづかにありといへどもそばよりあらくあたれは折痛み或は根ながら引をこされて損ずるものなり然るに年月を經て彌つよくなる時は風吹人さゆれども力用增す故に損ずる事なし是則五力なりされば佛の御法無邊なれども六度を過す其中の精進波羅密は別に體有にあらす前三後二の五波羅密をいさみ勤て成就するを取て精進度を立給ふものなり然は精進の一つは出世に於ては申に不ㇾ及世間の事業にも此ひとつを離れては成就する事なし今爰に目のさめたる時に念佛せよあまりに强て

は無用之由に答へ給ふといふ説は上人の詞にも背き侍るべし上人の答へは睡のさむるほど勤よと宣ふ事明なり睡にをかさるゝは心のすゝまぬ故なり心すゝみ懈怠を治せばをのづから睡はなきもの也睡の來るを歎かんよりは念佛のすきになりぬるをならひしれとの給ふ心なるへし古人も念佛にてせづき給へ人々との給ひけりとかや丞●念佛の時睡の催ほすは念佛未熟なるに依てなり我心と念佛と合する上にはいかてか睡眠きざゝんされば目の寢るほとの行を觀念せよとしめさるゝ者なり諺　頭書云▲觀無量壽經第三觀唯除ニ睡時一恒憶ニ此事一云々▲優曇寶鑑二曰寶王論曰修ニ持一相念佛三昧一者當下於ニ行住坐臥一繫レ念不レ忘縱令昏寐亦繫レ念而覺即續上之按法然之語本ニ于此一參▲山案下に記す兩説を味ひ見れは前説は目のさめたらんほどゝ云文法にかなふに似たりされと末世下根下智の者はつとめよと致へても怠りがちになるものぞしかるにねむたき時は寢て寤し時はかり念佛せよと敎るならば念佛申す日は一日もあるまじき程に後世の者のいましめならは後説の意より叶へり▲又一説に兩説ともに同し理也如何となれは目の寤る中懈怠なく念佛することは易きに似てしかも難成事也目のさむるほと念佛すると同じ意なりされば目さへ寤れば早おこたりなく勤るほどに心にかける者は念佛に信心あるゆへなり如レ此つとむる者は自らねむりもきざゝぬなりはじめより睡度ときは寢てさめし時はかり念佛せんと而已思はゞたとひ目はさむるとも念佛せんことを思ひ出すまじきなりさるによつて始より寢度を强て勤る時にはたとひ睡るとても夢中にも念佛の心になりて居るなり是我常に心に執著せしことは寢言にも云が如しされば目のさむると其儘念佛するほどの勤には至り難かるべし上人の答易きに似てしかも念佛の熟することを敎化し玉ふなれば最尊かりけりと兼好判じけるなりといへり此説我心に於て又いとたふとかりけり▲惠空評曰法然坊所謂目覺時念佛之語有ニ深旨一哉世典曰至人無レ夢設有レ夢是非ニ邪夢一故高宗夢レ説仲尼夢ニ周公一是即正夢决矣佛經説受ニ持佛名一者有ニ十種勝利一中第七者夜夢正直復夢見ニ阿彌陀佛勝妙色像一若然目覺時念佛則睡中亦正念也夢裏無レ

邪十二時中與レ佛寤寐者也是古人所謂夢覺一如而法然勸レ人也至矣盡矣參

いとたうと　●兼好の判じていへる也諸

又　●是には問はなけれども答給ふ詞上になぞらへて見るべし全

往生は一定と云々　●往生の二字本法花藥王品に出たり乞安樂世界へゆくを往といひ蓮花の中に生するを生といふなり參　●是中根のためにしめされし也決定往生を思ふ機の前には至誠心深心廻向發願心の三心はずゞろに具足す三心具足すれば起行は其中にそなはる故に安心をおもてにして起行をうちに立られたり若此決定の心なくして往生は不定と思へは機をうたがひ法を疑ふ故に三心不具なれば往生も不定也と也參

●此所は心得あるべし一定と思へば一定なりとて稱名の數返もつとめず唯一定なりとおもへばよきと心得すましぬる人は不往定のもとひ也一定不足の說は念佛の行業をはげむ上の事なりたとへば日々に步み行ば江戶へも長崎へも行事をうたがはねとも其儘打居て彼地につかんと思ふに似たりされば步みをはこはずしていたるらんと思ふは其決定も却て僻事に成なり全　●此一定不定の論うわつゝにては能きこへたるやうなれども淨土宗の大事これなり能工夫有へし若此字面の分にて澄と沙汰しおかはたとへば人參藥と思へは藥毒とおもへば毒といひたるがごとし是自得になりかたかるべし增鐵

▲頭書云　▲一言方談曰法然上人の曰往生は決定と思へは定て生る不定と思へば不定なり云々句　▲覺大師曰往生有無依下信與二不信一願與中不願上矣盤　▲善導釋に唯恨衆生疑不疑莫レ論二彌阿接不接一有二意專心而廻不廻一全　▲迷る者は十萬億土さとれる者は去レ此不レ遠の心となり諺　▲（往生）於二往生字一立二三義一一者往生捨レ此往彼二往生往者昔也所謂婦二往昔本覺理一斯乃迹門意也三者往生往猶レ此所謂此生義也本是不改寂光往生斯乃本門不共意也今案法然爲二下機一而所レ化盖當二第一義一雲棲彌陁蹂曰以レ生二於自心一故不レ往而往名爲二往生一

▲舊抄に淨土門の大事此所にあるなどゝ云はわけをしらぬにてあるべし兼好の心は何となく法然のやすらかに只むつかしきことなく念佛申せといは

れしを殊勝に思ひ我つれ〳〵の心にもかなひ又上の段の名利をはなれてかゝはらぬ心にも能相應せることを引合ていへるなるへし其上法然自筆の起請にも與ふかきことを存せば二尊の御あはれみにはづれ本願にもれ候べしとあり參
不定と思へば●思へばと云詞に心をつくべしとかく人の心によるといふ事なり盤
たふとし●兼好の判詞參
又疑なからも云々●是よりは下根のためにしめされたり參●まづ疑惑の者は往生しがたしといへともさすがに念佛して佛を念するが故に終には其念を果し遂て往生するの心にや文●うたがひながらも念佛すれば其内に自然と稱名に心をうつしてやまぬ時は初の疑もをのづからはれて往生すべしといふ心にや侍るらん參●是は本願力の故に往生する心なり盤●たとへば病人に藥を用るにあの醫師は下手そふなと思ひて心にうたがひても能其病證に相應したる藥をもる時は其病いゆるかごとし彌陀の願力いつはりなければうたがひながらも念佛さへすれは往生するとなりたとへうたがはすど

も念佛をつとめねば往生はとげぬぞ諺　頭書云▲往生要集問答科簡第八信毀下曰問若无二深信一生二疑念一有終不二往生一答若全不レ信不レ修二彼業一不二願求一者不レ應レ生若雖レ疑二佛智一而猶願二彼土一修二彼業一亦得二往生一盤▲是係念定生願に欲レ生二我國一不二果遂一不レ取二正覺一とあり文▲こゝのうたがひながらと云に往生要集の佛智を疑と云を引は其文章の機勢は能似たれども理に於ては而も別也こゝのうたがひは我小智にて佛智を疑とは見るべからずそれは下根の人にまれなり此うたがひは機を疑ひ法をうたがふなり機をうたがふとは我等下根の身にして罪惡不善なれば往生の機にあるべかずとかなしみ疑なり法を疑とはいかに彌陀佛の別異ノ弘願たふとくをはすとも我をたすけ玉ふことはいかゞといふ機の拙さにまかせて法をうたがふなり參▲(問)前の一定不定の義は疑のこと也不定とうたがへは往生ならずと決したり又爰に至て疑ながらも往生すとの玉へる自語相違如何(答)不定と疑て往生せざるは報土なり此所のうたがひながらも往生するとは邊地胎生の往生なり念佛は修しながら佛の五智

をうたがふもの是に生ず佛の大悲の故を以て罪福を作ㇾ信五智を疑ふ族を漏し給ふ間敷との方便に報土の生はかなひ難きなれは罪福を信し行業をはげむをたねとして邊地胎生の往生をとげしめ玉ふものなりくわしくは大無量壽經の說を窺ふべし全▲眞如堂の阿彌陀の御詠とて彼寺の緣起にのりたる歌に「彌陀たのむ人は雨夜の星なれや雲はれねども西へこそゆけ參▲後撰集空也上人の歌に「一度も南無阿彌陀佛と云人の蓮の上にのぼらぬはなし說

〔一段之統論〕●此段は前段にまことの人の賢愚得失にかゝはらず寂然不ㇾ動ことをいへりそれに付て法然上人の只何となく念佛だにすれば往生すとの玉へる心はへのおのづから通ひたれば書つゝけたるにや文●此段或人曰淨土の敎に上品中品下品の人の氣根に應じて示すことあり其上中下の三品に當て見るべしといへり爰に三つを別てる所を兼好たうとしと褒美せられしとなり此說是なるや否や暫く期二智者一諺

〔四十〕因幡國に何の入道とかやいふ者の娘かたちよしと聞て人あまたいひわたりけれども此むすめ只栗をのみ食て更に米のたぐひをくはざりければかゝることやうの者人に見ゆべきにあらずとて親ゆるさゞりけり

何の入道　●入道の名しれぬ故に何とかくにや又はしりたれどもえかゝぬ事なる故に書ざるにや諸●山案後說非なり末の行雅の奇病を書しも名をあらはせりこの娘も奇病なり是にかぎつて名をかくまじきいはれなし　頭書云▲凡惡をかくし善を揚ると云は聖人の心なり何の入道と云て姓名をいはさるも此心にや諺▲世中百首の歌「よき事はためしにもひけよからざることはためしにひくな世の中古

かたちよし云々　●容貌よしとばかり人はきゝし故に名にめでゝ其實をたしかにしらす參

いひわたり　●あなたこなたよりあまた妻にむかへんといふ也諸　頭書云▲源氏東屋にいとねんごろにいひわたりけりと在壽

栗をのみ云々　頭書云▲京六條町に老尼あり常に大豆を食て更に米をくはず人の所へ行は豆腐を烹

てくはせけり人皆豆婆とぞ云ける又伊豆國三島に或人の娘有五穀をくはず只菓をのみ食けるがこれは或人に嫁しけるとなん野 ▲山案予も亦まのあたり見たる也或者の娘五穀を不ㇾ食して只栢(カヤ)をのみくひけるが顔色も青白にして常に煩ふことのみあり是皆五藏の偏によつてあるなるべしこれも病のうちなるべし彼女はほどなく早世しけるなり

米のたぐひ ●類の字の意は米に不ㇾ限五穀に通ふべし參 頭書云▲廣韻曰穀實也五穀 米 大麥 小麥 大豆 小豆 又云 黍 䅘(ヒヘ) 粟 麥 稻古

ことやう ●異樣なり人とかはりたる事也全

見ゆべき ●入道のいひし詞也全

親ゆるさゞりけり ●是に付て兩說あり統論の下にしるす

[一段之統論] ●此段入道の嫁をゆるさゞるにつけて褒貶の兩說あり●先ほめし說には●此女外のきこえと其身の振舞とかたゝがひの侍れは嫁することは名によりて人のもてはやすをたとひ此實事を語るとも一旦は執著深き男ありて色形にめでゝ先むかえる事もあるべし然ども其形衰へ寵愛も盡ては彼實事の異樣の事にひかれて終に一生をすらりとをくるまじければよし加樣のかたはものゝ人の累ひになるのみに非ず果は先祖の名をもくだすこともやあらん只嫁せぬがまされるにはしかずと思ひけるにや人としては虛名にめでゝ其實事を掠むることなかれとすへて儒生沙門其外諸人のいましめとせる親の心眞實なることの書置けるなるべし是又莊列の虛名無實を惡める心にも通ふべきにや

參 ●凡そ仕官を望み求ㇾ嫁或は心の僻める歟形の見惡きあれども他人を賴み樣々に僞り飾りて終其身の恥を求めし者世擧て皆然りしかるを尋常に替りたる所ありとて嫁をゆるさぬ入道の心尤至極せり諺全も是に同し乘門の上よりいはゝつらからぬ身をも退くぞ本意なるべきにまして已に虧たる所あつて強て世に交らんと求るは恥なり此入道の心なみなみにはあらぬを感じて人にかゞみせしめん爲に書載たると覺へ侍る句 ●又貶し說には●是はよき娘を異樣なることありとて緣につけざる親の心をほめて書ると思ふ人ありさには非ず親の智惠なくしてあたら娘をかくし置く事をそしりて書り兼好は

親の心持をよしともあしとも是非をつけぬに何を以て批判すると云人有べしこれは前段の法然上人の金言をほめて其次につきともなきことを書なせるにてさとらるべし親のあやまりをしらせんためにかたちよき娘のよしをさへかゝれ侍る貞●此説しかるべからず凡此草子は異國の隨筆及び筆談の体に似たる文法なれば一章づゝをはなして各別に見るがよきなりされどもたまく\は前後の段にも其心つゞきたるところもあり參●又一說●此段の心說々ありまづは此后の行雅僧都の奇病の段と同じくめつらかなる僻ある女の物語を書り文●山案此說もすなをにしてよし但し句解にはさらに婦人の怪意を取てしるすのみにはあらじといへり右の說々後生好む所にしたがふべし但し强て論せは論語に人遠き慮なきときは必近き憂ありと云心を以て見るべし彼入道が娘を人に嫁するに實事を以てするとも後にはうとまれんと遠慮をしゆるさゞりし故に近き憂なかりしとなり又人としては其子の惡しきをしらぬが世間の人情なるに彼入道が子の惡しき病あるを能知つてゆるさぬはよき志哉とほめて書けると落居すべし

〔四十一〕五月五日加茂のくらべ馬を見侍りしに車の前に雜人立へだてゝみえざりしかは各おりて埒の際によりたれどことに人おほく立こみて分入ぬべきやうもなしかゝるおりにむかひなるあふちの木に法師ののぼりて木のまたについゐて物見るあり取つきながらいたうねふりて落ぬべき時に目をさますこと度度なり是を見る人あざけりあさみて世のしれものかなかくあやうき枝のうへにてやすき心有てねふるらんよといふに我心にふとおもひしまゝにわれらが生死の到來只今にもやあらんそれを忘れて物見て日をくらす愚なる事は猶まさりたる物をといひたれば前なる人どもまとにさにこそ候けれ尤愚に候といひて皆後を見かえりてこゝへいらせ給へとて處をさりてよび入侍りにきかほどのことはり誰かは思ひよらざらんなれども折からの思ひかけぬ心地して胸にあたりけるにや人木石にあらねば時にとりて物に感ずる事なきにあらず

加茂のくらべ馬　●競馬と書足そろへの事諸　頭

書云▲昔は內裏の豐樂院にて今日騎射有左近の馬

場の眞手番などありしこと年中行事歌合公事根源等に見たり又五月五日節五位以上進ニ走馬ーよし延喜式兵部式にあり中比より此事絶て今は只加茂に其儀式卿のこれりとかや文 ▲山案袖中抄曰五月三日は左近荒手結也四日は右近荒手結也五日は左近の眞手結也六日は右近の眞手結なり荒手結の日はいての近衞舍人水干はかまにくゝりをあけて裾の尻を女の中ゆひたるやうに引出て其上にむかばきを結也眞手番の日は紅の下のはかまおり物のさしぬきにくゝりをあげずそばをはさみて裾の尻を膀より前さまに引たをりて前にはさめりされは此眞手番の日をひおりの日とはいふ也公事根源同 ▲類聚國史曰承和元年五月乙卯天皇御ニ武德殿ー覽ニ四府馬射ー丙辰五御ニ觀親王以下五位所レ貢競馳馬ー戊午五御ニ同殿ー令ニ四衞府馳ー射ニ種々馬藝及打毬ー也同六年五月乙卯是端五之節也天皇御ニ武德殿ー觀ニ騎射ー

見侍りしに ●兼好見物に行し也古

車の前に ●兼好なと乘たる車の前也盤

雜人 ●數ならぬ下輩の人也參 頭書云 ▲葵卷に雜々の人とあると同じ下々の者也文

各おりて ●同車とて垂居事也兼好各々をるゝと也全 ●山案同車にはかきるべからずひろく見物の衆と見るべし

埒 ●馬をふせぐかき也句 ●やらひ也參 頭書云 ▲字彙曰埒庳垣也句 ▲玉篇曰封レ道曰レ埒參 ▲悅目抄に一埒の内にくらぶる駒の勝負は乘れる男の鞭の打から文

ことに人多く ●埒のきはゝことに人おほき也盤

あふちの木 ●樗木也古 ●今栴檀の木と云物也諸 頭書云 ▲拾芥曰證類本草に曰五月五日俗人取ニ樗葉ー佩レ之避ニ惡氣ー ▲枕草子に云木のさまぞにくけれどあふちの花いとおかしかればなにことに咲てかならず五月五日にあふもおかしと云々文 ▲新古今に「紫の雲の林を來て見れば法にあふちの花咲にけり全 ▲山案一説に爰にむかひなるあふちの木といへるは樗木の事には非すあふちとは大路のこと也只何木にても道のほとりにはへし木のこと也樗木とばかり限り見るへからず廣く見るへし此説又奇なり

ついゐて ●かりそめに居也諺

いたう　●疾の字或は甚の字參
あざけり　●嘲字
あさみて　●淺む義也與ふかく思はぬ心成へし句
しれもの　●愚痴なるものなり文　●文字書樣　頭
書云▲源氏帚木にしれもの丶物語せし▲花鳥にし
れものなとはざれものなど云ふがごとし五音相通
なり壽　▲萬葉第九詠二浦島子一歌に「世間之愚人（シレタルヒト）之
吾妹兒爾おろかなる義なり▲左傳晋悼公周子有レ
兄無惠不レ辨二菽麥一故不レ可レ立杜預曰菽大豆豆麥殊
レ形易レ別故以爲二癡者之候一不惠　盖世所レ謂白癡野
▲本朝文粹には白物（シレモノ）と書文
いふに　●あざけり見る人の詞也全
我心　●兼好の心に不圖思ひしま丶に古
生死の到來　●常は生と死との二つを生死といへ
ど爰にては生じたる者の死するといふ義にて只死
の一字の義也句　●生の字にさして心をつくべから
ず連續よきにまかせて生死とかけり只死する事の
頓而到來せんとなり參
愚なることは　●前のしれものといふに對してい
ふ也古　頭書云▲此所鳥窠禪師の故事思ひ合見る
べし▲五灯會元曰鳥窠道林禪師木郡富陽人秦望山
有二長枝一枝葉繁茂盤屈如レ蓋遂捿二止其上一故時人
謂二之鳥窠禪師一元和中白居侍郎入レ山謁レ師問曰禪
師住處甚危險師曰大守危險猶甚白曰弟子位鎭二江
山一何險之有師曰薪火相交識性不レ停得レ不レ險乎句
いひたれば　●是迄兼好詞也全
さにこそ　●さうにてこそ候けれとなり句
こ丶へいらせ云々　●兼好をよび入たると也句　●
見物の人兼好詞をかんじたるさまなり全
處を去りて　●我見る所をさつて諺
折柄の　●か丶る見物の場の鬧敷（イツガハシキ）折から也諺
胸にあたりける　●見物の人々の胸也參　●評論し
ていふ也奇妙なることといひて人を驚すにあらず感
ずる時が詮にてあるよし也感ずべき時いたらねば
何程の金言法文もいたつら事也との心なり折から
思ひかけぬとは無常の斷りなど人の思ひかくべき
時ならぬに能氣が付たるとの義也盤
人木石に　●いはきとよむべきなり全　●人といふ
もの無心非情のものならず本心はかつて消ぬもの
なれば常に迷ひたる人も感すべき時ありて本心に

相當するよしなり盤　頭書云▲文選鮑照詩人非ニ木石一豈無レ感句▲遊仙窟云心非ニ木石一豈レ忘ニ深恩一▲白氏文集曰人非ニ木石一皆有レ情不レ如不レ遇ニ傾城色一▲伊勢物語にむかしをとこありけり女をとかく云事月日へてげり岩木にしあらねば心ぐるしくやをもひけん野▲東屋に岩木ならねばをぼしゝる▲蜻蛉に人いはきにあらねば皆なさけあり盤

物に感ずること　●山案此結句尤いましめを書り心を付て味ふべきものなり　頭書云▲人は木石の如く無情のものに非るによつて教る人なければ心鏡いつ迄もくもれり誠によつて教ふれば自得の良心感じうごくは必然の理也諺▲かく云ことは人と云もの教へられまじきにあらず時をはかりてあらは教化なるべきよし也佛一代の說法も時至らねばならざるによりて花嚴阿含方等般若法花の五時あり孔子も時にあはすとて仁義禮智信の道のあるじにて大成の聖人なれども時いたらぬゆへに道行れずして書をおさめて後世に道を殘し給へりかゝる理を競馬のことにて人にしらせたるなり盤

〔一段之統論〕●此段無常をすゝむる也壽●生死到來只今にもやあらん是を忘るへからすとの心なり人彼名利につかはれて閑なる暇なきも此無常を忘るゝ故なり奥にもむさぼることのやまさるは命を終る大事こゝに來れりとたしかにしらされはなりと書りこれら兼好の爲人の所なるべし文●此段も前段の意のごとく彼法師の木の上より落へきかと末の慮もなくねむれるは愚なる至りなりと云て其より無常の心を引うけて人に示し結句に至て人たる者の性は善なることはりを述たり偏に有難き段なり說

〔四十二〕唐橋中將といふ人の子に行雅僧都とて敎相の人の師する僧ありけり氣の上る病ありて年のやうやうたくる程に鼻の中ふたがりて息も出がたかりければさま〳〵につくろひけれど煩しく成て目眉額なゝども腫まどひて打おほひければ物も見えず二の舞の面の樣に見えけるが只おそろしく鬼の顏になりて目は頂のかたにつき額の程鼻になりなゝどして後は坊の内の人にも見えずこもり居て年久しく有て猶わづらはしく成て死にけりかゝる病もある事にこそ

唐橋中將　●參議中將雅清なり村上源氏久我庶流

也諸　▲頭書云唐橋中將幷行雅傳

村上天皇仁皇六十二代 ― 具平親王二品中務卿後中書王 ― 師房從一位左大臣 ― 顯房從一位右大臣中院 ― 雅實久我從一位太政大臣 ― 雅定右大臣中院 ― 雅通內大臣後久我 ― 通資唐橋 ― 雅清參議中將正三位大納言 ― 行雅僧都

教相　●眞言宗に經論聖教を學ふを教相とし行をする事を事相とす野

氣の上る　●けのあがるとよむべし文　頭書云▲源氏若菜の下にけのゝぼりぬるにや野　▲榊卷に御氣あがりて猶なやましうせさせ給ふとあり句

息も出がたかり　●息もつまりて出ぬなり説

つくろひ　●養生の事也説

腫まどひて　●只腫にはれて何れを目何れを眉額と定めかたく見まとふ也句

打おほひ　●目のうへにおほふなり參

二の舞の面　●伶人の舞の面也色赤してをそろしき也安摩とてをかしき舞有其次にまふを二の舞と云也壽　頭書云▲世繼にいはくまことに今の世の事とりそへての給はせよあはれいくとせになり給ひぬらんといへば二の舞の翁にてこそ侍らめいへばむかしもしかり侍し二の舞の翁ものまねびのをきなと云々▲狹衣に云かきかへさるゝばちの音をもしろう愛敬つきて雲井はるかにひゞきのぼる心地するをかくれみのゝ中納言の二の舞にやならんとはづかしければばちついさし給へるを人々も宮もあかずをぼしめしけり盤

鼻になり云々　頭書云▲莊子人間世支離疏者頤隱ニ於臍ニ肩高ニ於頂ニ會撮指レ天五管在レ上兩髀爲レ脅註曰會撮髻也五管五臟之腧也▲又大宗師篇にいへる子輿が病もかくのごとし又唐の悟達國師に人面瘡あること編年通論佛祖統記勸善書等にあり又人あり膊に人面瘡を生じて酒食を瘡の口よりくはしむ貝母をのませて愈ぬと酉陽雜俎に見へたり其外奇病あまた野槌に出たり

坊の内　●方丈にてなく其外の僧の居所を云なるべし盤　頭書云▲名義集曰或名ニ僧坊ニ者別屋謂ニ之坊ニ也盤

猶煩しく　●上に煩しくといへるによりて爰には猶と書り古

かゝる病　●此結句奇妙也一段の眼目也壽●かゝ

るとは上にいふ所をうけたり此事をいはんためにしき煩有しぞと諸人にしらしめんために書しなるべし參　頭書云▲大和物語にあさましうかゝるや此一段はかく也盤●かゝる智者にも因果のもよほす所天命のはたす所まぬかれがたくしてかくあやまひをつくものになんありける論語に伯牛癩をやめり命哉斯人也而有二斯病一也と孔子の宣へることなど思ひ合すべし文

［一段之統論］●此段奇病のあることを云てさて天命をしらしむる也壽●此段は如何なる人にもさまざまの病あること天命なればせんかたなしされば其病人もさして慊むべからず又病者をあなどることなかれとの心にや文●此段世間に煩によつて其人の善惡を定ることを戒む凡病には纔證ありてさまざまの奇病其例多し何ぞ惡人のみあしき病をうけんや氣質のうくる所七情の感ずる所に依て病をなせば惡人無病にして善人病ること其數をほし世の迷をさとさんために敎相の師とする僧と云出してかゝる病もありけるかと書とゞむ諺

［四十三］春の暮つかた長閑やかに艶なる空にいやしからぬ家の奥ふかく木立物ふりて庭にちりしほれたる花見過しがたきをさし入てみれば南面の格子皆をろしてさびしげなるに東にむきて妻戸のよき程にあきたる御簾の破れよりみればかたち清氣なる男の年二十ばかりにて打とけたれど心にくゝのどやかなるさまして机の上に文をくりひろげて見ゐたりいかなる人なりけん尋きかまほし

花見過しかたき●兼好花をめつるの人にかはりたる所なり彼花はさかりに月は隈なきを見る物かはといふと同じ　頭書云▲千載集に前大納言俊實の山家の落花をよめる歌に「花の皆散ての後ぞ山ざくらはらはぬ庭は見るべかりける句▲有レ花便入レ門主人莫レ問レ誰▲白氏文集に遙見二人家一花便入不レ論二貴賤與二親疎一野

あきたる●兼好の心とまりしももつともなる風情とぞおもはるゝ説

打とけたれと心云々●內證なれば燕居無事の體にてあまり形儀もとりつくろはぬなり參●人なき所にてきつとしたるもいかゝなるに打とけたるな

がらむさとあらぬ説　頭書云▲君子愼ニ其獨一の心也盤▲論語に子の燕居せるときに申々如たり夭々如たりとあるなど可ニ思合一諺のどやかなるさまして　●閑かなるさまなり兼好のこのむ所なり
文をくり云々　●ひとり灯の下に見ぬ代の人を友とすといふに相應ずるなり盤
尋ねきかまほし　●ふかく其體を甘心したるよしなり盤
〔一段之統論〕●此段優なるさまの物語を古詩などの面影にて書り師説には誰人の加樣にのぞくべきもしらざることなれば平生の行跡をたしなむべきこと也彼やかてかけこもらまじかば口惜からましといへる段の心にをなじかるべし文●此段春の花の比年二十はかりなる人學文して居たる事を兼好感じて人の欸に書る也其故は若き者のならひとして心ものに動き人にさそはれ花にめてゝ學文などは思ひもよらぬ事也常の行跡まで思ひやられて若き者の手本にすべきとなり全●山案此段より四十九段老來りてといへるまでは人たる者の平生の心がけをいへりさて四十九段目にて云結て例の兼好存念の無常をさとるべきと云に歸せり此段より四十八段までは老來ての段を書べき序の心と見るべし此筆法あまたあり心をつけて見るべきものなり

〔四十四〕あやしの竹のあみ戸の內よりいとわかき男の月影に色あひさだかならねどつやゝかなる狩衣にこきさしぬきいとゆへづきたるさまにてさゝやかなる童一人をぐして遙なる田の中の細道を稻葉の露にそぼちつゝ分ゆくほど笛をえならずふきすさびたるあはれと聞知へき人もあらじと思ふにゆかん方しらまほしくて見送りつゝ行ば笛を吹やみて山の際に惣門の有內にいりぬ

あやしの竹　●竹のあみ戸か何ぞとうたがう程麁相なる體也所にたがひてやさしき人の住よしをいはんため也盤
さだかならねと　●央の字をさたかとよみたり盤●狩衣のいろさたかに見へざれどもと也文
つやゝかなる　●うつくしき意也壽●日本紀には嚴の字をかき文選には光の字をよませたれば嚴飾光彩の義取合見るべし句

狩衣　頭書云▲狩衣色は不定也袖くゝりあり若き
人はうすびらの組萠黄紫等の打交又紫匂云々▲桃
華蘂葉にあり狩衣の時は必烏帽子也文
てきさしぬき　●濃紫の指貫なり諸●濃紅濃紫は
たゞ人は着ぬ也宮にて御座す由をいはん爲也盤
頭書云▲濃紫の指貫なり紋は白き藤丸或は龜甲な
るべし衣冠の時夏冬ともに用る也狩衣にも勿論な
り▲西宮記曰指貫王者以下衆人共所レ用也古時有レ
制臣下不レ用近代五位已上昇殿六位用レ之文▲山案
和名抄曰奴袴和名佐師奴枳乃波加萬▲餝抄曰奴袴
色淺深隨レ年隨レ官可ニ斟酌一也禁色之人織物不レ然之
人志々羅平絹壯年之人夏著ニ大文薄物或烏多須岐
等一生織物白文奴袴高貴之人著レ之白ニ十月維摩會
比一至ニ四月御禊前一用ニ練指貫一自ニ四月御禊日一至ニ
十月十日比一生指貫云々
いと　●最の字
ゆへづきたる　●故ありげなるさま也なみ／＼な
らぬ心文
さゝやかなる　●ほそやかにちいさき也壽　頭書
云▲源氏箒木にさゝやかにてふしたり▲河海に細
々許少々野
ぐして　●召くして也文
露にそぼちつゝ　●添下と書ぬるゝ義也句　頭書
云▲堀川百首に「小山田の稻葉の露にそぼちつゝ
人目もる身はわびしかりけり文▲古今に「心から
花の雫にそぼちつゝうぐひすとのみ鳥の鳴らん壽
笛をえならず　●えもいはれすおもしろき義なり
ほめたる詞壽　頭書云▲業平の他の國より夜でと
に來つゝ笛を吹て二條の后にきかせたるをも影を
もひ合せ侍る盤
吹すさび　●手ずさみ口ずさみの意也吹なぐさむ
心也諸●愛する義なり壽
聞知べき人云々　●能人笛の上手めきたれど野外
なれば聞しる人もあらしとの心也文
しらまほしくて　●兼好の床敷思ひてしたひ行し
也文　頭書云▲此段と上の段とをよみて見れば東
坡が李節推を尋て風水洞にあそびし景氣あるやう
に覺へ侍る男色の事は歴代の史にをほく見えたり
野
惣門　●惣門は寺なるべし文

〔第一節〕●あやしの竹と云より内に入ぬまで也此段三節に分つ文段同レ是●山案此節は上の段の意をうけて艶にやさしきことを述たりさて爰までを一段となして次の節を別段となす本ありされども同し段になして見ねば義理すみがたし共に諸抄大かた一段になせり

榻に立たる車の見ゆるも都よりは目とまる心地して下人にとへばしか〳〵の宮の御座比にて御佛事などさふらふにやといふ御堂の方に法師共參りたり夜さむの風にさそはれくる空燒物の匂ひも身にしむ心地す寢殿より廊に通ふ女房の追風よういなどし人目なき山里ともいはず心づかひしたり

榻　●牛をはつして置時にながへを持せてをく鞍掛のやう成物也盤　頭書云▲和名集曰榻之知床也壽▲字彙曰榻牀狹而長者句

都よりは云々　●都にては不斷見るによりてさほどには思ぬ也片田舍にては珍しき故目とまる也古

しか〳〵の　●下人の詞也參●しか〳〵とはそんでう其宮といふ意也文●其時は御名をいふたるへけれど文章の體にて書也御名をいふて用もなき故

次なり盤

宮　●宮とは親王皇后宮など也文

さふらふにや　●たしかに覺えぬさまに答るなり參

空燒物　●衣裳にとむるにあらず只何となく香を燒を云句

寢殿　●前にくはし常の居間など也宮の御座す殿なるべし

廊に　●廊下也諸　頭書云▲字彙交員曰廊殿下外屋也句▲ながく立たるを云ふなりわたり殿とよむ堂の内陣の左右にろうと云所もあり全

追風　●人の行過る跡の風也衣の薰物などのかほれるなるべし文　頭書云▲源氏東屋にうちはらひ給へる追風いとかたはなるまで東の里人もおどろきぬべし壽▲若紫に空燒物心にくゝかほり出妙香のかなど匂ひみちたるに君の御追風いとことなればは內の人々も心づかひすべかめりとあり句

よういなど　●用意と書也衣のすそなど風に吹ちらさぬ樣に諸　頭書云▲紅葉賀に大とのゝ頭中將かたちようい人にことなるをとあり句

心づかひしたり　●女房のたしなみ常のさまをいふ也全

〔第二節〕●楊に立たると云より心づかひしたりと云までなり●此節は惣門の內の體を云なり文●山案此節は人たる者は常住をたしなむべきことを云ふ小人たる者は人の見る前ばかりをたしなみて我獨居る時はたしなまぬぞ大學にいへる小人閑居して不善をなすといへる所思ひ合すべ

心のまゝにしげれる秋の野等はおきあまる露にうつもれて虫の音かことかましく遣水の音のどやか也都の空よりは雲の往來もはやき心地して月のはれくもる事定めがたし

心のまゝに　●山案心のまゝならず作りなして見る目もくるしきとはちがひてわさとならぬ草木も心のまゝにしげれるはまことに兼好の好む所なればなり

かこと　●これはうらむる心にや虫の夜寒の風をいたみて鳴やうなとなり盤　頭書云▲加言と書り▲源氏幻卷に「つれ〳〵と我なき暮す夏の日をかごとがましき虫の聲哉又誓ふ心又かこつ心又かこつけの義所によりてかはるべし鐵增

雲の云々はやき　●雲の往來は山の間みればかくのごとし廣き空は遲き樣也盤

〔第三節〕●心のまゝと云より終まで也●此節は其邊の景氣を書り文●山里の景氣見るやうにうつしたり全

〔一段之統論〕●此段は女の心づかひをほめたり前段は男の事なり打とけたれと心にくゝとひ人目なき山里ともいはずと云にてしるべし人たるものゝ人目なき所にては心のまゝなるに愼みたる體をいへりつれ〳〵の人の身もち節にあたることを因緣の說にことよせていへりこれを二段に見るはあしき也一段とつゝけて見るべし盤

〔四十五〕公世（二位侍従公世卿也）の二位のせうと（兄のこと也諸）に良覺僧正と聞えしはきはめて腹あしき人なりけり坊の傍に大なる榎の木の有ければ人榎木の僧正とぞいひける此名しかるべからずとて彼木をきられにけり其根のありければきりくひの僧正といひけりいよ〳〵腹立てきりくゐを堀すてたりければ其跡大なる堀にて有ければ堀池僧正といひける

公世幷良覺　頭書云

▲系圖公實までは前十段目にくはし

鎌足—不比等—房前—眞楯—内麿—冬嗣—良房—

—基經—忠平—師輔—公季—實成—公成—實季—

—公實—實行太政大臣從一位—公敎正二位內大臣—實國正二位權大納言—公淸—

—從二位參議　實俊從三位—公世侍從從二位爲二洞院實雄子一正安三年四月六日薨爭一流之祖

—良覺山門大僧正東南院法印實快雅僧正灌頂

僧正　頭書云▲僧の極官也僧正は推古天皇三十七年甲申四月沙門斧を以て祖父を打殺す者あり依レ之朝廷始て僧正を於て僧官を檢校せしむ大僧正は聖武天皇御宇天平七年乙酉始る委くは書禮抄と云もの埃嚢抄等にあり▲釋氏要覽曰史云正者政也自正正レ人克敷二政令一故蓋以比丘無レ法若三馬無二轡勒一漸染二俗風一將乖二雅則一故擇二有レ德望者一以レ法而繩レ之令レ歸二乎正一故曰二僧正一磐

きはめて　●きはめてとあれば餘にかはりて腹立せまじき事にも至極のはら立る人なるべし參

〔一段之統論〕●此段は怒るまじきことにいかれる僧正の事を云てなべての人の怒を制せん爲なるべし誠に發しやすくしてやめ難きは怒なり不レ遷レ怒といふは顏子の學を好む至れるに非や人の異名を付たればとてかくいかるべきにあらず句●此段言意は榎木僧正といへばとて惡しきことにはあらざるに耳邊の風とはなさで何とてかほとにはいかりけるぞや殊に榎木とのみいはれし時は惡名にはあらざるを切くゐ堀池の名を三重に得たる時始めて腹あしきしるし分明に聞えしことは毛を吹て瑕をもとめたるなり參●此段腹のあしき事をいましめたる段なり「愚なる瞋恚のほむら吹たてゝ我とむかふる火の車かな貞●此段人の聞にはよるべからず己正しくは外はすつべきよしなり磐●此段夫れ人は其德によるぞ何ぞ其名によらん名か惡きとて榎木を切らんよりは何ぞ心をたしなみて善をば求めざるぞたとへば孔子と聞は名に善の心もなけれど人が聖人としる秦始皇と聞ば人又惡王と思ふぞ是名にはよらぬぞ其人の平生の行を知ておるがゆへにかくうかむぞ物の名は皆假に付たるものなればば何ぞ名によらんや又其德によつて付る名もあるほどに名があしきと思はゞ却て德を脩めて善に歸

せば人善僧正とも云べきを彌腹立しは彌愚なるこ
とぞとなり其上かく異名を付ることは古今ためし
多し野槌參考等の諸抄にくわし今其一二をあらは
さん郭槖駝は背かゞまりて槖駝といへる馬に似れ
ば人是を駝と名付く駝我名によく相應したりとて
自ら本名をかへて駝と云ふ淵明は宅邊に五柳樹あ
るによりて自から五柳先生と號す唐の方干は唇か
けて兎の口に似たれば缺唇先生と云ふ醫師に逢て
つくろひければ補唇先生とぞ申しける或時人に逢
てあやまりて三拜しければ又方三拜とぞ申ける後
に鑑湖に隱れ居て山野をありきければ方處士と號
す身まかりて後門人玄英先生とぞ諡しける又佛弟
子に憍梵波提と云しはつねに牛の如くにれ打かみ
し人なれば譏名を牛呞と號す迦留陁夷は其容貌ひ
なびて色黑かりしかば譯して黑光と云しと經文に
までのせられたりしかるに何ぞ此僧正一人にかぎ
るように腹立せしぞ註●山案此段も前々の段の意
をうけて人たる者の平生の愼を敎へたり
〔四十六〕柳原の邊に强盜法印と號する僧ありけりた
びたび强盜に逢たるゆへに此名をつけにけるとそ

强盜　頭書云▲庭訓往來にも强竊二盜とありおし
ふせてぬすむを强盜と云ひそかに忍び入てぬすむ
を竊盜とす▲續高僧傳二十一天台大師傳曰夢逢二
强盜一參
此名を　●此類ひの事　頭書云▲南都に强盜法師
と號する僧あり惡人の中へ交て盜賊をなす夜中人
の家に忍入にも人より先に入又人より後に出財物
を分つ時も人にくれて己はとらず用の在ん時はう
くべしと云久しで賊徒を勸め惡を改め善に趣しめ
んと思心あり是によりて强盜法師と云名を得たり
委見二沙石集一野
〔一段之統論〕●前の章と此章人我相をいましめた
る段なり前の良覺のことは佗より我に惡名をつけ
る時無念無相にして其そしりを何とも思ぬ樣にこ
そ心をばおさむべき物をといふ義をおしへたるな
り又此强盜法印の事を載たるは人にむさと惡名を
いひかけんとすることなかれ實否をきはめて物を
云ふべき也ふと此法印の名をきけば强盜せしやう
にきこゆればなり參●此段人の名物の名道理を開
てきはむべきとなり今も柳原室町の腰ぬけ風呂と

てありうち聞たるは風呂のたゝぬといふ名のやうなれどもたつていられぬと云義なり取なしによつて聞あしき名をつけべからずと云段なり壽●此段にて兼好の仁心しられ侍る貞●夫名に五の品あること春秋傳に見へたり後世の稱呼すくなからず蹠か盗賊たるにより盗蹠と號するはまことに惡名なれども人によりてかはるべし衛の君の名を惡と云ひ其臣に石惡と云者あれど必も惡人には定め難し僑如は夷の名なれども叔孫得臣夷を討て其子を叔孫僑如と名付鵄夷は馬の皮にてつくれる袋なり呉王是に子胥をもり殺す范蠡それをいましめて自ら鵄夷子皮と名をかへたりこれによりて見れば名をきゝても其實を委く尋ずば人をあやまることあるべしされと又義平が伯父義廣を討によりて惡源太とよばれ景清が伯父大口といへる沙門を殺す故に惡七兵衛と號せらるゝ類あれば其行跡により名もしたがへり幽厲の謚を子孫としてあらたむることあたはさるがごとし野●山案一説に此段は此法印を以の外に恥しめたる意あり夫出家は一衣一鉢の者なるに此法印が欲深く財寶多く畜へ置し故に數度強盗に逢しぞかし俗としてさへ欲ふかきはあしきに況や出家の身としてをや古語にも寶多害レ己といへり此説も一轉して面白し但し何れの説に隨ふとも此段も前段の心をうけて可レ見此法印の平生の行をも不レ知して只名をばかり聞て謾に惡事を云ひかけまじきなり又此法印が常の心入があしき故に加樣に度々強盗にも逢けるとなん共に此法印が平生の行事がよからぬ故にかくよからぬ異名をつけらるゝなり兎角常をたしなむべきことをいへり

〔四十七〕或人清水へまいりけるに老たる尼の行つれたりけるが道すがらくさめ〳〵といひもて行ければ尼御前何事をかくはの給ふぞと問けれ共いらへもせず猶いひやまざりけるを度々とはれて打腹立てやゝはなひたる時かくまじなはねば死ぬるなりと申せばやしなひ君の比叡山におはしますが只今もやはなひ給んと思へばかく申ぞかしといひけり有難き志なりけんかし

清水　●洛陽東音羽山清水寺也　頭書云▲彼寺の縁起には寶龜四年に沙門延鎮夢に感じて此瀧の下

に來て行睿と云ふ翁の敎に依て此地を求めり彼翁は則觀音の應現なりさて延暦年中に田村丸に相かたらひて寺を建丈六の千手の像を安置すと云々▲河海云寶龜十一年初建立延暦二十四年官府界ニ四至ヲ以ニ田村丸私宅ヲ寄附云々諸▲元亨釋書には寶龜九年四月を夢の年とし延暦十七年を建立の年とす三說不ㇾ同釋書にくわし說

尼　●尼の字は梵語なればあまといふよみの有へき樣なし佛家の心は具足戒を能持つ人を比丘尼といひたもたさる女をば尼とのみ云て常の女の事なりしかるを本朝には尼といへば髮をおろしたる者の樣に心得るはあやまり來れるなり又飜譯名義集をみれば梵語の阿摩は母の義なれば頭そりて佛道に入し後は母とはいはて梵語の阿摩をもちて尼の字によませてよみ付たる事も有べししからばたとひ戒品なくとも髮をだにをろしゝ女をばあまといひてもくるしからぬにや參　頭書云▲三藏法數十六云梵語尼華言ㇾ女參

つれ　●連の字諺

もて行ければ　●もつてゆくの中略也說

尼御前　●是より行つれの人の詞也參

いらへも　●いらへは報の字諸の字などを書返答の義也句　頭書云▲伊勢物語になといらへもせてと在古

うち腹立て　●或人かくくさめの故を問てまぎらはしき故に尼が腹立也文

やゝ　●漸の字諺●やゝと句を切べしやう〳〵として此故を答たる也文　頭書云▲やゝとは人に云かけたる詞なりやよなどゝ云類歟やよ時雨などゝいへる心にて呼かくる詞也壽

はなひたる時　●嚔の字●是より尼が答也文　頭書云▲山案神中抄に曰「出てゆかん人をとゞめんよしなきにとなりのかたにはなもひかぬ哉▲顯昭曰はなひ事いかにもよからぬこと也年始にも鼻ひりつれば祝事をいひて祝ふ也されば人の所へ行んずる初にとなりの人嚔らんを聞てもくせ〳〵しからん人は立とまるべきなり▲容齋隨筆第四に云今の、ㇾ止者必嚔ㇾ唾祝云有ㇾ人說ㇾ我婦人尤甚云々▲オ芥曰嚔時頌休息萬命急々如律令▲大全曰問嚔れば何なる故に厄害とはなるぞや答曰息災と

てありうち聞たるは風呂のたゝぬといふ名のやうなれどもたつていられぬと云義なり取なしによつて聞あしき名をつけべからずと云段なり壽●此段にて兼好の仁心しられ侍る貞●夫名に五の品あること春秋傳に見へたり後世の稱呼すくなからず跖か盜賊たるにより盜跖と號するはまことに惡名なれども人によりてかはるべし衞の君の名を惡と云ひ其臣に石惡と云者あれど必も惡人には定め難し僑如は夷の名なれども叔孫得臣夷を討て其子を叔孫僑如と名付鴟夷は馬の皮にてつくれる袋なり吳王是に子胥をもり殺す范蠡それをいましめて自ら鴟夷子皮と名をかへたりこれによりて見れば名をきゝても其實を委く尋ずば人をあやまることあるべしされと又義平が伯父義賢を討によりて惡源太とよばれ景淸が伯父大日といへる沙門を殺す故に惡七兵衞と號せらるゝ類あれば其行跡により名もしたがへり幽厲の謚を子孫としてあらたむることあたはさるがごとし野●山案一說に此段は此法印を以の外に恥しめたる意あり夫出家は一衣一鉢の者なるに此法印が欲深く財寶多く畜へ置し故に數度强盜に逢しぞかし俗としてさへ欲ふかきはあしきに況や出家の身としてをや古語にも寶多害レ己といへり此說も一轉して面白し但し何れの說に隨ふとも此段も前段の心をうけて可レ見此法印の平生の行をも不レ知して只名をばかり聞て謾に惡事を云ひかけまじきなり又此法印が常の心入があしき故に加樣に度々强盜にも逢けるとなん共に此法印が平生の行事がよからぬ故にかくよからぬ異名をつけらるゝなり兎角常をたしなむべきことをいへり

［四十七］或人淸水へまいりけるに老たる尼の行つれたりけるが道すがらくさめ〳〵といひもて行ければ尼御前何事をかくはの給ふぞと問けれ共いらへもせず猶いひやまざりけるを度々とはれて打腹立てやゝはなひたる時かくまじなはねば死ぬるなりと申せばやしなひ君の比叡山におはしますが只今もやはなひ給んと思へばかく申ぞかしといひけり有難き志なりけんかし

淸水　●洛陽東音羽山淸水寺也　頭書云▲彼寺の緣起には寶龜四年に沙門延鎮夢に感じて此瀧の下

に來て行睿と云ふ翁の敎に依て此地を求めり彼翁は則觀音の應現なりさて延暦年中に田村丸に相かたらひて寺を建丈六の千手の像を安置すと云々▲河海云寳龜十一年初建立延暦二十四年官府界ニ四至ニ以ニ田村丸私宅ニ寄附云々諸 ▲元亨釋書には寳龜九年四月を夢の年とし延暦十七年を建立の年とす三說不ㇾ同釋書にくわし說

尼　●尼の字は梵語なればあまといふよみの有へき樣なし佛家の心は具足戒を能持つ人を比丘尼といひたもたさる女をば尼とのみ云て常の女の事なりしかるを本朝には尼といへば髮をおろしたる者の樣に心得るはあやまり來れるなり又飜譯名義集をみれば梵語の阿摩は母の義なれば頭そりて佛道に入し後は母とはいはて梵語の阿摩をもちて尼の字によませてよみ付たる事も有べししからばたとひ戒品なくとも髮をだにをろしゝ女をばあまといひてもくるしからぬにや參　頭書云▲三藏法數十六云梵語尼華言ㇾ女參

つれ　●連の字諺

もて行ければ　●もつてゆくの中略也說

尼御前　●是より行つれの人の詞也參

いらへも　●いらへは報の字譜の字などを書返答の義也句　頭書云▲伊勢物語になといらへもせてと在古

うち腹立て　●或人かくくさめの故を問てまぎらはしき故に尼が腹立也文

やゝ　●漸の字諺●やゝと句を切べしやう〳〵として此故を答たる也文　頭書云▲やゝとは人に云かけたる詞なりやよなどゝ云類歟やよ時雨などゝいへる心にて呼かくる詞也壽

はなひたる時　●嚔の字●是より尼が答也文　頭書云▲山案袖中抄に曰「出てゆかん人をとゞめんよしなきにとなりのかたにはなもひかぬ哉▲顯昭曰はなひ事いかにもよからぬこと也年始にも鼻ひりつれば祝事をいひて祝ふ也されば人の所へ行んずる初にとなりの人嚔らんを聞てもくせ〳〵しからん人は立とまるべきなり▲容齋隨筆第四に云今の　ㇾ止者必噴ㇾ唾祝云有ㇾ人說ㇾ我婦人尤甚云々ィ于芥曰嚔時頭休息萬命急々如律令▲大全曰問嚔れば何なる故に厄害とはなるぞや答曰息災と

てわざはひは息にあらはるゝ此也息の鼻にとゞこる時くさめあることなり既にわざはひのきざしあらはるゝといひつたへてまじなふことなり▲參考曰毛詩邶風終風篇曰寤言不ㇾ寐願言則嚏朱子集註曰嚏鼽嚏也人氣感傷閉鬱又爲ニ風霧ㇾ所ㇾ襲則有ニ是疾ㇾ也▲輔氏箋曰寤則鼻而不ㇾ能ㇾ寐思ㇾ之則感傷氣閉而成ㇾ病也今俗人嚏曰人道ㇾ我此古之遺語也

かくまじなはねば　◉禁の字日本紀厭富の字を訓したり◉是は乳母がたのならはしに其兒の嚏る時かたはらの人はなを合すとて又くさめと云也もしはなをあはせざれば其嚏たる兒に害ありといひならはせり其故に今も守刀などに鼻の糸とて青き糸をつけて兒の嚏る時彼はなを合す代に其糸をむすぶなり此まじなひの心にて此所を見侍るべきなり彼尼が詞に嚏時かくまじなはねば死ぬるなりと申せばといへる則是也其はなをあはせんとてくさめくさめといひしなり文

やしなひ君　◉主君なり參　頭書云▲山案乳母のやしなふ君ゆへにかく云也▲神代卷曰彥火々出見尊取ニ他婦人ㇾ爲ニ乳母湯母及飯嚼湯座人ㇾ凡諸部備行以奉ㇾ養焉于ㇾ時權用ニ他婦ㇾ以ㇾ乳養ニ皇子ㇾ焉此世取ニ乳母ㇾ養ㇾ兒之緣也▲同纂疏曰取ニ他婦人ㇾ者內則曰擇ニ於諸母與ㇾ可者必求ニ其寬裕慈惠溫良恭敬愼而寡ㇾ言者ㇾ使ㇾ爲ニ子師ㇾ其次爲ニ慈母ㇾ其次爲ニ保母ㇾ皆居ニ子室ㇾ今取ニ乳母等ㇾ亦可ㇾ擇下有ニ婦德ㇾ者上乳母謂下以ㇾ乳哺ㇾ兒者上云々養ㇾ子之道母自乳者是禮也然後世或亦有ㇾ用ニ他婦ㇾ故舉ニ其始ㇾ也

比叡山　◉近江の國なり　頭書云▲日枝山又日吉山とも書なり天竺王都のうしとらに靈鷲山有故に日本いひゑの山もそれにかたどりて王城鎭護の靈地法華有緣の山なれば鷲のを山とも云ふ也參

有難き志　◉寔好判也彼尼が仕業は愚痴なるに似たれど實は有難き志なるべし文

[一段之統論]　◉此段は世の君臣の間尤僞り多く面にてはたがへとも退ては君を謗り且うらむこともあり殊に女は情ひがみて表裏多き者なるにかく片時も兒の事を忘ぬは愚ながらも殊勝の事なれば是をしるして忠を竭すべき事をおしへたるなり諺　◉此段此尼が仕業は至て愚痴なる事ながら信の志の所は如ㇾ斯ありたきとの敎なり說　◉惠空評曰此尼

素爲ニ兒侍母ノ故有ニ養育之愛ノ强不レ可ニ君臣愛敬之證ノ參 山案此段も前々の段のごとく平生の意入の第一をあらはせり此尼は愚なる心からも常々不レ怠如様に思ふことは有難き志なりと也

〔四十八〕光親卿院の最勝講奉行してさふらひけるを御前（●前くはし）へめされて供御を出されてくはせられけり物くひちらしたるついがさねを御簾の中へさし入て罷出にける女房あなきたな誰にとれとてかなッど申あはれければ有識のふるまひやん事なきことなりと返々感ぜさせ給ひけるとぞ

光親　頭書云 ▲按察使權中納言正二位號ニ堀川中納言ノ也葉室大納言光賴之孫權中納言光雅之男承久三年六月出家法名西親同七年十二月於ニ駿河ノ被誅文

系圖冬嗣まではニ段目にくわし

鎌足―不比等―房前―眞楯―内麿―冬嗣―良門―
内舍人 高藤 内大臣―定方 從二位左大臣―朝賴 從四位上左大辨―爲輔 正三位中納言―宣孝―
正五位下左衛門佐 隆光―隆方 左京大夫正四位右衛門佐―爲房 正三位參議―顯隆 正三位中納言按察―
顯賴 正三位中納言民部卿―光賴 權大納言―光雅 正二位權中納言―光親 正二位權中納言按察使

▲東鑑二十五承久三年七月十二日按察使卿光親去日出家法名西親者爲ニ武田五郎信光之預ニ下向而鎌倉使相ニ逢于駿河國車返邊ニ依レ觸ニ可レ誅之由ニ於ニ賀古坂ニ梟首訖時年四十六云々野

院　●後鳥羽院の御事にや諸

前へ　●院の御前へめされてなり句

御供　●食物なり諺

ついがさね　●衝重とも築重とも書り破籠の様なる折敷也壽

女房　●院の御前の女房なり諺

あなきたな　●染塵愚案抄にあなは嗟嘆する詞なりと註せり句 ●壒嚢抄に腹黑と書て心きたなきとよめり日本紀には黑心とかけり古

申あはれ　●女房達のかく申あはれたると也句

ふるまひ　●擧止と書てたちふるまひの心參

やん事なき　●こゝにてはほめたる詞也壽

〔一段之統論〕●此段の心は最勝講の奉行たるにより威儀をつくろふいとまなく物くひちらしたるついがさねを其まゝさしおくことの急しき時はかくあるべし器物をふところにして出べきにもあらず

又奥へ入て女房にさづくべき所にもあらず其日は講日なれば奉行のつとめを專にする故なりそれを有識のふるまひなりとをほせけること實もと思ひ侍るたとへは君の前にても甲冑の士は蹲拜せざるがごとし野 ● 上段には老尼の主君の爲に丹誠を盡しことを書たるにうけて又此段には光親の王事純一なる擧止を載られたり品こそかはれ其誠は同じ心にて侍る句 ●

[四十九]老來りて始て道を行せんと待事なかれ古き塚おほくはこれ少年の人也

老來りて ●人の命は今日明日をしらぬ物なる程に若きうちは世間のいとなみをなし年老て道を行んといふ事なく若き内よりつとめよと也諸　頭書云▲朱文公勸學文勿レ謂今日不レ學而有ニ來日一勿レ謂今年不レ學而有ニ來年一日月逝矣歳不ニ我延一嗚呼老矣是誰之愆野 ▲家隆の歌「明日迄と思ふ心のをこたりに今日をば化にくらすはかなさ諸

古塚おほくは　頭書云▲李卓吾淨土決曰古人句曰莫下待ニ老來一方學上レ道古墳盡是少年人今按則是寒山詩也盡字作ニ多字一句

少年の人也　●しかれば必老て死するにはあらず諺

[第一節]●老來てと云より人なりまでなり此段四節に分ち見るべし文段是に同じ●此一節は古語を受て一段の大意を擧げたり加樣に少年の人早くうせて多く墳となれるを見れば無常を待に油斷すべからずとの心なり奥に無常の來ることは水火のせむるよりもすみやかにといひ死は前よりしも來らず兼てうしろにせまりなどいへる段皆同し心なり文

はからざるに病をうけて忽に此世をさらんとする時にこそ初て過ぬるかたのあやまれる事はしらるなれあやまりといふは他の事にあらず速にすべきことをゆるくしゆるくすべき事をいそぎて過にしことのくやしき也其時悔共かひあらんや

はからざる　●不圖と書參●内々思ひかけぬところにとなり諺

病をうけ　●少年の墳なる仔細をいふ也盤

過ぬる方のあやまれる　●業平の昨日今日とは思はさりしをとよみ給へる樣に常にいつぞの程の樣

に思ひなしてもはやかなはぬ時におどろく愚痴なるものゝすゝめなり全　頭書云▲莊子遽伯玉行年六十而知二五十九年之非一▲淵明歸去來辭覺二今是而昨非一野●傳心法要曰枉用二三十年功夫一今日方省二前非一參

あやまりと　頭書云▲あやまりといひ出してそれをことはりたる問答の筆法なりこの詞は懈怠の二字をいひたるなり明日すべきを今日するは懈なり今日すべきを明日するが怠なりみな今日の道にそむくなり▲安樂行品除二懶墮意及懈怠相一盤　▲末の段にいへるごとく法師にならん者が馬に乘習の類ひ也たとひ馬に乘得ても寺持べき器量なければ招待して馬に乘るべき時もなくいたづらごとになりゆくなり是すみやかにすべき事を疎略にして我つとむべき所をゆるくする故なりさて其益なき時にいたりて後悔するとも甲斐あるまじければ尤一時もすみやかにつとむべきことをつとむべきなり說

速にすべき　●無常をまつわざの發心修行を云也文

ゆるく　●緩の字也參

ゆるすべき事　●無益の此世のいとなみをいふべし文

其時　●其時とは上の此世をさらんとする時といへる時の字をさす也句

〔第二節〕●はからざると云よりかひあらんやまで也●此第二節は上の節の心をことはりて無常を待に油斷ある人は彼期に望て後悔あらんことを云り文●山案此節は尤心を付て熟讀すべし釋心のみにかぎらず儒者武士工商の家にてもそれ〴〵の我道をば速には勤めすして外事に心をかけて益なき身と日を暮すものゝ爲のいましめに書り●此所以二老病死三苦一喩レ之不レ言レ生者人先已受レ之可レ追二來者一故只言二三苦一也其實則通二於四苦一而已參

人はたゞ無常の身にせまりぬる事を心にひしとかけてつかのまも忘るまじきなりさらばなどか此世の濁りもうすく佛道をつとむる心もまめやかならざらん

せまり　●迫と書なり古●無常の身にきはまりて身ゆるぎもせられぬ心なり文

ひし　●必至と書也古

つかのまも　●東間と書なり句　●一時の間也暫時と同し諸　頭書云▲新古今に「夏野ゆく小鹿の角の束の間も忘れずぞ思ふこゝろを▲八雲抄に束の間はたとへば草かりてつかぬるほどゝいへり時の間なり小鹿の角の束の間は鹿の新しく角を生る時一束ばかりにみじかきを云ふ夏月に角を生る故に夏野ゆくとよめり野▲つかの間は時の間なりつとゝがときと五音相通なればなり或説

さらば　●左樣にあらば也文　●束の間も忘れずばなどか也諺

此世　●濁世の塵相をいふ参

まめやか　●眞實なる事也文

〔第三節〕●人はたゝと云よりまめやかならざらんまでなり●此三節は彼油斷は無常を忘るゝ故なり無常を忘れずば其少壯年の人も佛道修行に懈怠あるまじきそとの心なり文　●山案此節上の兩節を結て生死事大無常迅速の事を常に心に忘れず後生菩提を第一として佛道修行すべきことををしへたり一時をも油斷すべからずとのいましめ尤有難し有難し●白樂天詩云花姿毎レ春萎不レ萎前可レ營月顏毎レ秋傾不レ傾間蓋レ勵●古長歌行曰少壯不レ努老大徒傷悲此等の文のこゝろなり盤

むかし有けるひじりは人來りて自他の要事をいふ時答ていはく今火急の事ありて既に朝夕にせまれりとて耳をふたぎて念佛して終に往生をとげけりと禪林の十因書の名に侍り心戒と云ける聖はあまりに此世のかりそめなることを思ひてしづかについ爲ける事だになくつねはうずく躊躇まりてのみぞ有けり

むかし　●是より拾因也参

ひじり　●聖字前委

自他　●我人の必とすべき肝要の用也増鐵

答て　●拾因には陳じて云くと有参

火急　●火の燒來る程急なると云義也参　頭書云▲文選三十七曰列司臨レ門急二於星火一▲任華詩火急將レ書憑二驛使一参▲東坡が詩にも出たり東坡將レ至レ筠先寄二遲适遠三猶子一詩云惟當下火急作二新詩一一二醉兩翁一勝中酒美上句

朝夕に　●拾因には旦暮に迫れりと有参

せまりて　●死期の到來也句

耳をふたぎて　●耳あれば自他の要入るによつて

諺

禪林の十因 ●東山永觀堂を禪林寺と號す其永觀律師の作れる所の往生十因一卷有諸 頭書云▲弘決の中に其名をよぶよりも所をよぶかうやまふ義なりと侍る故にや永觀律師をさして禪林と云なり則ち律師の作り給へる往生拾因とて一卷あり往生淨土の修行にとをの因緣を立て教られし書なれば十因と云也彼書には十の字を拾に作れり参 ▲十因とは一廣大善根故二衆罪消滅故三宿緣深厚故四光明攝取故五聖衆護持故六極樂化生故七三業相應故八三昧發得故九法身同體故十隨順本願故野 ▲按ずるに往生十因に云傳聞有レ聖念佛爲レ業專惜ニ寸陰一若人來謂ニ自佗要事一聖人陳云今有ニ火急事一旣逼ニ於日暮一塞レ耳念佛終得ニ往生一文

心戒 ●心戒傳記 頭書云▲發心集に云ちかく心戒房とて居所をも定めず風雲に跡をまかせたるひじり有けり俗姓は花園殿の御末とかや八島の大臣の子にして宗親とてあはの守になされし人なりけり盤 ▲或曰心海歟心海上人の歌は新後撰に見へたり野

うづくまり ▲頭書云言一芳談云心戒上人つねに蹲居し給ふある人其故をとひければ三界六道には心やすくしりさしすへて居るべき所なき故なりと云々盤

[第四節] ●むかしありける聖と云より終までなり ●第四節は無常を待わざに油斷せずして終に往生の素懷をとげにける古人の事をしるして加樣にあらまほしきと世人に警めて一段を決す文

[一段之統論] ●此段上に光親卿のすみやかにすべきことをはかりてついかさねをくひちらして出られたることをいひたればこゝには佛法につき菩提の道を急ぐべき事をいふなり世俗の事さへいそぎてよきにつきて其外のそこぬるはかまはぬことなるにいはんや道に心ざすには外をすてゝ一筋にいそげとなり盤 ●此段は上より此かた世間の事を大かたいひわたして此章にいたりてしきりに無常の切なることを告て兎に角油斷なく後世の道をいそぐべしと鞭策をくはへられたるなり参 ●此段は上四十三段春のくれつ方と云段よりの結段と見るべし皆平生の心掛をいへり佛道にかぎらず萬事も必

ず以て油斷すべからずとの敎なり其期に望て驚きて平生の懈怠を後悔するか世人の僻なりよく〳〵つゝしむべし〳〵說

徒然草諸抄大成卷之六

目　次

〔五十〕應長の比伊勢國より女の鬼になりたるをゐてのぼりたりといふ事有て其比廿日ばかり日ごとに京白川の人鬼見にとて出まどふ昨日は西園寺に參りたりし今日は院へ參るべし只今はそこ〳〵になどいひあへりまさしく見たりと云人もなし上下たゞ鬼の事のみいひやまず其比東山より安居院邊へまかり侍しに四條よりかみざまの人皆北をさしてはしる一條室町に鬼ありとのゝしりあへり今出河の邊より見やれば院の御棧敷のあたり更にとをりうべうもあらず立こみたりはやく跡なき事にはあらざめりとて人をやりて見するに大かたあへる者なし暮る迄かく立さはぎてはては鬪諍をこりて淺間しき事共有けり其比をしなべて二日三日人のわづろふ事侍りしをぞ彼鬼の虚言は此しるしをしめすなりけりといふ人も侍りし

應長の比　●花園院年號九十四代の帝なり說

ゐてのぼり　●將の字以の字を書引れて也諸　頭書云▲伊勢物語にゐていきけりとあり野

西園寺　●此比は西園寺殿北條家にしたしみ有て威勢をはしける故諸家の中にまつ書出したるべし文●山案當時威勢の有しは太政大臣實兼公左大臣公衡公也　頭書云▲其比は西園寺殿より后まいり給ふことつづきたる故にさかへ給へりさるによりてかく書なり盤

安居院邊　●兼好吉田にすまれし比參

一條室町　●或本に一定と書りしかるべからず說

院の御棧敷　●昔は一條大路に加茂の祭を御見物の用意の御棧敷ありしと也壽

とをりうべう　●通り得べき樣もなしと也參

たちこみたり　●人立籠也諺

はやく　●八雲抄に本よりなどいへる心也野

跡なき事には云々　●是兼好の思へる心なりかく諸人立こみさわぐは跡なき虚說にはあらさるべしとなり始より心をうごかさゞる所しられたり文

人をやりて　●みづから見にゆくは隱逸の本意ならねば也參●兼好のみづから見ざる心ばへ神妙なるべし文

鬪諍　●たゝかひあらそふとよみて喧嘩の類也句

彼鬼の云々しめす也　●それよき事もあしき事も前瑞あり此時の鬼の說貴賤いひはやらかしけるは

二三日わづらひあらん相をしめすなるべし二三日のわづらひは鬼のわざなり是疫鬼瘧氣のたぐひなりたとへば風が吹むとては山なり雷せんとてはいなびかりするが如しされど怪は人によつてなるといへば此時も此鬼の沙汰におどろきてともにいひあへる族は此わづらひをうけしなり心を動ぜざる大丈夫は煩ひもおのづからせぬなり兼好の動ぜざる心ばへあらはれてもつとも殊勝にはんべる也說

［一段之統論］●此段世間に每々かくのごときの僞りをいひ出すを必ず信し欺かれざるやうにと敎へ又末の段に二日三日病る事を書るは凡そ人の氣は本天地の氣なり故に常ならぬ言語あるを妖言といひ常にかはる歌曲あるを淫言と云ひあやしき衣服を着する人あるをば服妖といひ草木鳥獸まで天地の變氣より妖孽とあらはる是皆理の自然なりしかれば實はなしといへどもかく云ふらすはすなはち有なり上一人の政たゝしからぬ時はかならず妖言妖孽のあることを記するならし諺●聖代には麒麟鳳凰の出などいへば加樣の奇怪なる雜說のありしは其比凶年と見へたり貞●凡謠言妖言の世にをこなはるゝ事古今なきにあらず漢成帝の時に訛言ありて只今洪水いたらんとす長安城中大きにさはぎ帝をはじめ山にのぼらん船にのらんなどありしを王商すこしもあはてたることなくいつはりなるべしとかたく申ければはたして洪水なかりけり日本にても怪異の物語は人々することなれど我こそたしかに見たれといふ者はまれなり然れども君の德なく政あしければ天地の和をやぶる故に非常の事もいたるべし野●夫天地の間に何事か鬼神の態にあらずと云ことなし委は南秋公が鬼神論に出たりされば人の一身にていへば起を神にとり寢を鬼にとる晝夜にては晝を神とし夜を鬼とす生死にては生は神なり死は鬼なり天地にては天は神なり地は鬼なりすべて陽德にて發し伸るを神とす陰德にて屈し隱るゝを鬼とすされどこゝにいへる鬼は別に異形の者あつて人をなやまする物を古より鬼と云ふなりしかれどもたしかに見たると云ふ者はなきことなり大江山の酒天童子鈴鹿山の鬼神なとも人にあらぬ樣に云へどもさにはあらず右に云ふ如くに此者どもゝ人にかくれ居て山賊をなしける故に

鬼とは名付て云ふなり別に異形の者のあるにはあらず故に此時の女の鬼の物語も虚事にてありしぞされば理の明かなることは神なり理のくらきわけもなき事を云が則鬼なり此時萬人此取沙汰にくらまされてともに心をうごかし足をそらにまどふは是すなはち萬民の心が鬼なり其鬼なりし濁氣が感じてかやうに病をもうけしなりさるほどに少も心をうごかさず放心すまじきとの教のために此段をかかれしと見へたり加樣の虚言今の世は猶以て多きことなり尤意得あるべきことなり説

〔五十一〕龜山殿の御ッ池に大井川の水をまかせられんとて大井の土民に仰て水車をつくらせられけり多くのあしを給て數日にいとなみいだしてかけたりけるに大かためぐらざりければとかくなをしけれども終にまはらで徒にたてりけりさて宇治の里人をめしてこしらへさせられければやすらかにゆひてまいらせたりけるが思ふやうにめぐりて水をくみいるゝ事めでたかりけりよろづに其道をしれるものはやんごとなきものなり

龜山殿 ●人皇八十九代也 頭書云 ▲龜山院は八十九代也嵯峨の龜山の麓に山庄を建て御隱居ありし故に龜山殿と申也壽 ▲今の天龍寺は昔の帝居なりとかや諺 ▲山案龜山院諱恒仁後嵯峨八十七代帝皇子母大宮院藤原嬉子太政大臣實氏女也建長元年五月廿七日降誕同八月十四日爲二親王一同五年十月廿九日着レ袴于時五歲正嘉二年八月七日立二太子一于時十歲正元元年十一月廿六日受レ禪于時十一歲同十二月廿八日即位文應元年十月二十一日御禊十二歲同十一月二十六日大嘗會文永十一年正月廿六日讓レ位治二天下一十五年于時廿六歲正應二年九月六日御出家于時四十二歲法諱金剛源御戒師大僧正了遍嘉元三年九月十五日崩壽五十七號二禪林寺院一 ▲水鏡云嵯峨の龜山の麓大井川の北の岸にあたりてゆゝしき院をぞ作せたまへる小倉山の梢となせの瀧もさながら御垣のうちに見へてわざとつくろはぬ前栽もおのづから情をくはへたる所からいみじき繪師と云とも筆をよびがたしと云々槃 ▲續後拾遺集に「萬代と龜の尾山の松陰をうつしてすめる宿の池水太上天皇御製なり此池のことなるべし文

御池に ●御泉水なり古

大井川の水　頭書云▲日本事跡考云大井川自ニ丹波一流出参▲續古今に中務のよめる「大井川そこにも見ゆる龜山のかはらぬ影は幾世へぬらん句

まかせられん　●引の字を書水を引とる心也諸

頭書云▲日本紀神功皇后傳爰定ニ神田一而佃レ之時引ニ儺河水一欲レ潤ニ神田一句 西行歌に「ますげをふるあら田に水をまかすればうれしがほにもなく蛙哉家隆の歌に「庭の面にまかせし水も岩こえて外にせきやる五月雨の比壽

水車　頭書云▲尋到源頭曰水車器乃魏馬鈞初作レ之令ニ兒童轉レ之以灌レ園更出更入巧倍ニ于常一亦謂ニ之翻車一云々▲又陳去非水車詩江邊終日水車鳴我自平生愛ニ此聲一風月一時都屬レ客杖藜聊又寄ニ詩情一句▲東坡集十三無錫道中賦ニ水車一詩翻々聯々銜レ尾鴉舉々确々蛻レ骨蛇分レ畦翠浪走ニ雲陣一刺レ水綠鍼抽ニ稻牙一註曰江浙間人目ニ水車一爲ニ龍骨車一▲水車の用は田へ水をかけて日でりにそなふるためなれば其造式と其圖とをしるして王氏が農書に詳也野▲日本には五十三代淳和天皇天長己酉年諸國造ニ水車一と也盤▲この水車とあるは筒車の事也又は筒輪とも云也龍骨車をも水車翻車といへどそれとは作りやうも別也野槌の東坡詩も龍骨車のあがる形蛇の肉のされたるがうごくやうにみゆるを作れるなれば筒車のめぐるには似ざること也又尋到源頭有も兒童のめぐらして園にそゝぐとあれば是又龍骨車のことなるべし其仔細は筒車はひとりめぐる物なれば兒童のめぐらすべきに非す参▲日本にては水車と龍骨車とは二色也こゝにある水車と云は常の水車也又龍骨車と云は長き樋のやうなる物に四方なる板を多く纒（ナハ）につなぎ池水をもくりあぐる也水車は己れと流水の勢にて舞也鐵増

あし　●錢也料足と書てあしと讀又代とも書全

頭書云▲魯褒錢神論無レ足而走▲又白玉蟾集卷六雲遊歌曰初別ニ家山一辭ニ骨肉一腰下有ニ錢三百足一句

數日　●數とは大かた三以上七以下をさしていへは數日とは五六日もかゝりけるにや句

いとなみ　●營字をよむ句　頭書云▲孟子梁惠王篇朱傳營謀爲也とも見へたり句

大かた　●少はめぐりつらん故に大かつたと書諺

里人をめして　●宇治は水車の名所にて歌にもよ

めり文　頭書云△夫木集に「なかめやる宇治の河瀬の水車とことはにこそ君はかけゝれ文

やすらかに　●其所によく作り馴たる故にやすやすとかい結付てまいらせしと也大井の土民の數日にいとなみ出したるにあたりて見るべし文

めぐりて　●前の大形めぐらぬといふに對す諺

よろづに　●是より兼好判じて諸

〔一段之統論〕●此段萬事皆其道を知れる人を可レ用ことをいへり諸●此段のたぐひ奥にもまゝ見へたり孔子にある人ものしりにてましませば何事もしろしめさんと思ひけるにや畠の作りやうをとひ奉りしに我老圃にしかずと仰せられしにて心得給ふべし貞●上の段に天子として其政あしければ僞言妖言非道の事も出來ることをいへるにうけて又此段には明君の人をつかふは其長ぜる處ばかりを用る故に下に棄物なく皆上の惠にうるほふ道理をいひてひろく諸人の上にも此心得あるべき敎誡に末の一句を書そへて次の段の張本とせり句●此段よろづにといふにて水車にかぎらずと云ことを知べし一つをいひて其理を萬事に推してしらする筆法也其道をしらねばまどふ也迷へはつれ〳〵ならずと知べし盤●山案此段は論語に曾子の死期に及て孟敬子に告げ給ふて籩豆之事則有司存とある心を以て見るべし籩豆は人間大禮の其一をたすくる器のことさへくはしきことはそれ〳〵の奉行に云付てとりをこなはするぞ況や其外の事をやしかるに我智に慢ずる君は微少の事まで我一人して行なはんとする故事勞しふしてならず又昏君は人を見知らざる故に其器量にかなはさることを云付てなさする故にとゝのはずされば家隆の歌に「をのづから得たるところの其才をつかひあてぬはあはれなりけり此末の一句よく〳〵可レ着レ眼

〔五十二〕仁和寺にある法師年よるまで石清水をおがまざりければ心うく覺えてある時思ひ立て只ひとりかちよりまふでけり極樂寺高良なンどを拜てかばかりと心得て歸りにけりさて傍への人にあひて年比思ひつることはたし侍りぬきゝしにも過てたうとくこそおはしけれそも參たる人ごとに山へのぼりしは何事か有けんゆかしかりしかど神へまいるこそほいなれと思ひて山迄は見ずとぞいひけるすこしの事にも

先達はあらまほしき事也
仁和寺　●今いふ御室の事くはしく　頭書云▲五
十九代宇多天皇昌泰二年十月十四日御落髪有て法
諱空理と申奉る延喜四年に仁和寺に室を營みをは
しけるを俗に是を御室と申とかや御門跡と云もこ
こにはじまる此法皇は亭子院とも寛平法皇とも申
したてまつるなり諸
ある法師　●兩説也或字古増鐵　在字諸　仁和寺に住在
せる法師といへる義也或の字は誤也といへと文法
は或字やすらか也説
石清水　●男山八幡宮也　頭書云▲山に清淨の水
ある故に石清水と云其水の涌出し由來は神社考に
見へたり▲神社便覧曰石清水式外山城國久世郡八
幡大神宮三座東玉依姫中八幡宮西神功皇后第五十
六清和帝貞觀元年八月廿三日遷ニ雄德山ニ云々案以ニ
此神宮一爲ニ天下第二宗廟一兮玉依姫置ニ東殿一等蓋
有ニ深旨一哉雖レ然非ニ不肖所ニ及也故今省略焉參▲
玉依姫とは神武天皇の御母也▲山案諸社記曰石清
水神靈次第之事本社依レ爲ニ八幡一第一應神天皇也
第二神功皇后也父神仁天坐須程爾仲哀天皇第二多流

過介禮共神功皇后討ニ三韓一時坐ニ胎中一母神與利即位之
賜故爾第二神功止須流也第三仲哀第四仁德天皇也
云々此注兼右之注秘中之深秘也云々▲公事根源曰
人皇十六代の御門應神の御事也仲哀天皇の第四の
皇子御母は神功皇后也胎中天皇とも又は譽田天皇
とも名付奉る天下をしろしめすこと四十一年百十
一歳の寶算をたもたせ給欽明天皇の御代に始て神
と顯て筑紫の肥後國菱形池と云所に跡を垂給ふ人
皇十六代譽田八幡丸也と託宣ありき譽田は本の御
名八幡は垂跡の號後は豐前國宇佐の宮にしづまり
給ひし云々清和の御時大安寺の僧行教宇佐にまう
でたりしに靈告ありて今の男山石清水にうつりす
ませ給ふしかありし後は行幸も奉幣も石清水にあ
り一代一度宇佐へも勅使をたてまつる二所宗廟と
申は天照太神幷八幡大菩薩の御事也云々▲又案ず
るに八幡と云御號の事は箱崎緣起曰昔白幡四赤幡
四自レ天降ニ于此一故名ニ八幡一植レ松而爲レ標至レ今猶
在▲其外宇佐緣起公事根源等にくわし▲貞觀年中
に和州大安寺の僧行教筑紫宇佐八幡に參りし時大
菩薩夢に見へて汝王城に歸るへし我もともに行て

天子を護らんと宣ふ行教夢覺て奇異の思ひをなし都にのぼる時山崎に至る其夜又夢に我住所を見よとの給ふ覺て見れば東南男山鳩峯に大なる光あり行教則奏聞して勅使を立られ宇佐を此所に勸請して新宮建立するなり行教八幡の神體を拜んと祈念すれば阿彌陀觀音勢至の三像袈裟の上に現じ給ふなり以上神皇正統記元亨釋書等に見へたり野

かちより ●從レ步也乘物ならす辛苦して參詣する也壽

極樂寺 ●極樂寺高良兩所共に麓に在 頭書云▲八幡宮護國寺別當安宗開山也緣起曰大安寺傳燈大法師位安宗謹言伽藍壹院號曰ニ極樂寺一在ニ山城國久世郡科手上里一右件寺奉ニ爲石清水八幡大菩薩三所君達梵天帝釋天神地祇一兼師僧父母六親眷屬三有法界有識無識皆悉爲レ令レ往ニ生極樂淨土ニ以ニ去元慶漆年一始所ニ建立一也云々安宗者行教和尚之弟子也諸

高良 頭書云▲高良に上の高良下の高良とて二社あり二十二社註式肩書曰石清水別當澄清曰上高良武內也下高良玉垂也 ▲神社啓蒙曰上高良按ニ日本紀一孝元天皇妃伊香我色迷命生ニ彥太忍信命一是武內宿禰之祖父也景行天皇三年屋主忍武雄心命請ニ紀伊國一居ニ阿備栢原一娶ニ紀直遠祖菟道彥之女影媛一生ニ武內宿禰一由レ是見レ之孝元子彥太忍信其子武雄心其子武內也武內凡事ニ六君一景行成務仲哀神功應神仁德其壽殆三百十餘歲其事迹詳ニ于書紀一蓋有ニ武功一之人也▲下高良在ニ外陸前一師時記曰江帥曰高良大明神者武內大臣也非也高良者藤大臣連保也神號曰ニ高良玉垂命一以ニ干滿兩顆一令ニ奉行一之故奉レ號ニ玉垂一云▲按神社考以ニ高良一爲ニ武內宿禰一又引ニ一說一爲ニ玉垂一以ニ上下二神爲レ一別有レ撰歟參

かばかり ●是ばかりと心得て本社の山上に有事をしらぬ也文

そも ●抑の中略なり全 ●論語注には反語辭と有孟子注發語詞句

ほい ●本意なり說

すこしの ●是より兼好判じて云なり說

先達 ●案內者の心諸 頭書云▲法華釋曰彼諸大士是前輩先達參

あらまほし ●此一句一段の肝心なり諸

〔一段之統論〕●此段も前段と同心也結句に先達は

あらまほしきことと也といふを以て肝心とする也諺

▲此段も前を承て我意に任すれば必ず過あることを述ぶ諺●此段は物毎に知たふりをする事をいましめたり此法師が年寄迄八幡へ不ㇾ參して所の樣子をしらぬも餘り無下なることゝ思ひて人にも不ㇾ問先達も不ㇾ求して詣でける故に本社をも拜せずしてかへりしなりされば世の諺にも問は一時の耻問ぬは末代の辱といへり大聖孔子さへ大廟に入て事毎に問ひ給ひしとなり上の水事をもしらぬ大井の土民に仰付らるゝ故に殊の外費へながらしかも成就せず宇治の里人の能仕覺へたる者にいたさせければ以外早く出來して成程自由をとゝのへり何事も我意たてずして能先人に任すべきとのいましめを殘せり説

〔五十三〕是も仁和寺の法師童の法師にならんとする名殘とて各あそふ事有けるに醉て興に入あまりかたはらなるあしかなへをとりて頭にかづきたればつまる樣にするを鼻をゝしひらめて貌を指入て舞出たるに滿座興に入事かぎりなししばしかなでゝ後ぬかんとするに大方ぬかれず酒宴ことさめていかゞはせんとまどひけり兎角すれば首のまはりかけて血たり只腫にはれみちて息もつまりければうちわらんとすれどたやすくわれず響て堪がたかりければかなはですべき樣なくて三足なる角の上に帷子を打掛て手を引杖をつかせて京なる醫師のがりゐて行ける道すがら人のあやしみみることかぎりなし醫師の許にさし入てむかひゐたりけん有樣さこそ異樣なりけめ物をいふもくゞもり聲にひゞきて聞えずかゝる事は文にも見えず傳へたる敎もなしといへば又仁和寺へ歸て親しき者老たる母なゞど枕上によりゐてなき悲しめども聞覽とも覺えずかゝる程に或者の云樣はたとひ耳鼻こそきれうすとも命ばかりはなどかいきざらん唯力をたてゝ引給へとてわらのしべをまはりにさし入てかねを隔て首もちぎるばかり引たるに耳鼻はかけうけながらぬけにけりからき命まうけて久しくやみゐたりけり

是も　●前段に仁和寺の事いへるによりて是もといふなり古

仁和寺の法師　●下へ書たる物語は仁和寺の法師の事なりと此一句にいひきりて扨次の句より物語

を書はじめたる文法なり惣じて此文法とゝのみにあらず一部の内多く見えたれど爰は少しまぎらはしきにより如レ此註するなり句

童　●十五以下を童といふ也　頭書云▲漢書作二童子一▲集成十五以下謂二之童子一童獨也言未レ有二室家一也▲說文未レ冠也古

法師　●僧家に兒のはじめて得度する前の名殘に日比入魂せし友達を振舞事有參

あしかなへ　頭書云▲和名集に曰說文曰三足兩耳和二五味一寶器也▲鼎の字をよめり▲拾遺に「津の國の難波わたりに作る田はあしかなへかも見わけざりけり野

かなでゝ　●奏の字をよめり歌舞することなり野

大かたぬかれず　●少しはぬけゝれども古

まどひ　●迷惑せるなり參

とかく　●とやかくとぬく智略をする也參

まはりかけて　●廻缺てなり說

うちわらん　●打破なり說

響て　●頭へ也

かなはで　●ぬくべき手だてもつきはてゝ也

三足なる角　●鼎の足かづけば角のごとし參

がり　●許の字

ゐて　●將の字

道すがら　●往還のあやしむなり諺

ゐたりけん　●是兼好の推量してなり諺

異樣　●異風なることなり文

くゞもり　●神代卷に溟涬と書り不二分明一義也鼎の內にて物いふ聲也野

かゝること　●醫師の詞也

聞らん共云々　●母なんどのなげくもかなへの中へはきこへまじきと思ひしよし也金

きれうす　●耳鼻は切れうしなふとも命さへたすかればよきなり諸

まはりに　●肉と鼎との間へさしいれてなり諺

かけうけ　●缺穿也穿はほれ入たる心也文

からき命　●辛の字苛の字を書句●辛勞の義也又俗に命からがらなといふ心也壽●からきといふより兼好評論の詞なり盤

［一段之統論］●此段は座興の過ては必ず失のあることを記して左禮を好む者の戒とせり諸●此段は

自智を以てしそになひたるためしなり先達のをきてをとひてしたがはぬ失なり盤 ●此段は前段に仁和寺の僧の先達を求めざる失を云しを受て又仁和寺の僧の先聖の戒法を守らずかくのごとく酒宴遊興をなして果はうまれも付ぬ片輪となれることを云て後人をいましめたりされば太甲にも天作災はなを避べし自らなせる災はのかれがたしといへり今の世の人加様の類ひあるまじき事にあらずよくよくつゝしむべし諸

〔五十四〕御室にいみじき兒の有けるをいかでさそひ出して遊ばんとたくむ法師ども有て能あるあそび法師共なンど語らひて風流のわりごやうの物念比にいとなみ出て箱風情の物にしたゝめ入て雙の岡の便よき所にうづみをきて紅葉ちらしかけなど思ひよらぬさまにして御所へ参て兒をそゝのかし出にけり嬉しく思ひてこゝかしこあそびめぐりて有つる苔の莚に並居ていたうこそこうじにたれあはれ紅葉を焼む人もがなしるしあらん僧達祈りこゝろみられよなどいひしろひてうづみつる木のもとにむきて數珠をしすり印こと〲しくむすび出などしていらなくふるまひて木の葉をかきのけたれどつや〱物も見えず所のたがひたるにやとてほらぬ處もなく山をあされどもなかりけりうづみけるを人の見をきて御所へ参りたる間にぬすめる也けり法師共言葉なくて聞にくくいさかひ腹立て歸りにけりあまりに興あらんとすることは必あいなきものなり

御室　●仁和寺のことなり上の段に委し　頭書云▲凡そ御室とばかりいへば仁和寺とも定めがたし彼寛平法皇御髪をおろし給ひて後に胎金の外に兩部不二の灌頂と云事弘法所傳になき故に天台宗にて傳へんと思召けるにや又比叡の山に登りて受戒し給ふ其跡を御室といひて叡山にありしかれどもこゝの御室といふは上の段よりつゞけていひくだしたる故に仁和寺に決すべし參

能ある遊び法師　●目くら法師など也諺　頭書云▲順正論云僧有二五種一一無耻僧謂毀レ形被二法服一者二瘂羊僧謂於二三藏教一不二了達一無二聽説用一三明黨僧謂於二遊散一營務闘諍善巧結構此三種多分造二非法業一四世俗僧謂善異生此通作二法非法業一五勝義僧謂四果此定不レ容二非法業一云々盤

風流 ●ふりうと云よみくせ也野　風流とはやさしき心也諸　頭書云▲遊仙窟に風流と書ておもしろしとも又なさけありともよめり増鐵

わりご ●破子共破籠共書今云辨當などの事諺　頭書云▲和名集曰樏子今俗取謂破子是也以レ餉送レ人也野 ▲藻鹽草に曰後京極殿寄二破子一戀と云題にて「我をいとふ妹が心やこま〲とへだてがちなるわりごなりらん古

いとなみぞ ●營の字●拵へ出てとなり句

箱風情の物 ●破子をいるゝ箱也むかしは今のやうに辨當などのなかりけるなり盤

雙の岡 ●仁和寺の近邊なり　頭書云▲山城國葛野郡にあり續千載集の大僧正禪助歌に「ふりまさる年をかさねて見つる哉雙の岡の松の白雪▲又寛平の御歌に「色々に並の岡の初紅葉秋の嵯峨野のゆきゝにぞ見る句

紅葉ちらし云々 ●其埋たる上へ紅葉ちらしたり參

御所へ ●御室の御所也諸

そゝのかし ●唆の字野●さそはるゝをいふ也俗にそゝなはかす也全　頭書云▲末摘花にゑみまけて猶聞へ給へとそゝのかし奉れとあり句

苔の莚 ●青き苔はむしろの如し諺

並居て ●列座共連座共書參

いたう ●甚共傷共痛共萬葉に書り壽

こうじにたれ ●困の字くたびれたる也諸 ●にたれのにの字は助語なり句　頭書云▲源氏須磨にいたうこうじ給ひにければ▲花鳥にこうは困字なるべしくたびれ果たる也野

紅葉を燒む ●酒の燗をしてふるまへかしと也諸 ●かく云心は酒はなければはいのられよといはんため也盤　頭書云▲白氏文集に林間煖レ酒燒二紅葉一石上題レ詩拂二綠苔一壽

しるしあらん ●密教三密加持の靈驗あるを云參

こゝろみられよ ●何ぞ食物を祈り出されよとの心也文

いひしろひと ●たがひにいひあひたる義也諸

數珠　頭書云▲山案牟梨曼陀羅呪經曰梵語鉢塞莫梁曰二數珠一此乃是引二接下根一牽二課修業之具一也▲木槵子經曰昔有二國王一名二波流梨一白レ佛言我國邊

小頻年冠疫穀貴民困我常不レ安法藏深廣不レ得ニ遍
行一惟願垂ニ示法要一佛言大王若欲レ滅ニ煩惱一當下貫ニ
木槵子一百八箇一常自隨レ身志心稱ニ南無佛陀南
無達磨南無僧伽名一乃過ニ上一子如レ是漸次乃至千萬
能滿ニ二十萬遍一身心不レ亂除ニ諂曲一捨レ命得レ生ニ炎
摩天一若滿ニ百萬遍一當下除ニ百八結業一獲中常樂果上王
言我當レ奉行釋氏要覽に委し
印ことゝしく　●印象をむすふ也諸　頭書云▲
飜譯名義集五曰母陀羅攜李曰結レ印手也參
いらなく　●無ニ綺羅一共無禮とも書り●ことゝ
しくふるまひたる也壽　頭書云▲大和物語に我さ
まのいといらなく成にたるをとあるは衰て綺羅な
き心なりこゝもものつやもなくぎごちなき心な
り念珠すり印結びなと驗者のありさまするを云な
り▲大鏡にも此史ぶんはさみにはさみていらなく
ふるまひて此をとゞにたてまつるとあり文
ふるまひて　●擧止と書●色々の樣體をする也盤
つやゝゝ　●一切の字をつやゝゝとよむ又明かな
る心ともいへり諺●終々とも書つゐにゝゝと云心
說

物も見えず　●前にうづみたる破子壽
あされども　●求の字鳥の食をもとむるを求食と
云參　頭書云▲定家の歌「よらば只見なれぬ草も
なかりけり早蕨あさる山のたよりに野
言葉なくて　●兒へ面目なければ文
あまりに興あらん　●是より兼好判也參　頭書云
▲古文眞寶秋風辭に歡樂極兮哀情多▲同大寶箴に
も樂不レ可レ極欲不レ可レ縱といへり▲業平の歌に「大
かたに月をもめでしこれぞこのつもれば人の老と
なるもの諸
あいなき　●無愛とも無間共書なり●無興の心に
通ふ也文　頭書云▲桐壺にあいなう目をそばめつ
つとあるを源語類聚に無間と書たれと河海には却
て無愛の字義を用ひたり句
ものなり　●此結句上の段と二段にかゝるなり常
に心にかくべし壽●此結句肝要なりこゝを書へき
ために此兩段を書り說
〔一段の統論〕●此段前段と同じ意なりあまりに興
あらんといへる一句にてよくきこゆるなり人たる
者能心得へき段なりさて此兩段を能々味ふに當時

仁和寺に學德兼備したる敎化の師もなき故に僧徒等の式も亂れてかゝる事をもなすなり前段の法師より此段の法師には罪甚多し如何となれば夫れ人を百靈の長とするは信の德をそなへしゆへなり論語に人として信なくんば禮を如何人として信なくんば樂を如何といへり又猩々鸚鵡は能ものいへども信なきゆへを以て禽獸をはなれずといへりしかるに此法師等虛言をなして兒を誅きたぶらかす是信に背く論語に老者をば安んぜん少者をば懷けんと孔子も宣へり況や釋氏に於てをや此罪一つ此兒をそゝなかし出すは本男色を思ふが故に果は是を侵すべきためなり是邪婬戒を破る其罪二つ彼兒を盜み出るは是偸盜戒を破る其罪三つ法師の身として酒宴遊興を好む是飮酒戒を破る其罪四つ果にはいさかい腹立て瞋恚の炎を吹立るは是殺生戒を破る其罪五つされば大藏一覽に書る酒を吞て隣の女を盜み侵して其上に隣の鷄を殺しあらはれて吟味の時虛言を吐て是を爭しとあると同じ類なり僧俗によらず此段を能々熟讀していましみつゝしむへきものなり說

〔五十五〕家の造りやうは夏をむねとすべし冬はいかなる所にもすまるあつき比わろき住居はたへがたき事也ふかき水は凉しげなし淺くて流たるはるかにすずし細なる物をみるに遣戶は蔀の間よりもあかし天井の高きは冬さむく燈くらし造作は用なき所を作りたる見るもおもしろく萬の用にも立てよしとぞ人のさだめあひ侍し

夏をむねとすべし　頭書云▲詩格楊誠齋詩矮屋炎蒸不レ可レ居高天爽氣亦全無諸

淺くて云々はるかに　●深き水よりは遙にまさりてすゞしきと也諸

天井　頭書云▲天井とはゐづゝのかたちをまなびて空にあくるなり火災をふせぐためなり故に天井と名付く參

冬さむく燈くらし　頭書云▲問夏をむねとすべし此段の肝要也然るに此詞前後相違歟答曰大かた夏をむねとすべしされとも天井高きとてさのみ納凉のたよりなるべからねば又冬もあしからぬ樣にすべしとなり壽▲山案天井はひきく棟は高くすべし夏はすゞしく冬は煖なるものなり

用なき所　●兩說在母屋書院など云外の用なき所と云說●又かまへの屋舖に普く立つゞけず空地を殘すと諺　頭書云▲莊子曰知ニ無用一而始可ニ與言一用矣地非レ不ニ廣且大一也人之所レ用容レ足耳然則廁レ足而塾レ之致ニ黃泉一人尙有レ用乎惠子曰無レ用莊子曰然則無用之爲レ用亦明矣

萬の用にも云々　●其用にあたれる所は其用の外には用ひがたし何となく作り置し所は何ぞの折の用にもたちて見るも面白し文　頭書云▲無用の用と云ことあり造作にかぎらず萬事にわたるべきなり壽▲景行錄云賓客不レ來則門戶俗なりとあり又古文大寶箴壯ニ九重於內一所レ居不レ過レ容レ膝などゝいへども又時としてなければならぬほどに無用の所をも作り置べきなり爰を以て見れば大君の臣下を召仕も此心得肝要なり無病の醫治りし代の武士は民の奴よりをとりといへどもなくてかなはざる者なり孟嘗君三千人の客を愛す其中に庭鳥の眞似をする者あり常無益者なれども秦函谷關の難を遁るゝ時に甚だ益ありしかるときは人として何んぞ捨べき者あらんや說

人のさだめ　●兼好が時分の人の仰られし事を引て一段の結句としたるなりかく云心は莊子の心も通ふべし莊子にて書しとは見るべからず心が通ふと見るべし盤●山案重言の格なるべし

〔一段之統論〕●此段家作の心ばへを敎へたり前につきづきしくあらまほしきこそ興ある物なれといへる段のたぐひなり●衣食住の三は人間の大事なるに同じ手間を入て惡しくすまふは惡きことなるをかく書おかるゝ筆の跡ふかき情にてこそ侍れ貞

〔五十六〕久しくへだゝりて逢たる人の我方に有つる事數々に殘りなくかたりつゞくるこそあひなけれへだてなくなれぬる人も程へて見るははづかしからぬかは

我方に　●他の事はきゝもせずして我方のことばかりかたる義なり古

殘りなく　●のこらずかたりつくす也說

あひなけれ　●無愛と書前にくはし

へだてなく　●是より兼好の批判也諸

程へて云々からぬかは　●久しく中絶してあふ時はたとひ前かど心やすき者にも隔心のあるものな

るに也諺●はづかしからぬかはいやはづかしき物
ぞとの心也盤　頭書云▲隔なくなれども友も久し
く對面もせぬうちに何樣に學問つとめてゐんもし
れざればはぢ思ひて心づかひすべきと也鐵増▲人の
性は本善なるものなれば昨日跖が心ありしも今日
舜の徒になるべき道理ありされば程へてあひたる
人には心置べき事也句▲十年向顏せざれば明師に
逢かごとしといへる本語にもかなひけるとなり參
［第一節］●久しくへだゝりてと云よりはづかしか
らぬかはと云まで也此段四節に分ち見るべし文段
是に同じ●山案此節は人と交に物語するのたしな
みを云前にも朝夕出逢なかにもともあるときは心
をおき引つくろへといへり況や久しく隔りて後に
逢時は愈心を付てたしなむべき事也
次ざまの人はあからさまに立出てもけう有つる事と
て息もつきあへす語り興ずるぞかしよき人の物語す
るは人あまたあれど一人にむきていふををのづから
人も聞にこそあれよからぬひとは誰ともなくあまた
の中にうち出て見る事の樣に語りなせば皆をなじく
わらひのゝしるいとらうがはし

次ざま　●よからぬ人下さまの人諸
あからさま　●暫の字又白地とも書假初の義也野
けう有つる　●諸抄兩説を記す一説には今日文段一
説には興句解　山案珍しき事を人のきかぬ先にと息も
つぎあへず語るとあれば前説勝れり其上下に語り
興ずとあればこゝも興に作れば重言に似たり
息もつきあへず　頭書云▲二條院讃岐の歌に「蒼
海の浪間かきわけてかつくあまの息もつぎあへず
物をこそ思へ野
よき人の　頭書云▲善惡對して書也論語に君子小
人の事をならべて仰せられぬると同じ筆法なり備
書にも對敎の心なるべし盤▲老子經に大辯如レ訥
といへり又禮記守レ口如レ瓶ともいへり初段にも言
葉をほからぬこそあかずむかはまほしけれといへ
り當時は詞多に口にまかせてあることとなきことと云
ひちらすものを辯舌者と云ふ君子は却てこれを惡
む言多ければしなすくなしともいへり說
一人にむきて　●閑なる體なり文
をのづから　●をのづからとは他の人にはいはね
ども自然と人もきくなり參

うち出て云々　●只今見たる事の樣にしかた咄なとする也文

皆　●座中皆なり諺

らうがはし　●亂れかはしき也　頭書云▲源氏夕良にらうかはしき大路にたちをはしてとあり壽

〔第二節〕●次ざまと云よりらうがはしまで也●此節はよからぬ人のものいふとよき人の物語するさまとを書り文　●此節心を著て玩味すべきものなりさればよからぬ人は我見たやうに咄して興のあらんことを催せりこれ皆心に人の喜をもとむる故なり論語に巧言令色鮮哉仁となり說　●此節よからぬ人と云よりらうがはしと云までを曲禮の儳言することなかれ勦說することなかれ雷同することなかれといへる所をもちて見るべし野

おかしき事をいひてもいたく興ぜぬと興なき事をいひてもよくわらふにぞ品の程はかられぬべき

おかしきこと　●是より其わらふ人のうへをいふなり諺

いたく　●甚の字の義叶ふ句　●つよくといふ義也

古　頭書云▲古今忠房の歌にも「きり〳〵すいたくな鳴そ秋の夜のながき思ひは我ぞまされる句

興ぜぬと　●智ある人はあまり興せずしてわらはぬ也諺

よくわらふにぞ　●智惠淺き人女わらはなどのたぐひはよく笑ふ物也文

品の程云々　●よき人よからぬ人の品がはかりしられんとなり句

〔第三節〕●をかしきことをと云よりはかられぬべきまで也●此節は彼わらひのゝしるにつけて人品をおしはからるゝことを云なり文

人のみさまのよしあしざえある人は其ごとなゞど定めあへるにをのが身を引かけて云出たるいとわびし

みさま　●身樣也文　●形容の說也

ざえ　●才智ある人なり古

其ごと　●二說あり●一義にはこの字を濁りてよむ說に云ごとはごとくの義也たとへば一座の中に才智有人あつて人の身樣の善惡をいひ其人は其人の如くよし其人はその人の如くあしゝなど定めあへるによしとさだめられたるかたに己が身を引かけ物語し出たるもつともわび數事と也句　●又一義

にこの字をすむ其説に云●其事とは其わざなりざゑある人は其やうなるわざありなど評判せるにをのが身を其定規にして云出たるはいとわびしく聞にくきとなり増鐵

身を　●一本にをの字をにの字に作る

〔第四節〕●人の見ざまと云より終までなり●此節は人の上の善惡をいふに我身を定規にて云出る事の聞にくきいましめをいへり文●山案此節よく讀て意得べきこと也人としてやめ難き惡心なり善惡につきて我身を引かけて云也たとへば人が惡をなせば我等さへ加樣の惡はなさぬなどゝ云ひ又善事をなす者を見てはそれを妬てさまでの善事にてもなし我等とてもなるましきことにあらずと云是皆我を立て慢心より出る故なりよく〳〵つゝしむべきことなり

〔一段之統論〕●此段と此下の段は人に逢て物語すべき時のたしなみを書り壽

〔五十七〕人の語り出たる歌物語の歌のわろきこそほいなけれ少し其道しらん人はいみじと思ひてはかたらじすべていともしらぬ道の物語したるかたはらいたく聞にくし

歌物語の歌　●歌物語はうた一種なるに其うたあしくは物語の本意なるべし句●歌のあしきは語る人のはぢ也全

其道　●歌道をさす句

いみじと云々かたらし　●少歌道をしりたる人ならば其わろき歌をよきとおもひてはかたるまじけれどもしらざる故ぞとなり文●歌道なき人はまたばなしならでは大かたせぬ事也それに付て歌はかなにて書つらね心易くよめる樣なれど一字の淸濁のあやにて義理大きに相違せり其道しらぬ人は心得有べきとのおしへ也全　頭書云▲枕草子にかたはらいたき物ことによしとも覺へぬ我歌を人にかたりて人のほめしなど云ふもかたはらいたしと云云文

すべて　●都てなり歌道にかぎらず諸

いとも　●最の字也參●尤の義なる事前に注すこしもといふ義也と書る抄古也の說は誤なり句

かたはら云々　●歌物語にかぎらず萬の事しらさるをしらずとしてかたるべからずと也文

〔一段之統論〕●此章は總じて前段の餘論なり我をぼつかなき道を人にかたるべからずとのをしへなり參●文字の讃談は猶はぢがましき義ながら無學のものゝせぬことなればさやうのことある事まれなり和歌は假名にて書物なれば誰も〳〵心やすく思ひて細々ある事なり淺きやうにて深き道なれば語り出すと其まゝ智恵のたけきこへてこと〳〵しく見をとさるゝ物なりそれをいたはしく思ひて書ると見へたり貞●此段兼好の和歌に妙を得し人なる故に歌の事を云てそれより萬の事へうつして書る事有難き文法なりされば學才もありそふに見へてなつかしき人の片言まじりの物語己が得もせぬことをしたり顏に云出るは興さめてにが〳〵しき事也只何事も言をつゝしめとのおしへなり說

〔五十八〕道心あらばすむ所にしもよらじ家にあり人に交るとも後世をねがはんにかたかるべきかはといふはさらに後世しらぬ人なり

道心　●菩提心の事也參●佛道を勸心あらば也全
頭書云▲四教義第七曰菩提名ニ佛道一菩薩名ニ成衆生ニ又菩提名レ道薩埵名レ心兩義全　▲十六觀經曰發ニ無上道心一參

すむ所にしも　●何處にあつても道にさへ心ざしあらばと也說　頭書云▲金剛經曰應レ無ニ所住一爾生ニ其心一灸　▲或云夫隱在ニ市朝一古

家にあり　●常の俗家に居て妻子を帶しながら諺

人に交る　●世間の俗中にましはりをむすぶとも也參

かたかるべき　●いづくにてもねがはるべき物をとなり文

さらに後世　●人ごとにかくいふは兼好が心には後世しらぬ人と思ふなり參

〔第一節〕●道心あらばと云よりしられぬ人なりまで也此段四節に分ち見るべし文段是に同じ●此節は道心うすき人の云事なるを先書出て問答せり文●道心あらば何方にてもねがはれべきものなりなどゝ云人終に佛道を成就したる事なければこゝにさらに後世しらぬものゝ云ことなりと兼好の詞なり全●山案此節は彼生物識の僻として口にて古語を引て市中山居とあれば何ぞや道を行ふに住所のよしあしあらんや佛も煩惱即涅槃の娑婆即寂光

などゝも說給へりと利口をば吐出せども世を避て靜に後世をねがふ者の道を成就するには拔群をとりて道のかたはしをも行ひ得ざる輩をいましめて書りさて次の節にて處をえらんで後世をねがふべき道理をのべたり
げには此世をはかなみかならず生死を出むと思はんに何の興有てか朝夕君に仕へ家をかへり見るいとなみのいさましからん心は緣にひかれてうつる物なればしづかならでは道は行じがたし
はかなみ　●はかなく見る義なり古　頭書云▲古今の歌に「ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにも成まさる哉句
かならず　●まことに此生死流轉の世をはかなしと思ひ捨て必不生不滅のさとりの門にいるべき修行をせんとならばの心なり文
生死を出む　頭書云▲觀心略要集曰廻二何善巧方便一可レ出二離生死輪廻一參
興有て　●此興の字まへの段々にいふ興の字に應映しておもしろきなり句
君につかへ　頭書云▲惠遠法師のときより沙門は不レ敬二王者一不レ拜二父母一などいへる事は云出せり又棄レ恩入二無爲一眞實報レ恩者といひ一子出家九族登レ天など云論文あり野
家をかへりみる　●妻子眷屬を顧る也諺
いさましからん　●是家にあり人にまじはる人のわざ也まことに世をはかなしとおもはゞかゝるいとなみも何のいさみかあらんとのこゝろなり文　●いさむまじきと也句
心は緣に引れて　●見る事聞事の諸緣にひかるゝ也諺　頭書云▲本生心地觀經八曰心如二流水一念々生滅於二前後世一不二暫住一故心如二大風一一刹那間歷二方所一故心如二猿猴一遊二五欲樹一故心如二飛蛾一愛二燈色一故心如二野鹿一逐二假聲一故心隨二萬境一轉々所實能幽野　▲智朗禪師の語にも心は住所に依て清かるべしともいへり又惠信僧都の歌に「木の下を住家とすればをのづから花見る人と成にけるかな說
しづかならでは　●先づ我身を世間の俗をはなれ諸緣を放下して閑居ならでは道は成就しかたし諺
頭書云▲心地觀經曰入二阿蘭若菩提場一晝夜常修二於妙道一（阿蘭若者僧訓日記曰花言二寂靜一）　▲圓覺經曰欲レ求二如來淨圓覺

心ニ乃至宴ニ坐靜室一圭峯疏曰身住則心安心閑則境寂参
▲法花經序品曰入ニ深山一思ニ惟佛道一▲同方便品曰
我常獨處ニ山林樹下一若坐若行▲又藥草喩品曰獨處
山林一常行ニ禪定一▲伊勢物語に齋宮の歌に「そむく
とて雲にはのらぬものなれど世のうきことそよそ
になるてふ▲當麻中將姫緣記に曰「ひとりのみ深
山の奥ぞすみよけれ草木が人のうへをいはねは説
「第二節」●げにはと云より行じがたしまでなり●
此第二節は彼家にあり人にまじはるとも後世を願
はんにかたかるべきかはと云は道心うすき故なり
世を離れてしづかならでは修行しがたき物をと也
さて心は緣にひかれてうつるものなれば君につか
ふれば其緣にひかれて國を治るわざ忠節の心のみ
をてり家をかへり見れは其緣にひかれて妻子を養
ひ生業をいとなむ心のみにて後世の心はかたはら
になるべければたゞ閑居ならでは佛道修行はとげ
がたしとなり奥にも緣を離て身をしづかにしとい
へるたぐひなるべし文●山案此節は上の節の末の
句をうけて道を修行するには必ず處を擇むべきこ
とをいへり此意儒書にも數多見へたり●論語曰里
仁爲レ善擇而不レ居レ仁焉得レ智●又曰賢者辟レ世其
次辟レ地其次辟レ色其次辟レ言とあり●韓退之が詞
にも士之行レ道者　不レ得ニ於朝一則山林而已矣山林
士之所ニ獨善自養一而不レ憂ニ天下一者之所ニ能安一也
如有下憂ニ天下一之心上則不レ能矣又梁竦傳にも閑居
可ニ以養一レ志といへり

其うつはものむかしの人に及ばず山林に入ても饑を
たすけ嵐をふせぐよすがなくてはあられぬわざなれ
ばをのづから世をむさぼるに似たる事もたよりにふ
ればなどかなからんさればとてそむけるかひなしさ
ばかりならばなじかはすてしなどいはんは無下の事
也さすがに一度道に入て世を厭ん人たとひ望ありと
もいきほひ有人の貪欲おほきに似るべからず紙の衾
麻の衣一鉢のまうけ藜のあつものいくばくか人のつ
いへをなさんもとむる所はやすく其心はやくたりぬ
べし

うつはもの　●器の字にて器量の義なり句　頭書
云▲論語に管仲之器とある器の字義と同じ句
人に及ばず　●下根の今の世の人の器量は佛在世
の阿羅漢などの修行にはをよばずとのこゝろ也文

山林に入て　●これより下は家を捨かねる人の詞也諺

嵐をふせぐ　●嵐をふせぐと云を居所の義に見るべからず衣服の義に見るべし句　●餓をたすくるといふは下の一鉢のまうけ藜のあつものといふにかけて見るへし嵐をふせぐといふをは下の紙の衾麻の衣と云にかけて見るべしいかに静なる所に觀念をこらすとも衣食なくてはかなはすと也參　頭書云▲一休の歌に「ふりすてゝ世はなきものと思へども雪のふる夜はさむくこそあれ古

よすが　●よすがとは便なり諸

あられぬ　●存命する事ならぬ也說

似たる事　●似たると云詞おもしろきにや家にあり人にましはる人の衣食ゆへにむさぼる事のおほきやうにはなければなり文

たより　●其饑寒を防の求めにひかれやすき也參

されば　●さうあればとて也諸

そむけるかひなし　●うへこゞゆるが悲しきとても世をそむくからには世をむさぼるに似たる事もあらんはかひなしと也是家にありても後世をねがはんにかたかるべきかはといふ人の世をそむける人への問難也文　頭書云▲袾宏竹窓二筆曰人初出家雖三志有二大小一莫レ不レ具二一段好心一久之又爲二因緣名利一所レ染遂復營二宮室一飾二衣服一置二田產一畜二徒衆一多積二金帛一勤作二家緣一與レ俗無レ異云々古謂必須下重離二煩惱之家一再割中塵勞之網上是出家以後之出家也出二前之家一易出二後之家一難予爲レ此曉夜惶悚參

さばかり　●それ程未練の心ならはと也文　頭書云▲狹衣にさばかりの物はなじかはくるしと思ひさふらはんとあり文

なじかは　●何かはと同じ文　●初より何しに世を捨たるぞと也

無下の事　●兼好自答の詞なり文　●かやうに難する事もあれとそれはきこえぬ事と也參

さすがに　●此字肝要也參　●是より兼好徒然として閑居する本意をいふなり諺

いきほひ有人　●世間の俗を不レ離勢ある人也諺

貪欲　頭書云▲法花經諸苦所レ因貪欲爲レ本若滅二貪欲一無レ所レ依レ此▲瑜伽論曰於二諸境界一深起二躭着一名レ貪諸煩惱中貪爲二最勝一野

似るべからず ●おほきといふ字肝要也小欲知足の行とて出家しても小欲ありて足りとしるをば佛もほめ給ふ也参

紙の被 ●座禪の時しく衾なるべし又臥具にも通ふ可参 頭書云▲山案身章撮要釋名曰被寢衣也大被曰ㇾ衾單被曰ㇾ裯世人或以二錦繡一或以二布素一或以二楮皮一爲ㇾ之取二其暖且適一也▲紙被詩曰紙被圍ㇾ身度二雪天一白ㇾ於二狐腋一軟ㇾ如ㇾ綿此外劉子翬呂居仁等が紙被の詩あり

麻の衣 ●蠶の口より出たる糸にておりしは殺生戒にきらふ事あれば麻にてやすらかにこしらへたる三衣の事なるべし参 頭書云▲僧靈徹詩年老心閑無二外事一麻衣草座亦容ㇾ身句

一鉢の ●三衣一鉢と常にいふ也僧の齋を行ふ體也参 頭書云▲釋氏要覽曰梵曰二鉢多羅一此曰二應器一今略曰ㇾ鉢又呼二鉢盂一即華梵兼名也鉢者乃是三根人資ㇾ身要ㇾ急之物佛聽ㇾ用二二種一又有二瓦鉢一有二鐵鉢一文 ▲佛祖統記有嚴傳畜二一鉢一無二長物一躬拾ㇾ薪汲ㇾ水参 ▲僧可士詩一鉢即生涯隨ㇾ緣度二歲華一句 ▲事文類聚前集僧問二守淸禪師一如何是和尙家風曰 一餠兼二一鉢到所是天涯野

まうけ ●たくはへなり参 ●飢をすくふ便諺

藜のあつもの 頭書云▲莊子曰孔子厄二于陳蔡一藜羹不ㇾ糝句 ▲聖主得賢臣頌羹ㇾ藜含ㇾ糗註曰藜野菜 ▲護法論曰甘二心於幽深閑寂之處一藜羹革布僅免二飢寒一参

ついへを ●何程の費にかなるべきと也参 頭書云▲護法論曰釋氏雖ㇾ衆而各止一身一粥一飯補ㇾ破遮ㇾ寒而其所ㇾ費亦寡参

求る所はやすく ●有ののぞみはかるければ也諺

足ぬべし ●求る所かるき故に早速滿足する也諺 頭書云▲范堯夫布衾銘曰藜藿之甘綈布之溫名教之樂德義之腴求ㇾ之孔(ハナハダ)易貯ㇾ之常安書 ▲方丈記曰藤の衣麻のふすまうるにしたがひてはだへをかくし野邊のつばな峯のこのみ命をつくばかりなり人にまじはらざれば姿を耻る悔もなしかてともしければをろそかなれども猶味ひをあまくす云々文

〔第三節〕●其うつはものと云よりはやく足ぬべしと云まで也●此第三節は彼後世ねがふ人の家をはなれがたくするは身のあるかぎりは衣食といふ物

なくてかなはさる故なり然とも世をいとひたる人の衣食はもとめやすく心にもたりやすければたゞ世をはなれて閑に修行せよとの心なり文

かたちにはづるところもあればさはいへど惡にはうとく善にはちかづく事のみぞおほき人と生れたらんしるしにはいかにもして世をのがれん事こそあらまほしけれひとへにむさぼる事をつとめて菩提におもむかざらむはよろづの畜類にかはる所有まじくや

かたちにはづる　●たとひ心はすぐれずとも我は世をすてたる人なればとて剃髮黑衣のかたちにははぢる也諺　頭書云▲六道講式曰我等適剃レ頭不レ剃レ心染レ衣不レ染レ心乃至可レ耻々々可レ悲々々参▲慈鎭和尙の歌に「何故にすてける身ぞと折々は姿にはぢよ墨染の袖鐵槌

ところも　●大至には心もあればにつくるなり

さはいへど　●彼飢寒にひかれて世のもとめ少しはあるやうなれどゝ也参●上の詞にあたりていふ此文法前の人の無跡の段にも有其詞源は源氏品定に有旬

人　頭書云▲集韻人天地性最貴者也古▲人はもと天理の公をうくと儒にはいひ佛道には五戒の因にて生をうけ得たりと云なり参

むさほる事を　●家にあり人にまじはりて威勢有人のさまをいふ文

菩提　●句解盤齋などには道にをもむかざらんに作る　頭書云▲菩提ハ梵語也羅什の弟子肇公の注に曰道之極者稱曰二菩提一と云り故に諸師道と飜したり天台大師は菩提を智惠と見る共注し給へり壽

畜類に　●前にひとと生たらんしるしにはいかにもして世をのがれんことこそといふにあたりて見るべし文　頭書云▲涅槃經第十六曰善男子一切男女若具二四法一則名二大夫一何等爲レ四一善知識二能聽レ法三思二惟義一四如レ說修行云々無二此四法一則不レ得三名爲二大夫一也何以故身雖二大夫一行同二畜生一盤

▲萬善同歸集曰無レ聞無二智慧一是名二人身牛一参

【第四節】●かたちにはづると云より終までなり●此節は道心をおこし世をのがれたる人は善にちかづき惡にはうとき益を云て一段を決したり文●山案此節は上の節々を結でしかも畜類の一句にてきびしく人面獸心の族をいましめたり而も佛書に鳥

獸のたぐひも道をさとりて往生せることを載たればまことは畜類にもをとれるなるべしさて此結句を難ずる說あり其難をば新註と云抄に答へたり曰或儒そしりて曰（野槌の說）兼好が云處の道は何事を指や君臣父子夫婦兄弟朋友の外に道あらず兼好は世俗を畜類とすれど儒者より見ればかの世をのがれて人倫をみたる者を畜類とすと記せり是儒家者流の言にして天下の公論に非ず私をはなれていはゞ堯舜の道あり老莊の道あり釋迦達磨の道ありたとへば儒釋老の三は水火土のごとし天下に無てはあるべからず國により時にしたがひ盛なると衰るとのたがひ侍り今時大唐日本に佛法さかんに行れ其次に儒道なり惜哉老氏の道のをとろへたることやされど又時を得たらはおこらんこともしり難し古來老氏よりは仁義を貶し釋氏の儒を誹謗し儒者の老佛を異端なりとて擯斥するめづらしき事に非ずいかんぞ彼儒のみならんやといへり此辨まことに兼好の一道に偏ならさる志にはよくかなはんものなり

〔一段之統論〕●此段は道心をすゝめて道心あらば世を離て身を閑にせよと敎たり例のつれ〳〵を本意とする心なるべし（文）●此段世を遯れてこそ道は求やすけれしからざれは畜類にことならずといへる兼好が心佛道にをゐてはさも有なん若或は眞俗不二と云世門常住といひて大乘の道は善をもとらず惡をもすてず色は氷にして空は水なり煩惱はしぶかきにして菩提は熟柿なればいつれも皆本來一體なりと思ふ故に三毒いよ〳〵增長してまのあたり魔道に入是等の人は兼好が罪人なり稻の秀ざるはひゑの熟するにしかず大乘をほしいまゝにするはかへりて小乘の殊勝なるにしかず（野）●此段は道心者のことを俗家よりおしはかり思ひくだすをおさへて書るなり又下の六段目に道心者の方より在家の望あるを我身の輕きまゝに事よせてそしりあなどるを僻事に論じたり誠に心得べき敎なり（全）

〔五十九〕大事を思ひたゝん人はさりがたく心にかゝらん事の本意をとげずしてさながらすつべきなり

大事　●佛者にては生死の二つを大事といふ也（全）

頭書云▲法華方便品世尊以二一大事因緣一故出二現於世一（野）▲行成卿歌に「世の中に出といでます佛

をばたゞ一ことのためとしらなん盤
思ひたゝん　●生死を出菩提におもむくべしと思
ひ立事也文
さりがたく　●すてがたしと心にかゝることなり
諺
本意を云々　●本意をとげぬ事もそれながらすて
よとなり諸
捨へき也　頭書云▲往生十因曰依ニ於小緣一不レ退ニ
大事一參
〔第一節〕●大事と云よりすつべきなりまでなり此
段四節に分つ文段これに同じ●此節は前段をうけ
て道心あらば住所にもよらじといふ人にいよ〳〵
深くいましめたり文●此節は一段の大意擧たりま
ことに一大事を心がけん人は必ず小事には心かく
べからずたとひつとめかゝりし事ありとも半途に
してすつべき也なんぞや生死事大のすみやかなる
にかへることあらんや山案
しばし此事はてゝ同じくは彼事沙汰し置てしか〳〵
の事人の嘲やあらん行末難なくしたゝめまうけて年
比もあればこそあれ其事またん程あらじ物さはがし

からぬ樣になど思はんにはえさらぬ事のみいとゞか
さなりてことのつくるかぎりもなく思ひたつ日もあ
るべからず
しばし　●是より懈怠となる仔細をいふ也盤
此事はてゝ　●世間のいとなみを果しとけてなり
全
沙汰し置て　●菩提心をかね〳〵にさたしおきて
心靜に勤めんといふこと也全●山案此說鑿なり只
かれこれといふ意に見るべし
しか〳〵　●日本紀に云々と書河海にいろ〳〵の
いひ事と有又然々ともかく如此々々といふ義なり
前人の無跡の段にくはし說●それ〳〵の事を本意
をとげずして半にして道心おこさば人やあざけら
んと遠慮するていなり文●是皆ゆだんとなるよし
なり盤
難なく　●今少し待合て萬事をらちあけて也諺●
行末の資粮のたくはへなどしおきてことかけぬや
うにして發心すべしとなり盤
年比も　●世をすてずしてあられぬにもあらず年
來も浮世にかゝつらひてあればこそありけれとな

り文
其事またん程あらじ　●其事し果ん程はいく程の
隙とることもあらじをさのみ急ぐべきにもあらじ
なとおもふさまなり文●其事をまつとはしはつる
を待なり盤●又一説にあらしのしの字淸でよむへ
し此事彼事しはたすまではよもや死ぬまいしはた
すまでの程はまだ有べきと也古●山案後說はいや
しされど今世の人の如ㇾ此いふもまゝ多きなり
物さはがし　●あまりに急に物さはかしくせずと
もなり諺
えさらぬ事の　●夢の浮橋に又えさらぬ事も數そ
ひつゝすぐせどゝ有
いとゞかさなりて　●いよ〳〵おほくなりてなり
諸
つくる　●世間の事のつくるなり諺●世間の有さ
ま如ㇾ此なり
〔第二節〕●しばし此事と云よりあるべからずまで
也●第二節これは去難き本意をとげて後世を捨ん
とする人のありさまを書てさやうにしては大事は
思ひ立がたきことをいふ也文●此節は上の節の萬

をすつべきとあるをうけていよ〳〵其意を云んた
めに先此節にはすてざる者の終には益なきことを
いへりされば生死の大事を思はゞ世間小事には必
以かゝはるべからずたとひ初に菩提心をこりても
はや世事を打すてねば後には其志をも取失なふ也
佛者の臨終を不ㇾ待して水火の定に入るも初發り
し菩提心の堅固なる內に命を終り度とのこと也歌
にも「あしゝともよしともさらに云がたしよひ
よひかわる人の意はとあり又始めあらずと云こと
なし其終をよくすることなしといへれば思ひ立と
其儘餘事をばすつべき也金葉集に「明日までと思
ふ心はあだ櫻夜の間に風は吹ぬものかは又朱文公
の勸學文にも勿ㇾ謂今日不ㇾ學して有ニ來日一とあり
說
大やう人を見るにすこし心あるきはゝ皆此あらまし
にてぞ一期はすぐめる
大やう　●大體也諸
心ある　●一向下愚の人は云にたらず少しにても
心あらん人はと也古
きはゝ　●際の字分際也諸

あらまし　頭書云△堀川百首の歌に師頼「はかなさを思ひしらずはなけれどもあらましにのみ日をくらすかな此詞にて書り文

一期はすぐめる　●道心おこさんのあらましばかりにて難レ去世事にひかれて皆いたづらに一生を過るとなり諸

〔第三節〕●大やうと云よりすぐめるまでなり●第三節は道心は有ながら猶世にかゝづらふ人をいましめたり文●此節は上の節を承て惣て加様の人一二人のみならず世には多あると云て世人の無常を觀念せざる事をいきどほりて云なりされば後鳥羽院の御製に「すてやらぬ浮身の果のかなしさをなげきながらも猶過すなり又金葉集に二品親王の歌に「世を捨る心は猶ぞなかりけりうきをうきとは思ひしれどもなどゝよめり良にすて難きはうき世なりさはいへど善にはすゝみ惡をばいとふ志はあるべければ彼心もなくて放逸に月日を暮す者よりは大きにまされるなり山案

近き火などににぐる人はしばしとやいふ身をたすけんとすれば恥をもかへりみずたからをもすてゝのがれさるぞかし命は人を待ものかは無常の來る事は水火の責るよりもすみやかにのがれがたき物を其時老たる親いときなき子君の恩人のなさけ捨がたしとてすてざらんや

近き火　●是より火のたとへをもふけて油斷の人を戒む諺

しばしとやいふ　●しばしまたんとやはいふさはいはしと也句●近き火事などに身をたすけんと思ふ人はしばし此事はてゝなどゝ云ずと也來世を大事と思ふ人も其ごとくにこそのがれ去べけれそれには油斷する事のをろかさよといはんとてなるべし文

身をたすけん　頭書云△平家物語に重衡の乳母をなかと云女重衡の生捕れ給ふを見捨てにげさりしことを載す又知盛は武功の猛將なりしかども子息武藏守知章の親の命に代て死し給ふを見ながら落行給て宗盛に向て宣ふは命は惜きものなり我子の討るゝをも見捨てまいりたりとて落涙し給へりとあり説

たからをもすてゝ　●恥やたからよりも重き身な

れば也說　頭書云▲靑休淨土文卷第二曰且若人有二百斤之金一猝有二大難一不レ能二負挈以行一必捨而去レ之若抱レ金而與レ之俱死世必謂二之大愚一是皆知二此身重一於二百斤之金一也此語亦喩下求二菩提一之事至切上參

人を待物かは　●人の命の終る事は其人の世事を皆はたしとくるまでまつ物かはと也かはとはとかめたる詞なり待ものにはあらずとなり參　頭書云▲陶淵明雜詩曰歲月不レ待レ人參

水火のせむる　●近き火などにといへるをうけていへり暴水猛火も猶のがるべし無常の來る事の急速なるは是にも過てのかれがたき物をこゝに油斷せば其期にのぞみて必後悔すべきぞと戒をふくむ也文　頭書云▲禪家龜鑑曰衆生生死甚二於水火一也▲萬善同歸曰水火所レ逼一心求レ救此言喩二無常一也▲遺敎經曰無常之火燒二諸世間一▲梵網經菩薩戒序曰人命無常過二於山水一今日雖レ存明亦難レ保參▲往生要集曰若覺三無常過二於暴水猛風掣電一山海空市無二逃避處一如レ是觀已心大怖異眠不レ安席食不レ甘レ哺如レ救二頭燃一以求二出要一盤

其時　●命終らんとする時諸

いときなき子　●幼稚の子なり諸

すてざらんや　●世間の人の愛情によりて世をのがれかぬる事はさることなれど無常の責來る時は皆すてゝゆくならひ也參　頭書云▲華嚴經卷四十普賢行願品曰至二臨命終時一最後刹那一切諸根悉皆散壞一切威勢悉皆退失輔相大臣宮殿內外象馬車乘珍寶伏藏無二復相隨一參▲悲華經云妻子珍寶及王位臨二命終時一不レ隨者野

[第四節]●ちかき火と云より終までなり●此節は水火のたとへをひきて彼あらましにて過す人をいましめ無常の來る事速なれば油斷なく大事を思ひたてとすゝめて一段を決したり文

[一段之統論]●由案此段は前段の餘論にしてしかもきびしく道心を發すべきことを敎へたりされば少にても菩提心をてらばすみやかに世事を放下すべしゆめ〳〵かへり見べからずこれもしまひ彼もしはてゝと見合せなば一時の解怠一生の懈怠になるぞよく〳〵心得べきなり●此段を見れば片時もうき世に足をふみとめん心地せられ侍らず彼野槌にいへる花山院の帝悲華經の妻子珍寶及王位臨ニ

命終時ニ不レ隨者といへるを御覽して十九にして出家せさせ給へるたぐひ誰もあるへきことなり乍去若き人などは行末を思ひはからひて思ひ立べき也彼花山院も後には道心亂れさせ給て御後悔の由榮花物語に見へたり文

〔六十〕眞乘院に盛親僧都とてやんごとなき智者ありけりいもがしらと云ものをこのみておほくくひけり談義の座にても大成鉢にうづだかく盛て膝下に置つつくひながら文をもよみけり煩ふ事有には七日二七日なッど療治とてこもりゐて思ふ樣によきいもがしらをえらびて殊に多くくひて萬の病をいやしけり人にくはする事なし只獨のみぞくひけるきはめて貧しかりけるに師匠死にさまに錢二百貫と坊ひとつをゆづりたりけるを坊を百貫にうりて彼是三萬疋を芋頭のあしとさだめて京なる人に預置て十貫づゝ取寄て芋魁をともしからずめしける程に又こと用にもちふる事なくて其あしみなに成にけり三百貫の物をまづしき身にまうけてかくはからひける誠に有難き道心者なりとぞ人申ける此僧都或法師を見て白うるりといふ名を付たりけりとは何物ぞと人の問ければさる物を我もしらず若あらましかば此僧の顏に似てんとぞいひける此僧都みめよく力つよく大食にて能書學匠辯說人にすぐれて宗の法灯なれば寺中にもおもくおもはれたりけれ共世をかろく思ひたるくせ者にて萬自由にして大形人にしたがふといふ事なし出仕して饗膳などにつく時も皆人の前すへわたすを待ず我前にすへぬればやがてひとりうちくひて歸りたければ獨つゐ立て行けれとき非時も人にひとしく定てくはず我くひ度時夜なかにも曉にもくひてねふたければ晝もかけこもりていかなる大事あれども人のいふ事聞いれず目さめぬれば幾夜もいねず心をすましてうそふきありきなッど尋常ならぬ樣なれ共人にいとはれず萬ゆるされけり德のいたれりけるにや

眞乘院　●御室に有仁和寺の院家也諺

盛親　●盛親の傳不レ憶

いもがしろ　●いもがしらは芋頭共芋魁共書野●蹲鴟共書參　●物の名は時うつり世かはれば必かはる習ひあるによりて其世にいひふりたる物にもといふ物の字をそへて書げにもとぞ覺ゆる源氏物語に此筆法有旬

談義　●宗の義を解を云也講釋の座成へし全
文　●經論挙敎なり文
療治　頭書云▲療或作レ𤻲說文治也
病をいやしけり　頭書云▲雖知苦齋道三が編せる
宜禁本草をよみ侍るに芋頭は辛く平にして毒ある
ものにて病をいやすほどの能は見へざるに此僧の
腹中にはよく相應せるにや參
人にくはする云々　●我まゝにのみ振まふ也
三萬疋　●三百貫也諺　頭書云▲或說に云本朝に
錢十文を一疋と云ことは昔は駒疋錢とて駒をゑり
付たる錢を十文づゝのさかいめのへだてに入てつ
なぎしなり後の代九十六文を百文にさだめしより
此事すたれ侍り十文を一疋といふも駒疋の錢より
はじまれりとなり參
あし　●錢を料足といへは也野
めしける　●めしは食の字文　●もの喰事也今は上
人の詞にもちゆる也說
こと用にもちふる云々　頭書云▲此僧都のみに非
ず晉の陶淵明に顔延之が錢二十萬をくりたれば即
酒家に送て酒をとりて飲たる也かゝる事あしき事
ならば淵明がことも南史にものせず歐陽修も詩に
作るまじきがいさぎよき事なればこそ云傳へたる
也錢などの重寶なるは我ほしき物を求て志をやし
なふ故なりさるを當時の人は錢を持てさへ居れば
よきことゝ思ひて用立故をしらず左樣の世の習ひ
になりにける故に淵明や僧都のふるまひを不審な
ることの樣に思ふこと也錢の錢たることを知たる
故に僧都は芋を買てくひて錢の德を得たるなり盤
有難き　●三百貫の物をといふよりこゝ迄は兼好
の判詞也僧都の德のいたれるを褒る也說
白うるり　●由案此義種々異說多し先文段抄云な
ぐさみ草に貞德曰此段には此物語の三ヶの大事一
ヶ條こもりてありと云々即此所也と有予ひそかに
是を聞けり此大事といふは白うるりの義にてはな
し此一段が大事也むかしより此つれ〳〵草にては
しろうるりの有段が大事なりといひ來りしを聞あ
やまりて白うるりが大事かと思ひて數多の說共お
こるいづれもとるにたらずされども參校のために
あら〳〵是をしるす●或說にしろうるりとは白得
利と書されば白の字をなまなかと讀ば白得レ利と

書也言意は彼法師文盲不通にありながら剃髪染衣の姿になりてなまなか人を利益する事を得ると思ふかと殊外にあなとりそしりし詞也しかるを何物ぞと問れて有の儘に答へる事がならぬ故に我も知ずといふなり●盤齋抄云此段に口決のあるはしろうるりにてはなししかるをしろうりを此僧都いひそこなひてしろうるりといはれしを人に問れて我もしらずといはれし也これは白うりにて侍るといふか秘事なりとつたへぬると聞侍る此説不審に侍り其上われもしらずといはれたる故はあるものなれば相違なりなき事を口にまかせていはれしもの也●大全云しろうるりは説々有事にて殊外秘する也一義に云しろうと句をきりてよむが大事ともいへり又一義に云源氏の雲隱の大事これにかなへりともいへり源氏雲隱の事は一部の大事此卷にある事なれば習しる人まれなるよし承るしかるをしろうるりによくかなへりといふ事いかなる故やらん又一義に云貞德の説とて謂しろうるりを傳授せられざる人はしろうるりをいふかと思へりしかあるに非す德のいたれる故なりと云所なりかゝるわざ

を自由にしても一心の德こそ有難けれといふ義なり諺は禪林の十因に見えたりともいへり私云德の説は段の大意なり右の説々はしゐて義をもとめたりといふべき歟此正説はしろうかりと云が本なり昔は植字といふ物に致せしときかをるにとりちがへたると見へたりさてしろうかりにて義理をとらば盛親に異名を付らるゝ僧ならば思ひやるへじ愚癡うろんなるに顏の色白くしてうつかりとしたる僧にてこそあるらめさればこそしろうつかりとぞ聞えたり又つもしを略する事は歌書におほき事にてあつはれをあはれもつてをもてのたぐひ其數しらずありならひある事なりさて何物ぞと問ければ我もしらずもしあらば此僧の顏に似てんといひし心は義理も仔細もなき事を問し故にあさみて答たる心なるべし然とも教者禪家にかぎらず問答の習にかやうの答有事也思ひ合べし何物ぞと問しとき外にはなし此僧の事也との答也●又一説に此しろうるりは別に傳授ありさて此所は孟子の公孫丑にむかひて我浩然の氣を養ふとの給ふ何をか浩然の氣といふと問ふ時云ひがたしとこたへ給ふと同じ

心也彼は脩道性理の極致是は佛道心法の秘密なり容易の人に口授すべからずといへり●右の説々一理有といへども兼好の此所に書給ふ本意にはかなふべからず此一段の大事といふは別の義にてはなし只世間法を打捨て心法にのみ目をつけて行ふべしといふ事を人にしらせん爲に其證據に僧都の言行を書れけると見るが則此段の大事也

とは ●しろうるりとは何物そとなり壽

宗 ●こゝにては眞言宗なるべし増鐵

法灯 ●一宗の棟梁なといふと同し燈とは暗をてらすにたとふるなり諸　頭書云▲書言故事曰僧傳二度小師一謂二傳灯一注曰釋書譬喩謂下能破レ暗也句▲肇曰自行化レ彼則功德彌增法光不レ絶亦名二無盡灯一叢▲圓覺略疏懸談燈々相承明々無盡▲法花珠林迦旃延法滅盡偈曰法灯爲二已沒一正學已毀滅參▲杜子美詩曰傳灯無二白日一文

くせ者 ●曲者とは上はそしりたる樣なれど下心はほめたる詞也參

とき非時 ●ときとは日中午の時に齋食する也非時とは沙彌十戒の中の離非時食とて戒しむる是也

又過中不食ともいふ也其仔細は佛の弟子に迦留陀夷と申せしが檀越の家にいたり暮食をこひし時主人家にあらず夜闇に及て其家に宿せり主人歸りてこれを見ていはくおそらくは此人佛弟子にてはあらじこれ賊人ならんといひてころして馬糞の中にうづみけり世尊かれが咎にあらぬことをしろしめして目蓮をつかはしておさめしめ給ふ也これより非時食を制し給へりと也參 ●佛家の法に一食にて日中を過ては物を食ず或一人の沙彌ありて一度の齋飯にたへかねければ佛ゆるして晩にくはしむ是を非時とすくはしくは四分律に見えたり壽　頭書云▲毘羅三昧經曰佛爲二法惠菩薩一說二四食時一旦時爲二天食一午時爲二法食時一佛斷二六趣因一令レ同二三世佛一故制二日午一爲二法食正時一也▲僧祇律云午時日影過二一髮一瞬一即是非時文▲沙彌律儀要略曰不非時食解曰非時者過二日午一非二僧食之時分一也諸天早食佛午食畜生午後食鬼夜食僧宜下學レ佛不レ過レ午食上▲尼戒錄要曰若不レ能レ持二過午一當二晩食時一須下念二餓鬼苦一發中慈悲心上云々

いとはれず 不レ厭也人にきらはれぬ也諺 ●よの

つねならぬといふより一段の事を評論したる詞盤

德 ●德は學德也全 ●此一句肝要也芋頭を好むも能にあらず其外世をかろく思ふ條々皆人の好む所にあらずされどもつとむべき學問に達し德の至れる人なればかばかり私なるふるまひなれども寺中にもおもくおもはれ人にいとはれざると也兼好の心も此僧の行跡をほむるにはあらず德だにいたれば外の事は世人もゆるすならひぞといふ義をしるして教誡せる也無德の者是をまねて放逸をおこなふ事あらばかならず狂人なるべし諺

〔一段之統論〕●此段は上に大事を思ひ立人は其外になにもうちすてたるがよきと云事をいひたるをうけて僧都の我つとむべきことをし給へば其外はわけもなき人なれど人ゆるして萬ゆるしけると證人に出したるなり又僧都の芋をくひたるも常にてはなしよからぬ事也されども錢を惜まず無欲なるはよき也無欲なるは大事の因緣を智者にてしれる故なり盤 ●此段は前の段に道心を思立人の世にすて去がたき事あるを人のあざけりやあらんと遠慮することをいへり其遠慮する人のためにまづ道心をおこしつれば一大事を思ひたちたることはりを皆人しりてよろづのことをゆるすぞとの義なるべし文

〔六十一〕御產の時こしき落す事はさだまれる事にはあらず御胞衣とゞこほる時のまじなひなりとゞこほらせたまはねば此事なし下ざまよりことをこりてさせる本說なし大原の里のこしきをめす也古き寶藏の繪にいやしき人の子うみたる所に甑おとしたるを書たり

御產 ●后などの御產也参

こしき落す 甑(コシキ)の字諸 頭書云 ▲和名集云蔣魴切韻甑和名古之岐炊レ飯器也 ▲平家物語第三云后御產の時御殿の棟より甑を轉かす事有けり皇子御誕生には南へ落し皇女誕生には北へをとすを是は北へ落したりければ急ぎとり上をとしなをしたりけれども猶あしき事にぞ人申ける野

胞衣 ●女の後のもの丶事なり諸 頭書云 ▲神代卷及レ至ニ產時一先以ニ淡路州一爲レ胞野

ましなひ ●此所數說あり先一義 ●甑は子敷也胞衣をいたゞきいる物なるに生れさまには胞衣を子

がしきて居る也子生れてより子の敷たるえなのをりねば其まじなひにこしきをおとすといふ事か全 ◉こしきは腰氣とよみの通るゆへこしの氣をひきくたす心なり參 ◉こしきは米よりしたにあればこしきをとれは事すむなれは産のことすみたる心か又は子をうむはしもへ生るゝゆへにいげの上るをさぐる心かとも貞德のいはれし也加樣の事は了見なれば正說ならずといはれし也鐵　頭書云▲それまじなひと云ものはさま〴〵あれども皆實義もなきこと多し正月に野老を用るは老の字をいはひ齒朶はよはひの字をとり或は柑子を幸甚の義にかよはせ昆布をよろこぶ心といふたぐひ皆みなまじなひに似たり參
させる本說なし　◉まじなひなりといふと又皇子にもかぎらず下さまよりおこれるとのふたつ兼好の發明なり參
大原　◉大原といふも大腹と通するゆへ也是も産後の大腹になりて胞衣のとゞこほらずくだる樣にとの義なり諸 ◉又甲斐の國七ひこの里より米をとりよせて粥に煮て御産の時の供御にまふくる也會

孫と云縁也說
古き寶藏　◉儒書佛書圖繪日本の記錄歌書等にかぎらず種々の寶物をおさむるを寶藏といふ宇治の寶藏蓮華王院の寶藏東大寺の御藏などの類也野 ◉古き寶藏におさめ置たる繪雙紙などなるへし參
甑おとしたるを書たり　◉此まじなひ只天子ばかりの樣に人の思ひければ下々にも此まじなひしたる證據に書る也全
［一段之統論］◉此段はしれぬ事をしらせて世人のあやまりて心得ちがへしことをたゞして書り說 ◉此段は詩にいへる死と云はいかやう成物ぞと人うたがふ故に朱子列女傳の女の手にもてる物を見てこれなるべしと人にしめせり今兼好が甑をとすことを寶藏の繪を引て考へ合せらる實もとぞ覺ゆる野
［六十二］延政門院いときなくおはしましける時院へまいる人にことづてとて申させたまひける御歌「ふたつもし牛の角文字すぐなもじゆがみもじとぞ君はおぼゆるこいしく思ひまいらせ給ふとなり
延政門院　後嵯峨院の皇女なり壽　頭書云▲八十

二代後嵯峨院皇女御母大納言公經卿御女御名悦子
ふたつもじ　●この字を云かたち二畵なれば也旬
牛の角文字　●いの字をいふ牛の角の形に似れば也旬　頭書云▲假名遣ひにはこひしくとひの字を書といへと此時は其沙汰いまだ行れざるにやたとひさた有とも幼少の姫宮よませ給ふ事なれば少しもくるしからず明魏法師はすでにかな文字遣ひやぶりていゐをおえゑの類皆ひとつに書べしといへり野　▲いとひと通し用ひて苦しからざるにや顧阿が魚の十類の歌にもよめりあめ(鯇)ふり(鯽)てかはも(鱧)水ます(鱒)あち(鰺)こち(鯒)にふな(鮒)人こい(鯉)しこさば(鯖)さはら(鰆)じ是も鯉をこいしとよめる例も在焉　●事文類聚引ニ白氏文集注ー云鄭玄家牛觸レ墻成ニ八字ーとあり牛の角かきにあたりて其あと八の字のかたちあり然れば八の字をも牛の角文字といはんか皇女のいの字をいへるに似たり野
すぐなもじ　●しの字也諸
ゆがみもじ　●くの字なりかたちゆがみしゆへなり旬

こいしく云々なり　●いときなくおはします姫宮のあそばせる奇妙の御事なるべし文
[一段之統論]　●此段御幼稚と云姫宮といひ甚だ奇妙の御歌なれば爰に記す彦　●此段は心前と同しかかる歌の體もあると云ことをしらせたり古歌に「鼠のいゐ米つきふるひ木をきりて引きりいだすよつといふや是とあるはあなこひしといふことをよみたるなりねずみの家は穴也よねつきふるひは粉なり木をきり火きり出すはひなりよつとは四なり　義抄に謎警の體とねずみのいえのうたをいへり盤

徒然草諸抄大成卷之七

目次

〔六十三〕後七日の阿闍梨武者をあつむる事いつとかや盗人にあひにけるよりとのゐ人とてかく事々敷成にけり一年の相は此修中の有さまにてこそ見ゆなればついものをもちひん事おだやかならぬ事也

後七日　●公事根源云眞言院の御修法正月八日より七日おこなはる今年金剛界なれば明年は胎藏界にかはる〳〵修せらるゝ後七日の御修法とは此事なり天長六年に弘法大師大唐の內道場に准して眞言院を宮中にたてられて承和元年より大師すなはち此法をはじめ行る野　●禁裏年の始にまつり給ふ事なれど元日より白馬節會までは公事多き故に沙門參らずさるによつて東寺一の長者我本坊にて元日より七日迄行ひて八日より十四日迄七日の間禁裏の眞言院にて又祭るなり後七日の後の字此心にて唱ふべし諺　頭書云▲仁明天皇のとき大內中務省にて弘法大師此秘法を修すさて表を奉りて永代の規式をさだめんと申るゝによりて勘解由司の廳を改めて眞言修法院を立らる今の眞言院是也八日に開白して十四日の結願にあたりて大師請來の衲衣をき鼻祖附屬の五鈷を持して玉躰にちかづき二器の香水を加持して灌ぎ奉り又群臣にもそゝぐなり野

阿闍梨　●此修法をつとめ給ふ師の事なり文　頭書云▲名義集闍梨或阿祇利或阿遮梨耶唐言ニ軌範一隋言ニ正行一能糺ニ正弟子行一故野　▲楞伽經註解曰阿闍梨此曰ニ敎師一▲眞言宗には金胎兩部の職位を受る故に兩部の阿闍梨といひ天台宗には慈覺大師入唐請益のみぎりより胎金の外に合灌頂とて兩部不二の秘法をうくる故に三部都法阿闍梨と申也參　▲東寺の長者は阿闍梨なり仁和寺御門跡大覺寺御門跡隨心院御門跡勸修寺御門跡のかはり〳〵長者になりたまなふり盤

武者を　●甲冑を帶したる武者四門を警固して盜賊をふせぐなり諺

いつとかや　●盜人にあひし事は兼好時にもいつの御代ともしれずと見えたり但し安元年中以後に大內衰へてより眞言院のあたりまでも雜人まいりたり其比阿闍梨の法衣佛具などぬすみとりたるより武者におほせ警固し侍る事例となりたるものならん全

とのゐ　㊟とのゐは殿にゐると云訓の心なり禁中に夜番する事なり宿直とも直の一字をも書句　頭書云▲文選巻三十謝玄暉詩直ニ中書省一といへる題有其注に銑曰直謂下宿ニ於禁中一以備中非常上句

相　㊟相とは占人を相者といふ時の相の心にて吉凶のきさしあらはるゝ事なり参　頭書云▲說文曰相省視也▲又書言故事巻四相者類注視ニ人貌一而知ニ其貴賤一也句

おだやか云々　㊟年始の御祈禱修法なるに警固とかうして兵具を用てさはがしき事一歳の相おだやかならぬと也

［一段之統論］㊟此段は世の人武者を根本よりあつむるものと思ふが故にさなきことを知せたり末はつゐでにいひたるばかり也これ伊勢の國の鬼の段の心とかよふべし盤　㊟此段の心昔こそ兵を用ひたり盗人さへなくばいらざることに兼好思ひて書き給へる文章なるべき歟全　㊟此段兼好の本意は世も末になるゆへかく盗人もおこり物毎皆不作法になりゆくなりたゞ本へ立かへりて政さへすなをになるならば警固を用ひずとも賊人もあるまじき也是暗に世の道の行れざることをなげきて書ること言外に著し說

［六十四］車の五緒は必人によらず程につけてきはむるつかさ位にいたりぬればのるものなりとぞある人をほせられし

車の五緒　五緒はいつところに緒の付たる車といふ事也其付たる所はいづくにつくぞといへば車の天井に付てさげるなり其ゆへは車はとゞろく物なれば乗ゐる人ちからぐさにとりつき用る物也上ざまにてはさしたる事にてなければ記せるものなし下樣の者は終に見たる事なければ知もしらぬも傳授なりといひし也又七緒の車緒無事といふ事あり人のしらぬ事也つれ〳〵草にいらぬ事なればかゝず加樣の事歌書の大事にてはなきなり全　頭書云▲桃華蘂葉車部曰廂寛ニ尼眉一御直衣之時召レ之網代上白袖鵐中立板小八葉簾青薄青雨

絲䋈革五小簾青地錦緣白綾物見外御簾形內綸落入立板內押レ綾給如レ常緣錦金物皮

緒裏白綾

散物也

めつき青末濃簾下猶倣抄など勘に擯榔廂指の車の簾蘇芳編糸紫七緒小簾四枚四緒云々しかれば五緒はすだれのかざりなることとしられ侍り太平記に五緒の龍車に乗とあるも此事にや或說に世俗に御取車と

云は五緒車をあやまれるといへり七緒と云事もあれば貴人の車をうちませて五緒といはんこと如何にや猶可レ尋レ之文

五緒は ●車の五緒はとあるは文字に心を付べし此段の宗也此はもじにて車の事にはあらず緒のこと也其故は紫緒と云に習ある也女車は大方紅の緒也しかれば車の五緒はと書たる也さならねば五緒の車はとかくべき事なり全

必人によらず ●諸人の乗用有とさだまりたる事にてはなきと也句

つけて ●其身のほど〳〵につけてなり諺

極むるつかさ ●極位極官の事也其家々の先途をとげらるゝ事なるべし文 頭書云▲菊亭右大臣書禮曰攝家者以二關白一爲二先途一清華者以二一上一爲二先途一云々羽林名家もこれにて推量るべし文

或人仰られし ●頭書云▲二條家車記錄曰土御門大納言抄曰大八葉五緒長物見は極位の人是に乗ずしかるに近代多く乗用不レ可レ然事なりとあり此事を引用るにや諸

〔一段之統論〕●此段有職のしれぬ事をあきらめたる段也兼好が比に人によりて乗ると云説ある故に人によらずのるよしを云ふなり盤

〔六十五〕此比の冠はむかしよりははるか（一本にはの字　し）に高く成たるなりとぞ或人仰られし古代の冠桶を持たる人ははたをつぎて今もちゆるなり

冠 ●昔の冠も時代によりて少しのかはりは有説 頭書云▲本朝冠の始は人皇四代懿德天皇の朝に三冠一服を制す三冠は冕晃陽なり何も天子の冠也其後九代帝開化の朝に又三官を制す是臣下の冠也其以後三十四代推古の時に聖德太子十二階の冠を制し玉へりさて三十七代孝德の御宇に七色十三階の冠を制す厥后三十九代天智の御代に二十六階の冠を制し給ひける皆今の世の冠には異なり今の世の冠烏帽子は四十二代天武天皇の時より始まりけると也説 ▲本朝の古へ冠の制法代々に少しの不同あれども中古より唐國の衣冠をうつせり故に宋濂が日東曲にも千年猶効二漢衣冠一と作れりとなん野

冠桶 ●冠箱とて冠入物を葉をいれてまげ物にしてよく塗て梨地蒔繪などして箱の內を錦にて張てもたるゝ也壽 ●冠桶を一本には冠箱に作る

つぎて ●古代より高き故に冠桶へはいらず故に
上をつぐ也諸
今もちゆるなり ●前の段の衣冠より馬車に至る
までであるにしたがひ用ひよとの心こもれり増鐵
〔一段之統論〕 山案此段は上の段に車のことをい
へる詞の絲を以て冠のことを書りさて今の冠は昔
にかはりて奇麗になりたるなり古のは今の風には
あはぬぞと云て冠の一つを以て天下の萬事のをご
りゆくことをあげしめすものならじしかもはたを
つぎしの一句一段の肝要也たとひ冠こそ古にかは
りて美麗なりとも古の冠桶をはたをつぎて用るは
よきなり是も亦ちひさきとて作りなをさばいよ
〳〵驕奢のいたりなるべし彼論語先進篇にいへる
魯人爲長府閔子騫曰仍舊貫如之何何必改作の
意など思合すべし

〔六十六〕岡本關白殿さかりなる紅梅の枝に鳥一双を
そへて此枝につけてまいらすべき由御鷹飼下毛野の
武勝におほせられたりけるに花に鳥つくるすべしり
さふらはず一枝にふたつ付る事も存じ候はずと申け
れば膳部に尋られ人々にとはせたまひて又武勝にさ
らば己が思はんやうにつけてまいらせよとおほせら
れたりければ花もなき梅の枝にひとつをつけてまい
らせけり武勝が申侍しは柴の枝むめの枝つぼみたる
とちりたるとにつく五葉なゝどにもつく枝のながさ
七尺或は六尺返し刀五分に切枝の半に鳥をつくつく
る枝ふまする枝有しゞら藤のわらぬにて二所付べし
藤のさきは火うち羽のたけにくらべてきりて牛の角
の樣にたはむべし初雪の朝枝を肩にかけて中門より
ふるまひて參る大見ぎりの石をつたひて雪に跡をつ
けず雨おほひの毛を少しかなぐりちらして二棟の御
所の高欄によせかく祿を出さるれば肩にかけて拜し
てしりぞく初雪といへども沓のはなのかくれぬ程の
雪にはまいらずあまおほひの毛を散す事は鷹はよは
腰をとる事なれば御鷹のとりたるよしなるべしと申
き花に鳥つけずとはいかなる故にか有けん長月ばか
りに梅のつくり枝に雉をつけて君が爲にと折花は時
しも分ぬといへる事伊勢物語に見えたり作り花はく
るしからぬにや
岡本關白殿 ●關白左大臣家平公也 頭書云▲家
平公なり大織冠二十四代の孫近衞殿一流なり壽

系圖 道長公までは飛鳥川の段にくわし

鎌足—不比等—房前—眞楯—內麿—冬嗣—良房—

—基經—忠平—師輔—兼家—道長—賴通 攝政大政大臣從一—

—位宇治殿 師實 大政大臣攝政從一位京極殿 師通 內大臣關白從一位二條殿 忠實 大政大臣攝政從一位知—

—足院殿 忠通 大政大臣攝政從一位法性寺殿 基實 近衞殿攝政大政大臣從一位六條 基通 從一位攝政內—

—大臣普賢寺 家實 從一位攝政大政大臣猪隈 兼經 攝政從一位大政大臣岡屋 基平 關白左大臣從一位—

—深心院 家基 關白左大臣從一位淨妙寺 家平 關白從一位左大臣牛車兵仗身氏長者號三岡本一近衞殿長嫡—

但子孫略云々　元亨四年三月二十九日出家同五月十四日薨三十三

鳥 ◉鳥とは雉なりうちまかせて鷹の鳥といふは雉の事なり仝

一双 ◉二羽なり一番の事也諸

枝につけて ◉鳥の付樣くはしく首記す 頭書云▲付レ鳥枝の事柴高七尺五寸普通の柏木よりは葉せばく圓くして裏表に毛をひたり是を鳥付る柴と云也一說云たもん柴と云もの也年の內は立枝をへだてゝ雄を左にあけて付て雌をさげて付レ之年明ては雌を左にあげて付り春は雌を賞翫する故也付やう口傳あり或は柴を用といへども春は梅秋は紅葉につくること常の義也大臣大饗の時是を用ゆ又鷹野より人の許へつかはすには三四尺の柴の枝を刀めを付ずして本を相はしらかして付るなり一双を付るやうたしかに知人なし秦兼則說▲又四條大納言隆親卿の說柴のたけ六七尺雌雄一双をつくる也又大臣大饗元服移徙如レ此の時用レ之產所へつかはすには根びきの小松に付也義氏朝臣の說▲鷹野より人の許へ雉を送るには柴ならねども萩薄をはじめて何にても付也一說には松に鳩を付ることある山鳩也義家朝臣以後不レ付レ之鶉をば萩薄枝に付る小鳥をば紅葉の枝に付たり雀をば竹の枝に付るなり十月にはふし柴に付と云御鷹飼武久が說也 井見河海抄—壽

下毛野 ◉續日本紀などに下野の國をも下毛野と書ども爰にては氏と見るべし野 頭書云▲新撰姓氏錄云下毛野朝臣崇神天皇皇子豐城入彥命之後也文

武勝 ◉傳記未レ考

花に鳥云々 ◉武勝が答へ申詞也諸

すべ ◉首尾と書說

膳部 ◉關白殿臺所人などに尋ね給ふ也參 ◉御膳

の事をとりおこなふからに魚鳥のうへはしるべき事とおぼしめして也文 ●武勝が申所決せん爲に吟味し給ふ也全
つけてまいらせけり ●武勝がおぼえしやふに付たるなり全
武勝が申侍し ●是より鳥柴の故實を武勝がいひしまゝに書記せり文
つぼみたる云々 ●武勝習し心は鳥は花を散すものなれば花に對して鳥付ぬと心得たるべし全
五葉 ●松の五葉なり諸
返し刀 ●木竹によらずはす切にきりて其うらをきりそぐを返し刀と云諸
ふまする ●鳥の足をおろして諺
しゞら藤 ●つゞら藤の事也古 ●鳥一つを枝に藤にて二所ゆひ付る也諸
火うち羽 ●鳥の羽先にすぐれて長き羽あり火打のなりに似たり諺
牛の角 ●藤の先を諺
ふるまひて ●擧止と書てたちふるまひとよむ時の心なるべし容貌威儀をつくろふ事也參

大みぎり ●砌の字也庭の事古
石 ●廣庭の側軒の下の石諸
雪に跡をつけず ●これは正面よりまいらずわきよりつたひ參るよし也雪をよくる故也此朝の雪賞翫尤なり或本に盤抄跡をつけでと書たる有誤也石をつたひてといふて文字にあたるすもじなれば也てには大事の物也味ふべし全
雨おほひの毛 ●よは腰にある毛雨をおほふ爲と也
二棟 ●棟二つあるやうに作りたる御所也是も攝家の樣也文
高欄 ●地に有時は欄杆といふ地をはなれてそらにあれば高欄といふらんかんに鳥柴の枝をよせかくる也參
錄 ●錄とは御褒美に下さるゝ物なり大かた御衣を出さるゝ事也
初雪といへと沓の云々 ●雪は沓のかくるゝ程になければ霜のうちにして賞翫ならずと也全 ●雪の日献ずるは雪には雉がとるゝ物なれば也されども沓のはなのかくれぬ程の雪にはおもてむきよりは

まいらぬ御内所からあぐるぞさて雪の日にまいるいはれは人皇五十八代光孝天皇狩にすき給ひて雪さへ降れば鷹野に出給ふ其例を以て雪がふれば御鷹野に御出あつて御鷹のとりたるていになぞらへて也それゆへに雪が降ねば御出なきによつて雪のふらぬ時はまいらぬなり註と申き　●是までは武勝故實を申あぐる詞なり全

花に鳥つけず　●花といふより終まではあるとなきとの両本有諸　●此段のはじめに下毛野武勝が花に鳥つくるすべ知候はずといひたるを伊勢物語をひきて兼好の不審したる詞也壽　●此所種々難あり統論の下記す

長月　●九月のこと也前に注す

伊勢物語に見えたり　●證據に伊勢物語を引けり頭書云▲伊勢物語に昔しをほきをほいまうち君と聞ゆるをはしけりつかうまつるをとこ長月ばかりに梅の作り枝に雉をつけて奉「我たのむ君かためにと折花は時しもわかぬ物にぞ有けるとよみて奉りければいとかしこくおかしがり給ひてつかひに祿たまへりけり野　▲をほいまうち君は忠仁公天安元年二月十九日太政大臣一五十　つかうまつるをとこは業平也ときしもわかぬとは作枝の梅なれば也又雉をたちいれてよめり忠仁公を祝ふ故に君かためにをれば花もときはになれると云也右牡丹花老人の説なり肖聞抄にあり文

作り花は云々　●まことの花にあらねば是に鳥つくるくるしからぬにやと兼好了簡也文　●兼好いせ物語を引し心は武勝を難じたる文章の幹なり武勝花に鳥つけぬとの義は鳥は花をちらす故の義ならば難なり其故は御鷹の鳥賞翫なれば花は時のかざりのみなり伊勢物語の心も花のうたなれども雉と云題をかくしてよめれば雉賞翫勿論なり又兼好作り花はくるしからぬにやとたすけたる詞なれども是は歌人のならひなり作り花時の花すこしも義理におひてかはる事なし花に鳥付る證據いせ物語なるべし全

「一段之統論」●此段鳥柴の故實をいへり前段とをなじ心なり文　●此段は恐れながら兼好法師老耄の失念にて花に鳥はつけぬ事といふ事を不審せられしと見へたり武勝が花もなき梅の枝に貴命そむき

がたくてつけたるにてもしらるべし花を鳥にふますることは古人のいたむ事なれば我宿の花ふみちらす鳥うたんと古今にもよみたり武勝らさへ心得たることを兼好の不審せられたるは別の深き義もあるにやと見れど此外にふかき義もあるべからず只武勝が家の習ひに奥義あるかと不審出來て此段はかゝれしもの也此花に鳥を付ずと云より以下かゝずしてをきたき義なりこれほどのあやまちありとてもをろかなる兼好とは申がたし佛語の外は菩薩の論にもすこしづゝのあやまりはあるものとうけたまはり及ひ侍し貞●此段兼好のあやまてりといへども一偏には難じがたし細川幽齋の説に枝に鳥を付ること禁中方にては一羽鳥をばつけずと也一番をつけて生て居る心持になぞらふ也ことに此所は關白殿から上らるゝなればひとつ鳥は賞翫せぬなりされとも鷹飼の家にては二つは付ぬなりそれを如何にといへば鷹の二つ鳥を一度にはとらぬものなればなりされども二つ付る事もあるぞ先一つ取たるを付て又其跡に取しを後に付る也先後の付け樣に習ひあれども一度に二つ付ることはなきなりさて花に付ぬ事は武家には花にも鳥を付るぞ公家方にはつけぬぞ其所以は公家は歌の家にて雪月花の三つを賞翫し玉ふ中にも花を第一とし玉ふ也しかるに花に鳥を付れば鳥より花か輕くなるゆへなり其上古今の歌など思合すべし武勝此ことはりを知ぬにてはあるまじけれども高位の御尋ゆへにはゞかりて只しらぬよしを申し上たり兼好もいまた鷹のことはくはしく知り給ぬ故に如此うたがひて書給ふものならん去ども作り花には付る習もありとぞ其家の人に尋ぬべし説

〔六十七〕加茂の岩本橋本は業平實方なり人の常にいひまがへ侍れば一年參りたりしに老たる宮司（ミヤヅカサ貞徳點　ミヤツコ幽齋點　ミヤジ常ノ本ノ點）の過しをよびとゞめて尋ね侍りしに實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば橋本や猶水のちかければとおぼえ侍る吉水和尚「月をめで花をながめし古へのやさしき人はこゝに在原と」よみ給ひけるは岩本の社とこそうけたまはり置侍れどをのれらよりは中々御存じなゞどもこそさふらはめといとうや〳〵敷いひたりしこそいみじく覺えしか今出川の院近衛とて集

共にあまた入たる人はわかかりける時常に百首のうたをよゝみて彼二つの社の御前の水にて書て手向られけるまことにやん事なき譽ありて人の口にある歌おほし作文詩序なゝどいみじくかく人なり

岩本橋本　㊟岩本橋本ともに加茂の末社　頭書云▲神社啓蒙六曰岩本橋本神社在二山城國愛宕郡一賀茂別雷皇神之末社也▲岩本在二片岡社與二澤田社之間一也蓋岩上立二神籬一故有二此名一▲橋本在二一鳥居北土屋西一神前有二流水一架二石橋一也故名二于神一▲神祇拾遺曰住吉和歌之兩神也業平實方常拜二件二社一祈二和歌之秀一矣遂家風成譽溢二海内一之故世人稱爲二兩神化現一參

業平　㊟在原業平朝臣也　頭書云▲人皇五十一代平城天皇之御子三品彈正阿保親王之第五男故號二在五中將一母桓武帝御女伊豆内親王天長三年詔賜二姓在原朝臣一元慶四年正月廿八日卒年五十六事迹詳見二三代實錄一句▲神社考曰世傳在原業平貌閑雅而善二和歌一殆乎和歌之神也一旦入二吉野川上一而不レ知所レ終見二河海抄一參▲三條坊門の南高倉の西に家在てちまき柱と云物たてたりしよし長明の無明抄に見えたり大和國石上の在原寺に業平の墓はありとかや文▲系圖別に記すに不レ及

實方　㊟右近中將藤原實方なり　頭書云▲小一條左大臣師忠公の孫侍從定時の子にて右近の中將までのぼりて歌人なりしを一條院の御時大納言行成と口論の事によりて陸奥に左遷せられすなはち長德四年十一月三日彼地にて卒しぬ其後西行下向して「朽もせぬ其名ばかりをとゞめ置て枯野のすゝき形見とぞ見るとよめり此歌新古今にのれり詣▲山案故事談曰一條院御時實方與二行成一於二殿上一口論之間實方取二行成之冠一投二棄小庭一退散行成無二驚氣一靜喚二主殿司一取二寄冠一擺レ砂著レ之云坐左道公達哉主上自二小蔀一御覽行成者可二召仕一者也而被レ補二藏人頭一實方者看二歌枕一被レ任二陸奥守一於二任國一逝去云々▲又實方馬に乘て奥州名取の笠島道祖神の前を過けるとき下馬せよと人のいひけれともきかず馬俄にたふれて實方ともに死けり其社のそばに埋む其靈化して雀となりて王城に飛來り殿上の臺盤に入てなきけるとなん野

鎌足―不比等―房前―眞楯―内麿―冬嗣―良房―

┃基經━忠平（これまでは飛鳥川の段に委し）━━師尹（正二位左大臣）定時（侍従従五位上）┃
┃實方（陸奥守左近中將正四位下歌人）

いひまがへ　●岩本と橋本とは本より和歌の兩神なり業平實方の兩人此二神にたび〳〵まふでられし也いづれを業平信じいづれを實方仰れしとわきてしれざる也しかれども業平實方をば此兩神の化現といひつたふとなれば此二人の本地は此二社なりといふ心より岩本橋本業平實方なりといへる歟うちまかせて岩本は業平橋本は實方なりといふ義にはあらず參

一年　●兼好の參詣して也諺

尋ね侍りしに　●兼好時代に分明ならねば問給ひし也全

御手洗　●御手洗は神山より出て片岡森などを過てながれゆく川也文　●扨御手洗と云は加茂のみにかぎらず神前を流るゝ河をすべていふ也諺　頭書云▲京極御息所の歌合の歌に「春日野の松し枯ずばみたらしの川の流もたへじとぞ思ふ句

影のうつりける　●緣起にかく侍ればといへる義也句　●宮司證據を引ていふ也盤

おぼえ侍る　●岩本の社も御手洗川のむかひの岸にて水邊ながら橋本猶水にちかければ是やそれならんとの心也文

吉水和尙　●粟田口靑蓮院の慈鎭和尙也參　頭書云▲法性寺關白忠通公子也久壽二年亥四月五日生法諱道快養和元年十一月六日改ニ名慈圓一山門六十二代座主（自ニ義眞座主一六十二代也）居ニ東山吉水一嘉祿元年九月二十五日滅年七十一嘉禎三年三月八日諡ニ慈鎭一野吉水は今の丸山也

▲系圖（前關白殿の段にくわし）

忠平（右實方の系圖に在）師輔━━兼家━道長━━賴通━━師實━┃
┃師通━忠實━忠通━慈圓

和尙　●聖道にてはくわしやうとよみ禪家にてはおしやうといふ也壽　頭書云▲和尙者法印大和尙位也順和名曰法印大和尙位僧正位也法眼和尙位僧都位也▲希麟法師續一切經音義曰和尙正梵語塢波地耶此曰ニ近讀誦一謂此尊師爲ニ弟子一親近習讀者也舊翻爲ニ親敎一良以彼土流俗曰ニ殟社一此方訛轉謂ニ之和尙一相承既久翻譯之者順ニ方俗一曰參

めて　●めでは愛する義なり野
やさしき　●業平一生月花に心をよせやさしき歌人なりと讃だんして此社にありはらと秀句にてつづけたる歌也全　●業平の歌に月をもめでしとよみ花にあかぬなげきはいつもなどもよめり文
在原　●ありわらとよむつねの事なれどかな物にてはありはらとよむ也句
岩本の社　●岩本の社へよみ手向給ひける也全
うや／＼敷　●恭の字也俗にいへる慇懃の義に通ふ也句　●岩本は業平なる事を古歌を證據に引てうや／＼しくつゝしみ兼好に語る宮司が詞也全
覺えしか　●かの字すみてよむべし哉の義なり句
●右の宮司の理りにて兩社のわかちよく聞えたる故に兼好の感じたる詞也諺
今出川の院　●是より近衛局歌人にて此兩社を信じたる事を書る文　●龜山院（人皇八十九代）の后也諸　頭書云▲龜山院の后常盤井相國實氏公の孫中宮嬉子也即西園寺公相公の御女なり弘安六年八月十三日爲ﾞ尼（三十一歳）文保二年四月十五日崩年六十七壽
▲系圖

師輔（師輔以上は吉水和尚の系圖に在）―公季―實成―公成―實季―公實―
（これまで右良覺僧正の段にくわし）通季（正二位中納言 西園寺一流）―公通（従二位大納言）―實宗（正二位…）―
公經（従一位太政大臣）―實氏（従一位太政大臣）―公相（従一位太政大臣）―女（従三位 嬉子）

近衛　●近衛局といふ官女也　頭書云▲近衛局也大炊御門庶流大納言伊平女也伊頼卿覺道上人實伊倚正などの妹なり▲井蛙抄六曰近衛局九歳の時より厚氷といふ歌をよみ續古今よりこの方五代の勅撰に進て歌數もあまた入詩なども作り兼作集（日本の詩文を集たるなり本朝書目も二十巻のよし見ゆ）にも入佛法にも立入一生不犯の禪尼なり法華經十萬部よまれうるはしく宮仕などもせず續古今の時五月に菖蒲重の衣きて今出河院中宮と申にまいりて權大納言と申されき歌ことにめづらしく優美によまれし也新拾遺今出川院近衛「恨ても猶したふ哉こひしさのつらさにまくるならひなければ野

師實（これまでは右吉水の系圖にくわし）―經實（大炊御門正二位權大納言）―經宗（正二位左大臣）―頼實―
（従一位太政大臣 六條牛車兵仗）―頼平（鷹司正二位中納言）―伊平（正二位權中納言）―女（近衛局 權大納言）

集共　●歌の撰集共也参　●五代の撰集に歌入し也諸

人の口にある歌云々　●名歌とて世にとなへもてあそふ事なり諸

［一段之統論］●此段は始めには上段をうけてしれぬことをあかし終には信のふかきは其しるし有事をいひて次々の段をおこしたり盤●此段業平實方の岩本橋本を信じたりしことを述て末に近衛局のことを引て眞實に此神を信ぜられしによりて其誠の感ある故に名歌をあまた讀出されし事を記て次の段の端をおこせるなり諺

［六十八］筑紫になにがしの押領使なッどいふ樣成者ありけるが土おほねをよろづにいみじき藥とて朝毎に二つゞゝやきてくひける事年久敷成ぬ或時館の内に人もなかりける隙をはかりて敵をそひ來りてかこみ責けるに館の内につわもの二人出來て命をおしまずたゝかひて皆追返してげりいと不思儀に覺えて日比こゝに物し給ふとも見ぬ人々の戰し給ふはいか成人ぞと問ければ年來たのみてあさな〳〵めしつる土おほねらにさふらふといひてうせにけりふかく信●致の字也をいたしぬればかゝる德も有けるにこそ

筑紫　●九箇國をすべていふなり諺

なにがし　●其名たしかならぬなり句

押領使　●一任四ヶ年とて立かはる國司にはあらで二郡三郡なと代々おさめ居る者なり今世の地侍といふ類文　頭書云▲東鑑七曰鎭守府將軍兼陸奥守從五位上藤原朝臣秀衡法師出羽押領使基衡男同九日泰衡文治三年十月繼二父遺跡一爲二出羽陸奥押領使一管二領六郡一野

いふ樣　●其類のよし也全

土おほね　●土おほねは土大根の事なり諸　頭書云▲和名曰爾雅集註曰葍音福和名於保爾俗用二大根二字一根正白而可レ食レ之兼名苑曰萊服本草曰蘆菔　孟銑食經曰蘿菔今按皆畠之通稱也野

いみじ　●美の字也

やきて云々　●大根をやきてくらへば藥のよし醫書にも有　頭書云▲宜禁本草をよみて見ればまことに萊菔根はからく甘して毒なしことに炮煮して服せよとあればやきて食けるも醫書をかんがへたるゆへなり参

館の内　●屋形の内にといふ意也　頭書云▲集成客舍周禮五十里有レ市市有レ館館作レ舘古

をそひ來りて　●襲來と書●軍する人も兼て互に時どりをするものなるにさもなくて不意におしよせてたましてうつを襲といふなり參　頭書云▲春秋哀公二十三年秋齊侯伐レ晋冬齊侯襲レ莒傳曰輕行掩二其不備一又趙氏曰凡師有二鐘鼓一曰レ伐無二鐘鼓一曰レ襲諺

見ぬ人々　●萬事をし給ふとも見えぬ人々といふ心也諺●日此にたのみたる人にてもあらず見知たる人にても抱置たる人にても又此あたりに住居する人にてもあらぬなとゝ云事を此物と云字にこめて見る習ひ也種々の事を攝したり全

問ければ　●押領使が二人の兵に問ことば也文

あさな〳〵　●朝ごとゝいふに同じ文　頭書云▲勸心往生論曰傳大士云朝々與レ佛起暮々抱レ佛睡參▲古今の歌に一野邊ちかく家居しおれば鶯のなくなる聲はあさな〳〵きく句

めし　●食の字諺きこしめしつるなり句　前に注す

土おほね　●大根等也二人なる故にらといふ也參●山案兵二人と書しを前の二つゞゝといふにかけてみるべしもふけて書ならん

ふかく信云々　●此一句一章の肝心なるへし昔親に孝ある人のために寒谷の中より筍生ずるは陽和の氣のなすにあらず河の水酒の味と變じて軍旅をなつけしも麴のよきにあらずみな信力のいたす事なりと古人もいひをけり令押領使が大根をつねつね心にわすれぬ故にかく無情の物も寄特をあらはせり是おほねのいたす所に非ず信力のいたす所なりと也佛神の感應はましてと云心成べし參　頭書云▲この信の一字は佛家の茶飯なり菩薩の五十二位の階級も十信を始に修行し聲聞の五根も信根先にをれり華嚴經には信は道元功德母と說給へり參▲夫人として信なくんばたとひ道を修行しても何の益かあらん佛弟子智惠第一の舍利弗も始め信のなき内は成佛し給はす後に法華の功德ふかきを聞給て一心に信仰し給ふによつて終に華光如來となり給へり故に釋尊の曰汝今成佛すること智の致すところにあらず只信の一に歸する故なりと舍利弗だもしかり況や凡俗に於てをや論語にも孔子曰人而無レ信不レ知二其可一也大車無レ輗小車無レ軏其何以行レ之哉又曰兵食倘可レ去信不レ可レ去といへり說

▲皇朝類苑六十八云菜品中蕉菁菘芥之類遇レ旱其操多結成レ花如ニ蓮花一作ニ龍蛇之形一此常性無レ足レ怪者一熙寧中李賓知ニ潤州一園中菜花悉成ニ荷花一仍各有ニ一佛一座ニ于花中一形如ニ雕刻一莫レ知ニ其數一暴乾レ之其相依然或李君之家奉レ佛甚篤因レ此有レ異野

[一段之統論]◎此段は上の段に近衞局が爾社を信じ歌道の冥加に叶ひし事をいへるにうけて土をほねといへども深く信ずるときは其德ある物語を書傳へとかく人は信か萬行の根本なるいはれをしらしめ又次の段へうつりて書寫上人の法華信功のつもりて六根淨にかなへることを書る皆同意にて侍る句

[六十九]書寫の上人は法華讀誦の功つもりて六根淨にかなへる人なりけり旅のかりやに立いられけるに豆のからをたきて豆を煮ける音のつぶ〳〵となるを聞給ひければうとからぬをのれらしもうらめしく我をば煮てからきめを見する物かなといひけりたかるる豆がらのはら〳〵となる音は我心よりする事かはやかるゝはいかばかりたへがたけれ共力なき事なりかくなうらみ給ひそとぞ聞えける ◎萁(マメガラ)の音かく聞へし也

書寫の上人 ◎性空上人なり幡磨の書寫山に居住し給ふ故に書寫の上人といへり句 頭書云▲性空平安城人從四位上橘善根子也母源氏空十歲持ニ法華一三十六出家乃往ニ日向國霧島一結レ廬而居永延二年化人來告曰幡磨書寫山是鷲嶺一峰也居レ此者發ニ菩提心一得ニ六根淨一空至レ山結ニ庵西洞一茅薦爲レ席紙楮爲レ衣山鳥野獸來自馴創レ寺曰ニ圓敎寺一空於ニ山中一每年三九月轉ニ法華一爲ニ國民之福一增賀法師在ニ多武峯一求ニ上紙一空送レ之賀歎息曰性空者其淨ニ六根一者歟寬弘四年三月十三日誦ニ法華一而寂年八十元亨釋書十一感進篇ニ載ス撰進抄等にあり諺

▲系圖

敏達天皇(人皇三十一代)—難波親王—大俣王—美好王—諸兄—

—奈良麿—島田麿(是まで[illegible]賈吾ハ所に委し)—有王(正四位下)—綏氏(正五位下[illegible]和)—

—守善根(參議從四位上 下美濃守)—性空(俗名月角從五位上上總介歌人新古今集續後撰集に入る)

六根淨 ◎眼耳鼻舌身意也諸 頭書云▲法華經法師功德品曰爾時佛告ニ常精進菩薩摩訶薩一若善男子善女人受ニ持是法華經一若讀若誦若解說若書寫是人當下得ニ八百眼功德千二百耳功德八百鼻功德千二百舌功德八百身功德千二百意功德一以ニ是功德一莊ニ嚴

六根ニ皆令ニ清淨ナラ下略 又同經曰以レ要言レ之三千大千世界中一切内外所レ有諸聲雖レ未レ得ニ天耳一以ニ父母所レ生清淨常耳ニ皆悉聞知上下略文 ○性空法華經十萬部讀誦し給へる功德つもりて六根淨にならせ給ふとなり全

かなへる人也 ●增賀法師の上紙をもとめられしを性空の居ながらよくしられしは意根淨也この故に釋書に能知ニ他心一とものせたり又此草子に豆の音をきかれしは耳根淨をさとれる也鼻舌身の清淨も是になぞらへしるべし天台大師の文句に六根たがひにもちゆるむねをあらはし給ふにて心得れば目にても音をきゝ耳にても物を見給ふなるべしなどか鼻のかぎ舌のあぢはふのみにかゝはらんやねなしかづらの根なくてよくそだち蟬の口なくてよくなき魚の耳なくてよくきゝ蛇の足なくしてよくはふたぐひなるべしげにも觀世音とは世の音を見ると云事也と也參 ●法花經を讀誦する功德により て六根淸淨になる事法花經の法師功德品に說り文

豆を云々うとからぬ ●豆のからは豆ともと同根生にしてうとふなきにまめがらわれを煮て辛苦なる目を見するは曲なしとうらむる義也古 ●其豆を煮る者かくのごとく耳へ入るなり諺

をのれらも ●豆がらをさしていふ也しもは助字なり文

[一段之統論] ●此段いよ〳〵前の段をつゝけて性空の法華讀誦の功のあらはれたることを記して今の人も信心懈怠なき時は其驗のあらんことを教ゆ諺 ●山案此段をは魏曹植の七步詩を以て書ると野槌などにはいへり世說新語卷上曰文帝嘗令ニ東阿王一七步中作レ詩不レ成者行ニ大法一應レ聲便爲レ詩曰煮レ豆持作レ羹漉レ菽以爲レ汁萁在ニ釜下一燃豆在ニ釜中一泣本自同根生相煎何太急帝深有ニ慚色一梁劉孝標注曰魏志曰陳思王植字子建文帝同母弟也云々 ●今此故事よくこゝへかなふといへども貞德の說に此故事を以て此段を書たりと見るべからず此上人の六根淨にかなひたまへること人にうたがはせじがためにかゝれしと見えたり又季吟云古今の後序山谷の序の體に似たり倭漢此類多し又盤齋曰曹植がかく作りたるも理にかなひたる事なるべければ僞りにはあるまじきなれば上人のかく聞給ふ證

據なるべしされどこれはをのづから通じたると心得ぬべし上人のかく聞給ふ事のある故に曹植が詩もまことしく思はれ曹植が詩あるゆへに上人の事もまことしく思ふべきなり本意とする處は信心のふかきは其益のあるよしなり又新注の説に此兩段の意は平人は疑ひをまぬかれ難し天地の道をよくさとりたる大人にあらずば知がたし世の無の見に陷たる儒佛の學者皆狐疑を生じて兼好の意を傷る嗚呼哀哉なげきても猶あまり侍り其磧礫に翫て玉淵を窺ぬ者はいまだ驪龍の蟠所をしらずと左太冲がいへること耳にとゞまりてをぼへしか彼無の見の輩は如何ぞ押領使が年來の信心にて大根たちまち兵と化し上人法花の功德にて豆の物いふを聞給ひし地位を知らんや夫天地の感應の理は易の大傳にも見え侍る若感應なきものならば聖人の天地山川先祖の神をまつると云事も有まじ亦神も廟にいたるといふ事も侍らじ我心の誠だに致しぬれば鬼神の應ずること必然の理なりと云り此説最殊勝也予も申し度ことあれどしばらくこれを略す

〔七十〕元應の淸暑堂の御遊に玄上はうせにし比菊亭のおとゞ牧馬を彈じ給ひけるに座につゐて先柱(チウ)をさくられたりければひとつ落にけり御ッふところにそくいをもち給ひたるにてつけられにければ神供のまいる程によくひてことゆへなかりけりいか成意趣かありけん物見けるきぬかづきのよりてはなちてもとの樣にをきたりけるとぞ

元應　●九十五代後醍醐天皇の年號也兼好在世の時代也參

淸暑堂の御遊　●天子御一代に一度大嘗會をおこなはせたまふ時淸暑堂の御神樂と云事有て其後御遊ある事なり御遊には催馬樂なり文　頭書云▲拾芥中末曰大嘗會五節於二此所一行レ之野▲北山抄曰御二淸暑堂一有二御遊事一其儀堂中間設二御座一右立下置物御机御後及兩邊於屛風上軒廊雙行設二王卿座一其南横敷二侍臣座一天慶九年例如レ此下略　宸儀御二御座一殿上王卿依レ召著レ座即給二酒肴一寬平殿上記曰召二悠紀主基御藏倉院儲二御琴各一面并管絃器一先彈二和調一唱二神歌一次變調奏二律呂歌一下略

▲一條禪閤御說にまづ淸暑堂の御神樂あり淸暑堂は大極殿にて被レ行の名なり官廳にて行るゝ時は渡廊を以て其所とす然ども猶淸暑堂の御神樂と云

つけ侍也主上は御束帶にて簾中の大床子の御座に出御あり執柄大臣其外所作人ばかり著座す神樂の後御遊あり神樂の曲は縒合阿知女榊星三首朝倉等なり御遊には安名尊伊勢海など常のごとし或はつけものなどあり云々▲季吟曰御遊のつけ物とは催馬樂に笙箏篥などをあはすこと也其時琵琶は在べし神樂にはなきこと也文

玄上　●又玄象とも書也琵琶の名なり淸濁の兩音あり諸　頭書云▲禁秘鈔曰玄上累代寶物置ニ中殿御厨子ノ根源樣人不レ知之掃部頭貞敏渡唐之時所レ渡琵琶二面其一歟紫檀直甲也大宋人云紫檀者大樣不レ可レ過ニ六七寸ノ直甲之條不レ信云々但此甲非ニ只物紫檀ノ也凡此琵琶云レ體云レ聲不可說未曾有物也爲ニ靈物ノ人爲レ跡之時有ニ貴人ノ如何跡にはするぞと云入ニ人夢ニ皆著ニ直衣ノ人也靈物中越レ他以ニ不淨手ノ不レ可レ取昔無レ覆自ニ近比ノ有ニ沙汰ノ有ニ覆幷臺ノ(紫唐綾無文也臺摺レ貝)此琵琶靈驗內裡燒亡之時飛出撥面文消所々有ニ赤色ノ不レ知ニ其繪ノ代々有ニ沙汰ノ未レ決俊房云良通之琵琶移ニ玄上ノ彼撥面之不レ可レ違彼唐人打レ毬形也或云玄象吞ニ靑鉢之水ノ所謂號ニ玄象ノ又玄上宰相獻ニ延喜帝ノ仍號ニ玄上ノ兩說也但妙音院入道付ニ玄上說ノ歟野

菊亭の大臣　●左大臣兼季公の御事也諸　頭書云▲後西園寺太政大臣實兼公の息兼季公也

▲系圖

西園寺公相(是までは右の今出川の所に記)　實兼―兼季

牧馬　●琵琶の名也壽　●撥面に牧馬を繪かく故に名付野　頭書云▲古事談曰牧馬與ニ玄上ノ一雙名物也時人不レ辨ニ勝劣ノ爰有ニ信義(時雅三位息)信明(博雅三位息)兩人ノ不レ知ニ勝劣ノ初信義彈ニ玄上ノ信明彈ニ牧馬ニ更無ニ甲乙ノ信明彈ニ玄上ノ信義彈ニ牧馬ノ其聲雲泥故時人皆云信明超ニ信義ノ玄上勝ニ牧馬ノ云々野

先柱を　●琴にてはことぢとよみ琵琶にてはぢうといふ琵琶の柱はもとより四つありめくら法師の柱は五つ有なり野

さぐられたり　●所作を執し給ふ故にまつ柱を氣遣ひ給へるなるべし文　●此義此段の眼目なり用心諸藝にわたるべきなり壽

一つ落にけり　●前かど能付て置れたる柱一つ落にける也琴の柱をば付ねども琵琶は絃高きによつ

て下を付ざればたをるゝなり諺

そくい　●續飯をかねてもち給ひしほどの用意ふかき人なる故に又柱にも心つきたり參

神供　●大神宮へ供御をあげらるゝ間なり句

よくひて　●晞の字參

ことゆへなかりけり　●彼神供の程に柱の續飯よく干て異なる故もなく琵琶の役を勤め給ふと也

物見ける衣かづき　●今も節會などに官女ならねど物見る女房の衣をかづきてあまた有也文　●衣被と書野

はなちて　●いか成仔細のありしはしらね共柱をひとつ放てもとの様にをきたりと也此意趣を菊亭殿へ女人の意趣有しといふ說は好ましからぬ義なり參

〔一段之統論〕●此段は上の段に何事も其道に志深ければ其德そなはりて自ら妙をうる事を云しをうけて此大臣の柱の落たるを探りつけ給ひて續飯にてつけて其役義を首尾よくつとめすまし給ふも琵琶に志のふかき故によつてなりと云ことを書て萬の事に深く心をつけて愼むへきことを敎ゆるなり

說●此段かねて用心思慮すべきことをいふ諸事此心得あるべしいつぞや室町家將軍の時何阿彌とかやいふ同朋に畫軸をかけさせられけるに壁の釘をさぐりて見ければ其まゝ落けり打なをして後に軸を開てかけゝると或人の語り侍りしを思ひ出ぬ又近比人の語りしはある猿樂の山伏のかたちになりていのりするとてあまりつよく珠數をすりきりて懷の中よりこと珠數をとり出しなをいのりける用意の所はさもあるらめわざとたくみてせんはいかが侍らん野

〔七十一〕名を聞よりやがて面影はをしはからるゝ心地するを見る時は又かねて思ひつるまゝの顏したる人こそなけれ昔物語をきゝても此比の人の家のそこ程にてぞありけんと覺え人も今見る人の中におもひよそへらるゝは誰もかく覺ゆるにや又いか成折ぞ只今人のいふ事も目に見ゆる物も我心のうちもかゝる事のいつぞや有しかと覺えていつとは思ひ出ねどもまさしく有し心地のするは我ばかりかく思ふにや

面影はをしはから　頭書云▲熊孺登贈二俟山人一詩一見二清客一慨二素聞一有レ人傳二是紫陽君一野

おしはからるゝ ●誰と名を聞てはこのやうなる顔ならんと思はるゝもの也諺 ●其名を聞て推量したる顔したる人こそなけれ
人に逢たる時は兼ての顔したる人なし諺
にや ●にやとゝがめて兼好は此やうに思ふとなり諺

まさしく有し云々 ●人のいふ物語も目にふるゝ物もいつぞや我身にも此やうの事ありつると思ひながらたしかにはおほえぬとなり諺

［一段之統論］●此段ありのまゝ成ことを書て下ごころにはものを推量してはいはれぬことなり名を聞よりやがて面影はをしはからるゝ心地するを見るときは又兼て思ひつるまゝの顔したる人のなき如くなりとの義なりかく書事は上段に大臣の随分用心し給ひけれども又はなつべきとは用心の及ばざりしはとがに非す推量の外なる事も有ものにてあるほどにとの意也盤 ●南案此段強て上の段へつづけて見るべからず此段の意はすべて一切の事の推量は必ず違ふことあると云義を知せたるなり孔子の語にも以レ容取レ人則失二之子羽一以レ辭取レ人則失二之宰予一とあり又歌にも「きゝしより見てこそまされ松島の霞かくれに似る浦もなしとよめり ●此段語勢似二乎莊子一曰人生也固 如レ是芒 乎其我獨芒而人亦有二不レ芒者一乎副墨曰有二一不レ芒之人一而我獨芒然其可レ愧亦甚矣此等激切之論參

［七十二］いやしげ成物ゐたるあたりに調度のおほき硯に筆のおほき持佛堂に佛の多き前栽に石草木のおほき家の内に子孫のおほき人にあひて言葉のおほき願文に作善おほく書のせたる多くて見ぐるしからぬは文車の文塵塚のちり

いやしげ成物 ●こゝにて句をきる也これよりいやしげなるものゝ品をかく也一々のしたにいやしげなるといふ詞を付て見る也全

調度 ●調度は種々の道具の惣名也こゝにては手具足也居たる膝下にあつめ置なり全 ●頭書云▲調度のことは上に見へたり又源順が倭名集にも調度の部上中下あり佛僧具圖書具武具衣服器財具馬具等にいたるまで諸道具を載たりしかれば一切の具を調度といふと心得へし源氏物語にもてうどめくものとあり野

硯に筆云々　●用さへ達せば多は無用也諺

持佛堂　●寺などの佛殿にあらず修行者の看經所也參　参

佛の多き　●我願ふ佛一體にて諸佛へ通ずべし諺

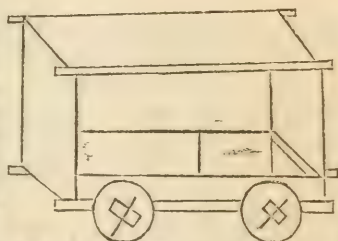
前栽に石草木云々　●亭主の心奇麗に見えぬもの也參

子孫のおほき　●上の子といふものなくてありなんといふところとよみあはせて心得べし參

言葉のおほき　●貞德は此段おほくてわろき物を書あつめられたる中に心をつくべきは詞おほきにて侍るべしといへりまことに言葉おほからぬこそあかずむかはまほしけれとも云り文

願文　●願くは二世安樂など佛菩薩に申す文章也文　●本朝文粹なとにおほく願文あり諸

作善　●願文に或は佛像を供養し或は經典を書寫する事などを書つらぬるを作善といふなり文

文車の文　●書物をつみ下に車をかけて失火などにはやく引出さんため也今禁中に有諸　●書藉おほく積たるみよき事勿論也全　頭書云▲文車はむかし用たる事にて今の世には知人まれ也必失火のためにあらず學文の席にて引用ゆるをも文車と云歟全　臺車と云物火事のために用ゆる座敷車なり近年▲莊子云惠子多レ方其書五車▲晉張華雅好二書籍一身死之日家無二餘財一惟有二文書一溢二于机篋一嘗徙レ居載レ書三十乘壽

塵塚　●塵をすつる所なり壽　●こと所の塵をよく清めて其あるべき所に掃よせたればおほきも見ぐるしからず文

[一段之統論]　●此段枕草紙の文體にてをほくていやしき物と見ぐるしからぬ物とを書りさて多くて見くるしからぬはと中にをきて上下をことはりたる文のあや妙也毛詩七月篇七月在レ野八月在レ宇九月在レ戸十月蟋蟀入二我床下一これ蟋蟀の字を中間に安在して上下の文をのづから明也源氏物語なとに此文法あまたあり和漢通同する事奇妙なり文　●此段に書し數々の事物皆いやしきに非す只多の一字をそふるによりてなり左右に調度多きは物を翫びて志を失るかといやし硯に筆をほく嗜をけるは

一向に書法に好著するかといやし持佛堂に佛の多きは佛形をのみたうとみて眞佛を知ざる愚心いやし佳石好樹庭にすくなきは風流成べし自家の意思と一般成を見る類ひはいよ〳〵多きによるべからず子孫の多きは家の肥たる也と儒門には見えたれど兼好が例の好める釋氏の見解又莊子が多ニ男子一則多レ懼など云る心なるへし人に逢て詞のをほきは行をかへり見ぬ心しられていやし鬼神は明靈なる物なれば書すとも其作善知なん願文の習ひならば少し書てよかるべし今をほく書のせたるは己が功にほこり利を求る心いやしからぬかは文車の文はおほしとていやしきに非ず前聖往賢の言行をしり己をたゞさん爲なればなり塵芥はけがれたる物なれど塵塚は有べき處なればいやしからぬと也されど此句重からず文車の文に類せん爲也必竟上の段に人の妄智妄想を放下せよと書る下心にうけて又此段にも妄事妄想をいましむる也多の一字是その病源何物か靈藥ならん文車の文尤妙方句 ● 山案此段詞多きと云處に意をつくべきと貞德の説なれども今熟讀して見れば作善多く書のせたると云

一句尤重し誰とても善にほこる意のなきものはすくなし其上詞の多きは人の聞をよろこばしめ己が辨を譽られんために巧言を吐なれば必竟善にほこる意より出ること也其餘の書つらねし事どもゝ皆人の見聞のためにしてともに皆人にほこらんとの爲也故に善にほこる意さへやめは餘は自らやむこと也それをやむる妙方は文車の文なりと句解にいへる良に故ある哉されど又或人の云しは當時の學者は書を以て人を慢どるの媒としてひとへに論語よみの論語よまずなりと是もさることなれど又或者の狂歌に「論語よみの論語よまずはうらやまし論語よまずの論語よまずはとよめること實もとぞおぼゆるも僕か書を嗜める僻ゆへならんかし

〔七十三〕世にかたりつたふる事まことはあひなきにやおほくは皆そらごとなり

まことは　●まことのみをいふ時は愛さうもなきにやと也參 ●河海には無レ愛と書源語類聚には無レ間と書野

おほくは　●大かたの心也其中に少しまこともあれば也文 ●おほくと云るつまらぬ詞なりひしとな

しといはぬ事是筆法也蓋などいふと同し心也聖人はものを必とせぬ心に通ふへきにや盤

そらごと　●虚言とも空言共書句

〔第一節〕●發端より虚言なりまでなりこの段七節にわかち見るべし文段には六節となす●山案この節は一段の大綱なり世人の僞りのみあることを歎じて云出して次の節より僞の中に又品々あることをいへりさてこの愛なきにや多くはといへる中に世の道の衰て人の質朴ならぬことを深く憤りて書り

あるにも過て人は物をいひなすにまして年月過さかひもへだたりぬれば云度まゝに語りなして筆にも書とゞめぬればやがて定りぬ

あるにも過て　●只今ある事をさへ人はおほきにいひなすにと也文

まして　●いはんやといふ心参

年月過　●年月を經て後は現在に見し人もなくなれば心にまかせていふ也盤

さかひ　●遠國にて聞傳へぬるは證據に立人もなきまゝに心まかせにいふとなり盤

筆にも書　●事を好む者僞りながら筆記する類世に多し説　頭書云▲韓退之原道曰不三惟擧二之口一而又筆二之於書一此詞にて書るにや諸　▲比叡の山覺林房の奴二郎と云者兵法相撲を好て高き木よりとびをり屋上にとびあがりなどせしを見て人天狗の矢取と異名をつけゝるを道春遠き吾妻にて聞傳て神社考をあめる時眞實に覺林房二郎が天狗に成しこととて様々の跡を載したくひにて心得へしかりそめなることを卒爾に筆にはかくまじきことなり参

やがて定りぬ　●わきの人はまことゝ思ひて實事に決するなり参

〔第二節〕●あるにも過と云より定りぬまでなり●此節は世の僞のまことに定て末代にも傳るべきことを云なり文

道々の物の上手のいみじき事などかたくなゝる人の其道しらぬはそゞろに神のごとくにいへ共道しれる人は更に信もおこさずおとにきくと見る時とは何事もかはる物なり

道々　●諸藝能なり諺

かたくな ●頑愚の人なり諸 頭書云▲左傳云心不レ則ニ徳義之經一曰レ頑句 ▲世話にかた口など云に似たり文

其道 ●其藝に不案内也參

そゝろ ●坐の字を書思ひかけぬ義也歌にはすゞろ共よめり句 頭書云▲文選十一鮑明遠蕪城賦驚砂坐飛李善注曰無レ故飛曰ニ坐飛一呂向注曰坐飛謂ニ忽然而飛一句

神のことく ●神變奇特 頭書云▲荀子致仕篇云誠信如レ神楊倞註言不レ能レ欺▲杜子美詩曰皇恩斷若レ神註曰不レ可レ測也參

何事も云々 ●道々の上手のうへ計にかぎらす萬事僞あると也決前生後の詞也文

〔第二節〕●道々の物の上手と云よりかはるものなりまでなり ●此節はあながち僞せんとは思ねど愚昧の人のしらぬ道のことを語るうへにはをのづから實ならぬ事を云ひ傳ることもあるをいへり文 ●愚昧なる人はたとへは醫師にても一人の大病をなをすれば世界中の病をも見ぬきし樣にいへども其道知人はひたすら信をもをこさず萬事の上かくのごとし增鐵 ●耳に聞と眼前見るとは違ふよしなりそぞろに信をおこすまじきよしなり孔夫子の我初其言をきゝて其行を信きいまや其行を見て其言を信するとやらんをほせられし心もあるべし盤

かつあらはるゝをもかへり見ず口にまかせていひちらすはやがてうきたることゝ聞ゆ又我もまことしからずは思ひながら人の云しまゝに鼻の程おごめきていふは其人のそら言にはあらず實々しく所々うちおぼめき能しらぬよしして去ながらつま〳〵合せてかたるそら言はおそろしき事なりわがため面目ある樣にいはれぬる空言は人いたくあらがはず

かつ ●且の字にてそのまゝといへる義に通へり句 ●はやくの心也盤 ●史記に且の字をそのうへとよませたれば又といふ心もあるべきなり參 頭書云▲貫之歌に「かつ越へて別も行か逢坂は人たのめなる名にこそありけれ句

やがて ●聞人にやかて也説

うきたる ●浮言共浮詞共書そらごと也野 ●此且といふより聞ゆといふ迄は智惠あさき人の空言也これは害すくなし增鐵

我も　●語る人に我なり說
鼻の程おでめき云々　●鼻をうごかす義なり新注●
蠢の字なり是は僞と心に思ふ事を顏にあらはして
いふなり諺　頭書云▲源氏箒木に鼻のわたりをこ
めきて語りなすおかしきをねんじたる心也壽
そら言　●僞せんども思はでむかふの人より聞し
まゝにかたれば也一人虛をかたれば千人實を傳る
とは是也參●又我もといふよりあらずといふ迄是
も又ひとつの空言也是は其當分世にいひはやらか
す風說の樣なもの也是もさのみ害なし増鐵
おほめき　●恍惚と書てほれたる體也句　●語る中
に所々忘れたるよしして云也諺
去ながら　●さうはいひながら說
つま〳〵　●はし〳〵也壽●はなしのつまり〳〵
をまことらしく前後とくと都合のあふ樣に語りな
す也說
おそろしき事也　●實々といふより是迄は才智あ
る者のいつはり也諺●是人をたばかるやうなる惡
心の空言なり増鐵●如此思惟して端々合せて語る虛
言はおそろしき事也句

面目　●山案此所二說あり先一義には我ためとは
空言する者をいふにあらず聞者にわれ也たとへば
始而人に引あはさるゝ時こなたには萬事心得られ
し人なりなといふ也是空言とは聞ながら我ために
あひさつしていふ事なるを我はこれ〳〵の不調法
ある者なればなどいたく云あらそはで聞居るとな
りあらがへば其あひさつを空しくなす故なり諸抄
是に同し又盤齋抄に曰わがをはかたる人の我身の
うへによきことをいつわりにいへども僞りぞとい
はれぬとなり僞りといへばかたる人にはぢをかゝ
するゆへなり但し前說まされりいはれぬると有詞
味ふべきなり
いたく　●痛の字
あらがはず　●不ㇾ諍なり
〔第四節〕●かつあらはるゝと云よりあらがはずま
でなり文段にはこゝにて節を不ㇾ分なり●山案此
節は世に語る虛言の中にも品々多くある事をしら
せて其僞を云者の口先の辨にまよふべからずとの
敎なり偖こゝに云る四品の中一番にいへる虛言は
一向の愚者の事なれば論ずるに不ㇾ足二番にいへ

る空詞は語る者さへまことゝ思はねば聞者は猶信せさる故後の煩ひなし是以て姦好の心には大きに悪み給へども人と交る者座敷一へんに世間ばなしもして興を催す事もある習ひなれば此心得肝要なるべし三番に書る僞りは當時の生物識(ナマモノシリ)の身の上にある事也尤可ㇾ懼々ㇾ々四番のいつはりは佞奸の輩の媚諂へる仕形なり是亦恐るべし努々其褒美の詞を信ずべからず面譽者背必非といへり可ㇾ愼々ㇾ々

皆人の興ずるそら言はひとりさもなかりし物をといはんも詮なくて聞ゐたる程に證人にさへなされていとゞさだまりぬべしとにもかくにも空言おほき世なりたゞつねにあるめづらしからぬ事のまゝに心得たらん萬たがふべからず

興ずる云々　◉滿座いつわりとしらで興ずるさまなり文

聞ゐたる程に　◉我ひとり是非それは虚言なりといひ顯さんも詮なしとて聞ゐる也諺

證人にさへ云々　◉其物語の虚實をしるべき人の僞ともいはて聞居たればさては無ㇾ疑と皆人おもふ故にやがて其證據人にさへ取なされて彼そら言の物語いよ／＼まことに定りぬへし文　◉又人と交りて物語を聞ゐる人にこなたにも御存知のごとくなと云て語り出す事まゝ多し增鐵

めづらしからぬ　◉そら言有る世なりと心得ていたらばめづらしくは思ふまじと也全　◉事のまゝにとはめづらしき事をおもひそへずになり增鐵

萬たがふべからず　◉とにもかくにもといふより是迄は前の段々をむすびて虚言を聞者の心入をあかせり說

「第五節」◉皆人と云よりたがふべからずまでなり文段は是までを四節目になして見る◉山案此節は彼虚言をきく者の心入を云也害にさへならぬ事ならばたとひ後日の證人にはなるべけれどもめつらしからぬ事のまゝに聞て置へしそれをあらそはんも詮なきことなりと敎へたり

下ざまの人の物語は耳おどろく事のみありよき人はあやしき事をかたらず

耳おどろく　◉尋常にたがひたる奇怪の事なり文

「第六節」◉下ざまと云よりかたらずまで也文段には五節目となす◉此節は下賤のうへには猶いつは

り多きことを云なり世の人の心ばせも大かた其品にしたがふものにて下賤は愚に高貴は賢き也其故に下さまの人は耳驚く事のみ語りもし聞てもよろこべりよき人はあやしきことをかたらぬとなり野

槌云論語述而篇子不レ語二怪力亂神一文

かくはいへど佛神の奇特權者の傳記さのみ信ぜざるべきにもあらずこれは世俗の空言を念比に信じたるもおこがましくよもあらじなゞどいふもせんなければ大かたはまことしくあひしらひてひとへに信ぜず又うたがひあざけるべからず

かくはいへど ●僞おほき世なりとはいへどもとなり文

權者 ●權者とは實者に對する詞なり佛菩薩の其修行の因程に果を感じて世に出給ふをば實者と名づく又內證は三明萬德の佛なれどもかりにへりくだりて凡夫に應類して出現し給ふを權者といふ也參

さのみ信ぜざる云々 ●佛經におほくのする所の佛菩薩鬼神の神變奇特又神明の不測なる事其外權者化身のたゞ人にあらざる物の傳記ども不思議多かるべし皆一々いつわりと定めかたしと也野 ●さのみといふ字心を付へき也孟子に悉書を信せば書なきにしかずとあり諺 ●其權者の傳記ともに潤色の事もまゝある故なり參

これは ●これはとはこゝに信ずるなとある事はこれ〳〵ぞとかさねてねんころにいひたるなり盤

空言を念比に ●人の僞をいふをあひしらひやうを敎たる也盤 ●さのみといひ念比といふに心をつくべし鐵增

おこがましく ●嗚呼と書りおかしきと云心也壽 ●文選西京賦に徑廷の字をよませたり注に徑廷は過度の意と此義もよく相かなへり句

よもあらじ ●左樣にはよもあらしと彼空言をいひくだす心也文 ●いひくだしてむかふの者の怒を求めてせんなし說

ひとへに信ぜず ●大形はまことしく挨拶して一向に信せぬがよきなり諺 ●前にめづらしからぬままに心得たらんといへる首尾なり文

[第七節] ●かくと云より終まで也文段は六節目なり ●此節は世に虛言と聞ゆる事の中にも又さもな

き事のあればたとひまさしき虛言なりともあらそはで聞あしらふべき心ばへを敎て一段を決したり文

〔一段統論〕●上の兩段二人の妄智妄想を放下すべき事をいひ殊には人に逢て言葉のをほきをいやしき物の一ヶ條に書のせたるにうけて又此段には世間の小人の虛言妄語する品々を寫し出し左樣の人に相對すべき用心又人々の身上に鑑てかりにもいつはらせまじき敎誡なるべし句●此段は妄語綺語の科をいましめたるものなり誠に鬼の拔舌せめをいたさんもことはりならずや貞

〔七十四〕
蟻のごとくにあつまりて東西にいぞき南北にはしる高きありいやしき在老たる有わかきあり行所あり歸る家有ゆふべにいねて朝におくいとなむ所何事ぞや生をむさぼり利をもとめてやむ時なし

蟻のことくあつまる ●世間に人のおほき體なり諺●世間の人をありの熊野まいりとやらんこたとへしなり全●文選に蟻同と書て蟻の如く同(アツマル)と訓 頭書云△文選卷十八馬季長長笛賦曰蜂聚蟻同註曰多貌參△柳子厚曰蜂附蟻合△又云羶レ仁蟻萃文△東坡詩集卷十九云人間擾々眞螻蟻句

東西云々南北云々 ●仕官の身となり賣買の人となりて名利につかばれてなり諸

高き有賤在云々 ●爰の筆法 頭書云△古文眞寶曰無レ貴無レ賤無レ長無レ少道之所レ存師之所レ存也退之が此筆法に似たり盤

行所あり云々 ●高賤老若の人々の日々の有さまいたづらなる體也盤

いとなむ所云々 ●上に云所をうけて左樣にはしりありきて何事の大事を仕出すぞと問かけたる筆法也決前生後の詞也盤

生をむさぼり利を云々 ●營むは是ぞと答へたるなり生をむさぼるとは長生をねがふなり利を求るとは財寶をもとむるなり盤

〔第一節〕●蟻のことくと云よりやむときなしまで也此段三節に分つ文段同じ●此節は先人間一生名利につかはれてしづかなるいとまなきありさまを云て次の節にいましむべきためにかけりたとひ千歳をへたとも何の詮なきことをいへり山案 ●凡そ人間のいとなみの品々多くあれども必竟は皆世をわ

たらんとの一つなり蟻の如くあつまるとは人間の品の多きことにたとへたりさて東西にはしりと云より朝に起と云まで十の對を以て書り東西に急南北に走一對高きあり賤きあり二對老たる在若き在三對行處あり歸る家あり四對夕にいね朝にをく五對是十品を對に書る筆勢妙なり心を着て見るべし説

身をやしなひて何事をかまつ期する所只老と死とにあり其來る事すみやかにして念々の間にとゞまらず

是をまつ間何の樂かあらん

身をやしなひて　●前に生をむさぼり利を求めてといふをうけていへり文

何事を　●何事をか待と問かけたる也盤

期する所　●まつ事はと答の詞也盤

只老と死　●此外はなきとの詞也盤

念々の間云々　●一念々の生滅するうちも無常のもよほしきたりてしばらくもとゞまらす是念々生滅の無常をいふなり參

是をまつ間　●此是の字と下の二の是の字皆老と死とをさす句

何の樂か云々　●かくすみやかに來るものゝ有をおきて其用心をせずして外の事何かおもしろからんと也盤　頭書云▲黄昏無常偈曰此日已過命即衰滅如二少水魚一斯有二何樂一參▲兼好の歌に「いかにして慰ぞとも世の中を厭はで過す人にとはゞや全

［第二節］●身をやしなひてと云より樂かあらんまでなり●此節は死の來る事はやければ此世のいとなみばかりは何のたのしみもなきことをいへり文

まどへる者は是をおそれず名利におぼれて先途の近き事をかへり見ねばなり愚なる人は又是をかなしふ常住ならん事を思ひて變化の理をしらねばなり

まどへる　●愚痴なる者を妄惑といふなり全

名利におぼれて　●名利をむさぼる事にのみ心を溺らしてと也文

先途の近き事　●冥途のちかきなり死して行先のみちを先途と云諸

愚なる　●又愚痴の人を論ずる也參

是をかなしふ　頭注云▲莊子曰已化生又化死生物哀レ之人類悲レ之　註物之初生本無而有又化而死則是既有而無同二乎一理一而人物之類自以爲二悲哀一愚惑也壽

常住ならん事　●死する事なくもかなとのみ思ふ
也文
變化の理　●萬物のうつりかはる理なり壽●生老病死即變化の理なり天地の間の物此理にもれぬ事を愚なる者はしらで只常住ならん事のみおもひて死を悲むと也壽　頭書云▲獻齊が列子口義には變は即化なりといへるときは變化ともにかはるといふ義に見る時もあれどわきて云ときは變は化の漸なれは人の老の至るがことし化は變の成なればあるものゝ忽なくなるがごとし參▲變化のこと野槌や新注なと詳論あれと今こゝには略す
〔第三節〕●まどへる者と云より終までなり●此節は彼名利にまどへる者は死をおそれず愚なるものはたゞに悲みてともに死をまつことのいとなみをもせずいたづらに身心をいそがわしく苦むることをいひて一段を決したり文　●此節は例の筆法にてきびしく無常をすゝめたり說
〔一段之統論〕●上の段に世間の僞をほきことをいへるにうけて此段には其僞はる病根は常住ならん事を思ひて變化の理をしらず生をむさぼり利を求る故なりと書つらねたり句●此段かの名利につかはれてしづかなるいとまなく一生をくるしむることをろかなれといふと同じ心なり皆人しづかなるいとまもなく東西南北にわしりて利をもとめ生をやしなひ一生をいたづらに苦るのみにて死の來ることを待いとなみをしらぬ愚さをいましめいへり
文
〔七十五〕つれ〳〵わぶる人はいか成心ならんまぎるるかたなくたゞひとりあるのみこそよけれ
いか成心ならん　●彼世事にわづらひて東西南北する人は世をのがれて閑なる事をつれ〳〵なりと侘るはいかなる事ぞやとなり文●わふるとは氣の毒がるなり新注
まぎるゝ方なく　●上に心ならんぞといひかけて其人はまぎるゝ方なくといひ下したり世間のわづらはしきをはなれて徒然としたるがよしと也諺
のみこそよけれ　●のみこそよけれとは此外にはなきなりとかぎりていひし詞也是も兼好例の心さしをいへり說
〔第一節〕●つれ〳〵わぶると云よりよけれまで也

此段三節に分つ也文段是に同じ●山案此節は一段の綱領なり彼先途を忘るゝ利欲人や老死を悲む愚昧の輩の間居をきらふことを歎じて如何なる心ゆへにかくは侘るぞと不審を起してたゞ獨あるより外によきことはなきとをしへたり是も前段の筆法をうけて問答して書りこれも文の一體也さて次の兩節に此意を二つにわけて世に交ることとの損あると閑居のすぐれたる事を委く論ぜんためなり●貞德曰西行法師の歌に「さびしさにあはれもいとゞまさりけりひとりぞ月は見るべかりける此歌にて此處は見るへし此段にて此歌は聞へしといへり又兼好歌に「いかにして慰むものと世中をいとはですごす人にとはゞや 增鐵

世にしたがへば心外（コヽロホカ）の塵にうばはれてまどひやすく人にまじわれば言葉よその聞にしたがひてさながら心にあらず人にたはふれ物にあらそひ一度はうらみ一度は悅ぶ其事さだまれる事なし分別みだりにおこりて得失やむ時なしまどひの上にゑゝり醉のうちに夢をなすはしりていそがはしくほれてわすれたる事人皆かくのごとし

世にしたがへば　●濁世にしたがふからに本心を外のけがれにうばゝれ迷ひやすきと也塵とは濁世のけがらはしき事をたとへて云なり一說に盤抄の說眼耳鼻舌身意の六塵を云心王此ちりにうばゝれまよふ事といへり文●此所異說有首に記す

心外の塵にうばゝれ　●心外の二字よみくせに異說多し正說の點をこゝに記す　頭書云▲心の外の塵とは思ひかけぬ義なり世にしたがへば思ひかけぬ塵事に本心をうばゝれまどひやすきと也心のの字助語なりといへる抄の義は誤なり一本にのゝ字なき本ありいかゞ有べきしばらく一說にそなふ句▲問心外の塵にと點つけたる本あり又心の外の塵にとかける本あり如何答詞よそのきゝにしたがひてといへる對句より見れは心ほかのちりにといふを用ゆべし且又文意はるかにまされり文▲六祖壇經曰分ニ別一切法一爲ニ外塵相一參

よその聞にしたがひて　●我云度事をも人の耳にさかはんかと思へばいはず心にいはまほしからぬ詞をも人の機嫌によりてはいふと也文　頭書云▲兼好の歌に「世の中にしたがふ人のことのはゝ思

へどいはずをもはねどいふ鐵増 ▲論語衞靈公篇子曰巧言亂レ德又學而篇子曰巧言令色鮮哉仁などゝあるにかく外物につかはれて我本心を失なふことはなげかしきことと也彼淵明が心形の役となるといひしもこれならんかし說

さながら心云々 ●己が心のやうにあらぬと也句

一度は恨み一度は悅ぶ ●世をわたるならひ皆かくのごとし 頭書云▲論語父母年不レ可レ不レ知而一憂一悅とある筆法也盤 ▲山案明心寶鑑張橫渠先生曰今之朋友擇二其善柔一以相與拍レ肩執レ袂以爲二氣合一一言不レ合怒氣相加

さだまれる事なし ●恨るもよろこぶもかつて定まらず皆世間にしたがふ故也諺

分別云々おこりて ●とやせんかくやせんと分別さまざまおこりて也諸

得失云々 ●或は利を得或は利をうしなひ諺

まどひの上にゑへり ●無明の煩惱にまとふ事酒にゑひて本心をしらぬににたるたとへ也盤

醉のうちに夢をなす ●眞實もなき事をするよし也盤 頭書云▲小學嘉言程子曰醉生夢死不二自覺一也 陳選注曰言迷溺之深如レ醉如レ夢自レ生至レ死而不レ悟也句 ▲竹窓隨筆醉生夢死之論可二併見一參

はしりて云々 ●前段の東西南北にはしる事なり諺

ほれて ●醉夢のごとく心うかうかとする也參 ●文選西都賦に恍々の字をほれてとよめり句 ●無智の體なり新注 ●心のくるはしき體也諺

わすれたること ●まことの大事をわする也佛道なるべし參

〔第二節〕●世にしたがへはと云よりかくのごとしまでなり ●この節は世にしたがひひとにまじはるひとのさはがしきありさまかきつらねてたゞひとりあるのみこそよけれといふこゝろをくはしくいふなり文 ●これつれづれわふる人の損をいひたつるなり盤

いまだまことの道をしらず共緣をはなれて身を閑にし事にあづからずして心をやすくせんこそしばらくたのしむ共いぴつべけれ生活人事伎能學問等の諸緣をやめよとこそ摩訶止觀にも侍れ

まことの道 ●諸法實相の理也壽 ●是すなはち生

死出離の覺りをいふなり文
緣　●世間の諸緣を離れ諺
身を閑にし　頭書云△童蒙止觀曰閑者不レ作二衆事一
名レ之爲レ閑參
事にあづからず　●浮世の人事を身にあづからす
してと也文
暫樂しむ共　●此暫樂むといふに心をつくべし眞
の道をしらで生死をはなれぬほどは眞實のたのし
みあらはれねともまづ身を閑に心をやすくしてこ
そしばらくもたのしむべけれとの心なりさて此段
の始につれ〳〵わぶる人はいかなる心ならんとい
ひしを結びて前段に是をまつ閒何の樂かあらんと
いひしに應ずる詞也文
生活人事　伎能學問　●(生活)　●身命をすくふ
產業也野　●(人事)　●人間の事に交る也野　●(伎能)
●よろづの藝能也野　●(學問)　●內外の書よみな
らふ也野　頭書云　▲止觀第四云緣務有レ四一生活
二人事三伎能四學問句　▲止觀第四曰緣務妨レ禪由
來甚矣▲又云緣務者經二記生方一觸レ途紛糾得レ一失レ
一喪レ道亂レ心二人事者慶吊俯仰造聘此往彼來來
往不レ絕三伎能者醫方卜筮泥木彩畫棊書咒術等是
也四學問者讀二誦經論一問答勝負等是也領持記憶心
勞志倦言論往復水濁珠昏何暇更得レ修二止觀一耶此
事尙捨況前三務▲此文を引て證文としたるにてつ
れづれは止觀の理なることをしるべしかくのごと
くすればつれ〳〵になるとの義なり盤
やめよと　●加樣の事も皆我心のさはりとなれば
すてやめよと也是止觀の趣也野
摩訶止觀　●書の名なり　頭書云▲智顗字德安天台
大師とも智者大師とも申也南岳思大和尙に嗣法す
といへど自解發明の人にて法華の旨をふかくしれ
り陳隋二代の帝に見へ師範となれり後に天台山の
佛隴寺に住す妙法蓮華經の題號を釋するをば玄義
と云十卷あり經の文段を釋するをば文句と云十卷
あり其うへに觀心の事をのぶるをば摩訶止觀とい
ふ摩訶は梵語也大と飜す十卷あり此三十卷を本書
と號す天台は懸河流瀉の辨舌なれば其ときをく事
を其弟子章安灌頂筆記せり其後妙樂大師湛然玄義
を注する釋籤と云十卷あり文句を注するをば疏記
と云十卷あり止觀を注するをは弘決(グケツ)とも輔行記と

も云十卷あり此三十卷を末書と名付く合て三大部
として天台六十卷と申なり野
〔第三節〕●いまだと云より終りまで也●此段は世
事世緣をはなれて心身閑にあらまほしき事をいひ
止觀の文などを引て一段の心を決したり文●山案
此節は初節に云し閑居の樂みあることをいよ〳〵
云述る也
〔一段之統論〕●前段の餘論なり靜にして性を守る
事を肝要とする儀なり壽●上段には世間の小人の
變化の理をしらず常住の念をたくはへ生をむさぼ
り利を求てせざることなき有さまの見苦しきこと
をいへるにうけて又此段にはいまだ薙染の身とな
り誠の道にこそ不レ入とも先大かたの世緣をはな
れ市隱なとの類になり身を閑にし心やすくして朝
夕を送らまほしき理りをなべての人にすゝむるな
るべし句
〔七十六〕世の覺え花やかなるあたりになげきもよろ
こびも有て人おほく行とふらふ中に聖法師のまじり
ていひ入たゞずみたるこそさらずともと見ゆれさる
べき故有とも法師は人にうとくてありなん

世の覺え　●榮花豪貴にして時の權威ある人の家
也參
なげきもよろこびも　●或は死葬愁歎の有時も有
婚禮冠の時も有
たゞずみたるこそ　●入して家內へいひ入て內外
にたてりゐたるさまなり文
さらずともと云々　●世捨人のさうあらずともと
也諺
さるべき云々　●さう有べき故と也行とふらはで
かなはさる故あるをいふ句
人にうとく云々　●是兼好のつれ〳〵をもとゝす
る心より云也文　頭書云▲法華安樂行品曰菩薩摩
訶薩不レ親ニ近國王王子大臣官長一盤▲僧寶傳十九
政黃牛偈曰爲レ僧只合ニ岩谷一國士筵中甚不レ宜句
〔一段之統論〕●上の段には俗人にさへ世緣をはな
れ心身を安閑にせよといへるにうけて法師の身な
どは尤かく有べきことを此段と次の段とに書つら
ね凡僧をはげましむるなり學問さへ止觀を修する
さはりとなれば餘事豈論ずるに及はん句
〔七十七〕世の中に其比人のもてあつかひぐさにいひ

あへる事いろふべきにはあらぬ人のよく案內しりて人にもかたりきかせとひ聞たることそうけられね殊にかたほとりなるひじり法師なッどぞ世の人の上はわが如く尋ねきゝいかてかばかりは知けんと覺ゆる迄ぞいひちらすめる

もてあつかひぐさ　●世間にいひはやらかす雜說也諸　●くさは種の字也

いろふ　●とりあつかふまじき人なり諸　●いらへ也則返答の義なり旬

よく案內云々　●委細に其樣子をしりてなり說

とひ聞　●又其事しらねば存知の人に念比に問聞也諺

うけられね　●承引せぬ義兼好も尤と同心ならぬと也諸

かたほとり　●世を遁れ邊鄙に引てもる法師也

世の人の上は　●世上の人の上の沙汰なり諸

尋ねきゝ　●二說有先一義には●我身のうへにかかりたるやうに尋ねきくと也盤　●我身の善惡をばみづからはしらねばこれはとふべき事なり諺　●又一義には●此兼好のごとくにと也兼好も遁世の身として世上の事を能しりてさまぐ〳〵此草紙にかければなり文

かばかり　●かくばかりの略語也是ほどゝいふ事也說

いひちらすめる　●いひちらすめるとは無益の事哉といふこゝろをふくめたり文

〔一段之統論〕●此段も前の段の餘說なり世に交る故に風說をも能しるをそしる也增鐵　●右の段々皆名利をはなれぬ僧をいましめて書ると見えたり聖敎よりもこれを見せたくこそ侍れ貞　●山案此段は聖法師をいましむといへども在世の俗人とても此段の心持を能々つゝしむべき也いろふべきにはあらぬ人と云を廣く見るべし出家にのみかぎるべからず言語をつゝしむべき敎は儒釋の書に多きこと也

●此段は枕草紙に露はかりの事も床しがりきかまほしがりていひしらぬをばゑんじそしり又わづかに聞わたる事をば我本より知たることのやうにこと人にもかたりしらべいふもいとにくしと書たる面影兼好の今こゝの筆にうつるやうに覺へ侍る旬

〔七十八〕今やうの事とものめづらしきをいひひろめ

もてなすこそ又うけられね世の事ふりたる迄しらぬ人は心にくし今更の人なゞどのある時こゝもとにいひつけたることぐさ物の名なゞど心得たるどちかたはしいひかはし目見合せ笑ひなゞどして心しらぬ人に心得ず思はする事よなれずよからぬ人のかならずある事なり

今やう　●當世風のはやり言葉なり參　頭書云▲新樂府に時勢粧と書ていまやうすがたとよませたり野

うけられね　●上の段に此詞あるに對して又うけられねと書たり古

今更の人云々　●初たる人の來りたる時を云句

いひつけたる　●他所には聞しらで其所習ひなどにいひなれし詞也文

ことぐさ　●言種と書諸

名なゞど　●人しれぬ物の異名など也文

心得たるどち　●たがひに其はやり言葉を心得たるどちと也どちは共の字諺

かたはし　●十の物を三つ四ついひて其事に合點する詞なり諺

心しらぬ人　●彼今さらの人をさして云なり文

心得ず　●是は如何樣なる事を云にぞと心得ず思する也參

よなれず　●世に物なれぬ也諸

〔一段之統論〕●此段は上の段の餘意にして世にをとなしからぬ人の上に必ある事ざまをよく寫し出し鑑戒となさしむ世なれずよからぬ人の必あることといへる末の一句通章の骨子にて侍る句　●此段にいへる如く人のきかぬ物の名しりたる同志の相圖詞なとを好で云ふ輩今の世にも是多し其身はよきことなりと思ふべけれど是よからぬ事の至り人をあざむくの科のがれ難し尤つゝしむべき事なり説

〔七十九〕何事も入たゝぬさましたるぞよきよき人はしりたる事とてさのみしり顔にやはいふかた田舎より出たる人こそ萬の道に心得たる由のさしいらへはすれされば世にはづかしきかたもあれどみづからもいみじと思へるけしきかたくななりよくわきまへたる道にはかならず口おもくとはぬかぎりはいはぬこそいみじけれ

何事も入たゝぬさま　●諸藝諸事共に人の前にては其道に立入らず不案内なる體にするがよきと也説　頭書云▲論語泰伯篇云學猶レ不レ及▲　又管公明が詞に善レ易者不レ論レ易といへり曾子の三省など皆我得し道に滿足せずよろづ入たゝぬさまに行へる古聖賢達なり説

しり顔にやはいふ　●やはいふべきか云まじきとなり諺　頭書云▲漢石慶馬をつかさどりて其數をしりしが景帝いくつ有ぞと問給へば策を以てかぞへて馬六疋と云の類なりなをものぼりていはゞ聖人の大廟に入て事ごとに問給へることも在野

出　●出の字の上に一本にさしの二字あり參

人こそ　●必田舍人にのみかく有にてはあらねどもみやこにても如レ此行跡ある人をふかくいましめん爲の下心なるべし句

さしいらへ　●答也諺

世にはづかしき　●世にとは世間にといふ事也諺●又一義に●世には助語也文　●山案俗語によにうれしきのよにいやなと云類か是等は太き心に用るなれば餘にと書べき歟多くてあまり有心なるべしともにかなふへし言意は田舍人の中にも能ことをしりてよにはづかしく心にくゝ思ふ人もあれどゝなり

みづからも　●自慢顔するはなり諸

かたくな　●頑の字也

わきまへ　●辨の字

口おもく　●ことばすくなになり説　頭書云▲禮記に口容止なりと云主人不レ問客不二先擧一といへるに通ずべし野▲論語の不レ問不レ言とある心なり盤

〔一段之統論〕●此段も前の餘論なりよくしりたる事をもさのみしり顔にはあるまじき事ぞとのいましめ也詞をほからぬこそあかずむかはまほしけれなどの心なるべし文●上段には他所より來る人をまどはすことをいへり此段には他所よりきたる人の心もちをいひたるなり盤●山案此段は言行の二つを愼むべきの意入を云ふされば入たゝぬさまといひいみじと思へるけしきと云は行のうへについて能人惡人の異なることを書り又しり顔にやはいふと心得たるよしのいらへはすれど云しは言のう

へについて善惡をいへりされど口重くとはぬかぎりはいはぬと書とめしは第一に詞をつゝしむべきことをいへりすべて言の失はありやすきもの故に先聖往賢も言を愼を先とせり論語爲政篇子貢問ニ君子一子曰先ニ行其言一而後從ㇾ之●又里仁篇子曰君子欲下訥ニ於言一而敏中於行上●明心寶鑑云張思叔座右銘曰作ㇾ事必謀ㇾ始出ㇾ言必顧ㇾ行●又離騷經云閉ㇾ口深藏ㇾ舌安ㇾ身處之牢　此語どもを心得ることなひし佞奸の族はたとひ知りたる事を人が問ても憶に答へぬぞこれ亦却てあしゝこゝにいへるとはぬかぎりとある詞を味ふべし問ても云ぬといふには非ず

〔八十〕人ごとに我身にうとき事をのみぞこのめる

我身にうとき　●我に似合ぬ道なり文

このめる　●我家に親しくせでもくるしからぬ道や藝能をつとむるなり是我道を忘るゝゆへなり說

〔第一節〕●人ごとゝ云よりこのめるまで也此段謾に四節に分つ文段不ㇾ同●一段の云べき事の心を先いひ出したるなりさて其仔細をあとへこまかに云也盤●山案此節は一段の綱領なり當時の庶人も皆我道を他所ごとのやうに思ひて外を嗜好なり此一句萬民の敎なりされど我勤むべき事をばよく習得て後には餘事をも學ぶきべなり博聞は道をたすくるの一つなれば也文宣王の行有ニ餘力一則以學ㇾ文との給へる意なり

法師は兵の道をたてえびすは弓ひくすべしらず佛法しりたるきそくし連歌し管絃をたしなみあへりされど愚なるをのれが道より猶人に思ひあなどられぬべく法師のみにかぎらず上達部殿上人かみざままでをしなへて武をこのむ人おほかり

法師　●前にも聖法師の世上にまじはる事の無益なるよしをいひしよりまづ法師のうへを書出したり文

えびすは弓ひく云々　●夷の字爰にては遠國の武士をいふなり參　頭書云▲源氏あづま屋に薫のうきふねのことをの給ふにもひたちがむすめなれば弓を引あたりにならひてとあり夷と云文字も大弓といふをひとつに成したると也弓をよくいるもののよし也盤

きそく　●氣色也諸

愚なる云々　●好ぬによりて其家の事はうとけれどもとなり諺

猶人に思ひ云々　●其家々の道はたとひ下手にても人あなどらず我道ならぬ事はいかによく知たる氣色しても人上手とは思はぬ物なれは好みて益なき事ぞとなり文

法師のみ云々　●是より武家の外に武を好む事をいましめたり此段はこゝを書べきとて書たりと見え侍る文

●上達部　公卿也　頭書云▲職原抄云公卿攝政關白及三公是公也散一位及三位巳上是卿也參議者雖二四位一猶卿也文

殿上人　●也足曰四位五位六位殿上に日夜詰奉る也是を殿上人といふなり諺

●武を好む人　頭書云▲左傳云衞公子列呼嬖人之子也有レ寵而好レ兵野

おほかり　●是太平記の亂世なれは也無益の事なりといふ心をふくめたる書ざまなり文

〔第二節〕●法師と云よりをほかりまでなり●山案此節は彼うときことを好む者の品々をいへる中に法師上達部などの武を好む事をいましめたり是兼好時代には山門三井寺の僧侶甲冑を帶し公卿達も武を專らとつとめ給ふことをいきとをりて書り

百度戰て百だひ勝共いまだ武勇の名を定めがたし其故は運に乘じてあたをくだく時勇者にあらずといふ人なし兵つき矢きはまりてつゐに敵にくだらず死をやすくして後はじめて名をあらはすべき道なりいけらんほどは武にほこるべからず

●百たび戰　頭書云▲孫子謀攻篇百戰百勝非二善之善者一也不レ戰而屈二人之兵一善之善者也諸　▲太宗問答曰攻守者一而巳矣得レ一者百戰百勝故曰知レ彼知レ己百戰不レ殆其知レ一之謂乎壽　▲山谷詩云百戰百勝不レ如二一忍一野

武勇の名を云々　●諸藝をこのみ嗜むは大かた名譽のためなるに武藝はたとひ一旦はかつとても猶武勇の名譽を定めがたしとなり文　●武を好て益なき事を云說

あたをくだく　●怨を碎く也あたは敵也諸

勇者にあらず云々　●運のよき時は武勇を心得ぬ者も敵に勝事ありとかく勝負は運次第也參

兵つき矢きはまりて ●運つきて味方の軍兵もうたれ矢も射つくしてとなり文 ●兵の字をば武道具とも見る　頭書云▲韻會云詩話曰兵戰器也又刀釼曰レ兵とあり此義にて爰の兵の字を見るべし兵士の義と見る説は非なり句 ▲文選曰兵盡矢窮人無ニ尺鐵一劉良曰窮亦盡也參 ▲王希聲嘲ニ漢李陵一詩云撮髮兒男重ニ主恩一兵疲矢竭死無レ門秋高若遇ニ南來雁一休レ說ニ劉家李廣孫一壽

くだらず ●不降也壽 ●かうさんせぬ也文　頭書云▲通鑑綱目第二劉友益書法曰亡國之君其辭五死レ之上也執レ虜次レ之以歸次レ之獲次レ之降爲レ下壽

名をあらはす云々 ●戰負て敵にもくだらず討死をたやすくして後に眞の武勇としらるゝ也註

いけらんほど ●此一句心をつけて味ふべし武藝にかぎるべからず諸道此意得第一なるべし説

〔第三節〕●百度戰てと云よりほこるべからずと云までなり ●山案此節は上節に武を好むといひしをうけて戰場の勝負軍士の勇臆を論ぜること孫呉か兵書の理にもたがふべからず是必竟軍は運次第なるほどに勝たるとて武勇とは云難し又敗軍の時に自身の武勇はあらはるべけれどこれとてもせんなきことゝ思へる兼好の志は老子の國家亂れて忠臣ありといへるこゝろなるべし

人倫に遠く禽獸に近きふるまひ其家にあらずはこのみて益なき事也

人倫に遠く ●人は天の生氣をうけて本心具足の仁あれば生る物を害するは本人倫の好む處にはあらず諺 ●是對の文法なり説

禽獸に近き ●畜類は仁を受ねば己か友を害し生物を食ても心に慳事なし然は物を害する事を好むは禽獸に近きふるまひなり諺 頭書云▲莊子說劍篇曰庶人之劍蓬頭突鬢垂レ冠曼胡之纓短後之衣瞋レ目而語レ難相ニ擊於前一上斬ニ頸領一下決ニ肝肺一此庶人之劍無レ異ニ於鬪雞一野 ▲老子曰兵者不祥之器也非ニ君子之器一盤 ▲孟子曰飽食煖衣逸居而無レ敎則近ニ禽獸一參

益なき事也 ●其家にあらずはと書たる眼目也壽

弓馬の家は義によつて人をも殺す也諸

〔第四節〕●人倫と云より終まで也 ●山案此節は上の段々を結てかけり其家に非の一句肝要なり論語

に非ニ其鬼一祭レ之諂也といへり又莊子に宋の平漫が千金を費して龍庖丁を支離益にならひけり三年の勞をつみて習得たれども終に其益なかりしと書る意など思ひ合すべし

〔一段之統論〕●此段は前に聖法師などの世上にまじり人の上をもいひちらすは似合ず無益なることを書けるにつけて其身に相應せざる藝を好むことをいましめたり殊に兵法は亂を治る道にて武家にとりをこなはるゝわざなるを法師の其道をたて公家にこのみ給はんこと益なきこととふかくいさどをれり文 ●此段は彼後鳥羽院の弓箭をこのませ給ひ北條をほろぼさんとせさせ給ひしよりかへりて世の中の亂となりしに兼好代時にも朝廷は年々に衰て武家は日々にさかんなりし事時節のしからしむるといふことをしろしめさゞる故にや後醍醐天皇いさどをりて武を用ひさせ給ひしことを無用と思ひでかけると見へたり貞

〔八十一〕屛風障子などの繪も文字もかたくなゝる筆樣して書たるが見にくきよりも宿のあるじのつたなくおぼゆるなり大かたもてる調度にても心おとりせらるゝ事は有ぬべしさのみよき物をもつべしとにもあらず損ぜざらんためとて品なく見にくきさまにしなしめづらしからんとて用なき事どもしそへわづらはしくこのみなせるをいふなりふるめかしきやうにていたく事々しからずつゐへもなくて物がらのよきがよきなり

屛風　頭書云▲下學集屛退也退レ風之義也又屛蔽也蔽レ風也是通諺▲山案釋名云屛風者障風也西行屛風浦にて「屛風には心をたてゝをもひけん行者はかへりちごはとまりぬ

屛風云々繪も　●屛風障子などの色紙うちつけ書など也文

かたくなゝる　●下手めきたるをいふ參

書たるか見にくき　●風あしく書たる繪や墨跡は見ぐるしきとなり諸

心おとり　●あるじの心がおとりてみえしらるゝと也盤●前十段に大かたは家居にこそことざまはをしはかるれといひし段とおなし類なり壽

さのみよき物　●繪文字のあしきは心おとりせらるゝといへば結搆なるをと人の心得ればあしき故

にかく云也盤
品なく云々　●あるまじき物に金物などむさとうち又は手おもくする類なり増鐵 ●たとへば車疊を箱に入符など付おく體也諺
しそへ　●器はたとへば耳にあれば耳の役足あれば足のやくある大方也めづらしくせんとて有まじき事をしそゆる類也増鐵
このみなせる云々　●前に心おとりせらるゝ事は有べしといひたるは加樣なるを云也と云心也文
ふるめかしき　●是より所持する心持を云諺
いたく　●甚の字諺
事々しからず　●目にたゝぬ樣に也諺
つゐへも　●金銀の費也諺
物がら　●道具の樣子也諺
よきがよき也　●此結句萬事にわたるべし可㆓甘心㆒也壽
「一段之統論」●此段は上段に吾道ならぬことの用なきをこのむをいましめたるやう調度も用なきことをしそへたるがあしき心なるをいへり盤
「八十二」うすものゝ表紙はとく損ずるがわびしきと人のいひしに頓阿がうす物はかみしもはづれらでんの軸は貝落て後こそいみじけれと申侍しこそ心まさりておぼえしが一部とある草紙などの同じやうにもあらぬを見にくしといへど弘融僧都が物をかならず一具にとゝのへんとするはつたなき者のする事なり不具成こそよけれといひしもいみじくおぼえしなりすべて何も皆事のとゝのほりたるはあしき事なりしのこしたるをさてうち置たるはおもしろくいきのぶるわざなり内裏作らるゝにも必作りはてぬ所を殘す事なりと或人申侍しなり先賢のつくれる内外の文にも章段のかけたる事のみぞ侍る
うすものの表紙　●羅の字也壽 ●錦などにて卷物の表紙をする也諸　頭書云▲源氏に玉のぢく羅のひょうし羅の字をうすものとよめり羅は金紗などに似たるものなり▲和名集曰唐韻曰羅綺羅也野▲かな物の書にては又らのへうしと字の聲を用ひてよみ付たる事多し源氏にも見えたり又拾遺愚草の歌にも「羅のへうしひもの玉ゆらときかぜは天の河原に雲やまくらんなどゝもよめり句
わびしき　●かなしき心なり諺

人のいひしに　●或人のいふ詞を先云て頓阿返答のよきをいはんため也盤

頓阿　●歌人也●頓阿が返答をほめてあぐる也盤
頭書云▲小野宮大納言能實の後胤なり二十四歲まで叡山に修學し其後高野にのぼり名を頓阿とあらため歌道を專とす始は名を泰尋と云又は感空と號す貞治二年の比頓阿七十餘歲歟後普光園攝政良基公と問答して近代歌の體あしく異風になるを正風體に改て後世の龜鑑とすべしと思へり其問答を愚問賢注と名付右堯孝末流鳥井小路經厚が說なり野
▲二條の爲世卿の門弟にて古今傳授の一流なり爲明卿新拾遺集を撰び給ひ未レ終してうせ給へるに頓阿續レ之といへり所レ著井蛙抄あり家集を草庵集といふ和歌の四天王にも頓阿慶運淨辨兼好といふ中に頓阿すぐれたり四條の道場にすみて後に東山双林寺にてうせて其墓今にあり文

系圖

鎌足―不比等―房前―眞楯―内麿―冬嗣―良房―
―基經―忠平―師輔―兼家―道長―賴通―師實―
―能實（正二位大納言長承九年九月九日薨六十三號二小野宮一）―全春―仁春―仁尋―
―仁譽―泰尋

はづれ　●ほくるゝなり諺

らでんの軸　●螺鈿の軸は卷本の軸に貝をすり入たるなり諺●螺はほら貝鈿は字彙に金華の飾と注したり句

おぼえしか　●此かの字淸てよむべし哉の義なり句●頓阿は兼好と同時なれども其詞を崇敬してこゝにひく事殊勝なりと云々野

見にくし　●人は見にくしといへどもと詞をもふけていふ也盤

弘融僧都　●兼好同時代の歌人也　頭書云▲權少僧都弘融文保二年十月於二押小路亭一隨二少將爲仲入道一受二古今和歌集訓說一云々　建武比與二兼好房一有二因緣一故弘融古今集を仁和寺の居住に預け置く貞和三年伊賀國佛姓寺遍昭院に居住す時に歲六十野

不具成こそ云々　●不具なるがかならずよきとは見るべからずあるにしたがひて用ひよの心也不具なる物をとゝのへ具足させんとする事のいらざるよし也全

いみじく　●弘融が詞をも兼好のほむる也文　●頓

阿のみにあらぬよし也盤
すべて　●惣字
何も　●萬事也
あしき事也　●是弘融が辭を受て萬事十分なるは
あしき事をいへり文　●ものみつればかくる義をふ
くみていえり盤
さて　●さうで也其儘の心也諺
いきのぶる　●二說在●息延と書源氏にいきをの
べてともいきのぶるともおほき詞也文　●又生延と
書●源氏にはひのふると云詞に似たり野　●皆優
なる心也句
作りはてぬ　頭書云　△史記龜筴傳曰天尙不レ全故
世爲レ屋不レ成三瓦一而陳レ之句
殘す事也と　●今もさひのひさしといふ所しのこ
して侍ると也文
內外の文にも　●內典外典也佛經をば內典とし儒
書百家を外典とす天台の止觀にも十段の中三段か
け毛詩も三百篇のうち六篇亡じ周禮の六官も冬官
かけ大學の格物の傳かけたる類多し野
【一段之統論】●此段は前段に損せざらんためとて
品なく見にくきさまにしなしといふ所をうけて書
出すなり必竟はものゝ十分に調りたることをきら
へる段なり心をつけて見るべくこそ文

徒然草諸抄大成卷第八

目次

〔八十三〕竹林院入道左大臣殿太政大臣にあがり給はんに何のとゞこほりかおはせんなれどもめづらしげなし一の上にてやみなんとて出家し給ひにけり洞院左大臣殿此事を甘心し給ひて相國の望おはせざりけり

竹林院入道　●是三公の長なり但左大臣關白の時は太政大臣其座下につく例なり天子をたすけ奉る官也参　頭書云▲後西園寺相國實兼公息なり西園寺公衡公竹林院左府と號應長元年八月二十日出家法名靜勝正和四年九月二十五日薨す歳五十二

鎌足——不比等——房前——眞楯——内麿——
冬嗣——良房——基經——忠平——師輔——
公季——實成——公成——實季——公實——
通季——公通——實宗——公經——實氏——
公相——實兼（これまで前七十段菊亭の系圖にあり）公衡

太政大臣　●西園寺公衡公なり諸　頭書云▲職原鈔云太政大臣一人相當正從一位師二範一人一儀二形四海一無二其人一則闕云々故云二則闕官一有德之撰故非二其人一

者常不レ任レ之又無二職掌一之官也古
めづらしけなし　●竹林院の心にあがるべき人の
あがるはめづらしからすと也諺
一の上　●左大臣の事也第一の臣下にて太政官の
うちの事をこと〳〵く沙汰するなり參　頭書云▲
職原抄云左大臣一人相當正従二位官中事一向左大臣總二領
之一故云二一上一文　▲左大臣關白なれば右大臣一の
上なり節會の時に内辨をつとむるなり野
出家し給ひ　●延慶二年六月左大臣を辭退にて應
長元年八月に剃髪也山案
洞院左大臣　●從一位左大臣實雄公山階と號す諸
●山案此說不審也洞院左大臣實泰公なるべし　頭
書云▲實雄公は鎌足二十代の孫也西園寺太政大臣
公經公の息也系圖は前の竹林院殿の中にある故に
畧す又實泰公は實雄公の息山本太政大臣公守公の
男なり後山本と號す▲山案に實雄公は龜山院八十九代帝
文永十年に薨し給ふ竹林院公衡公は花園院九十四代帝
延慶二年三月左大臣となり玉ひ同帝應長元年に出
家したまへり是實雄公沒後三十餘年の事なれば公
衡公の事を實雄公甘心し給ふべきいはれなし又實
泰公は花園院正和五年に右大臣に任じ後醍醐天皇九十五代帝
文保二年八月左大臣に轉じ同帝元亨二年八
月に左大臣辭し給へり是公衡と同時代にて公衡公
沒後十年餘のことなれば今こゝにいへる洞院殿は
實泰公なること疑なし其上實雄公は正親町三條の
祖とす實雄の男公守を洞院の祖とするなり大系圖
公卿補任王代一覽に見へたり但し外の據も有
甘心　●甘レ心とは其食を口に甘ずるごとくに我
心にとくと滿足するなり諺　頭書云▲詩衞風伯兮
篇三章云願言思レ伯甘レ心首疾鄭註曰甘厭也疏曰人
飲食口甘遂至二於厭足一故云甘厭也瑯琊曰佛經云
知二人飲レ水冷煖自知一此甘心首疾之旨參
相國　●太政大臣の唐名也　頭書云▲藝文類聚四
十五曰漢書百官表曰相國秦官金印紫授掌丞二天
子一助中理萬機上獨斷曰相國自二蕭何一以後殆非下後二人
臣一之位上參
〔第一節〕●竹林院と云よりおはせざりけりまで也
此段に節に分つ文段是に同じ●此節は前段にすべ
て何も皆事のとゝのほりたるは惡きことなりと云
るをうけて此二人の大臣を物の調りたるはあしき

ことをよくしり玉へる手本に書出たり萬物のうへのみに非す人の身の上も其心ばへを思ふべしとなるべし文

亢龍の悔ありとかやいふ事待るなり月みちてはかけ物盛にしておとろふ萬の事さきのつまりたるはやぶれにちかき道なり

亢龍 ●亢は高也文 ●易の占なり亢龍とは天上へのぼり極る龍なりのぼりきはまりてはくだるへきより外なし此故に後悔有也參　頭書云▲易乾卦上九亢龍有レ悔象云亢龍有レ悔盈不レ可レ久也又曰亢龍有レ悔與レ時偕極亢之爲レ言也知レ進而不レ知レ退知レ存而不レ知レ亡知レ得而不レ知レ喪壽 ▲王弼註曰九天之德也能用二天德一乃見二羣龍之義一焉夫以二剛健一而居二八之首一則物之所レ不レ與也本義曰上者最上亢之名亢者過二於上一而不レ能レ下之意也陽極二於上一動必有レ悔故其象占如レ此廣雅曰亢高也參

月滿て　頭書云▲釋名云月缺也滿則缺野 ▲古歌に「思へ只滿れは虧て缺月のいさよふ空や人の世中諺ちかき道也 ●前に志のこしたるを扨打置たるはいきのぶるわざと云にかけてみるべし文

〔第二節〕●亢龍と云より以下也●此節は天道のみてるをかくことはりをいひて一段の心を決せり文 ●亢龍の悔と月滿てはかくる是易と天道との上を以てものゝみたざるがよき義を結していへり上の段の心もこれにてしるべし加様に二三段かけて心をむすぶこと此草紙の筆法なり盤

〔一段之統論〕上段には器物の上よりいひ出し此段には官位のことより書下し人は只かけるに住してみてるに居るべからざる事をいふ器物官位品こそかはれ教誡することはりは皆相うけて同意なるものならし句 ●此段は世の愚なる人は後にやぶるゝをもしらずひとへに名利を求めて至極にいたりたがるぞ智者はしからず物の十分にきはまらぬ時にしりぞいて終に難にあふ事なし災難にあふは是亢龍の悔なりつれ〳〵一部の意指物のきはまる所をきらひていましめたり是兼好平生の執行は此段の意にて名利のたかぶりをやめてつれ〳〵にせよとの敎也説

〔八十四〕法顯三藏の天竺に渡りて故郷の扇を見てはかなしみ疾にふしては漢の食を願ひたまへる事をき

きてさばかりの人の無下にこそ心よはきけしきを人の國にて見え給ひけれど人のいひしに弘融僧都優に情ありける三藏かなといひたりしこそ法師のやうにもあらず心にくゝおぼえしが

法顯　頭書云▲高僧傳第三梁惠皎所レ撰法顯傳曰釋法顯姓龔平陽武平人也有二三兄一並髫齓而亡父恐二禍及一レ顯三歲便度爲二沙彌一居レ家數年病篤欲レ死因以送還レ寺信宿便差不二肯復歸一其母欲レ見レ之不能レ得後爲立二小屋一於二門外一以擬二去來一十歲遭二父憂一叔父以二其母寡獨不一レ立逼使二還俗一顯曰本不二以レ有レ父而出家一也正欲二遠レ塵離一レ俗故入レ道耳叔父善二其言一乃止頃（シバラクアツテ）之母喪至性過レ人葬事畢仍即還レ寺云々後至二荊州一卒二於辛寺一春秋八十有六衆咸慟惜云々野

三藏　●經律論の三つをおさめ得し人を云也諸頭書云▲金剛經直解曰三藏者經律論也參▲經は修多羅藏論は阿毘曇藏律は毘尼藏也藏とは包二藏諸勝義一故曰レ藏佛說を經と云弟子の所作を論と名付く律とは戒律なり文▲釋氏要覽曰經律論謂二之三藏一又佛藏菩薩藏聲聞藏名二三藏一々者攝也謂二攝レ人攝レ法故一句

天竺に渡りて　●晉安帝の時　頭書云▲宋史四百九十外國傳曰天竺國舊名二身毒一▲古今譯經圖記卷第一曰沙門法顯以三晉安帝隆安三年歲次二己亥一歷二遊印度一云々晉義熙元年歲次二乙巳一泛レ海而還參

故鄕の扇　●唐をさす也　頭書云▲一切經廣字函高僧法顯傳一卷東晉沙門釋法顯自記下遊二天竺一事上曰法顯到二師子國一一僧伽藍名二無畏山一有二五千僧一起二一佛殿一金銀刻鏤悉以二衆寶一中有二一青玉像一高三丈許通身七寶焰光威相嚴顯非二言所一レ載右掌中有二一無價寶珠一法顯去二漢地一積年所二與交接一悉異域人山川草木擧レ目無レ舊又同行分披或流或亡顧レ影唯己心常懷悲忽於二此玉像邊一見下商人以二晉地一白絹扇一供養上不レ覺悽然淚下滿レ目野

漢の食　●是も故鄕の食をねがふ也漢とは漢朝をいふにあらず天竺にてもろこしを云なり壽　頭書云▲法苑珠林九十一卷受齋篇曰東晉沙門法顯勵二節西天一歷二遊聖迹一往投二一寺一大小逢迎頓時遇レ疾主人上座親事經理勅二沙彌一爲二客僧一覓二本鄕齋食一倏忽往還脚有二瘡血一云往二彭城一吳若膺家一求レ食爲

レ犬所レ囓顯惟ニ其旋轉之間而遊ニ數萬里外一方悟ニ寺僧并非常人一也後隨レ船還レ國故往ニ彭城一追訪得ニ異著鷹一具レ狀問レ之答有ニ是事一便詣ニ餘血塗レ門之處一題曰此羅漢聖人血也當時見爲レ覓レ食耳如何遂損耶鷹鬪慚悚即捨レ宅爲レ寺見ニ晋文雜錄一文 ●支那は上唐虞より下元明に至るまで數千年の間代々の號をほきにをして漢といひ唐といひて支那の惣名とすることは漢は世をたもつこと四百年に餘り李唐は三百年にをよぶ故に其全盛の時をとりて號とする也此意朝鮮人崔溥が標海錄にもあり野 ●天竺までもゆくほとの人のとなり諺

さはかりの人

人の國にて ●他國をいふ也野　頭書云▲春日明神の託宣にひとの國の他の人より我人のといへり野

弘融 ●弘融前にくはし

優 ●弘融が法顯をほむる詞也文　頭書云▲字彙云和也勝也饒也文

心にくゝ ●兼好又僧都が詞をほめたる也およそ出家は身をすて世塵をはなれたるを以て本とする

によりて物の哀をもしらず情なき類のみおほししかるに此僧都世人に超過して優にやさしきをもつて後來の法師にしらしむるなり壽

おほえしか ●此かの字淸てよむべし哉の義也句 ●かの字うたがひのかに見れば義理大きにかはれり全

［一段之統論］●此段は法顯の事弘融の論じたる心ばへの奇妙なる事を書て法師と云ば只に無情の槁木のやうなる物と人思へりさやうにはあらずとの心なり惣じて佛弟子は世を濟ふ所の大慈悲あれば情なきものにはあらざるべしとの心にや文 ●此段の意は法師は無爲報恩をおもてとする故にやゝもすればそれにしづみてかの黃蘗の母をかへりみざるたぐひを證據にひきてみだりがはしく卓犖不羈の人のまねすること不孝不忠の大罪なるべし佛も迦維に父をかへりみ忉利に母をすくひ玉ふことき皆故鄕を思ひ給ふ故ならずや嗚呼黑獅子にさへをそれ玉はぬほどの法顯のやさしくも白團扇を見てかなしみ玉ふ事をのせたることものゝあはれもしらぬ情なき僧の心をやはらげんためのをしへなる

べし参

〔八十五〕人の心すなほならねば僞なきにしもあらず
されどをのづから正直の人などかなからんをのれす
なほならねど人の賢を見てうらやむはよのつねなり
すなほ　●廉直なり壽
僞なき　●氣質にひかれ人欲におほはれて天性の
まゝに廉直なる者まれなれば僞の人もある世なり
と也文
されど　●さはあれどなり参　●上をおさへて云說
正直の人などかなからん　●其中に自然と正直の
人なとかなからんとなり文　頭書云▲論語二十室
之邑有ニ忠信一といひ孟子に性善なりといふ心なり
野
人の賢を見てうらやむは　●我しわざにはすなほ
ならぬ事もあれどもと性善の人なれば人の賢を見
てうらやむはよのつねのよろしき人なりとなり文
●是中のよき人なり諺　頭書云▲論語里仁篇曰見
レ賢思レ齊焉見ニ不賢一而内自省也野
よのつね　●尋常と書
〔第一節〕●人の心と云よりよのつね也まで也此段

三節に分つ文段少しこと也●山案此節はたとひ我
身に行ぬとても人の賢をよろこぶは十分によきに
はあらねども大かたの善人なることを云て次の節
に頑愚の人のうへを云んためなり偖人の心すなほ
ならねば僞なきにしもあらずと書出せるは當時世
の人皆佞奸を先立て廉直の心なきをいきどほりて
書りしかれども僞のみなりとか僞をほきとか書べ
きをなきにしもあらずと書る文意せまらぬ筆法心
を著て味ふべしさて自ら正直の人もなどかなから
んといへる一章の骨子なるべし天性自然の善もつ
とも誣べからず
いたりて愚かなる人はたまたま賢なる人を見て是を
にくむおほきなる利を得むがために少しきの利をう
けず僞飾りて名をたてんとすとそしるおのれが心に
たがへるによりて此嘲をなすにてしりぬ此人は下愚
の性うつるべからず僞りて小利をも辭べからす
たまたま　●常に善をば目がけもせぬが適善人に
相見しては也盤
是をにくむ　●己が愚なるを悲しむ心はなくて却
而賢人を見てはそねみそしること至極の愚人故な

り參　頭書云▲大學人之有レ技媢疾以惡レ之人之彥聖而違レ之俾レ不レ通野　▲無量壽經下曰見レ善憎謗不レ思ニ慕及一參

少しき利をうけず僞飾りて名をたてんとすとそしる　●是は愚人の賢者をそしる詞也其詞の心は賢人の無欲なるは大利を得んがために小利をかへり見す心底には利を思はぬにもあらねど外を僞りかざりて名を求むためにかく無欲の顏をすることなりといふて謗る也參

おのれが心にたがへるによりて　●をのれとは愚人をさす盤●是は兼好の料簡して右の愚人の詞を破れるなり參●至愚のをのれが利を思ふ心のしわざと賢人の淸直なる有樣とはたがへるによりてなり文

此嘲をなすにてしりぬ　●至りて愚なる人と兼好のしりたると也今●此句は次の詞へかけてみるべし下愚の人の性はうつるべからず僞りて小利をも辭せぬ事がよくしらるゝとなり山案

下愚の性　●至極の愚なる人は賢を嘲るによりて敎ても其染りたる性のよき所にうつるといふ事なきなり是氣質の性也諺　頭書云▲論語陽貨篇上智與ニ下愚一不レ移野▲宗邢昺正義曰上知聖人不レ可ニ移レ之使ニ爲レ惡下愚之夫不レ可ニ移レ之使ニ強賢一參

辭べからず　辭退してとらぬ事はせず皆とるとなり句●前に至愚の人賢人をそしる詞に僞りかざりて大なる利を得んとすといへるをうけて賢人は利のために僞りて名をたてんとするにあらねと至愚の心にあてゝ此あざけりをなすが其愚人は僞りになりとも大利の事はさてをき小利をも辭せずしてとりぬべしと也文

〔第二節〕●いたりて愚なると云より辭すべからずと云までなり●此節は賢を見てもひとしからん事を思はぬ至愚の人かへりて賢を見てそしることをいへり文●此節よく〳〵見るべし彼至愚の人のかくそしることとは今の世とてもかはることなしたとひ世に智惠ある者と稱せらるゝ人も我才に自慢して我よりすぐれし者を見て又かくのことぐ云てそしるやからも間多し嗚呼是兼好の罪人ならん訛

かりにも愚を學ぶべからず狂人のまねとて大路をはしらば則狂人なり惡人の眞似とて人をころさば惡人

也驥を學ぶは驥の類ひ舜を學ぶは舜の徒なりいつはりても賢をまなばんを賢といふべし

かりにも愚を學ぶべからず　●假初にも愚人のまねなど也諺●まねまじきわけを次にいへり說●山案野槌はしめ鐵槌句解大全參考等には賢をまなぶべからずと書て上の辭すべからずと云下へ付て見るなり但し今貞德文段などの說にしたがふ文段云今師說にしたがへり其故はかりにも賢を學ぶべからずといふ詞はかの下愚の性うつるべからずといふに語重れるに似たり次の詞へかけてかりにも愚を學ぶべからずといふか語意つよきにはしくべからずと有又賢の字に作る說と今したがはさるとの辨は頭書にあり　頭書云▲本により愚をまなぶべからずと書たるありさりながら賢をまなぶべからずとあるかた可なるべしこれ對句の文法也僞りてと云とかりにもと云と小利を辭すると賢をまなぶとならべていへり猶小利を辭すると云は上の大なる利をゑんといふにかゝり賢をまなぶと云は上の名をたてんといふにかゝる也增鐵▲言意は下愚はかりそめざれことにも賢を學ぶべからずと也其故は賢は佞人のするわざのやうに覺へたり全▲山案此說ども文法を論ずるにはさもあらんかされど後人のいましめには愚を學ぶべからずと見るべし言意はかりそめにも愚を學ぶべからずたとひ眞似にするとも狂人惡人の作業をすれば自ら眞になるほとに次の詞にていましめし文意也其うへ上の節に僞りて小利をも辭すべからず至愚の人の上を云結び又此節をもいつはりても賢を學ばんを賢といふべしと云結びしを見れば是對句を以て書なれば愚の字に書しも文法亦よかるべし又僞りて小利をも辭すべからずと云下の節へ付て見る說もあれど整なれば今是略す

狂人のまね　頭書云▲禪話狂人走不狂人走▲淮南子曰狂者東走逐者東走東走則同所ニ以東走ー則異壽私思別也

惡人の眞似とて　●大路をはしり人をころしなどして心よりにてはなしまね也といふとも人是をまねなりとてゆるさんやしかるときはかりそめのたはふれ事にも愚を學ぶべからずと上へかへしてみるべし山案　頭書云▲楊子法言脩身篇曰人之性也善

惡混脩ニ其善一則爲ニ善人一脩ニ其惡一則爲ニ惡人一壽

驥を學ぶ ●驥は千里をゆく馬也參 ●たとひかのつねの馬にても千里をゆかんとせば驥のたぐひぞとなり諸 頭書云▲說文曰驥千里馬也句 ▲楊子法言學行篇曰晞レ驥之馬亦驥之乘也晞レ顏之人亦顏之徒也壽

舜を學ぶ ●古しへの聖人舜とおなし一類そと也參 頭書云▲孟子盡心上篇曰孟子曰鷄鳴而起孳々爲レ善者舜之徒也鷄鳴而起孳々爲レ利者蹠之徒也註 孳々勤勉之意言雖レ未レ至ニ於聖人一亦是聖人之徒也蹠盜蹠也文 ▲孟子告子下云曹交問曰人皆可ニ以爲ニ堯舜一有諸孟子曰堯舜之道孝弟而已矣子服ニ堯之服一誦ニ堯之言一行ニ堯之行一是堯而已矣子服ニ桀之服一誦ニ桀之言一行ニ桀之行一是桀而已矣野

いつはりても賢を學ばんを賢といふべし ●此結句眼目也全 ●愚人のいふ僞に對して云也此論おもしろし今時の人の心得ぬべき事也たまゝ善人有て儒學をして道を行んとすれば僞りて名聞にするなどそしる也是を見てそしるまじき也盤

［第三節］●かりにもと云より終までなり●此節はたとひかりそめにも惡をまなぶべからず賢をまねぶべしと云心を書て一段と決したり文 ●山案此節は上節に至愚のうへを云しにうけてかりにも愚の眞似をするなどいましめ僞りても善をなせとすゝめけること尤有難しされば僞りにても我心よりをこらねばせぬと也戲言なれども思ふより出といへり又末の段に事理もとより二つならず外相もしそむかざれば內證かならず熟すともいへり彼惡人の善人を見て僞りかざりてするなどゝ云てそしることを大きにやぶれり

［一段之統論］●此段たとへ己こそ賢ならずとも賢を見てひとしからんことを願へ又たとへ愚ならずとても愚を學ぶ人はまことの愚なることを教へたり諺 ●上の段に人情を論ずるにうけて又此段には人心のことに及し人の信不信をいましめ忠直をすすむ末に僞りにも賢を學ぶべしといへる是則後漢の張湛が意にして通章の要文なることをしるべし

後漢張湛矜嚴好レ禮人或謂レ湛爲ニ僞詐一湛曰人皆詐レ惡我獨詐レ善句

［八十六］ 惟繼中納言は風月の才にとめる人なり一

生精進にて讀經うちして寺法師の圓伊僧正と同宿して待りけるに文保に三井寺やかれし時坊主にあひて御坊をば寺法師とこそ申つれど寺はなければ今よりはほうしとこそ申さめといはれけりいみしき秀句なりけり

惟繼　頭書云▲一本に伊嗣と書は非なり惟繼中納言平氏西洞院嫡流也元德二年任ニ權中納言一建武二年任ニ文章博士曆應五年出家七十六歳法名宴儀康永二年四月十八日卒す七十八歳壽

桓武天皇(人皇)―葛原親王(一品式部卿)―高棟王(大納言正三位)―

―惟範(中納言從三位)―時望(從三位中納言)―眞材(從四位下伊勢守)―親信(參議從二位)―

―行義(從四位下武藏守)―範國(右工門權佐正四位下)―經方(春宮亮從五位上)―知信―

―兵部大輔從四位上―信範(兵部卿正三位)―信國(少納言正五位下)―時兼(從三位右京大夫)―兼親―

―宮內卿從三位―高兼(治部卿從二位)―惟繼(權中納言正二位)

風月の才●詩歌の才なり諸

とめる●さかりに多く有義也野　頭書云▲文選枚叔七發曰太子方富ニ於年一濟註曰富盛也參

精進　●佛書の心は其道を好てすゝみ油斷なきを云今俗に魚鳥をくはぬを云にも通ふべし參　頭書云▲弘決曰無レ雜故精無レ間故進云々其事をつとめて他事なきを云り今魚鳥をくはざるを精進と云は不殺生戒の心にや文

うちして　●餘事をましえず勤るをいふ也說●山案うちの字は物をさびしくいふべきためもちゆることは也

寺法師　●是より下は惟繼の物語也諸●山おほしと雖とも山と計いへば比叡山寺おほしといへども寺とばかりいふ時は園城寺なり園城寺は則三井寺なり野

圓伊　頭書云▲伊平大納言の孫也風雅集にも前權僧正圓伊の忍待戀の心をよめる歌一首の間はたれも人めをつゝめばとふくるつらさを忘れてぞまつ壽▲作者部類を見るに圓伊の歌玉葉集新千載續後撰等にも入りぬ文

大職冠―淡海公―房前―眞楯―內麿―

―冬嗣―良房―基經―忠平―師輔―

―兼家―道長―賴通―師實―經實―

「經宗――賴實――賴平――伊平 これまでは右六十七段近衛局の系圖にくわし」

尊道――圓伊僧正

文保 ●九十四代花園院の年號也文保元年四月二十五日山門より三井寺をやく事ありし也野

ほうしとこそ ●日此圓伊僧正のみづからを出して寺法師といひて寺といへば園城寺にかくれなき事をほこられしによりて此慢心をくだかんため法師とこそとは云り諺 ●又一説●ほうしとは火燒しに取なす也燒出されの法師なれば火うからんといふ意なりほとひと五音相通なれば也諸 ●後說文段には有べしと云り大全には文のうつりにかなはす味ふべしといへり

秀句 ●野云秀逸の詩歌をいふ義もあれどこゝにては俳諧の戯言也季吟曰のよのつねは云かけを秀句といへどもこゝは野槌の說を用ゆべきなり文 ●悅目抄云秀句と云は物を兼たる也浪のよる〳〵目もあかずとつゞけつれば浪のよせともよるの夜共かねたるなり盤

「一段之統論」●此段は前に驥を學ぶは驥のたぐひ舜を學は舜の徒也といふをうけて惟繼卿の俗ながら聖のをこないし給へることは沙門の徒也といふ意なるべし諸 ●上段に人心の直不直を論ずるにうけて又此段には人の滿心をやむへきことをいへり偺此秀句下心は教誡としてうはべは世俗の纖語俳言の體にしたがはれたる誠に花實兼備はりて尤いみじき秀句なるべし句 ●此段上段に僞りても賢をまなぶをうけて出家のまねしても則出家なるとの義に譬り秀句のことはつゐてに中納言の事を書也これに心なし又五郎男の事を云とひとつなり此秀句に心をつけてとかく云はよからずつゐでにかくいひたると見るべし盤

「八十七」下部に酒のまする事は心すべきことなり宇治に住みける男京に具覺坊とてなまめきたる遁世の僧をこじうと成ければ常に申むつびけりある時むかひに馬をつかはしたりければはるか成程なり口つきの男に先一どせさせよとて酒を出したればさしうけうけよゝとのみぬ太刀うちはきてかひ〳〵しければたのもしく覺えて召具して行程に木幡の程にて奈良法師の兵士あまたぐして逢たるに此男立むかひて日

暮にたる山中にあやしきぞとまり候へといひて太刀をひきぬきければ人も皆太刀ぬき矢はげなッどしけるを具覺坊手をすりてうつし心なく醉たる者に候まげてゆるし給はらんといひければをの〳〵あざけりて過ぬ此男具覺坊にあひて御坊は口おしき事したまひつる物かな己ゑひたる事侍らず高名つかまつらんとするをぬける太刀むなしくなし給ひつる事といかりてひたぎりに切をどしつ扨山だち有とのゝじりければ里人をこりて出あへはわれこそ山だちよといひてはしりかゝりつゝきりまはりけるをあまたして手おほせうちふせてしばりけり馬は血つきて宇治大路の家にはしり入たり淺ましくて男共あまたはしらかしたれば具覺坊はくちなし原によひふしたるをもとめ出てかきもてきつからき命いきたれど腰きり損ぜられてかたわになりにけり

下部 ●すべて下劣の者を云奴僕に限りたる義にはあらず句

心すべき ●心づかひすべきと也壽 ●通章の本意此二句をもつて見るべし句

具覺坊 ●傳記いまだしれず

なまめきたる ●風流なる心なり●やさしき義也出家なれども人情をも考へしれたるをいふ成べし下にむかひの男に酒のませられたる事なと書爲の詞也句

むつび ●昵(チツ ムツマシ ムツミ)文 ●睦(ムツミ)諺 二字相通る也●申通しむつまじくする也壽

むかひに ●具覺坊かむかひに

はるか ●是具覺坊が云也京より宇治迄は遠路と也句

口つきの男 ●馬の口につきて行者也和名に[illegible]人(クチトリ)

增鐵

一ど ●一度一土一斗と三說あり●一度と書てひとつとよむべし酒一盃二盃と書ても歌書にては一つ二つとよむ也おくにも今ひとつうへすくなしとあり金 ●一盃せさせよといふ心也土器に三度入五度入などいふ有是一盃づゝ三度くむ程のおほきなる土器をいふ也五度入七度入皆おなじ心なりされば一度は一盃といふ心しられ侍り一說に一土と書てよかるべし一土器と云事也といへりこれも捨べからず文 ●一斗は一銚子といふ事是も一盃とい

ふ心に通ふべし　頭書云▲古來一土なりといへども愚案ずるに釋日本紀云私記云問謂ニ之八鹽折酒一有ニ何意一哉答或說一度醸熟絞ニ取其汁一弃ニ其精一更用ニ其酒一爲レ汁亦更醸レ之如レ此八度是爲ニ純醋之酒一也謂ニ之鹽一者以ニ其汁一八度絞返故也便爲ニ一鹽一也謂ニ之折一者以ニ其八度一折返故也是古考之說也これをもちて見れば一度なるべし酒のことなりと見へたり盤▲又一斗詩大雅行葦詩酌以ニ大斗一字彙斗者飲器又作レ枓々者酌レ水之器形如ニ北斗一有レ柄愚案ずるに今云ふ銚子なるべし但し世說十三に枓者飲酒之抔也と注しければこゝにても一榼といふこゝろならんか說

よゝ　●源語類聚によゝは能々と有今案にては能々のむと見るべき歟壽●餘々共可レ書又予々と書我手づからのむ也說　頭書云▲夕良巻によゝとなきぬとありよゝはなく聲也河海に「君によりよゝよゝ〳〵とよゝ〳〵と音をのみぞなくよゝ〳〵よゝと六帖野

兵士　●弓箭など持せたる武士どもなり諺

逢たる　●行あひたる也說

此男　●口つきの男諺

日暮にたる　●に助字

とまり候へ　●具覺坊にとまられよと也又向ふの人にいふとも諺

人も皆　●向の人也諺

うつし心　●萬葉に現心と書り源語類聚にうつし心ならぬとは狂亂のこゝろなり壽　頭書云▲古今に「いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ことにしてとよめる詞也文▲後拾遺戀の四に「こひしさを忍びもあへず空蟬のうつし心もなくなりにけり鐵増▲葵の卷にうつし心ならず覺え給ふ折々もあればとなり句

まけて　●枉の字也理をまげてとわびたる也壽

頭書云▲傳心法要曰未レ逢ニ出世明師一枉服ニ太乘法藥一參

あひて　●向て也

ひたぎり　●かへりて具覺坊をきる也醉狂故也古

どすの今の字にこる義も有參

のゝじり　●自云たる詞なり古

あまた　●大勢よりてなり

おほせ　○負の字なり諺
しばり　○彼男しばりて也
馬は血つきて　頭書云▲馬は路を知るもの也韓子曰齊桓公伐ニ孤竹一春往冬還迷惑失レ道管仲曰老馬之知可レ用乃放ニ老馬一而隨レ之遂得レ道盤
宇治大路の家にはしり　○風俗通に馬夜道をゆく時は目あきらかにして前四丈をてらすとあれば道を知てひとりゆきし也參
淺ましくて　○主人馬に血つきしを見て淺間敷思ひし故に人をはしらする也參
くちなし原　○名所にあらず木幡の邊に梔原多し諺　頭書云▲新古今知家の歌「木幡山あるはさながら口なしのやどかるとてもこたへやはせんなどとあり諺
よひふし　○呻吟と書てうめく義なり諸
かきもて　○鑑輿などにのせて舁もてくるなり諸
からき命　○辛の字諺　○俗にいふ命から〳〵なり說
かたわ　○片輪とも又不具とも書說
なりにけり　○からき命といふ以下の詞は一部の評論なり結語なり盤

【一段之統論】○山案此段は上段に法師のうはさを云しをうけて具覺坊か事を書りさて酒は人の心を亂すものなれば尤其量りをさだめて用ゆべき中に殊に下部はみだりに心のまゝに飲て醉狂するものなればいよ〳〵心すべしとのいましめなりされば酒は禍福の二つをかねたり史記に云郊天禮廟非レ酒不レ享君臣朋友非レ酒不レ義闘爭相和非レ酒不レ勸とあるを見るときは一時もすつべきものにはあらざれとも又過れば害となるぞ景行錄云言多語失皆因レ酒とあり此男もみだりに言を發して山だちなりと云わめく故にかゝる難も出來る也是皆酒のなす禍なり論語に惟酒無レ量不レ及レ亂とあるは尤至り難き地位なれば人として其量を思惟して賓主の禮をなすべきものなり明心寶鑑云神宗皇帝御制遠ニ非道之財一戒ニ過度之酒一とあり此章下部をいましめたるやうなれどすべて諸人の酒をすごして亂に及ぶをいましめ殊には沙門には酒戒もわきてつよく人にすゝめてのませても悪道の緣をまねく事なるをかほどに人をまできりなやますほど正念を

うしなはしむる具覺坊のしわざなさけの罪過なりといひて緇門をも教訓せる下心あるにや參●此段發端の兩句勿論通章の大意なれど出家遁世の身の世間を所得顔にし身禍來りて後俗よりもまさりて見ぐるしき物也と後來の教誡に書る下心をも兼て見るべき也句

〔八十八〕或者小野道風の書る和漢朗詠集とてもちたりけるを或人御相傳うける事には侍らじなれども四條大納言えらばれたる物を道風かゝん事時代やたがひ侍らんおぼつかなくこそといひければさ候へとて世に有がたき物には侍りけれとていよ〳〵秘藏しけり

小野道風　●能書にて道風佐野行成を日本の三筆と云　頭書云▲河海云木工頭小野道風正四位下參議峯守太宰大貳葛絃男▲從四位上木工頭道風朝臣寛平五年生村上天皇康保三年十一月卒七十一歳壽▲一說延喜五年に生ずと云々野

敏達天皇（人皇三十一代）—春日皇子——妹子王（大德冠）—毛人—

（大德冠 中納言）—毛野（中納言 從三位）—永見（征夷將軍 從五位）—峯守（從四位下 參議）—

葛絃（備前守）—道風（正四位下 內藏頭）

朗詠集　●上下卷有むかしはふしをつけてうたひけるとなん日本人と唐人との作れる詩を撰によりて和漢と號するか詩文と和歌と載ぬる故にいふか野

うける　●うけるとは浮虚の義なるべし野●御家に代々かく相傳の上は實なき事にはあらじとなり句●又相傳をうけんと申にてはなきともいへり諺

四條大納言えらばれたる　●公任卿の撰する所也但和歌は公任以後堀川院の御時師頼書加へ給ふといへどももとも公任の詩歌ともに書給ふ有といへり世に傳るは大二條關白教通公を聟にとり給ふ時に引出物にせんため撰硯箱の蓋に入て出し給へば朗詠の異名を硯蓋不出書とも云といへども此說さのみ不レ用なり　頭書云▲關白賴忠公の男正二位權大納言公任卿なり後一條院治安四年十二月十日致レ仕萬壽三年六月出家長元二年正月一日に薨す歳六十二和漢朗詠をえらぶ歌人なり

鎌足——不比等——房前——眞楯——內麿—

冬嗣　良房──基經──忠平（これまでは前十段圖伊の系圖に見えたり）
└實頼（攝政太政大臣從一位）　頼忠（關白太政大臣從一位）──公任

時代やたかひ待らん　●公任は村上天皇康保三年にうまる道風は康保三年十一月に卒すしかれば公任の誕生は道風死去の年也後の人の朗詠を始め道風書ん事時代相違といへる或人の不審なり諸さ候へば　●是より特主の返事也諺

いよ〳〵秘藏しけり　●前にもいひしことく下愚の性はうつらぬものにて何事にてもはじめ思ひ寄たる道に心を付て終に其あやまりをたゞす事はせぬ也説

［一段之統論］●此段は上の段に醉狂人の事を書るにうけて又此段には至て愚かなる者の物語をしるせり誠に其身無智なれども我義をたてゝ人の是非を聞入さる類ひ今も世にをほかるべし里語に非學者論にまけずとは是その人が是惡心第一なりかやうの心ありとしれは智者も道理をかたらず良朋も善をすゝめずいよ〳〵天地の罪人なるべし書をよみて其非をあらたむる事こそなくともかやうの物語を若智者の邊りにて聞ば豈露心に監みさるべきや句　●此段世に愚なる者のことを云ふ誠に此類異朝にも有　●説苑曰宋愚人得燕石藏之以爲大寶周客聞而觀之主人齋七日端(タンベン)冕玄服發寶革櫃十重提巾十襲客見俛而掩口胡盧而笑曰燕石也主人大怒曰肓賛之言藏愈固守愈謹野

［八十九］奥山に猫またといふ物有て人をくらふなると人のいひけるに山ならね共此等にも猫のへあがりて猫またに成て人とる事はあなる物をといふ者有けるを何阿彌陀佛とかや連歌しける法師の行願寺の邊に有けるが聞て一人ありかん身は心すべき事にこそと思ひける比しも或所にて夜更る迄連歌して只獨歸りけるに小川のはたにて音に聞し猫またあやまたず足のもとへふとよりきてやがてかきつくまゝに頸の程をくはんとす肝心もうせてふせがんとするに力もなく足もたゝず小川へころび入てたすけよや猫またよや〳〵とさけべば家々より松どもともして走り寄て見れば此わたりに見しれる僧なりこはいかにとて河の中より抱きおこしたれば連歌の賭とりて扇小箱などふところに持たるも水に入ぬ希有にしてた

すかりたるさまにてはふ〱家に入にけりかひける
犬のくらけれどぬしをしりて飛つきたりけるとぞ

猫また　●猫まのたけたるといふ心にてねこまた
といふなるべし参　頭書云▲和名猫音苗禰古麻善
捕レ鼠也参　▲山案格物論云猫捕レ鼠獸也斑文不レ一
目睛旦暮圓及レ午竪斂如レ綖其鼻端常冷帷夏至一日
暖▲金花猫は黄なる猫なりばけて婦女をおかして
煩をなす其雄猫におかされたるは雄をころして是
を治し雌猫におかされたるは雌をとらへてこれを
治すといふこと續耳談月令廣義など云書に見へた
り野

あゝなる　●有なる也諺

何　●其名たしかならぬ心なり諺

阿彌陀　●陀佛の二字をは略してよむ口傳なり諺
頭書云▲時宗の名に何あみか阿彌と云有むかしも
周阿など連歌の宗匠ありし今に時宗に連歌師をほ
し▲貞徳曰時宗の名に付字四十八字定りて有る也
文

行願寺　●一條の革堂の寺號なり諸　頭書云▲元
享釋書十四云釋行圓鎮西人寛弘二年遊ニ帝城一頭戴ニ
寶冠一身披ニ革服一都下呼爲ニ革上人一於ニ賀茂神祠側一
營ニ行願寺一安ニ千手像一以ニ圓衣ニ革俗呼ニ行願寺一爲ニ
革堂一野

心すべき　●用心也諺

小川のはたにて　●前に行願寺のほとりといへる
首尾おもしろし革堂むかしは一條の北の小川に有
し也大閤秀吉公の時に其地をひかれて今の寺町には
侍文

猫またよや〱　●古點にはねこまたよやねこま
たよやとよめども今はよや〱と計よむ也文　●よ
や〱とは助けよや〱と上をうけたる詞なり句
頭書云▲よや〱とよむへきためしには清少納言
の集の歌に「忘るなよなよといひしは呉竹のふし
をへたつる數にそ有ける此わするなよなよとかさ
ねたる詞の體也文

松ども　松明也諺

わたり　●あたりなり諺

見しれる　●革堂邊の者共日比能見しれる僧也と
也言

連歌の賭　●其比は連歌かけものとて皆みやけを

くはりし也貞 ●連歌の時亭主よりいたさるゝひき
でもの也盤
ふところに ●其日のみやげともを懐中しける也
說
希有 ●まれなる事なりたまさかにして命をたす
かりし心なり文
はふ〳〵 ●匍々と書あゆむ事不レ叶して はふて
家に入たる體也句
くらけれど ●闇の夜なれどもと也說
ぬしをしる ●夫木集賀茂社百首歌に｜思ひくる
人は中々なきものをあはれに犬のぬしをしりぬる
句
飛つきたりける ●ねこまたにてはなかりしと也
諸
〔一段之統論〕●此段上の段にいたりて愚かなる者
の事をいへるにうけて一心愚迷の者の眼前にはあ
らぬものゝ現じて其身の害をなす事皆己よりする
とがなる道理をあらはしかゝるわづらひある人に
はぢあらためさせん爲なるへし句 ●山案此段物に
まよふと云は外より來るに非す皆我心のしわざな

り此法師かね〳〵猫またの物語を聞て心にまよひ
ける故になき化物を何かと恐るゝも心愚痴なる故
にはじめふと思ひ籠し迷ひによつて也されば地獄
餓鬼畜生道へをつると云も平生我心一心のむけや
うあしければなり彼茄子を蹈て蛙かと疑し異國の
沙門水鳥の羽音を聞て敵かと驚きし平家の武士の
たぐひなど可二思合一

〔九十〕大納言法印のめしつかひし乙鶴丸やすら殿と
いふ者をしりて常に行通ひしに或時出て歸りきたる
を法印いづくへゆきつるぞととひしかばやすら殿の
かり罷りて候といふ其やすら殿は男か法師かと又と
はれて袖かき合ていかゞ候覽かしらをば見候はずと
答へ申さなどか頭計の見えざりけん

大納言法印 ●或說に大納言たる人の子法印なれ
ば大納言法印と云たとへば殿下の息僧正なれば殿
僧正といひ法印なれば殿法印といふなりされどこ
こには聖家の僧に公名とて官名をつく事有平家物語
に中納言律師などいふ類なりさして父の官にかま
はざるなり又僧官にもあらず名を呼也寬平法皇御
出家の後此僧侶に多し說 ●法印なりし僧の名なる

べし誰ともしれず　頭書云△桑花紀年に記す昌泰二年十月宇多太上天皇仁和寺にをゐて髮を祝す延喜元年十二月法皇御堂を仁和寺に造り給ふを俗に御室と云其後叉叡山に來著給へり其跡今猶あ　其時百官公卿をほく法皇御供申てひゑの山に來り髮をそられけるが公家の入道なる故にはじめ大納言にてありし人をは大納言入道といひ中將をはそのまゝ中將入道とよびて其昔をあらためず此故に天台宗には俗姓をゑらびて兒の髮をそり俗姓よからぬは衆徒のかずに入すこれによりてかの剃髮の時俗姓のいやしからぬをば年わかき間にはかの公家衆の入道に比してこれに官號をあたふ本をおすときは宇多の法皇の勅許なり私の號にあらず僧の公名をつく事本天台宗等よりはじまれり故此法印天台の僧徒なればかく云ふなり職原を案ずるに法印准二四位殿上人一と在也參

乙鶴丸　○小童の名成べし句

やすら殿　○安良と書歟壽　誰共しれず

行通　○男色の交り成べし諺

或時出て　○乙鶴丸出し也諺

かゝり罷りて　○許の字もとゝよむ

其やすら殿は　○是より法印の詞也諺

袖かき合て　○はづかしがる體也諸

なとか頭計　○是より兼好の評論なり盤

〔一段之統論〕○上の段に愚迷の者の我と身の害をなすことをいへるにうけて叉此段には己があやまりを人に問つめられて其言葉の首尾をもわきまへずこたへたる事を云一心迷亂する折は此事のみならず此童のみならずなへての事に付て誰もかく有べき也眞に鑑むべしつゝしむべし句　○上段は前かたより用心しすぐしたるなり此段は前かたに用心なくて行あたりたるなり過不及の心をいへり盤

○爰に一說あり是は實に愚人の體を顯す日比睦したしみたる人を問れて頭を見ぬと云こと至て愚人なる故に男法師の分ちを不レ見今も如レ此に善惡の目利なく人に交る人あり凡そ朋友に益友損友あり損友を避善友を親めば日々に不レ覺善に至る故に交を結ぶ中に其善惡を見付ざるは猶乙鶴丸が如しと云ふを敎へたり諺

〔九十二〕赤舌日と云いふ事陰陽道には沙汰なき事な

りむかしの人是をいまず此比何者のいひ出ていみはじめけるにか此日ある事末とをらずといひて其日いひたりしことしたりし事かなはず得たりし物はうしなひくはだてたりし事ならずといふ愚かなり吉日をえらびてなしたるわざの末とをらぬをかぞへて見んも又ひとしかるべし其故は無常變易のさかひありと見る物も存せず始ある事も終なしこゝろざしはとげず望はたゝず人の心不定なり物みな幻化也何事かしばらくも住する此理をしらざるなり吉日に惡をなすに必凶なり惡日に善をおこなふにかならず吉也と云り吉凶は人によりて日によらず

赤舌日　●壽說にはかなごよみにしやくと云日是也即赤口日也舊抄には赤口と赤舌とをひとつにしてあつかひけれ共簠簋内傳には二ケ日の日どりを各別にのせたり冠者を見るべし參　頭書云▲簠簋内傳曰赤口日正三二一八七六五四三二一赤舌日二二一六五四三二一六五四右今二箇日取太歳神東西番爰赤口神者爲ニ大歳東門番神一云々次赤舌神者爲ニ大歳西門番神一頗以ニ六大鬼一令レ守ニ護之一所謂六大鬼者一明堂神二地荒神三羅刹神四大澤神五白道神六窂獄受神等也自ニ正月朔日一以ニ今所レ明六大鬼一番々守ニ護之一百億鬼神尤附ニ屬之一爰第三番羅刹神極惡忿怒令レ惱ニ亂閻浮提衆生一故號ニ赤舌日一專禁レ之參 ▲通書大全曰赤口日忌ニ會レ客詞レ事買一

▲又曰主ニ口舌喧爭一壽

陰陽道　●占博士なり參 ●天文を見て運氣をかんがへ暦數を知て日をさだむる家なり說　頭書云▲職原曰陰陽寮掌ニ天文暦數事一昔者一家兼ニ兩道一而賀茂保憲以ニ暦道一傳ニ其子光榮一以ニ天文道一傳ニ弟子安倍晴明一自レ此已後兩道相分野 ▲職員令云陰陽頭掌ニ天文暦數風雲氣色奏聞事一令義解云天文者日月五星二十八宿也暦數者計ニ日月之度數一而造レ暦授レ時也昔賀茂氏一家知ニ天文暦數之兩道之事一後安部清明傳ニ天文道一以來分爲ニ賀茂安倍之二家一文

沙汰なき　●舊抄に曰赤口日赤舌日の事晴明が簠簋に是有簠簋は陰陽家の秘事たる故其比世上へ出ざるにより兼好の見給はざりしと見えたり句

ひとしかるべし　●吉日に事をなしたるにあまた末とをらぬ事あり然れば是も惡日になしたるとひとしからんと也諺

無常變易　●物の常住に定りたる事なき境界なればＨの吉凶も定るまじきといはんとてなり文　頭書云▲涅槃經諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂▲天台四門有門空門非有非空門亦有亦空門野　▲涅槃經二十七曰如來常住無レ有ニ變易一參

●終なし　頭書云▲明心寶鑑曰人生驕與レ侈有レ始多無レ終參

●望はたゝす　頭書云　▲往生要集曰一生雖レ盡希望不レ盡參

人の心不定也　●朝思ふ事も夕にはやくかはり若き時の心老ては又かはれるなり諺

物みな幻化也　●物とは萬物也盤　●物皆まぼろしのごとく變化するといへる義也句　●幻化は幻術ハの人形をつかふ時實に有事のやうなれど其實體なきごとく萬物皆かはりゆくを云なり參　頭書云▲圓覺經曰幻身滅故幻滅亦滅幻滅々故非幻不レ滅野▲玄義云若業若果善惡等法乃至涅槃皆如ニ幻化一▲止觀曰若言ニ假實一諸法體如ニ幻化一乃至涅槃亦如ニ幻化一盤　▲圓覺經曰菩薩衆生皆是幻化▲楞嚴經疏曰假託ニ虛僞一妄設レ情名稱レ幻無而忽有畢竟無レ體稱レ之曰レ化▲圓覺略疏曰幻者謂世有ニ幻法一依ニ草木等一幻ニ作人畜一宛似ニ往來動作之相一須臾法謝還成ニ草木一然諸經致幻喩偏多良以ニ五天此術頗衆見聞旣審法理易レ明及レ傳ニ此方一翻成レ難レ曉參

住する　●常住ならぬと也諸

理をしらざる　●萬物皆變易の道理をしらぬに依て日を賴む也諺

かならず　●ふたつの必といふ字肝心也いかなる大吉日を擇ても行ふ事惡なれば必凶し又惡日とても行ふ事善なれば必吉なり諺

吉凶は人によりて　●日をかまはず自分を正しくすべきよし盤●此一句通章の要文成べし句　頭書云▲事文類聚前集十二沈顏時日無ニ吉凶一辨云吉者國家將レ有レ事ニ乎戎祀一必先擇ニ時日一以定ニ其期一是用備ニ物於有司一習ニ儀於禮寺一俾下臻ニ其慮一而戒中其誠上非レ所下以定ニ吉凶一決中勝負上也後之惑者不レ詳其故推ニ考時日一妄生ニ穿鑿一斯風不レ革拘忌益深云々且吉凶由レ人焉繫ニ時日一云々其凶也必由ニ於人一其吉也必由ニ於人一故吉人凶ニ其吉一凶人吉ニ其凶一一ニ於人之所レ爲而已矣然則惑者不レ知ニ其在レ人也有ニ一不

吉一則罪ニ於時日一矣△羅浮子背應ニ或人之求一而著ニ軍書題説一其中論ニ時日一其略曰夫往亡之日兵家所レ忌晉武帝曰我往彼亡吉孰大レ焉遂平ニ慕容氏一甲子者紂所レ亡兵家忌レ之後魏武帝曰紂以ニ甲子一亡武王以ニ甲子一勝遂破ニ賀鱗一鄧禹以ニ六甲窮日一理レ兵以敗ニ劉均一劉裕不レ避ニ折レ竿沉レ幡之凶兆一以擊ニ盧循一而走レ之皆是太公折レ蓍毀レ龜之遺意也耶尉繚子曰黃帝刑德者人事而已矣孟子曰天時不レ如ニ地利一地利不レ如ニ人和一言盡ニ于此一而已耶然又有ニ一理一康節先生出行不レ擇レ日或告レ之以レ不レ利則不レ行蓋曰人未レ言則不レ知既言則有レ知而必行故鬼神敵也是亦可レ不レ思乎嗚呼時日用捨存ニ於其人一矣野△涅槃經二十日求ニ佛良醫一不レ應レ選ニ擇良時好日一參

〔一段之統論〕●上の段に一心迷惑の者の言の首尾あはざる事をいへるにうけて又此段には道理を論ぜす只時日の吉凶擇ふ者の愚迷心をさとす也句●上の段に心によりて懼すぎ心によりて行あたることを云て兎角自分の用心なるよしあれば日によらず心によること世俗のみならぬ理をいへり壽●此章に見やうあるべし世人の行跡をばはげまずしてひとへに日の吉凶にかゝはりて執行す故に其愚なる心を破せんがためにいへり實は吉日惡日もなきには非す或は孤虛王相の方角をさだめて大軍をおこし或は年月時日を考て本卦の吉凶をとりて日用の行をつゝしむしかれば此段必辭に泥で心を害することなかれ諺●此草子周易を皮膚とせしといふことゝ是等の段也兼好は易をもよく知たる人なるべし如何となれば聖人易を作り給ふ本意は一卦一爻毎に皆人をして身をかへり見てつゝしましむるのいましめとして吉日とのみ思ひて油斷しおこたりてつゝしまざる則は其事なからず凶となる又惡日と思ひてつゝしみおそるゝ則は惡變じて善事となる故に孔子の吉凶悔吝は動によりておこるといへり我朝の人は易の本意をしらず嗚呼なげかはしひかな新注

〔九十二〕或人弓いる事をならふにもろ矢をたばさみて的に向ふ師のいはく初心の人ふたつの矢をもつ事なかれ後の矢をたのみてはじめの矢になをざりのこころあり毎度たゞ得失なく此一箭にさだむべしと思へといふわづかに二の矢師の前にてひとつをおろか

にせんと思はんや懈怠の心みづからしらずといへども師是をしる此いましめ萬事にわたるべし

ならふに　●まづたとへをいひ出す也文

もろ矢をたはさみ　●一手とて矢二筋を手挾てもつ也文●我朝的を射るには矢二本を以てゐるなり初矢を早矢といひ二度目にいるを乙矢といふ又兄矢弟矢共書唐には四本をば一手と云也說

ふたつの矢をもつ事なかれ　●弓の師が弟子をいましむる詞なり諸

なをざりのこゝろあり　●源氏におほきことば也孟津抄に平生遊仙窟と有よのつねに思ふ心也文●又等閑と書なげやりにする義なり句●二筋有によりて若早矢を射損したらば乙矢をあてんと思ふたのみ有からに自然とはじめの矢をばよのつねなけやりさまに思ひふたつになりてあしければ一心に思ひ入よとのこゝろなり諸

得失　●得はあたる事失はあたらぬ事なり盤●始の矢にあつることをうしなふ共後の矢にあて得んと思ふたのみなかれといふ心を得失なくとはいへり句

思へといふ　●是迄弓の師の詞說

わづかに　●是より上を評論したる詞なり諸

おろかに　●おろそかにせんとは思ふまじきとなり文

みづから　●自は弟子なり盤

いましめ　●決前生後の詞なり盤●山案此弓の師のいましめの心萬の事に通すべしかくゆだんせんとおもふまじき事さへ自然に懈怠の心あるなれば其餘の事のおろそかにおもへる事どものおこたりがちなるはもつともなり能々心得べき事也

［第一節］●ある人と云よりわたるべしと云までなり此段を二節に分ち見るべし文段は三節に見る也●山案此節はまづ射藝を習ふ者心入を教へたりさて萬の事にわたるへしと云結て次の節にてことはりたるなり此弓の事は次の節を書べきためにたとへを擧たり是詩經の興の詩の意なり

道を學する人ゆふべには朝あらん事をおもひあしたには夕あらんことを思ひてかさねてねんごろに修せん事を期すいはんや一刹那のうちにをひて懈怠の心ある事をしらんやなんぞ只今の一念におひてたゞち

にする事の甚かたき

道を學云々　●上に萬事にわたるべしといひて其中にて學の一道につきていふ也盤　頭書云▲朱文公勸學文曰勿レ謂今日不レ學而有二來日一勿レ謂今年不レ學而有二來年一日月逝矣歳不二我延一嗚呼老是誰之愆壽

朝あらん事を思ひ　頭書云▲景行錄曰明旦之事薄暮不レ可レ必薄暮之事晡時不レ可レ必天有二不測之風雲一人有二旦夕之禍福一說

期す　●只今は油斷して後によく道を修行せん事を期すと也文　期すとはまつ心也盤

剎那　●たゞ一念の間をは剎那と云也文　頭書云▲飜譯名義集二曰剎那毗曇飜爲二一念一句　▲慧琳一切經音義二十七曰剎那時之極少也俱舍云百二十剎那爲二怛剎那量一臘縛此六十此三十須臾此三十晝夜三十晝夜月十二月爲レ年於レ中半減レ夜即計二須臾時一可レ知玉篇須臾俄頃也參　▲俱舍曰壯士一彈指頃六十五剎那時之極少名二剎那一　▲仁王經曰一念中有二九十剎那一一剎那經二九百生滅一盤

なんぞ　●是より彼油斷する事を歎好の嘆息する詞也文

たゞちに　●直の字にてすぐにそのまゝなどいへる義なり正直にせよといへる心也と書る抄の義は誤也句　●又說に●まつすぐにわき目ふらす道にむかふ事也諺

甚かたき　●一念おこると隨て其まゝ道を修する事の何としてしがたきぞと也壽　●歎好の歎詞也句　頭書云▲護法論曰孟子曰誦二堯之言一行二堯之行一是堯而已矣余則曰誦二佛之言一行二佛之行一是而已矣何慊乎哉佛祖修行入道蹊路其據如レ此而人反以爲レ難深可二閔悼一乃至達二佛知見一入二大乘位一矣何難之有哉與二此語勢一同參

〔第二節〕●道を學すると云より終まで也●此節は道を學ぶ人の油斷をいましめたりこゝをいはんとて弓の師弟の事は書出したりと知へし文　●かく射法をたとへとして道理をとくこと儒書の中尤多し句　●中庸曰射有レ似二乎君子一失二諸正鵠一反求二諸其身一野

〔一段之統論〕●此段弓いることにたとへて萬人の心のゆるまる事をいましめたる義也貞　●此段道を

修せんの心を思ひ得たらば其儘修しをこなへしばらくも懈怠油斷すべからずとの心をいへり文 ●上の段の時日の事をいへるにうけて又此段には道を學ぶ者の光陰を惜むべき道理を書て人をはげましすゝむるなり

〔九十三〕牛をうる者ありかふ人明日其あたひをやりて牛をとらんといふ夜の間にうし死ぬかはんとする人に利ありうらんとする人に損ありとかたる人あり

牛をうる者 ●一段の問答の起りを先書出したり盤 頭書云 ▲史記貨殖傳烏氏倮畜牧及レ衆付賣畜至レ用レ谷量ニ馬牛一任氏力ニ田畜一人爭取ニ賤賈一任氏獨取ニ貴善一橋姚致ニ馬千匹一牛倍レ之云々 ▲貨殖傳にのする所を見れは牛馬を賣買する事いにしへより甚をほし牛馬の市を駔儈といふ野

うし死ぬ ●牛にたちとかやいひて俄に死する病あり文 頭書云 ▲大和物語に云南院の今君をほきが牛をかりて又のちにかりたりけれはたてまつりたりし牛は死きといひたりける返り事に「我のりし事をうしとや消にけん草にかゝれる露の命は文

かはんとする ●其事をわきより評判する也諺 ●牛の事につきて一理出したりかくいふは又大きなる利ある仔細をいはんためなり盤

〔第一節〕牛をうる者と云より語る人ありまで也此段三節に分ち見るへし文段不レ同 ●山案 此節は先牛の死にし事に得失のあるを云て末々に問答して畢竟兼好の存念の所へ云をとさんために假に牛の一事をまふけて書り此節も前段のことく詩の興の體なるべし

是を聞てかたへなる者のいはく牛の主誠に損ありといへども又大なる利あり其故は生あるもの死のちかき事をしらざる事うしすでにしかなり人又同じはからざるに牛は死しはからさるにぬしは存せり一日の命萬金よりもおもし牛の價鵝毛よりも輕し萬金を得て一錢をうしなはん人損ありといふべからずといふに皆人嘲りて其理は牛の主にかぎるべからずといふ

かたへなる ●傍の字側の字共に書

いはく ●聞人の一理まうけて損にてはなきことはりを云也盤 兼好みづからの評にや文

主誠に損あり ●損ありといふ人のいふごとくに

と也盤
うしすでにしかなり　●牛既にそれなりといふ心なり夜の間に死なんをしらて昨日うらんとせし故也文
人又同じ　●決前生後の詞也人とても死のはかられぬ事は牛とおなじとなり盤●此一句通章の肝要なり說
はからざるに　●牛と同じく不定の身なれ共適存命する也參
一日の命萬金云々　●萬金の命にくらぶれば牛の價ははるかに輕き也參　頭書云▲大智度論云一切寳中人命第一爲ㇾ命求ㇾ財不ㇾ爲ㇾ財求ㇾ命盤▲又云設滿二世界一寳無ㇾ直二身命一野
鵝毛　●鵝といふ鳥の毛なり是いたりてかろき物なれば也參　頭書云▲文選司馬選報二任少卿一書人固有二一死一或重二於大山一或輕二於鵝毛一野　▲山案格物論曰鵝有二蒼白二色一綠眼黃喙紅掌▲日本世俗には唐鴈と云家にかふ鳥なり鴨よりは大也參
萬金を得て　●萬金は今日の存命をさす一錢はうしのあたひのかろきをいふなり參

損ありと　●牛は死ずして人は死なんもはかられぬことなるに萬金より重き命をながらへたれば是に過たる大なる利はなきと也牛の死にし事は成程輕き事也努々損と云へからず說
皆人　●其一座にゐる人也盤
嘲りて　●愚人は耳にとまらぬ故にあざける也諸
其理は牛の主に云々　●人每に死のちかき事はかられぬ物なれば生て居るよろこびは牛のぬしばかりにてはなしと也かしこだてをいふ事なと理を合點せぬ人嘲るとなり盤
〔第二節〕これを聞てと云よりかぎるべからずと云まで也●山案此節は上の節に牛の死しにつきて得失あることを云けるを破して損はすこしもなきぞ大きなる利ありといふされども長命は兼好の本意にはあらず次の節の生死の相にあづからぬと云所を書べきために一旦存命のよろこばしきことを書りさはいへど出世に於ては存命するほどの寳はなきぞ前にも命のためには妻子親類金銀等までも見すてゝにげさると書り又もろこしの榮啓期が三の樂とせしも其一つは長命なりと也孔聖全書曰孔子

見二榮啓期一衣二粗布裘一鼓レ瑟而歌孔子問曰先生何樂也對曰吾樂甚多矣天生二萬物一惟人爲レ貴吾已得レ爲レ人是一樂也人以レ男爲レ貴吾已得レ爲レ男是二樂也人生不レ免二襁褓一吾年已九十五是三樂也夫貧者士之常也死者民之終也處レ常待レ終誠何憂也此語また家語にも出たり

又いはく人死をにくまば生を愛すべし存命の喜び日日にたのしまざらんや愚か成人此樂を忘れていたづがはしく外の樂を求め此財をわすれてあやうく他の財をむさぼるにはこゝろざし滿事なしいける間生をたのしまずして死にのぞみて死をおそれば此理あるへからず人皆生をたのしまざるは死を恐れざるゆへなり死をおそれざるにはあらず死のちかき事を忘るるなりもし又生死の相にあづからずといはゞ實の理を得たりと云べしといふに人彌あざける

又いはく　●右の人也兼好也諺　●此答は存命のたのしひの重きにくらべて牛のあたひなどは云にもたらざる故に一向手をつけぬ也文　●此詞さして愚者に答られしと見るべからず上件にいひたる詞につきて自身の詞を再釋せらるゝなり說

死をにくむ　頭書云▲孟子告子篇云生亦我所レ欲死亦我所レ惡野▲大藏一覽曰好レ生惡レ死念之遷流參

生を愛すべし　●命を萬金と知は死をにくむの故也かやうに死を惡むとならば生を愛すべしとなり文

此樂　●存命の樂を云諸

忘れて　●此世の樂は一日の命を保つに過たるものなきを何共思はぬなり諺

いたづかはしく　●煩の字勞の字わづらはしくの心也參

外の樂を求め　●命の外のうき世のたのしみを云文

此財　●天より受る所の命諺

こゝろざし滿事なし　●命を財とすれば其樂が我身にある故に志常にみてり他の寶をむさぼるは欲なるゆへにいつまでも滿足することなしとなり文　●千兩の金を持し者は二千兩をねがひ二千兩は三千をうらやむなり盤　頭書云▲五灯會元八溫州佛目禪師傳曰人心難レ滿溪壑易レ塡參

死をおそれば　頭書云▲樂邦文類曰貪レ生怕レ死參

此理あるべからず。●生をたのしまずして只死に望て俄に死を恐るゝものならばわか牛の主に大利ありといふ理はあるべからすと也文●是死を恐るるならは生をたのしむへし又一向に生をたのしまざるならば死を恐れぬ筈也生をたのしまずして死をおそるゝはゆきもとりの相違なれば此道理はあるましきとなり鐵增

死のちかき事を忘るゝ也　●死はおそれぬ故かとおもへばまたそれにてもなく死はおそるれとも其近き事を忘るゝゆへなりと重ていひほどけり鐵增

生死の相にあづからす。●もしといふよりは大乘實相の生死にかゝはらぬ事をいふ也上に生をたのしひ死をおそれる事一往の心のおさめにはしかるべき事ながら生死の二法をあるひは恐れ或はうやむ是小乘權門の沙汰なり故にかさねて此とところには大乘實相の道眼をひらきて高上の法門をあらはせる也參　頭書云▲生死覺用抄曰欲レ出二生死一不レ見二生死一欲レ得二涅槃一不レ執二涅槃一唯除二執見一當レ至二佛知一▲六門集曰生死不レ拘一切法拘レ他不レ得是名二大自在王如來一▲圓覺經曰不レ斷二生死一不レ求二涅槃一涅槃生死無二起滅念一▲大惠書曰三祇劫空生死涅槃俱寂靜參▲釋氏は不生不滅を涅槃とし生死即涅槃と云根來の聖憲の八識田中下二阿字萬一生死亦斷涅槃亦斷也といひ莊子か死生大なれども變ずる事あたはずと云老子の死而不レ亡者壽と云る皆是生死の相にあづからざる理をいふなるべし野

實の理　頭書云▲玄義第一心名二不生一亦復不レ滅心即實相野▲擅那先德止觀勘文曰法華已前方便諸經說二夢中生死是非一今法花圓頓說二寤前本覺眞如實相之理一參

人彌嘲る　●人は愚人をさすなり彌の字は上の詞にみな人あざけりてとあるに依ていよ〳〵と云也壽　頭書云▲老子の下士は道を聞てわらふと云る心なり野▲孔聖全書曰非二其地一而樹レ之不レ生也非二其人一而語レ之弗レ聽▲莊子曰瞽者無三以與二乎文童之觀一聾者無三以與二乎鐘鼓之聲一豈唯形骸有二聾盲一哉夫知亦有レ之▲古文聖主得賢臣頌曰夫荷レ旃被レ毳者難三與道二純綿之麗密一羹レ藜含レ糗者不レ足三與論二太牢之滋味一說

〔第三節〕●又云と云より終までなり●山案此節は

彼愚人どもか嘲りしにつきて又兼好の答へなりさて生死は人の好惡すること古今同じ事ながら愚人は好惡する事の理りにたがふことを云ふなり畢竟は生死の相にあづからぬことを云とめて一段を結したり是向上の工夫筆にも及び難し

[一段之統論] ●此段は人欲におぼれて自己の樂みを忘れいたづらに他の財を求る事をいへり壽 ●上の段に道を學する者光陰を惜むべき道理をいへるにうけ又此段には量らざるに牛の死したる事に付て人の世の無常をさとす凡佛道に入て生死の間にあづからざるは第一の事也されど人死を惡みて此心なしさらば生を愛すべきにさもなくして過るは至愚の人也といへる兼好本意なるべし句

[九十四] 常盤井相國出仕し給ひけるに勅書をもちたる北面あひ奉りて馬よりおりたりけるを相國後に北面何かしは勅書を持ながら下馬し侍りし者なり加程の者いかでか君につかふまつり候べきと申されければ北面をはなたれにけり勅書を馬の上ながらさゝげて見せ奉るべしおるべからずとぞ

常盤井相國 ●太政大臣實氏公の事なり諸　頭書云 ▲實氏公也西園寺の流也公經公の息歌人にて定家卿の弟子也壽　系圖 前十段にくわし

鎌足――不比等――房前――眞楯――内麿――
冬嗣――良房――基經――忠平――師輔――
公季――實成――公成――實季――公實――
通季――公通――實宗――公經――實氏 従一位太政大臣
臣文永六年六月薨歳七十六

勅書 ●天子の勅定の御書也古　頭書云 ▲吾學編六十五曰凡上所レ下一曰レ詔二曰レ誥三曰レ制四曰レ勅五曰二冊文一六曰レ諭七曰レ書八曰レ符九曰レ令十曰レ檄参 ▲禁秘抄云勅書書二黄紙一自二唐太宗貞觀一始レ之上卿奏レ之主上書レ日但依レ事歟或書レ日給或不二書レ日給一也勅書可レ忌二御衰日一云々 ▲本朝文粹朝野群載等に有延喜式にも有文

北面 ●上北面下北面とて有上北面は諸大夫なり下北面は五位六位譜代の侍をいふなり壽 ●白河院仙洞にておはしける時始て北面の侍を置て宿直せさせ給へりとなり文 ●山案きたおもてとめす事も

あり　頭書云▲山案上北面は諸家の諸大夫官外記などを補せらるゝなり洞中にては狩衣差貫なり下北面は諸家の侍これを補す五位はかりきぬ實に六位は襖袴なりあふはかま布色はあをきもあり白くもすと云々

何かしは　●何某なりそんでうそれはといふとおなじ文

加程の者　●かほとに故實をしらぬ者也諺　●いましめ給ふ詞なり文

さゝけて見せ奉るべし　●勅書を持てまいるはかくの如くするものぞとおしへたり盤●常の例とはちがひ馬車よりおるまじきと也それ禮は己にあり是は君の御代官として行むかへは君の外の人には禮は有まじきと也たとへ拜禮着座の時も親王家より攝家を先とあがめ給ふも親王は皇子と云ばかりにて君の代に政はなし給ぬなり攝家は君にかはり政務をとり行ひ給ふ人ゆへ也是にて心得べし法尊き故に人尊しといへり然るを高貴の人に逢しとて下馬すれば君をなひがしろにして貴人にへつらふのとが有り能々心得べきなり說

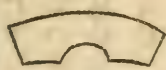
おるべからず　●恐るべからずと書たる本有古說誤りなり句　頭書云●高倉院の御宇因幡堂の額を平等寺と號し宸翰を賜る時に勅使車に乘ながら内陣へやりとをして勅額を納たるよし彼寺の縁起にあり勅書もちたる人は車馬より下まじきなり野●惠容按ずるに梶井御門跡仰せられしとて或僧正の申されしは惣じて諸藝ともに一役うけとりては禮義せぬものなり貴人の前にて食にむかふて箸をとる時は膝をかしこまるべからずゆるやかに居るもの也食過て又もとのごとく膝をなをすべしと法皇の御物語ありしよし也ましで天子の御奉書をもちながら臣下の相國へ下馬する事は有べからず參

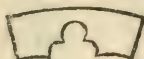
「一段之統論」●此段是はなをさりの事にても勅使などに立人の心持を敎へたる段なり公方などの御使に行侍などもゆくさきにて拜領の小袖などをいたゞかぬ物なれど小笠原のしつけかたにおしへらるゝと云々●此段故實を記して人におしへ又一つには世の中の一役のかしらをつとむる人は我に賂をなし追從せるを見てはやかて其人に與して主君への不忠をば何とも思はぬ者多きに相國はしから

ずしてかく我を忘れてひとへに君を大事にかけ奉りし心ばへをしらしめんためなるべし參

〔九十五〕箱のくりかたに緒を付る事何方につけ侍るべきぞと或有職の人に尋ね申侍りしかば軸につけ表紙に付る事兩說なればいづれも難なし文の箱はおほくは右につく手箱には軸に付るも常の事なりとおほせられき

箱　●手箱文箱等也諺

くりかた　●圖にてしるべし　頭書云▲箱の蓋のくりかたのことなり說

是をくりかたと云

是を山形と云

是をすはまがたさ云

右の外種々のかたちありといへども推こんでくりかたと云へし

有職　●故實をしりし人也諺　前にくはしく注す

軸につけ云々　●軸とは左表紙とは右なり昔の文箱は卷物などのやうに一方に付たると見えたり緒一筋なり左右のくはんをひきとをして一方に一むすびむすぶなり結方をつくるとはいふべし壽　兩說

頭書云▲緒を結ぶ方二說あり圖にてしるべし

是緒を結のところのくわんなり是右の方也

是は左の方なり緒を結ぶくわん

結ひやうは圖し難し口受すべし

軸につくるも　●蒔繪したる箱なれば蒔繪の本を我手前にして左右をばわかちて付るなり說

〔一段之統論〕●此段も前段と同じく古實を記す又は一樣のことを知りて一偏に物を諍ふ人あり故に必一偏に心得べからざることを敎へたり諺

〔九十六〕めなもみといふ草ありくちばみにさゝれたる人かの草をもみて付ぬればすなはちいゆとなん見しりておくべし

めなもみ　●めなもみには種々の說あり稀薟　地菘　天名精　鶴虱是らを今の世の俗なもみと云なり壽　●古道三はおなもみは稀薟草めなもみは蒼耳と云々貞　●天名精　地菘　鶴虱は一物也此三をめなもみとよみ又通じて是をいのしり草と云也但鶴

虱は實なりされども世俗蒼耳も蛇咬につくると見えたりされどももみてつくるとあれば地菘の說是此書の說に相合なり所詮いのしり草可然今の俗しり易かるへし但兼好時代には地菘をめなもみといひたるにや増鐵 ●蒼耳といふ說可なり諺 頭書云▲和名集曰葈耳と訓じ天名精と訓ず稀薟考ニ本草ニ治ニ蛇咬ニ說なし莖葉頗同ニ蒼耳ニとあり此故に今俗めなもみと云なり▲又本草蒼耳の條下に治ニ毒蛇幷射工等傷ニ嫩葉一握研取レ汁和ニ溫酒ニ而灌レ之將レ滓厚罨ニ傷處ニ私曰稀薟を世俗にめなもみといふ是也▲地菘本草曰地菘即天名精其實也主ニ蟲蛇螫毒ニ挼(モミテ)傳レ之云々壽 ▲又說 めなもみは稀薟なり本草稀薟主治の條下に蛇傷を治する事見えずとも百病主治蛇虺傷の條下に稀薟をも出せり句

くちばみ ●蝮の事なりまむしは口より生るゝ也毒虫也全

[一段之統論] ●此段れいの兼好の慈仁の心より書給へる段としるべしめなもみにかぎらずさやうの藥をぼへたらん人は人にもをしへ末代にも書のこして世をすくふ心もち尤あるへき事也貞 ●此段の心は今偶藥を覺へて驗を得るをば偏に深く是を秘事して人々に敎へすさやうの人を戒める段と見るべし諺

徒然草諸抄大成卷第九

目次

〔九十七〕其物につきてそのものを費しそこなふ物數をしらず有身に虱あり家に鼠有國に賊あり小人に財あり君子に仁義有僧に法あり

數をしらず　●あまた有と也

虱　頭書云▲山案篇海類篇云虱色櫛切齧レ人虫淮南子曰太廈既成燕雀相賀湯沐既具蟣蝨相弔亦作レ虱
▲山谷演雅詩虱閙ニ湯沸一銜血食古

鼠　頭書云▲山案小補韻會鼠賞呂切說文穴蟲之總名也▲字彙曰鼠蟲似レ獸善竊晝伏夜動有レ齒而無レ牙▲法苑珠林四十二曰鼠盜竊小獸夜出晝匿參

國に賊あり　●已上の三つは害ありといへども輕ししかもなき樣にする事も易しいふ意は虱は身より出てかへつて身をくひてそこなひ鼠は家によりて住みながら其家をかみやぶる賊といふ者も其國より生じて其國をそこなふものなり說

小人に財あり　●財寶は世渡るたすけながら惡數もてば害をなす也諸　●以下の三つは重く見るべし此內にも末二つは甚重し說　頭書云▲明心寶鑑引ニ景行錄一曰德勝レ財爲ニ君子一財勝レ德爲ニ小人一寶鑑亦載人爲レ財死鳥爲レ食亡參

君子に仁義有　㊟山案夫仁義は人々のまさに勤むべき急たるの道也しかも仁義を行ふをもつて是を君子とすしかるに其仁義によりてかへつて害をうる事あり其理諸抄まち〳〵にして一決しがたし後君子是をたゞせ今みだりに僻見を以てしばらく是を辨ぜばこゝにいへる君子は有德の君子には非ず道に志す學者の稱なるべし仁義も亦專言の仁ならず偏言の一事の仁義なるべし言意は彼學者適一事の仁義を行ひて慢心を起して人をひがみあざける輩是多し是仁義を以てかへつて心の明德をそこなふといふ物也たとひ慢心なくして仁義を行ひ得ても亂世の時分は聖賢をも不ㇾ用かへつて覇者の便りにならぬと云て是を左遷の罪にしづめ或は誅せんとす是身に仁義の德あるゆへ也是仁義を以身をそこなふといふものなり此二說の內兼好の本意は後說に有べしいかんとなれば當時政衰へて萬里小路藤房卿楠正成を初として仁義の忠臣世にかなはずしてかへつて害を受給ひし事を憤りてかく道の廢れたる時は仁義を行ふ者はかへつて身を損する程に仁義だてをば行ずして世をさけて靜に一生をくらせとの意なるべししかるに人是を見そこなひて老莊の語をもつて註釋す是兼好の老莊をこのめる事なれば一理有に似たれど能此所にかなふべきとも見えず又此仁義といふ字に泥て兼好をそしれる者も有又其謗りを惡てこゝにいへる仁義は儒者の仁義にあらず老莊の仁義なりなどゝいふ是等の說共甚理にあたらずなんぞや仁義に二品の高下あるべきともに天地一理の仁義なるべし老子の仁義の外に大道有樣にのたまひしも其時周の代も衰へて道の廢れたるによつて世を憤りてかく宣ひし也されど仁義に專言偏言はあるべし偏言の一事の仁義也とも本天理より出たる仁義なれば是をあしきといはんやさはいへど今治國平天下の時をもつて是を見れば仁義を行ふ者の害に逢ふ事有るまじきとの不審をこるゆへに色々の說をもふけて煩しき也此所は兼好の時代にあてゝ見れば兼好の本意よく〳〵しれぬべし若人あつて兼好の遁世はふつゝかに思ひ取かるにはあらで有かなきかに門さしこめたる道心者なれば世を憤る心は有まじといふとも此徒然草の一部を見るに世を憤りて書る所あま

た有此所計さにはあらずと云がたしよむもの是を味ふべしかく兼好本意を論ずといへども後人此書をよむ時は前説の意を意としてたとひ一事の善行あるとも努々自慢の心を出さずして少しの善をも推ひろめて萬事に應ずる樣につとむべき事なりかく永々しく解釋するといへども兼好本意にはいささかかなふべきとも思はずかへつて本意をそこなふべければ是も亦徒然草に此注解ありとやいはん諸抄の發明も參校のためにあら〳〵頭書に記す

頭書云▲老子十八章曰大道廢有二仁義一河上公曰大道之時家有二孝子一戸有二忠信仁義一不レ見也大道廢不レ用惡逆生乃有二仁義一可レ傳レ道慶良貂集註曰至德之世不レ尙レ賢不レ使レ能上如二標枝一民如二野鹿一端正而不レ知二以爲一レ義相愛而不レ知二以爲一レ仁參▲莊子騈拇篇云意仁義其非二人情一乎彼仁人何其多レ憂也云々自下虞氏招二仁義一以撓中天下上也天下莫レ不レ奔二命於仁義一是非下以二仁義一易中其性上與云々夫適二人之適一而不三自適二其適一雖三盜跖與二伯夷一是同爲二淫僻一者也余愧二乎道德一是以上不三敢爲二仁義之操一而下不三敢爲二淫僻之行一也▲同馬蹄篇毀二道德一以爲二仁義一

聖人之過也野▲此一句は是兼好の好む所の老莊の道よりいへるなり此仁義と云字をば儒道にいふ所の天理性より受得たる仁義のやうに講談する故に此理に通ずることあたはず凡老莊の中に仁義といへるは自然の大道の中に仁義の理ありと云沙汰なしたゞ老莊の心は人々みな造物自然の大道をうけてもとより寂寞無爲のかたちなれば上古の人は此理のまゝに夜をあかし日をくらす故にかざることなくつくろふ事なくて天然と大道にかなひし事たりしを彼大道次第にをとろへて世久惡逆無道になりし故に聖人君子世に出てかの惡逆を矯んとて種々に道をときて是に慈愛をおしへ義理をたゞしくするにしたがひて善惡の名いよ〳〵あらはれて本分の大道にかへる事あたはずしからば仁義は君子より生じながら却て大道のまことの君子をそこなふ也さはいへど兼好の本意心をつれ〳〵にして大道にをもむくまへはかくもあるべし今の世の惡逆にからめられたる人は聖人の仁義より道に入らずはいよ〳〵惡逆にをちぬべしよまん人用捨すべし參▲山案此說は向上の一理兼好本意にかなふべ

きや否や▲又一說▲惻隱の心羞惡の心君子の方寸より出て其の事を行ふ中に比干が紂王を諫めて胸をさかれ夷齊が武王をいさとをりて終に首陽に飢たるたぐひ仁を求めて仁を得たればたとひみづからは悔る事なしといへどそれも仁によりて比干も死し夷齊も餓死したればこれ仁義の君子をそこなひやぶれるなり眞の人は私もなく德もなく功もなく名もなし是賢愚得失のさかひにをらざればなりといへる所をもちて工夫すべし文▲由案此說ハ莊子の語の意也盜跖篇云比干剖レ心子胥抉レ眼忠之禍也直躬證レ父尾生溺死信之患也鮑子立乾申子不ニ自理一廉之害也孔子不レ見レ母匡子不レ見レ父義之失也此上世之所レ傳下世之所レ語以爲レ士者正ニ其言一必ニ其行上故服ニ其殃一離ニ其患一也さて此注解は兼好本意に近きに似て詞たらず此外褒貶の說あまたありといへども今これを略す野槌新注大全等にくわし僧に法有　●僧を費しそこなふ物は法ならといふ事なり全●山案此所も數說ありといへども是も上の君子に仁義有といふと心同じかるべし言意は其身に行ふ法は諸佛の遺教に違事はなけれ共志す所あしければ其行ふ法をもつてかへつて心法をくらますなりたとひ其志す所もよく法も道にかなふとも末世濁亂の時なれば人是を惡みて害をうくる事あり古今名僧達の難に逢ひ給ふ事多しされば法を惡敷行へば心をそこなひ破り又法を能行得ても時として身をそこなふ事有と也是も亦兼好本意は當時道行れずして上たる人知識道者を信仰せざる事を憤りて書たるなるべしされど後世の僧は是も前說の意にしたがひて人我の相をはなるべきものなり　頭書云▲維摩經云法尚可レ捨而況非法▲止觀云觀ニ雖レ正一著レ心同ニ邪計一▲僧は佛法を身につけをこなひ世にも說ひろむる物なりもとより不惜身命とて法のために身命をも不レ惜して世の救ひ人を度する中に僧謙上人も遠島にさすらへ安樂法師が斬れしたぐひ有も法の僧をついやしそこなひたるにてあればかくいへり是法々師が學匠をたてずしてやすらかに念佛したるありさまのあらまほしきと云る心にて工夫すべし文▲由案此說兼好存念をあらはすに似て是も亦詞たらず▲夫法は三世諸佛の成佛の通法也これをひろむる僧なれば三寶に

攝するなりしかるに此界如來をさる事やゝとをくなりて人之邪路を好む故に僧の人をすゝむるもをほくは衆生の得脱のすみやかならんことは何とも思はすしてたゞ佛法は世わたる橋のやうに心得るなり故に一音演說の佛敎の中に互に是非をあらそへばつゐに如來の無我の大法かくれひそまりて人我の僧の法世にさかりなれば愚人の目には佛法のひろまる樣なれどまことはをとろふるなり此故に兼好これをかなしみて佛に無我の法あるはたから也僧に人我の法あるは僧の中より生じて佛法をそこなふものなりといへる心なるべし參△山案此說兼好の本意とは見へねど後世の僧は此說の意を忘れずして平生我をわするゝやうにつとむべきなりさて此注解に不審是ありいかんとなれば上の君子に仁義ありと云を注する意と異なり何んぞや二色に釋せる上身に亂ありと云より終り僧に法ありと云までは一意なるべきものなりしかるに二說に云る志を今嘗試に論ぜん上の一句も此所の意に注する則は難なし若し此所をも上の一句の如く解せば是も亦難あるまじ其ゆゑんは此一句を上の一句の注の如く見るときは夫人としては己身彌陀惟身淨土なれば法と名付べき道なし然るを世の衰たるによりて人之惡趣に墮する故に佛菩薩出で佛法と云事を廣め給ふさるによりて此佛法の方便の說相に迷て人之皆己身彌陀惟身淨土たる大道の理を取失ふ是佛法世に出しが故に本分の大道をそこなふといふものなるによつて僧に法ありと書ると見るべき也しかるを今此意を云ずして人我の法世にひろまりて無我の法をそこなふなりと其罪を無德なる凡僧に歸するなり何んぞや上の仁義の所にては聖賢の仁義をひろめ給ふによりて大道をそこなふなりと云て罪を聖賢に歸し此一句にては罪を佛菩薩に歸せずして凡俗に同じき人我の僧に歸するぞ其謂なきに似たり是吾佛を敬し他の君子をそしるなり是を人我の僧と云ずして此外に人我の僧あらんや

〔一段之統論〕●此段は兼好本意のつれ〲を本として書り世をのがれて閑なる事を好むかたより見れば君子の仁義によりて身をそこなひ僧の法によりて其身をやぶるものあるも皆家の鼠にかぶりそ

こなはれ國の賊に亂しやぶらるゝと同じ事なる義を云なり心をとゞめてよく此草紙の本意を見るべし又云此段偏に閑人隱遁の心よりかけり世に君に仕へ家をおさむる人など此段の心を守りて身に行はゞ放辟邪侈のいたづら物となるのみにあらず大小の兼好法師にも罪をおほすべきわざなり文 ●此段實もなる事どもをあつめて指南せらるゝ心の奥はたゞ僧に法ありといふ所なるべし釋尊の御末期の一句に法本法無法無法法亦法と云々されども今こゝに書れし僧に法ありとは世の中の名利をはなれぬ僧の或は我身を驗者と思ひあるひは智者と思はるゝをいましめて書る歟先に申はあまりいたり過て此段にあひかなはすとしるべし貞 ●此段仁義を身虱にならべいへる事例なきことにしもあらず退之瀧吏詩曰工農雖二小人一事業各有レ守不レ知官在レ朝有レ益二國家一不レ得レ无レ虱二其間一不レ武亦不レ文仁義飾二其身一巧姦敗二群倫一法商君二十六篇大低以二仁義禮樂一爲二虱官一曰六虱成レ俗兵必大破句 ●此段虱と鼠と賊と僧とをつらねたる事元稹子庭が僧にてありながら僧をにくゝみし詩にも侍り兼好も法師にてありながらかくいはれし事よくならべて見るべし堯山堂外紀載二元稹子庭可レ憎詩一世間何物最堪レ憎蚤虱蚊蠅鼠賊僧船脚車夫並晩母濕柴爆炭水油燈參

〔九十八〕たうとき聖のいひ置けることを書付て一言芳談とかや名づけたる草紙を見侍りしに心にあひておぼえしことゞも

一しやせましせずやあらましとおもふ事はおほやうせぬはよきなり

一後世を思はん者は糂汰瓶ひとつももつまじき事也持經本尊にいたる迄よき物をもつよしなき事なり

一遁世者はなきに事かけぬやうをはからひて過る最上のやうにてある也

一上﨟は下﨟になり智者は愚者になり德人は貧になり能ある人は無能になるべきなり

一佛道をねがふといふは別の事なしいとま有身になりて世の事心にかけぬを第一の道とす

此外もありし事どもおぼえず

たうとき ●貴の字也參 ●又尊の字說

聖 ●佛家の聖人をさす也句

一言芳談　●書の名上下二卷有　頭書云▲たれの選集ともしれずあれこれの辭を一句づゝ載たるものなり故に一言と云芳は芳書芳札の芳にてほめたる言也談は談話なり諸

しやせましせずや　●なすべしやとうたがふてなすべしと決定したる詞なりせましのしの字濁りを付たる本有誤なり句　せずやのやの字又疑也參　頭書云▲本書の上卷に云明遍曰しやせましせでやあらましとおぼゆるほどの事は大抵せぬのがよきなり句

おほやう　●大かたなり諺

せぬはよき也　●すべき歟すまじき歟と疑しき事はせぬがよきとなり說●是明遍の詞也諸●今兼好の引用ると芳談の語とは少相違有空にて引けるにや諺

糂汰瓶　●糂汰はぬかみそ也瓶は壺也野　頭書云▲海篇犀炤曰糂以レ米和レ羹汰淘汰也參▲又糝粏とも榛粏とも又秦太とも書り二條大閤の御作とかや精進魚類物語にも糂汰のこと有沙石集にいはく大原の僧正往生要集をよまれけるを法然房春乘坊聽聞せられける時春乘坊秦太瓶一つも執心とゞむまじきこと也と法然坊へ申されければ大原の僧正隨喜の感涙をながされけるとなん野

もつまじき事也　●今案ずるにぬかみそのたぐひは至りて薄味の食物なれば味着にとゞこほらぬ事をおしへてもろ〳〵の着念を是にこめてしらしめたりしかれ共そのじんだがめをさへたくはへて着するはあしゝとて二重に放下せる也參●是迄俊乘坊の詞也諸　頭書云▲本書の下卷に云俊乘坊曰後世を思はん者はじんだがめ一つも持まじき物とこそ心得て候へ句

持經　●所持の佛經なり句

よき物をもつ　●持經本尊は出家の常住物の中にとりわき住持三寶なればたとひうるはしくこしらへて持とも是はくるしかるまじき事なれどもそれさへよしなきといへるは上に最下の糂汰にも着せぬにあたりていま最上の三寶物をもかろ〳〵として所持するといへる語意深長に侍るいたる迄と云る詞肝心也自餘の衣食居所などは勿論也と云ることをいたりてといふ字にこめたりと見えたり參●

芳談には解脱上人の詞なれども執心をとゞめぬ類なれば兼好の一つゞきにかゝれたるなるべし全

頭書云▲本書の下卷に云解脱上人の曰出離に三障有一には所持愛物本尊持經等まで二には身命をおしむ三には善知識の教にしたかはざる句▲佛道者にかぎらず儒學をせん者も此趣を知べし謝上蔡五經の要語をあつめて冊子とし明道に見せければ玩レ物喪レ志といはれて五體より汗をながし又よき硯を秘藏しけるが終に冊子も硯もはふらしすてたりと二程全書曰に見へたり道に志して悪衣悪食をはづることなかれと聖人ものたまへり野▲自知錄曰着ニ破補衣ニ一件爲ニ一善一麄布衣一件爲ニ一善一若原無ニ好衣一而著者非レ善矯レ情干レ譽者非レ善又曰過分美衣一衣爲ニ一過一美食は一食爲ニ一過一唯奉ニ養父母一非レ過參

事かけぬ　●鐵云なきにことかけぬとは何もなけれどもとむる心なくあればことかけぬ也求よりかしてたらぬ事はある也文に云なきにことかけぬとはなき時にも事かゝぬやうにかねて儉約にかくまふる事也文の說より盤の說はるかによし全　●此語芳談には聖光上人の詞の内也　頭書云▲本書の上云聖光上人曰遁世者は何事もなきに事かけぬやうを思ひつけふるまひつけたるがよきなり句▲景行錄曰知レ足可レ樂多レ貪則憂知レ足者貧賤亦樂不レ知レ足者富貴多レ憂知レ足常足終レ身不レ辱▲長明方丈記云藤の衣麻のふすまうるにしたがひてはだへをかくし野邊のつばな峯の木の實命をつぐばかり也人に交らざれば姿をはづる悔もなし糧ともしければをろそかなれども猶味をあまくす說

はからひて　●思量の義也諺

過る　●月日を過す也參

最上　●至極の義也諺　●もつとも上々の光陰の送り様といへる義なり句

上臈　●僧俗ともにわが上位にほこらず謙退して下臈にくだれとなり諸　●職原に極臈とあるも位階の名也然ば上臈下臈は上位下位といはんかことし野　●臈は勞也上臈とは勞を積上たると云心也說

頭書云▲臈は出家する者髮をそり授戒してより一夏九旬勤行するを臈と云僧臈戒臈是なり僧の位は戒臈の前後によりて次第するなり是より事の次第

するを臈次といふ野 ▲惠空案ずるに九旬をとげたるを臈と云はいかにとなれば臈はしはすとよむなり臘の字と同字也世俗しはすは十二月を云出家のしはすは夏の終りを云也夏をむすぶに上安居中安居下安居とて三度のかはりあれども上安居の數によるときは四月十六日にむすびて七月の十五日をしはすとする也故に盂蘭盆經新記にも臘は即夏滿なりといへり夏滿とは七月十五日を云なり此日僧の修行滿足する日なる故に亡者を追福する也此しはすをつとむる故に臈といふなり ▲一心戒文中卷曰慧曉禪師聲聞僧上臈德善禪師聲聞僧下臈 ▲金剛經略疏解ニ大比丘字ノ曰大者臘高德著之稱參

●智者は愚者になり　頭書云 ▲史記六十一老子傳曰孔子適レ周將レ問ニ禮於老子ニ老子曰云々吾聞レ之良賈深藏若レ虚君子盛德容貌若レ愚去下子之驕氣與ニ多欲ノ態色與中淫志上索隱曰君子之人身有ニ盛德ノ其容貌謙退有レ若ニ愚魯之人ノ然參 ▲荀子云孔子曰聰明聖智守レ之以レ愚野

德人 ●世俗に富人を德人と云參

能 ●伎能也諺

無能になる云々 ●是芳談には松蔭顯性房の詞なり諸　頭書云 ▲本書の下卷に曰松蔭顯性房曰昔は後世を思ふ者は上臈は下臈になり智者は愚者になり德人は貧人になり能ある者は無能にこそ成しが今の人は是にたかへり句

心にかけぬ ●世間の事を毛頭も心にかけず諸緣を放下するをいふしづかならでは道は行じがたしと前にいへる心也參 ●これらまことに兼好の心にあひぬべし此草紙にも此心あまた所出侍しなり文

第一の道とす ●是芳談にては行仙房の詞也文 頭書云 ▲本書の上卷云行仙房云唯佛道をねがふといふは別にやみ〳〵敷ことなしひまある身となりて道をさきとしてよの事に心をかけぬを第一の道とす句

此外にも有し云々 ●此詞にて兼好のそらに覺えて書つらね給へることしられ侍るなり文 ●本書をいだすに不レ及鐵增 ●されど今好事の者のために一一冠考にあり句

〔一段之統論〕 ●此段も前段をうけて遁世閑人の上のことを云はん爲に一言芳談のことを所々書述ら

れたる也諺○山案此段は一言芳談の抜書なり文意自ら明らかなり委く注するにをよばず但し上﨟は下﨟になるといへる段に心得そこなひあるべし上﨟に俄に下﨟になれ智者に智をすてゝ愚者になれ德人に財を擲て貧になれ才能ある人に無能になれと云にはあらず其自慢の意を除ておごりたかぶるなとの欸なり是老莊の意を以て書しといへども儒書にも此心まゝ見へたり○老子の曰貴以レ賤爲レ本高以レ下爲レ基○荀子云孔子曰聰明聖智守レ之以レ愚功被ニ天下一守レ之以レ讓勇力撫レ世守レ之以レ怯富有ニ四海一守レ之以レ謙此所謂挹而損レ之道也○孔聖全書孔子曰以ニ富貴一爲ニ人下一者何人不レ與以ニ富貴一敬ニ愛人一者何人不レ親衆言不レ逆可レ謂レ知レ言矣衆嚮レ之可レ謂レ知レ時矣○論語曾子曰以レ能問ニ於不能一以レ多問ニ於寡一有若レ無實若レ虛犯而不レ校昔者吾友嘗從ニ事於斯一矣○此段は上をうけて法にそこなはれぬ道を敎ゆ盤

〔九十九〕堀川相國は美男のたのしき人にて其事となく過差を好み給ひけり御子基俊卿を大理になして廳務をおこなはれけるに廳屋の唐櫃見ぐるしとてめで度作りあらためらるべきよし仰せられけるに此韓櫃は上古よりつたはりて其はじめをしらず數百年を經たり累代の公物古弊を以て規模とすたやすくあらためられがたきよし故實の諸官等申ければ其事やみにけり

堀川相國　○久我太政大臣基具公なり諸　頭書云▲村上天皇第六皇子具平親王九代之孫正二位岩倉內大臣具實公長男從一位太政大臣基具公也則久我一門也句

▲系圖前之段行雅のところにくわし

村上天皇人皇六十二代―具平親王―師房―顯房―雅實―雅定―雅通―通親從二位內大臣號土御門―通具正二位大納言號ニ堀川一歌人―具實正二位內大臣法名能圓號ニ岩倉一―基具―基俊正二位檢大納言

たのしき人　○此所數說在○美麗の色にとめる人といふもと美男にして又財寶に富る人との兩義也よき子を多くもたれたるといへる義もいひ傳ふいかゞあるべき句○山案後說にしたがふべしかく財

寶に富る人ゆへに物の費をもかへり見給はず何角に付て過差をこのみ給ふとみるべし又諺解に云たのしきとは樂むの心也しかれは美麗を好むと美色を好むとの兩義也此兩義の中美麗の說を用ゆべしといへり此說さもあるべけれど次の過差を好み給ひけりといふに詞重りてきこゆるなり

其事となく　●何事と一事をさゝぬ詞也何にもかにもなどいへる心に通ふべし句

過差　●おごれる義也野　●よのつねに過差とはあやまる事なりこゝにては野槌の義に可レ隨文　頭書云▲文選絕交書曰唯飮レ酒過差耳參　▲孟子離婁上編の朱傳に所レ行不二過差一と云々句

御子　●異本に一子とあり

基俊卿　○歌人也官大納言傳記不レ及レ書

大理　○檢非違使別當の唐名也壽　●凡此大理の職は追捕糺彈京都の訴訟など幷て職レ之諺　●尤規模なる職也說　頭書云▲職原曰檢非違使此云二使廳一淳和天皇御宇天長年中初置レ之異朝尤重二此職一昔唐虞代皐陶爲レ士此云二大理一周禮立レ官之日大司寇即此任也後代置二大理寺一本朝又以二刑部省一爲二紀判之官一天長年中准二唐朝一置二使廳一盖是大理寺也但別當以下爲二宣下職一爲二衞府一之人補レ之云々別當一人唐名大理卿參議以上尤擇二其人一也補二此職一之人必帶二衞門兵衞督一也世俗說補二大理一之人可レ備二七德一所謂譜代器量才幹有識近習容儀富有云々野　▲本朝にけびいしをおかるゝ事東山の左府の說に仁明天皇承知元年に參議四位上左大辨左近中將文屋秋津を召して別當に補せらる是はじめとかや職原抄曰朝家置二此職一以來衞府追捕彈正糺彈京職訴訟併歸二使廳一仍爲二國家之樞機一歷代以爲二重職一者也云々文

廳務　●廳とは檢非違使の政をきく所なりまんどころとよめり野　●廳務とは廳の政を行るゝ事也壽　頭書云▲字彙云廳屋也古者治官處謂二之廳事一毛氏曰聽事言二受レ事察一レ訟於レ是漢晉皆作レ聽六朝以來始加レ广句　▲卓氏藻林曰廳事所政之堂也參

唐櫃　●訴狀文書なとを代々入置物なるべし和名には韓櫃と書野

作りあらため云々　●結構に作りあらたむべきと也壽　●過差の本意こゝにあり參

仰せられけるに　●基具の仰也句

累代　●累はかさぬるとよみて代々の義句

公物…㊟おほやけの御器物なり參
古幣　㊟ふるくやぶれたる也壽
規模　㊟規は圓なる物を作るぶんまはし也模は形有物を作るいかた也爰は手本にする心諺
故實　㊟古事を沙汰しおぼえし官人とも也文　㊟檢非違使の下つかさどもなるべし盤　頭書云▲史記周公世家咨ニ於固實一注徐廣曰固一作レ故韋昭曰故實故事之是者句　▲庭訓往來にも故實職者とあり參
其事云々　㊟其具公役唐櫃をあらためずむかしのまゝにておかれたりと也

〔一段之統論〕㊟此段は故實を書り大方公物は古弊を規模とすべしとなり文　㊟此段いにしへより傳れるうつは物をあらためつくるべからずと云器のみに非す論語に魯人府庫を作りけるとき閔子騫舊貫によらばいかん何ぞ必しもあらためつくらんといひければ孔子是をほめたまふ野　㊟此段は上の段にしやせましせずやあらましと思ふ事はをほやうせぬはよきなりといへる心に相うけて書のべたる物なる事をしるべし句　㊟此段家督をうけとる若き人などによく見せたき事なり親祖父の作りをかれたる住所をかへ相傳の道具をうりて新しき器物になし天道にそむく事をしらぬものをほし貞

〔百〕久我相國は殿上にて水をめしけるに主殿司土器をたてまつりければまがりをまいらせよとてまがりしてぞめしける

久我相國　㊟太政大臣雅實公也　頭書云▲具平親皇三代之後胤從一位六條顯房公之長男從一位太政大臣雅實公也號ニ久我一句

村上天皇―人皇六十二代―具平親王―――師房―――顯房―
―雅實　前にくわし

主殿司　㊟百寮訓要抄云主殿寮は禁中殿庭掃除して松柴炭燎などの事をつかさどるなり參　前にくはしく注す
土器　㊟ときと音にてよむへしかわらけにはあらず節會の時の盞なり土にて作る形は馬上盞に似たり野　頭書云▲史記晉世家曰重耳過レ衞去過ニ五鹿ニ飢而從ニ野人ニ乞レ食野人盛ニ土器中一進レ之重耳怒趙衰曰士者有レ土也君其拜受レ之盤
まがり　㊟此まがりと云に種々の說ありいづれを

よしとも定めがたし見ん人用捨すべし参◎山案此所大全の說近きに似たり其詞に云此まがりとは扠の事也扠をまかりと云事は女中女官の詞に此たぐひおほし木をまげ用たる物なればおまがりと云和國公も詞をかりそめにつかひの給ふなりさて扠をまかりと云證據は禁秘抄に見えたりと云々禁秘抄の詞首にしるす今按するにまがりとは扠の字の和訓なり常にはしやくと音ばかりにていふて和訓をば人がしらぬ故に今さら別のものゝ樣に思ふなりたとへば扇の字をあふきと和訓し皿の字をさらといふ事などは人々の聞馴しゆへに不審せぬなり此外常に音ばかりを用て訓をしらぬ事ども多し扠子をゆがみと云碗をまりといひ盆をほとぎといふ類也其上地下に聞なれぬ和訓ども堂上方には是おほしされば練木をは地下にてはすり木のすりこぎのといへども是も堂上がたにてはならしとの給ふなり此類かぞへばいくらも有べしこのまがりも扠の和訓とさへ心得れば事すむ也されども只今は堂上方にも扠をまかりとはいはざるにやおぼつかなし此所に大事か有と云は此まがりの事にてはなし

土器をさしのけてまがりして水をめしける事はいかなるゆへと云に大事が有る也末に委くしるす頭書云◎禁秘抄に主上御手水まいる所に抑御手水近代內々供レ之昔は女官之所レ獻也今は前後不定之間不レ用レ之主水司供レ之御手水女官昇レ之各立二御手水間前一女官申御手水まいらせ候はん女房あと云女房御楊枝二つ雙二指御簾一まがりまいらせ候はんと云又女房あと云也と云々しかればまがりは扠なる事明也◎異說◎何にてもあれ木にて丸くなしたる器をばまかりと名付るなり鞠と云もまがりのか文字を中略していひ出たる詞也近年やしほの木の實などの大きなるを中を塗緒を付て腰にさげ水のむものをまがりともいへり今此書にいへるまがりは椀也貞◎まがりの字銃の字なるべしと長嘯子思へりされとも日本紀第二卷に玉銃を玉のまりとよめり一書には玉壺玉瓶とあれは兼良公もト部兼俱も銃はつるべ也と思へり和名集金椀日本靈異記云其器皆銃俗云賀奈萬利今案銃子所レ出未レ詳古語謂レ椀爲二萬利一宜レ用二金椀二字一也椀即盌字也まりを曲りと云ん事又おぼつかなし或說に貝をすりて作れる飲

器を曲りと云奥州邊田舍などに有となん野▲詩經兕觥其觩と云々朱注に觩角上曲貌也是は角のまがれる所を持て飲器に用ると見へたり又は菊亭右府晴季公つぼさかづきをまがりと云とある文にありされどもつほさかづきともしれず盤▲遊仙窟曰林盞交横▲文選甘泉賦玄瓚觩膠これらを見侍ればさかづきにもまがれるありと見へたりされば水のみにも盃にもまかりと云ものあるべけれど今の世にひろくもてあつかはぬ物なれば見ることまれ也今東大寺に昔よりまかりといへる古器ありと云り文▲拾遺にまがりをよめる歌「霞わけいまかり歸る物ならは秋くる迄は戀や渡らん句まがりしてぞめしける●此まかりをめしける義理いかんといふに諸抄まち〳〵なり先貞德曰惣別公家方の土器を用ゐ給ふに水火のけがれは水火になし器にありといふよりはじまりて昔より茶碗天目のたぐひを用給ふしかるに今殿上の器なれば土器にあらざれども水火にけがれなき道理を相國のあきらめて木器にて水をめしたると也云々又大全曰此相國水火にけがれなし器物にけがれ有るをしろしめしあたらしき抔にて水をめしけるとなり

〔一段之統論〕●此段は上の堀川相國の過差このみ給へるとはかはりたる久我相國の御事をほめて書り文●此草紙をよむ人まがりのことをのみせんさくして此水のめしやう餘人にかはりたる事を名匠のなされし例を末代にしらせんとて爰に兼好のかかれしことはりをば沙汰せざる也萬事肝要にする事をばそこ〳〵にさばきて詮もなき事をしりたく思ひ精をいるゝは癡人のなす所なり伊勢物語のしぼじりと云事を叡運の聞出して信ぜられしを俊成卿はそのやうなものしりても何かはせんたゞ富士の山に似たるものにてこそあるらめと思ひておくべしとのたまへり今此まがりをたゞさんよりもまがりにて水をめしたる道理を詩ねしるべき義にてこそ侍れ貞

〔百二〕或人任大臣の節會の內辨をつとめられけるに內記の持たる宣命をとらずして堂上せられにけりきはまりなき失禮なれども立歸り取べきにもあらず思ひわづらはれけるに六位內記康綱きぬかづきの女房をかたらひて彼宣命をもたせて忍びやかに奉らせけ

りいみじかりけり

任大臣　頭書云▲元日白馬などの節會には諸司奏と云ことあり任大臣の節會には諸司奏なき故にこれを片節會と云なり▲江次第卷二十云任大臣節會撰吉日召擬任人令申可任日（前一月許歟）前一日上卿奉勅仰外記令誡所司仰辨令裝束（裝束之事在別）預置宣命版當日仰宣命旨大臣奏宣命草及清書如常返給其後給内記令候於仗座預定宣命使參議（或帯剱人或大辨）天皇御南殿（懸御簾）内辨著靴王卿著外辨近仗階下諸衛各立中務式部彈正入春華修明門立承明門東西内辨取副宣命於笏進立軒廊西一間（不必著宜陽殿兀子）内侍臨檻大臣參上著南廊第二間下（西柱兀子北面内辨座也）開門（明承明建禮兩門不開長樂求安門）闈司著承明門左右座大臣喚舍人（二音）少納言就版大臣宣喚刀禰少納言稱唯退出召之公卿參上立標入自承明門東扉内辨召參議一人（微音）參議微音稱唯出列輕軒廊東二間自簀子敷西進立内辨後（長押下）内辨宣命參議受之（下略）文

内辨　◎節會の奉行其日の一の座なり句◎内辨外辨といふ事有閤門より内と外との事をつかさとりておこなふによりて内辨外辨の分なり盤◎内辨は第一の臣外辨は第二の臣つとめらるゝなり諸　頭書云▲江次第曰第一大臣於承明門内辨備諸事故曰内辨第二大臣於門外辨備諸事故云外辨文

内記　◎文筆を司どる官也　頭書云▲職原抄云儒門之中堪文筆者任之草詔勅宣命故也云々文

宣命　◎其人を大臣になし給ふ事を書付たる天子の勅命也宣はのたまふとよみ命は上より下へ仰せ下さるゝ義を云扨宣命は時の大内記書て出す也節會の時内記其宣命を持て仗座に候する也それを内辨の大臣とりて笏に持そへて堂上せらるゝ事也諸　頭書云▲職原抄萃菴校正注曰宣命者用神社山陵者也書樣有法式▲延喜式曰凡節會及尋常詔旨者内記預書但臨時詔勅者承旨即内記作詔書云々凡宣命文者皆以黄紙書之但奉伊勢太神宮文以縹紙書賀茂社以紅紙書參▲諸の節會任大臣の節會などには大かた詔勅を明らるゝといへど間亦宣命をも用らるゝ也詔勅宣命は文體大きに同じく少しく異なるもの也文

とらずして　●とるべき笏を失念してなり諸
堂上　●紫宸殿へのぼられたるなり文
失禮　●しちらいとよむ過失の義なり壽
康綱　●中原康綱なり　頭書云▲中原康綱正六位
上權大外記歷ニ德治以來五代一從五位下日向守源重
徇男德治年中改ニ姓中原一壽　▲六位外記と書たる本
あり康綱の系圖には大外記とあれば尤成べけれど
官はひうつりかはるものなれば爰の文義にては内
記の時の事にや句
かづき　●前に委
忍びやかに　●人のしらぬやうにとなり盤
いみしかりけり　●彼失念せられたる内辨の方へ
もたせやりたると也諺　●いみじき才覺なりと也諸
［一段之統論］●上の段に雅實公の有識のふるまひ
やんでとなかりし事をしるせるにうけて又此段と
次段にも公事になれたる者のしわざをいふなり句
●此段節會公事などの折の用意をかけりと見ゆ式
法みだれさる時は故實のまゝに行ふ故にさして心
づかひもいらす失禮の折に至りてことに才覺いる
べきこと也康綱の早速の才覺神妙にや此事をしら
せんとて此段はかける也文　●此段の大意は内の者
にてもあれ朋友にてもあれ才覺あるものを人はも
つべき義なり昔三井寺の本覺坊の物語にある兒を
花見に出したてゝやりけるにいづくともなく短册
をくりしを若き衆徒たち返歌すべきやうなかりし
に年よりたる供奉の男の中に心さゝたる者かの使
を請じ入酒をすゝめそのまぎれにすぐに返歌すへ
き見物の公家衆とをぼしき所へかのたんざくをも
てまいりかけたりしかは則返歌あり其返歌を取て
かへり兒の返歌になしたりと云々萬事にかやうの
はたらきはあらまほしき●となり貞
［百二］尹大納言光忠入道追儺の上卿をつとめられけ
るに洞院左大臣殿に次第を申請られければ又五郎男
を師とするより外の才覺候はじとぞの給ひける彼又
五郎は老たる衞士のよく公事に馴たる者にてぞ有け
る近衞殿着陣し給ひける時ひざつきをわすれて外記
をめされければ火燒て候ひけるが先ひざつきをめさ
るべくや候らんと忍びやかにつぶやきけるいとおか
しかりけり
尹　●尹(イン)は彈正尹なり是兼官也文　頭書云▲職原

抄云彈正尹多任ニ親王一或大納言以上兼レ之文
●光忠　頭書云▲具平親王十代之孫從一位內大臣六條有房公男權大納言正二位彈正尹光忠卿なり太平記に所謂千種中將忠顯之父也諸▲入道し給ひて法名賢忠と云り文

村上天皇（人皇六十二代）—具平親王——師房——顯房—
—雅實——雅定——雅通——通親（これまでは前堀川相國の段にくわし）
—通光（久我從一位太政大臣）—通有（六條）—有房——光忠

追儺　●前に委す
洞院　●實泰公也　頭書云▲大織冠二十四代之孫從一位太政大臣山本公守公男從一位左大臣實泰公號ニ後山本一句

鎌足——不比等——房前——眞楯——內麿—
—冬嗣——良房——基經——忠平——師輔—
—公季——實成——公成——實季——公實—
—通季——公通——實宗——公經——實雄—
—公守——實泰（八十三段竹林院殿のところに系圖くわし）

次第を申請られ　●追儺の上卿をつとむる其次第を相傳せられけると也追儺の次第は江次第に在文
才覺候はじ　●實泰公の指圖也これよく公事になれたる物なれば也家々の故實はさる物にてとかく其事になれて年へたる者をは師とすべしとの義殊勝なり文
彼又五郎　●是より兼好の評論也文
衛士　●衛門兵衛の被官火をたく者なり壽　●歌にみかきもり衛士のたく火などゝよめり句
近衛殿　●誰としりがたし文　●是より又別の事也又五郎が公事になれたる事をのべたるなり諸
着陣　●節會などの時陣の座につき給ふ事なり文
ひざつき　●小半疊のうすべりなり名目抄には膝突とかけり壽　●軾（サツキ）の字●和名に軾は車前なりとてくるまのとじきみとよめり然ばひざつきとはおなしからず野
めされ　●膝突を外記して召ょせんとてなるべし文
先ひざつき云々候らん　●又五郎火燒てありしが近衛殿着陣にひざつきを忘れ給ひし時はや其氣を

つけ置し故今何となく外記をめさるゝは定て其御用ならんとつふやきけると也是よく公事になれたる故なるべし文

いとおかしかりけり　◉此おかしは歎美の詞兼好のほめたる也説

〔一段之統論〕◉此段も前段の康綱が公事になれたると同日の談なりたれもかくなくてはといふ心なり參

〔百三〕大覺寺殿にて近習の人共なぞ〳〵を作りてとかれける處へくすし忠守參りたりけるに侍從大納言公明卿(キンアキラ)我朝の者とも見えぬ忠守哉となぞ〳〵にせられけるを唐瓶子と解てわらひあはれければ腹だちて退出にけり

大覺寺殿　◉後宇多院なり野　◉嵯峨の大覺寺に御隱居有し故にかくいふなりこゝは嵯峨の大覺寺をさすにはあらず九重の內の院の御所とみるべしたとへば後白川院の御隱居所を法住寺殿といひしに內裏にての御所も法住寺殿といひし類也説　頭書云▲山棠編年小史云人皇九十代後宇多院諱世仁龜山太子母皇后藤原信子號二京極院一左大臣實雄女也文永十一年三月二十六日即位元在二乙亥一治二天下一十三年弘安十年十月二十一日禪(ユヅル)レ位云々德治二年七月二十六日國母遊義門院源基子崩後宇多上皇落飾號二法皇一自レ此絶レ色建二嵯峨大覺寺一以居云々法名金剛性元享四年六月二十六日崩壽五十八葬二蓮華峯寺一亦號二大覺寺一

近習　◉君の御そはに近くなる人なり諺　頭書云▲近習字見二禮記月令一註習狎也天子親幸之臣句

なぞ〳〵　◉謎の字也野　◉なぞ〳〵とは何ぞ〳〵と問かけて其理をあかす也句　◉後撰集にあとうがたりとあるもなぞ〳〵の事也定家卿の僻案抄に見えたり文　頭書云▲謎の字なり▲玉篇謎末閉切隱言也▲隱語とも瘦詞とも云也野　▲拾遺集云なぞなぞのものがたりしける所に曾禰好忠「わがことはゑもいはしろの結び松ちとせをふとも誰かとくへき是右衞門督の家のなぞの歌合のときのうたなり此時のなぞに深きは淺きあさきはふかき物一いづれともわきぞかねつるあすか川ふかさあさゝのさだめなければなとあまたあり文

くすし　◉醫師の書

忠守　◉丹家也　頭書云▲丹家康賴十一世正四位下左京大夫典藥頭忠守內院昇殿長有二男法名舜阿歌人句▲水鏡に元享八年十五夜の月の夜の御會に忠守などいふ藥師もこのみちのすきものなりとあり略レ之盤▲後漢靈帝の孫孝日王來朝して丹波の矢部郡にすみて醫術神のごとし丹家は其子孫也文

後漢靈帝─正王─石秋王─阿智王─高貴王始而本朝來ル─忠拏直於二本朝一生住二丹波國一賜二坂上姓一─駒子─弓束─首─孝子─大國─康賴始而賜二丹波宿禰一天田郡人醫術通二神靈一褒譽溢二天下一─針醫博士左衛門權佐從五位上─重明典藥頭侍從─忠明典藥頭從四位下─雅忠昇殿禁色─右衛門佐典藥頭正四位下─重康醫博士圖書頭從五位下─重忠針博士主稅頭從四位上─重長典藥頭內匠頭正四位下─有忠正四位下大舍人頭典藥頭─長忠圖書頭典藥頭正四位下─長有典藥頭施藥使─忠守施藥使宮內卿

侍從大納言　◉侍從は兼官なり拾遺補闕の官と云武家の小性のごとしかろくして御身ちかく召仕る役也中務の屬官にてかろき官なれとも出頭人なとは大中納言に任じて後も侍從をかねて御身ちかくめしつかひ給ふなり說　頭書云▲山案職員令曰侍從八人掌二常侍規諫拾レ遺補一レ闕令義解曰拾二綴遺忘一補二益闕失一▲職原抄曰侍從相當從五位下大中納言參議已上有二兼任之例一

公明　頭書云▲鎌足二十三代之孫從二位大納言公明卿者從二位民部卿實仲卿男正親町三條之庶流也建武三年五月十一日薨

鎌足─不比等─房前─眞楯─內麿─冬嗣─良房─基經─忠平─師輔─公季─實成─公成─實季─公實─實行─公教─實房右大將正二位─公氏正二位權大納言─實蔭從三位參議─公貫正二位權中納言─實仲民部卿從二位─公明

唐瓶子と解て　◉なぞのときやうの心は我朝の者とも見えぬは唐也忠守を淸盛の親の忠盛に義をとる忠盛は平氏なり忠守忠盛よみおなし平氏瓶子聲相通ずるなり此ゆへに唐瓶子と解也諸◉瓶子平氏聲通ずるゆへに平家物語にも五節の時伊勢へいじはすがめなりとはやし鹿谷の參合にもへいじたお

れたりへいじのくびをとるなどあるなり壽

〔一段之統論〕◉此段は頓作なるなぞ〳〵の物語なり師說には前段にものなれたる又五郎が事をかける故又ものなれぬ人などはたはふれことにも腹立してさまあしきをいましめたるものなるべし文◉此段下心は上に居てあなとらずとこそ侍るを近習の人々のかくたはふれしことをいましめ又忠守も腹立して退出せられし其氣品のせはき故一座の首尾あしきと後の世の人を敎るなり諺

〔百四〕荒たる宿の人目なきに女のはゞかる事ある比にてつれ〳〵と籠りゐたるを或人とふらひ給はんとて夕月夜のおぼつかなきほどに忍びて尋ねおはしたるに犬の事々敷とがむれば下子女の出て何處よりぞといふにやがて案內させて入給ひぬ心ほそげなる有さまいかで過すらんといと心ぐるしあやしき板敷にしばし立給へるをもてしづめたるけはいのわかやかなるしてこなたといふ人あればたてあけ所せげなるやり戸よりぞ入給ひぬる內のさまはいたくすさまじからず心にくゝ火はあなたにほのかなれど物のきらなど見えて俄にしもあらぬ匂ひいとなつかしう住なしたり門よくさしてよ雨もぞふる御車は門の下に御供の人はそこ〳〵にといへば今宵ぞ易きいはぬべかめると打さゝめくも忍びたれどほどなければほのぎこゆ扨此程の事共こまやかに聞え給ふに夜ぶかき鷄もなきぬこしかた行末かけてまめやかなる御物語に此度は鷄もはなやかなる聲にうちしきればあけはなるゝにやと聞給へど夜ぶかくいそぐべき所のさまにもあらねばすこしたゆみたまへるに隙しろくなれば忘れがたき事などいひて立出給ふに梢も庭もめづらしく靑みわたりたる卯月ばかりのあけぼの艷におかしかりしをおぼし出て桂の木の大なるがかくるゝまで今も見送り給ふとぞ

荒たる宿　◉住み所の感情を催すべき體をかけり

盤　頭書云▲爰の發端の詞枕草紙のをもかげうつるやうに覺へ侍る也大夫はと云條に曰女のひとりすむ家なとは只いたうあれてつゐぢなどもまたからず池なとのあるところはみくさゐ庭などもいとよもぎしげりなどこそせねども所々すなごの中より靑き草見へさびしげなるこそあはれなれ句

はゞかる事ある比　◉世間をはゞかる比なり諺◉

物忌など也壽
或人　●此或人は何人ぞや此人の噂さを此章始終にいふなりもし又兼好が自託するにや壽
夕月夜　●夕附夜共書夕附夜とは夕より夜になりもてゆく比なり薄闇き事なり文　頭書云▲古今に「夕づく夜をぼつかなきを玉くしげふたみの浦はあけてこそみめ文
おぼつかなき程に　●道の程不明ならぬ體也諺
犬のこと〴〵しく　頭書云▲山案格物論犬家畜以吠守▲東坡文集云養レ犬以防レ姦▲都良香詩曰守レ家一犬迎レ人吠句▲夫木集従京極殿の歌に「ぬししらぬ岡邊の里をきてとへばこたへぬさきに犬ぞとがむる説▲又歌に「よもすがらとがむる犬の聲たてゝくるとうたがふたのみだになし諺
案内させて　●下子女の出ていづくよりと問ば誰なりとて案内させて先門を入給ひぬる也句
心ほそげなる　●荒たる宿なれば也諺　●つれ〴〵とこもりゐたるといふ首尾也文
心ぐるし　●哀に思ひやる心なり文　頭書云▲榊の巻に野の宮のさびしげなる體を書る詞の中に爰に物をもはしき人の月日をへ給ふらんほどをおぼしやるにいといみじうあはれに心ぐるしとあり今兼好が爰の心ぐるしの心言葉よく似たり句
あやしき板敷に　●板敷か何かとあやしむ程のあれたるよしなり盤
しはし立給ふ　●女の室にはそのまゝいらぬものなり聲つかひしているべき事列女傳にもあり文　頭書云▲孟子の妻の室へ聲づかひもせずして入られしをさへ聖教にそむけりとて孟母の異見せられし事列女傳にも侍り参
もてしつめ　●物なれてしとやかなる女也諺　頭書云▲藤のうら葉にいといたうよういしもてしづめて物し給ふとあり句
けはい　●氣色なり諺　●けはひといふはものをへだてゝ聲ばかりきゝて直に見ぬよしなり盤
わかやか　●若き女なり参　頭書云▲若紫にげにわかやかなる人こそかくてもあらめとあり句
いふ人あれば　●こなたへ入給へといふ人あればと也女房達なるべし文
所せげ　●所狭氣なる也野　●戸のたてあけのほど

のせばさなるべし文　頭書云▲せはきといへる心をせとはかり歌にもよむ也義家の歌に「吹風をなこその關と思へども道もせにちる山櫻かな句　▲一説に戸のたてあけの自由ならず音のやかましきよしなり

すさまじからず　●外はあれはてたるに内はさしもの住居なればさのみすさまじくもあらずと也全

あなたにほのか云々　●あなたにほのかなるとてくらきやうにはなしよき程のあかりにて有よし也盤

俄にしもあらぬ匂　●日比に用意してたきしめたる香也參●前にもわざとならぬ匂ひとあり説

門よくさして　●女房達の下部にいゝつぐる詞也壽●今宵とまり給ふよしをいひ告るなり盤

雨もぞふる　●あめもやふらんといふ事ながら慥にふるべきと見る時にいふてには也百人一首に忍ふる事のよはりもぞするとよめるとおなじ文

いはぬべかんめる　●いぬべきといふ事也はの字は助語なり諺●こよひといふよりは下部どもの詞也日比はあれて人めなき所なれば用心きびしくて寢かたかりしに今宵は此人のとまり給へば心易く寢ぬべくとよろこぶ體也諸●又一説●まらふとのかたらひに今宵は伽も入まじければ心易くいぬべしと内衆のさゞめくなり句此説はいやし

打さゝめく　●傍輩づから互に語りあふ心なり説　頭書云▲枕草紙あはれなるものゝ條に別當などよひてうちさゞめけばとあり句

ほのきこゆ　●下部どものさゝやきていふ聲忍びやかなれども程近き間なればほのきこゆる也諺　頭書云▲若紫にずゝのけうそくに引ならさるゝ音ほのぎこゆとあり句

こまやかに聞え給ふ　●こまやかに聞え給ふとは念比に物語し給ふ也

夜ふかき鷄も　●夜半過やう〳〵一番鷄のなくをいふ也野　頭書云▲伊勢物語に「いかでかは鳥の鳴らん人しれず思ふ心はまだ夜ふかきにとあり句

まめやかなる　●心をへだてぬ眞實なる御物語也諸

此度は鷄も　●さきに夜ふかき鳥もなきぬといひし故此たびはとなり明がたには鳥の音しきる物

也文　頭書云▲源氏帚木巻の方違の所に鳥も鳴ぬ
人々をき出てと有て奥に鳥もしば〳〵鳴に心あは
たゝしくてといへる筆法なり文
夜ぶかくいそぐ　●南義也一には人目をはゞかる
所は夜ふかく歸れども人目なき所なれば夜ふかく
急ぐべきにもあらず又一には別れをおしみて思ひ
亂たる風情中々夜ぶかくわかるべきにあらざれば
也諺
たゆみたまへるに　●いそぐ心をすこしゆるめた
る也參
ひましろくなれば　●明はなれて透間々々のあか
くなるを云也壽
青みわたりたる　●夜中に來りたれば今見る體は
ひとしほめづらしきなり參
卯月ばかりの　●四月には卯の花咲時なれば卯の
花月と云を略して卯月と云也句
桂の木の大なるか　頭書云▲花ちる里に曰よくな
る琴あづまにしらべてかきあはせにぎはゝしく引
ならすなり御耳とゞまりてかどちかなる所なれ
は少しさし出て見いれ給へは大なる桂の木の追風
にまつりのころをぼし出られてそこはかとなくけ
はいをかしきを只ひとめ見給ひしやどりなりと思
ひ出給ふにたゞならず程へにけるをおほめかしく
やとつゝましけれどすぎがてにやすらひ給ふとあ
るをうつせるにや句▲管家の歌に「君かすむ宿の
梢をゆく〳〵もかくるゝまでにかへり見しはや壽
かくるゝ云々とぞ　●或人今其所を通り給ふに
其時の風情を思ひ出て其家のわたりに桂の木あり
しが其かくるゝ迄見送ると兼好に語りきかせ給ふ
也諺●結句のとぞとは人のうへをいふ時にかく詞
也源氏のとまりにおほし文●又説に人のうへにい
ひなせる時書也參●山案此説をもつて見れば兼好
自身のうへの事ながら今かりに或人の二字をもふ
けてかけるものならんまことに住みあらしたる家
のさびしき有さま内の體の風流なるよそほひ今目
に見る樣にあり〳〵とかゝれしは人のうへの事と
はおもわれず
[一段之統論]●此段は此草紙の下巻に妻と云ふも
のこそおのこのもつまじき物なれといふ段によそ
ながら時々通ひすまんこそ年月經てもたへぬなが

らひともならめあからさまにとまり居などせんはめづらしかりぬべしといへる心なり源氏物語などの筆法をうつして風流をかけり文 ●此段人は常々の心づかひが本也それによりよくもあしくも有也後々まで心によりてこそ思ひ出らるれとの心なりこれは兼好がたれぞの御供してゆきてのこと也盤
●山案此說さもありぬべし前にも九月二十日あまりの夜ある人にさそはれて月見ありきしと云所にも主じのたしなみのよきを書り又あやしの竹のあみ戸の段にも人目なき山里ともいはず心つかひしたりと書り何れも平生意人を云なりされど此說に兼好の或人の御供してゆきしと云は非なり今も見送り給ふとぞと云結句の詞にかなはぬなり或は通章兼好身の上のことゝ見るはさもあらんか新注曰是より以下三四段は女色の事をしるして終に其欲をはなれよとの教訓したる成べし此說是なり次の女の物いひかけたるの段の結句のたゞまよひをあるじとしてかれにしたがはゝやさしくも面白もあるべきといましめんための發端と見るべきなり

〔百五〕北の屋かげに消殘りたる雪のいたう氷りたるにさしよせたる車のながえも霜いたくきらめきて有明の月さやかなれどもくまなくはあらぬに人ばなれなる御堂の廊になみ／＼にはあらずと見ゆる男女となげしに尻かけて物がたりするさまこそ何事にかあらんつきすまじけれかぶしかたちなどいとよしと見えてえもいはぬ匂ひのさとかほりたるこそおかしけれけはひなどはづれ／＼聞えたるも床し

北の屋かけ　●やかげは家の陰也北は陰南は陽なる故に南より雪消て北は消殘る也古 ●日面ならねば殘雪一入氷りたるさまおもしろき風情なり文
頭書云▲朗詠に窓梅北面雪封寒といへる俤なるべし文 ▲僧季潭春雪詩昨夜東風消不レ盡古墻陰處曉猶多と作れる面影引合せ見るべし句

いたう云々　●甚の字なり句 ●餘寒の節殊に陰處故に

くまなくは云々　●河海に阿の字曲の字をよめり左傳にも隈の字をよませたり参 ●くまなくはあらぬにとは月は明なれども木陰などにてくらく見ゆるなるべし壽 ●又一說にさへかえる空のけしきに月すみ渡りすさまじげなれどもさすが春のしるし

とておぼろなる處あるを云りと云々愚意には此說まさりたるやうに覺え侍る猶尋ぬべし句●月は明白なれども所々に雪など有しなるべしかのくまなきをのみ見るものかはといへる例の景氣也文右三說也　頭書云▲左氏僖公二十五年傳杜預注曰隈隱蔽之處云々句

廊　●廊下也諸

なみ〳〵　●凡の字常の人とは見えさる也參　頭書云▲枕草紙木はと云條に人のなみ〳〵なるべきさまにもあらねばとあり句

男女　●殿上人なるべし野

なげし　●長押は上下に有爰は下のなげし也承塵とも書壽　頭書云▲源氏夕顏になげしにもえのぼらずとあり壽▲枕草紙うれしき物の條に一尺と二尺ばかりの高さのなげしの上におはします又心ゆくものゝ條になげしにをしかゝりあればとも有句

尻をかけて　●腰をかるく也諺

つきず　●詞も盡まじきと也野

かぶし　●是に付て三說あり先一義には●貞德說に女のうちかたふける形也日本紀神代卷に頗傾かぶしとよめり歌にもいねたるばかりかぶしたるとも又ほうしこの稻かぶしそめけんなどもよみし詞也諸抄に髮かたちと云儀なりなどはえるは彷彿の義なるべし文●壽抄をはしめ句解新注等にも女のかしらつき也かみかたちと云義也と有若此說にならば髮子と書てかぶしとよむべし又一說に好子と書てよき女子といふ事なりといへり說文の說宜し

えもいはぬ匂ひ　●えもいはれぬ匂ひ也諺

さと　●俗にさつとゝいへる義也颯の字を書也句

●少の心也諺

けはひ　●けはひは物語する體たらくをいふ句

はづれ〳〵　●言葉のはし〳〵也句●又はつれはつれのはの字を上へ付る說有其時はものいふ音はつれ〳〵とさひしく聞ゆるとなり諺

［一段之統論］●此段も前段にひとしく艶にやさしき體なり壽●此段を見て兼好は色好みなりといはん者もあるべけれどそれは以の外の僻事也此草紙は心にうつりゆくことをそこはかとなく書るやうに聞へながら皆以底意にはいましめを含て書り此

段一まづ好色方人になりて書ながら末にいましめん爲也前の色好ざらん男はといへる段と同じ意なりされば假初に書しことも是勸善懲惡を本とするなり白樂天が詞にも願以₂今生世俗文字之業狂言綺語之誤₁翻爲₂當來世々讃佛乘之因轉法輪之縁₁とある心なりよむ者能々心をつけて味ふべきなり若又あしく意得て讀ならは兼好の筆力を盡して書給へる意入を無にすべきものなりすべて此草紙は淺きに似て深き道理をこめたり說●これまで一二段は女色の艶に面白き體をうつせりさのみ人の敎など云にもあらず加樣の事あるにて草紙と云なり全●山案此說いかゞ後人此つれ〳〵を學ぶ者は前說にしたがふてよろしからん

〔百七〕高野の證空上人京都へのぼりけるにほそ道にて馬に乘りたる女の行あひけるが口引ける男あしく引てひじりの馬を堀へ落してげり聖いとはらあしくとがめてこは希有の狼藉哉四部の弟子はよな比丘よりは比丘尼はおとり比丘尼より優婆塞はおとり優婆塞より優婆夷はをとれりかくうばいなどの身にて比丘を堀へ蹴入さする未曾有の惡行也といはれければ口引の男いかにおほせらるゝやらんえこそ聞しらねといふに上人猶いきまきて何といふぞ非修非學の男とあらゝかにいひてきはまりなき放言しつと思ひける氣色にて馬引返してにげられけりたうとかりけるいさかひなるべし

證空上人　●傳記不ㇾ慥三井寺の證空とも又は法然の弟子西山の證空の事也ともいへり●かやうの人の傳記しれがたし大才の道春も勸へもらせりそれを今の時分の人是非しりたがる有てこれをしらねば徒然草すまぬよしをおもふ人有しらるゝならば知たるがよけれども天竺大唐にも高僧名僧の傳しれぬもあり其たぐひ也こゝに傳記さのみいらぬ事也此草子にかく書ぬるが則傳記なり誰の子なにの俗性などしるに及ばず只こゝに書たるはいかなる心ぞとしるにはそれ迄のせんさくに及ばぬ成べし事鑿求て義理をわきにするは學者の病なるべし

盤　頭書云▲證空阿闍梨は三井寺の內供智興の弟子なり智興病急なる時弘法大師の語に師は三世の契親は一世のむつびとあるを引て身を智興の病に代て晴明にまつりかへさせし人なるよし寶物集中

卷に見へたり今爰の證空は高野とあれば別人なるにやされども遍歷の爲高野に住居せられたる事も有べし殊に死なんとする折まで弘法の語を信じてひかれたれば高野といへる詞に少したよりあるか猶尋ぬべし又法然の弟子にも同名あり句 ▲是は法然の弟子の證空なるべし黑谷上人傳三十一卷にのせたる法然弟子の連衆にも此人を第四につらねたり此僧當麻へ參詣して中將姫の曼陀羅を拜して此繪相に注記をくわへんと思はれけれどもゝとより顯敎をのみ脩せられし人なればかの繪像の極樂の體相の中にをはします諸尊の印像を會得する事なりがたし故に天台宗の密敎に達せる僧にあひて印契を相承し高野にもゆきて吟味に及ばれしよしなり西山の曼陀羅注記とて世にも是あり其中にも見へたり高野に住留の時なる故に高野の證空上人と云なるべし三井寺の證空の事歟といへる舊說はしかるべからず三井寺證空阿闍梨などゝあらは似合しかるべし其上高野にすまれたる事も聞つたへず西山の證空は上人號を得られし人なれば彌此僧の事なるべし參 ▲千載集の作者に證空上人とてありこれにや文

のぼり ●馬に乘てのぼられし體なり說

こは ●是はなり文

希有 ●まれなる也文

狼藉 ●蹈は踏也狼の物をふみちらしたるごとくみだれかはしき義也野 頭書云▲字彙狼字注曰蹂ニ躙其草一使ニ之雜亂一故曰ニ狼藉一句 ▲通鑑綱目 蘇鶚演義曰狼藉レ草而臥去則滅亂故凡物之縱橫敗亂者謂ニ之狼藉一 ▲居家必用曰多受ニ賍賄一者謂ニ之姦賍狼藉一參

四部の弟子 ●四部の弟子とは釋尊の弟子等部類を四品にわかてり所謂比丘比丘尼優婆塞優婆夷也新注 ●又は四衆とも云比丘比丘尼は出家二衆優婆塞優婆夷は在家の二衆なり參 頭書云▲四部に付ては種々の義あれども戒法に付て佛の弟子たる名なり全 ▲法華經序品第一時四部衆咸皆歡喜身意快然得ニ未曾有一句 ▲梵網經曰若國王太子百官四部弟子云々參 ▲(比丘)釋氏要覽上曰梵語云ニ比丘一秦言ニ乞士一謂下上於ニ諸佛一乞レ法資ニ益惠命ニ下於ニ施主一乞レ食資中益色身上句 ▲翻譯名義集第一比丘名ニ乞士ニ

清淨活レ命故又翻云ニ除謹一野　▲比丘とは二百五十戒を持つ僧をいふ也全　▲(比丘尼)要覽曰比丘尼亦名ニ除謹女一天竺以ニ佛姨母摩訶婆闍波提一爲レ始也句　▲名義集曰比丘尼通稱レ女爲レ尼尼得ニ無量律義一故應次ニ比丘一又稱ニ阿夷一　▲又曰百歳比丘尼見ニ初受戒比丘一當ニ起迎逆禮拜問訊請令レ坐比丘尼不レ得ニ罵ニ謗比丘一比丘得レ說ニ尼過一野　▲女の出家して五百戒を持つを比丘尼と云也全　▲(優婆塞)山案釋氏要覽曰秦言ニ善宿男一謂離ニ破戒一宿故又梵云ニ丘波索迦一唐言ニ近事男一謂親ニ近承ニ事諸佛法一故天竺受ニ五八戒一俗人稱レ之亦云ニ淸信士一　▲大藏一覽曰僧男曰ニ優婆塞一參　▲在家の男五戒を持を優婆塞と云ふなり全　▲(優婆夷)山案要覽曰夷即女聲字也又云ニ鄔波斯迦一名義同ニ優婆塞一　▲最勝王文句記曰優婆夷此云ニ近事女一　▲大藏一覽曰長老女曰ニ優婆夷一參　▲在家の女男に嫁しながら五戒を持を優婆夷と云

よな　●よびかけて物を告る詞說

比久尼　●比丘尼は戒品威儀みな比丘にしたがひて得る也畢々比丘の心にそむくを破戒とす尼戒錄要に其事有此ゆへに比丘尼はをとれりとなり參

優婆夷　●比丘尼は出家優婆塞は在家なればをとれるなり又優婆塞は五戒の男子なれば五戒の女人の優婆夷はをとれるなり參

うばい　●彼女を指

比丘　●我身を指說

蹴入れ　●踏入と書る本も有

未曾有　●いまだかつてあらざると也諸

いはれければ　●上人の詞殊勝なり壽

聞知らね　●尤下﨟なれば四部の弟子のわかちもしらぬによりてなり諺

いきまき　●息卷と書り古　●息あらくする也說　●上人の猶々腹を立らるゝよし也盤　頭書云　▲源氏玉葛にかのげんがいきまきしけはも河海にいきまくは腹立なりいきとをる義也壽

非修非學の男　●道をも修せず學問をもせぬおとこといふ事未曾有の惡行をせしは非修也えきゝしらぬは非學也文　●上人の氣にはかくいはれては殊外腹立事なれども此男馬耳の東風也壽鐵

放言　●ことばをはなつて惡口する也野

しつと云々氣色　●非修非學といひたるが至極人

をあしく云たる僧中のことばなればこのおとこもはらを立んとおもひて盤にけられけり ●此にげられたるにて出家の本意あらはれたる也道なき事と見ては其者をあらくいふは出家に似合しき事ながら其者に根ふかき怨念のむくひあるべく沙門のきらふ事也二念をつがずしてにげられし心入まことに殊勝なる道心者なり參

たうとかりける云々●是兼好の評論なり盤 ●此一句につゐて種々說ありて人すまし難し今得意すべき說は此上人愛著の心なき故にかく女にむかひてもあらけなき惡口をいはれしは沙門の色なき風情まことに殊勝なることなり其上自身ながら過言をしたると後悔したる氣色にて馬引かへしにげられし事は彌殊勝なる事と兼好思れてかく評論し給へるものなりされば今比の凡僧はたとひ是に過たる狼籍あるとも腹立て惡口することはさて置かへつて言葉をつくつてとかめながらも色めきたる風情有べし此上人の心入末世の手本なるべし說

[一段之統論]●此一章の心は前章に男女の興をこまやかに書て又こゝには彼證空の女人に向てもそれに愛著を生ぜずしてあらゝかにいはれし事沙門はかくこそありたきものなりとの心なるべし參 ●此上人出家として腹あしきこそ似合ねされと今比の都ちかき寺の法師の作法にかはりて愛著の念露もなくて誠に殊勝なるいさかひにてこそ侍れとかく出家は山寺そだちがよき也と云々貞 ●此段いさかひたる故を以て女性に愛心のなきと云事いかゞにやもしいろあらばいさかひなりともしつべかりけるもの也是例の段をつゞけんと思ふ失なり段々心にうつりゆく事を書たれば或は前段につゞき或はいひのこしたる事を別段にかける事もあり又もてはなれてつゝけられぬ所あるべしたとへば咄に月花吉野さらしなと折にふれ時にしたがひて語りけるうちにふと所帶咄になるなり如レ此つれ／＼段々もつゞけたり連續は益なきこと也只正意に見るべし問云しからはとうときいさかひと云事いかなる故ぞや答云證空は吾學文にすこしも慢心のなきこといさかひにてあらわれたり其故はわが覺えたるほどの事は口引の男までも心得たりと思ひて

四部のくらいをいひたり猶心を付てみるべし馬子までもしりたる由のときやうなり又悪口も上人に似合たるいひぶんなり非修非學と云も馬子の知べきことかと思ひてきわまりなき放言なりいひかへしをしられてはと思ひて馬ひきかへしにげられたる所又殊勝なり全 ●山案此說一理あるといへども此あたりの前後のやうすを見れば畢竟は此次の段を可ㇾ書ために上あれたる宿と云より以下は皆男女好色のことをいへりしかれば此段も前說にしたがひて見るべしされば上人の色なきふるまひは殊勝なりといひて次の段にては色あるものゝあしきことをいましめたるなり●此段は阿字本不生の段と同類なるべし壽

〔百七〕女の物いひかけたる返事とりあへずよき程にする男は有がたき物ぞとて龜山院の御時しれたる女房共わかき男達のまいらるゝ毎に時鳥やきゝたまへると問て心見られけるに何某の大納言とかやは數ならぬ身はゑ聞候はずと答へられけり堀川内大臣殿は岩倉にて聞て候ひしやらんと仰られたりけるを是は難なし數ならぬ身むつかしなどさだめあはれけり

有がたき物ぞ ●むかふの女に心をまよはすものなれば其返事何のたくみもなく能程にする事成難と也諺

龜山院 ●八十九代の帝なり上に有諸

しれたる ●人の心をひきみるやうな者を俗にしれ者と云說 頭書云▲ざれたる女なり野 ▲しれたるとは愚痴なる人也よき人はせぬことゝいはんため也盤

女房 ●龜山院にみやづかへの女房なるべし文

何某 ●答へあしきゆへに名をからぬなるべし諸

答へられけり ●此答も女をたやすからずおもひまよへる故に數ならぬなどゝいへるなるべし文 ●又一說此答は女にうらむる下心ある樣にたわむれかけたる詞なり句 前說勝れり

堀川内大臣 ●具守公なり 頭書云▲正二位内大臣具守公なり號二岩倉一村上天皇第六皇子具平親王九代之孫内大臣具實公之男堀川相國基具公之息也權大納言基俊卿之兄也系圖前堀川相國之段に詳し

村上天皇（人皇六十二代）─具平親王─師房─顯房─

─雅實──雅定──雅通──通親──通具─┐
─具實──基具──┬具守
　　　　　　　└基俊

やらん　◯何となくとりあへぬ返事なり壽
さだめあはれけり　◯女房達の批判したまへるな
り說

〔第一節〕◯女の物いひかけたると云より定めあは
れけりまでなり此段四節に分ち可ㇾ見文段少し異
なり◯山案此節は上の證空の色なきことをいへる
を承て愛著の念慮ある男は必ず女に物をとわれて
はゆきあたりてよきほどに返事をせぬものなると
云ことを證據を引て書り但末々の段にてきびしく
戒むべきためなりさて此節には一段の大綱を擧て
女に向ての應對の是非の二つを書たり

すべて男をば女にわらはれぬ樣におふしたつべしと
ぞ淨土寺前關白殿はおさなくて安嘉門院のよくをし
へまいらせさせ給ひける故に御詞などのよきぞと人
の仰られけるとかや山階左大臣殿はあやしの下女の
見奉るもいとはづかしく心づかひせらるゝとこそ仰
られけれ女のなき世なりせば衣紋も冠もいかにもあ
れ引つくろふ人も侍らじ

すべて　◯をしなべてといふ意也全 ◯決前生後の
詞なり盤
女にわらはれぬ樣に　◯彼數ならぬ身むづかしと
嘲りあひしより書出たる詞也文 ◯女色にふける心
なくば女にわらひあなづられまじき事也句
おふしたつ　◯そだて立る義也稚長とも生長共か
く句　頭書云▲夕霧にをふじたてけん親もいと口
惜かるべき物にはあらずと書り句 ▲歌に「かゝる
身にをふじ立けんたらちねのおやさへつらき戀も
するかな文
淨土寺前關白　◯九條師敎公　頭書云▲大織冠二
十三代之後胤報恩院關白忠敎公長男九條師敎公也
關白攝政左大臣從一位氏長者左大將牛車兵仗隨身
號二己心院一又淨土寺とも號す元應二年六月七日薨
歲四十四

大織冠──淡海公──房前──眞楯──內麿─
─冬嗣──良房──基經──忠平──師輔─
─兼家──道長──賴通──師實──師通─

忠實──忠通──兼實 従一位太政大臣攝政號ニ月輪──良經 従一位攝──

道家 従一位攝政左大臣後京極──教實 正二位攝政太政大臣光明峯寺──忠家 正二──

忠教 従一位關白左大臣報恩院──師教 攝政右大臣一音院

安嘉門院 ●有子後堀川院女御なり 頭書云▲鎌足十九代之孫淨土寺太政入道公房公之御息女有子後堀川院女御號ニ皇后宮安嘉門院──

師輔──公季──實成──公成──實季──

公實──實行──公敎──實房 師輔までは右に見へたり實房ま──

では前大覺寺殿の段にくわし 公房 従一位太政大臣──女子

御詞 ●女に物を御申ある言葉也句

人 ●誰ともなし盤

山階左大臣 ●洞院實雄公なり前竹林院左大臣殿の段に委

女のなき世なりせば ●是より兼好の評論なり右にしるせる歷々の人達さへかやうに女に恥給へればまして其下つかたの男のたやすからずおもふ事はいふにおよばずとかく女ゆへに萬事のたしなみはありと見えたりと也かくいひて次にいひおとさんとての詞なり是抑揚の文法なるべし文 ○論をたてゝいふ也これをよき人の事とみればたがふ也よき人はなんぞ女のはづかしきを待てゑもんをつくろはんこれはよからぬ人の禮義をもしらぬがむさとあるは女に恥たるゆへに衣紋冠をもつくろふなり盤

いかにもあれ ●何と成共次第にするをいかにもあれといふなり句

引つくろふ人も云々 頭書云▲萬葉の歌に「君なくばなぞ身かざらんくしげなるつげのをぐしもとらんとをもはじ句

〔第一二節〕●すべてをのこをばと云より人も侍らじまで也●第二節は歷々の人々も女をたやすからず思ひ恥らひたまひしことを書つらねたり此次にさやうに恥らふべき物にあらぬ子細をいはんとてまづかやうに書る也文

かく人にはぢらるゝ女いかばかりいみじき物ぞと思ふに女の性は皆ひがめり人我の相ふかく貪欲はなはだしく物の理をしらず只まよひの方に心もはやくう

つりことはもたくみに苦しからぬ事をもとふ時はいはず用意あるかと見れば又あさましき事迄とはず語りにいひ出すふかくたばかりかざれる事は男の智惠にもまさりたるかと思へば其事跡よりあらはるゝをしらずすなほならずして拙きものは女なり其心にしたがひてよく思はれん事は心うかるべし

かく　●是より女の事を貶して畢竟好色の人は心のまよへるといふ事をいへり諺

いかばかり　●いかほど也諺

いみじき物　●一切の人の身だしなみもおほくは女のためかとおもふ女をいみじきものとおもへばこれ〳〵なりといひて色にまよふことをいましめたり増鐵

女の性　●女の氣質也新注

ひがめり　●僻の字也すくならざるを云なり諺

頭書云▲大經曰一切江河必有二廻曲一一切叢林必有二樹木一一切女人必有二諂曲一盤▲法苑珠林三十曰夫在家俗女患毒過多佛說邪諂甚二於男子一參▲列女傳婦人脆二于志一竄二于心一文▲或問男女ともに天地の氣を受て出生したるに女ばかり性ひがめりと書るは如何答曰性理大全に乾道は男となり坤道は女となると侍ればぞ天の陽氣を感じたる者は男子となる陽は淸明なる故に男の性はいさぎよくしてすなをなり陰氣を感じて生れたるは女と成陰は濁暗なるにより其性邪枉也されどこれは常理のさたぞ若變をいふときは女にすなをなるもあり男にひがめるも侍り一槩にはいひがたし新注

人我の相　●人は人我はわれと隔て人をかろくし我をおもくする心を云也此人我の相は誰にもあれど女には一入深きと也文●是より女の性のひがめるすがたをくはしくいひのべたり盤　頭書云▲傳心法要曰與麼時無二人稅等相一▲六祖壇經曰無二人我貢高貪愛執著一名二離欲尊一▲金經剛註曰迷レ人恃レ有二財寶學問族姓一輕二慢一切人一名二我相一雖レ行二仁義禮智信一不レ合レ敬名二人相一參

貪欲　●むさぼりおもふ也文　頭書云▲瑜伽論云於二諸境界一深起二耽著一名レ貪諸煩惱中貪爲二最勝一於二貪中一欲貪爲レ勝生二諸苦一故文▲法界次第曰引取心無二厭足一爲二貪欲一▲王日休淨土文曰勸二婦人一曰更加二疾妬貪欲一業緣轉深參

はなはだし ●甚の字つよき心なり参
物の理をしらず ●三毒のうちの一をいひたりされど人我の相ふかきは恚なり物の理をしらぬは癡なり三つながら有と見るべし盤
只まよひの方 ●まよひ方とは色欲也盤 ●山案此説は此所好色の事をかける段々意にはかなふに似たれども只ひろく見るべしすべて女は屈滞の性なれば何事にても初一念に一度思ひ寄し事にまよひてはやく心をうつすものなり色欲のみにかぎるべからず
ことばもたくみに ●ことばをかざるなり諺 頭書云▲論語學而篇子曰巧レ言令レ色鮮矣仁句 ▲河晏論語集解包曰巧レ言好二其言語一 ▲詩小雅曰哿矣(コイカナ)能レ言巧レ言如レ流参
とふ時はいはず ●心愚にひがめるゆへにかくしていはぬなり諸
用意あるかと云々 ●とふにもいはぬによつて扨は言を愼む用意ありていはざるかとおもへば諺
其心にしたがひて ●かやうにひがみて愚痴なるにしたがひてなり諺 ●山案是決前生後の詞也

〔第三節〕●かく人にと云より心うかるべしまでなり但し文段には節を不レ分 ●山案此節は上の節に女をよき者のやうに思れし人々のことを云るをうけてさには非ず女の性はこれ〳〵あしき者也とかぞへ擧て彼好色にまよふ輩の女のために衣紋をつくろふ意入をおさへて書りさて次の節にてきびしくいましむべきためにこゝに女のあしきことを書り
されば何かは女のはづかしからんもし賢女あらばそれも物うとくすさまじかりなん只まよひをあるじとしてかれにしたがふ時やさしくもおもしろくも覺ゆべき事也
されば ●さうあればなり古 ●上をうけたる詞なり説
何かは女のはづかしからん ●前に女に笑はれぬ樣にとかいひ下女の見るも恥しなどいへる所をおさへていへる詞也文
もし賢女あらば ●女を愛するにたはれたるかたの情にてこそあれ賢人の女房ならばすさまじくて其たのしみあるべからずとなり増鐵 ●賢女は性ひがまぬもの也されど男のやうならんは女のかひある

まじければすさまじかりなんされば賢女もいらぬ物よと也盤　頭書云▲篝木に三史五經の道々しきかたをあきらかにさとりあかさんこそ愛敬なからめといへる心に本づきて書たると見えたり句▲品定に吉祥天女を思ひかけんとすればほうけづきくすしからんこそわびしかるべけれといへる心にて書るにや文▲祇注云是は世の中の女何れも心にかなふやうなければ吉祥天女かぎりなく侍らめと思へば佛法めきてくすみたる方なればそれも人にかなふまじきをいへるなりと云々全

物うとく　◉好色のかたにうとくなり説

やさしく云々事也　◉此まどひを一身の主人公として女にたはれしたがふ時はおもしろくおもふべきなり心ひらけては何のおもしろげもなき事也參

[第四節]◉さればと云より終まで也文段には前の節とつゞけて見たり◉山案此節は上の節をうけてこれ〳〵女は僻める性の者なれば少しもたやすからず恥思ふべきいはれはなきはずなりされど初發念に一度まよひ出し心を不レ去とめおきてそれに何角思ひ添ゆるによつて面白き意も生じ恥かしき氣も出來るぞ此まよひの意さへ除けばをも白きこともなく勿論恥べき意もなきぞされとて其性すなをなる賢女を思ひかけんとすればかへつてすさまじくして面白かるまじければ必竟は好色の道をたつべきことをいへり是兼好の例の徒然をこのめる所なりされば賢女さへとらぬ兼好なれば況や其外の女にをいてをやさて此只まよひをあるじとしてと云より以下の詞通章の肝要にしてしかも上の荒たる宿と書出しより此段までを結て書り前の數段もこゝを書べきためなり

[一段之統論]◉此段は彼證空の女に愛著の念露もなかりし事をうけて好色にまよふ事をいましめたり前にもいひしごとくたとひ色このむとも女にたやすからず思はれんこそあらまほしかるべけれ此段の始にいひしやうに女を恥かしき物として男の女をたやすからず思はんは愚痴なることとしらせたる也文◉戀路は人の情なれば艶にをかしかりし事のすてがたくて上の兩段に書あらはすといへども又過て淫になるべき道なる故に前の段には證空上人此段には堀川内大臣殿皆女性にあひて心なき

物語を書つゞけ末には女のしたはれまじき本性を寫し出し人の教誡にそなふるなり段うつりの下心といひ殊には此段の終に女の性を書るなと模寫奇妙道理分明誠にたぐひなき文章なるべし句●上の段ものいひにつきて書たればこれも物いひにつきて書出し末には好色をいましめたり證空上人はつくろひもなく人の聞しるもしらぬもしらずいはれたるが殊勝なりこれにたくみにかずならぬ身などいふはあしきとの心也僧俗ならべて論じたるなり

盤●山案此段にすみ難き事二つ在或人問夫人として衣紋をつくろひ冠をたゞすは本世間の禮義なるべきに此段に女のなかりせば衣紋冠もなり次第にすべきと書るを見れば禮義は女色のあるゆへにまふけられしやうにきこゆ是一つ又賢女は古今人のたつとみ有難き者とす詩經の關雎も大姒の賢女なる故にきはまりなき樂あることをいへるに此段にかへつてすさまじかりなんといへる是二つ最覺束なし暫く是を辨ぜよ答曰禮義は女ゆくにまふけしやうに書ることも強て是を論ぜは道は夫婦になるともいひ夫婦は人倫の本と往聖も説給へば五倫五常も本夫婦の一つにとゝまるなれば此所に禮は女のあるゆへにまふけしやうに書るもいはれなきには非ずさりながら此所の兼好本意はさには非ず當世愚痴の輩禮式をもわきまへぬながらも衣紋冠を引つくらうは是うはべは禮義を行ふやうなれど内心は女をたやすからず思ひて女に笑はれぬやうにとの用意なるべければ若し女のなき世なりせば加様の族はさぞ不禮のみにして法外なるしかたのみならんとなり是きびしく好色のことをいましむべきために書り是を例せば論語憲問篇に子曰微ニ管仲ニ吾其被レ髮左レ衽矣とあるも是管仲がありしゆへに世間の禮義も立しなりしかるにもし管仲なかりせば禮義も絶はつべきとなり是も世の禮義すたりしことを歎き給ひてしばらく管仲をほめ給へり全く孔子の本意には非ず今此所も能相似たり努々言葉を以て不レ可レ害レ心又賢女のすさまじかりなんといへる義も諸抄に其辨を漏せり但し大全少し論じたり其説曰光明皇后但林皇后中將法尼千代能禪尼紫式部清少納言此外本朝の賢女記に暇あらず皆これらは好色のためには物うとくすさまじきと也

淫欲は愚痴より起るものなればまよひふかく我身をもしらぬ女ならではおもしろからぬと見へたり己が風にあらねば友とするになり難し易文言同聲相應同氣相求ありとかや又妻は天理の常なれば好色の道とはいはぬ也と云々此說も面白けれど必竟此所を世に交る俗人の身の上にあてゝ見るゆへにすさまし難しこゝは一向高上の僉議萬事を放下し生死の相にあづからず待つことなく明し暮す桑門(ヨステビト)の身の上に於ては何んぞや賢女なればとて是を樂みとすへきにあらず

徒然草諸抄大成巻第十

目次

〔百八〕寸陰惜む人なし是よくしれるかをろかなるか

寸陰　●一寸の日の陰也參●一段の大意をいふな
り人のゆだんして佛道のために寸陰おしむ人なく
していたづらに過るを歎息してかくいふ也盤頭書
云▲淮南子云聖人不レ貴二尺之璧一而重二寸之陰一時
難レ得而易レ失也晋陶侃云禹惜二寸陰一人可レ惜二分
陰一壽▲抱朴子行品曰吝二寸陰一以進レ德者益人也參
▲業平の歌に「をしめども春のかぎりの今日の日
の夕あひにさへなりにけるかな古

是よくしれるか　●おしまぬ道理をさとりしりて
かと也諸

をろかなるか　●愚痴にして何ともおもはでうか
うかと過るかとなり諸

〔第一節〕●寸陰といふよりをろかなるかまでなり
此段六節に分ち可レ見文段の說にしたがふ●此節
一寸の光陰過るをも惜むべき事を世に惜む人のな
きは理を知たる故か又愚なるゆへかとなり世の無
益の事をなして懈怠する人に問かけをどろかした
る詞なり文

愚にしてをこたる人の爲にいはゞ一錢輕しといへど
も是をかさぬればまづしき人をとめる人となすされ
ば商人の一錢をおしむは切なり刹那覺えずといへど
もこれをはこびてやまざれば命を終る期忽にいたる
されば道人はとをく日月を惜むべからず只今の一念
空しく過る事をおしむべし

をこたる人の爲に　●理を知ておしまぬ人の爲に
は云事なしとふくめたる也文

いはゞ　●愚人のためにたとへをいはんと也諺

一錢輕し　●寸陰にたとふ諺

とめる人となす　●命の終る期にたとふ諺

一錢を惜む　頭書云▲鶴林玉露卷十曰張乖崖爲二
崇陽令一一吏自二庫中一出視二其鬢傍巾下一有二一錢一
詰レ之乃庫中錢也乖崖命杖レ之吏勃然曰一錢何足レ
道二乃杖レ我耶爾能杖レ我不レ能レ斬レ我也崖採レ筆判
日一日一錢千日千錢兼好か爰の一錢のたとへ思ひ
合されて面白し句

切なり　●深切なり文

刹那　●前に注在

はこびて　●運の字也天運は一息の懈怠なし諺

命を云々いたる　●其命に長短あれとも大限の來

る期はみな同し事也參
道人　●佛道は志ざす人をいふ鐵増　頭書云▲釋氏要覽曰智度論曰得レ道者名爲二道人一餘出家者未レ得レ道者亦名爲二道人一句▲四十二章經曰佛問二一沙門一人命在二幾間一對曰呼吸之間佛言善哉子可レ謂二爲レ道者一矣參
只今の一念云々おしむべし　●一錢つもりてとめる人になり刹那つもりていのちを終るごに至るゆへに遠くはおしまず手もとの近き所をおしむと也盤●商人の一錢をおしむごとくにすこしの間の一念をおこたる事ををしむなり諺
〔第二節〕●愚にしてと云よりおしむべしまでなり●第二節は彼愚痴にて懈怠する人にたとへをいひて寸陰をおしむべきよしを云なり文●此節のたとへは學者の身の上に切なる敎なる事儒佛いづれの道にもよくかなへり是兼好爲人の志尤々あり難し此意つれ〲一部の中あまた所に出たり說
もし人來りて我命明日は必うしなはるべしと告しらせたらんにけふの暮る間何事をか賴み何事をかいとなまんわれらがいけるけふの日なんぞ其時節にことならむ
もし　●是より又たとひをもふけてきびしくおしゆる也說
何事をかいとなまん　●無益の事はなすべからずたゞ來世の覺悟こそすべけれとの心也文●いひ殘したる筆法なり盤
われら云々今日の日　●それを思はゞ油斷なく後世をいとなむべしとふくめたる也文　頭書云▲黃昏無常偈曰此日已過命即衰減如二小水魚一斯有二何樂一即此意也
〔第三節〕●もし人と云よりことならんまで也●第三節は死にちかき事をしりたらば彼をろかにして怠る人のやうに無益のことをなすべからずとの心なり文●只今も知れぬ命なれば告不レ告かはりこそあれ●沙石集に昔し阿育大王と云あり常に佛法を信し僧二萬人を供養し給ふ大王の御弟阿輸伽は育王の三寶信仰をきらひにくみ剰兄大王を調伏して王位を奪とす此事育王しろしめして死罪に定めらる然とも大王は佛法信仰の御心なれば阿輸伽の本望を達しさせんと七日の間は王位を讓て五欲の

樂をあたへて後死罪に行はんと王位の如くあがめ奉りながら旃陁羅に鈴をふらしむ一日既に過ぬ又六日ありて害し奉るべしといふ如レ此七日の間朝夕に鈴をふりて一日一刻に死のちかきことを告しらせければ王位珍寶の望も宮女衣食の樂も絶はてて只死のちかき事のみ御心にやまず偏に寢食をも忘れて一心に道を修し給へば七日とはいへども初果を得給へりさて大王より使者して七日の榮花を尋させ給へば阿輸伽は只旃陁羅が鈴の音を聞のみかなしきとばかり勅答ありければ其罪をゆるし給ふとなり全

一日の内に飲食便利睡眠言語行歩やむ事を得ずしておほくの時をうしなふ其あまりのいとまいくばくならぬうちに無益の事をなし無益の事をいひ無益の事を思惟して時をうつすのみならず日を消し月を亘て一生を送る尤愚なり

飲食　●飲レ湯食レ食也句

便利　●大陽小陽也參

睡眠　頭書云▲說文曰睡坐寢也字彙曰今睡眠通稱句

言語　頭書云▲論語鄉黨篇朱傳曰自言曰レ言答述曰レ語句　▲梵網義疏曰直出爲レ言宣述曰レ語參

止む事を得ずして　●是はことごとく遁るゝ事を不レ得なり諺

思惟して　●おもひおもふ也古

日を消し　●日費す義也古　頭書云▲李涉詩に秋光何處堪レ消レ日句　▲顏氏家訓以レ此銷レ日以レ此終レ年參

一生を送る　●時より日日より月月より一生と次第して云

尤愚なり　●前におろかにしてをこたる人のためにいはゞといへる故に又こゝに尤おろかなりと結したる首尾一雙奇妙の筆にや參

〔第四節〕●一日のうちと云より尤愚也まで也●此節の意はたとひ油斷せぬ人さへかゝるやむことを得ずして一日のうちにする事有て佛道をつとむる其いとまはいくばくもならぬにいはんや懈怠して無益の事をなし身三口四意三の十惡をのみ作て時をうつすのみならず一生涯を空しく暮すは尤愚なることとなりといましめたり說　●無益の事をなすは

身の所作なりいひは口の言語也思惟は心のわざなり身口意の三業につきて罪をつくる事をいへり盤

謝靈運は法華の筆受なりしかどもこゝろ常に風雲の思ひを觀せしかば惠遠白蓮のまじはりをゆるさゞりき

謝靈運　●晉の代の人なり　頭書云▲南史謝靈運幼穎悟文章之美與ニ顏延之一爲ニ江左第一一世稱ニ顏謝一與ニ族弟惠連一爲ニ刎頸交一每對レ之輙得ニ佳語一嘗於ニ永嘉西堂一思レ詩不レ就忽夢ニ惠連一即得下池塘生ニ春草一之句上常云此語有ニ神助一宋元嘉中爲ニ永嘉守一郡有ニ名山水一肆レ意遨遊尋レ山陟レ嶺必造ニ幽峻一登躡常着ニ木屐一上レ山去ニ前齒一下レ山去ニ後齒一與ニ何長瑜等一爲ニ四友一小字客兒襲ニ父爵一封ニ康樂公一世稱ニ謝康樂一野

法華の筆受　●（法華）妙法蓮華經の義なり●（筆受）とは天竺の梵語を唐土にて通事するを翻譯といひそれを唐字にかきうつすを筆受と云正法花添品法花芬陀梨法花妙法花などいひて五度の翻譯あれとも靈運が名はあらず了譽の直牒にも靈運は法花の執筆の者なりといへども了譽は兼好より後の世の人なれば是もおぼつかなし今の世に行るゝ妙法花は晉の羅什の翻譯にて其弟子僧睿が筆受也涅槃經は靈運慧嚴慧觀三人の筆受也野●或書には謝靈運法花の壽量品までして其後弟の謝玄がかくといへり盤●此說たしかならず●此所かやうの覺えちがへは高德の人もある事なり惠心僧都往生要集に天親往生論の文を引て龍樹の說とせられしたぐひなるべし兼好にをひては此事を失とするほどの義にもあらず參●此外異說あり　頭書云▲長水楞嚴疏曰筆授或云ニ筆受一謂以ニ此方文體一筆ニ其所レ授梵本一緝綴潤色令下順ニ物情一不上レ失ニ正理一也▲雲棲樵象記曰譯者最初易レ梵爲レ華也譯語者成ニ其章句一也筆授者潤ニ其辭致一也而證譯者總爲ニ參詳校正一也▲凡そ法華に五譯あり竺法護の譯を正法華と云て十卷あり羅什の譯を妙法蓮華と云て七卷あり是今の世の八卷の經なり後に闍那笈多の翻するをも同じく妙法と名付是添品法華とも云て十卷あり但藥草喩品の後に千餘字を加へたる故にかく云也外はは謝靈運皆羅什の本にかはる事なし加樣にあまたの譯あれども余正法華添品法華などの翻譯の時代

か在世にあらずこの故に評するに及はずひとり今の世に讀誦する羅什の法華を譯する時謝靈運もさかりに詩文のほまれ世に鳴時なり又羅什と惠遠とも文章を通ぜられたる事もあれども羅什の譯經の所へ靈運が來りし事諸典に見あたらずしかれば法華經は羅什の譯にして弟子の僧叡の筆受なりといふ事明白なり又謝靈運か涅槃經を翻せる事も法華文句の一を見れは靈運は補助の譯人とて傍より譯人たすけたるのみなりされども涅槃の哀歎品などをば謝公がくはへたるなりと天台も釋し給ふ也たとひ同經のうちにても異譯の經なれば筆受もかはる事なるを法華涅槃同醍醐味なれば靈運筆受といへる歟などゝいふ説は用ゆへからず參 ▲異説花嚴の朝より涅槃の夕までを五時に分て五味に配當す法花と涅槃とは佛祖統記の三にも法花大王膳涅槃醍醐也と云て二經を同醍醐味に配して同一味の經なりされば靈運は涅槃の筆受なれば法花と同一味の經成故に法花の筆受と云るか法花といへば規模なればなり句 ▲三體詩黄滔遊二東林寺一詩翻譯如二曾見一白蓮開滿レ池註廬山記謝靈運即二東林一翻二涅槃經一云々野

風雲の思ひ　●月花にむかひて詩を賦し四時の景氣に文を作を惣して風雲の思ひといふなり觀ぜしとは眼に見るのみならずねても覺ても心にうつし見るを風雲の思ひを觀せしと云也全 異説有　頭書云▲風雲の思ひを靈運は詩人文人にてある間花鳥風月をもてあそびて詩文の思ひに時をうつすと見る人ありさには侍らず風雲の思ひとは臣下として君を思ふ義なり周易に雲は龍にしたがひ風は虎にしたがふとありて龍虎は君の象風雲は臣の象とするゆゑなり靈運は晉の臣たりしか宋の代になりしを無念に思ひ常に其怨をむくひて二度晉の天下になさんとたくむを風雲の思とは云ぞ新注 ▲野槌にもほどこの心見へたり▲通鑑綱目曰宋元嘉十年謝靈運有レ罪誅靈運好爲二山澤之遊一從者數百人伐レ木開レ徑百姓驚擾或表三其有二異志一靈運詣レ闕自陳上以爲二臨川内史一靈運遊放自若爲二有司一所レ糾遣レ使收レ之靈運執二使者一興レ兵逃逸作レ詩曰韓亡子房奮秦帝魯連耻追討擒レ之上愛二其才一降レ死徙二廣陵一已而棄市▲靈運は晉の謝奕か孫にして文章も妙也然れ

其宋の劉裕か晉の代をうばへるに其まゝ仕へて宦位をうけたり後兵をおこして晉のために仇をむくはん事張良か韓のためにするごとくならんと心にみづから思へどすでに宋につかへたればいかんぞ張良がこゝろざしに同じからんや果して靈運とらへられてころされぬ野

惠遠　●廬山の惠遠法師也　頭書云▲山案佛祖統記卷二十七曰法師慧遠姓賈氏雁門樓煩人幼而好學年十三隨舅令狐氏遊學許洛博綜六經尤善莊老宿儒先進莫不服其深致二十一欲度江從學范甯適石虎暴死南路梗塞有志不遂時沙門釋道安建刹於太行常山一面盡敬以爲眞吾師也初聞安師講般若經豁然開悟歎曰九流異議皆粃糠耳遂與母弟慧持投簪受業精思諷誦以夜續晝因求直道場云々太元六年至潯陽見廬山閑曠可以息心乃立精舍以去水猶遠舉杖扣地曰若此可居當使朽壤抽泉言畢清流涌出云々刺史桓伊大敬慼乃爲建刹名其殿曰神運以在永師舍東故號東林時太元十一年也云々師嘗謂諸教三昧其名甚衆功高易進念佛爲先既而謹律息心之士絕塵淸信之賓不期而至者慧永慧持道生曇順僧叡曇恒道丙曇詵道敬佛馱耶舍佛馱跋陀羅名儒劉程之張野周續之張詮宗炳雷次宗等結社念佛世號十八賢復率衆至百二十三人同修淨土之業造西方三聖像建齋立誓云々今年已八十三始順寂即義熙十二年八月六日也云々師將終耆德請以豉酒治病師曰律無通文請飮米汁師曰日過中矣又請飮蜜和水乃令披律尋文卷未半而終

白蓮　●昔廬山東林寺の惠遠法師同行の友心をひとつにして西方に向て口稱念佛して往生の行業をつむ院内に極樂界會のよそおひをあらはし庭に八功德水の池をうつす其中に白蓮花を植て九品淨土の思ひをなして一向に淨業をつとむる故に其結衆を白蓮の交と云なり今此國にも淨土宗に蓮社號といふ事はこれより始れり仝　●白蓮社とて惠遠が院の號なり文　頭書云▲釋氏要覽曰彼院多植白蓮又彌陀佛國以蓮華分九品次第接人故稱蓮社有云嘉此社人不爲名利淤泥所汚如蓮華故名之有云遠公有弟子名法要刻木爲十二葉蓮華植於水中用機關凡折一枝是一時與

刻滿一無レ差俾ニ亂念一不レ失ニ正時一或因レ之名レ之句

ゆるさゞりき ●謝公が心亂なる故に惠遠の蓮社の友にまじはる事をゆるさゞりしなり參 ●此所異說多し前にしるす 頭書云▲事文類聚前集云謝靈運求レ入ニ淨社一遠師以ニ心雜一止レ之范甯在ニ豫章一遠師請レ入レ社范不レ能レ從野 ▲山案佛祖通載七曰淵明陶潛字元亮爲ニ彭澤令一解レ印去居ニ柴桑一與ニ廬山一相近時訪ニ遠公一遠愛ニ其曠達一招レ之入レ社陶性嗜レ酒謂許レ飮即來遠許レ之陶入レ山久之以無レ酒攢レ眉而去▲又云宋朝明教大師契嵩過ニ遠影堂一列ニ六事一題レ之其辭曰陸脩靜異教學者而送過ニ虎溪一是不ニ以レ人而棄一レ言也陶淵明耽ニ湎于酒一而與レ之交蓋簡ニ小節一而取ニ其達一也跋陀高僧以レ顯レ異被レ擯而延且譽レ之蓋重ニ有識一而矯レ嫉レ賢也謝靈運以ニ心雜一不レ取而果沒ニ于刑一蓋識ニ其器一而愼ニ其終一也廬循欲レ叛而執レ手求レ舊蓋自信レ道也桓玄震レ威而抗對不レ屈蓋有ニ大節一也云々

[第五節] ●謝靈運と云よりゆるさゞりきまで也●第五節は靈運か事を引て少々佛道にたづさはりても外の無益のことを思惟しなどする事をまことの修行にはきらふことをいへり文

しばらくも是なき時は死人に同じ光陰何の爲に惜むとならば內に思慮なく外に世事なくしてやまん人は止修せん人は修せよとなり

しばらくも ●暫時と書時刻をさゝぬ詞也全

是なき時は云々 ●是なきとは上を受たる詞也其所は說々同じからず全 ●先一說しばらくも此覺悟なき時は死人に同じとなり參 ●又說愚ひそかに思ふに此是の字は發端の是よくしれるか乃是の字にて光陰をおしみ執行學問する事をさしていふ也余の說々は義理通しがたし新注 此說能かなふに似たり諸說備ニ冠考一 頭書云▲飮食便利等の無益の事なき時は死人に同しきとなり野 ▲光陰をおしみぬる心なき時は也盤 ▲是とは雜亂放下して本心を執守る工夫をさす禪關策進曰宏智禪師初侍ニ丹霞淳一因與レ僧徵ニ詰公案ニ不レ覺大咲淳責曰汝咲這一聲失ニ了多少好事一不レ見レ道暫時不レ在如ニ同死人一句 ▲此これと云字思惟すべし是かの無益の事をなす世上の人になりて光陰何のためにをしむと問かけたる詞となり文 ▲旨云これとさす所は風雲の思ひをさ

すなり其故は霧運を蓮社に入ざるを道理のなきやうにきこゆれば兼好其仔細を評判したる詞也靈運月を見ても月と思はず花を見ても花と思はざる心になれといふには非ず一向に月花のみに心雜亂ぬれば念佛の機にあらずとて蓮社に入ざると云事なり若し月花を見ても月花と思ふ心しばらくもこれなき時は死人と同しきと云事也又月花もなかめやうによりて念佛の助業となる旣に白蓮をうへたり全

光陰何の爲に惜むとならば　●光陰を何の爲にをしめといふぞなればつとむる事ある人の手前にてをしめといふ心なり全　頭書云▲淨土或問曰抖一擻身心一撥二棄世事一得二一日光景一念二一日佛名一得二一時工夫一修二一時淨業一參

内に　●内とは心也心に世間の事を思慮することなくなり盤

外に　●外とは身也身に世間の無益の事なく諺やまん云々修せよと也　●此二句すみにくき故に說々多し山案するに今しばらく壽抄野槌に止は止觀修は修行也是觀行の二也といへる說にしたがひて是を辨ぜん言意は内に思慮なく外に世事なき樣にしてさて觀念より入度者は止觀の理を工夫して道にいたるべし又修行ていより入度ものは修行の功をつみて菩提に本づくべきとの敎也是兼好のせまらぬ心ざし也諸抄の說は恐くはかなひ難しさりなから參校のため略是を論せん●先句解云止とは無爲寂滅にして一向に諸緣を放下するをいふ修とは其閑成心よりして佛理を觀念するを云止修は即止觀也止は止觀修は修行といへる抄の義は佛書の心にあらず●又參考云内に思慮なくと云に應ぜんとてやまん人は止と云へり世上の事をやめて寂靜無爲にするを止と云是即止觀の止門なり又外に世事なくしてと云に應ぜんとて修せん人は修せよといふなり前のしづかなる止門の觀念をいよ〳〵身に修行せよと也弘法も解は妙覺にひとしけれども行は該兒に下ると釋し諸惡莫作諸善奉行は三歳の孩兒も口にいひ侍れども八十の老翁も行ずることを得ずと古人もいひ台家にも解行目足とて心の領解を目として身の行を足とせよとあればとかく佛道は此修の一字を肝心とする也●此兩說句解は觀

法を第一と心得たる說也參考は修行を重く見たるなりともに一理有といへども皆一人の上にて止修の二をいへり今やまん人はのはの字と修せん人はのはの字とを味ふて見れば一人の上の事とは見難し其辨は右にしるすがごとし㊟扨大全云止む人はやみとは內心に惡念忘想の思慮もなく外になすへき產業の世事もなくしてやまばやめよと也此止むると云事は修行事をやまば止よと云事也心事の工夫或は學問等は大道の顯然したる人の手前にはいらざる事也是發端に寸陰おしむ人なしこれよくしれるかといふよくしれる人なり此故永嘉大師云絕學無爲閑道人不レ除二妄想一不レ求レ眞と云々又修せん人は修せよとは未得道の人は修せよと也種々の行種々の學問をも修せよといふ事也其ために光陰を惜めとすゝめたりおろかにしてをこたる人のためにいはゞと云其結句也然るに諸抄に止は止觀也修は修行也といふ注あり文章のうつりにも此段の義理にもあたらず此二句すみにくき故に如レ此なるべしかへす〲味ふべし㊟此說一理よく云かなへたれども文法におゐてきこえにくき事あり若此說によらば內に思慮なく外に世事なくしてやまん人は止といふまでを一つゞきにして得道の人の身の上へかけて見るさて修せん人は修せよといふ上に未得道にしてと云字を入て見ねばすまぬ也いかが其上得道の人のうへには修行なきといふもいかが也道を得ても又其うへに應じて修行あるべし決して修行はいらぬとはいひかたかるべし

〔第六節〕㊟しばらくもと云より終りまでなり㊟第六節は寸陰を惜てなすべき第一のことをいひて決したり偖發端に寸陰をしむ人なしこれ能しれるか愚なるかといひ出たる所を結べりよくしれる人は無益のわざなく後世に入し人なれば其人に光陰をしめと云事はいらず愚にしておこたる人のためにいふとは此故ぞとの心なり此文意の首尾よく〲心をとゞめて工夫すべし文

〔一段之統論〕㊟此段は命終の期いたる事すみやかなれば世上の無益の事をやめて偏に佛道修行すべししばらくも懈怠することなかれとの敎なり此心をかけゝ事是まで五六段にや兼好の爲人の心ざしこゝにある成べし文㊟上の段に色欲の事を云るに

うけて又此段には色欲のみならず風景雲氣に心をやり或は世間一切の雜事に付てむなしく光陰を送り一大事をわするゝ事をいましむ是皆只今の一念懈怠するより起りて時をうつし日を消し月をわたり一生を過す物毎やすく思へばあやまちする道理成事を又次の段へ相うけて書たり句

〔百九〕高名の木のぼりといひし男人をおきてゝたかき木にのぼせて梢をきらせしにいとあやうく見えしほどはいふこともなくおるゝ時に軒だけばかりになりてあやまちすな心しておりよと言葉をかけ侍りしをかはかりになりては飛おるゝ共おりなんいかにかくいふぞと申侍りしかば其事に候めくるめき枝あやうき程はをのれがおそれ侍れば申さずあやまちはやすき所になりて必仕る事に候といふあやしき下臈なれども聖人のいましめにかなへり鞠もかたき所を蹴出して後やすく思へばかならず落ると侍るやらん

高名の木のぼり　●よく木にのほる名をとりたる者也諸

頭書云▲都盧の身輕くして高木にのぼる事西京賦に見へたり又上竿奴と云は高き竹木のうへにのほる者なり日本にてのくもまひの類也野▲

枕草紙に高名のえぬたきなどあり世繼物語にもをほし文

人を　●木のほりの弟子也盤

おきてゝ　●掟の字也法度を敎るを云野　●他の者に云付て木をきらせしと也文

あやまち云々侍りしを　●あやまちといふよりは高名か木へのほりたる人にいひかけたる詞也盤

かばかり　●かばかりとはこれはかりになりてはと也余　●高名か詞をそばの人不審して云やうかほどになりてはとなり參　●又說是兼好の高名に問し詞なるべし文

其事に候　●是高名が答也文

めくるめき　●眩の字也句　●又矐の字諺

あやしき　●賤也諺　●兼好高名か詞を評論する也文

聖人のいましめ　頭書云▲易繫辭曰君子安而不レ忘レ危存而不レ忘レ亡治而不レ忘レ亂是以身安而國家可レ保也諺▲古文大寶箴云事起二乎所一レ忽禍生二無妄一▲說苑曰官怠二於宦成一病加二於少愈一禍生二於懈惰一說

鞠　頭書云▲韻會鞠居六切說文蹋鞠也徐按蹋鞠以㆑革爲㆓圓囊㆒實以㆓毛髮㆒蹴蹋爲㆑戲亦云㆓蹋鞠㆒古今注黃帝習兵之勢劉向別錄蹴鞠黃帝造以練㆓武士㆒或云起㆓戰國㆒漢霍去病傳穿域蹋鞠註服虔云穿㆑地作㆓鞠室㆒也野 ▲貞德の連珠曰日本の鞠のはじめは用明天皇の御時大唐よりわたれりと或譜に見へたり拾遺納言の譜には用明天皇の御宇に太子の御徒然をなぐさめんとて月卿雲客の造れりと有▲季云古今著聞云蹴鞠之遊興者前庭之壯觀也文武天皇大寶九年に此興始りけるとかや文 ▲まりは中天竺に留支長者酒に醉て廣野に出て鞠をけはじめたりと譜にあり盤

かたき所 ●けにくき所なり

後やすく思へば ●かたき所にても油斷なければおとさず易き所にてもやすく思ひて油斷すればおつる事木のひきし所にて懈怠の心あればあやまちすると同じことはりにて萬事皆其道理なる事のたとへにいふなり文

落と侍るやらん ●如㆑此蹴鞠家にいひ傳へ侍ると也やらんとは謙退してたしかにいはざる詞也句

【一段之統論】●此段前段をうけて安き所とても心に油斷することなかれとの戒なり諺 ●此段易の繫辭の文を以て書たるなり壽 ●そのかみ越前國に朝倉の金吾とて分別者の名をとりたる侍ありしに一ッ橋を馬に乘て渡すやうやあると人の尋しかばそれこそやすき事なれおしへむとて馬に打乘出て橋のきはにてひらりと馬よりをりて是が一つ橋の馬の乘様なりとおしへられしとなん又嶮岨なる山のそばづたひにては馬も用心すればけがはまれなるものなりたゞ落馬は平地に乘時あるものなりと申されしと云々貞 ●山案此段兼好の我のなき所しられたりかく賤しき下﨟の詞にても道にかなひしことはすてずして書載給へり孔子も人を以て言をすつべからずと宣ふ又虞舜は好で邇言を察し給へりとなん是皆爲人のこゝろざしにて我をわすれたるなり

【百十】雙六の上手といひし人に其てだてを問侍りしかばかたんとうつべからず負じとうつべきなりいづれの手かとくまけぬへきと案じて其手をつかはずして一めなりとも遲くまくべき手につくべしといふ道

をしれる教身をおさめ國をたもたん道もまたしかなり

雙六　●雙陸とも書く俗に博陸とよむ也諺　頭書云▲山案和名抄云雙六子一名六采今按簙奕是也簙俗云須久呂久▲說文曰博局戲六箸ニ十二棊ニ古者烏曹作ㇾ博尹文子曰博蒱ニ闘塞之宜ニ得ニ周通之路ニ聲譜云博陸采名也陳思王製ニ雙陸局ニ置ニ骰子ニ二至ニ唐末ニ有ニ乘子戯ニ未ㇾ知ニ誰置ニ遂加ニ骰子ニ至ㇾ六骰令ㇾ作ㇾ投投擲之義今作ㇾ骰非▲頌賞全篇に中華に四夷の雙陸を載たり其中に日本國の雙六をもあげて圖をしるせり野▲天慶年中に日本にわたせり萬葉の歌に「一二の目のみにもあらず五六三四さへありけり雙六のさい貞▲海篇犀焒曰雙陸出ニ天竺國ニ波羅塞戯其流入ニ於中國ニ也自ニ曹植ニ始參

てだて　●方便と書てだてとよむ佛書より出たり參●行の字道の字などを書句

かたんと云々うつべきなり　●かたんとおもふは我をたのみて敵をあなどるなり敵をあなどれば自然と油斷あるべし負じとおもへば敵をおそれて油斷せず我手前をつゝしむ理あり文　●是似たる事なれども手前をわするゝ失をいましめたり參

又　●又とは聖人の教にかなへりと有前段にかゝる詞也

しかなり　●しかなりとは如ㇾ此と云義なり是みな我手前を大事にかける事を要とするなれば孟子の天下の本は國に有國の本は家にあり家の本は身にあるといはれ大學の身非治て家齊家齊て后國治るとある理同じき也諸

[一段の統論]●此段前段の餘義なり壽●此段も油斷をいましめたり文●此段は雙六の勝負をいふといへども善惡一切の道理は一なる事をしらせたり全●本々の上手の醫者たちの療治のてだてを語られしに久病老病などをはなをさんとすべからすただ死ぬやうにとのみするがよきなりといへり又古き武士の若き子を奉公に出されしに主君の氣に入んとすべからずたゞ氣にちがはぬやうにせよとおしへられし萬の道同前たるべし貞●此段は太公が兵法にかつ事なけれども又まくる事なしと云を武王に語り孟子か人にかたんとすると人を恐るゝ事なきとを以て北宮黝孟施舍が勇をたとふるに合せ

て見ば淺きよりふかきにいたるべきなり羊をかふを見て身を治る事をしり釣をたるゝを聞て國家を治る事をしり木をうゆる道を聞て民を治るてだてをさとる雙六の道にても又さもあるべし野

〔百十一〕圍碁雙六好てあかし暮す人は四重五逆にもまされる惡事とぞおもふと或聖の申し事耳にとゞまりていみじく覺え侍る

圍碁　頭書云▲博物志堯造ニ圍碁一以敎ニ子丹朱一或云舜以ニ子商均愚一故作ニ圍碁一以敎レ之其法非レ智不レ能也野 ▲海篇犀炤曰圍碁局方而靜子員而動象ニ天地一子分ニ黑白一陰陽文也縱橫各一十九路蓋天數終ニ于九一地數終ニ于十一十九者天地二終之數也三百六十一着象ニ周天之數一三百六十配ニ三百六十一一其一則五度四分度之一也參 ▲歌に一白浪のうつや返すもまつほどに濱の眞砂のかずぞつもれる一渡してしもろこし船の波の音にまた打返すはまのいさごは古

雙六　●前にくはし

あかし暮す　●此道におぼれたる也參

四重　●四重とは五戒の內飯酒を除きて殺生偸盜邪婬妄語を四重禁戒といふなり律に波羅夷罪といふ唐には斷頭罪といふ也人の首をきればふたゝひ生ぜざるがごとく此重き罪を犯せば懺悔しても滅せざるなり壽

五逆　●五逆罪は殺レ父殺レ母殺ニ阿羅漢一破ニ和合僧一出ニ佛身血一是重き罪也壽

まされる惡事　頭書云▲論語陽貨篇云飽食終日無レ所レ用レ心難矣不レ有ニ博奕者一乎爲レ之猶賢ニ乎已一是終日いたつらに有んよりは博奕也ともせよと云るやうなれどさには非す聖人博奕を人にせよと敎に非すとりわき心を用る事なき者の非をあかさんとてかく云るうちにおのづから博奕を甚にくみきらふ心ある也又孟子博奕好ニ飯酒ニ不レ顧ニ父母之養一二不孝也とあり野 ▲林和靖が世間事皆能レ之唯不レ能ニ擔レ糞與レ着レ棊爾といひたる言葉の末々など追思合せ見るべし句 ▲雜寶藏經卷六說ニ七事非法一其第三曰食ニ着碁博一不レ修ニ禮敬一 ▲沙彌律儀要略曰碁局樗蒲博塞等事皆亂ニ道心一增ニ長過惡一噫可レ不レ戒歟參

とゞまりて　●兼好の甘心して耳に止りしと也說

〔一段之統論〕●此段は前段にまけじと打べしといふにつけて身を治め國を保ん道も亦しかなりといへば雙六をほむるに似たりもしこれを好む人のおもひあやまるついへあるべきかとの用捨にてかけるにや文●此段の聖たれともしらず又圍碁双六の四重五逆にまさると云諺文なきことなり兼好の耳にとゝまるといはれしはその心あり四重五逆は大罪と誰もしり犯す人も萬人に一人なり圍碁雙六は罪とも何思はずして一切の用事をかく剃佛事勤をも懈怠すること時々晝夜多し此方より見れば四重五逆にもまさる所あるなり一時のけだい一生のけだいとなるといはれし兼好なれば耳にとゞまるべし全

〔百十二〕明日は遠國へをもむくべしときかん人に心閑になすべからんわざをば人いひかけてんや俄の大事をもいとなみ切になげく事もある人は他の事聞入ず人の愁喜をもとはずとはずとてなどやと恨む人もなしされぱとしもやう〳〵たけ病にもまつはれいはんや世をものかれたらん人又是に同じかるべし

・いひかけてんや　●いひかけてんやとうたかひていひかけはせじとの心なり諸

俄の大事をも云々　●是より又たとへなり何にても一大事をつとむる時也諺

切に云々ある人は　●深切に愁涙にしづむ時なり諺

人の　●他人の也諺

うらむる人もなし　●などかこれを問きたらぬぞとうらむる人もなしと也其身に大事愁等あるゆへに人もゆるすとなり文

されば　●さればとは上をうけたる詞也盤●年もたけ病にもまつはれ況や世ものがれたらん人は又此大事をかゝへたる人に同じければ萬事をすてゝ菩提の道に入よと也増鐵

いはんや　●況の字今いふ所の物と前の事とを相比する詞也説

世をのがれたらん　●此一句をかくべき爲に前に種々たとへを擧たり説

〔第一節〕●明日はと云より同じかるべしまでなり此段三節に分つ文段同し●此第一節は彼老人病者遁世者などは後世のいとなみにのみかゝづらひて

人間の義式を捨てかまはずとてもとがめうらむる人もあらじ猶心よはく世事にかゝはる事なかれといはんとて先たとへを書出たり文 ●此所發端よりいひかけてんやと云までは遁世發心のまことある者は親子兄弟にても又はしたしき朋友の間にてもえとゝむまじきたとへなり又假の大事と云よりこゝまでは遁世發心のまことある者は世間一切の雜事を一向に放下すべきたとへなり句 ●是菩提にをもむく人そうはならぬなどゝいひしをいかにも捨さへすれば人もゆるす仔細をのべたり全

人間の儀式いづれの事か去がたからぬ世俗のもだしがたきに隨ひて是を必とせばねがひもおほく身もくるしく心のいとまもなく一生は雜事の小節にさへられて空しく暮なん

去がたからぬ ●人間の世事を心にかけは一つとしてさりつべき事なしと也諺

もだしがたき ●難二默止一とはつねにはものいひあひしらはでゐがたき心なりこゝにてはかまはずゐがたき心なるべし此中に言語の事もこめて見るべきなり増鐵

必とせば ●去かたきとてそれを必しとげんとせばとの心なり文

心のいとまもなく ●萬端にはせて心いそがはしきなり參

雜事 ●とりまじへたることまじ〳〵したるわざ也増鐵

小節 ●すこしき節儀なり一大事にたくらふれば小なり參

さへられて ●碍の字なりさまたげられての心なり文

暮なん ●老死のせめよする事なり參

[第二節] ●人間の儀式と云より暮なんまで也●此第二節は世の儀式の捨さりがたしとて心よはくかかづらはゞ菩提におもむくいとまなくて也一生むなしく暮べき心をいへり文

日暮途遠し吾生既に蹉跎たり諸緣を放下すべき時なり信をもまもらし禮儀をも思はし此心を持ざらん人は物くるひ共いへうつゝなしなさけなしともおもへそしるともくるしまじ譽とも聞いれじ

日暮途遠し ●空しく暮なんといふよりうけて此古語を書出たる筆勢殊勝にや文 ●これ本白樂天が

七十一にしていひしてとはなり故に居易も我年の老たるにたとふ参●日のくるゝは老たるにたとへ道とをきを修行のいたらぬにたとへたりいそがねばならぬと云心なり盤　頭書云▲諸上善人詠白居易傳に日暮而途遠吾生既蹉跎句　▲史記伍子胥掘ニ楚平王墓ヲ出ニ其尸ヲ鞭レ之三百曰吾日暮途遠吾故倒行而逆施之▲又史記主父偃曰吾日暮途遠故倒行暴施之野

蹉跎　●蹉跎は文選にはふしまろぶとよめり或はあしずりともよむ一生の年月を暮年にせめよせければ旅の道にて日暮に足をふみまどひしごとくとなり参●又蹉跎は韵會に時を失ふ也とあり彼老病の人の死のちかき身としていまだ菩提の道に至らざるは其時をうしなへる物なれば萬事を捨て一大事をつとむべき時節そとの心也文　頭書云▲韓文烏乎吾意其蹉跎ニ詿言不レ遂ニ其意ヲ韵會曰蹉跎失レ時也野　▲李善文選註曰廣雅曰蹉跎失レ足也参

放下　●前にあり

放下すべき時　●老人遁世者などは身をかへり見て萬事をすつべき時となり参

信をもまもらじ　●道を修せん人はたとひ人と此約束ありとてそれをも守らずとなり諺　頭書云▲莊子盜跖篇比干割レ心子胥抉レ眼忠之禍也直躬證レ父尾生溺死信之患也鮑子立乾勝子不ニ自理ヲ廉之害也孔子不レ見レ母匡子不レ見レ父義之失也此上世之所レ傳下世之所レ語以レ爲士者正ニ其言ヲ必ニ其行ヲ故服ニ其殃ヲ離ニ其患ヲ也野

禮儀をも思はじ云々　●今此道を修すれば此へ無禮也彼に不義也とて其をもおもはずとなり諺●此二句上の一生は雑事の小節にさへられてむなしく暮なんといふ處へ應映して見るべし句　頭書云▲五灯會元二曰牛頭山智巖禪師隋大業中爲ニ郎將ト年四十遂乞出家有ニ昔同從レ軍者二人ノ聞ニ師隱遁ヲ乃共入レ山尋レ之既見因謂レ師曰郎將狂耶何爲レ住レ此答曰我狂欲レ醒君狂正發　夫嗜色淫聲貪榮冐寵流轉生死何由自出二人感悟歎息而去句

そしるともくるしまじ　●毀譽に心をうばゝるゝ事には非すと也参　頭書云▲莊子逍遙遊擧レ世而譽レ之而不レ加レ勸擧レ世而非レ之而不レ加レ沮定ニ乎内外之分ヲ辨ニ乎榮辱之境ヲ斯已矣野　▲文中子曰我未

レ見見レ謗而喜聞レ譽而懼者又曰聞レ謗而怒者讒之囮也見レ譽而喜者佞之媒也 ▲明心寶鑑曰 康節邵先生曰聞ニ人之謗一未ニ嘗怒一聞ニ人之譽一未ニ嘗喜一 ▲歌に「世の中の人にはくずの松原とよばるゝ名こそうれしかりけれとよめる心なり参

〔第三節〕●日暮途遠しと云より終りまでなり●第三節は彼老人病者のたくひは萬事を放下して偏に後世をいとなむべしとの心をいひて一段を決したりさて彼老人病者遁世の人の一大事をつとめて人間の義式を捨去は遠國へゆく人俄の大事をいとなむ人切に愁ある人などの人の愁喜をもとはぬがごとくなれば其心を得たる人は現なし情なしとも思ふべからねどもし其心を得さらんは狂人とも何ともいへくるしむべからすとの心なり文

〔一段之統論〕●此段は上段に佛道の修行するともなく碁双六などにていたづらに朝夕くらす者は四重五逆罪にもまさりたりといへる聖の名言をのせたるにうけて佛道に心ざしある者などの暮やすき光陰の内に世をのどかに思ひてくらすは僻事なり只頭然をはらふごとく塵縁を少しも心にかけずはやく遁世發心せよと云心を書あらはしたる也句●此章の大意は前に大事を思ひたゝん人はさりかたき心にかゝらん事の本意をばとげすしてさなからすつべきなりといへる心なり遠國へをもむく人をたとへたる事は老病のせまりもよほす人或は菩提心もおこる人は未來生のとをき道へをもむく用意肝要なるべし其身になりなは世上のつとめ事をば人もゆるすへき道理なりと也参

〔百十三〕四十にもあまりぬる人の色めきたるかたをのづから忍びてあらんはいかゞはせんことにうち出て男女の事人のうへをもいひたはるゝこそにけなく見ぐるしけれ

四十　●老のはじめなり　頭書云▲四十賀と云て是より老のはじめなり▲素問云年四十而陰氣自半也起居衰矣▲事文類聚四十六曰韓愈曰余生四十有八年髮之短者日益レ白齒之搖者日益レ脫云々参

色めきたる　●好色の心也　頭書云▲東屋に有りかたき物は人の心にもある哉らうたけにをほとか也とは見へながら色めきたるかたそひたる人ぞかしとあり句

忍びて　●堪忍也尤色欲の念は發り易きをたへ忍んでなり諺

いかゞはせん　●よき事にてはなけれども是非にをよはすと也鐵増 ●人情なればいかゝはせんとしはらくゆるしたるなり句 ●一説いかゞあらんよからんと也諺 ●忍びてあらんはさもなくてはかなはずとなりしのびてといふに心をつくべし盤

ことにうち出て　●言葉にいひあらはしたはるゝをいふはつる心たき體なり句　頭書云▲六帖の五に人丸の歌に「ことに出ていはゞやさしみ山川の瀧津こゝろをせきつかねつる句 ▲古今に「ことに出ていはぬはかりぞみなせ川したに通ひてこひしきものを文

男女の事　●色欲を指參　頭書云▲中將姫の當麻閑居の詠に男女の境界にあらざれば愛欲の思もなしとあり參▲一説に男女の事とは若道女道と云也さもあるべし盤

人のうへ　●色道の事に付たる人のうへ也句 ●人のうへをも我好色の事をも云を含たり文 ●山案をものもの字を味ふべし人のうへさへあしき事なれば我身の上の事は勿論なり

にげなく　●似合ざる義也句

〔第一節〕●四十と云より見ぐるしけれまで也此段二節に分つ文段これにひとし●此節は見ぐるしく似合ざる事を書るうちに老人の色めきたる體たらくはいよ〳〵あしき意を述たり文

大かた聞にくゝ見ぐるしき事老人の若き人にまじはりて興あらむと物いひたる數ならぬ身にて世の覺えある人をへだてなきさまにいひたる貧しき所に酒宴このみ客人に饗應せんときらめきたる

大かた聞にくゝ　●是より聞にくゝ見ぐるしき事を一々擧るなり諺

世の覺えある人　●高位高貴の人をも身の分限をかへり見ずして心やすきさまにいふ事なり諺

饗應せんと　●あるじすとよめり今いふ振舞の事前に記

〔第二節〕●おほかたと云より終までなり●此節は枕草子の文法にて聞にくゝ見ぐるしき事どもを書つらねたり文 ●此節は上の節の結句をうけて好色の事にかぎらず其外の事にも見苦しき事あるを云說

〔一段之統論〕◎此段は似合ず見ぐるしき事をあらはせりとりわき老人のうへをいふ事重し文◎上の段に人は遁世發心すべき道理を云たるにうけて又此段にもわかきにもよらざる世の無常を觀せず老人などの後世の事をばなをざりにし色道にたつさはる者のうけられぬ事を第一にいましめ其次手に若き人にまじはり數ならず身まづしき所など書そへたり句

〔百十四〕今出川のおほい殿嵯峨へおはしけるにありす川のわたりに水のながれたる所にてさい王丸御牛を追たりければあがきの水前板迄さゝとかゝりけるを爲則御車のしりに候けるか希有の童哉かゝる所にて御牛をばおほ物かといひたりければおほいどの御氣色あしく成てをのれくるまやらん事さい王丸にまさりてえしらじ希有の男なりとて御車にかしらを打あてられにけり御高名のさい王丸は太秦(ウヅマサ)殿の男料の御牛飼ぞかし此太秦殿に侍りける女房の名共一人はひざゝち一人はことづち一人ははうはら一人はおとうしと付られけり

今出川のおほい殿　◎菊亭兼季公也前七十段目にくはし

ありす川　頭書云▲歌枕云有巣川本院の邊「千早振いつきの宮のありす川松とともにぞかげはすむべき右は京極前太政大臣二條大皇大后宮賀茂のいつきと申ける時本院にて松枝映水と云心をよみ玉へるとなん又いはく「君まさすみぞちはあれて有りす川いむすがたをもうつしつるかな西行法師古齋院をりさせ給て本院の前を過けるにおりてをはしましける所へ女房に申し遣はしけるとなん野▲一葉抄に伊勢の齋宮の野宮は嵯峨のありす川にあり賀茂の齋院の野宮は紫野にあり私に云今嵯峨にて野宮の舊跡は天龍寺より二尊院へ行道にあり其邊に川なしありす川と云ならはしたるは下嵯峨の川ばたと云在所を東へゆく道に小川あり是を云傳たり諺▲袖中抄に云顯昭ありす川は齋院のをはします本院のかたはらに侍る小川なり又或人曰太秦(ウヅマサ)より法輪へまいる道にある小川なり此草紙に嵯峨へをはしけるにとあれば後の說こゝには叶べきにや文

さい王丸　◎牛飼なり八瀬小原の者は牛をよくあつかふゆへに牛飼をつとむる也年よる迄丸額にて

髮をながくして童子のごとくに結ふなり其故に牛
童といふ也さて名には丸の字をつく也説
あがきの水　足がきの中略也牛の足にて水を前へ
かく也或●踠の字を書　頭書云▲足がきの水也野
▲歌に「鵜坂川渡る瀨をほみあが駒のあかきの水
にきぬ濕ぬめり文▲古歌に「あをとせずゆかん駒
もかなかつしかのまゝのつぎ橋やすく通はんこれ
も足音なりあかきもあしかきなり盤▲文選東都賦
に馬踠「餘足」と有て踠の字をあがくとよませたり
注曰踠屈也又字彙に馬足跌也などゝも見へたり句
前板　●車の前板也軾の事也參
爲則　●傳不知なり諸
しりに候けるが　●車のあとにのるなり諸
希有　●前に注す
希有の童哉　●爲則が西王丸をしかる詞なり諸
希有の男なり　●爲則がさい王丸を希有の童とい
ふ言葉を又其まゝ返して仰らるゝ也句
かしら　●爲則がかしら也句
打あてられにけり　●爲則同車にありければ車に
頭をつきあてたもふとなり全●其道に達者なる人
をわけしらぬものゝもとくを折攊せる事神妙也兼
好の感心こゝにある歟參　●一說あり　頭書云▲
問云水中にて車の牛を追べき故實ありや但しをほ
い殿其故はしろしめさねども齋王丸は其職の道々
なればしるらんとばかりをぼしめすか然は君子に
あらず此事此段の正意と見へたるに諸抄にもしる
さず侍りき水中にて牛を追べき故いかん答曰水中
にて牛を追ならひあれはこそ爲則もあやまりとな
り齋王丸も高名の齋王とよばれ今出河殿も牛を追
故實までをしろしめしたる所を兼好感じて此草紙
に書のせられたり偖其故は水中にて車の牛を追も
のなり追はざれば輪立沙に入て車水にしづむもの
なり又追時は車水に乘うかみて廻りやすく牛もを
よく心もちして大かたの高水にもそのゆへなくと
をるもの也車の轄に潛ほどの水まではをふものと
ぞ禮記にも五御とて五つの品あり鳴和鸞逐水曲過
軍表舞交衢逐禽左是也此中の逐水曲にてあるなり
然とも日本のならひはかわりたるなり全
此高名のさい王丸は　●是より兼好詞也おほい殿
に褒美せられたる故にかくいふにや全●此高名の

一字勢意つよし參

太秦殿　●坊門内大臣信清公なり　頭書云▲大織冠十八代之孫七條修理大夫贈左大臣信隆公之二男正二位内大臣信清公也建保三年二月十八日出家同四年三月十四日薨五十八歳

●鎌足――不比等――房前――眞楯――内麿――冬嗣――良房――基經――忠平――師輔――兼家――道隆（從一位攝政關白内大臣　左大將氏長者號二中關白一）――隆家（正二位中納言）――經輔（正二位權大納言）――師信（正四位下内藏頭）――經忠（正三位中納言）――信輔（正四位下左京大夫）――信隆（正三位修理大夫）――信清（正二位内大臣帶劍）

太秦殿の男　●此さい王丸は太秦殿に召仕はるゝ男にてすなはち信清公の召料の牛飼ぞと也されは牛の事はよくしるべきを爲則が怒りしはひが事といはんため也文

此太秦殿に侍りける　●太秦殿の事出たるによりめずらしき名を好み給ふといふ事を書つらねたり參

一人はひざゝち一人はことづちひとりははうはら

一人はおとうしと　●壽抄幷に野槌には其名義未レ詳よしをいへり　踏雪抄に貞德説とて膝幸（ヒザサチ）特槌（コトツチ）胞腹（ハウハラ）乙牛（ヲトウシ）などの義を付たり鑿穿の義なれはさして師説共信用しがたし文　●齋王丸が牛車の事をよくしりたる故をいはんために太秦殿の牛をすき給ふ事をいひそれに付て女中の名迄牛にことよせて付給ふよしをいへり全　頭書云▲膝幸とは[illegible]はひざのつよきがよきなればひざさちと云也さちは幸なりよきこゝろ也特槌（コトツチ）はこつてい也男牛也つちはふとく丸くして槌のやうなるがよき心也盤　●ことつちは蹄をほさにしてたつしやなる牛を云説　●胞腹とは牛は腹の大きなるがよければ大きなる腹と云心也をと牛は乙牛也盤　●牛は始めに生るゝより後に出生するを用いるなり説　●今武士の名馬の奔走あるがごとくいにしへの公家衆にはよき牛を御秘藏ありしと見へたり太秦殿は殊に淺からす牛をもてあそび給ふ故にやめしつかはるゝ女房の名まで牛になぞらへて付玉ふ成へし貞

〔一段之統論〕●此段は上の段に己か分限に似合ぬ事このむは道理にもたがふと云心を書たるにうけ

て又爲則が己が道にもあらぬ事にさし出て却而主君の氣にもちがひたる事をしるし何の道にてもあれ道しりたる者のなす事を其道しらぬ者のもどくはあさましく惡きものなりと人々に心得させん爲の敎戒なるべし倩さい王丸が事より太秦殿の名をいひ出其次手にうづまさ殿にめしつかはれし女房の名の異様なりしを書つらね次の段にいろをし梵字漢字などの異名異行の者をしるさん爲の張本とし又其次の段にいたりて萬事に付異名をこのむはよからぬ事なりとはじめて吐露せるなり段のうつりの下心かくのごとし眼を着て見るべき事なりとぞ句

〔百十五〕宿河原といふ所にてぼろ〳〵おほく聚て九品の念佛を申けるに外より入くるぼろ〳〵のもし此中にいろおし坊と申ぼろやをはしますとたづねければ其中よりいろおしこゝに候かくの給ふはたそとこたふればしら梵字と申すものなりをのれが師何がしと申し人東國にていろをしと申すぼろにころされけりとうけたまはりしかば其人にあひ奉りてうらみ申さばやと思ひてたづね申すなりといふいろをしゆゝしくもたづねおはしたりさる事侍りきこゝにて對面し奉らば道場をけがし侍るべし前の川原へ參りあはんあなかしこわきざしたちいづかたをも見つぎ給なあまたのわづらひならば佛事のさまたげに侍るべしといひ定て二人河原へ出あひて心ゆくばかりにつらぬきあひてともに死にけりぼろ〳〵といふもの昔はなかりけるにや近世に梵論字梵字漢字などいひける者其はじめなりけるとかや世をすてたるに似て我執ふかく佛道をねがふに似て鬪諍を事とす放逸無慚の有さまなれども死をかろくしてすこしもなづまざるかたのいさぎよく覺えて人のかたりしまゝに書付はんべるなり

宿河原　㊟攝津の國にあり壽

ぼろ〳〵　㊟暮露と書といへども梵論と書べきなり梵字漢字などいふ名もあればなり野㊟關東邊には薦僧と云ものをいふとなり壽　頭書云▲暮露一名をむまひじりともいへり職人盡歌合云四十六番左暮露月の歌「法の月ひろくすまして武藏野にをさゐる暮露い草の庵かな判云暮露と心月いかはかりの法のひかりをかひろめ侍るべき信仰もなく覺

ゆ同右戀の歌「いとふなよかよふ心のむまひじり人のきくべきあの音もなし判云右の馬ひじりはあの音せすゆかん駒もがなといへる萬葉の古風もよりきたりて神妙に侍り尤可レ爲レ勝云々文▲ほろ〳〵の草紙と云一巻あり虚空房と云もの身のたけ七尺八寸かつよし繒かき紙衣に一尺八寸の太刀をはきひるまきの八角棒をよこたへ一尺五寸の高足駄をはき髪ながく色くろくしてほろと云ものにあり一人の美女を妻とし同行三十人諸國をありくと云り其後に薦僧と云者僧とも見へず俗とも見へず山伏とも見へず刀をさし尺八をふき背に莚を負ひ道路をありき人の門戸に立て物を乞もらうこれぼろぼろの流なりと云ひつたへたり野●ぼろ〳〵の草紙と云こと諸抄に引ところ相違歟此草子の大略は一人の女性油を賣て業とすみめあしくして暮方はかりに見へければ世に暮とぞ云ける此女ある時蓮華を懐中すと夢見て一子を生り又或時虚空をのむと見て次男を得たり此母死去す後彼兄弟出家す兄を蓮華房弟を虚空房とぞいふ蓮華房は念佛脩行に諸國をめぐる虚空房は活僧の風を學ひて頭髪を半にきりてゑかきたる紙きぬきて八尺の桁の木の棒をつき簀を負で諸國を行めぐる其宗とする所は本分の意を示す是明恵上人の御作にて彼蓮華虚空の問答を演ためのの故に設て書たまへる作ものかたりなり彼虚空房が頭髪を中半にきりてほろ〳〵にしてと草子の文にあれはほろ〳〵の草紙とも油賣の草子とも云なり然るに兼好時代に此草子流布して異形の僧あればぼろ〳〵といひしなるべし又此つれづれのぼろ〳〵は例せば近比寛永年中に鐵心空道と云二人の悪僧衣のしたに大脇指を帶し諸國の人民をなやましける事あり此たぐひなるべし全▲暮露と云は彼女くれごとにのみ出ければ暮に露るると云こゝろにて暮露と云ぞ其暮露が子どもたるによりてかく名付しぞされどこゝにいへるは其流にてはなく今云虚無僧のことなり越後駿河攝津國に薦僧多し其流義に少しづゝの違あり一夏九旬の中は大寺あつまりて禪話をぬけることあり京都大佛の南にある妙安寺は虚無僧の本寺にて關西三十三箇國薦僧の支配をするなり達磨と普化和尚とを祖師としてこれをうやまふなり説

九品の念佛　●舊抄句解の説には九品の淨土に生れん爲の念佛成べしといへども予が按ずるには只念佛といはで九品の念佛といへる事はいかさま仔細あるべし法照禪師の五會の念佛といふも五會法事讃を見侍れば平上去入をわかちて五度調子をかへて稱名する事也今の世の淨土宗の念佛に緩急のほかせを申も其なかれとかやされば此九品念佛も彼暮露の宗門にて九品往生の階級にかたどりて九度調子をちがへて念佛する事にては有まじくや一抄に諸抄の意　釋迦にも藥師にも念佛あれば彌陀をしらせんために九品念佛と云り九品とは西方彌陀の淨土の名なればなりといふ説もあれど元亨釋書にも此方の念佛は彌陀にかぎるといはれしごとくなれは念佛とさへいへばたとひ少々餘佛の念佛ありとも彌陀念佛計はかく用がましく九品とはいふましき事なりとぞおほえ侍るなり參

道場　●いづくをも佛事を修する所を云　頭書云▲名義云道場者肇師曰修道之場也煬帝勅ニ天下ニ寺院皆名ニ道場一▲止觀曰道場淸淨境治ニ五住糠一顯ニ實相米一盤

あなかしこ　●穴賢と書あなかまへて也古　●惹虫の故事前の中陰の段にくはし●恐れがましといふ詞也諸

わきざしたち　●わきにゐらるゝ奉輩達といふ事也古　●諸講と書てわきざしとよめり弟子の義なりわきざし達といへる心なるを脇指太刀など書る本有大なる誤なり句　▲又一説にわきさしたちはわき座達なりといへり全

心ゆくばかり　●心よけなりとゝこほり思ひしてとの散じゆく計と也盤　●思ひのまゝなること也文

其はしめ也けるとかや　●ぼろ〳〵といふ者より以下は兼好の評論の詞也盤●兼好は此三人を暮露のはじめなりけるとかやいへり又明惠上人の褒藏に有しとてぼろ〳〵の草紙といふ物あり暮ごとに油賣ありきて暮といひける女の子ども虚空坊阿彌陀坊などいひしもの暮露のはじめと見えたり兩説なるべし文

我執　●我執は我相執着なり師の敵をわすれず終に其怨をとげて果したる所を云也しかれども梵網經の心なればたとひ親の敵師の敵にても佛弟子た

る者は是をせむべきにあらぬ事なれば兼好も是好しく思はぬ故に上に世をすてたるに似てといへり参

鬪諍　前五十段目にくはし

放逸無慚　二字ともにほしいまゝとよむ無慚とは悪を作りてもはちぬ事也諸　頭書云㊀（放逸）正法念處經云愚痴樂ニ放逸一常受ニ諸苦惱一文㊀（無慚）愴一阿含經云佛告ニ諸比丘一世有ニ二法一擁ニ護世間一所謂有慙有愧也諸比丘若無ニ此二法世間一則不レ別ニ父母兄弟女智職尊長大小一則與ニ畜類一同等也是故比丘當レ習ニ有慙有愧一也文㊀妙色王因縁經曰新婆娑論曰作レ惡不ニ自顧一是無慙作レ惡不レ顧レ他是無愧㊀三教指歸生死海賦曰遊蕩放逸無慚無愧参

〔一段之統論〕㊀此段は上の女房の名の不審なるに依て又梵論字梵字などを類して記す亦は暮露の行跡尤も放逸無慚なれ共師の敵を不レ忘して尋來るを又我と名乘出て互に義を重じ命を輕くせし事の事レ君致レ身或共不レ戴レ天と云ふ理に近ければ並て記レ之諺㊀此段は聖德太子の明眼論に我入滅の後七百餘歲の時に當りて異形裸形之僧尼有て神社佛事をけがさんとあるを舜統院破邪顯正記には暮露暮露などの事なるべしといへり此暮露の行跡放逸無慚なれば褒美するにたらぬ事なり師の敵を忘して尋來るも忠孝の心に似たれどもかたきをとること梵網の制戒なる故是も僧尼の身にはしかるべからず聖德太子すでに君王の敵をうち給はぬ事は過去の因果歴然をかへりみ給ふが故也今は只死をかろくして心のなづまぬ事兼好遯世によくかなひける故に書しるせるなるべし参

〔百十六〕寺院の號さらぬ萬の物にも名を付る事昔の人は少しももとめず只ありのまゝにやすくつけゝるなり此比はふかく案じ才覺をあらはさんとしたるやうに聞ゆるいとむつかし人の名もめなれぬ文字をつかんとする益なき事なり何事も珍しき事をもとめ異説をこのむは淺才の人のかならず有事なりとぞ

さらぬ　㊀さうあらぬ也寺院の號ならね共といふ義也句

もとめず　㊀理窟を求えぬ也参

〔一段之統論〕㊀此段尤可ニ甘心一上の二段に名のきこえぬ事をいひて借名を付るにありのまゝにやす

らかなるをつくべしと云心なり壽 ●この一段の心は終りの詞にて意得ぬべし何事もめづらしき事をもとめといふより評論していへり盤 ●此段は張子厚の書室の雙牖に銘じて左を砭愚といひ右を訂頑といひしを程伊川の是爭の端をひらくなり東西の銘といはんにはしかじとのたまひたる事など引合せ思ふべし句 ●相國寺の仁如和尚の御門弟に俗男の儒學を心ざし詩作を自慢せし者あり入道して道號を和尚に申ければ彼か心中をしろしめしたりけんたゞ其方の思ふやうにつかれよとの給ひしに東坡山谷が片字をとりて坡谷菴とつきけり人々きたなき菴號かなと笑ふよしを聞て菴の字をのけて齋の字につきかへたれどいよ〳〵惡しくなりて人にわらはれしとなり貞

〔百十七〕友とするにわろきもの七ッあり一ッには高くやん事なき人二にはわかき人三には病なく身つよき人四には酒を好む人五にはたけく勇る兵六には虚言する人七には欲ふかき人よき友三ッあり一には物くるゝ友二にはくすし三には智惠ある友

友とするにわろきもの七ッ有　●論語の益者三友損者三友とある心にもとづけり諸　頭書云▲論語季氏篇孔子曰益者三友損者三友友レ直友レ諒友二多聞一益矣友二便辟一友二善柔一友二便佞一損矣壽 ▲公羊傳に同レ門曰レ朋同レ志曰レ友と侍りて朋はうとし友はしたしき心の友なり新注

高くやん事なき人　●位の高きを云句 ●德の高き也參 前說よし ●上交すれはかならす諂ふ事あるゆへなり野　頭書云▲孟子云萬章問曰敢問レ友孟子曰不レ挾レ長不レ挾レ貴不レ挾二兄弟一而友友者友二其德一也不レ可二以有一レ挾也注挾者兼有而恃レ之稱說 ▲法華の安樂行品にも王子大臣官長に親近すべからずとありとかや貴人の命は背かれぬ事のみなれば道の障となるすでに兼好も師直に友なひし故艶書のことあり思ひ合すべし全

わかき人　●若き人は血氣さかんなる故に陸放翁が少年豪英の交は同參の夜雨にしかずといへる心有べし野 又老人の若輩にまじはるは見ぐるしき心ありと也參

病なく身つよき人　●病なく身つよき人は寒暑飲食行跡にをゐてつゝしみ恐るゝ心なくて人のいた

はりをしらず放逸なる者也参

酒を好む人　◎酒を好む人はわが飲のみならず人にもしゐのませての其酒狂友にかゝる事多し具覺坊か類有全　頭書云▲飲といはて好むと云少し心あるべきにや飲は養生のためにすこしなど飲こともあり好むとは長飲などして暇を費すのみならず身心をみだすなるべし盤

勇る兵　◎武く勇る兵は一朝の怒に身を忘れて父母の憂を殘し暴虎馮河の悔もあるべし野　◎異本に兵を人にかきかへたり誤也

虚言（ソラゴト）する人　◎虚言する人は萬事たつべからず朋友信あるは五倫のつねなり野

欲ふかき人　◎欲ふかきのふかきといふ字肝要なるべし少欲知足は佛もほめたまふ事なり参　頭書云▲欲ふかき人は久しくむつびがたし勢利の交は君子の惡む所なれば古人これを醴のごとしと云論語にも放ニ於利一而行多レ怨といへり是皆友とするにあしきものなり野

物くるゝ友　◎此所すみかたし異說あり　先一說◎車馬衣輕裘ともにやぶるともうらみなからんといふは子路かねかひにあらずや野　◎よき友の第一に物くるゝ友と書るは世間利心の上より云にあらず朋友の贈は車馬のおもき物に至るも拜せざるは古の禮也是朋友は本より財を通ずる道理なればなりされと心友ならすば共にやふるの恨あるべきことなる故に物くるゝ友の第一といへる事げにもとそおぼゆる句　頭書云▲兼好いやしき事を書る樣にいへ共四分律に親友意者要下具ニ七法一方成中親友上一難レ作能作二難レ與能與三難レ忍能忍四密事相告五互相覆藏六遭レ苦不レ捨七貧賤不レ輕如レ是七法人能行者是親善友應レ親ニ附之一とあり中の難レ與能與と云ふにかなへり私に書たるにあらず盤　▲問欲ふかき人をあしき友とせは物くるゝ友をこのむはをのれも欲深き者にあらすや如何答曰欲ふかきとは私欲の甚しきを云ぞ欲とは情の過たるものなりそれは惡人にてなれ近付は我も覺へず惡にうつるなり又友にたかひの助となる困窮したる時は合力をし益となるとそ其義をしらず物くれぬは交て何の甲斐かあらんすべて人にやると人よりとるとは義次第なりとるへき義なれば舜は堯の天下を得給ふ

受まじければ伯夷は周の粟をはまず首陽山に餓死せり君子は可もなく不可もなく義にしたがふのみなり欲ふかに物を望むにあらず新注▲一説ものくるる友と云こともらひ物の事にあらず眞實の友にて我を助くるを云ふたとへば俗に五器の中くひよふ友と云ふ類なり是食をくひやうをよきといふにはあらねども眞實ならねばさやうにはせぬ也萬葉に「思ふとは汁かけ飯をくひさしてをりはしそへてくるゝをぞいふ説

智恵ある友　●智恵ある友は童蒙のもとめに應し又たがひに講磨灉沽のたすけ有べし野　頭書云▲觀像經云賢友者萬福之基也現世免二王者之牢獄一死則杜二三途之門戸一升天得道皆賢友之助矣▲論語の三友にも友二多聞一益矣といふを終りに侍る此段まことに其體を庶幾せしに似たり文

〔一段之統論〕●此段は上の段に益なき事を求めこのむ人をいましむるにうけて又此段にも友に善惡ありて惡友を友なふは損あり善友を友なふは益あるべき道理をいへり旬●此段の友の善惡を論ずるも本隱逸者の身の上にかけて云に似たれ共萬民の上にわたるべき事なり增鈔●山案此段能々心を著て味ふべし夫朋友の交は五倫の其一にしてなき事不レ能ことなりしかも善惡を擇ふべき義也されは世間によき者はすくなく惡しき友は多し十分にして七分はあしゝ三分はよし人は善惡の友によるといへり友の字はたすくるとよめり互に諫をいひ議論評判して惡をさり善にうつりたすけとなるものとぞ●論語孔子曰君子以レ文會レ友以レ友輔レ仁●又曰責レ善朋友之道也●家語云與二好人一同行如二霧露中行一雖レ不レ濕衣時々滋潤與二無識一同行如二廁中居一雖レ不レ汚衣時々聞レ臭與二惡人一同行如二刀劍中行一雖レ不レ傷人時々驚恐●明心寶鑑云與二好人一交者如二蘭蕙之香一一家種レ之兩家皆香與二惡人一交者如二抱レ子上一レ墻一人失レ脚兩人遭レ殃如レ此友擇ふべき古語擧てかぞへがたしさて此段惡友七つ書たる先最初の高くやんことなき人とは高位高官にて時の威勢ある人は大凡皆過侈にして人を見下す者なり此人を友とすれば媚諂ねば伴なひかたしさて媚へつらへば露たがはざらんと向ひ居たるは獨ある心地して兼好の好まざる所也若し爭ひ惡みていさゝかも

違ふ所もあれば必疏らるゝ也第二の若き人は論語に子曰君子有三戒一少之時血氣未レ定戒レ之在レ色云々とあれば心ならす淫聲美色の方人となることあり其上老人の形をはつる心もなく人に出交らんとするは見苦しく似合ぬものなり第三の病なく身つよき人は是も同しく孔子語に及二其壯一也血氣方剛戒レ之在レ鬪云々とありはからずして災難をうくることとあり第四の酒を好む人の惡しきことは云ふに不レ及酒は百藥の長とはいへどたちまちに狂人となり息災なる人も目の前に大事の病者となりてと此末の段にもいへり又前の具覺坊が物語など思ひ合すべし第五のたけく勇める兵とは前に法師は兵の道をたてゑびすは弓引すべしらずなどゝいへる所と同じ意にて世捨人にはよくかなひし書やう今人のいましむることなりされば人を百靈の長とするも信の德をそなへしゆへなり人として信なくんば禮樂を如何とあ。此前にも實々しくうちをほめきよくしらぬ由して去なからつま／＼合て語る虛言はをそろしき事なりと書り第七の欲ふかき人とは人として離れ難きは私欲なり殊に年寄たる人の欲ふかき者に交れは彼か惡心を見習て我心にも貪る事出來るものそ是も又孔子の言に及二其老一也血氣既衰戒レ之在レ得との給へりこの前にひたすら世を貪る心のみふかく物のあはれもしらずなりゆきなん淺間しきとありさてよき友三つの第一にものくるゝ友を擧たりしにつきて種々論あれども此三友の中に肝要と心をとゞむべき友は智惠ある友にきはまりたり前二つは此賢友を云ふべき爲に對して書り是枕草子の文法なり此ものくるゝ友を中にて勝れたる故に治めに書しと見るによつてすまぬそ前の惡友七つも第一と眼を付べきは終りの二友をば嚴しくいとひ去べし前五つは少し輕きに似て是も愼むべき友の変也この段早卒に見るべからず●此段たけくいさめる人といはずして兵といひ物くるゝ人智惠ある人といはずして皆友といひくすしには人とも友とも上の例にしたがはざる如レ此かゝでかなはざる文法なり心をつくべし句、

〔百十八〕鯉のあつもの食たる日は鬢そゝけずとなん膠にもつくるものなればねばりたる物にこそ

あつもの●順和名にあつものは羹と有汁の事也壽
羹そへけず●醫書をもおほくかんがふれ共此事見えず其時節の俗語ならん參
膠に●魚を膠にねるをば鰾といふ瑣碎錄に鯉魚膠を黑にすりて身にさせば青黑にして愛すべしとあり野
ねばりたる●ねばりたるといふ以下は兼好の了見なり盤

〔第一節〕●鯉のあつものと云より物にこそと云まで也此段三節に分つ文段同じ●此節はまづ鯉の功能を云ふなり文

鯉ばかりこそ御前にてもきらるゝ物なればやんごとなき魚なり鳥には雉さうなき物也雉松茸なんどは御湯殿の上にかゝりたるもくるしからず其外は心うき事也

御前にても云々　頭書云▲貞德云玄旨法印鯉の庖丁し給ふとて此しわざこと〳〵しきやうなれど天子の御前にて鯉をきる時は音樂にあはする物なるゆへに加樣にて習ひ傳ふる事也と宣りとかや文
やんごとなき魚也●鯉魚は魚の王なれば漢土にもことに此魚を佳魚として食することと詩經大全などにくはし參　頭書云▲爾雅云神農書曰鯉最爲ニ魚之主ニ▲顔會鯉良以切音李魚有ニ神能飛魚之貴者脊中鱗一道數至レ尾無ニ小大ー皆三十六鱗有ニ赤白黃三種ー說▲周詩にも魚レ食ニ鱠ー鯉といひ豈其食レ魚必河之鯉といふ魯の君より孔子へ鯉魚を贈こともあり鯉魚をやんごとなき物といへる誠に佳魚也野
鳥には雉さうなき物也●雉の事をいへる次に上つ方に用らるゝ肴の事をいへり雙なきはならびなき義なり交野の雉子一入賞翫のよし也文
松茸●本草綱目には松蕈と書文　頭書云▲本草綱目に菌蕈の類をほし香蕈とあるは松茸の類なるべしたけくさびらを耳と云日本に茸の字を書は耳の字のあやまれるなるべし貞和集に有ニ松茸頌茸ニの字を書たり鹿茸の茸の字義を以て見れば松茸とも可レ書歟野▲本草綱目の本經には出す香蕈の注に李時珍が說に陳仁玉か菌譜を引て松蕈は松の陰に生すといへり鐵增
御湯殿の上に●上とはほとりの心なり御湯殿は内々のかたにあるべし雉松茸むかしより賞翫の物

なればさやうのところまで入たつも苦しからす文
●御湯殿は浴室の事をいふにあらず料理の間にて
湯にて物をゆで或はゆぶきなどするによりて名付
る歟未知古●今時の様に心得ぬれば不審あり昔は
御湯殿のひろくてやすませ給ふ所にて御料理など
ありとある人いはれき盤
［第二節］●鯉ばかりと云よりくるしからずまで也
●此節は上の節をうけて鯉魚のやんごとなきこと
を云ひ其次てに雉や松茸をも上つ方には取分て賞
翫し給ふことをいへり諺
中宮の御方の御湯殿の上のくろみ棚に鴈の見えつる
を北山入道殿御覽じて歸らせ給ひてやがて御文にて
かやうの物さながら其姿にて御棚にゐて候ひし事見
ならはずさま惡敷事なりはか〳〵しき人のさふらは
ぬゆへにこそなど申されたりけり
中宮　●後深草院の中宮也壽●東二條院と申これ
也常盤井相國實氏公の御むすめ也中宮とは天子の
嫡妻也文　頭書云▲紫宸殿清涼殿の間に常寧殿と
云ありそれに御座あるを中宮と云たり古
くろみ棚に　●黒く色つきたる棚なるべし又貴人
の御座には御厨子あり其次の間に黒棚といふ物有
なりそれは鴈などをくへき所にはあらす文　頭書
云▲一說にくろみ棚は膳棚なり色を付る故にかく
いふなり又或抄には火を燒烟にすゝけたるを云か
但し始よりくろく塗たる故の名かと兩義にうたが
へり句
北山入道殿　●西園寺定氏公なり常盤井相國と號
す中宮の父也壽 系圖九十四段に在
やがて　●其常座にのたまはざる事上﨟のさまな
り前に勅書を持て下馬したる北面をも其まゝはと
がめ給はざりし此相國の御本性推はかるべし文
さながら其姿にて　●料理のためとも見えぬ物の
只引ちらして有をいふ句●有ならはぬ物の其物と
見えて有事さまあしき也文
はか〳〵しき人の　●御近習の女官に有識の人な
きゆへなりとなり諺
［第三節］●中宮と云より終までなり●此節は雉松
茸等の外は貴人の御目ちかき所には心うき事なり
と云證據に實氏公の御詞をしるせり文
［一段之統意］●此段魚鳥菌蕈の品々を評論せり加

樣の類人のもてなす事和漢同じきありかはれるあり人の尊卑によりて用るあり用ひさるあり故に今爰にならへあけて朝廷に用捨ある日本の故實を人にしらしめ末にははか〳〵しき人のさふらはぬ故にと北山入道殿のいへるを上の段に人は惡友をすて善友に近べしと思へる義を書たるに相うけたる兼好の下心思ひやるべし句●此段に雉をば用ひ雁を用ひる事をばきらふ是日本の故實なるべしされば雉と雁とは堯舜三代の時より相見の禮に用る物なり雁は雉よりまされる故に大夫は雁をとりて君に見へ士は雉をとりて禮をなすなり是本朝とは異なり野●口傳云雉を用て雁を用ひさる故實はいかなる故ぞや答曰雁は秋來て春かへる鳥なりしかれば四時不レ全此故に雉を用ひならひたる日本の風俗にてあるなり全●此御湯殿に雁かゝりしを今の世の人の目には見とかむる事あらし上代の人のこゝろざし言葉にはいはれず及び難き風俗也正徹の歌に「あはれともしる人さへやまれならんくだりゆく世の秋の夕暮貞

〔百十九〕鎌倉の海にかつをと云魚は彼境にはさうなき物にて此比もてなすものなりそれもかまくらの年よりの申侍しは此魚をのれらわかゝりし世まではははかばかしき人の前へ出る事侍らざりき頭は下部もくはず切てすて侍りしもの也と申きか樣の物も世の末になれば上ざままでも入たつわざにこそ侍れ

鎌倉　●相模の國也　頭書云▲さがみの國なり大織冠の鎌を埋めたるによりて鎌倉山と云なり世に入鹿を藤の下にてころし給ふ鎌と云僻事なり日本紀を見れば大織冠の謀をばし給ふ餘人にころさせ給ふなり鎌にてもころさぬなり或說に大織冠の生れ給ふ時狐か枕上にもて來る鎌といへり盤

かつを　●鰹の字を書なり　頭書云▲鰹と云字本草綱目韻書等に分明ならず海編心鏡に鰹音堅大鯛也と有萬葉集の第九水江浦島兒之堅魚釣鯛釣矜及七日といへり又式部大輔石上堅魚朝臣といへる人の歌も同第八にのれり倭名集にも鰹加豆乎とある時は鰹とも堅魚とも書なり然れば昔より其名かくれなき魚なり又此魚をほしかためて調味の料とする事も久しき事なるべし兼好が時代に貴人などの生にて食ふことをあやしみけるにや野

彼境 ●鎌倉の境地なり文
さうなき ●無雙と書ならびなき物と賞翫す
かやうの物も ●是より兼好評論なり此結句鑑のみにかきらず説
〔一段之統論〕●此段は前段に鰹雉松茸ならでは鴈をさへ上つかたには見習はずさまあしきと侍るに此比は其外の物をも用る事を書て上代の風今の世は衰へたる事をいへるなり文 ●此段は末世の道なきを悲みいきどをりてかける成べしさて結句の加樣の物ものもの字に深き心ありかつほのやうなるいやしき魚さへ世の末になれば上ざまゝて入たついはんや人も今時はよき聖賢はすてられ愚不肖は用ひらるゝぞとの意なり新注

〔百二十〕●唐の物は藥の外はなくとも事かくまじ書ともは此國におほくひろまりぬればかきもうつしてんもろこし船のたやすからぬ道に無用のものどものみとりつみて所せくわたしもてくるいとおろかなり遠き物をたからとせずとも又得がたき寳をたふとまずとも文にも侍るとかや
唐 頭書云▲唐の字をからとももろこしとも和訓するなりからとは本幹の字なり幹の字は元と云意なり何事も日本よりは中華をもとゝしてするといふこゝろなり今幹の訓をかりて唐の字によませたる也又もろこしとはもろ／＼のもの來しと云義なり唐の代にはかぎらぬなりされども唐の代は別して日本と通路ありける故に唐の字をとりわけてよむなりさて和漢人の通路しけることは委細に善隣國寳記にあり日本十一代の帝王垂仁の朝八十八年に始而和漢の通路ありしと也説
藥 ●藥は人民の疾病をすくふ珍寳にして日本になき物共中華におほければもろこし舟のたやすからぬ道とは思ひながらなくてかなはぬ事なればいかゞはせん其外の物は皆なく共事かくまじとなり句
かきもうつし ●儒書をいはゞ四書六經佛書は釋迦一代の說經皆此國にひろまりたり其外は多くは皆多岐のまどひのたねなるべければ心法の爲には肝要の書計書うつしても事たるべし傳敎大師叡原敏行世尊寺の伊行など一切經をさへ書うつしたるためしなきにあらず句 頭書云▲書物はたとひも

ろこしよりわたらずともうつしてももたるゝもの也むかしより日本へわたりし本どもの彼國にはたへうせて又日本より彼地へわたしたる書どもをほし宋史などに其事あり此國にをほく書のひろまれる證也參 ▲鶴林玉露卷一曰唐張參爲國子司業手寫九經毎言讀書不如寫書高宗以萬乘之尊萬機之繁乃亦親洒宸翰遍寫九經嘗曰朕思讀十遍不如寫一遍句

所せく ●所せばくなり所狹と書前にくはし

遠きもの云々　頭書云▲尙書旅獒篇曰不寶遠物則遠人格壽

得かたき寶　頭書云●老子經云不貴難得之貨使民不爲盜壽

〔一段之統論〕●此段は遠き物得かたき寶をたふとむべからずとの心なり前の段に末の世は上つかたに用らるゝ物をほくなる事をいへるをうけて唐物も無用の物をほく用ひん事はおろかなるよしを書るにや文●此段は奢をおさへ日本の衰微せん事を鑑てかけると見ゆ綾錦をねがはずば萬民おのづから豐饒なるべしありがたき敎にて侍る貞

徒然草諸抄大成卷第十一

目　次

〔百二十一〕やしなひかふものには馬牛つなぎくるしむることそいたましけれどなくてかなはぬものなればいかゞはせん犬は守りふせくつとめ人にもまさりたれば必あるべしされど家毎に有物なればことさらに求めかはずともありなん

やしなひかふもの ●家にやしなひかふなり鳥獸の事なり諺　頭書云△周禮六畜註獸可ㇾ畜者六獸牛馬羊犬豕雞野 △事林廣記曰牛資ㇾ之以耕馬資ㇾ之以戰尤有ㇾ國有ㇾ家者之所ㇾ不ㇾ可ㇾ緩也

いたましけれど ●孟子のいへる惻隱の心也參 ●心をつくべき詞也文

なくてかなはぬ ●いたましとはいへど要用を達するにはなくて不叶也諺

いかゞはせん ●是非なく養おくと也諺

犬は守りふせぐ ●其つなぎかふものゝ中にわきて犬は夜を守り盜を防ぐ也參　頭書云△論語古註曰犬以二守禦一馬以ㇾ代ㇾ勞養ㇾ人也△風俗通曰俗說狗別二賓主一善守禦故著二四門一以辟二盜賊一也△續高僧傳二十二曰犬爲二防畜一△楞嚴釋要鈔曰犬能守禦因ㇾ是名ㇾ狗爲二守狗一參△本草綱目云狗類甚多其用有ㇾ三田犬長喙善獵吠犬短喙善守食犬體肥供ㇾ饌文 △東坡云養ㇾ猫以捕ㇾ鼠不ㇾ可三以ㇾ無ㇾ鼠而養二不ㇾ捕之猫一畜ㇾ犬以防ㇾ姦不ㇾ可三以ㇾ無ㇾ姦而畜二不ㇾ吠之犬一 △金樓子陶犬無二守夜之警一瓦雞無二司晨之益一野

家毎に有物なれば ●鄰の犬をもちて我家の守りともなる也諺　頭書云△孟子鷄鳴狗吠相聞而達二四境一△老子曰鄰國相望鷄犬之音相聞野

〔第一節〕●やしなひかふと云よりありなんまでなり此段三節に分つ文段是に同じ　山案此節は上の段に唐物も藥の外の無用なる物を求るは愚なると云しをうけて又家にやしなひかふ物も馬牛の外は入ざることとなり犬などは盜賊を守禦て益あるものなれどもそれさへ强て求め養べからずとなりまして無用なるものはと云のこして次の節に云んためなり

其外の鳥獸すべて用なきものなり走る獸は檻にこめくさりをさゝれ飛鳥は翅をきり籠に入られて雲をこひ野山をおもふ愁やむ時なし其おもひ我身にあたりて忍びがたくは心あらん人是をたのしまんや生を苦しめて目をよろこばしむるは桀紂が心なり

をり ●をりは獸を入る所也壽　頭書云▲圈の字檻の字押の字ともにをりとよむ諸 ▲字彙曰圈養レ畜之閑也句 ▲論語虎兕出二於押一註 押檻也貯二虎兕一之器也壽 ▲司馬遷報二任少卿一書云猛虎在二深山一百獸震恐及三其在二檻穽之中一搖レ尾而求レ食野

籠に入られ　頭書云▲鶴林玉露一曰拘束以度二日月一若三鳥在二籠中一 ▲白知錄曰籠二繫禽畜一一日爲二一過一杜詩曰日月籠中鳥參

雲をこひ　頭書云▲文選潘岳秋興賦譬猶下池魚籠鳥而有中江湖山藪之思上句 ▲東坡詩曰鳥因不レ忘レ飛馬繫常念レ馳野 ▲雲をこひは鳥の上を云野山を思ふは獸の上へかゝるべし▲元隣按ずるに古語に籠中翦羽仰看二百鳥之翔一側畔沈舟塵閲二千帆之過一かくうらやみ見る思ひ人と鳥とにこそかはり侍れ其心いかてかはり侍らん鐵增

其おもひ ●草木のきばむを見てもいたましき心を生じ雲霧のくらむ時にさえあはれげなる心はおのづからをこりて たのしみをうしなふは仁人のつね也ましていけるものゝ籠檻にとぢられたるを見て忍ひがたき心などかをこらざらん參　頭書云▲居家必用云籠鳥繫獸爲二其勢狀一悅二吾耳目一爲二我翫樂一令レ被二憂愁一又何不仁放二之山林一便得二自在一何異レ脫レ囚一身自戒一家不レ殺一家不レ殺一郡效レ之壽 ▲秋來見レ月多二歸思一自起開レ籠放二白鷴一と作れる雍陶が詩思合べし句 ▲慈鎮の歌に「たれも皆我身をつみて思ふべし命はをしきものとしらずや籠の鳥を見てよみ給へり盤

是をたのしまんや ●此くさりをさゝれ羽をきらるゝを我に引あてゝもし籠中に入手かせをいれられたらん時のくるしみを思ひくらべば鳥獸を苦しめてたのしむべき道は努々なき事也鐵增

生を苦しめて ●生あるものをくるしめてとの心也文

桀紂 ●夏桀王殷紂王なり●籠鳥繫獸のうれへを少も思ひやりなく目をよろこはしむる事は至愚の夏桀殷紂とおなじ心そとなり文　頭書云▲夏の桀が無道にして百姓をやぶり妹喜を愛して瑤臺をつくり牛飲するを見てよろこひ關龍逢を殺す又殷の紂が妲己を寵して婦人のいふことにしたがひ鹿臺鉅橋を作りて天下の財をあつめ狗馬奇物を宮室に

みちをき酒池肉林をついやして長夜の飲をなし慰斗炮烙の刑を行ひて人民をやき殺し朝に渉るの脛をきり賢人の心をさきはらめる女をさいて其胎内を見る是皆生をくるしめて日をよろこばしむるなり果して桀紂身亡びて國家をうしなふ野

〔第二節〕●其外と云より桀紂が心なりまで也●此節は馬牛の外に無用の鳥獸をつなぎくるしめ見ものなどに飼ふことをいましむるなり文

王子猷が鳥を愛せし林にたのしふを見て逍遙の友としきとらへくるしめたるにあらず凡めづらしき禽あやしき獸國に育すとこそ文にも侍るなれ

王子猷　●晉の王徽之なり　頭書云▲排韻云王徽之字子猷風流爲㆓一時冠㆒性愛㆑竹仕㆑晉爲㆓黄門侍郎㆒壽●子猷は王羲之が子にして風流の人なり

林にたのしふを　●子猷常に竹を愛してうへて名付て此君と云其竹の間の烟に鳥のをのづから遊棲するを見て愛する義也野　頭書云▲朗詠の章孝標か詩に阮籍嘯場人歩㆑月子猷看處鳥棲㆑烟とあり野

逍遙　●あそびたのしふ心也參　頭書云▲莊子逍遙遊の註優遊自在貝云々文▲詩小雅白駒篇朱傳曰逍遙遊息也句

めつらしき禽　●古語を引て一段を結ふ　頭書云▲尙書旅獒篇珍禽奇獸不㆑育㆓于國㆒野▲白樂天曰由來尤物不㆑在㆑能蕩㆓君心㆒則爲㆑害文帝却㆑之不㆑肯㆑乘千里馬去漢道興穆王得㆑之不㆑爲㆑戒八駿駒來周室壞至㆑今此物世稱㆑珍不㆑知房星之精下爲㆑怪八駿圖莫㆑愛盤

〔第三節〕●王子猷と云より終までなり●此節は賢人などの鳥を愛するはとらへくるしむるにはあらずすべてめづらしき鳥獸とてもかふべきことにあらぬことをいひて一段を決せり文

〔一段之統論〕●此段は前段に唐船の無用の物つみわたす事のをろかなることをいひし次手にやしなひかふものにも用なき鳥獸を籠にいれ檻にこめてたのしむことをいましめたる也文●上の段に人君は遠物をたからとすまじき道理を書の旅獒篇の心にていへるをうけて又此段にも同書同篇の珍禽奇獸不㆑育㆓于國㆒といへる文を引て上たる人をいましめ又一切の人の心得にもいへる成べし句●此段恕の道をいへり恕といふは我よしと思ふ事は人もさ

あらんとほどこし悪き事をば人もいやにあらんと思ひて與へぬを云とぞ恕をよく行へはやがて仁にいたるとぞ新注 ●人間と畜類と我と人と皆各々のものと思ふ故に此罪業をつくるもの也行基菩薩一山鳥のほろ／＼となく聲きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ是古六道衆生皆是我父母といふ經文にてよめり六道をめぐる衆生親となり子となるごとくいく千萬度といふ事かぎりなしさるによりて佛は十戒のはじめに殺生戒を出し給ふこれ肝要の事なれば一切の僧は旦那にむかひまつ人畜のへたてなく因果の道理はある事としめさるべきものなり貞●元賢勸ニ放生一曰雖レ曰ニ最小之施一實爲ニ莫大之德一矣即母レ論下其或爲ニ未來諸佛一或是多生父母上但一知覺是同理必難レ忍參

〔百二十二〕人の才能は文あきらかにして聖の教をしれるを第一とす次には手かく事むねとする事はなくとも是を習ふべし學問にたよりあらんためなり次に醫術を習ふべし身を養ひ人をたすけ忠孝のつとめも醫にあらずは有べからず次に弓射馬に乘ことと六藝に出せり必是をうかゞふべし文武醫の道まことにかけては有べからず次にこれを學ばんをばいたづらなる人といふべからず次に食は人の天なりよく味を調しれる人大なる德とすべし次に細工萬の要おほし此外の事其多能は君子のはづる處なり詩歌にたくみに糸竹に妙なるは幽玄の道君臣これををもくすといへとも今の世にはこれをもちて世を治る事漸をろかなるに似たり金はすぐれたれども鐵の益をほきにしかざるがごとし

才能 ●才智藝能也句

文 ●四書六經なり諸

聖の教 ●六經四書をよみあきらめて聖賢の道をしるを第一とす其道は君臣父子夫婦兄弟朋友の間にそなはりて其をしへは仁義孝悌忠信に過す其仁義はもとより人の心の中にあり此心は古今をへだてず貴賤をわかたず堯舜も人と異ならず人の道をつくしきはむるを聖人といふ也野

手かく事 ●まつ手のつたなきは萬の用にもたちがたく其人がらまていやしく推はからるるものなりされどもこれを宗として能書の名をとるほとにとおもはゝ一生たゝ筆硯の間に暮て他の學問をも

傍にすべきものなれば只俗ならぬほどにこれを習ひて學問のたよりとすべしと也初段にも手など拙からすはしりがきといへりむねとする事はなくともといへる心をつくべし文
忠孝のつとめ　●忠孝のつとめもといへる事は身をやしなひて何にかせんいたづらにあれと云にあらす君に忠をつくし親に孝をせんためなりといふこゝろにかくいへり盤　頭書云▲小學曰伊川先生曰病臥ニ於牀ニ委ニ之庸醫ニ比ニ之不慈不孝ニ事レ親者亦不レ可レ不レ知レ醫野
弓射馬に乘こと六藝に　●六藝のうち射は弓いる事也御はもろこしには車にのるに御者といふもの其車のうへにゐてさしひきする事馬の手綱のごとしされは馬にのるも六藝の御のたぐひなり六藝の事くはしく周禮小學纂疏に見えたり文　頭書云▲周禮註曰禮樂射御書數謂ニ之六藝ニ▲張九韶曰藝能也
食は人の天　●これ書經の詞をもちて料理調菜の德ある事を云也文●爰の心は天は人の養生ずる處なり又食も人の命をつなぐ所なれは食は天たりといへり然れば五味をよく調和する時は食のためにやめることなし諺　頭書云▲帝範務農篇夫食爲ニ人天ニ農爲ニ政本ニ倉稟實則知ニ禮節ニ衣食足則忘ニ廉恥ニ諺▲史記酈食其傳云王者以ニ民人ニ爲レ天而民人以レ食爲レ天索隱曰出ニ管子ニ又按論語大全引ニ此語ニ曰天者人資而生者也野
細工萬の要おほし　●小刀の細工なるべし奥にもよき細工はにぶき刀をもつ也などいへり是迄は人のさしあたりて學ぶべき事どもなり文
多能は君子のはつる處　頭書云▲論語子罕篇大宰問ニ子貢ニ曰夫子聖者歟何其多能也子貢曰固天縱レ之將聖又多能也子聞レ之曰大宰知レ我乎吾少也賤故多ニ能鄙事ニ君子多乎哉不レ多也野
糸竹に妙なる　頭書云▲文選十六思舊賦序曰稽康博綜ニ技藝ニ於ニ絲竹ニ特妙云々野
幽玄の道　●幽微玄妙の道也壽●詩歌管絃の道の深く妙なる事をほめたる詞也文
これををもくす　●詩歌管絃は人の心を感ぜしめて善にすゝめ世ををさむる道なれば也文　頭書云▲詩經朱子序云詩者人心之感レ物而形ニ於言ニ之餘

也心之所レ感有ニ邪正一故言之所レ形有ニ是非一惟聖人在レ上則其所レ感者無レ不レ正而其言皆足ニ以爲レ教其或感レ之之雜而所レ發不レ能レ無レ可レ擇者則上之人必思レ所ニ以自反一因有ミ以勸ニ懲之一是亦所ニ以爲レ教也昔周盛時上自ニ郊廟朝廷一而下達ニ於鄉黨閭巷一其言粹然無レ不レ出ニ於正一者聖人固已協ニ之聲律一而用ニ之鄉人一用ニ之邦國一以化ニ天下一文 ▲古今集眞名序云古天子每ニ良辰美景一詔ニ侍臣一預ニ宴筵一者獻ニ和歌一君臣情由レ斯可レ見賢愚之性於レ是相分所下以隨ニ民之欲一擇中士之才上也 ▲禮記樂記云禮以道ニ其志一樂以和ニ其聲一政以一ニ其行一刑以防ニ其姦一禮樂刑政其極一也所下以同ニ民心一而出中治道上也盤

漸をろかなる ●世の末になれば詩歌管絃も時の翫ひものとなりゆく事なればかならずしらずとても事かくまじと也參 ●君も臣も詩歌管絃をもつて世を治め道を守る故におもくすといへども兼好時代すでに歌道おとろへて如レ此と云心をふくめり漸愚なるに似たりといふ文章のうつりよく／＼味ふべし歌道のやくにたゝぬといふにはあらずよめる者の愚にしてえおさめぬと云心也愚なるに似たりと云にていよ／＼殊勝也全 頭書云▲問初段にありたき事はまことしき文の道作文和歌管絃などいへると此段とのたがひめ如何答初段は大かた人たるものゝ世に出つかへ人にまじはるうへにてのねがひをいへるなれば其外有職に公事のかた聲をかしくて拍子とり下戸ならぬこそなどまで書り此段は只一分の身の上にさしあたりて用をなす所の才能をいへる故に詩歌管絃をさへ君子の恥る多能の中にかけりよく其段々の本意を味ひわきまふべし文 ▲山案此所に意得ぞこなひあり詩歌管絃をば君子の恥る多能の中へ入れて是をしらずともくるしかるまじといへる說は大きに僻事也夫詩歌管絃は君子の重する所なり詩歌は思無レ邪ところより言にあらはれて天地鬼神も是に感ずる也又管絃は禮樂の一つにして一時もなくてかなはぬこと也故に一度奏すれば天神至り二度奏すれば地祇うけ三度奏すれは人氣和くといへり兼好何ぞや是をしらずとも苦しかるまじといはんや若兼好桑門の身上につきて見るときは右に云し文武醫工の四品にも心をよすべきいはれなし此所は出世の俗人の爲

に書るなれば詩歌管絃をば疎に心得よと云べき事にあらず能此段の文意を味ふに此外の事ども多能は君子はづる處なりといへる迄を上へつゞけて見るべしさて詩歌と云より以下は上人身の當務を書るに就て詩歌管絃も人の當務なれども當時世も末になり道も衰て詩歌管絃の德を不ㇾ知却て翫びものとする事を憤りて書り重くすといへども書る中に不盡の意ありされば金は鐵の益多きよりはおとりたるに似たれども萬寶第一なれば是も益なしとてすつる者なし是人々の欲のはなれ難き處也詩歌管絃も亦如ㇾ此右の四品にたくらぶれば日用の急務にてはなきに似たれども萬法の本たれは君子もつとも是を重くす是道を知れるが故也然るに當時の人は是を不知して重くせずされば金を益なきとてすてざることくに此道をも意得よかしと思ひて兼好の書るなり詞を以て努々心を害すべからず 鐵の益をほきに ●詩歌管絃に金をたとへたり鐵はよろづのものとなりて其益おほき事を彼文武醫調味細工などのさしあたりて用をなすにたとへて云也文

〔一段之統論〕●此段は人のさしあたり必學ふべき才智藝能を云り前段に牛馬などの外に無益の鳥獸をやしなふべからずとの心をいへる次手にさして用たゝき藝能を習はずともとの義を云なり●問此段を人君のうへにいへりと云說あり如何答調味細工いかてか人君の責なるべき是はかの管絃などの所にこれをもちて世を治めん事漸をろそかなるに似たりと云所の心を見あやまれる說ならんかし文前說は句解の註なり

〔百二十三〕無益の事をなして時をうつすををろかなる人とも僻事する人ともいふべし國のため君のため止ことをえずしてなすべき事おほし其あまりのいとま幾ならずおもふべし

無益の事 ●こゝは此段の衣食居醫などのいとなみの外を無益の事と云也寸陰おしむ人なしといふ段に後世のつとめの外をいひしとは異なり文　頭書云▲論衡云作ニ無益之能一納ニ無補之說一猶如下以ㇾ夏進ㇾ爐以冬奏ㇾ扇亦徒耳說

止ことをえずして ●或は隱遁の心あるも其身の貴き人は國のためなればやむ事を得ずしてつとむ

べき事有又君のためには遁去事あたはざることありとなり諺

其あまりのいとま　●其あまりのいとまにまことの道を學び修行すべき事なしとなり諺

〔第一節〕●無益の事と云より思ふべしまでなり此段諺に二節に分てり●山案此節は上の段の多能は君子の恥る處なりといへるをうけて無益の事をばすこしもなすべからずと也されど世に交れば國のため君のために止ことを得ずしてなすべきことあれば畢竟は世をさけて閑に過すときは右のはづらひなくして道を修するいとまもあると云んために先かく二色の事を擧たり次の節に二色のことをもやめよと云なり

人の身に止ことをえずしていとなむ所第一に食物第二にきる物第三居る所也人間の大事此三つにすぎず飢ず寒からず風雨におかされずして閑に過すを樂とすたゞし人皆病あり病にをかされぬれば其愁しのび難し醫療をわするべからず藥をくはへて四の事もとめ得ざるをまづしとす此四かけざるをとめりとす此四の外をもとめいとなむを驕とす四の事儉約ならば

誰の人かたらずとせん

人の身に止むこと　●上の詞は國と君とのために止事をえぬをいひこれには身の上に止事をえぬをいふ也盤

飢ず寒からず　●食物に珍物厚味を好むにあらず着物に綾羅をかざるにあらず居所に金玉をちりばむる事をねがふにあらず諺

閑に過す　●上の三の外を求ればさはがしきなり此三にてまんぞくして外をもとめずしづかに過すをたのしびと云ふべしとなり盤●兼好徒然の本意は此一句に有可レ着レ眼說●孫防が四休をたのしみとする心あり參

人皆病あり　●一切の人既に形あれば疾病は必なくてかなはざる物也故に孔子も齋戰疾の三の物をつゝしめり野

醫療を忘るべからず　●醫の道を心得て病を療治するなり諺　頭書云▲杜甫詩分類七多病所レ須唯藥物微驅此外復何求野

四の事　●食衣居醫の四つにとぼしきは眞の貧人なり諺●山案踏雪抄に醫療は衣食住の三のごとく

なくてかなはぬにもあらず死次第やみ次第にてもあらるゝ物也さるによりて但といふなりとあるはいかゞあらんそれ道を修行するも無病にて氣力勇健なればおのづから修行も成就する也多病なれば志はありても心ならず病苦の堪がたきにひかされて佛道修行もなしがたかるべしされば醫療をよく心得て病苦を除きて道を修する數になすべき也さはいへど生をむさぼれとにはあらずよく〳〵此所を心をつけて味ふべきもの也

儉約　●儉約とはつゞまやかにうちばに事をなすを云諸　按ずるにつゞまやかとはたやすくなき義にあらずすくなくしてしかもよく用を達する是つゞまやかなり物をしちらけたるとうらおもて也たとへば山に百荷の柴をかりちらしたるは仕ちらせる也一荷にてもつかねとりたるこれつゞまやかなり此四つの物だに其用に達する程求えたる人をば誰人が來りて事たらずとせんやと也増鐵

[第二節]●人の身にと云より終まで也●山案此節は上の節に國のため君のためにやむ事を得ずしてすることあると云しをうけてそれは爲にしてすることあればのがれ去こともなるべし只食衣居醫の四つは人と生を得ては一時もなくてかなはぬこと也かくなくてかなはぬ四の事ながら道を修する暇のさはりとなるなり況や其外無益の事をなして時をうつすに於ては尤愚の至りとなりされば國のため君のためにいとなむことは無益なる事にはあらねども是以兼好世捨人の身の上には好ぬこと也只世を遁れてあるかなきかに門さしこめて閑に過すを樂とすと云ことをいへり

[一段之統論]●此段は前段に文武醫などのことをいひて其外の事ども多能は君子のはづる處也といへる心をうけて藝能のみにあらず日用の物のうへにも衣食居藥物など大かたにともしからずば事足れりとすべし其外をもとめんはをごりならんとの義をいへり蓋●上の段をば一切の人の心得にもなるべけれどもまづは人君の身上に重く引かけむねと心がくべき品々をさしあげ此段には凡て人間の大事食衣居醫の四に過ざる事を論じ其外をもとめねがはずやすらかにすごさまほしきことはりを述たり句●山案此說さもあるべけれど今文意を味ふ

に上の段は廣く世人に教て日用の當務の外に多能を求るは君子のはづる所なりと云て無益のことをいとなむ者をいましめたり此段は兼好世捨人の身上の事を云りされば食衣居醫の四つは桑門の身の上にもなくてかなはざることながらあるに任せて用ひよ必々美麗を求ることなかれと也さて此いましめは桑門に而已かぎらず在世の貴賤も皆此心得肝要なりされば周禮に房室不レ在ニ高堂一不レ漏便好衣服不レ在ニ綾羅一和煖便好飮食不レ在ニ珍饈一一飽便好と云々又論語君子食無レ求レ飽居無レ求レ安といへりさて此段も廣く世人のいましめと見るときは此四つの外は皆無益のことにてしかも是をねがひ求るは驕なりといへる事すみがたし世に交れば國のため君のためにかぎらず父子夫婦兄弟朋友の上につきて已む事を得ずしていとなむべきこと多し何ぞ是を無益のこと也驕なりといはん是桑門の身上に於ては好ぬこと也其上在世の人の當務は上の段に云つくしたれば也野槌に此段衣食居醫に足てしつかに過すを樂とすと云へり外をねがひ世を貪らざるところあらましきこと也然れどものぼりて論ぜば簞瓢陋巷其樂をあらためず別に指ところあり衣食居の三等を樂むにはあらず德の身を潤す事富の屋をうるほするがごとし若世をむさぼらずと云て禮もなく義もなくば如何ぞ聖門の樂をしらんされば於陵の陳仲子を蚓蚯なりと孟子のいへるは此意なるべしと云るは此段を廣く世人のために書たると見あやまりしゆへなり

〔百二十四〕是法々師は淨土宗にはぢずといへども學匠をたてずたゞ明暮念佛してやすらかに世を過すありさまいとあらまほし

是法法師 ●作者部類云念阿の眞弟也野傳記未レ考
　頭書云▲新千載集第十八雜歌下是法々師のがれても同じうき世と聞物をいかなる山に身をかくさまし又新後拾遺集第八秋歌に「夜もすがら山下風吹て衣手のたながみ川にこほる月影野

淨土宗 ●本朝法然流の淨土一宗の學にはづる事なきなり諸

學匠 ●學解にて人の師となりだてをせぬ也參

念佛 ●一向專念の義也參

やすらかに過す有樣 ●念佛三昧に入と學匠をた

てすしてやすらかに世を過すと云所兼好心にかなへり全●明くれといふにて解怠なく念佛せられたる所をしるべし盤

〔一段之統論〕●此段は上の段の四の事たりてしづかにすぐす人の證人をいだすなり出家の專にすべき學問をだにたてずあるよしをいひていはんや其外はと心をあまして云り盤●此段例のつれ〴〵を本意としていへり前に智者は愚者になりともいひ法師は人にうとくてありなんなどいひし心とをなじ文

〔百二十五〕人にをくれて四十九日の佛事に或聖を請じ侍しに說法いみじくして皆人涙をながしけり導師歸りて後聽聞の人共いつよりもことに今日はたふとく覺え侍りつると感じあへりし返事に或者の云何とも候へあれ程唐の狗に似候なんうへはといひたりしにあはれもさめておかしかりけりさる導師のほめやうやはあるべき又人に酒すすむるとてをのれまづ酔てふしなば人はよもめさしと申き劍にてきりこころみたりけるにやといとおかしかりき　（四十九日事前に委）

導師　●法事の上首となりて人をみちびく人なり

參　頭書云▲要覽曰十住斷結經曰號ニ導師ー者令下衆生類ニ示中其正道上故華首經云能爲ㇾ人說ニ無生死道ー故名ニ導師ー文

さる導師のほめやうやは　●さる導師といふよりは兼好の判なり愚昧のやからはかやうの事おほし說法の沙汰こそすべき事なるを無用なるかたちの評議をなせる事なり諺●ほめやうやは有べきとはありはすまじきと云詞也是愚癡なるものゝほめやうのおかしかりげる故に說法の哀もさめたれば導師のとがにあらねどもこれも此導師の學匠をたて世にまじはるからに加樣の沙汰にもをよぶ事彼是法がたゞ念佛してやすらかに世をすぐすのあらまほしきにはしかじとの心にいへる義なるべし文

又人に酒すゝむるとて　●是より以下脫簡落字あるかといふ說もあれど同じく愚人の辭の分明ならざる事を記すなるべし諺●野槌などには是より別段となせり

しる ●强の字

劒にて人を ●劒にてといふより兼好の判なり盤 ●此劒の譬の詞はよくきこへたる事なれども凡前かどによく試たる事ならねば必其事落着なく疑を殘すべきを何の思慮なく劒のたとへを云若其人劒にて我頭をきりこゝろみたるにやと辭を貶してこゝにしるす諺おかしかりきとはたとへ事も猶よの事もあるべきことをおかしきたとへかなと也此おかしき前後ともに世俗におかしきといふ心なり増鐵 ●兼好そしれる詞也たとへのすべしらぬものゝいひし事皆此たぐひなり劒にて人をきる時二方に刄つきたればとて終にわが頭をきりたるためしなき事也合 ●此たとへのよくあひたるを兼好のほめていへる詞なり文 ●此說いかゞあらん又一說に劒は人を切ものにあらずつくもの也それを今の刀のごとくに思ひて引ことにしたるがおかしかりしと也說

人はよもめさじと申き ●酒をきこしめさじとなり句 ●是亦彼からの犬にといひたるものゝ其次手にいひたる事を書しるされたるなるべし文 ●又別人の語ともみるべし増鐵

〔一段之統論〕●此段は彼是法々師が事をほめたりしより又學匠をたてゝ世にまじはる僧のよしなき批判にあひたる物語なり文 ●上の段に是法々師が事をいへるにうけて又此段にも佛事に導師を請じたる物語を書あらはせり偖此兩條の旨を察するに初の一條は舊抄にいへるごとく人をほむる事あるにかたへの者の愚に思慮もなく卒爾にさし出あしきたとへをとりていふか或はわざと人をいひ落さんとてほむる言葉のさきを折たぐひか後の一條は其理は勿論なることながら物にたとふる才智のつたなくてあしくいひなし人の耳にもおかしく聞ゆるか或己そのをもむきをしかとしらざることをいふにはうかゞひていふべし又分明なる事にてもいまだ試みざることはをぼつかなきやうに云ふべき事なるを手にとりたるごとく落しつけて云類多し是皆或はものいふ事をよくせず或は言葉をつゝしまざる者の上にまゝ有事なれば教戒のためにしるせるなるべし句

〔百二十六〕ばくちの負きはまりて殘りなくうちいれ

んとせんにあひてはうつべからずたちかへりつゞけて勝べき時のいたれるとしるべし其時をしるをよきはくちといふなりとある者中き

殘りなく ●其まけたる銀錢をのこりなくなり參

●其打べからさる謂を云諺此所二說あり先一義に負たる者家財をもうちいれんといふ時勝たる者必々打べからずと也やはりうつならばかへつて負べしと也始に負し者の方へたちかへりて勝へき時のいたりぬとしりてうつべからずとなり是勝たる者の心えやうなり俗に一のうらは六といふがごとし物極れは變ずるの理を云り諸抄これに同じ●又一說に負極りて一跡殘りなくうちいれんとすること必定なり其時は何程打ても先のかちとなるもの也それをよくわきまへ殘ずくなにならばやがて此方よりうつべからずかくうたざる時は少分にても殘りたる銀錢か我得分となる也相手のつゞけて勝べき時いたると知てうつべからすと也此盤齋の說はいかゞあらん

あひて ●爰にて句を切る時は相手也大全の說

うつべからす ●こゝにて句をきる時は逢手なり諸抄如レ此●打いれんとせんにあふてはといへる義なり句

〔一段之統論〕●上の段に酒興の事をいへるにうけて又此段には博塞の事を論せり飲酒博奕は文にもならべあげて見へ侍り偖此段の意趣ばくちの指南にはあらずかゝることにも天理をはなれざることをいひあがせる也陰極て陽生じ亂極て又治り月滿てはかけ物盛にしてはをとろふ其理誠に眼前なり身をおさめ國をたもたん道皆此心得あるべき事なり句

〔百二十七〕あらためて益なき事はあらためぬをよしとする也

益 ●益の字一段の眼目也句

〔一段之統論〕●此段あらためて益なきと云はたとへば鍛冶をかぢの音によび如在の字をば人の交のをろそかなる事に用るたぐひをあやまりとてあらたむるやうなる事はならひ久しき道なればさして益なきわざなるべしされども事によりて益ある事ならば如何にも急に改たむべき道理なれば此一章にては益の一字肝要たるべし又前にしるせる一言

芳談のしやせましせすやあらましと思ふ事は大やうせぬはよきなりといへるにも心通ふべき歟参 ● 論語先進編魯人爲ニ長府ヿ閔子騫曰仍ニ舊貫ヿ如之何何必改作野

〔百二十八〕雅房大納言は才かしこくよき人にて大將にもなさはやとおほしける比院の近習なる人たゞいまあさましき事を見侍りつと申されければ何事ぞととはせ給けるに雅房卿鷹にかはんとていきたる犬の足をきり侍つるを中垣の穴より見侍りつと申されけるにうとましくにくゝおぼしめして日來の御氣色もたがひ昇進もし給はざりけり

雅房大納言　●後土御門大納言也　頭書云▲村上天皇第六皇子具平親王十代之孫從一位太政大臣定實公之長男正二位大納言雅房公也號ニ後土御門ヿ句

村上天皇（人皇六十二代）─具平親王─師房─顯房─
─雅實─雅定─雅通─通親（これまでは前九十九段堀川相國の系圖にくわし）─
─定通（内大臣號土御門）─顯定（正二位權大納言）─定實─
─雅房

よき人　●善人と書べし行跡のよきをいへり句

大將　●近衞大將なり武官の統領なり大納言の大將を兼官するを手柄とす諸　頭書云▲職原抄云非ニ譜代之華族ニ者更不レ任レ之多是大納言中 譜第上﨟任レ之▲又云任ニ大將ニ人其職掌大略同ニ大臣ニ只守ニ位次ニ着レ座許也其外内外作法不レ混ニ餘人ニ者也文

おほしける比　●院の御所に思召たるにや文　●此院は後宇多院なるべし此時院御所三院あり後深草龜山後宇多但後深草龜山は雅房大納言の時分は法皇なりし壽

近習　●前に見えたり

あさましき事を見侍りつと申されければ　●是彼近習の人雅房卿を妬みて讒奏する詞也文

かはんとて　●飼の字諺

いきたる犬の足をきり　●鷹の餌に鳥のなき時は犬を飼なり少し飼て餘肉を損ぜさせじとて生なから犬の肉をそぐなり文

うとましく　●院の疎敷也諺

御氣色もたがひ　●彼纔言を誠と思召て雅房卿をにくませ給ふなり文

昇進もし給はざりけり　●官をのぼせすゝむる事也てゝの心は大將にもなさせ給はざりしとなり文

〔第一節〕●雅房大納言と云よりし給はざりけりまて也此段三節に分つ文段これに同じ●山案此節は一切の有情を見ては必慈悲の心あるべきことなりといはんとて先雅房卿の犬の足を切給ひしことを擧たりしかも此事はいつはり也けれどもかく昇進をもし玉はざりしぞかしと云て實にかくのごとくなる不仁の行をなすものにおゐては論ずるにたらぬてとをしらせたり是ふかく慈悲の心を以て後人のいましめにいへるなり兼好の志又院の御心にもまさりて有難し

さばかりの人鷹をもたれたりけるは思はずなれど犬の足は跡なき事なり虚言は不便なれどもかゝること を聞せ給ひてにくませ給ひける君の御心はいとたふとき事也

さばかりの人　●かほとの人どいふ心なり全　●雅房卿をさすなり諸

思はずなれど　●此所雅房卿の心の上へかけて見る說と兼好心の上へかけていへる說と兩義あり先一義に●思はずとは思慮もなき事也盤　●此大納言は才かしこくおはしませは鷹は殺生の本にして益なき事なるといふ事をしろしめさぬほどの人にてはなけれども其所に心つかざるといふ事なるべし世話に思はずしらずなどいへる類たるべし鐵増　是前說の意なり又一義●思はずとは思ひがけぬ事なれと也句　●雅房卿さほどに才智かしこく善人として無益の鷹犬の遊びに心とゞめ給ひて是をもたれけるは思ひの外なれどゝなり鷹などにすくことを深くいましめたる詞なり文　是後說の意也今案ずるに兼好は釋氏にして慈悲心平等のうへより見る時は前說やよく此所にかなひ侍らん夫鷹犬の遊びは本民の貧富を察せんためなれば一偏に是をあしゝといはんやしかれども當時の田獵は徒に遊輿のためにして却而田畠を踏散して民の煩ひとなるなれば此所無益の殺生をいましめたれば後說も又よりなきにはあらず山案

不便なれど　●此讒言にあひ給へる雅房卿のためはせんかたなき事なれどもと也文　●兼好感じ奉る也此にくませ給ひける君の御心

院かねてより殺生をきらはせ給ひし故に讒奏に申上るさへ如レ此これにて殺生を御いとひましますす事しられたり尤有難き御事なり全●君子生るを見て愛し死をいたむは天よりうけ得たる仁の發するところなり故に仲春には巣をやぶり卵をそこなふ事をゆるさず魚尺にみたざれば鬻ず大夫故なければ牛羊をころさず士ゆへなければ犬豕をころさすといへり參

[第二節]●さばかりと云よりたふとき事なりまで也●此節は殺生をにくませ王ひし院の御心のたふときことをいふ批判の詞なり文●擁房犬の足をきりて鷹にかはんとするといへる虚言ならば君として浸潤の譖をあかす事なきいかゞあるべけれどもかゝる事を聞て悪める君の心を兼好がほめたるは齊の宣王の牛を殺すを見て羊にかへよといへる孟子の是心王たるに足りと云心にかよへり宋の睿宗の洗手水を蟻にかけさせ給ぬを伊川が此心四海におよぼさば王道なりと云もこれなり野

大かたいける物をころしいためたゝかはしめて遊び樂まん人は畜生殘害の類也萬の鳥獸ちいさき虫迄も心をとめてありさまを見るに子を思ひ親をなつかしくし夫婦をともなひねたみいかり欲おほく身を愛し命をおしめる事ひとへに愚癡なる故に人よりもまさりて甚し彼にくるしみをあたへ命をうばはん事いかでかいたましからざらんすべて一切の有情を見て慈悲の心なからんは人倫にあらす

いける物をころし　●佛家殺生戒の本意をいふ參

いためたゝかはしめ　●或は羽をきり足をむすび鬪雞鬪狗のたぐひを云なり諺　頭書云▲季氏郈氏が鬪雞の事は左傳にあり漢宣帝唐玄宗も是を好めり又言行錄には王荊公鬪鶉の事を載たり兼好が時分にも相模入道崇鑑鬪狗を好むことあり果して兵亂の前表にて關東亡ひぬ野

畜生殘害の類　●鳥獸虫魚のたがひにくひあふを畜生殘害といふ殘害はそこなひやぶるなり野　頭書云▲十六觀經疏曰畜生云二旁行一從二主畜養一爲レ人驅使食噉▲往生要集明二畜生道一中曰遇二諸違緣一數被二殘害一參

畜生　●畜生は全く天理を備ねは生をいたむ心なし人として痛ぬは猶畜生とひとしきなり諺

ちいさき虫　佛書に蠢々蠕動といへる類也參

子を思ひ　虎狼仁也とある時はおそろしき虎狼さへ父子相くらはすいはんや其外の鳥獸昆蟲をや夜鶴の子を思ひ巴猿の腸を斷も是也桓山の鳥の聲も子の別を悲しめり野　頭書云△譚子峭漁篇曰夫禽獸之于レ人也何異有二巢穴之居一有二夫婦之配一有二父子之性一有二死生之情一烏反レ哺仁也隼憫レ胎義也蜂有レ君禮也羊跪乳智也雉不二再接一信也孰究二其道一萬物之中五常百行無レ所レ不レ有也而教レ之爲二網罟一使下之務中畋漁上且夫焚二其巢穴一非レ仁也奪二其親愛一非レ義也以レ斯爲レ享非レ禮也教二民殘暴一非レ智也使二萬物懷一レ疑非レ信也楊升菴評レ之曰戒殺放生似レ爲二此說一　△王日休淨土文曰魚在二水中一亦有二眷屬一腹中多レ子云々參

親をなつかしくし　羊の跪て乳し烏の哺をかへし楚の豘子の死母に食るは親をなつかしむにあらずや野

夫婦をともなひ　猿は猵狙を雌とし麋は鹿とつるみ鰌は魚と遊事齊物論に見えたり獸に牝牡あり鳥に雌雄あり綏々の狐奔々の鶉同宿の鴛鴦双飛の孔翠比翼比目比肩の物に至る迄皆是夫婦をともなふにあらずや野

ねたみ　詩周南に螽斯は妬忌せずとあれば餘虫のねたむ事ありとしるべし野

いかり　蜂いかりて人をさし蚰いかりて首をあげ蟹いかりて戈をもたけ蟷螂いかりて斧をあぐる類なり參

命をおしめる　頭書云△居家必用云貪レ生畏レ死人與レ物同也愛二戀親屬一人與レ物同也當二殺戮一而痛苦人與レ物同也所三以不二同者人有レ智物則無レ智人能言物則不レ能レ言人之力強物力微弱人以三其無レ智不レ能三自辨二其身一以三其不レ能レ言而不レ能二告訴一以二其力之微弱不一レ能レ勝レ我因謂二物之受一レ生與レ我輕重不レ等遂殺而食レ之云々食二鳩鴿鶉雀一者殺二十餘命一方得二一羹一食二蚌蛤蝦蜆一者殺二百餘命一方得二一羹一嗟乎染習成レ俗見聞久當レ如レ此而不三以爲二怪深思痛念云々壽　△元賢戒殺生曰夫物之與レ我形軀雖レ隔知覺實同貪レ生怖レ死與レ人何異△梵網戒疏發隱曰慈悲者觀二諸衆生一如レ保二赤子一不レ忍レ傷也參

愚癡なる故　勇士は義によりて命かろんじ道者

はとても世は幻化なりとさとる故にさして身命をおしまず身命をふかくおしめるものは愚癡なる者也といふ事言外にあらはれたり増鐵
有情　虫魚鳥獸の類をいふ也文
慈悲　頭書云▲法界次第云能與二他樂一之心名レ之爲レ慈能拔二他苦一之心名レ之爲レ悲句▲盆經通今記曰愍二覆衆生一拔レ苦與レ樂名二慈悲心一參
人倫にあらす　●前の畜生殘害の類なりと云に應せり文
［第二節］●大かたいける物をと云より終までなり
●第三節は一切の有情を見て慈悲なくいためころしなどする人は畜生とをなじ心ぞと義論しいましめて一段を決せり文
［一段統論］●此段雅房の事いひ出ては君王の慈悲をほめてそれにつきて慈悲の心なきは人倫にあらぬことを云て深くいましめたり盤●此段尤有情を見ては仁心を可レ發ことを云へども底意には雅房卿の才智かしこくして君もよく思召ける故に傍の佞人ども是を娟疾して如レ此虚言をかまへて君へ纔奏いたしけることを述て當時出頭人などの心得の爲に書なるべし雅房卿の才かしこくよき人さへかゝる難は遁れ難し況や其外の人の愚癡佞奸なる族幸に時を得ては君の寵にほこりて人をないがしろにする者の難にあふことは勝て數へがたし說

［百二十九］顏回は志人に勞をほどこさじと也すべて人をくるしめ物をしへたぐる事賤き民の志をも奪べからず
顏回　●顏淵ともいへり亞聖とて聖人につげる人也孔門の高弟なり諸　頭書云▲山案史記仲尼弟子傳云顏回魯人也字子淵少二孔子一三十歲回レ年二十九髮盡白蚤死▲家語云年二十九而髮白三十二而死
勞をほどこさし　●我身に苦勞なる事を人にほどこしあたへてさせまじきと思ふ心也文　頭書云▲論語公冶長篇云子曰盍三各言二爾志一顏淵曰無レ伐レ善無レ施レ勞朱子註云伐誇也善謂レ有レ能施亦張大之意勞謂レ有レ功或云勞々事也勞事非二己所一レ欲故亦不レ欲レ施二之於人一野兩說あれども兼好の心は後の注を用られたり
くるしめ　●是兼好の辭也諺
しへたぐる　●せむる心也虐の字をせたぐるとよ

めり壽●又寃の字也無實の罪をかふむりていひひらく事得ざるを寃々といふなり野●しへをかながへしにかへせばせになるなりせたぐる也鐵增
志をも奪へからず　●こゝろざしをうばふとは彼かせんとする事をおさへてさせぬ心也諺　頭書云
▲論語云匹夫不レ可レ奪レ志壽
〔第一節〕●顏囘と云より奪べからずまでなり此段四節に分つ文段同じ●山案此節は上の段に一切の有情を見ては必ず慈悲の心を發すべきことをいへるをうけて物にのみかぎらず人に對しては猶以て仁の心を出してあなどり苦めまじきことを云り先顏囘が志を云てたとひ下賤の民たるとてもせめせたぐまじきことをいへり
又いときなき子をすかしおどしいひはづかしめて興する事ありおとなしき人はまことならねば事にもあらず思へどおさなき心には身にしみてをそろしくはづかしく淺間しき思ひ誠に切なるべし是をなやまして興ずる事慈悲の心にあらず
又　●又とはいやしき民といふより又となり爰に幼子の事を云はおくに義論をいはんため也盤

すかしおとし　頭書云▲禪錄に賺レ稚と云語あり釋典に小兒の啼時に黃葉を金なりとて小兒にあたふ是を黃揚止レ啼といふ也又もろこしに張遼といへるたけき兵あり小兒なく時に張遼來るといへば啼やみぬ日本にも昔大和の元興寺に鬼ある事本朝文粹道場法師傳に見へたり此故に小兒をおどすに顏をしかめて元興寺といふ顏なり野
まことならねば　●其おとしはづかしむる辭までとならぬなり參
誠に切なるべし　●たしかに思ふべしとなり諺
是をなやまし　●是を惱しの是の字たゞちに幼子の身をさすにあらず幼子の心をさし上にいへる詞をうけて是程に術なく思ふ心をなやましてといへる義也句
〔第二節〕●又いときなきと云より慈悲の心にあらすまで也●此節は幼少の者の事を云なり前は賤き民の上をいへり皆無智の者をあなどりてこれに勞をほどこすまじきことをいはんとてなり文●孟子いときなき時隣家に豕を殺すを見て母に問ければいつはりて汝にくはせんためなどゝいふ母かれに

僞をいふは僞を敎ゆるなきとてわざと家を買て孟子にくはしむ幼子常視母レ誑といへる禮の本文に相叶へり孟母が志まことに賢なりされば楊脩が孔雀のこたへ陸績が懷橘の返事するごとく山口しるき小兒まれなればたはふれにも彼をおどしはだしめん事せんなき事なり野
おとなしき人のよろこびいかりかなしびたのしむも皆虛妄なれども誰か實有の相に着せさる身をやぶるよりも心をいたましむるは人をそこなふ事なを甚し
皆虛妄　㊟むなしき妄念なりたとへば根本虛無にして喜怒有ましき我心なれども樂む事來れば其に着して樂み悲む事來れば其に着して悲む其時根本樂もなきといふ事を忘れて一偏に着して實とし有とする也故に實有の相に着するといふなり諺㊟をとなしき者も皆實有の相に着せぬものはなきにそれをば人々皆わきまへずしてかしこげに子供はかりをすかしおどして興とすへき事はあるまじきと也たとへば能や狂言を見て誠の人事かとおもふがことし增鐵　頭書云▲禪法には隨レ流認ニ得性一無レ喜無レ憂といふ佛祖の頌あり台敎にも不レ起一念の所たる空劫以前とさし威音那畔といひ道家には混沌未分と云て眞空より見れば喜怒哀樂の七情もことごとく虛妄なりとすされど斷絕しがたき事水上にうかへるひさごを杖にてをさへんとするに似たる故に起念の瓢不生の杖と台家に論ぜり吾儒より見れは寂然感通の理未發已發の中如何ぞ七情をすてんや是眞實にして虛妄にあらず野
實有の相　頭書云▲萬善同歸集曰秖爲レ不レ了ニ無性一迷爲ニ實有一參▲愚迷發心集無常遮レ眼實有之執彌深不淨滿レ身厭離之思都無增鐵
着せざる身　㊟決前生後の詞なり文
心をいたましむる　㊟童をおとす次てに人の心をやぶる事の重き事をいへり諺　頭書云▲前漢曰禍莫レ潛ニ於欲一利悲莫レ痛ニ於傷一心盤▲夏禹の水を治て大功あれど旨酒を惡める功は水を治るよりもまされりいかんとなれは水は人をおほらすといへと酒を飮て人の心をみだすは水のわさはひより甚しきゆへなり野
［第三節］㊟をとなしき人と云より甚しまでなり㊟此節はをとなしきもの虛妄の哀樂に着せるは幼童

の戯を誠と思と同じそれに身をつみて兒をすかしてをどしいひはづかしめてくるしめまじきぞとの心をいふなり文

病をうくることもおほくは心よりうく外より來るやまひはすくなし藥を飲て汗をもとむるにはしるしなき事あれども一旦はおそるゝ事あれば必汗を流は心のしわざなりといふ事をしるべし淩雲の額を書て白頭の人となりしためしなきにあらず

心よりうく　頭書云▲素問云百病生レ氣壽　▲文選嵇康養生論云精神之於二形骸一猶二國之有一レ君也神躁二於中一而形喪二於外一猶下君昏二於上一國亂中於下上也故君子修レ性以保レ神安レ心以全レ身愛憎不レ接二於情一憂喜不レ留二於意一泊然無レ感而體氣和平又呼吸吐納服食養身使下形神相親上表裡俱濟也野　▲維一峰曰使下主心一常存客氣聽上レ命則病根自除而病證不レ形　▲小止觀治病篇云息心和悅衆病即差　▲又曰若用レ心失レ所則四百四病因レ之發生參

やまひは　●寒暑燥濕風火の身をおかして病となるをいふ壽　●外の六淫の病より內七情にやぶらるる病のおほき事身をやぶるより必をいたましむるのはなはだしき理なり文

しるしなき事　●發散の藥をあたへても汗の出ぬ事あり諺

必汗を流すは　●是又心よりなす事の甚しきたとへなり文　頭書云▲文選嵇康養生論夫服レ藥求レ汗或有レ弗レ獲而愧情一集渙然流離野　▲胡文煥明善要言引二學餘錄一曰望レ梅生レ津食レ芥墮レ淚此五液之自レ外至也慕而垂レ涎愧而汗發此五液之自レ內至也參

淩雲の額　●臺の高き雲をもしのぐほど高きゆへに淩雲臺と名づく也參　頭書云▲卓氏藻林曰魏曹丕築二淩雲臺一在二洛陽孟津臺上一樓觀極二其精巧一參　▲世說新語補十六云陵雲臺樓觀精巧先稱二平衆木輕重一然後造構乃無二錙銖相負一揭臺雖二高峻一常隨レ風搖動而終無二傾倒之理一魏明帝（曹丕子也）登レ臺懼二其勢危一別以二大材一扶持之樓即頹壞論者謂輕重力偏故也野　▲三國史云魏明帝立二淩雲觀一誤先釘レ榜乃以レ籠盛二韋誕一轆轤引上書レ之去レ地二十五丈既下鬢髮皓然還語二子弟一直絕二此法一壽

白頭の人　●魏の韋誕が高臺にのぼりて恐れしに

よりて忽に白頭になりし古事を云なり文 ●是恐る
る事少しの間なりといへども心をくるしむる事深
きゆへに大に身を害せるためしに引用ひられ侍る
句

〔第四節〕●やまひをうくると云より終まで也●此
節は身をやぶるより心をいたましむるは人をそこ
なふ事甚しき理をたとへを取て證する也文 ●此節
は上節の結句をうけて身をやぶるより人の心をい
たむるは其とが輕からず萬端心のしわざなればそ
れをやぶるはよからぬとぞされば凌雲臺上にのぼ
り肝をつぶしたちまち心をいためて一時に年より
し事もありしとぞ諸

〔一段之統論〕●此段は前段に一切の有情を見て慈
悲の心なからんは人倫にあらずといへるにうけて
其有情のうち最上の人間を見て慈悲の心なきこと
を云なり顏回の志をば發端に書出て中比幼子をお
どしくるしめて興ずる事の不仁なることをいまし
め其つゐでにをとなしき人も七情は皆虚妄なると
云ことをしらずして實有の相かと迷ふは幼子のみ
にかぎらぬ事をしらせ末には養生論三國史等の事
跡を顯して內病外病の多少を論ぜり畢竟の意はか
りそめにも人の心をいたましむることはなすまじ
きと云て民の志を奪ふべからずと發端に書る心を
いよ〳〵云のべたり是兼好の爲人の志あらはれて
尤有難し山案

〔百三十〕物にあらそはず己を枉て人にしたがひ我身
を後にして人を先にするにはしかず

物にあらそはす　頭書云▲論語君子無ㇾ所ㇾ爭▲曲
禮在ㇾ醜不ㇾ爭野

己を枉て　頭書云▲老子曰曲則全枉則直夫唯不
ㇾ爭故天下莫㆓能與ㇾ之爭㆒野

人にしたがひ　●我思ふ所をしませて人の心に
したがふ也我をすこしもたてぬなり文

身を後にして　●身を後にして人を先にするとは
禮讓の道なりをよを此ゆづると云は聖人の重き教
也尤人のをこなひがたきところなりつゝしむべし
つゝしむべし諺　頭書云▲論語仁者己欲ㇾ立而
立ㇾ人己欲ㇾ達而達ㇾ人▲老子曰欲ㇾ先ㇾ民必以ㇾ身後
ㇾ之▲又云不㆔敢爲㆓天下先㆒故能成器長野 ▲堯王の
事を允恭克讓と虞の代の史官は示し孔子の御德を

溫良恭儉讓と子貢は美レ之しかれば我身を謙して人を先にする所は人の行ひ難きこと也諺

〔第一節〕●物にあらそはずと云よりしかずまで也此段五節に分つ文段是に同し●此節は即一段の大意なりされば こそ物にあらそはざると己をすぐると人を先にするとの心ばへをよく心得て世人にまじはらば人のうらみもらはず身の失もすくなかるべし文

萬の遊びにも勝負を好人は勝て興あらん爲なり己が藝のまさりたる事をよろこぶは負て興なくおぼゆべき事又しられたり我負て人をよろこばしめんと思はば更にあそびの興なかるべし人にほいなく思はせて我心をなぐさまん事德に背けり

勝負　●盤上博奕の類なり文

まさりたる事　●彼勝負のわざは我が人にまさる事をよろこふわざにてをのれを枉て人をさきにするの道にあらぬよしの評論なり文

よろこぶは　●山案此よろこぶはのはの字を除き此間にされば の三字を加へたる本多し諺解參考もかくのごとし其說に云勝をよろこぶから見ればむかふの相手は負て興なく覺ん事推量せらるゝ也とある今しばらく古今抄鐵槌などにしたがひて是をのぞく也但兩本ともに其說をもらせり今味ふてみれば己が藝のまさりたるをよろこぶ者は又負たる時に興なく思ふへき事也としらるるなりと一人の心のうへになしていへるものならんかし

德　●仁の德なり鐵

背けり　●人の人たるゆへは心に仁の德あれば也他人にほいなく思はせて我心をなぐさむは此仁の德にそむけり文

〔第二節〕●萬のあそびと云より德にそむけりまで也●此節は世の遊びわざも人にあらそひ人にまさらんとするわざの或は盤上の類博奕なとは無益のよしを云なり文

むつまじき中にたはふるゝも人をはかりあざむきてをのれが智のまさりたる事を興とす是又禮にあらず

むつまじき　むつ●昵の字●むつまじきさへかゝればましてうときはとの心也盤

たはふるゝ　頭書云▲張宇厚東銘戲言出二於思一也戲動作二於謀一也野

人をはかり　●むかふの智を淺しとおしはかるなり參●又人をたばかりて也增鐵

あさむき　●あざむきあさけりての心なり諺

禮にあらず　●さきには德といひこゝには禮といふ人にほいなく思はせて我心を慰といふと智の勝りたるを興すといふと少かはりめあれば德と禮とにわけていへるにや增鐵

〔第三節〕●むつましきと云より禮にあらずまで也●此節は親友の戲にても物にあらそひ人をさきにせざることをいふましきのいましめなり偖前節には仁德をいひこゝには禮義をいへり文

されば始興宴よりおこりてながきうらみをむすぶ類多し是皆あらそひを好む失也

始興宴より　頭書云▲魏其侯武安侯はともに漢帝の外戚にして名を天下にあらはす酒たけなはなる時に灌夫が酒失によりて兩人中あしく也互に恨を含て天子へうつたへて魏其侯灌夫はころされぬ史漢の本傳に委し野

ながきうらみ　●親友の遊興酒宴の上のかりそめのたはふれなどより始りてながく中絶の遺恨となる事ある也文

〔第四節〕●されぱと云より好む失也迄也●此節は仁德禮讓をかたはらにしてものに爭ふ失を云り文

人に勝らん事は思はゞたゞ學問して其智を人にまさらんと思ふべし道を學ぶとならば善に伐(ホコ)らずともがらにあらそふべからずと云ことを知べき故なり大なる職をも辭し利をもすつるは只學問の力なり

人に勝らんと思ふべし　頭書云▲人にかたんとのみ思ふは君子の心にあらされども此のこゝろなければをこたりたゆみて學問もすさむべし山門の慈惠僧正は日ことに我と云字を三度掌に書て自もねぶり門徒にもかくいひてねぶらせけるとなん其道にすゝめる志さこそ有けん儒を學ばん者も人とひとしからんと思はすは自暴自棄なるべしゆづりてあらそはざるは君子の德なりといへど仁にあたらん時弓いる時に人にをくれんや▲孟子無名之指屈而不レ信指不レ若レ人則知レ惡之心不レ若レ人則不レ知レ惡此之謂レ不レ知レ類也▲又云不レ恥レ不レ若レ人何若レ人有▲中庸云子曰射有レ似ニ乎君子一失ニ諸正鵠一反求ニ諸其身一野

道を ●聖人の道なり諺
學ぶとならば ●彼己をまげて人にしたがふ理なるべし文
大なる職をも辭し ●職は官職なりつかさどるわざ有也たとへば大臣の官は天下の政をおこなふ職あり大納言は宣奏宣傳をつかさどる類なり大なる官職利德などは人のあらそひ望む事なれども我にまされる賢人あれば我官職をも辭退してゆづり君子は爭ざる義をしれば利德をも捨てとらざるたぐひ世にあるは皆學問の力によりて仁義禮讓をしる故也加樣の大職大利をだに辭するにまして其外の小事にあらそふ事はあるまじければ只學問をつとめよとの心なり文 ●學問して義をしれば其ねがふ所義より甚しき事なくきらふ事不義より大なる事なければすみやかに官をさり利を捨てみづからいさぎよくする人古今其人多し諺　頭書云 ▲孟子の齊卿の位を辭し萬鐘の祿をうけず一百の兼金をとらざるのたぐびなり野 ▲山井案論語子曰富與レ貴是人之所レ欲也不レ以二其道一得レ之不レ處也貧與レ賤是人之所レ惡也不レ以二其道一得レ之不レ去 ▲又曰不義而富貴於レ我如二浮雲一 ▲又曰富而可レ求也雖二執鞭之士一吾亦爲之如不レ可レ求從二吾所一レ好 ▲左傳齊慶氏亡分二其邑一與二晏子一晏子不レ受人問曰富者人之所レ欲也何爲不レ受對曰無レ功之賞不義之富禍之媒也我非レ惡レ富恐レ失レ富也

〔第五節〕●人にまさらん事と云より終までなり●此節はよく學問してほこらずあらそはぬ道をよくしれといひて一段を結したり文 ●學問の力のつよきことを云なり人の尤すて難き事をも能辭しさる事は學の力也盤

〔一段之統論〕●此段は世人にまじはる禮讓の心を致たり人によろづまさらんと思ひあらそふ心あるは禮をしらぬ故にて且其失あり只學問して善にほこらずあらそはぬ道をよくしれとの心なるべし文
●此段末句に人に勝んと思ふ心のやめ難は只學問して其智を人にまさらんと思へといへる一段の警策なり中間に人にほいなく思はせて我心をなくさまん事德にそむけりなど書る又上の段の餘意なる事をしるべし句 ●此段一應學問の上にて爭ふ事をすゝむるに似たれども又々あらそはざるに歸せり

其人に勝たらん學問の至は善にほこらずともがらに爭事なき道なれはなり増徵●山案此段わづかの文句の中に仁義禮智信の五常を說て人の敎となせり先第一節には讓のことを云されは讓は禮の實也とあれば是禮の事を云る節也第二節は仁の德を云第三節には又禮をいへり第四節には信の道をいへりされば人と交るに信を以てせずして人に勝らんと思ふ心ばかりなれは必なかき怨をもむすぶと云て暗に信の道のことを含めり第五節には智の理を明せりさて結句に大なる職をも辭し利をもすてよといへる是義なり不義の富貴は求むべからずとなりさて此結句に兼好の本意つれ〲の所こもれりされば爵祿をも辭して自己の一分を樂とすべきことをいへり新注云或問己をまげて人にしたがはゝ寧巧レ言令レ色の戒にそむかんや答曰巧レ言令レ色と云は人の意にあはんが爲に輕薄に言葉をかざりわらはれぬ顏をも强てよくしいつはりて外のみを本として心中は虛なりされば心の仁德日々にほろびていさゝかも誠なし兼好の人にしたがふと云はさにはあらず人にまさらんことを思ひて血氣を以てあらそふ事なかれと敎訓したる意なり我まさらんとすれば人かへつてあなどる又したがへば猶我をうやまふなり此段の己をまぐるとは我慢の意をすつる義なり人にしたがふとあるは時にしたがふ意なり如此なる則はいづくに行ひ何をするとてもよからずといふ事なかるべし此說好し

〔百三十一〕貧しきものは財をもて禮とし老たる者は力をもて禮とす

貧しきものは　頭書云▲曲禮云貧者不下以二貨財一爲レ禮老者不下以二筋力一爲レ禮野▲此語を轉して兼好の用ひられしなり

力を以て禮とす　●此禮とすの下に大抵世間の人皆なかくのごとしといへる詞を加へて見れば語脈分明なり句

〔第一節〕●まづしき者と云より禮とすまで也此段三節に分つ文段同じ●此節は曲禮の語を轉じ用ひて世の愚なる者の分に過たる事を禮とする事を云なりまづしき所に酒宴をなし客人に饗應せんときらめき老人の若き人にをとらずおりたち奔走するたぐひなり文

をのが分をしりて及ばざる時は速にやむを智といふべしゆるさざらんは人のあやまり也分をしらずしてしゐてはげむはをのれが誤なり
をのか分　●是より上の事をことはるなり諺
人のあやまり　●若他人しゐて貧者にもふるまはせ老人にもおりたち奔走させてゆるさざらんはをのがとがにはあらずと也文
〔第二節〕●をのが分をしりてと云より誤なりまで也●此節は彼曲禮の本意をこゝにてあかして其分に過たる禮はあやまりなる事をいへり文●山案此節能々讀て見るべし人として止がたき病なりされば論語に林放禮之本を問し時孔子對曰禮與二其奢一也寧儉喪與二其易一也寧戚とあり又顔淵死門人欲二厚葬一レ之子曰不可門人厚葬レ之子曰回也視レ予猶レ父也予不レ得二視猶一レ子也非レ我也夫二三子也其外管氏が三歸反坫三家の八佾雍徹の事をいましめ給へる類多し是皆我分をしらぬあやまりなり又禮記に大夫七十致仕若不レ得レ謝必賜二之几杖一又適二四方一乘二安車一とあり天子諸侯さへ老人をばかくゆるし給へり吾力のほどをしりてをりたちて奔走せざるとて人是を不禮とせんやされども當時の萬人皆奢を以て禮とする故に適〻加樣なる者あれは人以て是を謗るなりされど其とがは謗る者にありて己があやまりにてはなきほどに必々其謗りをいとふてともに不義の禮を行ふべからずと教たり
まづしくて分をしらざればぬすみ力をとろへて分をしらざれば病をうく
力をとろへ　●結句に至りても分をしらざる過失をよくいひほどけり參●是にかきらず分をしるといふ事萬事にわたるなり全
〔第三節〕●分をしらざればと云より終まで也●此節は分をしらざる過失をいひて一段を結したり文
〔一段之統論〕●此段は前段に禮讓をいへるにつきて世上にをのが分に過たるわざをして禮と思へる事ありそれはかへりて禮ならず無智の故になすわざなれば其失ある事をいへり文
〔百三十二〕鳥羽の作道は鳥羽殿建られて後の號にはあらずむかしよりの名なり元良親王元日奏賀の聲甚殊勝にして大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし李部王の記に侍るとかや

鳥羽　●洛陽の南にあり諺

鳥羽殿　頭書云▲白川院應德三年に鳥羽殿をたてられたり野▲仙洞の御所なり壽

むかしよりの　●この鳥羽殿をたてられて後に此作道といふは出來たるものぞと世の人心得るによつて古來鳥羽の作り道と云名はあるよしをあらはす諺

元良親王　頭書云▲人皇五十七代陽成院第一皇子也三品兵部卿親王系圖別不レ及レ記

元日の奏賀　●朝拜の時ある事也壽　●元朝に慶賀を奏するとなへのこゑなり諸　頭書云▲公事根源云朝賀是を朝拜とも申なり辰時に天皇大極殿に行幸なりて行はせ給ふなり群臣皆禮服を著してさながら御即位の儀式に同し内辨なとも開門などありてめしの鼓をうたしむれば群臣列して門に入天皇高御座につかせ給へば兵庫寮鉦をうつ執翳(ハトリ)出て帳を八字にかゝぐ近仗警蹕を奏し圖書主殿香をたく典儀再拜をとなふ群臣此時再拜す奏賀奏瑞とて二人の者庭に進みていはひ申事也是去年目出度嘉瑞どもの有を國々より申せばそれをしるして今日是を奏するなり下略　此草子にも此奏賀奏瑞の事をいへるにや可レ尋レ之文

大極殿　●禁中の御殿の名也新注　●大内裏の時大極殿にて奏賀ある事なり里大裏になりては紫宸殿にて有なり大極殿なきゆへなり盤　頭書云▲拾芥云大極殿朝堂院正殿名ニ八省院一又云八省院天子臨朝即位諸司告朝所又謂ニ之中臺一野

李部王　●六十代醍醐天皇の御子式部卿重明親王の事也其著し給ふ記録を李部王記と號す野　●鳥羽殿よりは十二代昔の李部王記に鳥羽の作道といふ事出たるとなりむかしよりの名なりといふ證據に兼好のひけるなり全　頭書云▲式部を李部と云ことは法式を司とるものを吏と云ゆへなり行理行吏行李の字皆通用する事音同じき故なり左傳正義に見へたり野

〔一段之統論〕●此段は鳥羽の作道のむかしよりありしと云事を記すばかりなり文　●問奏賀の聲鳥羽の造道まで聞へたる事不審なり二里の間もきこゆる聲もあるにや如何答云李部王の時代は大内裏なれば今の東寺の程大かた大内の惣門なりきこゆる

事うたがひなし昔の內裏は南によりたると申さき句解云田原又大郎が聲八十里に聞へたる由東鑑に見へたりこれはすこし理あるべし全

〔百三十三〕夜のおとゞは東御枕なりおほかた東を枕として陽氣をうくべき故に孔子も東首し給へり寢殿のしつらひ或南枕常の事也白河院は北首に御寢なりけり北は忌事なり又伊勢は南なり太神宮の御方を御跡にせさせ給ふ事いかゞと人申けり但太神宮の遙拜は巽にむかはせ給ふ南にはあらず

夜のおとゞ　㊟天子の御寢所なり諸

東御枕　頭書云△禁秘抄云夜御殿四方有二妻戸一南大妻戸一間也帳同二清涼殿一東枕也云々文　△禮記曰寢時東首壽

陽氣をうく　㊟人の東首して寢る事は晝夜を分つ時晝は陽夜は陰也寤寐をわくれば寤は陽寐は陰也又東南は陽也西北は陰也陽は萬物を發生して育陰は萬物を殺伐する也されば夜は陰にして寢も又陰なる故に陽の方へ首をして陽をうけて陰を防ぐなるべし此故に寢殿のしつらひ或は南枕にもし給ふ常の事なりと次の詞に書り說

孔子も東首　頭書云△論語鄕黨篇云疾君視之東首加二朝服一拖レ紳朱子註云東首以レ受二生氣一也新安陳氏曰天地生氣始二於東方一或問疾君視之方東首常時首當レ在二那邊一禮記自云寢常當二東首一矣平時亦欲レ受二生氣一恐不二獨於疾時爲一レ然朱子曰常時多東首亦有二隨レ意臥時節一如二記云一請二席何向一請二衽何趾一這見レ得レ有二隨レ意向時節一然多是東首故玉藻云居二常戶一寢常東首也常寢二於北牖下一君問レ疾則移二於南牖下一野

白河院　㊟七十二代の帝王なり　頭書云△山案人皇七十二代白河院諱貞仁後三條七十一代帝第一子母贈皇太后從二位藤原茂子贈太政大臣能信爲レ子實權中納言公成之女也天喜元年六月二十日降誕治曆二年九月元服十三才時同四年八月十四日爲二親王一十六延久元年四月二十八日立二太子一十七同四年十二月八日受レ禪同二十九日即位二十才承保元年十一月二十六日大嘗會應德三年十一月二十六日讓レ位治十四年嘉保三年八月十日御落飾四十四才法諱融覺大治四年七月七日於二郁芳門院一崩壽七十七

北首に御寢　㊟北首に御寢なりし辨はくはしく

頭書云▲白河院は佛者なるが故に釋尊の頭北面西の涅槃の姿をうらやましく思召て常に北首し給へりされば佛者は平生臨終と心かげる故に此院も晝は代々の天子の日つきをうけて四海の政をとり行はせ給ひ夜は涅槃の相に表して御寢なる度ごとに御臨終の心持に思召てかく北首し給ひしと也說

北は忌事なり ◉彼釋尊の頭北面西右脇臥は入涅槃の御姿なれば北枕いむなり貞 ◉あながち此說の心ならねども北方は肅殺の氣なればにや句 ◉佛の北首に似たる事をいみ給ふとばかり沙汰しておかば家居の北向をこのまず紫宸殿の南向に作り王の南面し給ふ事もしかとは心得られぬわざなるべし參

御跡にせさせ ◉此義に隨ひ北首を忌といふ事尤也諺　頭書云▲禁秘抄云凡禁中作法先神事後他事旦暮敬神之叡慮無ニ懈怠一白地以ニ神宮並內侍所方一不レ爲ニ御跡一文

但太神宮の ◉是より北枕とても伊勢の御かたにはあらぬよしをいふ也遙拜ははるかにおがむなり天子の御身は爰にましくてはるかに太御宮を拜し給ふ事なり諸

【一段之統論】◉此段もしれぬ事を知しむる一篇にして結句には白河院の北首したまひし御事を俗に不審しける故に其不審をはらさせんために書けるなり說

【百三十四】高倉院の法花堂の三昧僧なにがしの律師とかやいふものある時鏡をとりて貞をつくくと見て我かたちの見にくゝ淺ましき事を餘りに心うく覺えて鏡さへうとましきこゝちしければそのゝちながく鏡をおそれて手にだにとらずさらに人にまじはる事なし御堂のつとめばかりにあひて籠居たりと聞傳しこそ有難くおぼえしか

高倉院 ◉人皇八十代の御門なり諸　頭書云▲山案人皇八十代高倉院憲仁後白河院七十七代帝第三子母建春門院平滋子兵部大輔贈左大臣時信女也永曆二年九月三日降誕仁安元年十月十日立ニ太子一六才于レ時同三年二月十九日受レ禪八才三月二十日即レ位十一月二十二日大嘗會嘉應三年正月三日元服十才治承四年二月二十一日禪レ位二十才治十二年同五年崩壽二十一

法華堂 ◉法華堂とは法花三昧を行ふ堂なり叡山

にも法花堂常行堂とて二つならびてたてられたり其法花堂には普賢菩薩を本尊として半行半三昧なといふ事を行ひ實相の理を思惟するなり參

三昧僧　法花三昧を修する僧なり壽 ●三昧とは專心をしづめてその事を思ふをいふ又其事一色にして他事をまぜぬをもいふなり世話に念佛三昧などいふ心もこれなるべし增鐵　頭書云▲名義集云此云ニ調直定ト又云ニ正定ト亦云ニ正受ト主峯疏曰不レ受ニ諸受ヲ名爲ニ正受ト遠法師云夫稱ニ三昧ト者何專思ニ寂想ヲ之謂也思專則志一不レ分想レ寂則氣虚神朗氣虚則智恬其照神朗則無ニ幽不レ徹斯二乃是自然之玄符用レ一而致レ用也云々野 ●妙樂云論曰一切禪定心皆名ニ三摩地ト秦言ニ正心行處ト是心無始常曲不レ端入ニ正行處ニ心則端直如ニ蛇行常曲入レ筒則直ト句

律師　●出家の官なり相當五位に準す　頭書云▲天武天皇の時此名はしまれり▲釋氏要覽云律鈔解題云佛言善解ニ一字ヲ名ニ律師ト一字者律字也寶雲經云具ニ足十法ヲ名ニ律師ト文▲經の中にとかれたる律師は沙門の律儀をまもれる人の德號なれば種々の義あれども今の律師は天台宗などの僧官のこと也參

鏡さへ　●さへの字心つくべし盤

鏡をおそれて　頭書云▲三國志魏夏侯惇從レ征ニ呂布ヲ爲ニ流矢ノ所レ中傷ニ左目ヲ時夏侯淵與レ惇爲ニ將軍ト軍中號レ惇爲ニ盲夏侯ト惇怒之每レ覽レ照レ鏡怒輒撲レ照著レ地▲許渾詩高歌一曲掩ニ明鏡ヲ昨日少年今白頭野▲南城吳氏祉倉寫ニ朱子像ヲ朱熹手自題ニ其上ニ詩曰蒼顏已是十年前把レ鏡回看一悵然參

御堂の　●前の法華堂なり諺

有難く　●是より兼好の評判なり

おぼえしか　●此かの字すみてよむべし哉の義也句

〔第一節〕●高倉院と云よりをほへしかまて也此段六節に分つ文段も同じ●此節は律師の我と身の上のことをしりたる事をほめて彼身上を知らぬ者のことを次の節にいましめたり前にもかたちをはづる心もなく人に出まじらはん事を思ひと書り山案かしこげなる人もひとの上をのみはかりてをのれをばしらざる也我をしらずして外をしるといふことはりあるべからずされば をのれをしるを物しれる人と

いふべし

かしこげなる人　●世にかしこだてに物いふ人の事なり文

ひとの上をのみ　頭書云▲范中宣公誡二子弟一曰人雖二至愚一責レ人則明雖レ有二聰明一恕レ己則昏參

外をしるといふ　●定木たゝしからずしては向の物の曲直は量り難し諺

をのれをしるを　●此一句至て重し此一句を心に得身に行ふ時は下の十の不知と云の煩なし增鐵　頭書云▲論語學而篇子曰不レ患三人之不二己知一患レ不レ知レ人也注尹氏曰君子求在レ我者故不レ患三人之不二已知一不レ知レ人則是非邪正或不レ能レ辨故以爲レ患也

〔第一節〕●かしこげなると云より人といふべしまて也●此節は律師か身の上を知たる事につきて世に賢げなる人も身を知らぬ事あるをいましめたり是より又一段とする說あれど師說にまかせて前の段の第二節とせり文 ●野槌盤齋は別段となせり

かたち見にくけれどもしらず心の愚なるをもしらず藝の拙きをもしらず身の數ならぬをもしらず年の老ぬるをもしらず病のおかすをもしらず死のちかき事をもしらずおこなふ道の至らざるをもしらず身の上の非をしらねばまして外のそしりをしらず

〔第三節〕●かたち見にくけれと云より謗をしらずまて也●此節は己をしらぬ事どもを云つらねたりさて彼律師が形の見惡きを自しりたる事を云しよりまつ形の上から書出たり文

但かたちは鏡に見ゆ年はかぞへてしる我身のことしらぬにはあらねどすべきかたのなければしらぬに似たりとぞいはまし形をあらためよはひを若くせよとにはあらず拙きをしらばなんぞやがてしりぞかざる老ぬとしらばなんぞしづかに身をやすくせざる行愚なりとしらば何ぞ茲を思ふ事茲にあらざる

但かたちは　●但かたちはといふより兼好しらざる者にかはりて其いひひらきをなして又形をあらため齡をわかくせよといふにはあらずと二度答をなして其事を明せり增鐵

かたちは鏡に見ゆ　頭書云▲明心寶鑑曰子曰明鏡可三以察二形往古所三以知二今參

似たりとぞいはまし　●形の見にくきをあらたむるかたもなく老をわかくするかたもなくて世に交

れはしらぬに似たりと也彼身の上しらぬ人かやうにいふべしと也文●我身の事を何を證據として見るへき事なければしらぬに似たりと也
形をあらため　●是より前の答也諺●是より兼好身の上しらぬ人に又敎訓の詞なり文
拙きをしらば　●藝の拙きをもしらずといふに應す文
行愚なりとしらば　●我行ひ至らすして愚なりとしらばいかで其おもふごとくに行をしゐてつとめざるぞとなり文
兹を思ふ　頭書云▲書經大禹謨念レ兹在レ兹野
〔第四節〕●但かたちはと云より兹にあらざるまで也●此節は身の上の非をしらばいかで律師がごとくしりぞかざるとの心を自問自答していへり文
すべて人に愛樂せられずして衆にまじはるは恥なりかたち見にくゝ心をくれにして出仕へ無智にして大才に交り不堪の藝をもちて堪能の座につらなり雪の頭をいたゞきてさかりなる人にならびいはんや及ばざる事を望みかなはぬことをうれへ來らざることをまち人に恐れ人に媚るは人のあたふる恥にあらずむさぼる心にひかれてみづから身をはづかしむるなり
すべて人に　●前には愚なる故に十色の事をもしらざるをいひ是よりしらざる故にみづから其恥をうくる事をいひてふかくいましめり鐵増
愛樂せられず　●樂はねかひこのむ心也世人に愛せられ好るゝをいふなり諺
衆にまじはる　●此方より求て世の衆人にまじはる也諺
不堪の藝　●無器用の藝をいふ也諸
堪能の座に　●其能にたへたる人也器量の人をいへり拙きを知らば何ぞすみやかにしりぞかざるといふに應ず此詞藝を習ふ人の修行のために不堪の堪能に交るをいふにはあらず是はをのれが藝に不堪をしらで堪能に肩をならべんとするを戒る也文
雪の頭　●白髪の體をいふなり句●前の老ぬとしりなば何ぞ閑に身をやすくせざるに應ず文　頭書云▲古今に「春の日の光にあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき▲高蟾詩人生莫レ遣二頭如一レ雪縱得二春風一亦不レ消野▲惠心僧都六道講式曰頭戴二霜雪一心染二俗塵一一生雖レ竭希望不レ竭參

さかりなる　頭書云▲曲禮三十云ㇾ壯註鄭云氣力浸強之名文
いはんや　●只衆に交るさへよからぬに況こびへつらひてはと也つのりてゆふ詞也盤
及ばざる事を　頭書云▲秋聲賦況思ニ其力之所ㇾ不ㇾ及憂ニ其智之所ㇾ不ㇾ能歐陽か書る文法うつれるやうにをぼへ侍る句
むさぼる心　●右の或は望み或はうれへ或はおそれ或はこぶるは皆むさぼることゝろよりをこれり參
［第五節］●すべて人にと云よりはづかしむるまで也●此節は顔見にくゝて愛樂せられぬ身をしらで人に出交るは恥也且亦形の見にくきも藝の拙きもみづからしるといへどもむさぼる心によりて人にへつらひ人にまじはるも偏に耻なることをいひてふかくいましめたり文
貪る事のやまざるは命ををふる大事今こゝに來れりとたしかにしらされぱなり
今こゝに來れりとたしかにしらされば也　●死はたれもしれども慥にしらぬ故との心也此たしかにといふ心をつくべしさきに病のをかすをもしらず死のちかき事をもしらずなどいふに應ず文
［第六節］●貪る事のみと云より終まで也●此節は彼むさぼりのやまぬは死するといふことをしらぬ故なりこれをたしかによく心得たらばむさぼる事はやむべきものをとの心をいひて一段を決せり文
［一段之統論］●此段の大意はすべての人の他を論じて己が非をしらざるあやまりをいましめ其心はいづくより生ずるといへば世をむさぼるよりをこれり又其むさぼる事のやまざるは命終の大事をしらざる故なりと決定し例のこのめる佛道を人にすすむるなるべしさて上の段の末に神社の事出たるにうけて又此段には法華堂の三昧僧など書初たり句●此段は己をしることをいへり諸
［百三十五］資季大納言入道とかや聞えける人具氏宰相中將に逢てわぬしのとはれん程の事何事成共答へ申さゞらんやといはれければ具氏いかゞ侍らんと申されけるをさらばあらがひ給へといはれてはかく敷事はかたはしもまねびしり侍らねば尋申までもなし何となきそゞろごとの中におぼつかなき事こそ問

奉らめと申されけりまして免許のあさき事は何事なりともあきらめ申さんといはれければ近習の人々女房なども與あるあらがひなり同じくは御前にて諍るへし負ならん人は供御を饗(マウケ)らるべしとさだめて御前にてめしあはせられたりけるに具氏おさなくより闘ならひ侍れど其心をしらぬ事侍り馬のきつりやうきつにのをかなかくぼれいりくれんどうと申事はいかなる心にか侍らん承らんと申されけるに大納言入道はたとつまりてこれはそゞろごとなればいふにも足ずといはれけるを本よりふかき道はしり侍らずそゞろごとを尋奉らんと定申つと申されければ大納言入道負になりて所課いかめしくせられたりけるとぞ

資季 ●法名了心といひし歌人なり句　頭書云▲大織冠十一代之孫法興院攝政兼家公七代之後胤從三位左中〻資家卿之男正二位大納言號ニ楊梅(ヤマモヽ)一句

大織冠——不比等——房前——眞楯——内麿

—冬嗣——良房——基經——忠平——師輔

—兼家 これまでは前の太秦殿の段にくわしき故に略す —道綱 正二位大納言 —兼經 參議正三

—位 教家 正四位下左中將 —教兼 正四位下刑部卿 —季行 太宰大貳從三位

—定能 正二位權大納言 —資家 從三位左中將 —資季 楊梅此流當時斷絶

具氏 ●從三位參議中將具氏卿也宰相は兼官也句　頭書云▲村上天皇第六皇子具平親王九代之孫從三位右中將通氏卿之男也號ニ中院一句

村上天皇 人皇六十二代 —具平親王——師房——顯房—

—雅實——雅定——雅通——通親 これまでは前の堀川相國の段にくわし

—通方 正二位大納言 —通氏 早世 —具氏 中院此流當時斷絶

わぬし ●吾主と書おぬしと世話に云詞也文 ●吾の字をわとよむ也人をさして吾子といふも此義也野

いかゞ侍らん ●世話に何と御座らふといふ心也少うけぬ心籠れり參

さらはあらかひ給へ ●是より資季の詞なり諺

いはれて ●資季にいはれて也句

はか〳〵敷事 ●是より具氏の詞野

そゞろごと ●譫言共座言共書句 ●わけもなき言也増鐵

まして●資季の詞野
叡許の●天竺唐に對して日本をさしていふ盤
近習●院の近習諺
御前●院の御前にてなり壽●女房達の詞なるべし全
供御●天子への御膳也諺
饗らる●ふるまひがけのあらそひなりまふくるはこしらゆるなり壽
いりくれんどうと申事●馬のといふよりくれんどうと云迄古來其義さだかにしれず諺●是遠國などに馬のわづらひたる時のまじなひにする事也むかしより本說なき事にて如何なるゆへといふ事しれず此所は心を尋侍らんとあるにて大納言殿つまり給ふ馬のまじなひとも申べくや全●此所せんさくの義をつくる說もあれど凡卑の事也しらずとてありなん文
これはそゞろことなれば●資季の詞なり說
定申つと申されければ●もとよりといふよりこゝまでは具氏宰相の詞也諸
所課●課はおほすとよめり其所作をしおほするをいふこゝにてはかけに負て振廻をせられたるなり野　課は言偏に果といふ字をかけばいひし所をはたしおこなふ心也增鐵●日課などゝいふも一日のうちのつとめ事をかけずする事也參●又課は試也計也と字彙に注したり句●課はこゝろむる也まけたる人は供御まふけ給はんやとこゝろみ置し所を負かたよりせられしと也文
いかめしく●不畏とも嚴とも書なり參
〔一段之統論〕●此段は上の段をうけて衆にまじはりて不堪の身をしらずして恥をかきたる證人に出すなり上段あまた擧たりけることの中にて一つ二ついひて餘は略して同じ心なることをあらはせり盤●此大納言入道もかたのごとく物の本をば見給ふべけれども不レ問不レ答と云ふ五字のいましめを忘て一代の學問を空しくなし今の世までの恥をのこされ侍る此語は安然和尙の童子敎に見へたり惣別何の道を學する人も我身のためにはせず只ものしりといはれて人の師とならんとのみ思ふ故に童子敎つれのあさき書をば直下と思ひなして見ても心をとめざる故なりかるがゆへに倘書にいはく古

の學は爲ㇾ己今の學は爲ㇾ人と侍り又一切經のうちに三界の有情に人ほど慢氣の高きものはこれなしと佛の宣ひしとなり少し物しらぬ者に向ひ智者のふるまひいと見惡し貞

〔百三十六〕醫師あつしげ故法皇の御前にさふらひて供御のまいりけるに今まいり侍る供御の色々を文字も功能も尋下されてそらに申侍らば本草に御覽じあはせられ侍れかしひとつも申あやまり侍らじと申ける時しも六條の故內府まいり給ひて有房つゐてにもの習ひ侍らんとてまづしほといふ文字はいづれの偏にか侍らんと問れたりけるに土偏に候と申たりければ才の程既にあらはれにたり今はさばかりにて候へ床しき所なしと申されけるにどよみになりてまかり出にけり

醫師あつしげ　◉諸抄にあつしげ傳記しれずとあり唐醫と見えたりあつしげは名乘なるべし全

故法皇　◉九十四代帝花園院崩御以後にしるすゆへに故といふ諺 ◉前二十七段御讓國の所に傳くはし

功能　◉食性をいふなり文

本草　◉神農はじめて作り給ふ梁陶隱居是を注しそれより此かた唐宋の儒醫代々の增藥あり野　頭書云▲神農本草をはじめ呉氏本草唐本草藥性本草食療本草海草本草食性本草蜀本草開寶本草圖經本草證類本草湯液本草日用本草食物本草食鑑本草などゝいひて其品をほし參 ◉山案此外に本草あまたあれども今あまねく用るは時珍があつめる本草綱目なり

ひとつも申あやまり侍らじ　◉御膳にあがるものを一々に本草に引合せられば其氣味能毒寒熱温凉そらに申所に相違有まじきといふなり野

六條の故內府　◉內大臣有房公和漢の才人句　頭書云▲村上天皇十代之孫左中將通有之男從一位內大臣有房公法名賢忠和漢之才人能書歌人也續古今集之作者

通親（村上天皇八代之孫これまでは前段具氏宰相の段にくわし）——通光——通有——有房（委細は前百二段尹大納言光忠の所にくわし）

▲故とは世を去し人なるによつて云也古

内府　◉內大臣の唐名

しほ　●鹽の字也　頭書云▲韻會鹽余廉切說文鹹也从ニ鹵監聲一古者夙沙初作レ煮ニ海鹽一徐曰黃帝臣也集韻或作レ𪉧鹽俗作レ塩非レ是諺　▲如レ此字書に侍ればしほと云字に土偏に書はなしといへるにはあらねど土偏にそふろふと一すぢにきはめていへるは大才の人にあらざる事しられて床しき所なしとなり句　▲此說よからぬ見たてなるべしたとひ俗字なりとも土偏にかく字あらば此一章の心をうしなへるなり鹽の字も臣偏にあらず塩の字も土偏にあらぬ事をよく／＼吟味すべしたゞ日本の人の草にかく𡈽偏をながく引のばしてかくゆへに土偏のやうに見ゆる也鹽の字を俗字に塩に作ると字書にあれども塩も土偏にはあらず只土の字はひだりの肩さきにちいさく書のみ也されば海篇犀熠などの字書にも鹽の字をば鹵の字の條に入れて其下にて鹽の字のことをもことはれる事なり參

偏　●文字の偏旁の事野

土偏に候と　●塩の字は俗字也是迄あつしげが詞

才の程　●是より內府の詞諺

あらはれにたり　●にの字助字なり句

今はさばかり　●それほどゝいふ事也參

どよみ　●どつとわらはれてといふ義也八雲には響とあり野　頭書云▲古今秋の部に「秋萩にうらびれをれば足引の山下どよみ鹿の鳴らん句　▲後拾遺集に「世にどよむとよのみそぎをよそにして小鹽の山の御幸をや見しなどよめり文

まかり出　●御前を退出する也源氏にはまかでと有をまかんでとよみくせ也文

［一段之統論］●此段も前と同じく過言をいましめたり文　●此段と前段とをよく眼を著て讀べし當時の人少し物を習しればもはや世上に人もなげに思ひてみだりに過言を吐出すによりて恥をかく事每なれどもそれをはづかしきと思ふ心はつかず彌人をあざけるなりされば越中前司盛俊は己が力を賴み敵をあなどるゆへに猪俣に欺れて終にうたれぬ此資季あつしげ兩人も我才を賴みて人を直下とあしらふ故にかく耻をかくなり是すなはち敬のなき失也學者これを忘るべからずされば南宮括は三復ニ白圭一言の失あらぬやうにつゝしめり彼白圭詩曰白圭之玷尙可レ磨斯言之玷不レ可レ爲とあり一度

言を出しては駟も不ㇾ及ㇾ舌いへり只人としては己をかへりみて人をあなどるべからず論語に學如ㇾ不ㇾ及と云ふ又中庸に及ニ其至一也雖ニ聖人一亦有ㇾ所ㇾ不ㇾ知といひ又及ニ其至一也雖ニ聖人一亦有ㇾ所ㇾ不ㇾ能などゝあるにかく言をつゝします身に應ぜざる過言を出せば人又耻をかゝするものなり大學に言悖て出るときは又悖て入とありよく／＼つゝしむべし前にも智者は愚者になりといへり說

徒然草諸抄大成卷第十二

目次

下卷　●上下とわくる事紙數をほきにより上下にするもありもの丶表事にて上下にするもあり内篇外篇と分もあり●周易本義云以二其簡袠重大一故分爲二上下兩篇一●神代卷疏云又按神代上下二篇象二于日月一盤●或說に云つれ〴〵草昔は一卷なりしを近比より上下に分つとも板行の始は又種字と云ことにいたせしが其時分にわかてりともいへりさのみ徒然草の用にたゝざる事なりしかれども此所より分てるはよきほど也又段々に一二を付たるは段を尋しるの覺へなり正本にはなし全

〔百三十七〕花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは

くまなき　●阿字曲字を河海にくまとよめり壽●無レ隈とは晴明の月を云隈は 水隈など云は 水のよどむ所也然は雲などにかくるゝを隈と云諺

のみ　●のみの字力あり句

見るものかは　●見るものかはいや見るものにてはなしと云出して次に下の詞を起 したるもの也盤

●尤盛の花晴明の月を愛すれどもされ共それはばかりをのみ見るべきかと也參 此所諸抄の評多し　頭書云▲諸抄にも此のみと云字心ありといへり花や月を愛するにまづ盛に隈なきをもてはやすこと世の常ながら猶花は未開の時散過て後月は曇りたる雨の夜など見るこそ心はふかゝらめと也文▲猶月花はさのみ目にて見るものかはといふ所にて其心は明なり増鐵▲徹書記物語云花は盛に月は隅なきをのみ見るものかはと兼好が書たるやうなる心根を持たる者は世間に兼好一人ならではなし此心は生得にてあるなりといへり句▲是又兼好の人に異なる文章の妙なる處初段のあやしうこそものぐるをしといへるに能かなへり古今未曾有のことと也說▲蔡君謨吉祥寺探レ花詩 花未二全開一月未レ圓看レ花待レ月思依然明知花月無情物若使二多情一更可レ憐蒙齊曰二末字有レ意此是花月之關レ情處花月無情猶能動二人之感觸一所謂多情却被二無情惱一之意野▲六家集に家隆の歌に「世の中を思ひそむけて見るときは散こそ花の盛なりけれ▲西行歌に「中々に時々雲のかゝるこそ月をもてなすけしきなりけれ此類歌人の情にあらずばいかでか加樣には侍へからん誠に淺からぬ道なりかし文▲山案に枕草紙雲はと云

段に月のいとあかき面に薄雲あはれなりなんどあ
る心はへ又こゝによくかなへり
〔第一節〕花はと云よりのみかはまでなり此段みた
りに七節に分つ文段は九節に分つこゝにて節をわ
けす●山案に此一節は一段の綱要にして兼好の意
思の妙なるところを書たり末々まで種々に云かへ
て書といへども此一句の意を含て此一段をかけり
されはすべて月花をもてなすは不斷常住になきを
以て也花の盛も纔に七日といへばこれ久しからず
花を見る時がすくなき故を以て人これを愛す古歌
に「徒に過る月日は多けれど花見てくらす春ぞす
くなき●月も又同じ日は月より照まさりて萬民の
助となるものなれども常住にあるを以て人さのみ
これを不ㇾ愛月は盈昃あるを以て人これを賞す如
ㇾ此兼好云とても花月の盛明をかつて愛するなと
云には非す盛明の時節は勿論なり只兼好の志は花
の咲ぬへき梢や散しほれたる庭などを見て世上の
無常を觀念せよと也歌に「色香をも思ひは不ㇾ入梅
の花常ならぬ世にたぐへてぞみる月も亦雨によつ
て待ち或は曉方の月をながめて人間の盈戯ある事
を歎かんため也歌に「たれもみよみつればやがて
かく月のいざよふ空や人の世の中良に有難き筆跡
也

雨に向ひて月をこひたれこめて春の行衛しらぬも猶
あはれになさけふかし咲ぬべき程の梢ちりしほれた
る庭なゞどこそ見所おほけれ歌の言葉かきにも花見
にまかれりけるにはやく散過にければともさはるこ
と有てまからでなゞどもかけるは花を見てといへる
におとれる事かは花の散月のかたふくをしたふなら
ひはさる事なれど殊にかたくなゝる人ぞ此枝彼朶ち
りにけり今は見所なしなどはいふめる

雨に向ひて月をこひ　●古詩の題をもつてかけり
頭書云▲朗詠の名月の詩に對ㇾ雨戀ㇾ月と云にて源
順楊貴妃歸唐帝思李夫人去漢皇情此詩の意は雨夜
に見へぬ月をこひしく思ふことやうきひや李夫人
をこひかなしみ慕給ふにたとへたるなり
たれこめて春の行衛しらぬも猶あはれに　●玉垂
などいへは簾などをおろしこめて也諺●いつ春の
過るやらんしらぬ也諺●古歌の詞也古●此猶の字
又心ありまのあたり見たらんよりはとの心也文

頭書云▲古今に藤原因香朝臣の歌に「たれこめて春の行衛もしらぬまに待し櫻もうつろひにけり此歌を切て詞にひきうつしたる所面白し源氏などに多きこと也全▲葉平巖暮春即事雙々瓦雀行ニ書案一點々楊花入ニ硯池一閑ニ坐小窓一讀ニ周易一不レ知春去幾多時と作れる詩意よくこゝに相叶ひ侍る句

咲ぬべき程の梢　●花の前をいふ諺

ちりしほれたる庭などこそ　●花の後をいふ諺

頭書云▲續拾遺に太上天皇庭落花といへる題にて「今はとて散こそ花の盛なれ梢も庭も同じ匂にとよみ給へる歌の心なと思合すべし句▲「散ばこそいとゞ櫻は目出たけれうき世に何か久しかるべき「いざ櫻我も散なん一盛ありなば人にうき目見へなん古

見所おほけれ　●さかりは見所なしといふにもあらず多きとあるにてしるべしいかで盛よりは見所多きといふに飛花落葉を見て無常を觀ずるをさしておほきといふ也となん盤

歌の詞書　●歌をよく聞えさせしめんが爲に歌の心を詞にて書故に詞書といふ也又序書共前書共題書共云全　頭書云▲新古今春部下良暹法師が歌の詞書に雲林院の櫻見にまかりけるに皆散はてゝはづかに片枝に殘りて侍りければとあり▲又新古今雜の部上安法法師が歌の詞書に東山に花見に罷り侍るとてこれかれさそひけるをさしあふことありてとゞまりて申遣しけるとあり句

さはる事　●障碍の字を用ゆ用の事有て也

おとれる事かは　●かはとなめて劣はせぬと也諺
●花を見るは勿論歌人の情なから又散過しをおしみさはる事有てゆかで思ひやるもおとる事にはあらず今一入心はふかゝるべしと心を含たる詞なるべし文

花の散月のかたふく　頭書云▲花の散　古歌に「大空にをほふばかりの袖も哉春咲花を風に任せじ▲開元遺事云唐帝毎ニ宮中花開一以ニ重頂帳一蒙ニ被欄檻一置ニ惜花御史一掌レ之號曰ニ括香一和漢ともに花をゝしむこと勿論なり説▲月の傾山　案伊勢物語に業平の歌に「あかなくにまだきも月のかくるるは山の端にげて入ずもあらなん又後鳥羽院の御製に「くれば又見るべき影と思へども名殘をほか

る晨明の月▲惜月花歌「花散て月はくもらぬ世なりせは物を思ぬ我身ならまし「あたら夜の月と花とを同しくは心しれらん人に見せばや説
さる事なれど●さあるの略語説●さうあるべき事なれど也参
かたくなゝる●頑字●頑愚の人をいふ句●心かたくなしき人なり壽
見所なしなとはいふめる●此枝彼枝散にけりと云ひて花盛をしとふは尤ながら今は見所なしと云くだすは頑愚なる人と也花のちりしほれたる枝などこそ見所おほけれといへる首尾也文
［第一節］●雨にむかひてと云よりいふめるまでなり文段にはこゝまでを一部とす●山案に此節は始に花は盛に月は隈なきをのみ見るものかはといへるをうけて雨夜の月開落の花を見て無常變易の理を觀念せよとなりされは頑愚の人の月花を惜も同じやうなれども今は見所なしと云て少も觀念の志はなくて却て月花に心を惱るゝなり古歌に「散ばとて花に歎きの色もなし我ためにうき春の山風「大形は月をもめでじこれぞこのつもれば人の老

となるもの
萬の事も始終こそおかしけれ男女の情もひとへに逢見るをばいふものかはあはでやみにしうさをおもひ他なる契をかこちながき夜を獨あかし遠き雲井をおもひやり淺茅か宿に昔をしのぶこそ色このむとはいはめ
おかし●面白けれ也●是より月花にかぎらず萬事のうへを云り壽●決前生後の詞也かくいひて萬の事のうちにて男女の情一を次にいへり盤●上に花月の事を論じて下に男女の上をいはんとて中間に此一句を書る詞續尤味ふべし句
ひとへに逢見るをば●ひとへに逢見るばかりをいふ物か逢見るばかりは情とはいふべからずと心をふくめもとりたるてには也増鐵●情ものもの字いふものかはの詞皆發端の一句に應映して書たる筆力面白く侍る句
あはでやみにし●逢て止にし也又病にし也是戀の始也増鐵●あはでやみにしと云所戀の情也夫婦の道を戀といはぬにて心得よ全　頭書云▲山案に續

千載集に源親長「つれなさを歎かんための命かはながらへてこそ思ひしりぬれ
かこち ◉恨むる心也古
なかき夜を獨あかし ◉思ふ人の事を思ひ出て長き夜もねられす獨あかす也盤
遠き雲井をおもひ ◉遠き境をへたてたる事也壽
頭書云▲歌に「忘るなよ程は雲井になりぬとも空行月のめぐりあふまで野▲貫之歌に「白雲の八重にかさなるをちにても思はん人に心へだつな古
淺茅か宿 ◉荒たる宿也茅なと生たる宿を云諺
頭書云▲古今の戀の部に淺茅生の詞出たるを定家の注に草の長く生たるを草深といへは此淺茅生も短く生たる茅を云成べしと云り句▲歌に「淺茅生の小野の篠原しのぶれとあまりてなどか人のこひしき古▲彼昔見し妹が垣根はあれにけりなどの風情なるべし文▲柏玉集に「唯すみて心やすくも賴らん花に陰なき淺茅生の宿訖
昔をしのぶ ◉是戀の終也增鐵
こそ ◉此こそのてにはならひあり參
色このむとはいはめ ◉是皆忘るべき事なるにそれをわすれぬを色好むとはいはめとは結語なりひとへに逢見るを著して心を一偏にあるは色好のわざにはなきなり一境にとゞまらず心かたおちず頑しからぬを色好みとはいふべしと也盤
〔第三節〕◉よろつのことゝ云より好むといはめまてなり文段これに同じ◉第二節は花も未ㇾ開ほどちり過たる庭などの見所多きたとへに萬のこと男女の情も其ごとくなるよしをいへり文◉山案此節は上節をうけて萬のことゝ大綱を擧げ其中にて男女のことを先あげたりされば夫婦は人の大倫なればなりされどこゝは夫婦のことは不ㇾ云して色好の品を書しは兼好例のめづらしき文法なりしかも逢で止にしと情の始を云ひ他なる契り長き夜遠き雲井と思ひの中比をのべ淺茅が宿に昔を忍ぶと戀慕の終りをあらはし纔の中に戀の始中終をありありと其情の深きことをしるせり能々可ㇾ着ㇾ眼さてこゝのをもはく夫婦の道にも能かなへりものゝ十分なるところを惡むはひとへに叶へり夫婦別ありと云るも又此心ならずや
望月のくまなきを千里の外迄ながめたるよりも曉ち

かく成て待出たるいと心ふかう青みたるやうにて深き山の杉の梢に見えたる木の間の影うち時雨たる村雲がくれの程又なくあはれなり椎柴白樫などのぬれたるやうなる葉のうへにきらめきたるこそ身に入(シミ)て心あらん友もがなと都こひしうおぼゆれ

望月　●十五夜の月なり日と月と遥に相望むの義なり又は望は滿なりと注して滿るの義なり壽●望月は三五夜の新月をもてあそぶなれば月を見る始也増　頭書云▲釋名曰望月滿之名也月大十六日小十五日日在ㇾ東月西遥相望也▲莊子德充符鬳口義曰望滿也月盈曰ㇾ望句▲異國には月の大小によりてかはるといへども本朝にはなべて十五日を云参

千里の外　頭書云▲謝希逸月賦美人邁兮音塵濶隔二千里一兮共二明月一▲唐季嶠百詠三五一八夜千里與ㇾ君同▲白氏文集三五夜中新月色二千里外故人心野

曉ちかく成て　●曉方の月は二十日より二十五六日比の月を云也全●又曉の月は月見る終なるべし増鐵　頭書云▲古今序に秋の月を見るに曉の雲にあへるがごとし野

待出たる　●夜更て出るゆへに待出るといふ古

いと心ふかう　●ふかうと句を切べし跡に又なくあはれなりといふ詞をこめたる詞也又の義に跡に云べき詞をまてる詞也文

青みたるやう　●月影のすみきりたるは青みたるやうにてあると也盤●日暮の月は黄に見え曉の月は青みてみゆる也古

●木の間の影　頭書云▲新古今深山の月「ふかゝらぬ山の庵のねざめたにさぞな木の間の月はさびしき諺

●うち時雨　頭書云▲弘長百首號二七玉集一行家卿歌に「村雲のかゝれとてしも烏羽玉の夜わたる月のなどしぐるらん文

又なく　●勝れての義なり諺●無二亦無三の意なり鐵

●あはれなり　頭書云▲枕草紙云あはれなる物二十六日はかりの曉に物語して居あかして見ればあるかなきかに心ほそげなる月の山の端ちかく見えたると句

●椎柴　●たゞ椎の木なり文●椎の木の柴なり全

白樫　●是も柴のかし也大木には白樫はなし仝
葉の上にきらめきたる　●葉のひかりてつやのあ
る體なり諺
心あらん友もがなと　●上より云述る所の幽玄な
る景氣は歌人ならでは面白からぬものなり其故に
都の友を慕ふ也仝　頭書云▲素性法師の歌に一心
あらん人に見せばや津の國の難波わたりの春のけ
しきを説
〔第四節〕●望月と云より覺ゆるまでなり●第三節
は月は隈なきをのみ見るものかはの心を立かへり
いへり文●山案此節は始に月と花とをならべ論じ
なから花のことばかりを委く云て月のうはさを略
せるによりてこゝに又立かへりて月の事を細に述
て發端の句に應映せり殊に花と月との間に男女の
道の事の云たるもせまらぬ文法なり
凡月花をばさのみ目にて見る物かは春は家を立さら
でも月の夜は閨のうちながらも思へるこそいと頼し
うおかしけれ
凡　●何事もといふこゝろなり盤
目にて見るものかは　●目ばかりにて見るものに
あらず心に思ひやるよし也仝●目にて見るものか
はと云出して其次の詞に目にて見ぬ體を書り盤●
此句肝要也句　頭書云▲莊子駢拇篇吾所謂聰者非
レ謂ニ其聞一レ彼也自聞而已矣吾所謂明者非レ謂ニ其見一
レ彼也自見而已矣
春は家を立さらで●春といふにて花をもたせたり
頭書云　▲山谷詩春去不レ窺レ園黄鸝頗三請野
月の夜は云々　●秋を月にもたせたりかやうの文
體に心をつけて作例にすべき也仝　頭書云▲杜甫
詩今夜鄜州月閨中唯獨看野▲春は家を立去でもの
句は花をいひ下の思へると云るは月花をかね上に
春と云て下の月の句は秋なることをしらしめ下に
月の夜と云て上の春は花をいふ事をふくませたり
此文法男文字にては禮記にも見へ侍るなり句
ながらも　●さぞ月や出らんとおもふ也諺　直に目
にて見て愛するより見ずして思ふは猶たのもしく
面白きわざ也鐵増
おかしけれ　●おもしろけれといへる義也句
〔第五節〕●すべて月花と云よりをかしけれ迄也●
第四節月花を合せ論じて目にて見んより心に觀ず

るの面白ことをいへりさきに男女の情も偏に逢見るをばいふものかはとたとへし首尾なるべし文●山案此節上にいへる月花のことを結て目にて見るものかはと云留めたり此段三のものかはと云る字眼なり鼎の三足のごとく始中終相對せりしかも此節のものかはの字尤重し前の二のものかはといへる道理をこゝにて云盡せりさて春は家と云よりは目にて見ず心を以て觀念することをいへり此節此一段の肝要なり此次の節より此節まで餘論と見るべし此前の節に頑人（カタクナヒト）のことをいひしをうけて又立かへりて彼頑人のさまとよき人の志と雲泥のちがひあることをいへるなり

よき人はひとへにすけるさまにも見えず興ずるさまも等閑なりかた田舍の人こそ色こく萬はもて興ずれ花の本にはねぢより立よりあからめもせずまもりて酒のみ連歌してはては大なる技心なく折とりぬ泉には手足さしひたして雪にはおり立て跡つけなンど萬のものよそながら見る事なし左樣の人の祭見しさまいとめづらかなりき見ごといとおそし其程は棧敷不用なりとて奥なるやにて酒のみ物くひ圍碁双六など

あそびて棧敷には人をおきたればわたりさふらふといふ時に各肝つぶるゝ樣にあらそひ走りのぼりて落ぬべきまで簾はり出でおしあひつゝ一事も見もらさじとまもりてとありかゝりと物ごとにいひてわたり過ぬれば又わたらんまでといひており只物をのみ見むとするなるべし都の人のゆゝしげなるはねふりていとも見ずわかく末々なるは宮づかへに立居人の後にさふらふはさまあしくも及びかゝらずわりなく見んとする人もなし

よき人　●是よりよき人ど田舍人の物を興ずるを論せり諺

ひとへ　●專一なり參

興ずるさま　●二つのさまの字心を付べしよき人は心に淺からず數寄興じても其樣體大やうなると也文

等閑　●なげやりさまといふ事也前に注せり諺

かた　●すべていやしき者をさしていふなり文

色こく　●しつこくなど云心也文

あからめもせず　●傍見と書八雲には外見と書他所目もせず也註　頭書云▲咏に　大井川岩浪高し

筏士よ峯の紅葉にあからめなせそ書 ▲又「津の國の難波わたりの一つ橋君しわたらばあからめなせそ文

連歌 ●連歌してなどゝいへば一向下﨟の人にても有まじけれど其心根のやさしからぬ所あればいなか人なり句

大なる枝　頭書云▲赤染衞門集に云人のもとより櫻の枝をいと大きに折てをこせたりしに「我ために折る心はうれしくて花をしまずと見ゆる技哉文

泉には ●泉水などなり諺　頭書云▲李義山殺風景花上曬レ裩清泉濯レ足野

跡つけ ●雪は月花におとらぬ景物なれば心なく足跡つけることはよからぬ事と也諧鐵

よそながら見る ●月花にかぎらず四時の景物の惡敷見様を云つくしたりき全 ●文段には是迄を五節目として曰此節は能人と田舍人の物めでするさまとをくらべて色こく翫すは却て賤しく情すくなき事を云へり彼頑人の今は見所なしといひし首尾なるべし文

祭 ●祭とばかり推出していへば賀茂の祭の事也其子細上巻に委參

見ごと ●見る事どもおそき也文 ●又見物(ミコト)と書たる本もあり句 ●今いふねり物など也諺

不用 ●無用の義也句 ●祭の來たるを待程棧敷に居る事無用なりと云なり壽

棧敷には云々 ●祭のわたる時しらせよと云付て下人を置たる也句

わたりさふらふ ●祭の來る也と也諸

走りのぼり ●奥なる家より棧敷へ俄に我先にとのぼるなり諸

落ぬべきまで ●棧敷の落る樣に見ゆるまで句

見もらさじ ●わたりのねりものを一色も見もらさじとせし也全

とありかゝり ●兎の角のと批判をいふ也文　頭書云▲和語の兎角の意佛經の龜毛兎角といへる詞より出たりとなれは本より無なることを兎角といへるうさぎには角なき故なりしかれども和語の兎や角とわけて云義をかんかふれば兎は有の義角は無の義なれば兎あり角あるとは有無の評定をなせ

る義なるべし參
又わたらんまで　●まつりの見もの一はなく〳〵わ
たるさまなり又他の見ものわたらん迄は奥なるや
とて棧敷よりおりる也文
おりぬ　●おりぬのぬは畢ぬなり參
只物をのみ見むと云々　●只といふよりなるべし
迄は兼好評定なり參●決前生後の詞なりものを見
んとする田舍人のことを云て物を見んともせぬ都の
人のことを次にいふ也此詞ふかく案ずるに祭見て
無常の觀念なき事をいへり見物聞物につけて觀念
あるべきことなり是は天台の他事觀といふ也こと
につきて觀念有事也文句の觀法也止觀は直達觀と
いふ玄義は附法觀と云也盤●山案文段には左樣の
人よりなるべし迄を一節として第六節とす則文に
云第六節は彼田舍人の祭見るさまのさはがしきを
いふなり今譾に節を分ずいかんとなればよき人と
いふより次の見んとする人もなし迄は能人と頑人
との物を見るに付ての違ひをならべ論ぜる故に通
して見るべきなり
都の人●前に片田舍の人とあるにあたりて云り古

ゆゝし　●山案優々と書べしゆゝしとは善惡につ
かふ詞爰にてはほめたる語なり
宮づかへ　●若輩にて立居する下人諺●小性或は
腰本の類古●曲禮に宦(ミヤヅカヒ)とよませたり句
及びかゝらず　●肩などを及ひ越にせず諺
わりなく　●無ニ和利一と書り參
〔第六節〕●よき人のと云より人もなしまでなり●
山案此節は彼頑人のしつこくものを愛することを
戒めんために又立かへりて花を愛するより萬のこ
とに至るまで一偏に落入りたることを述て深く禁
めたりさて能人のことを對し論じて善惡のわかち
をしらせたり畢竟は兼好本意の彼つれ〴〵の所を
書んために祭のことを云ひ出して次之節に其志を
のべられたり能々可ㇾ着ㇾ眼
何となく葵かけわたしてなまめかしきにあけはなれ
ぬほど忍びてよする車どものゆかしきをそれかゝれ
かなど思ひよすれば牛飼下部などの見知るもありお
かしくもきら〳〵しくもさま〴〵に行かふ見るもつ
れつれならず暮る程には立ならべつる車共所なく並
居つる人も何方へか行つらんほどなくまれに成て車

どものらうがはしさもすみぬれば簾疊も取はらひ門の前にさびしげに成行こそ世のためしもおもひしられてあはれなれ大路見たるこそ祭見たるにてはあれ彼棧敷の前をこゝらゆきかふ人の見しれるがあまた有にてしりぬ世の人數もさのみは多からぬにこそ此人皆失なん後我身死ぬべきに定りたりともほどなく待付ぬべし大なる器に水を入て細き穴をあけたらんに滴る事すくなしといふ共怠る間なく漏ゆかばやがてつきぬべし都のうちにおほき人死なざる日はあるべからず一日に一人二人のみならむや鳥部野舟岡さらぬ野山にもおくる數おほかる日はあれどおくらぬ日はなしされば棺をひさくもの作てうちをくほどなし若きにもよらずつよきにもよらず思ひかけぬは死期なり今日迄遁れ來にけるは有難き不思議なりしばしも世を長閑に思ひなんやまゝ子立といふ物を雙六の石にて作りて立並へたる程はとられん事いづれの石ともしらねどもかぞへあてゝひとつを取ぬれば其外はのがれぬと見れど又々かぞふれば彼是まぬきゆく程にいづれものがれざるに似たり兵の軍に出るは死にちかき事を知りて家をもわすれ身をも忘る世をそむける草の庵には閑に水石をもてあそびて是を他所に聞と思へるいとはかなししづかなる山の奥無常のかたききほひ來らざらんや其死にのぞめる事軍の陳にすゝめるにおなじ

何となく　●是より兼好の祭見る志をいへり

葵かけわたし　●賀茂の祭日には葵をかくる也諸頭書云▲説文葵有二紫莖白莖二種一常傾レ葉向レ日不レ令レ照二其根一▲爾雅翼葵爲二百菜之主一云▲賀茂葵はつねに花壇にあるにてはなし異名も口葉草二葉草などいへり諸▲公事根源に昔夢の告侍しより今日

人々葵桂のかづらをかくるなり賀茂松尾の社司前の日より所々へ奉ると云々二葉の葵を長くつらねて桂の枝につけて御簾柱昔物諸道具などに今もかくる也野▲定家卿の歌に「かげみゆるひとへの衣うちなびく葵も涼し白き簾に　又俊頼朝臣の歌に「けふくればしどろにみゆる山かつのをどろの髪も葵つけたり又飛鳥井榮雅歌に「今日といへは簾のみかは葵草ふるき文にもまきそへてけり▲又もろは草ともよめり忠岑の歌に「日影山今日のかさ

しのもろは草かけてたのむとかみはしるらん▲備葵をかくることは賀茂の社家殊外に秘事にすることゝぞさるによつて諸抄にくわしく不レ載其謂は昔地神三代瓊々杵尊此日本を平げ玉ふ時に賀茂別雷神は別して働き玉ふゆへによつて尊此地の主となり玉ふ然る故に尊宣ふは向後臣下とは思ふまいぞもろは草の左り右りのやうに思し召すとなり只天照太神と左右に思し召んと也これ神代の古君臣合體のありさまを今も表してもろは草をかくるなりされば六百番歌合に一久堅のあまてる神の光りにはあらそふものは賀茂の瑞籬其上當社は山城の地主天子を治め諸民の護神也可仰也説

なまめかしき　●最媚共嬋娟とも書やさしき意前に委

明はなれぬほど　●未明より車にて棧敷にくる人のさま也文　●何となくといふより跡へかえして朝のことを書也筆法也源氏などに多し盤

忍ひてよする　●さきに何となく葵かけわたしといひ爰にて忍てよするといふも皆しつかなる體也文

車ども　●物見車ともの事也諺

それかかれか　●其人か彼人か諺

思ひよすれば　●其人の車かなどゝ思ひよするなり文

見しるもの　●誰の召仕るゝ者と見しる諺

おかしくも　●様子の面白き也文

きらきら　●華麗の義也壽

さまざまに行かふ　●往還の字をよむ句　●行違也兼好こゝろ也仝

つれづれ　●祭ならねど加様の有様を見るもつれづれなくさむとなり文　●見物の人を見るさへいそがはしき程の慰みなるにさのみ祭を見もらさじとするはいかなる心にてあるぞとなり盤

暮る程には　●山案是より兼好本意をそろそろ書出せり　●前はいまだ祭のわたらぬ程のけしき也是よりは祭すみたる體也是萬の事は始終こそおもしろけれといひし首尾也文

車共　●物見の車共壽

まれに　●人まれにさびしくなりて也諺

らうかはし　●亂れかはしき也野　頭書云　▲源氏夕

良にらうかはしき大路に立をはしましてとあり野
さびしげに　●始には祭の賑き事をいひ終にはさ
ひしげに憂はしき體を書り男文字にも此例あり蘭
亭記なと讀合べし句
世のためし　●祭の始終を見て世間の治亂盛衰の
ことをおもひ出すなり壽
祭見たるにてはあれ　●結語也かゝることはりを
觀ずるたよりなれば大路を見たるが祭といふもの
よとなり盤　●是又決前生後の詞也文　●山案文段に
は都人といふより爰迄を第七節となして都の人の
物見の閑なるさまなりといへり今文段にしたかは
す何となくと云より爰迄は兼好の祭見たる有樣を
云て大路の一句を以て上件の頑人の祭見樣の事を
抑て又次に其大路の見やうをいひたり
こゝら　●源語類聚云巨々等とは多きなり壽　頭
書云▲萬葉に幾許と書てこゝらとよめり句　▲古今
在原元方歌に「めづらしき聲ならなくに時鳥こゝ
らの年をあかずもあるかな古
あまた　●前に牛飼下部なんどの見知れるもあり
と書たるをうけて云出たるおもしろきにや文

しりぬ　●此しりぬの詞さびしきは下の端をおこ
していふ也參
ほどなく待つけぬへし　●たとひ此祭見し人こと
ごとく皆死して後我身死するにしかと極りたり共
程なく待付ぬべきをまして老少不定の境なれば我
死の到來今にもしれぬといふ意言外に有猶此人み
なといふかみにたとひといふ字を心にもちて又た
りともと云てにはに心を付る時は其かくれなし此
一句の意諸抄にもらせり是つれ／＼一部建立の大
意也　頭書云▲古歌に「終又我もなき身となるみ
瀉はかなきものは沖津白浪説　▲新古今に「末の露
もとの雫や世の中のをくれ先立ためし成らん諺
大なる器云々　●是よりたとへなり野槌には漏刻
の事とみる參　頭書云▲初學記二十五曰梁漏刻經
云漏刻軒轅時初也乃至冬至ニ晝漏四十五刻冬至之
後日長九日加ニ一刻ヲ至ニ夏至ニ晝漏六十五刻夏至之
後日短九日減ニ一刻ヲ或以先ニ冬至ニ三日晝冬至後三
日晝漏四十五刻夜五十刻先ニ夏至ニ三日晝夏至後三
日晝漏六十五刻夜三十五刻云々參　▲今の世の沙時
計も漏刻と云なり日本には齊明帝六年庚申始造ニ

漏刻一全
したゝること云々　頭書云▲梵網經菩薩戒序曰水漏雖レ微漸盈ニ大器一參
やかてつきぬべし　●かぎりある命のつくるたとへなり全●世の人死して後我身の死するに應ず諺
一日に一人二人　頭書云▲神代卷上云伊弉冊尊曰愛也吾夫君言ニ如此一者吾當縊ニ殺汝所治國民日將千頭一伊弉諾尊乃報之曰愛也吾妹言ニ如レ此一者吾則當產ニ日將千百頭一野
鳥部野舟岡　●葬送の場也　頭書云▲鳥邊野は釋尊をたびし奉る所をこゝにうつして云天竺の鶴林よりことをこれり鳥邊野これ也全上卷詳也▲舟岡山城千本のあたり也葬送の所也參▲西行撰集抄に鳥邊野の烟たへず舟岡の死人隙もあらずいづれの日にか舟岡鳥邊野のほとりに骨をさらして空き名をのみ殘さん▲又西行歌に「舟岡のすの野の塚の數そひて昔の人に君をなしつる諺
野山にも　●其外の墓所也諺
をくる　●葬送なり諺　頭書云▲佛說に四葬ありとかや所謂火葬土葬水葬野葬是なり罪業なき人は火葬土葬是上品の葬なり惡業の人ならば野葬水葬上品の葬也水葬は河海にすて野葬は野に曝すなり艶色あつて人に戀慕るゝもの野葬となせは上品の葬也檀林皇后御遺言にて野葬になし奉る也今の世にまれなるゆへに此事しれる人もなし全
をくらぬ日はなし　頭書云▲白氏長慶集六云請看原下村々人死不レ歇一村四十家哭葬無ニ虛月一文
棺をひさく　●死骸を入る箱也●ひさくは鬻の字也字彙云鬻は賣也と云々句　頭書云▲和名集云棺一音貫和名比止岐所ニ以盛一屍也書▲ひときひつき五音相通なり文▲韓非子備內篇輿人成レ輿則欲ニ人之富貴一匠人成レ棺則欲ニ人之夭死一也參▲淮南子鬻レ棺者欲ニ民之疾病一孟子公孫丑矢人惟恐レ不レ傷レ人函人惟恐レ傷レ人巫匠亦然故術不レ可レ不レ愼注▲巫者爲レ人祈祝利ニ人之生一匠者作ニ爲棺椁一利ニ人之死一趙岐注云巫欲ニ祝活レ人匠梓匠作レ棺欲ニ其蚤售一利在ニ於人死一也野
作てうちく　●每日死て行人あれば年前に作て置く程のなき也諺
思ひかけぬは　●不慮に死する人間なり諺

不思議なり　●兼好自いへり諺　頭書云▲論語雍
也篇子曰人之生也直生罔生也幸而免說
しはしも世を云々　●暫時の間も常ある身と思は
んやと也諺　頭書云▲堀川百首に「今月とても世
を長閑には思はねどあすしらぬ身ぞあはれなりけ
る文　▲安養尼の歌に「出る息入る息またぬ世中を
長閑に君は思ぬる哉
思なんや　●思ふまいと也古
まゝ子立　●是またたとへなり文　頭書云▲一●一〇
●三〇五二●二〇四●一〇一三●一〇二二●一〇如レ此黒白の石をなら
へてかぞへて十にあたるを陰なり壽　▲山案まゝ子
立の圖

○●○○●●
○　　　○
○　白石　●
●　十五　●
○　　　○
●　黒石　●
●　十五　●
●　　　●
●　合テ卅　○
○　　　○
○●●○○○

此鱗形を付し石より左の方へ一つ
つかぞへて十にあたりしをまぬき
△ゆけば白き石皆のぞきはてゝ後に
は丸を付し白石一つばかり殘るな
り其時かぞへ來し順廻を飛して右
の丸付し石より又改て右の方へか
ぞへゆきて十にあたる石をまぬき
ゆけは黒き石皆のぞきはてて右の
丸付し白石一つばかり殘る也
のかれぬ　●此ぬ畢也ふのぬにあらず句　●其外は
遁たりと見ゆれどゝ也文
まぬき　●脱の字也壽　●こゝにては間援の心なる
べし野
のかれざる云々　●まゝ子立の石の遁ぬにおくれ
先立死の道似たりとなり鐵増　●山案文段には彼機敷
といふよりこゝ迄を第八節となして無常を観じた
りといへりされど暮る程といひしより以下は皆無
常を観ずる事をかけるゆへに今節を不レ分
兵の軍　頭書云▲山案兵と云は本五兵とて矛戟弓
劒戈の五つの武具を云ふされば其五兵を執て働く
武士なるゆへを以て武士をさして兵と云こゝにて
は器物には非す武士のことを云ふなり▲軍字彙云
軍規雲切音均萬二千五百人爲レ軍
死にちかき　●敵に對すれば千に一も遁れがたし
諺
家をも忘れ　▲此たとへは死をたしかにしらぬ故
に油斷する也實必死ぞとしる故に萬事をなげうつ
となんぞ軍にかはらんされども眼前ならぬことは

ゆだんすると也盤　頭書云▲殘儀兵的云作東坡將及ニ
於出陣ニ不レ愛ニ其妻一句
世をそむける　●世間を捨たる桑門の事をいふ諺
●兼好身上をいふならし文
水石をもてあそび　●水石をもてあそぶとは隱居
する事に昔より用たる事也參　頭書云▲昭明太子
書云息ニ糞塵ニ玩ニ泉石一句　▲唐田遊岩隱ニ箕山ニ高祖
幸ニ其門ニ曰先生比佳否答曰臣泉石膏肓煙霞痼疾野
▲天台大師和讃にも大師はもとより泉石を好て隱
居し玉へど陳隋二帝あひつゞき請じ下し奉るとあ
り參
是を　●此是字上の兵の軍に出るといふより身を
も忘るといふ迄の心を指句　●此是と云字は死の事
を指て云增鐵
他所　●余所に聞と思ふ人は愚也となり諺　●生死
無常は出世の身も遁世のうへもかはる事なき道理
を驚かししらしむる也句　●軍兵と桑門とは騷しき
と閑なるとの身の樣こそかはれ死に近き事を知て
家をも身をも忘べき事は偏に似たる物なれど軍兵
はあらはに死近き者也桑門は死を知て後世に入て

て世を捨たりといへば猶閑にして死の近き事あら
はならねばかへりてこゝに油斷あり其故に軍兵を
たとへにひきて桑門の身のいましめを書るにや文
無常のかたき競云云　●競字にてあらそふ義也上
に兵陣のたとへを云によりて敵字を取出す　頭書
云▲競莊子口義曰競爭亦一意但競則甚ニ於爭一尒參
▲來らきらんや觀心略要集云無常殺鬼不レ擇ニ豪
賢ニ山海空市無ニ遁避者一參　●法句經第二云山海空
市有ニ梵士兄弟四人ニ各得ニ神通一知ニ後七日一時死ニ
自共議定我等四人五通之力翻ニ覆天地ニ捫ニ摸日月一
寧不レ避レ死一云吾入ニ大海下ニ不レ至レ地不レ出レ水一
云入ニ須彌服ニ還合ニ其山一一云輕擧ニ空中一一云入ニ
大市中ニ各云如レ是所レ避ニ無常殺鬼ニなりとしかれ
ども其時節に四人ながら一時に死たるとなりされ
ばいづくへも無常のかたきはくるものぞとなり古
歌にも「いかならん巖の中に住ばこそ世のうきこ
とのきこへこざらん盤
死にのぞめる　●たとひ山里へ入むとても遁れ難
き人間の化なる事をいふ諺
陣　頭書云▲論語衛靈公篇朱傳曰陣謂ニ軍師行伍

之列一句合字彙陣行列也云々文
〔第七節〕●暮るほどゝ云より終までなり●山案此節は上の節に頑人都入の祭見しことをうけて兼好の祭を見て世を觀ずることをかけりさて末には譬喩をあまた云し中に取分て此結句の軍のたとへ親切なして人たるものゝ少しも死のことを油斷すまじきことを教へたり故に文段などには兵の軍と云より節を分て第九節とすされど此兵の軍より前にもまゝこ立や漏刻なとのたとへあれば文意に於て節を分ちがたきやうなりされども尤肝要の所なれば別して人に教んためならばさもあるべし●第九節は如レ是無常は誰ものがれぬ世に後世の勉たゆむべからすとの意を軍兵のたとへに合せて兼好の身に觀じて自警たり文●折しも此時分太平記の時分なれば死の近きをしるものゝ家をも身をも忘ることをあげて世をそむける人の水石をもてあそびてかへつて死の來を佗所にきくは墓なきことをのべて自らいましめ人をもをどろかせり兼好集に修學院と云所にこもり侍る比「のがれても柴のかりほのかりの世に今幾ほどかのどけかるべき幾ほどゝ云に生程といひそへたり諺此歌此段の心にひとしく侍るにや

〔一段之統論〕●上巻の末の兩端に資季あつしげの都に住ながら田舍人の如く成心ばへあることを記せるにうけて又此段には花月のことより筆をおこし萬の遊興に付ても都人と田舍人との各別なる賞心の有さまをうつし又京に田舍あり田舍に京ありと俚語の心をもふくませ中比は賀茂祭のことに說至り世の盛衰を感じ合る髑髏亭記の面影もうつりてあさ〱しからず末には生死無常の理をあかして例のこのめる佛道に引入たりいづれに勝劣あるまじけれと此段の文章心詞尤殊勝に侍る句●山案新注に云此段は下卷の頭なればつれ〱の意をしめしたりつれ〱と云は物の盛ならざる所にあり萬端色こく威勢つよきは皆つれ〱に非ず物のおとろへ行を感し常ならぬを思ふこそ兼好本意なれ盛者必衰の理をしるして終に無常に歸宿して人に菩提をすゝめたり奇特の文章ならずや是大慈大悲の方便なり世間の人或は名利を求め才藝をのみつとめて無常を忘れ生死事大をさとらざるは鏤レ氷

文章發三工巧一と山谷がいへる事思ふべし良に何となくと云よりは兼好が志を述て見るもつれ〴〵ならずと云て例の觀法をあらはし或は大路見たることなどゝいへること妙なる文意古今未曾有なる段なり尤可レ仰可レ尊●此段心なき者に心を着て愚なるを賢くなし無常をすゝめたる段なり生付利根の人も此心持も不レ聞は物に氣を作ることなからん故に其智慧用にたゝざるべしたとひ愚なる人なりとも此段を見聞て實もと思ひたらばよき人となるべしいつれも甲乙はなけれども別て殊勝の段なりと先達も申傳られきある古人の注に香は禪心より火を用ることなし花は合掌にひらきて春をまたずといふ北野の御作の詩の心にて此段のをもむきさとりしるべしと云々貞

〔百三十八〕祭過ぬれば後の葵不用なりとて或人の御簾なるを皆とらせられ侍しか色もなく覺え侍しをよき人のし給ふ事なればさるべきにやとおもひしかど周防内侍がかくれどもかひなき物は諸共にみすの葵の枯葉なりけりとよめるも母屋の御簾に葵のかゝりたる枯葉をよめるよし家集にかけり古き歌の詞書に枯たる葵にさしてけはしけるとも侍り枕草紙にもこしかた戀しき物かれたる葵とかけるこそいみじくなつかしう思ひよりたれ鴨長明が四季の物語にも玉垂に後の葵はとまりけりとぞかけるをのれとかるゝだにこそあるを名殘なくいかゞ取すつべき

祭過ぎ　●賀茂の祭也前に委し●上段に祭の事をいへるにかけたる書様也句

後の葵　●葵かくる事前注當日過たるをは後の葵といふ盤

不用なり　●無用の義也上に見えたり參●祭過て後かけおく事無用也句

色もなく　●心の色なく情なきことなり文●あいそうもなく也諺●あまりすなほすぎたると也盤

さるべきにやと　●さうもあるべきことにやと也又しかるべき事にやといふに通ずる也鐵増●左様に取も捨べきにやと覺しかど古人も枯たる葵を捨す翫びし事ども有といはん爲なり文●此歌を引事古人を證據として今をそしれる心ばへなり諺

周防内侍　頭書云△也足軒の御說云周防内侍仲子後冷泉院女房或宗仲女云々一本葛原親王八世孫棟仲

女云々又周防守從四位上繼仲女玄旨法印百人一首抄にあり文

系　圖

桓武天皇（人皇五十代）─葛原親王（一品式部卿 贈太政大臣）─高棟王（大納言 正三位）─惟範（中納言 從三位）─時望（從三位 中納言）─直材（從四位下 伊勢守）─親信（參議 從二位）─重義（從四位下 安藝守）─棟仲（從五位周防守或は繼仲）─女（白川院 內侍）

かくれ共　頭書云▲葵をかくるを人に心をかくるによそへたり句

かひなきものは　頭書云▲あなたよりも此方よりも諸ともに思へどもかいなきと也かいなきとは相逢ことと叶ぬをいへり全

みすの葵の　●此歌の注數說あり一說は（頭書にあり）直なる說は下にしるす●此なまめかしき翠簾の葵の枯葉も諸共に見てこそ甲斐あらめ思ふ人とも見ねばかけ置てもかひなしと也諸共に見ずといひかけし詞なり文　頭書云▲御簾は見ずと云ひかけし辭也說▲人を見ずと云によそへたり句▲後撰の歌に一君により我身ぞつらき玉垂のみすは戀しと思はましやはとよめる歌も此格也▲又一說みすとはみすると云下略也それを翠簾によそへたり全

かれ葉　頭書云▲かれは遠ざかりへだゝるを云みすの葵のかれ葉によせてなり葵のかれ葉に見するとの心也全▲離別の離の字をかるゝとよむかれ葉になるとは別るゝことを云ふ說

母屋の御簾　●本屋共書●今いふおもやと同じ諺　頭書云▲母屋とは子庇孫びさしなど云に對しての事也家のなかを云也母屋のみすとは廂と奥とのへだてにかけたる也そとがはに又みすをかくるゆへにかく云也磐▲近材集にはまん中の家のことなりと在八雲には死人のあり所なりと注せり此時は喪屋と書べきか所により用ひかふべきことなり句▲或說に母を置所を指て母屋と云となり父こそ本屋には置べきことなれども總家は皆父の家なれば母を置所を云となり諺▲長明無名抄周防の内侍我さへ軒の忍草とよめる家は冷泉堀川の北と西との角なりといへり此家のことにや文

家集　●歌人の自の歌を書集るを云文●內侍が家

集也

古き歌の詞書　頭書云▲新古今はやう物申ける女に枯たる葵をみあれの日つかはしける實方ーいにしへのあふひと人はとがむともなをそのかみの今日ぞわすれぬ返事詠人しらず「枯にける葵のみこそ悲しけれあはれとみずや賀茂の瑞籬壽▲詞書のはやうとはむかしと云心也實方歌は逢日と云てあふひをもたせたり返歌はあふいとよむべし歌の心は兩首ともに明なり此類猶あるべし増鐵

枕草紙　●清少納言が作三冊あり野●或は二冊或は五冊異本あまた有文　頭書云▲歌の枕詞にして其類をあつめたるものなり全▲枕とははなたず隨身する心なるへし古き歌にも「とぢ置し枕草紙の上にこそ昔の人の夢も見へけれとよめり盤

いみしくなつかしう　●清少納言が辭をほめて引けり參

鴨長明　頭書云▲本朝遯史云菊大夫長明者賀茂社氏人也工ニ倭歌ー精ニ管絃ー其名籍甚云々參▲作者部類云鴨禰宜長繼男季繼孫應保元年十月十七日中宮叙爵云々歌は俊惠法師の弟子なりしを後鳥羽院和歌所の寄人となさせ給へり出家して法名蓮胤とて外山と云所にすみける草庵に後鳥羽院御幸せさせ玉へるよし心敬僧都のさゝめごとに見へたり文▲十訓抄にちかごろ鴨社氏人に菊大夫長明といへるものあり和歌管絃の道人なり社司を望に叶ざるゆへ出家す古

四季の物語　●四季物語四卷あり諸

玉垂　●玉簾なり句

後の葵　●又證據に出したり如レ此あまた引出したる心は能人の捨し事なれば少々ことにては僻事とはいはれぬ心也盤

かゝるだに　●自然とかるゝたにおしく有物をと也文

いかゞ取すつべき　●兼好評論也取捨ることはりなきこそ尤なれとなり

「第一節」●發端より取すつべき迄なり此段二節に分ち見るべし●前段に賀茂の祭の所に何となく葵かけわたしなと書たるをうけて彼葵のかれ葉を取まじきことをいへりやさしき心ばへなるべし文

チヽントバリ貞德

御帳にかゝれるくす玉も九月九日菊にとりかへら

ミテウ野足

るるといへばさうぶは菊の折までも有べきにこそ枇把皇大后宮かくれ給ひて後古き御帳の內にさうぶ藥玉などのかれたるが侍りけるを見て折ならぬねを猶ぞかけつると辨の乳母のいへる返事にあやめの草はありながらとも江の侍從がよみしぞかし

御帳に ●是より五月の菖蒲くす玉は九月迄もをくるをいひて後の葵もやがては取すつまじき物ぞとの心を云文

くす玉　頭書云▲公事根源云五月五日節會天皇武德殿に出御なりて安全を行はれ群臣に酒を給なり內辨なども四節に同し人々皆あやめのかづらをかく日かげのかづらの如し典藥寮あやめのつゝみを奉る群臣に藥玉をたまふ五色の糸を以てひぢにかくれば惡鬼をはらふと申本文侍り荊楚歲時記に長命縷續命縷命縷とて五色の絲に菖蒲なと玉にぬきたる物なり今五月五日に色々のつくり花に糸をつけて女童のもてあそびとするは即其遺法なり文▲山案西宮記云糸所献二藥玉二流一送二諸寺一藏人所之結二付座母屋南北柱一云々或御記云延喜十三年五月五日糸所供二奉藥玉一如レ常云々くす玉は長命縷續命縷より始りたるよし舊抄に云り是漢朝の故事なれは甘心せず天照太神の素盞嗚尊と玉をとりかへ玉ひし事などは惡神降伏の大事なれば五月五日續命縷の起とや申べからん世人本朝の故事を忘れたまたま遺事の侍るをも多くは漢朝の似たる事に引あはせしこと我國の人としてはなけかしき事なりと或人申されし

菊に取かへらるゝ ●清少納言が枕草紙に書るをさして云也諸 ●さうぶ藥玉も九月迄をく事をいひて葵取ましき事を云なり説　頭書云▲枕草紙節はといふ所にきさいの宮などには縫殿より御藥玉とて色々の糸をくみさげてまいらせたれば御帳たてたる母屋の柱の左右につけたり九月九日の菊をあやとすゝしのきぬにつゝみてまいらせたる同し柱に結付て月比ある藥玉とりかへてすつめる又くす玉は菊のをりまであるべきにやあらん文

さうぶ ●菖蒲の事なり諸

枇杷皇太后宮　御堂の關白道長公の御女妍子也文　頭書云▲續世繼云上東門院御一腹の妹道長公の御女三條院后なり萬壽四年九月三十四歲にて隱れさ

せ給ひさ枇杷殿の皇太后宮これなり諸抄に昭宣公の女穏子の御事といへるは時代以下誤なり文

大織冠鎌足──淡海公不比等──房前─┐

┌眞楯──內麿──冬嗣──良房──基經─┐

┌忠平──師輔──兼家──道長──女（右いつれも前にくわし）

猶ぞかけつれ　●此歌の事冠考にくはし

辨の乳母　頭書云▲作者部類云前加賀守顯時女也陽明門院御乳母諸　系圖重可レ考

江の侍從　頭書云▲作者部類云大江匡衡女母赤染衞門也諸

平城天皇（人王五十一代）─阿保親王（四品）─本主（備中守從五位下 始賜二大枝姓一）─┐

┌音人（參議從三位 號二江相公一）─千古（從四位上式部 權大輔歌人）─維時（從三位 中納言）─┐

┌重光（式部大輔 從四位）─匡衡（正四位 下侍從）─女（歌人江 侍從）

よみしそかし　●此歌の贈答の事冠考にくはし贈答の歌●千載集哀傷部に枇杷殿の皇太后宮煩ひ給ける時所をかへて心見んとて外にわたり給へりけるをかくれ玉ひて後陽明門院一品內親王と申ける枇杷殿にかへり給へりけるに古き御帳の中に菖蒲藥玉などの枯たるが侍りけるを見てよみ侍りける辨乳母「菖蒲草淚の玉にぬきかへて折ならぬねを猶ぞかけつる返し江侍從「玉ぬきし菖蒲の草はありながらよどのはあれん物とやはみれ諸●はじめのあやめ草淚の玉にぬきかへては藥玉をそへてなり文●言は皇太后宮の御座ときは藥玉を拔たりし菖蒲草を今は泪の玉にぬきかゆる也諺●折ならぬ云云とは菖蒲のねに啼音をそへて九月なれば折ならぬねと云なり文●又思ひよらすかくれ玉へるを云んためによそへて云なり諺●返しのよどの淀野は菖蒲ある所なるに夜殿と后宮の御寢所をそへてよめり文●歌の心は玉拔し菖蒲草は其まゝ殘りてありながら其人かくれ玉へは如レ此に夜殿は荒はつべきものとやはか思はざりしものをとよめる心也諺

〔第二節〕●御帳と云より終までなり文段これに同じ●此節は葵のみならず五月の菖蒲藥玉も五月の節過ても其まゝをきて九月までありとなりことの

かはりたることなれど意は通ずる故に證據にかく云なり盤

〔一段之統論〕●此段前章の葵かけわたしたると云をうけてこゝには又葵の枯葉をとり捨たるは情なきことをのへて花は盛に月は隈なきを見るものがはの心を猶もいひあらはして一切の物は必のこりたる跡こそ面白けれと云ことをいへり諺

〔百三十九〕家にあり夏木は松櫻松は五葉もよし花はひとへなるよし八重櫻は奈良の都にのみ有けるを此比そ世におほくなり侍るなる吉野の花左近さくら皆ひとへにてこそあれ八重櫻は異樣の物也いとこちたくねぢけたり栽ずとも有なん遲櫻又すさまじ虫のつきたるもむつかし梅は白きうす紅梅ひとへなるがとく咲たるもかさなりたる紅梅の匂ひめでたきも皆おかし遲き梅は櫻に咲あひておぼえおとりけをされて枝にしぼみつきたる心うしひとへなるが先咲てちりたるは心とくおかしとて京極入道中納言は猶ひとへ梅をなん軒ちかくうへられたりける京極のやの南むきに今も二本侍るめり柳又おかし卯月ばかりの若楓すべて萬の花紅葉にもまさりてめでたきもの也橘桂何れも木は物ふり大きなるよし草は山吹藤杜若撫子池には蓮秋の草は荻薄きちのう萩女郎花ふぢばかましをにわれもかう苅萱りむたう菊黄菊も蔦葛朝顔いづれもいとたかからずさゝやかなる垣にしげからぬよし此外世にまれなるものからめきたる名の聞にくく花も見なれぬなといとなつかしからず大かたなにもめづらしく有がたき物はよからぬ人のもて興ずるもの也左樣の物なくてありなん

松は五葉　頭書云▲唐詩鼓吹に李賀五粒松の歌作るとあり五葉の松なり▲酉陽雜俎世言ニ松五粒ー者粒當レ言レ鬣自有ニ一種ー名レ鬣皮如ニ鱗甲ー結レ實多新羅多ニ此種ー野

八重櫻　●奈良の都に八重櫻を植られし事は聖武天皇の時なり八重櫻物語にくはしきよし盤齋抄に見えたり事長き故略す　頭書云▲詞花集云一條院の御時奈良の八重櫻を人の奉りけるを御前に侍ければ其花を給りて歌よめとをほせられければよめる伊勢大輔「古の奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬる哉文▲私云これよりして八重櫻を歌によみそめたり兼好心に好みたまはざるよしのていなり

全

吉野の櫻　頭書云▲古今序に春のあした吉野山の櫻は人丸が心には雲かとのみなんをほへける野

▲神の杖を二本立給ひしが花になりたるなり盤

左近櫻　●紫宸殿南庭の左右に左近の櫻右近の橘の雨木有諺　頭書云▲江談云内裏紫宸殿南庭櫻樹橘樹者舊跡也件橘樹地者昔遷都以前橘本太夫宅也

▲拾芥云南殿前庭櫻樹者本是也桓武天皇遷都之日所レ被レ植也而及承知年中枯失仍仁明天皇被ニ改樹一也云々これ仁明天皇の御宇より櫻をうへらるゝと也猶禁秘抄にくわし文

ひとへにて　●ひとへ櫻のよき證據に出す也盤

こちたく　●萬葉には言多(コチタキ)の字をよませたり句　●巨度大(コチタク)きなるよし也盤　●夕顔卷に此詞出たるを河海に事の外也ことくしき義也と注せり句

ねちけたり　●佞の字也口きゝがましきことなり壽えうの重なりてことむつかしくすなほならぬよし也盤　頭書云▲萬葉に「奈良坂や兒手柏の二面とにもかくにもねぢけ人かな壽

遲櫻　頭書云▲王荊公詩　山櫻抱レ石映ニ松枝一比ニ並餘花ニ開最遲只有ニ春風嫌ニ寂寞一吹レ香渡レ水報レ人知此詩を本集には山櫻と題せり全芳備祖には櫻桃の部に入たり野

すさまじ　●時過てつきなき心也前に注す

虫のつきたるも　●遲櫻の比は春陽の氣も盛にてかならず毛虫などあり文

むつかし　●むさ〳〵しき心也盤　●いやなる事也盤

白きうす紅梅　梅は第一白梅よし薄紅梅も又よしといへる義也句　頭書云▲美和父集載ニ梅十一品一紅梅粉紅色標格是梅而繁密則如レ杏香亦類レ杏參

ひとへなるが　●紅白の二種にかけて云句

とくさきたるも　●初春にはやく咲をいふ參

かさなりたる　●ひとへならす咲重りたるを云上のひとへと云に對して云句

遲き梅　頭書云▲東坡詩曰二月驚ニ梅晩一幽香此地無野　▲後撰集に「宿ちかくうつして植し甲斐もなく待遠にのみ見ゆる花かな▲又古歌に「梅さくらともに花にし花なれど花はさくらに香は梅にこその心ばへ也誹　▲山案惣じて梅は早く咲ゆへに諸

花の兄といへりたとひ櫻より勝りたりとも常を失てさくほとに何ぞ愛せんや其うへ櫻よりをほへをとりたれば也

おとり　◉先櫻を愛すれば梅はおとる也諺

枝にしぼみつき　◉不ㇾ散して也

心とくおかしとて　◉花の心のさとく思はるゝ事也文

京極入道中納言　◉定家卿也　頭書云▲鎌足十七代孫正三位皇大后宮大夫俊成卿之長子正二位權中納言定家貞永元年十一月出家法名明靜仁治二年八月二十日薨年八十三號二京極一父子共以二倭歌一鳴二于世一人皆所ㇾ知也諸　▲京極の北は冷泉南は二條二家ありける故に京極入道中納言と申す文　系圖

鎌足――不比等――房前――眞楯――内麿―

―冬嗣――良房――基經――忠平――師輔―

―兼家――道長――長家（正二位權大納言）――忠家（正二位大納言）―

―俊忠（從三位權中納言本名親家號二二條一）――俊成（正三位皇太后宮大夫）――定家

ひとへうめを　◉上にかさなりたる紅梅もとあれを必竟ひとへ梅に心をよせたるかきやうなり兼好のかたう人に定家を引り説

うへられたり　頭書云▲風雅集十五定家卿はやう仕ける家にしはし立入てほどへ侍りけるをりから自ら栽て侍ける梅の木の枝にむすひ付ける永福門院内侍「忘じな宿は昔に跡ふりてかはらぬ軒に匂ふ梅が枝　返し大納言爲世「くちのこる古き軒端の梅が枝も又とはるべき春を侍らし野

今も二本侍る　◉兼好時代なり諺

柳又おかし　◉此所は折にふれば何かはあはれならざらんといふ心也全　頭書云▲歌に「たをやかに糸打はへて見ゆるかな花にもまさる青柳の枝説

卯月はかりの若楓　頭書云▲杜牧之が詩霜葉紅ㇾ於二二月花一といひ或又新緑勝ㇾ花などいへる意なるべし壽

めでたき　◉愛すべきものといふ事也壽

草は云々　◉此類の文章枕草紙に有　頭書云▲枕草紙云草の花はなでしこからのはさらなりやまともめてなし女郎花きゝやう菊の所々うつろひたる苅萱りうたん枝ざしなどむつかしげなれどこと花皆霜がれたるにいとはなやかなる色あれにてさし

出たるいとをかし文
きちかう ●山案桔梗と書てきつきやうの音なれどもつを略して常にはききやうといふ也又きちこふといふ事はちとつとはたちつてとの五音相通なれば也又梗の字にはこうの音もあるゆへなり 頭書云▲古今物の名に「秋ちかふ野はなりにけり白露のおける草葉も色かはりけり野 ▲加様のものはかくしてよめるならひなり全

女郎花 山案異朝に云る女郎花とはちかふ也 頭書云▲山案靈鬼志云何文者漢人也有二一女子一容皃美卒死葬明日見二其塚一盡成二菊花一故名二菊花女一亦名二女郎花一▲新撰萬葉女倍芝(ヲミナヘシ)と書り▲源順詩云花色如二蒸粟一

ふぢばかま 頭書云▲二色あり古今集に主しらぬ香こそ匂ふれなどよめるは蘭なるべし堀川百首に「秋の野にむら／＼見ゆる藤ばかまむらさきふかく誰かそめけんなどよめるは花こまやかにしてあつまりさける物を云にや文

しをに ●紫苑也 頭書云▲しをんの音なれどもんとにと五音相通してしをにと云なり壽 古今物の名に「ふり出ていざ古里の花見んとこしを匂そうつろひにける文

われもかう 頭書云▲今立花につかふは葉苅萱に似て穂あり文 ▲多識編に木香をわれもこうと訓じたりもし是なかんか句 ▲狭衣に「武藏野の霜枯にみしわれもかう秋しもをとる匂なりけり野

苅萱 頭書云▲夫木頼俊の歌に「かち人の往來の岡の苅萱はをれふすかたや道となるらん説

りんたう 頭書云▲本草十三曰龍膽葉如二龍葵一味苦如レ膽因以爲レ名宿根黄白色下抽レ根十餘條類二牛膝一而短直上生レ苗高尺餘四月生葉如二嫩蒜一細莖如二小竹枝一七月開レ花如二牽牛花一作二鈴鐸狀一青碧色冬後結レ子苗便レ枯俗呼二草龍膽一又有二山龍膽一味苦濇其葉經二霜雪一不レ凋説 ▲悦目抄にりんだうの花を手向る木ほうしの經よむ聲はたふとかりけり文 ▲又りうたんと古今物の名に「我宿の花ふみちらす鳥うたん野はなければやこゝにしもくる古 ▲「りうたんの花の色こそ咲そむれなへての秋は淺茅生の末説

黄菊 ●菊は黄菊もとはの字の入たる本あり其時

は菊の類にては黄菊そとの心也はの字なき時は上の菊は白菊なるべし次に黄菊もといふ心也諺●句解にはの字なけれども前説に似たり云上の菊の字は先すべて菊花の愛すべき事をいはんとて只菊とばかり云ひ出して下に取わき黄菊を賞する事をいへり月令に菊有ニ黄花一とあれば菊は黄なるを正色とすると見えたり又菊は黄菊とはの字を入れもの字をのぞきし本もあり句●菊は白色を歌には賞翫すしかれども黄なるもよしとなり全●兩説の内見る者ゑらむへし　頭書云▲事文類聚後集云菊有ニ黄白一而以レ黄爲レ正説

朝顔　頭書云▲曾禰好忠歌に「ありとてもたのむべきかは世の中を知するものは朝顔の花説

いとたかゝらす　●蔦より下へかけて云諺

さゝやか　●ちいさき心細く許少々書野

しげからぬよし　●前にも見ぐるしき物前栽に石草木の多きといへり文

からめきたる　頭書云▲枕草紙なを世にめでたきものゝ條にろたいの前にうへられたりけるぼうたんのからめきをかしき事などの玉ふ句

ありなん　●山案大かたといふより以下の結句一段の眼目也草木にかぎらず衣食住器物までも異様なるものは好むなと也

〔一段統論〕上の段に葵のことを論ぜるにうけて又此段にもひろく草木のうへを云出して假初の物ずきにも只あさく尋常にかろ〴〵と目なれたるかぎりをよしと也色こく奇怪なるこのみ皆無益なる道理を人に書しらしむるなり句●人の好惡は生付の賢愚によれば此段などはなをざりの人合點すまじきなりよしせずともよくきかせたくこそ侍此比の茶の湯者の露地には見なれぬ深山木名もしらぬ異國の草木をうへたり利休居士の露地にしてなれたる松竹の類をうへしと見合すれば上手下手のかはりの分明に侍るにや壽

〔百四十一〕身死して財殘る事は智者のせざる處なりよからぬものたくはへ置たるもつたなくよき物は心をとめけんとはかなしてちたくおほかるまして口をし我こそ得めなどいふ者共ありて跡にあらそひたるさまあし後はたれにと心ざす物あらばいけらんうちにぞゆづるべき朝夕なくてかなはざらん物こそあら

め其外は何ももたでぞあらまほしき
身死して云々　●智者といふものは事物の理にく
らからぬ故に殘しおけば死後に害になるといふ事
をしるゆへ也盤　頭書云　▲前漢書韋賢及子玄成
倶以レ明レ經至レ相諺曰遺二子黄金滿籯一不レ如レ教二子
一經一　▲後漢書龐德公居二峴山之南一平生不レ入二城
府一劉表問曰先生不三肯受二官祿一何以遺二子孫一曰世
人遺レ之以レ危我遺レ之以レ安野
たくはへ置たるも　●是等の物を秘藏せしかと持
人の拙思はるゝ也諺
よき物は　●よき道具には執着もやしせんとはか
なしと也文
こちたく　●前に注す
おほかる　●なにかと取集て多きなり諺
まして口をし　●たとへよき物を少分なりとても
無益なるものをもとむるは君子のにくむ所也いは
んやおほく貯へおくはまして口おしく覺ゆると也
說
跡にあらそひ　頭書云▲山谷詩遺金滿籯常作レ災
野▲李卓吾集云自二從早年一索レ妻養レ兒經二營家計一
受二盡萬千辛苦一忽然三寸氣斷未レ免二一旦皆休一若是
孝順兒孫齎得二幾個一看二得部經一乃至若是不肖之子
父母方死骨頭未レ冷作二揵財產一出二賣田園一恣レ意作
レ樂以レ此較レ之着二甚麼一急兒孫自有二兒孫福一莫下
與二兒孫一作中馬牛上▲北觀曰澹然長性所有產貨徒爲二
他有一之意也參
いけらんうち　●如斯ならば跡のあらそひ有べか
らず諺　頭書云▲伏波將軍が財を新族故舊にあた
へほどこして世の人のあつめおけるは守錢奴なり
といへるまことにやさしき志也野
朝夕なくて　●自然と持たるは存生の内にゆづれ
といひて其ゆづるも六ヶ敷に同敷は入用の外はも
つなと也●朝夕といふ以下一段の眼目なり
【一段之統論】●山案此段は前段の結句に大かたな
にも珍らしく有かたきもはのよからぬ人のもて興
ずるものなりと云るをうけて財寶を蓄へて死後ま
でのこせるは智者のせざることにて害をかふ道理
を云つるも必竟は朝夕の一句をいはんためなり此
一句一段の肝要なり上卷のはじめにも衣冠より馬
車にいたるまであるにしたかつて用よといひ或は

金をして北斗をさゝふとも人の爲にぞ煩るべきと書き又は古より賢き人の富るはまれなりなどいゝしるせる心ばへ皆世人のためにのべられたる兼好の志は有難ことゝ也〇上の段に家庭の草木のことをいへるにうけて又此段には家財のうへを論ぜり句

〔百四十一〕悲田院堯連上人は俗姓を三浦の何某とかやさうなき武者なり故郷の人の來て物語すとて吾妻人こそ云つる事はたのまるれ都の人はことうけのみよくて實なしといひしを聖それはさこそおほすらめどもをのれは都に久しく住てなれて見るに人の心をとれりとは思ひ侍らずなべての心やはらかに情ある故に人のいふ程の事けやけくいなびがたく萬えいひはなたず心よはくてことうけしつ僞せんとは思はねどともしくかなはぬ人のみあればおのづからほいとをらぬ事おほかるべし東人は我かたなれどげには心の色もなく情おくれひとへにすぐよかなる者なればはじめよりいなといひてやみぬにぎはひゆたかなれば人にはたのまるゝぞかしとことはられ侍しこそ此聖聲うちゆがみあら〳〵しくて聖敎のこまやかなることはりいとわきまへずもやとおもひしに此一言の後心にくゝなりておほかる中に寺をも住持せらるるはかくやはらぎたる所ありて其益もあることそと覺え侍し

悲田院　〇昔奈良の京の時奈良に悲田院あり其時は光明皇后などのさかりに貧窮の者をあはれみ給ふ故に是を建立し給ひし也釋書光明子傳に見えたり其跡今に乞食の住家となりて彼地にあり今の京にももとは悲田院西と東に有て便りなき病者孤子など養ひしを中頃迄一所殘りて鴨川の西に有けるよし拾芥などに見えたれど今は其名ばかり白川橋の邊に殘りて其寺は泉涌寺にひかれて乞食の住所となれり今草子の悲田院は山城のをいへり參頭書云　▲延喜式左右京職式云凡京中之路邊病者孤子仰ニ九ケ條令一其所レ見所レ遇隨レ便必令レ拾ニ送施藥院及東西悲田院一拾芥中末云在ニ鴨川西畔一施藥院別所也養ニ孤子病者一也野　▲山案聖武皇帝天平二年始建ニ奈良一救ニ天下民疾苦一其後施藥院悲田院兩寺再興救レ人二十年間四萬六千八百人死活者一萬四千五十人此役平時宗住持忍性上人南都者建ニ于興福寺境內一平安城者在ニ大應寺地一應仁大亂兵火

今移二泉涌寺一
堯蓮　●傳記未レ考
上人　●僧の德行ある者を上人といふ說　頭書云
▲摩訶般若經云何名二上人一佛言若菩薩一心行二阿
耨菩提心一不二散亂一是名二上人一▲增一經云　夫人處
レ世有レ過能自改者名二上人一▲十誦律曰有二四種一一
麤人二濁人三中間人四上人▲古師云內有二智德一外
有二勝行一在二人之上一名二上人一盤
三浦　●伊豆の三浦也武士孫なり盤
さうなき　●無レ双無二左右一也諸
さうなき武士　●さうなき武者とことはりたる事
は加樣のこまやかなることはりをしりそむなきと
いはんためなり又武士は和らきたる事はなきもの
なるに奇特なるといはんためなり盤
故鄕の人　●山案和論語の說によりて見れば此故
鄕の人といへるは乾加賀入道時雲事なるべし　頭
書云▲山案和論語云悲田院堯蓮上人に乾加賀入道
時雲問て曰古鄕の人の尋來て云けるは東國の人は
心もいさぎよく云ほどの詞づかひも賴ありてよけ
れ都の上は言うけのみよくてまことなしと云侍る
はと有し時上人の曰云々ことばなかき故に略す此
草子とはすこし不同なるところもあれど意は同じ
きなり
吾妻人　●關東を指て云異本にあづまの猛者と有
野　頭書云▲人王十二代景行天皇の皇子日本武尊
東征の時橘姬海に入て死す尊歸り上り玉ふ道にて
東をかへり見橘姬のことを思ひし吾嬬やと宣ひし
より東をあづまと云よし日本紀に見え侍れど順和
名には文選を引て邊土をわづまとよむとあれば東
方にかぎらざることにやされと大方は關東をさし
てあづまと云なり野
云つる事　●用事をいひたる事は心得たるとて賴
まれると也盤
ことうけ　●言承と書諺　●心に思はぬ事も詞にて
うけたる也盤
いひしを　●是迄時雲入道が詞也說
聖　●堯蓮也是より上人の答への詞なり諸
さこそ　●左樣にこそおぼすらめ也諸
なれて　●都の人にそひ馴てなり句
けやけく　●尤の字也甚しき意也壽

いなびがたく　●否といひはなちがたく説
ことうけしつ　●心のやはらかに情ふかきゆへ也諺
ともしく　●手前貧乏にして諺
かなはぬ　●不如意の義也壽
おのづから　●心ならずのこゝろ也諺
ほいと　●本意と書諸
とほらぬ事おほかるへき　●人に頼れし事を其ではとく用にたゝんと思ふ本意をとげぬなり本意といふにて如在はなけれどもといふ事しられたり盤
我かたなれども　●此詞をもつて見るにいよ〱此段のあづまは關東をさしていへるに決定すべし句　●堯蓮上人の古郷の方にてよき樣にいひたけれども都にはおとれりとなり盤
心の色もなく　●あいそうなきなり諺　●土地によつて人の生れ付もちかふものなり説　頭書云▲土地によつて人の生れ付もちがふなり▲孔聖全書子曰堅土人剛弱土人弱墟土人大沙土人細息土人美耗土人醜▲漢書人有ニ剛柔緩急一音聲不レ同繫ニ水土之風氣一也▲文選西京賦云夫人在ニ陽時一則舒在ニ陰時一則慘此牽ニ平天一者也處ニ沃土一則逸處ニ瘠土一則勞此繫ニ乎地一者也能違レ之者寡云々何以覈秦據レ雍而彊周即レ豫而弱高祖都レ西泰光武處レ東而約政之興衰常由レ此作云々▲瑣碎錄曰若要ニ安樂一不レ脱不レ著北方語也若要ニ安樂一頻脱頻著南方語也▲又中庸に北方南方の强を論ぜり其土地によつて氣質言行の不同なるは是天地の當然なり説
ひとへに　●一向になり諺
すくよか　●つよき義に通ふべし健の字を書なり句　頭書云▲若紫にすくよかに云て物こはききさましたるとあり句
やみぬ　●なるまじき事はいやといひきるなり文
ゆたかなれば　●賑豊と書富貴なる心なり増鐵
たのまるゝぞかし　●爰に兩義有一説に東人を指其時は太平記に朝廷は年々に衰へ武家は日々に盛なりと云ごとく都人は貧乏なり東人は身の賑ゆたかなれば人にたのまるゝ事をよく調ると也●又一説は身のともしかなはぬ人は本意の通らぬ事あれど其の眞實の疎意にはあらず都人も賑はひゆたかにして富る人は賴まるゝとなり諺

此聖　●是より兼好の堯蓮を褒美したまへる詞なり全

聲うちゆかみ　●僻の字也なまる義也古　頭書云▲東屋にあづまの人のはるかなる世界にうづもれて年へければにや聲などほど〳〵うちゆがみぬべくものいふとあり句▲拾遺集に「あづまにてやしなはれたる人の子は舌たみてこそものはいひけれ說

あら〳〵しく　●詞つきのあらきなり諺

聖敎　●佛道の經論をいふなり文　頭書云▲西谷名目抄に云聖敎といふは聖人の說敎といふ事なり聖は正なり▲四敎儀解上曰敎者效也聖人被レ下之言也效レ之則革レ凡成レ聖也參

おほかる中　●僧おほき中にと也諸

住持　●此悲田院を也諸

やはらきたる所　●心の色ある也盤

【一段之統論】●此段は人のなりたちをもつて妄りに人を褒貶ずべからずとの敎なり說●此段は一言にして人の心を知事をいへり見たるとは相違のことあれば愚なる眼にて善惡は定むべからずとの心なるべし盤●此章の大意はをよそ沙門と云者は一朝に恩愛の家を出て棄恩入無爲をのゝしり人倫の情をもかたはらに見て心つよき者のみ多き中に此上人は片田舍の心あらき國の人にてありながら修練の功もつもりけるにやかく心の和ぎたる所のありて寺をも住持せられしぞと云て後の世の僧の柔和ならぬ心ばへをいましめたるをしへなるべし彼法顯の渡天の時白團扇に淚をこぼし給ひしをいみじく評せしも又是に同じかるべし其證據は下の章のあら夷の情ふかき一言を云し處にて其理あきらかなり參●此段法師と古鄕の人と問答を設て兩國の剛柔をあらはしたれども實は此說をとらず此上人の人を敎化せられし事を褒美して記せり諺●山案和論語曰此上人のこゝろざし誠あれば正しきこたへられやうなりと堂上地下の人々感じけるほどに君もきこしめして ふかく感じ仰られけるとなりありがなき事なり三井寺の智空此事をきゝて「うへてみよ花のそだゝぬ里もなし心からこそ身のいやしけれとよみをく歌のさま今身にしみぬとて淚をながし給ひけり▲又或說曰此堯蓮上人東國

の生れにて氣質も剛强にて心の色もなかりし人なれども都の人の生れ付にうつりてかくやはらかに情ある答をせられけるなりさるほどに人としてはかりにも善處に住すべきことなり文宣王も里仁爲レ美擇不レ處レ仁焉得レ智とのたまへり諺にも人は生れ付よりそだちといふなりされば生れ付の氣質も土地によつてよきにうつせばよくなり惡きにうつせばわろくなるなり又孟子盡心下篇曰孟子自レ范之レ齊望ニ見齊王之子一喟然歎曰居移レ氣養移レ體大哉居乎云々彼虞芮の君の暴虐ありしも周地に來ては忽禮讓の志を發せしたぐひ可ニ思合一又よき生付の者の土地にひかされて惡しくなりしことも又多し周禮橘踰ニ淮北一而爲レ枳氣然也江南種レ橘淮北移レ之怨成レ枳水土之異也▲抱朴子曰令ニ頭虱著一レ身皆稍變而白身虱著レ頭皆漸化黑則玄素果無ニ定質一などといへりしかるときは其地を擇て居をなすべきことの敎を底意にもちて此段をかけると見るべしとなり此說一理あるといへどもいかゞあらん

〔百四十二〕心なしと見ゆる者もよき一言はいふ物なり

心なし云々　◎頑なる田舍人などの類也諺〻頭書云　▲漢書韓信傳智者千慮有ニ一失一愚者千慮有ニ一得一古▲論語の不ニ以レ人廢ニ言といへる心にもかよふべきか句　▲古文眞寶云匹夫而爲ニ百世師一一言爲ニ天下法一　▲最明寺殿の歌に一云ふ人の高きいやしきかへりみずよき言の葉を我ためにせよ說

一言は　◎外へは見ゆれど見たるとちがひてよきことをいふとなり聖の聲ゆがみたるがやはらぎたることをことはられたるをうけてかくいふなり盤

〔第一節〕◎心なしと云より物なりまでなり此段六節に分つ文段これに同じからず◎一段の大意をまづ云出して此ことはりを奥にのべられたり盤◎此一節一段の眼目なりよく／＼味ふべし說

ある荒夷のをそろしげなるがかたへにあひて御子はおはすやととひしに一人ももち侍らずとこたへしかばさてはものゝあはれはしり給はじ情なき御心にぞ物し給ふらんといとおそろし子ゆへにこそ萬のあはれはおもひしらるれといひたりしさもありぬべき事也恩愛の道ならではかゝる者の心に慈悲ありなんや孝養の心なきものも子持てこそ親の志は思ひしるな

れ
荒夷のおそろしげなる　●心なき田舎人也壽
かたへにあひ　●傍人に逢てなり句
ものゝあはれはしり給はし　●子なきものはもの
のあはれをしらすと也諸　頭書云▲鬼子母神もを
のが子をば佛にとりかくされてより人の子をばと
りやみけれ是を思へば子ほどかわゆきものはなか
るべし子なき人はものゝなさけしるまじきとの見
たてげにもと思ひ侍る貞▲歌に「人の親の心は闇
にあらねども子を思ふ道にまよひぬるかな古▲池
の禪尼の頼朝をたすけ熊谷が敦盛をたすけんとす
るも我子のことを思ふゆへなり父子の道は天倫な
ればたれかあはれを思ばさらん陶淵明が一力をや
とひ我子のもとへ送りて汝が薪水の勞をたすく是
も又人の子なりよく遇すべしといへる仁愛の道な
り野
物し給ふらん　●我子なき程はあはれをしらざり
し程にとの下心にてかくいふなり盤
子ゆへにこそ　●夷のことはりをのぶる也子を思
ふひとつより萬事のことをおもひしるとあるに心
をつくべし一をもつて萬をしる心もあり盤
さもありぬ　●兼好右の詞を褒美して尤と云也諺
恩愛　●子を思ふ道をいふ句●右の辭を評論して
さも有べきことはりをいふなり盤
慈悲　頭書云▲南山 敎誡律義云論 云夫言レ慈者意
在ニ柔和一被ニ他所惱一不レ生ニ瞋恨ニ夫言レ悲者 意在ニ
饒益ニ善順ニ物情一參
孝養　頭書云▲　參云觀經に孝養父母とあり知禮
の妙宗鈔にくわしく注あり參
子持てこそ親の志云々　●我子を持て以後也諺●
親にかゝる子は其親のおもはくの萬事につけてよ
からぬ事のみ有樣にもどかしく思ふものなれとは
じめて我子をそだてゝ見てより彼親の日比のこゝ
ろざしの子ゆへにねんごろなる事をよくあぢはひ
しるなり此故に孝の念の發生するもかならず是に
よれり參●下賤は子故に親の恩を思ひしりてやう
やう孝の心ざしあり又子持て不孝になるもの世に
おほし是は畜生よりおとりなれば何れもいはんか
たなし畜類も親をなつかしむる禮あり全　頭書云
▲夫子として父母の心をうけて子の心とせばをの

づから孝もあるべけれされば所ニ求ニ乎子ニ以事ㇾ父未ㇾ能也といへるは子を思ふ如く親を思へといへる義もかよふへきこと也野　▲最明寺の歌に「子を思ふ親ほど親を思ひなば世にあり難き人といはれん▲古語に養ㇾ子方知ニ父母恩一といへり說

[第二節]◉ある荒夷と云より思ひ知なれまでなり

◉出案發端に心なしと見ゆる者もよき一言をばいふものなりと云しをうけて此節には其證據を擧たりさて恩愛の道と云ふ以下は荒夷の詞を評論して尤と兼好も同心せりまことに子たるものゝよく讀べき段なり

世を捨たる人のよろづにするすみなるがなべてほだしおほかる人の萬にへつらひのぞみふかきを見て無下におもひくだすは僻事也其人の心になりて思へば誠に悲しからん親のため妻子のためには恥をもわすれぬすみもしつべき事なり

するすみ　◉匹如身と書匹は匹夫の義にて無一物の獨身なるを云　頭書云▲白氏文集偶吟詩眼下有ㇾ衣兼ㇾ有ㇾ食心中無ㇾ喜亦無ㇾ憂匹如　身後有ニ何事一應向人間無ㇾ所ㇾ求靜念ニ道經一深閉ㇾ目閑迎ニ禪客一小低頭猶ㇾ殘少許雲泉興一歲龍門數度遊沙石集第四に此詩を引てするすみとは人の一物も手にもたてゆく貌なり下﨟はすつすみと云り應向は足ふみたてぬと云こと也所住なくして杖つく程の地ももたぬといふがごとし一物もたくはへす少分の地も持ずして棄はてぬる身は萬世間のことなくして佛道修行しつべしと云野

なべて　◉世間の人のをしなべて也諺

ほだし　◉妻子也上卷に委　頭書云▲法華科註曰經云妻子爲ニ鎖械一錢財爲ニ牢獄一▲四十二章經曰佛言人繫ニ於妻子寶宅之患一甚ニ於牢獄桎梏根檔一眞宗皇常御註曰夫世人爲ニ妻子一羈絆云々參

其人の心になりて思へば　◉遁世者の人の妻子にほだされて有を見て思ひあなどる勿論なれ共其あふぎ尊める釋尊さへ耶輸多羅瞿夷羅睺羅を思はすもあらず又妻子を愛するは觀音慈悲の心也といふは止觀の旨也兼好が子を思ふ人の心に成て見よといへる實もとぞ覺ゆる此心ををしひろめて心として群臣を我身のことく其人に成て思ひ百姓を子のごとく愛せばなどか天下のおさまらざらん野

親のため云々 ●只今うへことゆる見て悲しく思
はん妻子の爲にはと也文 頭書云▲後漢書呉祐順
帝時遷二膠東侯相一祐政惟仁簡以レ身卒レ物夷民懷而不
レ欺嗇夫孫性私賦二民錢一市レ衣以進二其父一父得而怒
曰有二君如レ此何忍欺レ之促レ歸伏レ罪性慙懼詣レ閤持レ
衣自首祐屛二左右一問二其故一性具述二父言一祐曰椽
以二親故一受二朽辱之名一所レ謂觀レ過斯知仁矣使二歸
謝レ父還以レ衣遺レ之野 ▲心地觀經之世人爲レ子造二
諸罪一説

〔第三節〕●世をすてたると云よりしつべきことな
りまで也●此節は我身にかゝることもなきゆへに
人をとかく云ことをいましめたり人によることな
るとの義也盤 ●此節は恩愛の道のわりなく哀なる
ことをいひて其子を思ひ親をやしなふ人には誰も
心すべき心をいへり是世を治る人に仁政を行ふべ
きことをいはんとてなり文

されば盗人をいましめ僻事をのみ罪せんよりは世の
人の飢ず寒からぬやうに世をば行まほしきなり人恒
の產なき時は恒の心なし人きはまりてぬすみす世治
まらずして凍餒の苦しみあらば科の者絶べからず人
をくるしめ法をおかさしめてそれをつみなはん事不
便のわざなり

されは盗人をいましめ ●此ことはりあればと云
心也諺 ●上をうけての詞也盤

僻事をのみ罪 ●而已と云字眼也最盗人僻事は罪
なきと云にはあらざれとも其本をさくりみよとな
りいましめ罪せんは政の末也うへずさむからぬ様
にするは政の本也本がたゝずしては末の治るとい
ふ事はなきなり盤

飢す云々 頭書云▲事文類聚前集十二曰晏子曰賢
君飽知二人飢一溫知二人寒一參

人恒の產なきときは ●此一句は孟子の詞をもつ
て書り●產業と云て人の世わたるすぎはひなり諺
●農人の品を上中下に定めて田畠をあづけてよく
作らせ其相應に屋敷をも與ふ是を民の恒の產と云
也上に奢あれば民公務に隙なく耕作をせざる故に
常の產なく又恒の心なき也文 ●是は盗人の有道理
を云也盤 頭書云▲孟子梁惠王篇云無二恒產一而有
二恒心一者惟士爲レ能若レ民則無二恒產一因無二恒心一苟
無二恒心一放辟邪侈無レ不レ爲已及レ陷二於罪一然後從

而刑レ之是罔レ民也焉有三仁人在レ位罔レ民而可レ爲也
是故明君制二民之産一必使下仰足三以事二父母一俯足三
以畜二妻子一樂歳終レ身飽凶年免二於死亡一然後驅而
之と善故民之從レ之也輕云々 黎民不レ饑不レ寒然而
不レ王者未二之有一也注 恒常也産生業也恒産可二常生
一業也恒心人所二常有一之善心也壽

人きはまり ●人きはまるとは貧窮になれば也命は捨られぬゆへにもし盗すませばとの顔にて只今罪にあふとしりながらぬすむことと也盤 頭書云▲家語云獸窮則攫鳥窮則啄(ツイバム)人窮則詐▲論語に小人窮するときはこゝに濫すとあるも此義なり野▲張南英集云菅原ニ人之造レ妄者ニ豈其心哉誠以三迫二急飢寒一苟免二患難一而已▲管子云禮義生二於富足一盗賊起二於貧窮一▲遺教經補註云盗心生二於饑寒一参

凍餒 ●凍はこゞゆる也餒はうゆる也壽 頭書云▲孟子盡心篇所謂西伯善養レ老者制二其田里一教二之樹畜一導二其妻子一使レ養二其老一五十非レ帛不レ煖七十非レ肉不レ飽不レ煖不レ飽謂二之凍餒一文王之民無二凍餒之老一者此之謂也野

【第四節】●されば盗人と云より不便のわざ也まで也●此節民の盗するは貧窮の故なれば民に飢寒なきやうに世の政を行なはまほしきとも孟子の心をもちてかけり文●山案此節は上節をうけて故あつて僻事をなす者をは徒に罰すべからず上たる人は政のあしき故と身を省て民の僻事せぬ様に政をとりおこなへと也さて此節は民に上たる人の奢驕のみにして下を惠む心なき君をつよくいましめん爲に一旦妻子のため親の養の故に僻事なすをば尤とゆるせりたとひ貧乏にして只今道路に父母の骸をさらすとも謾に天のあたへぬ人の財物を盗まんや惟士爲レ能若レ民とは孟子にいへる意を能々味ふべしあしく心得て此節を讀べからず上をつゝしましめんための一つの文法なり

さていかゞして人を惠むべきとならば上のおごりついやす所をやめ民をなで農をすゝめば下に利あらん事うたがひあるべからず

おごりついやす云々 ●奢をやむるは盗人なき本也盤

なて ●撫育とて哀みやしなふ心文

農をすゝめ ●農業を勸めて飢寒に逢ぬ樣に敎ゆ

る也諺◉恒産有本也盤　頭書云◉事文類聚後集巻之二十三曰勸二民農桑一漢景帝詔曰朕親耕后親桑以奉二宗廟粢盛祭服一爲二天下先一欲下天下務二農蠶一素有中蓄積上参

うたがひあるべからず　◉民ことごとく利を得て飢寒のくるしみなし諺

〔第五節〕◉さていかゞしてと云より有へからす迄也◉此節は上節の飢す寒からぬやうに政をせよといへるをうけて其政のしやうを述んために自問自答をなして仁政をとかれたり誠にこゝにいへるごとくに上たる人心得て下をあはれむときは民に利あらんこと必定なり説◉此所聖人の御言葉にもをとるまじく侍る貞

衣食尋常なるうへにひが事せん人をぞまことの盗人とはいふべき

盗人とはいふべき　◉人きはまりてぬすみすといふに應ず諺◉是をごりをいましむる詞にて民にも國とる人にもかけていへるなるべし文

〔第六節〕◉衣食尋常と云より以下なり◉山案此節は上にいへる盗人は眞の盗人には非ず此節に云るごとくなるをば眞の盗人とは云ふべき此結句尤可レ着レ眼也父母妻子の爲め盗人は良に故あり衣食住乏しからぬ身として僻事をなすは上たる人刑罰してもあきたらぬことなりさて上節は上たる人の民を愛すべきの仁政を述たり此節は下たる者のつゝしむべきことをいへりさりながら此結句上たる人へも通ずまじきに非ず僻事といへるは盗のみにかぎらずひろく見るべし

〔一段之統論〕◉此段は前段にさもあるまじきと思ひしに堯蓮の一言の後心にくゝなりしことをいへる次に荒夷の子故にこそ萬のあはれは思ひしらるれと云し一言につき兼好其餘意をのべられたり増鐵◉此段能々心を着て熟讀すべし始に荒夷の一言を書る事尤後世の人の子たるべきものゝ訓となるべしされば子故にものゝあはれをしるといへるは「戀せずば人は心もなからましものゝあはれはこれよりぞしるなど」よめる歌のごとく我身に子を思ふ愛によりて親のことをも思ひあたり人の子をもあはれみ禽獸にいたるまであはれむ心出來るなり是聖人の第一とし玉ふ忠恕の道なり偖末の

節々には君臣ともに併事をなすべからずといましめたり殊勝なる段也説

〔百四十三〕人の終焉の有樣の美じかりし事なゞど人の語を聞に只靜にして亂ずといはゞ心にくかるべきを愚なる人はあやしくことなる相を語つけ云し言葉も擧止もをのれが好む方にほめなすこそ其人の日來の本意にもあらずやと覺ゆれ

終焉　●臨終也焉は助語也壽　頭書云▲檀弓には君子曰レ終小人曰レ死見へたれどこゝの終焉は君子小人にかぎらずすべて人の死を云句

美しき　●よきことゝ褒る也

只靜にして　●本心を亂さずといはゞ其人の心にくかるべき也諺

心にくかるべき　●是より臨終の大事外にはなき故也參

あやしくことなる相云々　●奇怪の相ありたれなどいひ本よりなき事をも語付る也文

云し言葉も擧止も　●其死たる人の詞も行跡もなり壽

好む方に　●我すき好むかたにほめなす也句

其人　●終焉の人を指句

其人の日來の本意に　●其死人の日比の心にてなきことをかたりつくるとおもはるゝとなり盤　頭書云▲一休和尚の時とかや蜷川新右衛門と云し頓悟の人ありしが正しく最期にのぞみて西の峯より佛菩薩の殊勝の相を現して來迎ありと聞て床よりふと起あがり弓にて射ければ皆功を經たりし狐狸にてありしと也此人もとより念佛往生をねがひし人にあらねば因と果との相應ならぬ事を思ひけるにや弓にて射しことも實もなること也加樣の人の終焉のみきりに聖衆來迎のことを如何樣にほめなすとも其人の本意にはかなふべからず此類にてことも句がらを味ふべし參

〔第二節〕●人の終焉と云より覺ゆれまで也此段二節に分て可見●此節は世の愚痴なる者人の臨終に佛菩薩のまのあたりに來迎あらん事を思てさまざま異相をつくろひ語るに迷て誠と思ふ者あらん事を思てかけるにや文

此大事は權化の人も定むべからず博學の士もはかるべからずをのれたがふ所なくは人の見聞にはよるべ

からず
此大事　●臨終の時を云句
權化の人　●即權者を云句　●佛菩薩などの衆生濟渡のために此界に生れ給ふを云也壽　頭書云▲山案五雜爼八云死生之際一生學問大關頭也然有下名爲二巨儒一而處レ死反不レ及二常人一者上如二林兆恩一會二通三敎一自謂二海內一人一而臨レ死乃病レ狂喪レ心便溺俱下吾郡一搢紳王鑛者平日無レ所レ聞年踰二八十一自知二死期一戒二訓子孫一無レ作二佛事一仍賦二長詩一篇一旣而曰明日未レ能二便去一後日望日也吾當下以二十六日一去上至レ期沐浴衣冠談笑而逝此豈有二宿根一耶抑平日不レ言躬行人有レ不レ及レ知耶林之虛名高レ王十倍而死生之間迥別乃爾殊可レ怪也如レ此あれば人の臨終の相に依て其者の善惡をさだめ難しさて下に記す二說の中文段は後說を用て前說を不可とす▲文云權化の人は本佛菩薩ならば爭でか此一大事定めがたからん▲大全云是は見識學解の分際の人を云也さて此二句權化博學も人の臨終の目利はなるまじきと云事也去ながら博學の士もはかる事也權化は猶々しろしめさるゝとぞ然を爰に計るべからず

と書る心は彼目利たてする愚人を抑てかける是草紙の文法也抑臨終の目明は現量比量聖敎量とてあり現量は其眼明にして松を杉ともまがはぬ如く也比量とはたとへとへば山のあなたに煙の立を見て其の火は知ねども火の燃るを知が如也聖敎量は佛說によりて知るを云也▲盤齋曰廣燈錄云若人臨終身冷足煖者當レ墮二地獄一頭足共冷心胷遍煖者生二於人道一眼煖余冷者當レ生二天上一唯腹間煖余冷生二鬼趣中一大論云臨終之眼黑者墮二地獄一赤白端正者行二天上一　▲參考云權化の人はもと佛菩薩ならば爭か此大事定かたからんと云るは佛學に乏しき說也たとひ佛菩薩の再誕にして衆生濟渡のために來れる人なりともこと〲く三明無礙六根淨の人にあるまじければ父母所生の肉眼にて見わかつべきことにも非ず此臨終の瑞相の有無にて其人の後生の浮沈を見る事は經論の一往の沙汰にて再往は定判しがたきこと也龍樹の婆娑論などに其心あり臨終の相はいみじかりし人もうらやましからぬ者も侍り其故は或は罪障深き人の果る時には天魔の威力

加りて其惡人をたぶらかしてよその人をも迷惑せしめしがためにかりに奇特妙相を現ずることありと云々又臨終の相あしくとも終に尊むべき者あり其子細は或は善人の終る時破旬のなやますことありて行者の最後の相をあしさまに見なさせて見聞の人の善心を破らんが爲に惡相を現ずることもありされども其行人は惡相を見付ずしてやみぬと云々又臨終の相もあしくしてながく惡趣にしづむ人もあり或は又臨終の時座脫立亡して內證も自在を得外相も奇特なる人あり加樣なるさま〴〵の因緣あることなれば定難し

博學　●ひろく學べる大方の人なり文　●學者の惣名を曰し士となり諺

はかるべからず　●山案此所にまづ二說有一說に權化學者とても前かどより自ら定め推量はならざると也●又一說に終焉は其人の心中にある事なればたとひ權化博智の人もわきより人の臨終の事は推量はならざると也さて此二說の病有さるによつて諸抄に色々の難をこれり必竟得意すべき說は權化博學の士の臨終なりとも善相有べきやらん惡相有べきやらんかねてわきよりは定めかたしと也たとひ臨終に惡相有とても是惡人となし難し又善相有とても定て能者ともいはれず野槌云風雨雷電の時に善知識の死るも有べし形あれば病あり病に品多ければ思ふまゝに有べからず

をのれたかふ　●己が本心たかはずば盤

人の見聞　●外相はいかにあるともかまふなと也盤　●此句いよ〳〵妙也大悟底のをさめをよくうつせる一語也されども念佛往生などの人の臨終に來迎佛を感ずる事などいひけすべき道にはあらずそれは又各別の子細ある事也是も一念善成時は猛火すなはち凉風とあれは外に聖衆の來迎はなき也參

〔第二節〕●此大事と云より終迄也●山案此節には臨終の大事を云り而も此結心を看て熟讀す可き也

〔一段之統論〕●此段は世間の愚人の臨終のことを何かと云ふを破て己れたがふ所なくはと敎へて臨終の大事をのべて世人の迷ひをはらふなり說

〔百四十四〕栂尾の上人道を過給ひけるに河にて馬あらふ男あし〳〵といひければ上人立とまりてあなた

うとや宿執開發の人かな阿字阿字と唱るぞやいかな
る人の御馬ぞあまりにたふとく覺ゆるはと尋たまひ
ければ府生殿の御馬に候と答けりこはめで度事かな
阿字本不生にこそあなれうれしき結緣をもしつるか
なとて感涙をのごはれけるとぞ

栂尾　頭書云▲日本事跡考曰高雄西北曰二栂尾一栂與レ梅通用參▲栂と梅と本は通じけるにや東山の僧雪村諱友梅栂尾に至て此山の名は我諱の字なりと云ること岷峨集に載たり▲湖海新聞に梅を木母と名付と有時は栂梅ともに相通ずると見へたり野

上人　●明恵上人なるべし諺　頭書云▲元亨釋書五釋高辨姓平氏紀州在田郡人父重國嘗爲二嘉應帝衛兵曹一九歳從二高雄山上覺一讀二倶舍頌一十九從二興然一稟二兩部密法一自レ爾止二北山梅尾一盛唱二賢首宗一寛喜四年正月十九日唱二彌勒號一而寂年六十野

桓武天皇人皇五十代―葛原親王一品式部卿―高
―見王無官無位―高望上總介従五位下始賜平姓―良兼上總介
―公雅従四位下武藏守―致頼平大夫―致經左衛門尉
―將恒中村太郎―武基秩父別當―武綱十郎伊與守
―基家澁谷六郎―重家河嶋平三大夫―重國庄司―
―高辨明恵上人

あし〳〵　●馬の爪をあらふ時足をあげよとていふ事なり文

宿執開發　●宿執は過去の善也開發は現在の德也全●前生にて修練したる功德の開發して今阿字をとなふると也又自然發得するを云事も有諺

阿字　●眞言宗の秘密の觀法　頭書云▲阿字の義は眞言宗秘密の觀法大日法身內證三昧なればたやすく知がたし然れども此觀に悟入すれば大日覺王の位に至ると云全▲阿字は胎の大日の種字にて諸法一物を生せぬ義也其深理は灌頂職を得たる人にあらねばしるべきことに非ず參

唱るぞや　●馬の足を阿字ときゝなさる諺

府生　●左右の衛門左右兵衛の下に府生の官あり諺　頭書云▲職原下云左右近衛府々生大將判二授之一大納言大將不レ召二仕府生一大臣大將以上召二加府生一也野

こはめでたき　●是より明恵の詞なり諸

阿字本不生　●阿字本不生とは大日の密法の觀也

諸 ●明惠上人もとより密觀を常にたゆみなく修せられし人なれば足を阿字ときゝ府生を本不生と聞なせる也參　頭書云▲智證大師の阿字秘釋には始從ニ妙法一終至ニ而去一無レ非ニ阿字本不生一と釋し天台大師も阿字門即是法華經中爲令衆生開佛知見と宣へる時は法華實相の妙理を觀ずるがすなはち阿字觀の大事を了解する也▲大日經具緣品曰何眞言敎法謂ニ阿字門一切諸法本不生ニ云々山家曰阿字本不生理即衆生自性清淨心也大日心地衆生淨心一如無レ二參 ▲鈔ニ阿字ニ有ニ無不非三義一本不生者有ニ遮情表德兩義一遮情本不生者諸法本來空義也空則畢竟不生如レ此觀而遮ニ凡夫迷情一故名ニ遮情本不生一表德本不生者見ニ閑融ニ知ニ一諸法一皆與ニ法性深裡一相應表ニ顯然一自レ爾功德諸法皆本有常住也是名ニ表德本不生一本者本有義不生者不始生義也句

結緣 ●宿執のよき人に緣をむすぶなり槃 ●此男の足府生といふを阿字本不生と唱るは結緣なりと悅び給ふ文

感淚 ●愁淚にあらす感心より出る淚也參

〔一段之統論〕●上の段に人の終焉の事を云るにうけて又此段に佛道の沙汰に書及せり諸法と法性と二つならねば足を阿字と府生を不生ときけば即眞の阿字本不生なり上人阿字を觀ずる事心に間斷なき故に如此きゝなせる感應のいたり殊勝奇特也句 ●此段心得あり論語にも君子喩レ義小人喩レ利とて我念に應じて向より來るもの也爰にたとへあり柳下惠が飴を見て老人を可養ものと思ふに盜跖は是を見て錠にぬりて盜の便によからんと思へると同じ心なり我心邪なればたとへ聖賢の詞を聞ても却て僞かと疑ひ且つ僻事に聞なすこと皆愚人のなす處也諺 ●此類明惠にも不レ限佛儒ともに是ありされば山城國山階と大佛との間に苦集滅道と云處あり其子細は江州三井寺の開山敎待和尚常に觀音を信じ洛陽淸水寺へ參詣あり江州より音羽山まては山續なりそれを木履にていつも通はれしが敎待常に苦集滅道の法文を心にかけて觀じ玉ひけるに彼通ひたまふ道すがら木履の音苦集滅道とひゞきけり故に今も其道をくゝめぢと云也是皆此方の觀念によりて也又法華經にも諸法實相と說り其意を空也上人の歌に「さはがしき峯の嵐や磯の波も皆是法

の御聲なりけり又續千載に權僧正知辨の歌に「觀念の心しすめば山風も常樂我淨とこそはきこゆれ或は松に群居白鷺を見て源氏の白旗かと驚くは平家の落人等の心に憶病をかまへし故なり又儒經にも程明道の語に一草一木無レ非ニ吾仁一と有又孟子離婁篇云有孺子歌曰滄浪之水淸兮可ミ以濯ニ我纓一滄浪之水濁兮可ミ以濯ニ我足一孔子曰小子聽レ之淸斯濯レ纓濁斯濯レ足矣自取レ之これ小童のうたふ歌なれ共道の中庸にかなふたりと孔子の宣ふ也至聖の人の身には何事も誠と聞玉ふと見へたり說(參)上に巳たかはずば外はかまはぬを善と云て內外各別のこともあるよしを云たればこゝには又內外各別になきことはりを云也宿執あるゆへにかゝることはりを云なり盤

徒然草諸抄大成卷第十三

目次

〔百四十五〕御隨身秦重躬北面の下野入道信願を落馬の相ある人なり能々つゝしみたまへといひけるをいとまことしからず思ひけるに信願馬より落て死にけり道に長じぬる一言神のごとしと人思へりさていかなる相ぞと人の問ければきはめて桃尻にして沛艾の馬を好しかば此相をおほせ侍りきいつかは申あやまりたるとぞ云ける

御隨身　●本府の隨身なり猶前にしるす諺　●天子のゆへに御の字をつくる歟盤　●禁中に御扶持なされて兵仗を帶し御車の前に御供するを本府の隨身と云又攝家大臣などの召仕るゝを小隨身と云也說

秦　●秦氏の事　頭書云▲新撰姓氏錄云物智王弓月王應神天皇十四年來朝上表更歸レ國率ニ百二十七縣伯姓一歸化幷献ニ金銀玉帛種々寶物等一天皇嘉レ之賜ニ大和朝津間腋上地一居レ之男直德王次普皆洞王仁德天皇御世賜レ姓曰ニ波陀一今秦字之訓也文　▲日本事跡考云昔秦徐福來ニ日本一其子孫皆稱ニ秦氏一参

重躬　●重躬傳記未レ詳

北面の下　●北面も隨身もともに禁中の侍どもをいふ也說

信願 ●信願も傳記たしかならず
落馬の相ある ●其人の形を見て吉凶をうらなふ
事なり文
いとまこと ●信願も馬の上手なれば信ぜずと也
說●一說に兼好まことしからず思ひしと也此義い
かゞ
道に長じぬる ●人を相する道に長練したる也文
一言神のごとし●奇妙なること神明のことく也と
なり盤
人思へり ●前のまことしからぬを兼好心にし神
のごとしを他人の上に書たるといへり鐵增
桃尻 ●桃は器にろくにすはらぬ物也是は尻うき
て鞍のうちさだまらぬをいふ也諺
沛艾 ●和訓におどりあかるとよむ古點にはいさ
める共よむ文選に出たり古　頭書云▲文選籍田
賦龍驥騰驤而沛艾注馬行貌壽
おほせ ●課の字なり諸 ●いひおふするなり諺
頭書云▲韻會課試也計也源氏桐壺にやまと相をお
ほせてとあり書
いつかは ●何の字いつもあやまらすとなり文

〔一段之統論〕●上段に足を阿字と聞なせる感應の
耳なることをいへるにうけて又此段には人を相す
る道のいたれる一言を記せり誠に常を以て變を推
也重躬が相豈たがはんや夫子の由不得其死と
の給ひ鄒國公の盆盛括が死を前知せる聖賢の心に
も暗に協ひ侍る句 ●此類倭漢これ多し野槌云莊子
達生篇東野稷以御見莊公進退中繩左右旋中規
莊公爲文弗過也使之鉤百而反顏闔遇之入見曰
稷之馬將敗公密而不應少焉果敗而反公曰子何以
知之曰其馬力竭矣而猶求焉故曰敗●家語魯定公
問於顏回曰子亦聞東冶畢之善御乎對曰善則善
矣雖然其馬將必逸公不悅其後三日東野畢之馬
逸公聞之促駕召顏回々々至公曰前日寡人問
吾子以東冶畢之御而子曰其馬將逸不識吾子
奚以知之顏回答曰以政知之而已矣昔者帝舜巧
於使民而造父巧於使馬舜不窮其民力造父不
窮其馬力是以舜無逸民造父無逸馬今東冶畢
之御也歷險致遠馬力盡矣然而其心猶求馬不已
臣以此知之公曰善哉吾子之言其義大矣願少進乎
顏回曰臣聞之鳥窮則啄獸窮則攫人窮則詐馬窮則逸

自レ古及レ今未レ有窮ニ其下一而能無レ危者也公悦（詰書治要十）

〔百四十六〕明雲座主相者にあひ給ひてをのれもし兵仗の難や有と尋給ひければ相人誠に其相おはしますと申いか成相ぞと尋給ひければ傷害のをそれおはしますまじき御身にてかりにもかくおぼしよりて尋給ふ是既に其あやぶみのきざしなりと申けりはたして矢にあたりてうせ給ひにけり

明雲座主　●明雲座主は叡山三千の衆徒の貫主なり●座主とは一座の主といふ意也天台座主職は傳教大師の弟子の義眞和尚天長元年に勅定にてはじめて延暦寺の座主になられしより事をこれり今は法親王の職となりて妙法院靑蓮院梶井の宮のまはりもちにし給ふ事なり參　頭書云△久我太政大臣雅實公の孫顯通卿の子なり山門の座主なり壽

系圖（雅實公までは上卷行雅系圖にくわしき故に略す）

村上天皇（人皇六十二代）──具平親王──師房──顯房──雅實──顯通（正二位權大納言號二六條一）──明雲（山門の大僧正）

座主　頭書云△要覽云摭言云有司謂ニ之座主一今釋氏取ニ學解優膽穎拔者一名ニ座主一謂一座之主文

相者に　●山案に此相者は阿部泰親をさすと諺解や參考などにいへど盛衰記にいゑるを見れば少納言入道信西なりくはしく首に記

兵仗　●仗の字に害る本有誤也句　●爰にては太刀長刀弓箭の類を云文　頭書云△字彙云仗呈兩切長兵器刀戟總名也壽

尋給ひければ　頭書云△山案盛衰記卅四云後白川院御登山の時少納言入道信西御伴に候けり前唐院の重寳衆徒存知なかりけれ共信西才覺吐などしたりけり其次に明雲僧正我にいかなる相か有と御尋あり信西三千の貫首一天の明匠に御座す上は子細不レ及レ申と答重たる仰に我に兵仗の相ありやと尋給ければ世俗の家を出て慈悲の室に入御座ぬ災夭何の恐か有べきなれども兵仗の相也やの御詞怪しく侍て是即兵死の御相ならんと申たりけるがはたして角成給ひけるこそ哀なれ●參考曰是よりさき明雲座主阿部泰親に逢し時泰親申しけるは陰陽家のうらなひには明の字を日月にとる也日月の下に雲あるは凶事なることとなるに座主の御名を明雲といへるはよからぬことにやと云るを明雲聞給ひて

さては兵仗の難も有んやと云れし也▲此事も盛衰記に見へたれど誰ともなく或陰陽師とのみ有て明雲に向ひて斯云る共これなし是非未ㇾ分ニ彼是ㇾ傷害のをそれ ●誠に座主の御身なれば弓箭の恐れは有間敷義也諸
あやぶみのきさし ●其傷害に逢べき氣さしあらはれて恐れ給ふ心也諺
はたして ●果の字也果敢決斷の義也句 ●ものゝ決定したる時果すとも果然とも云也爰にては案のごとくの心也諺
矢にあたりてうせ給ひけり ●明雲の問をあやまられけるゆゑにはたしてかくの如し說 頭書云▲壽永二年天台座主明雲僧正を法住寺の御所へ招請したまへり十一月十九日木曾義仲兵をそつして法住寺殿を責やぶる僧正も馬に乗て遁んとし給ひけるを木曾が大將楯六郎親忠がはなつ矢に御腰の骨を射させて眞逆に落たまひ立もあがり給はざりけるを親忠が郎等落かさなりて御頸をとる盛衰記卅四に見ゆ野
[一段之統論]●山案此段と前段とをば書つらねて一段となしたる本もありともに同じ人相の事を云へばさもあるべけれど上の段と此段に言行の過りのことをわけて書ければ今暫兩段となすされば上の段には信願か馬を能乗り得しに慢じて重躬が詞を信ぜずして身のつゝしみなき故に果して害を得たり淮南子に善游者溺善騎者墮各以ニ其所ㇾ好反自爲ㇾ禍といへるも此意なるべしたとひ其道に長じても其行をつゝしむべきなりさて此段には明雲の言のつゝしみなくて問をあやまり給へば自ら禍を得給ふ句解云誠に明雲の問を失て眞相となる占の道にも此ためしあり魏の文帝周宣に我夢に屋上の瓦落て鴛となると見る吉凶はいかにと問給へは宮中俄に人の死することあらんと答ふ文帝我汝をいつはりこゝろみたりとの給ふそれ夢は只心而已也言葉にあらはるゝを以て吉凶を占ふ君いつはりたりとも既に言葉にあらはれば占方違べからず云と其如く頓て宮中に鬭諍をこりて人あまた死したりと事文類聚に見へたりされば九思一言と云り容易言を出すべからず▲前段は事の上を以て相し此段は言葉の端を以てうらなふといへど是皆當然の理

也されどしゐて頼むは愚痴のなす處なるべし爰に此二段を記さるゝといへ共兼好實に信仰し玉ふに非ず其故はまことしからず思ひけると云は兼好心也神の如しと思ふは佗人の上に書たるにてしらるべし此兩段の事も彼ひとへに信ぜず又疑ひあざけるべからずの心なるべし猶莊子に云る相人季咸が事見合すべし 鐵増

〔百四十七〕灸治あまた所になりぬれば神事にけがれありといふ事ちかく人の云出せるなり格式等にも見えず

灸治 ◉灸を加へて病を療治する也 諺

ちかく ◉灸所三所迄はくるしからず四所あれはけがるゝと吉田の神龍院申されし此神龍院は二位殿の舍弟左兵衞殿の叔父にて神道能學びたまひし人なり 貞

格式等 ◉萬事の定め書を載たる書の名也 頭書云▲嵯峨天皇の時弘仁格弘仁式を撰ず淸和天皇の時貞觀格貞觀式を撰ず醍醐天皇の時延喜格延喜式を撰ず是を三代格式と申なり律と令とに合て明法家に博士をたつ▲唐之刑書有ㇾ四曰 律令 格式令者尊卑貴賤之等數國家之制度也格者百官有司之所ニ常行一之事也式者其所常守之法也凡邦國之政必從ニ事於此三者一其有ㇾ所ㇾ違及ニ人之爲ㇾ惡而入ニ于罪戾一者は一斷以ㇾ律 野 ▲養老年中に服忌令を撰せらる 諺

〔一段之統論〕◉此段には人の愚昧なるより神を恐るゝあまり灸治までを忌て身の煩をなすことを格式を證據としてさとせるなり次の兩段も兼好の例の慈仁の心にてしるせる成べし 句 ◉此段世間に古來無きことを誤り傳ふことを論ずされとも吉田家に灸治三ヶ所までは不ㇾ忌四所あればけがるゝとあれば一樣には難ニ心得一 諺

〔百四十八〕四十以後の人身に灸を加へて三里をやかざれば上氣の事ありかならず灸すべし

三里 頭書云▲明堂灸經云男子三十已上不ㇾ可ㇾ不ㇾ灸ニ三里一三里所ニ以下一ㇾ氣也 野 ▲三里の灸は上中下の三焦の病によしとぞ人四十以後は陰氣おとろへて上氣しやすし三里をやいて氣をひきくだすべし 諺

〔一段之統論〕◉此段前段をうけて灸の事を論ず同

じく仁愛の心を云り諺●或人三里をばすへぬ年あり其すへぬ年すへたる人多く灸穴より血はしりて死したることありと語られしをうきたる事と思ひ侍りしにそのかみ或檢校のすへぬ歳に推てすへしが灸疾癒かねて終に血はしり死去せしを見て習ひ傳へ侍し八歳十七歳二十六歳四十四歳五十三歳六十二歳七十一歳八十歳以上禁之貞●これも人々の明め次第なり增鐵

〔百四十九〕鹿茸(ロクジヨウ)を鼻にあてゝ嗅べからずちいさき虫ありて鼻より入て腦をはむといへり

鹿茸　●鹿の袋角也壽●是誤也鹿の胃肉の干たる物也説　頭書云▲本草曰孟詵曰圭ニ益氣一不レ可三以レ鼻嗅二其茸一中有二小白虫一視レ之不レ見入二人鼻一必爲レ蟲レ顙藥不レ及也▲瑣碎錄曰鹿茸麝香肉蓯蓉切不レ可二就レ鼻聞一蓋有二微虫一壽

〔一段之統論〕●此段も醫道を述て人の心得がたきことをあらはす諺●是は醫師ならではとりあつかはぬもの也餅は常に人の喰ふものなるが春三月は頭に毒あり喰べからずと本草に見へたるを誰もしらぬかと覺ゆ又加樣の事しる人あれども人に語る人これなきは兼好の情ある志には似ざる故なるべし或醫師の振舞に芹燒に酢を加へ出されしを見て其醫を見かぎりたる人あり芹に酢を加て食すれば人の齒を落すと云々貞●山案予も聞し事あり昔京都の鴻醫人を振廻けるに鯉の刺身に胡椒(コセウ)をかけて出さる一座の人々是を見て鯉に胡椒は禁物と常に聞しかどもさすがの鴻醫の致ることなれば苦しはかるまじきと思ひながら何れも喰かねしを見て醫師申されしは鯉に胡椒は禁物と世間に云ふに思ひ違あり鯉のために胡椒は禁物なり鯉に胡椒をかくるときは鯉の肉消するものなりしかるときは人の腹中へ入ても鯉を消するなればかへつて藥となるべきとありければ皆々安堵してくはれけるとなん

〔百五十〕能をつかんとする人よくせざらん程はなましいに人にしられじうち〳〵よく習ひえて指出たらんこそいと心にくからめと常にいふめれどかくいふ人一藝もならひうる事なしいまた堅固かたほなるより上手の中にまじりてそしりわらはるゝにも恥すつれなくすぎてたしなむ人天性其骨なけれども道にな

づまずみだりにせずして年をゝくれば堪能のたしなまざるよりは終に上手の位にいたり德たけ人にゆるされてならびなき名をうる事也天下のものゝ上手といへ共始は不堪の聞えもあり無下の瑕瑾もありきされども其人道のをきてたゞしくこれをおもくして放埒せざれば世の博士にて萬人の師となる事諸道かはるべからず

能をつかんとする人　(能)藝能なり諸　●(人)其藝能に志す人の詞

しられじ　●稽古の未熟なるうちは人にしらせしと也

うち〳〵　●內々の下稽古也增鐵　●人にかくして能稽古してからと也盤

かくいふ人　●如此是より兼好判して諺

堅固　●堅固はやはらかぬ義にて其道に流通自在ならぬ心に通ふべし句　●何にてもかたく其事の外に他なき義也一向とおなし文

かたほ　●ろく〳〵になき義也舟に風の熟せぬ程片帆にかけたる心にて眞帆に調らぬ義なりこゝにては初心なる義なり文　頭書云▲かたほは片帆眞帆とて船詞より出て其道にさかふてしたかひ難き心に通ふべし追手に帆をかくるを眞帆と云ひ風にさかふて帆をかくるを片帆と云夕顏の卷にもかたほの詞見へたり句

上手の中に　●此段の心は前の藝の拙さをしらす不堪の藝を持て堪能の座につらなりなどゝいへる心と相反せり前のは我藝の愚なる事をしらで堪能にまじはりて自身をばはづかしむる事をいへり爰は我藝の愚なる事を自知て上手の藝を見ならはむため修行の爲に上手の中にまじはれる心ばへ也文

つれなく　●強面共強顏共書て面つよき義也俗にいふしぶときの心に通ふべし句

すきて　●一說に過てと見たる抄もあれどきの字淸てよろしすき好む心なり參　●過て也爰にてはすくれての義に通べしきの字淸てよめば下の嗜と云詞に心重りて誤なるべし句

天性其骨　●生れ付の器用也野　●俗にいふ器量骨柄也諺　●藝の淺深を云時に皮肉骨の三つに入事をいふ全

なづまず　●泥の字とゞこほらぬなり壽　●ものに

退屈せざるなり盤
堪能の●藝能にたへたる器用也壽　頭書云▲萬
善同歸云所有衆善隨ニ己堪能一參
たしなまざる●器用の人の藝をつゝしまぬより
はまさりて上手になると也文
德たけ●德の長する也野　頭書云▲文中子曰其
名彌消其・彌長▲楊子法言孝至篇年彌高而德彌邵
者孔子之徒歟　咸與秘註曰邵亦高也參
人にゆるされ●萬人崇敬するなり說
ならびなき名をうる　頭書云▲善珠法師は光明皇
后の孽子也沙門となりて唯識を學べども愚なる故
に自ら恥辱としいよ〳〵はげみ勤て夏日の暑に頭
はれて瓜の如くにたゞれ鬢髮も拔落るまでやまざ
りければ廣く三藏をあかせり又昔物ならふ人志窟
して田舍へまからんとて近江國をとほりける時に
或人斧を石にてとぐ者あり何のためぞと問へば針
にするなりと答ふさてはかうやうの者もあるぞか
し吾志は無下にをとれりとて又都へ上り學問して
終に博士となる其所をすりはりと名づくと云傳ふ
野▲東坡か遲々而爲レ之十年之後何事不レ立といひ

佛の遺敎に汝等當ニ勤精進一譬如ニ小水長流則能穿一
ニ石との玉へるも皆この意也參▲枚乘書曰太山之
霤穿レ石殫極之綆斷レ幹水非ニ石鑽一索非ニ木鋸一漸靡
使ニ之然一也▲劉子新論云有子惡レ臥自碎ニ其掌一蔬
生患レ睡錐ニ其股一說▲中庸に人一能レ之己百レ之人
十能レ之己千レ之果能ニ此道一雖レ愚必明と云へると
此章の本意も相同じ才智かしこきとてたのむべか
らず魯鈍なりともすつべからず勤る處に怠ざれは
終に至極にいたらんと云ことを述ふ諺
天下のもの上手　●天下一の上手も盤●何藝に
てもなべていふ也諺
不堪の聞え　●堪能ならぬ不器用の事也參
瑕瑾　●玉のきず也恥辱などとる事也壽
放埒　●埒は馬ふせき也馬の埒を放て奔走する體
なれば事のみだれかはしきをいふ諺●もはや是に
てよきと思ふて心をゆるすまじきとの心也全
世の博士　●世に物しりと云也壽博士前に注す
【一段之統論】●此段すべて藝能をならふ人の心得
をしらしめたり句●名のために藝能をもとむる人
は始より人にをとしめられじと思ふ故に先したち

をよくしならひ得て少しも人に謗れず譽んと思ふ故に此企をなす也しかれども萬の道いることはやすけれどもよきに至ることは功つもらねばならぬ物なるにより其人の藝能成就すること少なり又必名の爲にはあらで其道をすく人は人の笑をも顧ず師匠のきつきにも隨て初より人にもかくさず打むきて其道に其身をなす故に程なく執行かさなり終には上手の譽あるもの也諸藝に志のある人は此段を能見るべし少もたがふことあるべからず貞

〔百五十一〕或人（●或人は設ていふらん説）のいはく年五十になるまで上手に至らざらん藝をば捨べきなりはげみならふべき行末もなし老人のことおば人もえわらはず衆にまじはりたるもあひなくみぐるしおほかた萬のしはざはやめていとまあるこそめやすくあらまほしけれ世俗のことにたづさはりて生涯をくらすは下愚の人なりゆかしく覺えむ事は學ひきくとも其趣をしりなばおぼつかなからずしてやむべしもとよりのぞむ事なくしてやまんは第一の事なり

年五十　頭書云▲論語子罕篇後生可レ畏焉知ニ來者之不レ如レ今也四十五十而無レ聞焉斯亦不レ足レ畏也已

壽大戴禮修身篇曾子曰年三十四十之間而無レ藝則無レ藝矣五十而不ニ以レ善聞一則不レ聞矣七十而未レ壞雖レ有ニ後過一亦可ニ以免一矣野

あひなく　●無愛なり諺

おほかた　●藝のみならず萬事なり盤

萬のしはざはやめて　●老人は諸事をすてやめて身を閑にして隙あることそよけれとなり諺●前に身の老ぬるをしらず雪の頭をいたゞきて壯なる人にならびなどいふと同じ心也文

めやすく　●見やすきなり盤

あらまほし　●ねがふ詞なり諺

生涯　●いける一期也壽　頭書云▲莊子云吾生也有レ涯口義曰涯際也人之生也各有ニ涯際一言有ニ盡處一也▲山谷詩東園添ニ我老生涯一▲無題詩集周光詩生涯七十少ニ餘喘一參

其趣をしり　●其あらましをしりなばなり諸

おぼつかなからず　●をぼつかなからずといふに兩說あり●大かた其道の樣子をしりなば一向しらぬやうにもあらじなればおぼつかなくはなきにしてやむべし文などの說又一說に趣をしるとは其藝道の

大體をしるをいふ其上にまたいかなる奥義口傳も有やせんすらんと知度思はぬをおぼつかなからずしてといへりと或人申されき此說上の其趣をしりなばといへる言葉に相應して面白し古來の抄の說にしたがひてよまばなからずのかすみてよむへし今說の時はにこりてよむなり句 ●しりなばといふてにはを味ふときは後說おもしろきにや增鐵

のぞむ事 ●此結句殊勝なり壽

なくしてやまん ●前はゆかしく是非にしり度と云人の事をいひ爰には又一等ふかく敎て望む事なくして徒然としてやまんは第一の事となり諺

〔一段之統論〕●此段は前段に藝を習ふ人世に笑るるも恥ず人に出交てはげみつとむべきことを云しは若き人の事也老人は藝能の修行は無益也只つれつれにてあれかしとの義なり文 ●上段に稽古の事を云たる故にそれになづみて著する人あるべければ本分の道は藝はよからぬことなりそれにまどひしばらるゝ人あればなり盤 ●此段老に至るまでならざる藝をはすてよといへる一往さもあるべきやうなれども高適は五十にしてはじめて詩を學で少陵にほめられ蘇老泉は三十にて始て學問して文章の名を得たり詩文のみに非ず師廣が敎に若きより學ぶは朝に出行がごとし中年にしてするは日中に行がごとし老て學ぶは燭を取て夜行がごとし學ばざるにはまされり古詩云少壯不二努力一老大徒傷悲此心あらん者若きはつとむへし老たりともすつべからず燭なくて夜ゆかんはあやふからずや聖人の四十五十にして道を聞ことなき者をいましむることは時に及で學をすゝむるの敎誨なり野 ●或問野槌に五十にしてもつとめよと侍る此理如何答曰兼好意は五十になりてはひとへに佛道をねがへと進めたり道春は兼好未發の意を發明せり畢竟は四十五十よりは道をつとむる事を簡要にして才藝は等閑なれとぞされど道學だにもおこたらずば又才藝をもすつべからずと聞へたり若五十まで道しらぬ人は人間の萬事を放下して是を本とせよ朝に道を聞て夕に死すとも可なりと聖人の金言も侍り新注

〔百五十二〕西大寺靜然上人腰かゞまり眉しろく誠に德たけたる有樣にて內裏へまいられたりけるを西園寺內大臣殿あなたふとのけしきやとて信仰のきそく

有ければ資朝卿これを見て年のよりたるに候と申されけり後日にむく犬の淺間しく老さらぼひて毛はげたるをひかせてこの氣色たうとく見えて候とて內府へまいらせられたりけるとぞ

西大寺　●大和國七大寺の內也諸　頭書云▲稱德天皇人皇四十八代　天平勝寶元年にこれを創て天平神護元年に至るまで十七年を經て造營をはる長七尺の四天王の銅像を鑄て安置し玉ふ大和國奈良にあり律宗なり委は元亨釋書續日本記に見ゆ古今集に西のをほてらとあり諸

靜然上人　●靜然上人傳記未レ考

西園寺　●實衡公なり左府公衡公の男又竹林院と號　頭書云▲公衡公までは上卷竹林院段日に委し

鎌足——不比等——房前——眞楯——內麿——冬嗣——良房——基經——忠平——師輔——公季——實成——公成——實季——公實——通季——公通——實宗——公經——實氏——公相——實兼——公衡——實衡　正二位內大臣從一位右大臣嘉暦元年十一月十八日薨卅八歲

あなたふとのけしき　●其智德のいかんともしらで氣色ばかりを貴れける也増鐵

きそく　●氣色なり諸

資朝卿　●日野權中納言　頭書云▲權中納言從三位檢非違使別當後醍醐天皇の時の人也日野俊光卿の三男諸　▲當時高時湛レ驕淫レ酒管領長崎高資振レ威恣レ逆背二人望一士民共怨後醍醐帝素憤二北條氏盜一レ權于レ是密謀レ滅レ之事發正中二年五月高時囚二中納言藤資朝卿右少辨俊基卿一七月帝遣レ使賜二誓書一謝レ之高時流二資朝卿于佐渡島一赦二俊基卿一其後元德二年五月於二佐渡島一終殺二資朝卿一

系圖　內麿までは右に記すゆへにこれを略す

內麿——眞夏　日野三位參議從——濱雄　民部少輔——家宗　參議左大辨——弘蔭　從五位下大學頭——繁時　正五位下大學頭——輔道　太宰少貳正五位下——有國　參議從二位——資業　左中辨從三位號日野三位——實國　正四位下文章博士——有信　右中辨正四位下——實光　從二位權中納言——資長　正二位權中納言

—兼光正三位權中納言 資實正三位中納言 家光從二位中納言 資宣正二位中納言
—俊光正二位權大納言 資朝

年のよりたるに候 ●資朝の詞は其才智をもしらて腰かゞまり眉白き計にて信仰あるは年の寄たるをたつとみ玉ふとの心なり諺 ●西園寺の内府をそしれる心也說

むく犬 ●獵犬と書說

さらぼひて ●饒の字を莊子にてさらぼふとよませたり壽 ●やせつまりて骨ばかりになりたる義也

諸 頭書云▲莊子曰莊子之レ楚見ニ空髑髏ニ饒然有レ形口義云饒然空虛而堅固貞▲俊頼の歌ニ云 山陰にやせさらばへる犬櫻をひはたたれて問ふ人もなし

參▲末摘花にいとをしげにさらぼひてと在句

まいらせられたりけるを ●老たるものがたふとくは此むく犬も老たるとて內府へたはふれて參らせられけるにや壽 ●何の功もなく歲のよるをば犬の年のよるごとしといへる世話もあればにや但此世話は此時分より後の事にや又僧を畜類に對する事唐詩などに多く見え侍れば今こゝにもよそへてたはふれられたるにや句 頭書云▲無德の僧を畜類に比する事は十輪經に佛ヽ愚痴無能にして是非善惡を分ざる沙門は瘂羊僧と名付是を羊に類し又遺敎經の注にも僧にして僧の德なきを鳥鼠僧といへり參▲上卷にある導師を唐の犬に似たりと云者もありされば唐人の詩に鳥宿池中樹僧敲月下門僧歸夜船月龍川曉堂雲林下聽レ經秋苑鹿溪邊掃レ葉夕陽僧などいへるも皆僧を畜類に對するなり又朝鮮國に沙門あり形甚矮小にして雞に似たりけれは人皆此沙門を雞僧と申けると慵齋叢話に見へたり野

〔一段之統論〕●此段は老人の衆にまじはりたるが見ぐるしきことを云たるをうけて靜然上人のことを書るにや文 ●上段に萬の仕業はやめていとまあることそめやすけれとあるをうけてさし出て恥をあたへらるゝ證人を出すなり盤 ●此段世の僧の何の智德もなくて徒に年ばかり老たるを折檻せるなるべし參 ●山案此段は人として智德ありとても年老て衆に交るは見ぐるし況や靜然さして才智の聞えもなくして名利にをぼれて隱居することを忘れ參內せしはよからぬことゝいましめたり又後世の愚

人其人の智德もしらずして姿のたふとく見へ言葉にありがたきことをさへいへば佛聖人の如くにあがまへたつとむなり何ぞ外相にかゝはるべけんや內心の德を尊むべきことぞたとへは大六天の魔王か釋迦の眞似して說法をなす是外相は釋迦と同體なれともたつとみ信ずべけんや內外相違の者世に亦多し大聖孔子の弟子の宰予かためしもあるぞ孔子曰以レ容取レ人則失ニ之子羽一以レ言取レ人則失ニ之宰予一とありされども老たるを敬するとあれば內府のうやまはれたるはあしきに非ずさりながら其人の德行をも不レ知して信仰せられしは愚なることと也されば後人も老たるをば必すうやまふべし尊み信服すべきところは必す心の智德にあるといふことを敎へたり

〔百五十三〕爲兼大納言入道めしとられて武士ども打圍て六波羅へゐて行ければ資朝卿一條わたりにてこれを見てあなうら山し世にあらん思出かくこそあらまほしけれとぞいはれける

爲兼大納言　㊟藤原定家卿三代の孫爲敎卿の男なり正二位權大納言法名靜覺歌人なり諸　頭書云㊟伏見院御宇永仁六年二月中納言爲兼隱謀の風聞有しにより北條家より召捕て佐渡へ流されたまへり嘉元二年歸洛之後大納言に任ぜらる二條家冷泉家の二流の外に又爲兼一流とて和歌の一家なり文

鎌足——不比等——房前——眞楯——內麿—
┌冬嗣——良房——基經——忠平——師輔—
┌兼家——道長——長家——忠家——俊忠—
┌俊成——定家——爲家（正二位大納言）—爲敎（從二位左中將）—爲兼

權大納言正二位毘沙門堂と號す應長元年依レ勅撰ニ進玉葉集一正和元年奏ニ覽之一同二年十月十七日剃髮同四年十二月二十八日東使として召とられ佐渡へ流罪せらる公卿補任に見へたり或說に爲兼佐渡島へ流されて和歌三十三首を詠阿彌陀佛と云字を竪横すちかひによめりこれによりて赦免して嘉元二年に歸洛と云々野㊟山案爲兼卿配所にて三十三首の詠歌二首は三十一首の上下にあり五七五七は長歌七文字は文字ぐさり此歌によりてめしかへされ玉ふ彼自筆の歌は吉野寶藏に籠られけるとぞ其三十三首の詠幷阿彌陀佛の歌をも今こゝに記すな

りさのみ此草子のたよりにはならざる事なれども我ごとくに好レ事者のために書のすること左のごとし

アラ玉ノ年モ越ヌトアノ坂ノ關サヘアケテ　カスムコノシタ
フル雪ニ昔ノアトヲタヅネテヤ若菜ツムラン　タカマドノヲノ
コノホドハ川音タテヽウチトクル氷ノヒマニ　ノコルシラナミ
トキゾトテヒモ解梅ノ玉カツラコヽロニカケテ　ミルヤワキモコ
チリケント花ヲモミズハ驚ノナミヨリホカニ　コエヤキカマシ
マチワビシ初音ヲソキク郭公シノビシホドハ　シバシバカリカ
タチハナノ香ヲナツカシミ夏衣袖ゾスヽシキ　カセノフクカモ
今ハハヤ夕立シケリイカハカリツユケカルラン　森ノシヅクノ
ツノ國ノアシマノホタルホノ〲ト明行夜半ノ　野ニモミユルカ
河ノ瀨ニ淸キミキハノミソギセシ跡ヨリ秋ノ　カセハフクカハ
春夏ヤ秋キリカケテトマラバヤ夜半モフケイノ　ハマニナルナミ
トマリ舟トマ引ステヽ夜モスガラ滿クルモシホ　ミテアカシツヽ
夕グレハ野バラヲシナミ啼鹿ノアハレヲソヘテ　露ムスプクサ
フル里ノ庭ノ朝良フク風ニムシノ音ソヘテ　サムキ衣手
タレモハタヲシムカヒナク秋モハヤ止ラデ行カ　テマノ關ニモ
スギノヤニフルヲトスル也神無月シクルヽコソノ　モロキ木ノ葉カ
キヽシニモアサヌ嵐ノサラ〲テヲトサヘ今ハ　カハリテゾフク
カキクラシフル淡雪ノツモルマデ猶山フカク　雲カヽレタヽ
ケフマデモ狩場ノマシバソヨサヘテ霰ゾサムキ　タマハコヽノヘ
シタヘドモナヲ暮ハテヽムバ玉ノ一夜ニフシヲ　ヘダテツルカナ
契シモイツハリニトテウキ人ヲ忘レントスレバ　ナシトコトノハ
カクバカリアヒモ思ヌアフコトヲタノムル心ノ　ハテハツラキカ
ヒマヲナミウラミゾマサル麻衣ヌルヽタモトニ　カヽルシラナミ
ヲノヅカラトニモウラメシ人心ウカリシマヽノ　身ゾト思フヲ
カズ〲ニナヲゾ戀シキ月日ヘハ忘レントノミ　思ヒケルカナ
見シモウシキヽシモ人ノ思ヒヨリ立ヤケフリノ　ナビクユヘヲ
ニシニカヨフ我心トゾゴクラクノ道ノシルベト　思ヒシラズヤ
マツコトノナヲ年月ノアケクレテツモレバ老ト　ヤガテナラヌカ
カケマクモ畏キ賀茂ノアフヒ草ノカケテゾ賴ム　カミノミコマコ
セヲハヤミ流テハヤキ水ゲキノアトバカリミユ　コレゾウタカタ
手ヲオリテカゾヘツヽミン萬代ヲ神ヨリホカハ　タレカシラナン

右三十一首なり又一首のかしらの一字を横によめば

あふことを又いつかはとゆふだすきかけしちかひをかみにまかせて

又一首の下の一字を横によめば

たのみこしかものかはみつさてもかくたへなわがみをなをやかこたん

右合て三十三首

アサガスミ ミドリニカスム 空ニノトニ フルアハ雪ノ ツモラザリシヲ

アキヤマノ ミ子ヲバ霧ノ タチコメテ アモトノ里ニ ツキゾマタル

アイツメテ ナレレノチノ タヅサニ カキミロハ ツクシツルカナ

アキハツル ヲコカラレノ タマクラニ アケ行夜半ノ ツキハウラメシ

アキレダキ ヨノカタメヲ タノムカナ カキ戀ハ ツキゾトゾ思フ

又風雅集に爲兼あづまへまかりけるにやす川をわたりけるによめる「やす川といかでか名にはながれけんくるしき瀨のみあると思へば
六波羅●北條家兩人の一族を京都におき畿內西國の政を行はしむ是を兩六波羅と號するなり東鑑に詳なり壽
あな浦山し●此一句數説あり●かゝる心の人なる故に犬をひかせてやられたるぞと也盤　頭書云▲此所の心世の中にしる人まれなりしに妙壽院惺齋の此義は何とゝるぞと尋給ひしに丸が云俊成卿の歌に「咲てこそ散ともちらめ一時もあなうらやまし顏良の花此にや通ひ侍らんといへばよき引歌也我は桓溫が枕をなでゝ人界に生れて人しれぬ身とならんは口をしきとなり天下に類ひなきくさき名なりともとらばやと云しに似たる詞かと宣ひし殊勝にこそ侍れ貞▲此時北條氏鎌倉に居ながら帝王を無し幼稚を立て將軍とし其身恣に國家を掠る事年久し我朝廷の臣として君を延喜天曆の時の如にし北條を亡して自ら國政をとらんと思ふ故に男たる者身死して土ともならばなれ若本意をとげば敵を又かくのごとくせんものをと思へばまことに爲兼は世にあらん思出かくあらまほしき事なるべしと是資朝の心の詞にあらはれたるなり其氣分は楚石乞が事成爲レ卿不レ成而烹固其職也といひ前漢の主父偃が大丈夫生不三五鼎食一死即五鼎烹耳といへる心なるべし又蒯通が漢祖に向て天下の英雄みな帝のする所をせんとねがふと云これによりて見れば資朝も又北條がするごとくせんと思ふなり野▲三人の義ともに同じ心なるべし增鐵▲大全の説は統論の下に記す

〔一段之統論〕●此段は前段の次手に資朝卿の心の勇健なることを記せり增鐵●資朝卿のあな浦山しとの玉ひしこと諸抄評判一ならず然ども兼好これにかき給へる心をあらはすが宜しかるべきか資朝の事三段つゞきてあり前段靜然上人を內府公信仰尤愚なれども資朝卿むく犬を牽せ給へることあまりなる業なり此段に爲兼めしとらるゝは浦山敷ことにあらず其故は思ひしまゝに本意をとげてこそあれ其事不レ成をうらやましく思ふは異風を好めるていの資朝なるべし然所に東寺の門前に雨やどり

に不具者を見て自僻を改らるゝ所よき方のあれば兼好資朝の褒貶かとぞ覺ゆる加様の評判は情ごはきもの勝とぞいひ傳へ侍る全 ●山案前の三說は資朝の心底を論ぜり故に本文の首に記す此一說兼好の心を論ず故に統論の下に記す僕も云ふべき說あれどもしばらく略す右四說の中讀者意にまかすべし

〔百五十四〕此人東寺の門に雨やどりせられたりけるにかたわ者共のあつまりゐたるが手も足もねぢゆかみうちかへりていづくも不具にとやうなるを見てとり〴〵にたぐひなき曲者なり尤愛するに足りと思ひて守り給ひける程にやがて其興つきて見にくゝいぶせくおぼえければたゞすなほにめづらしからぬ物にはしかずとおもひて歸りて後此間栽木を好みて異様に曲折あるを求て目をよろこばしめつるはかのかたわを愛するなりけりと興なくおぼえければ鉢にうへられける木ども皆ほりすてられにけりさも有ぬべき事なり

此人 ●資朝を指上の章に名を書たる故に爰には略す句

東寺　頭書云▲釋書曰延暦十五年創二東寺一大中大夫藤伊勢人爲二造寺使一▲又云弘仁十四年春正月賜二東寺于沙門空海一十有一月置二密宗于東寺一盤▲河海云弘仁年中以二東鴻臚一爲二東寺一賜二弘法大師一文

あつまり ●乞兒どもの多く集りたる也

興つきて ●はじめ愛すべく思ふ心も盡てなり說

いぶせく ●むさくろしき心なるべし鐵 ●むごき心也吉 ●爰は物かなしき體也又恐しき心も有諺 ●いやなことに用る詞全　頭書云▲桐壺にいぶせきと云る詞出たり抄に云心もとなき心なりいぶかしと云も同じ義なりと云々訝字不審字などを書所によりて物をあやしむ心にもとるいまこゝにてもあやしむ心なるべし句　▲山案拾遺戀部人丸の歌に「たらちねの親のこふこのまゆでもりいぶせくもあるか妹に逢ずて

鉢　盆山也野

さも有ぬべき ●兼好同心なり前に前裁の草木迄心の儘ならず作りなせるは見る目も苦しくいとわびしといへり文

〔一段之統論〕●以上三段皆資朝のことを誌せり此

人なみ〱の人に非ずことやうなる志氣なり野●
此段は萬事常に隨て異を好むべからさる道理をかたはものを見て感する智の勝れたる處をしるしぬ又家に歸りて鉢にうへたる木をほりすてられたるは過を改るに尤すみやかなる行なりいづれも後人の龜鑑なるべし句

〔百五十五〕世にしたがはん人は先機嫌をしるべしついてあしき事は人の耳にもさかひ心にもたがひて其事ならず左樣の折節を心得べきなり

したかはん ●世にしたがひ人にまじはる者也諺

機嫌 ●きげんをしるといふに機嫌譏嫌の二說あり●先つ機嫌とは字書に機は發也嫌は嫌疑也とあり機は弓のすてにはなたんとするなり嫌疑はうたがはしく分明ならざる也むかへる人の喜ぶ氣色怒れるきざしを見てそれと大かたしるを機嫌をしるとはいへり文●又譏嫌の二字はそしりきらふとよむ人の譏り嫌ふべき事を察するを機嫌を知と云か句 頭書云▲中阿含經に預知ニ機嫌一とありとかや亦方便品因緣の釋に感應亦機嫌ともいへり文 ▲又譏嫌▲涅槃經比本四十云具ニ足知愚一預見ニ機嫌一句 ▲楞嚴九曰訐ニ露人事一不レ避ニ譏嫌一參

人の耳にもさかひ ●命惜む病人の前にて死を語るたぐひ鐵増 頭書云▲韓非子說難云有レ愛ニ於主一則知當而加レ親有レ憎ニ於主一則罪當而加レ疏故諫說之士不レ可レ不下察ニ愛憎之主一而後說上レ之矣文 ▲孔聖全書曰良藥苦レ口利ニ於病一忠言逆レ耳利ニ於行一禮記にも人の子は必親の前にて人の老を語る事なかれと有又論語に喪ある人の側に食しつるときは飽までにせずとあるも是皆機嫌をはかる也▲又俊成卿八十の時叡山にて猿の鳴をきゝ玉ひて「さらぬだに老てはものゝ悲しきに夕の猿よ聲なきかせそ說

其事ならず ●きげんあしき時いひ出し仕出せば其事成就せぬなり諺

折節 ●折ふしは時節の事也盤

〔第一節〕●世にしたがはんと云より心得べきなりまで也此段四節に分ち見るべし●此一節を世にしたがふ人は加樣にせよとの敎には非ず敎と見ては一部の大意に皆たがふ也こゝの心は世にしたがう人は加樣に心言葉もつくろひわたらるゝ事有べけれどもなるべきたけほどこそ世に諂ひ人に媚て機

嫌をうかゞはるべけれ生老病死の誠の大事は其機嫌をうかゞふ才覺にはをよぶまじとの教也增鐵●世にしたがはん人は先機嫌を知べしと書出したるは奇妙の文章なり末に轉化して機嫌を云べからずと書んためなり然は發端に書出したる機嫌をしるべしと云は眞の志には非す說●山案右の說の如くなれども一編に此節の意をすてゝとには非ず世に交る者は尤此意得肝要ならん歟但し機嫌をうかゞひはかるまじきことにも何かと諂媚はあしきぞ其所によく意をつくべしされば長頭丸の說にも此發端の敎人の許ゆくに必忘るべからず其色を見ずして物云これを盲と云と孔子も御いましめあり殊更貴人の御目見なと先御機嫌を能々うかゞひはからふべきこと也佛も知時大法師と御說なされしと也佛法をひろむるにも三時の弘行とて悟りを專らにする時もあり權敎を弘むる時あり實敎をひろむる時あり其時に相應せねば得道もなきことゝやらんうけたまはり侍るといへり

但病をうけ子うみ死ぬる事のみ機嫌をはからずつゐであしとてやむことなし生住異滅のうつりかはる實の大事はたけき川のみなぎり流るゝがごとししばしもとゞこほらずたゞちにおこなひゆくものなり

やむことなし　●病產死の三つは機嫌によらぬと云事也諸●子うみ死ぬると云を一條として見るべからず句●又此內に老のこともこもれり增鐵

生住異滅　●四相に麁細有生老病死は麁の四相也生住異滅は細の四相也生は生れ出る處住は人間に居住して老身となる異は病をうけて異形になる滅は死去也藏乘法數に見えたり諺●此四相の中に第一死相をいはん爲に書り說　頭書云▲宗泐如玘楞伽註曰生謂因緣所生住謂住止異謂變異滅謂滅盡參

大事　●死の事也盤

たけき川　●河のうちにてもはやきと云ん爲也盤

頭書云　▲論語子罕篇云子在ニ川上一曰逝者如レ斯夫不レ舍ニ晝夜一程子曰此道體也天運而不レ已日往則月來寒往則暑來水流而不レ息物生而不レ窮皆與レ道爲レ體運ニ乎晝夜一未ニ嘗已一也野　▲宗鏡錄曰雖ニ年百歲一猶若ニ剎那一如ニ東逝之長波一▲內德論云命川流而電逝參　▲古歌に「行水とすぐるよはいとちる花と

いづれまてゝふことをとはれん諺
みなぎり　漲の字也
おこなひゆくものなり　●生住異滅と次第をちがへずしてさへ河の流てしばしも滯らざるがごとく有と也さて奥に不次第を云なり　次第を不レ待うつりゆくをいはん爲也盤
〔第二節〕●但し病をうけと云よりゆくもの也まで也●此節は病產死の三つは此方機嫌をはからぬ事を云り此節をいはん爲に前を書たりと知べし文
されば眞俗につけて必はたし遂んと思はん事は機嫌をいふべからずとかくの用意なく足をふみとゞむまじきなり
されば　上の詞をうけて也此四相のたゞちにおこなひゆけばとの心諸
眞俗　●佛書の常のあつかひには眞如法性を指て眞諦と云或は臣をすゝむるには忠をとき子をすゝむるには孝ををしへ國を治るには治をすゝめ家を治るには和をひろめ又天堂地獄の事を沙汰しては善をすゝめ惡をこらすたぐひの世事へかゝづらひたる事を俗諦と名付て是を眞俗二諦と云也名義集三藏法數萬善同歸集にくはし然共こゝにては眞を出世間俗を世間と許かろく取てもよろしき也參
頭書云▲指二法性眞如理一名二眞諦一指二無非煩惱事法一稱二俗諦一迷爲二俗諦一悟爲二眞諦一盤▲碧巖集云據二敎中說一眞諦以明二非有一俗諦以明二非無一下略文
とかくの用意なく　●世間の事に心を用る事なく也諺　●野槌盤齋にはもよひなくに作るもよほしなくなり盤　●大事を思ひたゝん人はさり難き心にかからんことのほいをとげずしてさながらすつべきといへる心とおなじ文
足をふみとゞむまじき　●其事になづまぬことをいふ也諺　頭書云▲台家の論義に中道にも足をふみとゞめずなどいひつけたる語なり參
〔第三節〕●されは眞俗と云よりとゞむまじきまで也●此節は例の死を待いとなみに懈怠すべからずの心なり文
春くれて後夏になり夏はてゝ秋のくるにはあらず春は頓て夏の氣をもよほし夏よりすでに秋は通ひ秋は則寒くなり十月は小春の天氣草も青くなり梅もつぼ

みぬ木の葉の落るもまづおちてめぐむにはあらず下よりきざしつはるにたへずして落るなりむかふる氣下にまふけたる故に待とるつゐで甚はやし

春は頓て　●山案頓の字なき本参文全ありされ共已則の二字につゐて見れば有べき文法なり

夏の氣をもよほし　●春の煖なるは是すでに夏の炎氣をもよほす也文

夏よりすでに　頭書云▲中務の歌に「下くゞる水に秋こそ通ふらし結ぶ泉の手さへすゞしき句

通ひ　●夏の涼しきは秋のはや來る也盤

則寒く　●秋寒きは冬のはや來る也盤

十月は小春　●十月の異名なり十月はあたゝかなる時有故に小春といふ說　頭書云▲荊楚歲時記云小春十月異名也天時和暖似ㇾ春故曰二小春一壽▲萬花谷時令考小陽春云々句▲朗詠十月江南天氣好說

草も青く　●十月のはじめにはやく春氣を促す事を云文●如ㇾ此たぐひの文法異國の書にも有　頭書云▲六韜云春道生萬物榮夏道長萬物成秋道斂萬物盈冬道藏萬物靜盈則藏々則復起莫ㇾ所ㇾ終ㇾ終莫ㇾ知ㇾ所ㇾ始野

きざしつはる　●根より目ざし熱する故にたえずして零落する也参●冬の中より春を迎ふる氣也諺

むかふる氣下にまふ　●木の葉の落るを待とる次第の早き事はよく枯たる木には火のはやくうつるがごとし増鐵

「第四節」●春くれてと云より甚はやしまでなり●第四節は生老病死と云ば次第あるに似たれどさには非ず死は老病をまたす其儘も來る事をいはんとて四時も次第あるやうなれど春に夏もあり夏のうちにも秋は來る理をいひてたとへとせり文●此節の意生の內に死も有生れ子の死なり住の內異も有若き人の歲よりて見ゆる也との心をたとへたり盤

生老病死のうつり來る事是に過たり四季は猶定れるつゐであり死期は序をまたす死は前よりしも來らずかねてうしろにせまれり人皆死あることを知てまつことしかも急ならざるに覺えずして來る沖の干潟はるかなれども礒より鹽のみつるがごとし

生老病死のうつり　●是を塵の四相といふ事上に見えたり此四字法華普門品に見えたり句●生住異滅と同じことなり諸　頭書云▲是以二生老病死一

喩ニ四季草木轉變ー釋迦譜曰人生有レ死猶ニ春有レ冬
人物一統无ニ生不レ終▲草木成佛記曰草木既具ニ生住
異滅四相ー參▲山案歌に「草も木も生老病死四の苦
をうくる春夏秋冬の色
來る事　●四季の次第に過て死の來る事は急なり
と也文
四季は猶　●猶の字心をつくべし文
定れるつゐて　●四季次第ある故に四序といふな
り節序といふも是なり野●過たりといふ事をこと
はりたり四時は次第がありて春より秋にも飛こさ
ぬが四相はとびこす故にはやくうつる事過たりと
也盤　頭書云▲莊子知北遊曰陰陽四時運行各得ニ
其序ーへ杜詩曰四時無レ失レ序參
死は前よりしも來らず　●彼四相の生て老て病で
死すると云ば行先より來る樣なれど左樣に前より
來るものに非ず文　頭書云▲在レ前忽然在レ後とあ
る論語の文勢思ひ合すべし句▲前はさしむかふ心
也後とは前に對して云ふこれ我身の上の義なるべ
したとへは向ひの人の我をよびに來るも人のよぶ
やうなれども其よばるべき故我身にあればなり是
畢竟人のよぶに非ず我よばるゝなり人の死せるも
無常の風さそふにてはなしさそはるゝ時節なり其
時節かねて身にせまると云心なるへし鐵槌▲山案古
歌に「花もうし嵐もつらしもろともに散ばそさそ
ふさそへばそゝる
せまれり　●死期の來る事油斷なし不慮に來るこ
ころなり壽
鹽の滿る　●鹽の沖まで干たる時は遙の程なれば
磯へは來る間遲からんと思へば却て鹽は磯より早
く滿來る也諺●此たとへをまふけて死を油斷して
世間に馳走する人をさとすなり潮の滿干の事は萬
物造化論及び抱朴子などにも其說ありしかれども
異說まち〳〵にして決定しがたし參●潮の事あら
まし頭書に有　頭書云▲山案說文云朝曰レ潮夕曰
レ汐▲字彙云潮者地之喘息也隨レ月消長所ニ以應レ月
者從ニ其類ー也一日之內自ニ子後陽升之時ー陽交ニ于
陰ー而潮生午後陰升之時陰交ニ于陽ー而汐至如ニ人喘
息之象ー也一月之內自ニ三日明生之時ー則陽長猶ニ一
日之子後ー也故潮勢大十八日魄生之時則陰長猶ニ一
日之午後ー也故潮勢亦大此天地間陰陽造化之妙莫下

知二其所一以然一者上大抵朔望前三日潮勢長朔望後三日潮勢大▲事文類聚前集云高麗圖經云潮汐往來應レ期不レ爽爲二天地之至信一古人嘗論レ之率未レ之盡一大抵天包レ水水承レ地而一元之氣升二降於大虚之中一地乘レ水力一以自持且與二元氣一升降互爲二抑揚一而人不レ覺亦猶下坐二於船中一而不上レ知二船之自運一也方二其氣升而地沈一海水溢上而爲レ潮及二其氣降而地浮一則海水縮而爲レ汐▲又新註云凡潮水の生涸（ミチヒ）の事さまざま論じたる書多けれども決定の理なし故に道春の鴻儒といへども未二分明一に似たり如何となれば程子の今夫海水潮日出則水涸是潮退也其涸者已無也月出則潮水復生却不下是將二已涸一之水上爲二潮水自然能生一也といへるを是として汐も磯もみちひ同時なれば下より涌出るにやとも覺ゆされば程子の潮の退ものは則無なりて又來る潮は自然に生ずといへるげにもさも有べしと野槌にかけり予つくづく案ずるに此理恐は然るべからず潮水の增減は月にしたがひて生涸ありて日にはかまひ有べからず退潮は無なりてみつるは自然に生ずると云もおぼつかなし夫潮水は天地の間に常に充滿して本來不增不減なれど月の運行によりて人間世より見れば滿干ありといへども地下より涌出たり消たりするものに非ず月は水の氣なれば東方卯の地と四方酉の位にある則は世界に潮みち南午の天上と北子の地下にある則は退て涸且大潮小潮春秋の增減も月の水氣の旺と不レ旺とによりての事なるへし虞肇海潮賦に潮之漲退海非レ增減一蓋月之所レ臨則水往從レ之といふ實に據所とするにたれり▲續後撰雜部覺仁法親王の歌に「あはれなる海士の苫屋の住居哉みちくる鹽の程もなき世に句

〔第五節〕●生老病死と云より終までなり●第五節は四相の次第は四季の序より猶過て急なれば死の來るを待に油斷すべからずとの心をいへり文●此結句死の速なることを潮にたとへしこと妙なり人として能々讀べき段なり說

〔一段之統論〕●此段始には世にしたがはん人は機嫌を知べきことを云て終に死することの機嫌を待ぬことを書て例の油斷をいましめたり文●此段上段に資朝卿の善を見て則移り玉ふ事を云たる故に後世を思ふも資朝卿の如く心とくせよ油斷しては

ならぬとの來意なるへし盤
〔百五十六〕大臣の大饗はさるべき所を申うけてをこなふ常の事也宇治左大臣殿は東三條殿にてをこなはる內裏にて有けるを申されけるによりて他所へ行幸ありけりさせることのよせなけれども女院の御所などかり申故實なりとぞ

大臣の大饗 ●始て大臣に任ぜらるゝを任大臣の節會といふ也此節會過て後大臣になり給ふひろめに振舞給ふを大臣の大饗と云也尊者とて親王なりとも大臣なり共上客を定てえかゝ公家とて相伴の衆ありといへり增補 頭書云▲江次第二曰大臣家大饗 正月四日左大臣饗五日右大臣饗是式日也而近代任ニ大臣一明年正月行レ之不レ行ニ大饗一大臣不レ向ニ饗所一當年不レ行人也 藤氏一大臣用ニ朱器臺盤一以其日可レ行山以ニ職事一達ニ天聽一是非ニ式日一時依レ可レ遣ニ蘇甘栗使並饗饌樂部等事一下略文 ▲山案江次第云群饗於ニ中門外一徘徊主人降ニ南階一當ニ座下方一尊者以下入レ自ニ中門一列ニ立階前一再拜訖相並昇ニ自南階東西端一著レ座下略 ▲西宮記云上下會集遂ニ賓客使一近代四位乘レ馬尊者王客列立辨少納言在レ後外記史在ニ其後一共拜兩日不レ拜著レ座遍辭讓雙昇尊者正入著ニ本座一主人便著レ庇以ニ讃岐圓座一爲レ座諸卿著座除ニ大臣ニ之外一人著ニ北面座一南面人經ニ辨座前一著 獻盃時同ニ非參議一自ニ大辨座上一往還云々一獻勸盃二獻後居ニ餛飩一三獻後雅樂發ニ音聲一四獻後諸卿起レ座獻盃五獻後主客勸盃三四獻間羞ニ飯汁物一署ニ燒 蘂甘栗ニ云々其 外法式事 しげく且故實のみなれば今是を略する也

さるべき所 ●大饗をしてしかるべき所を借る也
參●天子の御殿か后女院の御殿かをかる也盤 ●此所兩說有次にくはし

申うけて ●問或說云此大饗をし給ふ時に我殿がよけれども他所を借が故實なりといへるは必他所をかり申さるゝが故實といふに聞えたり如何答云有職の事はしもがしもに知べき事ならねばとかく申べきにもあらねど古記を見るに大かた家にて行れ侍しにや江次第にも他所をからるゝ沙汰なし多多良問答にも此大饗の事を答らるゝに官の外記に至る迄吾亭へ招て饗應する事也とこそ侍れ此つれつれの心も打まかせては我亭にてし給ふを又さる

べき所を申うけて行ふも問常の事也との義なるべし文

をこなふ　●行ふとは大饗をする也盤

宇治左大臣　●宇治の惡左府賴長公の事諸　頭書云●知足院關白忠實公二男法性寺關白忠通公弟從一位左大臣賴長公也內覽氏長者稱二宇治左大臣一亦號二宇治惡左府一後白河院人皇七十七代保元々年七月勸二新院七十五代崇德帝謀叛一新院軍不ㇾ利賴長公中ㇾ矢於二奈良坂一薨時十四日歲三十八詳二于保元物語一

系圖　道長公迄は前爲兼入道の所委

鎌足——不比等——房前——眞楯——內麿——冬嗣——良房——基經——忠平——師輔——兼家——道長——賴通從一位攝政關白太政大臣——師實從一位攝政關——師通從一位號二後二條一關白內大臣——忠實從一位太政大臣攝政關白富家又岡院號——白太政大臣——賴長

東三條　●殿の名也　頭書云●拾芥中の末云四條院誕生所或重明親王家と云々二條南町西南北二町忠仁公家貞信公より大入道殿傳領長久四年四月晦日燒失畢云此事彼左府の記祿などにや可ㇾ尋ㇾ之但し桃華蘂葉云應和二年七月十七日今日於二東三條殿一被ㇾ行二大饗一知足院關白任大臣日也云々此知足院關白宇治左大臣父忠實公此等の例にて宇治左府も爰にて行れ侍りしにや文

他所へ行幸　●此所二說有●先一說に此時東三條に帝おはしまして內裏にて有けるを他所へと申されける故に行幸ありて東三條殿をかさせ給て大臣の大饗を行はれけるともいへり此說を可ㇾ用歟●又一說には東三條殿にてと申されけるに依てなり有けるといふ下へ營の字を一字入て見るなり諺

させることのよせ　●よせは子細なり何とぞ極りたる流例はなけれども也說●さして御一門などいふ事のよせなけれどゝ也文

女院　●女院とは國母に院號奉らせ給ひたるを申すとなり六十六代一條の母后東三條院詮子大二條太政大臣兼家公女より始れり門號の始は六十八代後一條院の母后上東門院道長公女とかやそれより陽明門院待賢門院などをはしましけり文

故實なりとぞ　●是わりなきかり所なれ共大饗を

行るゝ規摸なれば加様の所をかり申さるゝ故實なりとなり文

〔一段之統論〕●此段は大臣の大饗は大かた家にて行はるゝを若さるべき所をかり申して行ふも常の事あるよしをいへり文●此段口傳云大饗つとめらるゝことは如何なる故とも知ざるにより傳授と云習と云て種々の説あれども正説ならず抑此故實は昔大臣たる人の御殿も少分にて大饗の客達座せらるゝほどの席はなかりしとなり其時節女院などの廣き御殿を借そめしよりならはせとなりて大臣家も過美廣大になりても借て行ふことになれり是を故實なりとしらせし段也兼好時代に人不審しける故なり仝
●大臣の大饗に他所をからるゝを故實とせる詮いかなる義とも知人なし此草紙よまむ人は加様の段に氣を付て講釋あるべし正義ならずば得知らぬと云てをかるべきなり智者の義精は加様の所にてあらはるゝと最耻し貞

〔百五十七〕筆をとれば物かゝれ樂器をとれば音をたてんと思ふ盃をとれば酒を思ひ簺をとればだうたむことを思ふ心はかならず事にふれて來るかりにも不善の戯をなすべからず

筆をとれば　●筆をふんでとよむべし本文の手といふの略語也說●山案文の字の聲は濁音なりしかるにふんと淸むは是音にてはなきぞふみといふ和訓なりさてみの字をむとはねる名目なりたとへば弓杖をばゆんづへ上達部をかんたちへ神主をかんぬしなどいふ類也爰にてもふみの手といふをふんでとよむ也

樂器をとれば　●樂器をとるは音樂の器なり謂ゆる金石絲竹匏土革木の類也說●異本に樂器より以下をば茶器をとれば茶をたてんと思ひ盃をとれば酒をのまんと思ひ簺をとれば雙六うたん事を思ふとあり野

だうたむ　●攤の字●こゝにてはさいに對してだうたんとあれば雙六をうつ義なるべし何　頭書云▲大鏡師輔公の傳にだうたせ玉ふとありて重六の沙汰あれば雙六のこと也壽▲杜子美夔洲歌長年三老長歌裏白晝攤錢高浪中箋註曰攤錢蜀人賭ㇾ錢之名野▲此説は博奕のことを云と見へたり參▲攤は

他干切にてたんの聲なれどもだと濁てよみならはせり鐵增 ▲だうたんは數五六のこと也撰うつとは賽を筒に入ふりひらくの名也撰に攤也だうつともだうとるとも云ふなり全

心はかならず ●上の詞品々の事をくゝりていふ也事にふれ如レ此うつるものにて有程にかりそめにも不善をするなそれに心がうつるとなり善をせよと也盤　頭書云▲心地觀經八曰心隨二萬境一轉說

〔第一節〕●筆をとればと云よりなすべからずまで也文段是に同じ此段三節に分ち見るべし●此章の意は心は緣にひかれてうつるものなればかりにも不善のたはふれをなすべからざることを云として種々のたとへをまふく皆心のうつるたとへなりさて此筆法陳師道が思亭記に本くか曰目之所レ視而思從レ之視二干戈一思レ鬪視二刀鋸一則思レ懼視二廟社一則思レ敬視二第家一則思レ安參●此節の意はえて人每に不善をなしてはこれはとげて行とにてはなしなどいへるいましめなるべし又善をすゝむる人に逢ては尤と至極しながらも或はとげてなさねば益なしなど云ひ或は眞實よりなさずばいたづらこと也など云てなさず是則惡にすゝみ善にをもむかざる人なり此所の大意はたとひ末とげずとも心實よりをこらずとも不善をにくみ善におもむかば其益思の外にあるべきと也張子厚東銘戲言出二於思一戲道作二於謀一鐵增

あからさまに聖教の一句を見れば何となく前後の文もみゆ卒爾にして多年の非を改むる事も有かりに今此文をひろけざらましかば此事をしらぬや是則ふるる所の益なり心さらにおこらずとも佛前にありてずずをとり經をとらば怠るうちにも善業をのづから修せられ散亂の心ながらも繩床に座せば覺えずして禪定なるべし

あからさまに ●暫の字也白地共書かりそめのころなり野

聖教 ●經論の事也前に注す

前後の文もみゆ ●かならず前後の文をば見んとせされども見ゆるなり諺

卒爾にして ●ふとして也盤　頭書云▲論語注卒爾輕遽之貌野 ▲世話に云與風(フト)と云心鐵增

多年の非　●久年の義也句　頭書云▲歌に「世を渡るはしと思ひて文見ればまことの道に入ぞうれしき說

此文を　●文は書籍の事也爰にては此草子をいふ也增鐵

ふるゝ所の益　●書籍にふるゝ所の利益なり參

おこらず　●佛道を信ずる心おこらずともとなり句

ずゞをとり　●珠數なり諺解には鈴とあり

をのづから　●山案自字眼也

修せられ　●修行せられ也諺

散亂の心　●しづかならぬこゝろ也文　頭書云▲法華經方便品云若人散亂心入二塔廟中一一稱二南無佛一皆已成佛道文　▲尸迦羅越六方禮經云定心度二散亂一參

繩床に　●繩床は床になはを張て其上に居る也又木綿をもはるなり座禪工夫の床也講　●床字台家には淸てよみ律宗には濁りてよむなり今爰にては淸てよむべし兼好台家の學者なればなり參　頭書云▲止觀居二一靜室一安二一繩床一大賢古跡繩床安レ身と云又雲棲戒疏發隱には繩床脫二略貢高一とあれは我慢高上の氣を破せんがためにかろ〳〵と作れる床なり參

禪定　●心の靜に定るを云句　●重々善にふるゝ益を云うちにたとひ心はさのみおこらずとも善所に至りて其事に觸れば益ある事をいふ也文　頭書云▲智度論云禪秦言二思惟修一▲僧史畧云禪者即定惠之通稱明心達理之趣也文

〔第二節〕●あからさまと云より禪定なるべしまでなり文段にはあからさまよりふるゝ所の益なりと云までを二節目となし爰にて節を不レ分終までつゞけて三節目とす●山案上節に心は必事に觸て來ると云をうけて爰には假初にも善にふるれば自益あることどもを擧たりされはむつかしくいやなことも始の內は苦勞に思へども切々手馴るれば後には僻のやうになつて不レ覺して其事をなすものなり彼法然上人の念佛にくせつき玉へとの給へる意もこゝに叶ひ侍るものなり

事理もとより二ならず外相もしそむかざれば內證かならず熟すしゐて不信といふべからずあふぎて是を

たふとむべし
事理 ●事とは外相にあらはれたる所作を云理と
は眞如佛性の本理に歸するを云也今爰にては珠數
をとり縄床に座するは事相といふものなり善業の
心をこり禪定の機あらはるゝは理の上の沙汰也參
もとより ●此事理本來二に非す事に理を即し理
に事を融せりたとへば氷即水々即氷と見るがごと
し故にずゞをとり經をとる内に善心來り縄床に座
する内に亂心のやむは事即理と云ものなり參 頭
書云▲釋加一代敎法無邊なれども事理の二つを過
ず今爰にて云はゞ身口意の三業にては身口の二業
は事相なり意業は理なり台家にては讀誦解説書寫
等は事相也止觀は理也全 ▲智證大師頓成菩提要曰
問事理者何義答事者顯形現前相也理者其事相所極
眞實性也從ニ實性ニ所ㇾ顯相也故與ㇾ性不ㇾ異尋ニ事
相ニ所詮性也故性與ㇾ相不ㇾ別▲金錍論曰迷悟雖ㇾ殊
事理體一 ▲萬善同歸集曰因ㇾ事顯ㇾ理藉ㇾ理成ㇾ事 參
▲事と理を各別にして一偏に著するをば理障事障
と云てきらふ也事理不二とたつるは台家の論也野
▲撰集抄に山ふかく住て理事即一の悟りひらけて
いまそかりけるとあり諺
外相 ●外の形也諺 外相と云も事相と云も同し
事也全
もしそむかざれば ●外相そむかざれば内證必熟
といふは惠心僧都の常談也野 ●源信僧都の詞にも
しと云字を添て爰に用ゆ外の形若暫時もそむかず
して其善事にふれたらば内證も自然と熟して終に
善人となる斷り也文
内證 ●内證と云も理といふも同事也其内證とい
ふは釋迦彌勒に有ても凡夫二乘に有ても增減なく
勝劣なき我等が心法不可思議を理共妙共内證共い
ふ也全
しゐて ●强の字なり盤
是をたふとむべし ●如ㇾ此に外の形背ねば内心の
熟するといふ事をうたかひを發して信じがたきご
とく思ふべからず仰て事理不二外相不ㇾ背内證必
熟すといふ詞を可ㇾ尊也諺
【第三節】●事理もとよりと云より終までなり●此
節は上の兩節を結て評論して事理もと不二なれば
かりにも不善の戯をするなといよ／＼人をいまし

めたり說◎第二節は卒爾にての心を云ふなり此三節には心と善にふるゝ上をいへり文

[一段之統論]◎此段の意は散亂に候へば禪定も叶ひ難く下根の身なれば身口の行業も勤がたしと云こと人毎に有こと也是は卑下に似て佛道修行するためには大敵なり是等のために書一段也全◎上段には大臣の大饗の故實をしるし下の四段には物の誤りをばたゞして人にしらしめ中間の此一段には心は見にしたがひ聞にしたがひてうつるものなれは觸所の益をよく／＼心得べき道理を述て萬人の敎誨とし又上下の五段を見聞せん者のふるゝ所の益あるべき證文とす句◎山案此說鑿なりかろく只善にふるゝの德あることを云と見るべし但しかりに今此文をひろげざらましかばの文をばこゝにては此草子を云といへる說の意を以て見れば此說も又捨がたし見る者の意によるべし

[百五十八]盃のそこをすつる事はいかゞ心得たると或人の尋させ給ひしに凝當と申侍ればそこに凝たるをすつるにや候覽と申侍しかばさにはあらず魚道なり流てのこして口のつきたる所をすゝぐなりとぞおほせられし

尋させ　◎兼好に或人の尋給たると也句

凝當　頭書云▲字彙云凝魚慶切冰堅也文▲韻會當丁浪反底韓子玉巵無レ當注無レ底也野　上卷に見へたり

凝たるを　◎とゞこほる義なり句

候覽と申侍しかは　◎兼好申侍る也參

さにはあらず　◎尋給ふ人の詞也諺

魚道なり　◎魚は同じ道をひたと通る物なれば少し飲殘して口の付たる處を洗ひ清むる心か諺　頭書云▲下學集云魚道建二殘盃一也以二餘瀝一洗二盃痕一喩三之魚過二舊道一故云二魚道一也魚雖三泳二游大海一終不レ忘二舊道一者也是又出所未レ詳壽

おほせられし　◎或人の仰られしなり句

[一段之統論]◎これより以下の三段常に云ふ事のあやまりをたゞせり壽◎山案次の一段には統論を擧るに不レ及ゆへに略するなり

[百五十九]みなむすびといふは糸を結びかさねたるが蜷といふ貝に似たればいふとあるやんごとなき人おほせられにきになといふはあやまりなり

みな　●公家の表袴或台家眞言家の七條の伽裟などのかざりに糸をもつて結ひさぐる有是をみな結びと云壽　頭書云▲和名集云崔禹錫食經云河貝子(ミナ)和名美奈俗用二蜷字一非也音拳連蜷虫屈貌也殼上黑小狹長似二人身一者也野

にな　頭書云▲異本にはになと書出してみなと云はあやまりなりとある也これあやまり也諸▲さりながら天台の縢々衆も袈裟の組緒をばみなとはいはてになといへるをきゝたり參●山案人の名字などには蜷川と書てにな川と云也

[百六十]門に額かくるをうつといふはよからぬにや勘解由小路(カデノコウヂ)二品禪門は額かくるとの給ひき見物の棧敷うつもよからぬにやひらばりうつなどは常の事なり棧敷かまふるなどいふべし護摩たくといふもわろし修する護摩するなどいふなり行法も法の字をすみていふわろし濁りていふと清閑寺僧正仰られき常に云事にかゝることのみ多し

額　●揚字也　頭書云▲昔は平人額をかくることはなかりしぞ禁中三十六殿九重の御門より外にはならぬぞ社にては伊勢石清水など天子同體の社寺は七十二箇寺天子御祈願所の外はならぬぞ然所に一條院の時に東三條兼家公に始て法興院と云院號を御免にて額をもかけられしより攝家にそろ〳〵額をかくるぞさて額かけぬ家には下馬もなきことぞ今以勅額にてなければ門に額かけることならぬぞ説

うつといふ　●打といふはあしきぞ

二品禪門　●世尊寺行忠卿のこと也　頭書云▲鎌足二十三代之孫從三位宮内卿行尹(ユキマサ)卿男正二位參議行忠卿也號二世尊寺一句

系圖(行成までは前飛鳥川の段にくわし)

鎌足――不比等――房前――眞楯――內麿――

―冬嗣――良房――基經――忠平――師輔――

―伊尹――義孝――行成――行經(從三位參議)――伊房(正三位權中納言)――

―定實(從四位下宮內少輔)――定信(從四位下宮內權少輔)――伊行(宮內大輔從五位下)――

―伊經(左京大夫從四位下)――行能(修理大夫從三位)――經尹(少納言從二位)――行尹(宮內卿從三位)――行忠

額かくる　頭書云▲大鏡上實賴公の傳によろつの

社に額かゝりたるとあり壽 ▲平家物語に額うち論ありよからぬ詞なるべし野

ひらばり ●平張也諸 ●平地に板をわたし幕を四方にはりまはしたるをいふなり是はうつといふなり諸

護摩 ●護摩は梵語なり梵燒と飜す然はたくといふは重言なる故に嫌ふ也しかれども梵語には重複おほしたとへは阿伽は水の梵語にして阿伽の水といひ摩訶は大の梵語にして摩訶大迦乘なんどいふ類也　頭書云▲慈覺大師蘇悉地經疏云言二護摩一者是西天語此即梵燒義也參

法の字をすみていふわろし ●行法とは總じて佛法修行に通ふべき事ながら此行法と云は天台眞宗の兩宗に於て密敎の事をとり行ふ時四度の行法といふ事侍り十八道胎藏金剛護摩なり法字淸ては聞にくき故か常に濁りていふ也參

淸閑寺 ●東山しる谷でへの近所にあり野

僧正 ●道我僧正也系圖未考　頭書云▲淸閑寺の道我なり兼好の關東下向の時餞別の歌よみ玉へり又後宇多院より兼好かよめる歌めしけるに奉るとて僧正道我に申つかはしける「人しれず朽果ぬべき言の葉の天津空まで風にちるらんとよめること兼好集にあり文 ▲山案淸閑寺は高倉院治承二年に佐伯公行建立なり東山にあり

〔一段之統論〕●此段は論語に言不レ順則事不レ成とあるこゝろにも叶ふなりされば一言をあやまれば末々は大きに差となるぞ中人以上より誤をたゞさねば下に至ては分もなきことになるほどにそれをたゞすべきことをいへり一犬吠レ虚萬犬傳レ實といへるが如し其上人の言と書て信とよめりしかれば言の正しきを以て人とす猩々よく言とも禽獸をはなれずとあり人は信あるを以て尊しとすといへり此段兼好の心ある書樣もつとも眼を着べし武

〔百六十一〕花の盛は冬至より百五十日とも時正の後七日ともいへど立春より七十五日おほやうたがはず

花の盛 ●日本にて花とばかりいへは櫻なりもろこしにも洛陽には牡丹を花といひ成都には海棠を花といへり皆是尊貴の心なりと鶴林玉露に見えたり

冬至 ●十一月の中なり諸　頭書云▲群書拾唾云

冬至十一月中陰極陽生参 △事文類聚云斗指レ子爲ニ冬至一至有ニ三義一一者陰極之至二者陽氣始至三者日行レ南至故謂ニ之至一文

時正 ●彼岸の中日也晝夜時正しき故也諸 頭書云△或僧家の說に龍樹菩薩の記を引て都卒天の側に靈所臺ありそこに樹あり二月に花開七日七夜にして落秋八月七日果成る摩醯首羅梵天帝釋等𠆢集て七日の間世間の善人惡人の名を印記す生死此岸涅槃彼岸故曰宜下取ニ七日一修中善業上いはゆる春秋七日なり此事たしかならぬにや砥平石の錄に彼岸は日本の風俗也唐土にこれなしと云り野

おほやうたがはず ●たとへば元日立春の時は立春より七十五日は三月十五日にあたる時正の後七日は二月廿七日なり冬至より百五十日は四月十五日也しかれば時正の後七日は花の盛にはやく又冬至より百五十日は花の時節に遲し立春より七十五日は大概花の盛の時分なるへし句

〔一段之統論〕●此段花盛の時分を知せたり但し是は王城の土地の氣を規矩として云るもの也邊土田舍は又寒温の遲速あれば又ちがふべし說

〔百六十一〕遍照寺の承仕法師池の鳥を日來かひつけて堂の內まで餌を蒔て戶ひとつをあけたれは數もしらず入こもりける後をのれも入て立こめてとらへつつ殺しけるよそおひおどろ〳〵しく聞えけるを草かるわらは聞て人に告ければ村の男どもおこりて入て見るに大鴈共ふためきあへる中に法師まじりて打ふせねぢころしければ此法師をとらへて所より使廳へ出したりけりころす所の鳥を頭にかけさせて禁獄せられにけり基俊大納言別當の時になん侍りける

遍照寺 ●嵯峨の廣澤の邊にあり諸 頭書云△拾芥云廣澤僧正造地僧正は寬朝なり野 △釋書云吏部尙書敦實王第二子寬平上皇孫也從ニ寬空阿闍梨一稟ニ密宗一△又云居ニ遍照寺一啓ニ密肆一世稱ニ廣澤密流一盤

承仕法師 ●法師の名承仕といふにあらす寺中の觸ながし法事などの雜役をする者也今祇園にも承仕と云者有承り仕ふと云字意にて知べし諸

池の鳥 ●廣澤の池なるべし文

かひつけて ●飼なつけてなり說

おどろ〳〵 ●おどろくばかりこと〳〵しき心也

諸　頭書云▲源氏桐壺にをどろ〳〵しうとありをどろく義也をそろしき心もあり文

入て見るに　●堂の內へ入て見れば也說

ふためき　●うろたゆる體なり諺

使廳へ出し　●檢非違使廳なり別當あり上にくはし廳とは官人の居て事をさばく所也諸

鳥を頸にかけさせ　●今いふさうしもの也諺

禁獄せられ　●獄は罪人を置所今いふ籠なり禁足させんために獄中に入るなるべし句　頭書云▲沙門の罪をば大方輕々しくなだむるは近代の弊法也僧尼令すてに訓戒を垂たり石晉の高祖は佛像よくもの云といひふれて諸民を迷す僧徒を誅し唐の李德祐は甘露寺の常住物を訴る沙門を罪し柳渾は家に放火せる僧を刑す棠陰比事に見へたり野

基俊大納言　●久我の一門なり傳前に有

別當　●檢非違使別當也盤

侍りける　●前に基俊卿を大理になしてといふ所にくはし文

〔一段之統論〕●此章は破戒無慙の僧を敎誡せんがために四重禁の第一殺生戒を破て禁獄にあひける物語を書て後世のいましめにそなへられし成べし參　●上盃の段より皆俗のあやまりをたゝしけることをいへるをうけて此段には基俊卿の破戒の僧の罪をたゞし給ふことをいへり說　●上段に花盛の時節を論ぜるをうけて又此段には僧の鳥を殺したる物語を記す花鳥相うけたる底意にしてさて破戒の罪をあげて諸僧の龜鑑とす句

〔百六十三〕太衝の太の字點うつうたずといふ事陰陽のともがら相論の事ありけりもりちか入道申侍しは吉平が自筆の占文の裏にかゝれたる御記近衞關白殿にあり點うちたるを書たりと申き

太衝　●九月の異名なり灸穴にも太衝とてあれ共こゝは九月の事とばかり見るべし諸　頭書云▲沉存仲筆談卷七曰九月木可ㇾ爲ニ枝幹一故云ニ太衝一太衝者日月五星所ㇾ出之門戸天之衝也諸　▲字彙衝通道也句　▲見ニ明堂灸經唐本一太衝之太字有ㇾ點參

陰陽　●陰陽の事前の赤舌日の所に有增鐵

相論　頭書云▲范曄（ハンヨウ）が父の名は泰なり故に後漢書に泰の字を太と書り大學の大の字鄭玄讀で泰の音とすといへど朱文公の章句には大小の大也といへ

るためし昔よりなきにもあらず野

もりちか入道　●傳記未ㇾ考

吉平　●安部晴明(ハレアキラ)が子也　頭書云▲安部晴明子吉昌兄也主計頭(カズヘノ)陰陽博士年八十五卒壽

系圖

倉橋麿（左大臣本朝大臣始也人王八代孝元天皇第一皇子太彥命子孫云々）─御主人（左大臣從一位）─廣庭（中納言從三位）─吉人（右大辨從四位）─大家（治部大輔）─尼雄(モロオ)（從四位下）─春材(ハルキ)（淡路守）─益材（大膳大夫從四位下）─晴明(ハレアキラ)（天文博士）─吉平

占文　●古書とも書名目にはせんもむといふ也壽

裏にかゝれ　●後世の證據に用むため其時代の反古のうらにかゝるゝ事ありとぞ文

御記　●必書の名にあらず御は褒美也諺

點うちたるを書たり　●吉平の自筆にて書たる占文の紙の裏に近衛關白殿御記錄をあそばされたる有しが其吉平が表書の占文のうちに太衛と云字出たるに點うちたる太の字を書たるとなり句

申き　●もりちかゞ證據を引てことはる說

[一段之統論]●此段常に書文字の誤を心にかけさせんために例として一ヶ條擧たり鹽の字の類なり壽●上の段に僧道のことをいへるにうけて又此段には陰陽道の沙汰を說出す猶前々の段ごとく世俗のあやまりをたゞし正義をしらしむる仁心なるべし句

[百六十四]世の人あひ逢時しばらくも默止する事なし必言葉あり其事をきくにおほくは無益の談なり世間の浮說人の是非自他のために失おほく得すくなしこれをかたる時たがいの心に無益のことなりといふ事をしらず

默止　●默止とは物いはざる體なり壽

必言葉　●人に逢ては必挨拶あり

無益の談　●無益の談也談は物語也文　頭書云▲王日休曰口談ニ無益一如ㇾ嚼ニ木屑一不ㇾ如ニ默以養ㇾ氣參

世間の浮說　●是より其無益の物語の品を述たり

浮說とは世上にいふうき〳〵なる說なり雜說の事是を猛浪の說共いふ參

人の是非　頭書云▲論語顏淵篇子曰君子成ニ人之美一不ㇾ成ニ人之惡一▲座右銘無ㇾ道(イフコト)ニ人短一無ㇾ說ニ己長一▲法華安樂行品不ㇾ說ニ他人好惡長短一訓▲後漢馬援が好議ニ論人之長短一妄是ニ非正法一此吾所ニ大

惡一也と云るを可ニ思合一句
しらず ●うつら〳〵といふ物なれば心をつけて
つゝしむべしとふくめたることばなり說
〔一段之統論〕●此段はこと葉をつゝしむべきのい
ましめなり文 ●上段に相論の事ありと云をうけて
又此段にも世人の相逢時をほくは無根の雜談或は
人の是非を議論す皆是無益のことなる道理をあら
はし後人の龜鑑にそなふ句
〔百六十五〕あづまの人の都の人にまじはりみやこの
人の吾妻に行て身をたて又本寺本山をはなれぬる顯
密の僧すべて我俗にあらずしてまじはれる見苦し
本寺本山 ●東人都人のことは俗人の上にて云也
本寺本山といふは僧のうへにて云也僧俗共に外を
願て心身ともにしつかならぬをいましめたり盤
顯密 顯敎密宗也顯とは佛說をあらはに敎きかす
る天台宗なと也密とは眞言宗秘密の法なり文 ●此
二敎をひろむる僧を顯密の僧といふこの顯密の二
字にあまねく諸宗の僧をこめたり舊抄に解したる
義はいつれも理にあたらす參 頭書云▲三身問答
云爲ニ淺略機一所レ說名爲ニ顯敎義一爲ニ深秘機一所レ說
以爲ニ秘密義一▲二敎論意曰應化開說爲レ顯法佛談
話爲レ密▲顯とは顯敎釋尊の說敎也密とは密敎大
日覺王の說相也參
すべて ●是より上の僧俗のことを評して云說
我俗に ●わが風俗なり一本に屬の字を書り我屬
類なるべし野 ●俗にいふ馬は馬つれ牛はうしつれ
なり說 頭書云▲人として父母の國を離れて他國
へは行ぬか道なりたとひ父母の死後とてもはなれ
ぬもの也況や父母存命の中に於てをや論語里仁篇
子曰父母在則不ニ遠遊一たとひ身のすきはひたりと
云とも父母ある中は離るまじきなり曾參の仕を求
めざるにて可レ知▲孝經集靈雷紹字道宗求レ師經レ
年適ニ孝經一常讀レ書至ニ人之行莫レ大ニ于孝一乃投レ書
嘆曰吾離ニ違侍養一非ニ人子之道一即還ニ鄕里一躬耕奉
養▲萬葉集五に「ひとつ世にふたゝび見えぬ父母
を置てやながくあかわかれなん說
〔一段之統論〕●上段には世人の相交に無益の談あ
るとをあらはし此段には世人の相交に我俗にあら
ざるをそしりいましむ是も又兩端相うけたる語脈
なるべし句 ●前に法師は兵の道をたて裏は弓ひく

すべしらすなどいひし所と同じ心なり文 ●大江明衡が鸞鳳のまじはりに鳥雀をきらふとかけるも賓にことはりにて侍る僧侶のまじはりも宗門のかはりたるはいと見ぐるしくぞ見へ侍る貞

〔百六十六〕人間のいとなみあへるわざを見るに春の日に雪佛をつくりて其ために金銀珠玉のかざりをいとなみ堂塔をたてんとするに似たり其かまへを待てよく安置してんや人の命ありと見る程も下より消る事雪のごとくなるうちに營まつ事甚おほし

いとなみ　●只亘の事に非ず行末かけて營也増鐵

春の日に　●雪佛はおほくは冬つくるものなるに春の日にと云はいよ／＼消やすき詮なり文　頭書云▲禪家などの雪にて佛をつくるを云なり心のさはやかに着せぬを本意とする也▲無門關曰雪佛滿掌握レ雪聳参▲貞和集子元雪佛頌 一華聳出一如來六出團々咲臉開識得髑髏元是水摩耶空裏不レ投レ胎子元は佛光國師祖元なり又雪達磨雪布袋とあるも雪にて其像を作るなり野

かまへ　●堂塔を構るなり諺

安置　●二字共におくとよむなり佛をすへおくを云野

てんや　●貴金銀珠玉をもつてかざりたつる堂塔の成就する迄の間をまつて雪佛きえずしてあらんやと也死も又かくのごとし前に死期はついでをまたずといへり説

雪のごとく　頭書云▲伊勢大輔歌に「奥山の松の葉こほる雪よりも我身世にふる程ぞはかなき▲又紫式部歌に「消やすき露の命にくらぶればげにとどこほる松の雪哉▲雪佛は消る間あり死は機嫌を不レ待説

なるうち　●人の命の早く終る事も雪佛の下より消る如くに幻の身を持ながら幾久しき後の代の求を營て世を長閑に思へるは深く誤れる事と也参

〔一段之統論〕●此段我身を雪佛にたとへて是がために東西へはしり南北にもとむる金銀は我身をやすくおかんとするに大かた求得ずして死去するのみをほし雪佛のために堂を建るに少もかはらずたとへのぞみの如く成就しても雪佛なれば程なく消べし誰も此ことはり知ぬにはあらねど信のあるとなきとのかはりなり心を付て見るべきなり此段に

て思ひあたらぬ人は千佛出□□□とも益なかるへし全

［百六十七］一道にたづさはる人あらぬ道のむしろにのぞみてあはれ我道ならましかばかくよそに見侍らじ物をといひ心にもおもへる事常のことなれどよにわろくおぼゆるなりしらぬ道のうらやましくおぼえばあなうらやましなどかならはざりけんといひてありなん

道のむしろ　●我たづさはらぬ外の道の座席にのぞみてなり参

あはれ　●此あはれはあつはれの義なり句

我道ならましかば　●是二説あり一には我つとむべき道ならばと也又一には我しおほへたる道ならばと也説　●我道ならは加様に他所になしては居まじと其藝をもどかしく口にもいひ心にも思ふ也諺　●たとへば碁をよく打人連歌の席につらなり我得たる碁ならばと云がごとし碁をまんずる心わろしとなり全

よに　●よの字は餘の字義ならんか句

わろくおぼゆる　●是は我智を自慢したる者なればわろき覺悟ぞとなり諺

などかならはざりけん　●年も若き時分にならはずして口おしといひてありなん諺

［第一節］●一道と云よりいひてありなんまでなり　●此段人の慢心をいましめたり四節にかける第一節は人の應對にも我智をさしはさみていふがわろきことをいへり文

我智をとり出て人にあらそふは角ある物の角をかたふけ牙有物の牙をかみ出すたぐひなり

我智　●彼我道ならましかはといひし詞我智をさしはさみ云出たる詞なれは也文

人にあらそふ　●是は我道の上にて人とあらそふ事也鐵増

角ある物　●牛羊の類也諸　●是は他をおとして我智を自慢するはたとへは牛羊のたゝかひ虎狼猪犬のたゝかふ類のごとし角の字をあらそふとよむもげにもなる訓なり参　●虎狼猪犬のたぐひなり　頭書云▲列子云傳ㇾ翼戴ㇾ角分ㇾ牙布ㇾ爪仰飛伏走謂二之禽獸一　▲萬物造化論を見侍れば牛は上の歯なきが故に角あり歯あり牙あるものはかならず角なき

ものなり是皆自然の理なり參
牙をかみ出す　頭書云▲蘇子由曰以レ智攻レ智以レ勇擊レ勇如ニ兩虎相捽(ツカム)一齒牙氣力無ニ以相勝一說
〔第二節〕●我智と云よりたぐひなりまで也●第二節は彼我智をさし出て云詞のよにわろく覺ゆることはりなり文
人としては善にほこらず物とあらそはざるを德とす他にまさることのあるは大なる失なり品の高さにても才藝のすぐれたるにても先祖のほまれにても人にまされりと思へる人はたとひ言葉に出てこそいはねども內心にそこはくのとがありつゝしみて是を忘るべしをこにも見え人にもいひけたれわざはひをもまねくは只此慢心なり
人としては善にほこらず　●是より人は萬物の靈長にて禽獸よりは勝りたる甲斐には也諺　頭書云▲論語八佾篇顏淵曰願無レ伐(ホコル)レ善野　●文中子魏相篇曰無レ伐レ善阮逸註曰不ニ自矜伐一參
物と爭はざる　●人の事也人物とつねに云也參●物とあらそはぬ所大理を自得したる故なり諺　頭書云▲論語八佾篇子曰君子無レ所レ爭壽

他にまさること　●二說有　他にまされる事の我に有とみづから思へるはと也句●又一說に　惣別人にまさることのあるは失の本也人にまさる事かあれば人におとる事のなくてかなはぬ道理なるゆへに失か有となり盤●山案前說は諸抄同じたる解也其うへ此一節は前後皆人の自慢をいましめし所なれは此說本意にかなふに似たり但或說に此一句は例の兼好の志をのべて前をむすび後をおこせりしかもすべて才能あるものゝ失をいひければ後說もおもしろし其うへ文の顏(ツラ)も前說のごとくはきこへにくし加樣なる文法前にも多し僕もしはらく同す　頭書云▲劉子新論曰翠以レ羽自殘龜以レ智自害丹以レ含レ色磨レ肌石以レ抱レ能碎レ質▲左傳云象以レ有レ齒焚ニ其身一▲されば菅丞相の流罪も文武の才智まします故なり韓昌黎が左遷も博學が罪となれりしかれは上﨟は下﨟となり智者は愚者になり能ある人は無能になるべきもの也　金人銘云好レ勝者必遇ニ其敵一說
品の高さ　●位高き事又何某の系圖など云事也全
人にまされりと思へる　●自分の手柄咄し親類の

感狀だてなど也全
そこばく ●若干と書其外爾所許多居多爾許千萬とも書數のさだまらぬ義也參　頭書云▲禮紀註若如也未定辭也數始ニ於一ニ而成ニ於十ニ千字從レ一從レ十故言ニ若干一▲金剛經直解若干者干是不俱之數也參
とがあり ●心に忘れずしてかたばやと思はゞ言葉に出さず共內心にあしき科のがれまし全
忘るべし ●忘れにくき程にずいぶん〳〵用心してつゝしみて忘よと也盤 ●文段には是迄を第三節として云人にまされりと思ふ我慢を忘るべしとの心也第一二節は詞に慢をあらはせるをいましめこゝには心にある慢をいましめたりと也今しばらく節を未レ分
をこにも ●嗚呼と書世俗にしれものなどいふ義なり壽
いひけれ ●いひけさるゝ也諸　頭書云▲源氏帚木卷に光源氏名のみこと〳〵しういひけたれ玉ふとがをほかなるにとあり壽
只此慢心なり ●此一句此段の骨子にて侍る句●只の字眼目也說　頭書云▲法界次第云自恃ニ輕レ他之心ニ曰レ慢若下持ニ種姓富貴有德才能一輕中蔑於他上即是慢也慢有ニ八種一盤▲孔聖全書云慢ニ其身一雖レ學不レ尊說
〔第三節〕●人としてと云より此慢心なりまでなり ●由案此節は筆好存念のつれ〳〵の所へ引落して書り夫人として萬につけて他に勝ることのあるは大きなる失なり況やわづかの一藝を仕覺へてそれを慢ずるはいよ〳〵わざはひをまねく媒なり只慢心を忘れて無事安閑に一生をすごすべきとの敎也一道にも誠に長じぬる人は自明に其非をしる故に志常に滿ずして終に物にほこることとなし
誠に ●誠の字肝心也壽
長じぬる人 ●其道に通したる人也諺
其非をしる ●我あしきといふ事をしるゆへにすこしも自慢なきなり諺
志常不滿 ●異本にみだらずしてと有五　頭書云▲曲禮云志不レ可レ滿樂不レ可レ極壽
ほこることなし ●凡一切の事に極り盡る事なし才淺き者は此道をしらざる故に一藝にほこり我智

を自慢する事也參　頭書云▲謙德訓德行寬容而守レ之以レ恭者榮土地廣大而守レ之以レ儉者安位尊祿重而守レ之以レ卑者貴人多兵强而守レ之以レ畏者勝聰明睿智而守レ之以レ愚者哲博聞强記而守レ之以レ淺者不レ溢此六者皆謙德也說▲山案管子の戰々兢々の愼み三省のつとめ思ひ合すべし古歌に「つとめてもつとめてもつとめてもつとめたらぬは我つとめなり

〔第四節〕●一道にもと云より終りまて也▲山案此節は能其道に長したる者の心に慢なきことを云て彼小人の小智小能にほこる者のことをいましめたりされば萬の藝能をつとむるに我なす事を惡きと思ふ心のつくが藝の進む基也未熟の中には自慢か出るぞたとひ人のゆるしたる藝なりとも物に極り盡ることとなければ是を善とゞめて慢ずるは愚の至り也況や人もゆるさぬ身としてをや最つゝしむべきことゝなり

〔一段之統論〕●上段には人間世の久しからぬ中に名利に營々たる心の益なき道理をよくたとへ出し此段には其雪よりはかなき世中に名利をもとむる者の心よりなす體たらくを寫し人の滿心をいましむ旬●山案此段の意は夫人として儒道を學ひ佛書を講する輩皆他を誹り自をたてんとする科あるをいましめて書り僕も又此罪遁れがたし今此段を讀めば我肌骨に砭するか如し

〔百六十八〕年老たる人の一事すぐれたる才能ありて此人の後には誰にかとはむなといはゞ老のかたうどにていけるもいたづらならず

才能ありて　●何にても一事にすぐれたる才智藝能なり諸

此人の後には　●何にても藝あれば年のたけゆくをも藝ゆへにわきよりおしむ也此人うせなば此藝能極位を誰にかとはんとなり全

老のかたうど　●老の方人也諸●老功の人などいはるゝ事也諺●我方の爲に成人なる義なるべし旬

いけるも　●無才無能にての長命はいたづら事なれども是は藝能あれば各別なり參●老て死ざるは賊をなすわざなれば國家の費なるに一藝あれば長命もいたづらならぬと也盤

〔第一節〕●年老たると云よりいたづらならぬまでなり●山案此一節には上の段に藝能のことをいへ

るをうけて才藝のよきことを述たり是又下の節にて才藝も無益なるといましめんために一旦ほめて書り是褒貶の文章なり

さはあれどそれもすたれたる所のなきは一生此事にて暮にけりとつたなく見ゆ

さはあれど　●さうあれとも也諺　●山案上をうけていえる詞なり

すたれたる所のなき　●二説有先一說に一生其道をすてずしてつとめたるなり諸　●又一説に其ならひ得たる藝に一所にても悪敷てすたるべきことなき程に成就してならひ得たるはと也説

此事にて　●一藝を一向に學て一大事として其藝捨ずあるは一生一代これればかり世には善事は無と思ひ暮ぬと拙く見ゆる也盤　●暮字を又說に●年のよりたるとなり諺

〔第二節〕●さはあれど丶云よりつたなく見ゆまで也●山案此節は上の節に藝をほめしことを抑て一向其藝に泥むことは愚痴の至なりといましむ是上の段に眞に長じぬる人は志不ㇾ滿といへると同じなりまことに一藝のみをよきと思ふ心から自慢は出來ぬるものなり

今はわすれにけりといひて有なん大かたはしりたりともすゞろにいひちらすはさばかりの才にはあらぬにやと聞えおのづからあやまりもありぬべしさだかにもわきまへしらずなどいひたるは猶まことに道のあるじとも覺えぬべし

今はわすれにけり　頭書云▲本朝遯史佐藤西行傳を見るに西行頼朝に見へし時に頼朝倭歌弓馬の委曲をとはれけるに西行が云それがし俗にありし時弓馬の箕裘を傳ふといへども世塵をいとひてより皆これをすてたりといへるたぐひにて思ひ合すべし隠逸の人の心ばへ皆かくのごとくたるべし參

有なん　●其事を問人あらば如此にいひ度となり是兼好徒然の本意なり諺

大かたはしりたりとも　●なみ〳〵にしりたりとは見るべからず大分によく心得しりたりともとなり全

すゞろにいひちらす　●すゞろの注前に有●前後をもはゞからずむさといひちらすはなり諺　頭書云▲世説に出たり何平叔と云者易を善したり然と

も未レ具所あり管公明と云者に其所レ不レ至を學ぶ公明皆以おしゆといへども易の語を以ては不レ答其故を問へば公明が云く善レ易者不レ論レ易平叔笑を含で賛レ之曰可レ謂要言不レ煩此等の意思ひ合すべし説

さばかり ●それほどゝいふ心也参

才にはあらぬ ●したり顔の才藝さのみ事あるまじきと聞ゆる也淺瀬はなるといひ世話よくかなへり全

おのづから ●一義有一義には此句を上の句へつけて見る時はそところに云ちらすうへには自のあやまりあらんと也諺説一義に下句へかけて見れば加様に卑下していふは眞に道の主と思ふ也此時はましてと下にいへるに心をつくべし増鐵説

さだかに ●たしかにといふ詞なり文

覺えぬべし ●猶おくふかく思はるべしと也諸

[第三節] ●今は忘れにけりと云より覺ぬべしまで也●此節は知たることも我物顔すべからずとのおしへなり説

ましてしらぬ事したり顔にをとなしくもどきぬべくもあらぬ人のいひきかするをさもあらずと思ひながら聞居たるいとわびし

ましてしらぬ事 ●しりたる事もしらぬ顔にあらまほしきにいはんや知らぬ事をと前をうけたる詞也文 頭書云▲上卷にも人の語り出たる歌物語の歌のわろきこそほひなけれ少し其道しりたらん人はいはじと思ひては語じすべていとも知らぬ道の物語したるかたはらいたく聞ふべしといへる段の意など引合せ思ふべし又論語にも知をしるとせよ不レ知をしらざるとせよこれしれるなりとあり説

をとなしく ●兩説有おとなしくもどきぬべくもあらぬ人又おとなしくも説ぬべくもあらぬ人と諺前説勝れり

さもあらずと ●聞所の人のこゝろになり諺

[第四節] ●ましてと云より終までなり●此節はしらぬ事をしり顔する人の見ぐるしきことをいへり文

[一段之統論] ●此段は前段によろづの慢心をいましめたる次にすぐれたる才藝ありとも老期には打捨て身をしづかにせよといへるこゝろつれ〲の

本意なるべし〈増鐵〉●此段も彼范蠡が功なり名遂て身退は是天の道なりとて五湖に掉し丶面影うかびぬ若き人さへ卑下の心持あればにくむ人なくそしる者なし行ふ道はかはるとも老ては早く退くべき義なり近き比幸の五郎次郎勇健なる者にて八旬にあまり小鼓を打やまずみづから座席にてもむかしより名を得し者の打を聞おけ見おけと自稱せしかども老して功なき故にや音もかれ〴〵になりて若きものゝうつよりもしらぬ者の耳にさまで聞ごとゝはおもはれざるにやかれが出る能とてもさのみ群集もせざりき又觀世又次郎とて歳はいまだたけざりしかどぬしが生れ付親の彦右衛門におとり子の新九郎が器用に及ざることを知て如何なる大名の御所望にても筋氣を相わづらふとて少も打ざりしかばかれが小鼓をすこしなりともきかばやと天下にこひねがはぬ者なかりきされば諸道にたづさはらん人の齢たけたらば此段をよく聞て若年のほまれをうしなはぬやうにすべき事なり穴賢々々貞

徒然草諸抄大成卷第十四

目次

〔百六十九〕何事の式といふ事は後嵯峨の御代まではいはざりけるを近き程よりいふ詞なりと人の申侍しに健禮門院の右京大夫後鳥羽院の御位の後又うちずみしたることをいふに世のしきもかはりたることはなきにもと書たり

式 ●今いふ義式是式などなり諺

後嵯峨 ●八十七代の帝 頭書云△山案人皇八十七代後嵯峨院諱邦仁土御門第二子母贈皇太后源通子贈左大臣通宗女也承久二年二月二十六日降誕仁治三年正月廿日踐祚（于時二十三才）同日元服三月十八日即位同十一月十二日大嘗會寬元四年正月二十九日讓位（二十八）治二天下一四年文永五年十月五日於二龜山一御出家法諱（四十九才）素覺文永九年二月十七日崩壽五十三

建禮門院 ●人皇八十代高倉院の后 頭書云△高倉院の后安德天皇の御母平清盛公の女永子也文

系圖

桓武天皇（人皇五十代）―葛原親王（一品式部卿）―高見王（無官無位）―
高望王（上總介從五位上始而賜平姓）―良望（鎮守府將軍陸奥守）―貞盛（鎮守府將軍陸奥守）―
（從四位下）―維衡（權少將從四位下）―正度（少納言正五位下）―正衡（三位）―
正盛（右京大夫從四位下）―忠盛（刑部卿內昇殿人）―清盛（太政大臣准三后從一位）―女

右京大夫 ●藤原伊行女 頭書云△藤原伊行女三位中將資盛に心を通せし人なり建禮門院の官女

系圖伊行までは前百三十六段門に額かけるの所にくわし

鎌足―不比等―房前―眞楯―內麿―
冬嗣―良房―基經―忠平―師輔―
伊尹―義孝―行成―行經―伊房―
定實―定信―伊行―女

後鳥羽院 ●八十二代の帝王前四十八段に委し

又うちずみしたる ●內住とは宮仕して內裏にすむ事也諺 ●右京は高倉院の御時內ずみして源平の亂に內を出て其のち後鳥羽院の御時に再內住をするゆへに又うちずみといふ也諸

世のしきも云々 ●證據に此事を引たり 頭書云△右京太夫家集に云わかゝりし程より身をようなきものに思ひとりにしかばたゞ心よりほかの命のあらるゝだにもいとはしきにまして人にしらるべきことゝはかけても思ざりしをさるべき人々さりが

たく云はからふことありて思の外に年經て後また九重の中をみし身のちぎり返々さだめなく我心のうちもつれなくすゞろはし藤壺かたざまなど見るにもむかし住馴しことのみ思出られてかなしきに御しつらひも世のしきもかはりたることもなきに只我心のうちばかりくだけまさるかなしさ野 ●今板行の家集を見れば世のけしきもと書たるはあやまりにや文

〔一段之統論〕●上段の末に知ぬことをしたり顔に云ちらすあしき心をそしるにうけて又此段にも式と云詞のはじまれる時代の吟味よくわきまへもせぬ人のわきまへ顔にいへる言葉のあまりをたゞしてひろく世の人に正義をしらしむるなり

〔百七十〕さしたることなくて人のがりゆくはよからぬ事なり用有て行たりとも其事はてなばとく歸べし久敷ゐたるいとむつかし

さしたる云々　●爲レ指用事もなくてなり諸　頭書云▲論語子游曰有二澹臺滅明者一行不レ由レ徑非二公事一未三嘗至二於偃之室一也野

人のがりゆく　●人の許へ也諸

とく歸るべし　●用有てもはやく歸れ まして爲レ指事なきにはと上をうけたり盤

いとむつかし　頭書云▲枕草紙にくき物の條に云いそぐことある折にながことするまをふとあなつらはしき人ならば後になど云てをひやりつべけれどもさすがに心恥しき人いとにくし句

〔第一節〕●さしたると云よりいとむつかしまで也此段五節に分つ文段は四節に分てり●此節は人の許へ音信ゆく心ばへを敎たり是等も兼好の閑寂を好むより云たると心得べし文 ●山案此節は客のための戒なり

人とむかひたれば詞おほく身も困(クタビレ)心もしづかならず萬の事さはりて時をうつす互の爲益なし

人と　●客と對すれば說

詞おほく　●無益の詞也說　頭書云▲景行錄寡言則省レ謗▲素書微言所三以修二身▲擊蒙要訣多言害二心術一說

身も　●心にかなはぬ無益の客に對するゆへに說

さはり　●障也さまたけと成義也古

互の爲　●互とに亭主と客人と也古

〔第二節〕●人と向ひと云より益なしまで也●第二節は用なくて永居することの客主ともに益なきことをのべたり文但し文段には次の第まで書つゞけたり●此節は心に不レ合賓主の益なきことを云て永居の悪き様子を云也

いとはしげにいはんもわろし心づきなき事あらん折は中々其よしをもいひてん

いとはし云々　●是より亭主のあひしらへをいへり客無益の永物語するとていとはしげにこたへいはんもわろしとなりいとはしげにとはあらはにいとふさまにはいはねど不請の答する事なり文

心づき　●客をあいしらふ我心のそはぬ折を云句

●亭主の用心に客の心付ぬ事ある也古　●前説好諺

中々云々　●二説有　一説に●中々は俗にけつくと云義に通ふ也こゝの心は客に對するに心のそはぬ用有折はけつく始より其用のしさいを語て此方よりかへしたるがよきなり句　●中々と云詞歌にては却而などいふ所に用る詞なり爰にては世俗にいつそうの事になどいふ詞也全　又一説●客にかへられよとあらはにいふもいひがたければ中々にいはれんかいはるまじきとなり諺

〔第三節〕●いとはしげにと云より云てんまで也●山案此節は主となるものゝ心づかひを敎たり偖此所舊抄に二説を擧たり本注に記す今試に此兩説を辯せん前説は挨拶一へんに言葉をかさらず心の實をあらはすなれば人是を悪しとせずして却て褒なり其上兼好桑門の志にも能かなはんものか又後説は今の世上邪智の族實をあらはすふりをして我氣に不レ合人來る時にたとひ用事なくてもいつはりて用事あると云ひ或は佗所へ行しなどゝ云て思ひ寄て訪ひ來し者を空しく歸す者あり是等の人のためにはよきいましめならんか

同じ心にむかはまほしく思はん人のつれ〳〵にて今しばしけふは心しづかになどいはんは此かぎりにはあらざるべし阮籍が青き眼誰もあるべき事なり

同じ心に　●我と志同じき友の來りて閑に語りなぐさむを云諸

今しばし　●かへらんとするをとゞめて今しばしと云なり諺

かぎり　●かぎりとは法式の分限を定たることを

云参●前に永居すれば無益なりといへとも如レ此の亭主に逢ては各別の事なれば前の定の限とはちがふと也諺

阮籍が青き眼　●阮籍は竹林の七賢の隨一にのせたる人也心にかなはぬ友とは白眼を以て見かなへる友には青眼を以て見し人なり諸　頭書云▲晉書阮籍字嗣宗不レ拘二禮敬一能爲二青白眼一對レ之及二嵇喜來弔一籍爲二白眼一喜不レ懌而退喜弟康聞レ之乃齎レ酒挾レ琴造焉籍大悅乃見青眼由レ是法禮之士疾之若レ讐壽

誰もあるべき　●今阮籍事を引用てたれも好惡はあるべき事となり文●山案好惡は誰もありながら阮籍がことく青白をなすことはよからぬ事也只阮籍か心にかなふ友と交ることとくに靑眼のみにて出逢度ものなりこゝに靑白眼と書せずして靑眼とばかり出すも豈心なからんや

[第四節]●同じ心と云より有べきことなりまでなり●第三節は同心にてあかずむかはまほしき友のことを云なり文●此節は賓主相合友は又各別なることをいへり山案

其事となきに人の來りてのどかに物語して歸ぬるいとよし又文も久しくきこえさせねばなどばかりいひおこせたるいとうれし

其事と　●さし定たる用にあらてなり句

物語して歸ぬる　●發端にさしたる事なくて人のがりゆくはよからぬといふを一偏に心得てすきと用なくて見まふ事はなきわざ也と思ふべからず親友の中は折々見廻なくてかなふまじき也諸　頭書云▲枕草紙の心ゆく物の條に云つれ〳〵なる折にいとあまりむつましくもあらずうとくもあらぬまらふとの來て世の中の物語此比あることのおかしきもあやしきもこれにかゝりかれにかゝりをほやけわたくしをぼつかなからず聞よきほどに語たるいと心ゆく心地す句

又文も久しく　●上に次て書札を送る心ばへをのぶる也何用なけれども久しく善惡の左右きこへねば心許なく思てなどゝ云をくる也諺

いひおこせたる　●本文の餘論　頭書云▲但しことしげく時めきたる人の所へは斟酌あるべきこと也枕草紙云さはがしう時めきたる所にうちふるめ

きたる人のをのがつれ〲といとまをほかるならひにむかしをぼへてことなることなき歌よみておこせたるすさまじとあり壽

〔第五節〕●其事と云より終まで也●山案此節は親友のなかば又各別なれば一偏には心得まじきとなり是兼好ものにかたをちぬ例の筆法なり●此ところ一しほ面白き心ばへなるべし文

〔一段之統論〕●此章人の許に音信ゆく心ばへと又あるじになりての心ばへとの敎たるべし句●此節枕草紙のにくき物の條と心ゆくものゝ條との兩段の趣向に本づき筆にまかせたる所藍よりも靑く一入面白よみ覺へ侍る句●此草紙は天下に流布したるかと存にいまだ存ぜざるにや今も此きづかになき人のみをほしあわれ此段ばかりを板にちりばめ諸人に見せまほしく侍る貞

〔百七十一〕貝をおほふ人の我まへなるをばをきてよそを見わたして人の袖のかげ膝の下まで目をくばる間にまへなるをば人におほはれぬよくおほふ人は他所迄わりなくとるとは見えずしてちかきはかりおほふやうなれどおほくおほふなり碁盤のすみに石をたててはじくにむかひなる石を守りて彈はあたらず我手もとをよく見てこゝなるひじりめをすぐにはじけばたてる石必あたる

貝をおほふ　●貝合せの事なるべし野　頭書云●山家集に西行の歌「今ぞしる二見の浦のはまぐりを貝合とてをほふなりけり文　▲紀州の浦邊などにもあり耳じろと云はまぐりをするといへり參

おほふなり　●萬の事外にむきてもとむべからず我手前をたゞしくすべしとの義なれば貝合にたとへて其義をしらしめたり次の碁盤のたとへも又是に同じ參

碁盤のすみに　●隅の字　頭書云▲源氏須磨の卷にだぎのばんとあるは別に其盤あれど又碁盤にてもするなり文　▲後漢書梁冀傳冀能挽ニ滿彈碁一註挽滿猶ニ引强一也▲藝經云彈碁兩人對レ局白黑棊各六枚先引レ棊相當更先彈也其局以レ石爲レ之▲事文類聚前集云魏文帝善レ彈レ棊能用ニ手巾角一時一書生又能低レ頭以ニ所レ冠葛巾一撥(ウツ)レ棊野

石を　●碁石也

ひじりめ　●二說有一にはひずみなり一にはせい

目のとにて聖目と書にや又井目とも書なり説　頭
書云▲或人の所に土佐光長吉備公入唐して靈鬼に
棊ならひたる所を書たる繪に兼好記を書るあり其
略に云三百六十一目ある物のひじり日九つ侍るな
りとあり旬▲それ棊石三百六十八日の數黑白は晝
夜聖目にすへたる九の石は九耀星にかたどる所を
聖目といひ石を聖石と云なり仝▲棊の井目は井田
の九百畝になぞふるといへり聖目とも云にや可
レ尋レ之文▲何闘より起るといへば聖目を可レ用か
倘これを可レ尋諺
すぐに　●前のひじり目を眞すぐにして先のひじ
り目に目をかけずしてはじくをいふ也全
〔第一節〕●貝をおほふと云より必あたるまでなり
此段三節に分ち可レ見●山案此節は次の節の萬の
事は外にむきて求べからず只我手前をたゞしくす
べしと云ことを書べきために先此二つのたとへを
擧て詞をまふけたり上卷にも雙六の上手と云し人
に其手立を問侍しかば勝んと打べからず負じと打
べき也いづれの手か負ぬべきと案じて其手をつか
はずして一めぐりも遲くまくべき手につくべしと

云道をしれる敎身の脩め國を保ん道も又しかなり
といへるもこゝと同じたとへなり●貝のたとへは
内を忘るゝことをいひ石のたとへは内をつとむる
たとへなり盤
萬の事外にむきてもとむべからず只こゝもとをたゞ
しくすべし淸獻公が詞に好事を行じて前程をとふ事
なかれといへり
萬の事に　●貝石のみにあらず一を以て萬をしる
理也盤
もとむべかず　●己をたゞしくして外をねがひも
とむべからず
こゝもとを　●我手前をいふなり盤　頭書云▲中
庸子曰射有レ似二乎君子一失二諸正鵠一反求二諸其身一
野
淸獻公　頭書云▲言行錄後集云趙抃淸獻公字閱道
衢州人擧二進士一爲二仁宗英宗神宗一官至二參政一▲又
云淸獻公座右銘云行二好事一莫レ問二前程一壽▲皇朝
類苑三十六云馮瀛王詩雖二淺近一而多二義理一曰窮達皆
由レ命何勞發二嘆聲一但知レ好二行事一莫レ要レ問二前程一
冬去氷須レ泮春來草自生請君觀二此理一天道甚分明野

好事を行ひて　●おこなひのよきこと也参　●此こゝろはよき事をなして其よきむくひあらんかと思はずともたゞよき事をせよ好事だになしたらば自然に末はよからん事冬さりて氷きえ春きて草生ずることならんとなり文

前程をとふ事なかれ　●さきのしるしをいふ句　●好事を行ずるはこゝもとをたゞしくするなり前程を問ことなかれは外にむきてもとめぬ心なれば引合せたり是すなはち決前生後の詞なり文

〔第二節〕●よろづのことゝ云よりとふことなかれまで也●此節は貝をおほひ石をはじくことのみに非ず諸道己をたゞしくして外にむかひて求むべからずとの敎なり野　●この節此段の大意をあらはせり文

世をたもたん道もかくや待らん内をつゝしまず輕くほしきまゝにしてみだりなれば遠國必そむく時始て謀をもとむ風にあたり濕に臥て病を神靈にうたふるは愚なる人也と醫書にいへるがごとし目の前なる人の愁をやめ惠をほどこし道をたゞしくせば其化とをくながれん事をしらざるなり禹のゆきて三苗を征せしも師を班して德をしくにはしかざりき

世をたもたん道もかくや待らん　●是より世をおさむるみちにかけていへり國をおさめ天下を平らかにする道も外にむきてもとめず只こゝもとをたゞしくするにてや待らんと也参

內をつゝします　●內をつゝしまずとは我身にある德をさしていふ增鐵　●家とゝのふらざれば國治らぬ心也文　頭書云▲大學云欲㆑明㆓明德於天下㆒者先治㆓其國㆒欲㆑治㆓其國㆒者先齊㆓其家㆒諺　▲論語遠人不㆑服則修㆓文德㆒以來㆑之旣來㆑之則安㆑之註　內治修然後遠人服有㆑不㆑服則修㆑德以來㆑之亦不㆑當㆓勤㆒兵於遠㆒野

輕くほしきまゝ　●行跡を輕々敷ほしき儘に也諺

みだりなれば　●內證みだりなれば也

そむく時　●そむく時の時の字いきほひつよし参　●きびしく上をうけたる言葉也句

始て謀をもとむ　●假に此亂を治ん武略をもとむる也是外にむきてもとむるなり文

風にあたり濕に臥て　●六疾といふ事あり風にあたりて寒疾と也濕にふれて腹疾となる類也風寒暑

暑濕によりて皆もろ／＼の疾を生ず參
うたふるは　●祈願をかくるなり參
愚なる人也　●平生我身の養生をおろそかにして
風にあたり濕氣の地にふしてはさて病をうけ得て
後それを神靈にいのり本復をもとむる事誠に愚昧
のいたり也是又内をつゝしまずして外をもとむる
にたとふるなり諺
醫書にいへるが如し　●是彼始めてはかりことを
求むるの愚かなる事をいふたとへに醫書を引也文
頭書云△本草序云眞誥曰常不二能愼一レ事上者自致二
百痾之本一而怨二咎於神靈一乎當レ風臥レ濕反責二他人於
失覆一皆癡人也夫愼レ事上者謂二擧動一ヲ事必皆愼思一
云々野△素問云聖人不レ治二已病一治二未病一不レ治二
已亂一治二未亂一夫病已成而後藥レ之亂已成而後治レ之
譬猶二渴而穿一レ井鬪而鑄レ兵不二亦晩一乎訖
道をたゞしくせば　●是こゝもとをたゞしくすべ
しの首尾也文
其化とをく　●德化也壽　●化は上より敎へねとも
上の風を下をのづから見習て道に入をいふ敎化と
て敎と對する也鐵增　●其化遠とは遠國そむくと云に
あたりて也古
ながれん事　●家を治る化國に及び國をおさむる
化天下に及ぶ事水のながれゆくがごとし諺
しらざるなり　●彼内をつゝしますして遠國亂れ
てはじめて武略をもとむる愚なる人は此理をしら
ざるなりと也文
禹のゆきで三苗を　●夏の禹王也三王の其一也諺
　●三苗は國の名なり要害よきを頼みて王命に從
はさりし也文　●書の大禹謨には有苗と有同事也舜
典に三苗と出たり句　頭書云△書大禹謨帝云咨禹
惟時有苗弗レ率汝徂征禹乃會二群后一二旬苗民逆レ命
益曰惟德動レ天無二遠弗一レ屆禹班レ師振レ旅帝乃誕敷二
文德一舞二干羽于兩階一七旬有苗格　蔡氏傳云三苗
國名在二江南荊楊之間一恃レ險爲レ亂者也野△淮南子
注曰三苗堯時所レ放參
征せし　●行てたゞすをいふ也文　頭書云△書經
蔡氏傳云征正也征正二其罪一參
師を班して　●軍をやめたる也此語まさしく書經
の詞なり參　●禹王のゆきてたゞし給へどもしたが
はさりしに軍をとゝめて文德をしきほどこし給へ

ば三苗の民來りて服せし也是も又內をつゝしめば遠國化するの證據なり諺 ▲是舜の御代なり堯の時ははなたれて服せぬ民なり參

しかざりき ●不ㇾ如とはおよばざると云心也増鐵

【第三節】●世もたもたんと云より終まで也●此節は一身の上如ㇾ此のみにあらず一天下を保ち國を治るも外によらず手前をつゝしみたるかよきなりそのたとへに病のことを云て三苗を征せしことを證據に出せり盤

【一段之統論】●此段は萬事外にむきて求べからず我手前をたゞしくすべしとの義なりされば事に本と末とあり物に始め終りあり內あり外あることを知らせたり外をつとむるにはなりがたくて終に成就なし勞而無ㇾ功義なり內をつとむるにはやすくしてしかも其功ときことをいへり盤 ●上段に人と對談遊宴のことを述たるにうけて又此段にも貝合石はじき遊興のたとへをまうけて家國天下の道理をとく下庶人より上天子に至るまでよみ味て益あるべき段なり又中間の萬のこと外にむきて求むべからず只爰許をたゞしくすべしといへる二句尤通章の骨子なることを知べし句

【百七十二】わかき時は血氣うちにあまり心物に動く情欲多し身をあやぶめてくだけやすき事珠をはしらしむるに似たり美麗を好みて財を費し是を捨て苔のたもとにやつれいさめる心さかりにして物と爭ひ心に恥うらやみこのむ所日々にさだまらず色にふけり情にめて行をいさぎよくして百年の身を誤り命を失へるためしねがはしくして身のまたく久しからんことをば思はずすけるかたに心ひきてながき世語ともなる身をあやまつことは若時のしわざ也

わかき時　頭書云▲論語云少之時血氣未ㇾ定戒之在ㇾ色云々諺

心物に動く ●內心が外物にふれて動きやすきと也うごくはさかんなる故也盤

情欲 ●七情六欲をいふ野 ●喜怒哀樂愛惡欲を七情といふ眼耳鼻舌身意の六根の欲を六よくといふ又醫書には喜怒憂思悲恐驚を七情といふなり増鐵 頭書云▲說文情人之陰氣有ㇾ欲者也云々文 ●荀子曰性之好惡喜怒哀樂謂二之情一楊倞註曰人性感ㇾ物之後分爲二此六一者謂二之情一原人發微曰儒以二喜怒

哀懼愛惡欲二謂二之七情一張九韶曰情者性之動荀子亦欲者情之應也▲人の天より生れつきたる心を性と云其性動きて好惡喜怒哀樂するを六情と云其六情の外へつよくはたらくものを欲と云なり參

身をあやぶめ　●身のあやうき事をも遠慮なくしてなり増鐵

珠をはしらし　●心はやくうつるたとへなり諸　頭書云▲韻府張九齡議論如二下坂走一丸壽

財を費し　頭書云▲戰國の諸公子の門客をあつめて珠履をはき玳瑁を簪にし唐の少年の銀鞍白馬千金蛾眉を買の類なり野

是を捨て　●是をすてゝとは上をうけて書り美麗をこのみたからをついやす心も又時の間にかはると也句

苔のたもと　●隱遁の心也參　頭書云▲遍昭が歌に「皆人は花の衣になりにけり苔のたもとよかはきだにせよ▲遠藤武者盛遠が年十八にして人の妻を忍ひ其夫を殺しうばひとらんとて夜あやまりて女の頭をきりしに驚きかなしみて出家して名を文覺とつきける類あり野

恥うらやみ　●よろづ自由ならぬ事をはぢ他人の富貴なる事をうらやむ也諺

色にふけり　●耽の字

情にめて　●愛する心也古　●おぼるゝなり諺

いさぎよく　●少も死に泥さる體也文

百年の身　頭書云▲白氏文集第四新樂府井底引二銀瓶一云爲二君一日恩一誤二妾百年身一野

ねがはしく　●昔物語にても又今の人の上にても死をいさぎよくせしためしを身にも願はしく思ひて身を全くせん事はおもはずとなり文

すけるかたに心ひきて　●まづ好色其外何上にてもなり文

〔第一節〕●わかき時はと云よりしわざなりまで也此段二節に分つ文段是に同じ●山案此節は上の段に萬事外にむきて求べからずといへる心をうけて若き人はをのつからさかんなるにまかせて外の榮耀を事とするによりて時としてかゝる過失もあるなりと敎たり偖書出しに若時と云て又結句に若時のしわざなりと書とめてきびしくいましめたり是を首尾吟の句法に似たりといはん讀者熟く味ふべ

し

老ぬる人は精神をとろへあはくをろそかにして感じ動く所なし心をのづからしづかなれば無益のわざをなさず身をたすけて愁なく人のわづらひなからんことをおもふ老て智のわかき時にまされる事わかくしてかたちの老たるにまされるがごとし

精神をとろへ　●人の神氣也諺　頭書云▲淮南子原道訓曰精神日耗而彌遠乃日耗者以老是故聖人將養其神和弱其氣云々▲莊子在宥曰義曰精曰魄神曰魂▲竹窓隨筆曰精魂神識之謂也參

あはく　●淡の字也句●うすき心也精神氣血淡薄にして物に感動する事すくなし

をのづからしつか　頭書云▲僧靈徹詩曰年老心閑無外事句

身をたすける　●是迄は右にいへる若き人の皆うちなり諸

老たるにまされるがごとし　●血氣盛なれば形うるはし精神をとろへては心しづかに物におぼれず是若きが年寄たるにかたちまさりて智のおとれる道理なり文

〔第二節〕●老ぬる人はと云より終まで也●此節は老人の智惠の若き人にはまされる事をいふ也文

〔一段之統論〕●此段は若き人はさかんなる血氣にまかせて失ある事をいひ老たる人は心しづかなればあやまちすくなきよしをいひて若き人のをしへをたれたり文●利根なるわかき人なと此段を聞てげにもとをもはれば齡たけずして老年の工夫にいたらん事豈重寶にあらずや壽

〔百七十三〕小野小町が事きはめてさだかならずをとろへたるさまは玉造といふ文に見えたりこの文清行がかけりといふ說あれど高野大師の御作の目錄にいれり大師は承和の始にかくれ給へり小町がさかりなる事其後の事にや猶おぼつかなし

小野小町　●小町が事に付て諸抄まち〱也　頭書云▲古今集目錄并拾芥抄云出羽郡司女仁明時承和之比云々作者類部曰或曰玉造云小町非此人事云々玄旨法印百人一首抄云或說出羽郡司小野良實女又常澄云々三光院御說當澄女云々▲山井案ずるに和論語曰小野小町小野氏出羽守良實女也本朝無雙女權第一美人也法界寺本願又冷泉家書に六十九

葳於ニ井手寺一死云々又一説に相坂にて死すと云々

さだかならず ●不定也諺

玉造 ●此文につきても兩説あり 頭書云▲玉造小町子壯衰書云予行路之次 歩道之間徑 邊途傍有ニ一女人一容貌焦悴身體疲瘦云々 予問レ女曰汝何鄕人誰家之子有ニ父母一哉無ニ子孫一耶女答レ予曰吾是倡家之子良室之女驕壯時憍慢最甚衰日愁歎猶深云云文繁故に略す野▲今此玉造の女の吾是倡家之子と云を以て右先達の系圖共と考合する時は小野小町と玉造小町と兩人なる事明なり增鐵▲此玉造は樂天が秦中吟の詩を學と云り白氏文集第二秦中吟は長安にて貞元元和間つくれりとあり大師入唐は貞元二十年にあたれり樂天が死去は大中元年日本の承和十四年にあたれり大師入定より十三年後也然は秦中吟を學て玉造を作れるといふも大師にをいては餘りにまぢかくおぼへて侍る其上玉造の文大師の筆力よりはよはくおとりたるにや侍らん此文清行かけりと云若善相公ならば其文章相似たるやうに覺へ侍る此人儒者の風ありて延喜帝へ奉る意見封事などにも佛法は世教國政の爲にあしき事也と申されきされ共其他の文飼諧眼辭などにも佛道を結尾にがゝれたり然ば安倍清行が文也と云はんも又をぼつかなし野▲惠空評曰此文似ニ弘法之辭一而遙劣ニ弱乎空海之文勢一也彼三敎指歸假名乞兒論曰有ニ假名乞兒一不レ詳ニ何人一乃至容色顦顇體形蕞爾乃至隱士曰公是何州何縣誰子 誰 貴云々疑後人見ニ此文一作ニ上件玉造之文辭一乎參

清行 ●安倍の清行か三善清行かと案ずるに三善清行なるべきか世に善相公といふこれなり淨藏貴所の父なり其文章とも多く本朝文粹にのれり算道の達者也寛平延喜の比の人なり野

高野大師 ●弘法大師を云なり諸●たゞ何となくをし出して大師とばかりいへば天台大師也日本大師の家は天台宗なる事禪宗に國師號を家とするがごとし故に天台大師の霜月二十四日の忌日をば大師講といひ弘法の忌日をば御影供といふ也かやうにまぎれある故に弘法をよびて高野大師といふなり台宗の論義などには野山大師と常によぶ也參

頭書云▲山案紀州高野山金剛峯寺開山日本眞言宗

傳來元祖也在世名空海姓佐伯氏讃州多度郡人父田公母阿刀氏人王四十九代光仁天皇寶龜五年生桓武天皇代五十延暦二十三年入唐仁明天皇承和二年三月入ニ定于高野山一年六十二醍醐天皇代六十延喜二十一年十月賜ニ謚弘法大師一詳ニ于元亨釋書一

目錄に　●玉造の文も弘法の作かと兼好のいふごとく享德年中に沙門祐成が玉造の跡にも大師の御作なりと云へり今眞言家へたづぬれば御作の目錄にいらずといふ兼好が見たる處の目錄の本をなじからぬにや野

承知の始　●弘法大師の入定は仁明天皇の御宇承和二年三月二十一日なり壽

其後の事にやおぼつかなし　●或説に此所諸抄誤れり三善淸行の作れる玉造を弘法大師の御作と誤れる故分明ならざる也又まぎらはせるも理にや沙門祐成が玉造の跡にも大師の御作と書り相似たる所も有にや又兼好も外の人のあやまりて玉造を大師御作の目錄に書入しを見られたるによりてなり其上兼好の時代にも小町か傳記を書ける物も世に流布せざればきはめてさだかならすといへるげにさる事也さて小野玉造同名二人と云説も玉造を大師の御作と思ふより惑亂せり一人なる事分明也時代の事古今集に歌よみかはせし人々あり全　●古今集の事頭書に記す　●近代の抄に兼好は玉造を大師の作也とおもはれしと大師の作にはあるまじきといふ事を始て心を付たるやうに書なせり兼好大師の作ときはめたるにはあらず其故は此おぼつかなしといふは玉造の作者の事をもかねていへるなるべし鐵增　頭書云▲小野小町が歌よみかはせし人々を歌書の中にて勘るに古今集十二戀歌に云しもついづも寺にて人のわさしける日眞濟法師導師にていへりける詞を歌によみて小町がもとにつかはしける安倍淸行朝臣一つゝめとも袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目のなみだなりけり返し小町一をろかなる泪ぞ袖に玉はなす我はせきあへず瀧津瀨なればば同集の十三戀三業平朝臣一秋の野にさゝわけし朝の袖よりもあはでこしよぞひちまさりける小野小町一見るめなき我身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくゝる此歌伊勢物語に彼なりひらの歌の返し也又古今集十八雜下文屋康秀が三河

ぞうになりてあがた見に出たゝじやといひやりけるかへりことによめる小野小町「わびぬれば身を浮草の根をたへてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ此歌の詞書小町か集も同じ後撰集十七雜歌三いその上といふ寺にまふでゝ日のくれにければ夜あけてまかりかへらんとてとゞまりて此寺に遍昭侍ると人の告ければものいひこゝろみんとていひ侍りける小野小町「岩の上に旅寢をすればいとさむし苔の衣をわれにかさなん返し遍昭「世をそむく苔の衣はたゞひとへかさねばうとしいざふたりねん此詞書小町家集にもいその上と云寺にまふでゝとあり大和物語には淸水にてと侍り此遍昭は仁明天皇かくれさせ給ひて出家して後に此歌を小町とよみかはし玉へり安倍淸行業平など皆仁明文德の比の人々なるにかく艶書の歌よみかはせしよしなれば小町がさかりは大師入定の後なる事必せり康秀は陽成院の御時の人とかやこれ又大師よりなを〳〵後なり文▲無名抄云業平朝臣がみをはさむとて籠居たりけるほどに歌枕とも見んと數寄によせてあづまの方へ行けるみちのくにゝいたりてやそ

島と云所にやどりける夜野中に歌の上句を詠ずるこゑあり秋風の吹につけてもあなめ〳〵といふ怪をぼへて聲を尋つゝ是をもとむるに更に人なしたゞ死人のかうべ一ありあくる朝なを是を見るにかの髑髏の目の穴より薄一本生たりけるが風になびくをとのかく聞へければあやしくてあたりの人に此の事を問或人語て云小野小町此國に下て此所にして命を終りぬ則頭是也と云こゝに業平哀にかなしくて泪を押て下句を付たり「小野とはいはじ薄生たりたりとぞ付たる其野をば玉造の小野とぞ云けるとぞ侍る玉造の小町と小野小町と同人かあらぬものかと人々をぼつかなきことに申てあらそひ侍し時人のかたり侍しなり野▲此事長明が無名抄江記等には業平とあり又範兼の童蒙抄淸輔の袋双紙等には只人と書て業平とはいはず親房卿の說には此髑髏を見し事は實方なりともいへりしかればこれは一決しかたきことにて小町業平の時代をいはん證據には用ひがたかるべしことに江記も無名抄もはるかに後代の書なれば古今後撰伊勢物語大和物語等の其世にちかきことの正しきにはしくべ

からず　問　貞徳なぐさみ草に云玉造の文大師の御作の目録にいらずと云説もあれど兼好は見しやうにこゝにかゝれたり玉造の小町と歌よみの小町と別人と云説もあれど只同じ小町也大師の書たまへる小町が像紹巴所に侍し大師を權者としらぬによりて此疑を生ずたとへば太子の未來記と心得玉ふべしと云々如何　荅　まことに大師は權化の人にて未來にあるべき小町をも知て文にも繪にも書とゞめ給ひけんことさもあるべき又二人と云説によらば其大師の自筆の小町の像はむかしの小町にて侍りけん戰國の時に藺相如ありて漢の世に司馬相如あり我朝に在原行平有て橘行平ありしたぐひ同名の人なきにしもあらねば小町といふ名も二人ありしにや文

〔一段之統論〕●此一章の大意前の段に老てはわかきに智はまされども姿はをとろふる事をいひし次に小町が老後にをとろへしといふを思出て小町名高き歌人ながら其傳記のさだかならぬを兼好もをぼつかなく思ひ又は我了簡のたけを人にもしらせんために書をかれたるなるべし増纘 ●此段小町が事兼好すでに和歌の家に生れ其時代もさること遠からずそれだにさだかにしれずいはんや今時の人とかくいふはあたらぬ事なりすまぬ事をばすまぬとすましたるがすましたるといふものなり新註

〔百七十四〕小鷹によき犬大鷹につかひぬれば小鷹にわろくなるといふ大につき小をすつることはり誠にしかなり

小鷹に　●鴫うづらとる鷹也諸

大鷹に　●雉をとる鷹也諸

誠にしかなり　●如レ此なり諺　頭書云▲史記蕭相國世家高帝曰夫獵追殺ニ獸兎一者狗也而發蹤指ニ示獸處一者人也今諸君徒能得ニ走獸一耳功狗也至レ如ニ蕭何一發蹤指示功人也▲史記李斯臨レ刑謂レ子曰吾欲下與レ汝牽ニ黃犬一臂ニ蒼鷹一出ニ上蔡一逐ニ狡兎一得上乎野▲これ獵犬と鷹とを以て人事をたとふる類語なり

〔第一節〕●小鷹によき犬と云より誠にしかなりまで也此段二節に分つ文段是に同じ●此節は雉の大なるにつける犬は鴫鶉のちひさき物には目かけぬなるべし是道の氣味ふかきをしらば世間の無益の

雜事は捨べき物をとのたとへなり文
人事おほかる中に道をたのしむより氣味ふかきはなし是實の大事なり一たび道を聞てこれに志さん人いづれのわざかすたれざらん何事をかいとなまんをろかなる人といふともかしこき犬の心におとらんや
道をたのしむ ●儒釋道の二教にわたるべし參●爲レ善爲レ樂といひ人生至樂無レ如レ讀レ書などゝいへる語意思ひ合せ見るべし句
大事 ●則佛道を云此大の字上の二の大の字に應映して云也句 頭書云▲法華經の世尊唯以二一大事因縁一故出二現于世一と云る大事の字を借書用たり句
一度道を聞て 頭書云▲論語に朝聞道夕死可也と夫子の宣ひたる心にも暗にかなふべきか句
いとなまん ●此一大事をすてゝ何事をか也諺
かしこき犬の心云々 ●誰も大道をあぢはゝば無益の小事は捨べきに道に入人すくなき事也と嘆じたる詞也文 一說に●大事をいまだしらぬ人に敎たり大道をしりてもつとめぬ人犬よりおとれりとの心なり全 頭書云▲大學に孔子の黃鳥の丘隅に囀る詩を引玉ひて人を以て鳥にだもしかざる可けんやと強く學者を敎へ玉ふ心と同じ諺
〔第二節〕●人事をほかると云より終までなり●此節は人も大道にいらば小事はすつべき理りをいへり是實の大事也一生の內のみにあらず未來までの大事なればなり文
〔一段之統論〕●此章は人と生れて道をもしらで一生をやみ〳〵と送る事は誠に大鷹につかへる犬の小鷹をすつるほどの智慧もなき事也道の大事をしらばなどか小事はすたらざらんやと鷹犬をたとへにかりて人間をはぢしめたる義なり參
〔百七十五〕世には心得ぬ事のおほき也ともあるごとにはまづ酒をすゝめしゐのませたるを興とする事いかなるゆへとも心えず
心得ぬ ●道理こゝろへられぬと也盤●心得ぬ事のおほき中にも是を心得ぬとの心なるべし文
ともあること ●兎もある時也兎あり角ある時々なり諺●節句か又はよろこびごとなり盤 一說に友の來る時なり古●此說はあやまりなり句
しゐのませ ●強の字 頭書云▲孟子離婁上曰是猶惡レ醉而强レ酒野

〔第一節〕●世には心得ぬと云より心えずと云までなり此段六節に分つ文段これに同じ●此節は世に心得がたきこと多きうちに取分人に酒を強のまするは道理の辨へがたきことなりと不審をまふけて末の節に酒を強ることのよからぬといはんためなり案山

飲人の顏いとたえがたげに眉をひそめ人目をはかりて捨んとしにげんとするをとらへて引とゞめてすゞろに飲せつればうるはしき人も忽に狂人となりてをこがましく息災なる人も目の前に大事の病者となりて前後もしらずたふれふすいはふべき日などは淺ましかりぬべしあくる日まで頭いたく物くはずによひふし生をへだてたるやうにして昨日の事覺えすおほやけわたくしの大事をかきてわづらひとなる人をしてかゝるめを見する事慈悲もなく禮義にもそむけりかくからきめにあひたらん人ねたく口おしと思はざらんやひとの國にかゝるならひあなりとこれらになき人事にて傳聞たらんはあやしく不思議におぼえぬべし

眉をひそめ　顰の字なりしはむる義なり句　頭書云▲山谷詩曰北客未レ嘗眉自顰参

目をはかり　●たばかりて也参

すゞろに飲　●そゞろと同し坐の字も卒の字もかくなり鐵増●すゝろは思ひかけぬ義也解委く上に見えたりすゞろとは正直と書て捨ずと正直にのまれよと云心也と書る抄の説古今抄の義はわけもなき事なり句

うるはしき人も　●嚴重なる人也諸

狂人となり　頭書云▲范魯公詩曰戒レ爾勿レ嗜レ酒狂藥非ニ佳味一句

をこがましく　●嗚呼也古●俗うつけがましきなど云也諺

病者となり　頭書云▲抱朴子外編ニ酒誡篇曰起ニ衆患於須臾ニ結ニ百痾於膏肓一▲四分律飲酒載ニ三十六失一其十一曰生レ病之根▲雲棲戒疏事義曰蔡文忠公少縱レ酒登第後友人贈レ詩云乃至酒如成レ疾悔何追公遂終レ身飲不レ至レ酔▲善悪所起經曰飲酒三十六過乃至二現多ニ疾病一参

いはふべき日　●五節句及び嫁娶元服の日の類なり参●祝言の折かへりて狂人となし病者となす事

淺ましとなり文
あくる日まで頭いたく　●宿酒のさめざるをいふ野　●俗にいふ二日ゑいなり　頭書云 ▲莊子狂酲三日不已 ▲說文酲病レ酒也野
物くはずに　●呻吟と書てうめく義也物くはずに醉ふしと云說も有元は誤なり句　前にくはし
生をへだてたる　頭書云 ▲玄義六曰隔レ生即忘 ▲又張籍詩云三年患レ眼今年較免下與二風光一便隔上レ生句 ▲正法念經曰若酒醉之人如二死人一無レ異盤
昨日の事　●此身の過去生ことをしらざるがごとく醉てきのふの事をおぼえずと也文　又一義に●死たる物に似たるとなり壽
おほやけ　●公義也壽 ●遊仙窟には天事と云ておほやけことゝよむなり參
大事をかきて　頭書云 ▲四分律曰十七癈二忘事業一淨影無量壽經疏曰飮酒之人乃至不レ事二家業一參
わづらひとなる　●要用を闕によりて事のわづらひとなるなり諺
慈悲　頭書云 ▲法界次第上曰能與二他樂一之心名レ之爲レ慈能拔二他苦一之心名レ之爲レ悲句

禮義にも　頭書云 ▲酒誡曰臣子失二禮於君親之前一幼賤悖二慢於耆宿之坐一 ▲風俗通曰君子曰酒以成レ禮弗二繼以一レ淫義也參 ▲樂記曰先王因爲二酒禮一凡一献之禮賓主百拜終日飮レ酒而不レ得レ醉焉此先王之所三以備二酒禍一也句
からき　●辛苦の心也句
ねたく　●ねたむ義也句
ひとの國　●他國と書異國の事也
あなり　●有の字の下略也壽
これらになき人事にて　●日本をさす諺 ●異國に酒をのみ醉狂する事ありて此方になきならひならは傳へきゝてもあやしくおもはんがあるならひとおもふてあやしみもせぬなり古 ●京邊にすむ人かの日光あたりの土民のそのむかしには人に餉をふるまふとてひたせめにしゐると云物語をきくに同しかるへし參
あやしく　●奇怪なり諺
[第二節] ●飮人のと云よりをほゑぬへしまで也●此節は强飮することの心得ぬゆゑを書つらねたり文

人のうへにてみたるだにこゝろうし思ひ入たるさまに心にくしと見し人もおもふ所なくわらひのゝしり詞おほくゑぼうしゆがみひもはづし脛高くかゝげてよういなき氣しき日來の人とも覺えず女は額髪はれらかにかきやりまばゆからず顏うちさゝげてうちわらひさかづきもてる手にとりつきよからぬ人は肴とりて口にさしあてみづからもくひたるさまあし聲のかぎり出してをの／＼うたひまひ年老たる法師めし出されて黑くきたなき身をかたぬぎて目もあてられずすぢりたるを興じみる人さへうとましくにくしあるは又我身いみしき事どもかたはらいたく云きかせあるは醉なきし下さまの人はのりあひいさかひてあさましくをそろし恥がましく心うき事のみ有てはてはゆるさぬものをしとりて緣より落馬車よりおちてあやまちしつ物にものらぬきはゝ大路をよろぼひ行てついひぢ門の下などにむきてえもいはぬ事どもしちらし年老袈裟かけたる法師の小わらはの肩ををさへて聞えぬ事共いひつゝよろめきたるいとかはゆしかゝる事をしても此世も後の世も益あるべきわざならばいかゞはせん

こゝろうし　●他人のうへにて見るさへ如レ此なれば我ゑひたらばといふ下心なり諺
思ひ入たる　●思案ある躰なる人也又わが思ひ入たる也參
心にくしと見し人も　●信仰せし人もなり諺　頭書云　▲范魯公戒酒曰移ニ謹厚性一化爲ニ凶險類一參
おもふ所なく　●はゞかる所もなく也句
わらひのゝしり　●頭書云▲善惡所起經曰二十五增ニ語笑一參
詞おほく　頭書云▲酒誡曰或無レ對而語參
ひもはづし　●裝束の帶なり盤
はきたかくかゝけ　●すそまくり上る也諺　頭書云▲善惡所起經曰二十二形不ニ隱密一參
よういなき　●身を守る用意なき也諺
日來の人とも　●日ころ思ひ入たるさまとは各別也參
はれらかに　●はれらかは晴の字なりすこしも顏をかくす躰なきなりかきやりはかき上るをいふなり諺
まばゆからず　●はぢざるなり羞明と書壽　●病論

俗解に陰滋をまばゆしと訓ず又怕明とも書参
口にさしあて　●人の口になり諺
さまあし　●是まて女の躰なり文
法師めし出されて　●高貴の人の前へなり諺
黒くきたなき　●悪の字也句
かたぬぎて　●是猶我をわすれたる躰なり諺　頭
書云▲柳文序飲曰吾聞昔之飲レ酒者有二揖譲酬酢百
拜以爲レ禮者一有二叫號屢舞如レ沸如レ羹以爲レ極者有
二裸裎袒(タンセキ)裼以爲レ達者一云々
すぢりたる　●一曲かなてたるさまなり文　●行儀
の正躰ならざるなり諺　又一説に●老人の肉の體
なり盤　此説はいやし
人さへ　●此さへの字法師をつよくにくめる義を
ふくめり諺
にくし　頭書云▲枕草紙のにくき物といふ所に酒
のみてあかき口をさぐりひげあるものはそれをな
でて盃人にとらするほどのけしきいみじくにくし
とみゆ又のめなどいふなるべし身ぶるひをしかし
らふり口をひきたれてわらはべのこうどのにまい
りてなどうたふやうにするそれはしも誠によき人
のさし玉ひしより心づきなしとをもふ也文
いみしき事　●系圖だてをいひ自賛の事かたるな
り全
酔泣し　●上戸にやゝもすれば有事也句　●頭書
云▲萬葉に「かしこしといふものよりも酒のみて
ゑひなきするぞましてあるらし又「たゝにゐてか
たらひするは酒のみてゑひなきするになをしかす
なり壽　▲源氏繪あわせにもゑひなきにや院の御事
聞へ出てうちしほれたまひぬと書り　▲白樂天答
レ勸レ酒詩云莫レ怪近來都不レ飲二幾回一因レ醉却沾レ巾
誰料平生狂レ酒客如今變作二酒悲人一酔なきの事詩
歌に已に顯然たり上戸にやゝもすればあることな
り句　▲大和物語にゑひなきいとになくす文
のりあひいさかひ　●罵詈の二字いつれものると
よむ也のりあひは互に悪口する也諸　頭書云▲源
氏わかなにゑひなきこそのりあひいさかひて壽▲
平家物語に殿下ののりあひてとあり文▲四分律曰
十二闘諍之本云々善悪所起經曰三因與二闘諍一酒識
曰或爭レ辭尙レ勝参
ものともをしとりて　●無理に奪ひ取也文　●漢典

に劫奪とつかひしと同じ義なり人の目の前にてをひやかしうばふ事也ぬすみにはあらず参　頭書云▲四分律曰二十四偸二人財物一参

おちてあやまちし　頭書云▲莊子達生篇曰夫醉者之墮レ車雖レ疾不レ死▲四分律曰三十二墮レ車墜レ馬▲酒誡曰或奔レ車走レ馬乃至登レ危蹋レ頽雖レ墜而不レ覺参

物にも　●乗物馬にもなり盤

きは　●際の字なり分際の義也句

よろぼひ　●よろめくさま也句　●沈醉の人のまゝあることとなり説　頭書云▲催馬樂に酒をたうべてたへゑひてとうどこりんそやまいりてくるよろぼひぞや云々文

ついひぢ　●築地也野　●よみくせ兩義也ついいちといの字をもつ心也又はついんぢとひの字をはねてよむ也全

えもいはぬ事ども　●爰にては嘔吐などする事なり野　頭書云▲酒誡曰或嘔二吐几筵一参

かけたる法師の　●是より又出家の事をいへり説

いとかはゆし　●法師の身としてかゝる淺ましき躰は見るに不便なり又其酒狂人をたすくる小童はかはゆしともいへり諺　●此かはゆしといへることは小兒を愛する語のやうに見ゆる故に後説の意もあれど然るへからず参　●法師の酒をこのめる嘲一字の褒貶なりかはゆしと云詞は甚そしれるなり全

この世も後の世も益ある　●もし如此に酒を用て今生後生のために益ある事ならばそれはさま〳〵の難行をつとむる事もあるなればいかにともいはれずと云て猶下に深くいましめたり

いかゞはせん　●益あるわざならばいかほどに賞翫すべきと也此てにはあたし野の段にいかにもののあはれもなからんといふいかにと同じ心なり増鐵

【第三節】●人の上にてと云よりいかゞはせんまでなり●此節は醉たるありさまのよからぬことをかけり文

此世にてはあやまちおほく財を失ひ病をまうく百藥の長といへど萬の病は酒よりこそおこれ憂をわするといへど醉たる人そ過にしうさをも思ひ出てなくめる後の世は人の智惠をうしなひ善根をやく事火のことくして惡をまし萬の戒を破りて地獄におつべし酒

をとりて人に飲せたる人五百生が間手なき者に生るとこそ佛は說給ふなれ

此世にてもあやまち多く　◎これより上をうけて此世も後の世も失ある事を三つにわけて上の返答をなす　頭書云▲是大藏一覽般若論などに酒に三十五の過あることをいへるにてかけり▲般若論云佛告ニ難提一酒有ニ多過一一費レ財二多レ病下略▲大藏一覽にもあり野にくわし

百藥の長　頭書云▲前漢書食貨志夫鹽食肴之將酒百藥之長也壽▲書叙指南九日酒曰ニ百藥之長一又曰歡伯一又曰ニ天美祿一又曰ニ狂藥一云々參

病は酒よりこそ起れ　◎格致餘論にも酒よりおこる病をさま〴〵のせたり文

憂をわする　◎酒の異名を忘憂と云壽　頭書云▲東方朔傳銷レ憂者莫レ若レ酒▲古樂府何以忘レ憂唯有ニ杜康一注杜康善造レ酒故爲ニ酒名一野▲文選卷三十淵明雜詩曰汎ニ此忘憂物一注良忘憂物謂レ酒也句▲事物異名集には酒の異名を祛レ愁使者ともいへり參

過にしうさ　◎醉て心亂るゝ上より昔今のうき事をいひ出て泣なり壽◎上に出たる醉なきなり句　頭書云▲四分律曰二十八日夜憂愁▲善惡所起經曰十二多增ニ憂苦一參▲詩云憂レ心如レ醉又曰憂如レ酲野

後の世は人の　◎これより前のこの世のちの世もいへるのちの世の返答なり參

智惠を失ひ善根を云々　頭書云▲善惡所起經曰七智惠漸寡▲永明禪師曰若不レ去レ酒斷ニ一切智惠種一參▲般若論云六少レ智乃至ニ十九行ニ不善一三十捨レ善▲往生禮讃曰恒以ニ瞋恚毒害火一焚ニ燒智惠慈善根一野▲大藏一覽云燒下所ニ積集一諸善根薪上句

萬の戒を破り　頭書云▲般若論云二十三破レ戒▲大藏一覽第三曰毘婆沙論有ニ一鄔波索迦一稟性仁賢受ニ持五戒一專精不レ犯後於ニ一時一爲レ渴所レ逼見ニ一器中一有レ酒如レ水遂取飮レ之爾時便犯ニ飮酒戒一時有ニ隣雞一來入ニ其舍一盜殺而噉復犯ニ殺與ニ盜戒一隣女尋レ雞來入ニ其室一强逼交通復犯ニ邪行戒一隣家告レ官訊問拒諱復犯ニ誑語戒一如レ是五戒皆由レ酒犯佛告ニ諸比丘一汝等若稱レ佛爲レ師者自レ今已往下至ニ茅端所レ沾酒滴一亦不レ得レ飮野

地獄におつへし　頭書云▲大毘婆娑論云今稱ニ地獄ー者地底也下也謂ニ萬物之中最在ニ底下ー也獄局也謂拘局不レ得ニ自在ー故ㇳ▲天台十六觀經疏曰地獄名ニ泥犁ー譯ニ不可樂ー▲正法念經曰以レ酒施ニ於持戒之人ー或破ニ禁戒ー而自飲酒或作ニ麴糵ー臨命終時其心迷亂失ニ於正念ー墮ニ地獄ー▲智度論飲酒有ニ三十五過失ー云々三十四身壞命終墮ニ惡道泥犁中ー▲梵綱發隱律十過第十身壞命終墮ニ三惡道ー參

酒をとりて人に云々　頭書云▲梵綱經心地法門品云若佛子故飲レ酒而生ニ酒過失ー無量若自身手過ニ酒器ー與レ人飲レ酒者五百世無レ手何況自飲亦不レ得教ニ一切人飲及一切衆生飲レ酒況自飲レ酒野

〔第四節〕●此世にてはと云より佛は說給ふなれまでなり●山案此節は上節に此世も後世もといひしをうけて今生後生酒にとがあることを云なりされば酒に過失のあること內外の書に多く見えたり其語略冠考に備へたり野槌云孟子離婁下禹惡ニ旨酒ー而好ニ善言ー注戰國策云儀狄作レ酒禹飲而甘レ之云後世必有下以レ酒亡ニ其國ー者上遂疏ニ儀狄ー而絕ニ旨酒ー今考るに景行錄云言多語失皆因レ酒義斷親疎只爲レ錢

▲又金剛寶戒章源密曰酒當殺人能失ニ正念ー雖レ有ニ息出入ー體如ニ死人ー又曰酒能引レ人令レ入ニ地獄ー經云酒爲ニ毒中毒ー地獄中地獄大病中大病脩此節の結句に論あり新注曰酒を飲は萬の戒をやぶり地獄に落べし又酒を取て人に飲せたる人は五百生が間手なき者に生ると佛は說玉ふとあり古より酒をのみたる沙門唐和に名僧をほし又のませたる人手なき者に生れば世に手なき人多かるべきにそれもなし佛說といふとも更に信し難き如何　答て曰釋迦の本意をくわしくしらぬ人は皆うたがひをまぬかれ難し佛說なればとてその分のみに心得て活して見る事をしらねば也活して見ると云は常をはなれ變に應じ其意味をいかして見るぞ常をのみ守て變の理をしらぬは柱に膠して琴をひくがごとし佛の說はいましめなりかくいたくいましめすんば皆酒にをほれ心をみたさんとあらかじめしりて右のごとくにいへりされどよきほどには飮べし若くるしからずとゆるしたらば醉狂人かぎりあらじとの本意なるべしみだれぬほどにさへ用れば佛聖人の意にかなへりいかんとなれば夏の禹や周公はいたくい

ましめ玉へども或は天地山川をまつり先祖の宗廟に事あり冠婚の禮にもなくては有べからず又釋尊のときも末利夫人と祇陀太子にはゆるしてのましめられしとなり又參考には梵綱發隱を引て曰問飮酒之戒昔犯必多無手之人今見何掛咎無手者不ミ必人中無ニ兩手一也蛇蚓鰍鱔之屬皆無手報云々又問沈湎之流理應ニ無手一云何過レ器便獲ニ斯殃一且如ニ君父之壽臣子稱レ觴一豈レ得ミ誠敬之心友招ニ惡劣之報一答凡言レ罪者皆爲下有ニ菩薩戒一者上言也已受ニ菩薩大戒一當下行ニ菩薩大道一發ニ大心一證中大果上乃所ミ以壽ニ吾君臣一而杯酒之敬々之小者也然而無手之報非ニ此類所レ感彼感報者蓋是報ニ持癡器一掛ニ酌癡藥一奬ニ誘癡人一成ニ就癡業一耳豈比下夫稱ニ觴君父一雖レ不レ名ニ大敬一終不上レ失下爲ニ誠敬一之心上乎無手之報加ニ於此等一則忠臣孝子必有下所ニ憤悗一而不平者上吾故表而出レ之　此說も一理ありといへども前說のすなほなるにはしかず

かくうとましとおもふ物なれどをのづから捨がたき折も有べし月の夜雪の朝花のもとにても心長閑に物語して盃出したる萬の興をそふるわざなりつれ〳〵なる日思ひの外に友の人來てとりをこなひたるも心なぐさむなれ〳〵しからぬあたりの御簾の中より御くだ物みきなどよきやうなるけはひしてさし出されたるいとよし冬せばき所にて物いりなどしてへだてなきどちさし向ておほく飮たるいとおかし旅のかりや野山などにて御肴何などいひて芝の上にてのみたるもおかしいたういたむ人のしゐられて少飮たるもいとよしよき人のとりわきて今ひとつ上すくなしなどの給はせたるもうれしちかづかまほしき人の上戸にてひし〳〵となれぬる又うれしさはいへど上戸はおかしく罪ゆるさるゝ者也

かくうとましと　●上をうけてかくうとましとおもふ物なれとゞいへり盤　●是より又酒の捨がたき事をのべたり諺　●壽抄にはこゝより別段とせり師說野槌等前につゞけられたるを用ひ侍るなり文

捨がたき折云々　頭書云△李白月下獨酌詩花間一壺酒獨酌無ニ相親一擧レ盃邀ニ明月一對レ影成ニ三人一△謝惠連雪賦梁王遊ニ於兎園一乃置ニ旨酒一命ニ賓友一天寶遺事王元寶每ニ大雪一掃レ雪開レ徑迎レ客飮宴謂ニ之暖寒會一△李白宴ニ桃李園一序開ニ瓊筵一而坐レ花

飛羽觴而醉月白樂天詩花下忘歸因美景樽前勸醉是春風野 ▲雪月花に酒興を催せし漢朝のふる事書つらぬるも中々筆かふろに成ぬべく覺へ侍る句

なれ〳〵しからぬ ●公義體にてなり諺 頭書云▲唐書云粟田眞人が唐國に入て則天皇后にまみへて麟德殿に宴しけるとあり又宋史に東坡か宣仁皇后の御前に侍りし事ありかやうのこと思ひいてす野

御くだ物 ●菓子也諺

みき ●御酒と又酒と書をこゝにて用ゆべし 頭書云▲御酒日本紀 酒同 或は神酒諸神を祭るに皆酒を供ずる故なり神の字をみとよむ也以上河海に見へたり又三寸とも書酒をのみたる人邪風をさること三寸といふより書之となり手の字をきとよむてとは馬の寸の時もよむなり御酒祭時如此書なり壽

物いり ●みづから料理などする體なり諺 頭書云▲宋壺山夜雪詩一爐柴火三盃酒誰記山陰有戴逵

へだてなき ●隔心なき友達也共同者との書也野

おほく ●冬のほかはおほくいらさるといふ心にやこゝにておほくのみたるよしとあり盤 ●山案是につゐてあ論り末の節分の下にくはしく辨ず

いとおかし ●面白義也末も皆同 頭書云▲枕草紙大夫はといふ條に又雪のいとふりつみたる夕暮よりはしちかう同じ心なる人二三人ばかり火桶中にすべて物語りなどするほどゆくらふ成ぬればこなたには火もとぼさぬに大かた雪の光いとしろう見へたるに火箸して灰なんどかきすさびてあはれなるものをかしきもいひあはするこそをかしけれ句

御肴何などと ●不自由なる所ゆへ何がなとさかなもとむるなり何なとゝは何がなゝどなり參 ●又何哉などゝ書る本も多し 頭書云▲催馬樂に我家は戸はり帳をもたてたれば大君きませむこにせんみさかなにはなによけんあはびさだをかゝせよけん野 ●梁塵愚抄にさだをかはさゞいなりかせよけんは是よけんの心とあり文

いたう ●上のいたうは甚の義下のいたむは酒のむ事をいたむ義也句

しゐられて　前のいたましうする物からといふと同し文

人のとり　●貴人の御前にて上戸は取わき御書にあづかる也文

すくなし　●盃の上すくなしと也又酒の數すくなしとも見るなり參

ちかづかまほしき人　●馴近きて睦たき人也諺

うれしさはいへど　●前の酒をいましめたる所にかけていへる詞也此詞の例上にも有句

罪ゆるさるゝ者也　●さのみにくみかたき義なり文　頭書云▲張安世は郎官の醉て殿上にゆばりしたるをゆるし丙吉は御史の醉て丞相の事の上に吐を醉俺の失を以て士をすつべからずと云てつみせず漢書にあり醉人をば不罰と云義あれども世敎のためには大飲を戒むべきことなり野

〔第五節〕●かくうとましと云より罪ゆるさるゝ者なりまで也●此節は又酒のすてがたき事をいへり是也初段の下戸ならぬこそをのこはよけれの心をいふ文●山案或人問て曰前節には酒の事をあしきやふにきびしくいましめ此節には酒をのみてもれ苦しからぬやうに書り是過不及なき致中の道理をいへり爰に兼好のせまらぬ志しなるべし然るに冬せはき所にて火にて物いりなどしてへだてなきどちさしむかひてをほく飲たるいとをかしと書て多く飲べきことをいへり大飲は是過なれは時として惡事も出來すべきに多くのむことをゆるしけること不審也又一說に冬は寒苦甚しければそれを除かんために多く飲べき也其上へだてなく思ふ友と出逢てはたとひ大飲をなしても害あるまじければかく書るものならんといへり此說もすなほならず是非如何　答て曰此一句は次にいたういたむ人のしゐられてすこしのみたるもいとよしと書ると對してをほくのみたるもいとをかしと書るのみなりをほくの字にさのみ心あるべからず只此一節は時として酒も又すて難き事あるといへるなりと心得よ●大全に云く酒のすてがたきことを兼好のかゝれたるは是草子のならひなら佛說などには萬人に通じて加樣の事はなきなりしかれども一人の手前にては酒をゆるし給ふこともあり此說一理といへども兼好本意にかなふべきかいかゞ

醉くたびれてあさゐしたる處をあるじのひきあけたるにまどひてほれたる顏ながらほそきもとゞりさし出し物も着あへずいだきもちひきしろひてにぐるかいどりすがたのうしろ手。毛おひたるほそはぎのほどおかしくつき〴〵し

醉くたびれて　●是は醉て他所に宿したる所をいふ諸

朝ゐしたる　●朝寢也諸　頭書云▲歌に一竹ちかく夜床子はせじうぐひすの鳴聲きけばあさゐせられず盤

あけたる　●戸障子などあけたるなり壽

ほれたる　●ねほれたる也句

さし出し　●髮などの不レ結して寢亂たる　なから也諺

ひきしろひて　●狩衣素襖なども着つくろはすいだきもちひきづりたるさまなり今まで醉伏たる事と恥てにげゆくなるべし文

かいどりすがた　●下着はかりにて帶をもせぬなり文

うしろ手　●うしろつきなり文　頭書云▲紅葉賀に誰としられていなばやとをほせとしどけなき姿にてかうむりなゞどうちゆかみては　しらむうしろ手思ふにとをこなるべし句

つき〴〵し　●興不レ盡也諺　●解前に有り

〔第六節〕●醉くたびれてと云より終までなり●此節は前にあくる日までかしらいたくなどいひしをうけて宿酒のさめざるありさまも捨がたきことをいふなり文

〔一段之統論〕●此段初より半すぐるまで酒好む人の現世に失多く後世に罪ふかき事をいひて末に至て又酒の德をも書つゞけたり文段抄に下戸ならぬこそ男はよけれといふを委いへるにやと侍り古抄に九分は酒をいましめ一分酒をすゝむといへり增鐵

●此段酒を飲ことのよきとあしきとをいふ其體筆にまかせてよく形容せり黃帝は酒を以て藥とすれば人の疾病と成と素問にあかせり夏后氏は酒をにくみて儀狄をうとめり周公旦は酒誥をつくりて國民をいましめて只まつりにのみ酒をのめとのたまへり君も臣も沈湎して身を亡し國を破る古今少からず誠にいましめをそるべきなり然とも洼樽杯飲

是禮のはじめなりいかんぞ玄水をすてんや其上ばかりなけれども亂にをよぼさずとあるは魯論に見へたり堯夫仲晦も三盃の微醺を興せずしもあらず酒は賓主のよろこびを交へ隣里の好を修する物なればすつべからず又すごすべからず大藏一覽第三未曾有經云昔波斯匿王遊獵儀甚勤斬ニ厨官名修迦羅ニ唯此一人稱ニ王意ニ者末利夫人聞レ之即具ニ酒饌ニ往至ニ王所ニ共飲相樂王瞋乃歇輙妄傳レ命莫レ殺ニ厨官ニ王至ニ明日ニ顏色憔悴夫人問何患耶王言昨日饑火所レ逼忿殺ニ厨官ニ悔恨愁耳夫人笑曰其人猶在王大歡喜王即白レ佛末利夫人持ニ佛五戒ニ犯ニ此飲酒妄語二戒ニ其事云何世尊答曰似レ此犯レ戒得ニ大功德ニ無レ有レ罪也▲又云祇陀太子曰得レ酒念レ戒不レ行レ惡也佛言若如レ汝者終レ身飲レ酒有ニ何惡ニ哉野　▲熏笭ニ云此一章始と終と酒をいましむるとゆるすと相違あるやうなれどもはじめは常道をのべ終りは權道を說りかの孟子のいへる嫂の水をぼるゝときは手をとれよとをしへられしがごとし佛も常道を敎誡し玉ふ時は飲酒戒をたてゝふかく其罪をせむといへども權道をしめし給ふ時は彼末利夫人祇陀太子にはゆるし玉へり又梵網經古蹟に瑜伽論を引て善心にて人に酒をほどこすは布施の行にをさむといへりこの故に雲棲寺の蓮池法師は菩薩戒の師として自智錄を撰じけるが其中に曰飲酒爲レ評ニ議惡事ニ飲ニ一升ニ爲ニ六過ニ與ニ不良人ニ飲ニ一升ニ爲ニ二過ニ無レ故與ニ常人ニ飲爲ニ一過ニ奉ニ養父母ニ延ニ待正賓ニ著非レ過煎ニ送藥餌ニ非レ過といへりしかのみならず元照は律宗の祖にてありながら念佛の法門をひろむる時は屠沽の下類刹那成佛の法なりと讃せり沽はこれ酒をうる人にして十重禁の犯人にあらずや法に常法なし機にしたがひてとくべし佛祖統紀には臨終に酒をのみて彌陀來迎を感し往生せる人をまでのせたり兼好もはじめは如來の常道をまもりて梵網を引て酒をきらふ樣に見へたれどもかた意地ならぬ人なればうき世の交をもおしたてゝ加樣にゆるやかに書をさめたること顧にそれたゞひとにあらずまことにこれ酒は正念をみだすものなれば小乘のおしへには草藥にてすくひあげてものむべからずとも見へ侍れ共もとより性罪にはあらず只遮罪也と倶舍にも見へけるうへは時のよろしきにしたがひてた

とひのむ事ありとも正念をうしなはぬをもちて本意とするなり黒谷語燈錄をよみ侍しにある人法然上人に酒のむは罪にてさむらふかと問し時實にはのむへくもなけれとも此世の習ひ也といへる此一章の大意によくかなへり參 ●山案此段酒の得失をならべあげて論ぜりされば上戸は酒なければ興もなく愛もなしと云くだし下戸は酒は禍のもとなりと一偏にこれをきらふ皆是己が好惡の僻によつてなり兼好はさにはあらす能酒の善惡あることを知てかく一偏におちいらぬ敎やう尤眼をつくべし良に好而知ニ其惡一惡而知ニ其好一人なり前にも色好さらん男は玉巵の當なきやうなといひてまたひたすらたはれたるかたにはあらてと云しと同じ意也ともに過不及なき中庸の意をとけりさはいへど多くものまず少ものますよきほと中くらいにのむを中とすべきかそれは子莫が中にして兼好の本意にあらずのむべき所にては大飲もすべし又のむまじき時には一滴も吸ましきなり是時に中する道にて聖賢の尊ぶところなり ●此段はじめには酒のむことをこと〳〵しくいましむといへども佛も飲酒をゆるされたるためしあれば末には又のみても害あるまじき程の風流を筆にまかす嗚呼兼好はそれ古人の所謂法花を轉ずるの徒かあふぐべしたうとむべし句

〔百七十六〕黒戸は小松の御門位につかせ給て昔たゞ人におはしまし〻時まさな事せさせ給ひしを忘れ給はで常にいとなませ給ひける間なり御薪にす〻けたれば黒戸といふとぞ

黒戸　頭書云 ▲清涼殿の北成瀧口の戸の西に有 壽

小松御門 ●五十八代光孝天皇の御事なり　頭書云 ▲山案人皇五十八代光孝天皇諱時康仁明帝（五十四代）帝第二子母贈皇太后宮藤原澤子贈太政大臣總繼女也天長七年降誕承和十年三月二日元服（于時十六歲）式部卿一品上野守太宰帥常陸太守元慶八年二月四日受ㇾ禪同二十三日即ㇾ位（于時五十五歲）▲同十一月二十二日大嘗會治ニ天下一三年仁和三年八月二十六日於ニ仁壽殿一崩壽五十八葬ニ小松山陵一仍號ニ小松帝一又號ニ仁和帝一 ▲大鏡云小松の帝と申す此御時に藤壺の上の御局の黒戸はあきたると聞へ侍るはまことにや句

おはしまし〻時 ●いまだ即位し給はざりし已前

親王にておはしましけるほどの事なるべし五十五歳にて思ひもかけず御位につかせ給ひしなり文

まさな事 ●無ㇾ正事也自御料理などして聞召たる事なるべし諺 頭書云▲枕草紙こと〳〵なるものゝ條にあなまさなや入給へとよぶにとあり句

常にいとなませ ●御位の後も昔の事思召出されてなり參

御薪 ●御料理の間にて燒給ふ薪柴の事也説 頭書云▲正月十五日百官ゟ薪を献て宮内省に納事天武帝の時より始て御薪と名る事延喜式公事根源などにあれ共爰にては只小松帝の位につきたまはぬ時まさなことの折たかせ給ふ薪柴なり野

【一段之統論】●此章は別の事なし黒戸のおこりをのぶるのみなり諸 ●此段は世の人のあやまりをただすぞ黒戸は禁中にさはまりてあることのやうにおもひしゆへさにはあらざることをしらせり或説に今色付の屋臺は黒戸の一つ歟宇多醍醐仁厚の深き帝ゆへ光孝の事をしたひ給ひて後々まで御殿を黒作にし玉へりとなん又それをうけて地下にも色付の家をたつるとなん説

【百七十七】鎌倉中書王にて御鞠有けるに雨ふりて後いまだ庭のかはかざりければいかゞせんと沙汰有けるに佐々木隱岐入道鋸のくづを車につみておほく奉りたれば一庭にしかれて泥土のわづらひなかりけりとりためけん用意ありがたしと人感じあへりけり此事をある者の語り出たりしに吉田中納言の乾沙(カハキスナゴ)のよういやはなかりけるとの給ひたりしかばはづかしかりきいみしとおもひける鋸のくづ賤くことやうの事なり庭の儀を奉行する人がはき砂をまうくるは故實なりとぞ

鎌倉中書王 ●一品中務卿征夷大將軍宗尊親王の御事也中書は中務の唐名王は親王也 頭書云▲山案一品中務卿宗尊親王八十七代後嵯峨院第一皇子母准后平朝臣棟子藏人勘解由次官棟基女也仁治三年生二於京一建長四年三月十九日入二六波羅一即赴二關東一公卿武士卑從四月朔日至二鎌倉一五日任二征夷大將軍一時年十一歲文永三年七月鎌倉騷動將軍乘二婦人輿一出歸ㇾ洛文永十一年七月薨二十三歲治ㇾ世十五年

鞠 頭書云▲山案事物紀原卷九嬉戲部第四十八云

劉向別錄曰蹴鞠者傳言黄帝造或曰起ニ戰國時ニ蹋鞠兵勢也所下以練ニ武事ニ知上ㇾ有ㇾ材皆因ニ嬉戲ニ而講ニ陳之ニ博物志曰黄帝所ㇾ作也△雅經卿御說云仁皇三十九代天智天皇朝渡云々元興寺に大なる槻木あり是をかゝりとして天智天皇大臣鎌足入鹿などして御鞠有けり云々古今著聞十一云蹴鞠ハ逸遊者前庭之壯觀也文武天皇大寶元年に此興はじまりけるとかや

佐々木隱岐入道　●佐々木太郎左衞門政義事なり入道して法名眞願といふなり　頭書云△東鑑四十建長二年十二月二十九日隱岐太郎左衞門入道心願者佐々木隱岐前司義淸嫡男幕府近習也俄出家遁世訖云々與ニ若狹前司泰村ニ度々爭ニ座着上下之事ニ而及ニ喧嘩ニ故今及ㇾ此云々野

宇多天皇（人皇五十九代）—敦實親王（一品式部卿賜姓源）—扶義（參議）—成頼（佐々木祖從四位下兵庫介）—章經（從四位下兵部大輔）—經方（四品兵部大輔）—爲俊（從五位上式部大輔）—秀義（從五位上兵部丞）—義淸——政義

鋸のくづ　●屑の字也　頭書云△晉書陶侃背造ㇾ船其木屑竹頭皆令ニ籍而掌ㇾ之其後元會大雪始晴廳事前猶濕於ㇾ是以ニ所ㇾ掌木屑ニ布ㇾ地△蕭服之題ニ陶侃詩云致ニ力中原ニ了無ㇾ事竹頭木屑是功名野

わづらひなかり　●雨にて庭のしるくなりたるなり諺

とりため　●日比とりためたる也參

吉田中納言　●藤房歟萬里小路を吉田とも號する也壽　頭書云△山槐萬里小路從一位中納言藤房卿鎌足二十七代之孫從一位權大納言宣房卿之男也本朝中古之賢臣也後醍醐天皇建武二年三月俄剃髪遁世以ニ朝政不ㇾ正諫ㇾ帝不ㇾ聽也一生至言多其書號ニ天鏡記ニ

系圖

鎌足……不比等——房前——眞楯——內麿—冬嗣（これまでは前にくわし）—良門（正六位上內舍人）—高藤（內大臣）—定方（從二位左大臣）—朝頼（從四位上左大辨）—爲輔（正三位）—宣孝（正五位下右衞門）—隆光（左京大夫）—隆方（正四位下右衞門佐）—爲房（正三位參議）—爲隆（從三位大藏卿）—光房（正四位下）

中宮亮 光長 正三位參議 ― 長房 正三位民部卿 ― 定高 正二位中納言 ― 忠高 正二位中納言

定光 正五位下春宮進 ― 光經 正二位權大納言 ― 光嗣 正五位下丹後守

資經 正三位參議號ニ吉田一 ― 資通 從三位左京大夫 ― 宣房 ― 藤房

はづかし ●兼好のかたはらに居合て此中納言の言葉を聞て心はつかしく存しとなり句

賤くことやう ●此一言を聞てはいやしく異相なる事也參 ●今も雨後の鞠場には鋸屑をしきて濕りをとる事あり扨其鋸屑を掃いて後砂をもまきてつくろふなり是は此ころの事にてむかしはせざりしにや此所の心は其砂の用意なくて只のこぎりくづをしきて其まゝ鞠場にかまへしを賤くことやうの事といふなるべし文

〔一段之統論〕●此一章の大意は庭の奉行などする人の心得を述て次には吉田中納言の一言にて却て鋸屑の用意賤しく聞ゆれば萬事に付て一偏に心得べからずと云事をあらはせり諺

〔百七十八〕或所のさふらひとも內侍所の御神樂を見て人に語るとて寶劒をば其人ぞ持給へるなどいふを聞てうちなる女房の中に別殿の行幸には晝御座の御劒にてこそあれとしのびやかにいひたりし心にくかりきその人ふるき典侍なりけるとかや

御神樂 ●前にくはし

其人ぞ ●名をさしていふ言葉なり句

持給へる ●御神樂おこなはるゝ時內侍所へ行幸あり其時もたせ給へる御劒は晝の御座の御劒なりそれをしらずして寶劒かといふあやまり也寶劒は三種の神器のうち也晝御座は清涼殿に有壽

うちなる ●二義有一には內とは禁裏の惣號なれは禁裏の女房といふ心か又簾內にいるの心也と未レ知ニ是非一句

別殿の行幸 ●爰にては內侍所を指なるべし野 ●昔は夜御殿の御帳の中御枕の上に安置有しに今は內侍所にましますにより別殿とはいへり句

晝御座の ●案するに御劒二つあり寶劒と神璽とは常に夜の御殿の御帳中御枕の上に安置す壽永の亂に寶劒入海の後清涼殿の御劒を用らる是晝御座の御劒なり野 ●常にはひのござといへり枕草紙にはひのおましとあるは訓によめるなり文

心にくかりき ●故實をしりたる女なればなり諺

その人ふるき典侍　◯昔典侍に居てつかはれたる女と云事但久しく典侍の役を勤たる人か諺　頭書云▲禁秘抄云劔璽渡時内侍二人直取レ之只時典侍傳レ之授ニ次將一號ニ逆内侍一云々典侍掌侍など御劔を手にふるゝ物なれば其わざをよくしるべき也文▲内侍司に尙侍二人典侍四人掌侍四人あり供奉奏請宣傳の事を司類なり禁秘抄云典侍の職尤重爲ニ御乳母一之人者諸太夫女聽レ之云々野

【一段之統論】◯上の段に吉田中納言の御庭の故實をしれる事をしるせるにうけて又此段にも宮女の才かしこくものなれたる物語を書あらはし後來の鑑とするなるべし句◯此段は我境界にあらずしらざる事を卒爾にいふべからずとのいましめにかける物語なり文

徒然草諸抄大成巻第十五

目次

〔百七十九〕入宋の沙門道眼上人一切經を持來して六波羅のあたりやけ野といふ處に安置して殊に首楞嚴經を講じて那爛陀寺と號す其聖の申されしは那爛陀寺は大門北むきなりと江帥の說とて云傳たれど西域傳法顯傳などにも見えず更に所見なし江帥はいかなる才覺にて申されけん覺束なし唐土の西明寺は北むき勿論なりと申き

入宋の　◉支那へ渡るに唐の世なれば入唐といひ宋元の時なれば入宋入元といふ也野

沙門　◉出家の通名也諺　頭書云▲四十二章經曰佛言爲ㇾ道識ㇾ心達ㇾ本解ニ無爲法一名曰ニ沙門一眞宗皇帝御註曰沙門梵語合ㇾ云ニ沙迦門曩一已略ニ其二字一云々參▲釋氏要覽上肇師云出家之都名也梵云ニ沙迦懣曩一唐言ニ勤息一謂此人勤ニ修善品一息ニ諸惡一故又秦釋云ニ勤行一謂勤ニ修善法一行ニ趣涅槃一也或曰ニ沙門那一或云ニ桑門一文

道眼上人　◉傳記たしかにしれず越前永平寺の開山道元かともいへどそれは時代もちがひ文字もかはり又上人號もにあはぬやうに覺えられたり此道眼は兼好同時なり此草子の末に兼好那爛陀寺に行て道眼の談義聞たりとあり參

一切經　◉大藏經也五千餘卷と七千餘卷との多少有野　頭書云▲大經藏に多小ありいにしへ奈良などの藏にをさめたるには五千餘卷あるなり又建仁寺の靈雲院にて見し經は七千餘卷あり又慈眼大師の命にて寬永寺にをさまれる本は六千餘卷あり參▲佛說を經と云菩薩の說を論といひ人師のを釋と云なり一切經には佛說ばかりにてはなく菩薩の論もあるなり勅定にて後に入ること也白樂天が文集も入日本の元亨釋書も入るなり盤

持來して　◉將來してと書たる本有句

六波羅　◉清水寺の下にあり諺

殊に　◉其一切經の內殊になり參

首楞嚴經　◉十卷有　頭書云▲大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經と題せり疏云首楞嚴者梵語也涅槃云首楞者名ニ一切事竟一嚴者名ㇾ堅即一切事究竟堅固也得ニ此三昧一觀法如幻於ㇾ法自在云々唐則天神竜元年中天竺沙門般刺密帝於ニ廣州制止道場一譯正諫大夫房融筆授烏長國沙門彌伽釋譯語　長水沙門子璿疏を作り懷遠是を釋す又師子林

の惟則も會解を著す野
講じて　◉講談してなり參
那爛陀寺　●是は天竺の那爛陀寺也諺　●天竺の寺號也道眼上人歸朝して其名をかりて又那爛陀寺と號するなり壽　◉楞嚴經を中印度那爛陀大道場經とも申也野　頭書云▲名義集曰那爛陀西域記曰唐曰ニ施無厭ト此伽藍南菴沒羅園中有レ池其龍名ニ那爛陀ト旁建ニ伽藍ト因取ニ其稱ト從ニ其實義ト是如來昔行ニ菩薩道ト時爲ニ大國主ト建ニ都此地ト憐ニ愍衆生ト好樂周給時美ニ其德ト號ニ施無厭ト參
其聖の　◉道眼なり盤
大門　頭書云▲大宋僧傳云那爛陀寺周匝四十八里九寺一門是九天主所造西域伽藍無レ如ニ其廣ト矣▲九人の天王九寺を建られたる中に門はたゞひとつにてありしなりよのつねの伽藍の門をも皆大門といへど此大の字わきて九寺の總門なる故に大の字をつけたると見るが爰にはしたしきなり參
江帥　◉大江匡房卿也大宰帥なる故に江帥と云ふものしりにて口きゝなる故にかうそつなるものと云詞も江帥の字なりといひならはせり野　頭書云▲山案平城天皇十一代之孫大江匡房卿也堀川院（人王七十三代帝）の御宇嘉保元年六月任ニ中納言ト承德元年九月任ニ太宰權帥ト故號ニ江帥ト歌人也儒者也鳥羽院（七十四代）天永二年十一月五日薨歲七十一江次第江談など云書も皆匡房作也

系圖

平城天皇（人王五十一代）—阿保親王—本主—音人—千古（チフル）—維時—重光—匡衡（是までは下巻の二段目江侍從系圖にくはし）—擧周（タカチカ）（正五位下式部大夫文章博士）—成衡（從四位上大學頭）—匡房（正二位中納言　太宰帥美作守）

說とて　頭書云▲むかし宇治關白賴通公平等院をたて給て惣門の便宜を思ひ煩ひ給ける折ふし公任卿まいられけるに賴通公曰此境地東は河南は山西はうしろなり北より外に惣門をたつべき便なし北に總門のある寺やさむらふと尋給ひけるにさしも和漢の才人なりし公任卿覺悟なかりけるにや江帥いまだ弱冠のとき車のしりに相のりて同參せられたりけるにさやうの寺やあると問給ければ匡房

云先我朝には六波羅密寺容也上八の寺漢土には西明寺圓側國師の寺天竺には大那爛陀寺戒賢論師の寺と申されける盤

西域傳法 ◉玄奘三藏天竺へわたりての記錄十二卷有西域記と名づく壽

法顯傳 ◉法顯三藏渡天の記錄也上卷に委し壽

覺束なし ◉天竺の那爛陀寺は北向なるといふ事何の書にも見えざるをいかなる博學の才にて云はれけるぞと江師を褒美したると云と又道眼の何の書にも見えざるに此說は不審なりと江師をあやしめると兩說諺

西明寺 ◉唐にて法相宗の沙門圓測の居たる寺也圓測は窺基の弟子基は玄奘の弟子也白氏文集にも西明寺の牡丹の詩あり野

勿論なりと申き 江師のいはれる如くなりと也盤

【一段之統論】◉此段別のことなし匡房卿の詞の上を道眼上人の不審したる事の物語なり諸 ◉此段は江師をあやまりと見るべきにあらずさしもの大才の人のいはれしとなれば上人の見あたらぬにてこそあれあやまりにてはあらじとなり上段のやうにはかりごゝろへまじきとの義なり人によるべきとのこゝろなり盤

【百八十】さぎちやうは正月に打たるぎちやうを眞言院より神泉苑へ出し燒あぐるなり法成就の池にこそとはやすは神泉苑の池をいふ也

さぎちやうは ◉三毬抄（サギチヤウ） 三毬杖 爆竹 左義長如レ此書樣あまた有也去共三毬打の說を用べし

◉季吟云三毬打（サギチヤウ）と書心はむかしは毬打（ギッチヤウ）三つをたてて作れりいまの爆竹の竹三本を足に用るも其形とかや三毬杖も亦同じ心也文 頭書云▲三毬打も三毬杖もともに同じ 顯昭袖中抄十云十節錄黃帝取ニ蚩尤頭一毬レ之今毬杖是也以ニ彼例一漢土年始用ニ件事一國中無ニ凶事一仍日本國學ニ其例一年始打ニ毬杖一然則毬杖玉毬奉と云也野 ◉出案ずるに事物紀原卷三云宋朝會要曰毬杖非レ古蓋唐世尙レ之以資ニ玩樂一とあれば十節錄の說も信じ難し▲口傳曰或ふみには三毬杖の玉は天地人の三つを玉にあらはして打走しむる其心は天地人の三つの行はるゝさまを祝したるなるべし又正月十五日迄用る所のしめ

繩松竹をあつめて彼玉をやく也竹を三本立たるは天地人の三つにかたどる三角にしてたてほそなるは陽の形なり燒あくるは陽を祭なり其火を水邊にうつして消しをさむる也全 ▲爆竹　事文類聚爆竹神異經西方深山中有レ人長尺餘犯レ人則病ニ寒熱一名曰ニ山臊一人以レ竹著ニ火中一熚烞有レ聲而山臊驚憚諸書を考ふるに爆竹は除夜と元日とにする事也上元にあらず野 ▲爆竹日本のことわざに似たればなぞらへてさぎちやうと訓をつけたる成べし文 ▲左義長　後漢明帝永平年中に佛法はしめて天竺より漢土へわたる五岳の道士是をやぶらんと訴るによりて甚しるしをみんとて佛經を左にをき道士の書を右にをきて火をかくるに道士の書燒失すされば左の義長せりと云て左義長と云其故に西域義長や東土やとはやす西域佛法の義まさりて東土へ流布すと云事也とも云り是は皆佛家の說にて我道を譽たる成べし野 ▲又陰陽家には巨旦將來を調伏の威儀なりとて三毬杖燒の齊會は三毒退治のことはりなるよし淸明が簠簋內傳に見へたり文

正月に ◉如レ此正月に打たるぎちやうとあれば袖中抄の說に同じ此義をよしとすべきなり野

眞言院 ◉後七日の御修法を行はるゝ道場なり文前にくはし

神泉苑 ◉神泉苑は池の名也二條大宮に有也池に中島あり雨乞なと今も此所にて有レ之也

燒あぐるなり ◉彼眞言院の御修法十四日に終りて後に三毬打せしにや今十五日に是をはやすゆへ分明也禁中には十八日に有是神泉苑のさぎちやうよりのちに又別に內裏にてありはじめしなるべし文

法成就の池 ◉弘法大師神泉苑にて請雨經の法を修して天下潤澤す故佛法成就の池とは神泉苑の池をいふ也諺 ◉これも佛法成就のこゝろにて左義長の義なりと佛家にはいへと兼好は神泉苑の池の名なりといへり此池は請雨經の法成就の所なればなり文　頭書云 ▲拾芥曰天子遊覽所以ニ近衞次將一爲ニ別當一乾臨閣謂ニ之正殿一金剛疊石二條南大宮西八町三條北壬生東善女龍王常見ニ此所一上代有ニ公卿別當一長保年中道綱補レ之野 ▲日本事跡考曰王城

大內有ニ神泉苑一以爲ニ靈沼一天皇時々行幸遊戲若旱祈レ雨有レ驗參 ▲江談曰神泉苑修ニ請雨經法一四ケ度大僧都空海一七ケ日不ニ雨降一延ニ二ケ日一九ケ日龍破ニ神泉苑一上レ天即降レ雨天下潤澤陰陽師滋岳川人勤ニ五龍祭一今度殊同感猜レ之度云々 又曰 大僧都元杲一七ケ日雨不レ降延ニ二ケ日一至ニ九日一雨降又曰小僧都元眞一七ケ日雨不レ降延ニ二ケ日一遂不降仍隱ニ居鎭西安樂寺一云々又曰阿闍梨仁海寛仁年六月四日始五ケ日之間雨降可レ作ニ律師一之狀蒙ニ宣旨一任ニ權律師一 八月十一日 文

〔一段之統論〕● 此段は我朝のさぎちやうのことを云なり文 ● 此段は世俗のいひあやまりをしらせしと見るべきなりされば雨禱成就したる池とはやすは神泉苑の池に限るなりしかるをいづかたにても法成就の池とはやせしをこれは神泉苑の池の事なりとしらせし詞なり又とうどやといふ事は貴とやといふ事也をほんやとは御法やといふ事也これ雨のいのりの密法をいふなりこれ皆法成就の池と云詞のうち也全

〔百八十一〕ふれ〱こゆきたんばのこゆきといふ事よねつきふるひたるに似たれば粉雪といふたまれこゆきといふべきをあやまりてたんはのとはいふ也かきや木のまたにとうたふべしとある物しり申さ昔よりいひける事にや鳥羽院おさなくおはしまして雪のふるにかく仰られけるよし讃岐のすけが日記に書たり

よねつき ● 色葉集の歌にも此詞出たり前に在

粉雪 頭書云 ▲謝女は雪を鹽にたとへ香山は雪を玉屑に比し王勉は雪を京積灰にたとふるためしあれば米粉にたとへたることさもあるべし野 ▲白き事を米の粉にたとへたるに例をいはゞ紀州の粉河寺といふははじめながるゝ水粉のごとくなるゆへなりしと釋書にあり參

かきや木のまた ● 牆垣樹木の岐なり野

鳥羽院 ● 人皇七十四代の帝也野 頭書云 ▲山案人皇七十四代鳥羽院諱宗仁堀川院七十三代帝第一皇子母贈皇太后苡子贈太政大臣藤原實季女康和五年八月十七日立ニ太子一嘉承二年七月十九日踐祚同六年十二月一日即レ位天仁元年十一月廿六日大嘗會同四年正月一日元服于時十一歲保安四年正月二十八日讓

位同二月二日尊號保延七年三月十日御出家〔三十九歳〕法諱空覺康治元年五月五日於二東大寺一受戒治二天下一十六年保元元年七月二日崩壽五十四

讃岐のすけ ●新勅撰集の作者に堀川院讃岐典侍とあり日記三卷あり堀川院の官女なる故に鳥羽院のおさなくおはしますほどの事をよくしられしなり或説に〔句解説〕源三位賴政のむすめといへるは非なり二條院にみやづかへ申せし仲の名のさぬきにおもひあやまれるなるべし文

〔一段之統〔論〕〕●前段にさぎちやうのはやしやう貴とや御法〔チホン〕などはやせし事むかしよりあやまり來をいひて其始たしかならぬといふついでに童蒙のいひしことにもあやまりきたれる例を擧たり全

〔百八十二〕四條大納言隆親卿からざけといふものを供御にまいらせられたりけるをかくあやしき物まいるやうあらじと人の申けるを聞て大納言鮭といふ魚まいらぬ事にてあらんにこそあれ鮭のしらほし何條事かあらん鮎のしらぼしはまいらぬかはと申されけり

隆親卿 頭書云▲善勝寺大納言隆衡卿の男權大納言正二位檢非違使別當

鎌足――不比等――房前〔これ迄前に委〕魚名〔正二位左大臣號二河邊一〕

――末茂〔從五位下但馬守〕總繼〔從五位下紀伊守〕直道〔從五位上少納言〕連茂〔從五位下但馬守〕佐忠〔山城守正五位上〕時明〔正五位下山城守〕賴任〔從四位上右衛門佐〕――

――隆經〔正四位下春宮大進〕顯季〔太宰大貮正二位〕家保〔正三位參議〕家成〔正三位中納言〕隆季〔正二位大納言〕隆房〔正二位大納言〕隆衡〔正二位大納言〕隆親〔正二位權大納言四條嫡家又大宮〕

からざけ ▲干鮭と書なり野 頭書云▲和名曰崔禹錫食經云鮭〔折青切和名佐介今案俗用二鮭字一非也鮭音圭鯸鮐魚一名也〕其子似レ苺〔音茂今案苺子即覆盆也見二唐韻一〕赤光一名年魚春生年中死故名レ之野 ▲本草綱目には鱖魚をさけに用ひたれど和名には世にしたがひて鮭を用ゆ參

供御 ●天子の御膳なるへし文

大納言 ●此下にのいはくといふ四字を加へて見るべし句

まいらぬ事にてあらんにこそあれ ●隆親卿の辨說也文 ●一切に鮭をまいらぬ魚ならば乾鮭をまいらぬは尤なりなまなる鮭をまいる上はなり諺 頭

書云▲東鑑第十建久元年十月三日頼朝於二遠江國菊河一佐々木三郎盛綱相二副小刀鮭楚割一數居折以二子息小童一送二進御宿一申云只今削レ之令レ食之處氣味頗懇切早可二聞食一歟云々殊御自愛被折敷被レ染二御自筆一曰「まちゑたる人のなさけもすはやりのわりなく見ゆるこゝろさしかなとよまれし例有野
鮭のしらぼし　●生ながらほしたるを云諸　頭書云▲をよそ魚を生なからほしかはかしたるを淡魚とも鱐魚ともいふ串につらぬきたるを鮑魚とも鮿魚とも法魚とも云鹽につけたるを醃魚鹹魚鮑魚鯹魚といふ本草綱目にあり野
何條事かあらん　●鮭をまいるからはしらほしにせし干鮭何といふ難かあらんと也文
鮎のしらぼし　●是しらぼしにせし物を參らせたりとて難あらじとのことはり也文　頭書云▲和名云䱔魚一名二鮎魚一和名安由楊氏漢語抄云銀口魚又云細鱗魚春生冬死故名二年魚一▲本草綱目には鰷魚をあゆに用ひたれと世に久しく誤るゆへに和名にも鮎の字なり參
〔一段之統論〕●此段は隆親卿故實をよくしり其上に發明をくわへられたる事をしるせり古抄に云此御時にからざけを供御に奉れる事珍しかりしにや其故に人難じ侍しをまづ鮭と云魚をまいる事をいひ次にあゆのしらほしをまいる事を明めて畢竟からざけは名こそかはれ鮭のしらほしなりといふ心なり増鐵●此段は論語泰伯篇に不レ在二其位一不レ謀二其政一と孔子の宣へる語を引合せて見るべし此隆親卿は能故實をしり玉ふ人なれば天子の供御にまいらせまじき物を奉ることとあらんやそれをしらぬ人の側より不審するは其家を無すると云ものなりされば今も此四條家を山陰殿と云て料理の家なり世に山陰一流と號するぞ畢竟我道にあらぬことを難すましきと云こゝろを記せり說

〔百八十三〕人つく牛をば角をきり人くふ馬をば耳をきりて其しるしとすしるしをつけずして人をやぶらせぬるはぬしのとがなり人くふ犬をばやしなひかふべからず是皆科有律のいましめなり
ぬしの　●牛馬を持たる主なり諺
律のいましめ　●天下法律のいましめなり新註　頭書云▲律贋牧曰凡馬牛及犬有二觸觝蹋二咬人一而記號栓繫不レ如レ法若有二狂犬一不レ殺者笞四十疏曰依二

雜令㆒畜產觝㆑人者截㆓兩角㆒踰㆑人者絆㆑足齧㆑人者截㆓兩耳㆒此爲㆓標幟羈絆之法㆒▲事文類聚云度嶷遁㆑世不㆑仕牛馬有㆓踶嚙者㆒恐㆑傷㆑人不㆑鬻㆓於市㆒▲曲禮献㆑鳥者佛㆓其首㆒畜㆑鳥則勿㆑佛注佛謂㆑捩㆓轉其首㆒恐㆓其啄之害㆒㆑人也畜者不㆑然順㆓其性㆒也又曰效㆑馬效㆑羊者右牽㆑之效㆑犬者左牽㆑之注效陳献也以㆓右手㆒牽之爲㆑便㆑犬以㆓左手㆒防㆓其齧噬㆒野

〔一段之統論〕●此段は上の段に魚類の物語をしるせるにうけて畜類の事にをよぼし馬牛犬は家ごとにあるものなれば養ひかふべき古法をあかして諸人の心得となせる成べし句

〔百八十四〕相模守時賴の母は松下禪尼とぞ申ける守をいれ申さるゝ事ありけるにすゝけたるあかり障子のやぶればかりを禪尼手づから小刀してきりまはしつゝはられければせうとの城介義景其日のけいめいして候ひけるが給はりてなにがし男にはらせ候はんさやうの事に心得たる者に候と申されければ其男尼が細工によもまさり侍らじとてなを一間づゝはられけるを義景皆をはりかへ候はんははるかにたやすく候べしまだらに候も見ぐるしくやとかさねて申されければ尼も後はさは〳〵とはりかへんとおもへどもけふばかりはわざとかくてあるべきなり物はやぶれたる所ばかりを修理して用る事ぞとわかき人に見ならはせて心づけむためなりと申されけるいと有難かりけり世を治る道儉約を本とす女性なれども聖人の心にかよへり天下をたもつ程の人を子にてもたれける誠にたゞ人にはあらざりけるとぞ

相模守時賴　●鎌倉五代目の執權最明寺入道殿の事　頭書云▲正四位下相模守時賴卿は修理亮時氏卿之二男北條四郎時政五代之孫なり寬元後嵯峨院八十七代四年より康元後深草八十九代元年まて十一年の執權也賴經卿宗尊親皇兩將軍の中なり康元々年十一月剃髮法名は道崇覺了房號㆓最明寺㆒弘長三年龜山院八十九代十一月廿二日に卒す歲三十八世に賢臣と稱する也事跡東鑑元亨釋書太平記評判等にくわし

桓武天皇人皇五十代 ── 葛原親皇 ── 高見王 ── 高望王 ── 良望 ── 貞盛これまでは前の建禮門院の所に委 ── 維將從五位上肥後守 ── 維時從五位下肥前守 ── 直方從五位上上總介 ── 聖範北條流從四位下 ── 時直

一時家——時方 従五位下 時政 北條四郎従五位下遠江守鎌倉執權 —義時 従四位下相模守右京權大夫執權 泰時 正四位下武藏守左京權大夫執權 時氏 従五位下修理亮 —時頼
松下禪尼　頭書云▲修理亮時氏室經時時頼時定等母也秋田城介景盛女也見ニ東鑑一▲東鑑四十四建長六年十月六日相州室産ニ女子一加持若宮僧正隆辨驗者清尊僧都也奥州女房松下禪尼相州等群集爲ニ安藤左衛門光成奉行一有ニ祿物等銀劍五衣馬置レ鞍云々野

鎌足——不比等——房前——魚名 これまでは前の四條大納言隆親の所に委
鷲取 従五位上中務少輔 藤嗣 従四位上參議右衛門督 高房 正四位下中宮亮
山蔭 従三位中納言 有頼 従五位下但馬守 有衡 従二位左大臣 國光 正四位下
忠輔 正三位治部卿中納言 相任 正五位下遠江守 相繼 従四位下上野介秋田城介祖
相國 上野掾 國重 出羽介 兼廣 小野田三郎 盛長 藤四郎
景盛 従五位上秋田城介 義景 従五位上秋田城介
女子 北條時氏室　泰盛 次の段にくわし

守をいれ申さるゝ事　●時頼を禪尼の亭へ請待せられたるなり諸

あかり障子　頭書云▲井蛙抄に爲氏卿古の犬きかかひしすゝめの子とびあがりしやうじと云らん文▲山案如レ此もあれどもよみくせには　あかりさうじとよむなり

禪尼手づから　●手の字一字をも手自の二字をもてつからと訓ず句

小刀して　●してとはにてのこゝろなり句

せうとの　●兄弟禪尼の兄也諸

城介義景　●秋田城介也　頭書云▲従五位上秋田城介義景は大織冠四代之孫河邊左大臣魚名公十六代の後胤秋田城介景盛入道覺知が長男也父子ともに評定衆也系圖見レ右▲職原抄云秋田城介爲ニ出羽介一者兼レ之除目不レ任レ之被ニ宣下一也▲季吟云正月の縣召の除目には此介を任せられずして臨時に藏人をもて被ニ仰出一を宣下と云也むかしは東夷やゝもすればをこれる故出羽の秋田城を置て其非常を守らしめたる事也文

けいめい　●經營と書ていとなむ心なり壽　●時頼は義景の姪なれ共時の權柄なるゆへにうやまはれたるなり古　頭書云▲遊仙窟には婆娘と書り爰に

ては經營と書べし夕顏卷にけいめいとあるを源語類聚に敬命と書りうやまひしたがふ義なり野

給はり　義景の詞也其障子の細工をこなたへ給りてと也文

なにがし男　●其者にといふ辭也諺

申されける　頭書云▲貞永式目に小破之時且加ニ修理一とあるは泰時が法政なり彼禪尼かやうのためしを見聞しゆへに如レ此して先祖の風を時頼に敎へしめすなり野

いと有難かりけり　●いとゝいふより兼好判なり諺

儉約を本とす　●儉約の二字一章の大綱也參　頭書云▲論語子曰以レ約失レ之者鮮矣▲又曰奢則不孫儉則固與ニ其不孫一也寧固▲何晏集解云去レ奢從レ約謂ニ之儉一野▲謝氏曰不ニ侈然以自放謂ニ之約一▲黄之子曰恭レ儉謹レ約所ニ以自守一▲明心寶鑑引ニ景行錄一曰勤儉治レ家之本和順齊レ家之本勤富之本儉富之源參

子にてもたれける　頭書云▲父母賢なれは子女又賢なるは自然の理也堯舜朱均は天地の變なれば理外の沙汰也されば松下禪尼賢女なりしが故に時頼も又賢臣なりしぞかし此故に列女傳曰古者婦人姙レ子寢不レ側坐不レ邊立不レ蹕不レ食ニ邪味一割不レ正不レ食席不レ正不レ坐目不レ視ニ邪色一耳不レ聽ニ淫聲一夜則令ニ瞽誦レ詩道ニ正事一如レ此則生子形容端正才過レ人矣とあり是形容を正しうしてさへ其子にうつる也況や心の邪正に於てはいかでうつらざることあらんや楊子法言學行篇曰螟蛉之子殪而逢ニ蜾蠃一祝レ之曰類レ我々々久則肖レ之矣速哉七十二子之肖ニ仲尼一也注咸曰螟蛉桑虫也蜾蠃蒲盧也桑虫子始生而蒲盧取レ之於ニ木空中一七日祝而化之以變爲ニ己子一殪者一謂下其始生未レ有ニ形性一殪然如ニ死故始可ニ以祝而變一レ之秘曰詩草木疏云螟蛉桑上青虫蜾蠃細腰蜂言螟蛉與ニ蜾蠃一異類殪而祝レ之以成ニ其子一矧仲尼之聖七十子之賢敎而誨レ之豈不レ速哉とあり螟蛉さへ如レ此人としてをや説

たゞ人　●こゝにてはたゞひとゝよむべし説　●タヾウト諸抄の點

〔一段之統論〕●此段は世を治る道は儉約をもとゝすることを松下禪尼の物語につきて敎たり前に古

の聖の御代の政をも忘れといひかみのをごりつい
やす所をやめなといへる段と同心なり文 ●上の段
には古の世を治るに馬牛犬を養ひかう律法あるこ
とをいへるにうけて又此段には世を治るに儉約を
本とする道理を述たり誠に松下禪尼の才すぐれた
り其言葉金玉なり其心有難しされは萊公が三公の
位にのぼりても樓臺をたつる程の地さへなく寢所
一青幃二十餘年時々有二破壞一纔命補葺とあるは異
國同意の談なりつら〱思ふに人の上として下を
めぐむ心のうすきは只萬に奢をこのめるあやまり
よりをこれり天下は天下なるを一人の私として民
と共にたのしまずは禍いたらん事日なかるべし嗚
呼句 ●山案此段天下諸侯としては儉約を本とすべ
きことを教へたりされば上一人奢をなせば下も又
身を約にすることをしらず杜牧が阿房宮賦に一人
之心千萬人心也秦愛二紛奢一人亦念二其家一とあれは
人に上たる人は尤つゝしむべきこと也誠盈篇に儉
則民不レ勞民勞則怨起とありさて禪尼の時頼の母
公たれど臣にかはりて教訓し給ふありがたくこそ
彼孟母の三遷思ひ出られ侍る

〔百八十五〕城陸奥守泰盛はさうなき馬のりなりけり
馬をひき出させけるに足をそろへてしきみをゆらり
とこゆるを見ては是はいさめる馬なりとて鞍をおき
かへさせけり又足をのべてしきみに蹴あてぬれば是
はにぶくしてあやまちあるべしとてのらざりけり道
をしらざらん人かばかり恐れなんや

城陸奥守泰盛 ●此家代々秋田城介に任ぜり弘安
年中に陸奥守兼任の故に城陸奥守といへり城介義
景の子也
頭書云 ▲城介義景三男北條相模守時宗舅也弘安八
年泰盛其子宗景改二藤氏一爲二源氏一謀反皆被レ誅是
謂二霜月騷動一系圖前段委
しきみを ●閫の字をも閾の字をも書なり句　頭
書云 ▲孔安國論語鄕黨篇注曰閾門限也参
鞍をおきかへさせけり ●此馬には乘まじきとて
餘の馬に鞍を置せしなるべし諸
是はにぶくして ●前のいさめるは過也後のにぶ
きは不レ及也馬の中道を得ざるをきらへるなり文
道をしらざらん人 ●馬道なり是より兼好の批判
也さうなき馬のりなりといひ出し首尾也文 ●此道

の字は馬の事にかぎらず萬の事も又かくのごとくなるべき心入肝要也説

恐れなんや　●おそるゝはつゝしむとおなし心なり文

〔一段之統論〕●此段は松下禪尼義景などのことをいひし次手に泰盛が事を書て乘馬の心ばへを敎たり文　●此段は過不及を云て道は中庸を干要とすることを述たり諺

〔百八十六〕吉田と申馬乘の申侍しは馬ごとにこはきもの也人の力あらそふべからずとしるべしのるべき馬をばまづよく見て强き所よはき處をしるべし次に轡鞍の具にあやうきことやあると見て心にかゝる事あらば其馬をはすべからず此用意をわすれざるを馬乘とは申也是秘藏の事なりと申き

馬ごとにこはき　●每也殊にとあるはあしゝ諺　●こはきは强の字也つよき義也句　●いつれの馬も人よりは力つよきものなれば力わざにのりこなしがたしとの心也文

力あらそふ　●ことばのあらそひは諍の字なれども是は力のあらそひなれば角の字を可用參

馬をはすべからず　●馳騁の字也野　●逸足をとるべからず壽

秘藏の事なり　●肝要の事なりといふがごとし說

頭書云▲圓覺略疏曰秘藏如㆓不開櫃㆒又曰秘謂非㆑器不㆑傳▲涅槃經疏曰隱故名㆑秘覆故名㆑藏參

〔一段之統論〕●此段も又上の段に相うけて馬道のうへを論じ萬事にわたりて戒謹恐懼をわするべからざることはりをあかせり句　●此段は馬に乘べき人の第一と心得べきことなりわづかなるやうなことながら此所に心を著ずんば時とし害多かるべし世俗に馬を能乘得たる人每に蛇に綱つけても乘べきなど云はさらに此道しらぬ人の云ことゝなりかく馬に乘ことに名を得し泰盛や吉田などさへかばかりをそれにけり其上劉子新論曰逢蒙善射不㆑能㆑用㆓不㆑調弓㆒造父善御不㆑能㆑策㆓不㆑服之馬㆒倕善斷不㆑能㆑用㆓不㆑利之斧㆒孫吳善將不㆑能㆑戰㆓不㆑習之卒㆒とあれば必つゝしむべきことなりされば馬一道にかぎらず萬のことにも此心得肝要也たとひ我能得たることをも必々由斷すべからず前にいへる泰重躬を落馬の相あると下野入道心願が云ける

も此つゝしみなき所を見て云しなり淮南子に善游者溺善騎者墮各以ニ其所一レ好自爲レ禍とあるも最つつしみのなきによつて也まことに吉田が一言可レ爲天下法一説

〔百八十七〕萬の道の人たとひ不堪なりといへとも堪能の非家の人にならふ時必まさる事はたゆみなくつつしみてかろ〳〵しくせぬとひとへに自由なるとのひとしからぬなり藝能所作のみにあらず大方のふるまひ心づかひもをろかにしてつゝしめるは得の本也たゝみにしてほしきまゝなる失の本なり

萬の道の　●其道々の家の人をいふ文

不堪　●無器量なり前に注あり壽

堪能　▲器用の義參

非家の人に　●其家にあらざる人に也壽

ならふ時　●立並て其藝をつとむる時也

必まさる　●彼不器用ものまさる也諺

たゆみなく　●我家の事なれば諺

つゝしみて　●此つゝしみの詞此章の骨子也句

かろ〳〵しくせぬ　●道の人をいふなり文

自由なる　●是は非家の人は我家ノ事ならねば自由にして大事にかけぬ故に其家の人とはひとしからぬなり諺

藝能　●是より愚にてもつゝしむがよき事をいへり文　●まことの道に引かけて云也一部の筆法かゝる所おほし心をつくべし盤

をろかにして　●聖門にても曾子魯鈍にして篤實なれば終に一貫の傳を得たり然れども眞の下愚は惡に入て善に入事なし桀紂が惡も畢竟は下愚の至極也野

たゝみにして　●蘇秦張儀が揣摩の法たくみならざるにはあらず然もおごりいつわりほしいまゝなる故に果して災難にかゝれり野

〔二段之統論〕●此段も前の兩段に御藝の上のつゝしみをいへるうけてよろつの藝能所作もをろそかにせざる第一なりいふこゝろを記せり增鐵　●此段も上二段をうけて敬の字をいへり易の終日乾々中庸の篤恭尙書の顧諟みな敬の尤ものなり朱文公の主一無適之謂と敬の字の注をせられたり主一無適とは深淵のはたにのぞみ薄氷の上をふむがごとし事事物々毎に此意をわすれざるなり今初學のために

一級くだりていはゞ天目に一盃水をたゝへて兩手にて持主君の前に出るがごとしわづかも心をこたらばこぼるべきをよくたもつやうにする是敬の工夫なるべし新注

〔百八十八〕或者子を法師になして學問して因果の理をもしり說經などして世わたるたつきともせよといひければおしへのまゝに說經師にならんために先馬に乘ならひけり輿車もたぬ身の導師に請ぜられん時馬などむかへにおこせたらんにもゝじりにて落なんは心うかるべしとおもひけり次に佛事の後酒などすすむる事あらんに法師の無下に能なきは檀那すさまじくおもふべしとて早歌といふことを習ひけり二のわざやう／＼さかひに入ければいよ／＼よくしたくおぼえて嗜ける程に說經ならふべきひまなくて年寄にけり

因果の理 ●因緣果報也新注 ●因とは物の種のごとし果とは其實とおなじ前世の業因によりて只今の果をうくる也文 ●因果の理とは佛法の道理といふ心也一大藏經みな因果の二字をとけりといふ心にてしるべし故に法華にては一乘の因果といひ無量壽經にては淨土の因果といふ事を一經の宗要とす又禪家にも不落因果の了解によりて五百生があいた野狐になれりとなれば此二字の外に何事をか佛道といふべき三世の因果をあきらむるを佛道の理といふなゝ壽　頭書云▲此觀曰招果爲レ因剋獲爲レ果云々▲又惺窩文集曰因果の字義未レ詳說文因託也緣也又猶ニ根本一果與レ菓同凡有ニ木之根本一者必結ニ其實一因レ彼來レ此之謂也譬如ニ慈在レ人昨日盜ニ人之物一而今日遭レ害者昨是因而今即果也句▲因果錄曰因者種レ種也果者種ニ穀種一得ニ穀食一也種レ善而得ニ善果一是自食ニ其種一也又何疑乎▲歸元直指集引ニ因果錄一曰要レ知ニ前世因一今生受者是要レ知ニ後世果一今生作者是參▲山案因果とは善惡に通じて暫くも不レ離ものなり今世俗にあしき事ばかりを因果なりと思ふは僻事也さて因果の道理は儒釋老ともに明白にこそしかるを當時の生物識其道理の眼前にあることを不レ知して己が無の見にまかせてこれを撥して無する也其說新注に見えたり曰先禪徒の無の見をいはゝ萬法一如など常談して人死する則は假合の四大やふれ本來空に歸してやけは

灰うつめは土となるいづれか跡にとゞまる一物もなしとなん又俗儒の無の見をいはゞ人死すれば陽氣は天にのぼり陰氣は地にくだり一身の理氣大虚に分散して空無と成とをもへり嗟乎偏哉かれらが見やうのごとくならば因果といふもの有べからず伯夷の平生聖清の言行も盗跖がよのつねの悪逆も持戒の人も破戒の者も死して無に歸するとのみをもはゞ善悪人の差別なし何の佛法何の聖教といふ事あらんや今つら〳〵案ずるにさには侍らず因果の道理明白なり善人死すれば善所へをもむき悪人滅すれば悪道にをつこれ不易の常理ならずや空々となる所に妙有の理ありて存在せり實に眞空實有なり眞儒より見れば虚而靈無極而太極ともいふべし老荘には谷神不レ死可レ可不ニ可不可一といへり三道に因果を用る事あら〳〵こゝにしるすべし豁達空撥ニ因果一漭々(モウ〳〵)蕩々招ニ殃禍一は證道の歌にあり不昧因果の理は無門關に見えたり智恵出有ニ大僞一とは老子の因果にあらずや上に智恵の因あれば下に僞の果あり積善之家必有ニ餘慶一積不善之家必有ニ餘殃一と孔夫子の言也是亦儒門の因果也

説經などして　●佛經の理を説談する義なり句

世わたる　●渡世と書諸

たつきとも　●萬葉に便と書たより也諺　●(とも)

此もの字肝心也法師の因果の理に達する事は生死をはなれんためなれども衣食なくては世にかゝづらひかたきものなれば世わたるためにもなるべしとのもの字なるべし只ひとへに世わたるために因果の理をしれと見ては其親の異見のあしきなれば馬と早歌(サウカ)との世事に先心をうつすもげにものやうに覺え侍る參

先馬に乗　●一大事を指置て無益のわざをするたとへ也文

もゝじり　●前にあり

無下に　●前にあり

能なき　●藝能也說

檀那　施主也說　頭書云▲書言故事四釋敎類僧道稱ニ施主一曰ニ檀那一梵語陀那鉢底唐言ニ施主一稱ニ檀那一者即訛レ陀爲レ檀去ニ鉢底一故曰ニ檀那一▲今僧より施主をさして檀那といひ又施主も僧を檀那と互にいふ皆いはれあり名義集に法界次第を引て云案

言ニ布施一々々有ニ二種一一者財施二者法施是を以て見れば檀那は布施の義にて俗は僧に財施する故に僧より檀那と云僧は俗に法施する故に俗より又檀那と云なり句

早歌 ●今の小歌の類なるべし又神樂催馬樂の中にも早歌あり野 ●神樂のはやうたといふは別の事也文　頭書云▲職人盡歌合繪賛云かたみにのこるなでしこの六十六番右早歌うたひ月「もろともに月にうたはんげにやさは今はた誰もさぞ覺へたる判云げにや娑婆の曲其興侍り云々同右戀「別路になくかうたふかかれ聲のしほりあげたる袖のなごりは判云袖の名殘の美聲近比の早歌の聽聞耳を驚し侍云々季吟按にこれ中古早歌とてうたひ物ありしに此袖の名殘形見にのこる撫子など其曲の名なるべし又神樂に早歌とて有一いつれそもとゞまりかふさきこゑて　みやまのこつゞら　くれ〳〵こつゞらなどいふ事也これははやうたとて別の事なるを諸抄にこれをもそのたぐひと云しはあやまりなり文

さかひに入ければ ●其藝のあらましを覺ゆる事也壽 ●上手と下手の間をさかひと云入とは上手になるまゝに也盤 ●其道の味ひをしる事也たとへば國郡の堺に入てその風俗をしるがごとし文 ●諸藝に皮肉骨の三つを立て藝能の淺深をしる肉に通るをやう〳〵骨に通らんとする境といふなり全

「第一節」●或者子を法師にと云より年寄にけりまでなり此段八節に分つ次段これに同じ●山案此節には上の段の心をうけて何れにても我つとむべき事をば一向につゝしみはげみて油斷するなと教へんために此法師の我つとむべきことをばなさずして無益の事に日を暮しけることを云て次の節にて萬人の上へ引かけて書べきために此たとへを設けてかけるなるべし

此法師のみにもあらず世間の人なべて此事あり若き程は諸事につけて身をたて大なる道をも成し能をもつき學問をもせんと行末久しくあらます事ども心にはかけながら世をのどかにおもひて打おこたりつゝまづさしあたりたる目の前の事のみにまぎれて月日を送ればこと〴〵なす事なくして身は老ぬつゐに物の上手にもならず思ひしやうに身をもたずとりか

へさるゝ齡ならねば走りて坂をくだる輪のごとくに
おとろへゆく
此法師のみ　●是より兼好の本意を述たり諺　●例
の筆法也盤
人なべて　●たゞしなべてなり句
あらます事ども　●兼て其事をせんとおもひをく
ことをいへり文
打おこたりつゝ　●我身の年寄る事を幾久しく思
てなり諺
なす事なくして　●終に一事も成就せずして參
物の上手にもならず　●前のかねて思ふ毎に諺
とりかへさるゝ齡　頭書云▲歌に　とりかへす物
にもがなや世の中をありしながらの我身と思はん
文
走りて坂をくだる輪のごとくに　●年の寄にした
かひておとろへゆくはやきたとへなり全　頭書云
▲前漢書如ニ坂上走ニ丸　師古曰　言乘レ勢更易壽　▲後
漢書皇甫嵩傳閻忠云逆レ坂走レ丸　迎レ風縱レ棹　豈云
レ易哉野　▲天寶遺事下曰張九齡毎下與ニ賓客一議中論
經旨上沼々不レ盡如ニ下坂走一レ丸也句

おとろへゆく　●上のわかき程はといふよりこゝ
にいたる迄朱文公の勸學文のこゝろなとひき合せ
味ふべし句　頭書云▲朱文公勸學文勿レ謂ニ今日不
レ學而有ニ來日一勿レ謂ニ今年不レ學而有ニ來年一日月逝
矣歲不ニ我延一嗚呼老矣是誰愆句
〔第二節〕●此法師のみと云よりをとろへゆくまで
也●此節は世上の人道はこゝろざしながら懈怠に
よりて本意をとげさる事をいへり文　●此節は上の
節をうけて彼法師のみにもかぎらず世間の人々皆
かくのごとし一事こゝろざすことあらば萬事をす
てゝつとむべきと前にもいへり說
されば一生のうちにむねとあらまほしからん事の中
に何かまさるとよくおもひくらべて第一のことを案
じさだめて其外は思ひすてゝ一事をはげむべし一日
の中一時の中にもあまたのことのきたらん中に少も
益のまさらん事をいとなみて其外をばうち捨て大事
をいそぐべき也何方をもすてじと心にとりもちては
一事もなるべからず
されば　●さやうにあればと前をうけたる詞也文
むね　●肝要也諺

一事をはげむべし　●其一大事と思ふ事をつとむべしとなり諺●山案此一事といふはかろく見るべし

〔第三節〕●されぱと云よりなるべからずまで也●此節は一生の中に第一の事を思ひ定て餘の事なくつとめまなぶべき事をいへり文●山案此節能々玩味すべし人としては日用の急務あるなりそれをは疎にしてあれこれと諸藝をつとむるほどに一事をも成就せず適なし得ることありとても無益の事のみにて身の爲にはならざることゝ也論衡云作ニ無益之能一納ニ無補之說一猶如ニ以レ夏進レ爐以レ冬奏ニ扇一亦徒耳とあり其上多藝は君子の恥る所也さて此節はひろく萬人の上にかけてそれ／＼のつとむべき事を第一に心がけよとの敎なり兼好本意の一大事はいまだ說出さず

たとへば碁をうつ人一手もいたづらにせず人にさきだちて小をすて大につくがごとしそれにとりて三のいしをすてゝ十の石につく事はやすし十をすてゝ十一につく事はかたし一つなりともまさらんかたへこそつくべきを十までなりぬればおしくおぼえておほくまさらぬ石にはかへにくし是をも捨ずかれをもとらんと思ふ心にかれをもえずこれをもうしなふべき道なり

たとへば　●是より一事を用るたとへなり諺

小をすて大につく　●碁に十法あり中の第五の捨レ小就レ大がごとし参　頭書云▲群書拾唾曰碁十訣奕棋有ニ此十法一故以レ訣言レ之　不レ得レ貪レ勝　入レ界宜レ援　攻レ彼顧レ我　棄レ子爭レ先　捨レ小就レ大　逢レ危須レ棄　愼勿レ欲レ速　動須ニ相應　彼强自保　我弱取レ和▲野槌には棊經を爛柯經と號す其中に捨レ小而取レ大といふ事あり然れども就レ大といへる就の字は拾唾の說よくかなへり参

それにとりて　●是より小を捨て大をとる事をくはしく論ず参

十をすてゝ十一につく　●少しの違ひなれば爰を見る事難し諺

おしくおぼえて　●すつる事をおしくおもふてなり諺

かれをもえずこれをもうしなふ　●世話にいふ一もとらず二もとらずの類也說

〔第四節〕●たとへば碁をうつと云よりうしなふべき道なりまてなり●此節は一生のうちにむねとあらまほしき事多きをいづれをも捨じとしては一の大事ならざるたとへなり文

京にすむ人いそぎて東山に用ありて既に行つきたりとも西山に行て其益まさるべき事を思ひ得たらば門より歸て西山へゆくべき也こゝまで來着ぬれば此ことをば先いひてん日をさゝぬ事なれば西山の事は歸りて又こそ思ひたゝめとおもふ故に一時の懈怠すなはち一生の懈怠となるこれをおそるべし

京にすむ人　●是又たとへをかへていふ也諸

門より歸りて　●東山の行つきたる家の門諺

先いひてん　●東山にてなり諺

日をさゝぬ事なれば　●日限なければ今日にかぎらぬ事と思ふ也鐵増

一時の懈怠　●此一時の懈怠の心よりおこたりそめて一生さま〳〵にまぎれくらしつゝ終に其本意をとげぬどなり文

懈怠の字訓　頭書云▲山井案 文選上 林賦云於レ是乎游戲懈怠▲字彙云懈居拜切懶也怠蕩亥切倦也慢也▲菩薩本行經云夫懈怠者衆行之累在家懈怠則衣食不レ供産業不レ舉出家懈怠則不レ能レ出二離生死之苦一▲釋論云 出家懶墮 則喪二於法寶一文 ▲遺教經節要曰論云懈怠者心懶惰故▲惟則禪師曰一念間斷之心便是三塗羈鎖業也參

〔第五節〕●京にすむ人と云よりをそるべしまで也●此節はたとへをかりて少しなりともまされりと思ひ得たる事あらば今までなしたる道に執着なくすてよとの教なり鐵増●山案此節は少しにてもまさることを見付たらばすみやかにそれをなすべきとの義なり人として尤なし難きこと也少しにてもさかひに入しことはたとひまさることゝはしりながら捨がたきなり彼も是も同じくなしたく思へば前の節の碁のたとへのごとし又是をなしはてゝ彼をなすべきと思へば一時の懈怠一生の懈怠になるなりされば孟子 告子上編孟子 曰魚我所レ欲也熊掌亦我所レ欲也二者不レ可レ得レ兼舍レ魚而取二熊掌一者也生亦我所レ欲也義亦我所レ欲也二者不レ可レ得レ兼舍レ生而取レ義者也

一事を必なさんとおもはゞ他の事のやぶるゝをもい

たむべからず人の嘲をも耻べからす萬事にかへずしては一の大事なるべからず

〔第六節〕●一事をと云よりなるべからずまでなり

●此一節は此段の眼目なり前にも大事を思ひたゝん人はさりがたき心にかゝらん本意をとげずしてさながらすつべきなりなどあまた所あり是兼好爲人の本意なるべし文●山案此節にいたりて兼好本意の一大事をいへり是すなはち佛道の事なり前の節毎に一大事といひ又は大事などゝ云しは人々の上にてのつとむべき第一の義なり此處の一大事は萬人にわたりて見るべしされば一大事をさへ成就せばたとひ日用の急務たりともうちすつべきと也前にも此心をゑざらん人はものぐるひともうつゝなしとも情なしともいはゞいへとある心など見合すべし

人のあまた有ける中にて或者ますほのすゝきまそほのすゝきなどいふ事ありわたのべの聖此ことをつたへ知たりと語りけると登蓮法師其座に侍りけるが聞て雨のふりけるに蓑笠やあるかし給へ彼すゝきの事習ひに渡邊のひじりのがり尋まからんといひけるをあまりに物さはがし雨やみてこそと人の云ければ無下の事をも仰らるゝ物かな人の命は雨のはれ間をもまつものかは我も死聖もうせなば尋きゝてんやとて走り出て行つゝ習ひ侍りにけりと申傳たるこそゆゝしく有がたふ覺ゆれ

人のあまた有ける中にて　●此事長明が無明抄にくはし畧して引り諸

ますほのすゝき　●十寸穗の薄眞麻穗の薄なりともに　頭書有　頭書云▲鴨長明が無明抄云此すゝき同さまにてあまた侍りますほのすゝきまそほのすゝきますうのすゝきとて三草は侍也ますほのすゝきといふは穗のながさ一尺ばかりあるをいふ彼ますかゞみをば萬葉集に十寸かゞみとかけるにて心得すべし野●季吟云かの長明の歌に「口にそへてとゞますほの花ずゝきたもとゆたかに人まねくらんとよめり文▲まそほのすゝき　無明抄云眞麻のこゝろなりこれ後頼朝臣の歌によみて侍る「花ずゝきまそほの糸をくりかけてたへずも人をおもほゆるかなと侍とよ糸などみだれたるやうなり野

ますうのすゝき　また云まことに蘇枋なりといふ

心也ますわうのすゝきといふべきことばを略したるなり色ふかき薄の名なるべし越前の名所色の濱にて鹽の間にますうの小貝ひろふとて色の濱とは云にやあるらんと西行のよめる其詞と同じ野

わたのべの聖　●津の國渡部にすめる聖なるべし名はしれず諸

語りけるを　●正佛入道かたりける也山案　頭書云▲山案するに和論語に曰登蓮法師空堯上人正佛入道眞佛房などよりあひてたがひに法の物語ともありしに正佛入道がいはくますほのすゝきまそほのすゝきなど云事あり渡邊のひじり此事を傳へてしれりと語りしに登蓮法師是を聞てと云々下は略す無明抄には語りし人の名を不ㇾ記此つれ〳〵草ともに三書のをもむき大に同して少しき異なり無明抄全文は野槌盤齋抄に委し

登蓮法師　頭書云▲詞花集巻軸の作者一世の中の人の心のうき雲に空がくれする有明の月壽▲作者部類を見に詞華千載新古今新勅撰後撰等すへて十一代の集の作者なり文

無下の事を　●是より登蓮が詞也古

待ものかは　●此詞まことに金言なるべし説頭書云▲時の間も待べきものかあたし野の草葉の末に秋風ぞふく「明日までと思ふ心はあだ櫻夜の間に風は吹ぬものかはなどゝよめる心なり説

習ひ侍り　●殊勝なる心ざし也説　頭書云▲山案に和論語曰上略此事ならひてあけの日二色のすゝきの事板に書て道々にをきけると也ありがたき心ざしとて御門より僧綱をくだし給りけるに登蓮此事を聞てあなたこなたとかくれて終にあづからざりしとなり長明が説とは異なり無明抄に曰上略さて本意の如く尋あひてとひきていみじうひさうしけりとあり▲又梨聰三筆曰紀州浄福寺悪空和尚作登蓮法師が渡邊の聖に逢し處を世に知者希なり然るに河内國丹南郡阿彌村と云處に其遺跡あり昔は此村に阿彌陀寺と號して十二坊有けると也中比は六坊となり今はいよ〳〵衰微して只一坊のみなりされば糸薄と云ふ謠は爰のこと也登蓮法師雨ふりけるに簑笠を着て此所へ來りわたのべの聖に薄のしなを尋たる處なりとぞ其阿彌陀寺の舊跡を予も行て見侍りしに其處に登蓮法師が墓なりとて今に古き墓所あり

〔第七節〕●人のあまた有ける中と云より覺ゆれまで也●此節は是我本意とあらましをきたる事を他のあざけりをも恥す萬事にかへてしとげたる物語なり文

敏ときは則功ありとぞ論語といふ文にも侍るなる此薄をいぶかしく思ひけるやうに一大事の因縁をぞおもふべかりける

敏ときは　●論語陽貨篇にあり敏は疾也壽●物に懈怠なく疾勉むれば其功ある心なり文

いぶかしく　●不審と書諸●おぼつかなく思ふ心也全

一大事の因縁　●一大事因縁とは一佛乘の妙理をさすなり一とは一實相とて衆生の妙心法界に遍じて眞實なるをいふなり大とは實相の體いかにもひろ〳〵として十界にわたり萬法をかねふくめる物なれば大と名づけたり事は所作にあらはれたるをいふ諸佛出世し給ひて衆生濟度の規式となれるをいふ也衆生の機佛を感ずるが因となり佛かの衆生にしたがひて應じ給ふが緣となる也此外色々の說あれども兼好こゝの一大事因緣をぞ思ふべかりといへるは只未來菩提にいたらん事をわするべからずとなり參●一大事因緣とは法華經方便品より出たり然共諸宗にわたりて至極の所は自已の心法を會せんとするより外に一大事はなき也扨一大事因緣とは實相共妙共第一義共本來面目共萬法歸一とも阿字共神道にては國常立とも儒にては天理共いふ也すべて無量無邊の名あれども決して二つとなき事也これを悟り得たる人を佛共聖人共一切智人共我朝にては神明とも申なり全　頭書云▲法華經方便品云諸佛世尊唯以二一大事因緣一故出二現於世一壽▲天台釋曰只今衆生得二此實相一唯爲二此事一出二現於世一更無二他事一一則實相也其性廣博也故名爲レ大諸佛出世之義式也故名爲レ事是爲二出世本意一云々貞▲又釋曰一即法身大即般若事即解脫此之三法衆生本具爲レ因諸佛顯示爲レ緣出世元意祇爲レ此矣▲天長釋曰非レ三非レ五故云レ一廣博包含故稱レ大說レ此化レ生故曰レ事機能感レ佛爲レ因佛隨レ彼應名レ緣有二此一大事之因緣一所以出二現於世一也參▲砂法を一大事と名付るなりされば諸佛出世して衆生を利益したまふことは此法華經にきはまる故に妙樂大

に曰出世本意在ニ佛乘一佛乘方得ニ名爲ニ大事一當レ知佛乘只是妙法也云々然れば一切諸佛は唯法華經をときたまはんためばかりに出世し玉ふと云ことを唯以ニ一大事因緣一故出ニ現於世一といふ也文 ◉此一大事因緣の字を舊抄には只法華經ばかりの事のやうに注したるは兼好天台學をせるにかなはず一大事因緣とはとかく大乘圓敎の一事を云也いまの法華にかぎらず爾前の經にも花嚴方等般若にも一分の妙をとかれたり其妙も今の妙もかはる事なしみなこゝの字のこゝろなり天台大師の釋をくはしく心得るとき念佛などを行ずるもよく融通の理にかなふときは皆一大事因緣の理に通ずる也參

〔第八節〕◉敏ときと云より終まで也◉山案此節は論語の文を引て一切の事を早速につとむれば其功あるとの心を云て一段を結したり良に登蓮の薄の名をいぶかしくきかまほしく朝夕に思へるやうに此一大事の理をよく心にかけて思ふべきとなり中間の種々のたとへをいへるも此節を書くべきためなり兼好本意こゝにきはまれり

〔一段之統論〕◉上の段に萬の藝能所作つゝしみてかろ〳〵しくせぬと偏に自由なるとの得失をあげて人をはげましいましめたるにうけて又此段には藝能の道のみに限らず人間一生の工夫も又しかなり誠に光陰は水のながるゝごとく行てふたゝびかへらず人の壽は夢のごとく幻のごとし一生のうち何事を學てか身の益まさらんと一事に思ひざためて其一事をはげまし習ひ餘事を一向にすてよとなり猶畢竟上にいふ所の藝能の道は人間世のかりなるうちのすさみにて皆無益の雜事也只後の世に便りする佛道を修行すべしと例のこのめるかたに引入るなるべし旬

〔百八十九〕今日は其事をなさんとおもへどあらぬいそぎ先出來てまぎれくらし待人はさはり有てたのめぬ人は來りたのみたる方の事はたがひて思ひよらぬ道ばかりはかなひぬわづらはしかりつる事はことなくてやすかるべき事はいど心ぐるし日々に過ゆくさまかねて思ひつるに似ず一年の事もかくのごとし一生の間も又しか也かねてのあらまし皆たがひゆくかとおもふにをのづからたがはぬ事もあればいよ〳〵物は定がたし不定と心得ぬるのみまことにてたがは

ず
あらぬいそぎ　●內々心にもあらぬ急用也思ひか
げざる義成べし句
待人はさはり有　●故障ある也諸　頭書云▲鄧侯
挽不レ來謝令推不レ去野▲陳后山詩客有レ可レ人期不
レ來と作れる又こゝの心也句
たのめぬ人は　●約束もせぬ人はなり文
かなひぬ　●畢ぬ也諺
わづらはし　●世間の煩多に六ケ敷事なり諺
ことなくて　何事もなくなくて也句
やすかるべき事は　何の事もあるまじき事諺
かねてのあらまし　●是より一轉して又奇妙なり
よく不定の理をおもひ得たるなるべし文●この心
は皆たかひゆくさだまれば世中は不定なりとさだ
まれども又たがはぬ事もあればいよ〳〵不定とも
さだめがたき也是一重上の不定なり鐵增　頭書云▲
兼好集のうたに「あらましもきのふにけふはかは
るかな思ひ定めぬ世にしすまへば此心通ふべし文
たがはぬ事　●おのづからたがはぬ事に人間の死
する道ばかりは必定れる事なり諺●法然上人の歌
に「何事も皆僞りの世の中に死ぬるばかりぞまこ
となりけるといふと意似たり參
定がたし　●常ある上にさへ世事は悉く違ひゆく
にまして不定の人間世なればなり諺
不定　●一切の事は不定と心得れば是計は實に違
ふ事なきと也諺●此所につきて論あり統論のした
にてくはしく辨ずべし
［一段之統論］●此段は上の段をうけてかけり彼一
大事因緣を思へと云ふもかゝる不定なる世の中に
てあるほどにすいぶん志をたてゝはげみつとめ餘
事をは打すてよとの意をいよ〳〵述たりさて末に
は一轉して自いたがはぬこともあればと書て人と
して生あれば必ず死あることを顯し無常の理りを
述たり尤殊勝なる文法心を着て熟讀すべし說●山
井案ずるに此段結句の不定と心得るのみ誠にてた
がはずといへるにつきて褒貶の說あり先句解曰此
段人間世の無常なる有さまを筆にまかせられたる
誠に面白くよみ覺へ侍るされど儒にとく處の平常
の理をわきまへられざる無念の事なりと云々野槌
曰兼好は人間不定と思へば萬事たがはずといへり

これ目前にある事にて佛老の見所なり或人程子に釋氏生死無常の說いかゞと問ければ程子古今生あれば死有是則常也若生て不死かへりて是無常也と云へり平常の道古今の定理也事かはれども理はかはらぬ也易は交易變易の義ありて其名をゑたり是定れる理にあらずや水火山澤の互に氣を通じ寒暑晝夜のかはる〴〵來る誰か不定とせん右の說を新注に辨して曰兼好は人の事につきていへり彼儒は理によりて論じたり不定の字義を無常の意に見そこなひ誠の字を中庸に云所の誠かと思ひて重く見るが故に程子の中者天下之正道庸者天下之定理といふ易の體の理をのぶる似たることは似たれど兼好本意にそむけり兼好日用五倫の理は古今の定理なりといふ事をしらずしていへるにあらずたゞ事の用につきて人間のありさまをいへるなるべしかの儒の論は易の體をいふつれ〴〵の意は用をしるせり易を皮膚とするといふは是等の段也易の本躰は不變也用をいふ則は變易するとぞ一槩にいふべからずかるが故に蘇子瞻が自ニ其變者ニ而觀レ之則天地曾不レ能ニ以一瞬ニといふは易の用也自ニ其不レ變者ニ而觀レ之則物與レ我皆無レ盡也とかきたるは易の躰をいふならし此說一理あるといへども兼好本意にかなふべきや否やしばらく其辨をさしをくなり

〔百九十〕妻といふものこそをのこの持まじきものなれ

〔第一節〕◉妻と云よりものなれまでなり此段四節に分つ文段是に同じ◉此節には一段の大意をあげたり前段に不定の理をいへりしつゐでに妻をも定めては持まじき物ぞとなるべし文

いつもひとりずみにてなど聞こそ心にくけれ誰がしかむこになりぬとも又いかなる女をとりすへて相住など聞つれば無下に心をとりせらるゝわざなりことなる事なき女をよしと思ひさだめてこそそひゐたらめと賤くもをしはかられよき女ならば此男をぞらうたくしてあが佛とまもりゐたらめたとへばさばかりにこそとおぼえぬべし

ひとりずみ　頭書云▲若紫に世に心のしまぬにやあらんひとり住にてのみとあり句　▲三教指歸曰天上牽牛猶歎ニ獨住ニ水中鴛鳥必欲ニ比宿ニ參

ことなる事もなき女　◉常に替る事もなき女也諺　◉

是より無下に心をとりせらるゝ故を云文
よき女ならば　●貞女の事也説　●又美女の事也兩說共に末に辯ず
此男　●此男をぞのてにはすみがたし兩說有
らうたくして　●良度とかくよき心也壽　●いとをしくする心也又勞の字も書なり文　●みだれかはしきといふ所にては勞の字也爰にては良の字なりといへり全
あが佛　●山案吾佛といふことなりあとわとは五音相通なればなり　●此所二說有先一義には女の男を大切にして我本尊の如くたうとみ守りゐるらんと也是盤齋季吟の說也今此說の心を案ずるに貞女は兩夫にまみえざるものなれば我夫をのみかくのごとく守りたうとむとの心なるべし又一說に冠考に引ける婁談が詞によりて見れば此あが佛は女をさしていふなるべししかる時は男の女をあかむるなるべし句解諺解に出たり　頭書云▲源氏手習の巻にあが佛京に出給はゞこそあらめとあるを花鳥にあが佛を我佛と云こと也と注せり又日本紀にも吾の字をあがとよませたりされば吾妻と書てあづまとよまずるも是あがつまと云の中畧なり諸　▲女子を佛に比したるいはれなきにあらす事類後集曰中宗朝裴談崇ニ奉釋氏一妻悍妬談畏レ之嘗云妻有レ可レ畏有三一少之時視レ之如ニ生菩薩一安有ニ人不レ畏ニ生菩薩一及ニ男女滿一レ前視レ之如ニ九子魔母一安有ニ人不レ畏ニ九子魔母一至ニ五六十一薄施ニ粧粉一或青或黑視レ之如ニ鳩盤茶(クハンダ)一安有ニ人不レ畏ニ鳩盤茶一本事詩及太平廣記などに見へたり
さばかりに　●それ程になくともと餘所より思はるべしと也諺　●たとへば其あがむる事は佛の如くに其かたらひはひよくの如くにあらんなど人に覺えられんもあぢきなからんとの心をふくめたる詞成べし文　●上の此男をぞと云より以下世の人の評判する詞也女の男を吾佛と思ふにはあらず若よき女ならばその男の女を佛の如くたうとみ守りゐたらめたとへば玄宗の貴妃を愛せしやうにや有ん義經の靜を思へる樣にやみゆらんなどゝ評判すべしと也句　●山井案ずるに此段は定めて妻を持ましき事をいへるなれば此一句も句解の說にしたがひて我妻の佛のことくにたうとみ守る男の心ざしよか

らぬ事をあらはすとみるべし此說にしたがふ時は上の能女といへるを貞女と見るよりは美女とみるべし此說よくかなふに似たれど上の此男をぞといへるてにはには穩當ならす此所恐らくは三寫烏焉馬のあやまりあるなるべし又女の男を吾佛とおもふといへる說は此所にかなふべきとも見えずなんぞよき女ばかり男をあが佛とあがめ守るべけんや夫妻としては男を大切になすべき事天下の定理なれば也彼密夫を好むは又論ずるにたらず但し此說は此男をぞといへる所のてにはにはよくかなひたり兩說いづれか是ならん後人これをたゞせ

〔第二節〕●いつもと云よりをぼゑぬべしまでなり

●此節は妻を定めぬこそよきに定て持たる男のありさまのよからぬことを書つらねたり文

まして家のうちをおこなひおさめたる女いと口おし子などいできてかしづき愛したる心うし男なくなりて後尼になりてとしよりたるありさまなき跡まであさまし

まして　●いはんやといふこゝろ也參　●上をうけたる詞也愛する女さへさばかりにこそとおもはるゝに況や世帶にまつはれ家業をとりおこなふ女はとなり說

かしづき　寵愛の義なり句　頭書云▲公羊傳母以レ子貴子以レ母貴▲後漢書母愛子抱野

心うし　●子をもふける事は世間にめでたきなどいひて喜ぶ事なりそれをよからぬやうに書なせる是この草子の名譽なり鐵增　●上の節の冠者に引ける褻談が詞など思ひ合すべし說

尼になりて　●梵語の尼の字はたゞ女の事也然るを日本の風俗に髮をそりたる女を尼といふ也くはしく前に注す參

としよりたるさま　●年寄たる女は褻談がいひし鳩槃茶のごとくおそろしかりぬべきにいはんや尼になりて夫のなき跡までながらへおらん事まことにあさましくすさまじかりぬべし說

〔第三節〕●ましてと云よりあさましと云までなり

●此節は女をやさしくもてなし愛せんだに妻と定めんはいやしかるべきにまして世帶にまつはれたる美相なき家童子或は子もちのきみなどは猶くちをしからん事をいへり文　●山案ずるに夫婦は人の

大倫にしてしかも夫は外を治め妻は内をとゝのをるを以て第一とせり故に大學にも詩經を引て桃之夭々其葉蓁々之子于歸宜ニ其家人一宜ニ其家人一而後可三以敎ニ國人一といへりしかるに兼好此所にてまして家のうちをおこなひ治めたる女いと口惜と云るは如何なる心と案ずるに彼家人に宜しき婦は當時あることを不レ聞やゝもすれば嫉妬の心を出して家人をせめせたけ剩夫婦の中も遺恨たゆることなき族世にこれ多したとひ嫉妬の心うすくして家内を能治るとも其夫吾妻をば本尊の如くにたつとみ守り居るときは必以て奢侈の心出て閨門の内亂て家を亡す媒となるなりされば牝鷄の晨するは家を亡すの相なりといへり古今君子の治め難きことなりといへるは閨門の內なり孔夫子も唯女子與ニ小人一爲レ難レ養近レ之則不孫遠レ之則怨と宣へりいかなる女なりとも明暮そひ見んにはいと心づきなくにくかりなん女のためも半空にこそならめよそながら時々通ひすまんこそ年月へてもたへぬなからひともならめあからさまに來てとまりゐなッどせんはめづらしかりぬべし

いかなる女　◉いかにかたち心ざまのよき女なりともとの心なり文

心づきなく　◉女に心の不レ着也説　頭書云▲伊勢物語云かのたかやすにきて見ればはじめこそ心にくゝもつくりけれ今はうちとけて手づからいゐがひとりてけごのうつはものにもりけるを見て心うかりていかずなりにけりとあるをば思ひ合すべし説

半空　◉疎路の義也句　頭書云▲新古今に「なか空にたちいる雲のあともなく身のいたづらになりにけるかな説

たへぬながら　◉不レ絶中ともならめ諸

あからさまに來て　◉白地と書前にくはしかりそめの意也説

とまりゐ　◉前に卯月ばかりのあけぼのゑんにおかしかりしをおぼし出てなどいひたる所とおなじこゝろなり文

「第四節」◉いかなる女と云より終まで也◉此節は妻とて家の內には定めずしてよそながら折々ゆきかよはんはめづらしからんとの義なり文◉或抄曰

是かく有べしといへるにはあらず血氣さかんなるとき人情のをこる事やめかたくあるべきとなるべしよそながら通ひ住は妾也家の内をおこなひをさむるは妻也妾と妻とは思ひくらぶる時は其情のかたにをひては妻より妾のめづらかなる事もありぬべけれども其縁をはなれて佛道に入にをゐては妻をはなるゝは妾をはなるゝよりはそこばくはなれがたき事世間の上につきてもありぬべしといへり是此段の餘意なるにや增鐵●今評して曰勿論妻をはなれがたき事妾をはなるゝよりは愛著ふかきことは色欲の一偏にてはあるべからず妻は世間へをし出したるものなれば人のをもはく一門のまじはりまふけ得たる子などにつけ或は久しく家風になれぬるものなれば起居座臥の用事衣食のとほしくなる事にまで愛心ひかれてはなれがたき事あるべし色欲一分ならば妾のめづらかなるに心のふかくかゝる事もあるべきか其事定めかたかるべし參

［一段之統論］●上の段に人間不定の道理をとくに言うけて又此段にも不定を述たり兼好が心入一生女犯(ボン)にあはずしてくらすは最上の事也もし人情たつ事あたはずばよそながら時々通ひすまんこそたがひのなさけもふかく其興もつきすまじ妻とさためてもつは無下の事なりといへる是又不定の美談ならずや旬●古抄云此段を儒書の法令を以てとやかくいひさまたぐる時少のたがひも侍れども世教をはなれて論ずる時は大切なる段なり其故は世をすて佛道にをもむかんとする人もをほくは妻子にひかれて其本意とげかたし此段のやうに平生をこなはゞ其道に入にをゐて世のほだしをほからん者よりはいとこゝろやすかるべきにや增鐵●此段に不審なることあり世間は本妻さだめて心をあなたこなたとちらさぬをよしとするにいかでかゝるをよしとすることは兼好の心を案ずるに妻をもたぬほどなるよき事はなけれども是非もつならば一所にしみつきて此世後世のほだしとなるよりもかりそめなるちぎりが終には心とまらずほどしならぬ故ましぞと也一所に思ひをとゞめすかれこれと好色なるものは善惡に心うつるゆへに善に引入て善にうつるたよりあり下愚はうつらずといふやうに一所に著して善に引入てもうつらぬ也されば色好まざ

らん男は玉のさかづきのそこなきこゝちすると云なり制戒も人により時によりことをこまかに合點すべし一へんに心得古人のいひをきしことをとかくいふべからず盤●此段妻をさだめて常にもたずしてまれ〳〵に女とかよひたる心よしといへり古今の人を見るにわかふして娶ざるあり壯にしてめとるあり妻死て後再めとらさるあり道士桑門の外一生妻をもたぬ人まれなり周澤か三百六十日齋し李益が門を閉て妻をふせぐよからぬこと也又南史齊何點隱居不レ仕絶レ昏何尙之强爲娶ニ任氏一禮畢將ニ親迎一點涕泣求レ執ニ本心一遂罷既老又娶ニ魯國隱者孔嗣女雖レ昏亦不ニ與レ妻相見一別レ宇以處レ之人莫レ諭ニ其意一張融爲レ詩嘲レ之曰惜哉何處士薄暮遭ニ荒淫一をいへり兼好が心も何點が心ありけるにやそれ男女は人倫の本なり男子に家室あらんとねがひ女子によき聟をもとむるは天下の父母の心なり男は外をおさめ女子は内をたゞす家法にあらずや妻子和ひて父母に順ふ家の榮にあらずやいかんぞ五倫をさりて道をもとめん兼好は佛老の跡をしたひて妻帑の累ひある事を云といへども又女にあから

さまに行通ひたるがよしと云時は何點が妻をもたず世を遁れて常の人にまされとも老て女をめとりて張融にわはるゝがごとしかれをさへや高師直が許にて艶書をやとはれてかいて師直が心にちがひけんまことに無下にをぼゆる野●此段好色の道をのべたり人倫の本意にあらずとしるべし新注●李吟曰まことに男女は人倫のもと也しかれども兼好は隱逸の心ざしをたてゝよのつねの外に道理を書りかの子といふ物なくて有なん四十にたらぬほどにて死なんこそめやすかるべけれ身の後の名のこりて更に益なし君子に仁義あり僧に法ありといひ時節の景氣をいふには冬枯のけしきこそ秋にはをさ〳〵をとるまじけれ花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかはやへざくらはことやうのものなり卯月ばかり若楓すべてよろづの花紅葉にもまさりてなどのたぐひかへりて此草紙の眼目にてこれによりて世にもてはやして人其義を感じ其風を慕ひ侍るにやよく其心ばへを知て後此段の本意をも思ひしるべき事にこそ彼佛の道は淫戒を立て偏に女犯をいましめたり兼好はそのたぐひにあらず

只風流のうへよりかへりて妻といふ物を定むまじき事なりといへり其ゆへにこそよそながら時々通ひすまんこそなど書るなるべし文◉此段は萬にいみじとも色このまざらんと云段と同意なり人の敎にあらず然れども好色人は此風流をこのめるなりかやうなることとあるにて草紙とはいふなりあやまるべからず全

徒然草諸抄大成巻第十六

目次

〔百九十一〕夜に入てものゝはへなしといふ人いとくちおし萬の物のきらかざり色ふしも夜のみこそめでたけれ

はへ　●榮映光三字ともにはへとよめり俗につやなどいふ事也諺 ●花の夕榮共云野　頭書云▲わかなの上にいとあまり物のはへなき御さまかなと見奉りたまふと書り句 ▲はへと云に二義あり品々をあつめ見る心ならば榮也折はへ色はへなど也又一義は色ことに見事に見ゆるなと云時は光映の字を用ゆる也全

はへなしといふ人　●夜に入てはへなしと云人があるは口おしきいひぶんぞと問をもふけて扨夜のよきことをおくへいひつゞけたり盤

きらかざり　●物のうつくしきことをいふ也盤

色ふし　●ものゝいろ歌のふしなど也文 ●色だてなり全 ●其一曲ある所なり盤

めで　●愛の字前に委

〔第一節〕●夜に入てと云よりめでたけれまでなり此段三節に分つ文段抄に異なり●此節は一段の大綱なりすべて萬の物大かた夜のみことをいへり次の節に其よき子細をいふなり山案 ●兼好の風儀すべてこゝにあり春は家を立さらでも月の夜はねやのうちながらもなどいへるも皆此心に同じかるべし文

晝はことそぎをよすけたる姿にてもありなん夜はきらゝかに花やかなるさうぞくいとよし人のけしきも夜のほかげぞよきはよく物いひたる聲もくらくてきゝたる用意ある心にくしにほひものゝ音もたゞ夜ぞひときはめでたき

ことそき　●省の字なり略してつくろはぬ心也文 ●そぐは殺の字又除の字を書省畧の義なり句　頭書云▲枕草紙口惜物の條に田舍だちことそぎてとあり句

をよすけ　●助及と書おとなしき姿を云諸　頭書云▲桐壺の巻にをよすけをはする源語類聚に日本紀を引て助及と書り壽 ▲おとなしき事也此心はをとなしきとはものゝ公道なる心なればはなやかならぬを云なるべし鐵増 ▲又源氏の舊抄に皆成人の心地と注せり爰にては大さはやかにしてつくろはぬ義ならんか句

きらゝか　●玓瓅の字を文選にてよめり前にくはし美麗なること也

さうぞく　●裝束なり文

ほかげ　●火の影なり呼

よく　●つねによきが上に今一きはよきとなり句

用意　●くらければいふ詞に前後氣遣してつゝしめるとの心也諺

〔第二節〕●晝はことそぎと云よりひときはめでたきまでなり●此節は上の節をうけて晝より夜陰に至てはひときはよく見ゆることをいへり諺に夜目遠目といふ類なり山案

さしてことなる事なき夜うち更てまいれる人のきよげなるさましたるいとよしわかきどち心とゞめて見る人は時をもわかぬものなればことにうちとけぬべき折節ぞけはれなくひきつくろはまほしきよき男の日暮てゆするし女も夜ふくるほどにすべりつゝ鏡とりて顏などつくろひ出るこそおかしけれ

さしてことなることなき夜　●節會公事などの夜はつくろひてまうのぼるはたれもある事なるがさなきときつくろひてまいるがよしと也人の心をつけぬ時に心をつけよとなり盤

わかきどち　●若き友同志なるべし文

心とゝめて見る人は　●としわかき人のまじはりは互に容貌のたしなみに心を留て見る物なれば晝夜のわかちは有まじきと也句　●朝夕まじはる朋友の中にても物に氣をつくる人あるにはさしてたしなまでもあるべき折ふし一入つくろひて見えまほしきとなり文

時をもわかぬ　●晝夜のときをもなり　頭書云▲伊勢物語の歌に「わがたのむ君がためにと折花は時しもわかぬものにぞありける句

とけぬ　●夜の事をいふ也諺

けはれなく　●褻晴けはなれたる義なりはれは法禮の義なり又私公とも書べし常にきる物をけごろもといひ朝服禮服をはれぎぬといふなり野

ゆするし　●ゆあみし髮あらひなどする也文　頭書云▲東屋の卷にゆするのなごりにやとあるを河海に沐の字を書り沐浴するをいふなり壽

すべり　●奧に入る也今も御前より女の局へおるるをすべるといふ也野　頭書云▲枕草紙すさまじ

き物の條にやう〳〵一人二人づゝすべり出ぬとかきたり句
つくろひ ●今も少年の風呂あがり女の曉粧人の目たつもの也野

〔第三節〕●さしてと云より終までなり●此節は男女ともに夜陰にいたりては一入容貌をたしなむべきと也山案

〔一段之統論〕●此段は人の身たしなみを教たり夜陰など人も見ぬ折ふしをわざと心とゞめて嗜むべしとなり文●上の段に男女のうへを論じ末にあからさまに來てとまりたるはめづらしかりぬべしと書るにうけて又此段には晝よりも夜景のまさりたる事を書出し末に男女のうはさにいひ及せり上の段は世の人の妻室をさだむるのみよをしと心得たるをよそながら通ひたる色情すぐれぬる道理をあらはし此段には世の人の萬に付晝ならでは物のはへなしと思へるを夜風流まさる事を述たり兩風ともに皆人に心上の知見を具せしむるなるべし句●此段も前段に同じ艶色の心はへある人はかやうなる風俗也これを褒たるにもあらず貶たるにあらす兼好このみたまふにもあらず只ある事をかきうつせるのみ也然ども面白き風義也全●晝はたれも耻を思ふ故たしなむ心あり此段を見ざらん人よるは油斷して人にあざけられん事必定也尤ありがたきをしへにこそ侍れ古語に曰莫レ見ニ乎隱一莫レ顯ニ乎微一出たらのみにかぎるべからず貞

〔百九十二〕神佛にも人のまふでぬ日夜まいりたるよし

〔一段之統論〕●此段は前段のあまり也野●此段にもと云字に心をかけて見るべし壽●此段にもの字きびしく前段をうけたる言葉なり又前段と此段と一段に書つゞけたる本もあり句●上の段に夜がよしといひたるゆへに人事のみならず神佛の事も夜よしとなり人のまふでぬしづかなる日それも夜がよしとなり文法のこまやかなること心をつくべし盤●此一段は兼好のしづかなるかたを好める心よりしてかき給へり散亂不信の人の寺社參詣はよろづの見物にことよせてするわざなれば人のまうでぬ日しかも夜まいるは心もきよく信もあらはれぬべしとの教なるべし全●山案或説に此段是非神佛

へは夜がよきと云にはあらず人のまうでぬ時參詣いたすべきと也前の段に夜の事をいへるをうけて書るのみなり其上夜は人のまうでぬ時なればなりたとへ夜とても人の群集する時は參詣いたすまじき事なりといへり是此段の餘意なるにや又一說に此所の文意を味ふに二つに見るへきなり其意は人の詣ぬ日と又は夜まいりたるがよきといふなりもし夜ばかりと見るときは人のまふでぬ日の夜まいりたるよしと云心にて日の字の下にのゝ字を入てみねば聞へぬなり此說一理あるといへども鑿(イリホガ)也只兼好志は上卷にもいへる寺社なんどに忍びてこもりたるもをかしと同じかるべきなり

〔百九十三〕くらき人の人をはかりて其智をしれりと思はん更にあたるべからず

くらき人　●愚闇の人をいふ壽

人をはかりて　●人の智を推量して諸

更にあたるべからず　頭書云▲莊子曰小知不レ及二大智一又曰大知閑々小知間々注閑々間々言二知量大小不一レ同也野

〔第一節〕●くらき人と云よりあたるべからずまでなり此段三節に分つ文段抄とはことゝ也●此節は一段の大綱なりされば我智惠の及ぬことをはからふべからずと也たとひはからひてもあたるべからず漢書に以レ管窺レ天以レ蠡測レ海以レ莛撞レ鐘などゝいへるも皆わつかなる智を以て大智をはからんとするのたとへなり又尚書大禹謨曰皐陶曰都(アヽ)在レ知レ人在レ安レ民禹曰吁咸若レ時惟帝其難レ之又史記范睢傳云人固未レ易レ知知レ人亦未レ易などゝ聖賢もいへり況其餘の愚不肖の輩に於て人をはかるべきことなかなか及ぶべからす山案

つたなき人の碁うつ事ばかりにさとくたくみなるはかしこき人の此藝にをろかなるを見てをのれが智にをよばすと定て萬の道の工我道を人のしらざるを見ておのれすぐれたりと思はん事大なる誤なるべし文字の法師暗證の禪師たがひにはかりてをのれにしかずと思へる共にあたらず

つたなき　●是より右の譬なり諺

碁うつ事ばかり　●前にくはし

此藝にをろかなる　●胡且か詞なと思ひ合すべし

頭書云▲山井案するに事類全書前集四十二三歸田

錄胡旦曰以レ棋爲レ易則聰明者或不レ能以爲レ難則愚
下小人往々精絕

をのれが智にをよばずと定て　●爰にて句切るべし文　頭書云▲賈生服鳥賦小知自私兮賤レ彼貴レ我野

萬の道の工　●百工なり野

をのれすぐれたりと思はん事　●前の詞の己が智に及ばずと定てといふ句をも爰にて一つに結びたる詞なり碁うつ人も百工もわが藝をしらぬ人をなべて我智にをよはずと定て己すぐれて智ありと思はんは大なるあやまりぞとなり文　頭書云▲尙書五子之歌予視二天下愚夫愚婦一一能勝レ予野

文字の法師暗證の禪師　●文字の法師は敎相をならふて坐禪をしらぬなり暗證の禪師は坐禪工夫を專として敎相にくらきなり止觀第五暗證禪師誦文法師とある是なり野　頭書云▲弘決一曰縱文字法師有二千群萬衆一難二汝智辨一不レ可レ盡此語天台大師講二大品經一時南岳大師印可之言也　又天台大師和贊に文字の法師は百千萬力をあはせてたづぬれど辨才海はつきもせず說法尤も第一なりとなり敎相にも坐禪にも共にくらからぬを禪敎共履とも宗敎俱通なども云て禪家には褒美する又竹窓隨筆に禪佛相爭の說尤も此理を論ずる也されば止觀の第七に鄴洛禪師などの暗證にして一生何の利益もなくむなしく過す事を破し玉へり▲儒者にも誦文暗證あり漢唐訓詁の儒は誦文なり江西人學者は暗證なり訓詁にかゝはるものは支離影響の弊あり頓悟に走るものは虛遠詖淫の病あり故に尊德性道問學此二のものかくまじき也學て思ひ思ひて學ふ時は必罔殆なしと云ことを知べし野▲從義云暗證禪師者多二增上慢一文字法師者多推二上位一云々盤

たかひにはかりて　●互に推量してなり壽

共に　●兩方ともになり諺

あたらず　●我しらさる事なれば皆推量の外也諺

〔第二節〕●つたなき人と云よりともにあたらずと云までなり但し文段には誤なるべしと云までを第二節となし文字法師と云より次の節になしたり今案するに此節の意は何にても我得たる一事を人の得ざるを見て身を慢ずる事をいましめたりされば文字の法師暗證の禪師も其得し我一道に慢じて互

にはかりそしれる事をいふなれば今つゞけて一節となして文段にしたかはず山案

をのれが境界にあらざる物をばあらそふべがらず是非すべからず

是非　●是とほめ非とそしるべからず文

〔第三節〕●をのれが境界と云より終までなり●山案此節は上の兩節を結て何事にても己が境界にあらざる事をばあらそひ是非すまじきことをいへりたとひ我知り得たる事にても其家にあらぬ道は語るまじき事なるにまして我しらぬ事をばゆめ〳〵誹謗すべからずとなり其位にあらずしては其政を謀らすと文宣王ものたまへり此節良に殊勝なり尤一章の骨子なるべし

〔一段之統論〕●此段は世間我人ともに得し事と得ざる事とあるものなればたとひ我得し道と人得ざればとて我にをとれりと思ふべからずとの敎なり其用心は我智の及ぬ所をはからひ我境界にあらざるものをあらそひ是非すべからずとなり増參

〔百九十四〕達人の人をみる眼は少しもあやまる所あるべからず

達人　●明達の人を云諸　頭書云▲賈誼鵩鳥賦通人大觀兮物無レ不レ可註通一作レ達壽　▲文選卷二十孫子荊詩曰達人垂二大觀一呂延濟註ニ謝靈運詩一曰達人賢達之人修

人を見る眼　頭書云▲眼にあまたの品在なり父母所生の男を肉眼とし内外の彌樓山を見を天眼とし諸色を見て染着なきを惠眼とし眼根淸淨にして色を見あやまつ事なきを法眼とし一眼に諸眼の用を具するを佛眼とすと法華玄義にあり壽

〔第一節〕●達人と云よりあるべからずまでなり此段三節に分つ也文段もをなじ●此節は前のくらき人の人をはかるはあたるべからずといふをうけて明達の人は其さま〳〵の人の生得たる本性を詞にても顏にてもよく勘破了すべき事をいへり文●山案此節は一段の大綱を擧て達人の人を見る所には少しもあやまる事なきほどにゆめ〳〵惡事を思ふまじきとの敎なりされば大學誠意之章小人閒居爲不善一無レ所レ不レ至見二君子一而後厭然揜二其不善一而著二其善一人之視レ己如レ見二其肺肝一然則何益矣▲又論語爲政編子曰視二其所一レ以觀二其所一レ由察二其所一レ安

人焉廋哉人焉廋哉▲又孟子離婁上編孟子曰存ニ乎人ニ者莫レ良ニ於眸子ニ眸子不レ能レ掩ニ其悪ニ胸中正則眸子瞭焉胸中不レ正則眸子眊聴ニ其言ニ観ニ其眸子ニ人焉廋哉

たとへば或人の世に虚言をかまへ出して人をはかる事あらんに「すなほにまことゝ思ひていふまゝにはからるゝ人あり「あまりにふかく信をおこしてなをわづらはしく虚言を心得そふる人有「又何としも思はで心をつけぬ人あり「又いさゝか覚束なくおぼえてたのむにもあらずたのまずもあらで案じゐたる人あり又まことしくは覚えねども人のいふ事なればさもあらんとてやみぬる人もあり又さま〲に推し心得たるよしゝてかしこげにうちうなづきほゝえみてゐたれどつや〲しらぬ人あり「又推し出してあはれさるめりと思ひながらなをあやまりもこそあれとあやしむ人あり「又ことなるやうもなかりけると手をうつてわらふ人あり「又心得たれどもしれり共いはず覚束なからぬはとかくの事なくしらぬ人とおなじやうにて過る人あり「又此虚言の本意をはじめより心得て少しもあざむかずかまへ出したる人と同し心になりて力をあはする人あり愚者の中の戯だにしりたる人の前にては此さま〲のえたる所詞にても顔にてもかくれなくしられぬべしましてあきらかならん人のまどへるわれらを見んこと掌の上の物見んがごとし

世に虚言　●世には助語也前にも在文

かまへ出して　●設たくみ出したる也全

人をはかる事　●人の智恵をはからひ見る事也文

すなほに　●正直也壽

いふまゝにはからるゝ　●人のいふまゝに也句

頭書云▲校人魚を烹食ていつはりて池に放といへば子産まことゝ思ふ類なり是は道理のある所なれば智者もあざむかるゝ事あるべし愚者は道理なき事をもまことゝ思ひて信ずるものあり野

はからるゝ人あり　●これひとつのたとへなり達人が虚言のみをよく勘破する物にはあらねども其うちに空ごとは人のかまへてはかり出す物なれば有様の事よりはしりがたし其しな〲をたによく見分ぬる物なればよの常の事は猶以はづかしき義なり増鐵

ふかく信をおこして ●右のはかり出せるそらごとを也諺
虚言を心得そふる ●おろかなるものゝ佛神の奇瑞をいへばいよ／＼とりそへて雪の上に加レ霜ごとし野　頭書云▲一犬吠レ形萬犬吠レ聲一犬傳レ虚萬犬傳レ實野
心をつけぬ ●馬耳の東風なるべし野 ●至て愚なる人也諺
又いさゝか ●少と同し諺
覺束なく ●不審におぼえてなり諸
又いさゝか覺束なく　頭書云▲狐の氷をきくがことし疑而未レ決之人也野
たのむにもあらず ●誠ともたのまず文
たのまずもあらで ●僞とも思はずして也文
案じゐたる人 ●是は狐疑の心とてうたがひ有人なり參
さもあらんとてやみぬる人もあり ●心にはうけねども先面ばかりはむかふの人にしたがひてなり諺　頭書云▲以レ誤襲レ誤唐風采苓の詩をよまんものこのいましめをしるべし野

ほゝゑみて ●微笑する也合點したる躰なり參 ●粗笑と書說
つや／＼ ●一切と書諺上に見えたり
しらぬ人あり　頭書云▲不レ知レ之爲レ知レ之これ論篤而色莊者にちかし野
推し出して ●是はいつはりを云と推し出して也文
あはれ ●此あはれは天晴の義也句
さるめり　さもあるらんといへる義なり句
あやしむ人あり ●我智をはからふぞと思ひながら猜又我推量のたがひもやせんとあやしみひかへたる也文　頭書云▲狗の先立往て又たちかへり人にしたがふを猶豫といふ其心定れる所なし野
なかりけると ●常にかはりたる事もなきものをと思ふなり諺
手をうつてわらふ ●これ虚言といふ事もしらず人をはかるといふ事もしらず只虚言のうへを笑のみ也全　頭書云▲韻瑞古詩曰以レ鐵作ニ門限一鬼拍レ手而笑野
心得たれども ●虚言と心得たれ共句

しれり共　●偽る事をしれりともいはず也諺

覺束なからぬは　●是はたしかに偽とおぼつかなからずしる上はなり諺

とかくの事なく　●今日本の世話の兎も角もと云は兎は有の義角は無の義なれば有無にと云心也前にくはし參　●爰にて虚實をたゞしてこばみあらそはぬ事也諸

しらぬ人と　●是は人をはからんための虚言也とよくしりたる故に却て知らぬ人なみになりてゐるなり増鐵

虚言の本意を　●此人はおぼつかなからぬ人より一重上の其虚言の本意迄をよくしりたる也増縁

力をあはする人あり　●是は偽りをかまへ出したる者と同心してともに語りなしまこと也などゝ證據にたつやうの事也是迄九品なり全　頭書云▲張儀が楚に入て鄭袖と謀を通ずるがごとし野

愚者の中の　●是より上件の事を結て論ぜり諸

しりたる人の前にて　●其虚言をいふ根をしりたる人の前にてはなり諺

さまざまのえたる所　●上のことくにはからるゝ人心得そふる人心をつけぬ人なとのさまざまの生れ得たる本性詞にても顏色目の中にてもよくしられんとなり文

まして　●上をうけたる詞也訖　●愚者の戲たにも人の本性は見ゆるものなるにまして也文

あきらか　●前にいふ賢達の人をさす也諺

掌の上の物を見んがごとし　●手のうへの物を見るがごとく見易からんと也文　頭書云▲中庸曰治㆑國其如㆑示㆓諸掌㆒乎論語にもあり▲浄名經に天眼第一の阿那律三千世界を見る事掌上の菴摩果をみるがごとしとあり野　▲雲棲梵網發隱曰佛云觀㆓大千世界㆒如㆑視㆓手掌㆒儒云如㆘視㆓諸 斯㆒指㆗其掌㆖皆明顯易㆑見意也參

〔第二節〕●たとへばと云より見んがごとしまで也　●此節は人にさまざまの本性ありそれぞれに顏にも詞にも見ゆる事をいへり文　●此發語にいひ出したる達人を又こゝにて結句にあきらかならん人といへる首尾是も中庸の天命よりはじめて上天のことにてをはれりし筆法一章の仕立心を付べし參

但かやうのおしはかりにて佛法までをなすらへいふ

べきにはあらず
はかり ◉即推量の字也句
佛法までをなずらへ ◉彼虛言をかまへて人をはかるに如レ此品々ある事佛の事の方便說を衆生の所レ受不同なるに似たれば若邪見の人佛の慈悲方便をもたゝかくのごとく皆虛言にて人をはかるわざぞとおもふべき事をいましめて是は愚者の中のたはふれをたとへにいふにこそあれ佛法はまた各別ぞとのことはりなり文

[第三節]◉但かやうと云より以下なり◉爰の兩句は佛法に方便をたつる所あるによりて今兼好の言葉を殘していへるなるべし佛の方便といふ事は愚なる凡夫にいひきかせ眞の道に引入れん手だてなりしかるを小智の者眞實の所をは聞いれずして佛の方便を惡口する敎誡のためなり此處は法華方便品唯佛與佛乃能究盡の心にて見るべし又羅浮子曰凡人の言に眞僞あり僞をまことゝするは愚なれども智者はまれなれば多はあざむきたらさるゝなり明君は浸潤膚受の行れぬやうにするを本とす兼好は佛法までをなぞらへ云べからずといへども我道より見れば彼元來虛妄なり莊老は群愚を籠にぜり台家に種々說法といひ二十八品皆名方便といひ禪家には小玉を呼の手段なりと云いかんぞ自いつはりて人を眞實の道に引いれんや句◉山案此羅山子野槌抄の說一理ありといへども是儒者の一見のみなり三敎一致と見られし兼好眼より見るときは老子の虛無は自然の道にとゞまり釋氏の寂滅は實相の妙を具し儒者の無極は大極の理をはなれずともに萬人を道に誘引すべきためなれば虛妄則實理なり其上佛道の方便說是儒道の權道にあらずや又いかんぞ自いつはりて人を眞實の道に引いれんやといへる事も不審なりされば孔子の語に二三子我道にをいて少しもかくす事なしと宣ひながら性と天道の事をばみだりに說たまはず且子路鬼神の事を問し時も答へ玉はずこれ孔子の道をかくし玉ふに似たれば上の語はこれ妄言なりとせんやしかるには非ず門弟の心の未熟なるによつてなり道は人の器量に應して敎るなり孔門三千の徒同じ道を尋ぬるに孔子の答一々にかはれるを以てしるべし當時天竺魔道盛にして人正道を不レ樂によつて釋尊種

種の方便説をあらはし幻術を行て衆生を道へ引入玉ひしなり何ぞこれをあしきといはんや上の段に文法法師暗證禪師たがひにはかりてをのれにしかずと思へるともにあたらず己が境界にあらざるものをばあらそふべからず是非すべからずといへる心を此結句にていよ〳〵述たり

〔一段之統論〕●此段は上の段發端にくらき人の人をはかるはあたるべからずといふをうけて賢達の人は其さま〴〵の人品を見あきらめて色ざし詞にてもよく視察する事をいへり諸●山案ずるに此段の心は達人の人を見るはかやうなるほどにすこしも惡事をなさずかりにも善道にをもむけとのをしへなりされば達人の人を見る事はあやまりなき事跡まゝ多し略これをいはん金樓子にのせたる孔子かつて山に遊し時のんど渇に及ければ子路を呼て水を取につかはす子路水を取に行し路にて虎に逢て虎とたゝかひて虎の尾をとり來り孔子に問て曰上士の虎をとる事如何子曰虎の頭をとる中士は如何虎の髯をとる下士は如何虎の尾をとるとこたへ玉ふ由はぢて其尾をすつさて孔子を害せんと思ひて石を懐にして又問曰上古の人を殺すこと如何子曰筆を以す中士は如何舌を以す下士は如何をおむね石をふところにすと答へ玉ふ由いよ〳〵はぢて心服す其外あまたあり野槌抄に粗見へたり又栂尾の明惠上人德の尊きにより其比上人信仰の御所方より結縁のために衣裳を營しきせ進られける其折節笠置の解説上人法談のために來り給けり明惠美麗の織物の小袖を服しながら對面ありければ解説思はずげに思召ければ明惠はや其機を合點し玉ひて指にて小袖のくびをさして是が御心にさはり申かと仰られければ解説心つかひ仕損じたると思はれたる體なり此事明惠傳記にくはしされば解説上人ほどの人にても少しの心づかひあしき事は早速に見付られ玉ふ良に明惠上人は明達の人掌の上物を見るがごとくにしり玉ふ事宜なり尤つゝしむべく恐るべし

〔百九十五〕或人久我繩手を通りけるに小袖に大口きたる人木造の地藏を田の中の水にをしひたしてねんごろにあらひけり心得がたく見る程に狩衣の男二三人出來て爰におはしけりとて此人をぐしていにけり

久我内大臣殿にてそおはしける尋常におはしましける時は神妙にやんごとなき人にておはしけり

久我繩手　●山城國鳥羽の西桂川の邊なり諸

大口　●大口袴の事諸　頭書云▲大口袴はおほくちのはかまなりひだを襞積（ヘキテキ）と云なり參▲山井案するに和名抄云大口袴唐令云慶善樂舞四人白系布大口袴和名於保久知乃八賀萬一云表袴▲名目抄云大口生平絹幼年日白長年紅指貫得ニ近日過老ニ着ニ精強大口一▲餝抄云大口紅平絹或紅張但近代不レ用也宿老之人或白張絹云々▲西宮記云袙大口袴表袴中隔ニ上下ニ可レ同レ色不レ得レ交ニ紅茜色一若人可レ用ニ茜色一也裏表ともに紅の平絹を用ゆる也▲又塵添壒囊鈔十一曰大口と云ふ名何なる義ぞくゝりをいれねば口廣き故に大口と云ふ歟其故は主上の御鞠時小口御袴とてめすは御大口にくゝりを入てめすはさうにき云ふにこそ但し清少納言が枕草子には大口は長さよりも口のひろければと云々主上のめさるゝ緋御大口は女房の袴の様に長くうちはへたれば口は長さよりもせばき歟されども御大口とこそ云めれおぼつかなき様なれどもかく云にやと云々

木造の地藏　●木像の地藏の事也說

心得かたく見る程に　●或人の心得がたく見る程に也兼好か見たるといへる抄古今抄諺解の義はあやまりならんか句

狩衣の男　●布衣着たるもの來りてなり說

爰におはしけり　●此人を彼方此方たづねたるさまなり文

いにけり　●つれて歸りたるなり古

久我内大臣　●通基公なり　頭書云▲村上天皇十一代之孫久我通基公者正二位大納言通忠卿息也號ニ愛宕一伏見院正應元年七月任ニ内大臣一同九月爲ニ源氏長者一

村上天皇〔人皇六十二代〕―具平親王〔第六皇子〕―師房――顯房

―雅實――雅定――雅通――通親――通光〔是マテハ〕

―〔上卷百卌六段目ニアリ〕通忠〔正二位大納言右近衛大將〕―通基

神妙にやんごとなき人にておはしけり　●壽命院云此詞にて見れは狂氣と見えたう一說云尋常は神抄とあればとて狂氣とも定めがたし是はよのつね

はかろ〳〵しく加樣の水にて物あらひ給ふやうなる人にてはなく神妙をとなしき人におはしませども地藏の道のはだに土にけかれていますを見給ひて手づからあらはれしは殊勝なる心ばへなりと也此説もさもあらんやうなれど狩衣の男のたつねたる樣體しかと見わけがたければ決定しがたし參

〔一段之統論〕●此段は久我内府の事の物語なり此次に此内府の神妙にやごとなき人にをはして隨身警蹕の事などのたまへるをいはんとてかけるなるべし文●此段は上の段の末句に佛法の事出たるにうけて久我通基公の地藏をあらはしたる物語をしるし才智ありとても賴れずとかく世は不定なることはりをのぶる成べし尋常は神妙にといへば此段の體は氣の違ひたるなり誠に次の段にのせたるを見ればやんごとなき人なり句

〔百九十六〕東大寺の神輿東寺の若宮より歸座の時源氏の公卿まいられけるに此殿大將にてさきをおはれけるを土御門の相國社頭にて警蹕いかゞ侍るべからんと申されければ隨身のふるまひは兵仗の家がしる事に候とばかり答給けりさて後に仰せられけるは此相國北山抄を見て西宮の説をこそしられざりけれ昔屬の惡鬼惡神をおそるゝ故に神社にてはことにさきをおふべき理りありとぞ仰られける

東大寺　●四十五代の御門聖武天皇の御建立也大和にあり釋書廿八卷にくはし參　頭書云▲四ヶの大寺の第一也聖武天皇御願良辨僧正の草創也此本尊は十六丈あり天平十五年十月十五日に近江國信樂京にして創レ之舍那銅像を鑄給ふ文明十六年十月甲賀寺に於て像模を造り十七年八月大和國添上郡奈良城に改め造らる伽藍造營同年八月に事始あつて御子孝謙天皇御宇天平勝寶三年に造畢するまでは首尾七箇年なり同四年四月に供養導師は梵僧婆羅門僧正兜願は行基大僧正講師は隆尊讀師は延福なり元亨釋書にくわし諸

神輿　●東大寺の鎭守八幡大菩薩の神輿也諸　頭書云▲東大寺の鎭守八幡大菩薩は聖武天皇の勅にて行基菩薩于レ時僧正宇佐より觀請申さる一説北畠准后の説なり云孝謙天皇天平勝寶元年八幡太神託宣に依て大和國平郡に神宮を作る東大寺の八幡是也云々文

東寺　●人皇五十代桓武の御宇延曆年中に御草創

なり羅城門の東に立なり其後五十二代嵯峨の天皇の時に弘法にたまはりしなり諸　頭書云▲山案ずるに桓武天皇延暦十五年に羅生門の左右に東西二寺を建給ふ藤大納言伊勢人を以て造寺の長官として草創し給ふ所なり是洛陽鴻臚宮也是は比丘の賓客を令レ館ところなり騰蘭二比丘漢土に來し初明帝鴻臚寺に令レ居故に他國沙門の爲ニ旅館一者なり然を嵯峨聖主弘仁十四年正月十九日以ニ忠仁公一勅使として永く弘法大師に恩賜ありて密場となし玉ひて敎王護國寺と號すべしと勅筆の額を被レ下也

若宮　●是も同じく八幡宮也嵯峨天皇の御宇弘法宇佐より勸請せられし東寺の鎭守也諺　頭書云▲この若宮八幡は嵯峨天皇平城天皇の騷亂の時潜に大師に約諾の子細ありて靜謐の後御建立ある社なり大師こゝに勸請し玉ふに尊體空中に儼然たり渇仰に不レ堪すなはち花牋にうつし留めまいらせ重て木像にきざみ給ふなりこれ則僧形の神體なり大菩薩御出家の事は光仁天皇寶龜八年五月十八日御託宣有て吾明日辰時沙門と成て三皈五戒を受べし今より後永く殺生を斷せむ但爲ニ國家一巨害輩出來らん時非ニ此限一云々仍今尊儀是也と大師御狀記に見へたり盤

歸座　●東大寺の神輿を內裏へ歸る時其間東寺にをく事也諺●季吟云御こし振とて僧徒みやこにうつたへうらみ申事あれば鎭守の神輿をさきだてゝまいるにまづしばらく東寺の若宮もおなじ八幡宮なればそこにをき奉りて其うつたへかなひなどして南都へ歸座し給へる時なるべし奈良のみにあらず山門のみこしぶりの事平家物語に見えたり文

源氏の公卿　●源平藤橘のうちに藤氏は春日明神の御すへにて臣下の末也のこり三は皇子の姓を給りて臣下になり給ふなり源氏はことに八まんの氏子也さるによりて源氏の公卿御ともなり公卿とは三位以上をいふなり三公卿大夫と云心也盤●久我土御門などは具平親王の御子源師房の御末の源氏なる故供奉し給へるにや文

大將にて　●上の久我內大臣通基公其比いまだ內大臣にはあらで大將にて有しとなり諸

さきをおはれ　●河海には隱聲と書り又喝道前呵

警蹕などの字等もさき聲也隨身の役也大將のつれたる隨身にさきをはせられたるなり壽 ●問或說盤の說也に隨身たる者が さきをおふ事 也大將神を尊てみづからをひ給ふといふ如何季吟答此說大に非也只壽抄の義によるべし文

土御門の相國 ●從一位太政大臣定實公也久我の庶流也 頭書云▲具平親王九代之孫正二位權大納言顯定卿之男從一位太政大臣定實公也句

通親 コレマデハ前ノ段ニクワシクアリ 定通 內大臣 顯定——定實

社頭 ●頭はほとりの義也句

警蹕 ●右に記す先を拂事也彥 頭書云▲文選劉良注曰出入曰二警蹕一參 ▲前漢書列傳十七梁孝王得レ賜二天子旌旗一從二千乘萬騎一出稱レ警入言レ蹕注 師古曰警者戒肅也蹕止二行人一也言二出入一者互レ文耳出亦有レ蹕漢儀註皇帝輦動左右侍二帷幄一者稱レ警出レ殿則傳レ蹕止レ人淸レ道也▲韻會曰蹕 本作レ蹕壽 ▲江談曰警蹕者文選曰出警入蹕是天子近邊事歟近衞司誡二諸人一之義也文

隨身のふるまひ ●隨身の作法はとの心也通基公の答也文

兵仗 ●官に文官武官の二つあり大將は武官のつかさなれば兵仗の家と申給ふ也文 ●兵仗の事前に委し 頭書云▲字彙曰仗去聲直亮切唐制殿下兵衞曰レ仗文

仰せられけるは ●通基仰られける也相國に對してはけやけく證據いだしてこたへず言葉ずくなにの給ひてさて其後にそのことはりをの給ひし事神妙にやごとなきわざなるべし文

此相國 ●定實を指

北山抄 ●公任卿の作也異本に小野 ●西宮左大臣高明公作也壽 ●抄とあり小野宮の抄といふもあればなりこゝは北山抄佳キ也壽 ●此相國の社頭にての警蹕を不審し給ふ心は北山抄のおもむきのよし也北山抄に御禊神事の間は警蹕せざる趣を所々にのせたり加樣の心にてかく宣へるなるべし文 頭書云▲北山抄卷第五大嘗會御禊の所にいはく行幸儀式如レ常無二警蹕一鈴奏等一到二河原頓宮一上下略 其次又曰御禊畢大炊寮散米又御膳幄於二御禊幄一駕二御輿一間初稱二警蹕一云々しかれは御禊神事の間は警蹕せざる事しられ侍り文

眷屬の惡鬼　●諸神に眷屬の鬼神あり其中に惡神の人をなやますもあるをおそるゝ故よと也文　頭書云▲元々集に事代主神八萬四千鬼類大神將也とあり又祇園緣起に牛頭天皇眷屬有ニ八萬四千六百五十四神一といへり文▲釋書北野天神傳曰我十六萬八千諸眷屬暴惡鬼神等隨レ處與レ災我尙難レ禁參

さきをふべき理　●西宮の說にありと也彼神泉苑の變化のものゝ事なるべし文　頭書云▲河海云昔は內々のありきにもさきをおひけりと云々用心のためなり變化の物もさき聲にをそるゝといへり西宮左大臣神泉苑の艮角にて變化の物にあはれけるにもさき聲する時はひき入けるとあり野▲心經の宗泐如記の注を見れば鬼神王の名を咒といふこれをとなふれば其部類の鬼神をそれをなすといふ事あるにてしるべし參

〔一段之統論〕●此段は上の段の結句をうけて內大臣殿の社頭にてさきをおはせられたる事を載て常はやんごとなかりし證文とし偖一切の人に此故實をしらしめんため且は又人は只博學を貴ぶべし百をしりたりとも一をあらそふまじき敎戒にもそなふるなるべし句　●山案此段は上の段を受て內大臣殿の能故實をわきまへられし事を書のせことには相國殿に向ひてするどに答へ玉はず後に其故實をのべられし事尤殊勝也人の心をやぶらず又我あやまりのなきところをものたまへり是上卷に常盤井相國實氏公の勅書を持し北面をまのあたりとがめずして後にはなたれしと中宮の御湯殿の上に雁のかゝりたるをも歸り玉ひて後に御文にてをほせつかはされし心づかひなどゝ同じきなり

〔百九十七〕諸寺の僧のみにもあらず定額の女嬬といふ事延喜式に見えたりすべて數さだまりたる公人の通號にこそ

定額　●額の字を小學の注に數也とあればかずをさだむると云事也諺　●此數をさだむるに二つの義有べし一は諸國に私に新地の寺院を取立る事を禁制なき時は年を經ては爰もかしこも寺のみにして政道の妨となるゆへなり是弘仁文の義なり又僧正以下の從僧の數を定めらるゝはひとつは其禮法を周備せしめんためもあるべし鐵增　●むかしは定額の寺とて諸國の寺の數をも定めおかれ又其寺々に僧

都などありて其下に僧いくたりと數をさだめられて其僧或は死し或は還俗しなど其數減ずれば玄番寮に申ておほやけの度緣を給はりて其うせたる僧の數を足す事也是を定額の僧といふにや文 ◉沙門は蠶をかはずしてあたゝかにはだへをかくし田をたがへさずしてゆたかに食するものなればとて和漢ともに時代によりて僧徒天下に幾人といふ數をさためらるゝにもろこしには其僧のはじめて得度する時天子よりたまはるふだを度牒と申也此ふだを失なひぬればながく僧徒のかずにゐりがたし護法論に皇恩度牒といへるこれなり參 ◉此所の意は定額といふ事は寺院僧侶のみの事にて其外には是なきと人思ひしゆへに禁中の女孺にも定額といふ事あるなりとしらせたり今城中へ入日用等何人と數を定めて中へ入ものゝ腰に札を付さる類なるべし諺 此外の說はあらまし　頭書云 ▲宋の時進士の數を書付たるを解額を鎸と小程の言葉にあるを晦菴小學に引りそれを陳選が解猶レ貢也額猶レ數也とあるも爰に同義ならんか句 ▲弘仁文曰太政官府禁ニ斷京職畿內諸國私作ニ伽藍一事右奉レ勅定額諸寺其數有レ限私營作先既立レ制此來所司寛縱曾不ニ糺察一如經ニ年代一無ニ地不一レ寺寺 ▲延喜式玄蕃式云凡僧正從僧五人沙彌四人童子八人大少僧都各從僧四人沙彌三人童子六人律師各從僧三人沙彌二人童子四人威儀師各從僧一人沙彌一人童子二人從儀師各沙彌一人童子二人云々 ▲本朝文粹五云請レ被下以ニ施無畏寺一爲中定額寺上狀前中書王諫寺ニ舊例一臣下道場多爲ニ定額一者有伏願陛下鴻慈特降ニ龍渙一准ニ之前例ニ列ニ之定額一略文上下 ▲續日本紀文武天皇大寶元年八月皇親年滿者不レ論ニ官不一皆入ニ賜レ祿之額一 ▲十八史略第七元以ニ耶律楚材言一始定ニ天下賦稅一上田每レ畝稅三升中田二升半下田二升水田一畝五升商稅三十分之一五戶出ニ絲一斤一以給ニ諸王功臣湯沐之賜一鹽每ニ銀一兩四十斤永爲ニ定額一みな數のさだまりたるを定額といふなり唐志に出たり野 ▲又說に額の字名額とてゆるしを書たるふだを給はる心にもかよふべきか張商英集佛祖統紀等にも院額科敷といひ功德墳寺自造レ屋置レ田止賜ニ名額一などゝいへるは寺院にゆるしの額などを賜はる事と見えたり參 ▲昔七十二大寺へ額を賜りて門にかけさせら

おけるなり故に七十二大寺を定額の御寺と云又各山號もあれどすべて定額山と云今信濃善光寺を定額山と云も其故なり其七十二大寺には僧數もさはまりありけるゆへに定額の僧ともいふなるべし説此の外の説は略す

女孺　●内侍藏司書司等の女官の下に女孺いくたりと數を定て掃除指油などの役をせさするものなり内侍の下に女孺一百人藏司の下に女儒十人書司の下に女孺十人藥司の下に女孺四人兵司に女孺六人闈司に女孺十人殿司女孺六人掃司女孺十人なと後宮職員令にもありこれを定額の女孺といふなるべし近代は女孺さやうに多からず文　頭書云▲禁秘抄云近代不レ著レ衣只小袖唐衣也以二左道姿一御調度擱レ手上下格子奉仕是藏人等如在不當故也御所中掃除指油役女孺可レ知也野

延喜式　●五十卷あり延長年中に右大臣忠平勅を奉て博士共をあつめて是を撰ず壽

すべて　●是より定額の事釋するなり説

さだまりたる　●定額といふは公義の人の數定りたるをなべていふ名目そとのこゝろなり諸

〔一段之統論〕●此段は上の段に社頭にて警蹕すべき子細をいへるによりてこれより九段めまでは皆段々相うけて物の故實來歷をのせて人の知見をひろむる例の兼好の慈仁の心にて侍る句

〔百九十八〕揚名介にかぎらず揚名目(サクワン)といふものもあり政事要略にあり

揚名介　●源氏物語三ヶの大事の其一つなり名ばかり國の介になりたるもの也壽　●揚名介とは名ばかり加賀介になりて加賀國の支配をばせぬ也近代の受領は大形揚名の官也説　頭書云▲源氏夕顏卷に揚名の介なる人の家になん侍りけるとあり句▲此外葵の巻に三つがひとつ榊の巻にとのゐものゝ袋とあるを源氏三ヶの大事と云也新續古今雜中云源氏物語の揚名介の事を忠守朝臣に尋侍るとて藤原雅朝朝臣「傳へをく跡にもまよふ夕貞の宿のあるじのしるべともかな丹波忠守朝臣「心あてにそれかとばかり傳へきてぬしさだまらぬ夕顏のはなとよめりむかしよりなべて人しらざりし事と見へたり文▲山井案ずるに揚名介の事は本源氏物語の大事にして此つれ〲草にては深くもとめ知るべ

き事にあらず此所の本意は世間に揚名介といふ事ばかり聞ふれ其外に揚名目ある事をしる人まれなれば介より外に目もあると云事を教へたるばかりなりされば此書に秘事と云ことは少しもなきなりしかるに近代白うるり布のもかう放免のつけものの事を三箇の大事なりなどゝ云は大きなる避事也兼好の本意にてはあるまじき也揚名介の事は此所に不入義ながらあらあら書しるすべし源語秘訣曰清愼公紀曰康保四年七月二十二日宰相中將來言雜事次言主上追日本病發給之由右兵衛佐佐理曰高聲歌給田中井戸或法用云々左衛門督又來曰今日候殿上渡邊殿放歌御聲甚高其歌者子奈良波云々近衛官人皆承御聲頗以不便明日可有除目々々如此間何被行公事乎云々往代聞武猛暴惡之主未聞狂亂之君如此之間外戚不善輩競成昇進之座左衛門督曰藤納言望大納言云々入夜之後右少將爲光朝臣來曰明日除目一昨右大將與藤納言議定畢之由傳承云々揚名關白早可被停止之者也今案冷泉天皇は民部卿元方が怨靈によて狂亂にをはしましける時外戚の人々（九條殿一族也）官位昇進等の事を議定せしかば小野宮殿このとき關白にありながら見處し給し故に述懷して揚名關白早くやめらるべしと記せられ侍る李部王記曰天暦四年九月五日一分除目今一勞書生讓件揚名書生云々今案揚名の二字諸國介にかぎらるべからず故に揚名關白と清愼公はの玉へり揚名はたゞ名ばかりといふこゝろなりたとへば其官になりたれども職掌もなく得分もなきを云り或抄に揚名介は不給職符と見へたり官符を給る程にては國へくだりて吏務をしるべき故なり寛弘二年除目藤原維光望揚名介申文にて常陸權介に任せらる云々委しくは秘訣鈔を考ふべし全文をば事ながき故に不載略してこゝに記すなり

揚名目　●受領に諸國の守介掾目の三つのしなあり職原に見えたり（野）

政事要略　●政事要略には諸國の揚名椽目とあり（文）●百三十卷あり惟宗允亮撰公務交替糺彈雜事至要臨時雜事等をしるす（壽）

〔一段之統論〕●此段も前段の諸寺の僧のみにかぎらず女孺にも定額といふ事ありとしらしめたると

同じ心にて揚名介のみにかぎらず揚名目もあるといふ事をしらせたるなり増鐵

〔百九十九〕横川の行宣法師が申侍しは唐土は呂の國なり律の音なし和國は單律の國にて呂の音なしと申き

横川　㊟近江國坂本の邊に有諺

行宣法印　㊟坂本の北にあふぎといふ所に居住せし人なり諸　頭書云▲井蛙抄六に辨内侍は信實の女子老の後尼になりて坂本の北にあふぎと云所にこもり居て侍けり龜山院きこしめして七夕の御會の時に題をつかはされければ七夕の衣に「秋きても露をく袖のせばければ七夕つめに何をかさましとよみて侍りけるをげにこそとあはれがらせをはしましてつねに御とふらひなど侍けるよしあふぎに行宣法印とてふるきもの丶侍しかたり申侍き壽

呂　㊟十二調子の中六呂は陰の音にて和らかなり諺

律の音　㊟六律は陽の聲にて強く上りたるを云諺

單律の國　㊟單律とは單はひとへとよめりひとへに律ばかりにて呂の音なしと也諺㊟この所に評論有　頭書云▲此事について評判有諸抄の趣きあらあら記すべし先増鐵曰日本にては呂は春に用律は秋に用漢土にては律を陽に用ひ春に用ゆ呂を陰に用ひ秋に用ゆと也此説によるときは下に書る注解はかなひかたき也野槌曰韻鏡を說もの梵僧傳ㇾ之華僧續ㇾ之と云によりて西域にはよく音をしり中華には音をしらずしてよく文字をしる是故に悉曇に通ずる者まれ也と云さには非ず五聲十二律八音いづれもよくしらずんは樂を制作しがたし古の聖賢皆一代の禮樂を制して中和の域にいたらずといふ事なり周禮々記其外歷代の史ことく〳〵律呂をしるせりされども樂經秦火にやかれて全書世に傳らず是故に後世の俗儒よくわきまへがたし蔡西山が律呂を議し柯尙迁が黄鐘を論ずる三代の遺音に相叶べきなり律呂は陰陽の音なればたれか陰陽をわけつめんや獨陽不ㇾ生獨陰不ㇾ成陰中に陰陽あり陽中に又陰陽あり冬至子之半大音聲正に稀なるは音聲の源にあらずや律管灰を飛して自然の根本なる事をしる人は中和の氣をうけて生ずる故に人々各中和の音あり或は東西の遠き或は裏表の隔たる

言語の不同ありとも其音あるほとの者いかんぞ律呂陰陽の外ならんやすでに鳥獸の聲をさへ聞知るものむかしはあれば律呂をはなるゝ音有べからず只一槩に此國は律にして彼國は呂なりと云いかゞをぼつかなし六律六呂は一年十二月の數にあつ四時の變あれども元是一氣流行して年をなすいかんぞ律と呂とを分つめんやめぐりて宮をなすと禮記に云へるは是なるべし世の音樂にうときものたまたま沙門の梵音をしるかとをそれ伎者の調子をきしるやとまどふ耳なきものゝごとし野

呂の音なしと申き　●或僧申けるは呂はなへてやはらかなる聲なり律はたちてこはき聲なり唐人の音聲は和にして聞わけがたし日本人の言語は清濁あらはにきつくきこゆる是呂律の不同なりといへり野　●縱淨子云梶井の門跡仰られしは大原の聲明は余所にまされり慈覺大師大原に居て川の流の聲を聞て呂律をわかち定らると書傳たり良忍の融通念佛のこゑも世にかはれりとなん惠空案ずるに此章に音聲の事につきて横川行宣法印がいひし事を證とし野槌に大原の法親王の仰られし事を據とする事は皆天台宗の聲明世にすぐれたる調子なる故にこれをひきて其よりどころとする也慈覺大師の大唐國に渡り給ふ時赤縣に遊びて十師のあひだに周旋してかたはらに此音律の道をつたへ給ふそれより歸朝して智證相應淨藏慈惠源信覺超懷空寛誓良忍と次第相承して大原の聲明となれりしからば横川はもと源信僧都のすみ給ひし所なれば此行宣も聲明の相承を得たる人なるべしされどもひとへに唐は呂の國日本は律の國とばかりはさだめがたき事なるべしこれには猶台家の傳授をうけずばしるべからず參　●此所すみ難し統論のあらまし是を辨ず

〔一段之統論〕●山案此段も上の段と同じ意にてしらぬことをしらせたるなり僧此段に和國は單律の國といへる所は諸抄に難せり略前に記すがごとし或說に曰唐土は世界の中華にして天地の氣も正しく人の音聲も中和の德をそなふ日本は邊土にしてしかも東方陽氣に近し故に單律の國なる事知られたりされども呂律は天地陰陽の音聲なれば何處にても須臾も離るゝ事はあるまじき事也さりながら

輕重清濁は土地によつてかはる事顯然たりたとへは關東關西の者の音聲の異なるを以てしるべし夫人として怒氣あるときは聲あらく出憂氣あるときは聲もかなしみ悅氣あるときは聲もうるはしこれ音聲は氣によつて發する故なり又氣は土地によつてかはるなり中庸に北方南方の强を論し又文選に人は天に率れ土地に繫れる事を辨じたりこれを以て見れば日本人は心偏にして氣剛强なり此故に人の音聲もこはくきこゆるなり是を以ての故に行宣もかくいはれけるならんされば金石絲竹匏土角木は無心のものなれとも人の氣によつて聲もかはる也荷レ簣丈人は孔子の打玉ふ磬の聲を聞て孔子の志をしり玉へり孔子は又琴の音を聞て子夏子貢が仁不仁をしり玉へり無心の木石さへ如レ此況や口より直に發する音聲にをいてをやと云々此說一理あるに似たりされば呂律を細に論する時は野樋にいへるごとくなるべけれどもこゝにては單律の單の字を輕く見べし只日本は律の國唐土は呂の國なると云意に見るべしたとへば火は極陽水は極陰なりこれを單陽單陰ともいふべき也しかれども火の中に陰氣あり水の中に陽氣あり是陽中の陰々中の陽なれども水火の二つをわけて云ふときは陰陽とへだつがごとし呂律の二つをわけて見るときは日本は律唐土は呂なる事右の說にしるすがごとく明なり呂律の中すぐれて多くある音を以て大槩にかくいふなるべし單の字をば絕てなきこゝろに見によりて此所に色々難出來るぞ天地にあらゆる物としてひとつも陰陽をはなれたるものなく又獨陰獨陽のものはこれなきぞしかれども又わけでいふものこれ多きぞ鶴は陽鳥といひ兎は陰獸といふ類なり鶴兎ともに一陰一陽のみならんやこれを以て此所を能々合點すべきなり必々詞を以て心を害すべからず行宣法印も能聲明を調へ音律をしれる人なり兼好又此理をしらずして行宣の事をこゝに書のせらるべきや本呂律と音をわけしも大槩を以てなり呂の中に律あり律の中に呂ありしかるに我偏見にのみまかせて古人を誹謗する事は大なる僻事なり此所には右の外に種々の說あれども皆附會の說にて杜撰をまぬがれがたき故に先しばらくこれを閣くなり如此永々しく辯するといへども是また附會に似

たり後の君子これをたゞせ

〔二百〕呉竹は葉ほそくかは竹は葉ひろし御溝にちかきはかは竹仁壽殿の方によりて植られたるは呉竹なり

呉竹　●昔もろこし呉の國より來る竹なりとかや諺●山案俗に云はちくの事也　頭書云▲山案に和名類聚云簟竹漢語抄云呉竹也和語云久禮大介似レ葦而節茂葉滋者也▲訓蒙圖彙曰淡竹俗云はちく或作レ淡甘竹くれ竹亦同し或云別一種也と云々續古今に俊頼朝臣呉竹のうきふししげく成にけりさのみはよもと思ひしものを續後拾遺に覺助うきふしもしらぬにはあらぬ呉竹の言の葉しげきよにまじるらん

かは竹　●河竹と書は非也本漢の國より來るによりて漢竹と書べしさて漢の字をかはとよむ也銀漢と書てあまのがはとよむ也説●山案今云まだけの事　頭書云▲山案するに尋常の河そひに生る竹をも河竹といへば同じ事なるべけれどもこゝにいへるかは竹はさにはあらず訓蒙圖彙に云苦竹かはたけ今云まだけ或は作レ箽竹根名二竹鞭一今此書にみかはにちかきはかは竹と書るによりて河竹のことなりと云は大きに非なり何んぞや河にちかき竹とて葉のひろくあるべきぞ又今世俗にいふ苦竹はあやまりなり此かは竹の事を諸抄に禁庭の川端にうへられしによりてといへるはよからぬ説なり新續古今に禁庭の竹をよめる雅緣「むかし思ふ心をかはせかは竹の御代にあひぬる身はふりぬとも

御溝　●禁庭の溝也みかうとは讀べからず壽　頭書云▲禁秘抄云御溝近日東庭瀬湲任レ甃流上古或風流樣々也流非二一脈一且古立石等在二縦砌一也文▲唐于祐得二御溝紅葉一題レ詩野

仁壽殿　●禁裏御殿の名なり諸　頭書云▲拾芥云南殿北九間四面壽▲仁壽殿は賀の御祝をなさるゝところなりかく目出度御殿なるゆへに竹をうへ玉ふと也説▲仁壽殿の邊に竹臺あり石清水の臨時祭の試樂の舞人竹臺の下にて竹の枝を折てかさしにさして仁壽殿の下よりすゝみて御前に列りたつといふ事公事根源にありこれくれ竹なり文

〔一段之統論〕●此段も人のあやまり來りしことをしらせたるなり河竹は葉のひろきをいふなり御溝

にちかくうへられたるによつて河竹と云にてなきと教たり説

〔二百一〕退凡下乘の卒都婆外なるは下乘内なるは退凡也

退凡下乘　●凡人を退くる義也そこにある卒都婆をいふ也野　●王の車馬よりおるゝ義也そこにある卒都婆を云野　頭書云△西域記九云如來御世垂五十年多居靈鷲山廣說妙法摩訶陀國頻婆沙羅王爲聞法故興發人徒自山麓至峯岑跨谷淩巖編石爲階廣十餘步長五六里中路有二卒都婆一謂下乘即王至此徒行以進一謂退凡即簡凡人不令同往其山頂壽

卒都婆　●そとばの事前にくはし

外なる　●山の下に有ゆへに外也野

内なる　●山中にあるゆへに内なり

〔一段之統論〕●此段も上の段と同じ意也退凡下乘と云へば退凡卒都婆はさし口にあり下乘卒都婆は奥に有やうに思ふべきによりて是にしるさるゝと見へたり句

〔二百二〕十月をかみ月といひて神事にはゞかるべきよしはしるしたる物なし本文も見えず但當月諸社のまつりなきゆへに此名有か此月萬の神達太神宮へあつまり給ふなんど云說あれども其本說なしさる事ならば伊勢にはことに祭月とすべきに其例もなし十月諸社の行幸其例おほし但おほくは不吉の例なり

かみな月　●是につきて種々說有神無月上無月葉みな月神な月と書樣もあまた有委しく頭書にあり

●あらく一義をこゝにしるすべし先一說神無月とは●十月は極陰の月にて十一月より一陽來復の月なれば陽のなき月といふ事かともいへり壽　●陽の魂をさして神といひ陰の魄を鬼といへば也山井　●又上無月とは●玄旨曰九までは數有て十一と云かずはなき也九を極數とするなり十は一と始めんため也然ば十一といふ數はなきなれば上無月といふ也此子細をしらずして神無月と文字にかきしをみて不審し來れり又例證は十二律の管にて心得べし十の調子を上無（カミム）と云なり此こと兼好しらぬにもあらねども人に尋させん爲なるべしこれにかぎらず小町が事呼子鳥の事など皆爲人の心なる總而萬物の名に理名體名の二つあり此事をしらねばかやう

の義分明ならず傳をばうくべしと云々全先此兩說に隨べし　頭書云▲貞治の此藤澤山乘門由阿が萬葉集の注をして詞林采葉抄と名づくその第六に云一天下の神無月をば出雲國には神在月とも神月とも申なり我朝の諸神まいりあつまりたまふゆへなりその神有の浦に神々來臨の時小童のつくれるごとくなる篠舟波上にうかぶこと數もしらず諸神は彼浦の神在の社にあつまり給ひて大社へまいりたまはず此神在の社は不老山といふ所にたち玉ふ神號佐太大明神と申也是則傳奏の神にてまします大社をば杵春明神と申也別當をば國曹と申也大社は素盞烏尊にてをはします日本國諸神は天照太神をこそ宗廟の神なればば尤尊敬あるべきになにとてこの大社を御祖神としてまいりあがめたまふぞといふ不審ありそれは子細深祕なるなり▲卜部流の神書を說者申けるは素盞烏のかくれましますは冬十月なり是故に十月を素盞烏のつかさとりたまふべきなりと勅しまします故に諸神出雲國へまいりたまふゆへに出雲には神有月と申すとかたりき兼好すでに其家に生れて神道を知べき人なりしかれども

此兩說こゝに沙汰せざる時は本據とするにたらざるか野▲ある神書を見侍しに出雲國秋鹿郡佐陀神社に神在祭といふ事あり是をいかにと云に社說にいはく伊弉並尊の功すでに成就してのち神さり玉ひぬ御子素盞烏命いとけなくをはしましければ妣を慕し玉ふ事をふかくかなしみ給ひて此地に來り玉へりしがこゝにをゐて簸川之上に人を害する蛇ありときこしめしてかちよりゆきてこれを制すそれよりこのかた星霜ひさしくへだゝるといへども毎歲の十月當社と御崎と錦紋小蛇海上にうかひ來りて其しるしをうしなはずことに伊　並尊はもろもろのかみの尊妃たりしかば當月一切の神祇こゝにあつまりて孝行の義を存するなり其神の會集し玉ふを以て神在の名ありといへりこの故に其餘の國には此月を神無月と申なり今神無月の義をいはゞ天下には神無月といひ出雲には神在の月といふ事は十月を陽月といふたぐひなるべし十月陰極の月にして雲州又極陰の地なりといはゆるもろ〳〵の神達かの地にあつまり玉ふと云は陽伏の義なるべし十月を陽月と名付る事は陽なきをうたがふと

爾雅などにもあり十一月は始て一陽來復するゆへに十月は極陰の月なりされども陽月と云陽の果して絶無なるまじき道理なり陽神のなき月と云義にて神無月と名づくるとの義なり世俗十一月に薪木を宮社に燒て火燒と名づくるも陽を迎る義なるべししからば雲州へあつまり給ふとは陽伏のいはれなるべしましてこの月出雲に祭會あるにしられたりとなり參▲鬼神の二字を沙汰するに鬼は陰の魄神は陽の魂十月は極陰の月にて天下に陽なし八卦を見れば西北の角を乾者運と號して九月十月の卦也出雲の國も日本の西北にあたるか加樣の義によつて十月をかみな月と號する說は一理あれば出雲の神幸の說をばとがめず勢州へ諸神あつまり玉ふと云義をとがめてかける段と心得をくべきなり貞▲一說に人は母胎孕十ヶ月にして生る十月にあたる月は母の腹內に人なきゆへに神無月と云り母の腹內も又世界なるゆへなり此生れ出たる處をさして出雲の大社と云とのそれに表して年中の十月をも神無月と云て出雲の大社へ諸神のあつまり給ふやうにいひなせると云人の生を神といひ死を鬼と云へば人をさして神といへる勿論なり又十月坤母にして一陽來復の母也十一月を子に屬するも坤の子なればなり人間產育にことなることなきにや▲又或說に神無月にてはなく神月と書てかみなつきとよむなりかみなのな字はやすめ字にて無の意にてはこれなきぞ例せばさむひなあつなひやゝかなちいさきな大きなの類なりさて十月を神な月と云意は易に陰陽不ㇾ測謂二之神一とありされば十月も陰陽不測の月なり如何となれは十と云は陰數なりしかれども算數にをくときには一十と云てつぶ一つをあぐるぞこれ陽數なり十と云數はまさしく陰數にて其居位を見れば陽數なりこれ故に陰陽不測と云且數は陽數の終りは九陰數の極は八つなり十と云數はなきことと也十と云は十一とよび出すべきために陰陽の二數を疊あげてかりにまふけて十と名付るなり然るときは陰陽不測の數なりこゝを以十月をも陰陽不測の月とするぞさるによつて十月を陽月とも小春とも俗には十月の小六月とも云なりさて神なのなの字をいつの比よりかあやまりて無の字の意かと思ひちがへて書にも筆しける故

諸說出てまがらはしきなりされぱてにはのなの字を無の字の意に云あやまりし事又世に多したとへは曲な人と云へきを曲もなひ人と云せはしなと云べきをせはしなきと云類あげてかぞへがたし說

▲世諺問答曰此月を神無月と申は伊弉冊尊崩し給ふ月なれば申なり又四方の木末ちりすさむ比なりとて葉みな月と申人ありいとおほつかなしまた諸神出雲の大社へ下り給へば申ともいへり一條冬良公の御說文しるしたる　●神事を取おこなはぬといふ事を記し置たる出所本說なしと也諸

當月　●即十月也

太神宮　●其比は十月に諸神伊勢へあつまり給ふとこそ世にいひつらめ今はいせへの沙汰なし出雲へこそ神のまいり給ふと申せいぶかしき事也神無月といふ詞は古歌にもおほくあればなき事にては有まじある事ならば吉田の家の兼好のしられぬ事は有まじきに此段不審なり貞

祭月　●祭禮をおこなふべき月といふ義なり說

但おほく　●拾芥抄云松尾寬和元年十月十四日花山院北野に寬弘元年十月廿一日一條院日吉に延久三年十月廿九日後三條壽

不吉の例　●花山院は御在位わづかに二年にておりゐさせ給ひて御落餝ありし後三條院は此行幸のあくる年すべらせ給ひて又の年崩御なりしかやうの事を不吉の例といふにや文

〔一段之統論〕●此段十月を神無月と云事本說もなし書籍等にも見へずいかなる故ともしれがたし十月諸社へ行幸ありしためしも侍れどそれは不吉の例とぞ世のみだれたる時やむ事を得ずして社參ありとかく十月は神のなき月と心得て神事にはゞかるがよしとなんそれをやぶるはあしゝ兼好すでに神道の家に生れて博學多才にてだにかんがへ出す事あたはず今又道春古今日東の鴻儒さへも分明ならずといへるうへはしれぬとすましたるがつれづれをすますといふものなり新注此神無月の諸說あらまし前にしるすといへどいづれも附會の辨にてひとつも信用しがたきなりしゐて事をもとむべからず

〔二百三〕勅勘の所に靫かくる作法今はたえてしれる人なし主上の御惱大方世中のさはがしき時は五條の

天神に靭をかけらる鞍馬にゆきの明神といふも靭かけられたりける神なり看督長(カドノヲサ)の負たる靭を其家にかけられぬれば人出いらず此事絶て後今の世には封をつくることになりにけり

勅 ●天子の臣下へ命令し給ふを勅といふ也說

頭注云▲山案するに壒嚢抄卷之一曰勅とは主上のおほせごとにかぎりていふ事歟勅の字をとゝのふるとよむ勑の字にかよふ歟帝王の勅によりては萬事とゝのほりて亂るゝ事えざる心にて勑と云歟內裏仙洞の御を勅諚と稱すつぎ〳〵にはさることなし但後漢書文繇云昔孫叔敖勅ニ其子一受レ封必求ニ墝埆之地一と云へりこれを見には私に我子を教ふるを勅すと云へり隨レ分家中にとりても君臣あるべければ勅の字もほと〳〵に准へて云ふべき謂れ也されどもまぎれの便なかるべければ今はいはぬことになりぬと云り今考ふるに字彙云勅恥力切音尺天子制書亦作レ敕俗作レ勅又勑字註云六書正譌俗用爲ニ敕字一譌文字談苑に梁の代の比までは帝王の命令を尙いまだ敕と稱せず唐顯慶中に至て始て云不レ經ニ鳳閣鸞臺一不レ得レ稱レ敕々の名此に定ると也又勑の字下に之郢切與レ整同敕勑音義同じからざれば壒嚢抄の說をぼつかなし又勑とかけるも譌也

勘 ●勘當也諸 ●勅勘とは天子の勅令にそむく事なり壽　頭書云▲增韵勘鞫囚也句

靭 ●さの字すむとにごるとの兩點なり左衞門の官を靭負といふに桐壺の卷にてゆげいの淸濁兩說あり文 ●靭とは矢を入る物也今の空穗のごとくなる物と見えたりたしかにしる人なし諺　頭書云▲箭室一名ニ步叉一▲山谷詩倒レ靭收ニ蓮菂一といふは蓮の實のぬけ出たる穴が矢を入るうつぼに似たり▲日本紀神代上天照太神背負ニ千箭(チノリ)之靭與ニ五百箭之靭一靭は矢籠なり今の平胡簶(ヒラヤナクヒ)の類なり野

今はたえてしれる人なし ●兼好時代にさへ絶てしる人なしまして今の世は云々壽

さはがしき ●時氣疫令などのはやる時なり壽 ●榮死物語などに世の中さはがしきといふ詞あるもみなえやみの事なり文

五條の天神 ●山城帝京西洞院五條松原に有神書を見れば當宮影向の年記いまたしれかたし然ども此遷都の日これを祭るならし參 ●弘法大師の草創

なり少彦名命也日本醫道の祖神也説 ●天神とすみてよむべし文くはしく頭書有　頭書云▲少彦名神也高皇産靈尊の子也大己貴と天下を經營して疾病を治する事なんどしたまへる事日本紀第一に見へたりいまにいたるまで節分に五條の天神に人々まいりて朮餅などうけてゑやみをのぞき出行の首途をいはひなどするは其遺法なるべし野

靫　●是疾病をおさむべき神のおこたりゆへに世の中さはがしきとの義にて勅勘の心なるべし文

ゆきの明神　●由岐明神は山城國愛宕郡鞍馬山に有又靫神といふ也六十一代朱雀朝天慶年中に勸請し給ふとなり神體は大己貴神是も日本醫道の祖神也説　●鞍馬九折の中間に有所の氏神と也文　頭書云▲此神の事前々の抄にいつれもたしかにしるせるを見ず今云神書を考れば靫神社は山城國愛宕郡にあり祭る神一座大己貴命也此社も天子不豫世上さはかしき時靫を此神前にかくるなり其子細はかの少彦名と此大己貴とともに疾病を療じ天下を治るの神也このゆへに五條天神と同じく當社にも靫をかくるの遺法なり或説に素盞烏といへるは非なり參

看督長　●檢非違使廳の被官なり壽 ●山案に使廳の下司に看督長六十六人あり別當の召具する者也赤き狩衣白き布袴を着白杖を持て雜人を拂追者也則背に靫を負なり　頭書云▲職原云檢非違使（此云ニ使廳ー本所乃靫負廳也）當使補ニ看督長六十六人ー此爲レ遣ニ諸國ー也壽 ▲國々へつかはして其守護の善惡をきく役なり説 ▲山并案狹衣に別當殿の御事をばしらぬがいたうあなつり奉らばかどのをさなど出來て此門あけさせんとこそいひけれ

其家に　●勅勘の人の家也諺

人出いらず　●今公方の御勘氣をかうむる人の門をさゝせて閉門と江戸衆の申すに似たる事也貞 ●靫をかけて勅勘の家といふ事を諸人にしらせて其罪をこらしめんため也靫をかくるいわれに一説在頭書云▲勅勘の家に靫をかくるは罪あると云ことを人にしらして出入をたつべきため也昔しは勅勘の家のみにかぎらず皆かくのごときの類ありたとへば神事を行ふ家には門に榊に白木綿をかけて人にしらせて外のけがれなきやうにするなり又喪あ

る家には殯をなして死人あると云事を人にしらするなりされば昔は鐵炮鑓などはこれなく武士の第一の道具は弓なりさるによつて靫をかくるなり今も罪人を引わたす時に道具をつけると云ふも此遺法なるべきとなり説
封をつくる　●今も罪人の家には闕所屋とて財寶を官におさめ門戸に封をつくる兼好が時よりしか有けるにや句

〔二百四〕犯人(ボンニン)をしもとにてうつ時は拷器によせてゆひつくるなり拷器の樣も今はわきまへしれる人なしとぞ

犯人　●罪をおかせる人なり壽
しもと　●笞の字也むちともよむ説　●犯人を罪なふに其罪の輕重によりて五刑有笞杖徒流死是なり昔は死刑に行ふはまれにして大かた笞にてうちしと也文　頭書云▲和名曰唐令云笞(音知和名之毛度)大頭二分小頭一分半又云杖(音仗和名都惠)皆削ニ去節目一長三尺五寸許▲漢景帝の時に議して曰文帝肉刑を除て輕刑の名有といへども法をつかさどる者笞にて多くたゝく故重罪にことなる事なし其上をほかたたゝき殺さる或は死せざれどもかたは者となりて用にたゝず今より定て笞五百を三百とし三百を二百とせよといへり其後又改て三百を二百とし二百を一百とす景帝又箠令を定む箠(ムチノナガサ)長五尺ふとさ一寸の竹也末のほそさ半寸其節を削りすつ笞にあつる者臀をうつうつ人をかへず一人して打しむ手の困てあたりのつよからざる事を用て也野　▲山案令義解曰凡杖皆削ニ去節目一(謂笞杖亦准此也)長三尺五寸訊レ囚及常行杖大頭徑四分(謂雖レ訊ニ笞罪囚猶用ニ四分杖一)也小頭三分笞杖(謂用ニ之笞刑一之杖也)大頭三分小頭二分枷(クビガセ)長四尺以下三尺以上秙(テカシ)長一尺八寸以下一尺二寸以上其決ニ杖笞一者臀受拷訊者背臀分受須ニ數等(謂假犯ニ杖九十一應レ拷ニ三度一者毎拷臀背分決ニ十五一之類也)　又本朝には罪の限程産物を出し贖て笞罪にかゆる事あり是即本朝神代の遺風にして異國にことなる由なり
拷器　●罪人をしばりつくる所の木也諸　頭書云▲玉篇拷苦老切打也壽　▲山案居家必用曰拷掠漢法謂ニ榜笞而問一也罪の疑しきを捶擊して問を拷掠とも拷問とも云なり
よせて　●しぼりよする事なり説
今はわきまへ　●此一句此段の眼目也其故は昔皇

德さかんにましませし時はかゝる事のありしに王法もおとろへてより其作法しれる人さへなきとなげく由なり古聖の御代の政をも忘れとある底意に引合思ひみるべし全

〔一段の統論〕此段も前段もともに皇道すへになりて悪人をほくして古風の刑罰のかろ〳〵とやさしきていすたれはてゝ拷器は今の木馬のせめにかはり又はりつけ柱は昔の笞といふものならんと覺へて古風のすたれはてたるを歎てかけるよしなり全

●此段と上の段とを同段に書つゞけたる本ありいかゞ侍るべき句

〔二百五〕比叡山に大師勸請の起請文といふ事は慈惠僧正書始給ひけるなり起請文といふ事法曹には其沙汰なしいにしへの聖代すべて起請文につきて行はるる政はなきを近代此事流布したる也又法令には水火に穢をたてず入物にはけがれあるべし

比叡山　●江洲に有前に注す

大師　●慈惠大師也　頭書云▲羅浮子曰朝廷よりは慈惠とばかり謚號あれども山にはをして慈惠大師と云なり傳教弘法慈覺智證の外には大師なし又或抄に云朝廷より慈惠とばかり謚號ありしに職事綸旨を書し時慈惠大師と三度書あやまりたりさるによりて山門には大師と云とぞ何の書に出たるにや猶考ふべし句　▲盤の說是に似たり今略す▲傳教弘法慈覺智證慈惠に近代の慈眼を加へて本朝に六大師あり此外には大師なし釋書には慈惠の大師になり給ひし事を書もらせり世に元三大師と申がすなはち此大師の事なり野槌に釋書を證として書る時は誤に決すべし慈惠僧正はことに入滅の後三年めに大師になり玉へる事扶桑略記第五卷曰十六日永延元丁亥二月十六日 己酉定故天台座主大僧正良源慈惠大師之贈ニ故藤原時姬正一位ニ 正惠僧都考レ之 とあり參 ▲山案に和論語曰四大師外大師號雖レ無レ之山門押而以レ號ニ慈惠大師ニ併圓融帝密勅と云々

勸請の起請文　●一紙の上に佛神を勸請してかく起請也諸 ●彼山に大師勸請の起請といふは慈惠のかきはじめ給ふゆへと也文 ●慈惠大師の女難にあひ給ひしとき書始給と也昔より佛神を勸請したる起請といふはなし全　頭書云▲起請文と云こともころしに盟誓をたてゝ牛馬の血をすゝり其詞をし

るして土にうづみ約する所若そむかば此牛のごとくきりほふらるゝ罪にあたらんと諸神にちかふ也周禮春秋傳等に悉しくしるせり日本にては天照太神素盞烏とちかひましませば神代にもありけるなり初は盟誓といひしを人の代の末に至て白河鳥羽の御時も起請文と云事あるよし貞永式目起請のうち書にあり武内宿禰が甘美内と探湯し允恭帝の時氏族のみだれを定めんとて湯をさぐらせ斧をやぎてにぎらせらる是を後世に火起請湯起請の始也とす日本紀に誓約字をうけひとよめり起請の字是訓によりてうけをおこすといふにやなををぼつかなし野 ▲山井案ずるに日本紀一曰素盞嗚尊對曰請與レ姉共誓夫誓約之中必當レ生レ子誓約之中此云二宇氣譬能美難箇一 ▲起請はうけをたつるとよめりたとへば人を抱へ置に請人を立るごとくに此事いつはりにてなきと云ふ證據に佛神を請人に立て人に心易をもはするなり又史記陳餘傳張敖齧二其指一出レ血索隱小顔云指を齧て至誠を表しそれがために約誓す今の血判はこの遺意なるべし ▲又參考抄云抱朴子曰受レ之四十年一傳々レ之歃レ血而盟委レ質爲野レ約又曰受二眞一口訣一皆有二盟文一歃二白牲之血一以二王相之日一受レ之以二白絹白銀一爲レ約尅二金契一而分レ之輕說妄傳其神不レ行也云々又野槌曰本朝文粹十二に前中書王の山亭起請とて文一篇あり誓詞にあらずと云々

慈惠僧正　頭書云 ▲元亨釋書釋良源始木津氏近州淺井郡人也延喜十二年九月三日生焉十二上二叡山一師二事理山一延長六年禮二尊意一登壇受戒云々康保三年八月補二天台座主一領二山務一者二十年天元四年爲二大僧正一兼二法務一聽二輦車一永觀三年正月三日唱二彌陀一而滅年七十四賜二諡慈惠一壽 ▲山案和論語曰釋良源宇多帝落腹之御子也江州淺井郡養育蜜而號二木津氏子一號二慈惠大師一或元三大師云々

書始給ひける　●昔たまひけるゆゑんを冠考に擧たり　頭書云 ▲圓融院の御時慈惠僧正内に參り給ひ女に五の障の經文いとたふとく講じ給ふ折から御簾の内よりある女房の申出されける歌に「有漏地より無漏地に通ふ釋迦だにも羅睺羅が母はありとこそきけとよみし時に僧正の返歌に「いなやいなむきても見べきいが栗のえめば一度落もこそせ

め此歌をよまれし故に僧正うき名立て山門にて勸請の起請を書はじめ王ふなりこれを大師勸請の起請とはいふなり新注

法曹　●明法家を云法曹共法家共申也律令をよくならひしりて沙汰し行ふ家也野　頭書云▲職原曰明法博士二人唐名律學博士明法道之極官也中古以來坂上中原兩流爲法家之儒門以當職爲前途昔允亮道成等以明法道任廷尉佐勘解由次官等中坂兩家立家已來以廷尉法儒大判事爲先途野

沙汰なし　●評定評議する義也字義上に見えたりてゝには略す

流布　●兼好甘心せざる文意也文　●兼好が古の聖代起請文につきて行はるゝ政なしと云時は應神允敬の時の探湯のみにあらずすべて起請はよからぬ事なりと思ふなるべし野

又法令　●是よりは別段になしたる本あれども又と云字にてみれば前段の餘論か全　●法令とは世の法度といふと同じ文

入物にはけかれあるべし　●天地の間水火なき所なしいづれかけかれとせん其器物には穢有べし野

●此所は火起請湯起請と云事もあれば底意にふくみてかけり火もやく事不能水もひやすに不及ことあり皆人によりての起請なりとの心歟全　頭書云▲後成恩寺殿日本紀纂疏云水火是天生之物無分淨穢而神事忌火何也曰火雖是淨因物穢故不食炊爨之物而已▲又いざなみの尊かくれ給ひしかばいざなきの尊をひつきて逢給ふによもつひくひせりとの給ふ故にいざなきたなしとて歸り給ふ今の世の人の同火(ヒトツヒ)を忌事のをこりなり野

[一段之統論]　●此段は山門に大師勸請の起請といふ事何の大師ともしれざるを慈惠僧正としらせ次に起請文は聖代の法にあるべからずと云事をしらせたるなり文　●山井案此段も前々の段と同じ心なり末代になりて人の心も直ならず僞のみなればかく起請文をもつて世を治る政も出來たり兼好それを歎て上古は起請なけれども人の心も直なりしてとを慕て書りさりながら今の世は起請文をもつて佛神の罰ある事をしらせて民の心を大きに畏しめずんば世も治り難かるべし彼耻あつて且格をいへる政は中々及び難き事也されども起請の罰も當時

なきに似たり故に適起請文の趣きにたがふものありても罰と云事もなく却て安閑たり此故に野搥に常忠が詞を引り或人外記の常忠に火起請はいかにと尋ければ常忠火をつかみてやけまじきならば水をつかませよ水にてやけんと答けり火は必焼べし焼ぬ不思議あらば水にて又やくべきふしぎあらんとなり此時火起請の事しばらくやみぬ異國に罪人の實否をたゞさむとて象にかゞしむる類なるべし聖賢いかんぞ水火を以て罪をたゞさんやしからずば崑崗（コンカウ）の火玉も石もともにやくがごとくならん常忠一旦の辯をいふといへども却て法を弄ぶにちかし其道理をあきらかに辯せばをのづから火の物をやくべき事は必定なるを水をにぎりてもやけむといひまぎらすはよく其理をしれるにあらずされども愚にして人に火をつかませんよりはまされり又貞德曰或時比叡山中堂のこかねのあぶらつきの失し時火起請行ひて手のやけたるものをきられし其後京都にありし盗人を千本にてきられしに其盗人先年中堂のあぶらつきも我取しなり手のやけたる者はとらざりしと語りしより火起請は世に行れずと外記の道白かたられ侍しされども秀吉の御代に德本といふもの弟にさゝへられ兄弟北野にて火起請をとらせらる弟のみ手やけて兄の德本が手はすこしもやけざりし事侍りきつら〳〵是を案ずるに日本の政には誓文起請なくてかなはぬ義なり佛神罰利生なきと思はゞ惡人多く出て末世の凡夫いよいようやまひたつとふ事をしらずそしりあなどる心はやくつきて運命のうすくなるをもしらず凶年の來りて病とりつき壽命のちゞまるをもわきまへずあさましき人のみなり日にみへぬ佛神は目に見へぬ人の運命を又よくそふるものなり貞永の式目の發端に神は依二人之敬一增レ威人は依二神之德一添レ運と云二一句をもろこしにてひらき見てことゝしくほめたりしとなり

〔二百六〕德大寺右大臣殿檢非違使の別當の時中門にて使廳の評定をこなはれける程に官人章兼が牛はなれて大理の座のはまゆかの上にのぼりてにれ打かみて臥たりけりおもき怪異なりとて牛を陰陽師の許へつかはすべきよし各申けるを父の相國聞たまひて牛に分別なし足あればいづくへかのぼらざらん尩弱の

官人たま／＼出仕の微牛をとるべきやうなしとて牛をば主にかへして臥たりける疊をばかへられにけりあへて凶事なかりけるとなん怪を見てあやしまざる時はあやしみかへりてやぶるといへり

徳大寺　●公孝公の事なり　頭書云▲太政大臣従一位公孝公のことなるべし後徳大寺と號す

鎌足―不比等―房前―眞楯―内麿―冬嗣―良房―基經―忠平―師輔―公季―實成―公成―實季―公實―實能 左大臣従一位 始號二徳大寺一―公能 右大臣正二位 號二大炊御門一―實定 左大臣 正二位 號二後徳大寺一―公繼 右大臣 従一位―實基 太政大臣 號二水本一―公孝

▲句解曰今此書に右大臣とあれば公能か公繼の事なるべけれども父の相國と云をもつて見れば公孝のまだ右大臣にてをはせしときのことなるべし

検非違使　●前にくはし

使廳　●使廳は検非違使の廳也壽　●検非違使別當はものゝ非道違背の義をたゞす職にてたとへば今の世の奉行所に公事をきかるゝがごとく也うつたへなどの評定を中門にてせられしなるべし文章雜　●傳レ記未レ考

大理　●検非違使別當の唐名也壽　前に注す

はまゆか　▲倚子などのやうにて高欄などのあるもあり文

にれうちかみ　●齝の字なり牛の口よりねばりたる物をかみ出すを云　頭書云▲本草綱目齝草一名牛轉草即牛食而復出者俗曰二囘嚼一▲和名曰爾雅集注云獸吞レ蒭噬反出而嚼牛曰レ齝 音台 唐韻有二笞詩二音一 字亦作レ齝 和名邇介加無

つかはすべきよし　●吉凶をうらなひにつかはさんと也句　頭書云▲郊牛の口やぶれたるをうらなひ又その角を鼷鼠のくひたるをうらなふてあらためたる事春秋傳に見へたり此義にて今の牛をも陰陽師へつかはすべきよし申にや野

父の相國　●公孝公の父太政大臣實基公也

牛に分別なし　●のぼるまじき所やらんのぼりてよき所やらんの理非のわけをしらぬ也畜生にて愚痴なる故也盤

のぼらさん　●少も氣にかけぬいひやうなり參

此類もろこしにも多し　頭書云▲性理字義云大抵

妖由レ人與凡諸般鬼神之旺皆由二人心一與之人以爲レ靈則靈不三以爲二靈則不レ靈人以爲レ怪則不三以爲一レ怪則不レ怪伊川尊人官癖多レ妖或報曰鬼擊鼓其母曰抱レ槌與之或報曰鬼打扇其母曰佗熱故耳後遂無レ妖只是主者不三爲レ之動一便自無了緇觀二左氏所謂妖由レ人與二一語說二得極一出則道石佛放光之事亦然野▲鍾惺風俗通評曰謹按桂陽大守汝南本叔堅少時爲二從事一在レ家狗人立行家言當レ殺レ之叔堅云犬馬喩二君子一狗見二人行一效之何傷叔堅見二縣令一還解二冠榻上一狗戴持走家大驚時復云誤觸レ冠冠纓桂着之耳狗於二竈前一蓄レ火家益怔忪復云兒婢皆在二田中一狗助蓄レ火幸可レ不レ煩二鄰里一此有二何惡一里中相罵不レ言無二狗怪一遂不二肯殺一復數日狗自暴死卒無二纖介之異一叔堅辟二大尉椽周陵長原武令一終享二大位一子條蜀郡都尉威龍司徒椽凡變怪皆婦女下賤何者小人愚而善畏欲下信二其說一類復裨よ增レ文人亦不二證察一與倶惶懾邪氣承レ虛故速咎證易曰其亡斯自取レ災若二叔堅一者心固二於金石一妖至而不レ懼自求二多福一壯矣諺曰見レ怪不レ怪其怪自壞叔堅之謂也參

尫弱 ●いやしくわかき義なり尫弱の官人とは章釆をさす也野　頭書云▲韵會尫烏光切跛曲脛也或作レ尫亦作レ尪荀子賤レ之如レ尪注癈疾之人野 ▲無量壽經下卷曰有二貧窮厮賤尫劣愚夫一參

微牛 ●輕微の心古 ●さいさき牛と云心文　頭書云▲觀心略要集曰微牛駕レ車身疲而死參

疊をばかへられにけり ●疊をば敷かへられしとなり說

あへて ●果敢の義也句

あやしみ ●此古語の兩句はもろこしの諺也此詞をもつて此一章の大意骨子と見るべきなり參　頭書云▲千金方黃帝雜忌咒曰見レ怪不レ怪其怪自壞壽 ▲小止觀曰凡見二一切外諸惡魔境一悉知二虛誑一不レ憂不レ怖不レ取不レ捨忘計分別息レ心寂然彼自當レ滅參

【一段之統論】●此段は德大寺の大臣の其心の利發神妙にして物動轉せぬ事をほめて後の世の人の理もなき事を氣にかけぬやうにとのをしへなるべし參 ●上段に水火にけがれなしうつは物にあると云をうけて牛にはとがをおふせずしてはまゆかはかへられたることをいへり心同じければなり盤

〔二百七〕龜山殿たてられんとて地をひかれけるに大なる蛇數もしられずこりあつまりたる塚ありけり此所の神なりといひてことのよしを申ければいかゞ有べきと勅問ありけるにふるくより此地をしめたる物ならばさうなく堀捨られがたしと皆人申されけるに此大臣一人王土におらん虫皇居をたてられんに何のたゝりをかなすべき鬼神はよこしまなしとがむべからずたゞみなほり捨べしと申されたりければ塚を崩して蛇をば大井河に流してけり更にたゝりなかりけり

龜山殿たてられんとて　●八十九代龜山院の事也五十一段目に委　頭書云▲弘長百首〔続二七 玉集一〕に「龜の尾の山の岩根の宮作りうごきなき代のためしなるらん弘長は龜山に皇居をたてられしことと上にも見へたり文

地をひかれ　●地を引ならす義也句

こりあつまり　●凝集なり句

ことのよしを申ければ　●帝へ申上る也諸

勅問　●帝の諸官へ尋させ給ふ也諸

ふるくより　●舊の字也久しき義也野

しめたる　●卜の字也句●我ものとして住心也諺

さうなく　●無二左右一と書ためらひもなくの心也文

此大臣　●上の章をうけていふ實基公の事也諸

王土におらん虫　●普天の下王土にあらずといふ事なければ也諺　頭書云▲古歌に「草も木も我大君の國はればいづくか鬼のすみかなるべき野

皇居をたてられんに　●天子の御座所を建られんには也新注

鬼神はよこしまなし　●俗に鬼神に横道なしといふがごとし壽　頭書云▲左傳莊三十三年云神聰明正直而壹者也野　▲抱朴子四曰神聰明而正直故其道賞レ眞而罰レ僞參

とがむべからず　●堀すてたるとも蛇とがめ得まじと也又此方よりとがむべからずとも也兩説あり説

皆ほり捨べしと申されたり　●實基公のかく宣ふなり

大井河に流し　●大井河は則龜山の近所なり前に委し

【一段之統論】●此段も上の段に心通ず怪を見てあやしまざるの類也壽●此段と前の段とゝもに父の相國の智惠明なるをほめて書り良によきさばきをし玉ふ何のたゝりか侍らんや世の愚昧の者いさゝかの事をも心にかけてまよひ己とわざはひをとれりいづれを見ても無心ならばいむと云事はあらじかし新注●蛇のたゝりをなすもあり吉兆をしめすもあり猶野槌につまびらかなり

徒然草諸抄大成卷第十七

目次

〔二百八〕經文などの紐をゆふに上下よりたすきにちがえて二すぢの中よりわなの頭を横さまにひき出すは常の事也左樣にしたるをば華嚴院の弘舜僧正ときてなをさせけり是は此比やうの事也いとにくしうるはしくはたゞくる〳〵とまきて上より下へわなのさきをさしはさむべしと申されけりふるき人にてかやうの事しれる事になん侍りける

弘舜僧正　◉傳記不ㇾ慥　頭書云◭山案ずるに諸抄に誰とも知れずとあり但し和論語云弘舜字多源氏也道德兼才人也號二華嚴院僧正一系圖重て可ㇾ考

たすきにちがへて云々

上より下へわなの云々

圖說は文段に出是はわなの頭をよこさまに出す也惡敷むすびやうなり全

圖說文段是は弘舜ときてなをさせ給ふよきやう如ㇾ此全

圖說文段又一說にかやうならんかと全

いと　◉最字

にくし　◉見惡し也說

うるはしくは　◉見たる所の麗しくは也諺　◉俗にいふそうあり度はなどの義也說

ふるき人にてかやうの　◉是より兼好評判の詞なり盤

〔一段之統論〕◉此章の大意は今やうの事はこのましからぬ事なれば經の紐にいたるまで古風をしたふべき事をいへり參　◉山井案に此段は弘舜僧正のものをつくろいかざることをきらひてすなほに心やすきやうにといへるをほめて書なりことに古き人にてと云結句を味へば孔子の吾先進にしたがはんと宣ふこゝろもあり此弘舜の名言和論語にも出たりこれとはすこし異なり

〔二百九〕人の田を論ずるものうたへにまけてねたさに其田をかりて取れとて人をつかはしけるに先道すがらの田をさへかりもてゆくを是は論じ給ふ所にあらずいかにかくはといひければ刈者ども其所とてもかるべき理りなけれども僻事せんとてまかる物なればいづくをかからざらんとぞいひける理りいとおかしかりけり

人の田を論ずるもの　●我田ならぬを無理に論ずるなり文

うたへに　●訟の字を書則公事の事也句

ねたさに　●妬の字●對決に負て腹立し妬める也文

人をつかはしける　●田地こそえとらね其稲をかれと也文●下人に無理を云付る也盤

道すがらの田　●其論じまけたる田地へ行べき道の田をさへ刈て行也文●相手ならぬ人の田也盤

論じ給ふ所に　●餘所よりいふ也諺●一說に●これは兩三人もかりに遣すと見えたり其中に利窟者ありて平等にかりてゆくなりこれ論じ給ふ所にあらずとは傍輩のいふ詞なり全●但し者どもと次の詞にあれば前說好なり

理りなけれども　●人の田の稲なればなり是かる者どもの答なり文

いづくをか　●とてもひが事しにまいるものなれば一向に道すがらの田をもかるぞとのこゝろ也文●刈に行し下人どもかく利口をいふ也諸

理りいとおかし　●是兼好の評論の詞なり盤●實はいよ／＼僻事をかさぬれば惡き義ながら當分の利口の面白きとのこゝろなるべし鐵●此おかしは笑ひあざけりたる義なりかく惡の上に付てたに其一通りのことはりをいひ立る程の僻智を一度ひるがへして正智とし善にいたらばいかばかりよからん句●山案に後說の意は無理をいひ付てかりに遣しける主人の上へかけて見る時はよくかなへり非とはしりながら主命黙止がたくしてかりに行し下人のうへにては穏當ならざるに似たり只前說のすなほなるにしたがふべし

〔一段之統論〕●此段は田夫の少理をいひたるを書たる物がたりなり文●此段田夫の辭なれども理りの面白さに爰に記すならん諺●山案に此段結句に

褒貶の二說あり先褒の說には新注曰無理なる者はすべきやうなし公義ばれてだにまた我をおらず家來の者どもの道理いときこへ侍る主の事なれどあしき所をばよくしれり下人だにも其智はあきらかなりおしひ哉國天下の大臣とせざる事をと云々此說一理あるといへども後人非をかさる病まぬかれ難し彼小人の過は必かざりてこれが辭をなすといへる聖賢の敎にそむくに似たり其上主人の非を誘るはこれ君を無する罪あり此者ども擧用て卿大夫となさば國を亂し天下を覆すの害出來へしされば其國に居ては大夫をだもそしらずとは文宣王のいましめに非ずや又貶の說は大全に曰此段ふかく心をつけて見るべきか世俗に此たぐひをほし本亂れて末治るはあらじとの心なり云々此說面白し主人一たび無理を以て田を論じ訟に負て其非を改めず却て稻をからせければ下人又いよ〳〵非をそへて相手ならぬ者の田までをかりとり其上にこれが辭をなして非をかざりけりまことに桀紂天下を帥ふるに暴を以て民これにしたがふといへること思ひ合され侍る又野槌句解等には此通章の趣は鍾氏が兒の酒をぬすめる故事の心にて侍るといへり今案ずるに事跡は能相似たれども心はいさゝかの違あるなり細に味ふべし世說新語補十二曰鍾毓兄弟小時値ニ父晝寢一因共偸服ニ藥酒一其父時覺且託レ寢以觀レ之毓拜而後飮會而不レ拜既而問レ毓何以拜毓曰酒以成レ禮不ニ敢不一レ拜又問レ會何以不レ拜會曰偸本非レ禮所ニ以不一レ拜異本云孔文擧有ニ二子一大者六歲小者五歲晝日父眠床頭盜レ酒飮レ之大兒謂曰何以不レ拜答曰偸那得レ行レ禮如レ此辯すといへども畢竟は文段諺解の說にしたがふて輕く見るがよからん歟

〔二百十〕喚子鳥は春の物なりとばかりいひていかなる鳥ともさだかにしるせるものなしある眞言書の中に喚子鳥なく時招魂の法をばをこなふ次第ありこれは鵺なり萬葉集の長歌に霞たつながき春日のなどつづけたり鵺鳥ゝ喚子鳥のことざまに通ひて聞ゆ

喚子鳥　（書）古今集の三鳥なり相傳あらずは難レ知レ之壽（諸）諸抄に色々擧るといへども信用しかたし頭書云▲古今集春部に「遠近のたつきもしらぬ山中にをぼつかなくもよふこ鳥哉喚子鳥稻負鳥百千鳥是古今集の三鳥なり傳受なければさだかにしり

がたしとなり諸 ▲三鳥ともに古今集の秘決なれば歌によまぬ事なりと云人あれども歌書にも出又歌の題にも出したればよまてはならぬ事也春の末の鳥にかゝる鳥があるとしりて古人の歌のをもむきを見てよめとなり切紙なればとかくの事云べきにあらずいかやうの鳥と云は一往の義なり多くの鳥のある中にこれを秘傳にしたる子細しるが古今の口決なりとなり盤 ▲長谷川式部少輔守尙所にて常琢宗祇基綱の相傳の書を見侍しによぶこ鳥は人をも云猿をも云とあれど猿といふがよきなりとしるせり近代の歌人此事を秘して口外にいださずされども此草子は揚名介呼子鳥などをも書のすれば兼好が此まではさほど深く秘せざると見へたり又唐に報春鳥を喚起と云と韓文漁隱叢話などにあれば喚起鳥は呼子鳥の類か野 ●或說に猿をよぶこ鳥といへるは此獸は餘の獸よりとりわき子をなつかしめ又木末などをも身かろげに鳥のやうにわたれる義なりといへり増鐵 ▲櫻井基佐心敬法印にあひて大原に行て夜話の草紙一帖あり其中に「遠近のたつきもしらぬ山中にをぼつかなくもよぶこ鳥かなれ猿なり「誰をこよひ待がね山のよぶこ鳥をろの鏡に影をうつして俊惠山鳥なり「つゐに身のかぎりあるてふ世の中にたれよぶこ鳥さして鳴らん貫之山つぐみなり「色うすのちりぬる花の陰に來てたれよぶこ鳥あさな／＼なく宮內卿うぐひすなり「くる人もなこその關のよぶこ鳥こゑてわかるゝ野路の玉河俊成卿郭公なりなど侍り歌によりてかはるよしなり又東の野州の古今傳受の箱の中の切紙の說にはかつほう／＼と鳴鳥の事なりと云々貞
▲諸抄にいへるまち／＼の說はいかなるゆへぞやひとつも正義にかなひ難し只かりそめの擬說をひろひてかろ／＼しくしるされ侍るならじされば彼壽命院の抄に相傳あらずは難レ知レ之と侍るばかり心にくゝをくゆかしく覺へ侍る文

しるせるものなし ●古今の大事ゆへに書にあらはさず

ある眞言書 ●此眞言書いづれの書ともしれ難し兼好は何の書を見られけるにや諸 ●是につきて數說あり　頭書云 ▲愚案ずるに野槌の說によれば眞言宗の中に此行はなき事のやうに見ゆれども眞言

宗も事ひろく其上ことに密の法なれば政遍此事をいまだ見あたれ侍らぬか或は秘事せられたるもしりがたし又兼好時代に此書物あつて今はほろびたるもしり難し增鐵 ▲此書は立川一流の眞言の書なるべし高野山宥快大阿闍梨作寶鏡抄云醍醐三寶院權僧正弟子有仁寛阿闍梨云人依有罪過子細被流伊豆國於彼國爲渡世具妻俗人肉食汗穢人等授眞言爲弟子爰武藏國立川云所有陰陽師對仁寛習眞言引入本所學陰陽法邪正混亂内外交雜稱立川流構眞言一流是邪法濫觴上下略 しかるに文觀立川の二流の邪法は建武以後に燒捨たるよし寶鏡抄に見えたり文觀流はたへて立川は少々相殘れるよしなり此事政遍のしろしめさぬことあるまじけれども此二流は眞言宗の法敵なれば本よりなきことにして答へ玉ふなるべしなきことをなきと答ふるに別の子細あるべからずこれは私の會通なり政遍の心量りがたし ▲又玄旨曰此眞言書と云所をまぢなひ文とよむべし又招魂も玉よはひとよむべしと云々全

招魂の法をばをこなふ ●招魂とは玉よばひの法也人だまの飛たるをまじなひかへす秘法眞言宗に是を行なり壽 ●招魂をば禮記には復（タマヨバヒ）とあり宋玉が招魂の作楚辭に有天台眞言の兩家に招魂の法といふ事ありこれは神社遷宮の時或は祭會の前の夜門火など燒て神輿に正體をうつしなどする時これを行ふ事なり儒書に招魂の法あれども佛家には其字をばかり用て行ひの秘法は各別なる事なり今爰によぶこ鳥なく時招魂の法を行ふと眞言書に見えたりといふを野槌曰余駿河に侍しに高野の檢校法性院政遍といへる八十餘の老僧來りまみへしかば太相國此つれ〴〵草の招魂の事尋よと仰給ひければ余まかりて問に政遍我か宗に招魂の法おこなひて加持する事はありされども呼子鳥の鳴時おこなふ事はしり侍らず魂をよぶといふによりてかく申にやと對へけるを則太相國へ奏し侍るとあれども密敎にも同じ一宗のうちにてさへ行ひの流々さまさまにかはる事なれば天台宗にはある一流に其法もある事なりとしるべしとある老僧の申されしによりて予も此事にをゐて密法に穿鑿をはけましゝ事年久し此ごろ其よりどころを見あたりたる事あり

是れをもちて口決の所とすべし兼好天台の學徒なれば此眞言の書と有も台家の密書なるべしさりながら政遍が魂をよぶといふによりてかく申にやと對へけるも即座に發明にして捨がたき說なるべし參㊀此事徒然草の一二の難義也まづ眞言宗の事相に付て小野廣澤などいひて十二流ありとかや此外に立河流とて邪義を弘めけり是蓮念坊仁寬阿闍梨の所爲也又小野の文觀坊弘眞とて後醍醐天皇の歸依まし〳〵て東寺の長者に任ぜらるゝ事ありこれも立河流に相似て邪法のよし寶鏡抄に見えたりさて招魂の事は陰陽家に玉よばひと云まぢなひあり此所の眞言書といへるはかの立川流に陰陽家の玉よばひを會合せし書なるべし兼好時代盛に流布し侍ればなりされば立川流は大かたまぢなひの樣にて今の世には行人又は願人坊或はとのかいなどいふものゝ類其末々とぞ覺ゆる全㊀立川流の事ある眞言書といへる冠考にくはし可レ見レ之又招魂の字訓證文　頭書云㊀楚辭注云招魂者宋玉之所レ作也古者人死則使二人以一其上服一升レ屋履レ危北面而號曰皐某復遂以二其衣一三招レ之乃下以覆レ尸此禮所レ謂復而說者以爲二招魂一復魂又以爲レ盡二愛之道一而有二禱祠之心一者蓋猶冀二其復生一也如レ是而不レ生則不レ生矣於レ是乃行二死事一此制禮者之意也而荊楚之俗乃或以レ是施二之生人一故宋玉哀二閔屈原無レ罪放逐一恐二其魂魄離散而不一レ復還一遂因二國俗一託二帝命一假二巫語一以招レ之以レ禮言之固爲二鄙野一然其盡レ愛以致レ禱則猶古人之遺意也㊀曲禮注云復始死時呼レ魂辭也㊀又神道にも招魂の法あり余二十四歲の時江戶へまかりけるに越前阿波賀の神主卜部氏の孫周禊に逢て神書どもを見侍しに日本紀三十卷神代纂疏其外口訣數紙護摩加持などの事をしるせるもあり其中に招魂の祭文一首あり讀で見れば宋玉が詞をにせていと拙くいやしかりき又常陸の麻島流のなりとて神書あり是は大かた眞言家より出ると見へて佛菩薩明王などを神の本地なりとせり此祭文を唱へて人の魂魄をまねきよぶ作法ありと書り野㊀招魂の事は陰陽家に玉よばひと云まぢなひあり今の世にも人玉と云ものとふなど云時古歌を唱へてしたがへのつまをむすぶまねする事ありこれかの陰陽家に招魂の法ある餘風なり全㊀山案に

人魂の飛時に「玉はみつ主はたれともしらねども
むすびぞとむる下がへのつまと此歌を三遍となへ
衣の下がへつまをむすぶとなり
これは鵺なり　其眞言書にいふ鳥はぬえ鳥の事と
なり文 ●鵼とも書り又鵺といふ鳥頼政が射たるを
以て見れば怪しき鳥なり野　頭書云 ▲和名曰鵼
音空漢語抄云沼江恠鳥也 ▲海篇云鵺音夜鳥名野 ▲愚案に鵺鳥と云
もの今世にも見たるといふ人もなし又鳴聲は眞言
家に振所の鈴に似たりとあれどもこれ又聞たる人
もなし招魂を行ふ時節の表示にて其理りをとりた
ると見えたり全

萬葉集　●歌書也二十卷あり勅撰の時代撰者の異
說多して一決しがたし先正說は五十一代の帝平城
天皇の勅撰と見るべし撰者の事文段曰師說に始橘
諸兄公の撰び置給へるに後に家持卿撰そへ給ふと
なり其外の異說ともは　頭書云 ▲古今十八云貞觀
御時萬葉集はいつばかりつくれるぞと問せたまひ
ければよみて奉りける文屋ありすゑ「神無月しぐ
れふりをけるならの葉の名にをふみやのふること
ぞこれ同序にいはくならの御時これより前の歌を
集めて萬葉集と名づけられたりける同眞名序に謂
く昔平城天子詔㆓侍臣㆒令㆑撰㆓萬葉集㆒今の世に傳
る本は二十卷有野 ▲袋双紙曰四千三百十三首此中
長歌二百九十五首但本々不㆑同難㆑用㆓定數㆒又曰
如㆓世繼物語㆒萬葉集は高野御時諸兄大臣奉之撰云
云高野孝謙也又或家持撰云々文 ▲山案に拾芥抄云
萬葉集二十卷四千三百十五首長歌二百五十此內也
或說與五十首或無部立錯亂不㆑定奈良天皇御宇左
大臣橘諸兄公撰㆑之私勘左大辨家持同撰之聖武天
皇勅云々京極中納言入道抄云時代事近代歌仙等多
雖㆑有㆓喧嘩相論事等㆒撰者又無㆓慥說㆒ ▲古今眞名序
云平城天子詔㆓侍臣㆒令㆑撰㆓萬葉集㆒云々玄覺律師
云是則相㆓當大同御時㆒乎或云此集者聖武天皇御時
之撰歟其故彼帝御時和歌盛興之由見㆓古今序㆒隨能
令㆑作㆓和歌㆒又天平元年正月十四日奏㆓諸歌㆒云々
如㆓此等㆒者聖武御時相當但至㆓平城之號㆒者凡以㆓
聖武並桓武大同之朝㆒號㆓平城帝㆒也見㆓國史㆒云々
今既有㆓如㆑此明證㆒何又背㆑之好立㆓異儀㆒遲懐㆓迷
惑㆒乎次撰者或稱㆓山上臣憶良㆒或稱㆓橘大臣㆒或稱㆓
藤原眞楯㆒或稱㆓大伴家持㆒云々 ▲參考曰臆餘雜錄

━曰萬葉集不レ詳ニ何時之撰一古今序曰昔平城天子詔ニ
侍臣一令レ撰ニ萬葉一自レ爾以來時歷ニ十代一數過ニ百
年一或曰萬葉集爲ニ聖武時之撰一云々或曰山上臣憶良
所レ撰也此說非也云々今案萬葉集平城天皇時撰而
恐非ニ聖武時撰一矣古今序時歷ニ十代一之言可ニ以爲一
レ證也白ニ平城一至ニ醍醐一十代也平城者桓武長子號ニ
奈良帝一▲山案ずるに此事につきて繼體の天子な
ど云ならひあれども先此說にしたがふべし
霞たつ ◉萬葉にはぬえこ鳥と有文　頭書云▲萬
葉集第一幸ニ讃岐國安益(アヤ)郡一之時軍王見レ山作歌
霞立　長春日乃　晩家流　和豆肝之良受　村肝乃
心乎痛見　奴要子鳥　卜歎居者　珠手次　懸乃
宜久　遠神　吾大王乃　行幸能　山越風乃　獨座
吾衣手爾　朝夕爾　還比奴禮婆　太夫登　念有
我母　草枕　客爾之有者　思遣　鶴寸乎白土　網(アミ)
能浦之　海處女等之　燒鹽乃　念曾所燒　吾下情
仙覺抄にはわつきもしらずはわびしきもしらず
といふこゝろなりむらぎもとは餘のことなく一向
に思歎ことあるその肝むねにこるをいふなりうら
なきはしたなくこゝろなり玉たすきはかけのとい
はんためなりとをつかみは皇をかみといへるなり
かみとはよろづをかゝみたまふゆへなり明王は天
下上下をかゞみあきらめたまふゆへなりますらを
は増荒男なりたけきものゝふなりたつきはたより
なりあみのうらは非ニ名所一網ひくうらの惣名な
り文
鵺鳥も喚子鳥の云々　◉彼眞言書に喚子鳥といふ
は鵺の事なるうへに萬葉の歌にぬえこ鳥もかく春
日になく心あれば春の物といふ喚子鳥の事ざまに
似通ひて聞ゆると也是も落着してはかゝざる文章
也文　頭書云▲眞言書にある喚子鳥は鵺なりと兼
好落着せり其鵺鳥も古今のよぶこ鳥の事ざまに通
ひて聞ゆるとなり眞言書に鵺をよぶこ鳥と訓せた
る故に萬葉の長歌を引たるとみればふしんなきな
りさてこゝのならひは鵺鳥は怪鳥なるがゆへによ
ぶこ鳥のことざまに通ひてきこゆといふ事なり奎
▲山井曰或說に鵺をよぶこ鳥と訓をつけしに意得
あり鵺鳥は夜鳴鳥なり故に字も夜鳥と書しなり殊
に夜更て鳴鳥なり故に夜更鳥と書てよぶこどりと
よむよぶこどりと云意り(なりカ)また或人の曰此說は鑿な

り只喚子鳥はすべての鳥の異名としるべしさるによつて右の冠考にあるが如く歌によつてかはるなりしかるに喚子鳥は春の物なりとかぎりて云しは以二鳥鳴一春と韓文にも書たるごとく鳥と推出していへば春になるなり小鳥の色鳥などいへば秋にもなるなり今鳥の囀るといはねば春にならずして只雑なりしかるに喚子鳥にかぎりて春のものなりといへるに習ある事なりと也兼好眞言書にいへる鵺とよぶこ鳥とことざま似かよひたるといへる發明良に由ある哉僖此書に喚子鳥の事をかくあさ〳〵しく記せるによつて兼好は古今傳授なき人なるべしなどゝ貶る者あり此義僻事也和歌の四天王とゆるされし人の古今傳授これあるまじきや其上兼好世を遁れ佛道に志す身にては物を秘すると云ことあるまじく何事によらず諸人にしらせて其疑をやめたきとの慈悲の心なる故に喚子鳥にかぎらず此書の全體皆かくのごとしと云々今案ずるに此二説ともに一理あるに似たれども古今直傳の人も此事は口外に出さゞれば其善惡の辨はしばらくこれをとゞむ

〔一段之統論〕●此段は小野小町がことゞきはめてさだかならずとある段と底意おなじ喚子鳥は古今集の傳授なれば習しれといはぬばかりの筆勢なり兼好時代まではこれ〳〵傳授なりなどゝ云事さへいはぬ事にいたせし故其比の書籍に傳授口決など書たる所多からず八雲御抄に喚子鳥は春の物なりとばかりあそばせりこれ書籍に書著さぬ證據也詮●此段喚子鳥は古今の傳授なれば只春の物とばかり知ていかなる鳥ともさだかにしれる人まれなるを今兼好の眞言書と萬葉集とを引合せて鵺の事ならんと發明し出せるをひろく人にしらしむる例の慈仁の心なるべし句

〔二百十一〕萬の事はたのむべからず愚なる人はふかく物を賴むゆへにうらみいかる事あり

愚なる人　頑愚なるものゝならひにて物ごとに一偏に心得る也說

うらみいかる　●其賴たる事の相違する時必怨怒るなり諺

事あり　●是迄の三四句通章の大意なる事をしるべし句

〔第一節〕●萬の事と云よりこゝまで也此段五節に分ち可レ見文段も如レ此●一段の大意を云出して次次に其まこゝろを云のぶるなり盤

いきほひありとて頼むべからずこはきもの先ほろぶ財多しとてたのむべからず時の間に失ひやすし才ありとて頼むべからず孔子も時にあはず徳有とてたのむべからず顔回も不幸なりき君の寵をもたのむべからず誅をうくる事速なり奴したがへりとてたのむべからずそむきはしる事あり人の志をも頼むべからず必變ず約をもたのむべからず信ある事すくなし

いきほひ　●威勢權柄也說

先ほろぶ　●蘇我入鹿平の政門がたぐひ威勢剛力有て早くほろびたり文●項羽の力山を拔暗噫叱嗟千人皆廢する程なれども終に寛仁大度の人にほろぼさる此ゆへに舌柔にして長く存し歯堅して先折る事は常樅が戒にして老聃よく此心を得たり　頭書云▲淮南子厚道訓曰兵强則滅木强則折革固則裂歯堅ニ於舌一而先レ之敝▲列子黄帝篇老聃曰兵强則滅云々膚齋口義曰兵强則滅者恃ニ其兵力一以爭戰者必亡也木强則折者如レ藤如レ柳則難レ折木則易レ折也參▲三略曰柔者徳也剛者賊也▲又曰威多則蹶講義云威多則反ニ陷其身一此韓信黥布之不レ克レ終者威多也野

たのむべからず　●鉅橋鹿臺は何の益なく紂が寶財を衣て焚死ぬ阿房の鼎鐺玉石金塊珠礫も子羽一炬の火に驪山三月紅なりし野

失なひやすし　頭書云▲咸實論卷第十四曰富貴不レ久還爲ニ貧賤一參

才　●才智なり句

時にあはす　●時とは時の運をいふなり參●尤周末氣運おとろへたる時出られし故終に君師の位を得たまはすして卒給ふ也諺　頭書云▲楊子法言淵騫篇曰聖言聖行不レ逢ニ其時一聖人隱也宋咸註曰仲尼亦然▲撃壤詩曰富貴如レ將ニ智力一求仲尼年少合レ封レ侯世人不レ解ニ青天意一空使ニ身心半夜愁一參▲史記儒林傳孔子干ニ七十餘君一無レ所レ遇▲莊子曰孔子再逐ニ於魯一窮ニ於齊一伐ニ樹於宋一圍ニ於陳蔡一不レ容ニ身於天下一野▲論語曰道不レ行乘レ桴浮ニ於海一增鐵

不幸なりき　●さいはいならずと訓ず今いふ不仕合の類也說●徳行有し顔淵も不幸短命にして死す

諸　頭書云▲論語曰有ニ顔回者一不幸短命而死矣野
▲史記顔淵年二十九而髮白三十二而蚤(ハヤク)死参
誅をうくる事速也　●我朝にては惠美押勝梶原景
時など一旦君寵を得たれとも終に誅せられぬ異國
にては楊貴妃國忠も果して馬嵬の鬼となれり又衛
の彌子瑕が事なと思ひ合すべし説　頭書云▲山井
案に史記六十三韓非傳曰說難云昔者彌子瑕見レ愛ニ
於衛君一衛國之法竊駕ニ君車一者罪至レ刖(アシキラル)既而彌子之
母病人聞往夜告レ之彌子矯駕ニ君車一而出君聞レ之而
賢レ之曰孝哉爲レ母之故而犯ニ刖罪一與レ君游ニ果園一彌
子食レ桃而甘不レ盡而奉レ君君曰愛レ我哉忘ニ其口一而
念レ我及ニ彌子色衰而愛弛得ニ罪於君一君曰是嘗矯
駕ニ吾車一又嘗食レ我以ニ其餘桃一故彌子之行未レ變ニ
於初一也前見レ賢而後獲レ罪者愛憎之至變也云々上下略
▲文選阮嗣宗詠懷詩曰布衣可レ終レ身寵祿豈レ足レ賴
▲太上感應篇經曰受レ寵若レ驚註曰一旦失レ寵禍必
勃至豈不ニ果可一レ驚乎参
そむきはしる　●上の句と此句と君臣たがひにた
のむべからぬ義をいへり彭寵梁冀柳公權張之定が
僕本朝の枚夫がやつこ本三位中將重衡卿のめのと

の類主人をあざむき背くもの其數しらず参　頭書
云▲後漢彭寵は光武に隨はずして魚陽にありける
が其奴にあざむきころさる梁冀が妻孫壽は其奴に
通じて冀も終に奴にころされたり柳公權が奴は杯
盃をぬすみ張之定が奴は銀器(バイス)をぬすめり日本にて
も播州犬寺は蘇我入鹿か臣に枚夫と云者あり其妻
奴とたはけて奴枚夫をあざむき山中に入狩をせん
とて是を射殺さんとす枚夫二犬あり一犬飛て奴の
弓弦をくひきり一犬をどりあかりて奴の喉をくひ
ころす枚夫犬のために寺を立今の犬寺是なり元亨
釋書にあり野　▲本三位中將重衡卿の馬たふれける
にめのと我馬をまいらせずしてにげて終に中將を
生どらせし事平家物語にあるたぐひなり文　▲王盧
中淨土文曰一僕未レ歸己變ニ其失一参
賴むべからず　●朋友智者の信を變ずる事尤おほ
し諺　●凡士卒心を變じ敵となり見かたとなる事古
今甚おほし朋友の間も又しかり野　●山案に野槌レ
說いかゝなり上の奴といふ句に士卒の事こもれり
此句は只朋友の交と見るべし　●張耳陳餘刎頸の交をむすひしかとも

忽に敵となりて張耳韓信と同く陳餘を殺す又朋友の道始終とをる事まれなる故に朱穆絶交論を作り劉孝標廣絶交論を作る野▲山案に此一句尤朋友の事をいふに似たれども男女の中の事と見るへし前の句に朋友の事をいひければ也されば君臣朋友夫婦の三倫をあげたり父子兄弟の二倫は骨肉の親しみなれば聊も不孝不弟の者あるべき義ならずさるによつて頼むへからずとはかゝざるか勿論君臣朋友夫婦も義別信の道をもつて交れば努々踈略あるべき事ならねども此三倫は外の交りなれば時として頼みがたき事あり　頭書云▲元輔歌に「ちぎりきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山波こさじとは　定家卿歌に「しかばかり契りし中もかはりけり此世に人をたのみけるかな此たぐひをほし文

〔第二節〕●いきほひ有てと云よりすくなしまてなり●此節は萬たのまれぬ品を書つらねたり文●山案ずるに此節才ありとて頼むべからず孔子も時にあはず德ありとてたのむべからず顔回も不幸なりきといへるところに論あり先野槌曰孔顔の心をしらずんば孔顔の樂を得がたし時にあはさる不幸短命なるとて此段前後に常の人と書つらねたる是ひがことなりされど莊子に此體あるによりて兼好が例の筆法なるにや賈生が仲尼墨翟之賢と云退之孔墨相用といへるだに識者の異論なきに非ず又參考曰儒者の評議に賈生退之が筆勢に同じとてそしれども此一章の筆躰さにはあらず余人の事とては一人も名を出さずして只孔顔の二人のみをよびあぐる事はかほとの聖賢の才德ある人も君師の位を得ぬときは凡人は猶以我道德をたのむべからずと心をあきらめさせんとての敎なるべし其子細は孔子も顔回もといへるもの字にて其意を見るべしかほどの人なれどもと云義なき平人とならべていへりとは過當のそしりやうなり誰の名も此章には外によび出したるものなし兼好の孔顔を踈にせぬ所をよく〱見るべしまして法師の筆づからにはこれよりほかさらに書べきやうなし其家にむまれたりし退之が孟軻荀卿以レ道鳴者也と云るほどの失にては有ましきかと覺へ侍る▲又盤齋曰孔子に才といひ顔回に德といふをある人不審せり德は本なり才は末なるにいかでかく云ぞ兼好儒學なき故也と

云々此難はかへりて儒しらぬ人なり漸四書なんど字よみして孔子は尊く顔回は其次なり德は尊く才は其次と云事をおほへて此難あるなり先德と才と孔子に兼備なきにあらす顔回もなきにあらねども事により時によりて德を表にいふときもあり才を裏に云こともあり孔子は周室の王道を興し給ふ心あるゆへに天下を治る才を表にいひて孔子ほどの大成の聖人も時が來らねば才をほどこし萬民を安樂にし周公の道にかへす事ならねば才有とて其外の者が必道を天下に行むとすることなかれとなり又顔回才なきにはあらねども孔子にゆづりて出てつかへずしてをのれが德を全して有けるなり身のために道を行ひぬれは何事も幸ひあり福祿壽もありぬべきかと思へば不幸短命なりされば德ありとてよき事のあるにもあらずとなりかく云ことは才をほどこしてもしならぬときくやむまじきなり孔子さへとをもへと也出てつかへずして身を全くしてもよきことのなき時顔回さへ不幸なるとしりてうたかふまじきとなりこゝをあしく心得ぬれは孔子の才もやくにたゝず顔回の德もかひなければ才德をいらぬ物よとこゝろへぬる也さにてあらぬ事也人しらずしかるをいからざるを君子なりと論語にいへる心と見るべし又新註曰孔子に才といひ顔子に德と云才は氣より發して人を敎化し物に及ぶところ廣大なり德は性にもとづきて自巳の守にて狹隘なりたとへば德は灯の體才は光の物に及がごとし其用なり孔顔の度量はるかにへだゝれりと云云又或人の説に孔子は其德を才にあらはして人を導玉ふ也顔子は自己の德は能守り玉へど其德をば才にあらはして人を敎化し玉ふ事不レ能によつて兼好かく書しなるべしと云々愚案ずるに此二説は一理あるといへどもすこし病ありされば孔顔の道を行ひ玉ひし跡を見れば大聖亞聖の分ちあるに似たれども其道を得て才德兼備のところにいたりては孔顔の異あるべからず顔子は孔子の時逢たまはざるを見て才をかくして自巳一分の德ばかりを修めたまへるなり若其時孔子世に出玉はずは顔子も孔子の如くに才をあらはして道を弘むるやうになし玉ふべきなり顔子に才なきと云事ゆめ〳〵あるべからず孔顔地を易へばそれしからん歟

身をも人をもたのまされば是なる時はよろこび非なる時はうらみず

是なる時は　●是は我心にかなふを云非は心にかなはぬをいふ増鐵 ●兎角物を頼まさればうらみも生せぬもの也との事をいへり是は我を頼まざればうらみも生ぜぬものなりとの事をいへり壽抄に兼好心は是なる時も悦ふべからざれども人情を助て是なる時はよろこひと書たる事おもしろし惠空按ずるに佛さへ他をすくふ前には悲喜の心をこし給ふとあればこゝがおもしろき所なり又山谷東坡賛を作れる詞にて此所を見るべし参 ●異説あり　頭書云▲山谷作二東坡賛一曰其愛レ之也引レ之上二西掖鑾坡一是亦一東坡非亦一東坡其悪レ之也投二之於鯤鯨(コングイ)之波一是亦一東坡非亦一東坡野 ▲問　或説野槌ヤ句解ノ説也に是なる時はよろこび非なる時はうらみずの二句連續したる詞なり是なる時もよろこばず非なる時もうらみさるなりといへり如何答其説是なるときは非なるときはといふはの字に不快なり只壽抄の説よくてにはを聞得たるのみにあらず亦兼好の本意をよく見とれり若是なる時もよろこひ非なるときもうらみずとあらば連續の詞ともきこゆべきにや文 ▲大全には是なるときはよろこび非なる時はうらみずと書て其説に曰異本に非なる時はかならずうらみずとありこれはあしき歟其故は是なる時はかならずよろこびつるは常なりかねてより信もなく約もたかふ物のならひ成しに思の外に是なれはなり又非なる時もうらみずとはこれもとより其ならひなればうらみずとなり此非なる時もと云も文字を用ゆべし非なる時はと書たる本はあしきなり

〔第三節〕●身をもと云よりうらみずまで也●此節はものをたのまざればうらむることなき事をいへる決前生後の詞なり文

左右ひろければさはらず前後とをければ塞がらずせばき時はひしげくだく心を用る事少しきにしてきびしき時は物にさかひあらそひやぶるゆるくしてやはらかなる時は一毛も損せず

左右ひろければ　●我心を寛大にもつ時は外の物に煩はされぬ事をたとふ諺

前後とをければ　●是も前と同したとへ也　頭書云▲左右ひろければさはらず前後遠ければふさが

らずといへる此二句をしひろめていはゞ大學の絜矩の道孟子に左右逢二其源一と云の義にもかよふべし野
せばき時は　●心をちいさく用ひて必とすれば喜怒これにさはりて物のためにわづらはさるゝ譬也文　頭書云▲莊子天道篇輪扁曰徐側甘而不レ固疾則苦而不レ入不ノ徐不レ疾得二之手一而應二於心一野
少しきにして　寛大ならず諺
きびしき時は　●溫和ならす諺
さかひあらそひ　●文段參考にはさかひの三字なくあらそひてと書り
やはらかなる時は　頭書云▲老聃曰柔弱者生之徒堅强有死之徒參
一毛も損せす　●心常に柔和なれば一毛のはしほども心を損耗せずと也參　頭書云▲列子曰楊朱曰古之人損二一毫一利二天下一不レ與也人々不レ損二一毫一天下治矣▲孟子曰楊子取レ爲レ我拔二一毛一而利二天下一不レ爲也野　▲法華經不レ能レ損二一毛一句　▲林鬳齋が列子口義にいへる如レ藤如レ柳則難レ折といへるの心なり參

〔第四節〕●左右ひろければと云より一毛も損せずまでなり●此節は心の用ひやうを敎へたり文
人は天地の靈なり天地はかぎる所なし人の性なんぞことならん寛大にしてきはまらざる時は喜怒是にさはらずして物のためにわづらはず
人は天地の靈　●靈とは靈明とて智などのあきらかなるを云也參　●人の心は天地と等しく廣くも用ひらるべき物ぞといはんとて書出たる也文　頭書云▲周書泰誓惟天地萬物父母惟人萬物之靈蔡氏傳云天地者萬物之父母也萬物之生惟人得二其秀一而靈具二四端一備二萬善一知覺獨異二於物一而聖人又得二其最秀而最靈一者▲孝經曰天地之性人爲レ貴孔安國傳云凡生二天地之間一含氣之類人最其貴者也野　▲漢書にも二儀のかたちを受たる中に人最靈なりと見へけるを顏師古が注を見れば頭の圓は天にかたどり足の方なるは地に法て萬物の中に靈なるもの也といへり參
かぎる所なし　●人の性理も天地同體なれば其かぎりなき天地といかでことなる事有べきやと也參
頭書云▲宋陸子靜曰天地何所窮▲又曰宇宙吾分內

事▲又曰東西海聖人同二此心一同二此理一南北海聖人亦同▲又曰人在二無窮之中一野 ▲六家集定家歌に「天地とかぎりなかれとちかひおきし神のみことぞ我君のため参

性なんぞ ●天地と人の性とことならねば心を廣く用ひば用ひらるべき物ごとの心也文 ●性といふは即明德なり是を佛性ともいふ也増鐵 ●此所に論あり節分のところにくはしく辨ず

寛大にして ●ひろくおほひにして也諺 ●寛は地の廣がごとし大は天の大なるがごとし新注 寛順大度などいふとおなじ文

喜怒是にあらず ●情なり参 ●これにといへるこれは上の人の性といへる性の字をさす句 ●是とは心をさしていふ也増鐵 ●心をせばくきびしくせずして豁然とほがらかに用ひる時はよろこびいかりの情も其さはりとならずして常に身心安樂なるべき也故に外より來る物のために煩はすと也参 ●此所に論あり 頭書云▲論語曰顏回不レ遷レ怒程子曰顏子怒在レ物不レ在レ己故不レ遷又曰喜怒在レ事則理之當二喜怒一者也不レ在二血氣一則不レ遷若二舜之誅二四凶一也可レ怒在レ彼己何與焉如二鑑之照一レ物妍媸在レ彼隨レ物應レ之而已何遷之有野 ●舊抄野槌の説にもいへるごとく喜怒は聖人も有事也喜怒すべき時に喜怒するを已發の中となづけ其理そなはれどもをこらざる所を未發の中と名づく顏子不レ遷レ怒と云るもすでに怒るべき時にいかりて又其を他へうつさゞる義なりといへりこのころ黄壁開山隱元事實をしるせる本をよみ侍しにかの隱元の行跡とてのせたるを見れば事之是必膺レ已從レ之事之非必覿面叱レ之極燥辣處極其慈悲極慈悲時極其燥辣と見へたりこれこゝの心によくかなへり道人はたとひ覿面に非を見ていかる事ありとも本心はさはる事なきゆへに極て慈悲なりよのつねの人は喜怒のためにさへられて其本心をくらます事あり是兼好の今の敎誡なりかつて喜怒をすてよとにはあらで喜怒これにさはらずとかける所世人のをしへによき筆跡なりとしるべし参

物のため ●萬物のためになり諸

[第五節] ●人は天地と云より終までなり ●此節は心をひろく用ふべき事を彌をしへて發端に應じて

一段を決せり文●山案に此節は一段の肝要なり天地とひとしく寛大なる本心を人欲の私にひかされて一偏にをち心をちいさく必と用ひぬる故に喜怒哀樂心にさはりて見るもの聞事につけてわづらはさるゝなり歌に「ひろき世に心とせばくなりにけりすむ人からの柴の戸の内これは眼裏有レ塵三界窄といへるこゝろをよめるなり一旦豁然として天地の性に復るときは物のために少しもわづらはされぬなり此所に思ひあやまる事あり喜怒を發さずして草木瓦石のごとく無情になれとにはあらず人として賢愚ともに七情の發せぬと云ことなし理にあたつて發するを道とす理にあたるが故に喜怒發しても天地同體の性にさはることなくして安然たりされば大學に心廣體胖なりといへるもこれなるべし若本より喜怒の發らぬやうになすべきとせば却て本心をとりうしなひてものゝためにわづらはさるゝ事多からん張南軒の詞にも有レ主而虚者觸レ之而應無レ主而虚者觸レ之而亂といへり良に故ある哉●さて前に是なる時はよろこび非なる時はうらみずといへるは壽說の如く人情の上を述たり此所にいたつて喜怒是にさはらずといへるは是非ともにかゝはるまじき事をのべたり是兼好の本意●又天地はかぎるところなし人の性なんぞこれにことならんと云所を參考抄曰是は一往儒教の心にて書るなるべし釋門より見るときは虚空も我大覺の性の中に出生したる事片雲の大清裏にたなびくがごとくと心得る金剛經の序にも天地豈能同二其大一乎といへるは是なり今案ずるに此序の意は我心法の廣大無邊なるところをしらしめんためにかくいへり天地より大なる心もなく心より大きなる天地もなしこれを天にあつては理と云人にとつては性と云ふ佛家には本來面目とも妙とも名付異名同體にして前後淺深なきなれば此所は儒教の心のみともいひがたし

〔一段之統論〕●此段は人のこゝろもちを書たりたのむところかなければしづかになるなりたのむ故にこゝろがさはぎ物にうばゝれてしづかなる事なきことはり也盤●此段老莊のむねをのべたりよくよみ侍れば心ひろくなり物をたのむ事を忘却するぞ一部の中のよろしき段とぞ名利牛の段にもをと

るまじ又萬の事はたのむべからずといへる發端の一句奇特也又類の字十一ありて同じからず上の二の類の字と下の一の類の字義ひとし中八の類の字は意すぼし其事一偏をいへり上の三の字はいふ所はなはだひろし新注

〔二百十二〕秋の月はかぎりなくめでたき物也いつとても月はかくこそあれとて思ひわかざらん人は無下に心うかるべき事なり

秋の月はかぎりなくめでたき　●愛し度也新注　前にくはし●秋は五行の中金氣さはやかなる時なればいつよりもわきて天もたかく見ゆるものなり殊に月は水の精なれば金と水と相映して光瑩餘の三時にすぐれたる故に限りもなく愛すべき物と也参

頭書云▲歐陽詹翫月詩序月之爲翫冬則繁霜大寒夏則蒸雲大熱雲蔽月霜侵人蔽與侵俱害翫秋之於時後夏先冬八月於秋季始孟終十五於夜又月之中稽於天道則寒暑均取於月數則蟾兎圓況埃壒不流大空悠々嬋娟徘徊摶華上浮昇東林入西樓肌骨與之疏涼神氣與之淸冷野▲秋は陰の時月は陰の精なれば時節相應にて淸光かぎりなかるべければなり古今集に「久かたの月の桂も秋くればば紅葉すればやてりまさるらん山家集に「天原をなじ岩戸を出れとも光りことなる秋の夜の月此類あげてかぞへがたし文

思ひわかざらん　●秋月と春夏冬の三時の月と思ひわかざる人はとなり句　頭書云▲張景安仲秋詩四時此月曾無別人自今宵冷眼看と作れるも又思ひわかざる人なるべし句

無下に　●殊外にいやしめたる詞也前に委

心うかる　●秋の月に別にして心をつけて見ぬはほいなきわざなりとぞ新注

〔一段之統論〕●此段は時節の相應を感ずべきとなり壽●前段に世間のことたのまずあれどこれ〳〵の大意を書より月花には心をうつしてもよしとなり前に四季の段の次に空の名殘のをしきといひしに思ひあはすべし盤●山井案に或問曰秋の月ばかりかぎりなく愛すべきものなりといへるは偏見なり彼花は盛に月はくまなきのみ見るものかはといへるとは相違のやうに覺ゆる答曰此所にて兼好の心の寛大にして天地同體なる事しられたり前の段

は古人のいまだいはざる發明をなして彼愚人の一偏に月花を愛することを拆ていへり又此段は兼好の發明の詞に泥みて月は常住にあれば秋にはかぎるべからずと思ひくたして秋の月の時節相應の理を知ざる人あらんことを抑ていへりまことに一偏になき兼好の志ひとへに有難し色好ざらんの段と酒の段の褒貶と同じ意なるべし

〔二百十三〕御前の火爐に火をおく時は火ばししてはさむ事なし土器よりたゞちにうつすべしされはころび落ぬ樣に心得て炭をつむべきなり八幡の御幸に供奉の人淨衣を着て手にて炭をさゝれければある有職の人しろき物を着たる日は火ばしを用るくるしからずと申されけり

御前の火　●天子の御前也句

火爐　●和名に比多岐とあれども爰には火ろとよむべし壽　頭書云▲源氏御幸に六條院より御み三寸酒賛き御へすみ火ろなどたてまつらせたまへり壽

たゞちに　●直になり諺

炭をつむべきなり　●前かどに手に付ぬやうに油をもて拭てつむなり諺

御幸に　●いづれの御時の御幸にや是を尋ぬべし後醍醐天皇重祚の後石淸水みゆきの事太平記にあれどこれは行幸なり御幸にあらず文　●又是よりは火ばしを用る事も有事をいへり諺

淨衣を　●白張裝束なり古

炭をさゝれ　●炭をさしをく事なり文

火ばし　●淨衣をけがらはしくすまじきため說

〔一段之統論〕●此段は故實をかけり文　●此段は前の最勝講の奉行の段と心同じ時によろしき事を敎へたり有識とは時によろしくすることなりと也今はともあれかくもあれ古例が如ㇾ此といふは記になづむとてきらふ事なりと也盤　●此段は上の段に四季の月光を皆同觀する人の心あさゝをそしりて秋ぞ第一なるべき趣をしるせるにうけて御前の火爐に火をおくには必火箸を用ひぬとばかり心得たる人の偏見をあげて又時によりて火箸をも用る故實を書あらはしたり句　●今世の數奇の爐中に一つ大きなる炭を手にてをくもこれ師の名殘にやとをかしく侍る貞

〔二百十四〕想夫戀といふ樂は女男をこふる故の名に

はあらず本は相府蓮文字のかよへるなり晉の王儉大臣として家にはちすをうへて愛せし時の樂也これより大臣を蓮府といふ廻忽も廻鶻なり廻鶻國とてゑびすのことは國有其夷漢に伏して後に來りてをのれが國の樂を奏せし也

想夫戀　頭書云▲源平盛衰記に仲國嵯峨法輪へ小督局を尋行て其琴をきくに夫を想て戀るとよむ想夫戀といふ樂なりとあり此義あしきなりと此章に云也白氏文集六十八想夫憐詩玉管朱絃莫ニ急催一客聽歌送十分盃長愛夫憐第二句請君重唱ニ夕陽開一野

女男をこふる　●想夫戀の事源平盛衰記平家物語などに見えたり白氏文集韵府等には想夫憐と有をあやまりて憐を戀となせるなるべし諸

相府蓮　●相府は大臣の唐名なり相府蓮の樂の事は晉の王儉が故事也次にくはし言は相府蓮と書が本說なると也諸　頭書云▲韻府云于蘭(ウテヤガ)謌笛曲有ニ想夫憐一名ニ不雅一客曰南朝製曲號ニ相府蓮一訛 訛爾即王儉蓮幕事野　▲山案に相府蓮は皇麞萬歲樂に同じ平調の樂なり▲但し舞はこれなし枕草紙にしらべは風香調黃鐘調蘇合の急鶯のさへづりといふしらべ相府蓮とあり又拾芥抄には想夫戀とあり

文字のかよへる　●想夫戀相府蓮文字の聲の通ずる故也文

晉の王儉　頭書云▲排韻曰王儉字仲寶袁粲曰此兒雖レ小已有ニ棟梁之器一年十八拜ニ秘書郎一仕レ齊領ニ吏部一用ニ庾杲之一爲ニ長吏一蕭沔(セウメン)與レ儉書曰庾景行泛ニ綠水一依ニ芙蓉一何其麗也時人以ニ儉府一爲ニ蓮華池一壽

蓮府といふ　●王儉齊の尙書令となれり儉大臣たりし故に大臣を蓮府と申なり野

廻忽も　●上の相府蓮の事をいひしにちなみて此所も又廻忽と云樂の事を云り參 ●廻忽又は回忽又は回鶻又は回紇などゝ書り唐書に回鶻傳有句 ●此所のこゝろは廻忽あしくて廻鶻がよきと也說

廻鶻國とてゑびすのことは國有　●廻鶻國は始め薛延陀と云又中比高車部と云しと也文 ●大明一統志には長安を去事八千一百里と云々諺 ●北の胡國なり新註　頭書云▲通鑑註薛延陀其先匈奴自ニ藥葛羅氏一居ニ薛延陀北安陵水上ニ元魏時號ニ高車郎一郎當作レ部唐初爲ニ敕勒諸部一唐德宗時請改號ニ回鶻一言其捷鷙

猶ニ鶻鳥之飛ー也△唐書回鶻列傳云回紇其先匈奴也俗多乘ニ高輪車ー元魏時亦號ニ高車部ー云々△十八史略第六唐憲宗元和三年沙陀朱邪盡忠與ニ其子執宜ー來降沙陀勁勇冠ニ諸胡ー吐蕃毎レ戰以爲ニ前鋒ー後疑ニ其貳ニ於回鶻ー欲レ遷ニ之河外ー擢而歸レ唐處ニ之靈洲ー注福本作レ紇德宗時請改曰レ鶻々鷙鳥也取ニ其鷹揚之義ー野

其夷 ●則回鶻國の事也説

漢 ●中國の惣名也新註

伏して後に ●歸伏して也或は服の字を書たる本もあり句

をのれが國の樂を奏せし也 ●奏はかなづると訓ず句 ●蠻夷の歌曲中國に來る回鶻にかぎらず和漢ともこれ多し粗冠考に備へしなり　頭書云△蠻夷の歌曲中國に來る廻鶻の外に胡旋胡騰涼州甘州扶南高麗高昌龜茲康國疎勒などの類樂府雜錄にあり或は舞或はうたふと見へたり白氏新樂府にも胡旋女は天寶の末康居國より献道州民は道州より貢じ蠻子朝は鄢州より來り驃國樂は貞元十七年に來り西涼伎は安西より送來る又日本にては高麗百濟新羅林邑渤海任那などの舞曲を奏する事國史續日本紀等に載たり聖武天皇の時南天竺の婆羅門菩提林邑國の佛哲來れり天皇則雅樂寮に勅して音樂を調へて是をむかふ日本樂部中に菩薩拔頭舞林邑樂などは彼佛哲の來て傳たるなり村上天皇の秦氏安に問給ひし勅策にも船木之新蘇羈人爲ニ美談ー魚丸之世羅國世稱ニ妙舞ーとありとかや野

〔一段之統論〕●此段樂の名目の覺悟をあらはすものなり壽 ●此段は音樂の名の文字のあやまりをただして正字意義を人にしらしむ皆兼好の例の慈仁の心なるべし句

〔二百十五〕平宣時朝臣老ノ後むかし語りに最明寺入道あるよひの間によばるゝ事有しに頓而と申ながら直垂のなくてとかくせし程に又使來りて直垂などのさふらはぬにや夜なればことやうなりともとくとありしかばなへたるひたゝれうち〳〵のまゝにて罷たりしにてうしにかはらけとりそへてもて出て此酒を獨たうべんがさう〳〵しければ申つる也さかなこそなけれ人はしづまりぬらんさりぬべき物やあるといづくまでももとめ給へと有しかばしそくさしてくま

くまをもとめし程に臺所の棚に小土器にみその少しつきたるを見出てこれぞもとめえてさふらふと申しかば事たりなんとて心よく數獻にをよびて興にいられ侍りき其世にはかくこそ侍しかと申されき

平宣時　●大佛陸奥守也　頭書云▲大佛陸奥守宣時は武藏守朝直が三男なり北條時政四代の孫也●東鑑云治承十五年自弘安十年至正安三年北條五郎時忠後改宣時野

桓武天皇——葛原親王——高見王——高望王—

—良望——貞盛——維將——維時——直方—

—聖範——時直——時家——時方——時政 是まで は

—前に在 時房 修理大夫相模守大佛 —朝直 正五位下 —宣時 陸奥守従五位上執權 永恩寺殿

最明寺　●時頼の事前に委

よばるゝ事有　●宣時を最明寺殿よりよばるゝなり説

頓而と　●やがてまいらんと申ながら宣時の詞なり諸

とかくせし程に　●遲參せし程に也説

又使　●最時寺殿推量して也諺

夜なればことやう　●異體にて也とも也壽●夜なれば直垂などに行儀をたどしつくろはずともはやく來られよと也句

なへたる　●淸濁の二説あり先淸說に大全曰しなへたると云心ならば着なれてしほたれしさま也諸抄同じ●又濁說に大全曰をしなべて着たる直垂也はれ着ならぬ也なべをめとよむ也野槌曰常住着たる直垂也鐵槌古今抄等も同じ前說まさるべき歟

頭書云▲ふるきひたゝれのなへしほれたるをいふはゝきゞになへたるきぬともと書りなへのへに濁りを付てなべたるとなしたる本多しあやまりなるべし句

うちうちの　●内々也諺●平生體のまゝにて也參

てうし　●銚子也文

そへてもて　●最明寺殿の持出て也文

獨たうべんがさうざうしし　●ひとりたべんがさびしければ也文　頭書云▲催馬樂に酒をたうべてたべゑひてとある詞なり文

申つるなり　●よび申つると也

人はしづまり　●入道殿の詞也もはや内のものも

静に寝つらんと云るゝ也古 ●此人はねしづまりぬらんとて奴僕をよび起しもせず人を心やすくねさせたる事最明寺の慈仁の心にしてかの六方禮經にとき給ひし飯食を時ならぬ時用て奴僕のものをなやます事をいましめ給へるにも暗にかなへり参

さりぬべき ●しかるべき也古 ●肴になるべき物やあるといへる義なり句

しそくさして ●紙燭さしともして也諸 頭書云▲源氏夕顔の巻に惟光にしそくさしてありつるあふぎなどゝあり紙燭とぼしてと云心なり古

くまぐま ●隈々曲々と書文 前に委し●ものゝかけのくらき所をいふなり野

もとめし程に ●宣時の物のかくれ／＼をもとめ給ひし也説

みそ ●常には味噌と書 頭書云▲俗に味噌と書倭名集には未醤とかく美蘇の訓なり本説詳ならずつきくだきこまかなるを末と云を誤て未の字を書し其音をひきて味の字をかくといへり今本草にて見れば鹽豉豆豉これなんみその類ならじされど豉はしほうちまめとよめり野

事たりなん ●足の字●此一句通章の骨子ならん山井案 頭書云▲老子經知レ足不レ辱増鐵

其世にはかくこそ 其時代には如レ此にこそ儉約にありたれとなり壽 ●最明寺殿は北條九代の中の賢人なればかやうに儉約なりけれど此時分はやうやうおごりもてきたるをいきどをれることばなるべし文

かと申されき 此かは哉の義也句

「一段之統論」●此段並に下の段とには時賴入道の天下の權をとれる身の上にて猶質素儉約を本とせられたる物語をしるして後世過差をこのむ者の龜鑑とす誠に儉者是廉之本奢者是僞之源儉より奢に行事はやすく奢より儉にひるがへす事はかたし且夫以レ約失者鮮矣とは古聖人の遺戒ならずや人々尤つゝしみよむべきは此段也句 ●第一章天下の執權たる人の儉約を守られし事の殊勝に覺へて記すと見へたり春齋が七武といへる書にもかきをさしごとく泰時德政を行ふと云ども經時時賴其道を推ひろめしとなれば北條九代の中には尤政道すなほなる事を中興せし人にして富でをごる事なし高時

にいたりてをごりし故にこそ亡びにければよく〳〵つゝしむべき事也結句の其世にはかくこそ侍しかと申されたりと云るにて兼好時代にやう〳〵をごりのましたる事をいきどをれる心こもれる詞なり

參◉山案に此段は儉約を守るべきことをいへりことに事たりなんとて數獻に及びて興にいられ侍りきといへるところ一章の肝要なるべし上天子より下庶民にいたるまでたることをしれば奢はをのづからやむものなり前聖の御代の段にもあるにまかせて用よといへり良に時頼禪門の心入ありがたし殊更天下の執權たる人はかくあるべきとなり上に奢を好むときは其下貧窮にして國家亂るゝ事古今これ多し誠盈篇儉則民不ㇾ勞靜則下不ㇾ擾民勞則怨起下擾則改乖とあり又齊の國に或者乞兒に向て汝かく乞食をなしてはづかしくなきかといへば乞兒答て吾乞食をなすは如ㇾ此城市の奇麗なるによつて也我すこしもはづかしきとなし天下の辱是より大なるはなしと云りと列子書り上たる人尤可ㇾ懼可ㇾ懼一說に時頼天下の執權たる人にてかく不自由なることはあるまじけれども萬民への戒のために加様にこしらへて見せられけるならしまことに松下禪尼の賢を受得たまへる人なればなり禪尼のあかり障子をはりなをされずしてつゞくり玉ひし志と同じきなりといへり今案ずるに此一義もさもあるべけれどこれもいまだ足ことをしらずして奢を好む者の心よりかく思ふならん

〔二百十六〕最明寺入道鶴が岡の社參の次に足利左馬入道の許へ先使をつかはして立いられたりけるにあるじまうけられたりけるやう一獻にうちあはび二獻にえび三獻にかいもちいにてやみぬその座には亭主夫婦隆辨僧正あるじ方の人にて座せられけりさて年毎に給る足利の染物心もとなく候と申されければ用意しさふらとて色々のそめ物三十前にて女房ともに小袖にてうせさせて後につかはされけり其時見たる人のちかくまで侍しが語り侍しなり

鶴岡　◉鎌倉の八幡也　頭書云▲二十二社註式曰本社者人皇七十代後冷泉院御宇伊豫守源朝臣賴義奉ㇾ勅定征ニ伐安倍貞任ニ之時有ニ丹祈之旨ニ康平六年

八月潛勸二請石清水一建二瑞籬於當國由比郷一今號二若宮一下人皇七十二代白河院治八年永保元年二月陸奥守源朝臣義家加二修復一今復奉レ遷二小林郷一改曆　雜事記曰後冷泉院天喜六癸卯年鎭坐▲神書を見れば祭るところの垂跡石清水と同じ神社便覽には伊豆に鎭座延久年中源義家勸請とのせたりこの說よろしかるべからざるなり前說を正とすべし名所方角抄云鶴が岡世には雲井が嶺といへり若宮八幡なり社壇西向なり在所雪下といへり磯邊十八町に大鳥井あり

參

足利左馬入道　●左馬頭源義氏也諸　頭書云▲源義氏正四位下左馬頭法名正義號二法樂寺一義康之孫義兼之男母北條時政之女

清和天皇人皇五十六代―貞純親王第六皇子四品中務卿上總常陸太守號二桃園一―經基右馬頭太宰大貳正四位上號二六孫王一天性達二弓馬一賜二源氏姓一―滿仲正四位上左馬頭鎭守府將軍―賴信從四位上左馬頭鎭守府將軍―賴義正四位下民部少輔伊豫守鎭守府將軍―義家正四位下―義國從五位下式部大輔號二足利新判官一―義康從五位下治部少輔號二足利一―義兼從四位下治部大輔號二足利上總介一驗河寺殿身長九尺二寸―義氏足利三郎

左馬頭陸奥守號二八幡太郎一　陸奥判官

あるじまうけ　●饗應と書●日本紀にて饗をみあへとよめり俗にもてなすとよむなり野

一献に　頭書云▲禮記一献之禮賓主百拜野

うちあはび　●熨斗鮑也野

もちい　●俗に萩花といふ物也文

亭主夫婦　●今時なき事なるゆへに人が不審する也昔は夫婦出て馳走するを懇志のいたりにする事也盤●女性などの客の中へ出る事は能々したしからずば有べからず足利左馬の母は時政の女なれば最明寺入道とも一門なり古●宋の大祖の故事など思ひ合すべし　頭書云▲十八史略六宋大祖自レ即レ位或微行幸二功臣之家一不レ可レ測趙普毎レ退レ朝不三敢脫二衣冠一一夕大雪普意上不二復出一矣久之聞二叩レ門聲一異甚亟出則上立二雪中一普惶恐迎拜即二普堂一設二重裀一地坐熾レ炭燒レ肉普妻行レ酒上以レ嫂呼レ之云々野

隆辨僧正　●鶴が岡の別當なり　頭書云▲鶴岡別當也宗尊將軍御不例之時致二祈禱加持一依レ爲二効驗一爲二恩賞一拜二領美濃國岩瀧郷一被レ任二僧正一吾妻鏡四

二十

さて年毎に　●年毎より下は最明寺殿の詞也壽
足利の染物　●足利にて染出す故なるべし今いふ加賀染などの類なるべし壽
心もとなく　●毎年たまはる足利の染物を入用候へば申請度候が如何俄の事なれば用意なき事もやと心もとなしと也句　●かくおも〳〵しからぬあひさつも儉約のゆへなり文
用意し　●左馬入道の詞也壽
前にて　●左馬の入道の前にて也句
女房　●工女ともなり説
てうぜさせて　●調の字也縫調へさせてと云る義也左馬入道の前にて縫調へさするは工女に念を入させん爲なるべし諸
つかはされ　●時賴歸られて後に遣す也説
語り侍し也　●其時といふより兼好の詞なり諺
[一段之統論]●此段は前章をうけてかくのごとく君臣心を合て年毎の染物といひ夫婦ともに出て饗應し奉るといひとかく上下うらみなき和睦の德殊勝なる事をのせたる也參●此段は儉約の道を敎へたり今時の下々の饗應もこれよりはよかるべし一天下の君のおなりにかはかりの儉約を用るまことに聖人の道にもかなひ侍らんありがたし新註

[二百十四]或大福長者の云人は萬をさしをきてひたふるに德をつくべきなりまづしくてはいけるかひなしとめるのみを人とす德をつがんとおもはゞすべからく先其心づかひを修行すべし其心といふは他のことにあらず人間常住の思ひに住してかりにも無常を觀ずる事なかれ是第一の用心なり次に萬事の用をかなふべからず人の世にある自他につけて所願無量也欲にしたがひてこゝろざしをとげんとおもはゞ百萬の錢ありといふともしばらくも住すべからず所願はやむときなし財はつくる期あり限ある財をもちてかぎりなき願にしたがふ事得べからず所願心にきざす事あらば我をほろぼすべき惡念きたれりとかたくつつしみをそれて小用をもなすべからず次に錢を奴のごとくしてつかひもちゐる物としらはながく貧苦をまぬるべからず君のごとく神のごとくをそれたふとみてしたかへもちひる事なかれ次に恥にのぞむと云とも怒恨る事なかれ次に正直にして約をかたくすべし此義をまもりて利をもとめん人は富の來る事火の

かはけるにつき水のくだれるにしたがふがごとく成べし錢つもりてつきざる時は宴飲聲色をことゝせず居所をかざらず所願を成ぜざれども心とこしなへにやすくたのしと申き

大福長者 ●こゝにては富饒の人を長者といふ也文　頭書云△翻譯名義集ニ曰長者西土之豪族也富商大賈積レ財鉅萬咸稱ニ長者一此方則不レ然蓋有德之稱也句 △もろこしにては貴年德ある者を長者ともいへどこゝにては天竺の善覺長者月蓋長者須達長者などいへるごとく富る者を云なりされども天竺にも十德そなはりたるを多は長者とす法華經信解品にも長者窮子の喩あり諸

德をつく ●智德にあらず利德なり古

すべからく ●如レ此なすべくは如レ此なすべしとうち返して心得る字義也句 ●すべからくとは須の字也二度べしとよむ也文字に書して見れば須ニ先修ニ行其心遣一とよむべし說

思ひに ●人間は常住なる物と思ひて財を惜てたくはへ置べし句 ●住しては其覺悟にとゞまる義也文

無常を觀ずる事 ●無常を觀ずれば無欲になる間利德をつくべきやうなければ也文

自他 ●我用人の用に付て也諸

所願無量也 ●所願も欲も同じ事なれば所願をいふをうけて欲と書り鐵

限ある財 ●財はつくる期ありと云をうけて也說　頭書云△通鑑汝以ニ有レ限之財一與以レ不レ可レ成レ之壽 △莊子養生主吾生也有レ涯而知也無レ涯以レ有レ涯隨レ無レ限殆已野 ●史記蘇秦傳云且大王之地有レ盡而秦之求無レ已以ニ有レ盡之地一而逆ニ無レ已之求一此所謂市レ怨結レ禍者也文 是らの語勢にてかけるにや

願にしたがふ事 ●上の所願は止事なきといふをうけて云說

ほろぼすべき ●貧になるはほろぶると同じ心也前にまづしくてはいけるかひなしといへる首尾なり文

小用をも ●少の要用も錢を遣べからず諺 ●又小要と書る本有

君のことく神のごとく ●我まゝにしたがへ用ひられぬたとへに君と神とを出せり諺 ●晉の魯褒當

時賄賂の道の盛りに行れけるをいきどをりて錢神論を作りて譏刺せり兼好も此論のこゝろをもつてかきたる所有野　頭書云▲荀子曰貴レ之如レ帝至乃畏レ之如二神明一参▲晋魯褒錢神論曰親愛如レ兄字曰二孔方一失レ之則貧弱得レ之則富强無レ翼而飛無レ足而走解二嚴毅之顏一開二難發之口一錢多者處レ前錢少者居レ後云々野

怨恨る事なかれ　●物にはづる心あれば時にあたりて金銀をもつかふべき故に恥にのぞむとも腹立恨みざれと也句●恥しらずになれと也文

正直にして約をかたくすべし　●金銀をつみたくはふる手だても僞り盗ては其事ならず約束をたがへ友にたゝれては富を求る道ふさがる故に正直にして又約をも違べからすとぞ句●此所少すみにくし委末の節分の下にしるすなり

火のかはけるにつき　●富のきたる事のやすきにたとふるなり諸　頭書云▲易乾卦曰水流レ濕火就レ燥雲從レ龍風從レ虎▲孟子曰猶二水之就一レ下也野

宴飲聲花　●宴飲は酒宴也聲色は音樂と女色也壽　頭書云▲荀子曰世之貴富者其於二聲色滋味一也▲抱朴子内篇曰凡人唯知二美食好衣聲色富貴一而已参▲尙書仲虺之誥曰惟王不レ邇二聲色一▲長恨歌傳玄宗深居遊宴以二聲色一自娯野

心とこしなへ　●長の字なり諺

やすくたのしと申き　●火福長者の云しとなり文「第一節」●ある大福長者と云より申きまでなり此段二節に分つ文段これに同じ●山案此節は先長者の詞をあげて富饒になる手立を敎へたりこれ次の節にてきびしくいましむべきためにかりに設ていへるなり良に不義の富榮は君子の惡むところなり孔子曰富而可レ求雖二執鞭之士一我爲レ之若不レ可レ求我從レ所レ好となり此所にいへる手立逐一道にかなはざること眼前なり但し正直にして約をかたくすべしといへる一句は聖賢の敎訓にもかなひたるに似たりされど道を行んためにすると利欲のためにするとなれば志には雲泥の差あり文段抄に云商人なども正直ならぬは得意をうしなふといへり約束かたき心にては心よはく事うけなどする事なくはじめよりいなといひてやむゆへなり畢竟心を固く客にもてとの義也又一説にこゝの正直はかたくな

しうせよと云心なり正直ものは約をたゞしうちがはぬやうにする故に我心に入ぬことは始よりことうけせぬなり何事によらず損失すべき義ならば少しにても人とかろ〳〵と約諾をせずなるほど心をかたくのしうして耻をうくるとも心にかくべからずとなり

抑人は所願を成ぜんがために財をもとむ錢を財とする事は願ひをかなふるが故なり所願あれどもかなへず錢あれども用ひざらんは全く貧者とおなじ何をか樂とせん此掟は只人間の望をたちて貧をうれふべからずと聞えたり欲をなして樂とせんよりはしかじ財なからんには癰疽をやむもの水に洗ひて樂とせんよりはやまざらんにはしかじ爰に至りては貧富わくところなし究竟は理即に等し大欲は無欲に似たり

抑　●そも〳〵は前の文をうちかへして論ずる時にをく字なり新註　●是より上をおさへて道理を論ずる也抑と云字の心よく聞えたり諺　●頭書云助語辭曰抑有ニ還是之意一如レ胗レ豚以レ指按抑究ニ其所ニ以然一文公又有レ云反語之辭略反ニ上文之旨一參

ために　●人の財を好むは我願ひを叶へ度が爲也諺

錢あれとも　頭書云▲李卓吾集冷笑富家翁營レ生忙似レ箭國內米生レ虫庫中錢爛レ貫參

用ひざらんは　●後漢の伏波が守錢奴といふがごとし野

此掟は　●前の大福長者のさま〳〵にいひたる掟をさしていふなり文

人間の望を　●斷捨ての心也彼小用をもなすべからずしたがひ用る事なかれといへるところのぞみをたつの義なり文

うれふべかず　●耻にのぞむともいかりうらむることなかれ宴飮聲色をことゝせず居所をかざらず所願をなさゞれなどいへる心をうけて心得べし文

欲をなして樂と　●頭書云山谷詩辱莫レ辱ニ多欲一樂莫レ樂レ無レ求參　●彼天命を樂て又奚をか疑はんと淵明がいへるも貧をうれへずして富貴をねがはさる兼好心にかよふべし文

癰疽　●二字ともに腫物の名也諺　●かゆがりのかさ也新注　頭書云▲癰疽皆腫物之病名癰者大而高起屬ニ平陽一六府之氣所レ生也疽者平而内發屬ニ平陰一

五藏之氣所レ成也と醫書に見へたり句やまさらんは ◉癰疽は熱氣甚しき故に冷水をしばらく心よく思なりしかれどもかたはらより見れば無病にて此樂のなきかたがまされるなり錢を積置て欲ふかきをたのしひとせんよりは錢なくて欲のなきをまされりといふ譬なり諸 頭書云▲賢聖品頭疏曰誰有二智者一灑レ水洗レ癰有二少樂生一執レ癰爲レ樂此詞にてかけるにや▲安居院澄憲法印釋二四十八願三十九受樂無染願一曰受二小樂一又遇二多苦一如二洗レ癰而樂煮レ疥暫悦一 ▲梵網古蹟曰離欲者見レ欲爲レ苦如二无レ疥者疥樂爲一レ苦参

爰に至りては貧富 ◉山案此所兩義有一義は頭注有又義には文段に曰爰に至りてとは所願をもかなへす小用をもなすべからずとの義に至りては富人も貧者もおなじ事と也◉繼齋抄曰財有ても所願をとゝのへぬに至りては貧人富人の分もなく皆貧人にて有也つかふによりて富人のかい有つかはぬによりて貧人のうれへある事なれば也 頭書云▲ここに至りてとは其無欲の田地にいたりてはと也たとひ貧にしても無欲なれば本分の癰疽をやまぬ人のごとし富人なれども欲をほければ水にてあらひたのしむ人のごとし其相に貧富のわかちあるとも本理は貧富わかつところなしとなり高上の無欲より見たる所をいふなりとても其癰はあしきものぞと見てやまぬ位にいたる時は貧者の無欲も富人の無欲も一致ぞとなり ▲金樓子貧富篇曰富者非レ富貧者非レ貧也参

究竟は理即に ◉山案にこの所すみにくし先一義には此一句次の大欲は無欲に似たりといふをいはんためにたとへにもふけていへり言意は究竟と理即はうはべは似たる樣なれと實は大にちがひたるとの心に引合て書りされば天台家に六即の位階と云事あり迷倒の凡夫より佛果の頂上までをたゞ六段にてふみのほらしめたる階級ある中に究竟即とは究竟は至極にいたりたる心也さはまりをはるとよむ是妙覺の位にて如來地也理即とは佛法の名字をもしらぬ凡夫躰の至畜類まで此理を具足したる所を云なり◉新注曰長者を理即と大福に比し兼好意を究竟即と無欲にあてゝいへり長者が錢をたくはへ持て人間のねがひを断欲心なく無爲無事にて

世をくらすは兼好一錢もなけれど道をたのしみ殘生をやすく送るに似たるやうなれど下心は天地各別とそたとへば空竟即の有とも無とも善とも惡とも思はぬ理即の無知無心との似かよひて實はしからざるが如し●諺解等の說も同じ諸抄の注解は冠考に備ふ　頭書云▲四敎義曰謂一切衆生皆有ニ佛性ニ有佛無佛性相常住也▲又云一色一香無レ非ニ中道ニ等言惣是理即次從ニ善知識ニ及從ニ經卷ニ聞見此言爲ニ名字即ニ依レ敎修行爲ニ觀行即ニ五品位相似解發爲ニ相似即ニ十信分破分見爲ニ分證即ニ從ニ初位ニ至ニ等覺ニ智斷圓滿爲ニ究竟即ニ妙覺極位▲四敎儀集解曰究盡終竟名爲ニ究竟ニ▲六即とは理即名字即觀行即相似即分眞即究竟即これなり是を六即と云ことは六の字は修行をつとめしめんがためにまふけ得たる字也其實は衆生も佛も平等一理にして階級なきものなる故にはじめの一段にても悟道發明なれば餘の次第をふまずしてたゝちに妙覺の位にいたるべき道理なり初發心時便成正覺といへるも是なり此理をしらしめんために一段々々にて即の字をゝけるが禪家の即心即佛の即の字に同じくて階級をたてぬ所なりかのはじめ理即より究竟即に至るまで六階のしなあれども迷悟の上の名にして本分の田地には理即も究竟もかはる事なし故に究竟は理即にひとしといへるなり▲天台大師十六觀經疏釋ニ理即ニ曰得者不レ爲レ高失レ之不レ爲レ下無機子六即頌究竟句曰從來眞是妄今日妄皆眞但復ニ本時性ニ更無ニ一法新ニ登之ニ是皆兼好言ニ比之義也參▲山案此說は向上の一理彼可不可は一定なりといへる兼好の本意にはかなふべけれど此段の意には穩當ならざるに似たり如何となれば此一句は彼長者の大欲は無欲似て實は各別なりと云て長者の詞をくじきて是を貶せんために究竟理即のことをならべ云なりしかるときは下に記す說にしたがふべきもの歟若右の說にしたがひて次の大欲は無欲に似たりと云句に引合せ見るときは大欲なるも無欲なるも畢竟の道理は一致なりと見あやまりて大欲心のきざす輩も欲心をふせぐ手立をなさゞる事あらん讀もの言を以て心を害すへからずたとへば究竟と云は河の向の岸の淺瀨理即は此方の岸の淺瀨淺き所に異なることはなけれども實は各別なるが如し

大欲は無欲に似たり ●山案に此所も數説あり先正義には增補鐵槌曰此大福長者の大欲は百萬の錢あれとも一錢もつかはぬ心得なれは是錢の用をなす事をしらさるに似たりしかるときは有てつかはぬとなくてつかはぬと貧富わかつ所なきに似たり錢ありながらつかはぬは我物とせざるごとくなればこれ無欲に似たりと也●諺解曰右の長者のいへるごとくに大欲なるは無欲に似たるやうなれども畢竟の所は究竟と理即と替りたるごとく天地各別なる事を言表に云述たり　頭書云▲聖濟總錄百九十九曰欲生則三尸生欲滅則三尸滅故至人曰欲者不レ欲不レ欲者欲云々壽▲無智慳貪の人々皆欲深して一紙半錢を惜めども後生の爲にはあまたの金銀を費すいかんとなれば極樂に生れて金玉の堂に居て百味の飲食をうくる大樂に逢んとの欲心あるゆへに今生にて布施をする事無欲に似たり異端の人をまどはす事かくのごとし野▲或人云此布施をするといふ注は本文の心にかなひがたし是は大欲は無欲に似たりといふ事をとりはなしていふときはをもしろき説なりといへり增鐵▲西行か歌「世をすつるすつる我身はすつるかはすてぬ人をそすつるとはいふとよめるこそ大欲は無欲に似たりといへる心に能叶へり句▲此一句もし又上の長者の事にかもはずしてとりはなしていはゞ大欲の大の字心をつくべし凡そ小欲なるものは一針一草ほどのものをしみむさぼりて欲心に見ゆるものなり大欲のものは大分の利德を心がける故にわづかの事には目をかけぬもの也大欲のものはをほくは名を惜で小利にかもはぬものなり故に無欲に同じきなりこのゆへに貧と富と究竟と理即と大欲と無欲と其相をの〳〵ことにして道理はたゞ一致なるものぞとなり參

〔第二節〕●抑人はと云より終まで也●山案此節は上の長者の詞を一々云くじきて金銀をたくはへるは己が用事をとゝのへんためなるにかくのごとくあつめたくのみにて少要をもなさゞるときは却て無欲のものゝ少要をも求めざると似たりと云也一往はゆるして云たるに似て實は大きにそしりいましめたる詞なり偖此節結句の二句につけて數説まち〳〵にして一訣しがたし略右に記すがごとし●

新注曰究竟は理即にひとし大欲は無欲に似たりといふ二句にて一段の意をむすべり此二句いづれの抄どもにも見あやまりていろ〳〵の義理を牽合附會せりまどはさるゝ事なかれ又曰長者が大欲心にて世にあそぶと兼好無欲にしてすごすと外はひとしけれと內心はそこばくちがひたり又長者か錢をつみたくはへてたのしむはかゆがりの瘡を湯にて洗ひて心地よしといふがごとし一錢もたねど晏如として居る兼好は無病なれば湯にてあらふこともなくいたみもかゆみもなしたゞ依然としてもとのまゝなり一錢ももたて道をたのしむ無爲閑道人も亦しかなり

〔一段之統論〕● 此段は上の段に天下の執權の身の上にて儉約を守り驕をいましめられたる殊勝さを稱美して書しるせるにうけて愚人の金銀をつみたくはへんために儉約質素を本とする物語を述あらはしとかく貧富は天のなすわさにして人力にかなはざれはなげきうらやむべからず大福長者のいへる如く一應富を求る手だて有とても古人の所謂守錢奴にてもとめて益なき事也但貧にしても足事を知れば富人也富ても欲心やまざれば貧者に同じき道理を末にいたりて念比に說あかし萬人の天理に安じて人欲をとゞむる心得となすなるべし句 ● 此段は大福長者が詞を評判して畢竟福者も貧者もをなじ理なれば福者のごとく欲をなして樂とせんよりはたゞ淸貧にてたのしまんにはしかじとの心をいへり前の兩段に儉約をほめてかきぬるは無欲にして儉約なる人を云なり彼大欲人の千金萬金をもてりといへども惜むがゆへに儉約なるたぐひをいふにはあらず其たぐひの人は前段をきゝていよいよ儉約とて所願もかなへず錢あれども用ひざらん者さやうのついへあるべき事を思ひて此段にかく欲をなして樂とせんよりは財なからんにはしかじとかけるなるべし文 ● 此段は儉約は上のをごりをしりぞけて下に利あらんため成に下に利あることを忘れて上の人儉約がよきとばかり思ひて財寶をあつめて石瓦をつみかさねたるやうにしてをくゆへにそれは只この大福長者が心なるといふ心にて上のこゝろをうけて抑揚にいひつるなり盤

徒然草諸抄大成卷第十八

目次

〔二百十八〕狐は人にくひつくもの也堀川殿にて舎人がねたる足を狐にくはる仁和寺にて夜本寺の前をとをる下法師に狐三飛かゝりてくひつきければ刀をぬきてこれをふせく間狐二疋をつくひとつはつきころしぬ二はにげぬ法師はあまた所くはれながらことゆへなかりけり

狐　頭書云▲山案格物論狐黄似ニ黄狗一鼻尖尾大性多疑審聽　白虎通狐死首レ丘不レ忘レ本也説文狐妖獸也鬼所レ乘也有ニ三徳一其色中和小前大後死則首レ丘　玄中記千歳之狐爲ニ淫婦一百歳之狐爲ニ美女一右圓機詩學活法に見へたり猶狐の化る事末の五條內裏に化物ありと云の段にくわし

堀川殿　●久我一門基具太政大臣號ニ堀川一基俊大納言の父也壽前に委

舎人　●牛をつかふ者

仁和寺　●前にくはし

本寺　頭書云▲壽云本寺とは今の仁和寺より北の方に野あり本寺の舊跡たる故にや今も本寺野と號す龍安寺より嵯峨へ行に龍安寺の少し西の方にある野を本寺の馬場といへり此處の事也季吟云野摠

に本寺は仁和寺をいふべしと云々是本堂の前と云心にやされども壽抄の說も捨がたきにや雙べてしるされたれば本寺野の邊の心に見侍るべくこそ文

ことゆへなかりけり　●異なる事なき也死ぬる程にはなかりしと云義也古

〔一段之統論〕●此段はきつねは人をばかすとのみ思ひてくひつくことをしらざればそれをしらせんために書る物がたりなり貞

〔二百十九〕四條黃門命ぜられていはく龍秋は道にとりてはやむごとなきもの也先日來りて云短慮のいたりきはめて荒涼の事なれども横笛の五の穴は聊いぶかしき所の侍るかとひそかに是を存す其故は干の穴は平調五の穴は下無調也其間に勝絕調をへだてたり上の穴雙調次に鳧鐘調をおきて夕の穴黃鐘調也其次に鸞鏡調をおきて中の穴盤涉調中と六とのあはひに神仙調ありかやうに間々に皆一律をぬすめるに五の穴のみ上の間に調子をもたずしてしかも間をくばる事ひとしき故に其聲不快なりされば此穴をふく時は必のくのけあへぬ時はものにあはす吹うる人かたしと申き料簡のいたり誠に興あり先達後生をおそるといふ事此事なりと侍りき他日に景茂が申侍しは笙はしらべおほせてもちたればたゞ吹ばかり也笛は吹ながら息のうちにて且しらべもてゆく物なれば穴ごとに口傳の上に性骨をくはへて心をいるゝ事五の穴のみにかぎらずひとへにのくとばかりも定むべからずあしく吹ば何れの穴もこゝろよからず上手はいづれをも吹あはす呂律の物にかなはざるは人のとが也器の失にあらずと申き

四條黃門　●此人笙吹也壽　●四條は稱號にて黃門は中納言の唐名也文　●此人誰とも知ず未ㇾ考

命ぜられて　●命令也下へ云事也諺　●命はみことゝ讀也上たる人の仰事を云也黃門の兼好に宣る成べし文

龍秋　●樂人の名なり豐原氏笙を吹家なり地下也豐筑後統秋が先祖也豐原氏を略して豐と云也壽

道にとりては　●音樂の道にとりては也諸

先日來りて云　●龍秋か黃門へ來ての物語也句

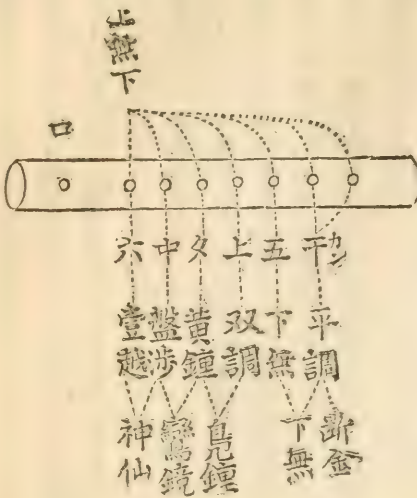
短慮　●是な龍秋か詞也壽　●遠慮なき事と謙退の詞也文　頭書云▲庭訓往來曰短慮未練之仁云々參

きはめて　●極の字なり

荒涼　●過言なる事なれどもと也壽　頭書云▲山

井案に韓退之詩に家居牽荒涼　李賀詩に獨出月荒涼涼は冷義なり俗過言の義に用ふ平家物語に荒涼のもふしやうとあり
横笛　●常の笛の事也壽
穴は　●干と上との間の穴を云也文
いぶかしき所　●すこし不審の所ありとの心也文
竅に　●是又龍秋か卑下の詞也壽　頭書云▲孟子離婁下曰其義則丘竊取レ之朱傳曰竊取者謙辭也句

横笛之圖　十二律ノコト傳授ナクテハ難レ知

口
干　平調　斷金
五　下無
上　双調　鳧鐘
夕　黄鐘　鸞鏡
中　盤渉
六　壹越　神仙

干の穴は　●二つ目の穴諺
平調　●頭書云▲十二律之次第十一月壹越調十二月斷金調正月平調二月勝絶調三月下無調號二龍吟調一四月雙調五月鳧鐘調六月黄鐘調七月鸞鏡調八月盤渉調九月神仙調十月上無調號鳳音調
五の穴は　●三つ目の穴諺
其間に　●二三の間に也諺　冠考の圖を見るべし
上の穴　●四つ目の穴諺
次に　●四五の間なり諺
夕の穴　●五の穴
其次に　●五六の間諺
中の穴　●六の穴也諺
中と　●六の穴諺
六との　●七の穴也諺
かやうに　●上に云しをうけて也
一律　●律とは調子の事也穴ことの調子の間に皆一調子つゝへたてたる事也文　頭書云▲調子に呂律とて陰陽あれともなべて律とばかり云て呂は其中にある理也漢志云陽律爲レ律陰律爲レ呂律以統レ氣類レ物呂以旅レ陽宣レ氣呂皆曰レ律陽統レ陰也云々

愚案するに本朝の催馬樂には呂を主とし春とし律を陰とし秋とす是異朝とのかはりめなるべし文

間をくばること ●五と上との間も餘の夕中六等の穴の間くばりと同じきと也文

其聲不快 ●其聲こゝろよからざる也諸 ●五は下無調也上は雙調也此二つの間には調子を持たぬ也 ●爰を吹得る事成難事也と云り故不快と云也參

此穴を ●五の穴をさす句

必のく ●口をのくる義なり吹さまに口を持なをすこゝろもちなり壽

あはす ●餘の樂器と調子合ざるなり諺

かたし ●難字諺 ●以上皆龍秋か言葉なり龍秋如㆑此申たりと黄門の語らるゝ也句

料簡 ●料ははかる簡はゑらふと讀む然れは道理をばはからひ知事也句 ●黄門龍秋を褒給ふ詞也諸

先達後生をおそる ●先達は已前に道に達せし人也後生はこれより後に生れて其道を學ぶ人也後の世に今より道をよく通達する人あらん事ををそるる心也先達のいまだいはざる事を今龍秋が料簡していへる事を感ぜられし詞なり文　頭書云▲論語子罕篇子曰後生可㆑畏焉知㆓來者之不㆒㆑如㆑今也野

此事なりと侍りき ●是まて命せらるゝ詞なり諺

他日に ●是より雅好の詞也諸

景茂 ●大神氏八幡の山の井といふ所に住す是も笛吹地下の樂人也壽　傳未㆑考

笙　頭書云▲詩經琅玕曰嚴氏曰笙以㆑匏爲㆑之十三管列㆓匏中㆒而施㆓簧管端㆒吹㆑笙則鼓㆓動其簧㆒而發㆑聲參

吹ばかり也 ●笙は管おほしといへとふかぬさきにひとつ／＼調子を合てをけば吹にはさのみ子細なしと也文

穴ごとに ●穴ごとゝは上にいへる干五上夕中六の穴を指諸

性骨 ●天性其骨を得たる所をいふなり口傳の外の器用といふ義なるべし文前にくはし

ひとへにのくとばかり ●龍秋が說をもどける詞也文

こゝろよからず ●上には不快といひたるを爰にて和げていふ也句

人のとが也 ●調子の物にあはざるは其吹人のと

がぞとなり文 ●此詞いよ〳〵龍秋をそしりたるなり說

器の失にあらず ●樂器の難にあらずと也五と上との間配はひとしくて其間に調子をもたぬゆへに不快也なといふべき事にあらずとの義也文 頭書云▲楞嚴第四曰譬如二琴瑟箜篌琵琶一雖レ有二妙音一若无二妙指一終不レ能レ發汝與二衆生一亦復如レ是野

と申き ●如此景茂が申たると兼好のことはらるなり句

【一段の統論】 ●此段は横笛を吹心ばへに龍秋と景茂との兩說を雙べしるして後學の覺悟とせられしなるべし文 ●以上の義景茂が返答ことの外位あり此等に心をつくべき事なり我道ならぬ事には少し心の及ばぬ事あると見へたり萬事用捨すべき敎なるべし壽 ●上の段には狐は人をばかすとのみ思ひてくひつく事をしらざるに喰つく事もありし例を引て諸人の心得となし此段には龍秋が料簡一應尤なれども又景茂がいひ分はまさりたる處ある物語を記して人は只一偏に物を心得まじき敎戒に品こそかはれ下心は同じき故上の段に相うけて又此段を書しめせるなり又黄門龍秋は笙の家景茂は笛の家何事も其道々の人は非家の堪能の人にもまさるべき心得に書りといふ人侍りしからは前の道の人と書出せる段と同意なり引合せ見るへし句

【二百二十】何事も邊土はいやしくかたくなゝれども天王寺の舞樂のみ都に恥ずといへば天王寺の伶人の申侍しは當寺の樂はよく圖をしらべ合せてものゝ音のめでたくとゝのほり侍る事外よりもすぐれたり故は太子の御時の圖今に侍るをはかせとすいはゆる六時堂の前の鐘なりその聲黄鐘調のもなかなり寒暑にしたがひてあがりさがりあるべきゆへに二月涅槃會より聖靈會までの中間を指南とす秘藏の事也此一調子をもちていづれのこゑをもとゝのへ侍るなりと申き凡鐘の聲は黄鐘調なるべし是無常の調子祇園精舍の無常院の聲なり西園寺の鐘黄鐘調にいらるべしとてあまた度いかへられけれ共かなはざりけるを遠國より尋出されけり法金剛院のかねの聲又黄鐘調なり

邊土 ●偏土とも書也句 ●田舍の事也新注

かたくな ●頑の字也壽

天王寺 ●攝津の國に有 頭書云▲推古天皇の御

守聖德太子建給ふ多聞持國增長廣目の四天の像を安置する故に四天王寺と名つくる也野 ▲歌にはなにはの寺とよめり ▲元亨釋書云天王寺者用明二年八耳皇子率二官師一討二物守屋一官師三却 皇子斬二白膠木一刻二四天王像一安二髻中一發二大誓一曰官兵得レ勝當レ建二護世四天王寺一守屋亡乃於二玉造岸上一營レ寺安二四天王像一分二物氏資產一納レ寺推古元年移二難波荒陵東一故曰二荒陵寺一又云二敬田寺一南北一里東西一里餘有レ池云二荒陵池一青龍泃焉 昔釋迦文佛因地轉二法輪於此一爾時太子爲二長者一聽受供養故 遷二此地一寶塔大殿對二極樂界東門一云々文 ▲今は荒陵山敬田院天王寺といふなり說

恥すといへは ●以上の通り兼好の天王寺の伶人にいへばとなり句

伶人 ●樂人の事也諸 頭書云 ▲書言故事に曰樂人曰二伶人一注 黃帝之世伶 倫造二音樂一故稱二伶人伶官一句

圖をしらべあはせ ●調子の圖をよく調合たると也闘竹など云こゝろなり文

故は ●其いはれはと上をうけたる詞也句

太子 ●聖德太子の事なり句

はかせ ●節奏の二字をふしはかせとよめり上下の調子の事を云爰は其はかせを定規として諸の調子を定ると云こゝろなり諺 頭書云 ▲聲明のはかせには墨譜といふ字を用ゆと也或書にも墨譜は諷經の點也と注せり又一說に文段の意はかせとは師範とする心也博學にして人の師となる人を博士といふよりをこりたる詞なりと云々不レ可レ然歟拾

いはゆる ●所謂と書前にいふ所といふ義也爰にては上にいへる所の圖をさす句

六時堂の前の鐘なり ●天王寺に有晨朝日中日沒初夜中夜後夜の六の行をつとむる所也其前に鐘樓あり然其昔の鐘は一年の炎上にうせて今のはそれに非ず文

黃鐘調 ●黃鐘は律の本也中央の調子なり文 ●漢書律曆志にくはし 頭書云 ▲山井案漢書二十一律曆志云五聲之本生二於黃鐘之律一云々又云黃鐘黃者中之色君之服也鐘者種也天之中數五五爲レ聲聲上レ宮五聲莫レ大レ焉地之中數六 六爲レ律律有レ形有レ色色上黃五色莫レ盛レ焉云々 ▲文選長笛賦曰十二畢具

黃鐘爲レ主李善注云呂氏春秋曰黃帝命ニ伶倫一爲レ律伶倫制ニ十二筩一聽ニ鳳鳥之鳴一以別ニ十二律一以比ニ黃鐘之宮一故黃鐘宮律之本也李周翰註曰六律六呂爲ニ十二一黃鐘律宮之聲也宮爲レ君故爲レ主也句

もなか ●一調子をも細に分別せば上下あるべきに此鐘の聲は黃鐘調の最中と也文　頭書云▲源順が八月十五夜の歌「水の面にてる月なみをかぞふれば今宵ぞ秋のもなかなりける野

あがりさがり ●此所兩說有先一義には●文段抄曰寒天には鐘の聲もさえ暑き時はぬるむべき也●諺解曰寒天にはあがり暑にはさがるなり●又一義には古今抄曰寒は水氣にてくだる故に其聲下り暑は火氣にて上る故にあがる也●句解曰冬寒の時は其聲ちゞまりてさがり夏暑の折は其聲ゆるまりてあがる也●新注曰冬さむき時は物每の調子ひくし夏あつき時は高しとぞ▲山案に後の一義さもあるべけれど鐘ばかりは寒夜にはさえ響も常よりは高き樣に歌などにも古今よみ來るなれば前說やまさらん

二月涅槃會 ●二月十五日也釋尊此時にをゐて鳩尸那城拔提河のほとり沙羅雙樹のもとにいたりて夜半の子の時にかくれさせ給へる故に今にいたるまで其日をとりて涅槃會を行ひ奉る也　頭書云▲涅槃經師子吼品第十一之四云師子吼言ニ世尊一如來何故二月涅槃善男子二月名レ春春陽之月萬物生長種植根栽花果敷榮江河盈滿百獸孚乳是時衆多生ニ常想一爲レ破ニ衆生如レ是常心一說ニ一切法悉是無常一云云文

聖靈 ●二月廿二日太子の忌日にて天王寺に法事を行ひ終日舞樂なとあり文

指南 ●車の故事より發りてこれも又手本とする義也句　頭書云▲山案に文選卷五左大仲吳都賦兪騎騁レ路指南司レ方劉淵林注指南指南車也鬼谷子曰鄭人取レ玉必載ニ指南之車一爲ニ其不一レ惑也▲袁了凡綱鑑註指南車古制不レ可レ倣至ニ唐憲宗時一始定ニ其制一蓋車一有レ樓四角刻レ木爲レ龍又刻ニ仙人羽衣於其上車一雖ニ回轉一手常指レ南軒轅用レ之以定ニ四方一示ニ軍士一也、或曰車上用ニ子午盤針一以定ニ四方一▲日本へ來る事は三十九代天智天皇五年に唐沙門智由指南車を献ずとなり又指南車の事二說あり▲句解曰鄭

鄭代醉編巻三十三馬鎬曰大駕指南車起二于黄帝一及蚩尤戰二于涿鹿之野一蚩尤作二大霧一皆迷二四方一於レ是乃作二指南車一以示二四方一遂擒二蚩尤一而即レ位李豫事曰指南車舊傳周公所レ作越裳氏重譯來献使者迷二歸路一周公錫以二𫐐車五乘一皆爲二指南之制一越裳氏載レ之周年而至二其國一秦漢其制無レ聞後漢張衡始復創造漢末其法不レ存魏明帝始令二博士馬鈞造一レ之晉亂又亡石虎使解飛姚興使令孤生又造宋武平關中得レ之其制如二鼓車一設二木人於車上一擧レ手指レ南車雖回轉所レ指微差句

いつれの聲をも云々　頭書云▲尙書云八音克諧無レ相二奪倫一野

申さ　◉是迄が伶人の言葉なり句

凡鐘の聲　◉是より末が兼好の詞なり諸

黄鐘調　◉是より鐘の調子は黄鐘調なるべき事をいへり文

無常の調子　頭書云▲平家物語に祇園精舍の鐘の聲諸行無常のひゞきあり壽▲皆此平家物語を證文とすれどもこればかりにてはをうけなき事也往生要集曰諸行無レ常是生滅法生滅々已寂滅爲レ樂祇園寺無常堂四角有二頗梨鐘一々中亦說二此偈一參

祇園　◉天竺にて釋尊の說法し給ひし寺の號也參もと祇陀太子の園なりしを須達長者金をしきてこひ得て精舍として佛に奉りし故祇園精舍と云なり文　頭書云▲大藏一覽第二曰經律異相云佛大檀越須達多長者居二舍衞國一常施二孤獨一故曰二給孤獨一因往二王舍城護彌長者家一爲レ男求レ聘因見二其家請レ佛說レ法須達本事二外道一忽聞二佛法一生二歡喜心一接足作禮而白レ佛言我舍衞國人多信レ邪弟子欲下營二精舍一請レ佛往化上願垂二聽許一佛默受レ請即遣二舍利弗一指授規則遍處求レ踏唯有二祇陀太子一園一廣八十頃林木鬱茂幽靜可レ居既得二勝地一往白二太子一太子戲曰滿以レ金布便當二相與一須達喜曰此園已屬レ我矣太子對曰我戲語乎兩成與レ諍時首陀天下爲二評議一以二太子法一不レ應二妄語一價既已決不レ宜二中悔一須達出レ金布二八十頃一須臾欲レ滿尙缺二少地一祇陀即語二須達一園地屬レ汝樹林屬レ我共以上レ佛提レ繩定レ基之際舍利弗忽笑須達問二其故一答曰汝始於レ此經營而六欲天宮殿已成汝果報也即借二須達道眼一果見聞二舍利弗一是六欲天何處最樂舍利弗言第四欲天兩處菩薩

常彼說法須達言我生レ此出言既竟餘宮悉滅精舍告レ成凡千二百處白レ王遣レ使請レ佛安居靈字函第三卷野 ▲須達長者金をしひて地を買求樹をは祇陀太子のほとこし玉ひし故につぶさには祇樹給孤獨園と云なり給孤獨とは須達の德號なりくはしくは賢愚經に出たり參

精舍 ●佛閣を精舍と云 頭書云▲長水楞嚴疏曰精舍者即沙門精行所レ舍處也釋要鈔曰精舍者非二麁暴者所一レ居故曰二精舍一參 ▲釋氏要覽曰釋迦譜曰息レ心所レ棲曰二精舍一藝文類聚曰非レ由二其舍精妙一良由二精練行者所一レ居也句

無常院 ●是も則祇園精舍の中の其一つなり此無常院の鐘も黃鐘調なる事をいふなり諺 頭書云▲西域傳曰祇桓西北角日光沒處爲二無常院一若有二病者一當レ安二其中一意爲下凡人內心貪二著房舍衣鉢道具一生二戀著心一無中厭背上故制二此堂一令四聞レ名見レ題悟三一切法無二彼常一故祇桓はすなはち祇園也野云祇園圖經曰緣覺十二因緣院中有二大金鐘一風吹音聞二八里一迦葉佛時毘舍門天所レ造每レ至二四月八日一鐘能誦二迦葉佛涅槃經一四衆咸聽レ之文

西園寺 ●拾芥いはく衣笠の艮太政大臣公經公の家なり野

法金剛院 ●つき山の南太秦の東に舊跡あり壽 ●法の字を淨となす有淨金剛院は嵯峨の椎野に有野

頭書云▲拾芥云本名天安寺待賢門院御建立也壽 ▲淨▲山案に崇德院大治五年草創西山立眞言宗也▲淨金剛院▲水鏡云嵯峨龜山殿の所に云橘大后の營みたてられたりし檀林寺といひし今は破壞して石ずへばかりになりたれば其あとに淨金剛院といふ御堂をたてさせ玉へり道覺上人を長老になされて淨土宗をおかる云々文

〔一段之統論〕●此段は上の段に音樂の道を論ぜるにうけて又音樂の事に及し秘藏の義を書あらはしひろく諸人にしらしむる兼好の例の仁心なるべし句

〔二百廿一〕建治弘安の比は祭の日の放免のつけ物に異樣なる紺の布四五たんにて馬を作りて尾髮にはとうしみをして蜘の井書たる水干に着て歌の心などいひて渡りし事常に見及侍しなども興ありてしたることちにてこそ侍しかと老たる道志どもの今日もかた

り侍る也此比はつけ物としを送りて過差殊外になりて萬のおもき物をおほくつけて左右の袖を人にもたせてみづからはほこをだにもてたずいきつぎ苦しむ有様いと見ぐるし

建治弘安　●皆後宇多院の年號壽

祭　●加茂祭也前に有

放免　●此放免今の世に傳へしる人なしと云々此一部の三ヶの大事の其一つとうけ給り侍る貞●此放免の字東鑑にあれどもそれとは各別也とて古來口授する所也予も又口說すべし故に委曲に筆記せず又或說云放免といふ事祭にかぎらず人民の道具持通る行列にもかならず放免あるなりたとへば弓鐵炮百挺貳百挺など持せ行に其役人大小便の時のかはりとなる人を外に着る其名を放免といふ也放免とははなちゆるすとよませて役人の手あきのものといふ心なり扨祭の時の放免も鉾を持役人にそゆる放免也傳授は此外に子細あり參●大全の說も此或說と同じきなり異說おほし　頭書云▲東鑑二十三建保六年六月將軍家實朝任二大將一爲二拜賀一參二鶴岡一隨兵江判官能範布衣冠革緒尻細鞘太刀郎等三人雜色四人調度懸一人放免四人野▲東鑑に放免と云役人所々に見へたり今深草祭を以ていふならば櫻町の放免うりの類歟壽▲祭の日ばかりは御赦免にて帝王のまねをもつけ物にするそれを放免のつけものといふとぞ句▲放免のこと未レ詳私に曰此日ばかりは放埒を免許の義にや新註▲此放免といふ事傳授なりと書たる說もあれとむかしはかくれなき事も今の世にしれぬ事多し何事も加様の事は考へてしるゝ事なり考しるゝ事を傳授とはいふべからずいかんともしれがたきは事にして事にあらず理にして理にあらぬ古今集三ヶの大事などをこそ申べけれ甲斐信玄の時代にはさみ竹をもちて打あひしと云事甲陽軍鑑にやらん見へたり此はさみ竹といふ物今の世にいたりては十人に兩人はしれる人まれなり今より貳百年も過たらんには大かたしれがたかるべしさてはさみ竹と云ものは三四尺の竹をなかばわりかけて或袴或羽織などはさみてかたげ持しめたるを當御代次第に過美になりてはさみ竹見ぐるしとて箱に致せしなりかの名をかりて挾箱（ハサミバコ）といふ也放免もこれがたぐひなるべし

はさみ竹も傳授といはましや全
つけ物　●ねり物也鉾に着て渡るねり物なればつけ物と云也賀茂にかぎらずいづれの神事にもある也さてかの鉾を持役人の替となる放免がねり物となりてわたるよし也參考大全
水干　●衣服の名也諺●蜘の井を書たる水干を馬の背に付たと也古●此所のてにをは少すみにくし
歌の心　●古歌をうたひてわたるなり新註　頭書云▲古歌に「くものゐにあれたる駒はつなぐとも二道かくる人はたのまじ壽
道志　●明法道の輩の使廳の志となり右衛門左衛門の志となるを道志といふなり　頭書云▲職原下檢非違使の下に志あり　明法道輩六位時任ニ衛門志一即蒙ニ使宣旨一也凡志者奉ニ行使廳諸公事一之故以ニ當道一爲ニ其撰一此號ニ道志一也壽▲道志は今云雜色の事也祭のねりもの丶跡につきて行也説▲道志は足輕のやうなる者なり祭の日の下奉行なり新注
今日も　●此言葉をもつて見れば兼好も同座に居て見たると見えたり句
過差　●衣服車馬等のかざり皆法令に過たる義也野●字義は上に見えたり
苦しむ　●むかしはねりものやすらかにして鉾持の大小へんの時のかはりとなる用に達せしにいつぞの比より過美になりてわがやくをもわすれて鉾をもつかはりのやくにた丶ぬとなり全●彼放免が我は放免の役たるといふ事を忘れて或は五端母袋八端母袋などをかけて鉾持事はさて置き其身さへ歩行しにくきゆへに左右に眞紅の繩などを付て人に持せてありくと也是放免につけ物が出來たるによつて放免のつけものと右にしるせるなり説
見ぐるし　●此比はといふより終り迄は兼好の評論なり説
［一段之統論］●此段賀茂の祭はむかしよりは兼好が時分にわたりもの丶かざりいろ／＼の物をとりつけて過差なることをいふなりむかしよりちがひたることはまつりのみにあらず萬の事もをしてしるべし野●問或説に是盤の説なり此段放免がしれぬゆへに人ことに大事と思へり僻事なり放免こそ口傳にてもあらんずれ一段の心は別なることなしと見るべきなりといへり如何　答此説は放免の事を貞德

にきかずしらざる歟此段放免の事をこそいひたれこれをしらで別なる事なしとはをぼつかなくも侍るかな師說に大事などいへる事は故ありと思ふべし誣べからず放免をしらずは此道志のかく語れる故をもしるべからず彼或說いかでか別なる事なれとはいへるぞや

〔二百二十二〕竹谷乘願房東二條院へまいられたりけるに亡者の追善には何事が勝利おほきと尋させ給ければ光明眞言寶篋印陀羅尼と申されたりけるを弟子どもいかにかくは申給けるぞ念佛にまさる事さふらふまじとはなど申給はぬぞと申ければ我宗なればさこそ申さまほしかりつれどもまさしく稱名を追福に修して巨益あるべしと說る經文を見をよばねば何に見えたるぞとかさねてとはせ給はゞいかゞ申さんと思ひて本經のたしかなるにつきて此眞言陀羅尼をば申つるなりとぞ申されける

竹谷　●醍醐にあり所の名也諸

乘願房　●淨土宗の明匠のよし沙石集に見えたり傳記はいまだ考ず

東二條院　●人皇八十八代後深草院後也　頭書云▲常盤井相國實氏公の御息女公子也後深草院の后なり壽

大織冠——淡海公——房前——眞楯——內麿——冬嗣——良房——基經——忠平——師輔——公季——實成——公成——實季——公實——通季——公通——實宗——公經（これまでは前の竹林院殿の段にくわしきゆへに略す）——實氏（從一位太政大臣牛車隨身兵仗號常盤井入道）——女子（東二條院中宮公子後深草院后）

亡者　頭書云▲中庸圖解曰始死謂二之死一既死則葬謂二之亡一參

追善　●追善の字は追薦と書也其時は跡よりをひすゝむる心也善の字を書時はあとよりの善根なるべし參

勝利　●すぐれたる利益也諸

光明眞言寶篋印陀羅尼　●あるか中に此二種の眞言陀羅尼は廣大無邊の利益にて其功德かぎりなければ要文のきれ物語のはしくれなどこの所に引用事却而功德あらはれがたし殊更秘密の事なれば凡

俗のしる事にあらず其宗に對して可尋（金）●此二種功德ふかき證文　頭書云▲海東元曉法師遊心安樂道曰問親遇善緣預九品生類且又義憤心雲披若有衆生唯集衆惡不識修善已入三途爲有方便救彼亡靈令除業障生極樂界以不答愚情難通聖教有術（術者指光明眞言也故下引其諸經也）故不空羂索神變眞言經第二十八卷灌頂眞言成就品曰云々光明眞言儀軌曰若有死者靈當墮惡道者說助救惡道度苦之法云々欲令父母靈生極樂世界向西方誦十萬遍決定生極樂淨土是故建立墓所以眞言書副無量壽如來梵字安置父母墓所必彼靈雖經無量無邊不可思議阿僧祇劫不墮惡趣必令往生極樂淨土蓮花中寶座上成佛時從眉間放白毫光明故名光明眞言又曰若爲死者此眞言誦一遍者必無量壽如來爲死者授手引導極樂淨土（參）▲慧琳一切經音義卷第三十九曰眞言者眞實無二之言也（參）寶篋印陀羅尼　頭書云▲一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經若有惡人死墮地獄受苦無間免脫無期有其子孫稱亡者名誦上神呪纔至

七遍、鎔銅熱鐵忽然變爲八功德池蓮華承足寶蓋駐頂地獄門破菩提道開其蓮如飛至極樂界一切種智自然顯發樂說無窮位在補處（句解參考）▲佛祖統紀四十四曰吳越王錢俶天性敬佛慕阿育王造塔之事用金銅精鋼鑄造八萬四千塔中藏寶篋印心呪經註曰此經呪功云造像造塔者奉安此呪者即成亡寶云々（參）▲慧林不空羂索經音義曰陀羅尼唐云持盟或云惣持（參）

と申されたり　●諸經の中に亡者をたすくる法則なくてたゞ光明眞言などがまさしく靈魂をたすくる法也といへる事は乘願房のはじめていへることにあらず華嚴宗の法師に新羅國の元曉と云し名だかき僧の遊心安樂道といふ自作の書物に光明眞言ならでは靈魂をたすくる法なしとしるして證文に不空羂索經の光明眞言を土沙に加持して尸陀林の死骸の上にかけてこれをとふらふ經文を引てことはれりさてそのをはりにいへるはあまねく聖教の說を見れ其亡人を救度する妙術なし土沙にあはずは後悔するともをよびがたしと見えたり此僧もとより念佛修行の人なれば阿彌陀經の疏をも作れり

今の世の唯密教の人の念佛をさしをきて光明眞言をばかりほめあぐるとははるかにかはりたる事也又安樂道の中にも淨土宗號の事ある故に法然の選釋集にも此書を引て用ひられたり乘願房も法然の末弟なれば此本の文證などを見て信仰したる事も有べしと覺え侍る参

弟子ども　●乘願房の弟子ども也字義頭書在　頭書云▲禮記曲禮註呂氏曰先生者父兄之稱有ニ德齒一可レ爲ニ人師一者猶ニ父兄一也故亦稱ニ先生一以レ師爲ニ父兄一則學者自比ニ於子弟一故稱ニ弟子一山案　▲遺教經節要曰學居ニ師後一故言レ弟解從ニ師生一故稱レ子是出家之弟子之義也▲四書圖解曰弟子後生之通稱爲ニ人弟一爲ニ人子一者是在家之弟子之義也

念佛　●觀經には念佛と稱名とふたつにときわけてあれどもこゝの念佛は稱名の義也専修の家には念の字を稱の義に心得るなり参

申給はねぞ　●是迄が弟子どもの不審せし詞也

・我宗　●是より乘願房の答也諺　●念佛宗なれば也

追福　●追善と同じ事なり　頭書云▲佛家に福智の二門などいひ又十六觀經に三福など說るもみな其修行する功能をさして福といへり此二字隨願往生經等の下に出たり参

巨益　●巨は大なり益は利益なり諺　頭書云▲觀心畧要集曰縱雖レ不レ順レ心遂應レ有ニ巨益一参

經文を見及ねば　●此詞のごときは遊心安樂道の說のごとししかれどもかつて念佛にも追福の證文なしとはさだめがたし地藏經などに驗文も見えければ一偏にいふべからず参　頭書云▲遊心安樂道曰普訪ニ聖教之說一全無ニ救度妙術一しかれども地藏經曰更爲ニ身死之後一七七日內修齋念佛能使ニ亡者超昇一又曰念ニ佛菩薩名號一歷ニ在亡人耳根一縱有ニ罪業一亦得ニ消除一参

本經　●不空羂索經の二十八灌頂眞言成就品及び大毗盧遮那佛說金剛頂光明眞言儀軌ならびに一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經などをさす也参此經ともの全文右の冠考に有

たしかなる　●此たしかなるといへるが字眼なりおぼろけの證文は念佛にもある事なりしかれどもたしかなるはこれぞとなり又云乘願房念佛の僧にして地藏經などに證文ある事をしらば少しは二條

院へ申上るやうすもかはるべき事なりたゞたしかなるにつきてといへるは念佛の證據はしらぬが一定なりたゞありやうなるいひ分とばかり見てもよき也参此所種々説あり　頭書云▲經文にて其證をたつるときは念佛にも功能のなきにはあらねど其實をいはゞ念佛と光明眞言とは其法式各別の手段なるべし其子細は其法を行ふ密教者にあらねば其わかちはしられぬ事也先念佛と云は三心具足して稱名を修ずるを以て本意とすもし三重病とて一人のうへに耳も目もつぶれ口も瘂にして此三種のきびしく其身ひとりに任持したるものあらんには念佛修行もかなふまじき事也然るに光明眞言は土沙加持とて手に印を結び口に明咒をとなふべし心に三昧耶(サマヤ)を觀じて沙の中へ其功能を封じこめて其死骸にかける時は其死かばね光明を放ちてたすかる殊勝の德ある事なる故にいかほどほめあげてもくるしからぬ事なり参▲念佛は追善の益にならぬにもあらず追善に修せよとある經文は此眞言と陀羅尼に准しては證文すくなし然ども念佛追善に修して利益ある道理は明なり其故は他力本願の念佛なれば稱する所に於て阿陀尊行者一體なりされば

そ「となふれば佛も我もなかりける南無阿彌陀佛の聲ばかりして此心になりて餘念を忘じて念佛すればとりもなをさず彌陀佛の廻向の心なれば他をすくふに何かは利益なからんや念佛本願は現身の利益を表に說給ふ如ニ經文一又光明眞言等は追善にかり巨益ありて自身成佛うすきやうなれどさにはあらず諸佛の本願にもあはずまして念佛行者にもあらぬものゝ惡所に墮在したるものをすくひ給ふがをもてなりまして自身成佛うたがひなし眞言念佛表裏のかはりめ利益同じ垒

眞言陀羅尼　●光明眞言寶篋印陀羅尼なり眞言といふも陀羅尼といふも同じ事なりと一切經の音義に見えたり梵語には陀羅尼といひ漢語には眞言と云也或は呪とも釋せり故に光明陀羅尼寶篋印眞言ともいひ又光明咒共いふ事あり参

［一段之統論］●此段勿論光明眞言寶篋印陀羅尼の功能をのべると云ども本意は名僧の無我なる物語をしるして凡俗の教誡とし惣じて私の智をさきだて物に爭そはぬ事を指南せると見へたりさて此一

章の大意を心得たくば沙石集にかけるを見てしるべし彼集云道理あれども證文なきことは奏しがたし佛法に偏頗あるべき事なければ自他宗とへだつべきにあらず念佛の中にも分明なる證文あらば追てこそ奏じ申さめと申されけると承傳へたり誠に智者と聞しに合て偏頗なき心なりといへるが兼好のこのめる所なり參◉此乘願房の返答の事委く沙石集に見へたり其全文野槌に出たり此事私論語にも見ゆ

〔二百二十三〕たづのおほいどのは童名たづ君なり鶴を飼給ひけるゆへにと申は僻事なり

たづのおほいどの　◉田鶴と書田の字に心なし只鶴の事なり參◉九條前內府基家公の事なり諸　頭書云▲後京極良經公三男九條前內大臣基家　公號ニ鶴殿ト又號ニ沙金大臣殿ト幷蛙抄にもあり壽

鎌足――不比等――房前――眞楯――內麿
冬嗣――良房――基經――忠平――師輔
兼家――道長――賴道――師實――師通
忠實――忠通 これまでは上卷闕本殿の所にくはし――兼實 從一位攝政關白太政大臣號ニ月輪ト――良經 從一位攝政太政大臣――基家 正二位內大臣號ニ月輪ト

童名たづ君　◉一本につるのおほいとのは童名つる君也とあり句

〔一段之統論〕◉此段ある本に上卷の榎本僧正強盜法印の下に書のせたり類をもつてあつむる義なるべし野◉此段は彼小松どの灯籠をこのみ玉へるゆへとうろのをとゞといひしたぐひにたづのをとども鶴を飼給へる故などいへる異說ありしをさにはあらずとしらせたるなり文◉此段は柿本人丸は柿の木の本にて生れ藤原氏は大織冠藤纏鎌にて入鹿をころしゝ故になつくといひ空海の母金魚をのむと夢見て懷胎せしゆへに小字を金魚丸と云しなどといふ俗說のごとし其誤をたゞして本說をしらしめる事爲人の心なり參

〔二百二十四〕陰陽師有宗入道鎌倉よりのぼりてたづねまうて來りしがまづさし入て此庭のいたづらにひろきこと殘ましくあるべからぬ事なり道をしるものはうふる事をつとむほそ道ひとつ殘して皆はたけに

つくり給へといさめ侍き誠に少しの地をもいたづらにをかん事は益なきこと也くふ物薬種などうへ置べし

陰陽師　㊟陰陽道をしり極めたる者任する也上巻赤舌日の段に委

有宗　㊟陰陽頭安倍有宗也　頭書云▲安倍晴明十五代の孫なり有重が子なり陰陽頭正三位壽

たつねまうで來りしが　㊟兼好かもとへ尋ね來りたるなり壽

道をしるものはうふる事をつとむ　儒道をしり佛道をしる人なり　頭書云▲論語憲問篇禹稷躬稼而有二天下一▲中庸人道敏レ政地道敏レ樹▲後漢列傳二十二樊宏字靡卿南陽人也嘗欲レ作二器物一先種二梓漆一人嗤レ之然積以二歳月一皆得二其用一向之笑者咸求假焉野▲護法論曰潙山問二仰山一曰子今夏作二得箇什麼事一仰山曰鋤二得一片地一種二得一畬粟一潙山曰子可レ謂レ不三虛過二時光一斷際禪師毎集二大衆一栽レ松钁レ茶洞山聰禪師常手植二金剛嶺松一故今叢林普請之風尙存▲泼元の八の巻にのせたる如く地藏禪師はみづから田をうゑて食せられたるを禪苑蒙求には地藏種レ田とあり又百丈惟政禪師も大衆に命して田を開かしめられし事あり誠に道をしれる人のうふる事をつとむるふかき心あるべし參

つくり給へ　㊟是迄が有宗か詞也句

いさめ　㊟兼好へ異見したる事なり句㊟諫の字なり參　頭書云▲山案字彙諫居晏切音澗直言以悟レ人也又規諷也从レ言从レ柬俗从レ東誤▲參考云いさめるとは諫の字なれは父兄主君につかふ詞なれどもこゝは只かろく見るべし教訓の義なり

誠に少しの地　㊟是より終まで兼好か詞なり句㊟是より評論して云

［一段之統論］㊟此段有宗か詞をいひ出て少の地もいたつらにをくはあしき事を論じたり況や大地を亡所になして民の産業をさまたげんはよからずとの心なり盤㊟誠に其分際なき者のひろく空地をたくはへ遊宴の所とする無用の事なりふりさゝげ且茶のあつものとなり柿林檎不時の客來のもてなしとなるそのうへ南天の喉痺を治し三七のきりきずをいやすたぐひ急をすくふ爲家にありて尤益多きものなり農家粒々のくるしみは王公たにも思ひや

るべしいはんや士庶人の身をや旬

〔二百二十五〕多久助が申けるは通憲入道舞の手の中に興ある事どもをえらびて磯の禪師と云ける女にをしへてまはせけり白き水干にさうまきをさゝせ烏帽子をひき入たりければおとこ舞とぞ云ける禪師かむすめしづかといひける此藝をつげり是白拍子の根源(由來縁起也壽)なり佛神の本縁をうたふ其後源光行おほくの事をつくれり後鳥羽院の御作もあり龜菊にをしへさせ給けるとぞ

多久助 ●舞人なり多は氏なり壽 ●神武帝の子神八井耳命は多氏の遠祖なりいまも伶人に多の氏あり野 ●句解新注等には久資と書り

通憲 ●少納言入道信西が事なり　頭書云▲少納言正五位下日向守法名信西諸道に通ぜし人なり妻は後白川院の乳母二位父は文章博士加賀掾實兼なり旬 ▲平治元年十二月十三日信頼亂逆時信西見ニ天變ニ兼知ニ其災ニ入ニ大和國多原山ニ自害入レ棺不レ死之前被レ堀ニ埋土ニ同月十五日伊賀守光保尋ニ出此所ニ注進即堀ニ出死骸ニ斬レ首渡ニ大路ニ被レ梟ニ獄門ニ壽

此事平治物語にあり

大織冠……淡海公　武智麿(此間事に永き故に略す前の系行が段にくわし)

┌尹文――永頼(皇太后宮權大夫従三位)――能通(左兵衛佐従四位上)――實範(大學頭従四位上)――季綱(従四位上右衛門佐)――實兼(文章博士)――通憲(日向守少納言諸道才人也)

野槌曰　通憲――澄憲――聖覺――隆承

┌憲實――憲基

此唱道の事元亨釋書二十九に委し

磯の禪師 ●義經の妾靜か母也禪師幷に靜か事

頭書云▲東鑑第六文治二年三月一日豫州(義經)妾靜及母磯禪師自レ京來ニ于鎌倉ニ四月八日二品(頼朝)幷御臺所詣ニ鶴岡ニ召ニ靜女於廻廊ニ欲レ令レ施ニ舞曲ニ彼天下名人也欲レ見ニ其藝ニ再三固辭不レ得レ已而囘ニ白雪之袖ニ發ニ黄竹之歌ニ祐經打レ鼓畠山重忠爲ニ銅拍子ニ靜先吟ニ出歌ニ云「吉野山峯のしろ雪ふみわけていりにしひとのあとぞ戀しき次歌ニ別物曲ニ之後又吟ニ和歌ニ云「しづやしづしづのをだまきくりかへしむかしを今になすよしもかな其壯觀梁塵殆可レ動上下催レ興云々五月十四日祐經梶原景茂千葉常秀八田朝重藤判官代邦通等相ニ具下若等ニ向ニ靜旅宿ニ催

レ宴郢曲畫レ妙磯禪師又施レ藝同二十七日入レ夜靜女依ニ大姬君仰一參ニ南御堂一施レ藝賜レ祿野

水干　●衣服の名也

さうまき　●さやまき也太刀也諸

ひき入たり　●きる事也文

白柏子　●もと白柏子とは囃物なくして舞をいふそれ故白の字をつくる也たとへは袴を着せぬを白衣といひ裸なるを白膚（ズハダ）といひ沓をはかぬを白足（ズアシ）といひ鼓なくしてうたふを白謠（スウタヒ）といふ類なり去共冠者に備へし東鑑の說を見れば白拍子にもはやしものあると見へたり說

根源なり　●源平盛衰記には鳥羽院の御宇に島の千歲若の前とて二人の遊女まひはじめけりと有しかれば白拍子の根源兩說也といへ共兼好如此書置る上は異說を用ゆべからざる歟句　頭書云▲源平盛衰記十七云世に白拍子と云ものあり漢家には虞氏楊貴妃王昭君などいひしは皆是白柏子也我朝には鳥羽院御宇に島の千歲若前とて二人遊女舞はじめけり初は直垂に立烏帽子腰刀をさして舞ければ男舞と申けり後には事がらあらしとて烏帽子腰刀を止て水干に袴ばかり着てまふ其比京中第一の白拍子あり姉をば祇王妹をば祇女と云又佛白拍子といふ者あり皆淸盛入道寵愛せしといへりこゝには磯禪師を白柏子の根源也といふ是兩說にて侍る近年出雲巫京にきたりて僧衣を著て鉦（ドラ）をうち佛號をとなへてははじめは念佛をどりといひしに其後男の裝束し刀をよこたへ歌舞す俗にかぶきと名づく又男舞と申ける似たる事元朝にも天魔舞と號する事あり今のかぶきによく似てをぼゆる天魔舞の事龍飛紀略第一にあり野槌に詳也

源光行　●土岐左衛門尉光行也後鳥羽院の北面也頭書云▲出羽判官又河內守左衛門尉後鳥羽院之北面從五位下美濃守光衡が子なり土岐と號す源氏物語河內本といふは此光行の本也　又號ニ淺野判官一

淸和天皇 貞純親王 ―― 經基王 滿仲 これまで

―は前足利左馬入道の所に委しき故に略す 賴光 正四位下左馬頭鎭守府將軍武略長通神權化人傑人 賴國

―正四位下內藏頭左馬權頭 國房 正四位下伊豆守 光國 從五位上左衛門尉出羽守一[illegible]土岐先祖

―光信 從五位上左衛門尉出羽守號土岐 光基 左衛門尉從五位下 光衡 光行

後鳥羽院 ●人皇八十二代の天子なり前にくはし
龜菊 ●後鳥羽院御寵愛の舞女也文 ●龜菊を龜前とも云也後鳥羽院より龜菊が訴訟を鎌倉へ兩度迄仰られとも義時同心せざるゆへ御氣色惡敷なりて承久兵亂おこるなり野　頭書云▲東鑑二十五承久三年五月武家背ニ天氣一之起依ニ舞女龜菊申狀一可レ停ニ止攝津國長江倉橋兩庄地頭職一之由二箇度被レ下ニ宣旨一之處右京兆不ニ諾申一是幕下將軍募ニ勳功賞一定補之輩無ニ指雜怠一難レ改由申レ之仍逆鱗甚故也▲又承久兵亂記に云攝津國長江倉橋兩庄は院中に近く召使れける白拍子龜菊にたまひたりけるを其恩賞の地頭領家を忽諸しければ龜菊憤を含てなげき申ければ一院後鳥羽院やすからずをほしめされて地頭を改易すべきよしをほせられければ義時申けるは地頭職の事上古はなかりしを故右大將頼朝平家を追討の解狀に日本國の惣地頭に補せらる平家追討六箇年間國々の地頭人等或は子をうたせ或は親をうたせ郎從を損ずかやうの勳功に隨て分ち給ひたらん物をさせる罪なきに義時かはからひとして改易すべきやうなしとて是も不レ奉レ用しかば一院彌安からず思召され是關東亡さるべき事思召定て國々の兵ともことに寄てめされけり野

〔一段之統論〕●此段白拍子の根源をいへり壽 ●是より以下三四段ものをこりをいへり文 ●此段は上の段に陰陽頭有宗が名言をのせたるにうけて又此段には多久資が白拍子の根本をたゝせる言葉をのせてひろく諸人に正說をしらしむ雅好の例に仁心ならん上の段此段品こそかはれ其人をあげて自他の心得となる事をいふ處は皆同意にて侍る句

〔二百二十六〕後鳥羽院の御時信濃前司行長稽古のほまれ有けるか樂府の御論議の番にめされて七德の舞をふたつ忘れたりければ五德の冠者と異名をつきにけるを心うき事にして學問をすてゝ遁世したりけるを慈鎮和尚一藝ある者をば下部までもめしをきて不便にせさせ給ければ此信濃入道を扶持し給ひけり此行長入道平家物語を作りて生佛といひける盲目に敎てかたらせけりさて山門の事を殊にゆゝしくかけり九郎判官の事はくはしく知て書のせたり蒲冠者の事はよくしらざりけるにやおほくの事どもをしるしもらせり武士の事弓馬のわざは生佛東國のものにて武

士にとひ聞てかゝせけり彼生佛がうまれつきの聲を今の琵琶法師は學びたる也

行長　●行長傳記しれす諸

稽古　●ひろく古をかんがへ知たる義成べし句　●爰にては音樂の名を得たる也新註　●書の堯典後漢書文選に在　頭書云▲稽古の字尙書の堯典に出たり又後漢書列傳二十七桓榮傳に桓榮曰今日所レ蒙稽古之力也是は學問の力也と云義也野　▲文選東都賦曰憲章稽古注憲法也言法二其舊事一考二其古事一云々文　▲朱子の小學にも稽古を編の名とせり陳選が注に稽は考也とあり參

樂府　●古樂府新樂府あり文選にも樂府の詩歌を載たりなど諸抄にあれど是はそれにはあらず白氏文集卷の三卷之四などにある新樂府なり七德の舞も即文集卷三にあり其御論義とは文集の樂府の中の下審を問答する事也文　頭書云▲古樂府あり新樂府あり文選に樂府の詩歌をのせたり元稹集白易居集等に樂府の歌甚多し長恨歌傳にも樂府岐女と有又樂府雜錄と云書もあり野　▲文選西都賦序注銑曰樂府聚レ樂之所レ同廿七樂府詩註濟曰漢武帝定二郊祀一乃立二樂府一散二採齊楚趙魏之聲一以入二樂府一也句

番　●番はつがふとよめり學者をかたわけて其義を論ぜしむる人數にめさるゝを番にめさるゝと云成べし文

七德の舞　●白氏文集三新樂府の最初にあり此舞初は破陣樂の舞といひしを後に七德舞と名付し也文　●七德の舞といふは唐の太宗の始秦王たりし時劉武周を破りて軍中相ともに作りし破陣樂といふ曲なり其後太宗位に即給に及で宴會し給ふには必此曲を奏し給ふ其後貞觀七年正月に名をあらためて七德舞といへり此草子の樂府の七德舞と云は白居易此七德舞を題にして作りし文なり此文の論義なり彼太宗の七德の舞を論義するにはあらず文の義理を論する也增鐵　頭書云▲白氏長慶集七德舞注曰武德中天子始作二秦王破陣樂一以歌二太宗之功業一貞觀初太宗重制二破陣樂舞圖一詔二魏徵虞世南等一爲二之歌詞一名二七德舞一自二龍朔一已後詔二郊廟一享宴皆先奏レ之云々文　▲白氏文集新樂府注太宗爲二秦王一時破二劉武周一軍中相與作二秦王破陣曲一及レ即

レ位宴會必奏レ之以二百二十八人一被二銀甲一執レ戟而
舞凡三變毎變爲二四陣一象撃二刺往來一後更名二七德
舞一壽 ▲左傳宣公十二年傳曰夫武禁レ暴戢レ兵保レ大
定レ功安レ民和レ衆豐レ財者也杜預註曰此武七德也 增鐵
ふたつ ●七德の內を二つなり諸
冠者 ▲元服せし人を云也文 頭書云▲曲禮二十
曰レ弱冠すとあるを以て見れば冠者といへるは二
十以後三十以前のうちをさしていふか但もろこし
にてこそ上下ともに二十歲に及では冠すると見へ
たり本朝にては平人の冠するはなければ只平人な
らぬ義に冠者といへるか句 ▲本朝にも聖德太子十
九歲にしてかふりをはじめ給ひしとかやあれば尊
貴の上には此時分に冠を著給へども平人はなき事
也只歲の穿鑿なしに元服の後の名なりと見るがよ
きなり參 ▲源氏夕霧などをも元服の後くわざのき
みといへるがごとし上中下俗體を定めたる程若の
き人を云なるべし文
學問をすて ●樂の事を學ばずやめて也新注
慈鎭和尙 ●天台座主也前に委文
一藝あるもの 頭書云▲韓退之進學解名二一藝一者

無レ不レ庸野
平家物語 ●今座頭のかたる十二卷ある也文 ●此
平家も別人の作のやうに異說ありといへども兼好
の說あるうへは他說を用ゆべからず貞
盲目に敎 ●行長入道慈鎭和尙に扶持せられし故
にや平家のふしもおほくは台家の聲明のこゑに似
たる所あり六道講式のはかせ及び唐山大會の時な
どよみあぐる聲明のふし今の座頭のかたるによく
うつりのまがふところおほし又頓寫の時是をかた
るも台宗よりはじまれり參
山門 ●叡山を山門と云三井寺を寺門といふなり
參
殊にゆゝしく ●慈鎭和尙に扶持せられたるゆへ
にや
九郎判官 ●源の義經の事也 頭書云▲義經は源
義朝の九男なるゆへに源九郎と云也又判官といふ
は檢非違使の尉に任ぜられしゆへなり判官とは檢
非違使尉事を云なり文 ●義經童名牛若九左衞門大
尉從五位下武略長名將也文治五年閏四月二十九日
燒二奧州平泉衣河館一自害歲三十一是依二梶原平三

景時之讒言一也其欝憤之起在二津國渡部逆櫓遺恨一

清和天皇人皇五十六代―貞純親王――經基王――滿仲―

―頼信――頼義――義家八幡太郎殿是までは前法明寺殿鶴岡社參の段の足利の系圖にくはし

―爲義 左衛門尉從五下下野守實從五位上對馬守左衛門尉義親之四男也祖父義家爲二養子一義親義家男也

―頼朝 左馬頭從四位下

―範頼 從五位下參河守範頼於二遠州蒲生御厨一出生之間號二蒲冠者一頼朝弟也

―義經 文治二年於二伊豆北條一依二舍兄源二位命一被レ誅

蒲冠者 ●三河守範頼の事也

おほくの事どもをしるしもらせり ●誠にこゝに云ごとく平家物語を東鑑に考へ見れば義經のことはくはしく範頼の事は略せり野

武士にといひ聞て ●生佛も談合せしにや參

うまれつきの聲 ●天台宗の六道講式などよむふしはかせよく平家に似たれども聲つきやはらかにして少しうきたるやうに聞ゆ今の世の座頭の平家をかたるをきけば事の外にすね〴〵しきつよきこゑなり生佛が坂東音のうまれつきたるいろなるべし參

琵琶法師 ●琵琶法師とは地神經をよみて竈のはらひをするものゝ事にて本の座頭の事にてはなしといへどそれはのち〳〵琵琶をせなかにをへるを見てつけたる名なるべし元來平家物語を琵琶にて和せるは檢校勾當の所作なれば琵琶法師とは常の座頭の事をいふべき事也參

學びたる也 頭書云 △事文類聚に謝安は洛下書生謠の上手也世上に其名高鼻病ありて音濁りたり洛人其聲を學びてうたへりと云々此生佛が流のごとし諺

〔一段之統論〕●上の段に白拍子の根元並に俗樂の事をいへるにうけて又此段にも今の琵琶法師のかたる平家の本緣をくはしくたゞしあかしてひろく諸人にしらしむる兼好の例の仁心なるべし句 ●觀修寺良門十三代の孫葉室時長平家物語作者の隨一也と公卿補任にありそれは四十八卷の盛衰記なるべし行長がつくれるは十二卷平家にて生佛にをしへたり又俗間に平家勸文一冊あり六人の作者を載たり舛誤多ければ信用にたらず凡此物語に數本ありて往々に不同あり野

〔二百廿七〕六時禮讃は法然上人の弟子安樂といひけ

ける僧經文をあつめて造りてつとめにしけり其後太秦の善觀房といふ僧ふしはかせを定て聲明になせり一念の念佛の最初なり後嵯峨院の御代よりはじまれり法事讃も同じく善觀房はじめたるなり

六時禮讃　●書の名なり說●晝夜の六時に淨土を禮讃して罪障を消滅せし勤行(ゴンギヤウ)の法式なり參●此書の作者につけて二說あり　頭書云▲晉の惠遠法師蓮社を結びて蓮花漏をきざみ六時を禮せし六時念佛の權輿とす唐の善道六時禮讃偈をあらひあつめて日夜の勤行とす此段に安樂が作なりと云は異說なるにや淨家の人申さ壽▲六時禮讃は唐善導和尙の集記せられたる本にて一卷あり題號には往生禮讃とあり書中にいたりては六時禮讃とつゞきたる文字も見へたり懺文の中にてことにすぐれたる本なれば大藏經にもをさめ入られたり善導五部九卷と云るうちの隨一なりこゝに安樂か作なりといへるは不審なる事也かの禮讃の文段事の外なかきゆへにもし其中より略式の勤行をはじめて作り出せる事もありけるか今の淨土宗の世俗に發願經とてよむも此禮讃のうちより發願の文をぬきいだして用ゆる事なり參

安樂　●傳記つまびらかならず　頭書云▲編年小史の五の卷を見れば黑谷法然房の門弟に安樂住連とて二人あり八十三土御門治世二月に法然房源空の徒弟淨土宗を倡(イザナヒ)けるに官女に戒をうけ尼となれる人ありければ上皇いかりて源空を讃州にながし安樂住連を斬給ひしなりくはしくは黑谷上人傳にのせたり參

太秦　●山城國嵯峨の邊也說●廣隆寺なり秦氏の人來りて有し故に太秦寺といふなり野　頭書云▲山案參考曰日本事跡考曰嵯峨邊有二太秦寺一一名廣隆寺昔秦徐福來二日本一其子孫皆稱二秦氏一秦河勝居二此所一故號曰二太秦一▲今考るに廣隆寺又號二桂宮院一推古天皇十一年秦河勝造二立之一

善觀房　●傳記未レ詳諸重可レ考

ふしはかせ　●節は聲の上下博(ハカセ)とは聲の程也句

聲明　頭書云▲三藏法數注二五明第一聲明一曰聲即聲敎明即明了▲釋書音藝志曰聲明者印土之名五明之一也支那偏取曰二梵唄一曹陳王啓レ端也本朝遠取二于竺一立レ號焉參

一念の念佛　●法然の流義の一向專念の念佛也句諸抄の說も如ㇾ此なれ共濟難し　頭書云▲法然の末弟にも一念義多念義とて種々の派流あり一念義とは念彌陀佛を賴みをかけてよりのちふたゝび念ぜねども往生決定と思定むるとなり又多念義とは一生のうち名號の數功をほくつもらねば往生しがたしとたつると也百萬遍流義のたぐひのごとし其一念義多念義の由緒は東大寺の凝然の淨土源流章にくはしく見へたりしからばこゝの一念は一念義の念佛の事か猶可ㇾ考參

後嵯峨院　●人王八十七代の天子也　頭書云▲山井案人王八十七代後嵯峨院諱邦仁土御門院八十三代天子第二子母贈皇后宮通子贈左大臣通宗公女也承久二年二月廿六日降誕仁治三年正月廿日踐祚于時二十三歲同日元服三月十八日即位同十一月十二日大嘗會寬元四年正月廿九日讓位廿七歲二月五日尊號治四年文永五年十月五日於二龜山仙洞一御出家四十九歲法諱素覺文永九年二月十七日於二龜山別院藥師院一崩壽五十三

法事讚　●兩卷上下あり是も善導作也ふしはかせつけたる事善觀房か所爲歟壽●法事讚も善導製作の五部九卷の內也本の奧の題には西方淨土法事讚といへりこの法事讚二卷右の往生禮讚一卷般舟讚一卷觀念法門一卷この四部五卷を行儀分といふそれに觀經の四帖疏を加へて五部九卷といふなりふしはかせをつけたる事善觀房はしめる歟參

〔一段之統論〕●上の段に慈鎭和尙幷に行長遁世の事に付て平家物語の由來をいへるにうけて又此段にも同じ釋門の法然安樂善觀などの名を取出し六時禮讚法事讚の始をしるしてひろく諸人にしらしむる兼好の例の仁心なるべし句●此段は六時禮讚法事讚等を聲明とする事のをこりを書り文●禮讚の偈は唐の善導の作なるに安樂といへるは是兼好の覺ちがひなるべしつく〳〵思ふに其比安樂の此偈を不斷となへし故に世にしかいふをそのまゝしるされたるにや新註●六時禮讚は善導の御作勿論なりしかれども善導の作のまゝにては往生の行業を心得にはよし勉にはなりがたししかるを安樂房善導の五部九卷の往生禮讚を六時に分てつとめになりよきやうに致せしなりこれ六時禮讚と名付なり兼好あやまりにあらず往生禮讚と六時禮讚とはゝ

るかにちがひたるなりみるべし全●凡淨土の經釋の文に節はかせをつけて聲明になせる事本朝にては慈覺大師を元祖とす此大師入唐して法道和尚にあひて引聲の阿彌陀經念佛三昧を相傳して歸朝し玉へりき是極樂淨土の法音をうつし玉へるなり坂本赤山明神はすなはち慈覺大師にもろこしより隨逐し玉へる念佛守護の明神なりとかや此事台家の津金名目の中にも見へたり今にいたるまでもろこし魚山のこゑをすぐさまにつたへたる聲明の家は睿山の別所大原にかぎれるなりくはしくは元亨釋書にのせたるがごとし今にいたりても淨土宗の法事に奉請四方如來入道場散花樂などゝ讀あげて阿彌陀經をよむは皆覺大師よりの引聲の念佛也法然上人天台宗の僧にてありしゆへなりしからばたとひ善親房といふ者ありて聲明をはじめたりとも皆慈覺大師の引聲のひゞきをうつしたる事なるべし

參

【二百二十八】千本釋迦念佛は文永の比如輪上人是をはじめられけり

千本釋迦　●千本の釋迦堂にて二月九日より十五日まで涅槃佛の像をかけて涅槃の義式今に至るまで毎年あり兼好時代には十五日の夜は通夜にて有しと也北山槇尾山律院には今も十五日通夜ありさて法事の義式は遺教經を訓よみにふしを付たり終りには釋迦の寶號を唱れば釋念佛といふなり全

頭書云▲釋迦堂稱二大報恩寺一用明天皇御草創云々今本堂藤原秀衡建立而請二如珠上人一云々在二洛北千本一▲さてこゝを千本と云事笙岩屋の日藏上人冥途に赴きて延喜の帝に逢たてまつりしに帝勅定ありしは吾無實讒言を信じて無レ罪菅丞相を左遷しけるによつて今地獄に落苦患を受る也汝娑婆にかへり吾王子にこのおもむきを告て吾ために千本の卒都婆をたてゝ吊ふべし然らば苦を離るべしと宣ひしによつて上人蘇生したまひて右の勅定を奏聞し玉ひて船岡山に千本の卒都婆を立られしなり其邊なるによつて千本と云なり▲一說にこゝに釋迦念佛といへるは閻魔堂の事なりといへり千本に光明山引接寺とて閻魔堂あり此所に釋迦念佛と云事を如輪上人のはじめられしといふ說もあり但し大全曰此奥の自讃の所に女房のよりかゝりたる所

も此釋迦堂の涅槃會の時の事なり閻魔堂などゝを
もへるは僻なり文段參考增補鐵槌も大全の說に同
じ山案
文永　●八十九代龜山院の年號壽　●山案に文永九
年に釋迦念佛はじまりしと也
如輪上人　●諸抄ともに如輪上人の傳記詳かなら
ずといへり但法然上人の孫弟子澄空上人の事なり
ともいへり　頭書云▲梨窓三筆惠空和尚之筆作曰千本の釋
迦念佛を始めたりし如輪上人を人たれともしらず
予按ずるに法然の孫子弟なり東大寺凝然の淨土法
門源流章曰郊北九品寺長西上人房號覺明久事二源
空一練二淨土教一長西十九出家即附二源空一長西門人
英哲甚多就中澄空上人房號如輪宗研二天台說法一流
レ美兼隨二長西一習二學淨教一と見へたり如輪の事是
にて明にしるべし▲或說に釋迦念佛嵯峨淸涼寺壬
生寺幷當寺三ケ寺ともに圓覺上人のはじめられし
也今こゝに如輪上人と云は圓覺の事歟山案
〔一段之統論〕●此段は上の段の餘意也故に同段に
書たる本も有壽抄及び貞德などは別段にしたがへ
り文

〔二百二十九〕よき細工は少しにぶき刀をつかふとい
ふ妙觀が刀はいたくたゝず
少し　●少といふ字にて心は明也あまりはしがき
はものはつかひにくし過たるは猶及ばざるかごと
し增鐵
にぶき刀をつかふ　●鈍刀利からぬなり文　●細工
上手なるにより必よく切るゝを不レ用にぶき刀に
て割めば小刀めは淺くして然も其細工約なり是其
細工の至るゆへなり諺　頭書云▲古文眞寶後集賈
誼弔屈原賦曰莫耶爲レ鈍兮鉛刀爲レ銛▲淮南子曰莫
耶斷割砥礪之力壽▲三教指歸曰鈍刀切レ骨必由二砥
助一參
妙觀　●攝州勝尾寺の觀音の像を割し人なり文
頭書云▲元亨釋書云勝尾寺講堂觀音像寶龜十一
年七月十八日比丘妙觀刻レ之千臂千目莊麗端嚴又
加二四天王像一凡五尊三十日而成八月十八日妙觀合
掌而化觀音之靈應也▲仲芳攝州勝尾寺募緣疏にも
妙觀雕レ像の事を書り野
いたく　●甚の義也句
たゝず　●されずと也句　●其彫たる像などの刀目

ふかゝらぬはこれも利からぬ刀の故なるべければ是を能細工のにぶき刀つかふ證據にかけるなり文【一段之統論】●此段に義理ありとて種々に注をつくる人をほししかるべからずたゞ此かゝれたる如くよくきれぬ刀をかへりて用は上手のしるし也といふ義なるべし貞●此段も過不及のあしき心なりあまりにきれすぐれば小刀のわざにて作者の心のまゝにならずして其かたちしゝをきなどよからぬとぞ少にぶきといふ此少の字眼なり又妙觀の事は權化にて凡人の業に類せねども一往こゝに出されたりいたくたゝずと云所をよく〳〵見るべし凡人のわざにあらず●上の段に如輪の名出たるにうけて又此段にも佛工妙觀が事を書しるし巳が志をのべたりつら〳〵此段の意を按ずるにたとひ妙工なりとも利刃にてはもしも切過しあらん鈍刀にて幾度もきりこゝろ見んはあやまちなかるべしされはよき細工はすこしにぶき刀をつかふといふ細工のみにもあらず此理諸事にわたるべし孔門三千の弟子にぶきにはあらず却而魯鈍の曾子一貫を傳授して其血脈をつげり殊に兼好は莊老を好てすゝむ事を恐れ退く以て道とすときは誠にやふれにちかくにぶきは終をたもつことはり顯然たり句

【二百三十】五條の内裏には妖物ありけり藤大納言殿かたられ侍しは殿上人とも黑戸にて碁をうちけるに御簾をかゝげて見る物ありたそと見むきたれば狐人のやうにつゐゝてさしのぞきたるをあれきつねよとどよまれてまどひにけり未練の狐ばけそんじけるにこそ

五條の内裏　●後醍醐院の時皇居ありと云つたへたり壽●法住寺殿とて後白川院のときも五條に皇居ありしと也

妖物あり　●化物とも書也諸

藤大納言　●藤原氏の大納言は其比いくたりもあるべければ今誰と勘ふべからず文●句解に曰大納言爲世卿

黑戸　●前にあり

さしのぞきたる　●似たる故事あり　頭書云▲抱扑子內篇恭をうつ時鬼魅きたりて見たるをあやしみてうかゞひ見れば犬のばけたるにてありし事をのせたりこゝとよく似たり參

どよまれて●響の字也前にくはし
未練の狐●鍜練せぬを未練といふこゝにては功
のいらぬ狐也野
ばけそんじ●狐のみにあらず物每未練の人は皆
如レ此成就しがたからむ新註　頭書云▲本草綱目李
時珍曰狐至二百歲一禮二北斗一變化爲二男女淫婦一以惑
レ人又能擊レ尾出レ火▲事類後集三十七曰野狐一名紫
夜擊レ尾出レ火將レ爲レ怪必戴二髑髏一拜二北斗一髑髏不
レ墜則化爲レ人矣酉陽雜俎　參▲山井案に五雜俎卷九曰
狐千歲始與レ天通不レ爲レ魅矣其魅レ人者多取二人精
氣一以成二內丹一然則其不レ魅二婦人一何也曰狐陰類也
得レ陽乃成故雖二牡狐一必托二之女一以惑二男子一也然
不レ爲二大害一故北方之人習レ之南方猴多爲レ魅如二金
華家苗畜三年以上輙迷レ人不二獨狐一也
［一段之統論］●此段五條の內裏にばけものありと
いひふれしも狐なりし物語を書て世に化物といへ
どをほくきつねなどのなすわざなりといふ事をし
らせたるにや文●一段の大意は國のみたれんとす
る時家のほろびんとする折など種々のあやしき事
あらはるゝは其前表にて常に有事なり其外のふし
ぎは大かた狐狸のしわざなりとかねて思ひさだめ
時に臨てまよふべからざる敎戒にそのかみ五條內
裏にばけものありといひしも狐にてありける物語
を書しるされたるものなりといふ人もあり句●抱
朴子內篇の四を見れば萬物の功をへたるもの人に
化事をのせたり又小止觀の中にしるし給ひしを見
れば修行者座禪の時十二時の獸變化して種々のか
たちになりて行者をさまたくることをのせたりひ
とへに狐狸のみばけるものにはあらざる事也用心
すべきものなり參

［二百卅一］園の別當入道はさうなき庖丁者なり或人
の許にていみしき鯉をいだしたりければ皆人別當入
道の庖丁を見ばやとおもへどもたやすくうち出んも
いかゝとためらひけるを別當入道さる人にて此程百
日の鯉をきり侍るを今日かき侍るべきにあらずまげ
て申請んとてきられけるいみじくつき〴〵しく興あ
りて人ども思へりけるとある人北山太政入道殿にか
たり申されたりければかやうの事をのれはよにうる
さく覺ゆるなりきりぬべき人なくはたべきらんとい
ひたらんはなをよかりなん何條百日の鯉をきらんぞ

との給ひたりしおかしくおぼえしと人のかたり給ひけるいとおかし

園の別當入道　●參議右衞門督基氏卿●園は稱號也文●撿非違使の別當に任ぜられしゆへなり文●別當の事前にくわし　頭書云▲正三位參議撿非違使別當基氏卿則正二位權中納言持明院基家卿三男也天福二年十一月十七日上ニ辭狀ヲ出家改ニ名圓空ト句

鎌足——不比等——房前——眞楯——內麿
——冬嗣——良房——基經——忠平——師輔
——兼家——道長——賴宗（從一位右大臣號ニ堀川これまでは上卷の六段目皆たへん）
所にくわし——基賴（正四位下中務大輔鎭守府將軍）——通基（大藏卿持明院）——基家
——基氏（園流檢非違使別當右衞門督弘安五年十一月十八日薨七十一歲）

さうなき　●無雙の義也諸　前にくわし

庖丁者　●丁氏よく庖厨の事を知て宰烹するゆへに庖丁と云なり是より鸞刀をもいふ也莊子に出たり壽●日本庖丁者の始は四條家の庶流山蔭中納言なり野　頭書云▲莊子養生主篇庖丁牛を解ことを詳にかけり丁氏よく庖厨のことを知て宰烹するゆへに庖丁と云なりこれより鸞刀をも云なり此類多し伶人名を倫と云て伶倫と云巧匠名を石と云て匠石と云扁と云者よく車輪をけづりて輪扁と云奕秋名は秋にして奕を善するゆへなり琴摯はよく琴をひくもの其名摯なり京房易を講するゆへに易京と云醫和醫緩も醫者なり野▲庖丁匠石輪扁がことは莊子にあり伶倫は黃帝の樂師也奕秋は孟子にあり琴摯は大師摯也京房傳は前漢書にあり醫和は國語にのせたり醫緩は左傳にあり鄭季咸も神巫の名ありてこれを巫咸と云盜跖も名は跖なり庖丁鸞刀にわたるためしは劉伯墮酒を釀して佳酒を白墮と云晉阮咸月琴を彈して後世にこれを阮と云日本にても玄能奈須野を行脚して石を割に玄能の名あり玄賓山田を守て鹿を驚に僧都の器を用ふ山案

ためらひ　●猶豫と書思惟する也諸　頭書云▲猶豫と書漢書呂后紀注師古曰猶獸名也爾雅曰猶如レ麐善登レ木此獸性多ニ疑慮ヲ常居ニ山中ニ忽聞レ有レ聲即恐ニ有レ人且來害ニ之每豫上レ樹久之無レ人然後敢下須臾又上如レ此非レ一故不レ決者稱ニ猶豫ト焉或曰猶

は犬名なり犬隨レ人行ときは毎豫前にあり人を待て不レ得ときはまた來りむかへて候（ウカガウ）故曰ニ猶豫一韻會注に見へたり案山井

さる人 ●さやうの所と心得たる人にてと也文

百日の鯉 ●ものゝ稽古に百日行にする類なるべし壽

まげて申請 ●餘にきり給ふべき人あるべけれども我是非申請てきらんとなり文●まげては理を非にまげて也首尾のよきやうにてたくみていはるゝ也盤

いみじく ●美の字ほめたる詞也前に見えたり

づきく／＼しく興あり ●つきの有て一たんと興あると也古前にくはし

北山太政入道 ●西園寺公經公前にくはし

かやうの事 ●是より北山殿の詞也

よにうるさく ●餘にうるさく也又世にうるさくと云義にも通ふ古上にも見えたり●よには助語なり文

たべ ●此方へたまはれ也諺

何條百日の ●何しに百日の鯉をきるべきあらばに虚言めきたるとの義也文●北山殿一きはうへの重を被レ仰し也其たくみなるがあしき事也盤

鯉をきらんぞ ●是迄北山入道殿の詞也句

おかしく ●面白くおぼえしと也文●ほめたる義也句

人のかたり給ひける ●兼好に人かたりたる也諺●此給ひといふ字を味ひ見れば語りし人も高貴の人なるべし參

いとおかし ●兼好も甘心するこゝろなり諸

〔第一節〕●園別當入道と云よりいとおかしまでなり此段二節に分つ文段是に同じ●山案此節は園殿の鯉をきれる挨拶のいとうるさき事を云て次の節にて細にうるさきこゝろを述たり良に北山殿の詞いと有かたし

大かたふるまひて興あるよりも興なくてやすらかなるがまさりたるなりまれ人の饗應などもついでおかしきやうにとりなしたるも誠によけれどもたゞそのことゝなくてとり出たるいとよし人に物をとらせたるもついでなくてこれを奉らんといひたるまことの志なりおしむよしゝてこはれんとおもひ勝負のまけ

わざにことつけなんどしたるむづかし

大かた　●是より兼好世の心へのおしへなり諺

ふるまひて興ある　こゝにては色々と興をつくろひかざりての義也諸

饗應　●あるじまふけとよむ上に見えたり諸　●賓客にあるじまふけするにもなり文

ついでおかしきやうにとりなし　●其首尾をつくろひて面白やうにしなす事なり文　●金銀など出して求なから此肴此菓子は時節遠國よりもらひしなり幸なる事などいひてとり出てふるまふは一興ある事なれどよからぬ事也いかんとなればつくろふがあしき事なり盤

たゞそのことゝなく　●何のつやもなく振舞を出せと也諸

ついでなくて　●世話につきともなくなど云心なり增鐵

勝負のまけわざにことつけ　●かこつけたる義なり人にやるべき物を碁將棊等のかけろくにしてまけてやるやうにする也文　●つくろはずしてとらするがまことのこゝろざしなり盤

［第二節］●大かたと云より終までなり●此節は上の北山殿の詞をうけて萬事つくろひて興あらんよりたゞ直にやすらかなるがまさる事を云なり山案

［一段之統論］●此段つたなきまことを得のもとゝしたくみなる僞を失の本とすといへる古語にて能きこゑ侍る何事もたゞありやうにをこなひて後に氣づかひせぬがよきなりさりながら貴人の座敷に出ては時によりて惡事をも吉事にとりなしよからぬ刀脇指茶の湯道具などをもすこしほむるは禮なるべしこれはたゞよのつねの事のうへにて正直ならぬ人の世の人によきやうに思はれんたくみてなすわざは皆惡しと落著したる段なり貞●山井曰或說に此段に人に物をとらせたるもついでなくて是を奉らんといひたるまことの志なりといへるまことに殊勝也さりながら君臣の交は又各別ならんいかにとなれば主君より臣下に物をとらするには奉公の勤仕の品或は戰場の武功によつて感狀にそへて金銀封祿をあたふるなりこれ其臣下の勞功を褒美するなり是等はかこつけてやる義に似たれども如此なさねば臣下己が役義に勇まぬ者なれば主

人たる者はかくなさねばならぬなり此所にいへるは我同輩の交の中にて物をとらするときにことつけなどしたるはあしきとなり今案ずるに此説一理あれども鑿(イリホカ)なり君臣の交は義を以てするなればとらすべきことにとらするはこれかこつけといふものにてはなく則これ義なりしかれども君臣の中にもとらすべきほどの忠勤なくとも時として物をとらすべきことありさやうの時はつくろひがましき事はせずして志の誠をあらはしてとらすべきなり一偏に君臣の中にはこの心得あるまじきといへるは僻事なりさて朋友は信を以て交るなれば平生此心得が肝要なるべししかれどもかくつくろひかざることが禮のやうになり來るなり

〔二百三十二〕すべて人は無知無能になるべきものなり

〔第一節〕●すべてと云よりものなりまでなり此段諺に三節に分つ也文段は不レ分なり●山案此節は一段の大意をあげたり●増鐵曰前段園の別當の才藝ありながらありのまゝには用ずして百日の鯉など樣子過たる事をいひて北山入道にもどきいはれ玉ふ事をうけて發端の詞をいひ出せり前に智者は愚者になり能ある人は無能になるべきなどいへると同じこゝろなり●偖此無智無能にのにの字諸抄にこれなし諺解にはこれあり今しばらん諺解にしたがへりもし無智無能なるべきとにの字なき時は本より無智無能なるがよきといへるやうに聞ゆるなりさにはあらず才智藝能は隨分つとめ成就してしかも其才智藝能を外へ出さずして善にほこるなとの心なり但し諸抄にもにの字なけれど此說のごとく注解せりされどもにの字の入たるよりはてにはすなほならず又無智無能なるがよきといへるやうに注釋する抄もあり是說はいかゞあらん兼好本意とも思ひがたし

或人の子の見さまなどあしからぬが父の前にて人と物いふとて史書の文をひきたりしさかしくはきこえしかども尊者の前にてはさらずともとおほえし也

見さま ●打見たる樣子なり古

史書 ●史記漢書等の類なり壽

さかしくは ●賢の字文 ●才かしこくはなり諺

尊者 ●こゝにてはかの父をさしていふなり文

頭書云▲家無二二尊一といへる家語の詞も尊者の證文なり故に事物異名集には父の異名に家尊尊公尊甫尊嚴令尊々翁などゝのせたり弟子職の中に母レ倍二尊者一とあるは師をさしていふなり參
さらずともとおぼへし也 ●父を置ながら我智をとり出てさかしかるはさやうにせずともおぼえしと也これもなまじひの才智あるの失をいましめたる詞なり文　頭書云▲論語郷黨篇孔子於二郷黨一恂々如也似二不レ能レ言者一朱子注恂々信實之貌似二不レ能レ言者一謙卑遜順不レ以二賢智一先レ人也郷黨父兄宗族之所レ在故孔子居レ之其容貌辭氣如レ此 ▲晉趙獻子之入レ朝楚使者多二隱語一在レ廷之臣不レ能レ答獻子之子𦒿答レ之歸白二獻子一曰朝臣豈不レ能レ答但有二長者一姑且讓レ之耳句 ▲小學曰長者不レ及不二儳言一註儳雜之言也これも若き物よりさし出まじきいましめなり文
〔第二節〕●ある人の子と云よりをぼゑしまでなり文段にはこれまでを書つゞけて一段となして次の節よりを別段となせり諸抄ともに次を別段とせり但し壽抄には同段に書たり今壽抄にしたがへり●山案に此節は上をうけて人は無智無能になるがよきことをいはんだめに或人の子の少しの學智に自慢して父兄の前をも不レ憚古語を引て云ひちらす心ざまのよからぬことを證據に書たるなり

又ある人の許にて琵琶法師の物語をきかんとてびはをめしよせたるにぢうのひとつ落たりしかば作りてつけよと云に或男の中にあしからずとみゆるが古きひさくの柄ありやなんといふを見れば爪をおふじたり琵琶なんどひくにこそめくら法師のびは其沙汰にも及ばぬことなり道に心得たるよしにやとかたはらいたかりきひさくの柄はひもの木とかやいひてよからぬ物にとぞある人仰られし若き人はすこしの事もよく見えわろくみゆるなり

又 ●又とは上の段の意をうけてかけり句
琵琶法師 ●座頭の事也前に在
物語 ●平家物語なるべし野
ぢう ●柱の字なり琴にてはことぢとよむ琵琶にてはぢうとよむなり絃をのする木也樂人のびはの柱は四つ琵琶法師の柱は五つなり壽
あしからず見ゆるが ●是も上の詞をうけて書也

句

ひさく　頭書云▲和名曰杓音酌和名比佐古斟レ水器也俗に柄杓(ヒシヤク)と二字にかくは誤なり杓一字かくべし野

などいふを　●琵琶の柱にけつらんとのこゝろへなるべし文

見れば　●兼好の見たまえるなり文

爪をおふじ　●つめをばながくしたるなり生長と書ておほじたつるとよむ也壽

琵琶なゝどひくにこそ　●琵琶も瓜ひきとて瓜にて弾(タンズ)と也めづらしき事なる故に琴ばかりかと思ひて不審する人有盤●中園殿の説に箏のことに蘇香の樂をゆるされし人は大指食指中指の三つの瓜を生ずと也と宣へり琵琶も秘曲傳授の後は爪を生ずるにや四辻殿の記録に琵琶の爪きる圖あり文　頭書云▲或抄に說壽曰びはなどひくにこそとは不審なり爪にてひくは箏にてこそあれ琵琶は撥にてこそひけ琵琶なども、あるは琴などゝ書たるものかといへり此說あやまれり座頭の琵琶は撥にてひく樂人のびはゝ爪にてひくなり兼好ふるきひさくの柄ありやなどいふに氣をつけて見れば爪などながくのばしたり誠にびはなどひくと見へたりとなり四辻殿の記録に人指ゆびの爪はみじかく中指の爪はそれより思ひましたり大指の爪は三つの中に長かるべし此御流には皆爪をみじかくをきさふらふ也其外は皆長し琵琶の爪は　かやうに長かるべし箏の爪は　すこしたはみたるきりやう也句

めくら法師のびは　●座頭の琵琶などは樂人の琵琶と同じ口に評定しがたしと也句●沙汰の字上に注す僉議評定の心にかよふべし兼好此字をつかひたる何れの所へも心をつくべし參●其沙汰とは爪の事をいふ增鐵●琵琶の柱は古き檜がよしといへども座頭づれのには何にてもくるしからぬとぞ新註

道に心得たる　●此男琵琶の道を我心得たる由にかく柱をつくらんなどさし出たるかとかたはらいたかりしとなり上の章の無智無能なるべきもの也といひし同意なり句

ひもの木　●檜物師のつかふ木なり白木といふものなり文

よからぬ物にとぞ　●よからぬ物にとぞはよからぬ物なるにとぞ也此男のふるきひさくの柄ありや

といへる意はふるき檜の木を用むためひさくはいづくにも有物なれば如此云り句 ●琵琶の柱には新しき木よりもふるく手なれたるがよきなりと今の琵琶法師などもいふとなりこゝの心は檜はよけれども檜物師の手にふれてことにひさくの柄などはふつゝかなるものなればよからぬものなりといへる義なるべし野

若き人は ●是より兼好の評判の詞也盤 ●此詞ふかく若き人に愼むべしといましめたる詞也前に机の上に文をひろげて見ゐたる人のありさまの心にくかりしと此段前の段の人のふるまひとを見合せて其心をよく思惟すべし文

〔第三節〕●又ある人と云より終りまで也 ●此段は前段の智の失をいへりければこゝにて又能の失をいひて彼發端のすへて人は無智無能なるべきものなりといひし詞をことはるなり文

〔一段之統論〕 ●上段に園別當入道の庖丁の能にほこられし事をいひたるにうけて又此段も私智僻能をいましめり句 ●此段人のもとより智もなく能もなきかよしといふにはあらず少智少能をばなにあてゝそれをさしはさむ故にさやうにあらんよりは無智無能なるがましにてあるとなり又說には無智無能なるものゝやうにあるべきとなり盤 ●人は智能を以てこそ貴とはすれ無智無能にてよかるべしや答て曰不以辭害志と孟子のいへるこれなり無智無能がよしといふにはあらず人智能あるは何れか是にまさる事侍らんされとそれに自慢の心あるは物しりがほにてすゞろにいひちらしてよからぬとぞことに尊者の前にてはをそれざるべけんや世の若き人達の得たりかしこきをいましめてかけるなるべし兼好のみにあらず若愚と老子はのたまひ又聖人は盛德なれども容貌愚なるがごとしと史記にもはべるとなん注新 ●日本には莊老の道をしらざる故利根を表へあらはす智惠あるものと大名高家もかつまへ給ふ故にをさなひ時より我人にすぐれむとのみ見ゆるやうに心をもつなり兼好は是をにくみてこゝにしるさるゝと見へたり儒者も石中の玉のひかりをつゝむごとき道德のふうをしらずは必あやまちもいでくべき義なり若き人などには此段をよくしらせたき儀なり貞

徒然草諸抄大成卷第十九

目次

〔二百三十三〕萬のとがあらじとおもはゞ「何事にもまことありて「人をわかずうや〳〵しく「詞すくなからんにはしかじ

萬のとが　●とがをうけまじきとならば也説　頭書云▲論語曰多聞闕レ疑慎言ニ其餘一則寡レ尤野

人をわかず　●貴賤をわかたず也古

うや〳〵し　●恭の字説●慇懃の良なり新注●貴賤老少なべて敬てとの心なり文

しかじ　●已上の引文　頭書云▲論語曰言忠信行篤敬雖ニ蠻貊之邦一行矣野　▲又有子曰信近ニ於義一言可レ復也恭近ニ於禮一遠ニ恥辱一也▲又子曰人而無レ信不レ知ニ其可一也大車無レ輗小車無レ軏其何以行レ之哉▲又曰君子欲　訥ニ於言一而敏中於行上説　▲尸迦羅越六方禮經寧使ニ少レ言多一レ行不レ可ニ少レ行多一レ言參

〔第一節〕●萬のとがと云よりしかじまで也此段譲に三節にわかつ文段には節を不分●山案に此節は一段の綱領なりされば誠恭寡言の三つは人として最つゝしむべき道なり或説に此三をさへよくつゝしめば人たる道をつくすに足れりこれ徒然草の三寶とやいはん慈と儉と不先人とは老子の三寶忠信

習は曾子の三寶士地人民政事は孟子の三寶なるが
ごとしといへり此辨兼好本意にかなふべきはしら
ねども良に一理ありよく〱つとむべきは此三つ
なりされば誠は中庸に第一と說るところなり人と
して須臾も離るべからざる道也中庸云誠天之道也
誠レ之者人之道也云々又云者誠物之終始不レ誠無
レ物是故君子誠レ之爲レ貴云々又恭敬は大學一書の
工夫主一不適之道禮儀三千威三百之本なり寡言は
君子の重ずるところ經書に往々見へたり略冠考に
もそなへしなり
男女老少みなさる人こそよけれどもことにわかくか
たちよき人のことうるはしきは忘れがたく思ひつか
るゝ物なり
さる人　●左樣の人なり句
こそよけれども　●誠あり敬有寡言の人はよけれ
ども也參
かたちよき　●上の段に見ざまなどあしからぬと
いひあしからず見ゆるなどいふに應じて書なるべ
しとりわき若き人をいましめたり新注
こと　●言葉也諸

うるはしきは　●ことうるはしきはことばを慇懃
にいふ成べし句
〔第二節〕●男女老少と云よりつかるゝ物なりまで
なり●山案此節は誠敬寡言の三の中に言を愼むべ
きことをいへり人として多言なりやすきものなれ
ばなりことに上の段に若き人の言をつゝしまざる
ことの見にくきをいへるにうけて又此節にもとり
わきて若輩をいましめたり
よろづのとがはなれたるさまに上手めき所えたる氣
色して人をないがしろにするにあり
よろづのとがは　●發端の詞をうく說
なれたるさまに上手めき　●其事に馴がほに我こ
そと上手めきたるさまする也文
所えたる氣色　●物に功者なる躰なり參●傍若無
人のさまなり俗にしてもちがほしたりといふ類也
野
ないがしろにするにあり　●ないがしろにすると
は不禮にして人をあなどりいやしむ躰なり說
〔第三節〕●萬のとがはと云より終までなり●山案
此節は上の節に寡言のよきことをいゑるによつて

誠恭の二つをいへりされば物なれ上手めくは心に忠信なきゆへなり又人をないがしろにするは身に恭敬をそなへざるによつてなりされはなれたるさまに上手めき所得たる氣色してとがをうけし人和漢ともにこれ多し淮南子曰善游者溺善騎者墮各以二其所一レ好反自爲レ禍とあり況や其藝能の至極をもしらずして上手めく者に於てをや前にもいゑる下野入道信願を落馬の相ありと秦重躬がいひけるも上手めきて沛艾の馬を好しによつて終には馬より落て死にけり又史記韓非傳に載たる衛彌子瑕か君の車に乘り桃の餘りを君に奉りしも後には科なりとて殺されたりこれ君の寵になれて所得たるさましたるゆへなり我朝の梶原景時も君寵にほこりて人をないがしろにいたしけるゆへ終に害せらる其外人をないがしろにしてとがを得し者古今勝てかぞへがたき也孝經曰治レ國者不三敢侮二於鰥寡一況於二士民一とあり國君さへ如レ此いましめたり士庶人の族としてみだりに人をあなとるべからず越後謙信は士卒をはないがしろにし玉ひし故に成田も敵となりて勝利を失ひ織田信長も明智をあなどり恥をあたへられし故に終に討れ玉へり又晏子春秋に記せり齊の晏子荊と云國へ使者に行ける比荊王晏子がもとより口利根なる事を聞及給ひいかにもしてはぢしめ口をあかせざるやうにすべきとて諸臣下と談合しめし合せ待かけられたる所へ晏子來りたり荊王對面し給ひける所に其前を囚をしばりからめて通りけり荊もこれを見て其囚はいづくの者にていかなる咎をか仕りたるぞと尋玉ひしに繩とりの者申上けるは此囚は齊の國の者なるか此國へ來りてぬすみを仕りたる咎によりかくのごとしと申上ける時荊王晏子にむかひて齊の國にはもとより盗人多くさふらふやと問玉ひければ晏子取敢ず江南の橘をとりて江北にうゆる時は必からたちになる事は地によりての事なれば今此盗人も又如此なるべし齊の國にてはぬすみすまじけれども荊の國へまいりて地によりてぬす人となりたる成べしと答へ申けるゆへ荊王かへりてはぢをかき玉ひけるとぞ其後晏子又楚の國へ使者に行ける時玆にても晏子をはつかしめんとたくまれ晏子もとよりきはめて長ひくき小男なれば城の大門のわきにい

かにもちいさき門を一つこしらへ置て此小門より晏子をばいらせんとせしに晏子入らずしていひけるは狗の國へ使にゆくものは狗の門より入べし今我は楚の國へ使者に來りたればかゝる狗の門よりは入べからずと申ける楚人皆理に服して大門よりぞはいらせけるさて楚王にまみえける時楚王とひ玉ふは齊の國には人なきと見へたり其方のごとき不人物なる者をは晴がましき隣國への使者にこさるゝほどにと有ければ晏子又荅へけるは齊の國は大國なれば人に事かく事は侍らねども所によりてそれ〳〵に人をつかはるゝゆへによき國へはよき人をつかはしあしき國へは惡き人をつかはるゝなりとぞ答へけるしかれば恥をかゝせんとたくみ給ひてかへりて皆我身に恥をかき玉ふやうになりたりければ總じてむさと人をあなどりこなすべからさるなり又郭令公か事思ひ合すべし郭令公常に妾ありけるが客人ある時も其女どもゝ前に並居て用事を達しける所に或時盧杞と云人見舞に來れりと聞てそのまゝかの女どもを皆々わきへやられたり子どもこれを見て如何なる故ありてかいつもとかはりかくはし玉ふぞと不審しければ郭令公こたへられけるはされは別の子細にても侍らず只今來れる盧杞といふ者は容貌醜しきはめて不人物なる生れつきなれば女童の輩是を見ば定めて笑ひ侍るべし笑はれたる身になりてはいかばかり無念に思ひとかなき某を仇敵のごとくうらみんと思ふによりかくはしつるなりとぞ申されけるまことに人と交るには萬につき加樣の心づかひあるべき事なり齊頃公は婦人の客をわらひしより事をこりて國をみだるにいたり趙の平原君は足なえたるものをわらひし女をころさゞるより賓客さりしためし思ひ合すべしこれ等皆召仕の女の人をあざむきつるさへ如此自身人をないかしろにせば忽とがを得べきこと勿論なり

〔一段之統論〕●此段は前の兩段のこゝろをうけて若き人のなましゐ才能もあるは必自負の氣色をもてにあらはれて人をもないがしろにし心の誠と敬とを忘るゝゆへにかへりて人に見をとされいひけたるゝとかあるものなればこゝを能つゝしみて忘るべからずとの心をいへり文●此段は前の兩段の

心をうけて人をあなどり詞多き事をいましめ誡と敬との道を致たり人をあなどるのもとは我を慢じて心にも思ひ色にも詞にも出すにありよく〳〵つゝしむべし鐵増

〔二百三十四〕人の物を問たるにしらずしもあらじ有のまゝにいはんはおこがましとにや心まどはずやうにかへりことしたるよからぬ事なりしりたることもなをさだかにと思ひてや問らん又まことにしらぬ人もなどかなからんうらゝかにいひきかせたらんはおとなしく聞えなまし

しらずしもあらじ　●必しらで問にてもあらじと彼問人の心を答る人がをしはかりておもへるさま也文

ありのまゝ　●あまり有様に云んはしろ人しきやうに人も思ひけつくおこがましからんと思ひてにやと也鐵増●答る人の心を乖好察して云文

心まどはす　●問たる人の心なり諺

よからぬ事なり　●問るゝ人の心に是は必知ぬ事にあらしとわが推をまわして有のまゝに云まじきと六かしくこたへて人の心をまとはすはよからぬ事となり諺

なをさだかに　●さだかとはたしか成心也諺●知りたる事なれどもよく人に問ていよ〳〵さだめたきとおもひてとふ事も有べし句

まことにしらぬ　●又はじめより眞實にしらずして問人も有べしと也句

うらゝかに　●問人の耳にたゝぬ様に也諺●何となくいひきかすべし文

〔第一節〕●人の物をと云よりきこゑなましまでなり野槌はじめ句解蟠齋等はこれまでを一段とし次の節よりを別段となせり壽抄貞德をはじめ文段諺解などには一段となせり●此一節は人の應對の心ばへをおしへたり文●此段上にうや〳〵しく言葉をほからぬをほめたるによりたゞものをいはねばよきとばかりしりていはぬかたにすぎたる人あるべき故に無用の事をたくさんにいふこそ悪けれ用の事を埒のあかぬやうにいふはあしきことのこゝろなり盤

人はいまだ聞及ばぬ事を我しりたるまゝにさても其人の事の淺ましさなゞどばかりいひやりたればいか

なることのあるにかとをし返しとひにやることそ心づきなければ世にふりぬることをものづから聞もらすこともあれば覺束なからぬ樣に告やりたらんあしかるべき事かは加樣の事はものなれぬ人の有事なり淺まし ◉其淺ましきやうすをもいはでそんでうそれば笑止成事出來たりなどばかりいひやるなり增鐵

をしかへし ◉何事の有にやとかさねてさきの人より我にとひに來るなり句

心づきなけれ ◉心なきといふ事也一度にてすむやうに云やらずして又二度問に來る樣に云やるは心なき事と也句

世にふりぬること ◉世に事舊ぬることと也文 ◉經の字を書べし流布の義なるべし句

聞もらすこともあれば ◉異本にあたりもあれば共かた共書 ▲遠鄉の人或は世に交ぬ人諺

覺束なからぬ樣 ◉世の中に流布したる事を我こそはよくしりたらめ人によりて聞もらす事もあれば覺束なく思ぬ樣にいひたらんはあしかるべき事かはよかるべきとなり諺

ものなれぬ ◉功のいらぬ人なり壽

〔第二節〕◉人はいまだと云より終までなり ◉此節は人に物を告やる心つかひを敎ゆ文

〔一段之統論〕▲此段人のつきあひ世間常住のたしなみをすゝむるなり壽 ◉此段初は世間つきあひの上にて應對の品につきて惡意地ある事をいましめたり殊に物の師匠などする人に問どをしへずして結句慍をふくみ人をあざむく人侍り末には人の方へ物いひやる品をおしへたり增鐵 ◉此段畢竟我しりたることはわたくしなく心を用ひて分明にいふべし心を用ひずして無二覺束一やうにいふべからずとなり是等の人世にをほければいましめてかくいへるにや句

〔二百三十五〕ぬしある家にはすゞろなる人心のまゝに入くる事なし

すゞろ ◉無端と河海在　頭書云 ▲古歌に「難波人あしのかりやに宿かればすゞろに袖のしほたるゝかな說

〔第一節〕◉此段みだりに五節に分つ文段は四節に分つ也今ともにしるすなり ◉山案此節は一段の大

意なり心に主なければ若干の忘念の起ると云はんために先此家のたとへをば設たりされば主ある家にはみだりなる物入ことなし心にも主あるときは外物にうばゝれざるなり故に求二放心一は孟子一部の工夫其外大學の明德中庸の至誠も皆是心の主をとりうしなはざるやうにとの敎なり老子の又玄釋氏の妙と云るもともに同じかるべし此段諸說まち〳〵にしてすみ難し見あやまるべからず次にくわしく辨ずべし文段曰これ兼好心にさま〳〵のよしなしごとのうつり來り念々のほしいまゝに來りうかぶにつきてさては心とさしていふべき主人はなきにやあらん若心とさす主あらばかくそこばくの情欲はきたらざらんと思ひ得たる所を家のたとへにていへり問或說(野槌句解などの說なり)に此段家を形にたとふ主人を心にたとふといへり如何答是は心を一身の主人公などゝいふ事あるになづみて此段の文意をして妄に注したるなり此段の家といへるは心のたとへにて形をいふにあらず彼あるじなき所とは心の虛明なるといへるにてしるべし問性理大全三十に心下曰有二主人一在レ內先實二其屋一外客不レ能レ入と此段と同きにや答詞は似たれどもかれは心を守る工夫此草紙と異なり▲今此說を味ふ一家といへるは心のたとへにて形をいふにあらずといへるは面白けれど彼あるじなき所とは心の虛明なるを指といへることはいかゞあらん次の節にくわしく辨ずべし又性理大全の詞は心を守る工夫にて此草紙と異なりといへる事大に僻事なり此書にいへるも放心をもとめ自己本分の一主人公をとりうしなはせまじきために書るなり若心を守る工夫にはあらずといはゞ草木瓦石のごとく無心なるところをよしとせんや是今の世に多き斷無の見なるべし嗚呼あるじなき所には道行人みだりに立入狐ふくろふ樣の物も人げにせかれねばところえがほにいりすみこたまなどいふけしからぬかたちもあらはるゝ物なり

あるじなき　●主なき家也是より譬喩どもを擧たり說

狐ふくろふ樣の物　●狐梟のやうな物といふ義也

文　頭書云▲山案狐の事は前にあり梟は▲字彙云梟不孝鳥一名流離少好而長醜大則食二其母一說文夏

至捕レ梟磔レ之以レ頭挂(カク)二木上一今謂レ挂(カク)レ首爲レ梟云々
▲白氏文集第一凶宅詩　梟鳴二松桂枝一狐藏二蘭菊
叢一▲夫木集二十七後京極歌に「古寺の軒のひはだ
は草あれてあはれ狐のふし所かな説
人げに　●人氣と書也古
ところえがほ　●此所を己が得たるよしにて也參
こたま　●山彦(コヾマ)　同木神　同空谷響　同樹神　同木魅　同罔
象など書諸●かやうの文字は其所にしたがひてか
はれども惣じて其形なくて聲をなす響を云也化生
妖怪といひてもくるしからず爰にては空堂などの
人すまぬ所にやなりと俗にいふ響あるをいふなり
全●こゝにてはけしからぬかたちもあらはるゝと
あればばけ物のこゝろを用べし文　頭書云▲文選
東都賦に罔象と書てこたまをよめり註綜曰罔象木
石怪といへり木石の妖怪をなすをいふと見へたり
又木神(コダマ)樹神(コダマ)とも書又無城賦に木魅と書てこたまと
よませたりすべてばけ物なり又山彦空谷響と書も
あれどもばけ物にあらず句▲こゝもと源氏の蓬生
の巻にて書たり云くかみしも人かず〳〵なく成行
もとよりあれたりし宮のうちいとゞきつねのすみ
かとなりてうとましうけとをき木だちにふくろふ
の聲をあさゆふにみゝならしつゝ人氣にこそさや
うの物もせかれてかげかくしけれこたまなどけし
からぬものども所得てやう〳〵かたちをあらはし
てものわびし壽▲是はすゑつむの住居のさびしき
をいひしなり參

「第二節」●あるじなき所と云よりあらはるゝ物な
りまでなり文段にはこゝまでを一節とす●山案に
此節は上の節をうけて主なき家には外物みだりに
入ることをいへり是心主なきときは惡念みだりに
來りうかふことをいはんために先一つのたとへを
設たり文段云彼あるじなき所とは心の虛明なるを
いへるにてしるべしと云々此說を味ふにいかゞあ
らん夫心は虛なるもののゆへに善惡ともに能うつり
來るなりしかれどもよく靈なるもののゆへに善惡の
分ちを知るなり其明にして善惡の分ちを能しるも
のをさして性とも理とも云なり其理性がすなはち
心の主たる故に能好惡をなす能好惡をなすが故に
外物みだりに入來てしばらくも足をとゞむる事な
し主なき所は心の虛にして萬物の能うかみ來るに

は似たれども外物みだりに住するはこれ主なきが故なり何ぞ心の虚靈なると同日の談ならんや若し心には主なきものなる故に能萬物がうつり來るとのみいはゞ彼放心の輩なるべしされば放必の人も心はもと虚なるものなるゆへに能善惡うつり來るなりしかれども主となるべき性理がなきによつてみだりに外物足をとゞめて放必するなりさるによつて心の本體虚なるところをさして未發の中とも名付る也さて萬物のうつり來るに任せて能中節を已發の中と云なり猶くわしく次の節々に辨ずべし又鏡には色かたちなきゆへに萬の影來りてうつる鏡にいろかたちあらずましかばうつらざらまし虚空よくものをいる

鏡には云々　●心にたとふ鏡の中空々たる故に一切の物の影うつり來る也猶家に主なければ外の物の來ると同じ諺　頭書云▲性理大全潛室陳氏曰人心如レ鏡物來則應物去依レ舊自在不三曾迎ニ物之來一亦不三曾送ニ物之去一只是定而應々而定壽　▲程子曰聖人之心明鏡止水▲神秀曰心如ニ明鏡臺一六祖曰明鏡亦非レ臺▲古德曰胡來　胡現漢來漢現野　▲王虚中淨土文曰如ニ大明鏡一凡有レ物來便現ニ其影一鏡何嘗容レ心哉以ニ其明而自然一耳▲圓覺經疏曰無念而應レ緣如ニ明鏡無心而現一レ像故參

あらましかば　●鏡のなか虚無なる故にあらずは色像のうつる事はあるまじきと重て決然としたる語也參　●此所論有節分(セツワケ)の下に辨ずべし　頭書云▲七玉集に行家卿　何かそれうつらぬかげぞなかりける心やすめる鏡なるらん文

虚空よく物をいる　●この虚空よくものをいるといへるはあながち天地の外までの虚空と見るにはあらず物のなき所をさして虚空といふ也こゝにては只前の家に主なきと鏡の中のむなしきとを結していふなり諺參　●此所すみにくし節分(ワケ)の下に委く論ず　頭書云▲遊心安樂道曰衆生心性融通無礙泰若ニ虚空一▲肇法師淨名經疏曰至人空洞無レ象應レ物故形參

［第三節］●又鏡と云よりものをいるまで也文段には又鏡と云よりうつらざらましと云までを第二節目として其說に曰是心の虚明なる故萬物をてらす事を鏡にてたとへたり又虚空よくものをいると云

の一句を第三節目として其說によこれ心の萬物をのこさず心得る事を虛空の虛無廣大にして森羅萬象をいるゝにたとへていへり今此段分(ワケ)にしたがはず●山井曰此節は上節のこゝろをうけてたとへをかへていへり言意は鏡はもと虛明にしてしかも主となるべき色像がなきゆへに能姸媸の差別なく物として前に向ふことにうつるなりこれ心の虛靈なる故に萬物をよくうつすに同じきところをたとへたりされど此鏡のたとへにつきて論あり大全曰鏡を覺悟の心法にたとへし事儒佛神道までをしなべての常說なりしかるにあるじある家を覺悟にたとへなきを愚人にして此古來よりたとへきたる心法の鏡に難問をうちかけてその旨をひらきたりしかれども難問ばかりにて其會通はなきなり鏡にぬしありといはゞ萬像影はうつらぬはつなり又あるじなきとはいはゞ空亡無心にて佛者に第一きらへる但空(タンクウ)なり何をか佛性といひ主人公といふぞや工夫すべしとなり●山案するに此說是なりされば鏡の空虛にして萬物をうつすは心の虛靈に萬物が來りうかふに似たれども本より鏡は無心なれば姸媸を

わきまへ知ことゝなし心の虛靈にして萬事に應じてしかも跡なきところは鏡に似たれども能善惡邪正を知なり其知ものは何ぞと云ば性とも誠とも妙とも名付るなり是すなはち心の主宰なり古今鏡を以て心にたとふるは萬物のうつり來るのよく似たるをのみ云也鏡のごとく主宰なきと云には非ず參考曰竹窓隨筆曰如ニ喩レ心以ニ鏡蓋謂鏡能照レ物而物未レ來時鏡無ニ將迎一物方對時鏡無ニ憎愛一物既去時鏡無ニ留滯一聖人之心常寂常照三際空寂故喩レ如レ鏡然取ニ略似一而已究極而論鏡實無心心果若レ是之無心乎天台家には一面の鏡にをゐて心性の三體を見たつる事あり鏡の中の虛にして色かたちなきをば空體にたとへもろ〳〵の影うつるをば假體にたとへ鏡のあきらかにてらすをば中道體にたとふるなり又鏡像圓融の大事鏡智互照の口訣とて師資相承の子細あり其心より見れば此所いよ〳〵をもしろく覺へ侍る●又虛空よくものをいるの一句を大全に注して曰これも古來より心のたとへあり虛空を以て心の妙用不思議をあかす事なりしかるに虛空にぬしあらば山河大地草木瓦石等は入置まじき事な

り又ぬしなきといはゞ無の見なるべし今案ずるに此説も一理あれどもこゝにいへる虚空を實の天と見るときは理におゐて思ひあやまることもあるべければ只本注に記すごとく物のなきところをさして虚空と云と見るべし

我等がこゝろに念々のほしきまゝに來りうかぶも心といふものなきにあらん

なきにやあらん　◎念々のほしきまゝに來りうかふとはひまなく人欲のきざしおこるを云是たゞ本心の主人うちにまもる事なきゆへにてありと也句文段には次の節と書つゞけて第四節となして其説〔第四節〕◎我等と云よりなきにやあらんまでなりに曰此節はたゞちに心をさして論ぜり◎山井曰此節は前に家と鏡とをたとへに出して主なきときは外物のみだりに入くることをいへるをうけて心と云ものも念々のほしきまゝに來りうかぶは心と云ものゝなきにやあらんとうたがふ也この心と云ふものとは即ち心の主宰をさして云なりしかるときは心と主宰とは各別なるやうにきこゆさにはあらず心即主宰主宰即心にして異名同體なりさて主宰

と云は天より全くうけえたる本心をとりうしなはぬやうにするを云なり其とりうしなはぬやうにするは何ものがするぞといへばすなはち心なりこれをは孟子の求放心の工夫と云也さて此節に心の虚明にして萬物の來りうかふことをいへるは前に家と鏡とのたとへをもうけたるごとく心の本體は空虚にして主と云ふものなきによつて如此なりと人にしらせし意なりと注解する抄もあり是大なる僻なり若心の本體にぬしなきといふならば前に辯ずるごとく但空の見なるべし此節を熟味するに心と云ものゝなきにやあらんといへる中に無限歎息したる意あり今兼好が心のうちに無量の悪念のほしきまゝにきたりうかぶは心の主宰のなき故なるべれとなげきし詞也この念々といへるは善悪に通ふべけれどもこゝにては悪念をさして云なるべし大全曰悪念を狐ふくろう道行人にたとふればなりと云々其上ほしきまゝとかける詞も悪念なるゆへいへるなるべしすなはち第一節の注に載たる文段の説を見合すべしさて此節兼好が心の上をいへども萬人の心も又如此なればしばらくの中も

心の主宰をとりうしなはぬやうに守るべきことなりと次の節にいましめたり又大全曰上にいふ所の家と鏡と虚空とのうへをこゝにて不審したるなり主ある家には萬の物きたらず主なき家にはきたるといふなれば我らにも心といふものゝなきものにてあらんとなり其故は念々に惡心忘念のきたりうかめばとなり此ところも見あやまるべからずよくよく翫味すべし猶以次の節にくはしく辯ず

心にぬしあらましかば胸のうちに若干のことは入きたらざらまし

若干　●心にぬしとは主人公也若干とはかすもしれぬほどゝいふ事なり全●本心の主人よく内にまほりなばそこばくのきつねふくらうごときの人欲は入きたるまじきとなり句

［第五節］●心にぬしより以下也文段には上の節と書つゞけたり●山井曰此節は第一節にいへるたとへの意に應じて心の主人公をとり守るべきことをいへり諺解にも是より本心を放ちて求得ざれば此虚に乘じてさまの妄念雜心のくることをいへり主一無適の教を以て内を直くせば何物か至りきたらんやといへり此節は一段の骨髓なり又此節と上節とを連續して同じ意に見たる一義あり其說に曰心と云ものに主あるならば若干のことは入きたるまじけれど心は本來一物もなきゆへに萬事がうつり來るなりこれ即上にいへる空屋へ狐梟の入りすみ鏡中へ妍媸のうつり來るがごとく也となり今案ずるに此說は前にもいへる但空（タンクウ）の見なり今兩節にわけて見るべし第一節は一段の大意をたとへを設ていへり第二第三節は主なきことのよからぬを又たとへを以ていふなり第四節は上の二のたとへをうけて心上に主なれば惡念のをこりうかぶことをいへり偖此節には此惡念ををそれてうかみ來らぬ所の主人公をとりうしなはぬやうにせよと敎たり大全曰心にぬしあるならば萬境界はうつり來らぬはづなり主なきものにてあらんとなり是は兼好つれ〳〵所見の人に問れたる義なり此所をよくすまし此主人公の有無をよく知るを則主人公と云なり主人公しらぬ故に凡人と云しる故に佛陀聖人と云なり此難問は他人の知見を用す自己に工夫すべし其時鏡のたとへ虚空のたとへ明なるべきなり

此説いかゞあらんしばらく筆を閣

［一段之統論」●此段は心性を論ずるなり尤眼をつくべきなり壽●此段の大意如何答て曰此段容易に看破すべからず一部の修行こゝに侍るいかんとなれば釋迦七千巻の經菩薩の論人師の語錄萬巻ありといへど畢竟はたゞ一箇の心の字のさたのみなり道德經五千言南華三十三篇尹子列子等の書あまた侍る心をとくより他事なし儒には三皇五帝三王周公孔子孟子等の經傳棟に充牛に汗するも道心人心をあきらめて中を執に極まれり學問の道他なし其放心をもとむるのみと孟軻のいへる是なり此段徒々に見あやまりて牽強附會のがれがたし家といひ鏡といふたゞ此心の譬喩なり家に主なければあれはてゝ色々のわざはひ出來侍る心も亦しかり主人公ある則ば外物にまどはず死をも恐れぬものなれど心空々として敬なき則ば見る事聞事に轉せられ死にのぞみてはとりみだす鏡のたとへも上に同じ虛空よく物をいるとは上を結たる句なり家にあるじなき所と鏡中の物なき所を指て虛空とはいふなり實の天とみるはあやまり成べし家鏡のみならずいづれにても中に物なきをばいふべし心のぬしといふは家々により名かはれり儒には明德老子には虛無佛家には或は主人公無位眞人阿彌陀大日妙法などいへりつく〲とをもんみるに心に虛と靈との二つあり虛とは誰も見やすし靈の所はしりがたしかるが故に無の見にをつる者をほし無ノ見はあきやしきのごとし靈をさとる人は心に亭主侍る心に亭主なき則は日夜に物にまよひ臨終には心みだれ闇夜にともしびなくて山路をたどるがごとくならんまよはさること得ざるべし世上の愚人一心に敬(ツヽシミ)なき故に妄想妄念さま〲をこり六塵にひかれてまよひ行なりひとへに自己の佛性自已の明德をあきらむべしとぞ新注●此段は心法をしらする段なりつれ〲草全篇に名利の段寸陰をしむ人なしと云段僧に法ありの段此段四段は注抄する作者も講釋する人も智惠のたけしれて恥がましき段なり見る人能々心付て見るべきなり兼好智惠をふるひて書る所なりこれつれ〲の眼なりさて此一段家の虛空と鏡と此三つを以て自己本分の一主人公をしらせたるなり家には人をあるじとし鏡には明白を

あるじとし虚空には無色無形をあるじとするなりしかるに鏡と虚空は心法のたとへにことふりたるに家のたとへは兼好めづらしき作意なり全●此一章家と鏡とをたとへにかりて心のをさめやうを論ぜり始終をよみあぢはひて見るに石勉子清神篇に此主ある家の事鏡空虚にしてものをうつす事などをたとへて清神の事を論じたり諸子彙函二十四の卷にも其清神篇をぬき出してのせたり文章ながきゆへにこゝにのせず兼好も此石勉子によりてかけるかなどいうたがはるゝほど論意の體似たる段なり此家と鏡とに心のとりやりやうをしるべし後の人石勉子と見合せて工夫のあることと侍りさなくては心法をおさむる正意をしるべからず故に口授の段也参●此段は心にうつりゆくと初にいふ心法のことを上のたとへにて云なり家とたとへは心に萬物を具したるたとへ鏡はうつりゆきて著せぬたとへ虚空は心の廣大なるたとへなるへしこの一段は心法の事を工夫なくばしれがたきなりぬしなき家にいろ〳〵のものあらはるゝは心に著して一境にかたをちざるはあるじなき故に萬にあまねくして

萬物があるよしなり心にもとより體具したる萬物なる故にものに對したるとき其ものうかび出るなり家に主のさだまりてあるごとく心に一物に着して主があればよのものうつりてもあらはれぬとなり又鏡といふ物はさだまりたる色がなき故に萬の影がうつりゆくなり青キか黄ナルか赤キか白キか黒キか方ナルか圓キか長キか短キかなどさだまりなる色あらばそれがあるじとなりて其外はうつりきたりうるつりゆかじと也虚空のはてもなきごとくに心がひろくある故に心の中に萬物があるなりとなり虚空いづくにありとは見へねども萬物生々するなり其ごとく心に何ものがあるとも見へず空々寂々としてあれども心にあるなり我等が念々のほしきまゝとは心に念をおこしぬれば其事心にうかぶなり其うかぶにつけて心と云ものは無にて有んかいやなきにてもなし無はうかふまじきほどにいふ心なり初に心に主があるがあしきと云故にかく云なり初に云ぬしは着念なりこゝにいふは無著の主なり禪法の主人公なり心はひとへになきものと聞て但空にしづみぬべければかく云なりなきにやあらんいやなきにても

なしといふてにをは也なきにもあらぬといへば又あるものかと思ふべき故にぬしあらましかはといひて著したる心のあるといふ事にてはなしといへり著したる心の主あらば家の主のあるに萬物のきたらぬごとくなるべしとなりこゝは心法のさたなりこれはありといはんとすれば色相を見ずこれをなしといはんとすれば慮相をこるといふ文にて心得ぬべし柏樹の話則を參じたらむ人はよくしりぬべし其外佛書にをほくの心さたを書儒道にあまた論じたれどもことひろくてまよひぬべしすぐに祖師西來の意を工夫せばしれぬべし盤●此外數説あれども杜撰の類にて本意をとりうしなふべければ今これを略すこゝに記せる二三説も一分〳〵の見處をあらはせり讀者必まよふべからず

〔二百三十六〕丹波に出雲といふ處あり大社をうつしてめでたくつくれりしだの何がしとかやしる所なれば秋の比聖海上人其外も人あまたさそひていざ給へ出雲おかみにかいもちいめさせんとて具しもていきたるに各おがみてゆゝしく信をこしたり御前なる獅子高麗犬そむきてうしろさまにたちたりければ上人いみじく感じてあなめでたや此獅子のたちやういとめづらしふかき故あらんと涙ぐみていかに殿原殊勝の事は御覽じとがめずや無下なりといへば各あやしみてまことに他にことなりけり都のつとにかたらんなどいふに上人なを床しがりておとなしくものしりぬべき顔したる神官をよびて此御社の獅子のたてられやうさだめてならひあることに侍らんちとうけ給らばやといはれければ其事に候さがなきわらはべどもの仕りける奇怪に候こととなりとてさしよりてすへなをしていにければ上人の感涙いたづらになりにけり

丹波に出雲　●丹波國桑田郡也龜山の北にあり參●西の出雲をうつす故にこゝを出雲と云なるべし拾芥には出芋と書也盤　頭書云▲一宮記云大己貴命妻三穗津姫也父高皇産尊也日吉樹下神系圖曰坐二丹波一出芋神天津彦根命也兩説の中其可否をしらず改曆雜事には元明帶和銅四年辛亥にはじめて出現と見へたり此神の位を類聚國史には貞觀十四年十一月二十九日從四位上とあり此後階級未詳啓蒙便覽等を見れば出雲の國の杵築神よりは丹波の

神を先にのせたりしかれども兼好神道の長として大社をうつしてといへれば神社をかたどりていとなみたるは一定なるべし野槌其外の諸抄にも此草子に大社をうつしてといへるを見てかの出雲國出雲郡の大社と神躰を同じき樣に思へるはしかるべからず出雲の大社は素盞烏なりと云と又素盞烏の子大已貴を祭ると云の兩説なりいづれにもあれ丹波の出雲とは神躰もかはれりとしるべししかれども大已貴の妻なりといへる説によれば出雲國杵築神の大社をうつしたるもげにもなる事なり參出雲大社の事は次にくわし

大社　●出雲國大社也諸　●神名帳には名社とかくなり野　頭書云　▲山案に出雲國出雲郡にあり風土記曰所ニ以名ニ出雲一者八束水臣津（ヤツカミノオンツ）野命詔ニ八雲立出雲一之故云ニ出雲一（今案に八束水野命は素盞烏尊の別名也）　▲神社啓蒙曰神祇令曰出雲大社素戔烏尊也社家亦隨レ焉雖レ然以ニ根本一推レ之則天祖親以ニ日隅宮一所レ附ニ與于大已貴命一者也（當代社家尤以ニ大已貴命一座一爲ニ垂跡一而無ニ素盞烏之説一）　▲日本紀には素戔烏尊の子大已貴命を祭るなりとあり猶啓蒙等

に委

めでたく　●美麗の定也前に委句

しだの何がし　●志太の字乎壽　●志太氏の何某也誰ともしりかたし文

しる所　●知行所の事也古　頭書云　▲伊勢物語にしるよしゝてと書るも同じ古　▲源氏にしり玉ふところなどいへり文

聖海上人　●傳記未レ詳諸

いさ給へ　●卒（イザキ）來給へと誘詞也文　頭書云　▲源氏若紫巻にいざ給へよをかしき繪などをほくひゐなあそびなどする所にとあり文　▲宇治大納言物語の上に地藏のありかせ玉ふ道は我こそしりたれいざ給へあはせんといへばとあり句

さそひて　●志太が上人や皆其外の人共をさそひてゆかれたるなり兼好のさそはれたるといふ説は（句の注也）あしゝ説

かいもちい　●田舍なれば結構なる馳走はえすまじきなどゝ卑下していへる挨拶の詞也文前に委

めさせんと　●きこしめさせん也句

貝しもていきたる　●引具して出雲へいきたると

なり文

獅子高麗犬　●又狛犬とも書諸●是神社にかぎらす禁中にも有元日の節御即位なとに隼人此しゝこまのうしろにて犬の聲をあげて君を守り侍る事延喜式に侍り是日本紀に云る火闌降命の苗裔なり此故に神社にしゝ狛犬をたつるも守護の心と也文頭書云▲神道の傳受の巻物を見侍しに神功皇后の三韓を征伐し玉ひし時高麗にいたり玉へば犬來りて先手をせしより軍旅すゝみて其功をとげ玉ひしゆへに其形を作りて高麗犬と名付け神社の守護神となせりといへり本説をしらず▲神社啓蒙曰問高麗狗何義答此犬也其義見紀王室今尚今尚在銅犬而諸社階除置獅子者非也參▲こまいぬは高麗犬なり然るを獅子の形につくるは非なりと云々亦上可茂の社こまいの後の板に同犬を繪書てあり是余社にまれなり是をかけの犬と云ふ也子細神秘也と一年白井宗因の談也說

いかに　●同道の人々に上人のいへる詞也文

御覧じ　●見つけ給はぬと也說

まことに　●他所の狛犬の置樣とはちがひたると也文

都のつと　●京のみやけ也文●土産其纂其書　頭書云▲萬葉に「をくろさきみつのこじまの人ならは都のつとにいざといはましを文

さがなき　●惡の一字をさがなしとよむ惡口と二字にてもよめどもこゝにては惡の一字よくあへり古●又不祥其書句●此里のあしき童共也諺

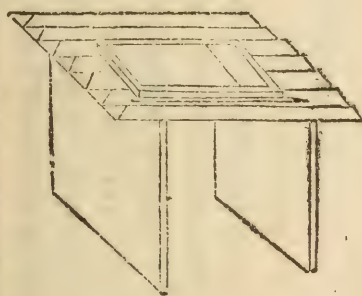
奇怪　●常ならぬ也參曲事也增鐵

感涙　●かなしみの涙にあらず奇瑞を感じてこぼるゝゆへに感涙といふ也參

［一段之統論］●この段はあまりいらぬところまで氣をつけだてする敎戒なり壽●此段は事々物々理あきらかならねばならぬ理をいひたるなり聖海上人神道をしられぬゆへになみだいたづらになるなり鐵●山井曰或說に此段は論語に季文子がことを再せば可なるべし三思てするゆへにかへつてあやまりも出來ると孔子の宣ひし意と同じ聖海上人のいらぬところに氣をつけてかへつて心の愚痴なることまであらはれたり余社にかはりたる狛犬のたてやうなれば一たん氣の付たるはさもあるべし

再氣を付て殿原までにいはれしはよからぬことながらかくもあるべきこと也三たび思ひめぐらして神官に問れしはこれあしきことなりさりながら物によりて深く心をつけて工夫をなすべきなり一偏に心得べからず孔子の詞も此段も季文子や聖海上人なと一人の心上にかけて見るべし此兩人はあまりものに念を入すきてかへつてあやまりもありけるゆへなるべし上巻に書る仁和寺の法師か床しく思ひて尋ぬべき八幡山をば問ずして極樂寺高良などばかりを拜みて歸りしは又ものを疎略にしたる故なり此兩人を手本にして過不及なきやうにつゝしむべきことなり貞德曰可レ信而不レ信非二誠心一又可レ不レ信而信レ之愚之所レ致也故以爲レ戒

【二百三十七】柳箱にすゆるものはたてざるよこざま物によるべきにや巻物なとはたてざまにをきて木のあはひより紙ひねりを通してゆひつく硯もたてざまに置たる筆ころばずよしと三條右大臣殿仰せられき勘解由小路(カデノコウジ)の能書の人々はかりにもたてざまにをかるゝ事なし必よこざまにすへられ侍りき

柳箱 ㊟硯短册或は鞠冠或は又追善の時に經巻等をすゆる臺なり柳にて作るけたの木數重半(テウハン)の儀說說あり御短册をすゑて進上の時冷泉家には重にこしらへらるゝ也又三條三光院の相傳とて吉凶により重半の儀あり吉事には半を用ひ追善の時經巻をすゆるには重を用ると也此章に物をすゆるにたてざまよこざまの兩說あるが如く其家々の相承あるべきか壽　頭書云△下學集柳箱編二柳枝一作レ之一尺四方句

柳筥之圖

三條右大臣 ㊟兼好時代と聞ゆ然に三條家の系圖又公卿補任等を以て考るに右大臣或左大臣にても見えず未決也壽

勘解由小路　●勘解由小路は世尊寺なり行成の子孫にて代々能書の家也抄　●世尊寺家の能書今はたへたり説

〔一段之統論〕●此段柳宮にすゆるもの丶故實をかけり文　●上の段に事をこのむ者さまで心を付まじき事に心を付るはしかるべからざる事をいふにうけて此段に又事によりてよく心をつくべし一偏に思ふべからざる事をいへり句

〔二百三十八〕御隨身近友が自讃とて七箇條書とゞめたる事有皆馬藝させる事なき事どもなり其ためしを思ひて自讃の事七あり

一人あまたつれて花見ありきしに最勝光院の邊にてをのこ馬をはしらしむるを見て今一度馬をはするものならば馬たふれて落べししばし見給へどて立とまりたるに又馬をはすとゞむる所にて馬をひきたふして乘る人泥土の中にころび入其詞のあやまらざる事を人みな感ず

一當代いまだ坊におはしまし丶比萬里小路殿御所なりしに堀川大納言殿伺候し給ひし御ざうしへ用ありて參りたりしに論語の四五六の卷をくりひろげ給て唯今御所にて紫の朱うばふことをにくむといふ文を御覽ぜられたき事有て御本を御覽ずれども御覽じ出されぬなりなをよくひき見よと仰事にて求るなりとおほせらる丶に九の卷のそこ〳〵の程に侍ると申たりしかばあなうれしとてもて參らせ給きかほどの事は兒ども丶常の事なれど昔の人はいさゝかの事をもいみじく自讃したる也後鳥羽院の御歌に袖とたもとと一首のうちにあしかりなんやと定家卿に尋仰られたるに

秋の野の草の袂か花ずゝきほに出てまねく袖とみゆらん

と侍れば何事かさふらふべきと申されたる事も時にあたりて本歌を覺悟す道の冥加なり高運なりなンどこと〳〵しく記しをかれ侍る也九條相國伊通公の款狀にもことなる事なき題目をもかきのせて自讃せられたり

一常在光院のつき鐘の銘は在兼卿の草也行房朝臣淸書していかたにうつさせんとせしに奉行の入道かの草を取出て見せ侍しに花の外に夕を送れば聲百里にきこゆと云句あり陽唐の韻と見ゆるに百里あやまり

かと申たりしをよくぞ見せ奉りける己が高名なりとて筆者のもとへいひやりたるにあやまり侍りけり數行となをさるべしと返事侍りき數行もいかなるべきにか若數歩のころかおぼつかなし

一人あまたともなひて三塔巡禮の事侍しに横川の常行堂のうち龍花院とかけるふるき額あり佐理行成のあひだうたがひありていまた決せずと申傳たりと堂僧ことごとしく申侍しを行成ならば裏書あるべし佐理ならばうらがきあるべからずといひたりしに裏は塵つもり虫の巣にていふせげなるをよくはきのごひてをのをの見侍しに行成位署名字年號さだかにみえ侍しかば人みな興にいる

一那蘭陀寺にて道眼聖談義せしに八災といふ事を忘れて誰かおぼえ給ふといひしを所化みな覺えざりしに局の内より是々にやといひ出したればいみじく感じ侍りき

一賢助僧正にともなひて加持香水を見侍しにいまだはてぬほどに僧正かへりて侍しに陳の外まで僧都みえず法師どもを返してもとめさするに同じさまなる大衆おほくてえもとめあはずといひていと久しくて出たりしをあなわびしそれもとめておはせよといはれしにかへり入てやがて具して出ぬ

一二月十五日月（キサラギトヲカアマリイツカノツキ）あかき夜うちふけて千本の寺にまうでゝうしろより入てひとり顔ふかくかくして聽聞し侍しに優なる女の姿にほひ人よりことなるがわけ入て膝にゐかゝればにほひなどもうつるばかりなればびんあしと思ひてすりのきたるに猶ゐよりて同じさまなればたちぬ其後ある御所さまのふるき女房のそゞろごといはれしついでに無下に色なき人におはしけりと見おとし奉ることなん有し情なしとうらみたてまつる人なんあるとの給ひ出したるに更にこそ心え侍らねと申てやみぬ此事後にきゝ侍しは彼聽聞の夜御つほねの内より人の御覧じしりてさふらふ女房をつくりたてゝいだし給ひてびんよくは詞なとかけんものそ其有さま參りて申せ興あらんとてはかり給ひけるとぞ

御随身　●随身の事前にくはし

近友　●近友傳記未レ詳

自賛　●我とほむる義なり諸

其ためしを思ひて自讃の云々　●近友がさしたる

事にも有ぬ事を自讃して七ヶ條のこしたる先例を取て兼好もさせる事なき自讃を七ヶ條書りと云也

壽●兼好もはじめに馬乘を相せし事をかゝれたるは彼近友が馬藝になぞらへたる下心なるべきか增鐵

參考●此自讃の事につけて論あり　頭書云▲此卷の三十段めには人としては善にほこらず物とあらそはざるを德とすわざはひもまねくはたゞ此慢心なりといへりしからは兼好は慢心あるまじきにいかんぞ自讃するや答曰自慢と自讃と似たるやうなれども大にかはりあり自慢とは己が學問才藝を以て敖惰とをごりたかぶりて人をないがしろにする莫大の科なり自讃といふは平生我つとめし事を他はほめたまはぬほどにせめて自なりとほめてたのしまんといふ意なるべし自讃歌といふは我よみたる歌を自ほめたれどこれ自慢にあらす却て卑下謙退の辭なり我朝の人のみにあらずもろこしにも侍る毛遂と云人平原君にむかひて自讃せし事史記に見えたり又趙充國が漢帝に自讃したる事前漢書にありとなん李白が韓朝宗に與ふる書にも雖二長不一レ滿二七尺一而心雄二萬夫一と自讃してかきしは古文眞寶に侍る

新注▲歌書に自讃と云事は口傳ありとかやさならねば何事も自讃よからぬ事なり▲盤云馬藝させることなきを本にして今もさせることもなき事を書たるといふ謙退の心なりされども此七箇は一部の心得に入事あり口傳なり補註云顯レ德謂二之謙一とあれば故もなきに自讃してしかもよきことはり有て我身をほむるにあらず人のためになるやうの心もあるべし釋尊の天上天下唯我獨尊との給ひしなとの心あるべし全▲自讃はもと佛の十重禁戒の制法なれば殊に兼好法師の身として佛制をかろしむべきにもあらぬば此七箇條を見て兼好の心をとりせることを見付たりいかにと問ふ答て曰佛家にも自行の前には自讃の義あるべからず輪廻の業なるゆへなり若利他の時はあながち罪過になるべからず慈恩通讃にも若彌陀自讃於レ理何違引二轉衆生一令レ生二勝意一といへる心にてしるべしことに歌道には自讃歌などゝ云事もあれはこれをならひにして云事也其故は自と云一字をわすれて見るべし小町が歌に一我なくば彌陀も正覺よもとらじ我こそ彌陀の知識なりけり此歌の心をしらば自讃

の事そしりを生する事ゆめ〳〵あるまじき事なり

參

最勝光院　●兼好ともに見てありきし也諺　頭書云▲野云拾芥曰法性寺建春門院字有落文歟　▲山案に最勝光院は人皇八十代高倉院承安三年十月建立供養建春門院の御願なり門院は即高倉院の御母后也

見給へとて立とまり　●兼好の同道の人々にいへる詞也諺

其詞のあやまらざる　●是は兼好の先知なり句　▲前の秦重躬が信願を落馬の相ありといひしと同意也野　●馬に三段の汗ありといへりそれを見るならん諺

當代　●當代とは後醍醐院か光明院かなるべし壽

坊　●春宮坊の事也位につかせ給はで太子にておはする時のことをいふ也野　頭書云▲山案春宮坊は太子の居玉ふところなりされば親王に儲君の宣下あるを立太子の宣下といふなりさて太子に立玉ふを東宮と云東宮春宮ともにみこのみやと和訓す太子の御名を云ときは東宮御殿をさして云ときは春宮御名の字をはゞかりて春の字を書なり▲令義解云東宮謂二太子所居一也未レ御幼君之間禁中御坐之間也云々▲左傳隱公三年正義云四時東爲レ春萬物生長在レ東西爲レ秋萬物成就在レ西是以君在二西宮一太子處二東宮一也▲職原抄云東宮春宮是一也然而傳學士此爲二東宮官一大夫以下爲二坊官一古來如レ斯▲又云春宮坊唐世置二詹事府一以統二衆務一又置二左右春坊一宮中事一向坊官指二大夫一之所レ掌也▲大夫執柄息大臣子孫爲二大中納言一人兼レ之諸大夫之納言已上無二拜任之例一坊中事大夫管領也

萬里小路殿御所　●里の御所なるべし東宮の此時おはせし所なり野

堀川大納言　●藤原師信公なり後醍醐院春宮の御時の大夫也花山の庶流なり壽　頭書云▲山案に大織冠二十一代の孫堀川内大臣師信公なり花山院の庶流なり從二位内大臣師繼公の男なり此時はいまだ大納言にて春宮の大夫をつとめられしなり元亨元年十一月十日に薨歳三十八

鎌足——不比等——房前——眞楯——内麻呂—

—冬嗣——良房——基經——忠平——師輔—

―兼家―道長―頼通 これまで前に委―師實 從一位太政大臣攝政關白―

白牛車兵杖隨身氏長者 家忠 從一位左大臣牛車兵杖―忠宗 從三位權中納言―忠雅 太政大臣―

從一位花山院 兼雅 從一位左大臣―忠經 正二位右大臣花山院―師繼 從二位內大臣花山院又―

堀川 師信 內大臣從一位

伺侯 ●堀川大納言殿今春宮大夫なれば萬里小路の御所へ常に伺候し給ふ也諸 ●春宮大夫は坊中の一切の事を掌どる官ゆへ也冠考に委

みざうし ●御曹子と書局の事也句 ●萬里小路殿の内に休息所の部屋なるべし古

用あり ●兼好の用の事ありて也諸

御所にて ●東宮なり諸

紫の朱うばふ ●論語陽貨篇の語　頭書云▲論語陽貨篇曰惡紫之奪朱也野

九の卷のそこ〳〵の程に ●兼好の詞則陽貨篇也諸

うれしと ●大納言殿の詞也諸

もて參らせ給き ●堀川殿東宮の御前へなり諺

かほどの事 ●是よりは兼好後に此つれ〳〵を書つらねられし時の草子の詞なり增鐵 ●論語にある程の事を覺ゆるは兒も常にある事なれど丶なり文 ●かほどのと云よりむかし人も自讃したる例を云なり全

後鳥羽院 ●前に有

袖とたもと丶一首のうち ●上句と下の句とによみては也諺　頭書云▲是喜撰式の歌の八病の中に同心病とてあるを基俊の説に詞かはりてをなじ心あるべし「あまを舟いまぞなぎさによするなるみぎはの田鶴の聲さはぐなり渚と汀と同心なりとのたまへるたぐひなれば定家卿へ敕問ありしなるべし文

定家卿 ●前にくはし

秋の野の草の袂か云々 ●古今在原棟梁の歌也諺

●歌の心は花薄は秋の野の草のたもとにてかかくほに出てまねく袖と見ゆらんと也文　頭書云▲此歌の意は花薄の風にふかれてなびくを人をまねくよしに見たて丶よめる歌なり秋の野の草の袂にてかと也ほに出てとはあらはる丶と云事なり時至て秋の季のあらはる丶を薄の穗によせてなりまねくとは草の袂といふ古事のあればなり袖と見ゆらん

とは人のまねく袖のやうなりといふ事なり又袖と同心なるやうなれども心かはれり全

何事かさふらふへき　●古今に證歌あるうへは何の難か侍らんと也文

時にあたりて　●勅問の時にあたりて也是より定家卿のしるしをかれし詞なるへし出書は未レ考文

道の　●歌の道か

冥加　頭書云▲孝衡曰加護有二一種一一顯加謂現二身語一讃二印其所作一二冥加謂潛垂二覆攝一不レ現二身語一參

高運　●高上の天運なり諺

ことゞゞしく記し　頭書云▲山案に枕草子うれしきものゝ條にはづかしき人の歌のもとすゑとひたるにふとをほへたる我ながらうれしつねにをぼゆる事も又人とふには淸く忘れてやみぬる折ぞをほかると書たり定家卿のかくことゞゞしくかゝれたるもむべなり

九條　●前にくはし

欵狀　●禁中へ官位をのぞみ或は訴訟を申上時の狀なりくわじやうと讀なりくわんとはよまざる也

壽　頭書云▲字彙云欵俗款字款苦管切寬誠也敬也叩也文▲山案韻會說文曰欵意有レ所レ欲也徐曰意有レ所レ欲而猶塞欵々然也▲むかしよりの諺曰くわしやうは山のあやまりつしやは公家のあやまりといふ事侍り比叡山より禁中へ欵狀をもちて參內する時山法師くわぢやうをもちてまいりたりと申上る公家の人其狀をとるとてことはをいひかへてくわんぢやうもちてきたられたるかと欵の字をありやうの正音にはねていふが故實なり山の僧はねてさゝぐる時は公家のかたより故實にたがひたるとてとがむる事侍るとなり此例によれるにやかやうの草子にても下より上へ上る時ははねずにいふことなり次にりつしやは公家のあやまりとは叡山大會の法事にたつ僧を竪者(リッシャ)といふなりこれをりつしやと云は公家がたより竪の字を見あやまりて立の字のこゑをばかりつけてりつしやといふ也竪はしゆのこゑなるゆへにりつしやは公家のあやまりと云なり參

ことなる事なき　●異本にことなることなき題目をもといふをかゝざるなり但し諸抄大形かくのご

とし
自讃せられたり ●此一箇條は是論語の文を早速
覺えて申たる自讃也參
常在光院 ●相國寺の末寺舊跡東山に在壽
在兼卿 ●參議正二位菅原家也唐橋の祖壽 頭書
云▲聖廟十四代の孫なり正二位左大辨菅原在兼卿
は參議正二位在嗣卿の男なり
字庭 ノキ三八 阿波守―古人 侍讀從五位下遠江守―淸公 文章博士―是善 從三位參議文章博士―
―通眞 從二位右大臣聖廟―高視 從五位下大學頭―雅視 文章博士左少辨―資忠 大內
記左中辨―孝標 タカスエ 文章博士從四位下―定義 贈從三位―輔方 雜色―是基 從五位下―
―在茂 文章生正四位下―在高 從二位大學頭―淳高 ナチタカ 式部大輔從二位―良頼 從二
位文章生―在嗣 參議正二位―在兼
草也 ●草書草稿などいひて下書の事參
行房朝臣 ●世尊寺の行成卿の末孫 頭書云▲世
尊寺行成より十代の孫なり經尹の息の行尹の弟也
鎌足―不比等―房前―眞楯―內麻呂―
―冬嗣―良房―基經―忠平―師輔―

―伊尹―義孝―行成 これまでは上巻飛鳥川の段に在―行經 從二位參
議―伊房 正三位中納言―定實 從四位上右京大夫―定信 從四位下宮內大輔―伊行 從五
位上宮內少輔―伊經 正四位下中務權少輔―行能 從三位右京大夫―經朝 從二位―
―經尹 從二位少納言―行房 右京大夫號二條一
いかた ●型とも摸とも範共書也參
見せ侍しに ●奉行の入道か兼好に見せ侍りしと
也句
花の外に夕を送れば ●鐘の音の花の外にきこえ
て遠く夕を告おくる心なるべし朗詠に長樂鐘聲花
外盡龍池柳色雨中深とある白樂天の詞を用ひたる
句成べし文
百里あやまりか ●此銘の全句皆平字の陽唐を韻
とせしに里の字ばかりは上聲の字にてしかも紙旨
の韻に入たる字なり然るに聲百里に聞ゆとあれば
聞の字は上に有て里の字は下の韵をふむ所につか
ひたれば韵ちがひたり是あやまりなるべしと兼好
の見出し給ひてかくのたまひし也銘はことにより
て韵を中ほどよりかへてふむもありまたふまぬ事

も有と見えたり跡は大かた四字つゝ韵を踏也増鐵參考
己が高名　●をのれはわれなり是は奉行の入道が詞也句　●兼好へ見せたる故に我高名となりたりと也増鐵
筆者のもとへ　●或說に行房也古說と有愚按に在兼卿成べし在兼鐘の銘を作りて行房淸書せり下の文に數行となをさるべしと有を見れば作者こそなをすべけれ淸書する者のなおすべき理なし句
返事　●在兼よりの返事成べし說
數行も　●是より貞德本にはなし壽命院抄には誰人書加へたるにやとあり野槌には古本にかしらがきしたるを後に書くはへたるなるべしとありとかくけづりずつべし諸
若數步のこゝろか　●行の字庚韵にも陽韵にも敬韵にもいれり庚韵にては行步の義也陽韵にては行列の義也敬韵にては行跡德行の義也こゝにては數行を數步の義にとらは庚韵成べし此鐘の銘は陽韵なれば庚韵にては韵ちがひたる故おほつかなしとなり又陽韵にして見れば鐘の聲つらなるといふ事いかならん又或本に數行なを不審數は四五なり鐘四五步不レ幾也只とをく聞ゆる心なりといふ事を此奥に書つらねたり諸
おぼつかなし　●是鐘の銘の書あやまりを見出したる手柄なり新注
三塔巡禮　●三塔は東塔西塔横川也壽　●三塔順禮とは三塔の諸堂をおがみめくる事なり三塔順禮記といふ物山門にあり所々の堂のいはれまで書たる物也盤　頭書云▲叡山も三つに山を分て空假中(クウケチウ)の三諦の表示となせり謂東塔西塔横川是なり又戒定惠の三つとも云なり全
常行堂　●常行堂は止觀の二の卷より出たる法花の四種三昧の行の中の常行三昧を行ふ堂也九十日の間阿彌陀を本尊として常に道中をするゆゑに常行三昧といふ也昔は三塔ともにありしと也慈覺大師入唐歸朝の後はじめて是を造營し給へり今東塔の根本中堂のあたりに戒壇堂とむかひてたてるが常行堂也參　頭書云▲元亨釋書慈覺大師傳讃曰授二弟子於三昧一謀營二常行之堂一參　▲新拾遺釋教部云やまの常行堂の流通の鐘にいつけて侍りける歌　心海上人「本覺の山のたかねの鐘の音に長きねふ

りをおとろかすかな文

龍花院 ●常行堂の境内なる龍花院なり則横川の一院の名也東塔には止觀院東塔の西谷は淨土院東谷は旦那院などゝ云ごとく也盤抄にも有仝

佐理 ●參議佐理卿也もろこしまでもしれる能筆の人也 頭書云▲正三位前太宰太貳參議藤原佐理少將敦敏之男小野宮太政大臣藤實賴公之孫也一條院長德四年七月晦薨五十五歲

鎌足―不比等―房前―眞楯―内麿―冬嗣―良房―基經―忠平（これまでは往々見へたり）―實賴（攝政太政大臣號ニ小野宮殿一）―敦敏（左少將）―佐理（參議正三位前兵部卿太宰大貳）

能筆ニ號之其一也

▲宋史四百九十一記ニ日本事一曰端拱元年日本永延二年啓ニ貢佛經乃至參議正四位上藤原佐理手書二卷等一參

行成 ●正二位太宰權帥大納言行成卿なり世尊寺と號す能書の家也前に委

堂僧 ●三塔の堂々を預りたる者也盤

佐理ならばうらがき云々 ●佐理は表書行成は裏書に大槩したまへり是名ある人後代に見あやまらすましき爲にかく分を立給へりとなん然るを人是をしらざりしに兼好はよくしられけるゆへにかくいはれけるならし說

虫の巣 ●蛛の類なり諺

いぶせげ ●むさ／＼としてわけもなきを云也文

位署 ●性名の上に官位を書つらぬるを位署といふ野 ●職原抄等にくはし

興にいる ●年久しくしれぬ事をよくあかせる新注

那蘭陀寺 ●前に見えたり

道眼 ●前に見ゆ

八災といふ ●修行得道に八つのさはりとなる事あり故に八災と云參 ●憂、苦、喜、樂、尋、伺、出息、入息、これを八災と云藏乘法數に在壽

語かおぼえ ●こゝは聖の詞也誰かをこれやと書たる本も有

所化 ●師は能化と云弟子をば所化と云也壽

局の內 ●聽聞する局なり諸

是々にや ●兼好の八災をおぼえてこれ／＼にやといひしとなり句

いみじく感じ ●道眼の感ぜし也文 ●此八災はあ

まりつねにもてあつかはぬ名目なるを兼好そらに覺えて是々にやといひしは奇特なる事なり參

賢助僧正にともなひ　●醍醐三寶院なり日野家の人なり壽

加持香水　●正月八日より十五日の朝まで御法事あるを後七日御修法といふ其間に三度の加持あり加とは佛の三密なり持とは行者の三業なり彼三密を此三業に持たるを加持と云也在二河海一野　頭書云▲神經略註三元加持經抄曰高野大師神變加持言釋不レ測云レ神異レ常云レ變往來出入爲レ加攝而不レ散爲レ持即入我我入也一印一明加持力成にも行者三業入二本尊三業一又本尊三業入二行者三業一故互入義也三密加持速疾顯云々又佛日應二衆生心水一云レ加衆生心水感二佛日一云レ持尺せり所詮者妙感妙應義也文▲加持香水と云文字も皆密敎の行用の本につづきたる字なり口に明呪をとなへ手に印をむすびて金剛杵にて水を加持して散杖をとり行者を加持すること其法式密法なれば筆に記しがたし天台眞言の兩宗禁裏にて御修法の時これを行ふこと也參

陳の外　●禁裏の眞言院の外陣也法事を行ふ時に内陣外陣あるべし參

僧都みえず　●賢助僧正同道の僧都也誰共不レ知諸

返してもとめさする　●僧正伴僧の法事をあとへかへして尋させらるる也

大衆　●衆徒の義なり諺

おはせ　●僧正の兼好にいはれし也文

具して出ぬ　●僧都をたづね引ぐしてなり諺　●ありがたき才覺なり新注

千本の寺　●釋迦堂なり二月十五日は遺敎經の法事なるべし壽●涅槃會共いふ也兼好時代までは所所にこれを行はるゝと見えたり今の世にも如レ法に勤るは北山槇雄律院に毎年二月九日より十五日迄あり十五日は夜もすがら法事釋迦念佛等あり今の釋迦堂には晝ばかりなり全●猶千本釋迦堂ならびに念佛の事前にくはし

うしろより入て　●うしろ堂より兼好のいられたる也文●人目をしのびて參詣し給ふ說

聽聞し侍しに　●遺敎經を兼好聽聞したるなり句

膝にゐかゝれば　●兼好のひざによりかゝればな

り句
びんあしと ●たよりあしと也古 ●つきなき心也
便惡と書文 ●兼好いやにおもふ心なり説
すりのき ●膝によりかゝりし匂ひなど此方へうつれば兼好いぶせく思ひてわきへすりのきたるなり諸
猶ゐよりて ●彼女猶以兼好の膝のもとへ近くなり說
たちぬ ●兼好そこを立去也諺
ふるき女房 ●年寄たる女なり諺
いはれしついでに ●彼老女の兼好にいはれし左禮詞也文
うらみたてまつる人なんある ●彼老女の兼好を人情もなく心の色もなき人なれば見おとしたりといひし人有とざれていひ出したる也増鐵
更にこそ ●始は兼好合點ゆかざりし故心得らぬなと申て止し也増鐵
御覽じしりて ●或人兼好を見しりて也參
さふらふ女房 ●傍に見やづかへし女房也侍女と書てさふらふ女とよむ也句

びんよくは ●兼好風流の隱者なれば便宜よくは詞をもかけんものぞとなり文
はかり給ひけるとぞ ●人しれぬくらがりなれどいさゝかも女に心をうごかさぬ奇特なりいかなる智者賢人も此道にはまよふものぞしかもくらがり人しらぬ所なれば美女のあなたよりたはふるゝならば何とぞ言葉をかくるか手をもふれずしてはあるべからぬ事なるに露ばかりも心をかけてまどはずすなはち座を去てかへりし事血氣ある人間のをよびがたき所とぞ兼好をば實に鐵作の眞人ともいひつべし七ヶ條の自讃の中の又自讃とおもへばこそ終にはしるされたれ新注 ●此條餘にすぐれて人のみだりに淫するための誡となりて殊勝なる條目なり自讃してもくるしかるまじき事也佛祖統紀三十七及び金湯編二の卷にのせたる法志が事とあはせてよく似たるおこなひなり參 ●猶統論の下に委辯ず

〔一段之統論〕●右七箇條の自讃の内第四第六條は稱するにたらずといへども第一條落馬の相を先知せし事尤心智の明かなるにあらずんばなりかたき

所なり第二條論語の文をそらんじ第三條鐘の銘の韻字のあやまりをしり第五條八災の名目をそらんじたる事もとより難事にあらずといへども人に益ある事なるにや第七條にいたりて色に淫せざる事をいへり是尤常人のこのみ淫する所なるに兼好其座を立さりぬる事誠に殊勝に見へ侍れ世の色に淫せるものははぢいましむべき事なるをや句●山非案に此段の七箇條先第一條は落馬の相の事を自讃すといへども人としては我功能に伐(ホコ)るべからずとなりたとひ得たる藝能にてもそれにほこりてつゝしみなきときはかゝるはざはひも出來るほどにそのいましめなり第二條は記憶を自讃してたとい學問遊藝をなしても心に記憶いたさねば千卷萬卷の書を讀破しても詮なきことなれば一句を得も胸中によくおさめてそれをはや行ふときは日用のつとめのたよりになることをしらせたり第三條はものゝあやまりを見出すことを讃すされば物毎に念を入ねばかゝるあやまりもあるとなり唐橋殿の疎ことをのせて後人に敬のことを敎へたり第四條は故實をしりし事を自讃せり是又後人にしらす事をばみ

だりにあらそふべからざるとのいましめなり第五條は亦記憶の事を自讃せり第六條は才覺のはやきことを自讃せり誰とても時にのぞんて氣轉のはやき才智はあり度事なりとしらせたり第七條は好色の心なきことを自讃せり殊に此一條心を着て見るべし人のやめ難きは好色の心なり此草子にあまた好色のことを書り一旦はゆるすやうに書ながら底意には大きに戒めたり見る者あやまるべからずされば兼好節操有難し〳〵兼好が志に似たる事異朝にもこれあり佛祖統紀三十七曰初餘抗山沙門法志初詣二廬山一依二遠法師一續往二關中一見二羅什一後東遊二會稽一入二秦望山一誦二法華經一越十二年有二女子一身披二彩服一携二筠籠盛二一白豕兩根大蒜一至二師前一妾入レ山采レ薇日已暮矣材狼當レ道歸無二生理一敢託二一宿一師卻レ之甚堅女哀鳴不レ已遂以二草牀一居レ之夜半號呼腹疼告レ師案摩師乃以レ布裹二錫杖一遙爲案レ之翌旦女以二彩服一化二祥雲一豕變二白象一蒜化二雙蓮一凌レ空而上謂レ師曰我普賢菩薩也以三汝不レ久當レ歸二我乘一特來相試觀二汝心中一如二水中月一不レ可二染汚一既而天上雨レ華地皆震動郷人聞見莫レ不二稱歎一是日

太子孟顗方晨起視㆑事忽見㆓南方㆓祥雲光射㆓庭際㆒隱然金石絲竹之音訪知㆓普賢示化㆒遂以㆓師道行㆒上㆓聞于朝㆒敕建㆓法華寺㆒師既亡漆㆓眞曰㆒留㆓山中㆒●参考曰徒然草評判といへる本世に梓行せり是には此兼好の好色をさけたる事をこそしらんとて兼好もし其時千本の寺に人もなくてひとり女人のみよりかゝりたる事あらましかば非道も行ふべかりし物をなどいへる評を書置たりかやうの事はとりあぐる事にもあらす意地のあしき論なり兼好此時毫髮の心をうごかす事ありしほどならばかやうに自讃のうちに入て後の世の教誡とはなすまじき事なりよむ人兼好の非を見つけんと思ずともみづからの姦邪をかんがみる手本とすべし●又草山沙門不可思議曰兼好以㆓師直㆒爲㆑友且筆㆓其艶書㆒若㆓物我相忌㆒然及㆑遇㆓淫女之魅惑㆒則秋霜烈日凛然不㆑可㆑侵也可㆑謂和而介者矣或曰可㆑學焉乎曰柳下惠者百世之師也然其迹或不㆑可㆑學焉無㆓兼好之介㆒而學㆓兼好之和㆒則其不㆑失者幾希矣

徒然草諸抄大成卷第二十

目次

〔二百三十九〕八月十五日九月十三日は婁宿なり此宿清明なるゆへに月をもてあそぶに良夜とす

八月十五日　●八月十五夜を中秋として殊に月を翫ぶ事大かた李唐の世より盛にして詩人文人其詠おほしといへど古樂府に孀娥怨の曲あり漢人の中秋の月なきによりて此曲を作るとある時は漢の世よりもある事にや野　頭書云▲山井案に歐陽詹翫月詩序云月之爲レ翫冬則繁霜大寒夏則蒸雲大熱雲蔽レ月霜侵レ肌蔽與レ侵倶害レ翫秋之於レ時後レ夏先レ冬八月於レ秋季始孟終十五於レ夜又月之中稽二於天道一則寒暑均取二於月數一則蟾兎圓況埃壒不レ流大空悠々嬋娟徘徊摶華上浮昇二東林一入二西樓一肌骨與レ之疎涼神氣與レ之清冷云々▲事言要玄天集卷三曰月歌月者水之精秋者金之氣金水性相生五行分二其事一則知天地間相感各以レ類水得レ金還盛月因レ秋更清氣類使二之然一人誰不レ有レ情又曰提要錄八月十五爲二月夕一▲事文類聚前集卷之十一曰前輩名二中秋月一爲二端正月一昌黎月詩云三秋端正月今夜出二東溟一又前輩詩云去年中秋端正月照二我衣襟萬條血一又曰古樂府有二孀娥怨之曲一注云漢人因二中秋無一レ月而度二此曲一所レ謂孀娥者蓋指二言月中姮娥一也雖レ隱中秋不レ見レ月詩天爲二素娥孀怨苦一故敎下二西北一起中浮雲上　中秋の月をもてあそぶこと此外和漢の故事詩歌不レ可二勝數一

九月十三日は　●九月十三夜の月を翫ふ事もろこしにはさして文ともにもまれなり日本にては菅丞相宰府にて九月十三夜の月をみる詩あれば其ころよりある事にや法性寺入道相國の九月十三夜の詩を無題詩集にものせたり野　頭書云▲本朝一人一首曰九月十三夜者本期所レ翫二三秋之佳斯也既有二菅丞相詠吟一則延喜以前賞レ之明矣若其擬二中秋一則季秋亦可レ取二十五夜一然賞二十三夜一者蓋其易所謂月幾レ望又曰天道虧レ盈是其所レ注レ心其旨深矣参▲九月十三夜の月をもてあそぶ歌三代集には未だ見へず源氏夕霧の巻に九月の比夕霧の大將小野よりかへり玉ふ所に十三夜の月のいとはなやかにさし出ぬれば小倉の山もたどるまじうをはするにとあり其比ははや此夜の月をもてはやせしなるべし千載集に九月十三夜の月を「秋の月ちゞに心をくだきゝてこよひ一夜にたへずもあるかなとよめる歌あり

文▲山井案に菅丞相筑紫にて作り玉ふ詩に云黄萎顔色白霜頭況復千餘里外投荒被ニ棄華ー簪組縛今爲ニ貶謫ー艸莱囚月光似レ鏡無レ明罪風氣如レ刀不レ斷レ愁隨レ見隨レ聞皆慘慄此秋獨作ニ我身秋ー此詩菅家後集に見へたり世に此詩を引てをほくは九月十三夜の御作とす後集二十五夜とす今五句目の月光似レ鏡と云を味ひて見れば满月の意もあり九月十三夜の作と云ことといぶかし其外據もあるにや古今十三夜の作といへるほどにしばらくこれにしたがふなり

婁宿 ●二十八宿の一つなり西方七宿の第二なり宿の字しゆくとしうとの兩音也諸 頭書云▲宿の字俗音秀書洪範晋星辰註星宿音夙亦音秀然辰之所レ舍有ニ止宿之義ー則音夙亦可也句 ▲婁宿は二十八宿の一つなり二十八宿をいはゞ東方蒼龍の體とせる七星は角亢氐房心尾箕北方玄武の體とせる七星は斗牛女虚危室壁西方白虎の體とせる七星は奎婁胃昴畢觜參南方朱鳥の體とせる七星は井鬼柳星張翼軫参●正月一日より十二月晦日まで二十八宿を一星つゝ毎日にあてゝ其日の宿とす近代もろこしより來凡暦には二十八宿を次第して日に配し日本には吉備公の相傳なりとて別に前後まじはる事有中比大内冋錄する日牛宿なりとて牛を除て二十七宿とせり今かんがへ見れば八月十五九月十三婁宿にあるほどに兼好も牛宿を除きたる義を用ひたるなるべし八月一角二亢三氐四房五心六尾七箕八斗九女十虚十一危十二室十三壁十四奎十五婁なり九月一氐二房三心四尾五箕六斗七女八虚九危十室十一壁十二奎十三婁なり野

此宿 ●西方の七星ともに秋に屬し金にあたるといへどもことに婁宿は金狗の姓あり故に金氣のさはやかなるが水性の月に和して金水相生の時節ななれば清明なる事げにもなる事なり參

[一段之統論]●此段は此二夜の月を誰も翫びながら何のゆへとも心をつけざるを兼好の一説發明し給ひしまことに興あるものなるべし文

	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
朔日	室宿	奎宿	胃宿	畢宿	參宿	鬼宿	張宿	角宿	氐宿	心宿	斗宿	虛宿
二日	壁宿	婁宿	昴宿	觜宿	井宿	柳宿	翼宿	亢宿	房宿	尾宿	女宿	危宿
三日	奎宿	胃宿	畢宿	參宿	鬼宿	星宿	軫宿	氐宿	心宿	箕宿	虛宿	室宿
四日	婁宿	昴宿	觜宿	井宿	柳宿	張宿	角宿	房宿	尾宿	斗宿	危宿	壁宿
五日	胃宿	畢宿	參宿	鬼宿	星宿	翼宿	亢宿	心宿	箕宿	女宿	室宿	奎宿
六日	昴宿	觜宿	井宿	柳宿	張宿	軫宿	氐宿	尾宿	斗宿	虛宿	壁宿	婁宿
七日	畢宿	參宿	鬼宿	星宿	翼宿	角宿	房宿	箕宿	女宿	危宿	奎宿	胃宿
八日	觜宿	井宿	柳宿	張宿	軫宿	亢宿	心宿	斗宿	虛宿	室宿	婁宿	昴宿
九日	參宿	鬼宿	星宿	翼宿	角宿	氐宿	尾宿	女宿	危宿	壁宿	胃宿	畢宿
十日	井宿	柳宿	張宿	軫宿	亢宿	房宿	箕宿	虛宿	室宿	奎宿	昴宿	觜宿
十一日	鬼宿	星宿	翼宿	角宿	氐宿	心宿	斗宿	危宿	壁宿	婁宿	畢宿	參宿
十二日	柳宿	張宿	軫宿	亢宿	房宿	尾宿	女宿	室宿	奎宿	胃宿	觜宿	井宿
十三日	星宿	翼宿	角宿	氐宿	心宿	箕宿	虛宿	壁宿	婁宿	昴宿	參宿	鬼宿
十四日	張宿	軫宿	亢宿	房宿	尾宿	斗宿	危宿	奎宿	胃宿	畢宿	井宿	柳宿
十五日	翼宿	角宿	氐宿	心宿	箕宿	女宿	室宿	婁宿	昴宿	觜宿	鬼宿	星宿

十六日　軫宿　亢宿　房宿　尾宿　斗宿　虚宿　壁宿　胃宿　畢宿　參宿　柳宿　張宿
十七日　角宿　氐宿　心宿　箕宿　女宿　危宿　奎宿　昴宿　觜宿　井宿　星宿　翼宿
十八日　亢宿　房宿　尾宿　斗宿　虚宿　室宿　婁宿　畢宿　參宿　鬼宿　張宿　軫宿
十九日　氐宿　心宿　箕宿　女宿　危宿　壁宿　胃宿　觜宿　井宿　柳宿　翼宿　角宿
廿日　房宿　尾宿　斗宿　虚宿　室宿　奎宿　昴宿　參宿　鬼宿　星宿　軫宿　亢宿
廿一日　心宿　箕宿　女宿　危宿　壁宿　婁宿　畢宿　井宿　柳宿　張宿　角宿　氐宿
廿二日　尾宿　斗宿　虚宿　室宿　奎宿　胃宿　觜宿　鬼宿　星宿　翼宿　亢宿　房宿
廿三日　箕宿　女宿　危宿　壁宿　婁宿　昴宿　參宿　柳宿　張宿　軫宿　氐宿　心宿
廿四日　斗宿　虚宿　室宿　奎宿　胃宿　畢宿　井宿　星宿　翼宿　角宿　房宿　尾宿
廿五日　女宿　危宿　壁宿　婁宿　昴宿　觜宿　鬼宿　張宿　軫宿　亢宿　心宿　箕宿
廿六日　虚宿　室宿　奎宿　胃宿　畢宿　參宿　柳宿　翼宿　角宿　氐宿　尾宿　斗宿
廿七日　危宿　壁宿　婁宿　昴宿　觜宿　井宿　星宿　軫宿　亢宿　房宿　箕宿　女宿
廿八日　室宿　奎宿　胃宿　畢宿　參宿　鬼宿　張宿　角宿　氐宿　心宿　斗宿　虚宿
廿九日　壁宿　婁宿　昴宿　觜宿　井宿　柳宿　翼宿　亢宿　房宿　尾宿　女宿　危宿
卅日　奎宿　胃宿　畢宿　參宿　鬼宿　星宿　軫宿　氐宿　心宿　箕宿　虚宿　室宿

[二百四十]しのぶの浦の蜑の見るめも所せくくらぶの山もる人しげからんにわりなく通はん心の色こそ淺からず哀と思ふふしぶしの忘れがたきこともおほからめ

しのぶ ●奥州に信夫郡あり人を戀しのぶといふことをいはんためなり句　頭書云▲新古今に一打はへてくるしきものは人目のみしのぶの浦のあまのたくなは句

蜑の見るめ ●蜑は海松和布などかる物なれば忍びかよはんとする所も人目にせかれて自由ならぬ心をいひかけたり文

所せく ●所狹と書壽前に委

くらぶの山 ●山城の名所也暗部山と書又歌枕には暗布山と書り句 ●清濁の兩義有こゝにては清べし　頭書云▲ものにくらふるといふ心によみたる歌はくらぶとにごるなり又くらき心によめる歌はくらぶとすむなり古今に是則一我戀にくらぶの山の櫻花まなく散ともかずはまさらし貫之が歌に「秋霧のたちぬるときはくらぶ山をぼつかなくぞ見へわたりける鐵増

もる人 ●守る人也古 ●山には山守あるをいひかけて暗き通ひ路などを忍びいらんとするも守りめしけきをいふ也こゝもとの詞つかひはなずらへ歌の體をうつせり文

わりなく ●無二和利一と書也参

通はん ●通ひ難き所をしゐてかよふなり文

淺からず ●情の深きをいふ也諸

思ふふし〲 ●節々なり句 ●哀と耳ににとゞまる所々也文

[第一節]●しのぶ浦と云よりをほからぬまでなり此段五節に分つ文段には四節に分てり次のまばゆかりぬべしと云までを一節とす●山案此節は好色の本意をいへり尋常の婚姻などのごとく人にのみまかせて妻をむかへとるは興もあるまじければ我心と思ひより人目を忍び露霜にしほたれありきて逢かたらはんこそ互の情のふかく忘れ難きこともをほからめとなりこれ一旦は如レ此書るといへども末々にいましめんために此一節をばまうけて書たり見る者思ひあやまるべからず

親はらからゆるしひたふるにむかへすへたらんいと

まばゆかりぬべし世にありわぶる女のにけなき老法師あやしのなづま人なりともにぎはゝしきにつきてさそふ水あらばなゞどいふをなか人何方も心にくきさまにいひなしてしられずしらぬ人をむかへもて來らんあいなさよ何事をか打いづることの葉にせん

親はらから ●兄弟なり同胞と書り句

いとまばゆかり ●字上に見えたり日輪の光りをたしかに見がたきと同じ參●親兄弟よくしりて女をむかへたらばはづかしかりなんと也壽

世に ●是より別段とする本有壽●文段の二節目

女のにげ ●似合ざる義なり壽

老法師 頭書云▲源氏の薄雲にかゝる老法師の身にはたとひ然侍りとも何のくひか侍らん句

あづま人 ●邊鄙の義也强ちに東國をさすに非ず

にぎはゝしき ●富める義也豊饒と書壽●賑膝

さそふ ●是は女の世にあり侘て誰なりとも我を招くものあらはといふ心也參 頭書云▲古今に文屋康秀か三河椽になりて下るとて小野小町をさそひし時一わびぬれば身をうき草の根をたえてさそう水あらばいなんとぞ思ふとよめる詞にてかけり諸▲人の妻とならんと思ふをさそふ水あらばといへる詞宇治物語にも見えたり句

なか人 ●媒なり壽 頭書云▲遊仙窟には桂心と書り野▲孟子に媒妁ともかけり句

いひなして ●媒の人は双方よきやうに僞りをいひて婚姻する事尋常也文

しられずしらぬ人 ●新古今戀の部西行が歌「うとくなる人を何しにうらむらんしられずしらぬをりもありしにの詞なり句

あいなさよ ●無愛と書あぢきなさよと也壽●あいさうもなしと也新注

何事をか ●一目も見ぬ人なれば何といひ出すべきこともあるまじと也增鐵●おもひやりて書たりあはれとおもふふし〴〵の忘れがたきこともおほからめとあるに對して云也盤

〔第二節〕●親はらからと云より言のはにせんまでなり文段には世にありわぶると云より次の節までを第二節目とするなり ●山案此節は上の節をうけて親兄弟にまかせてとりむかへたる妻や又媒の

いひなしばかりにてよびむかへたるはまばゆく愛なき事あらんとなり

年月のつらさをもわけこしはやまのなどもあひかたらはんこそつきせぬことのはにてもあらめすべて餘所の人のとりまかなひたらむうたて心づきなき事おほかるべし

年月のつらさ　●是より發端の心をたちかへり云なり彼みるめ所せく守る人しげくて自由ならざりし年月のつらさをいふ也文

はやま　●端山と書り　頭書云▲古今の歌「筑波山はやましげ山しげゝれど思ひ入にはさはらざりけり諺▲此歌の心は筑波山は木陰茂りて分いりがたけなれども我思ひいれば其茂山もさはらぬと也文

あらめ　●彼人目しげき所をもしゐてわりなくかよひきてあひ見る事などかたりなくさむ心なるべし古今の歌の詞をもつて書り諸

人のとりまかなひ　●餘所の人とは親兄弟媒妁にかゝりたる詞也參

心づき　●世にあり侘るといふより是迄はよろしからぬ女の身に付ていふ也句

〔第三節〕●年月と云よりあらめまでなり●山案此節は第一節の心を又云のべて彼親はらから媒にまかせたらんはいよ〳〵愛なからんことゝをさへて書り文段云問禮記に聘則爲レ妻奔則爲レ妾と云り此段の心は禮を用ひざるにや答つれ〴〵草一部は偏にこゝろざしをもとゝして尋常にかゝはらざる所おほし其故に男女の中をいふにも妻といふものこそおのこのもつまじきものなれとかきしをはじめあはてやみにしうさを思ひあだなるちぎりをかこちなどいへりかつやまとことのはの戀の部大かた其心に通ずべし兼好は和歌の人にてしゐて儒道をまもらざる物なり其心をしらでは必野搥の嘲を誰もなすべきわざにこそ此說面白し其上此節に好色の面白きさまをかけるのみなりこれを是とするにはあらず一旦好色の面白きさまをいへども次節にていましむべきためにまうけて書り上巻の三段目にも好色をよきやうにかきて八段目にていましめたる筆法と同じきなり讀者見あやまるべからず

よき女ならんにつけても品くだり見にくゝ年もたけ

なん男はかくあやしき身のためにあたら身をいたづらになさんやはと人も心おとりせられ我身はむかひゐたらんも影はづかしくおぼえなんいとこそあひなからめ

よき女　●たとひよき女とても人まかせに向へたらんは興あるまじければまして見にくき女はさらにいふにもたらずと心をふくめたるてにはなり参

品くだり　●字義前に在男の位の卑き也文

見にくし　●醜の字也男の見にくゝ也諺

あやしき　●男の身をいふ也彼にげなき老法師怪のあづま人などいひしをうけてみるべし文

あたら身　●惜の字をあたらしむとよむ壽

いたづらに　●かやうのあやしき我身のためににぎはゝしきにつくとてもあたら女のみめかたちをいたづらごとゝなすべき事かはとの義なり文

●山說にいやしき男のためにしたがふはむねんなりと女のいふ詞也全盤抄も是に同じ但此說はいかゞあらん此所は男のかたより身のうへをおもひやりし文意なり

人も　●人とは男のかたより女の人がらをさしていふなり文

問おとり　●心おとりとは彼にぎはゝしきにつきて我妻と成來たるこゝろを思ひおとす心也是も兼好の風流よりかけける所しられたるにや文

身はむかひゐたらん　●女を人といひしに對して男の身をいふ也文

影はづかしく　●我おもかげはづかしきと也参

あひなからめ　●前に愛なきよといひし詞をいよいよ落着したる詞なり文

[第四節]●よき女ならんにと云よりあいなからめまで也文段にはすべてと云よりこゝまでを第三節として其說に曰人にまかせてあいそふ中ははじめまばゆくていひ出る詞なきのみにあらず後まで心づきなくあひなきことおほからん心をいふなり●よき女ならんにつけてもといふより是までよろしき女の身に付ていへり句

梅の花かうばしき夜の朧月にたゝずみみかきか原の露分出ん有明の空も我身ざまにしのばるべくもなからん人はたゞ色このまざらんにはしかじ

梅の花　●伊勢物語のこゝろ歟　頭書云▲伊勢物

語に又の年のむ月に梅の花ざかりに去年をこひていきてたちて見居て見みれど去年に似るべくもあらざればうちなきてあばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりてとあり句　●朧月にたゝずむとは此方よりしのふていふ也新注

みかきが原　●御垣原と書大和の名所むかしの皇居の跡なり壽●こゝにては內裏などをいふなり文　頭書云▲御垣原こゝにいへるは源氏の意にて書たるやうなれば禁中の事ならんか若菜の上に一日の風にさそはれて御垣原を分入て侍りしにいとゞいかに見おとし給ひけん其夕より見たりこゝちかきくらしてあやなくけふを詠くらし侍るなど書てとあり是は柏木の衞門が女三の事を忘れかね小侍從がもとへ遣したる文の詞なり明星抄にいはくみかきが原は院中の垣のうちをいふ爰は名所にあらずと云々金葉集に「九重のみかきが原の姬小松千代をばよその物とやはみる是は雲井のうちをよみたる歌なり又名所のみかきが原をよめる歌に「古里は春めきにけり御吉野のみかきが原にわかなつむらん詞花集に見へたり平兼盛歌なり句

有明の空も　●此所源氏物語のおもかげにて書るにや但ふることにも及ばず梅の花のかうばしき夜みかきが原の有明の空など好色に艷なる折ふしをいふなるべし文　頭書云▲花の宴の卷に光源氏の朧月夜の內侍のかみ內裏を退出玉ふ事を思ひ給へる所に彼有明出やしぬらんと心も空にて思ひいたらぬくまなきといへるをもかげにて書るなるべし文

色このまざらん　●源氏の大將や業平朝臣などやうに女にしのばるべき身ならず女にきらはれぬるやうなかたちあしく心やさしくもなきあづま人老法師などの身にては色このまぬにはしかじと也畢竟の心は色をこのむ事なかれとのいましめ也にげなき法師あやしき吾妻人などのみ色このむなといふにはあらず說

〔第五節〕●梅の花と云より終りまでなり文段には四節目とす其說に曰此節は彼よからぬ男のよき女にむかひて影はづかしく爰なかるべき心をうけてすべて好色は其身に似つかはしからぬ人は無益のよしをいひて一段を決せり文此節の心を思ふに彼

千本の寺の聽聞の夜女の居かゝりしに兼好のまよはざりしことまことにさいはいにして立のきたるにあらず其平生の覺悟ありしこととしられて殘勝に侍るにや文

〔一段之統論〕●此段忍ぶの浦といふより過半は好色のをもはくをあらはしかけり好色人は夫婦の道をわすれてひたすらかやうの心なるものなり誠にそのためには妻子はをもしろからぬものなり萬にいみしとも色このまざらん男は玉卮のそこなきがごとくにいひ此外かやうの筆法は皆好色人になりかはりて書るなり此心をしらぬ人は道にたがへりとてそしり又歌人はかやうの心なるものなりとてほむるともにあたらず上卷の三段めにことはり侍ればこゝに略す又此段も梅花のかうばしきといふより兼好をもはくなり好色はよからぬとかみに對していましめたる詞なり全●此段をもてむきは好色の事をうるはしくのぶるといへども下心には好色をいましめ妻といふものは男のもつまじきものなりといふ段の心なるべし其故は此段には好色の上品をかきてなみ〳〵の人は色このまざらんにはしかじといふに決したりこれ人に在中將光源氏などのやうなる好色をすゝむるに似たれどもとても後世には人の情もをくれさやうなることもあらねばなべての人此段の心をよく味はゞ好色の心は日日にすくなくなりゆくべしこれあたらしき好色のいましめやうなり此段はたとへば庖丁をこのめる人に始より庖丁を無用といましめずしていでや庖丁このめるからは生たる龍の庖丁をしてこそ其本意たるべけれとても庖丁すべき龍もなきときは庖丁このみてもほまれにもなるまじきとゝめたるがごとし莊子などにをほき文法なり増鐵 ●此段色好の本意をしるしたり後世菩提をねがふ人はとかく妻子をもたぬがよしとぞされど一生獨寢にては過しがたきほどにかやうにいろをこのめとをしへたるなるべしをはりにいたりてかくはあれどたゞ色欲をこのまぬがはるかにまされりとかきとゞむるぞ一段の大意は色をすてゝ道にをもむけといふなるべし新注

〔二百四十一〕望月のまとかなる事はしばらくも住せずやがてかけぬ心とゞめぬ人は一夜の中にさまてか

はるさまもみえぬにやあらん

望月　●十五日の夜の月を望月といふ也　頭書云▲山井案釋名云望月滿之名也月大十六日月小十五日月在レ東日在レ西遙相望也▲韻會望無放切說文月滿也與レ日相望如レ朝レ君也从レ臣从レ月从レ壬壬朝也徐日假借作レ望增韻今經典通作レ望後律歷志分ニ天之中一相與爲レ衡謂ニ之望一謂下月半日月正相對其平如上レ衡▲萬物造化論云月如ニ銀丸一受ニ日之光一其魄常滿注月向レ日處一半常充既望之夕月與レ日相對人處ニ中間一陋見ニ其全一日在ニ其傍一自レ下而視故但見如ニ一眉一及レ去日漸遠則斜照而光稍滿亦猶下日初出時人平視レ之則太及ニ既中一仰視レ之則小上非ニ日月之不レ同乃視レ之有レ異耳▲もろこしにはあながち十五日とはさだまらず月の大小によりてかはるなり本朝にはなべて十五日を望月といふなり參

やがて　●月はもと陰の體にして光もなきものなれども日の光をかりてあきらか也日月のめぐるに遲速ありてたま〳〵日月相望む時月はまとか也日の光り月にそむく時は陽の光をえうけぬが故に次第々々にかけゆく事也彼圓なるうちにも日月の遲速あれば直に相望てまろけれどものきさる事一息の間も油斷はなき事也されとも日の影地の面にて一寸ゆくときは天をゆく事一萬里なりといへり六町一里の事なるへしかほど天のとをき事を地にて見る故に人のめには見えぬ也參●又月のやがてかけるを無常にたとへたる體相は冠考にのせたる應報經の文がよくこゝにかなへり　頭書云▲易豊卦彖曰日中則昃月盈則食天地盈虛與レ時消息而況於レ人乎況於ニ鬼神一乎▲又歌に「たれもみよみつれはやがてかく月のいざよふ空や人の世の中說▲管子白心篇曰月滿則虧▲罪業應報經偈曰日出須臾沒月滿已復缺尊榮高貴者無常速過レ是參

とゞめぬ人は　●心をつけぬ人なり句

かはるさまも　●心をつけねば一夜の中にさまて月のかゝる事有とはしらじと也されば十六夜の月をすでに一分の明をかくとつゝれる詩人もありまたわざと不同なきやうにいふもあり

「第一節」●望月と云より見へぬにやあらんまでなり此段三節に分つ文段もこれに同じ●此節はをぼへずして病のをもり死期の來るたとへに望月のこ

とをいへるなり詩經の興の體なとの類なるべし人の身の上のことを云べきために先此節には月のことを興したり説

病のおもるも住する隙なくして死期すでにちかしされどもいまだ病急ならず死におもむかざるほどは常住平生の念にならひて生の中におほくの事を成じて後閑に道を修せんとおもふほどに病をうけて死門にのぞむ時所願一事も成ぜずいふかひなくて年月の懈怠を悔て此度もしたちなをりて命をまたくせば夜を日につぎて此事彼事をこたらず成じてんと願ひををこすらめどやがておもりぬれば我にもあらずとりみだしてはてぬ此たぐひのみこそあらめ此事まづ人人急き心にをくべし

病のおもる ◉人の病のおもるも月のごとくなりと合譬とてたとへを實儀に合ていふ也盤

隙なくして ◉人の病のおもる事もしばらくも住せずして日々におとろへ死期に近づくと也句 ◉病も月のかくると同じく人のめにははかに起りておもくなるやうに見ゆれと內には一時片時の懈怠もなくおもりもてゆきて終に死におもむくと也

かの扁鵲がてときの神醫は人の目に見えぬうちに病のおもる事をよく察したる故事も史記などにあまた見えたり參

生の中に ◉生の中とは生涯の中也句

成じて ◉おほくの所願を成就してと也文

死門 ◉門は宗密の圓覺經疏にも出入義也とありこゝも生じ來り死し去る義をふくみて死期を死門といふ也又は死關といへる語もあり參　頭書云 ▲善導和尙往生正念文曰死門事大云々參

年月の懈怠を悔 ◉彼所願を成ぜんとばかりしておほくの年月に佛道修行をせざる懈怠を悔む也文

頭書云 ▲護法論曰老死忽至臨危湊亟雖レ悔奚追參

おもり ◉病なり諺

我にもあらず ◉我身を忘却して無性になりゆくさま也文

はてぬ ◉死する也諺

たぐひ ◉人間の後世に懈怠する人は大かた此たぐひのみなるへし文 ◉決前生後なり上をかくのごとくあるほどにとうけて下をすゝめていふ詞なり

盤

此事まづ人々　●後世の事也先と云は萬事をさし置てまつと也盤　●此一大事を心に忘るべからずとの義也文　●安心と書て心にをくとよむ也参　●異本句解大全参考等には心得をくべしと書也

〔第二節〕病のをもると云より心にをくべしまでなり此節は死のちかき事をいひて懈怠をいさむるなり文

所願を成じて後いとまありて道にむかはんとせば所願つくべからず如幻の生の中に何事をかなさんすべて所願皆妄想なり所願心にきたらば妄心迷亂すと知て一事をもなすべからず直に萬事を放下して道にむかふときはさはりなく所作なくて心身ながくしづかなり

如幻の生　●まほろし如くの生涯と也諸　頭書云　▲金剛經云如二夢幻泡影一如レ露亦如レ電この故に金剛經を六喩經ともいふなり増　▲四十二章經曰寄レ生亦不レ久其事如幻耳眞宗皇帝御註曰寄二生浮生一倏然而滅都如二幻夢一爾　▲又如幻者法界次第載十喩中第一喩也大師釋レ之曰如幻者譬如下幻師幻中作象馬及種々諸物上云々　▲此草子の文藝は詠朗の蝸牛角中爭二何事一石火光中寄二此身一といへるに似たり如幻の字は楞伽經西域記などにもをほき文字なり参

妄想なり　●妄念なるべし句　みだりなるおもひとよめり　頭書云　▲圓覺經曰常居二幻化一曾不三了二知如幻境界一令二妄想心一云何解脱上参　前にもくわしきゆへりやくす

一事をも　●彼妄想の心の來りて我をまよはしみだすそとしりて所願を一事も成すべからずと也文

放下して　●放下はなげやりすつる心なり野　頭書云　▲大慧書須彌山一物不將來時如何云放下着参

所作なくて　●無爲自然の體なり諺

心身ながくしづか也　●浮世に交る人もしばしは心身閑にする事もあれど畢竟萬事を放下して道にむかはざればながく閑ならざる也此ながくといへるに心をつくべし文　●ながくとはとこしなへといふたる心也後の世までの事と見たる抄の義はいりほがなるみやうなるべし参　頭書云　▲釋氏要覽曰能斷金剛論曰寂靜有二二種一一心寂靜二身寂靜今以二四句一料簡一有三身欲レ寂靜而心不二寂靜一謂貪欲比

丘林下座禪二有三心寂靜而身不ニ寂靜一無貪欲比丘親ニ近王臣一三有ニ身心俱寂靜一謂諸聖人四有ニ身心俱不ニ寂靜一謂凡夫文 ▲童蒙止觀曰身心靜定忽然覺ニ悟心生一參 ▲心身ながくしづかのながくといふ字に心を付てみよ一旦しづかなるをばながくとはいひがたし肉身は天地に歸すといへども我神靈のほろびざる所をよく〳〵さとりしりて生にも心をとゞめす死にのぞみてもみだれて變せず今形氣あるとても更に生とも思はず死て後滅するをもいさゝか滅ともをもはず居ながら天地と肩をならべて一般の境涯となりて其寂滅の中に抄有の理の有レ在此意によく撤したる人こそ常に物表にあそぶ無位眞人なれこれぞ心身ながく閑のしるしなるべし新注

〔第三節〕 所願を成じてと云より終りまでなり

此節は彼一大事に懈怠するは浮世の所願を成ぜんとのみするゆへなればたゞちに所願をなげすつべしとの心をいひて心も身をもつれ〳〵になす手段をおしへて一段を決せり文

〔一段之統論〕●此段は例の死期のちかき事をいひてとかく萬事を捨て心も身をも閑にしてひとへに佛道にむかふべしとの心を敎へつれ〳〵の本意をあらはせり此草紙やう〳〵終りに近き故重てねんごろに此事を書しるせり兼好の爲人の所こゝにありと心をつくべし文 ●此草子一部のうち身のつれづれになりやう心のつれ〳〵なりやうの二をいひたりなかくとは一旦つれ〳〵になることはあれどもやがて退するがかくあれば不退轉の位にのぼるなりされば題號に心のつれ〳〵身のつれ〳〵を云ことをしるべし盤

〔二百四十二〕とこしなへに違順につかはるゝ事はひとへに苦樂のためなり樂といふは好み愛する事なりこれを求る事やむ時なし樂欲する所一には名なり名に二種あり行跡と才藝との譽なり二には色欲三には味なり萬のねがひ此三つにはしかず是顚倒の相よりおこりて若干のわづらひ有もとめざらんにはしかじ

とこしなへ ●長の字也長時の義也野

違順 ●逆順の事也壽 頭注云 ▲婆娑論云心安住故不下爲ニ世違順一傾動上此語の心よくかなへり文 ▲我にたがふ事あれば苦となり己にしたがふことあれば樂となり又中庸とて違順のあひたの中分なる

事には捨心とて平等なる心にてむかふなり此苦樂捨の三つともにさとりの眼より見ればみなくるしみぞといへる教へにてこゝをみれば文理あきらかなりされば人々大事の道の心をば天然とそなへて居れども違事には苦を生じ順事には樂を生じてこの二種のために貪嗔を生し一生をくるしめそれにかゝりつかはれて大道をおしからめてをくなり▲宗密禪師曰對二違順中庸一生二苦樂捨一智惠明達三受皆苦▲阿字觀曰終日逐二境緣一起二違順之念一解者曰寸志順レ己愛著逐レ日增一念違レ我怨嫉隨レ時熾參▲壽抄云佛眼遠禪師曰苦樂逆順道在二其中一動靜寒溫自愧自悔愚按ずるに佛眼遠禪師は苦樂逆順に即道ある事を悟りて如レ此いへり兼好は人皆此苦樂逆順にほだされてまよへる事をしらしむるなり句

つかはるゝ　●違は我心にたがふ事にて苦なり順は我心にしたがふにて樂也此苦をさけ樂につかんために常住にこれに心身をつかはるゝなり文

樂欲　●樂欲とはこのみおもふ也文　●頭書云▲圭峯禪師盂蘭盆經疏曰願者心之樂欲參

行跡と才藝　●行を人を勝れて名をとる諺味なり　●色と味とは佛家にも五欲のうち也味とは飲食をたしむをいふ也參　頭書云▲禮記曰飲食男女人之大欲存焉

萬の願　●前段の所願と云にかけて見るべし文

顛倒の相　●本心とそむきたる事人のかふべ地につけてかへる如くなるを顛倒と云參●何事をもさかさまに思也佛と衆生とはうらおもて也かく佛とちかひて顛倒なる見より違順につかはるゝと云事也盤　頭書云▲華嚴念佛三昧無盡燈序曰佛惘二衆生顛倒妄想執著而不一レ證得一▲圓覺疏曰顛心識狂亂倒背レ覺合レ塵▲弘決一曰言二顛倒一者顛即頂也頂墜二於下一故名二顛倒一▲雲棲曰是非不レ辨趁レ背乖レ宜迷惑錯亂名二顛倒一也參▲法華經爲凡夫顛倒とあり常樂我淨の四顛倒西谷名目等にくわし文

若干　●數のさだまらぬ義也上に注す

[一段之統論]　●此段は前段に世間の所願つきざる故に道にむかひ心身をつれ／＼になすさはりとなる事をいへりし其所願といふは大かた名譽と色欲と飲食なればこれらみな凡夫顛倒の想よりをこる事をいひて重てふかくいましめて身心共につれつれになすべき工夫を書り文　●此段と前段とはつれ

〳〵一部の大事のみにあらず萬法の生滅をしる所なるべし一部二百四十餘段もたゞ此段の意をしらしめんためなるへしといへり前の段の萬事を放下して道にむかへといへるは佛道に入べき丈夫心を敎へ此段は名と色欲と味との三つの願ひ求ざれといへるは萬事を放下すべき根元を敎かねて後發端のねがはしかるべき事こそをほかめれといひしに首尾せるなるべし增鐵 ●此段はつれ〳〵一部の結段とみよ上卷のはじめにねがはしかるべきことこそをほかめれと書てそれより二百餘段のうちにいろ〳〵ねがはしきことゝもを述たりさて此段に至りて其ねがはしきことは順逆ともに皆顚倒の相なれば萬事を放下して一物をももとむべからずとなり求めされは心身をのづから靜にしてつれ〳〵の本意にかなふなりと書とゞめたりされは詩經三百篇は思無邪の三字を以て蔽之禮記三千篇は毋不敬の三字にとゞまるがごとく此つれ〳〵草二百四十餘段は不ㇾ如ㇾ不ㇾ求と云る四字にのみとゞまれり次の八つになりしの段は兼好自悟發明の所をあらはしてわざと手を不ㇾ著して後人の工夫を待ものなり此つれ〳〵を後人のいましめに書しは此段の本意をしらしめんためなり此段の本意をさへしれば次の段は工夫を待に及ぶべからず說

〔二百四十三〕八になりし年父にとふて云佛はいかなるものにか候らんといふ父が云佛には人のなりたるなりと又問人は何として佛にはなり候やらんと父また佛のをしへによりてなる也とこたふ又とふ敎候ひける佛をばなにがをしへ候ひけると又こたふそれも又さきの佛のをしへによりてなり給ふ也と又とふ其敎はじめ候ひける第一の佛はいかなる佛にか候けるといふとき父空よりやふりけん土よりやわきけんといひてわらふ問つめられてえこたへずなり侍りつと諸人にかたりて興じき

八になりし年 ●兼好八歲の時也諸 ●兼好八歲の時父に問たる事も有べし又餘人のことを聞てしるす事も侍るべし又寓言にてなき事をのべて理をとく事も有べし作者の心はかりがたし新注 頭書云▲八は少陰の數にて老陽より變じ來るをよそ男子は天の大陽に感じて出生したれば八歲にしてわづかに智惠の發する故にこゝにも八といふにや儒家に

は八歳にて小學校にいれて物をならはしむるぞ 新
注▲幼きよりさがしきもの今古すくなからず近代八歳の宮の詩歌などもいひつたへたり唐にもあまたありこゝに兼好かいふところは法華經に八歳の龍女佛にあひて南方無垢の成道をとなふる記莂をうけしこゝろを以ていへるなるべし 野 ▲山案に八歳の童兒のさがしき者ありしこと野槌に略載たれども今詳にこれを考へ出す是好事の者のためなり
▲事言要玄卷二十人集九云唐書孔穎達八歳就レ學記誦日千餘言闇記ニ三禮義宗一劉晏字士安玄宗封ニ泰山一晏始八歳獻ニ頌行在一帝惜ニ其幼一命ニ宰相張說一試レ之說曰國瑞也謝蘭八歳爲ニ春日閑居詩一有ニ風定花猶落之句一　詩話冠公準八歳吟ニ華山詩一只有ニ天在一上更無ニ山與齊一其師謂ニ準父一曰賢郎怎不レ作ニ宰相一岳柱年八歳時觀ニ畫師何澄畫ニ陶母剪レ髮圖一岳遂指ニ陶母手中金釧一詰レ之曰金釧可レ易レ酒何用剪レ髮爲也何大驚即易レ之▲又事文類聚前集卷之四十六樂生部云張玄祖八歳齒虧先達知ニ其不常一戲レ之曰君口何爲開ニ狗竇一玄祖答曰使ニ君輩從レ此中出一謝尚八歳神悟速成父鯤宰攜レ之送レ客或曰此兒一座之顏回尚應レ聲答曰坐無ニ尼父一焉別ニ顏回一　隋何妥少機警八歳顧良戲之曰汝姓是荷葉之荷河水之河妥應レ聲曰先生顧是眷顧之顧是新故之故　王元之年七八歳已能レ文一日太守席上出ニ詩句一云鸚鵡能言爭似レ鳳元之即對曰蜘蛛雖レ巧不レ如レ蠶此外勝てかぞふべからず

人のなりたるなり ●爰にて佛とさしたるは釋尊の御事なるべし淨梵王の御子悉達太子二十五にして出家し三十成道し給へり過去のはじめて發心し給ひし時も瓦師といひ瓦を給る人にてありしとなれば人のなりたるといふなり 文段参考　頭書云▲觀心畧要集曰彌陀昔是凡夫▲一元禪師曰要レ知作佛在ニ人倫一 参

佛のをしへ ●檀特山の阿羅々仙人の教によりて也其外佛の因位の時の修行あげていひがたし 文
頭書云▲このうちにはや佛法僧の三寶を成就せり釋尊は佛寶也をしへは法寶也父の物語は僧寶にあたる兼好の幼稚の時とひしはたすけらるゝ衆生にあたるべきにやさて父が返答に又佛のをしへによりてなるなりといひし其佛とは釋尊三僧祇といへ

るひさしき修行のうちに古釋迦尸棄佛と申如來にあひたまひてのち然燈佛に親印可を得たまへる故に今日佛になり玉ふなりしかれども第一の佛をとはれて返答につまりたる事はまさしく其然灯佛の所にて所得の法なきといへる金剛經の意にも叶ふべき事にや彼むかしをほくの佛の印可を得て修行成就の佛となり玉へる事は四教儀などにくわしく見へたり舊抄に阿羅々仙の教にあひしをいふといへるはよろしからずこれは外道の苦行を學び給ひし方便の行なれば佛の教にあらずとしるべしはじめは外道の行をつとめ玉ひしかと後にみな其非をさとりてすて給ひし事は僧祐の釋迦譜及び宋程輝が應運略錄に見へたり參

空よりやふりけん　●古語の詞を用ひてかけるにや諸　頭書云▲禮記問喪篇云禮義之經非ニ從レ天降一也非ニ從レ地出一也人情而已矣野

【一段之統論】●山案此段は一部の終り兼好自悟發明の所を述られたりされば佛と云ものは凡舌を以ては說あらはし難し兼好さへ手を着ずにをかれしを後人何角と辨を以ていはゞ兼好の本意にもそむき道も修行する人の害となるべきものなり漸々修學の工夫を以てせば一旦豁然として貫通することあるべしされば此書發端にいでや此世にねがはしきことをほけれど皆ねがひてもかなはぬことゞもなり或はねがふにたらぬことゞもなれば只後の世の事心に忘れず佛の道うとからぬことこそねがはしきことなれと書はじめて偖また終りにいたりて佛の一字に歸して書しこと尤殊勝なり中庸三十三章も發端に天命之謂レ性と書はじめ終りに至て上天之載(コトハ)無レ聲無レ臭至哉と書とゞめられしにもかなふべきなりよく〳〵心をつけて熟讀玩味すべしさて此段の筆法は史記や無邊經などを摸して書り諸抄に出たり其外此段につきての評論ども參考のために不レ殘あらはしたり●句解曰史記孟嘗君傳曰田文承レ間問ニ其父嬰一曰子之子爲レ何云爲レ孫孫之孫爲レ何曰爲ニ玄孫一玄孫之孫爲レ何曰不レ能レ知也これらの心にて書たるにや●野槌曰佛說三身壽量無邊經曰文殊白レ佛言我等從レ昔聞ニ如來說法一如來何佛開ニ此說法一佛告ニ文殊一言過ニ四十一重內大院一承ニ大毘盧遮那說法一文殊重白レ佛言四十一重內大

院何者是耶世尊復言過ニ十住十廻向十地等覺内大院ニ承ニ妙覺地大毘盧遮那說法ニ文殊重白レ佛言妙覺地毘盧遮那從ニ何佛ニ承ニ說法ニ世尊復言妙覺地毘盧遮那承ニ無始無終一心一念本佛說法ニ文殊重白レ佛言無始無終一心一念本佛承ニ何佛說法ニ世尊復言無始無終一心一念本佛承ニ無心無念本佛說法ニ文殊重白レ佛言無心無念本佛承ニ何佛說法ニ世尊復言無心無念本佛上更無ニ佛陀ニ無ニ前佛ニ無ニ後佛ニ無心無念本佛以ニ不思議ニ爲レ體無ニ去來ニ無ニ三身性ニ無ニ十界性ニ云々●此章は上にひたと妄想をはなれて道にいらん事をいへり其道といふは此佛道なり其佛とはいかなる物ぞと尋ねたる次第なり此草子一部の終りにいたりて佛をとひつめて終に佛の正體のしれぬ所不可思議の妙所なり言語も辨ずる事あたはず文字もかきしるす事のならぬか至道の極意なるべしよろづの事も是になづらへしらせんための一段の話則なるべし心をとめて深く其玄底を工夫すべき事なりとぞ參●前の兩段に佛道修行のわざはすでに說つくし侍れば此段は其一重上の工夫本來無一物の所近く今日の上にては不起一念の田地是無心無念の佛なるべし增鈔●此段はかの世間の所願みな妄想なり直に放下して道にむかふべしと前にいへり其道といふは此佛道なり其佛といふ物はいかなる物ぞと書くだせり惣而一部をこゝにて決したる段なり工夫すべし猶此草子の心引て按せぬ言葉なり參じてしるべし又貞德云此双紙のさしくちにいでや此世に生れてはねがはしかるべき事こそをほかめれと書初て終に佛のことをさたせらるる其心根殊勝に侍るとかく衆生は佛にならざれば生死のくるしみをはなれず夏の夜のみじかきたに月出されば明しにくし冥途黄泉の底にしづみ長夜の闇にまよはんとはかなしき義にならずや此兼好の八歲の時父をいひつめられし說も爾前經の方便の一通なりこれみな爾前といつは佛にならぬをしへと云事なり久遠實成の釋迦にあひたくをぼさば法華經の本文壽量品をひらきて拜たまふべきなり云々このむ所にしたがひて修行すべし●問此道遊軒の說は兼好をもどかれたりいづれか勝劣ならん答兼好はかく八歲のほどに已に高上の工夫ありてをひたつ年月にそへて其發明いよ／＼たかくいよ

いよかたしされば此草紙のさま〴〵書る心詞ひとへに其見得の上より說出し來れり其中にかの常の道をこへて君子に仁義あり信に法あり等の段々彼野拙の嘲りにあひかく道遊軒のもどきををへりといへど實に其堂上の發明は動くべくもうすろくべくもあらず又羅山は儒道をのべてあざけり道遊軒は大乘をときてもどかるゝも此兼好の高上の發明をしらて偏に我好む所にかゝつらひてかく難破せらるゝにもあらず猶又世のため人のためにて此草紙を見んに過不及のあやまちなからん事を思へるなるべしさりとて兼好の詞もなべて過不及のあやまり有といふにはあらず亦世のため人のためにしてまことにあふぎたふとむべき事どもなり只此草紙を見る人々の心得のをのがさま〴〵有べければいづれのをもむきにても其志をはげまし多年の非をあらたむる益ありぬべき事どもなればいづれを勝りいづれを劣れりともいふべきか只其所好にしたがひて修行覺悟せば是又兼好の本意なるをや文

●此段は兼好身の上をいひてそれにつけて一部をくゝりたり佛の先をとひ〳〵して天よりやふりけん土よりやわきけんといひのこしたるなり自己の工夫にて得道成佛させんためなり此段には秘傳あり傳授しても多年の工夫せずしてはがてんゆかぬ事なるべし壽●私云鐵齋說のごとく此段は工夫ならでは自得ならざる事は可然佛の始をとひたるも心法と云ものはいかてなる物ぞと問たるも同事なりたとへ釋尊に問たてまつりても所詮は自己の工夫ならでは得道なき事なり是は可然又秘傳ありと云所はいかなる事ぞや抑秘傳と云事は學解をからず工夫を不レ用して習をうくればよくしるゝ事なり又理なれば秘傳に不レ及レ思慮分別して見ればいかなる事も智解にてすむことなり佛の始りは學問にても智解分別にても知られぬ事なり工夫熟し詞詞大笑の時始て得事なり然は此所に傳受といふ事はなきなり●玄旨法印曰此段はつれ〴〵一部にもらしのこせる事を此所に書つくしたりと見るべし又八つになりし歳に實問したる事もさもあるべけれども自讃のやうなればたゞ心をつくべからずと御說されば兼好八歳にして奇特なる妙智なりしなどゝ褒美に心をつけ侍らば此段はよの事になりぬ

べしたとへ兼好詞にて吾八歳の時と書給ふとも設談なるべし●又佛は千佛萬佛一體なれども此所にてはたゞ佛とばかりにて釋迦尊等の佛にとゞすべからず法界の佛なるべし●又此段にをひては本説をたゞし古語を用ひ辨を付るほど正意はうする事なりいはれざる事をいひつくさんとする故なり既に兼好詞にいひつくしがたくしていかんともしがたき所を此段に讓りたり禪録などに是は心の境界也注すべからずとあり皆かやうの所なり●むかし童子をあつめて物かきならはせてたつぎとせる人あり一日のはてにはうたひを敎けるに白樂天の曲(クセ)舞(マイ)の前にいたりて穴に鳴鶯とうたひければさにあらずとてなをすれどもいよ／＼穴になくとぞいひけり此師鼻くたなりければ花になくといふ事のかく聞へけるとぞ全●或説此段は定家卿の歌に「わたつ海によせてはかへるしき浪のはじめもはてもしる人ぞなき」又滿沙彌の歌に「をしへぬに我から我と心得て戀をば人に習ふものかは　此歌なんどの心やよくかなふべき●或問曰如何是佛釣虛散人答曰大矣哉問乎其於二佛字一也兼好未レ發二注解一泥於二如レ予頑魯者一也却今應二吾儕(ワガコ)之問一者苟如二淤泥之穢二白紙一耳新注

追　加

一日和論語をよみ侍しに兼好法師の格言をあまたのせたり此つれ／＼草と詞意ともに同じ所は此書に讓りてのせず或は心同じけれども言葉の異なると或は全く此書に漏れし事とは今のこさずこゝにしるして童蒙の參考に便ならしむるなり

一益なき事をして月日を暮す人は智德ありとても見るにたらずいはんや愚かならざらん人におゐてをや愚かならざらん人におゐて　●おろかなる人におゐをやといふ事なるべしてにおはちがひたる様にきこゆ書寫のあやまりか　頭書云▲山案この段の心前にあり百二十四段に無益の事をなして時をうつすを愚なる人とも僻事する人ともいふべし國の爲君のためにやむことを得ずしてなすべきこと多し其あまりの暇いくばくならず思ふべしと云ると同じ意なり又智德ありとても見にたらずといへるも百九段に一日の中に飲食便利睡眠言語行歩止ことをゑずして多の時を失なふ其あまりの暇いくば

くならぬうちに無益のことをなし無益の事を思惟して時をうつすのみならず日を消し月を亘て一生を送る尤愚なり謝靈運は法華の筆受なりしかども心常に風雲の思を觀ぜしかば惠遠白蓮の交をゆるさゞりきと書るところなど可二見合一

一なべて人の吉日惡日をえらびぬる事はいたつて愚なる人なるべし善惡は人のなすところにありて日時にはあらずたとへば吉日に惡事をなすにかならずしも惡事也惡日に善事をするにかならずしも善となる吉日と云は國にも君にも民にもなやみなく物のさはりとならぬ日は最第一の吉日なり

頭書云▲此段は九十二段の赤舌日の事を論ずる所と文意ともに同じ但し吉日と云は國にも君にも民にもなやみなく物のさはりとならぬ日は最第一の吉日也と云所を能々玩味すべし此段の眼目なりされば國君里民萬物のさはりとならぬ日とは別に有に非ず善事をなす日を指たとへは陰陽家に云る鬼宿日也とも惡事をなして人物のなやみとならば是惡日也彼大公望亦日取をやぶりし類ひ又孟子の天時は地利に不レ如地利は人の和に不如レとのヽ玉へるなど思合すべし天地は理のみ也豈惡日と云時あらんや人の事業に善惡有かりにも善をなして惡をせざれば日として吉日ならずと云事なし

一我手あしきとて人をもたのみてかヽする事はよからぬ事也惡筆をもはゞからで書ぬるはよし凡物かく事は人々の心靈の外にあらはれぬるなればなき跡の形見後の世の面影には書をく筆の跡のみ也よからぬ人は珍奇をもてあそびて人のかたみとて見る人は是又愚なるところ也

頭書云▲前三十六段にもこのこヽろ見えたりされば人のがり文をやるは我志を通て人の安否を問なれは人をたのみてかヽすれは我志氣いたづらとなる故に眞實の志が向へ通ぜぬぞたとひ千里を隔ても志をうつして自筆に文を遣す時は能々通ずることはり也志通ずるときは吳越も兄弟といへり又三十段も無人の手ならひ繪かきすさみたる見出たるこそ只其折の心地すれと書たり

一人は己をつゞまやかにして奢をしりぞけたからをもつまじき也いみじき人もたからをあつめもてるをきけば其人ともたくあさましきなり

頭書云▲十九段にも此事出たり又三十九段にも財多ければ身を守るにまとし害をかひ累をまねく媒也と云り又百四十一段に身死して財殘る事は智者のせざるところ也よからぬ物をたくはへ置たるも拙くよき物は心をとめけんとはかなしといへり一人の俗姓ばなしのあるにいやさやうにてはなしその人は養子なり又はゆへありて其ゆかりをしる實子にはなし又はなに〱などいひてはなのほどうごかしていひさます人はかならず破戒の出家いやしき人の子さふらひは土人の中商人の子などのやうの人能いふ事なり是は己が身のつたなきをかくさんがためにかくはいふめる又かたはらなる人いや〱左様にはあらし人の俗性は昔も今も世にもれぬる時は人いろ〱いひもてあつかひてよくもあしくもいひ度まゝにいふなれど其人世にも出ぬればむかしあやしかりける事もよろしくいひなすはつねざまの人のならひなりなどいひなをせる人はかならずしも俗性めて度人のいふ事なり我此比人のとり〱いふことをきくに見ぬしらぬ人のうへのはなしせるものは今時の出家によくある事なり武士の家は常に志を守れる故にあへてみだりかはしき事はいはぬなり沙門はむかひにいひしろひて死しぬるほどの事なれば旦夕習ふ惡ゆへに自然と口のわざにつたなしさりながら世をいとひし人なんどかく有べしとにはあらずがし

侍は士民の中　●士民などの侍になりしを云

●此段能々玩味すべし兼好法師の身にて沙門のみ習惡ゆへに自然と口のわざそつたなしと云る事前にも論ずる如く殊勝なる志なりしかも世をいとひし人などかくあるべしとにはあらずと云るにて兼好本意あらはれていよく有難こそ覺ゆれさて武士の家はつねに志を守る故にあへてみだりがはしき事はいはぬ也といへるは彼孟子の民恒産なき時は恒心なし恒産なくても恒心なる者は唯士のみ是を能すとの玉へると同じ意也さりながら當時太平記の亂の比なれば志を守る人もすくなく恒の心ある士もまれなり只朋黨畜生殘害の志のみ内にあつて外をば飾りて巧言令色を事とする侫奸の者ども多き時世なり兼好今こゝにかくいへるは士の常の道を論ずといへども世を憤る意言外にしれたり如何となれば武士として志を守る世なれば如此亂は自

これなきなり志を守る者がなき故に自世も亂るゝなりそれを悲て士たる者は如此なるべきと也と世人を戒めていへるなり此徒然草の全篇も皆時世を憤りて書るなり此書を如斯心得てよまねばぬすみ惡き事とも有て無理に道理をつけて兼好本意にそむく事のみ多からん聖賢の書を述作し玉ふも當時道の行ぬ事を歎し玉ひて也是世を憤り玉ふに非や一人の人をあひしむすびて親子の如くにちぎるを見るに大かた頼む方ありてなり同じくは世にも時にももれたる人のよるかたなき人に契りを深くしてたすけともなりなば佛の御教にも仁義の方にも能かなひてよかるべしかくのごとくの人有まじければいひし言葉も夢となりなんかし

時にも　●これ桑門のことなり兼好本意こゝにきはまれりまことに友とするには色々の品多きなり前にもいへるごとく心友面朋あり又勢交財交色交の友ある也心友はこれなきほどに古人を友とするがよきと前にもいへり友として頼みよる方あれば一旦は親友のごとくなれども其たのむ事が盡ぬれば必疎くなるもの也

●此章無盡の感慨ありされば有かなきかに門さしこめて待こともなく明し暮したる世捨人を友としてともに山寺にかきこもりて後のこと心にわすれず佛につかうまつるこそつれ〴〵もなく心のにごりもきよまりて佛の御教にも能かなひてよかるべけれどもかくのごとくの人あるまじければなげかしきことゝなりされば當時亂世の比にして人の心もすなほならねばかくのごとき人もこれなきこと尤なりかくのごときの人これなき故に兼好たまたま道を語りても聞得る人もなく只々夢中の物語のごとくいたづらごとになるとなり古歌に「思ふこといはでたゞにやゝみぬへき我にひとしき人しなければとよめるこゝろなりたとへば孔孟列國經歷し玉ひて道を宣玉へども却て迂遠なりとてこれを不用兼好も一旦世に交て道を述んとし玉へども人聞入ずさるによつて世に交れば心外の塵にけがさるゝと云て引退しぞかし前に牛を失しことを論せるところにも云るごとくしばらく道理をのぶればかへつてあざけり笑ていさゝかも用ひずさるによつて兼好かくのごとく歎じていへるなり

室松岩雄
保持照次
信田重並
校

明治四十三年七月二十日印刷
明治四十三年七月廿五日發行

定價金參圓也

編輯者　室松岩雄

發行者　三里半七
東京市麴町區飯田町五丁目八番地

印刷者　横田五十吉
東京市神田區松下町七、八番地

印刷所　横田活版所
東京市神田區松下町七、八番地

發行所　國學院大學出版部
東京市麴町區飯田町五丁目八番地